静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第27集

篠場瓦窯跡・上海土遺跡

（第二東名No.130地点）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市－4

２０１３

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第27集

篠場瓦窯跡・上海土遺跡

（第二東名No.130地点）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市－4

２０１３

中日本高速道路株式会社東京支社

静岡県埋蔵文化財センター

序

本書は、浜松市浜北区に所在する篠場瓦窯跡と上海土遺跡の発掘調査報告書です。第二東名高速道路の建設に伴って行われた浜松市内の発掘調査では、４冊目の報告書となります。

篠場瓦窯跡は、静岡県西部地域で初めてとなる白鳳期の瓦窯の調査として、現地調査が行われた時から注目されていた遺跡です。資料整理では、県内最古となる鬼瓦や文字瓦の発見や、巨大な鴟尾が復元されたことでマスコミにも大きく取り上げられ、全国的にも大きな話題となりました。

本書では、これまで大和の大寺院である山田寺でしか出土例のない特異な形をした蠖羽瓦や、全国で初めての発見となる藁座痕が残る截断片、三角形の粘土を用いて製作された丸瓦など、希有な資料が多数報告されています。また、遠江地域でいち早く採用された軒瓦の文様が、その後に創建される周辺寺院の瓦に大きな影響を与えていることも明らかになりました。膨大な数の瓦について詳細な分析を行い、古代における仏教文化の広がりの一端を明らかにできたことが、今回の調査の大きな成果であるといえます。

篠場瓦窯跡が所在する浜松市は、自動車産業や先端技術の研究が盛んな「ものづくりのまち」として知られています。今から 1300 年前、当時最先端技術であった瓦づくりに、試行錯誤を繰り返しながらも懸命に取り組んでいた瓦工人たちの姿を、より具体的にイメージしていただけるような内容になっていると思います。本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社ほか、各関係機関のご支援、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013 年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長
勝田　順也

例　言

1　本書は、静岡県浜松市浜北区根堅に所在する篠場瓦窯跡と上海土遺跡の発掘調査報告書である。なお、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、市町村単位にて実施している。浜松市では本報告書が4冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浜松市－4」とした。

2　調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中まで日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度まで文化課）の指導のもと、 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　篠場瓦窯跡と上海土遺跡（第二東名№130地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は次のとおりである。

確認調査　平成13年9月～平成14年1月、平成15年6月～12月
本調査　　平成14年7月～平成15年10月、平成16年6月～11月
資料整理　平成18年4月～平成25年3月

4　調査体制については、第1章に別記した。

5　本書の執筆は、武田寛生、広岡公夫、株式会社加速器分析研究所、株式会社パレオ・ラボが行った。

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　次の業務については、委託により実施した。

写真測量等業務　株式会社フジヤマ（平成14～16年度）
掘削業務　小林建設株式会社（平成16年度）
遺物洗浄・注記業務　小林建設株式会社（平成16年度）
整理作業員派遣業務　NTTマーケティングアクト（平成18年度）
放射性炭素年代測定業務　株式会社加速器分析研究所（平成18年度）
鴟尾実測図作成業務　株式会社フジヤマ（平成20年度）
出土品付着物分析業務　株式会社パレオ・ラボ（平成23年度）
整理作業・保存処理業務　株式会社パソナ（平成23・24年度）

8　発掘調査では次の方々にご指導、ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

上原真人、大脇潔、八賀晋、広岡公夫、森郁夫（五十音順・敬称略）

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　座標は平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2　グリッド（方眼）は、1の座標を用いて設定している。グリッドの一辺は10ｍとし、アルファベット（Ａ～）と算用数字（１～）を用いて、その位置を表示している。東西方向が西から１・２…、南北方向が北からＡ・Ｂ…と設定している。

3　方位については、1の座標による方位（座標北）を基準として表示している。

4　発掘遺構は、遺構の種別を示す次の記号と、一連の番号の組合せにより表記した。
ただし、窯跡については、個別に名称を付しており記号は用いていない。

SD　溝　　SB　掘立柱建物　　SP　柱穴・小穴　　SX　その他

5　遺構番号は、遺構種類ごとの通し番号としている。番号は、基本的に現地調査で付されたものをそのまま使用したが、遺構種類が変更されたものについては、新たに別の番号を付している。

6　遺物番号は、遺跡・種類・遺構・挿図の別に関わらず、すべて通し番号を付している。

7　図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図中に表記している。

8　遺物の実測図の縮尺は、軒丸瓦・軒平瓦・瓦製作時の截断片・土器は1/4、文字瓦と鴟尾は1/5、陶馬は1/3、そのほかは1/6を基本とし、各図にスケールを付した。

9　軒丸瓦については、瓦笵の位置が特定できるものは●・○の印を付して位置を示している。

10　軒丸瓦の丸瓦取り付け位置と粘土板合わせ目は、▲の印を付して位置を示している。

11　周辺の地形図については、大日本帝国陸地測量部「二万分の一地形図（明治23年)、国土地理院「二万五千分の一地形図（平成19年発行)」、浜北市「二千五百分の一地形図（平成３年発行)」を複写・加筆して使用した。

12　瓦の部位の名称や技法に関しては、主に以下の文献に依拠した。

佐原真1972「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第58巻２号 日本考古学会
大脇潔1991「研究ノート　丸瓦の製作技術」『研究論集』Ⅸ　奈良国立文化財研究所
奈良文化財研究所2002『山田寺跡発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980『日本古代の鴟尾』

13　本報告書では、基本的に平成23年４月現在の市区町名で記し、必要に応じて旧市町村名を併記している。なお、所属については、当時の所属機関名を記している。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 27 集

篠場瓦窯跡・上海土遺跡

目　次

序 / 例言 / 凡例

第１章　調査の方法と経過 …… 9

1　調査に至る経緯 …… 10
2　調査の体制 …… 11
3　調査の方法 …… 12
4　調査の経過 …… 14

第２章　位置と環境 …… 18

1　遺跡の位置 …… 18
2　地理的環境 …… 19
3　歴史的環境 …… 21

第３章　篠場瓦窯跡 －遺構－ …… 25

1　概要 …… 25
2　瓦窯 …… 28
3　溝 …… 42
4　瓦集中遺構 …… 47
5　大型土坑 …… 51
6　掘立柱建物 …… 52

第４章　篠場瓦窯跡 －出土遺物－ …… 56

1　軒丸瓦 …… 56
2　軒平瓦 …… 81
3　丸瓦 …… 111
4　平瓦 …… 197
5　熨斗瓦 …… 333
6　塼 …… 349
7　蠣羽瓦 …… 354

8　鬼瓦 …… 367
9　鴟尾 …… 368
10　瓦製作時の截断片 …… 383
11　文字瓦 …… 389
12　土器 …… 393
13　陶馬 …… 401

第５章　上海土遺跡 …… 419

1　概要 …… 419
2　掘立柱建物 …… 419
3　包含層・攪乱出土土器 …… 423

第６章　理化学的分析 …… 425

1　放射線炭素年代測定 …… 425
2　考古地磁気測定 …… 427
3　元素マッピング分析 …… 428

第７章　総括 …… 430

1　軒丸瓦 …… 430
2　軒平瓦 …… 435
3　丸瓦 …… 438
4　平瓦 …… 442
5　道具瓦・鴟尾 …… 444
6　まとめ …… 447

図版 / 抄録

図版目次

図版１　遺跡とその周辺
図版２　遺跡とその周辺
図版３　篠場瓦窯跡調査区
図版４　篠場瓦窯跡遠景
図版５　１号窯
図版６　１号窯
図版７　２号窯
図版８　２号窯
図版９　３号窯
図版10　３号窯
図版11　篠場瓦窯跡 SD01
図版12　篠場瓦窯跡 SD02
図版13　篠場瓦窯跡 SX01
図版14　篠場瓦窯跡 SX02・SB
図版15　３号窯出土瓦
図版16　３号窯出土軒丸瓦
図版17　３号窯出土軒平瓦
図版18　３号窯出土丸瓦
図版19　３号窯出土平瓦
図版20　３号窯出土隅平瓦
図版21　３号窯出土熨斗瓦
図版22　２号窯出土瓦
図版23　２号窯出土軒丸瓦
図版24　２号窯出土軒平瓦
図版25　２号窯出土丸瓦
図版26　２号窯出土平瓦
図版27　２号窯出土隅平瓦
図版28　１号窯出土瓦
図版29　１号窯出土軒平瓦
図版30　１号窯出土丸瓦
図版31　１号窯窯体内出土平瓦
図版32　１号窯焚口・灰原出土平瓦
図版33　１号窯出土熨斗瓦
図版34　蠟羽瓦
図版35　塼
図版36　瓦製作時の截断片
図版37　鴟尾Ａ
図版38　鴟尾Ｂ
図版39　鬼瓦
図版40　陶馬
図版41　３号窯出土須恵器
図版42　２号窯出土須恵器
図版43　１号窯出土須恵器
図版44　環状瓶
図版45　SD02 出土土器
図版46　SD01・SX01 出土土器
図版47　軒丸瓦の分類・赤色付着物
図版48　軒丸瓦の分類
図版49　軒丸瓦の分類
図版50　軒丸瓦Ⅰ類
図版51　軒丸瓦Ⅱ類
図版52　軒丸瓦Ⅱ類
図版53　軒丸瓦Ⅲ類・細部写真
図版54　軒平瓦の分類
図版55　軒平瓦の分類
図版56　軒平瓦Ⅰ類
図版57　軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類
図版58　軒平瓦Ⅳ類・細部写真
図版59　丸瓦Ⅰ類
図版60　丸瓦Ⅱ類
図版61　丸瓦Ⅲ類Ａ
図版62　丸瓦Ⅲ類Ａ
図版63　丸瓦Ⅲ類Ｂ
図版64　丸瓦Ⅲ類Ｂ
図版65　丸瓦Ⅲ類Ｂ
図版66　丸瓦Ⅲ類Ｂ・Ｃ、細部写真
図版67　平瓦Ⅰ・Ⅱ類
図版68　平瓦Ⅱ類
図版69　平瓦Ⅱ類
図版70　平瓦Ⅲ・Ⅳ類
図版71　平瓦Ⅳ・Ⅴ類
図版72　平瓦Ⅴ類
図版73　平瓦Ⅴ類・特殊例
図版74　平瓦の細部写真
図版75　熨斗瓦Ⅰ類
図版76　熨斗瓦Ⅰ類
図版77　熨斗瓦Ⅰ・Ⅱ類
図版78　熨斗瓦Ⅲ類・細部写真
図版79　塼
図版80　蠟羽瓦Ⅰ類
図版81　蠟羽瓦Ⅱ類
図版82　蠟羽瓦の細部写真
図版83　鴟尾Ａ
図版84　鴟尾Ａ
図版85　鴟尾Ａ
図版86　鴟尾Ａ
図版87　鴟尾Ａ
図版88　鴟尾Ａ
図版89　鴟尾Ｂ
図版90　鴟尾Ｂ
図版91　鴟尾Ｂ
図版92　瓦製作時の截断片
図版93　文字瓦
図版94　文字瓦
図版95　瓦窯出土土器
図版96　瓦窯出土土器
図版97　篠場瓦窯 包含層出土土器
図版98　上海土遺跡　遺構
図版99　上海土遺跡　遺物

第１章　調査の方法と経過

１　調査に至る経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和 62 年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第 28 回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜から東海市に至る延長約 270 ㎞の第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては、東西に貫く形となり、その延長は約 170 ㎞である。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年 12 月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月 24 日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月 17 日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月 11 日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成４年８月 27 日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成４年９月 29 日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在にについての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月 18 日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は 136 箇所、調査対象総面積が 1,453,518 ㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年 11 月 19 日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。さらに平成６年には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は 133 箇所、調査対象総面積は 1,286,756 ㎡となっている。

平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第１回の協議が平成７年 12 月 13 日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組している。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成８年９月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成８年９月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真の№94地点、浜北市大平の№136地点、同市四大地の№137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地において確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成９年１月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により、平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年９月２日日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査の実施に関する打ち合わせ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年３月５日付で協定変更を行っている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、埋蔵文化財発掘調査は、中日本高速道路株式会社横浜支社に引き継がれている。

第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜松市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

浜松市（旧浜松市と旧浜北市）内における、確認調査を必要とする対象地点とその範囲の選定は、静岡県教育委員会の指導のもと、浜松市教育委員会及び、浜北市教育委員会が行った。その後、路線範囲の変更、側道やサービスエリアなどの本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡所在の再確認によって、対象地点範囲の変更や新たな対象地点の追加が行われた。最終的に、浜松市域では、本線およびサービスエリア建設範囲内で10箇所、工事用道路建設範囲内で２箇所の対象地点が選定された。この内、周辺の発掘調査や分布調査などによって、周知の遺跡となっていたのは、５地点である。その他の７地点については、周知の遺跡を含まないが、踏査や周辺環境等の検討の結果、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

調査を必要とする対象地点には、静岡県内で通し番号による地点名が付けられており、浜松市域において対象となった10地点については、№129～139地点となっている。ただし、いずれも確認調査の着手前に付けられたため、周知の遺跡を含んでいなかった地点に関しては、必ずしも地点名と遺跡の範囲とが合致していない。本書で報告する篠場瓦窯跡と上海土遺跡の範囲は、いずれも130地点に相当する。№130地点については、篠場瓦窯跡と上海土遺跡以外にも、すでに報告書を刊行している大門西遺跡、中屋遺跡、寺海土遺跡、中通遺跡の４遺跡が含まれている。なお、県の組織の改編に伴い、埋蔵文化財調査は、平成23年度より静岡県埋蔵文化財センターが引き継いでいる。

2　調査の体制

篠場瓦窯跡・上海土遺跡に関する調査体制は、表１の通りである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）は、日本道路公団静岡建設局における各工事事務所の範囲に合わせて「工区」を設定し、各工区単位で調査体制が組織されている。そのため、表１は浜松工区として組織された体制の一部となっている。

篠場瓦窯跡と上海土遺跡の確認調査および本調査（以下、現地調査）は、浜松市浜北区尾野の浜北現地事務所を拠点にして、平成 13 ～ 16 年度に実施した。本事業については、現地調査を優先するという方針から、浜松工区における全遺跡の現地調査が終了した後に、整理作業を実施している。本遺跡の資料整理および報告書作成作業は、浜北現地事務所と袋井市小山の袋井整理事務所において、平成 18 ～ 24 年度に実施した。ただし、出土遺物の洗浄、注記、写真の整理・収納、各種台帳作成などの基礎的な整理作業の一部については、現地調査と並行して実施している。

なお、鴟尾の復元作業については、静岡市駿河区谷田の埋蔵文化財センターにおいて実施した。

表１　調査体制

		H13 年度	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H18 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度
所　長		斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	清水 哲	天野 忍	石田 彰	勝田順也	勝田順也
副所長		山下 晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫							
常務理事		伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	清水 哲	清水 哲	天野 忍	石田 彰		
総務部（総務課）	部長	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫						
	次長			鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村 享	松村 享	八木利眞	八木利眞
	課長	杉木俊雄		鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村 享	松村 享	八木利眞	八木利眞
	専門監									稲葉保幸		
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸						
	総務係長	田中雅代	山本広子	山本広子	佐藤美奈子	佐藤美奈子			山内小百合	瀧みやこ	瀧みやこ	瀧みやこ
	事業係長										村松弘文	前田雅人
	事業担当	鈴木秀幸	鈴木秋博	鈴木秋博	鈴木秋博	中鉢京子				中鉢京子		
調査部（調査課）	部長	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久						
	次長	及川司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	及川 司 稲葉保幸	及川 司 稲葉保幸	及川 司 稲葉保幸			
	課長	及川 司	足立順司	足立順司	中嶋郁夫	中嶋郁夫		及川 司	及川 司	中鉢賢治	中鉢賢治	中鉢賢治
	工区主任	西田光男										
	係長						富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志
	調査担当（篠場瓦窯）		武田寛生	武田寛生 筒井京	武田寛生 中谷哲久	武田寛生	武田寛生	武田寛生	武田寛生	武田寛生	武田寛生	武田寛生
	調査担当（上海土）		武田寛生	佐野和道 鈴木昌明								武田寛生
	調査担当（確認調査）	水野功太郎 佐野和道		水野功太郎 高見健司								
保存処理					西尾太加二		西尾太加二		西尾太加二	西尾太加二		
調査内容		確認調査	本調査	確認・本調査	本調査・保存	本調査	整理・保存	整理	整理・保存	整理・保存	整理	整理
備　考		財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所									静岡県埋蔵文化財センター	

３　調査の方法

（１）確認調査

篠場瓦窯跡と上海土遺跡の確認調査は、130 地点の確認調査として他の遺跡とともに実施されている。条件が整い委託者からの要請があった範囲について、平成 13 年度と平成 15 年度に実施された。

実施にあたっては、篠場瓦窯跡のＦ･Ｅ区を除いて、トレンチを掘削して調査することを基本とした。トレンチの掘削は、重機の進入が容易なことから、表土や耕作土等は重機で掘削する方法を用いた。ただし、この場合においても、遺物包含層の掘削や遺構を精査する作業については、人力によってその把握に努めた。

調査区のトレンチを掘削する際には、主として土層の確認と遺構の発見に力を注いだ。土層については、各トレンチ四方の壁の土層断面を検討し、その高さや土色、土質などを記録した。遺物や遺構が発見された箇所においては、遺物包含層や遺構面の確定に努めた。

出土遺物は、出土した層位と位置を確認し、記録した上で取り上げることを基本とした。しかし、まとまって出土した場合や、遺構の性格を示している遺物が出土した場合などについては、本調査を実施することを前提に、出土位置に残すこととした。

篠場瓦窯跡Ｅ・Ｆ区については、瓦窯や灰原の存在が想定されたことから、攪乱や造成が及んでいない範囲をトレンチにより確認した後、地形の残存する範囲を面的に拡張して調査した。この調査で出土した遺物については、記録を作成した上ですべて取り上げ作業を行った。

現地での記録図面は、調査区全体図（トレンチ配置図）が１/200、土層断面図や柱状図は１/10 を基本として作成した。その際の測量基準点は、平成 13 年度は三角点や第二東名の工事関係用基準杭、平成 15 年度は新たに基準杭を打設して使用した。記録写真には、作業工程撮影用と併行して 35 ｍｍ判カラーネガを用いた。

（２）本調査

篠場瓦窯跡は東西約 180 ｍ・南北約 150 ｍ、上海土遺跡が東西約 200 ｍ・南北約 110 ｍを範囲とする。ただし、工事の及ばない現道・河川や安全確保が困難な狭小な場所については、遺跡の状況について検討を行った上で、静岡県教育委員会の指導の下、一部調査範囲から除外している。

調査は、平成 14 年度から 16 年度まで実施しており、工事の優先度に従って、調査区を篠場瓦窯跡では５区、上海土遺跡では３区に分け、順次調査を実施した。また、篠場瓦窯跡では、周辺の調査が終了した後に、河川の付け替え工事が行われ、工事完了後に元の河川部分（５区）の調査を行っている。両遺跡は、国道によって隔てられてはいるが、ほぼ同時期に調査を行っており、基本的には同様の調査方法をとっている。

調査に際しては、基準点測量およびグリッド杭の設置を委託して行った。両遺跡におけるグリッドは、大グリッドと小グリッドからなっている。大グリッドは一辺 10 ｍの正方形で、調査範囲の北西にあたる座標（X= － 128760　Y= － 65000）を起点として、北から南へＡ・Ｂ・Ｃ…、西から東へ１・２・３…と、アルファベットと数字の組み合わせによって表記している。小グリッドは、１つの大グリッドを４分割した５ｍ四方の正方形で、大グリッドと組み合わせてＡ１－ NW などと記している。

なお、2002 年４月１日からの改正測量法の施行によって、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、中屋遺跡の発掘調査はすべて日本測地系に基づいている。そのため、本書の平面座標は、世界測地系であることを明示したものを除き、すべて日本測地系で表記している。

発掘調査は、まず調査区の設定を行った。そして、作業員棟・簡易トイレなどの設置とともに、重機

による表土除去を開始した。その後、重機による表土除去が完了した範囲から、人力によって遺構検出面までの掘削作業を開始した。ただし、確認調査で窯跡の存在が確認されていた地点の周囲については、重機による窯の損壊の恐れがあったため、表土から人力による掘削を行っている。

段丘上にあたる上海土遺跡と篠場瓦窯跡の西側では、重機で表土を 10 ～ 20 ㎝程除去すると、まもなく検出面（地山）に達した。段丘下の篠場瓦窯跡の東側では土砂が厚く堆積し、一部には廃棄物が多量に投棄されていた。重機でこれらを 1.5 ～ 2 m程取り除くと検出面（灰原上面）に達した。また、5区では河川の付け替えや橋脚建設工事のために盛土されていたため、まずはこれらの土を除去した。検出面に達した場所については、随時、遺構の検出作業を行った。

検出された遺構は、土層断面によって埋土の状態を観察・記録した後に、全体の掘削を行った。発見された遺構には、すべて調査中に遺構番号を付した。

遺構から出土した遺物については、出土状況図の作成または、出土地点の三次元座標を計測した上で取り上げることを基本とした。ただし、土砂とともに流入したとみられる遺物については、基本的に層位ごとに取り上げている。篠場瓦窯跡の灰原出土遺物については、各窯の灰原ごとに 50 ㎝四方のグリッドを設定し、グリッドごとに取り上げた。また、包含層出土の遺物については、遺物が集中するなど特別な場合を除いて、5 m四方の小グリッドごとに取り上げた。

遺構の現地記録写真の撮影は、6 × 7 判（モノクロ）と 35 ㎜判（カラーリバーサル）を用いた。作業工程の撮影には 35 ㎜（カラーネガ）を使用した。

現地の記録図面としては、空中写真測量によって、設定したグリッドに沿って、100 分の 1 縮尺の地形測量図と 50 分の 1 縮尺の遺構図を作成した。また、窯跡など細部の記録が必要なものについては、10 分の 1 縮尺の記録図面を作成した。

なお、篠場瓦窯跡の 3 基の窯跡については、三次元レーザースキャナーを用いて三次元データを取得した上で、調査の終了後に、窯の型取りと壁面・床面の剥ぎ取り作業を実施している。

掘削業務は小林建設株式会社（平成 16 年度）、三次元レーザー測量と空中写真撮影・写真測量、遺構図作成作業の一部は株式会社フジヤマに委託して実施した。

（3）資料整理・報告書作成

両遺跡に関わる資料整理および報告書作成作業は、平成 18 年度から開始した。ただし、出土遺物の洗浄・注記や台帳作成等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行っている。また、篠場瓦窯 2 号窯の復元作業は、2 号窯について平成 16 年度に実施している。

作業としては、出土品の分類・仕分け、接合、復元、拓本、実測作業や、遺構図面の編集、各図の版組、トレース作業、遺物の写真撮影、原稿執筆などを行い、これらを編集して報告書を作成した。遺物の写真撮影は、4 × 5 判（モノクロネガ･カラーリバーサル）、6 × 7 判（モノクロネガ･カラーリバーサル）を用いて、当センター写真室において行った。窯跡と鴟尾の復元作業は、当センター保存処理室が実施した。なお、平成 22 年度までは財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が業務を行い、平成 23 年度からは静岡県埋蔵文化財センターが業務を引き継いでいる。

篠場瓦窯跡の地磁気年代測定については、富山大学理学部の広岡公夫氏に依頼した。炭化物年代測定は株式会社加速器分析研究所、元素マッピング分析は株式会社パレオ・ラボ、復元した鴟尾の実測業務は株式会社フジヤマ、水洗・注記業務は小林建設株式会社、整理作業員派遣業務はＮＴＴマーケティングアクト静岡、整理作業・保存処理業務は株式会社パソナに委託して実施した。

４　調査の経過

（１）現地調査

篠場瓦窯跡と上海土遺跡の現地調査（確認調査・本調査）は、工事の工程や河川の付け替えが必要であるなどの事情により、複数回に分けて行われている。また、基本的には地点を単位として調査が実施されたため、確認調査では 130 地点に含まれる他の遺跡とともに調査を実施している。

以下、調査年次ごとに現地調査の経過について記すことにする。

平成 13 年度　（９月 13 日～１月 30 日　№130 地点範囲確認調査）

５月より中屋遺跡において本調査が実施され、大規模な溝が東に延びることが判明し、№130 地点の東側の範囲を確定させることが急務となった。ちょうどその頃、地元在住の職員により、国道 152 号線の東側の第二東名路線内において、偶然布目瓦が採取された。これを受け、急遽現地踏査を実施したところ、斜面に沿って土手状の高まりが存在し、地表面には多数の瓦が散布していることが確認された。このとき採取した瓦に重孤文軒平瓦が含まれていたことから、白鳳期の寺院の存在が想定された。

そのため、本調査対象として範囲が確定していた市道岩水地駅前線から、国道 152 号線東側の八幡川付近までの範囲を対象に、９月 13 日より範囲確認調査が実施された。

調査の結果、瓦の散布していた場所には、寺院の存在については確証が得られなかったものの、少な

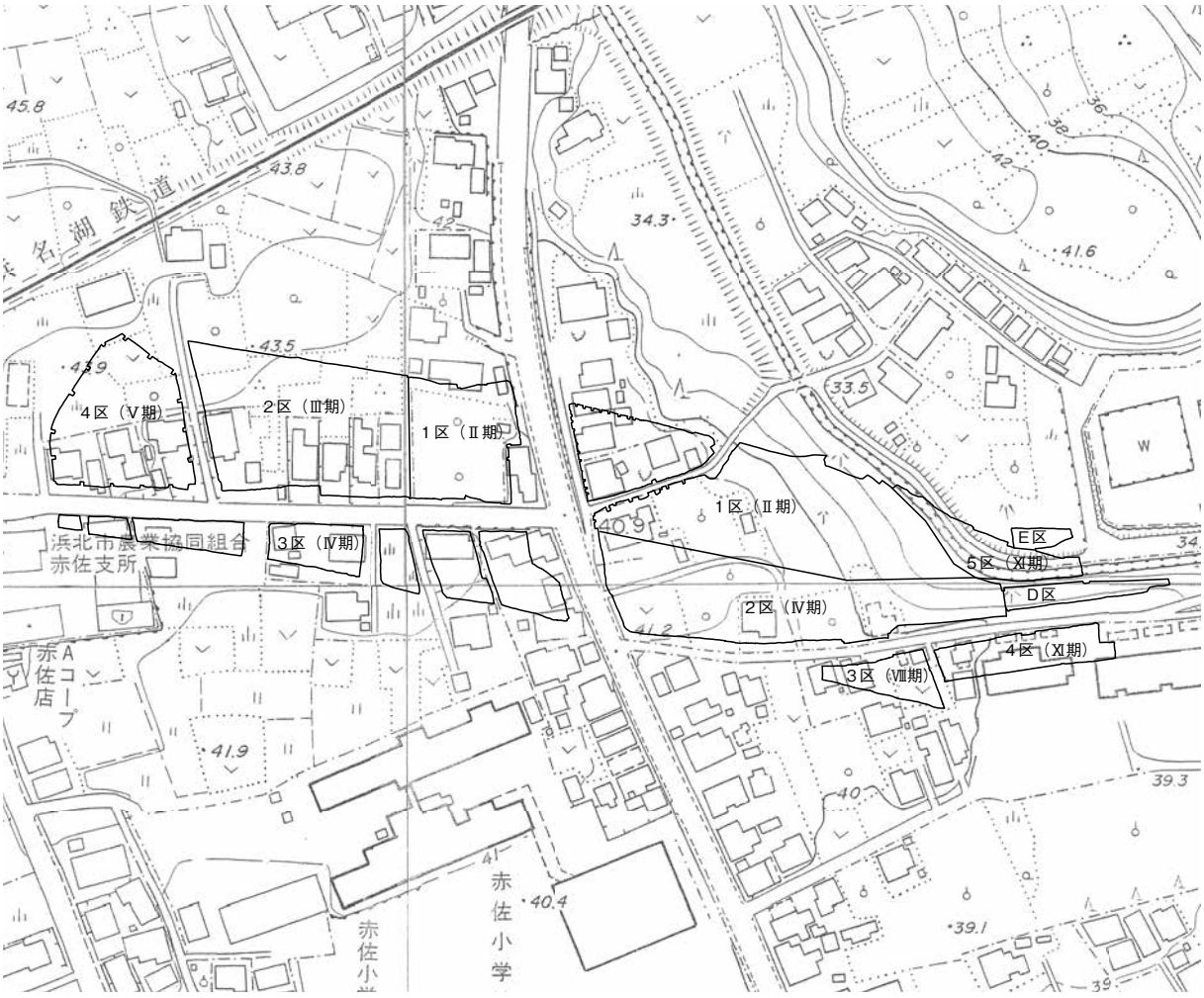


図１　篠場瓦窯跡・上海土遺跡 調査区配置図（Ｓ＝１：2500）

くとも１基の瓦窯が存在することが確認された。また、そのほかの場所においても遺構や遺物が発見され、確認調査を行ったほぼ全域に遺跡が展開することが判明した。なお、現在これらの遺跡は、篠場瓦窯跡、上海土遺跡、大門西遺跡、中屋遺跡となっている。

平成 14 年度　（７月 30 日～３月 31 日　№130 地点本調査Ⅱ期）

範囲確認調査の結果を受け、７月 30 日から篠場瓦窯の本調査を実施した。工事計画との関係から、調査は瓦窯の存在が確認された斜面部と路線の北半分を先行して行うこととなった。なお、本調査Ⅱ期には、篠場瓦窯跡と上海土遺跡の両遺跡が含まれており、同時期に調査が実施されている。調査面積は、篠場瓦窯跡（１区）が 8050 ㎡、上海土遺跡（１区）が 1500 ㎡である。

確認調査において確実に認識できていた瓦窯は１基のみであったが、斜面の表土を除去し検出作業を行うと、瓦窯は２基検出され、遺存状態も予想以上に良好であることが判明した。確認調査で存在が確認されていた瓦窯を１号窯、新たに発見された瓦窯を２号窯として調査を行うことになった。また、寺院の存在を想定する根拠の一つとなった土手状の高まりについては、人為的に盛られたものではなく、逆に周囲が大きく削平されたために、周囲よりも高くなっていることが明らかになった。

その後、１号窯の灰原の調査を終了すると、その下面でさらにもう１基の瓦窯が検出されたため、これを３号窯とした。瓦窯の基数が増えたことに加え、想定以上に瓦窯・灰原の遺存状態が良好であることから、瓦窯周辺に関しては、翌年度に継続して調査を実施することとなった。１・２号窯が検出された 11 月には、八賀晋氏（三重大学）、森郁夫氏（帝塚山大学）、上原真人氏（京都大学）による、調査指導が行われた。

平成 15 年度　（４月７日～ 12 月 12 日　№130 地点本調査Ⅱ～Ⅴ期・Ⅷ期、確認調査その３）

平成 15 年度には、上海土遺跡について広範囲に本調査を実施した。工事計画との関係から、本調査はⅢ期（２区）・Ⅳ期（３区）・Ⅴ期（４区）の３期に分けて行われた。このうち遺跡の西側に位置する４区では、掘立柱建物が検出された。10 月 31 日には、上海土遺跡についての当事業における調査がすべて完了した。

篠場瓦窯では、窯跡の調査を継続するとともに、窯上方の路線南側の調査についても実施した。前年度の調査において、本調査範囲の東側へ灰原が広がる可能性が高くなったことから、６月には東側（D・E区）についての確認調査が行われた。E区では瓦が採取されたものの、深さが２m近くにもなり、トレンチ内での人力による調査は危険である判断された。そのため、周辺を拡張して作業空間を確保し、土留めを設置した上で灰原の調査を行うことになった。出土した瓦については、記録を作成し、取り上

図２　確認調査

図３　本調査

げ作業を行った。12 月には、未買地のため調査の及んでいなかった南東部の確認調査を実施し、窯上の溝が続いていることが確認されている。

７月には、３基の窯跡の型取り･剥ぎ取り作業を行った。８月 19･20 日には、広岡公夫氏（富山大学）により、考古地磁気測定のための試料採取が実施されている。窯跡の調査がほぼ完了した９月には、調査成果について報道提供を行い、９月６日には現地説明会を開催した。現地説明会には、新聞で大きく取り上げられたこともあり、県内外から 350 人以上の参加者があった。

平成 16 年度　（６月 21 日～ 11 月 17 日　№130 地点本調査Ⅺ期）

６月に八幡川の付け替え工事が完了したことから、旧河川部分の本調査が実施された。調査区には灰原が広がっており、多くの瓦が出土した。また、前年度に溝の存在が確認された段丘上についても調査が実施され、建物基礎によって失われている部分のも多かったが、溝（SD02）が検出された。

11 月 17 日には調査を終了し、当事業における篠場瓦窯跡の現地調査がすべて完了した。

（２）資料整理

出土した瓦がポリエチレンコンテナにして 700 箱以上と多量に及ぶため、資料整理は基本的に窯ごとに作業を行うこととした。前述のように、出土遺物の洗浄・注記や台帳作製等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行われていた。また、篠場瓦窯跡２号窯の復元作業は、整理作業よりも先行して平成 16 年度に実施している。なお、整理作業中にも出土遺物や写真等については随時公開した。

平成 18 年度　　篠場瓦窯跡の資料整理が本格的に開始されたのは、平成 18 年４月からである。３号窯窯体内の出土瓦を中心に分類・仕分け、接合、復原、実測などの作業を実施した。作業の結果、完形に接合される丸瓦が多量に存在することや、破片の中に鴟尾の破片が多く含まれていることなどが明らかになった。これらについて、11 月１日には森郁夫氏（帝塚山大学）、11 月 14 日には上原真人氏（京都大学）、２月７日には大脇潔氏（近畿大学）による調査指導が行われている。

また、１月には接合作業によって発見された鬼瓦について記者提供を行い、新聞等で大きく取り上げられた。復原が完了した瓦について、１月にはなゆた浜北ふるさと情報コーナーにて特別展示を行い、２～３月には浜松市博物館特別展「里帰りした新浜松市の文化財」にて展示・公開した。

平成 19 年度　　３号窯窯体内出土瓦について、接合、復原、実測、拓本などの作業を継続して実施した。12 月３日には、復原作業を実施中の鴟尾について、大脇潔氏（近畿大学）による調査指導が行われている。

図４　現地説明会

図５　調査指導

２月には、復原が完了した鴟尾に関する記者発表を行い、新聞やテレビで大きく取り上げられた。鴟尾は、静岡県立美術館で開催された、埋蔵文化財展「発掘された仏教遺跡」（静岡県教育委員会主催）において展示・公開した。

平成 20 年度　　前年度からの実測や拓本などの作業を継続するとともに、３号窯灰原出土の瓦について分類・仕分け、接合、復原作業を実施した。２月 12 日には、出土須恵器について後藤建一氏（湖西市教育委員会）による調査指導が行われている。また、復元した鴟尾の実測を委託により実施した。

平成 21 年度　　３号窯灰原出土瓦の実測・拓本作業を中心に、２号窯出土瓦の分類・仕分け、接合などの作業も実施した。３号窯出土瓦の内容が明らかになるとともに、蠖羽瓦や藁座痕の残る断片などの特殊な瓦の存在が確認された。これらについて、12 月２日には上原真人氏（京都大学）、３月 11 日には森郁夫氏（帝塚山大学）による調査指導が行われている。６～７月には、浜松市博物館特別展「地下に眠る浜松の至宝」において、鴟尾や軒瓦を展示・公開した。

平成 22 年度　　２号窯出土瓦の実測、拓本などの作業を行うとともに、１号窯出土瓦についての分類･仕分け、接合作業を実施した。窯跡出土瓦の全容が徐々に判明するとともに、窯ごとの製作技法の違いが明らかになった。これについて、２月９日に八賀晋氏（三重大学）による調査指導が行われている。

平成 23 年　　１号窯出土瓦の実測、拓本作業を中心に、３・２号窯出土瓦の版組、トレース作業、窯以外の遺構から出土した瓦の分類･仕分け、接合、復原作業などを実施した。瓦の赤色付着物の元素マッピング分析を委託により実施した。10 ～ 12 月には、藤枝市郷土博物館企画展「発掘された藤枝－ふじえだの新発見遺跡としずおかの発掘名品展」にて軒丸瓦を展示・公開した。

平成 24 年　　出土瓦の実測・拓本や、遺構・遺物の版組、トレース、編集、原稿執筆などを行い、これらを編集して報告書を刊行した。なお、上海土遺跡の資料整理は、平成 24 年度に実施している。篠場瓦窯の出土瓦の全容が判明するとともに、新たに文字瓦の存在が確認された。これらについて、９月 19 日に上原真人氏（京都大学）、９月 21 日に森郁夫氏（帝塚山大学）による調査指導が行われている。軒丸瓦については、７月から静岡県立中央図書館において常設展示している。３月に報告書を刊行し、両遺跡の資料整理をすべて完了した。

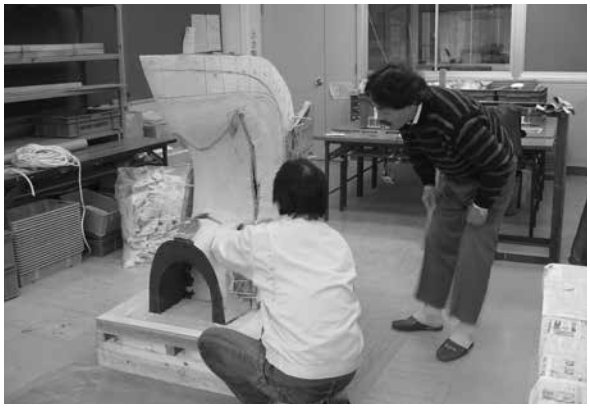


図６　鴟尾復元作業・調査指導

図７　整理作業

第２章　位置と環境

１　遺跡の位置

篠場瓦窯跡は、静岡県浜松市浜北区根堅の、浜松市立赤佐小学校の北東約 120 ｍに位置する。上海土遺跡は国道 152 号線を挟んで篠場瓦窯跡の西側に隣接する。篠場瓦窯は、東西が於呂浄水場から国道 152 線までの約 180 m、南北は窯跡を中心に南北約 150 ｍが遺跡の範囲となっている。上海土遺跡は、東西が国道 152 号線から県道岩水寺停車場線まで約 200 m、南北は第二東名の路線を中心に約 110 ｍが遺跡の範囲となっている。浜松市は、静岡県西部に位置し、東は天竜川を挟んで磐田市と、西は浜名湖西岸の新居町・湖西市と接している。平成 17 年に周辺の２市・８町・１村と合併し、平成 19 年には政令指定都市となって７つの行政区が置かれている。このため、中屋遺跡の所在地は、調査開始時には浜北市であったが、現在は浜松市浜北区となっている。

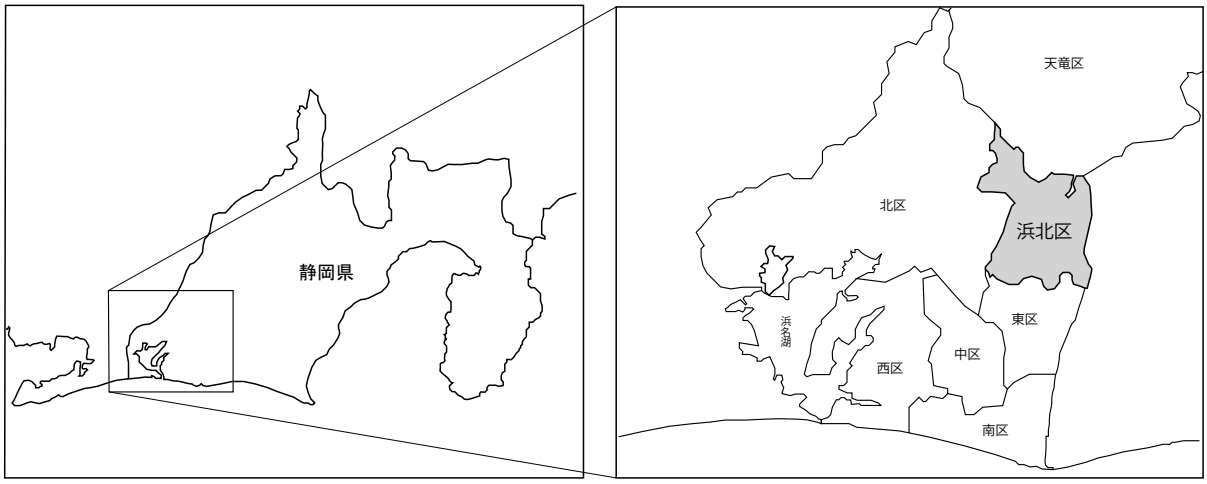


図８　浜北区の位置

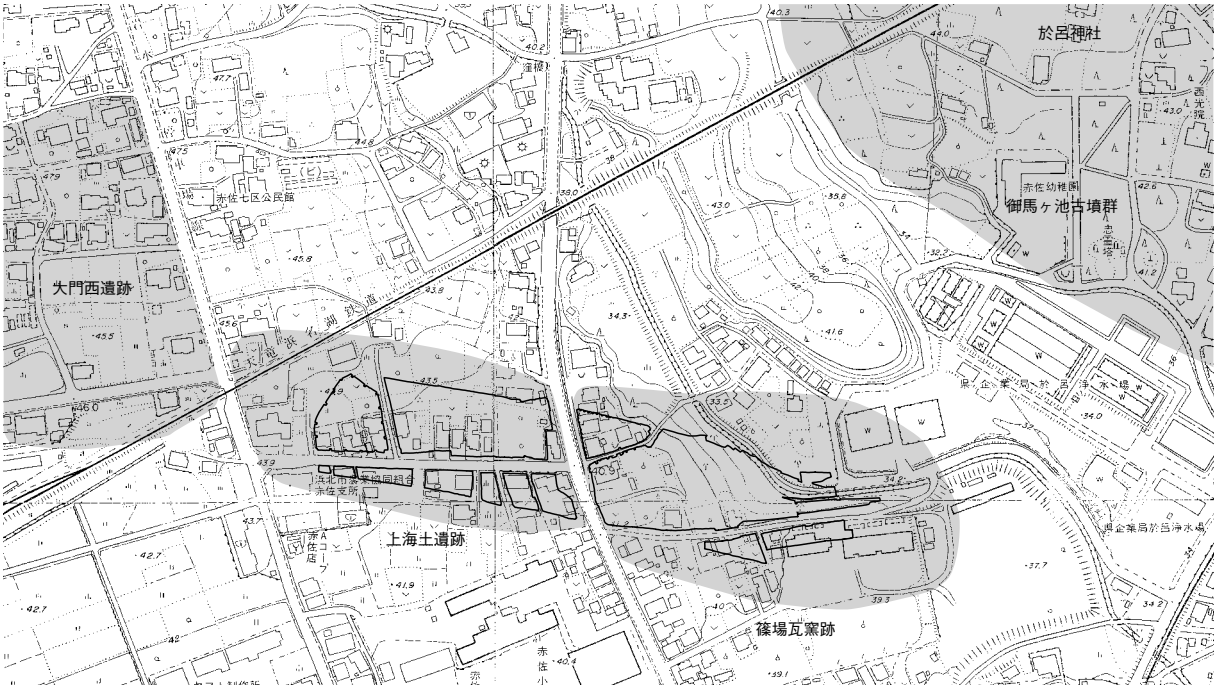


図９　遺跡範囲図（Ｓ＝１：5000）

2　地理的環境

浜松市は静岡県西部に位置し、東は天竜川を挟んで磐田市と、西は浜名湖西岸の新居町・湖西市と接している。平成 17 年の合併により、浜松市・浜北市・天竜市の３市と、水窪町・佐久間町・春野町・引佐町・細江町・三ヶ日町・雄踏町・舞阪町の８町、龍山村の１村が一つとなり、現在は浜松市となっている。平成 19 年には政令指定都市となり、現在では７つの行政区（中区・東区・西区・南区・北区・浜北区・天竜区）が置かれている。浜松市は、総面積は 1511.17 ㎢で、東西 52 ㎞・南北 73 ㎞もの広大な範囲に及ぶ。その中で、第二東名関連の発掘調査対象地は、浜北区及び北区の丘陵沿いに集中する。したがって、ここでは、浜北区から北区にかけての丘陵沿いの地域を中心に、地理的環境をみていくことにする。

地形としては、山地および丘陵と、三方原台地、河岸段丘、沖積平野に大別される。北部は、赤石山脈の南端にあたる、標高 200 ～ 300 ｍ程の山地となっている。山地の南側には、標高 100 ～ 200 ｍ程の丘陵が連なる。丘陵では、開析が進行しており、掌状に伸びる小尾根がいくつも形成されている。山地は、約２億５千万年前の古生代にできた、砂岩やチャート、石灰岩などからなる。丘陵の一部は、約５～ 15 万年前の砂礫やシルトからなっており、浜北区の根堅周辺の地域には石灰岩地帯も確認される。主に山林として利用されている。

図 10　明治期の地形図（１：40,000）　「明治 23 年二万分の１地形図」（大日本帝国陸地測量部）を縮小・加筆

浜北区の西部から北区にかけては、三方原台地が広がる。三方原台地は、かつては、天竜川を挟んで東側の磐田原台地とつながっていたが、地殻変動によって隆起した後、天竜川による浸食によって２つに分割された。形成されたのは、約 10 万年前のリス・ヴェルム間氷期とみられる。台地上は標高 100 ｍ程の平坦面が広がり、全体は南西方向に傾斜している。天竜川によって運ばれた礫質を中心とする第四紀層が厚く堆積しており、その上に赤褐色～橙褐色の土壌が覆っている。台地の南部は、市街地となっている。北部では、都田テクノポリスなど開発も進んでいるが、多くは果樹園として利用されてきた。

河岸段丘は天竜川によって三方原台地の東方に形成された段丘で、上位と中位、下位の段丘とに分けられる。上位段丘は富岡段丘と呼ばれ、約３万年前に形成されたとみられている。標高 50 ～ 60 ｍ程で、砂礫層からなり、その上を赤褐色～橙黄色の細粒土質が覆っている。浜北区平口付近から、三方原台地に沿って南へ広がっており、一部根堅にも確認される。茶畑や果樹園に利用されている。

中位段丘は姥ヶ谷段丘と呼ばれ、約２万３千年前に堆積したとされる。標高は 50 ｍ程で、砂礫層からなり、表層は赤褐色～黄褐色の土層に覆われている。下位段丘とは、10 ～ 30 ｍ程の比高差があり、その間には段丘崖もみられる。上位段丘と同様に、根堅に一部見られる他、宮口から内野付近にかけての地域に、三方原台地に沿って広がっている。多くが果樹園や茶畑として利用されている。

下位段丘は浜北段丘と呼ばれ、鹿島付近から平口にかけて広範囲にみられる。約１万２千年前に堆積したとされる。標高は 15 ～ 45 ｍで、南東方向に緩やかに傾斜している。沖積平野とは、大きいところで数メートルの比高差があり、段丘崖もみられる。砂礫層からなり、その上を黒色土や赤褐色土、粘土などが覆っている。特に「黒ボク」と呼ばれる黒色土は、浜北段丘の大部分で最上層に認められる。果樹園や畑地として利用されており、近年では宅地化が進んでいる。

下位段丘の東側には、天竜川よって形成された沖積平野が広がっている。天竜川が運搬した砂や礫によって形成されており、その範囲は上島から中瀬、貴布祢、小松など、市街地の大部分に及んでいる。平野には、網目状に広がる低水路（旧河道）が認められ、かつて小河川が入り組むように流れていた様子がうかがえる。緩やかな傾斜の平坦地で、主に畑地や宅地として利用されている。

また、根堅から内野にかけては、氾濫平野も確認される。北部の山地や三方原台地から流れ出た小河川によって形成された低湿地で、大部分がシルトや粘土からなる。排水が悪い地域で、主に水田として利用されている。

浜北区北部の段丘上には、丘陵に沿って東西に国道 362 号線が、浜北段丘の縁辺には南北に国道 152 号線が通り、根堅で合流して天竜川を渡る。この地域は、天竜川西岸における南北・東西交通の要所の一つとなっている。

上海土遺跡は浜北段丘上の平坦地に位置しており、調査以前には宅地として利用されていた。遺跡の南西側には、氾濫平野が広がり現在は水田として利用されている。篠場瓦窯跡では、浜北段丘の段丘崖に窯跡が築かれている。調査前には荒地となっていたが、戦中から戦後しばらくの間は段々畑が営まれていたようである。また、段丘上の平坦地については宅地として利用されていた。窯跡の東側は開析谷となっている。北部の丘陵から派生する八幡川が段丘の裾に沿って流れており、谷を抜けると天竜川にかけて氾濫平野が広がっている。谷を挟み篠場瓦窯跡から約 400 ｍ北東の段丘上には、延喜式内社於呂神社が鎮座している。

3　歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、天竜川東岸の磐田原台地に比べて少ない。浜北区根堅の丘陵地に所在する根堅遺跡（27）では、人骨や動物化石が発見されている。昭和35年に石灰採石場で多くの動物化石が発見され、昭和37年と38年には東京大学によって調査が実施されている。遺跡は石灰岩の割れ目にできた洞窟で、堆積層がⅠ層からⅣ層に分けられている。人骨が発見されたのはⅡ層とⅢ層で、Ⅱ層のものを上層人、Ⅲ層のものを下層人として報告されている。動物化石としては、Ⅱ層で哺乳類５種と鳥類１種が、Ⅲ層で哺乳類５種と両生類１種、は虫類１種、鳥類１種が発見されている。石器などの遺物は、採集されていない。近年、放射性炭素年代の測定が行われ、上層人骨が約13900年ＢＰ～14200ＢＰ、下層人骨が約17900ＢＰという結果が得られている。梶池遺跡（55）では、ナイフ形石器や細石刃、石核などが発見されている。浜北区宮口の段丘上に位置しており、平成９年に浜北市教育委員会によって発掘調査が行われている。ただし、遺跡の中心は縄文時代中期であり、旧石器時代の遺物は少量出土した程度である。

縄文時代

早期の遺跡としては、龍泉寺西側の丘陵裾に位置する中通遺跡（６）がある。すでに報告書を刊行しているが、第二東名の建設事業に伴って発掘調査が実施され、200基をこえる数の炉穴が密集した状態で発見されている。一遺跡で発見された炉穴の数としては、東海地方で最多である。出土した遺物は少ないが、押型文土器や表裏縄文系の縄文土器が出土している。中通遺跡以外の早期の遺跡としては、大屋敷遺跡（53）で早期とみられる縄文土器が採集されている程度である。大屋敷遺跡は、比較的広い平坦面が確保できる段丘上にあり、現在でも地表面において比較的容易に黒曜石などが採取できる。遺跡では、中期初頭から後・晩期の土器も出土しており、この地域における居住域の一つであったと推定される。

中期以降になると、富岡大谷遺跡（62）や梶池遺跡（55）、染地石遺跡、大屋敷遺跡（53）、北谷遺跡（25）など、多くの遺跡が展開する。いずれも、三方原台地上か中位段丘上に立地している。梶池遺跡（55）では、竪穴住居が１軒検出され、中期初頭の土器が出土している。北谷遺跡（25）では、中期中葉から後・晩期の土器が出土している。遺構は明確ではないが、未製品を含め多量の石器が採集されていることから、石器製作遺跡であった可能性が指摘されている。富岡大谷遺跡（62）では、竪穴住居が５軒、染地石遺跡では竪穴住居が１軒検出されており、いずれも中期後半の土器が出土している。

弥生時代

前期については、北谷遺跡（25）や芝本遺跡（31）などで土器片が出土しているのみであり、明確でない。中期から後期にかけては、低位段丘の東側の芝本遺跡（31）や東原遺跡（32）で集落が営まれる。芝本遺跡（31）は、昭和39年から数次にわたって、発掘調査が行われている。竪穴住居が11軒検出されている他、方形周溝墓や土器棺墓なども発見されている。主に中期から後期にかけての土器が出土している。東原遺跡（32）は、芝本遺跡の南に隣接する。昭和40年から、32次にわたって発掘調査が行われている。合計140軒以上の竪穴住居、方形周溝墓や土器棺墓も発見されている。遺物としては、後期中葉から後葉のものが主体を占めている。芝本遺跡を含めて、約140000㎡にもおよぶ、弥生後期の大集落が存在すると推測されている。

1	篠場瓦窯跡	13	二俣城	25	北谷遺跡	37	大屋敷Ａ古墳群	49	野口前遺跡	61	大平城址
2	上海土遺跡	14	鳥羽山城	26	泉Ａ古墳群	38	大屋敷Ｂ古墳群	50	土取Ⅱ遺跡	62	富岡大谷遺跡
3	中屋遺跡	15	百々原遺跡	27	根堅遺跡	39	大屋敷Ｃ古墳群	51	土取Ⅰ遺跡	63	沢上Ａ古墳群
4	大門西遺跡	16	向野遺跡	28	泉Ｂ古墳群	40	大屋敷古窯跡群	52	土取遺跡	64	沢上Ｂ古墳群
5	寺海土遺跡	17	向山Ａ古墳群	29	雲岩寺Ａ古墳群	41	北屋敷Ａ古墳群	53	大屋敷遺跡	65	沢上Ⅲ遺跡
6	中通遺跡	18	向山Ⅰ遺跡	30	雲岩寺Ｂ古墳群	42	北屋敷Ｂ古墳群	54	大屋敷墳墓群	66	沢上Ⅰ遺跡
7	赤佐中学校内遺跡	19	向山Ⅱ遺跡	31	芝本遺跡	43	新屋遺跡	55	梔池遺跡	67	沢上Ⅱ遺跡
8	雲岩寺Ｃ古墳群	20	向山Ｂ古墳群	32	東原遺跡	44	新屋古墳群	56	男池遺跡	68	白昭Ⅰ遺跡
9	高根山Ａ古墳群	21	御馬ヶ池古墳群	33	勝栗山墳墓群	45	吉名古窯跡群	57	新原古墳群	69	姥ヶ谷古墳群
10	大平遺跡	22	勝栗山Ａ古墳群	34	泉墳墓群	46	譲栄Ⅰ遺跡	58	梔池古墳群	70	山林遺跡
11	蜷原砦	23	勝栗山Ⅰ遺跡	35	高根山Ｂ古墳群	47	譲栄古窯跡群	59	志野古墳群	71	二本ヶ谷古墳群
12	毘沙門堂砦	24	勝栗山Ｂ古墳群	36	高根山Ｃ古墳群	48	譲栄Ⅱ遺跡	60	志野遺跡	72	二本ヶ谷積石塚

図 11　浜松地区周辺の遺跡（Ｓ＝１：50,000）

古墳時代

古墳時代には、丘陵や三方原台地に多くの古墳が築造される。前期に古墳がつくられるのは、赤門上古墳や権現平山７号など、三方原台地の縁辺部である。中期には、古墳の数が増加し、三方原台地縁辺では、権現平山古墳群や神明社上古墳群、観音ツブラ古墳群、辺田平古墳群など多くの古墳が築造され、古墳群を形成する。さらに、雲岩寺Ｂ１号墳（30）や御馬ヶ池２号墳（21）など、北部の丘陵や段丘上にも古墳が認められるようになる。

後期になると、北部の丘陵や段丘で、築造される古墳の数が急増する。その大半が、主体部に横穴式石室をもつ小型の円墳で、一帯には向山古墳群（17・20）や勝栗山古墳群（22・24）、泉古墳群（26・28）、雲岩寺古墳群（８・29・30）、高根山古墳群（９・35・36）、大屋敷古墳群（37 ～ 39）など、数多くの古墳群が形成される。このうち、雲岩寺Ｃ古墳群（８）と高根山Ａ古墳群（９）は、第二東名建設に伴って発掘調査が実施されている。横穴式石室の古墳が発見されており、須恵器や玉類、鉄鏃、大刀、馬具などの副葬品が出土している。

このように、多くの古墳が確認されるにもかかわらず、それ以外の遺跡については、調査例も少なく、不明な点が多い。集落は、低位段丘上に立地する東原遺跡（32）で認められる程度である。東原遺跡では、竪穴住居が４軒、掘立柱建物が２棟発見されている。いずれも、古墳時代後期の遺構とみられている。

古代

律令制下において、浜北区北部地域は遠江国麁玉郡に属すると推定される。昭和 31 年に他町村と合併する以前、浜北区根堅周辺には赤佐村が存在した。字名としては失われているが、自治会名や学校名などに、現在でも「赤佐」の名称が用いられており、根堅周辺の地域は『倭名類従抄』にみられる赤狭郷にあたると推測される。麁玉郡には赤狭郷のほかに、三宅・碧田・覇多の３郷がみえ、屯倉や渡来系氏族の存在を伺わせる。麁玉郡はわずか四郷の小郡ではあるが、やや特殊な地域であったものと推測される。

遺跡としては、北部の丘陵や台地・段丘の縁辺に、多くの窯業遺跡が確認されている。段丘の東側斜面には、今回報告する篠場瓦窯（１）が築かれている。篠場瓦窯以外の瓦窯としては、雲岩寺Ｃ古墳群（８）の西側に位置したとされる東ノ谷瓦窯瓦窯がある。発掘調査は行われていないが、かつて平瓦や丸瓦、鴟尾、須恵器などが採取されている。採取されている須恵器などから、８世紀中頃の瓦窯と推定されている（武田 2009）。吉名古窯跡群（45）では、現在までに９基の窯跡の存在が確認されており、３基について発掘調査が実施されている。９～ 10 世紀に操業した灰釉陶器の窯跡で、硯や陶製の九輪、瓦なども生産されている。大屋敷古窯跡群（40）では、６基の窯跡の存在が確認されている。このうち２基については、発掘調査が実施されており、10 ～ 11 世紀に操業した灰釉陶器の窯跡であることが明らかとなっている。これらの他にも、平安時代の窯跡が４ヶ所で確認されており、窯業生産が盛んに行われた地域であることを示している。

集落遺跡については調査例が少なく、向山Ｉ遺跡（18）や東原遺跡（32）、大門西遺跡（４）、中屋遺跡（３）で建物跡などが検出されている程度である。向山Ｉ遺跡（18）では、奈良時代の竪穴建物が３軒と平安時代の溝が１条発見されている。東原遺跡（32）では、奈良時代前半から中葉までの竪穴建物 10 軒や土坑、溝などが検出されている。大門西遺跡（４）では、７世紀後半から８世紀にかけての竪穴建物が７軒と掘立柱建物が 11 棟確認されている。ほかに井戸や土坑なども検出されており、小規模な集落が展開していたことがうかがえる。中屋遺跡（３）では、竪穴建物が５軒と掘立柱建物が 32 棟検出されている。中心となる時期は８世紀で、土坑や大規模な溝なども検出されている。

中世～近世

中世には、根堅から宮口にかけての丘陵に、多くの中世墳墓群が築かれる。中でも勝栗山墳墓群(33)は、江戸時代からその存在が知られており、久安二（1146）年銘の陶製五輪塔形経筒外容器が出土したと伝えられている。昭和 30 から 40 年代にかけて開墾が行われた際には、多数の石塔や蔵骨器、蓬莱鏡などが発見されている。採取された遺物などから、12 世紀から 17 世紀にかけて造営されたと推測されている。泉墳墓群（34）では、周囲が方形に区画された集石墓が発見されている。大屋敷墳墓群（54）でも、同様の集石墓が発見されている。中心部に主体部をもち、上部に石塔が建てられている。

中屋遺跡（３）では、中世前期の大規模な溝が検出されている。溝は東西 160 ｍ・南北 210 ｍの範囲を長方形に区画する溝で、溝の内側には土塁が構築されている。ほぼ全域から瓦や塼が出土しており、寺院の可能性が高いと推定されている。岩水寺の東側に位置する北谷遺跡（25）でも類似する瓦が出土しており、岩水寺と関連する遺跡として注目されている。区画に東側では河川跡が検出されており、河川の両岸には護岸施設が築かれている。護岸施設の基底部には、螺鈿鞍と呪符木簡が埋納された状態で出土している。中世後期から近世には、建物や井戸、溝、墓などが築かれ、集落が形成されている。

遺跡の調査事例はあまり多くないが、史料などには断片的にこの時期のものが残されている。暦応２(1339）年の「足利尊氏寄進状」には、「遠江国宮口郷相模国広河郷　備前入道跡　地頭職事」とあり、宮口に北条宗長の所領が存在したことがわかる（静文研 2010)。北条宗長は、名越流北条長頼の次男である。官位は従五位下備前守左近将監で、能登・安芸・豊前３ヶ国の守護を兼務した、幕府内でも有力な人物であったとされる（北条研 2001)。

岩水寺に関しては、『遠江国風土記伝』に北条時頼の廻国伝承が残されている。それによると、貧しい僧の姿で訪れた時頼に対し、当時隆盛を極めていた岩水寺の僧たちが横暴な態度をとったため、後にその咎めによって寺領を召し上げられたというものである。また、これとは逆に岩水寺には、寺の西に位置する八幡宮周辺の土地が、時頼によって寄進されたという伝承が残されている。その真偽はともかくとして、当時岩水寺が大きな勢力をもっていたことと、北条氏との何らかの関係を有していたことを伝える話として理解される。なお、岩水寺には秘仏の本尊として、慶派の仏師による作とみられる、国重要文化財の地蔵菩薩立像が伝えられている。その由来については残されていないようであるが、鎌倉との関係が指摘されている。

中世後期には、多くの禅宗寺院が建立される。中通遺跡･寺海土遺跡の周辺だけでも、応永年中（1394～ 1427）に安泰寺、明徳４（1393）年に雲岩寺（竜泉寺)、室町期には大宝寺、永正年中（1504～ 1520）に常光院、明徳元（1390）年に庚申寺、永正３（1506）年に陽泰院が創建されている。現在の国道 362 号線沿いに、数百ｍごとに寺院が林立する状況となる。

引用・参考文献

浜北市　1989『浜北市史　通史上巻』
浜北市　2004『浜北市史　資料編　原始・古代・中世』
(財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『大門西遺跡』
(財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『中屋遺跡』
静岡県埋蔵文化財センター　2012『中通遺跡・寺海土遺跡』
北条氏研究会　2001『北条氏系譜人名辞典』新人物往来社
武田寛生　2009「資料調査報告　東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』第 21 号

第３章　篠場瓦窯跡 －遺構－

１　概要

（１）瓦窯

篠場瓦窯跡では、合計３基の瓦窯跡が発見されている。斜面の狭い範囲に、少しずつ位置をずらして３号窯→２号窯→１号窯の順で築かれている。

３号窯は直立煙道式緩傾斜窯であり、斜面の最下段に築かれている。最終操業時の規模は、長さ 6.5 m・最大幅 1.8 mである。床面は無段であり、傾斜は約 10 度と緩い。長さを短くする形で改築されており、築造当初は長さが 10 m以上の規模であったとものと推測される。

２号窯は、３号窯から約３m南側の斜面中央に築かれている。有階有段式窖窯で、燃焼室と焼成室の境には大きな段差が設けられている。煙道部が削平されているが、最終操業時の規模は、長さ 8.5 m以上・最大幅 1.5 mである。焼成室には 13 の段が設けられており、全体の傾斜は約 28 度である。

１号窯は、３号窯の焼成室奥壁から 3.8 m上方に築かれている。有階無段式窖窯で、燃焼室と焼成室の境には明確な段差が設けられている。最終操業時の規模は、長さ 6.9 m・最大幅 1.2 mと小型である。焼成室は、約 20 度で傾斜するスロープ状の床面であるが、瓦を積み上げて段が築かれている。

（２）溝

窯が築かれている斜面の上方で、SD01 と SD02 が検出されている。SD01 は窯の周囲に巡らされた排水溝である。２号窯上方に位置する SD01 －②と、１号窯の周囲を巡る SD01 －①が切り合っている。②が先行して掘られており、これを埋めた後に①が設けられている。

SD02 は段丘の端に、斜面に沿って掘られている長大な溝である。調査区内で検出されている溝の総延長は 180 mであり、東へ約 50 mの場所にある谷に注ぎ込んでいるものと推測される。幅は 3.2 ～ 3.8 mで、深さは現存で１m前後である。最下層からは瓦や須恵器が出土しており、瓦窯と同時期のものであると推測される。

（３）瓦集中遺構

窯の上方の平坦面に、瓦が集中して出土する SX01 が検出されている。表土直下で検出されることから失われている部分もあるが、窯の周囲の 30 m程の範囲に広がっている。出土瓦は、１～３号窯すべての製品が混在しており、焼き上がった製品についての最終的な仕分けが行われていた可能性がある。

（４）大型土坑

２号窯から１m南の斜面に、長さ 8.2 m・幅 1.4 mの大型の土坑 SX02 が検出されている。床や壁の構築は確認できないが、未完成で放棄された窯の可能性がある。

（５）掘立柱建物

窯から約 10 m西側で、掘立柱建物が４棟検出されている。側柱建物は３棟確認されており、いずれも規模は３×６m前後と小規模である。総柱建物は１棟確認されている。規模は 3.2×4.8 mであるが、抜取り穴が大型で、柱の根入れが深いなど比較的強固な建物である。遺物は出土していないが、周辺に瓦窯と異なる時期の遺構が存在しないことから、瓦窯に関連する建物である可能性が高い。

T
S
R
Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
Y=-63940
Y=-63930
Y=-63920
Y=-63910
Y=-63900
Y=-63890
Y=-63880
Y=-63870
Y=-63860
Y=-63850
Y=-63840
Y=-63830
Y=-63820
Y=-63810
Y=-63800
Y=-63790
Y=-63780
Y=-63770
Y=-63760
Y=-63750
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
X=-129040
X=-129030
X=-129020
X=-129010
X=-128990
X=-128980
X=-128970
X=-128960
X=-128950
X=-128940
X=-128930
X=-128920
SX01
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40

SD02
SX01
SD01
1号窯
2号窯
SX02
3号窯
灰原
0
(1:200)
8m

２　瓦窯

（１）３号窯

窯跡（図 13 ～ 14、図版９～ 10）

３号窯は斜面の最下方に築かれている。窯の形態は直立煙道式緩傾斜窯であり、窯体内の床面は約 10 度と傾斜が少なく、奥壁が直立気味に立ち上がり煙道に至る。最終操業時の窯体の規模は、最大幅 1.8 m・長さ 6.5 mである。燃焼室と焼成室の境は不明瞭であるが、床面の被熱の度合いに差がみられることからおおよその範囲が把握できる。床面が硬化せず赤色焼土となる部分を燃焼室とすると、燃焼室は長さ約 5.5 m・焼成室は長さ約 1.0 mの規模である。焚口では、側壁の幅を狭めている痕跡が確認されている。燃焼部付近に一部天井が残存しており、残存部の床面から天井までの高さは 1.5 mである。奥壁側の側壁に残る窯壁もほぼ同様の高さまで残存しており、高い天井を有していたものと推測される。

焚口の手前にも被熱・硬化した側壁が存在しており、焚口を前方に押し出す形で大規模な改修が行われている様子が認識できる。床面を掘り下げて最終操業時の前庭部を築いているため、築造当初の床面は残存しないが、側壁の残存する範囲から築造当初の窯の全長は 10 m以上であったことがわかる。

壁面はスサ入りの粘土で構築されており、表面は還元焔焼成により、青灰～灰白色に硬化している。床面と側壁は補修されており、１度粘土を塗り足して再構築している様子が確認できる。床面はほぼ平坦であるが、奥壁から 2.8 mの所にわずかに段の様な部分が確認できる。最終操業時の床面（第二次床面）では段差がほとんど消失しているが、補修前の床面（第一次床面）では多少明確な形で残っている。段差があまりにも小さく、炎の調整機能はほとんどないとみられることから、焼成室内を区切る意味で設けられた可能性が高い。

床面には、多量の瓦が放置された状態で残されていた。次章で報告するように、瓦は完形に近い状態に復元されるものが多い。ただし接合関係をみると、近接した破片が接合して完形となるものが多いものの、奥壁付近と焚口付近の破片が接合したり、灰原から出土した破片と接合するものも一部存在しており、窯詰めの状況がそのまま残されているものとは考えにくい。焼成が完了した後に選別が行われ、使用に耐えないと判断された瓦が残されたものと推測される。

廃窯後は、徐々に窯壁が剥落し床面上に土砂が流入している（第９層）。場所によって異なるが、堆積した土砂の厚さは平均 30 ㎝程である。天井は、まず開口している煙道と焚口付近が一部崩落（第５・７層）し、その後大規模な崩落（第３層）が発生し窯体内の大半が埋没する。最終的には、天井の崩落によって形成された窪みが、１号窯の灰原（第１層）として利用されている。

灰原（図 21）

３号窯の灰原は、窯の下方に形成されており、東西 16 m・南北 26 mに展開している。出土した瓦の総重量は 1010 kgである。土層の厚さは一様ではないが、窯の近辺で 10 ～ 15 ㎝程、窯から離れた場所では５～ 10 ㎝程と全体的に薄い。基本的には暗褐色土の単層で、土色・土質の異なる間層も確認できない。窯の近くでは多く、窯から離れるにつれ出土量が少なくなる。破片の大きさも同様で、窯の近くには大型の破片が多く、遠い場所では大半が数㎝程度の細片となっており、廃棄された瓦が斜面を滑落して広範囲に拡散した状態にあることがわかる。また、３号窯から 40 m以上離れた場所からも瓦の出土が確認されているが、連続して展開しておらず、これらは二次的に移動したものと判断できる。

なお、これら最下段に展開する灰原は、主に３号窯の操業に伴って形成されたものとみてよいが、破片には１・２号窯の製品も一部確認される。前述のように灰原の堆積が薄いため、出土状況で区別することはできないが、細片を中心に１・２号窯から滑落した瓦も一部混入しているものと推測される。

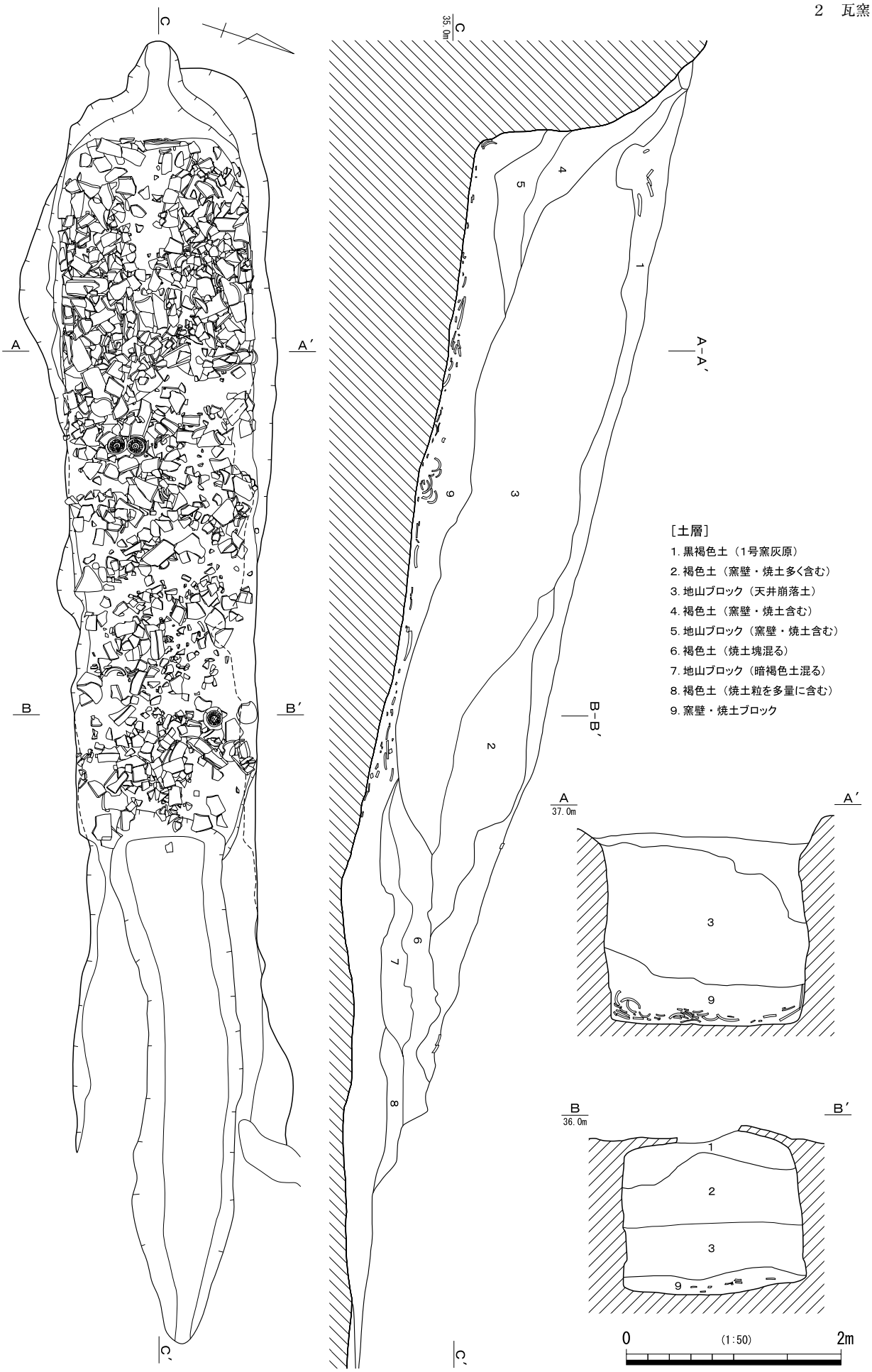


図 13　3号窯遺物出土状況図・土層断面図

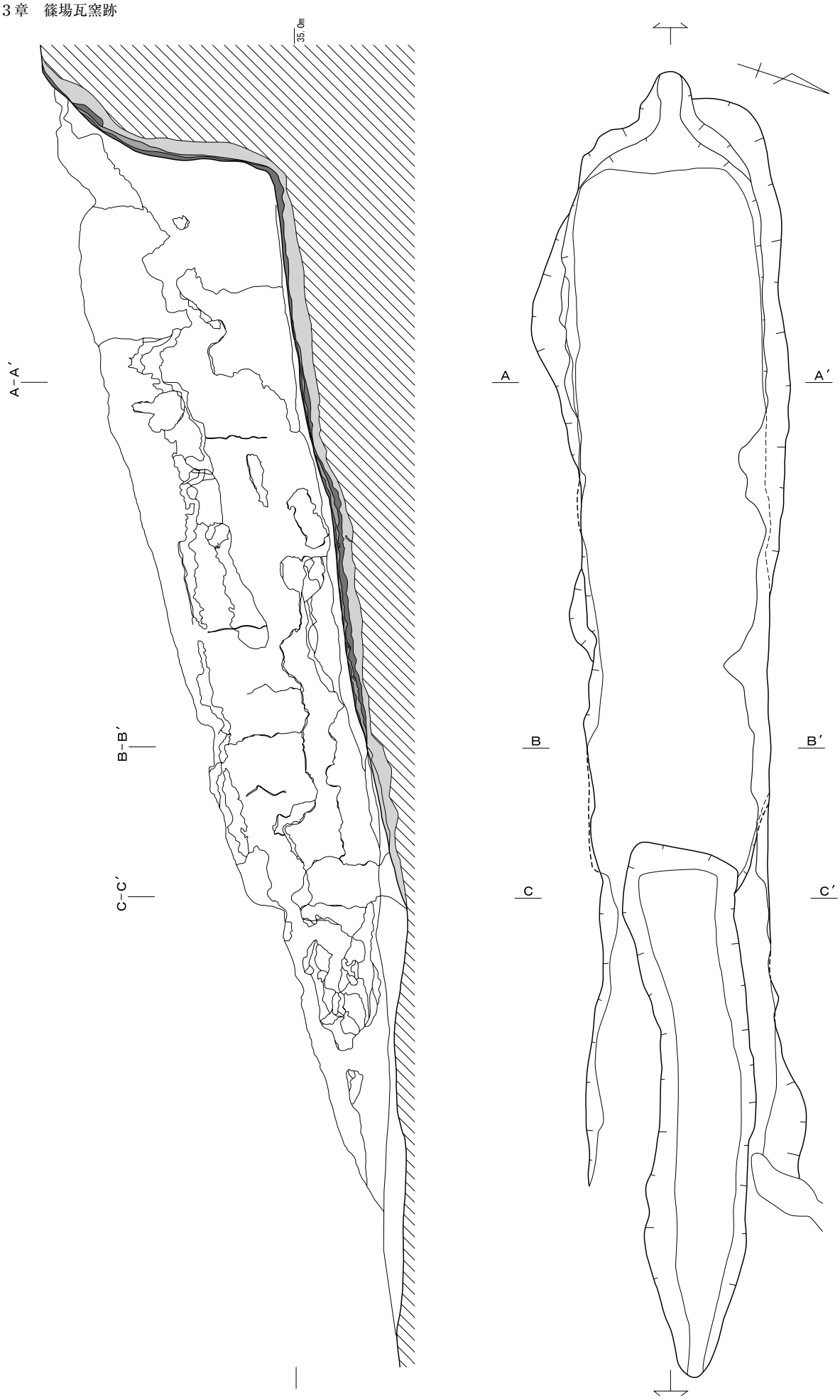
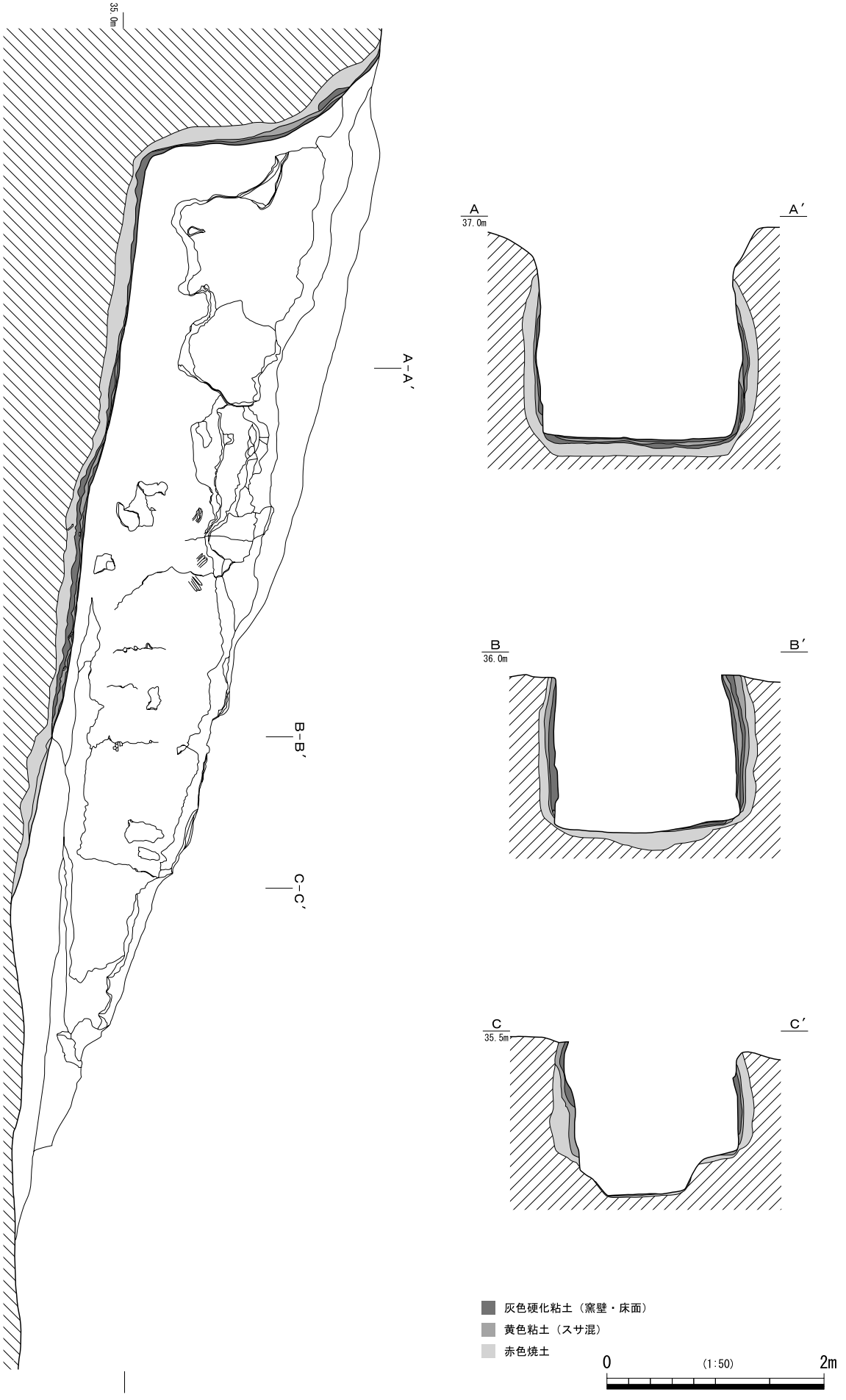


図 14　３号窯実測図


35.0m
A-A′
B-B′
C-C′
A
37.0m
A′
B
36.0m
B′
C
35.5m
C′
灰色硬化粘土（窯壁・床面）
黄色粘土（スサ混）
赤色焼土
0
(1:50)
2m

（２）２号窯

窯跡（図 15 ～ 17、図版７～８）

３号窯から約３ｍ南側の、斜面上方に築かれている。有階有段式窖窯であり、煙道付近は一部削平により失われているが、燃焼室から前庭部にかけては比較的良好に遺存している。天井は残存しない。

焼成室は、最大幅 1.5 ｍ・長さ 6.0 ｍの規模で残存している。上方は大きく削平されており、最も良好に残存する部分で高さは１ｍである。床面は段構造となっており、合計 13 段が検出されている。各段の長さや高さは不均等であるが、長さは 20 ～ 70 ㎝、高低差は 15 ～ 38 ㎝となっている。焼成室全体の傾斜は約 28 度で、３号窯に比べて傾斜は明らかに急である。燃焼室は幅 1.5 ｍ・長さ 2.7 ｍである。奥壁の高さは 90 ㎝で、燃焼室の床面と焼成室の床面に大きな高低差が設けられている。天井までの高さは不明であるが、残存状況から 1.6 ｍ以上であったことは確実である。

床面と壁面は、還元焔焼成により青灰～灰白色に硬化している。壁面にはスサ入りの粘土が使用されており、一部瓦も塗り込められている。床面と壁面には補修の痕跡があり、比較的大規模な補修が最低１回は行われていることが確認できる。焼成室最下段から燃焼室にかけては、下層床面（第一次床面）の上に新たな床面（第二次床面）が構築されており、燃焼部の第一次床面と第二次床面の間には、瓦の破片を多く含む焼土が検出されている。

焚口から燃焼部は、燃焼部の中央付近から南側へ 42 ｍ、北側へ 0.5 ｍの範囲を削って平坦面を造り、さらに粘土や地山の黄褐色粘質土などで盛土をして構築している（図 17）。非常に非効率なように思えるが、この周囲は部分的に礫層が存在しており、おそらくは地質上の都合からこのような作業を行わざるを得なかったのであろう。この造成部においても、一度大規模な改修が行われていることが確認されている。改修時の盛土（第Ⅰ～Ⅲ層）には第二次床面に伴う側壁が構築され、下層は第１次床面の残存部上面に相当しており、この改修は第二次床面の構築に伴って行われている。また、北側の改修時の盛土内からは、窯の主軸と直交する方向に２列に積まれた円礫が検出されている。礫は埋め殺しにされており、盛土の強度を増すための補強材として使用されたものと推測される。なお、焚口付近の両側には、検出面でも礫や瓦が確認されているが、これらについても同様に盛土の補強材であった可能性が高い。この造成に伴って削り出された平坦面は、大半が前庭部として利用されている。

窯体内からは、比較的多くの瓦が出土している。焼成室の床面に残るものは少なく、多くは燃焼室に滑り落ちた状態で発見されている。壁面の崩落とともに落ちた構築材の瓦も一部混在しているが、大半は最終操業時に窯内に残された瓦とみてよい。

廃窯後しばらくは、窯壁の剥落は進行するものの大規模は崩落はなく、流入した土砂によって燃焼室が徐々に埋没している。その後少しずつ天井が崩落（第２・３層）し、最終的には焼成室の天井が大規模に崩落（第１層）している。

灰原（図 21）

２号窯の灰原は、南北５ｍ・東西６ｍと範囲は非常に狭い。その大きな要因は、灰原の下方が段々畑の造成によって失われていたことにある。また、前述のように明確な区別はできなかったが、灰原の先端の一部は３号窯の灰原と重複・混在している可能性もある。残存状況によって大きく異なるが、厚さは平均 20 ～ 30 ㎝程であり、すべて暗褐色土で明確な土層の違いは確認できなかった。

残存していた範囲が狭いこともあり、出土した瓦の総重量は 526 ㎏と少ない。焚口付近で多く、窯から離れるにつれて少なくなる傾向がみられる。ただし、２号窯に関しては、窯付近から出土したものには窯体内から流出したものが多く含まれ、窯から離れた部分は削平を受けているため、本来の灰原の状況を示しているとはいえない状況にある。

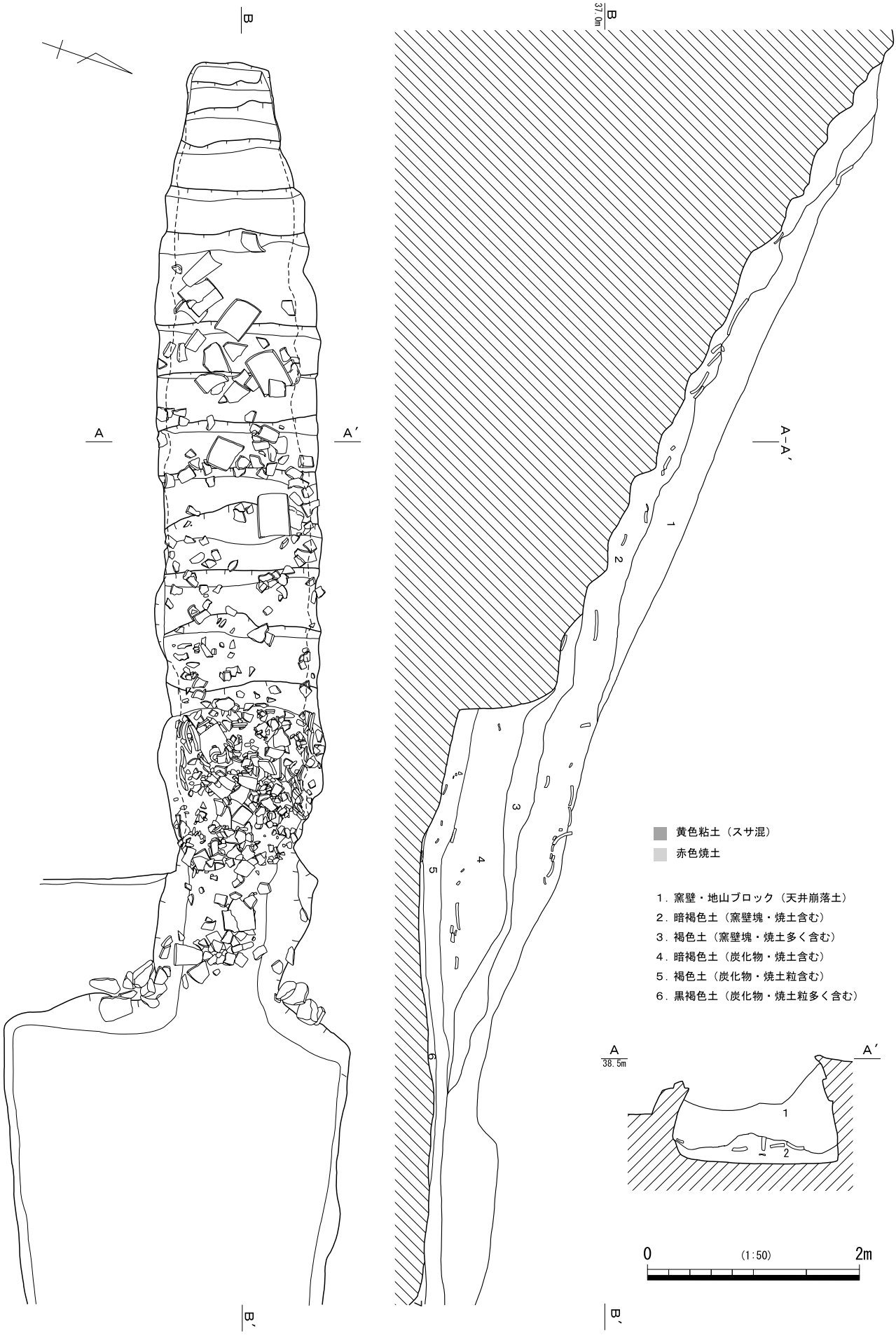


図 15　２号窯遺物出土状況図・土層断面図

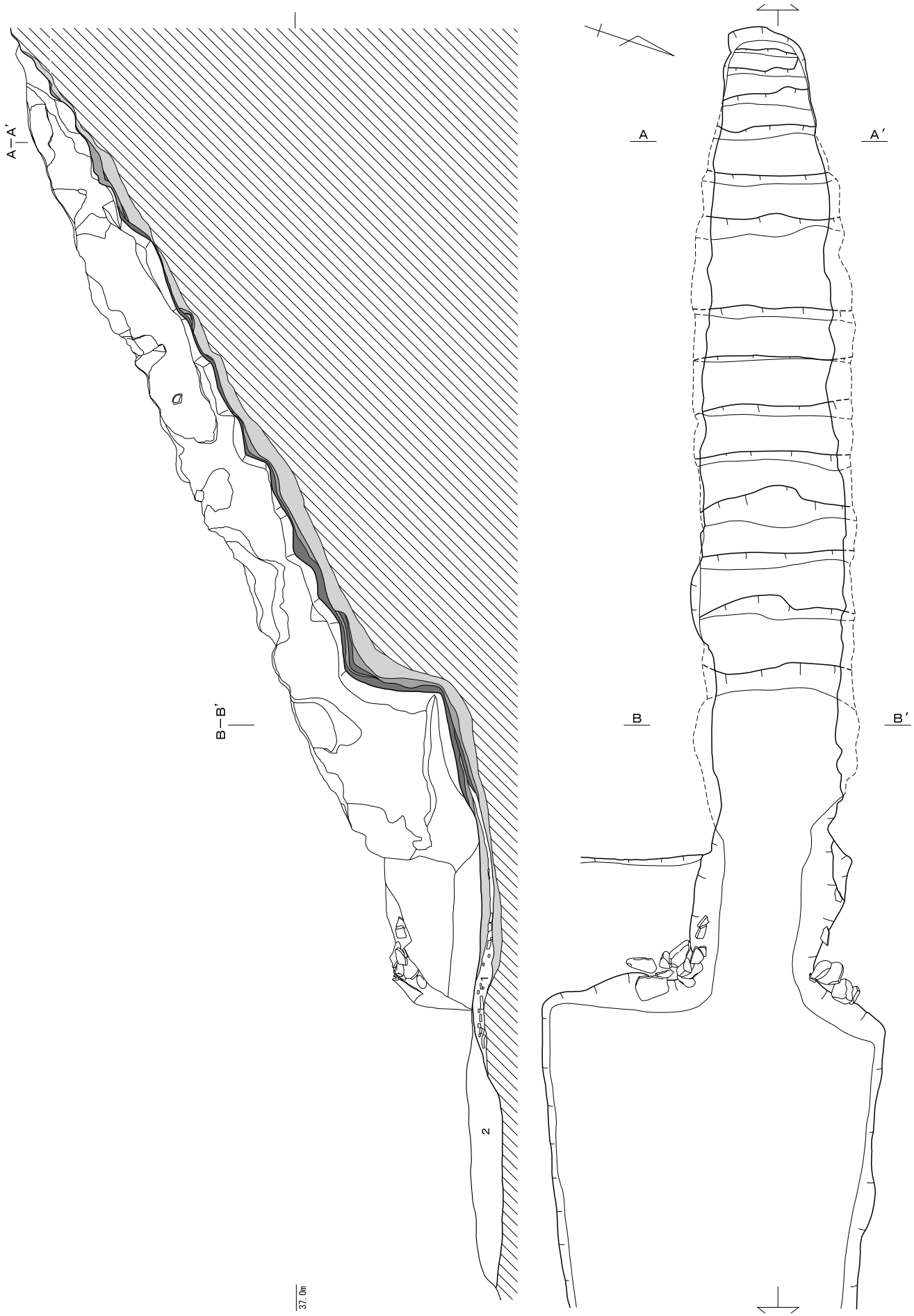
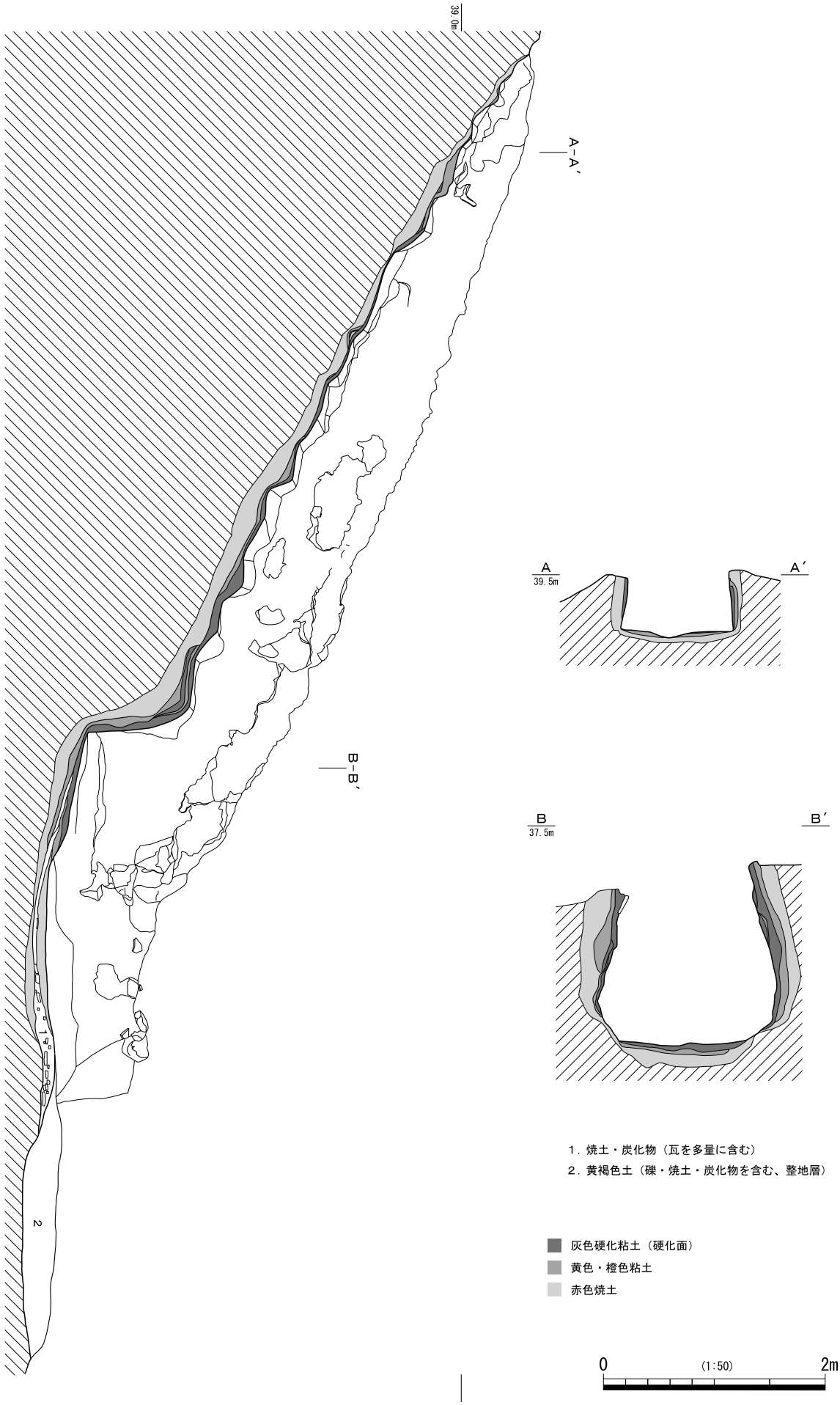


図 16　２号窯実測図


39.0m
A-A′
B-B′
A
39.5m
A′
B
37.5m
B′
1．焼土・炭化物（瓦を多量に含む）
2．黄褐色土（礫・焼土・炭化物を含む、整地層）
灰色硬化粘土（硬化面）
黄色・橙色粘土
赤色焼土
0
(1:50)
2m

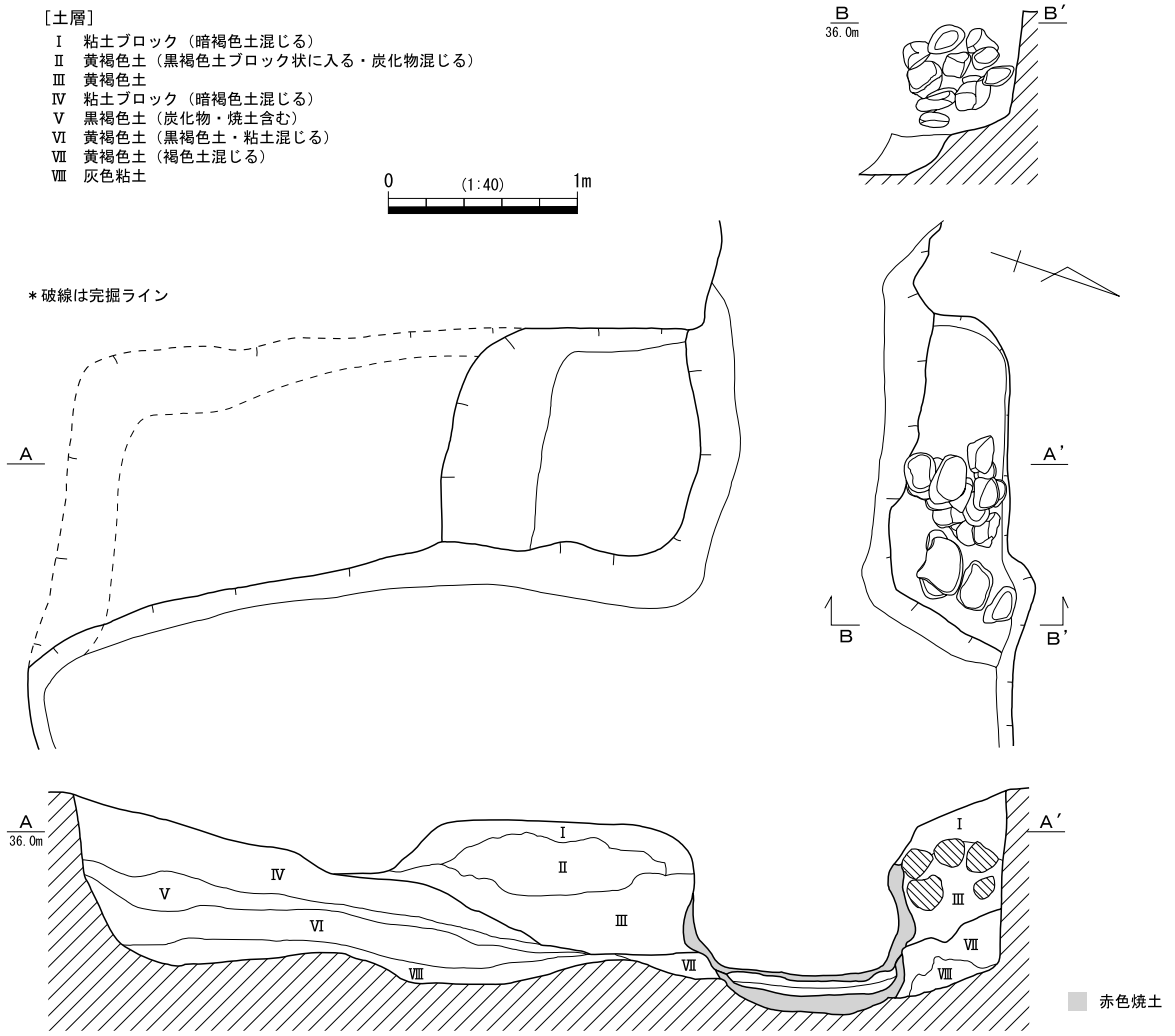


図 17　２号窯焚口・前庭部構築図

（３）１号窯

窯跡（図 18 ～ 20、図版５・６）

３号窯の奥壁から 3.8 ｍの斜面上方に築かれている。有階無段式窖窯であり、煙道から焼成室にかけては良好に残存するが、燃焼室は南側が攪乱により大きく失われている。

焼成室は最大幅 1.2 ｍ・長さ 4.9 ｍであり、天井は残存しないが、側壁に残る窯壁の状況から高さは１ｍ程度と推定される。床面は、約 20 度で傾斜するスロープ状の形態となっている。床面に段は造り出されていないが、瓦が主軸に直交する方向に並んだ状態で検出されており、瓦を用いて段を構築していることがわかる。瓦の上部は崩落しているものが多いが､基底部は原位置に近い状態で残存しており、段は 11 段確認できる。段には、熨斗瓦のほか平瓦や丸瓦、軒平瓦などの破片が使用されている。最も残状態の良好な２段目では、７枚の瓦が積み上げられている。

煙道は天井が崩落してはいるものの、比較的良好に遺存している。約 48 度で斜めに立ち上がり、開口部の大きさは直径 40 ㎝程と推定される。

燃焼室は一度大規模な補修が行われており、改修前と後とで幅が大きく異なるが、最終操業時の規模は、長さ 2.0 ｍ・幅 1.2 ｍで焼成室の幅とさほど変わりない。改修前の燃焼室は、幅が 2.2 ｍと焼成室に比べて大きく広がる（図 20)。一部天井付近が残存しており、最終操業時の床面から天井までの高さは１ｍである。燃焼室の奥には明確な奥壁を構築しており、燃焼室と焼成室には大きな高低差がある。

図 18　1 号窯遺物出土状況図・土層断面図

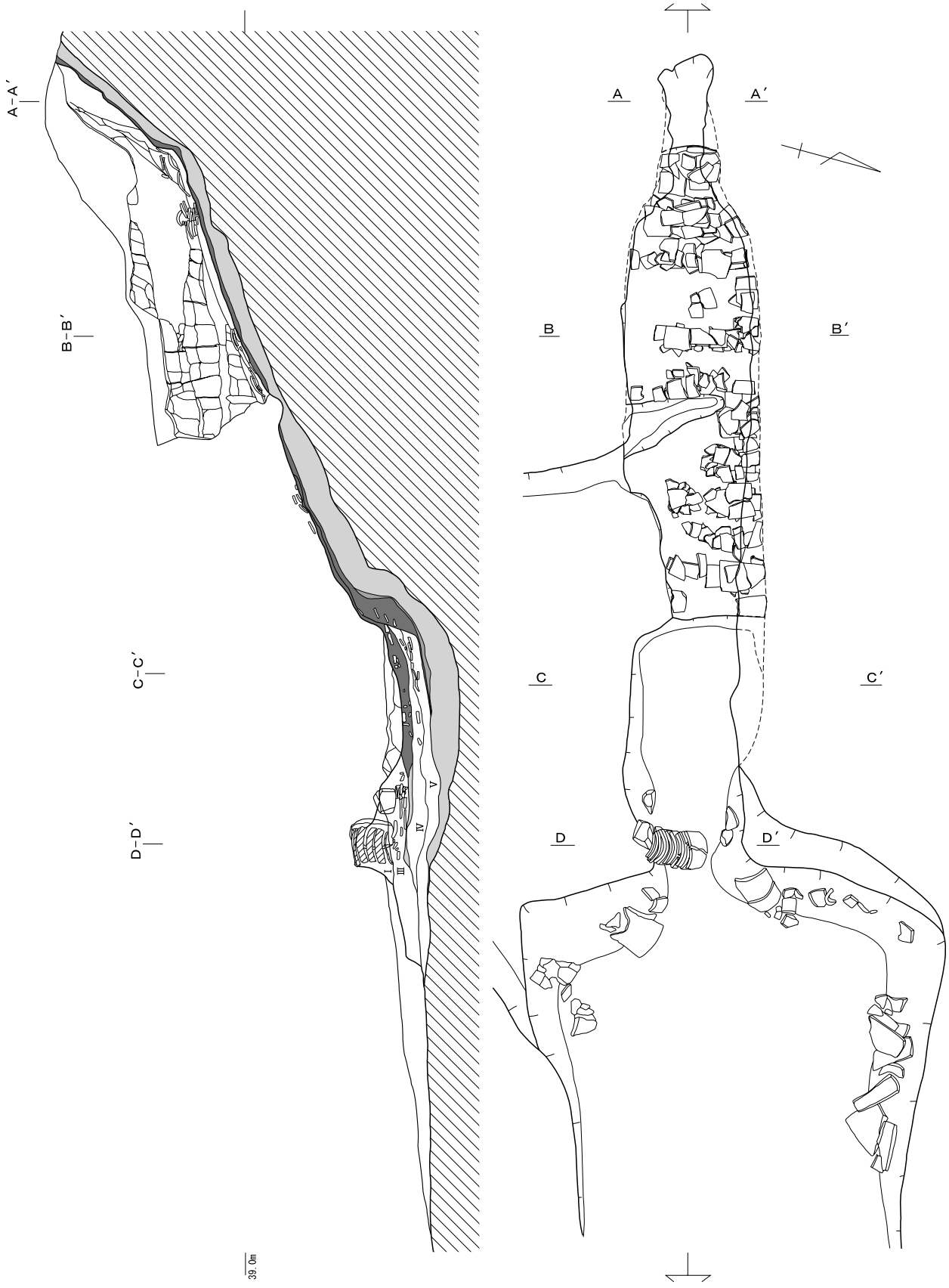
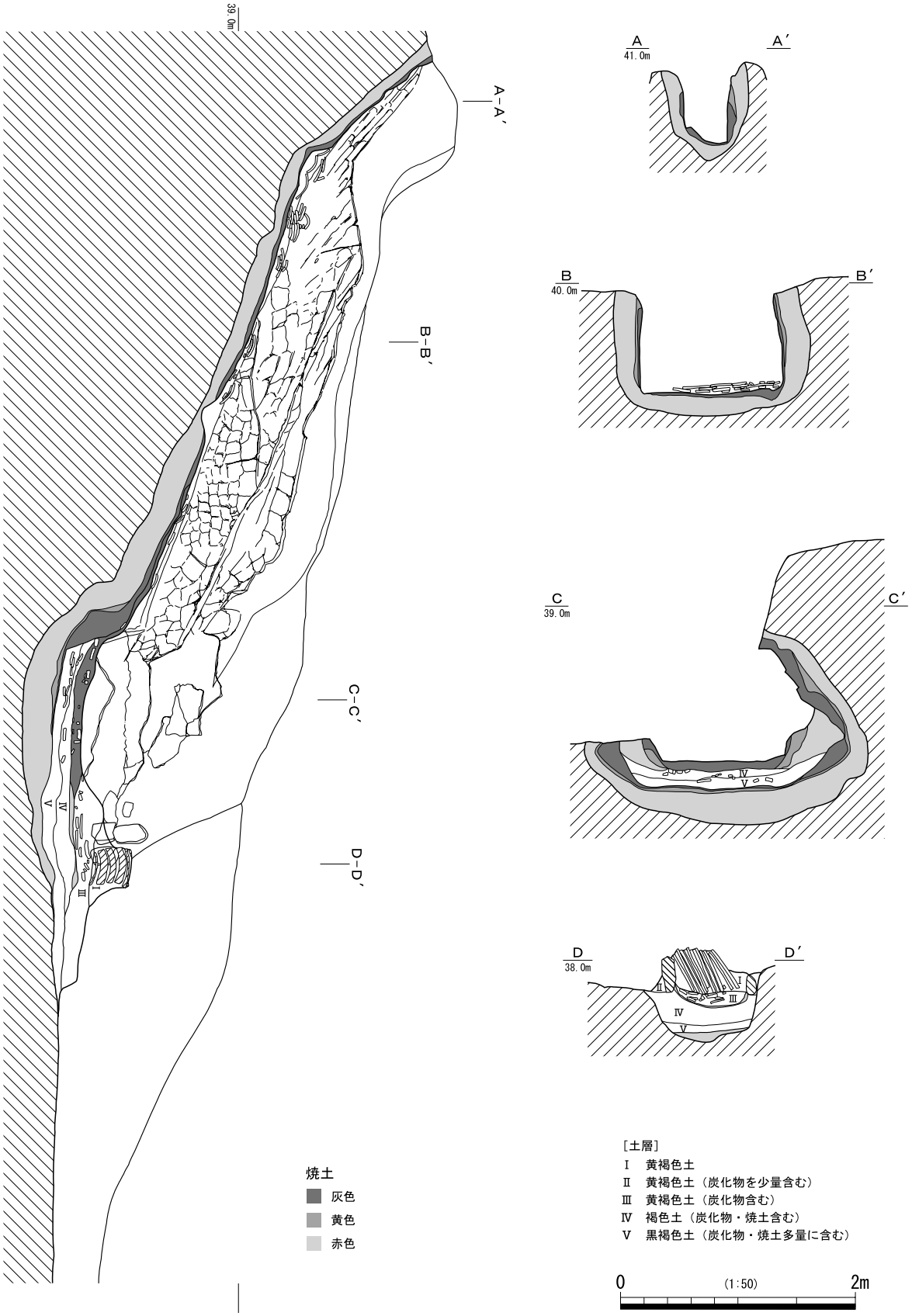


図 19　１号窯実測図


39.0m
A-A′
B-B′
C-C′
D-D′
A
41.0m
A′
B
40.0m
B′
C
39.0m
C′
D
38.0m
D′
焼土
灰色
黄色
赤色
[土層]
Ⅰ　黄褐色土
Ⅱ　黄褐色土（炭化物を少量含む）
Ⅲ　黄褐色土（炭化物含む）
Ⅳ　褐色土（炭化物・焼土含む）
Ⅴ　黒褐色土（炭化物・焼土多量に含む）
0
(1:50)
2m

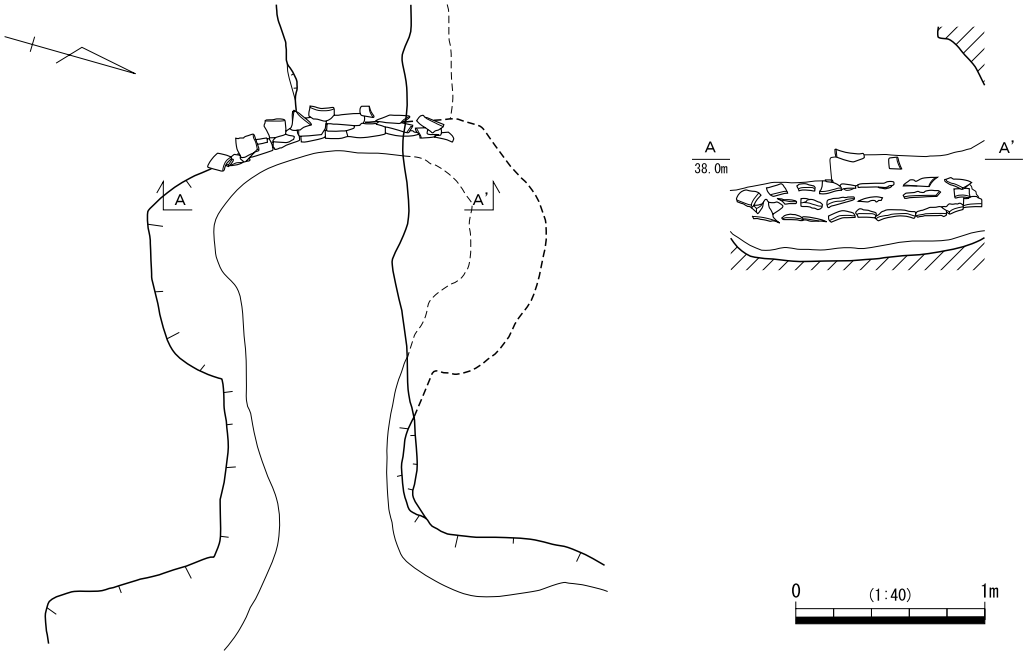


図 20　１号窯燃焼部（改築前）状況図

焚口部では、11 枚の平瓦が並んだ状態で検出されている。瓦の基底部は、焚口の閉塞土とみられる黄褐色土（第Ⅰ層）で覆われており、閉塞時に使用された瓦とみてよい。本来は窯を開ける際に取り外されるものであり、焚口の閉塞方法を知る上で貴重な資料といえる。焚口の側壁には立石が２個ずつ埋め込まれている。また、前庭部でも立て掛けられたような状態で、完形の瓦が検出されている。

床面と壁面は、還元焔焼成により青灰～灰白色に硬化しており、全体的に被熱により赤化した部分の厚さは非常に厚い。燃焼室の床面と壁面には補修の痕跡があり、比較的大規模な補修が最低１回は行われていることが確認できる。側壁は、前述のように幅を狭める形で新たな壁を築いている。上層の床面（第二次床面）は、下層床面（第一次床面）の上に瓦や焼土を含む土（第Ⅳ・Ⅴ層）を挟んで築かれている。焚口部では、第二次床面の上に瓦を多く含む黄褐色土（第Ⅲ層）が積まれている。被熱や硬化は確認できなかったが、閉塞の瓦がこの上に置かれていることから、最終操業時の焚口部の床面はこの上面であるとみてよい。

窯体内からは多くの瓦が出土している。燃焼室に向かって滑り落ちる形で検出されており、段の瓦の遺存状態からみて、大半は崩落した段構築瓦である可能性が高い。

廃窯後には土砂が流入し、これにより段の構築瓦が崩落して下方に押し出されている（第６層）。そして、まず燃焼室の天井が崩落（第５層）し、しばらく後には焼成室の天井が大規模に崩落（第２層）して窯の内部を埋めている。

灰原（図版 21、図版８）

１号窯の灰原は、南北４ｍ・東西 13 ｍの範囲に展開している。細長く広がっており、３号窯の存在した位置にほぼ一致している。このことは前述のように、３号窯の天井の崩落により、溝状に大きく窪んでいたことを示している。範囲はさほど広くはないが、総重量 1749 kgと比較的多くの瓦が出土している。斜面の傾斜が急で滑落しやすいためか、場所による出土量や破片の大きさの差はあまりない。また、灰原の先端は３号窯の前庭部付近まで到達しており、調査時には認識できなかったが一部は３号窯の灰原と重複している可能性がある。

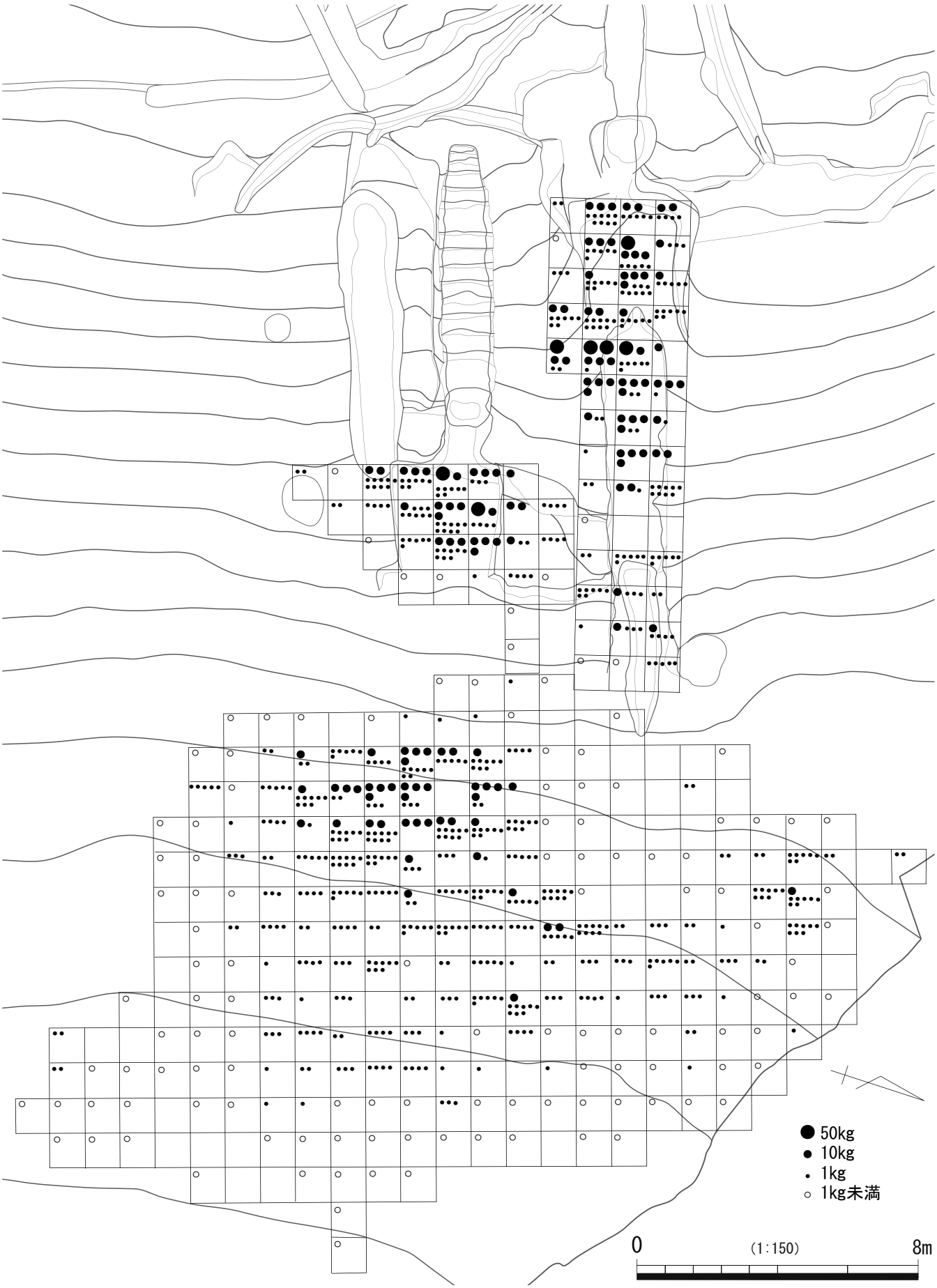


図 21　灰原瓦分布図

３　溝

SD01（図 22・図版 11）

窯の上方に巡らされた排水溝である。調査時には１つの遺構番号しか付されていないが、２条の溝が切り合っていることから、北側の溝を SD01 －①、南側を SD01 －②とする。

SD01 －①は、１号窯の周囲を巡る排水溝である。削平を受けているため残存状況は場所によって異なるが、最も残存状態の良好な１号窯の北西側では、幅 1.8 ｍ・深さ 1.4 ｍと深く、底部の幅が狭い断面三角形状の形態である。溝の先端は、北側が窯から約４ｍ、南側は大型土坑 SX02 の位置する窯から約７ｍの位置で、斜面へと繋がる。溝の内部は土砂の自然堆積によって埋没しており、下層は暗褐色土、上層は地山に近い褐色土が堆積している。遺物は大半が１号窯の西側で出土しており、特に煙道付近ではほぼ完形の丸瓦が外側（SX01）から滑り落ちた状態で多く発見されている。

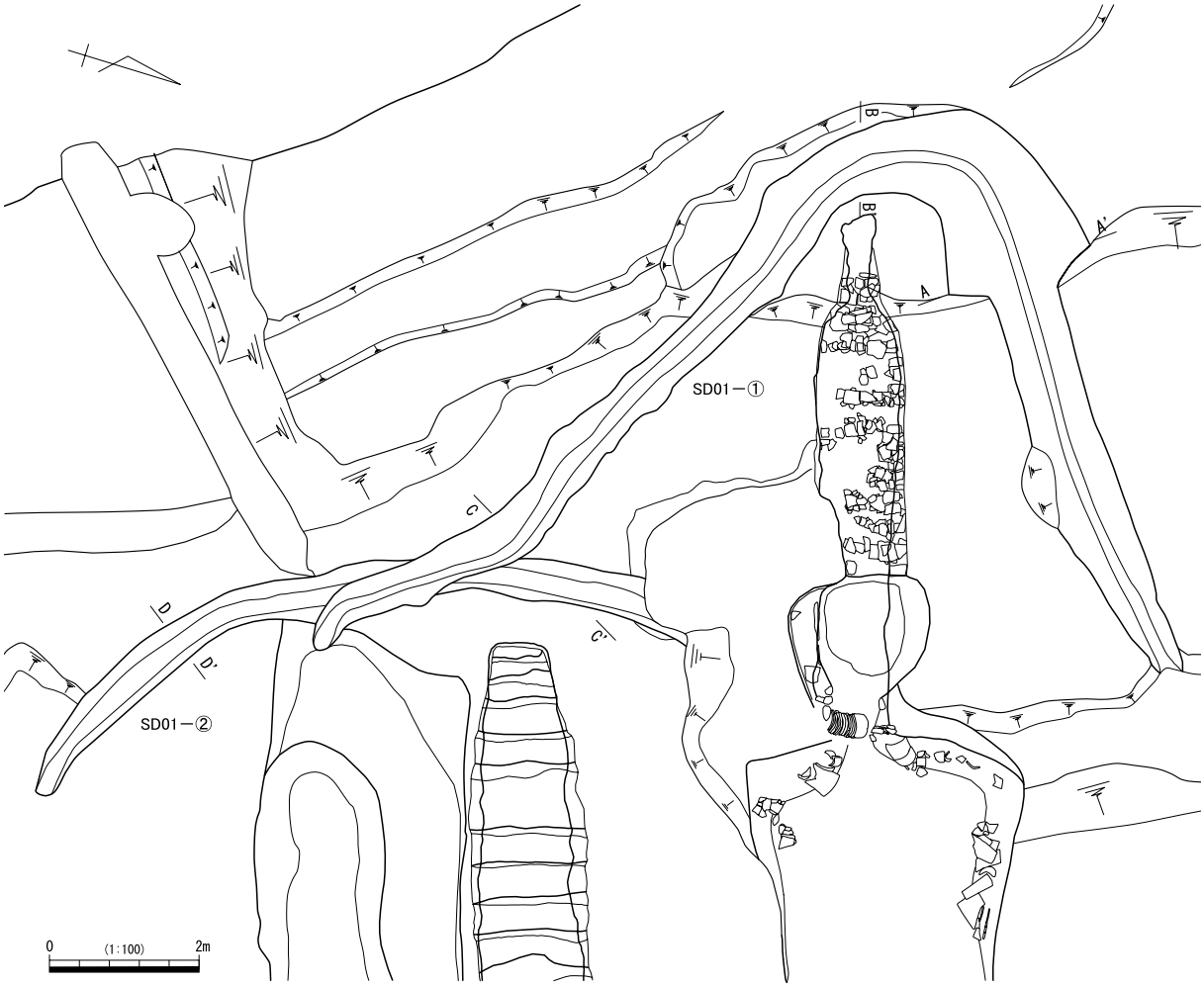
SD01 －②は、２号窯の周囲を巡る排水溝であり、２号窯の南西で一部 SD01 －①と切り合っている。溝の上層には地山ブロックが詰まっており、ブロックの隙間には黒褐色土が入っていた。この土が周囲の攪乱の土と近似していたため、当初２号窯の西側は攪乱として認識・掘削されたが、掘り進める過程で SD01 －①が検出され、これに切られていることが判明した。さらに南側を検出したところ、明らかに SD01 －①に切られる形で溝の延長が存在することが明らかとなった。埋土の状況から自然堆積とは考えにくく、SD01 －②は人為的に埋められた可能性が高い。最下層には、自然堆積とみられる暗褐色土が堆積している。全体的に削平を受けているが、規模は現存で幅 70 ㎝・深さ 30 ㎝である。溝の南側の先端は、②号窯から 3.5 ｍ離れた位置で斜面に注いでいる。北側は攪乱によって失われているが、延長線上には１号窯が位置している。当然、溝から雨水が注ぎ込むような状況では１号窯の操業に支障があり、１号窯と SD01 －②が同時期に存在したとは考えられない。SD01 －②は、１号窯が築造される段階で埋め立てられたものと推測される。遺物は出土していない。

SD02（図 23 ～ 25・図版 12）

窯上の平坦地の端に巡らされた大規模な溝である。窯の周囲では、調査以前にも窪みとして地表面に痕跡が残存していた。斜面に沿って掘られており、北西から南東方向に向かった後、調査区南側で屈曲して東へ方向を変える。検出された溝の総延長は 180 ｍである。また、東側については、国道 152 号線の窯壁敷設工事の際に、ほぼ延長線上に溝の断面が確認されている。東側は建物基礎によって失われていたが、確認調査で調査区東端から 50 ｍ東に谷が存在することが確認されており、溝の先端は谷に注ぎ込んでいたものと推定される。これらを合わせると、溝の総延長は 250 ｍ以上に及ぶ。

全体的に削平を受けているが、幅は 3.2 ～ 3.8 ｍで、深さは最も残存状態のよい SX01 付近で 1.2 ｍである。溝の断面は箱堀状の形態で、側面は斜めに直線的に立ち上がる。埋土は、最上層の表土や攪乱を除くと大きく２層に分けられる。下層には､周囲から流入した土砂（第３・４層）と崩落した壁面の土（第５層）が堆積している。上層は、地山の黄褐色土ブロック（第２層）によって人為的に埋め立てられている。遺物の大半は瓦であるが、土器類も少量出土している。最下層の第４・５層からは、瓦や須恵器などの窯に伴う遺物が出土している。第４層と３層の境では、灰釉陶器や山茶碗が出土しており、第３層では、中世末から近世にかけての土師質土器皿が出土している。第２層からは少量ではあるが、近世の陶磁器類が出土している。

遺物の出土状況から、SD02 は瓦窯とほぼ同時期に掘られた溝と推定される。窯の存在する斜面への雨水の流入を防ぐ役割を果たしていることは確かであるが、あまりにも大規模である。斜面上の遺構がほとんど残存しないため、溝が掘られた直接的な原因については現状では明らかにし得ない。



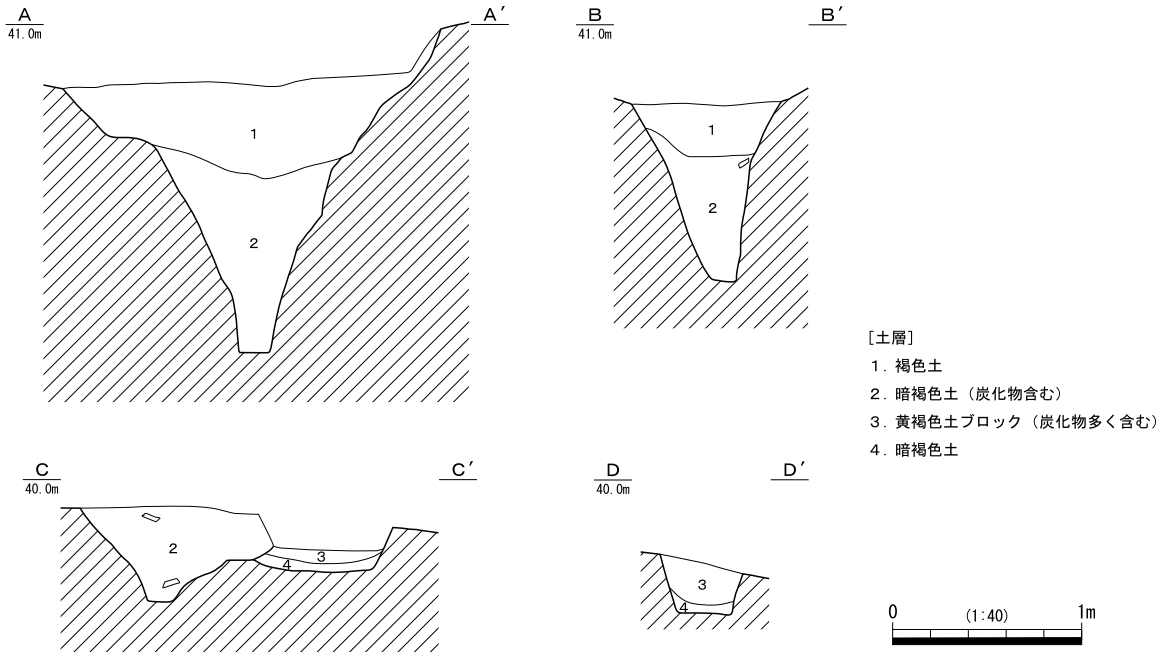


図 22　SD01 実測図・土層断面図

図 23　SD02 全体図

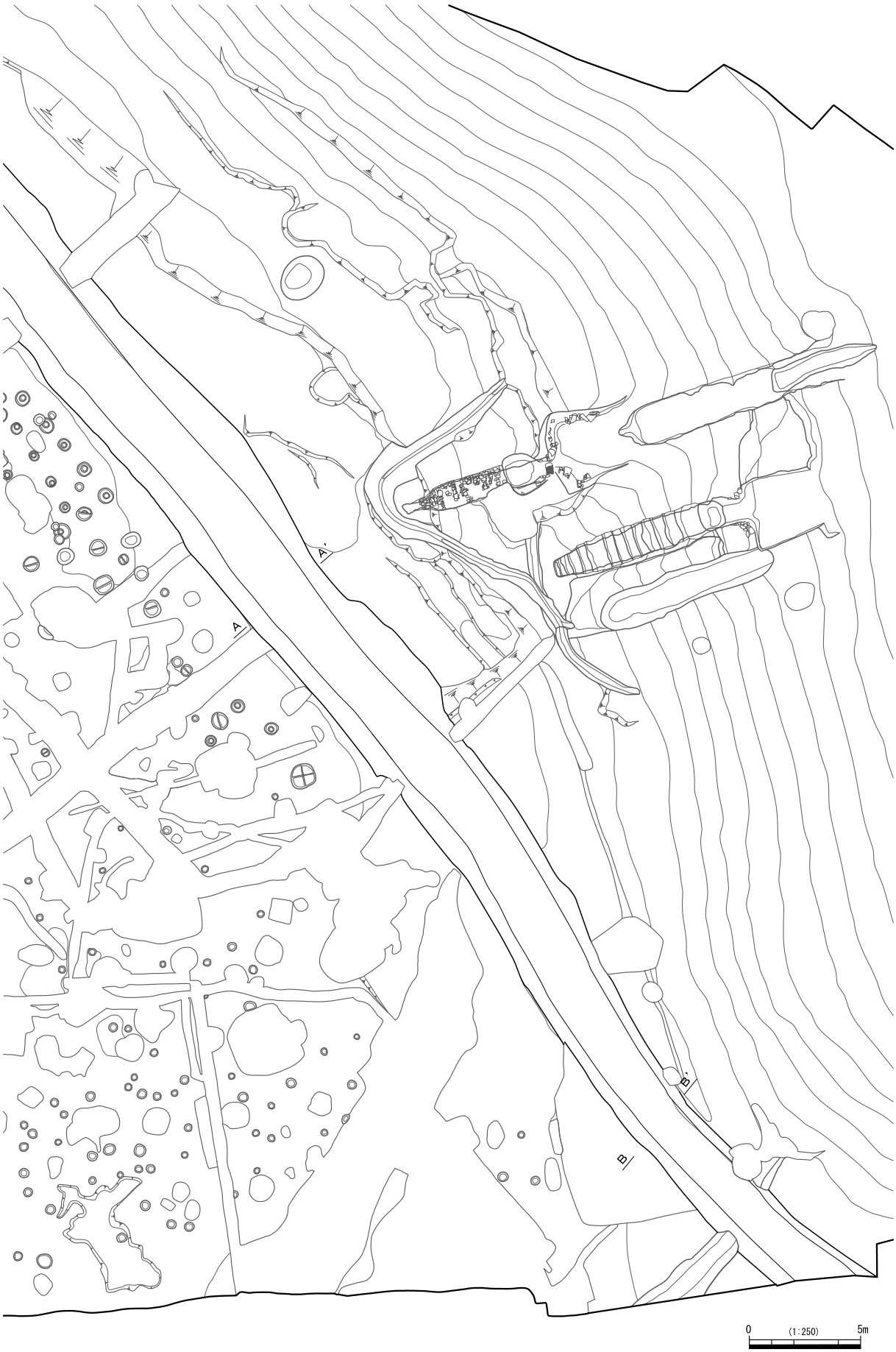


図 24　SD02 実測図（1）

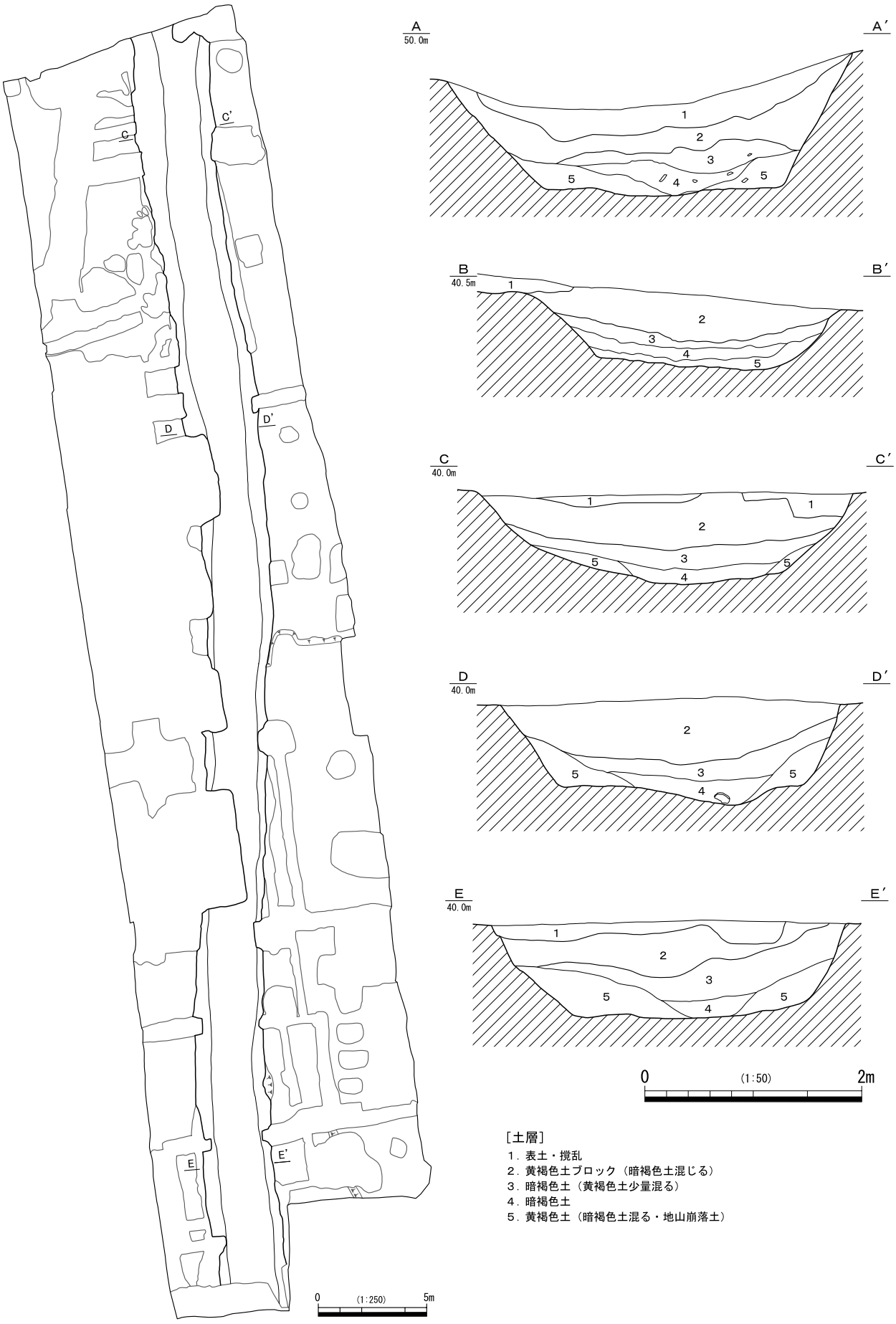


図 25　SD02 実測図（２）

4　瓦集中遺構

SX01（図 26 ～ 29・図版 13）

窯の上方で検出された瓦集中遺構である。検出されたのは、窯の西側の高まりとして残っていた部分である。この高まりについては、当初土塁等の構造物である可能性が想定されていた。しかし、このSX01 が発見されたことにより、高い部分は旧地表面に相当し、周辺は造成により土地が大きく削られていることが明らかになっている。

瓦が検出された範囲は、東西が 1 号窯から SD02 までの 3.2 mで、南側は 1 号窯から 8 m、北側は 1 号窯から 14 mである。南側は削平を受けているため、本来はもっと広範囲であったと推測される。検出面は表層の腐植土直下であり、現地表面とほぼ同一の面である。そのため、掘り返されるなどして大半の瓦は失われ、部分的にしか残存していない。なお、SX01 では調査前に地表面で多くの瓦が採取されている。遺存状態が一律ではないため本来の状態を知ることは困難であるが、南側では瓦が折り重なった状態で密に出土しており、このような状態が全域に広がっていた可能性が高い。

瓦は総重量にして 401 kg出土している。次章で述べるように、1 ～ 3 号窯の各種の瓦が確認でき、特定の窯の製品に偏る傾向は見出せない。瓦はすべて焼成されており、粘土の状態のものは確認できない。遺構の性格については不明瞭な部分も多いが、すべての窯の製品が存在していることから、窯から出された製品の最終検査・仕分けを行う場所であったと推定される。

図 26　SX01 全体図

図 27　SX01 遺物出土状況図（１）

図 28　SX01 遺物出土状況図（2）

図 29　SX01 遺物出土状況図（３）

5　大型土坑

SX02（図 30・図版 14）

2 号窯の南側 1.2 mに位置する大型の土坑である。縦長の土坑で、2 号窯と平行する形で斜面に直交して掘られている。幅 1.4 m・長さ 8.2 mで、中央付近の深さは 60 ㎝である。埋土は大きく 2 層に分かれ、下層には暗褐色土が堆積し、瓦が出土している。上層には周囲の崩落に伴う褐色土が堆積している。下方では、2 号窯の焚口の構築土を掘り込んでおり、2 号窯よりも明らかに後出する遺構であることが確認されている。上方には 1 号窯の排水溝 SD01 －①の先端が位置しているが、切り合い関係は確認できていない。遺構の性格については特定できないが、2 号窯とほぼ平行しており、窯に近い細長い形状をしていることから、未完成で放棄された窯の可能性も考えられる。

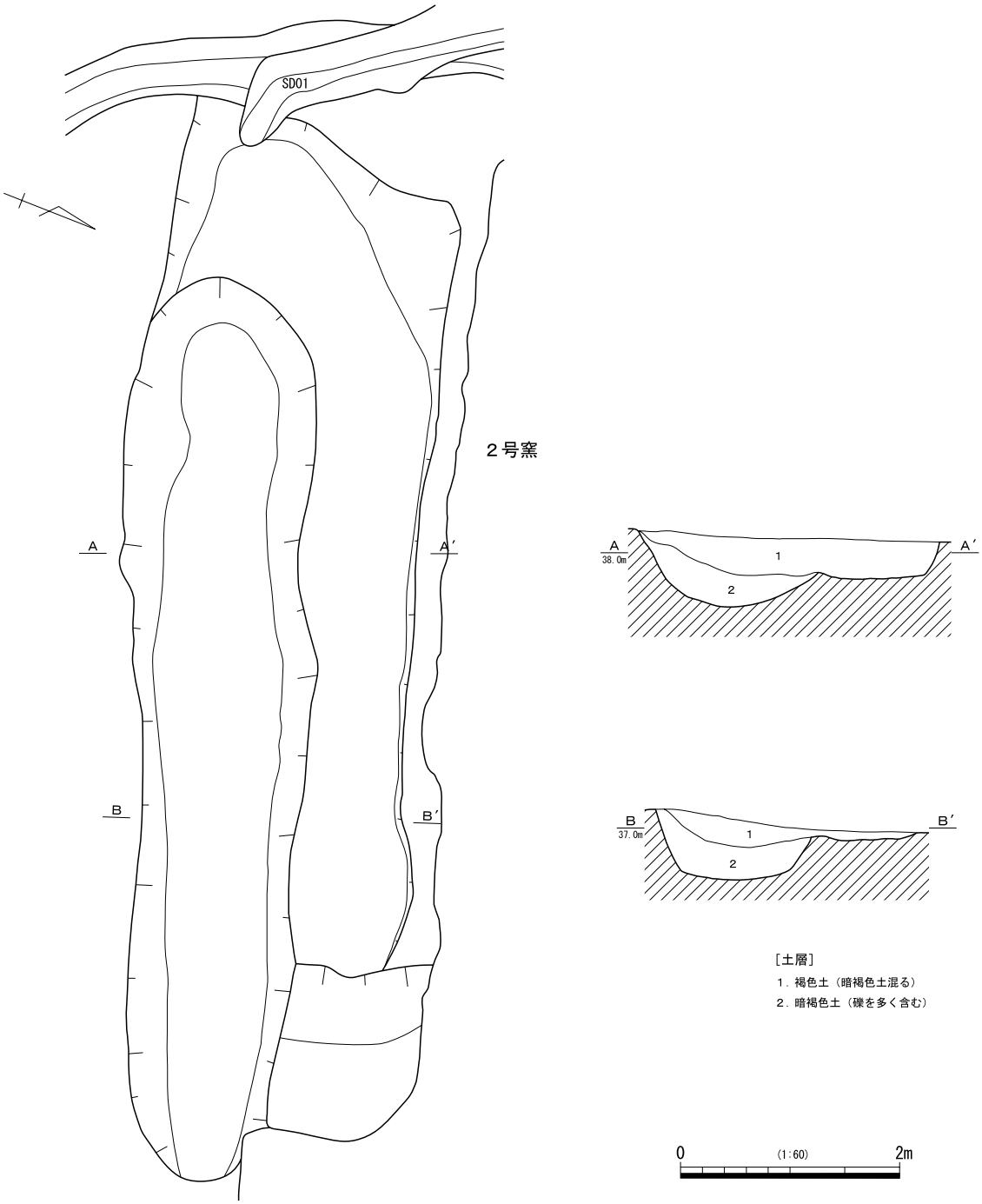


図 30　SX02 実測図

6　掘立柱建物

窯の上方の平坦面は、大規模に造成されており、宅地として利用されていたこともあって確認できた遺構は少ない。柱穴とみられる小穴も検出されているが、ほとんどが底部の痕跡がわずかに残る程度であり、明確に建物として認識できるものは少ない。柱穴が比較的深く、柱の配置から掘立柱建物として認識できた４棟を図示する。いずれも遺物が出土していないため年代の特定は困難であるが、周囲に瓦窯と異なる年代の遺構が検出されていないため、窯操業時の建物の可能性が高いと推測される。

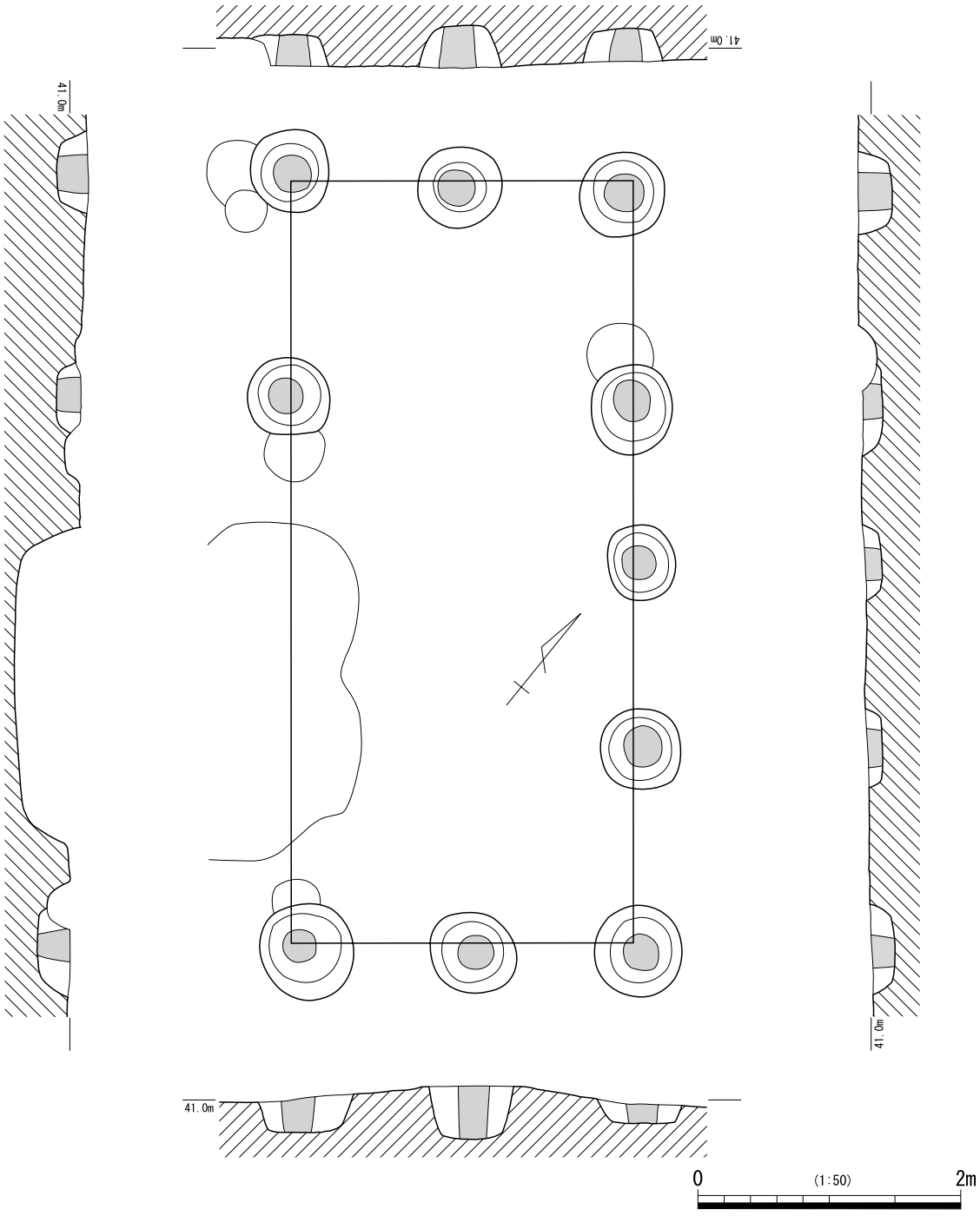


図 31　SB01 実測図

SB01（図 31・図版 14）

大溝 SD02 の 1.2 m西側に位置する南北棟である。梁行 2 間・桁行 4 間の側柱建物で、西側の 1 ヶ所の柱穴は攪乱によって失われている。建物規模が 2.6 m ×5.8 mで、梁行が狭く細長い建物である。建物の主軸はSD01 とほぼ平行しており、N－39°－W と西側に大きく振れる。柱間は梁行は 130 ㎝の等間で、梁行は北から 160 + 130 + 145 + 145 ㎝とややばらつきがある。柱痕跡はすべての柱穴で確認されており、柱痕跡の規模は直径 25 ～ 27 ㎝である。柱穴掘方は円形で、直径 52 ～ 67 ㎝と大型である。深さは 12 ～ 40 ㎝で、根入れの高さはほぼ揃っている。

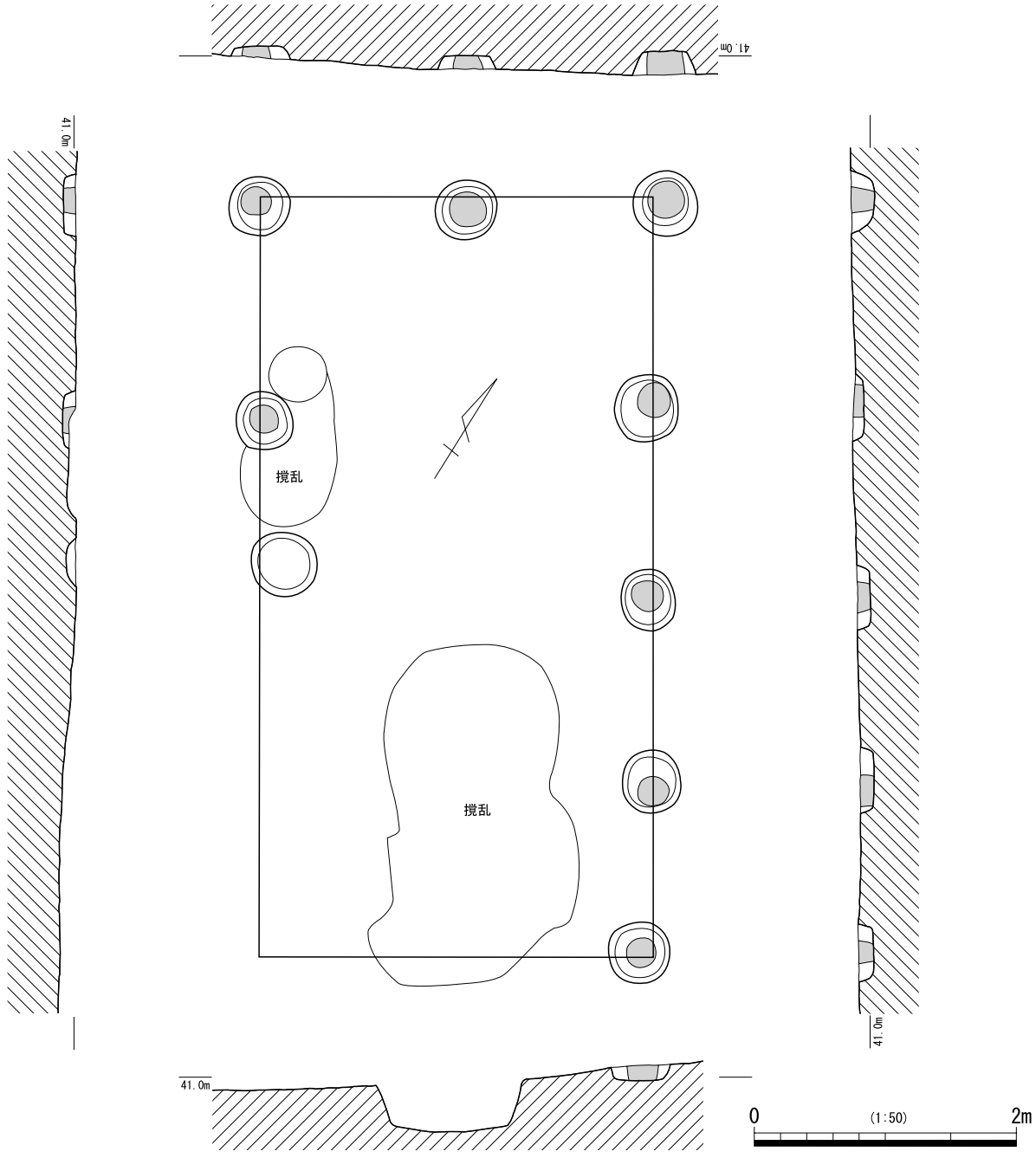


図 32　SB02 実測図

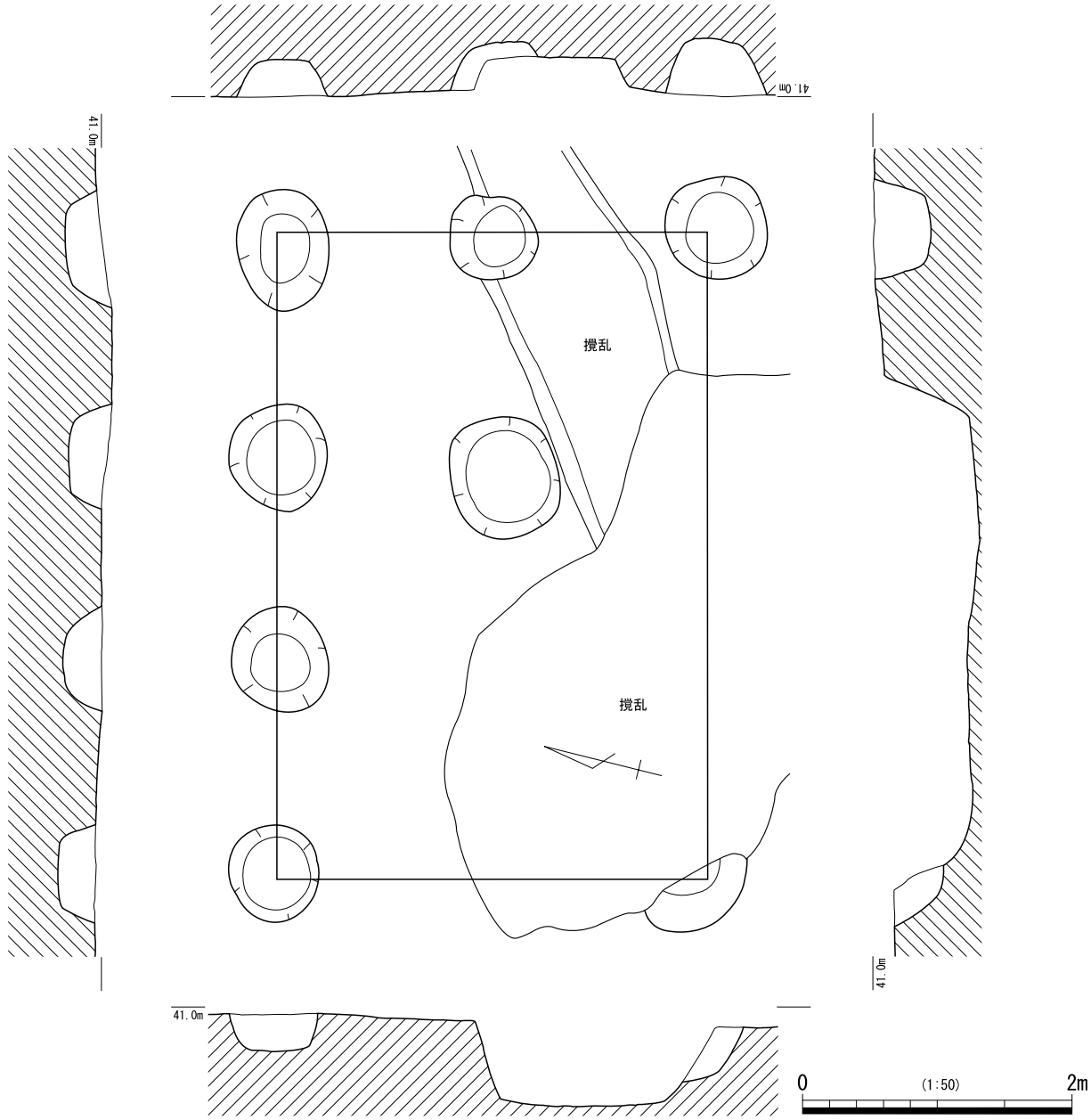


図 33　SB03 実測図

SB02（図 32、図版 14）

SB01 の西側にずらして建てられた南北棟で、東半は SB01 と重複している。南側は攪乱や削平によって柱穴が失われている。SB01 と同じ梁行２間・桁行４間の側柱建物であり、建物規模も 3.0 m ×5.8 m とほぼ同規模である。建物の主軸も SB01 と近似しているが、N－32°－W と北へ少し振れる。柱間は、梁行は 150 ㎝、桁行は 145 ㎝の等間である。すべての柱穴で柱痕跡が確認されており、規模は直径 22 ～ 30 ㎝である。柱掘方は円形で、直径 42 ～ 50 ㎝と SB01 よりも一回り小さい。根入れの深さはほぼ揃っているが、深さは 10 ～ 18 ㎝とやや浅い。

SB03（図 33、図版 14）

SB01 の南側に隣接する東西棟で、南西部は攪乱によって柱穴が失われている。梁行２間・桁行３間の総柱建物で、建物規模は 3.2 m × 4.8 m である。建物の主軸は N－14°－W で、西に少し振れている。

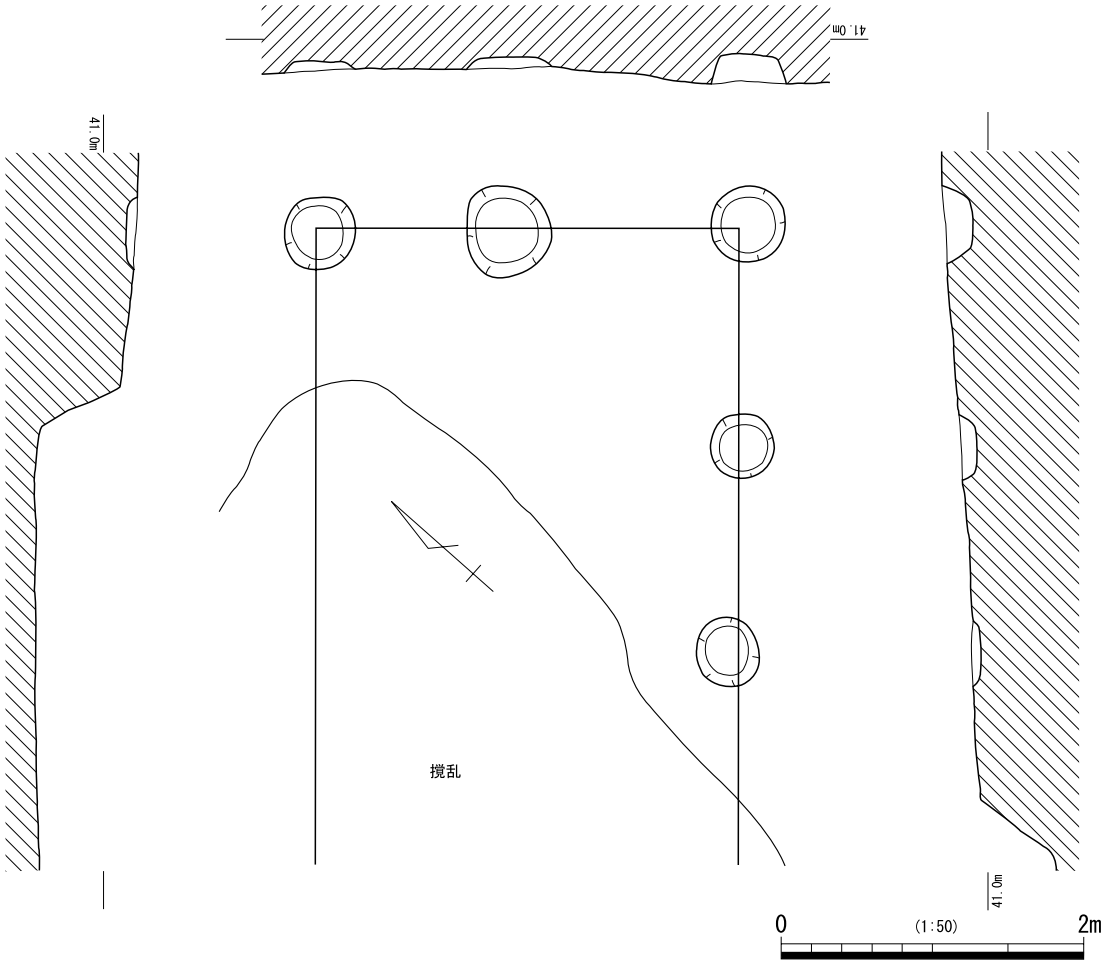


図 34　SB04 実測図

いずれも抜き取り穴であり、柱痕跡は認められない。柱痕跡が残らないため正確な柱間は不明であるが、抜き取り穴の間隔からみて、梁行・桁行ともに 160 ㎝の等間であると推測される。抜き取り穴は、直径 65 ～ 75 ㎝と大型である。深さは 28 ～ 42 ㎝であり、高さが概ね揃っていることから、柱の根入れの高さとほぼ一致するものと推測される。

SB03 は、抜き取り穴の大きさや深さから、太い柱を用いた堅固な造りの建物であったと推測される。総柱の構造であることから、建物は倉庫であった可能性が高い。瓦の一時的な保管など、瓦窯に関連する倉庫の可能性も考えられる。

SB04（図 34、図版 14）

SB01 から北へ 5 ｍに位置する側柱建物である。西側が攪乱で失われており、全体の規模は不明であるが、おそらくは東西棟であろう。梁行は 2 間、桁行は 2 間分検出されており、2.8 ｍ ×2.8 ｍ以上の規模の建物である。建物の主軸は N－41°－W であり、SD02 に平行させて西に大きく振っている。いずれも抜き取り穴であり、柱痕跡は認められない。妻柱の抜き取り穴がややずれてはいるが、柱間は梁行・桁行ともに 140 ㎝の等間であったと推測される。抜き取り穴の大きさは直径 42 ～ 55 ㎝で、深さは 5 ～ 17 ㎝と浅い。底部の高さは、多少ばらつきはみられるが大きな差はなく、柱の根入れの高さとほぼ一致するものと推測される。

第４章　篠場瓦窯跡 －出土遺物－

１　軒丸瓦

軒丸瓦は、細片も含めて 272 点、総重量 63.3 kg出土している。そのうち、３・２号窯の窯体内と灰原から出土したものが大半で、合計 56.1 kgと全体の 89％を占めており、１号窯からは細片を含めても合計 14 点、総重量 0.6 kgが確認される程度である。窯以外の遺構では、点数は少ないが、瓦集中遺構 SX01 や大溝 SD02 からも出土している。また、包含層や攪乱の埋土中から出土したものや、確認調査で採取されたものもある。軒丸瓦については、細片であったり表面の風化が著しく文様の判別が困難なものを除き、できる限り網羅的に図化・掲載した。

（１）分類

出土した軒丸瓦を、瓦当文様の様式からⅠ～Ⅲ類に分類し、文様構成や整形時の文様への加工の違いによってさらに細分した。

Ⅰ類　　素文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、いわゆる川原寺式の軒丸瓦である。周縁部は、素文の傾斜縁で内区側の端に１重の圏線（突線）が巡る。蓮子は周環を有しており、１＋５＋９の配置で中心の蓮子の周囲に２重に巡る。瓦当側面と裏面端には削り調整が施され、側面と裏面の境は明瞭な角をもつ。瓦当は中心付近で平均４㎝と厚い。丸瓦の接合部には、凸面側を削り先端を細くする加工が施される。

Ⅱ類　　四重圏文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦となるもの。蓮子配置の異なるＡ・Ｂの２種があり、さらにＢについては文様への加工の有無によりＢ１とＢ２の２種に細分される。

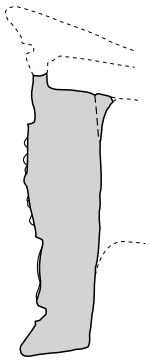
Ⅱ類Ａ　蓮子配置が１＋８のもの。蓮子にはいずれも周環が伴い、大きさが大小２種がある。中心蓮子を含む大型の蓮子を十字に配し、小型の蓮子はその間に配されている。小型の蓮子周環は正円となっておらず、部分的に間が切れている。花弁の先端は丸く、間弁の幅が広い。

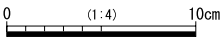
Ⅱ類Ｂ　蓮子配置が１＋６のもの。蓮子にはいずれも周環が伴い、大きさにはややばらつきがある。花弁の形状はⅡ類Ａと同様であるが、間弁はⅡ類Ａに比べて幅が狭い。瓦当の周縁部に加工を施さないもの（Ｂ１）と、周縁部を平らに削り圏線が消されるもの（Ｂ２）に細分される。

Ⅲ類　　二重圏文縁の軒丸瓦で、周縁部を中心とする破片のみが出土している。花弁の残存する資料が出土しておらず、花弁の形状・枚数について断定できないことから、別形式として分類する。ただし、間弁の大きさ・形状がⅡ類Ａと酷似していることから、Ⅱ類Ａの周縁部を改笵して製作されたものである可能性が高い。周縁は全体としては傾斜縁となる形状で、内区側に２重の圏線（突線）が巡る。

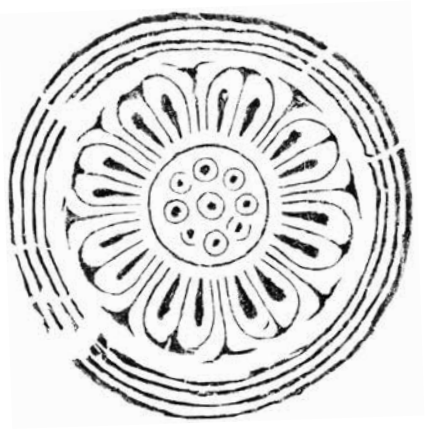
なお、Ⅱ類には、丸瓦の接合位置･加工や、瓦当裏面の形状の異なるものが２種類存在する。一つは、丸瓦の接合位置が高く、凸面側に削り加工を施して細くするものである。瓦当の厚さは薄く、ナデ調整によって平坦に仕上げられている。もう一つは、丸瓦の接合位置が低く、丸瓦の先端は凸面側の削り加工に加えて凹凸面に刻み加工瓦が加えられるものである。側面は、笵端付近から丸瓦の凸面に向かって明瞭に屈曲する。瓦当裏面は中心に向かって膨らむ形状となる。これらの技法の違いに関しては、前者を「技法 a」、後者を「技法 b」と呼んで区別することとする。

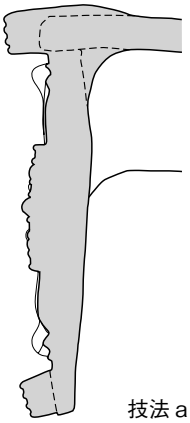
Ⅰ類

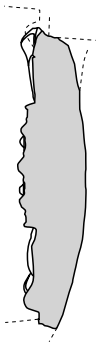




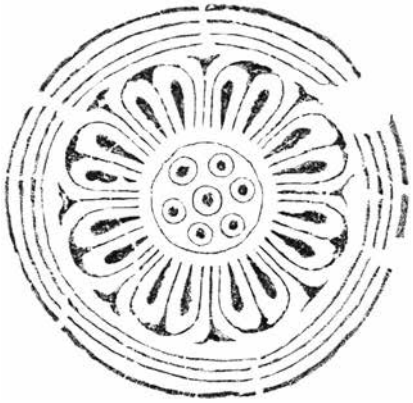
Ⅱ類 A

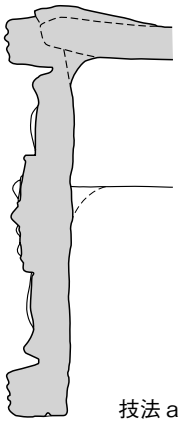


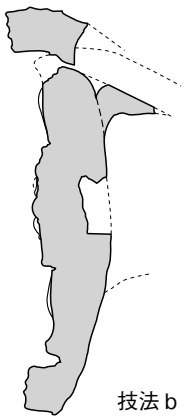




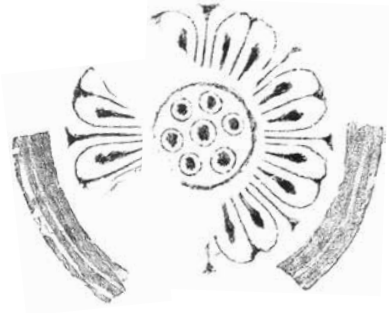
Ⅱ類 B1

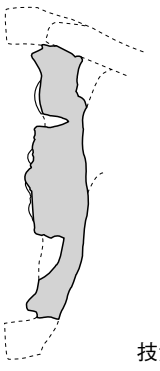






Ⅱ類 B2





Ⅲ類

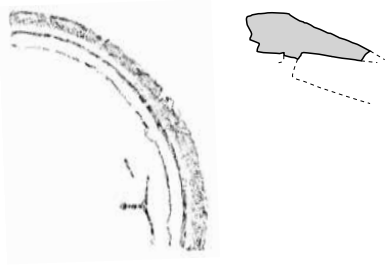


図 35　軒丸瓦の分類

（２）３号窯出土

３号窯窯体内（図 36 ～ 43、図版 15・16・47 ～ 53）

３号窯の窯体内からは、床面に他の瓦と折り重なった状態で、総点数 23 点・総重量 31.6 kgの軒丸瓦が出土している。このうち、比較的残存状態が良好な 17 点を図示する。

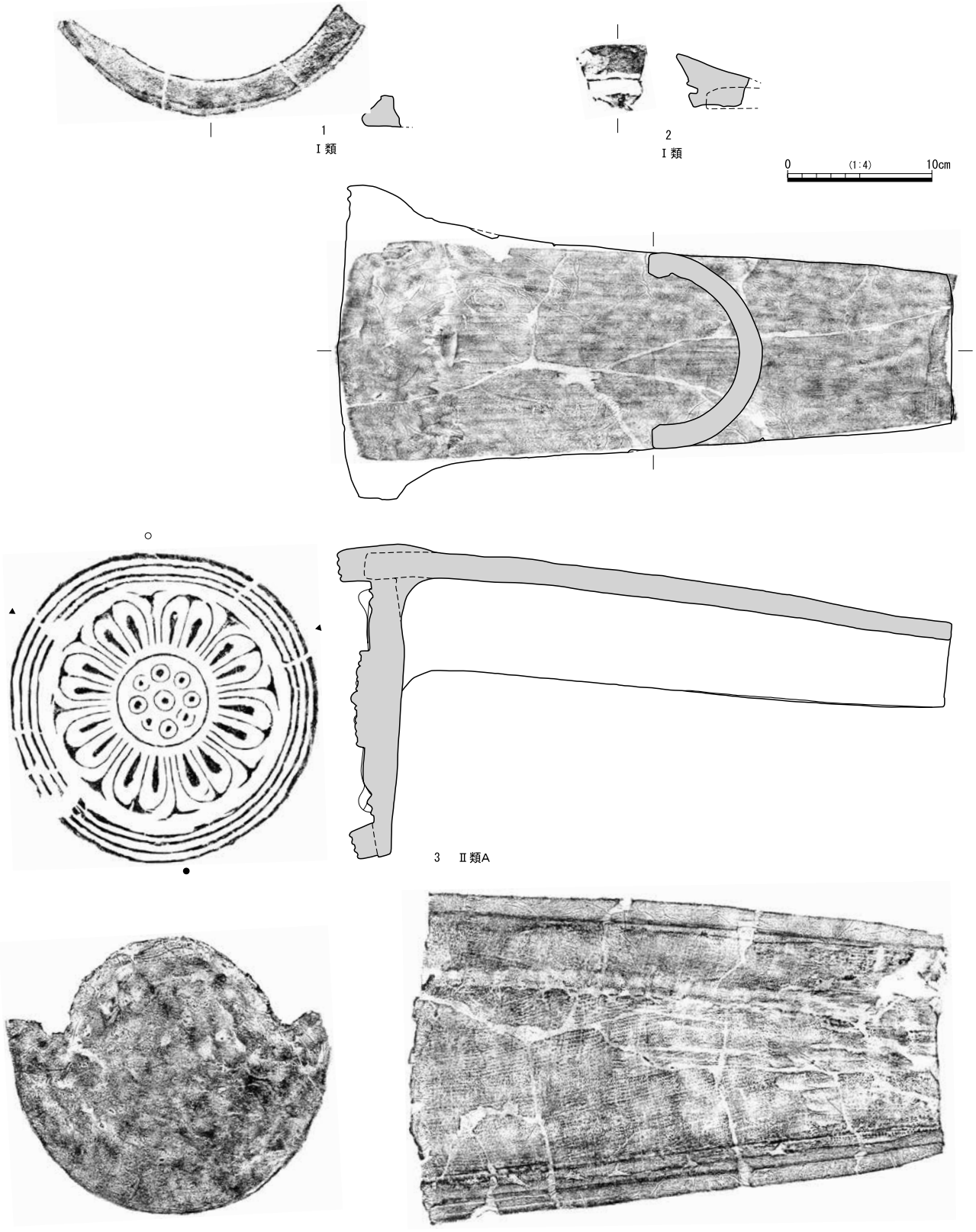


図 36　３号窯窯体内出土軒丸瓦（１）

Ⅰ類　1と2はⅠ類である。1は周縁部の剥離した破片であり、裏側には瓦笵に粘土を充填した際にできた指の痕が残る。2は瓦当上部の破片であり、接合された丸瓦が一部残存している。

Ⅱ類A　3～12・14は、Ⅱ類Aである。3～6は一部欠損するものの、ほぼ完形である。瓦当の損傷は少なく、丸瓦部から瓦当が脱落した状態で出土している。内区の周縁に丸瓦の凹面側を合わせるように、高い位置に接合されている。また、差し込みの深さも、ほぼ内区の高さまで深く差し込まれている。瓦当裏面は、不整方向のナデ調整により平坦に仕上げられている。丸瓦の接合位置・加工・瓦当裏面の形状は、いずれも技法aである。瓦当側面は、軽いナデ調整が施される程度であり、瓦当端から約1.5cmの位置に笵端の段差が明瞭に確認される。丸瓦には、丸瓦Ⅲ類B2が使用されている。瓦笵と丸瓦の位置関係は、3が180度回転、4～6が正位置となっている。また、3～5には、風化によって失われ

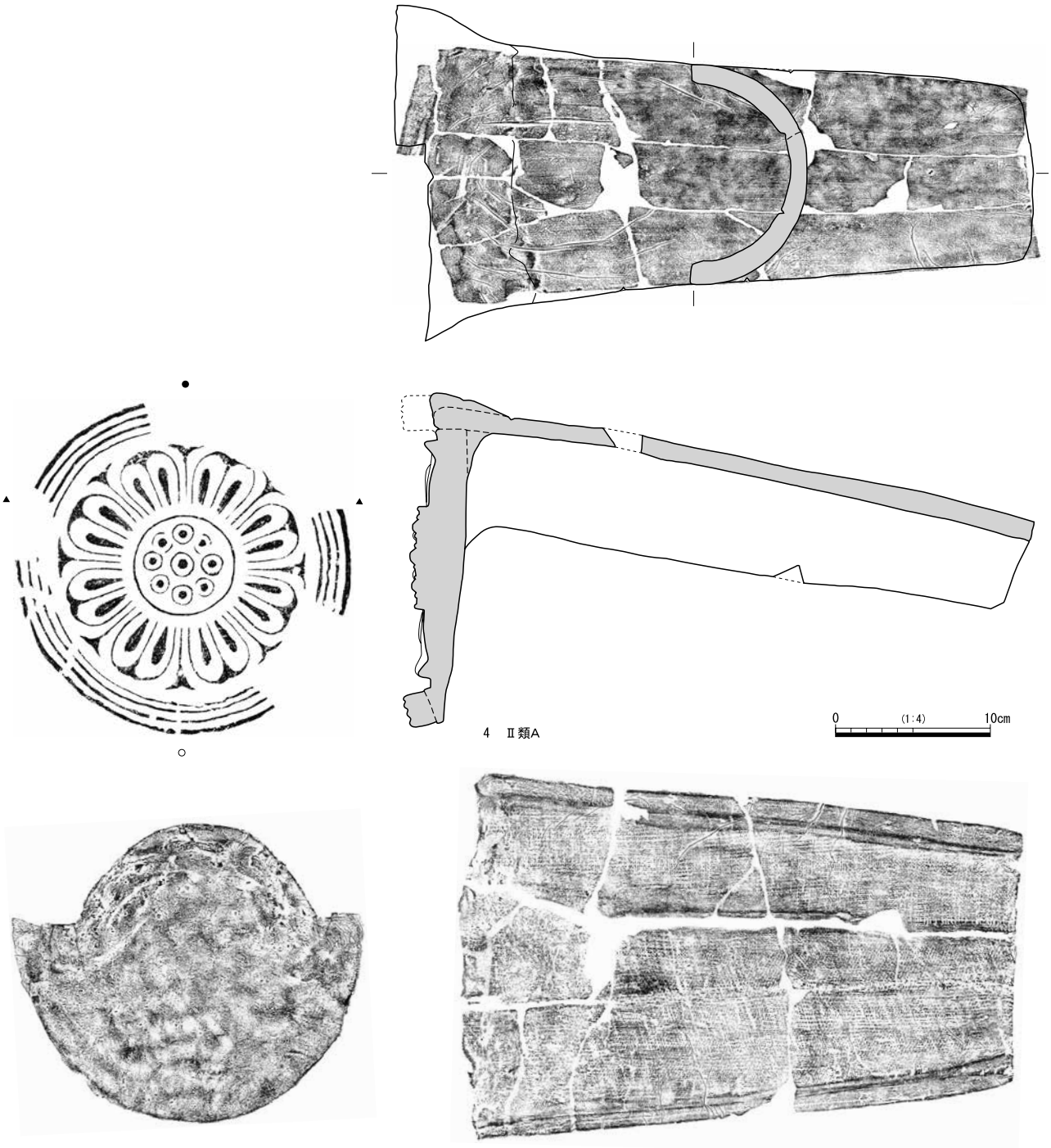


図37　3号窯窯体内出土軒丸瓦（2）

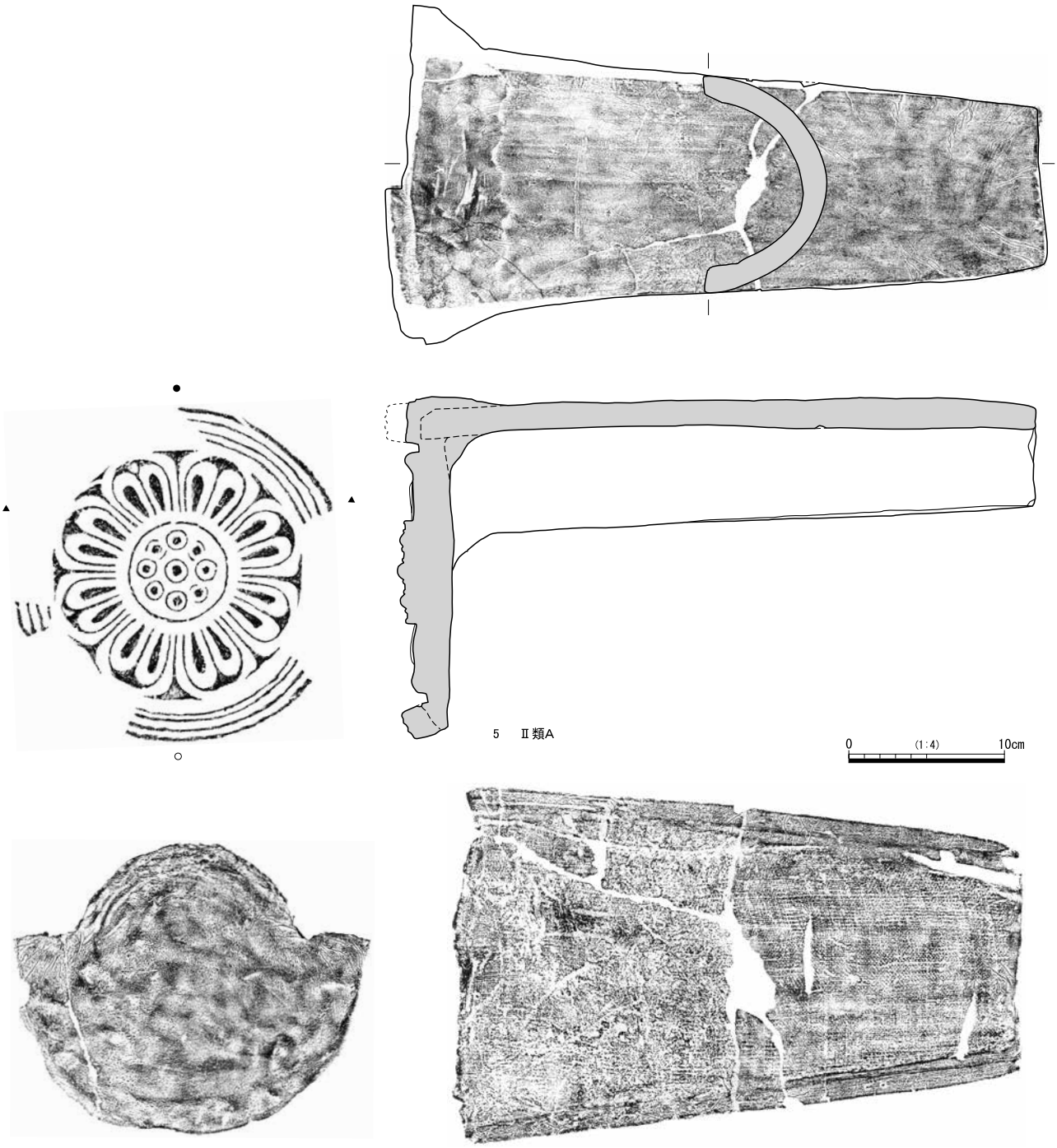


図 38　３号窯窯体内出土軒丸瓦（３）

た部分も多いが、ほぼ全体に赤色の付着物が確認できる。この赤色付着物については、理化学的な分析を実施しており、鉄分を多く含む泥漿が塗布されていたものと推定されている（分析結果の詳細は、第５章に掲載）。

７～９は丸瓦が脱落した瓦当である。丸瓦の接合位置・加工・瓦当裏面の形状は、３～６と同じくいずれもａ手法である。瓦笵と丸瓦の位置関係は、すべて正位置となっている。８と９は文様が重複しており、位置をずらして粘土を押し直した様子がみてとれる。８の周縁部の裏側には、指による丸瓦の接合溝が確認できる。接合溝は、内区との境付近で捲れており、溝の幅が狭かったため一部丸瓦の先端が入りきらなかったものとみられる。

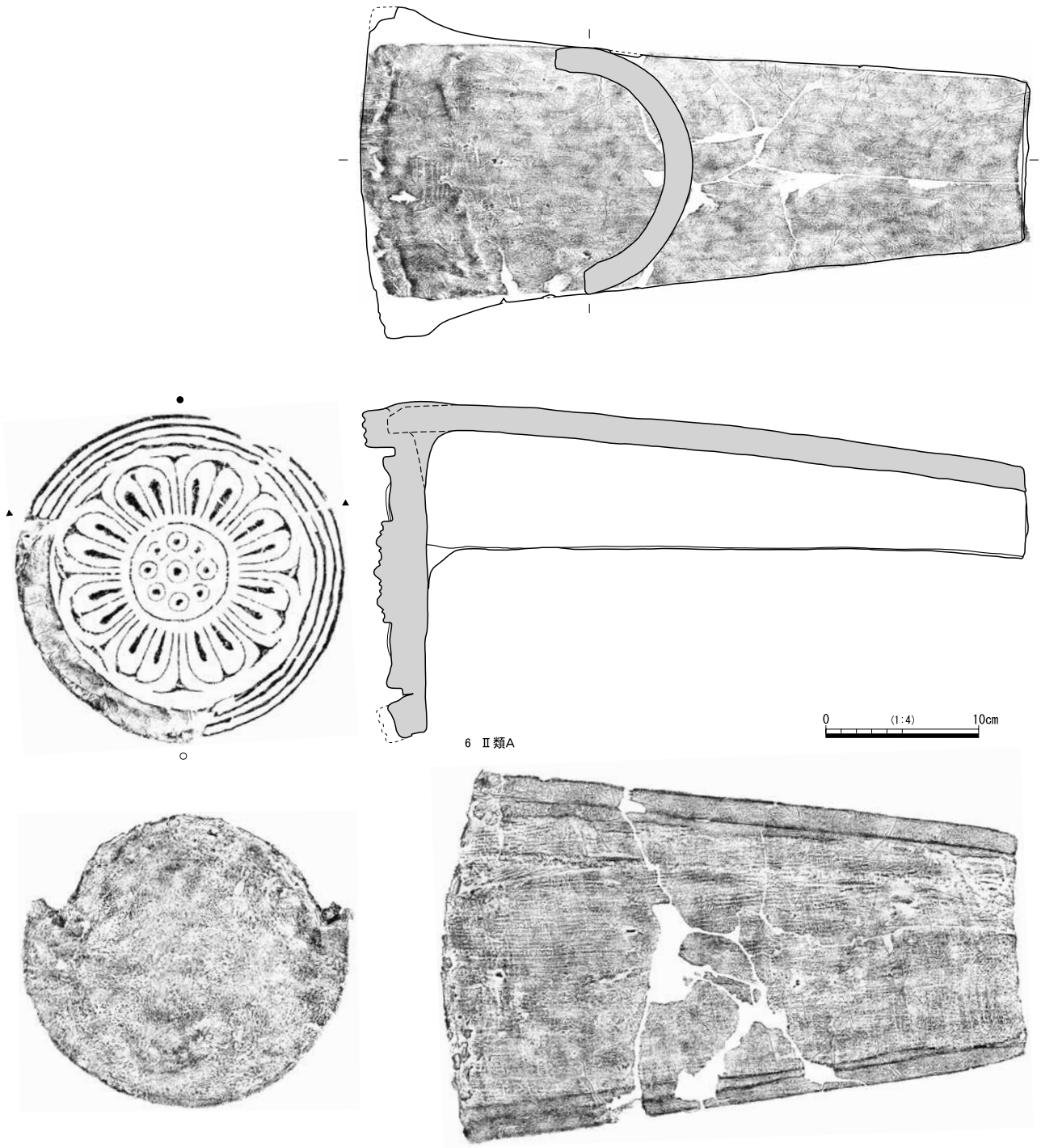


図 39　３号窯窯体内出土軒丸瓦（４）

10 ～ 12 は周縁部のみ残存する破片である。10 には丸瓦の剥離痕が確認でき、丸瓦の取り付け位置が判明する。瓦笵と丸瓦の位置関係は正位置である。11 と 12 は、上半の破片であり、裏側には指によって設けられた丸瓦の接合溝が残る。また、笵傷の位置関係から、図示した位置の上が第１または第４間弁にあたることがわかる。詳細な位置は不明であるが、図示したとおりの位置であれば、瓦笵と丸瓦の位置関係は 11 が 180 度回転、12 が正位置となる。いずれも周縁部のみの破片ではあるが、11 と 12 に関しては、丸瓦の接合位置が高いことから技法ａであると推測される。

14 は、周縁部と丸瓦部のみ残存するもので、瓦当は脱落している。瓦笵と丸瓦の位置関係は、180 度回転している。丸瓦取り付け位置が高く、他のものと同じく技法ａが用いられているとみてよい。

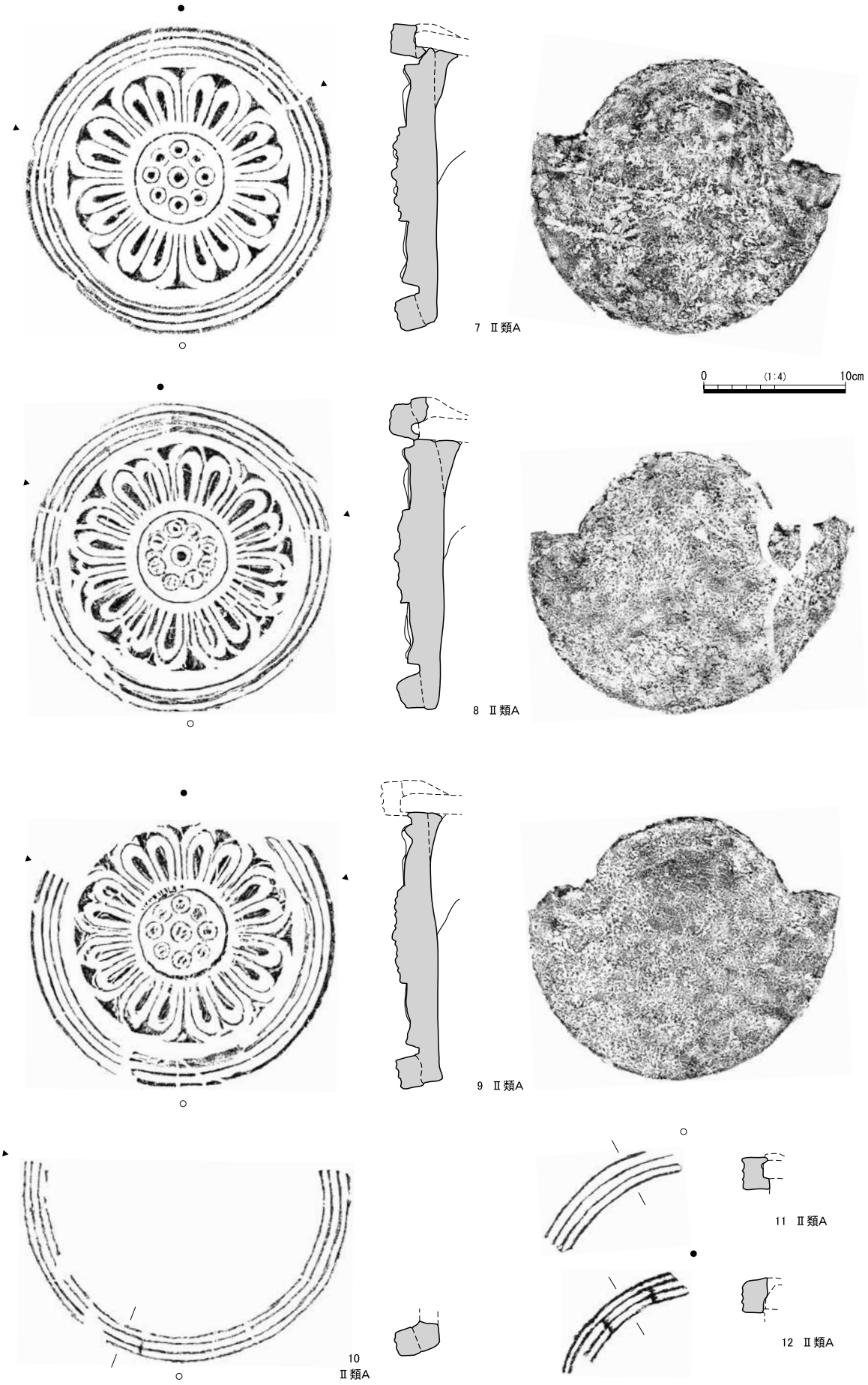


図 40　３号窯窯体内出土軒丸瓦（５）

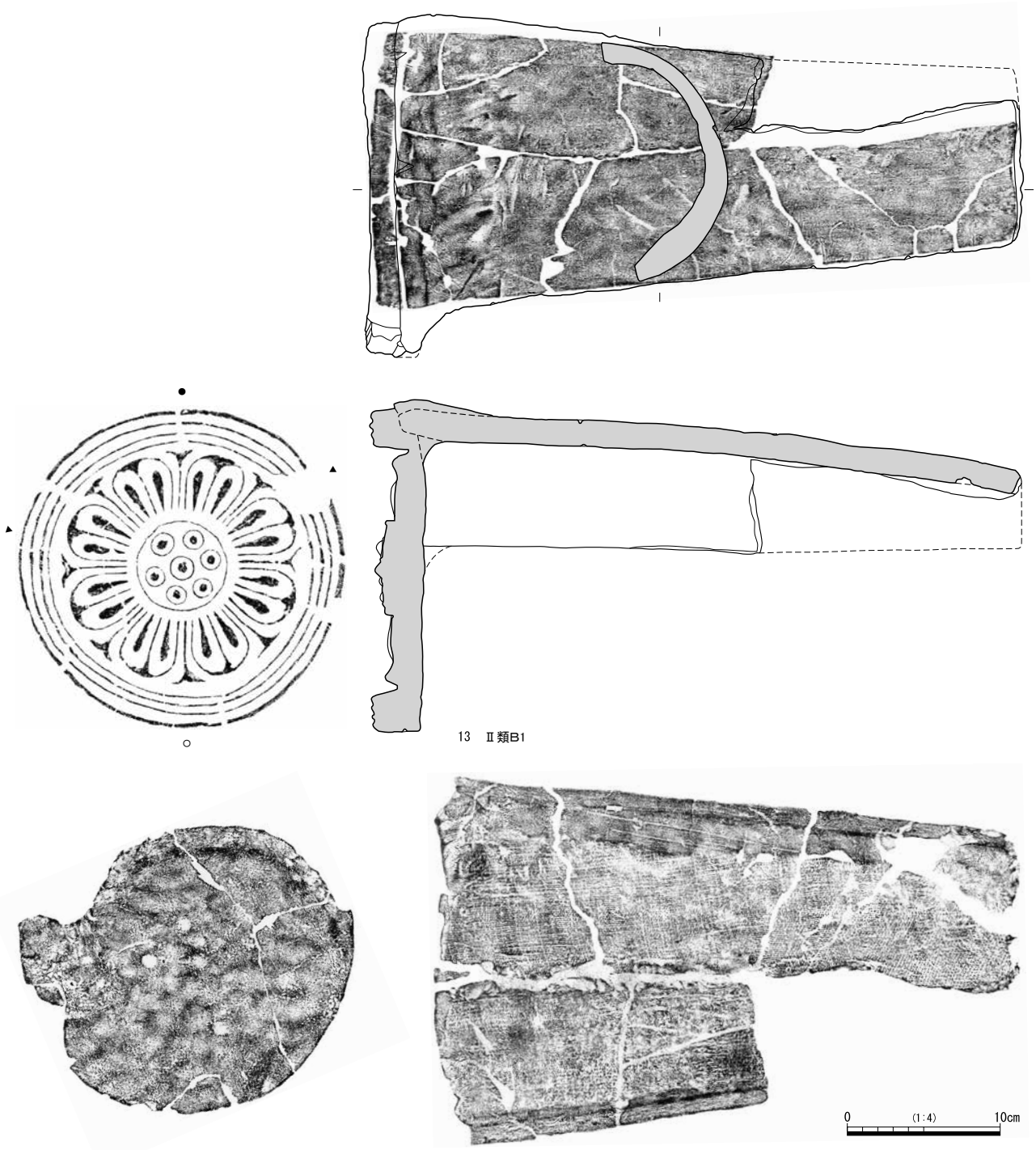


図 41　３号窯窯体内出土軒丸瓦（６）

Ⅱ類Ｂ　13 はⅡ類Ｂ１で、丸瓦部の一部を欠損するが瓦当についてはほぼ完形である。丸瓦は、凸面が瓦当側面付近の高さに取り付けられており、左半は周縁部の外側に出ている部分もある。丸瓦の先端が笵端の位置に相当し、一部は笵端に乗るような状態で置かれたものとみられる。丸瓦接合と瓦当裏面は技法ａである。瓦笵と丸瓦の位置関係は、多少ずれてはいるもののほぼ正位置にある。表面には、３～５と同様に赤色の付着物が認められる。

丸瓦部　15 ～ 17 は丸瓦部のみが残存するものである。瓦当の剥離痕などから軒丸瓦であることはわかるが、瓦当を完全に欠いており種類は断定できない。ただし、15 と 16 については、接合粘土の状況からみて、Ⅱ類の丸瓦部である可能性が高い。丸瓦部には、いずれも丸瓦Ⅲ類Ｂ２が用いられている。

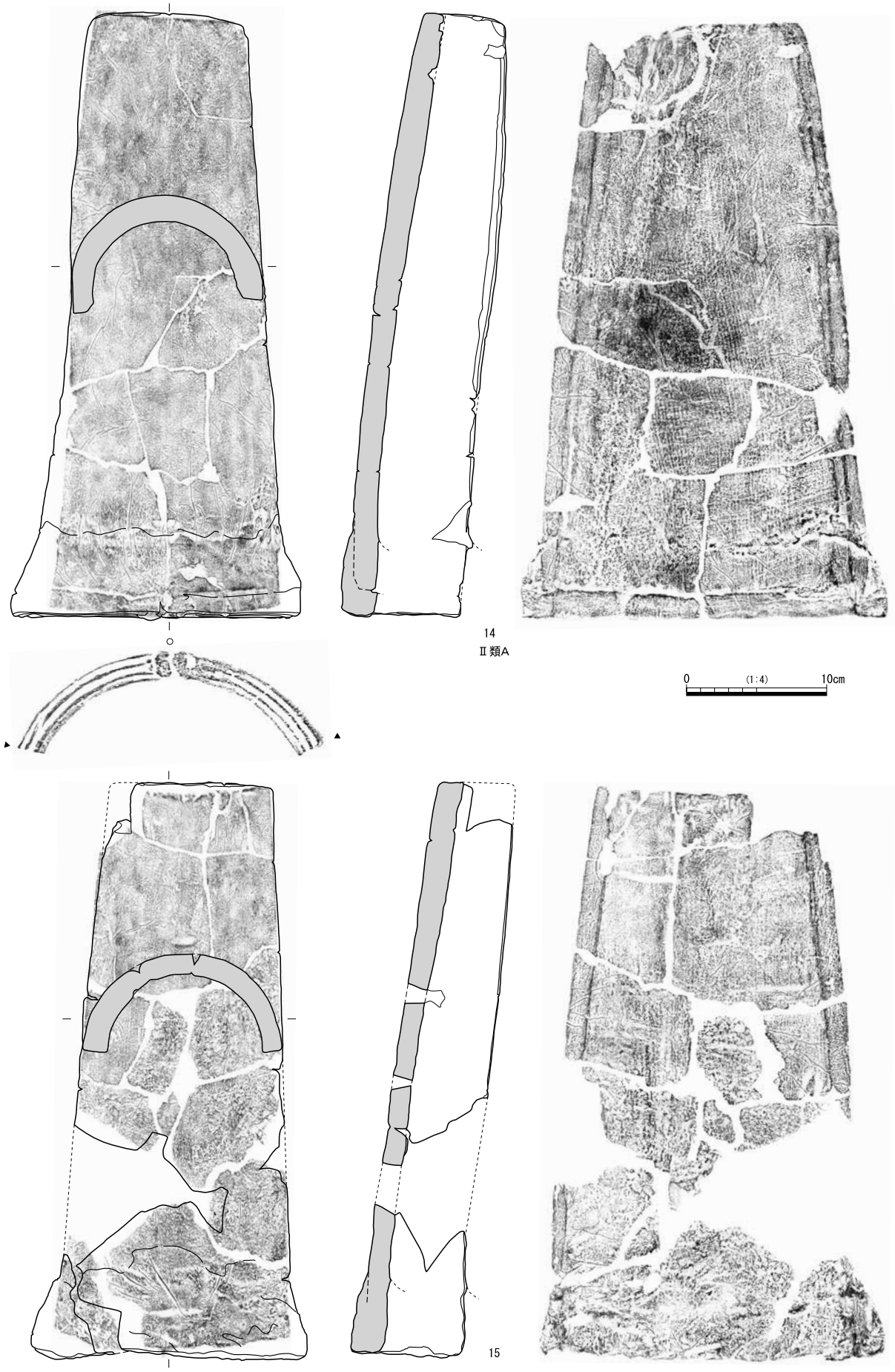


図 42　３号窯窯体内出土軒丸瓦（７）

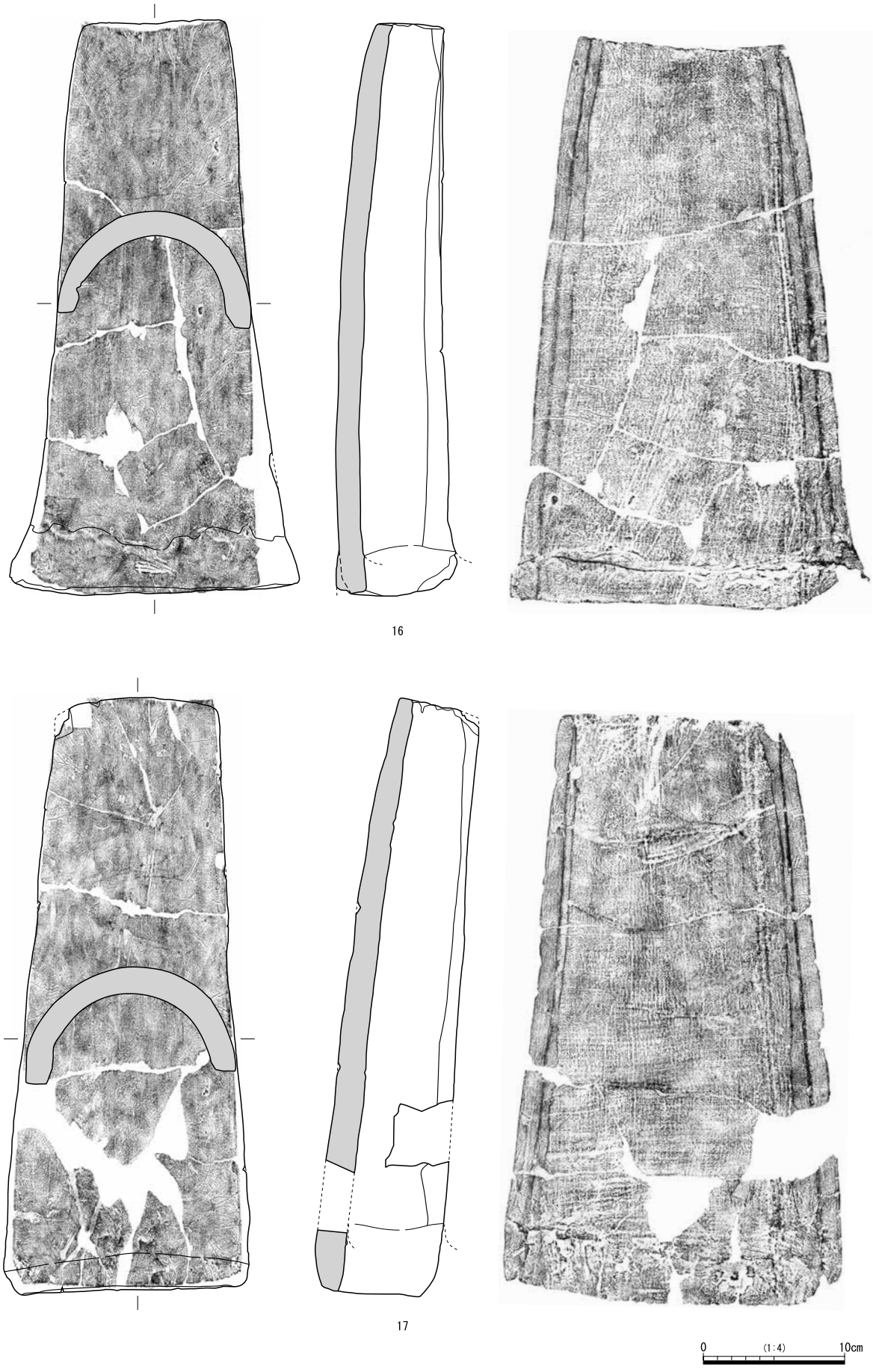


図 43　３号窯窯体内出土軒丸瓦（８）

３号窯灰原（図 44 ～ 46、図版 15・16・47 ～ 53）

３号窯の灰原からは、総点数 113 点・総重量 9.6 kgの軒丸瓦が出土している。比較的残存状態が良好なものを 55 点を図示した。

Ⅰ類　18 ～ 25 はⅠ類である。18 ～ 20 は、周縁部から内区まで残存する破片である。18 と 19 は硬質で遺存状態も良好であるが、20 は軟質で表面の風化が著しい。上部には丸瓦の剥離痕が残り、布目が転写されているが、いずれにも刻み等の加工痕は認められない。瓦当側面と裏面端部には削り調整が施され、明瞭な角がつくり出されている。瓦当裏面は削りの後ナデ調整が施されている。18 と 20 は瓦笵が正位置、19 は 180 度回転した位置で丸瓦が接合されている。21 は中房付近の破片である。灰被りや表面の風化によって蓮子周環の不明瞭なものの多い中、周環を明瞭に確認することができる。上部左半には丸瓦の剥離痕が部分的に残り、瓦当裏面には接合粘土が一部残存している。これらの痕跡と蓮子配置から、瓦笵が正位置の状態で丸瓦が接合されていると推定される。22 ～ 25 は周縁部付近の破片である。24 には指による丸瓦の接合溝が認められ、22・23 には丸瓦の剥離痕が残る。

Ⅱ類Ａ　26 ～ 43 はⅡ類Ａで、丸瓦接合と瓦当裏面は技法ａである。26 と 27 は、表面がやや風化してはいるが、内区がほぼ残存している。瓦当裏面の接合粘土の痕跡から、丸瓦の取り付け位置が把握できる。26 は瓦笵が正位置、27 は 180 度回転した状態で丸瓦が接合されている。28 は中房の破片であり、蓮子が１＋８の配置であることからⅡＡ類であることがわかる。中房の高まりに相当する高さで、粘土が剥離している。29 は瓦当右笵の破片であり、瓦当裏面には接合粘土が残存し、上部には丸瓦側端の痕跡が確認できる。中房は残存しないが、間弁先端の幅からＡ類であることが特定できる。30 ～ 32 は花弁と間弁が残る破片である。瓦当における具体的な位置は不明であるが、丸瓦の剥離痕が確認できることから、瓦当上半の破片であることがわかる。33 ～ 35 は瓦当右側やや上方の破片である。丸瓦側端の痕跡が確認でき、瓦当裏面には丸瓦の接合粘土が一部残存する。37 と 38 も同様に丸瓦側端の痕跡が残っており、瓦当左半の破片であることが分かる。39 は内区が比較的よく残る破片である。丸瓦の剥離痕が認められないことから、瓦当下半の破片であるとみてよい。図示したように、瓦笵が正位置の状態で丸瓦が接合されている可能性が高い。40 ～ 43 は具体的な位置は不明であるが、丸瓦の剥離痕がみられないことから、瓦当下半の破片とみてよい。

44 はⅡ類Ａの軒丸瓦であるが、丸瓦接合と瓦当裏面には技法ｂが用いられている。瓦当は周縁部しか残存しないが、笵傷の存在からⅡＡ類であることが特定できる。丸瓦先端は大きく削り落とし、凹面に刻み加工を施している。瓦当側面は、笵端で明瞭に屈曲し、接合粘土が取り付けられている。接合された３点の破片のうち２点は、２号窯の前面（Ｍ２グリッド）から出土しており、距離も２号窯の灰原端から２ｍ程しか離れていない。３号窯の軒丸瓦でｂ手法のものはこの１点のみであることから、２号窯からの混入品である可能性が高い。

Ⅱ類Ｂ　45 ～ 51 はⅡ類Ｂである。中房の部分は残存しないが、間弁先端の幅が狭いことからⅡ類Ｂであることが特定できる。丸瓦接合と瓦当裏面は技法ａである。45 ～ 47 は瓦当上半の破片である。45・47 には丸瓦の剥離痕、46 には丸瓦側端の痕跡が確認できる。48 ～ 51 は、丸瓦の痕跡が認められないことから、瓦当下半の破片であると推測される。いずれも周縁部を欠いているが、３号窯ではＢ２が出土していないことから、これらはいずれもⅡ類Ｂ１とみてよいであろう。

52 ～ 59 は中房を欠く破片である。花弁の形状からⅡ類であることは明らかであるが、Ａ・Ｂいずれか特定できない。識別の要素となる間弁が残るものもあるが、いずれも表面の風化が著しく先端の幅が特定できない。52 ～ 55 は瓦当上半の破片であり、上部には丸瓦の剥離痕、瓦当裏面には接合粘土の痕跡が残る。56 ～ 59 は瓦当下半の破片である。いずれも、丸瓦接合と瓦当裏面は技法ａである。60 と 61 は丸瓦部の破片で、瓦当を欠く。丸瓦先端は凸面側に削り加工を施しており、刻み加工はみられない。

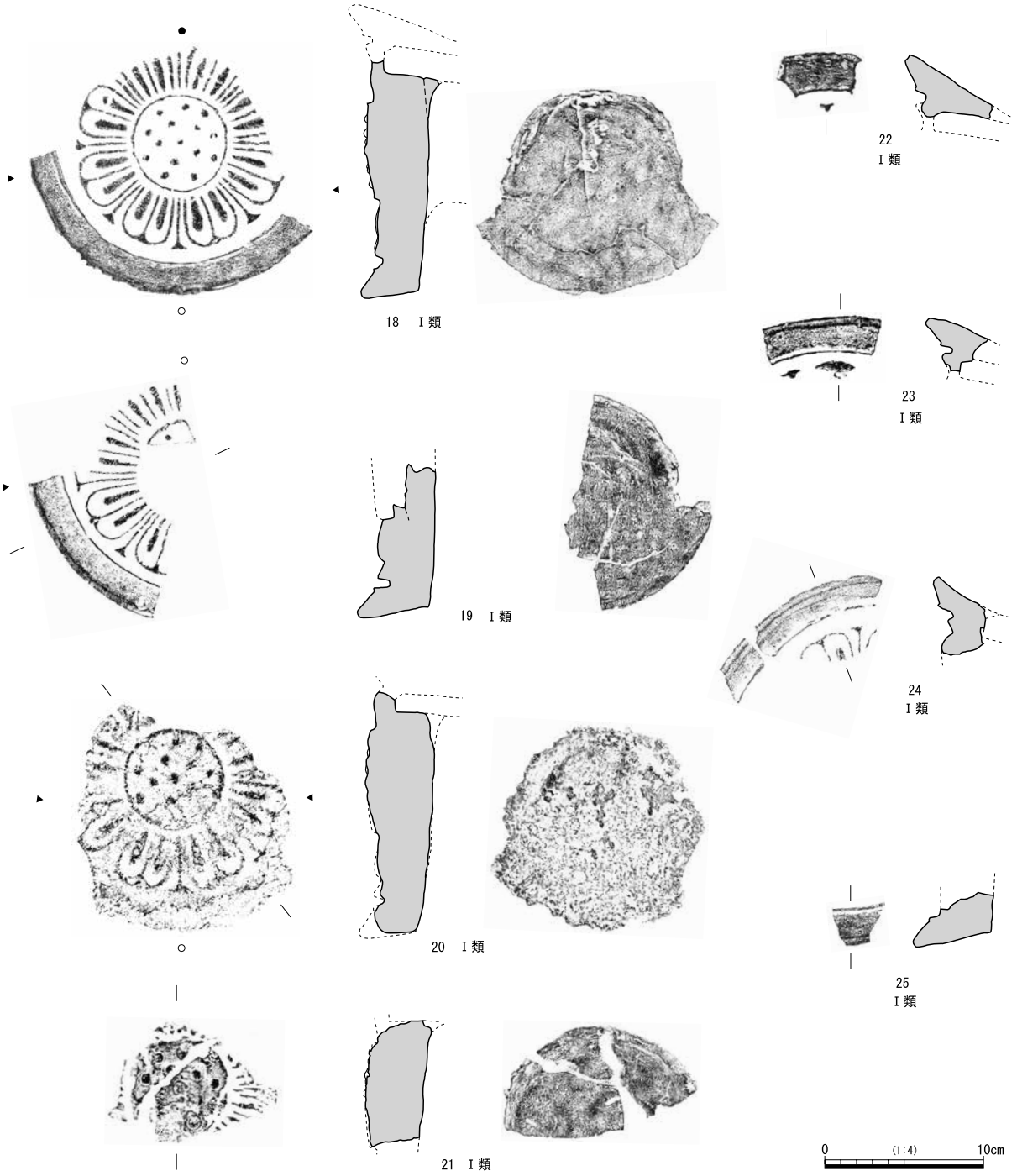


図 44　３号窯灰原出土軒丸瓦（１）

凸面側の補充粘土の形状から 60 はⅡ類である可能性が高い。62 ～ 71 は、Ⅱ類の周縁部の破片である。いずれも表面の風化によって笵傷が確認できないため、Ａ・Ｂの峻別ができない。62 ～ 64 は瓦当上半の破片で、丸瓦の剥離痕が残る。65 ～ 68 は瓦当下半の破片である。69 ～ 71 の瓦当裏面には接合粘土の端が残ることから、瓦当の中央付近であることがわかる。

Ⅲ類　72 はⅢ類であり、周縁部と丸瓦凸面側の接合粘土が残る。丸瓦凸面側の剥離痕が残っており、凸面側が内区端にあたる低い位置にあることがわかる。側面はⅡ類の技法ｂと同様に、笵端で明瞭に屈曲する。３号窯で出土したⅢ類はこの１点のみであり、他の窯で詳細された瓦の可能性がある。３号窯から 50 ｍ近く離れたＥ区で出土している。

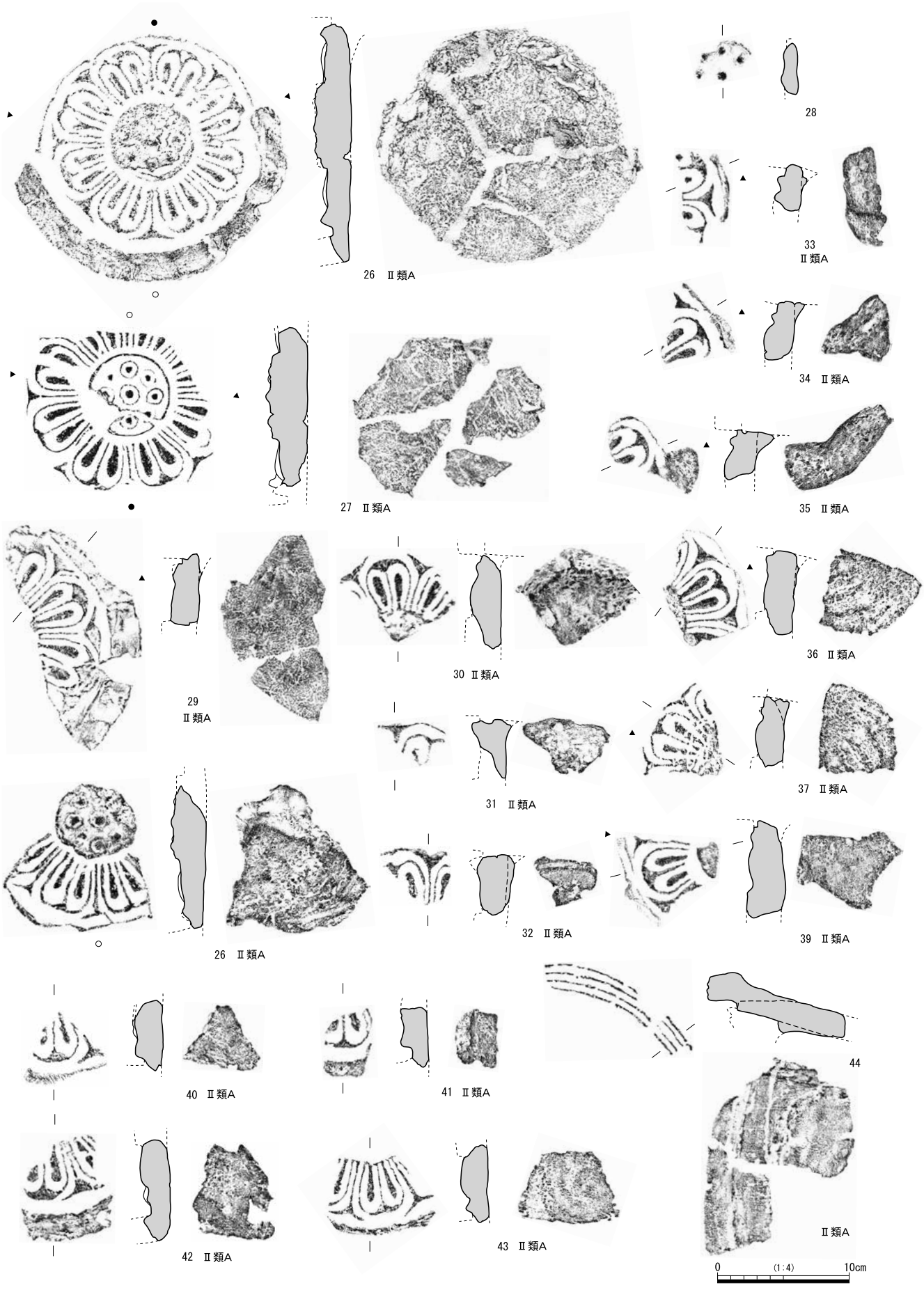


図 45　３号窯灰原出土軒丸瓦（２）

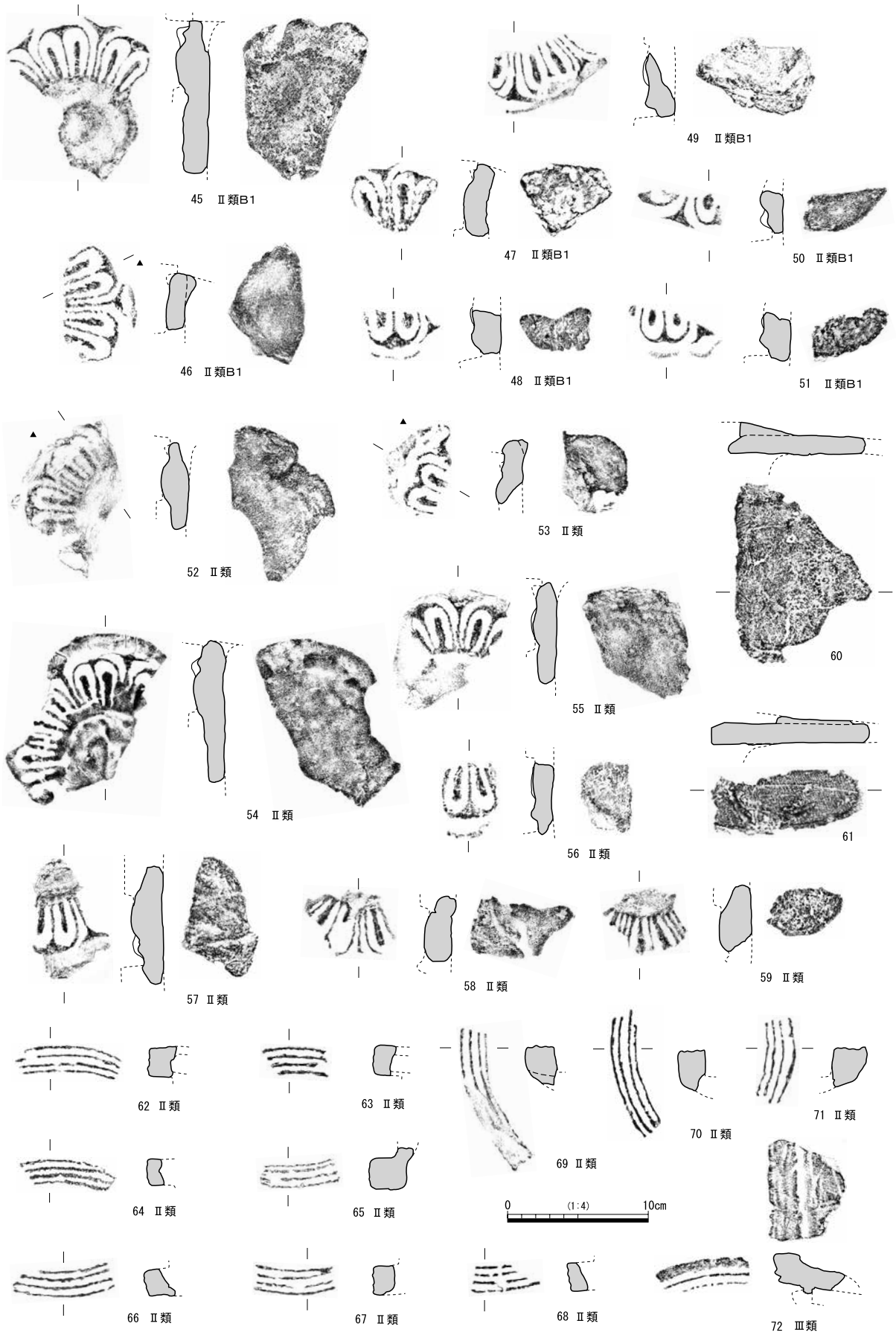


図 46　３号窯灰原出土軒丸瓦（３）

３号窯埋土（図 47、図版 49）

３号窯の窯体内から出土したものの中で、床面から浮いた状態で出土したものである。出土した軒丸瓦は、合計７点、総重量 0.8 kgである。表面の風化が著しいものがほとんどであるが、比較的遺存状態の良好なもの 10 点を図示した。

Ⅱ類・Ⅲ類　73 はⅡ類Ａで、内区がほぼ残存する。上部には丸瓦の接合痕が残り、瓦笵が正位置の状態で丸瓦が接合されている。74 ～ 76･79 ～ 82 は周縁部の破片である。79･82 には丸瓦の剥離痕が残っており、瓦当上半にあたることがわかる。、74 と 82 は笵傷からⅡ類Ａであること判明するが、ほかは表面の風化が著しくⅡ類としか判断できない。77 は内区の破片である。丸瓦取り付け位置が花弁の先端付近まで下がっている。硬質の焼きであるが、蓮子周環がやや不鮮明となっている。丸瓦の取り付け位置が極端に低い点では技法ｂと類似するが、瓦当裏面は平坦で技法ｂとは異なる。周縁部を欠くため断定はできないが、丸瓦の取り付け位置を重視するとⅢ類の内区である可能性が高い。

74 ～ 76・82 は床面を覆う第９層、73・79・80 は焚口付近の堆積土である第６層から出土しており、３号窯に伴う遺物と判断できる。77 と 81 は最上層にあたる第１層からの出土であり、１号窯灰原の遺物とみなされる。

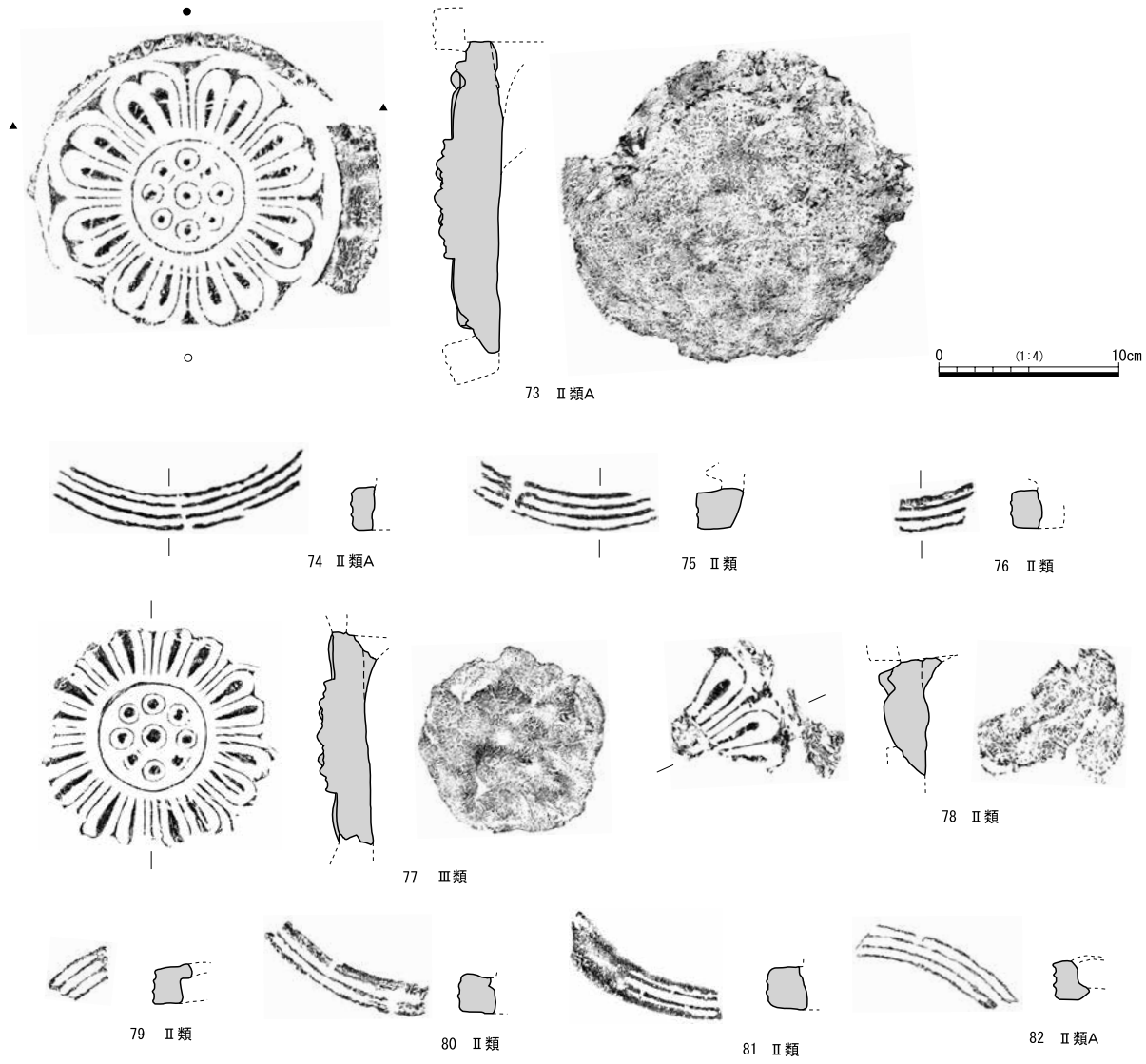


図 47　３号窯埋土出土軒丸瓦

（3）２号窯出土

２号窯窯体内（図 48、図版 22・23・47 ～ 53）

２号窯の窯体内からは、４点の破片が出土しているのみであり、そのすべてを図示した。

Ⅰ類　83・84 はⅠ類である。83 は周縁部から丸瓦部にかけて残存する。丸瓦側端が残ることから、上部左端の破片であることが分かる。丸瓦は、凸面側を内区端に合わせる高さで接合されており、先端の凸面側に削り加工を施す。刻み加工は認められない。84 は瓦当下半の破片である。裏側には、瓦笵に粘土を充填する際についた指痕が残る。

Ⅱ類Ａ　85 はⅡ類Ａで、中房部のみの破片である。瓦当裏面が残存しないため明確ではないが、やや厚手であり、中央が膨らむ状態で剥離していることから、裏面の成形は技法ｂの可能性が高い。

Ⅱ類Ｂ　86 はⅡ類Ｂ２である。周縁部のみの破片であるが、丸瓦測端の剥離痕が確認でき、瓦当左側下半であることが分かる。周縁部には削り加工が施され、圏線の痕跡がわずかに残るのみである。瓦丸瓦接合と瓦当裏面は技法ｂである。

２号窯灰原（図 49 ～ 54、図版 22・23・47 ～ 53）

２号窯灰原からは、細片も含めて合計 73 点、総重量 14.2 kg出土している。細片や風化が著しいものなど文様が認識できないものを除き、55 点を図示した。

Ⅰ類　87 ～ 91 はⅠ類である。87 は瓦当下半の破片である。瓦当側面と裏面端部には削り調整が施され、裏面の大半はナデにより平坦に仕上げられている。笵傷の位置関係から、瓦笵が正位置から 90 度回転した状態で丸瓦が取り付けられていることがわかる。88･89 は瓦当上半の周縁部付近の破片である。88 には接合された丸瓦、89 には丸瓦の剥離痕が残る。88 は丸瓦取り付け位置がやや高くなっているが、Ⅰ類で同様のものは他に確認できないことから、やや例外的な存在である。90 は瓦当周縁部から丸瓦部の破片である。丸瓦側端が残り瓦当左側の破片であることが分かる。丸瓦部先端は、凸面側に削り落とす加工が施されており、凹凸面ともに刻み加工は認められない。91 は瓦当下半の周縁部のみの破片である。周縁部のみが剥離しており、裏側には瓦笵に粘土を充填する際の指痕が残る。

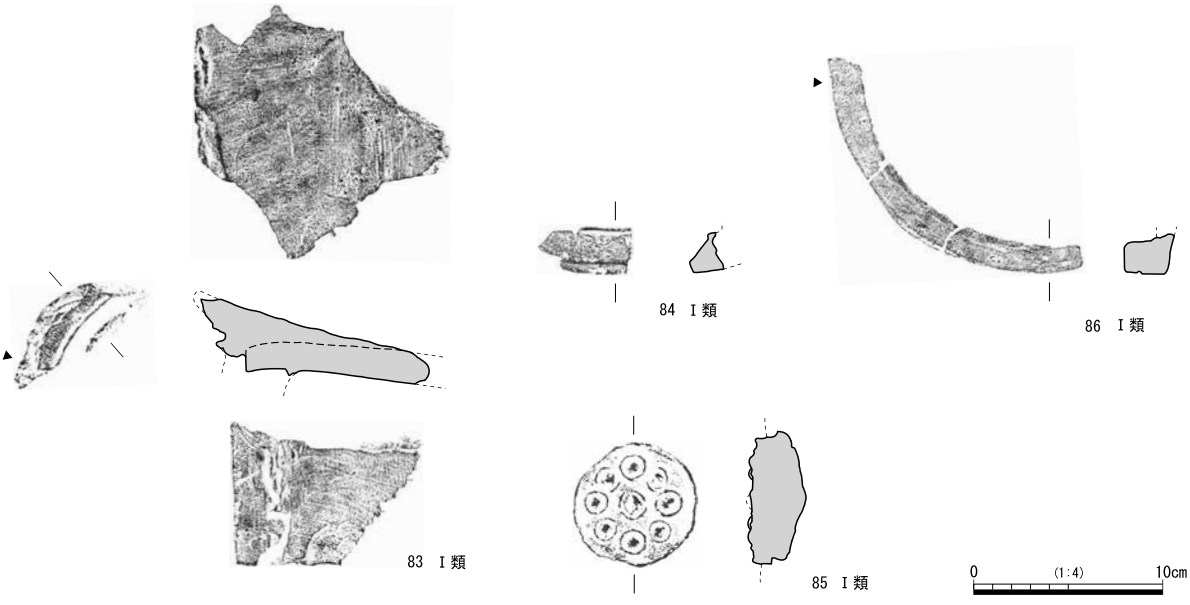


図 48　２号窯窯体内出土軒丸瓦

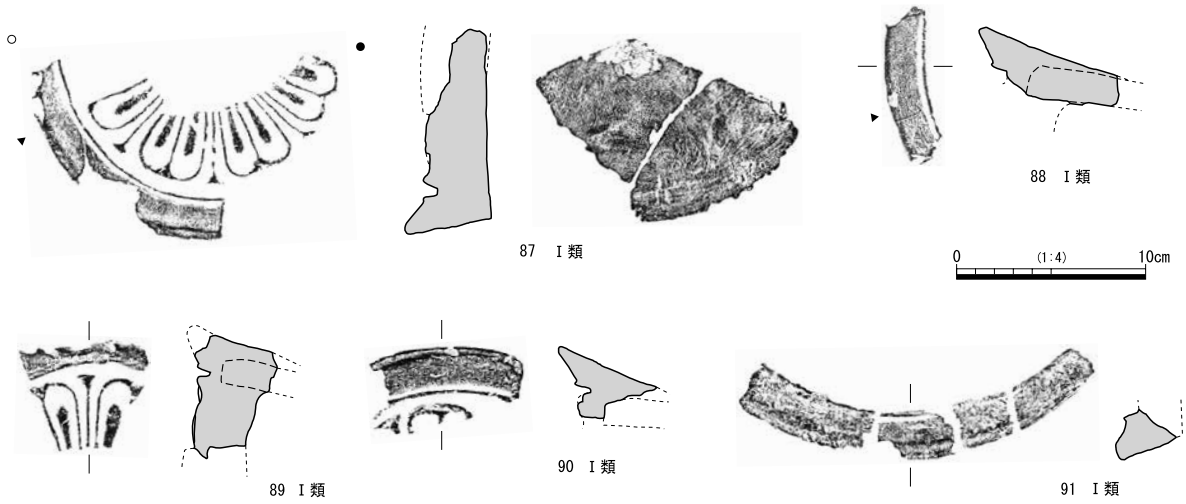


図 49　２号窯灰原出土軒丸瓦（１）

Ⅱ類Ａ　92 ～ 106 はⅡ類Ａで、丸瓦接合・裏面調整は 97・104 が技法 b、そのほかは技法 a である。92・93 は内区の破片である。明確な丸瓦の痕跡は確認できないが、瓦当裏面に残る接合粘土の痕跡からおおよその天地は把握できる。92 は瓦笵が正位置の状態で、93 は正位置から 90 度回転した状態で、丸瓦が接合されている可能性が高い。94・95 は瓦当右半、96・97 は左半の破片である。接合粘土の剥離痕からおおよその天地が把握できる。磨滅してはいるが、丸瓦の剥離痕とみられる平坦面が確認でき、周縁部の立ち上がり付近に丸瓦凹面が位置していることがわかる。97 には丸瓦側端の痕跡が残り、丸瓦の取り付け位置がわかる。全体的に風化が著しいが、瓦当裏面は中心から側縁に向かって低くなっており、丸瓦接合・裏面調整は技法 b と推定される。98 ～ 101 は瓦当下半の破片である。いずれも瓦当裏面は表面が風化しているが、全体としては平坦になっており、丸瓦接合・裏面調整は技法 a とみてよい。102 は瓦当左側の破片である。瓦当裏面には接合粘土の端が残る。103 は瓦当上半の破片である。瓦当裏面には接合粘土の剥離痕が残る。104 ～ 107 は周縁部から丸瓦部にかけての破片である。瓦当は周縁部のみであるが、笵傷の一致からⅡ類Ａであることが判明する。104 は技法 b であることが明確な資料である。丸瓦は低い位置に取り付けられており、凸面が内区の立ち上がりにほぼ一致する。丸瓦先端は凸面側を幅広に削り落としており、凹面には刻み加工瓦施されている。105 と 106 には丸瓦の接合溝が残り、丸瓦が高い位置に差し込まれていたことが分かる。

Ⅱ類Ｂ　108 はⅡ類Ｂ１で、丸瓦接合・裏面調整は技法 b が用いられている。瓦笵が正位置から右に 90 度回転した状態で丸瓦が接合されている。瓦当側面は、上半はナデ調整されているが、下半は無調整で笵端の段差が明瞭に残る。丸瓦の剥離面には、凹凸面ともに刻み目が転写されている。

109 ～ 120 はⅡ類Ｂ２で、いずれも丸瓦接合・裏面調整は技法 b で、側面にも削り調整が施されている。ある。109 と 110 は周縁部の上半を欠くが、瓦当が比較的良好に残る破片である。周縁部は削り加工が施されているが、凹線部が部分的に残る。瓦笵と丸瓦との位置関係は、109 が正位置から左に 90 度、110 が 180 度回転した状態で丸瓦が接合されている。ともに丸瓦凹面の剥離面には刻み目が転写されている。111 ～ 113 は周縁部から丸瓦部にかけての破片である。周縁部の圏線は、削られて完全に消されている。いずれも丸瓦の凹面には刻み加工が施されており、112 には凸面側の刻み加工も確認できる。111 に用いられている丸瓦は、丸瓦Ⅲ類Ｂ４である。114 ～ 120 は周縁部のみの破片である。115 には丸瓦凸面の剥離面が残り、刻み目の転写が確認できる。118 には圏線の凹線がわずかに残る。

121 ～ 124 はⅡ類Ｂである。周縁部を欠くため１・２の判別ができない。丸瓦接合・裏面調整は、121 ～ 123 が技法 a、124 は技法 b である。瓦笵と丸瓦の位置関係は、121 ～ 123 は表面の風化が著し

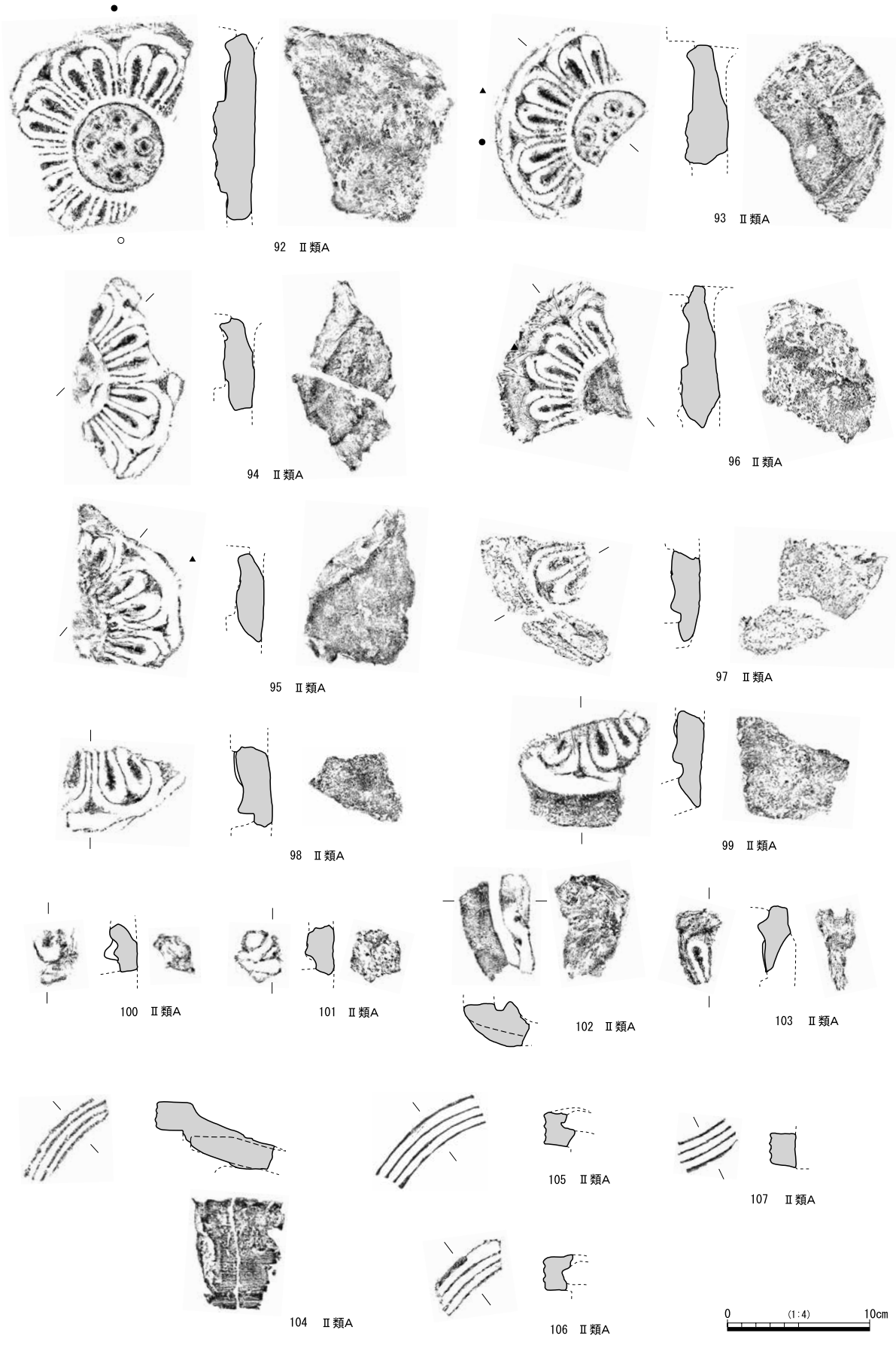


図 50　２号窯灰原出土軒丸瓦（２）

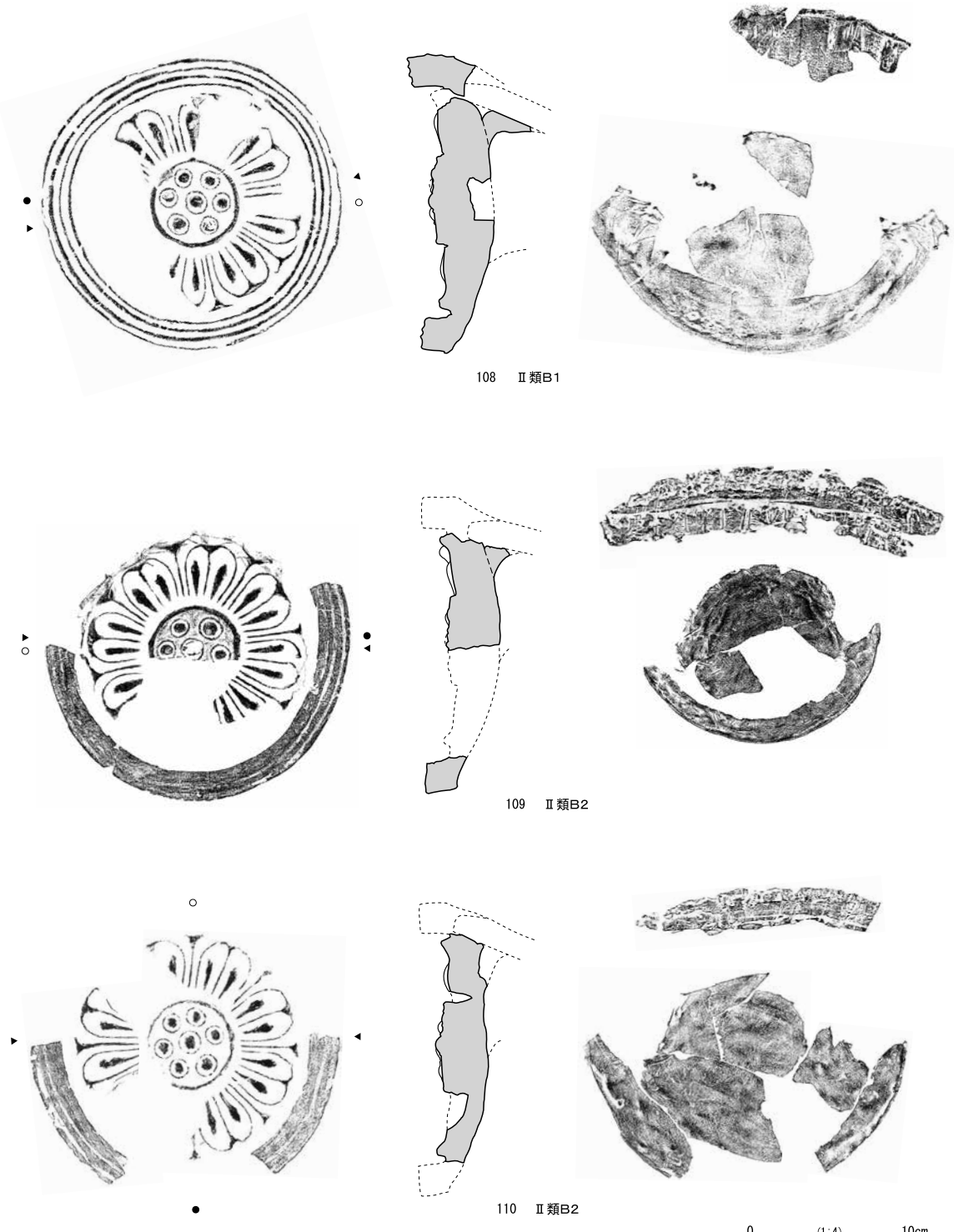


図 51　２号窯灰原出土軒丸瓦（３）

く不明であるが、124 は正位置から 180 度回転している。

125 ～ 136 はⅡ類の周縁部の破片であるが、表面の風化等によりＡ・Ｂの区別ができないものである。125 ～ 132 は瓦当上半の破片で、丸瓦や丸瓦の接合溝・剥離痕が確認できる。瓦当裏面の形状は不明であるが、丸瓦接合は、127 が技法ｂである以外はすべて技法ａとなっている。133 ～ 136 は瓦当下半の破片である。134 ～ 136 は裏面が欠損しているが、裏側に瓦笵に粘土を充填する際の指痕が残る。

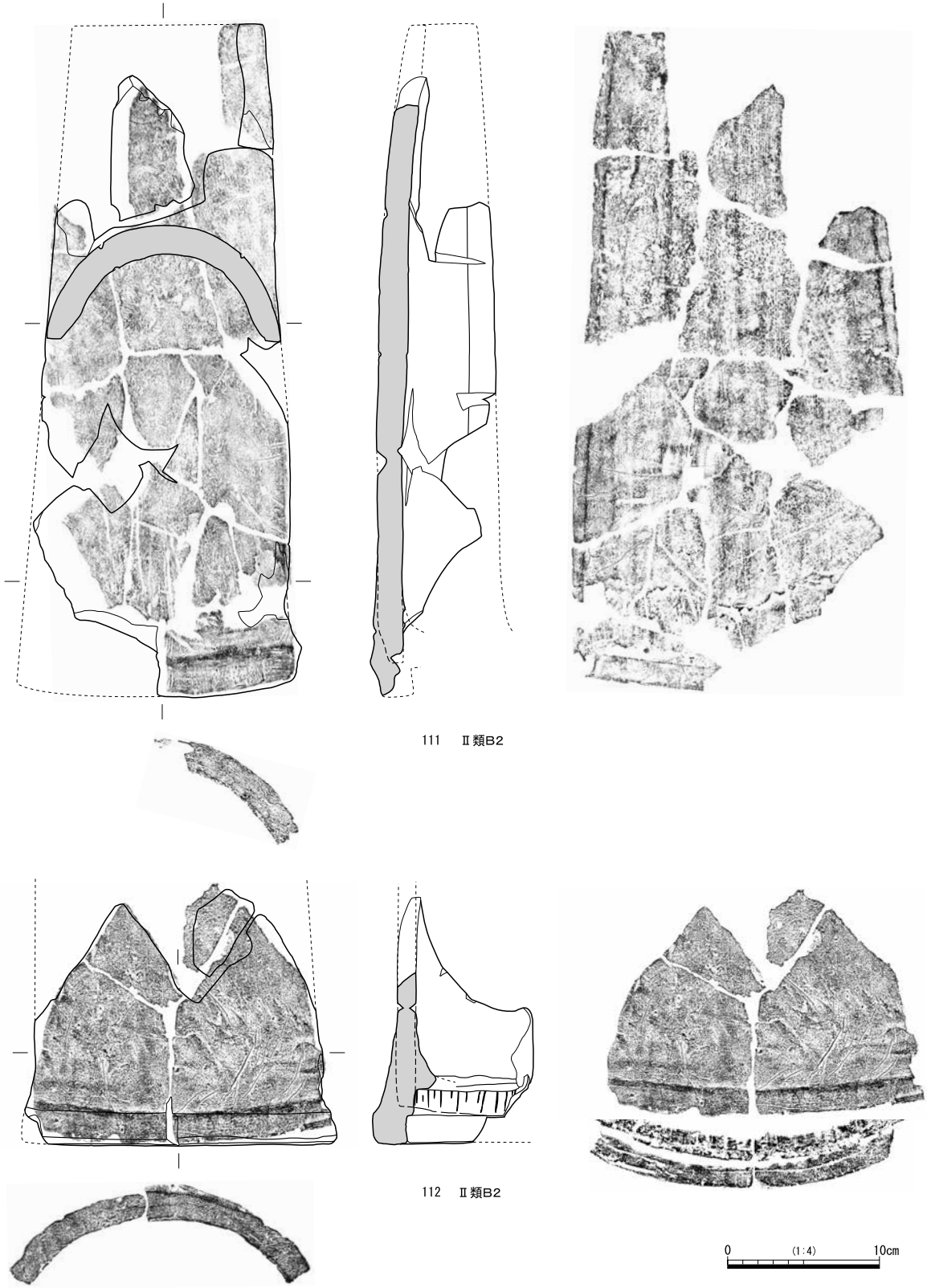


図 52　２号窯灰原出土軒丸瓦（４）

丸瓦部　137 ～ 141 は丸瓦部の破片である。瓦当が欠損しているため、明確に分類ができない。丸瓦部がほぼ完形である 137 には、Ⅲ類Ｂ３の丸瓦が使用されている。いずれも丸瓦先端は凸面側を削り加工されており、刻み目は確認できない。

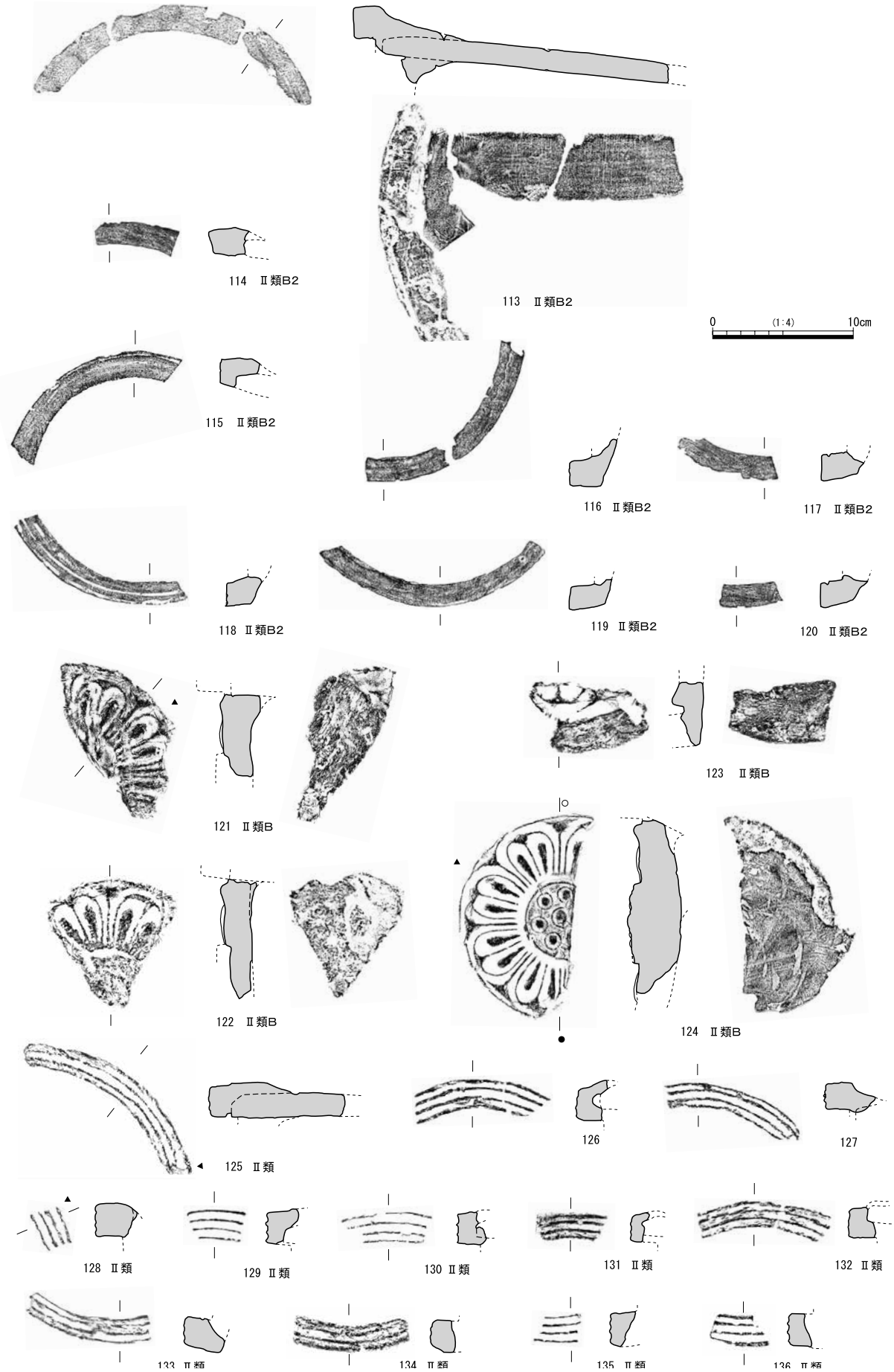


図 53　２号窯灰原出土軒丸瓦（５）

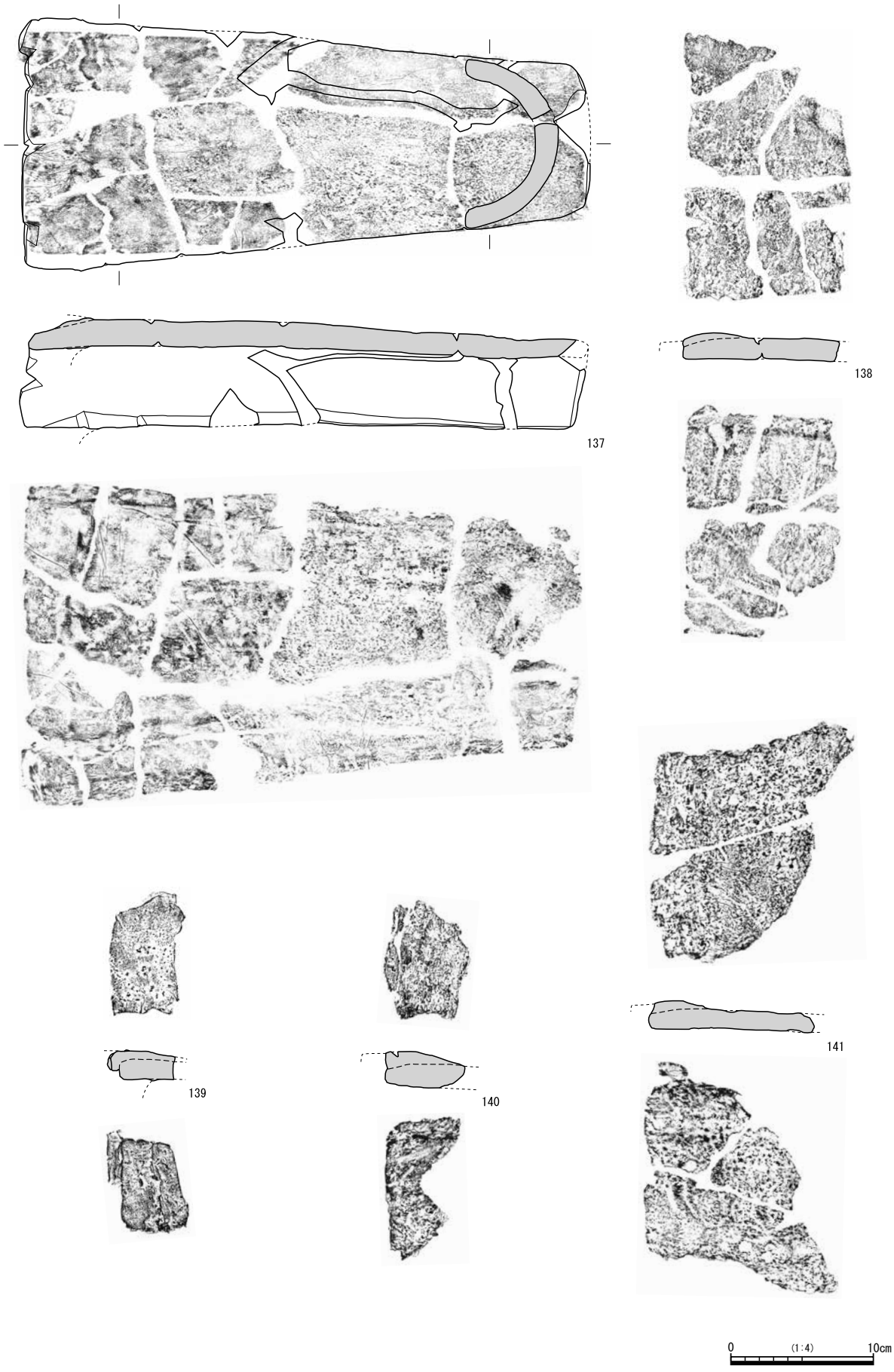


図 54　２号窯灰原出土軒丸瓦（６）

（４）１号窯出土

１号窯灰原（図 55、図版 28・53）

１号窯からの軒丸瓦の出土は少なく、灰原から合計 14 点・総重量 0.6 kgが出土している程度である。いずれも細片のため、SX01 など窯の上方から混入している可能性も否定できないが、混入品とみられるものも含め、細片や風化が著しく文様の識別できないものを除き、合計 13 点を図示した。

Ⅱ類　142 はⅡ類Ｂである。内区の破片で中房を欠くが、間弁先端の幅からⅡ類Ｂと識別できる。丸瓦接合は不明であるが、瓦当裏面は平坦で技法 a が用いられている。143 ～ 148 はⅡ類Ａである。145 ～ 147 は内区の破片、148 は中房の剥離片である。143 ～ 147 の丸瓦接合・裏面調整は、いずれも技法 a である。143 は瓦当上半の破片である。瓦当裏面には接合粘土が残存し、上部には丸瓦剥離痕とみられる平坦面がある。144 は瓦当左側、145 は瓦当右側、146・147 は瓦当上半の破片である。144 ～ 148 は同一グリッドからの出土であり、色調や焼成も近似する。破片が少なく接合はしないものの、単一の瓦であった可能性が高い。149 ～ 153 はⅡ類の周縁部の破片である。笵傷が確認できないため、Ａ・Ｂの識別はできない。149 ～ 151 は瓦当上半の破片であり、丸瓦の剥離痕が確認できる。丸瓦の接合位置は高く、技法 a である。

Ⅲ類　154 はⅢ類の破片である。側面には笵端の段差が明瞭に残り、瓦当裏面は削り調整される。内側の凹線部に笵傷が残る。

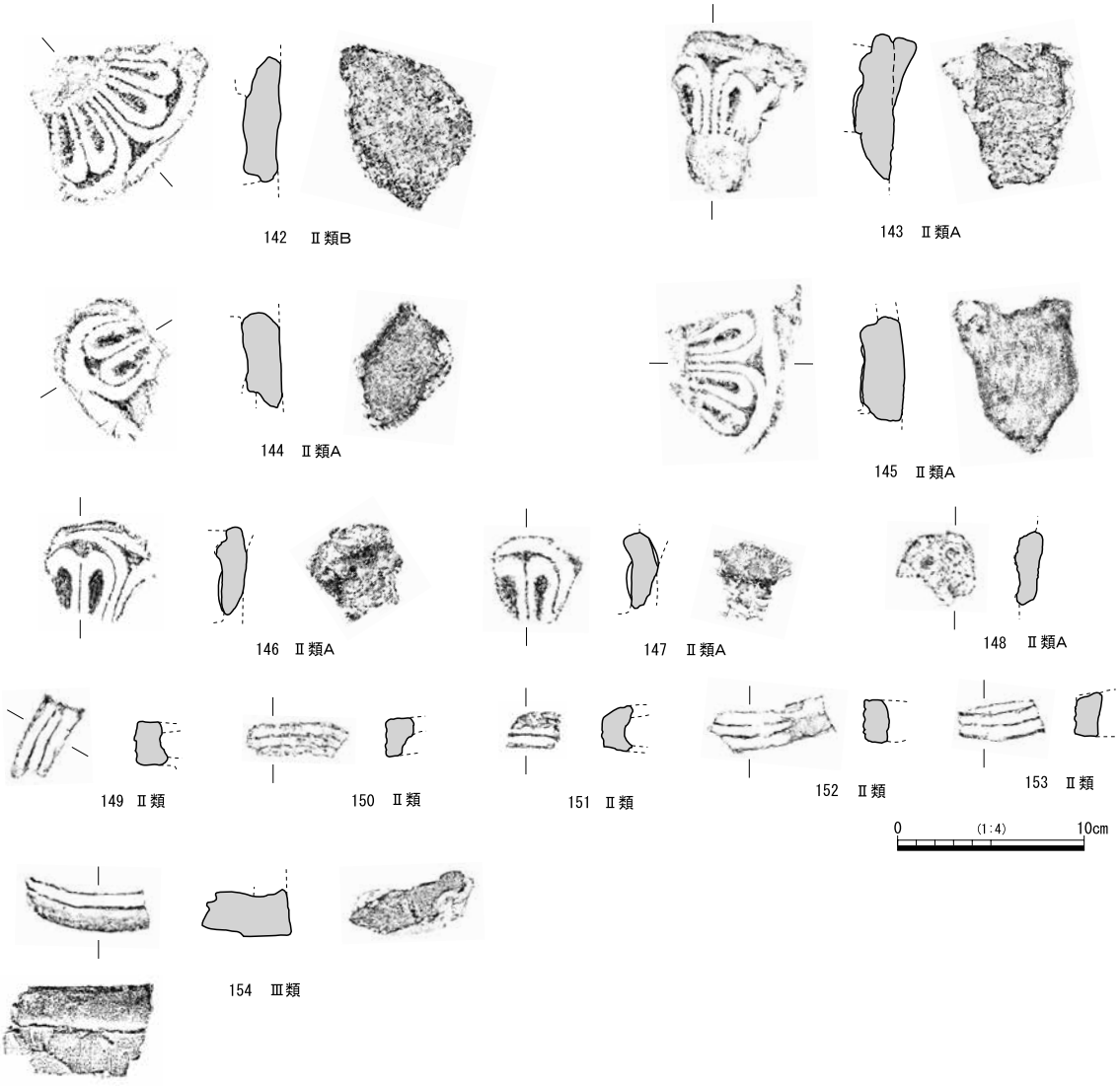


図 55　１号窯灰原出土軒丸瓦

（５）その他の遺構出土

SX01（図 56）

SX01 では、合計７点・総重量 0.7 kgの軒丸瓦が出土している。瓦が広範囲に分布する割には出土点数は少ない。細片を除き、合計６点を図示する。

155 はⅠ類である。内区と裏面は欠損しており、周縁部の瓦当表面のみ残存する。156 はⅡ類Ａの中房の破片である。全体的に風化が著しいが、中央が比較的厚いことから、技法ｂによるものと推定される。157 はⅡ類の破片であるが、Ａ・Ｂの区別はつかない。中央に向かって徐々に厚くなっていることから、技法ｂが用いられている可能性が高い。158・159 はⅡ類Ｂ２である。周縁部から丸瓦部にかけての破片であり、周縁部の圏線は完全に削られている。丸瓦接合・裏面調整はｂ技法で、凹面に刻み加工が明瞭に残る。

SD01（図 56）

SD01 では、合計２点・総重量 0.1 kgの軒丸瓦が出土している。表面の風化が著しいため図化していないが、２点ともにⅡ類Ｂ２とみられる。

SD02（図 56）

SD02 からは、合計６点・総重量 0.8 kgの軒丸瓦が出土している。溝に流れ込んだ遺物であるため、いずれも表面の風化が著しいが、このうち４点を図示する。

160 はⅡ類Ａである。内区の破片であり、丸瓦と接合粘土の剥離面が確認できる。丸瓦接合・裏面調整は技法ｂである。161 ～ 163 はⅡ類Ｂ２の周縁部の破片である。161 と 162 の周縁部の削りは不完全で、部分的に圏線が残る。いずれも丸瓦接合はｂ手法である。

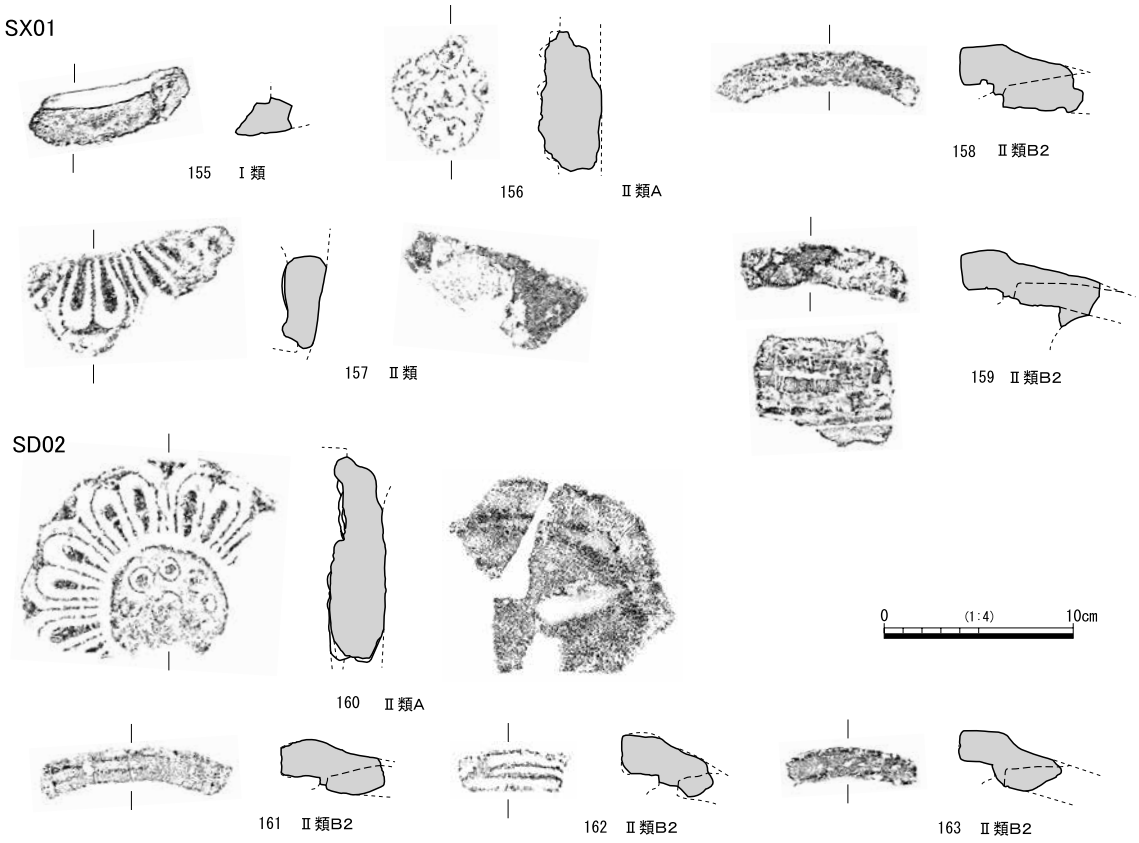


図 56　SX・SD 出土軒丸瓦

（６）包含層・表土出土

包含層や攪乱など遺構以外で出土した軒丸瓦や、表土や確認調査時に採取された軒丸瓦は、合計 23 点・総重量 4.2 kgである。瓦当が良好に残存するものや、窯跡からの出土例が少ないものを６点図示する。

164 はⅠ類である。窯の上方に広がる平坦地で、包含層の掘削中に出土している。周縁部の上半と丸瓦部を欠くが、内区についてはほぼ残存している。蓮子は全体が潰れてしまっているが、周環の存在は確認できる。丸瓦は、瓦笵を正位置から 180 度回転した位置で取り付けられている。

165・166 はⅡ類Ａの内区の破片である。165 は排土中、166 は確認調査の際に窯の周辺で採取されている。裏面調整は、165 には技法 a、166 には技法 b が用いられている。166 は瓦笵を正位置から右回りに 135 度回転した状態で丸瓦が取り付けられている。

167 はⅢ類であり、１号窯灰原の周辺で採取されている。周縁部の右上半が残存する。主に周縁部の破片であるが、内区の一部が残存する。間弁先端の幅がⅡ類Ａとほぼ一致しており、Ⅱ類Ａの改笵の可能性が伺える。丸瓦凸面の剥離痕が残っており、刻み目の転写が確認できる。

168 は窯の下方で採取されているが、瓦窯と関連するものではない。左巻の巴文軒丸瓦で、巴頭を欠いているため年代の特定は困難であるが、巴文の高まりの具合から中世のものと推定される。

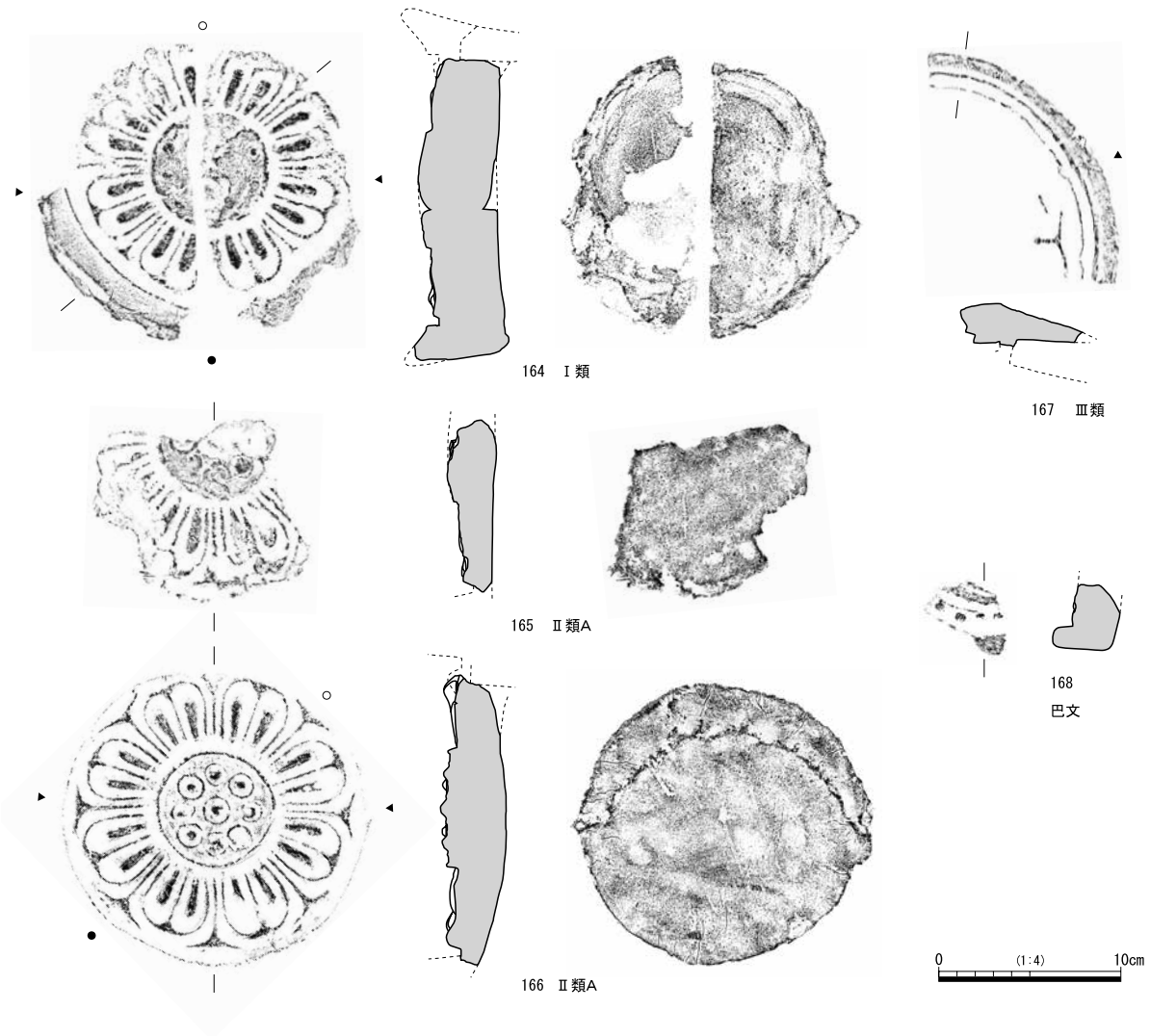


図 57　包含層・攪乱出土軒丸瓦

2　軒平瓦

軒平瓦は、細片も含めて481点、総重量207.8kg出土している。いずれの窯からも一定量の出土がみられるが、１号窯と２・３号窯とでは軒平瓦の構成に明確な違いがみられる。窯以外の遺構では、瓦集中遺構SX01から比較的まとまって出土している。また、包含層や攪乱の埋土中から出土したものや、表土や確認調査で採取されたものもある。２・３号窯出土のものは、細片であったり、表面の風化が著しく文様の判別が困難なものを除きできる限り網羅的に、多量に出土した１号窯は主に両側端も残存するものを選択して図化・掲載した。

（１）分類

出土した軒平瓦を瓦当文様の様式からⅠ～Ⅳ類に分類し、細部の文様の違いによりさらに細分した。

Ⅰ類　　重孤文軒平瓦。弧線は櫛歯状の型による型挽きである。顎は貼り付け段顎で、円筒の状態での施文後に分割されている。弧線の数により２つに細分される。

Ⅰ類Ａ　四重孤文の軒平瓦。弧線は太く、断面形がやや丸みを帯びる。凹線は幅広で、下面に平坦面をもつ。瓦当の幅は24～25㎝である。瓦当側面の調整は、全体を凸面側に深く削るものが大半である。凹面は四側縁に面取りが施されるが､全体としては部分的にナデ調整が施される程度で布目が多く残る。顎部の長さは、６～８㎝とややばらつきはみられるが、７㎝前後のものが多い。

Ⅰ類Ｂ　五重孤文の軒平瓦。弧線は幅が狭く、上面に平坦面をもつ。凹線の幅は狭く、断面が丸い。瓦当の幅は､両側端の残存する資料が少ないが､30㎝前後と広い。瓦当側面は､凸面側に深く削っているが､削りが凹面側に達していないものが多い。顎面の施文などの違いから２種に細分される。

Ｂ１　顎面が無文のもの。凹面には前面にナデ調整が施される。顎部の長さは７～８㎝で、段部はナデ調整でやや窪み気味に仕上げられる。

Ｂ２　顎面に櫛描きの波状文が施文されるもの。凹面は側端に浅い面取り調整は施されるが、全体はほぼ無調整で布目が残る。顎部の長さは７㎝前後であり、段部の接合部側が溝状に大きく窪む。窪みの断面は半円形で、平瓦との接合に先端の丸い棒状の工具が用いられたものと推測される。

Ⅱ類　　連珠文軒平瓦。凸線を二重に巡らす廓線内に、周環をもつ10個の珠文が横一列に配される。軒平瓦では、唯一笵型が使用されている。瓦当の幅は30㎝である。顎は貼り付け段顎で、長さは５～７㎝。側端面は、廓線に合わせて凸面側を削り、凹面側に面取りを施す。施文が分割前か後かは、出土点数も少なく断定できる最良がない。凹面は瓦当側と両側端に浅い面取りが施されるが、全体はほぼ無調整で布目が残る。凸面には全面ナデ調整が施されているが、部分的に縦縄叩きの痕跡が残る。

Ⅲ類　　竹管文軒平瓦。竹管により珠文や弧線が描かれている。顎は貼り付け段顎で、ほとんどが剥離した顎部のみの破片である。一般的な軒平瓦とは異なり、瓦当面が狭端側に設けられている。珠文は１点１点施文されており、間隔にはばらつきがある。珠文の径が明らかに異なるものがあることから、複数の施文具の存在が想定できる。文様の構成により３種に細分される。

Ⅲ類Ａ　弧線の下に、竹管による珠文が横一列に配されるもの。明確に瓦当上半と認識できるものが出土していないため、上半の文様については不明である。弧線は断面形が半円形で、半裁竹管による施文である。瓦は施文後に分割されており、側端で半裁されている珠文が確認できる。瓦当の幅は24～25㎝である。瓦当の側端は、凸面側に深く削るものと分割面と平行に削るものとがある。顎部の長さは６～７㎝で、段部はナデ調整により窪み気味になっており、強いナデにより端部が飛び出すものもある。

Ⅲ類Ｂ　上下に２列の珠文が配されるもの。１点のみではあるが、瓦当の上下端が残存するものが出土しており、確実に存在が認識できる。上段の珠文は平瓦部のほぼ中央に、下段は顎部の平瓦部との境付近に配される。上下段の珠文は、縦にほぼ位置を揃えて配される。顎部のみの破片については、弧線がなく、珠文が顎の上端付近に配されているものをＢとする。瓦当の幅は 24 ㎝で、側端は凸面側に深く削り、凹面側を面取りする。瓦の分割は施文後で、顎の長さや形状はＡと同様である。
Ⅲ類Ｃ　瓦当の中央に１本の弧線のみが描かれるもの。Ⅲ類Ａの珠文を省略した文様とみてよい。瓦当幅は 24 ㎝で、側端は凸面側にやや深く削る。顎の長さや形状はＡと同様である。出土点数は少ない。

Ⅳ類　　無文軒平瓦。瓦当には文様が施されていないが、顎が形成されていることから軒平瓦として認識できる。Ⅲ類と同様に、瓦当が狭端側に設けられている。凹面は両側縁に浅い面取りを施すが、全体は無調整で布目が残る。瓦当の幅は 23 ～ 25 ㎝で、側端は凸面側にやや深く削る。顎は貼り付け段顎で、長さは６～７㎝である。Ⅳ類は無文であることを除くと、大きさや形状、狭端部に瓦当が設けられる点などⅢ類と共通する要素が多い。基本的にはⅢ類の省略形とみてよい。

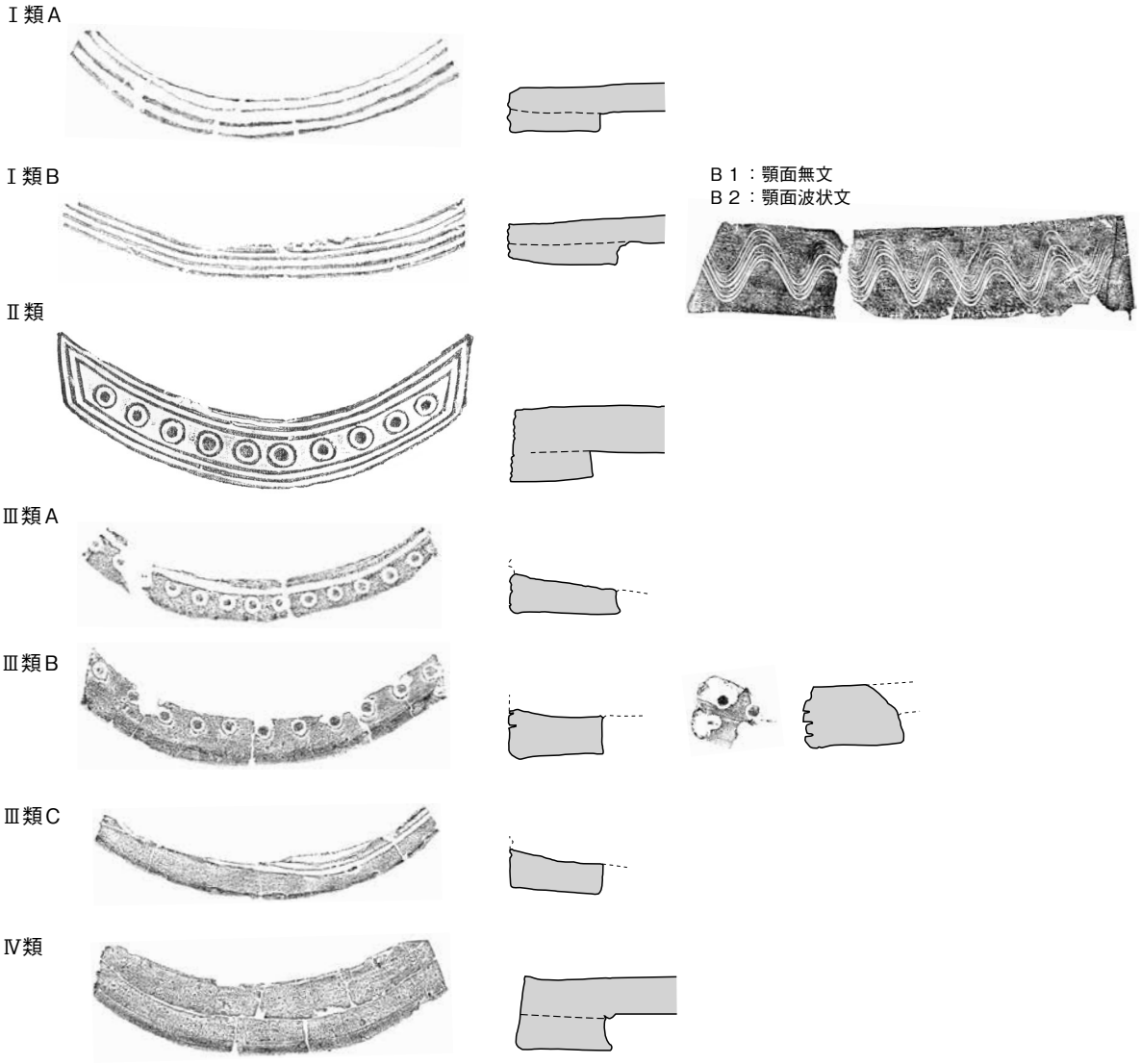


図 58　軒平瓦の分類

（2）３号窯出土

３号窯窯体内（図 59 ～ 65、図版 17・54 ～ 56）

３号窯の窯体内では、他の瓦と折り重なる状態で床面から合計 20 点・総重量 27.4 kgの軒平瓦が出土している。このうち 15 点を図示する。

Ⅰ類Ａ　169 ～ 175 はⅠ類Ａである。凸面は全面ナデ調整が施され、叩き目は残らない。凹面は側縁には面取りやナデ調整が施されるが、それ以外は部分的にナデ調整が施される程度であり、広い範囲に布目が残る。側端は凸面側に深く削る。いずれも平瓦部には、平瓦Ⅱ類が使用されている。

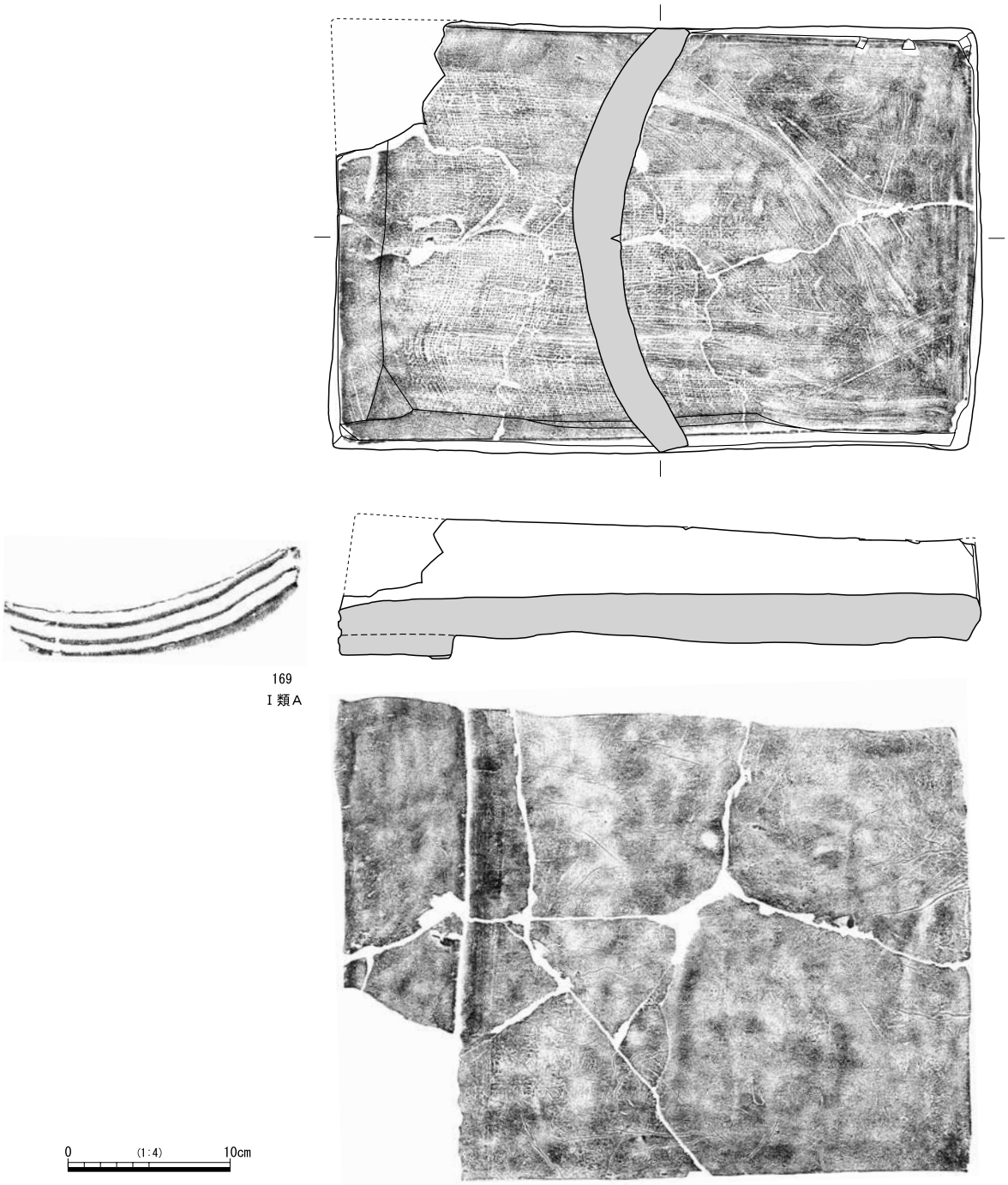


図 59　３号窯窯体内出土軒平瓦（１）

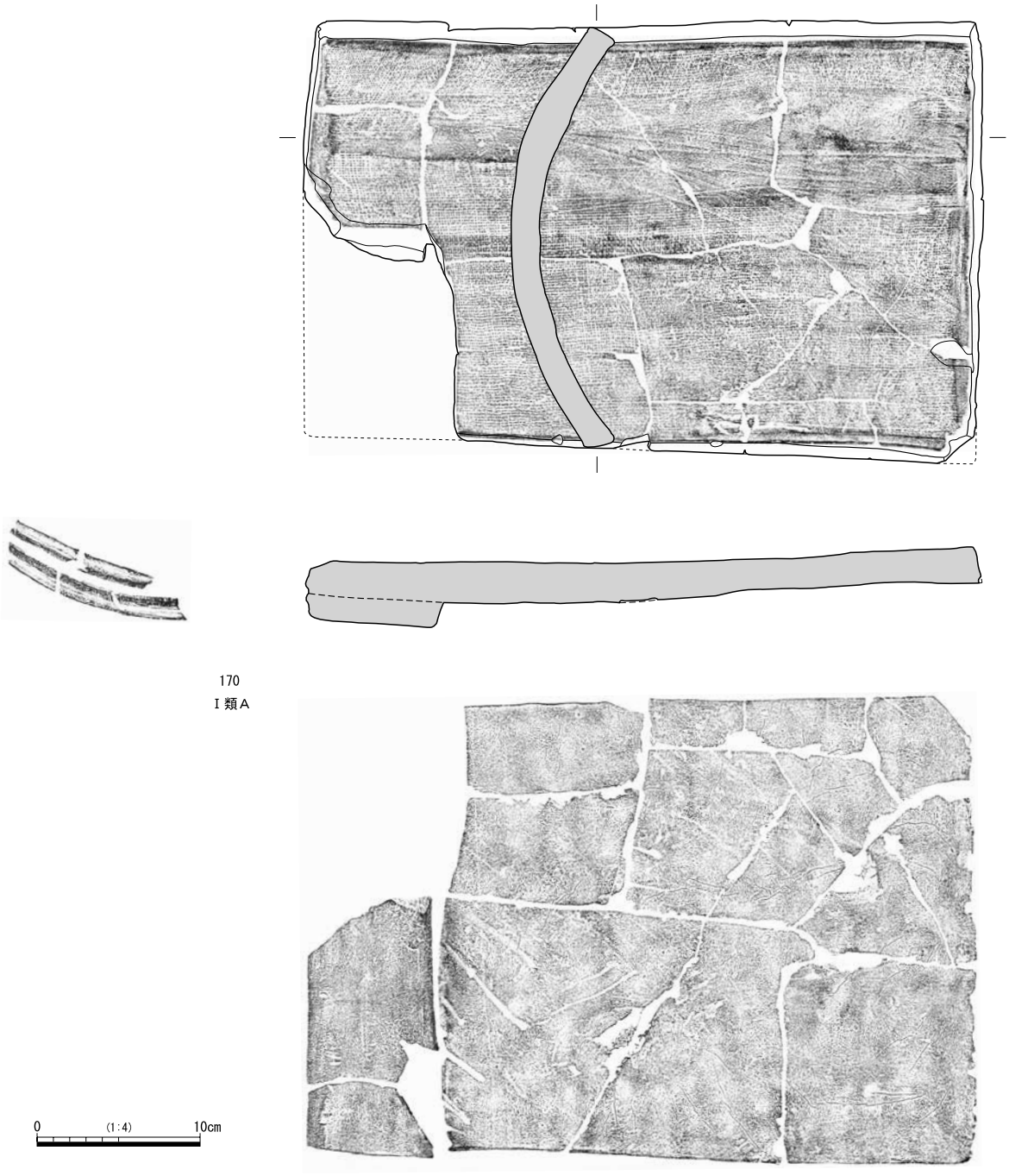


図 60　３号窯窯体内出土軒平瓦（２）

169・170 は、瓦当を一部欠くがほぼ全体の形状が把握できる。側端付近では弧線がずれて三重孤文のようになっている。凹面は狭端側がやや広めにナデ調整されている。170 は凹面のナデ調整がより限定的である。粘土板の接合痕が残っており、合わせ目はＺ型である。

171 ～ 175 は、瓦当から平瓦部にかけての破片であり、171 ～ 174 には両側端が残存する。いずれも平瓦部の大半を欠いているが、凹面には面取り調整されている側縁部を除き布目が残る。171 は側端付近の瓦当の高さが低く、弧線の数が減っている。凹面には布綴じ痕が確認される。顎面には、斜格子文

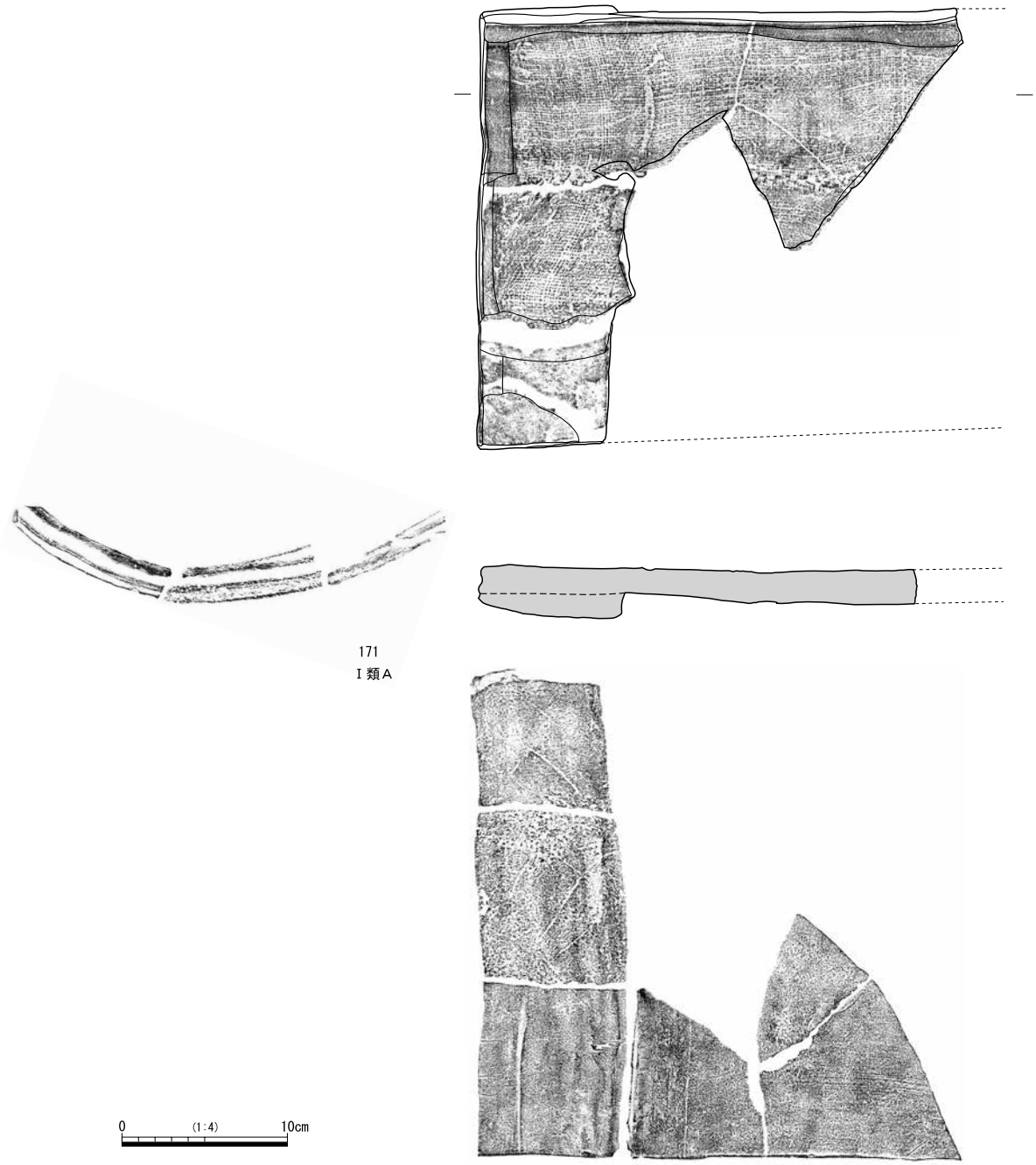


図 61　３号窯窯体内出土軒平瓦（３）

のようなヘラ書きが残る。斜線の配置は雑で、間隔にもばらつきがあるため、文様として意識して施されたものかどうかについては判然としない。172 の顎の段部には、平瓦部にまで至っている段部整形時の截断線が残る。173 には、凹面に布綴じ痕があり、縫い目等からみて 171 と同一の布綴じ痕である。174 には平瓦部が剥離した状態で顎部が残存するが、顎の剥離面には刻み等の加工は認められない。また、部分的ではあるが瓦当面や顎面の表面に、３号窯窯体内から出土した軒丸瓦Ⅱ類と同様の赤色付着物の存在が認められる。

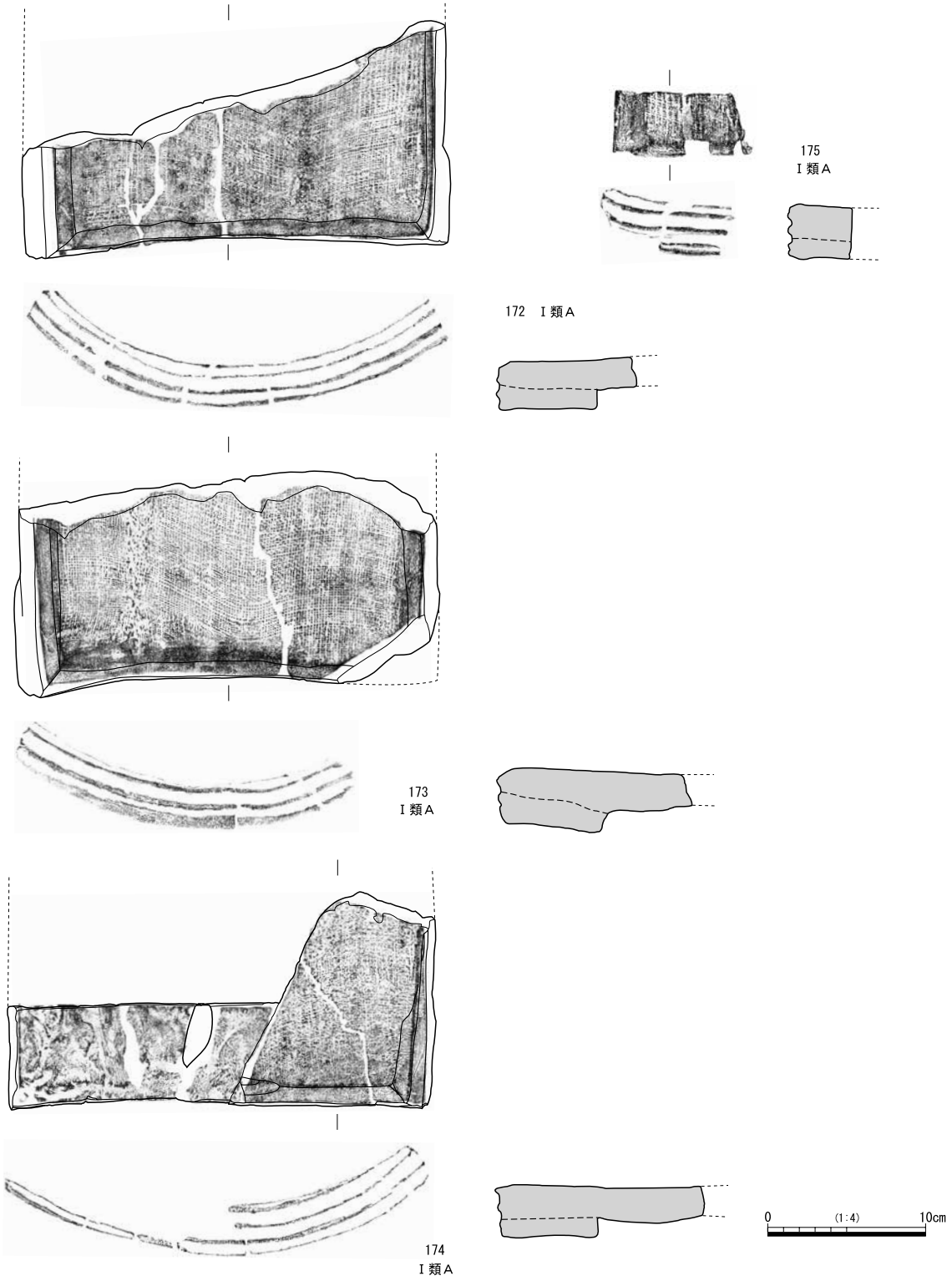


図 62　３号窯窯体内出土軒平瓦（４）

Ⅰ類Ｂ１　176 ～ 183 はⅠ類Ｂ１である。凹凸面ともに全面ナデ調整が施されている。側面調整は、凸面側に深く削るものと分割截面と平行に削るものとがある。瓦当の幅は 32 ～ 33 ㎝程あり、Ⅰ類Ａと比べると大型である。平瓦部には平瓦Ⅰ類Ａが使用されている。

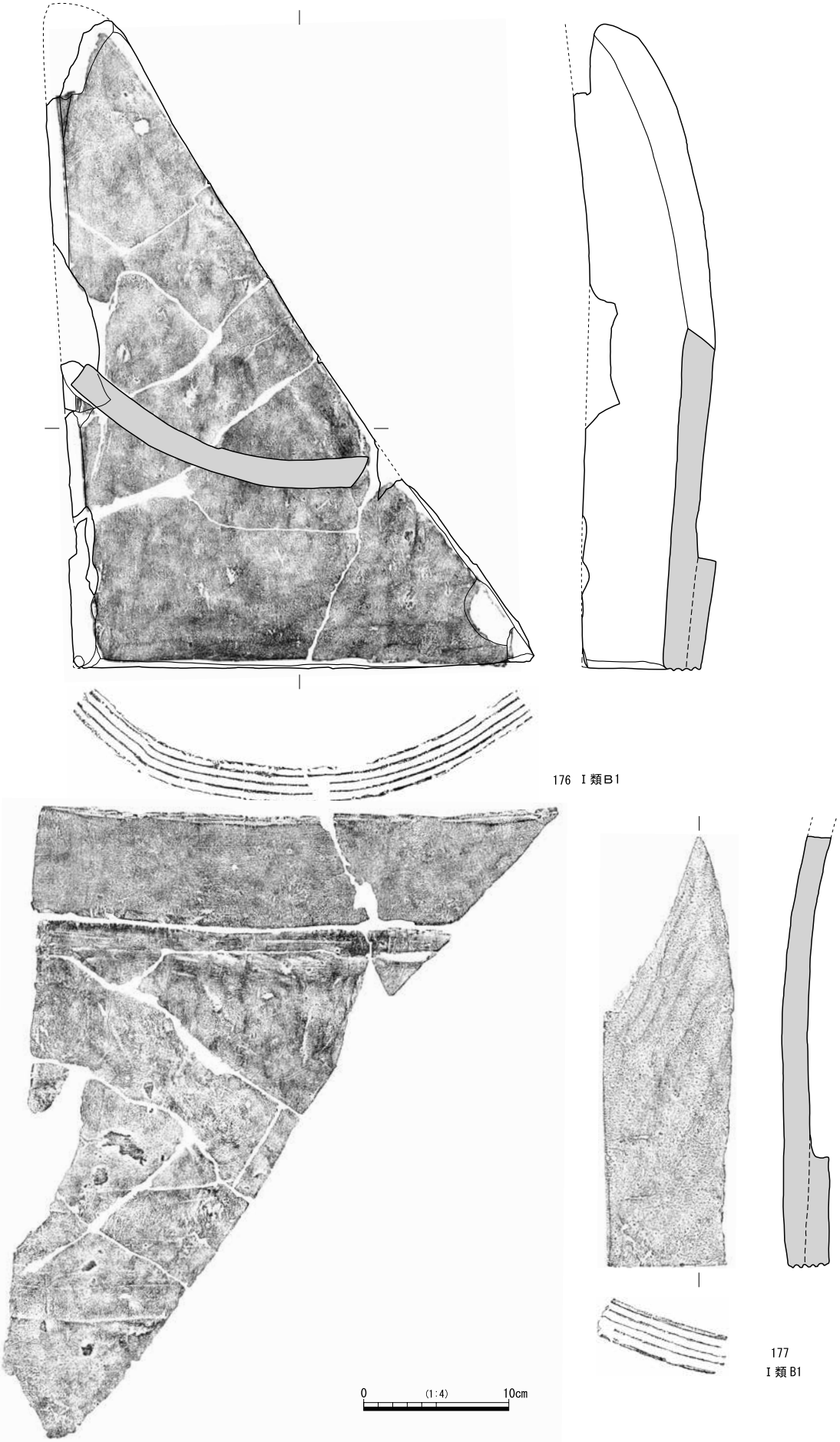


図 63　3号窯窯体内出土軒平瓦（5）

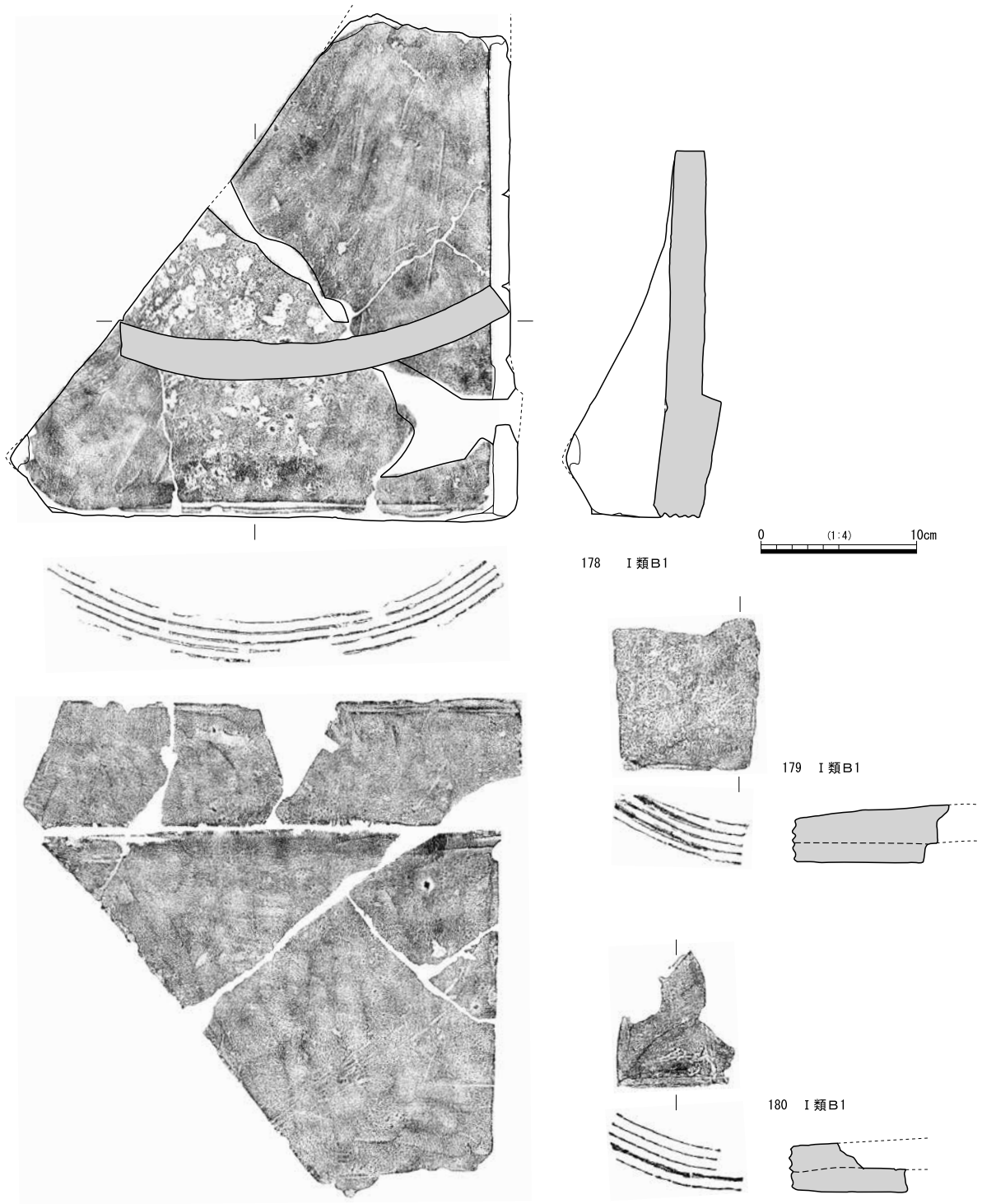


図 64　３号窯窯体内出土軒平瓦（６）

176 は隅軒平瓦であり、瓦当右側から斜めに截断されている。平瓦部を一部欠くがほぼ完形である。瓦当左側で弧線の位置に段差が確認できる。側面は分割截面に平行して削り調整されている。177 は焚口付近から出土しており、窯体内の床面から出土してものは別に扱うべきかもしれない。床面から出土した他の軒平瓦とは異なり硬質の焼き上がりである。

178 は隅軒平瓦である。瓦当左側を小さく切り落とし、右側へ斜めに大きく截断している。瓦当の残存状況は良好で、弧線が明瞭に残る。側面は分割截面に平行して削り調整されており、顎部付近に破面

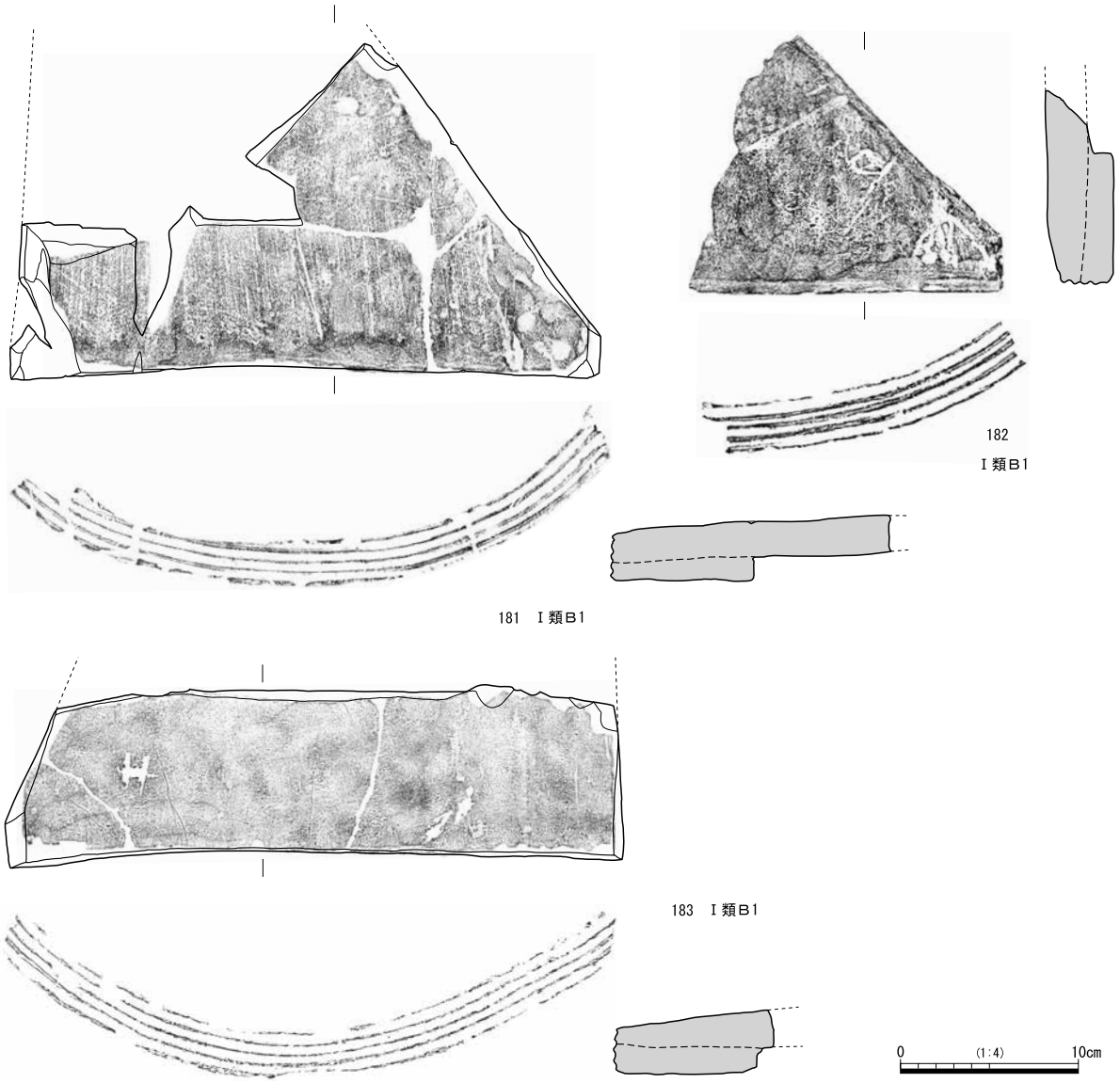


図 65　３号窯窯体内出土軒平瓦（７）

のような凹凸が残る。180 は瓦当から顎部にかけての破片である。瓦当には弧線の重複が確認される。側面は顎部のみ凸面側を深く削る。

180 ～ 183 は瓦当から顎部にかけての隅軒平瓦の破片である。181 と 183 は両側端が残存する。180 と 183 は瓦当左側から、181 と 182 は瓦当右側から斜めに截断されている。凹面は基本的に全面ナデ調整であるが、181 にはナデ残し部分に布目が残存する。瓦当が薄い部分は、上端と下端の弧線の欠損がみられる。183 の凹面側端には、ヘラ状の工具によるＨ形の刻線が残る。ヘラ記号のようなものの可能性もあるが、篠場瓦窯では他に類するものが出土しておらず、意図して付けられたものかどうかはっきりしない。偶発的についたものである可能性も考えられる。180 の側面には、瓦当から２㎝程入った場所に分割破面が残る。分割截面はわずかしか残らないが､凹面側から入れられている様子が確認できる。側面調整は、180 が顎部のみを凸面側に深く削り、181 は左側は 180 と同じであるが右側は全体を凸面側に深く削る。182 は分割截面と平行に、183 は全体を凸面側に深く削っている。３号窯窯体内のⅠ類Ｂ１に関しては、側面調整に複数の方法がみられるが、隅軒平瓦が多数を占めている点を考慮する必要があるかもしれない。

３号窯灰原（図 66 ～ 68、図版 17）

３号窯灰原からは合計 92 点・総重量 19.0 kgの軒平瓦が出土している。このうち 29 点を図示する。

Ⅰ類Ａ　184 ～ 190 は、Ⅰ類Ａの瓦当から顎部の破片である。186 と 189 の凹面は風化が著しく観察できないが、ほかは側縁部を面取りする以外無調整で布目が残る。184 と 188 には側面が残存しており、ともに側面調整は全体を凸面側に深く削る。185 には顎段部の位置に平瓦部に截断面が残る。この状態では長さがあまりにも短く、軒平瓦としての機能は想定できない。截断面の位置が顎段部と一致していることから、段部の整形時に截断面が部分的に深く入り過ぎたものと推定される。

Ⅰ類Ｂ１　191 ～ 207 はⅠ類Ｂ１の破片である。凹凸面ともに全面ナデ調整で、196 と 197 の凹面にはナデ残しの部分に斜め方向の縄叩き痕がかすかに残る。191 ～ 199 は側端面が残る破片である。側面調整は、いずれも凸面側に深く削っているが、192・194・198 は凸面側 1/2 ～ 2/3 程度で全面には至らない。191 は両側端が残る破片である。瓦当幅は 28 ㎝で、３号窯窯体内の隅軒平瓦に比べるとやや小さい。192 と 194 には顎段部から少し離れた位置に切り込みがあり、194 では深さが凹面付近にまで及んでいる。また 199 は段部が２段となるような形状である。これらは 185 と同様に、顎段部を形成する際の調整ミスにより生じたものとみてよい。196 と 197 の顎の剥離面には斜め方向の縄叩きの痕跡が残っており、顎の貼り付け後に凸面調整が行われていることが分かる。200 は側端の残らない瓦当の破片である。201 ～ 207 は剥離した顎部の破片であり、剥離面に刻み等の加工痕はみられない。

Ⅰ類Ｂ２　208 ～ 210 はⅠ類Ｂ２の破片である。顎面には波状文が施されており、凹面には布目が残る。波状文は側端部にまで至っており分割前の施文である。209 と 210 の顎部の接合面には、瓦当と直交する方向のハケ目が残る。３号窯灰原から出土したⅠ類Ｂ２はこの３点のみである。Ⅰ類Ｂ２は点数も少なく、いずれも２号窯の前面にあたる位置で出土していることから、２号窯からの混入品の可能性がある。

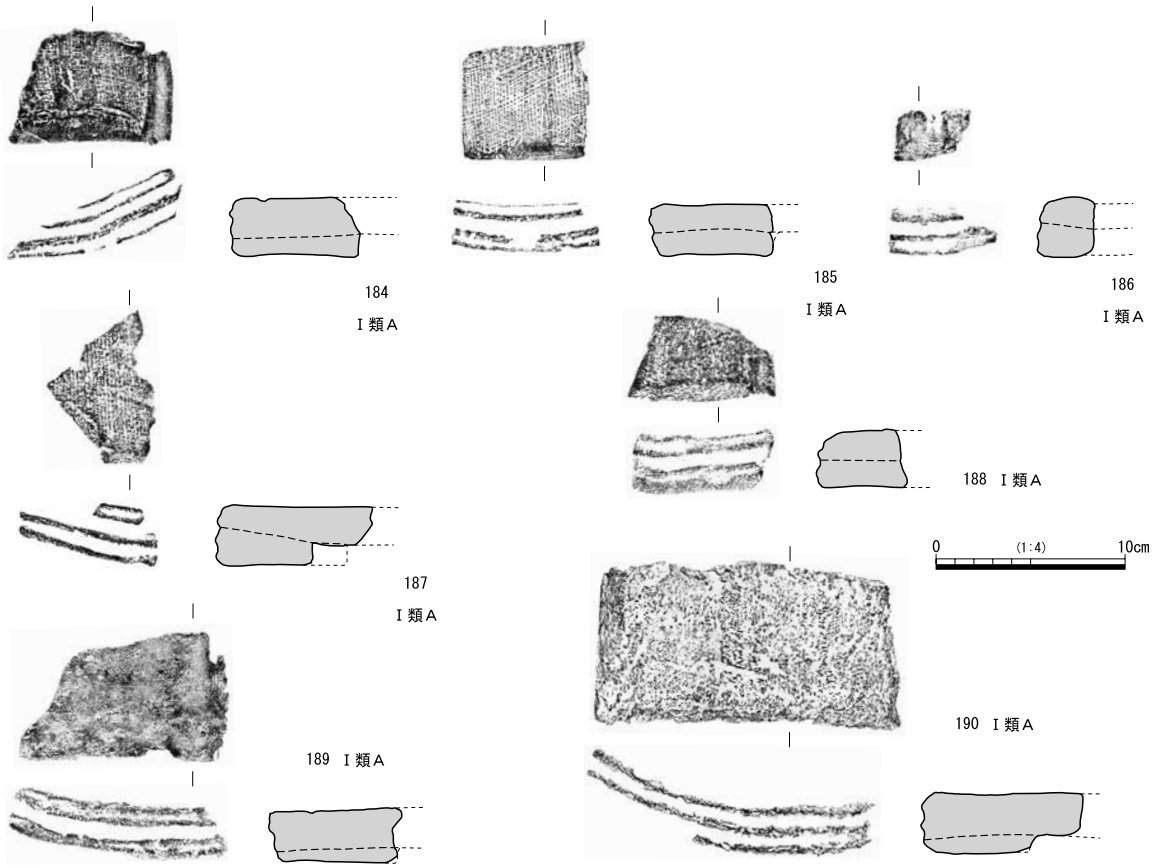


図 66　３号窯灰原出土軒平瓦（１）

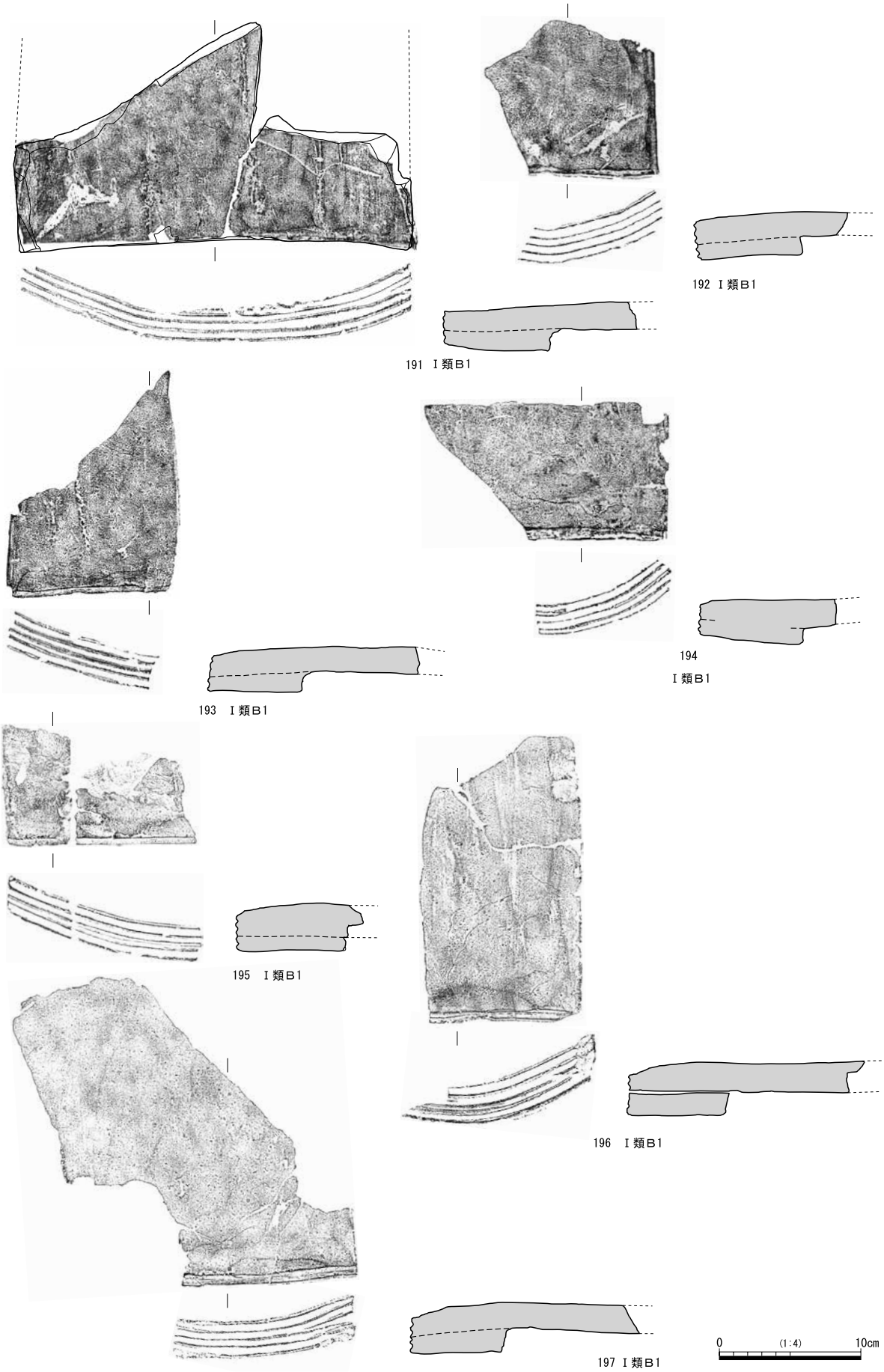


図 67　3号窯灰原出土軒平瓦（2）

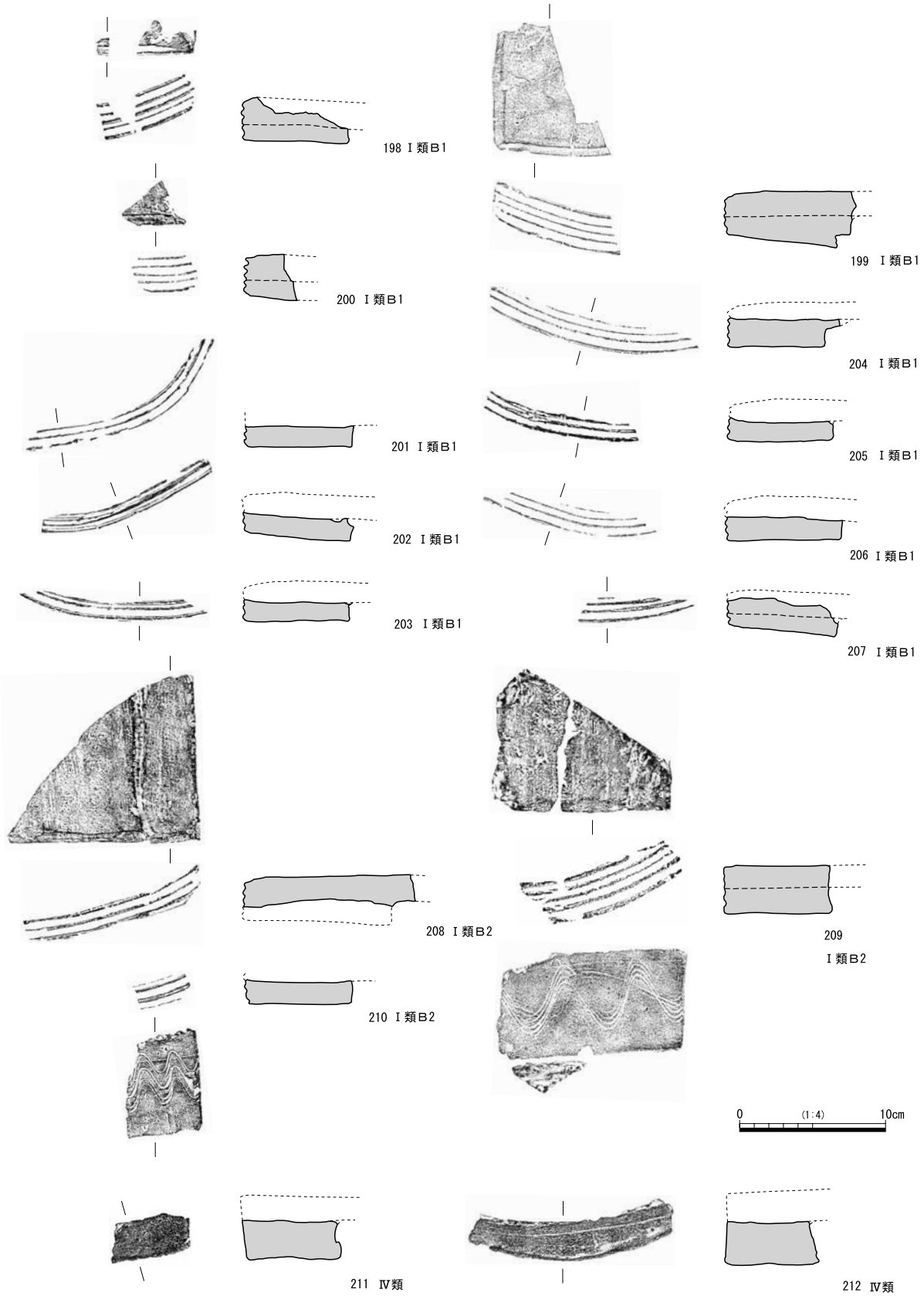


図 68　３号窯灰原出土軒平瓦（３）

Ⅳ類　211・212 はⅣ類である。ともに剥離した顎部で、剥離面に刻み等の加工は確認できない。３号窯灰原で出土したⅣ類はこの２点のみであり、窯から 40m 以上離れたＥ区から出土している。

（3）２号窯出土

２号窯窯体内（図 69 ～ 73、図版 24・54・57）

２号窯窯体内からの軒平瓦の出土は少なく、合計 11 点・総重量 19.1 kgである。瓦当がほとんど残らない４点の小片を除く７点を図示する。

Ⅰ類Ａ　213 ～ 217 はⅠ類Ａである。表面の風化が激しいものもあるが、凹面は側縁部を浅く面取りスルホかはほぼ無調整で、全体に布目が残る。凸面は全面ナデ調整で、叩き目は残らない。側面調整は、全体を凸面側に深く削っている。213 は両側端の残る破片である。瓦当幅は 25 ㎝で、瓦当がやや薄く左側では弧線が減り三重孤になっている。顎の長さは７㎝で、接合時の強いナデ付けにより段部との境の平瓦部が溝状に窪んでいる。214 ～ 215 は片方の瓦当側端が残る破片である。214 は瓦当を半分ほど欠くが、平瓦部は比較的多く残る。全体的に風化が激しく、表面の観察できない部分が多い。瓦当幅は約 25 ㎝に復元される。粘土板の合わせ目があり、合わせ目はＺ形である。215 ～ 217 は、瓦当の厚さが 2.5

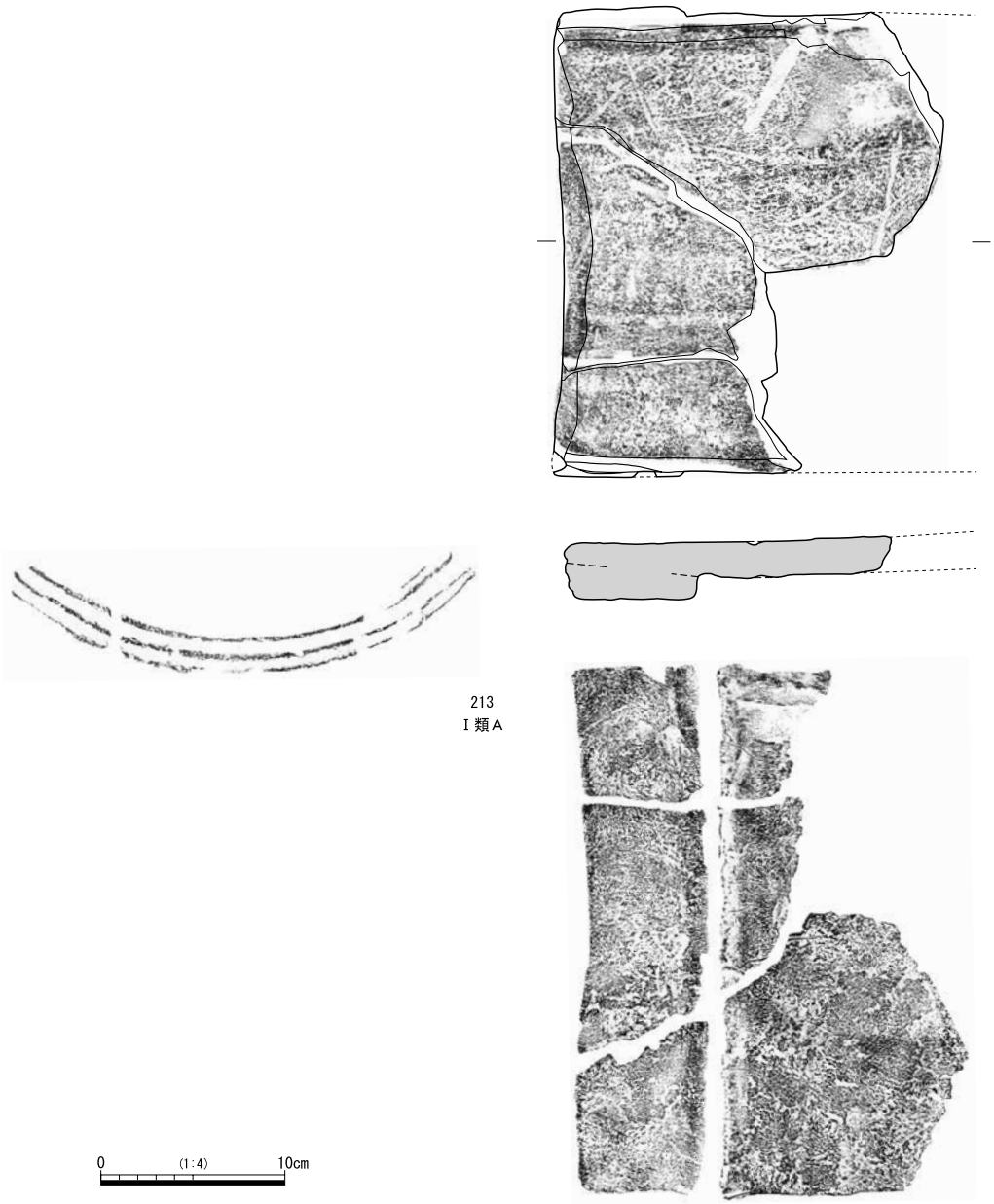


図 69　２号窯窯体内出土軒平瓦（１）

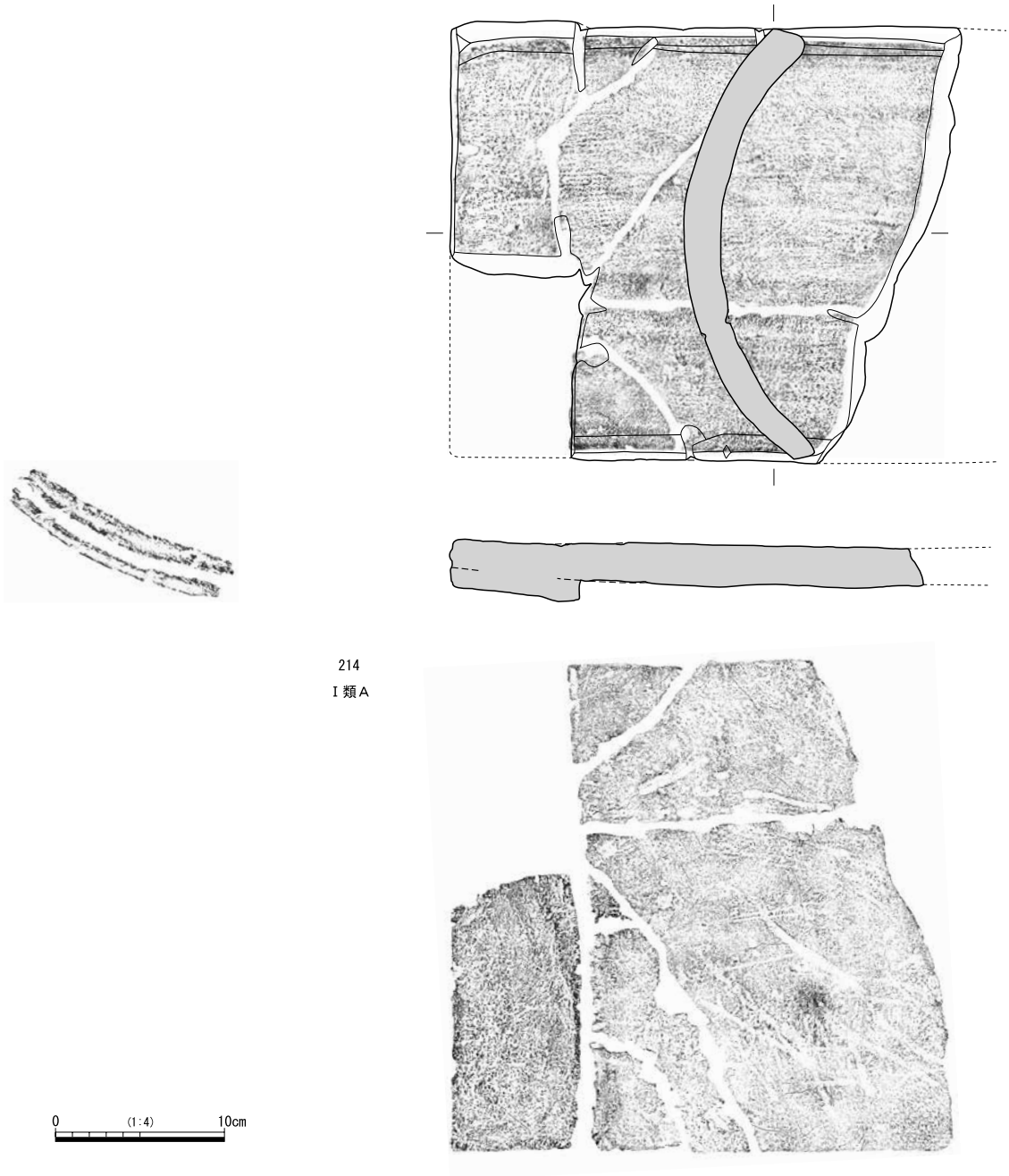


図 70　２号窯窯体内出土軒平瓦（２）

cmと薄く、上下端の弧線はほとんどない。215 には顎の剥離面が残っており、叩き目の痕跡はみられるが、刻みなどの加工痕は認められない。216 は硬質の焼成であり、広範囲が灰被りしている。破片の断面が被熱しており、窯壁とみられる焼土が付着していることから、窯の構築材と二次転用されていたものと推測される。

Ⅱ類　218 と 219 はⅡ類である。ほぼ完形で、破片のほとんどは焼成室の床面から出土している。２号窯の最終焼成時の瓦とみてよい。側面は廓線に合わせて凸面側を深く削り、凹面側にも削り調整が施される。平瓦部は、凹凸面のナデ調整はやや異なるが、縦縄叩きである点や規模などからみて、平瓦Ⅳ類Ｂが用いられている。218 は硬質の焼きで残存業態も良好である。前庭部から出土した小破片とも接合しているが、小破片は埋没過程で窯から流出したものであろう。破片の断面にも灰被りがみられるこ

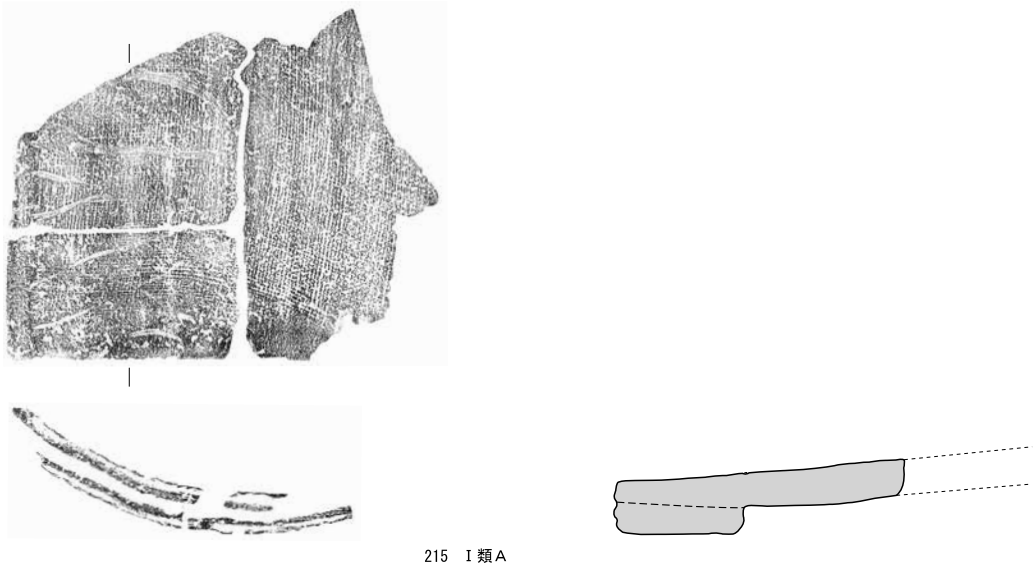


図 71　２号窯窯体内出土軒平瓦（３）

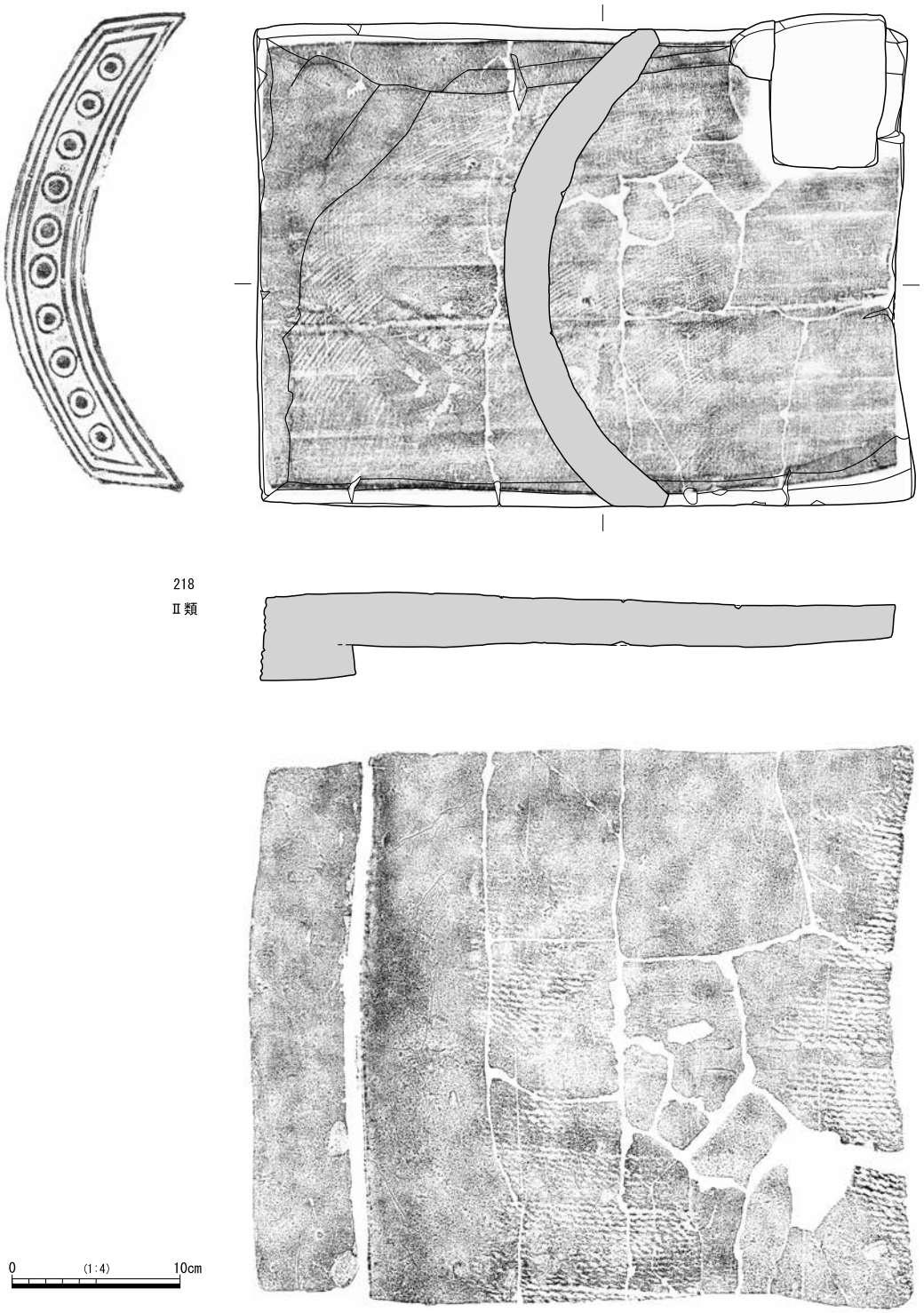


図 72　２号窯窯体内出土軒平瓦（４）

とから、焼成中に破砕している可能性が高い。凹面狭端側には、須恵器の壺の破片が融着している。凹面は、瓦当側縁と左右側縁が面取りされるほかは、部分的に軽いナデ調整が施される程度であり、大部分に布目と糸切り痕が残る。中央少し右側には、分割突帯とみられる窪みが残る。凸面は基本的に全面横ナデ調整であるが、やや雑でナデが及んでいない範囲が広い。ナデ残しの部分には、縦方向の縄叩きが残る。顎の長さは 5.4 ㎝である。219 はやや軟質で、凹面はやや風化が進んでいる。218 とほぼ同じ

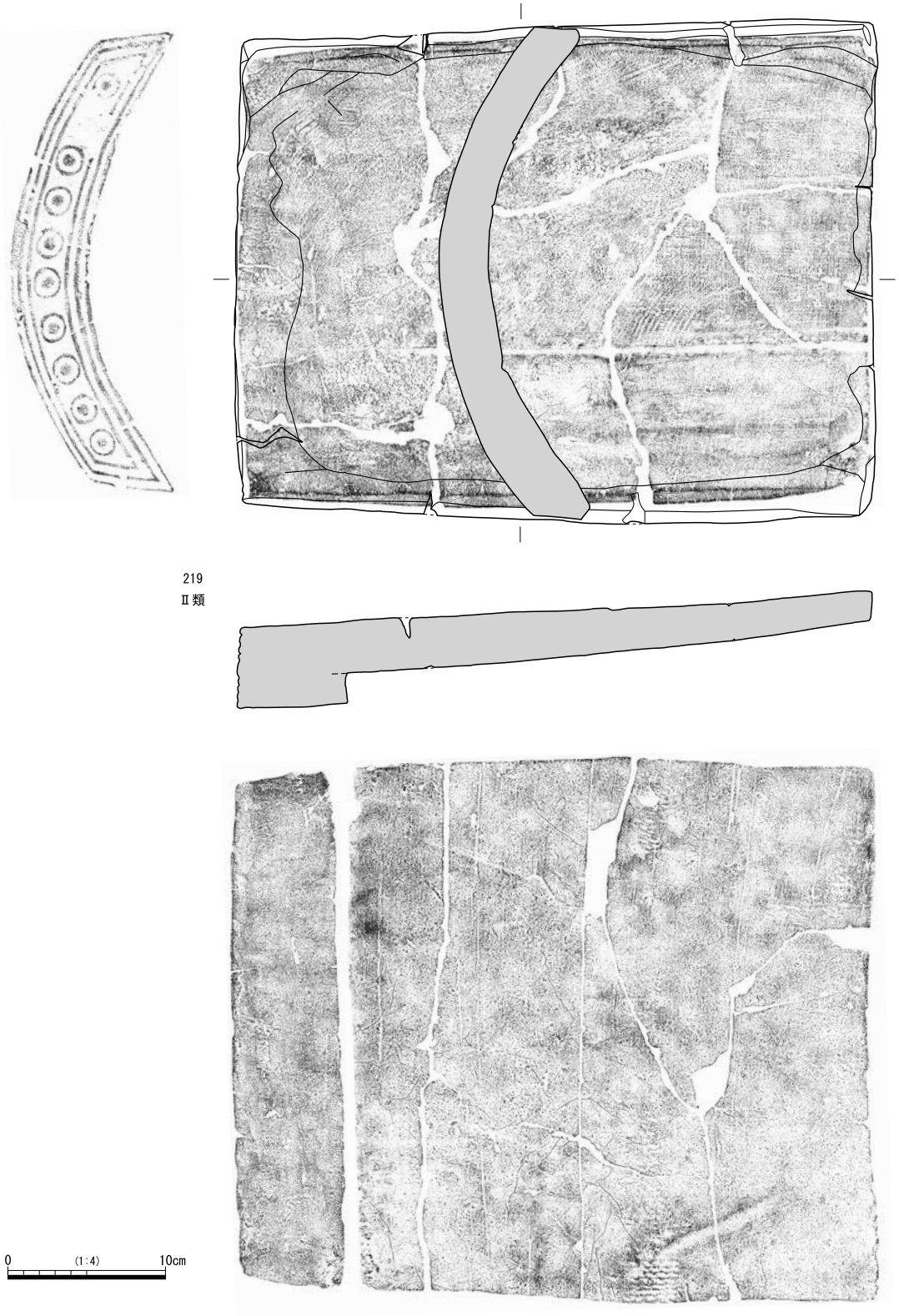


図 73　２号窯窯体内出土軒平瓦（５）

つくりであるが、凹凸面のナデ調整が広範囲に及ぶ。わずかではあるが、凸面に縦方向の縄叩きが残る。凹面には 218 と同様に中央やや右側に分割突帯とみられる窪みが残る。顎の長さは７㎝で 218 よりも長い。

２号窯灰原（図 74 ～ 76、図版 24・54・57・58）

２号窯灰原からは、合計 42 点・総重量 15.1 kgの軒平瓦が出土している。瓦当の残らない細片が大半であるが、瓦当の残存するものを中心に 17 点図示した。

Ⅰ類Ａ　220 ～ 224 はⅠ類Ａである。220 ～ 222 は瓦当の左側端、223 と 224 は右側端が残る。いずれも凹面は、側縁を面取りするほか無調整で布目が残る。220・221・224 は瓦当の厚さが 2.5 ㎝程しかなく、三重孤文のようになっている。222 に至っては、瓦当の厚さが 1.7 ㎝しかなく、弧線は２本しかない。側面調整は凸面側を深く削り、223 は凹面側にも削りを施している。

Ⅰ類Ｂ１　225 と 226 はⅠ類Ｂ１である。ともに表面の風化が激しいが、凹面は全面ナデ調整で布目は確認できない。顎段部はナデ調整により中心が少し窪んでいる。225 の破片には窯壁が焼土が付着していることから、構築材として使用されていたものと推定される。

Ⅰ類Ｂ２　227 ～ 232 はⅠ類Ｂ２である。額面には櫛描波状文が施されており、側端で切られていることから円筒の状態での施文されていることが分かる。顎段部には、平瓦部との境に溝状の

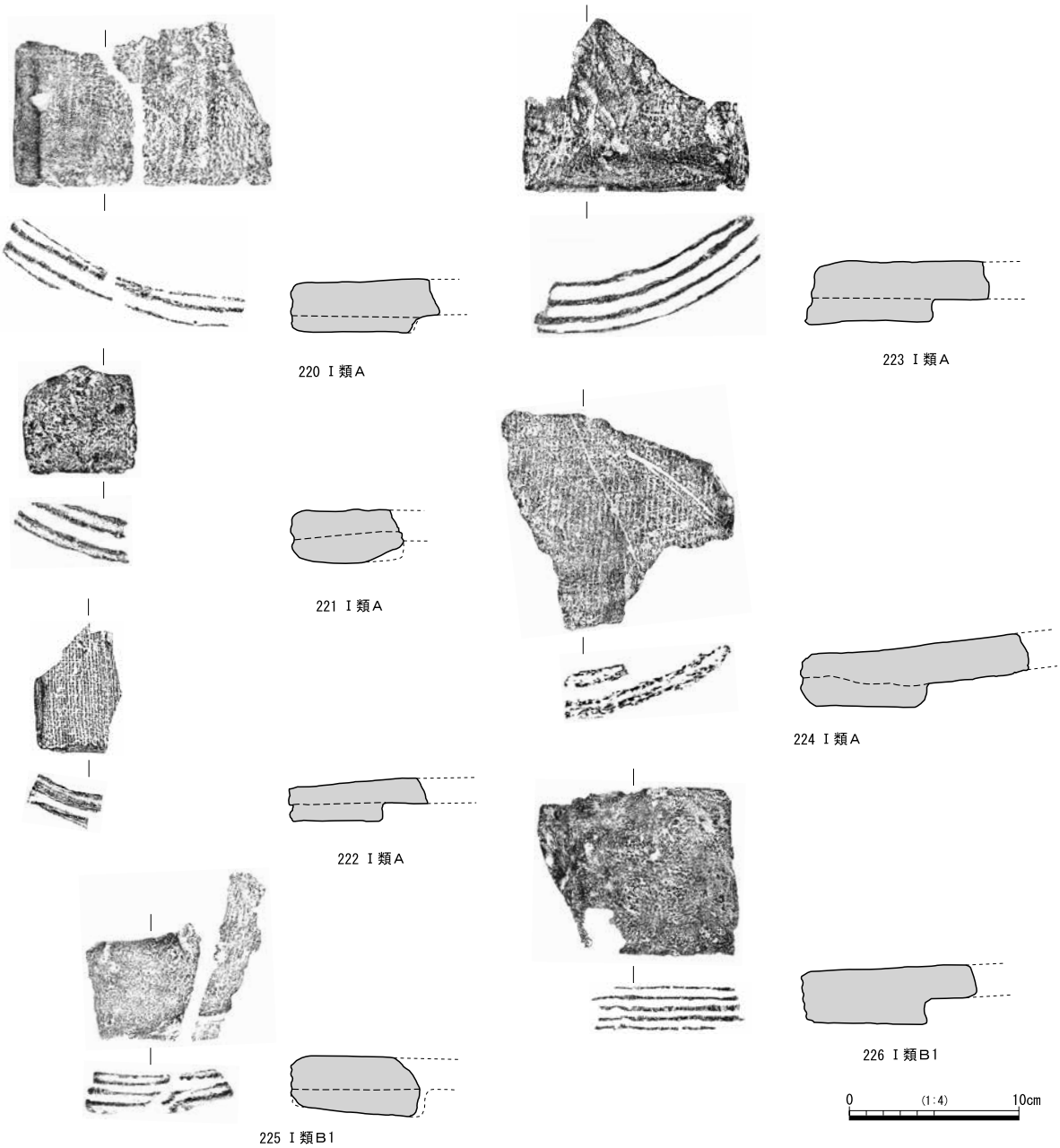


図 74　２号窯灰原出土軒平瓦（１）

窪みが残る。瓦当の側面は、顎部を凸面側に深く削る。227は瓦当から平瓦部にかけての破片である。平瓦部の凸面は全面ナデ調整であるが、わずかに斜め方向の縄叩きの痕跡が確認できる。凹面は側

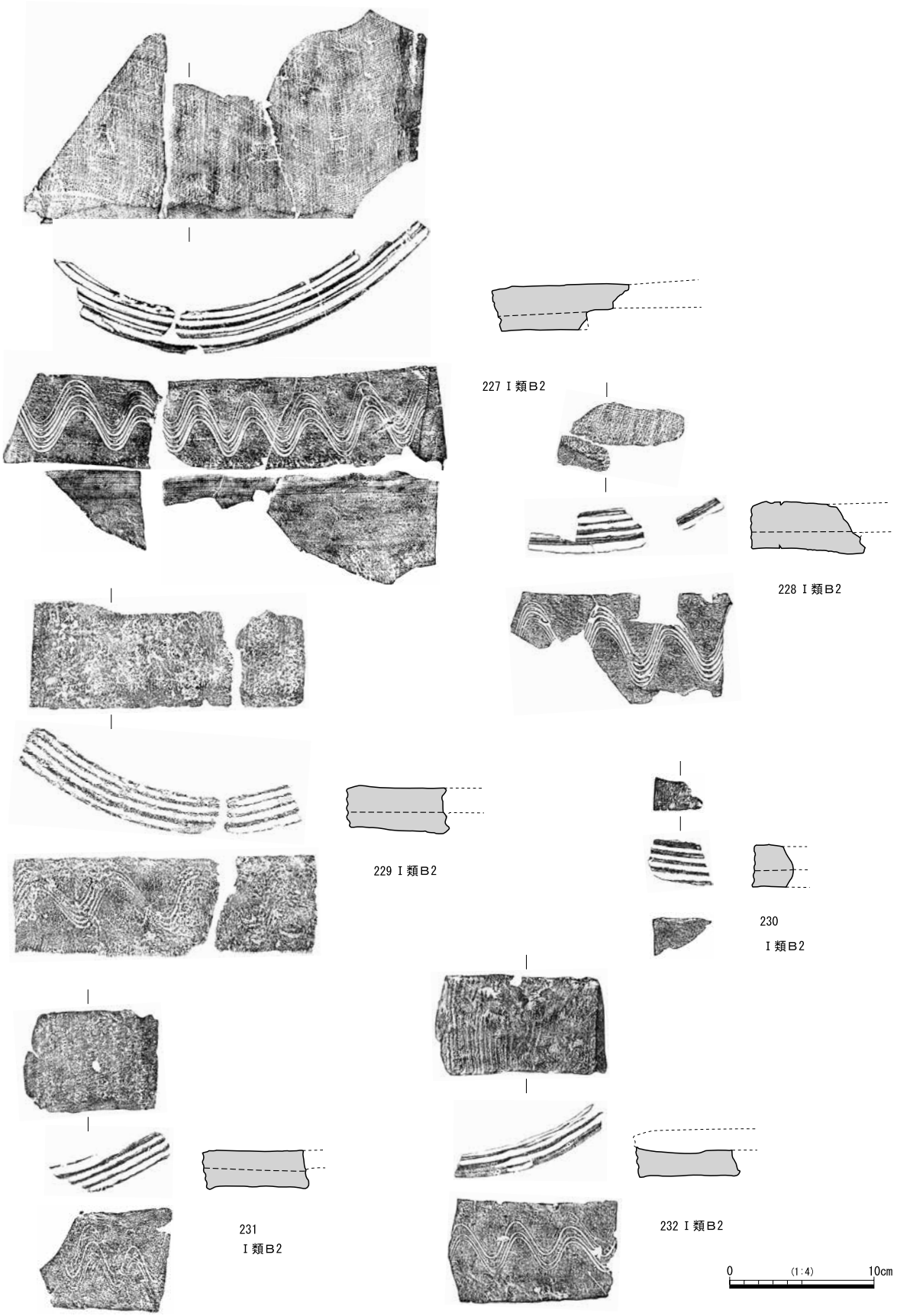


図75　2号窯灰原出土軒平瓦（2）

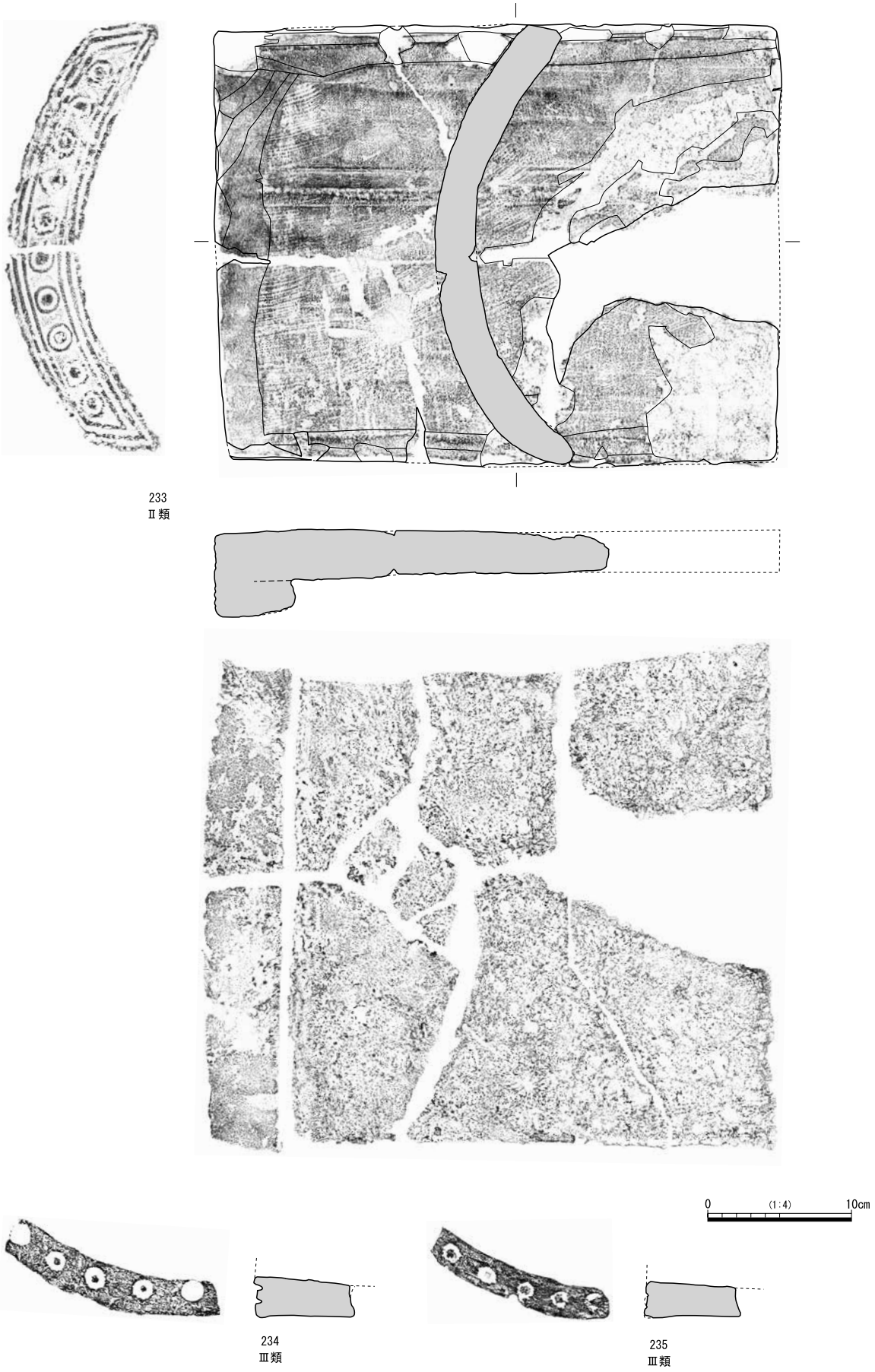


図 76　２号窯灰原出土軒平瓦（３）

縁部が面取りされる以外無調整で、布目が残る。229 ～ 231 は瓦当から顎部にかけての破片である。凹面は 227 と同様で、側縁を面取りするほか無調整で布目が残る。232 は剥離した顎部の破片である。剥離面には、瓦当と直交する方向にハケ目が残る。

Ⅱ類　233 はⅡ類で、平瓦部の一部を除きほぼ完形である。焚口付近から破片になった状態で出土している。全体的に風化が激しく、特に凸面側はほとんど表面の状況がわからない。全体の大きさや調整は、窯体内から出土したものと同様で、顎の長さは 5.7 ㎝である。凹面の中央やや左側に、分割突帯とみられる紐状の痕跡が残る。

Ⅲ類　234 と 235 はⅢ類である。ともに剥離した顎部の破片で、表面がやや風化している。珠文の径は 1.5 ㎝程で、間隔は 1.5 ～ 2.0 ㎝とやや広い。弧線は確認できないが、珠文の位置はやや低く、Ⅲ類Ａであると推定される。234 は前庭部の埋土上層（第２層）から出土している。２号窯から出土しているⅢ類の軒平瓦はこの２点のみであり、前庭部の埋没過程で１号窯から流入した瓦である可能性が高い。

（４）１号窯出土

１号窯窯体内（図 77 ～ 79、図版 29・55）

１号窯の窯体内からは、合計 35 点・総重量 17.4 kgの軒丸瓦が出土している。大半は燃焼部に滑落した状態の出土であるが、段構築瓦としての使用が確認できたものもある。瓦当が良好に残存するものを中心に 25 点を図示する。

Ⅰ類Ａ　236 ～ 238 はⅠ類Ａである。凹面は、側縁は面取りされる以外は無調整で広く布目が残る。側面は全面を凸面側に深く削る。236 は瓦当から顎段部にかけての破片である。燃焼室の第二次床面の下層（第４層）から出土しており、断面も含めほぼ全面に焼土が付着する。237 は瓦当から顎段部にかけての破片であるが、顎部は剥離して欠損する。側面付近に弧線の重複がみられる。２つの破片が接合しているが、１点は上から７段目の段に構築材として使用されていた。もう１点の破片は灰原から出土しているが、２点ともに断面や顎の剥離面を含めてほぼ全面に焼土が付着する。238 は瓦当近くの小破片で、顎部は欠損する。237 と同様に、側面付近に弧線の重複が確認できる。第２次床面の内部に埋め込まれた状態で出土している。二次的な火熱を受けており、表面には焼土が付着している。１号窯の窯体内から出土したⅠ類Ａはこの３点のみである。いずれも床面内や段の構築材として二次的に使用されており、出土数の少なさからも、１号窯で焼成されたとは考えにくい。周辺に投棄されていた２・３号窯の瓦を構築材として再利用されたとみるのが妥当であろう。

Ⅰ類Ｂ１　239 はⅠ類Ｂ１である。瓦当から平瓦部にかけての破片で、顎部は剥離して欠損する。顎部が欠損するため顎面の波状文の有無は確認できないが、凹面が全面ナデ調整であることからＢ１と判断できる。平瓦部の凸面は全面ナデ調整で、ナデ残しの部分に斜め方向の縄叩きが残る。また、顎の剥離面にも同様の叩き目が確認できる。２点の破片が接合しているが、237 と同様に１点は段の構築材として使用され、もう１点は灰原から出土している。構築材として使用されていた破片は、二次的な火熱により、全体が赤く変色している。１号窯の窯体内から出土したⅠ類Ｂ１は、この１点のみである。Ⅰ類Ａと同様の出土状況であることから、これに関しても２・３号窯で焼成された瓦が二次的に利用された可能性が高い。

Ⅲ類Ａ　240 ～ 250 はⅢ類Ａである。いずれも剥離した顎部であり、剥離面付近に弧線、その下に竹管による珠文が横一列に並ぶ。珠文の径は、７㎜程の小さいものと８㎜程の大きめのものとがみられるが、単一の個体においては同じ大きさの珠文で統一されている。珠文の間隔は、１㎝程度の狭いものと、２～３㎝程の広いものとがある。個々の間隔は一定しておらず、珠文は１点１点の施文とみてよい。弧線の断面形は半円形で、半裁竹管が使用されていると推測される。いずれも瓦当側の幅が狭くなってお

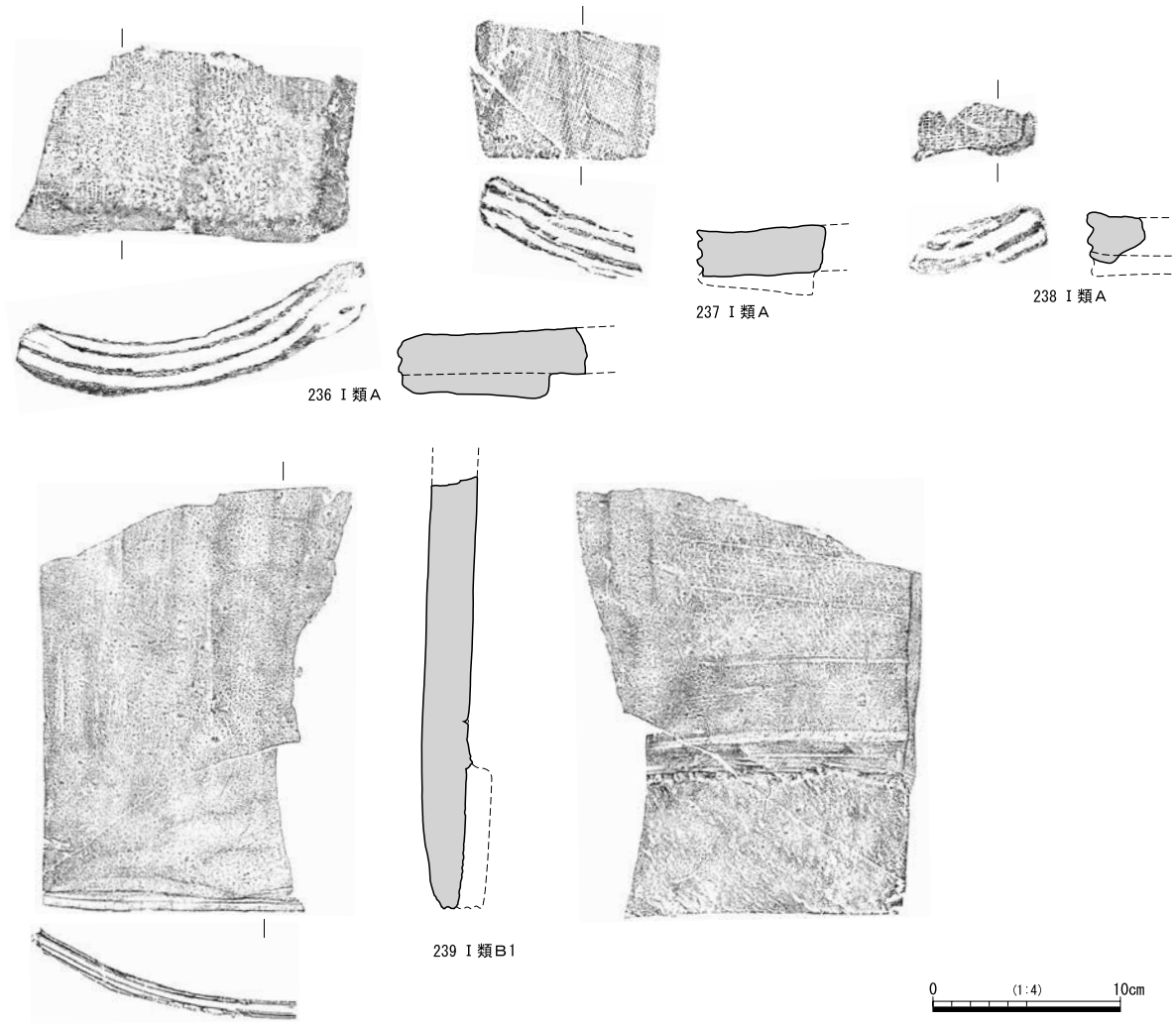


図 77　１号窯窯体内出土軒平瓦（１）

り、平瓦の狭端側に瓦当が設けられていることが分かる。240 と 246 の凹線には、側面からの粘土が被りが確認できる。240・244・245・248 では、側面に架かる珠文が半裁されており、弧線・珠文ともに分割前の施文である。側面調整は、凸面側に深く削るものと分割截面と平行に削るものとがある。顎段部にはナデ調整が施されており、強いナデにより端部が突出する形態のものもある。240・241・245・246 の剥離面には、にはやや不明瞭ではあるが、瓦当と平行する方向にハケ目の痕跡が認められる。240 ～ 245 は、焼成室内の段に使用された状態で出土している。

Ⅲ類Ｂ　251・252 はⅢ類Ｂで、ともに焼成室の段構築瓦である。251 は剥離した顎部の破片であり、剥離面近くに下段の珠文列が配されている。瓦当側の幅が狭なっており、平瓦狭端部に瓦当が設けられていることが分かる。252 は瓦当から平瓦部にかけての破片である。顎部と平瓦部の一部は欠損しており、凹面付近のみが残存する。瓦当には、平瓦部の中央付近に上段の珠文列が配されており、凹面には布目が残る。

Ⅲ類Ｃ　253 ～ 255 はⅢ類Ｃである。253 と 254 は剥離した顎部の破片である。剥離面付近に弧線が施されている。254 は瓦当幅が 17 ㎝程しかない小型のものである。瓦当右側の側縁近くに、分割時の躊躇い線とみられる刻みが残る。255 は瓦当から段部付近にかけての破片であり、顎は剥落している。段構築瓦として使用されていた。顎の剥離面付近に弧線が施されており、破片の中央付近で弧線が重複

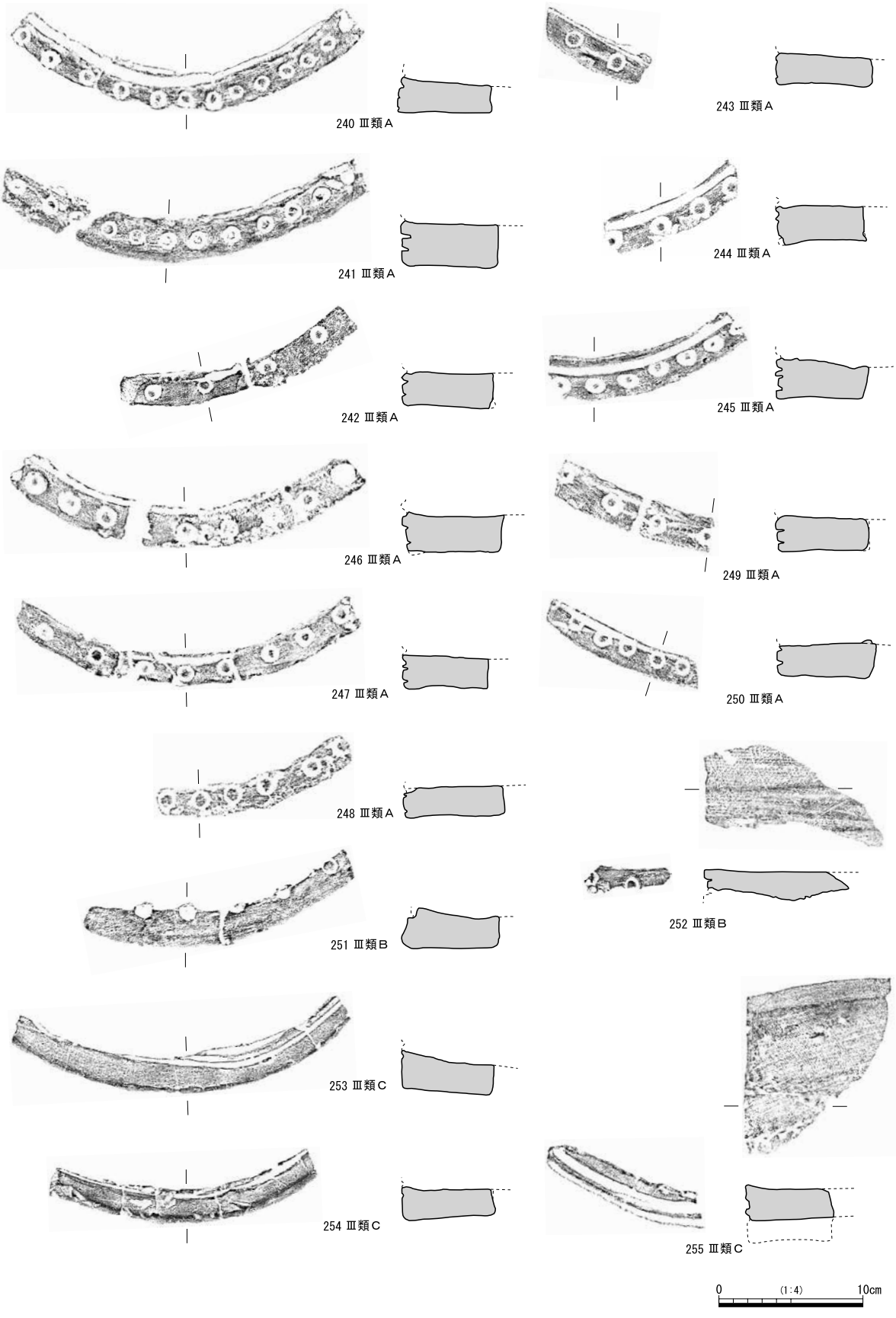


図 78　1 号窯窯体内出土軒平瓦（2）

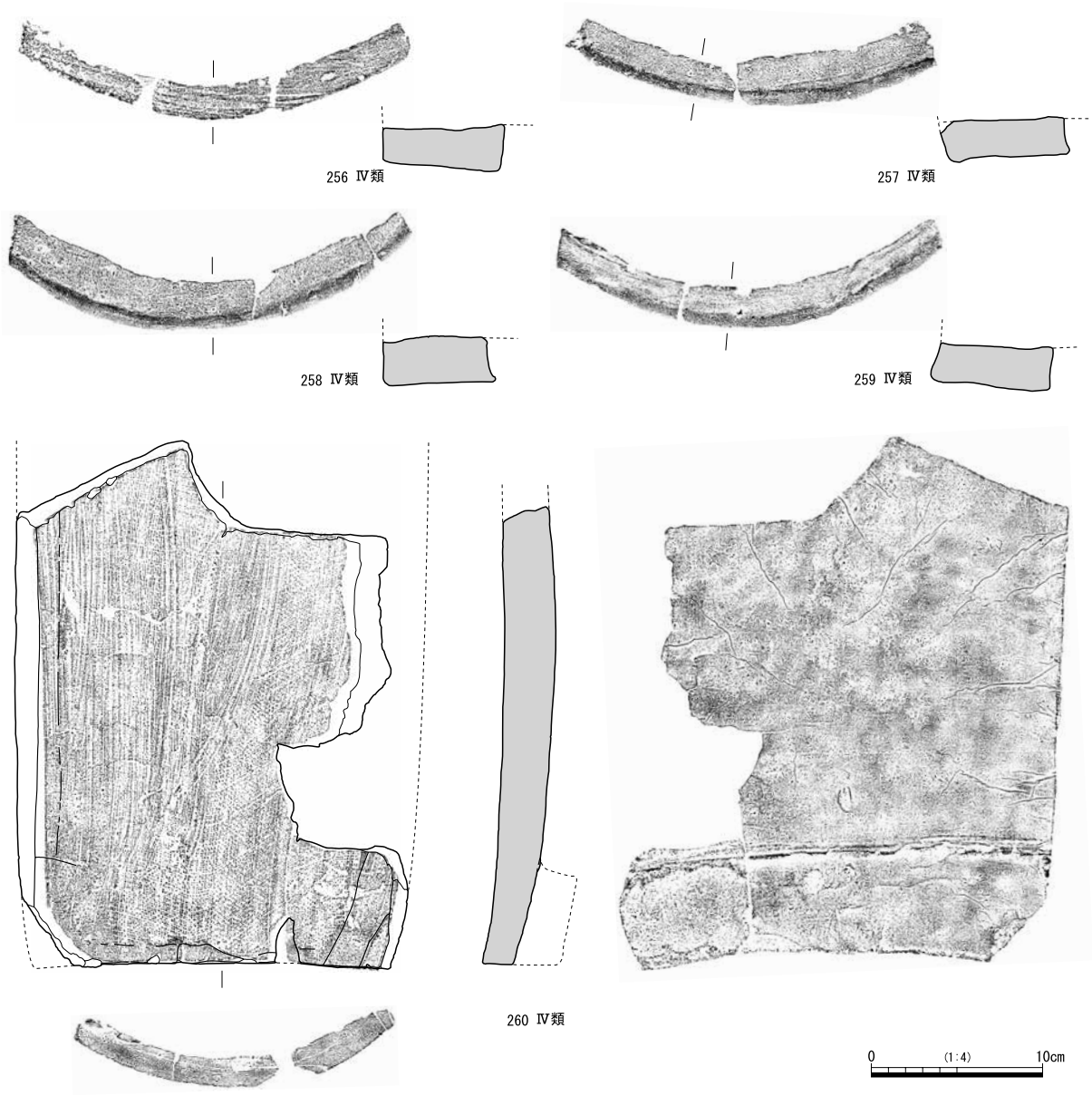


図 79　１号窯窯体内出土軒平瓦（３）

している。凹面は、側縁を幅広に面取りしているほかは無調整で布目が残り、布綴じ痕が確認できる。瓦当は平瓦の狭端側に設けられており、瓦当側の幅が狭い。

Ⅳ類　256 ～ 260 はⅣ類である。256 ～ 259 は剥離した顎の破片であり、257 以外には両側端が残る。256 ～ 258 は段構築瓦として使用されており、表面には焼土が付着している。256・258 は顎部に対して瓦当面がほぼ垂直であるが、257 は鈍角、259 は鋭角となっており、形態に多少の違いがみられる。258 の剥離面には、瓦当と平行する方向のハケ目が残る。260 は瓦当から平瓦部にかけての破片であり、顎部は剥離し失われている。凸面は全面ナデ調整である。凹面は側縁を面取りし、粗いナデ調整が施されている。断面や剥離面を含めほぼ全面に焼土が付着しており、崩れた状態で出土しているが、本来は段構築瓦であったと推測される。瓦当の右側端に、分割時の躊躇い線とみられる刻み目が２本確認される。

1号窯灰原（図80～83、図版29・55・58）

1号窯灰原からは、合計180点・総重量51.6kgと多くの軒平瓦が出土している。この内Ⅲ類とⅣ類とで合計51.1kg出土しており、この2種で軒平瓦全体の99%を占める。Ⅰ類は出土した4点全てを図示し、多量に出土したⅢ・Ⅳ類については両側端が残存するものを中心に32点図示する。

261～263はⅠ類Aである。261と262は、瓦当から平瓦部にかけての破片であり、顎部は剥落し失われている。ともに表面がやや風化しているが、凹面には布目が確認できる。262の凸面の顎部との境には、強いナデつけによる溝状の窪みがみられる。263は瓦当の小片で表面の風化が著しい。1号窯灰原出土のⅠ類Aはこの3点のみであり、1号窯で焼成された瓦とは考えにくい。構築材などに転用されたものが投棄されたか、上方に位置するSX01から転落した2・3号窯の瓦である可能性が高い。

264はⅠ類B1で、剥離した顎部の破片である。1号窯灰原のⅠ類B1はこの1点のみである。264についても、混入した2・3号窯の製品の可能性が高い。

265～277はⅢ類Aである。いずれも剥離した顎部の破片であり、上半にあたる平瓦部は出土していない。剥離面に架かるように弧線が施され、弧線の下には横一列の珠文が施される。珠文は径5～6㎜の小さなもの（268～270）と、7～8㎜のやや大きなもの（271～277）とがある。珠文の間隔も狭いものとやや広いものとがみられるが、270や273のように間隔が均一でないものも存在する。側面調整は、凸面側に深く削るものと分割截面と平行に削るものとがある。いずれも瓦当は狭端部に設けられており、顎段部の幅に比べて瓦当の幅が狭い。施文後の分割であり、268・269・272・274の珠文は側面で半裁されている。266･269･271･275の剥離面には、瓦当と平行する方向のハケ目が残る。265の珠文には1ヶ所突起がみられる。珠文のすべてにこの突起がみられることから、珠文は単一の施文具（竹管）による一つ一つの施文であることが分かる。276・277は弧線が二重になり、珠文列と重複する。明らかに弧線を断ち切る形で珠文が押されており、施文の前後関係は弧線が先・珠文が後である。265や274では珠文による弧線の湾曲が確認できる。他のものも、同順序で施文されている可能性が高い。

278～282はⅢ類Bである。278は瓦当の上下端が残る破片である。瓦当には、上下2段に珠文列が配されている。珠文は上下同じ位置に合わせて施文されている。凹面は無調整で布目が残る。側面は凸面側を深く削り、凹面側も面取りされている。279は瓦当上半の破片である。顎部は剥落しているが、中央付近に上段の珠文列が残る。280～281は剥離した顎部の破片である。剥離面には、瓦当と平行する方向のハケ目が残る。

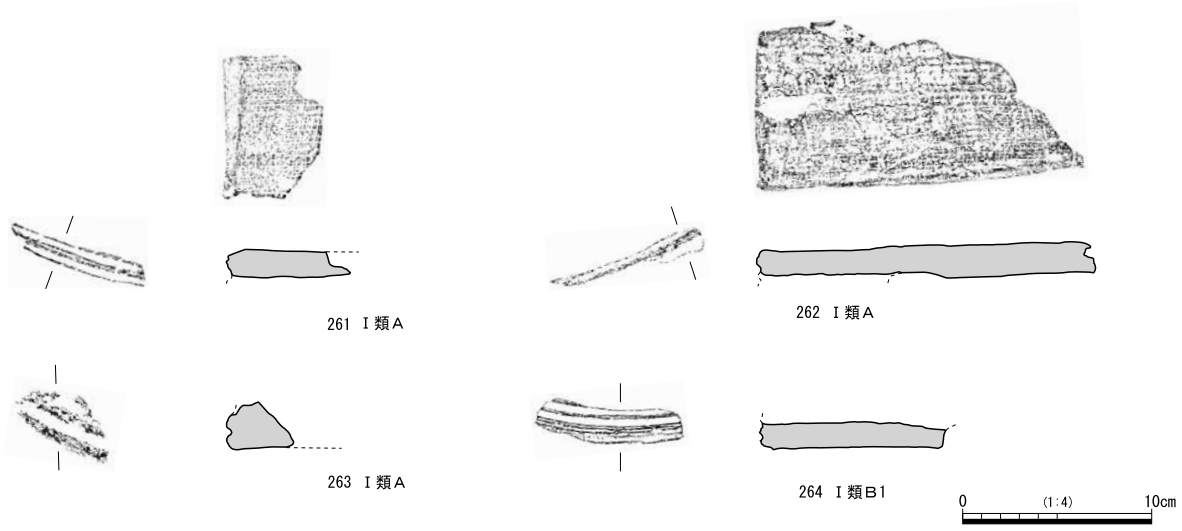


図80　1号窯灰原出土軒平瓦（1）

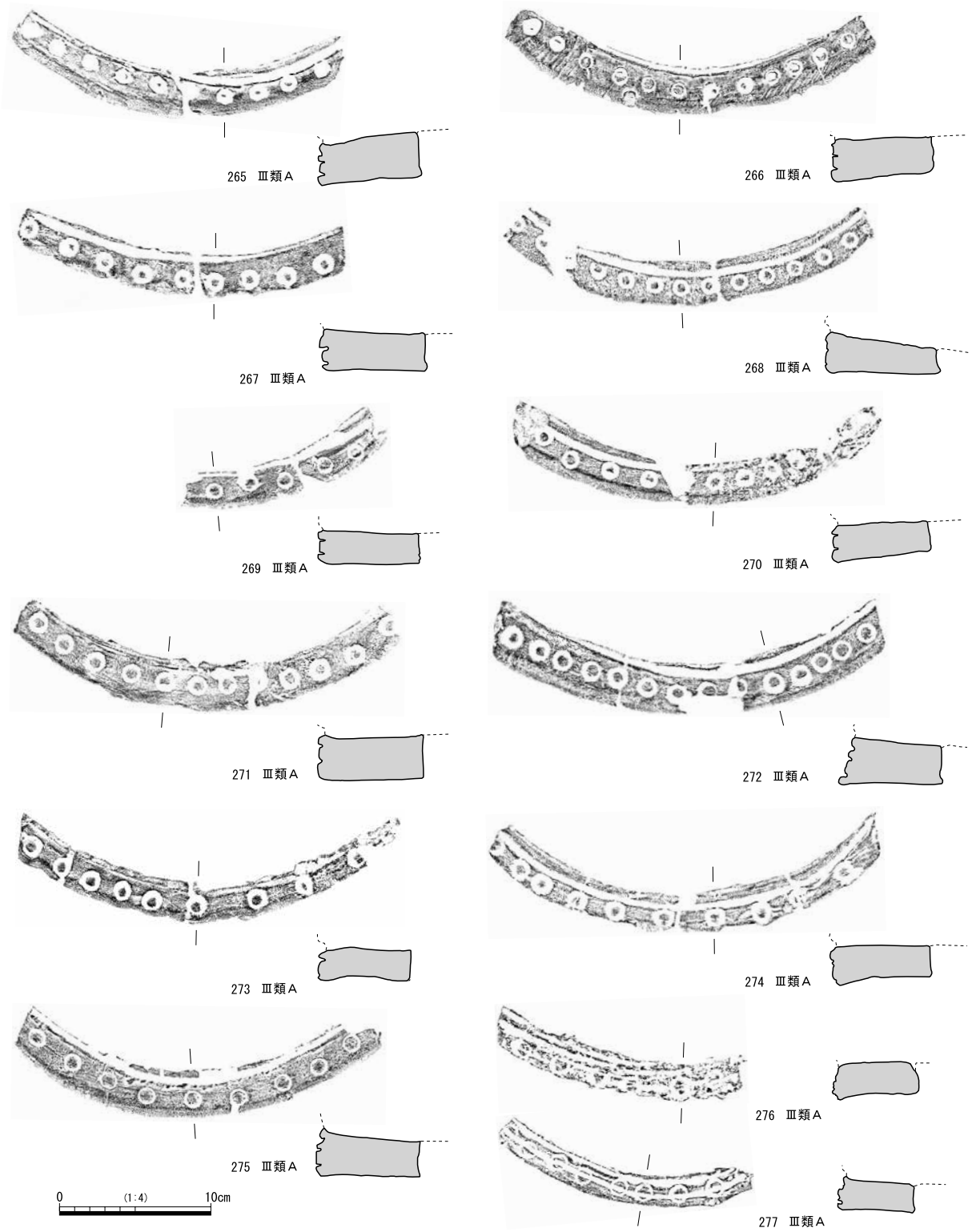


図 81　１号窯灰原出土軒平瓦（２）

283 はⅢ類Ｃである。剥離した顎部の破片であり、剥離面に架かる位置に弧線が描かれている。側面付近には、分割時の躊躇い線とみられる刻み目が３本残る。

284 ～ 296 はⅣ類である。側面調整は、凸面側に深く削るものと分割截面と平行に削るものがある。284 は瓦当から平瓦部が比較的良好に残存する。瓦当は平瓦の狭端部側に設けられている。平瓦凸面は全面ナデ調整で、凹面は風化が激しいが部分的に布目が確認できる。285・286 は瓦当から顎段部付近

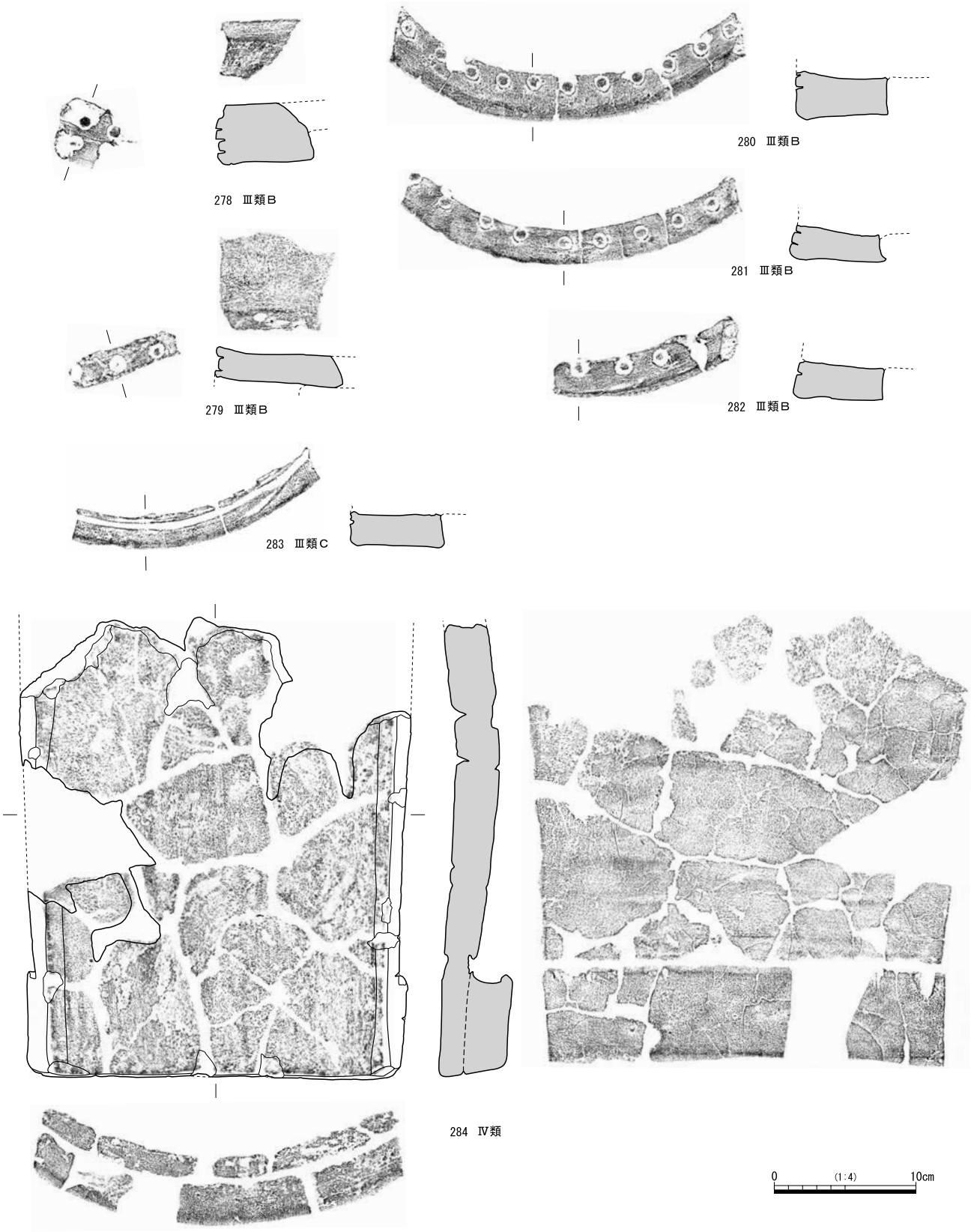


図 82　１号窯灰原出土軒平瓦（３）

の破片である。凹面は側面を面取りするほかは無調整で、広く布目が残る。287 ～ 296 は剥離した顎部の破片である。287・290・293 の剥離面には、瓦当と平行する方向のハケ目が残る。

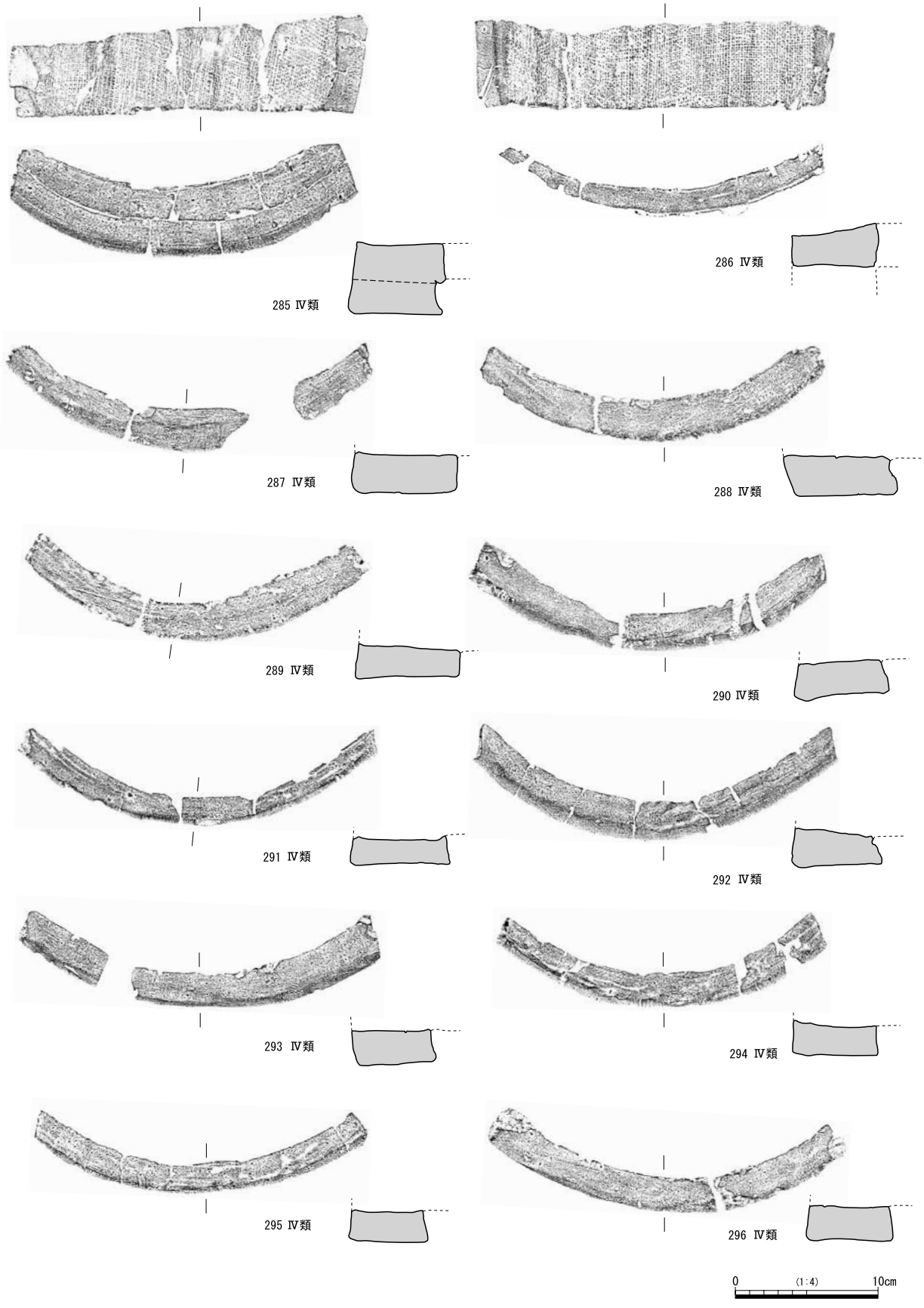


図 83　１号窯灰原出土軒平瓦（４）

（5）その他の遺構

窯以外の遺構では、SX01 と SX02、SD01 から出土している。SX01 からは、細片が多いが合計 24 点・総重量 8.0 kg出土している。SX02 ではⅠ類とみられる破片が３点、SD01 ではⅣ類の破片が１点出土しているが、いずれも表面の風化が激しい。SX01 から出土した残存状況が良好な５点を図示する。

SX01（図 84）

SX01 では軒平瓦Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類が出土しているが、細片で表面の風化の著しいものが大半である。297 はⅠ類Ｂである。焼成は硬質で、瓦当から平瓦部にかけて残存する。瓦当中央やや右側に弧線の重複が

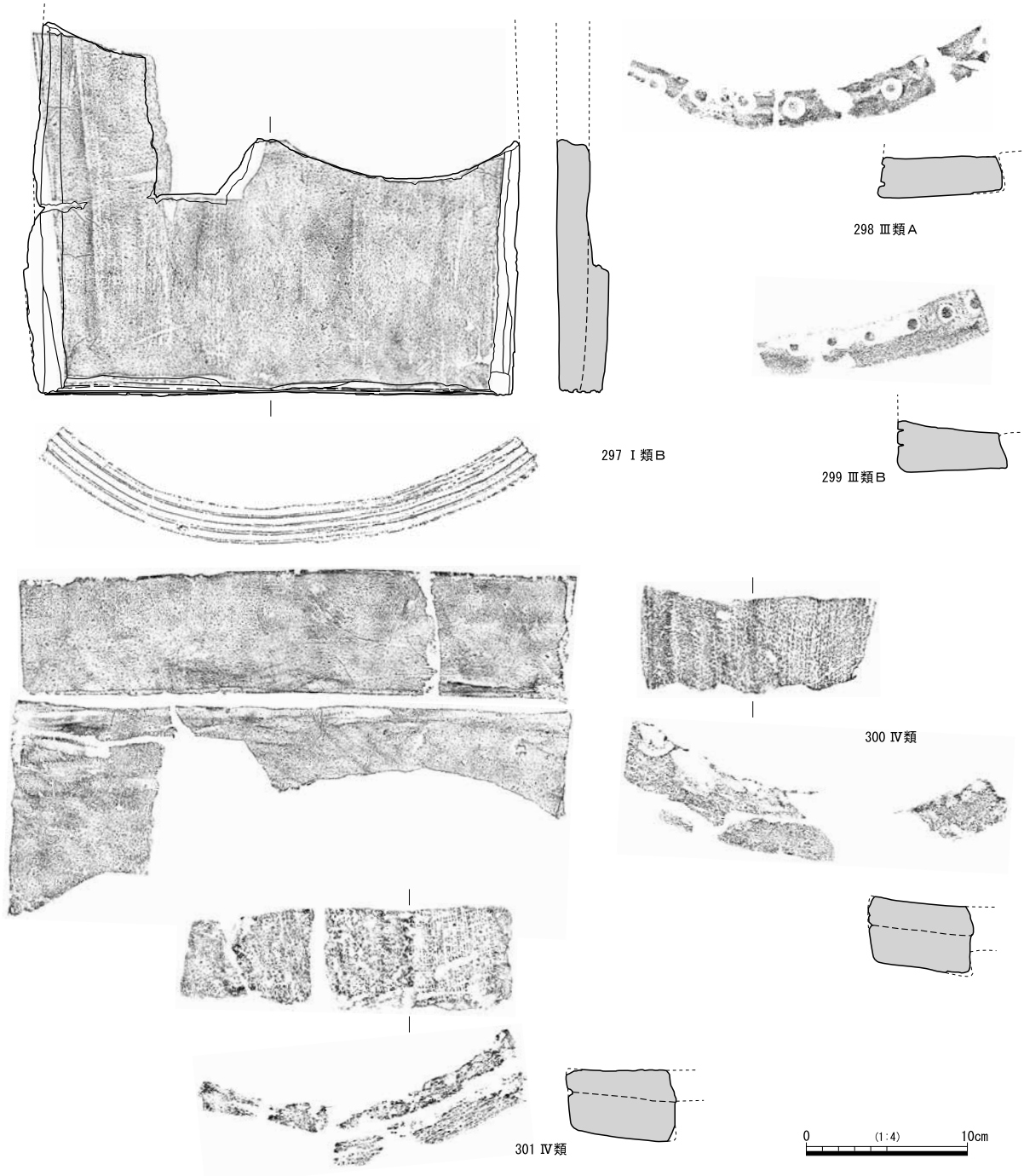


図 84　SX01 出土軒平瓦

確認できる。凹凸面はともに全面ナデ調整で、側面は凸面側を深く削る。凸面側に分割破面が残っており、凹面側から分割截線が入れられていることがわかる。298 はⅢ類Ａの剥離した顎部の破片である。瓦当の剥離面付近にわずかに弧線が残る。右側面で珠文が半裁されている。299 はⅢ類Ｂの剥離した顎部の破片である。瓦当の剥離面付近に珠文列が配されており、右側面で珠文が半裁されている。300・301 はⅣ類の瓦当から顎段部にかけての破片である。凹面は側縁を面取りするほか無調整で布目が残る。側面は凸面側を深く削る。

（６）包含層・攪乱出土

包含層や表土などで採取された軒平瓦は、合計 53 点・総重量 10.3 kgである。小破片が大半であるが、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類が確認される。比較的瓦当の残存範囲が広い 11 点を図示する。

302 はⅠ類Ａの瓦当から顎段部にかけての破片である。凸面は瓦当側面に面取りを施すほか無調整で、布目が残る。303 ～ 305 はⅠ類Ｂ１である。瓦当から顎段部付近にかけての破片である。凸面は全面ナデ調整されており、布目は残らない。305 は確認調査以前に採取されたもので、篠場瓦窯発見の契機になった瓦の一つである。後世に砥石として転用されており、全体が研磨されている。306 はⅠ類Ｂ２の瓦当から顎段部にかけての破片である。凹面には布目が残り、顎面には櫛描き波状文が施されている。307 ～ 309 はⅢ類Ａの剥離した顎部の破片である。307 には剥離面付近に弧線が残る。310 ～ 312 はⅣ類である。310 と 311 は瓦当から顎段部にかけての破片で、凹面には布目が残る。312 は剥離した顎部の破片である。

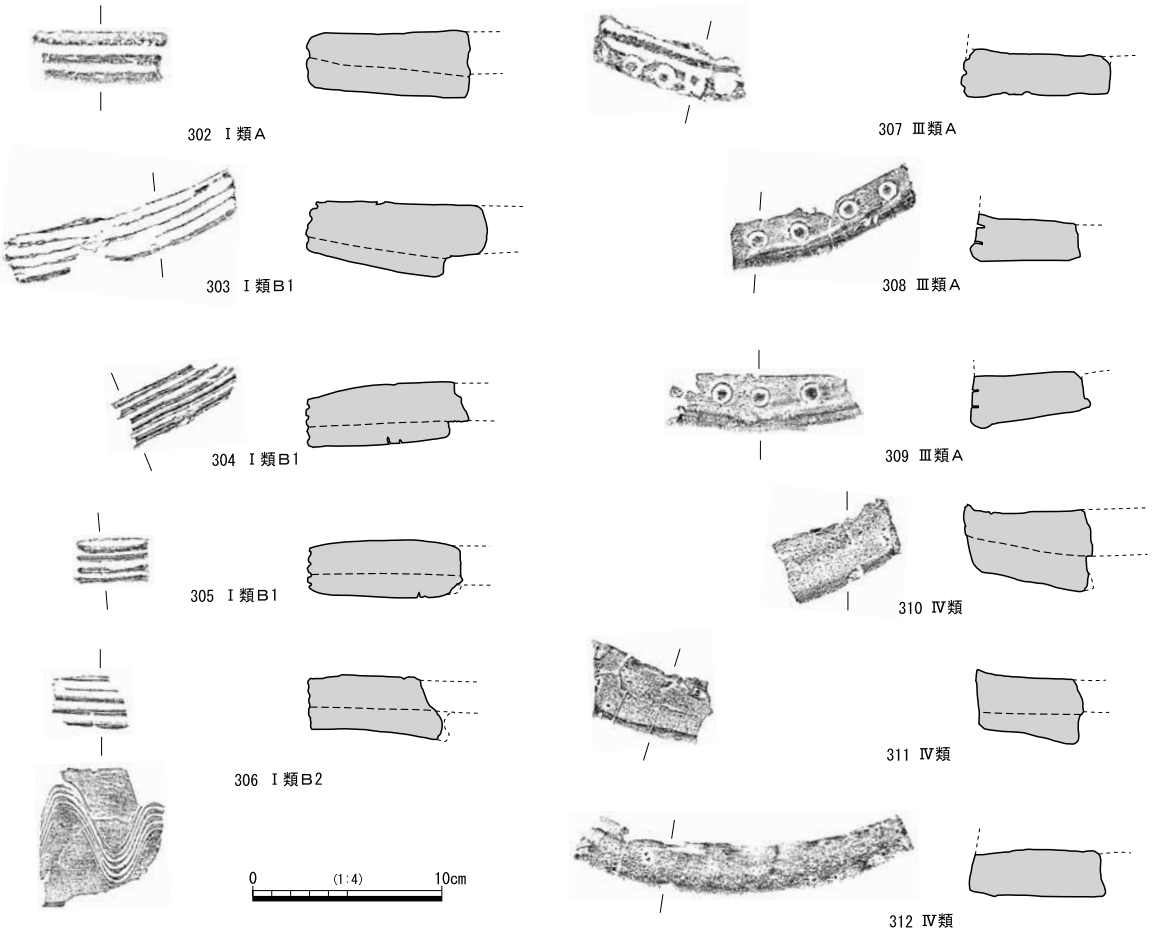


図 85　包含層・攪乱出土軒平瓦

3　丸瓦

丸瓦は、細片も含めて総重量908.9 kg出土している。各窯から出土しているが、特に３号窯の窯体内では床面に完形に復原できるものが多量に残されていた。窯以外の遺構でもほぼ普遍的に出土しており、溝 SD01 からは形状を復原できるものが比較的多く出土している。また、ほとんどが小破片ではあるが、包含層や攪乱の埋土中、表土や確認調査においても一定量の出土が確認できる。丸瓦については、出土数が多量であることから、主に両側端の残存するものを選択して図化・掲載した。

（1）分類

丸瓦は、形状（模骨）からⅠ～Ⅲ類に分類し、細部の形状や凸面調整の違いによって細分した。法量に違いが認められるものに関しては、さらに細分を行った。

Ⅰ類　　有段式（玉縁式）のもの。段差を彫り込んだ瓶形の模骨に、粘土板を巻き付け、凸面に粘土を付加して段をつくる。段部凹面の形状によりＡ～Ｃの３種に細分される。

Ⅰ類Ａ　段部凹面の屈曲が強く、段差が小さいもの。段部では粘土が非常に薄くなるため、段部で欠損しているものが多い。玉縁部の幅は、端部と基部でほとんど変化がない。凸面は、玉縁部・筒部ともに全面横ナデ調整される。凹面には、玉縁部・筒部ともに側縁に幅の狭い面取り調整が施される。

Ⅰ類Ｂ　段部凹面の屈曲が直角に近く、段差が大きいもの。屈曲は直角に近い。筒部の凸面は横ナデ調整される。玉縁部を欠く破片が１点出土するのみであり、玉縁部の形状や調整は不明。

Ⅰ類Ｃ　段部凹面の屈曲は強いがやや傾斜しており、段差が大きいもの。玉縁部の端部と基部で幅にほとんど変化がない。凸面調整は、玉縁部は全面横ナデ調整であるが、筒部は横ナデ調整のものと縦ナデ調整のものがみられる。凹面には、側縁に玉縁部には幅広の、筒部には幅の狭い面取りが施される。

Ⅰ類Ｄ　段部凹面の屈曲が弱く緩やかなもの。玉縁部の幅は、端部と基部でほぼ同じものと、端部の幅が狭くなるものがある。凸面は、玉縁部が全面横ナデ調整、筒部は縦ナデ調整される。凹面には、側縁に玉縁部には幅広の、筒部には幅の狭い面取りが施される。

Ⅱ類　　無段式（行基式）で、模骨に側板連結模骨を用いるもの。側板の幅は 0.5 ～ 1.0 ㎝程と狭い。粘土板を巻き付け技法で製作される。凹面調整は、わずかに側縁全体を面取りし、広端側のみ斜めに広く面取りを施す。法量は、全長 41 ～ 42 ㎝・狭端幅 12 ～ 13 ㎝・広端 18 ～ 19 ㎝である。凸面調整の違いにより、ＡとＢの２種に細分される。

Ⅱ類Ａ　凸面に縦方向の削り調整を施すもの。削り調整は、凸面全面におよぶものが多いが、部分的なものもある。

Ⅱ類Ｂ　凸面が全面ナデ調整されるのもの。

Ⅲ類　　無段式（行基式）で、模骨にいわゆる杵形模骨を用いるもの。いずれも粘土板巻き付け技法で製作されているが、粘土板の形状には三角形のものと四角形のものがある（第６章参照）。凸面調整の違いにより、Ａ～Ｃの３種に細分される。

Ⅲ類Ａ　凸面に縦方向の削り調整を施すもの。法量は、全長 44 ～ 45 ㎝・狭端幅 12 ～ 13 ㎝・広端幅 19 ～ 20 ㎝である。三角形の粘土板を使用する。

Ⅲ類Ｂ　凸面調整が全面ナデ調整のもの。法量の違いにより１～８の８種に細分される。

Ｂ１　全長 42 ～ 45 ㎝・狭端幅 12 ～ 13 ㎝・広端幅 19 ～ 20 ㎝のもの。凸面は全面横ナデ調整で、部分的に縦ナデ調整が加えられる。三角形の粘土板を使用する。

Ｂ２　全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 10 ～ 11 ㎝・広端幅 16 ～ 17 ㎝のもの。凸面は広端部に付近に横ナデ調整が残るが、大半は縦ナデ調整が施される。四角形の粘土板を使用する。
Ｂ３　全長 36 ～ 38 ㎝・狭端幅 10 ～ 11 ㎝・広端幅 16 ～ 17 ㎝のもの。四角形の粘土板を使用する。
Ｂ４　全長 36 ～ 38 ㎝・狭端幅 12 ～ 13 ㎝、広端幅 17 ～ 18 ㎝のもの。四角形の粘土板を使用する。
Ｂ５　狭端幅 13 ～ 14 ㎝、広端幅 17 ～ 18 ㎝、長さ 38 ～ 40 ㎝のもの。四角形の粘土板を使用する。
Ｂ６　狭端幅 13 ～ 15 ㎝、広端幅 18 ～ 19 ㎝、長さ 30 ～ 32 ㎝のもの。四角形の粘土板を使用する。
Ｂ７　狭端幅 13 ～ 14 ㎝、広端幅 18 ～ 19 ㎝、長さ 36 ～ 37 ㎝のもの。四角形の粘土板を使用する。
Ⅲ類Ｃ　凸面が無調整で縄目叩きが明瞭に残るもの。

また、布袋に関しても、綴じ目や布の破損の状態等から、いくつか特定できるものがある。これらについては、図 386 のように布ａ～ｉと呼ぶことにする。

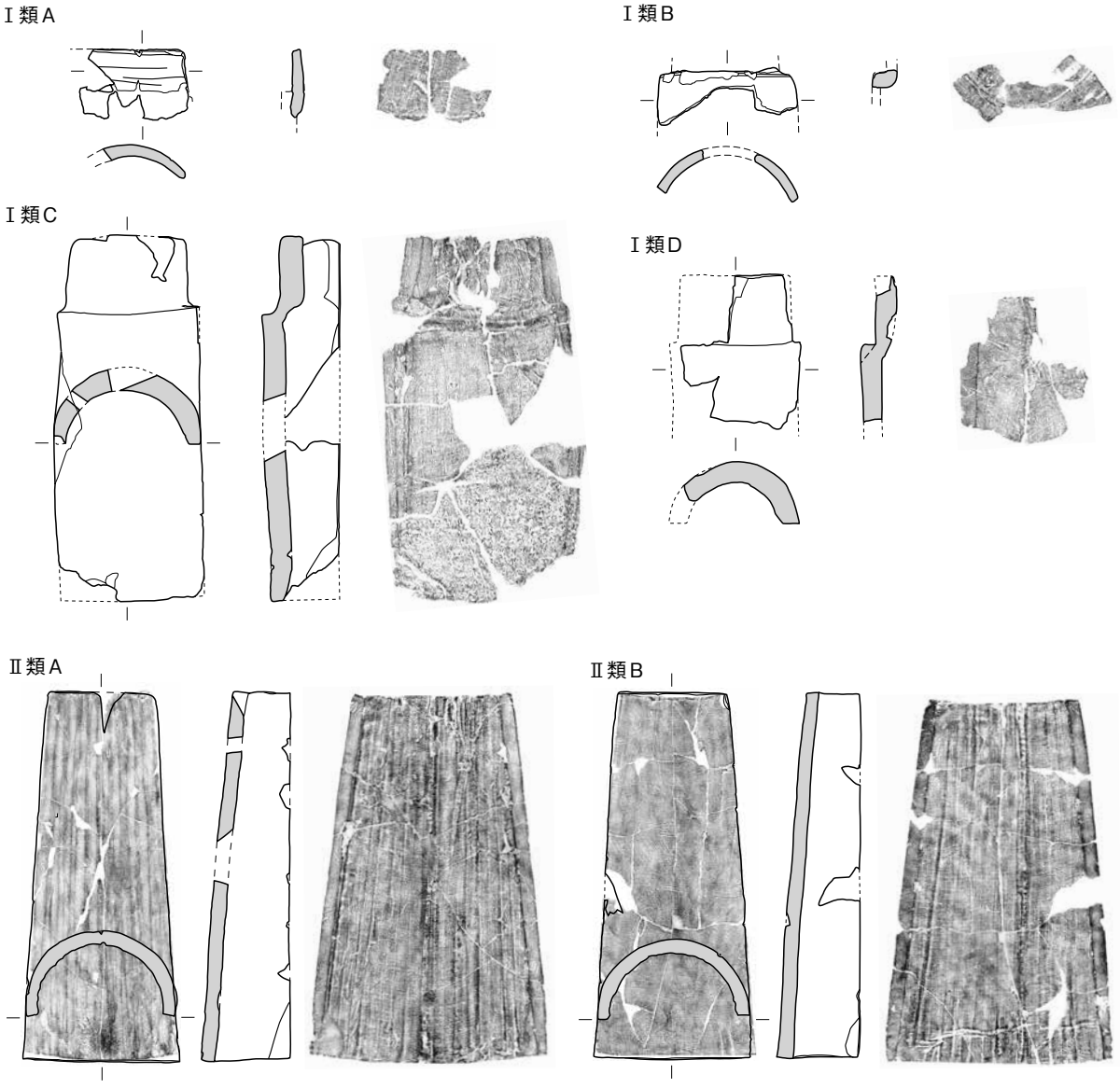


図 86　丸瓦の分類

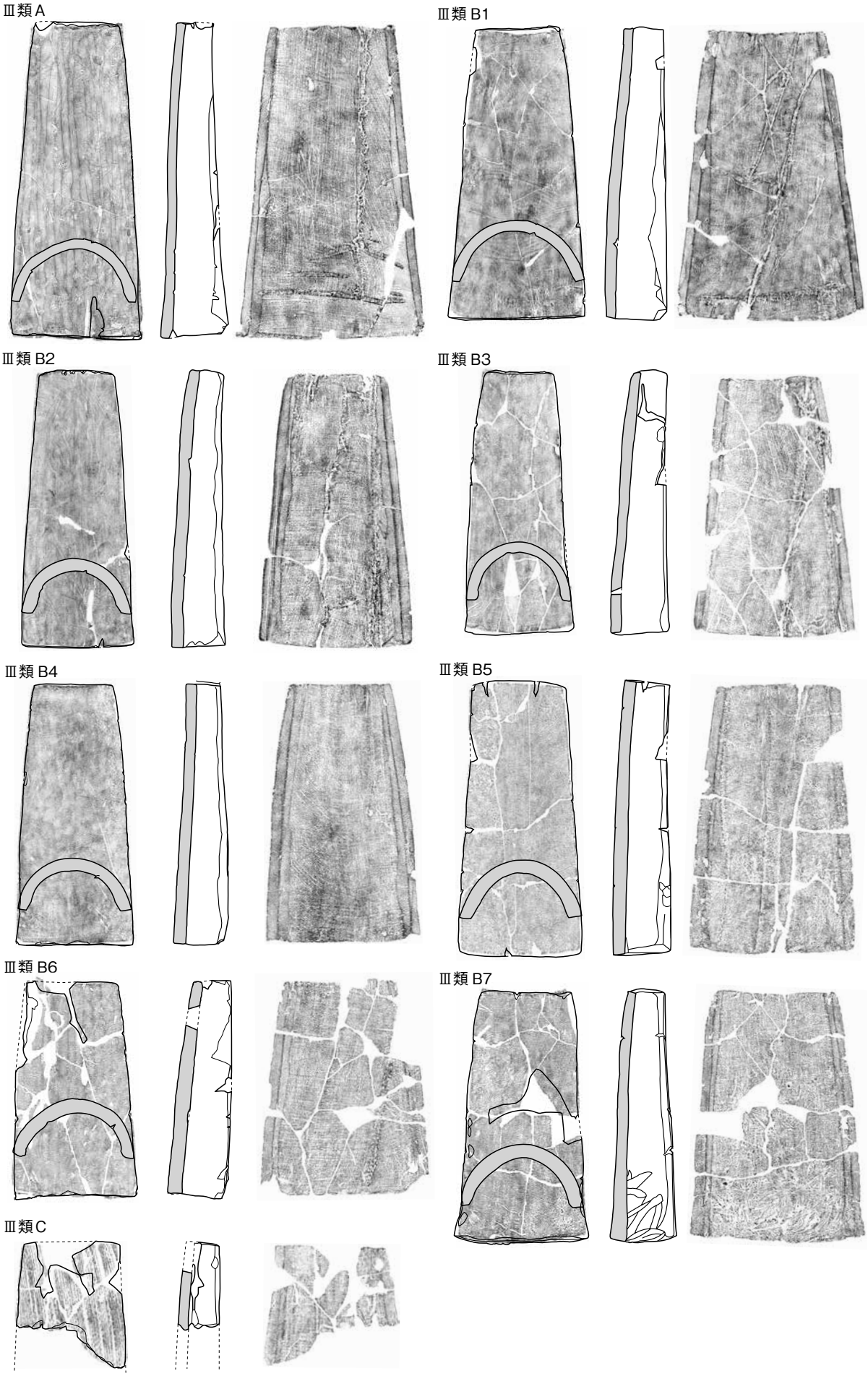


図 87　丸瓦の分類

（２）３号窯出土

３号窯窯体内（図 88 ～ 129、図版 18・59 ～ 64）

３号窯窯体内では、床面に放置された状態で、総重量 325.8 kgと大量の丸瓦が出土している。出土数の少ないⅠ類は２点すべてを、多量に出土したⅡ・Ⅲ類は主に幅が残存するものを 113 点図示する。

Ⅰ類　313・314 はⅠ類Ａである。３号窯窯体内で明確にⅠ類と認識できるものは、この２点のみである。玉縁部から段部にかけての破片であり、段差は少なく１㎝程しかないが屈曲は強い。199 は側面が一部残存しており、玉縁端部と基部の幅はほぼ変わらないものとみられる。段部下端付近で最も薄くなり厚さは２㎜程しかない。玉縁端部から４㎝程の位置には粘土の剥離痕が残り、断面を観察すると玉縁端部付近まで粘土が薄く付加されている様子がみえる。肩部付近から玉縁端部にかけての広い範囲に、粘土が付加されていたものと推測される。

Ⅱ類Ａ　315 ～ 327 はⅡ類Ａである。凸面は全面縦方向に削り調整されている。削りの方向は、部分的に逆方向のものもみられるが、基本的には狭端側から広端側に削っている。一部削り残しの部分には、斜め方向の縄叩きの痕跡が残る。凹面は広端側を部分的に削り調整している。粘土の接合痕がみられるが、いずれも不定形なブロック状の粘土である。３号窯窯体内出土のものには明確な糸切り痕は確認できないが、灰原出土のものに糸切り痕の残るるものが確認できることから、これらの粘土接合痕はタタラ成形時のものと推測される。側面は全面削り調整されており、広端側に小さな破面が残るものが多い。分割截線は広端側を残す形であった可能性が考えられる。また、凹面には広端側と中央付近に、直径１㎝程の浅い窪みがあるものが確認できる。布袋にはすべて布ａが使用されている。

315 ～ 317・319・321 ～ 324 の側面には、広端から２㎝程離れた位置に破面が認められ、327 には広端付近にのみ深い削りを施しているのが確認できる。315・317 ～ 320・323・325 には、布ａの布綴じ痕が残る。323 と 326 は広端側が布端が確認でき、326 の布足らずになっている部分には側板の痕跡が明瞭に残っている。側板はどれも１㎝程の幅であり、細い側板を連結していることがわかる。315・317・319・320・322・325・326 には広端近くと中央付近に浅い窪みがみられ、位置は 315 のように側端近くのものから、325 のように中心付近にみられるものもある。痕跡の原因は特定できないが、分割突帯の可能性は低いと考えられる。長さは 41 ～ 42 ㎝のものが多いが、325 は 39 ㎝、326 は 40 ㎝とやや短かい。

Ⅱ類Ｂ　328 ～ 332 はⅡ類Ｂである。凸面は全面横ナデ調整を基本とするが、ナデの弱いものや一部に削りを加えるものもある。ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩きが残る。不定形の粘土の接合痕はみられるが、明確な糸切り痕は確認できない。側面の広端側には破面が残るものが多く、広端側のみ別に削り調整を加えているものも確認できる。布袋にはすべて布ａが使用されている。Ⅱ類Ａとは、凸面に削り調整が施されない点では異なるが、布袋やほかの技法は共通しており、おそらくは模骨も同一であろう。Ⅱ類Ｂは、Ⅱ類Ａの凸面の削り調整を省略したものとみてよい。

328 は凸面のナデ調整が不十分なため、ほぼ全面に斜め方向の縄叩きが残り、332 には凸面の広端側に一部削り調整が加えられている。328 と 329 には布ａの布綴じ痕が確認できる。332 の広端付近には

図 88　３号窯窯体内出土丸瓦（１）

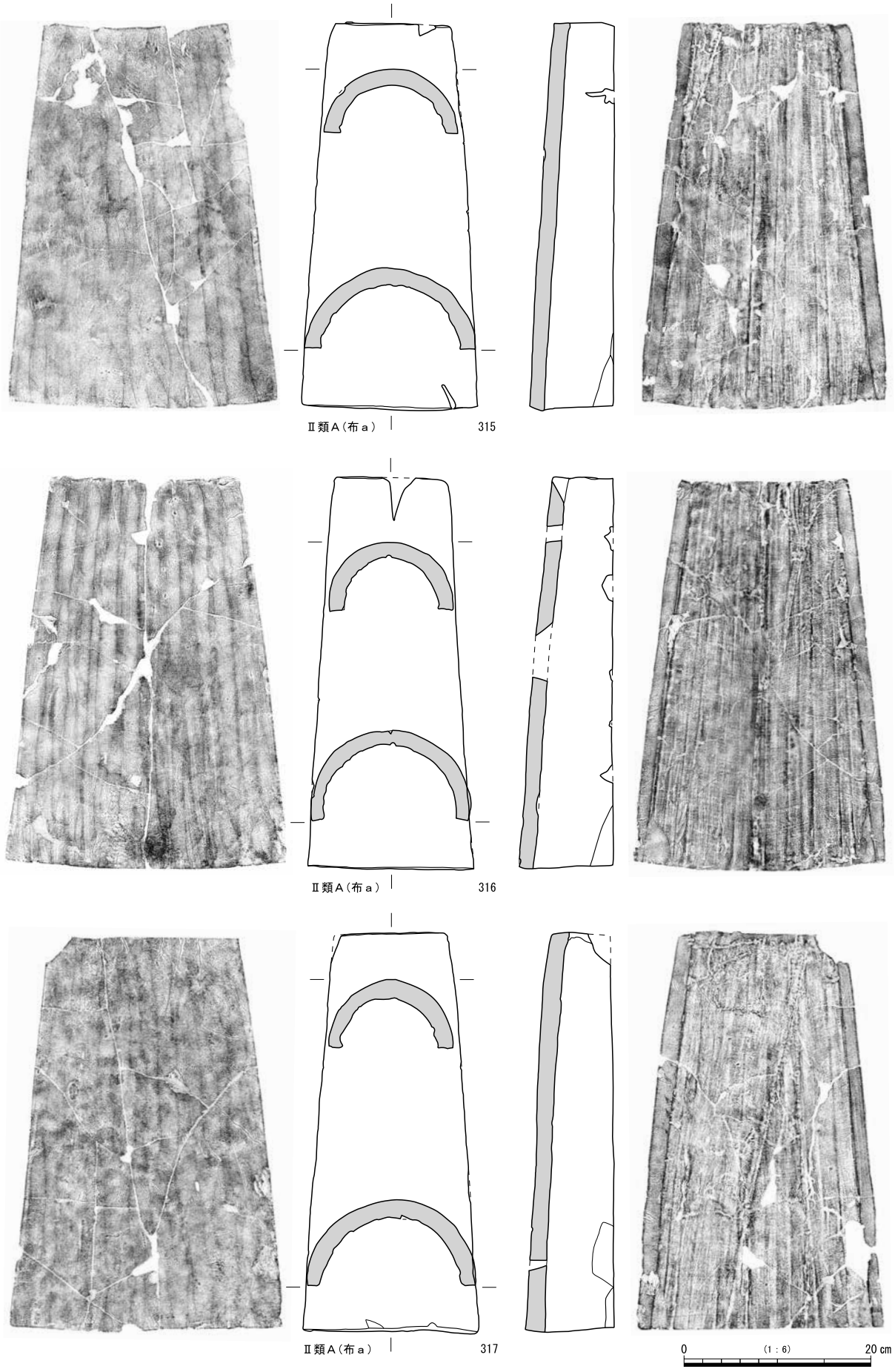


図 89　３号窯窯体内出土丸瓦（２）

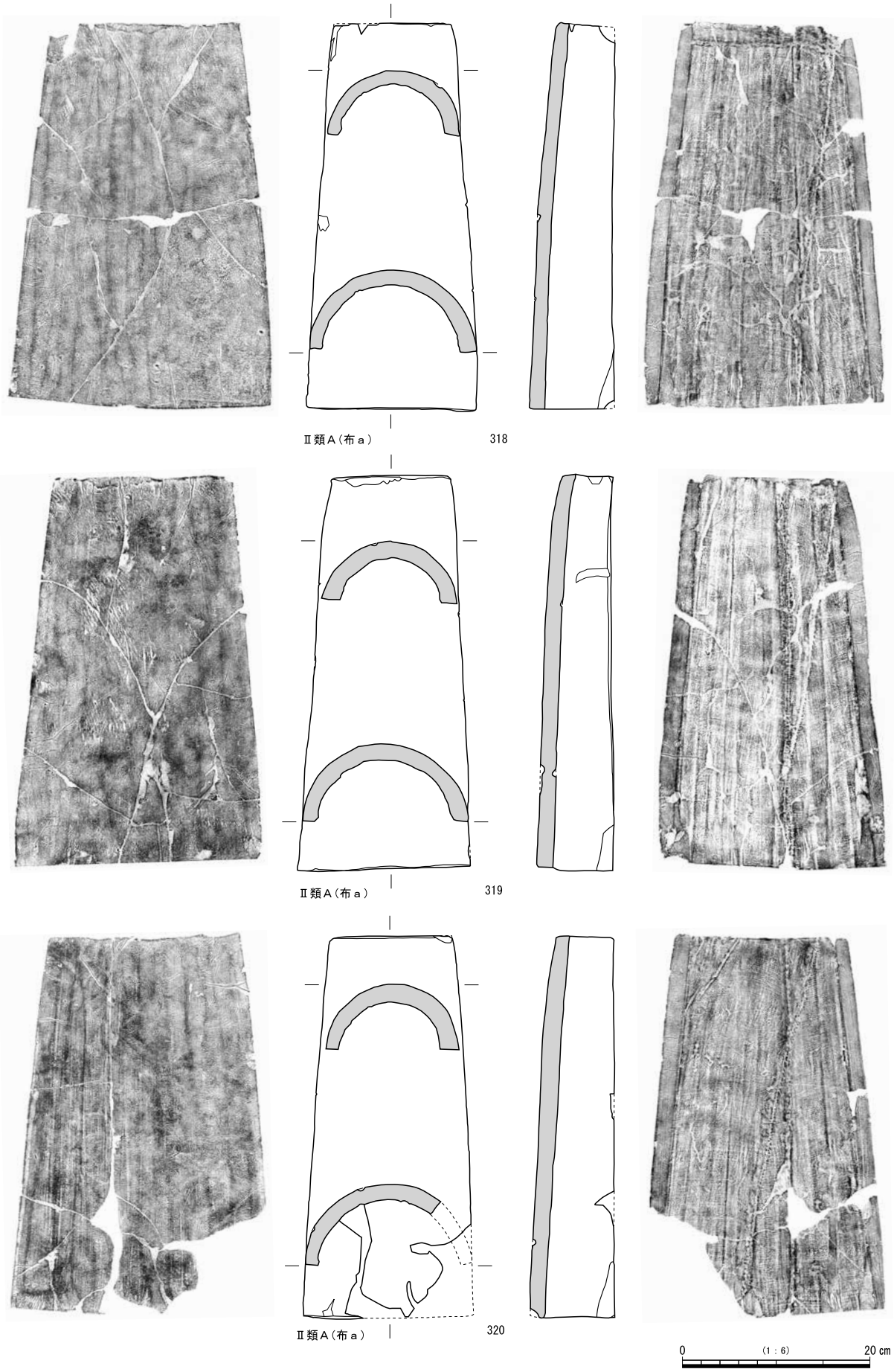


図 90　３号窯窯体内出土丸瓦（３）

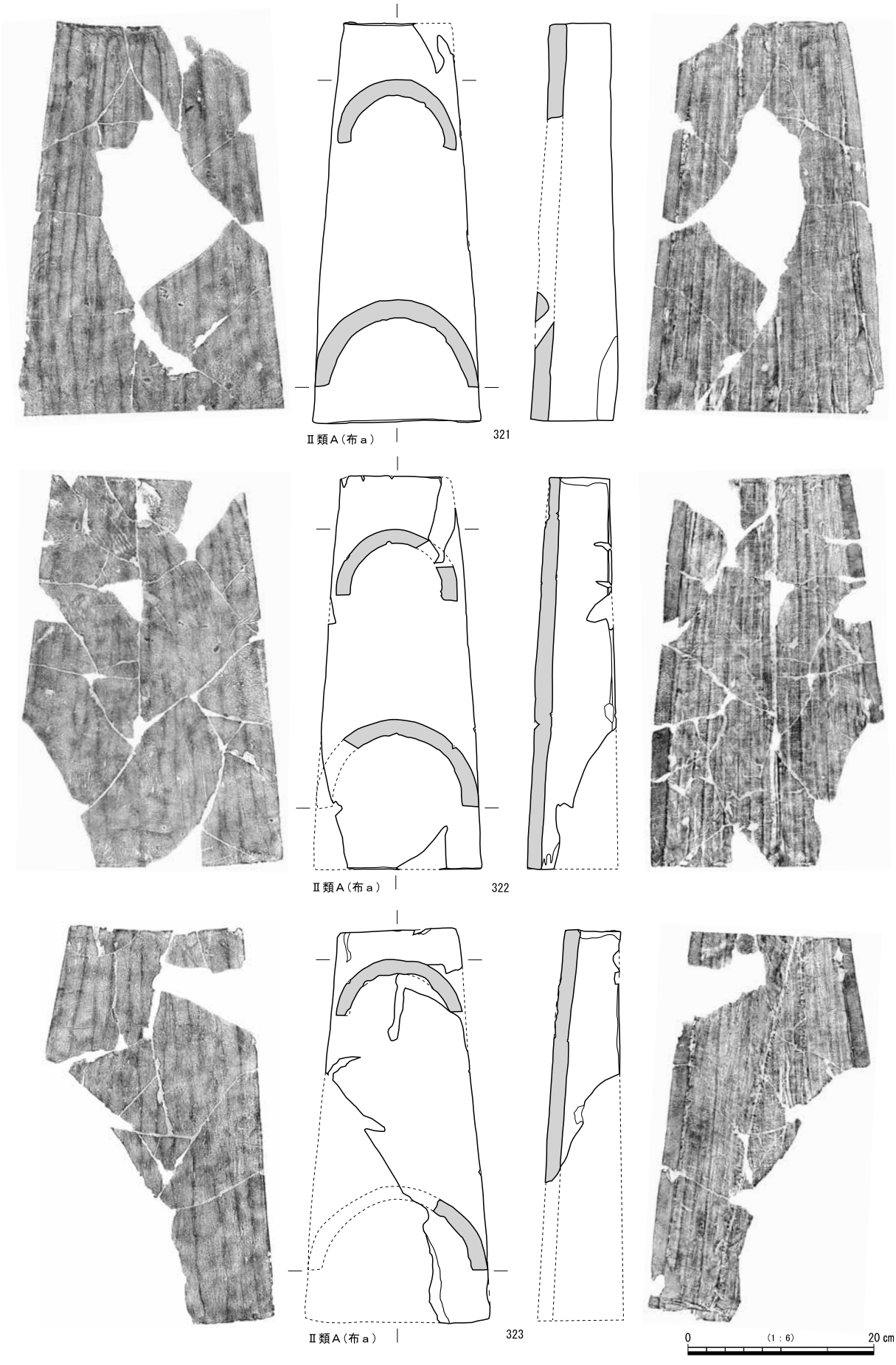


図 91　３号窯窯体内出土丸瓦（４）

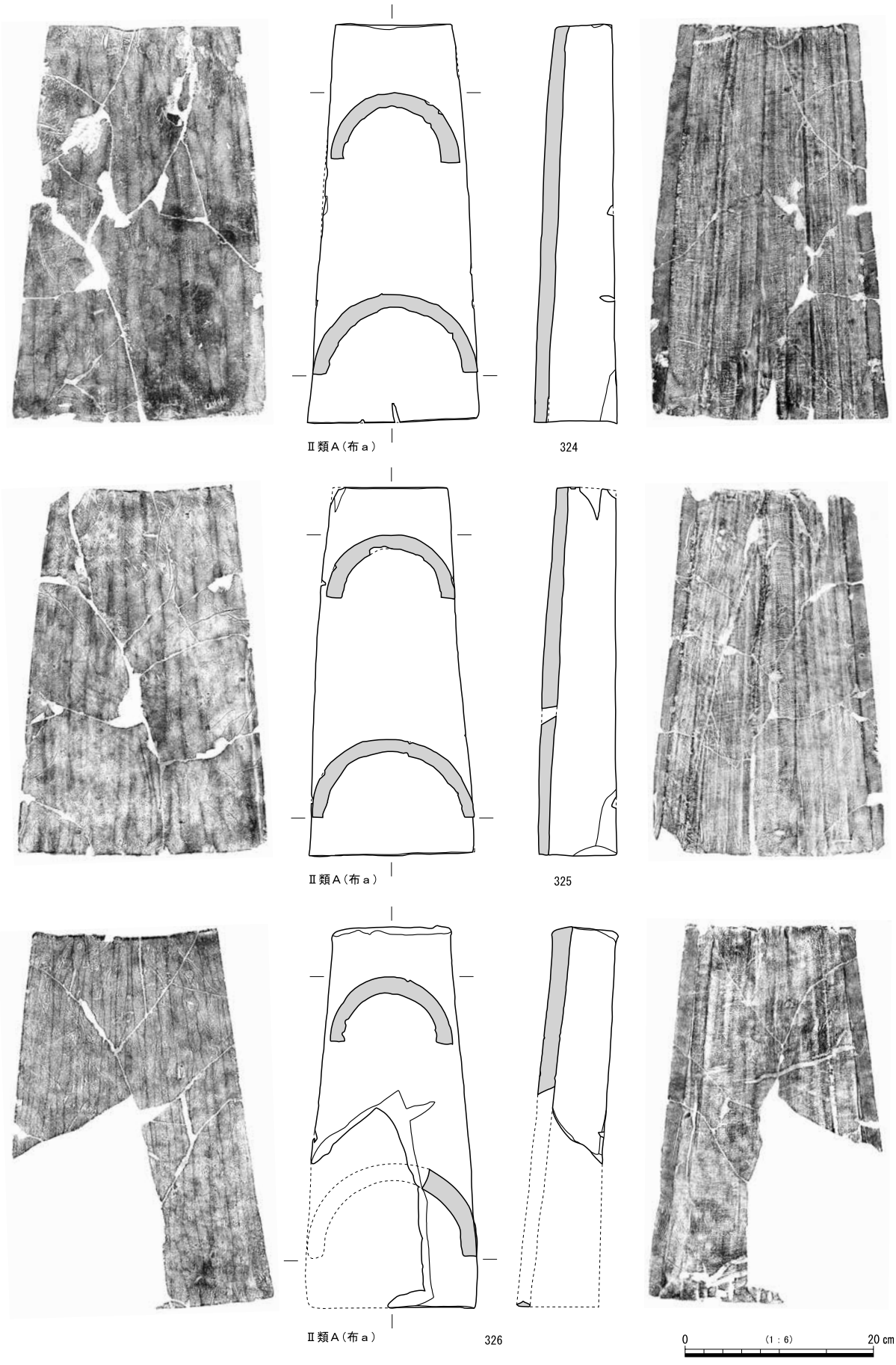


図 92　３号窯窯体内出土丸瓦（５）

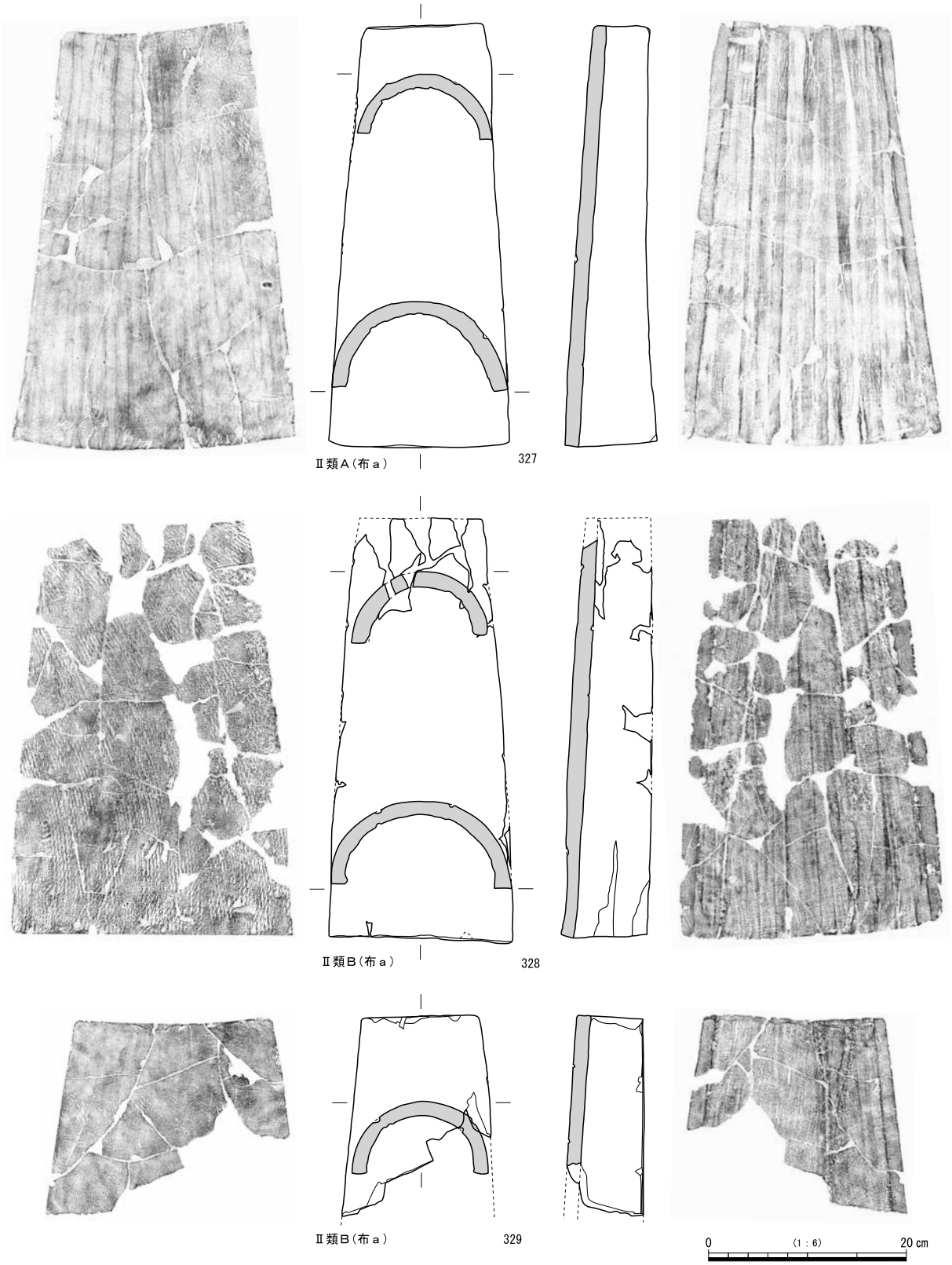


図 93　３号窯窯体内出土丸瓦（６）

布端があり、布足らずとなっている広端側には側板痕が明瞭に残る。側板痕の幅は約１㎝と狭い。328の広端と側端から５㎝の位置には、浅い窪みが確認される。328・330・331の側面には、広端近くに破面が残り、破面から広端にかけては側面全体とは別の削り調整が加えられている。

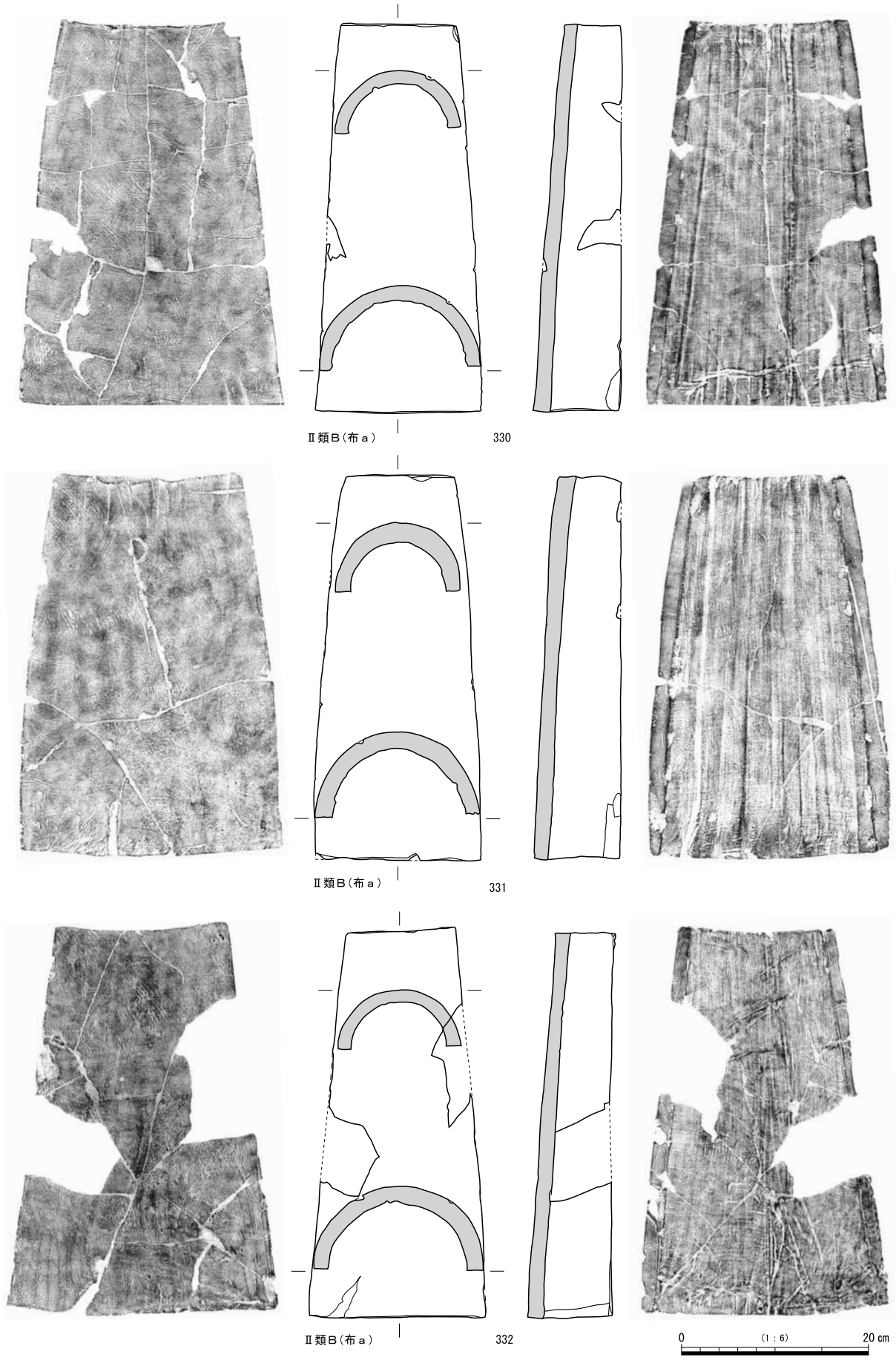


図 94　３号窯窯体内出土丸瓦（７）

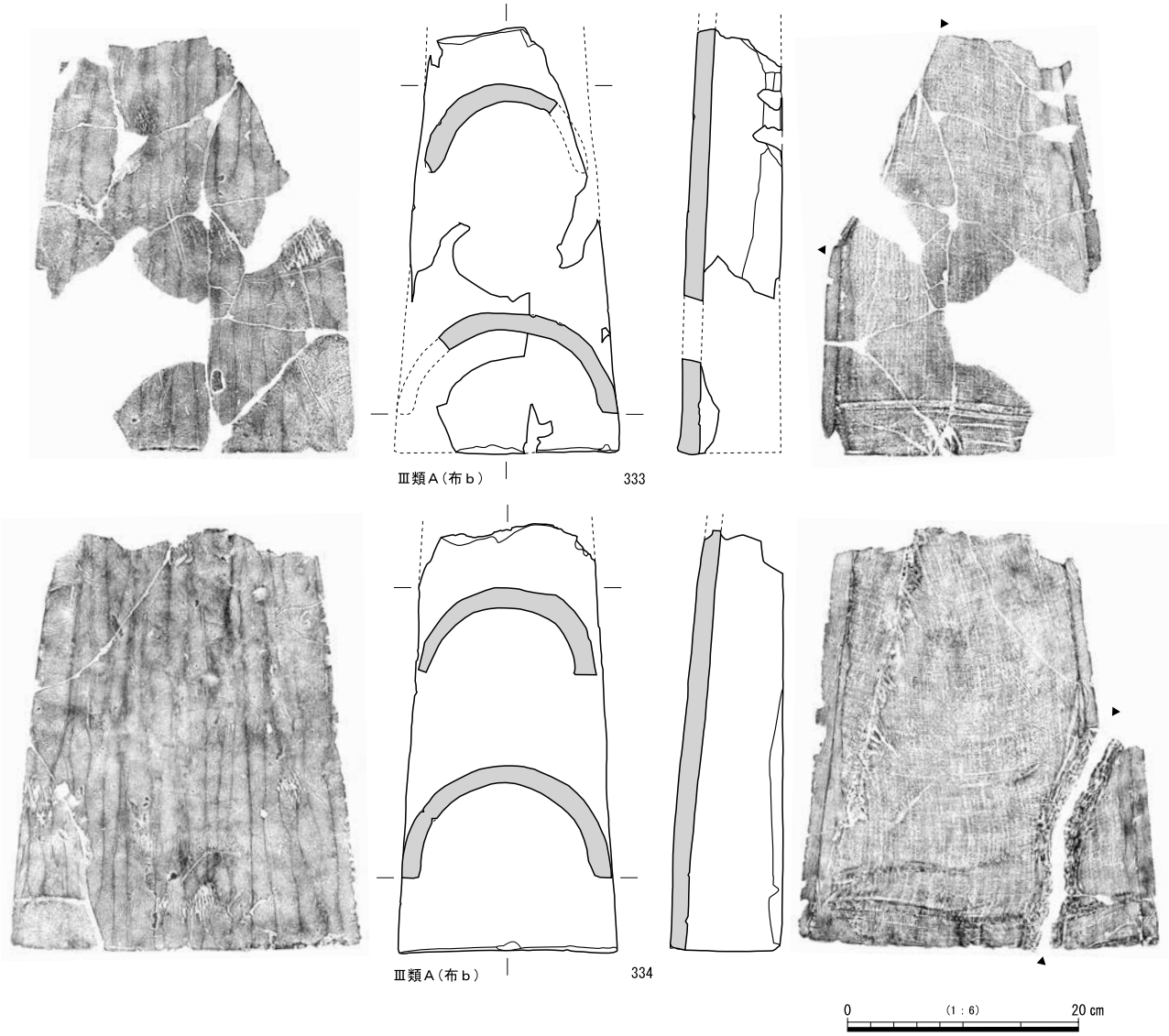


図 95　３号窯窯体内出土丸瓦（８）

Ⅲ類Ａ　333 ～ 364 はⅢ類Ａで、布袋に布ｂを使用するものである。凸面は全面縦方向に削り調整されている。削りの方向は、狭端側から広端側に削るものと反対方向のものが混在する。一部削り残しの部分には、斜め方向の縄叩きの痕跡が残る。凹面は両側縁を面取りしている。三角形状の粘土板素材を使用しており、斜め方向に粘土接合痕がみられる。粘土板の間に、糸切り痕が残らない帯状またはブロック状の粘土が確認できるものもある。側面は全面削り調整されており、Ⅱ類のように広端側に破面を残すものはみられない。長さは 44 ～ 45 ㎝のものが多く、335 や 346 のように 42 ㎝と短いものや、351 や 357 のように 46 ㎝とやや長いものも確認される。

333 と 334、335 と 336 は同一の粘土円筒から分割された個体である。布綴じ痕の位置に加えて、布にできた皺の位置と幅が一致している。333 の左上と 334 の右下には、右上がりの方向に粘土接合痕が残る。粘土の接合部には、中に布が巻き込まれている様子が確認される。ともに右下がりの方向に糸切り痕が残る。335 には右上がりの方向に粘土接合痕が残る。糸切り痕はともに横方向である。

接合痕の不明瞭な 359・360 を除くすべてが同様の粘土接合痕であり、一般的な縦方向の粘土接合痕は確認できない。347 と 349 では布が接合部に巻き込まれている。339 と 352 では、接合痕を境にして糸切り痕の方向が異なっており、右下では右上がり、左上では右下がりになっている。363 と 364 では

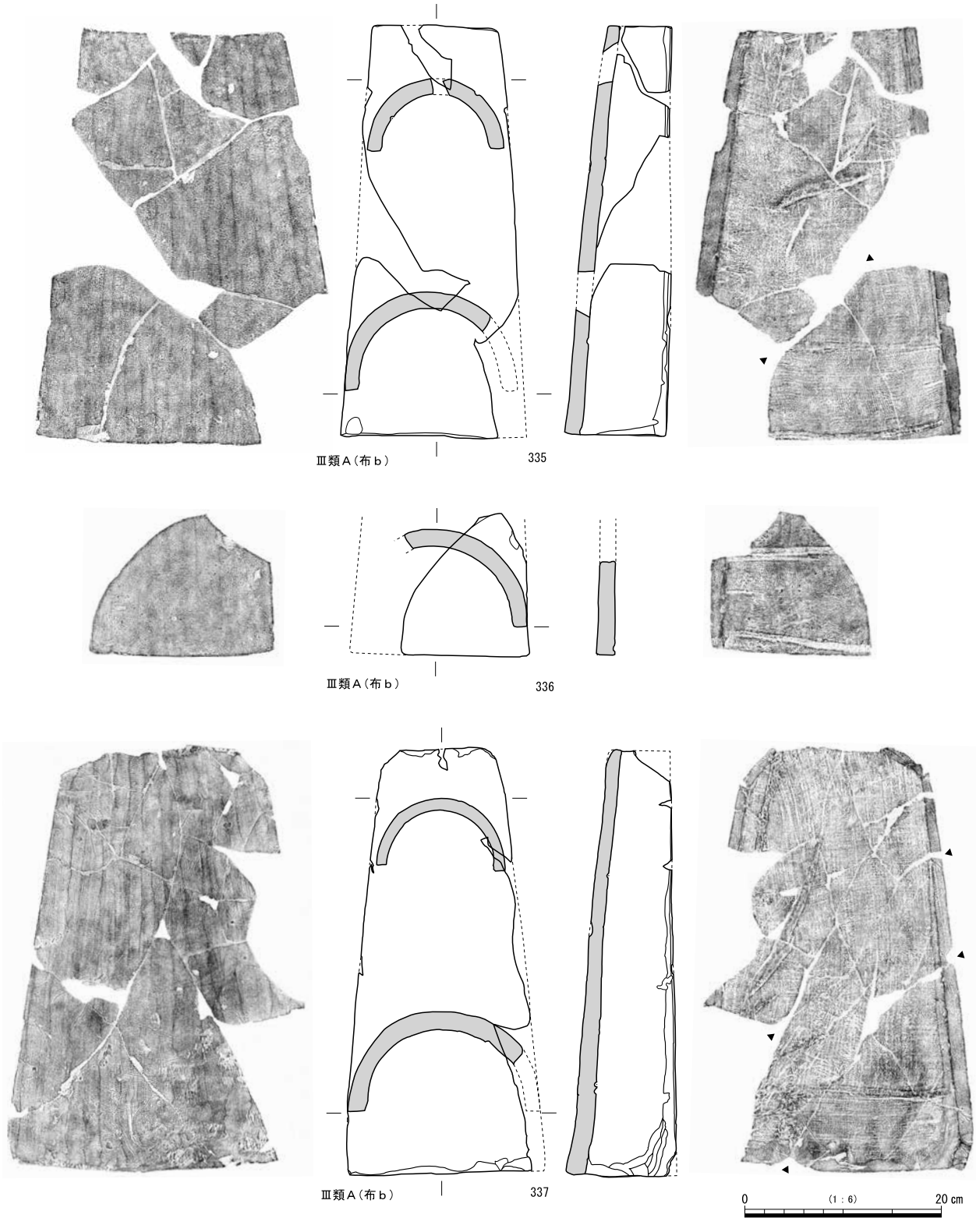


図 96　３号窯窯体内出土丸瓦（９）

糸切り痕が比較的明瞭に残っているが、接合痕を境にして糸切り痕は途切れている。337・340・342・343・351・353・362・363 には、間を空けて平行する粘土接合痕が確認される。345・352 では、接合痕が途中で枝分かれしてＶ字形になっている。接合痕の間には小さな粘土が充填されており、337 や 353 のように紐状の粘土を用いるものも確認できる。

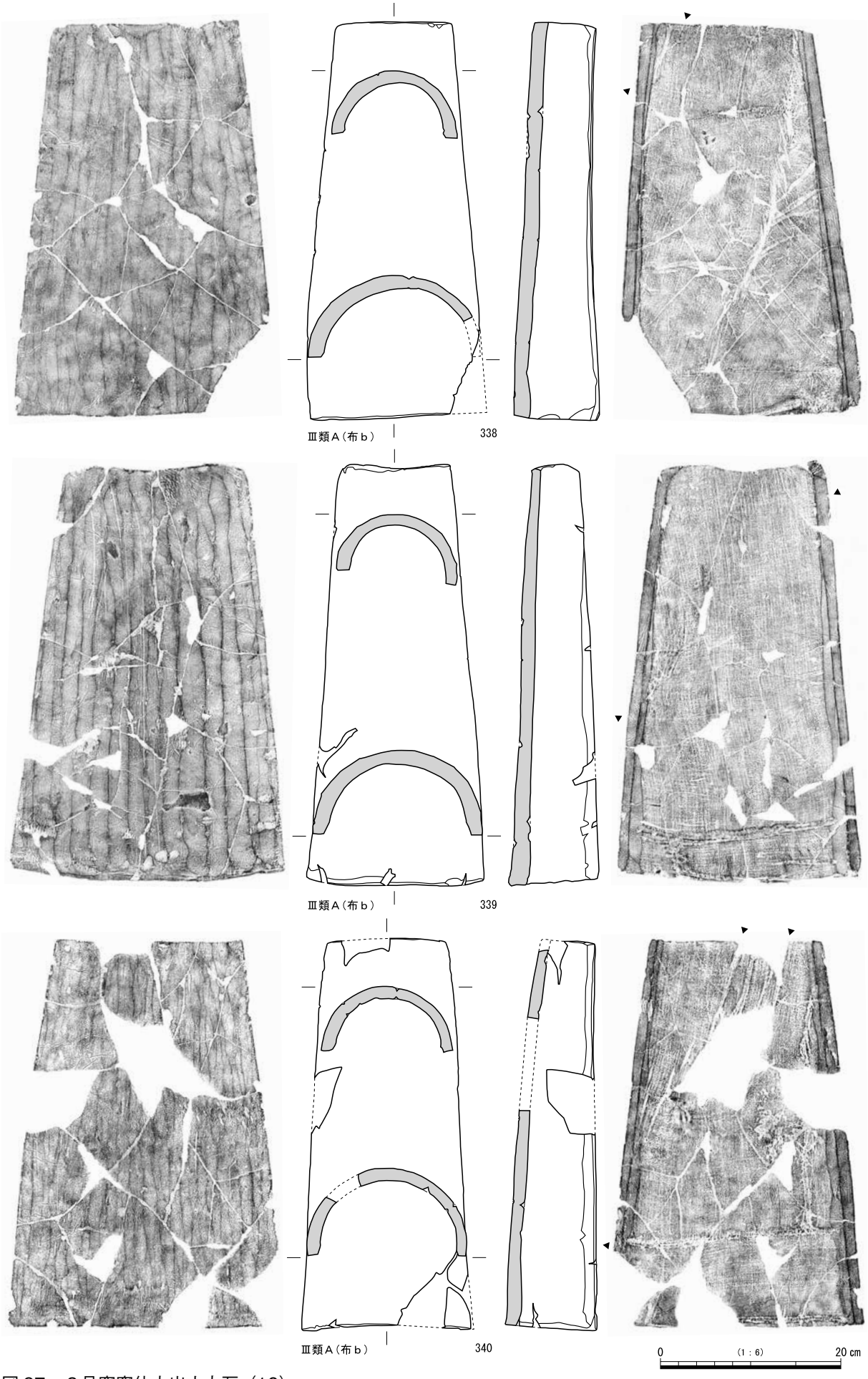


図 97　３号窯窯体内出土丸瓦（10）

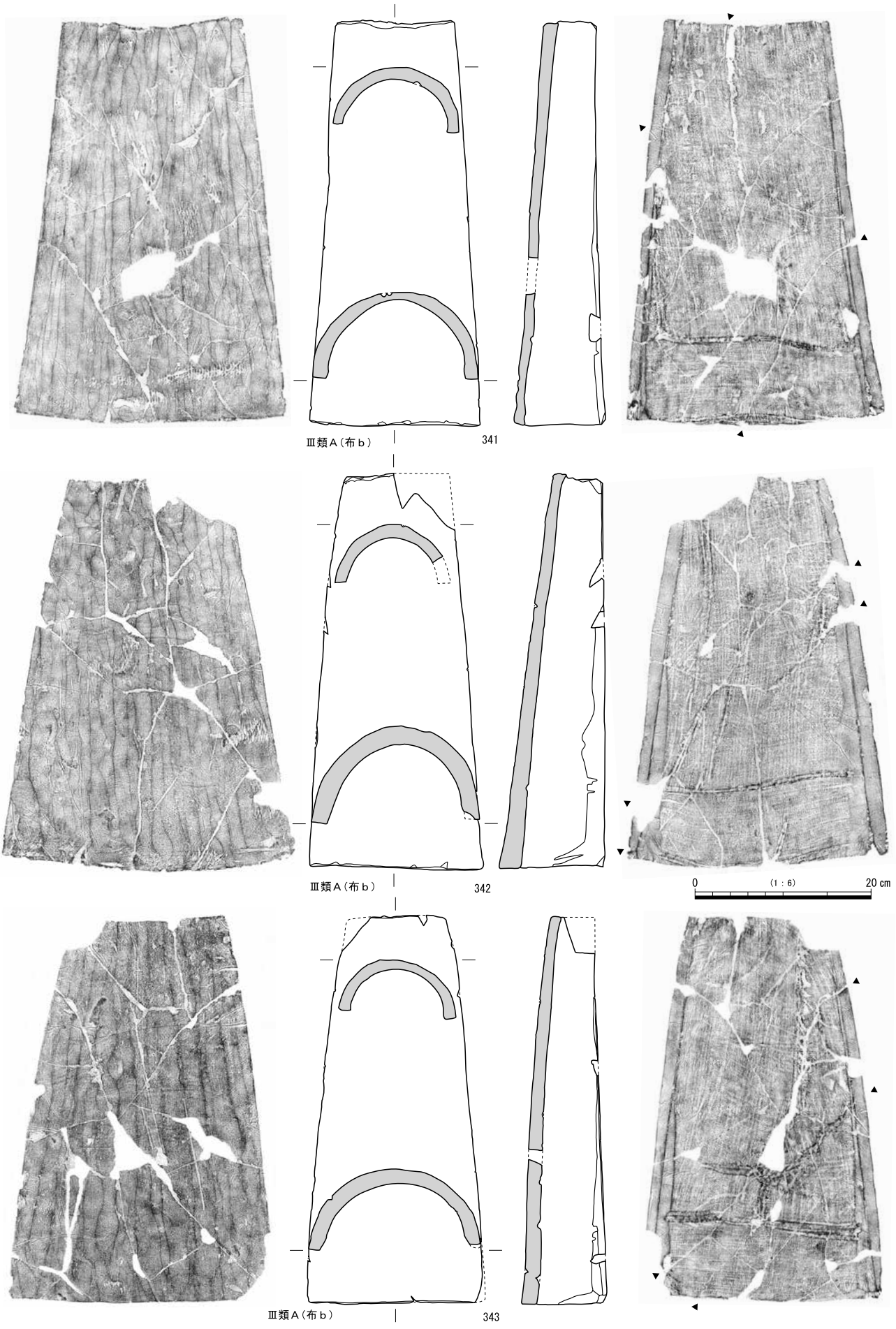


図 98　３号窯窯体内出土丸瓦（11）

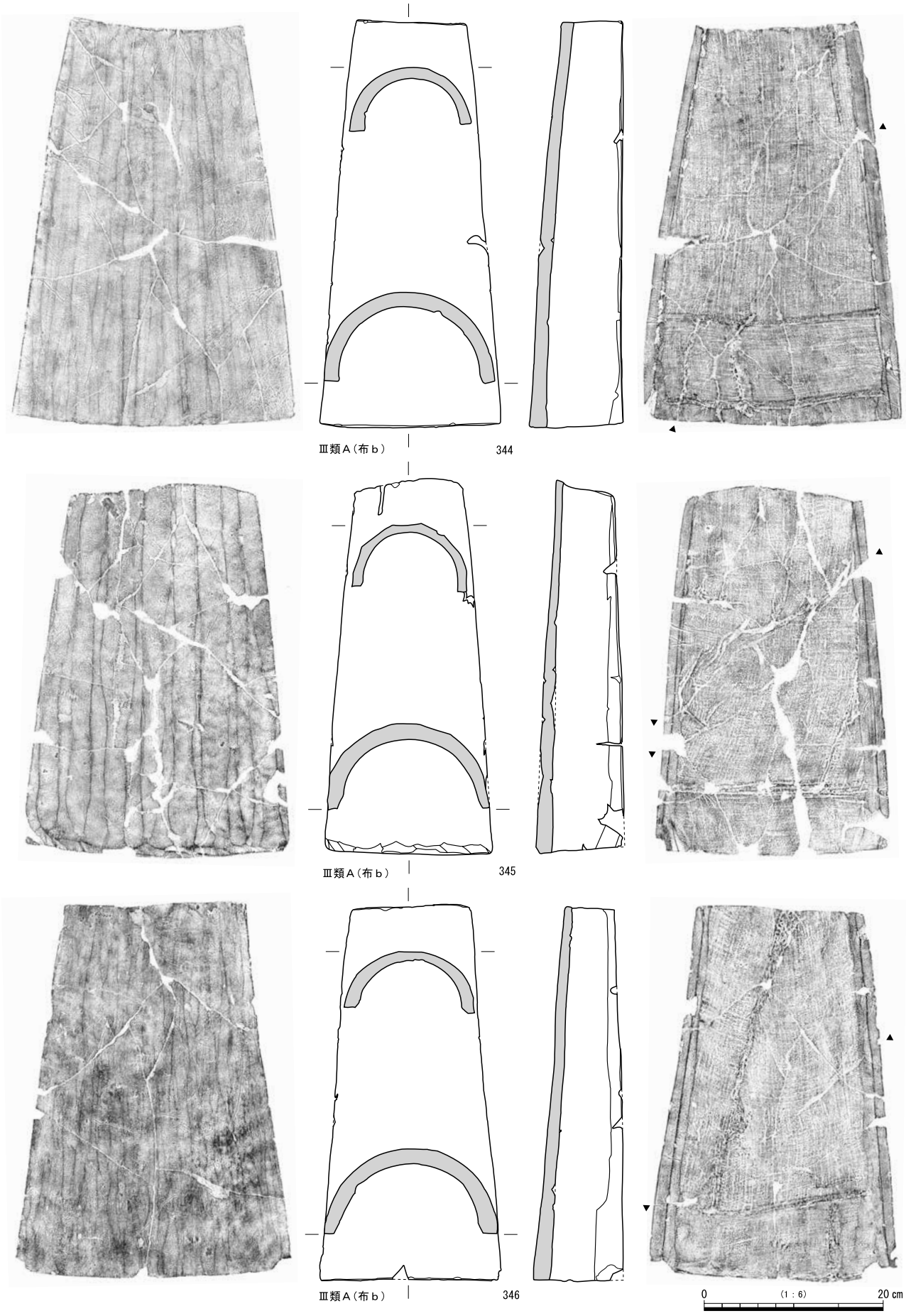


図 99　３号窯窯体内出土丸瓦（12）

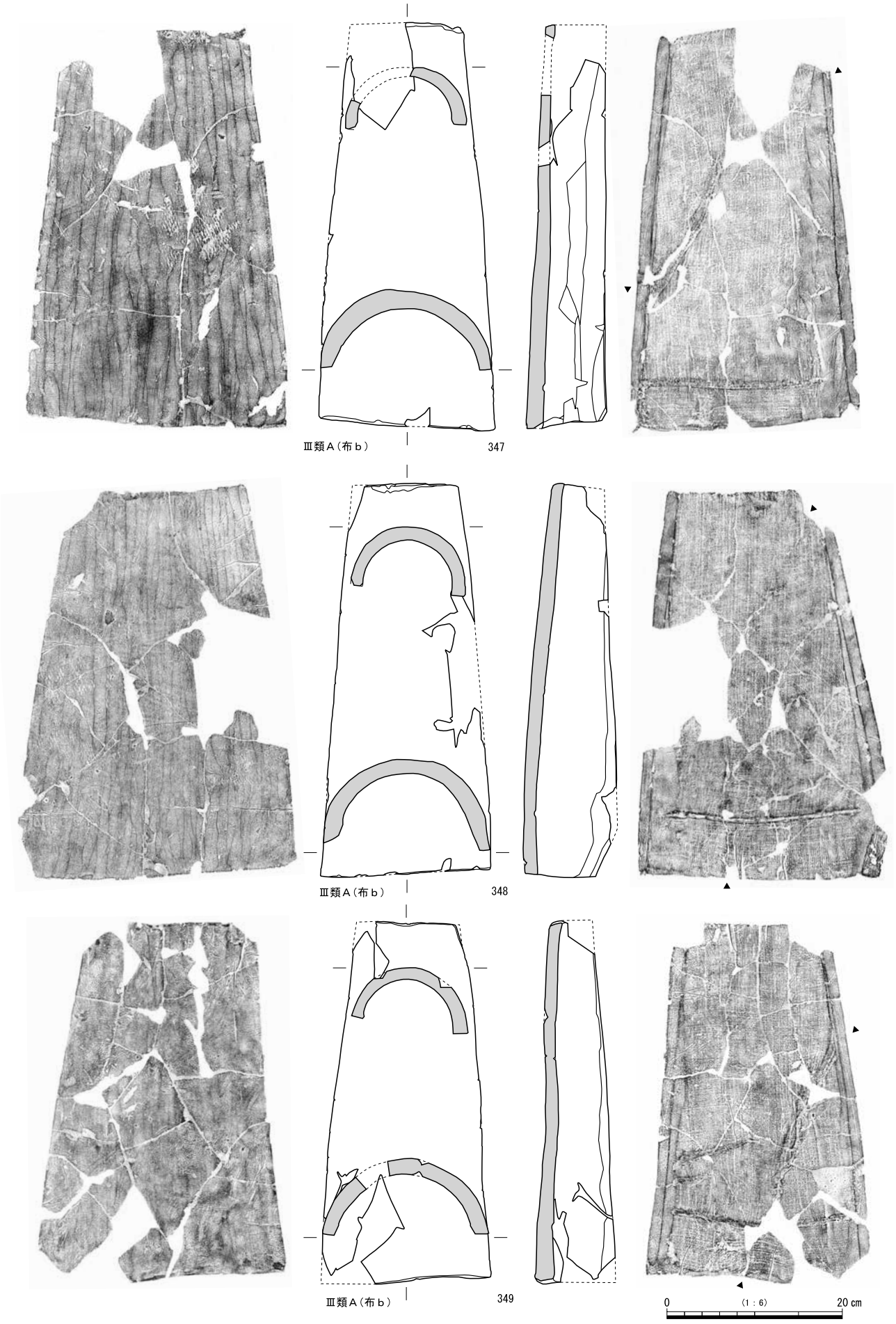


図 100　３号窯窯体内出土丸瓦（13）

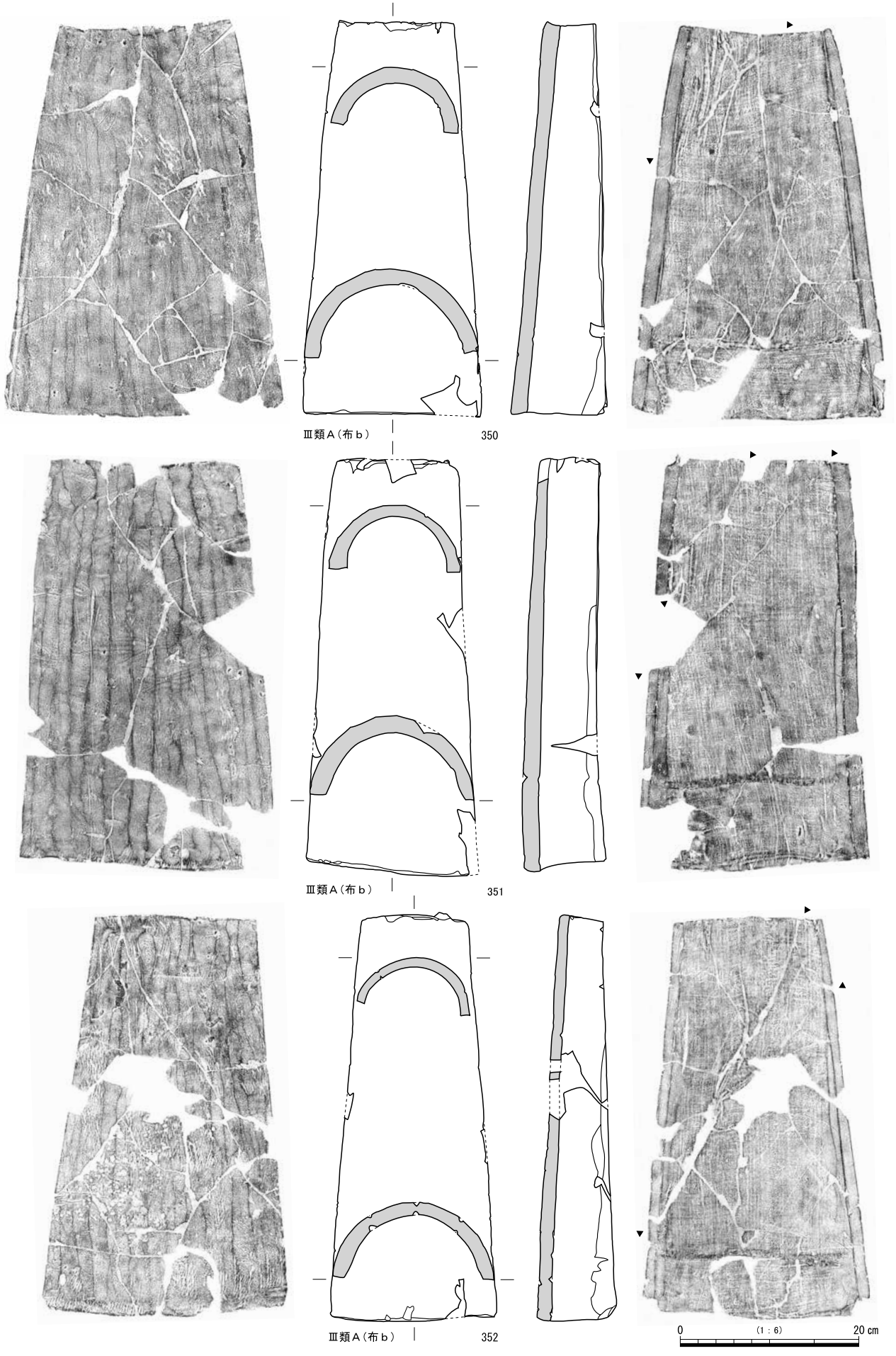


図 101　３号窯窯体内出土丸瓦（14）

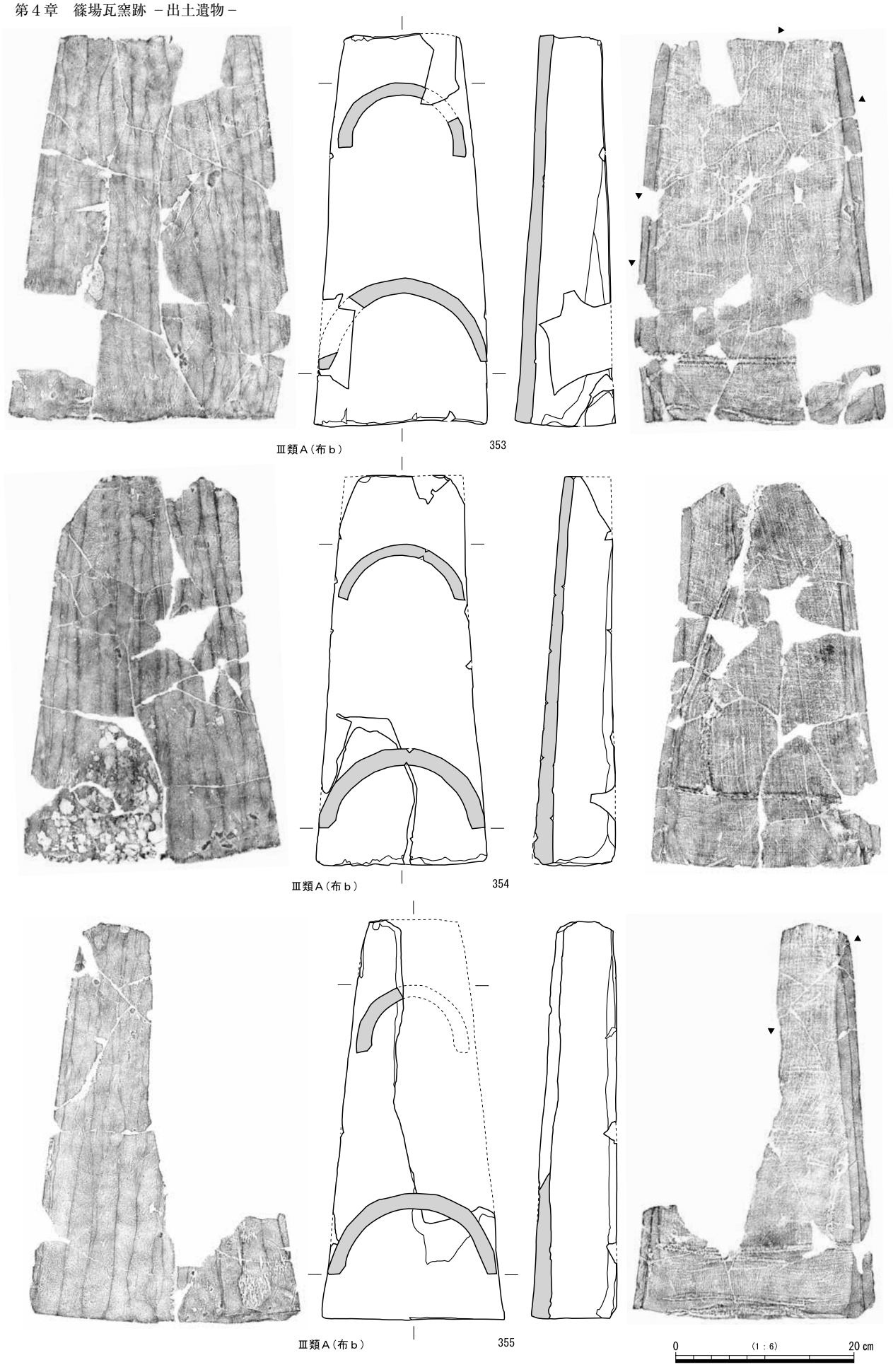


図 102　３号窯窯体内出土丸瓦（15）

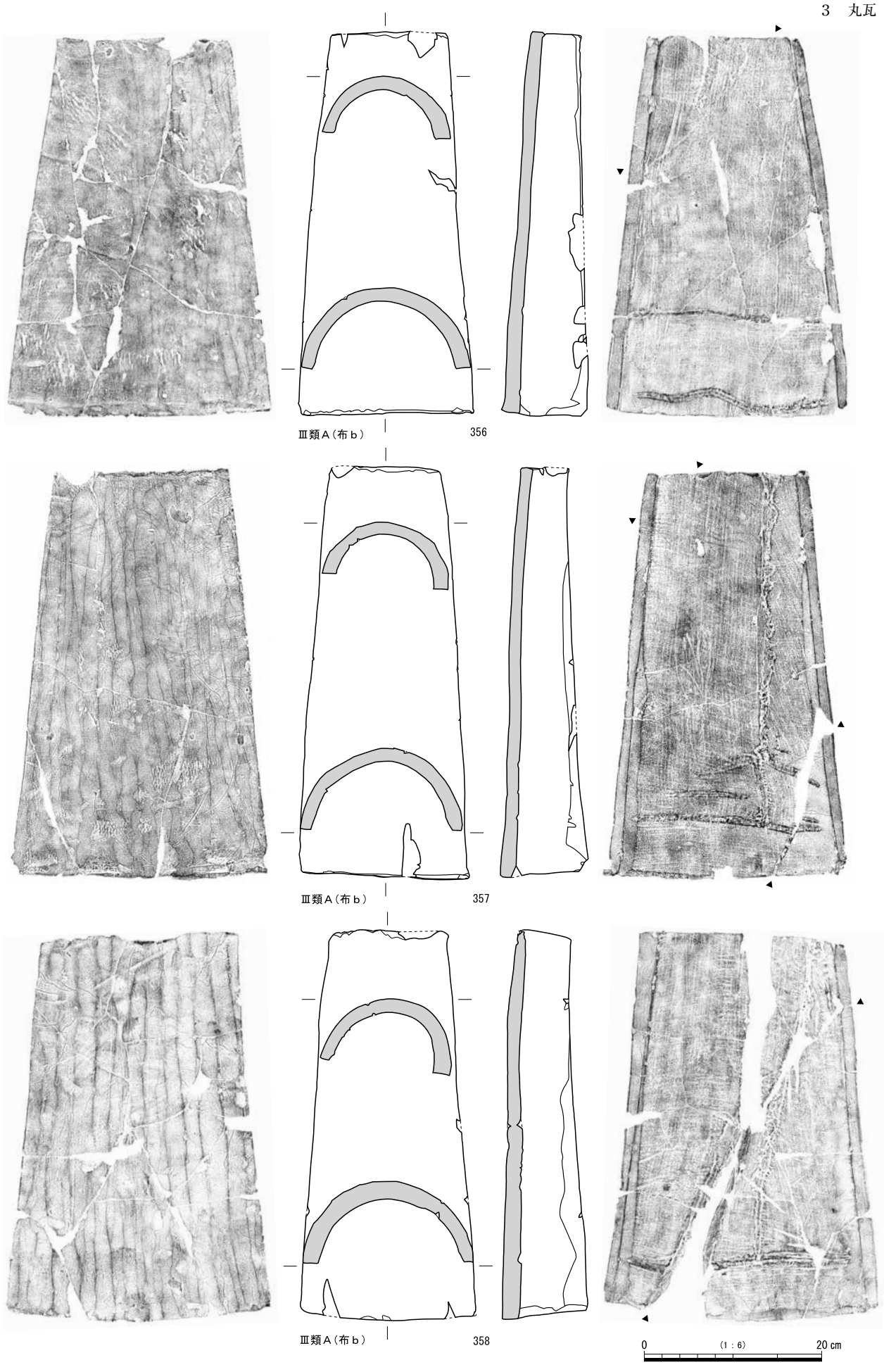


図 103　３号窯窯体内出土丸瓦（16）

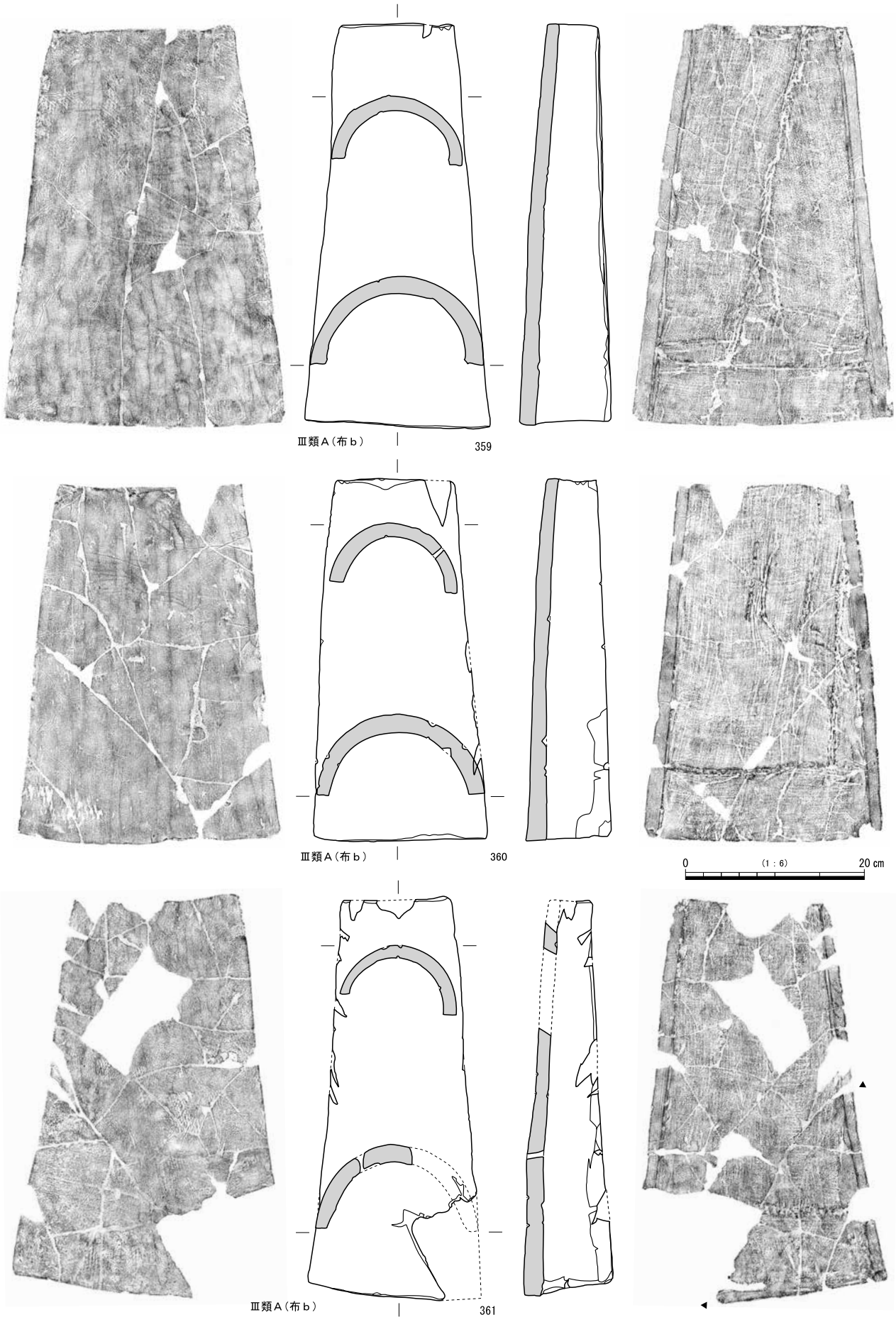


図 104　３号窯窯体内出土丸瓦（17）

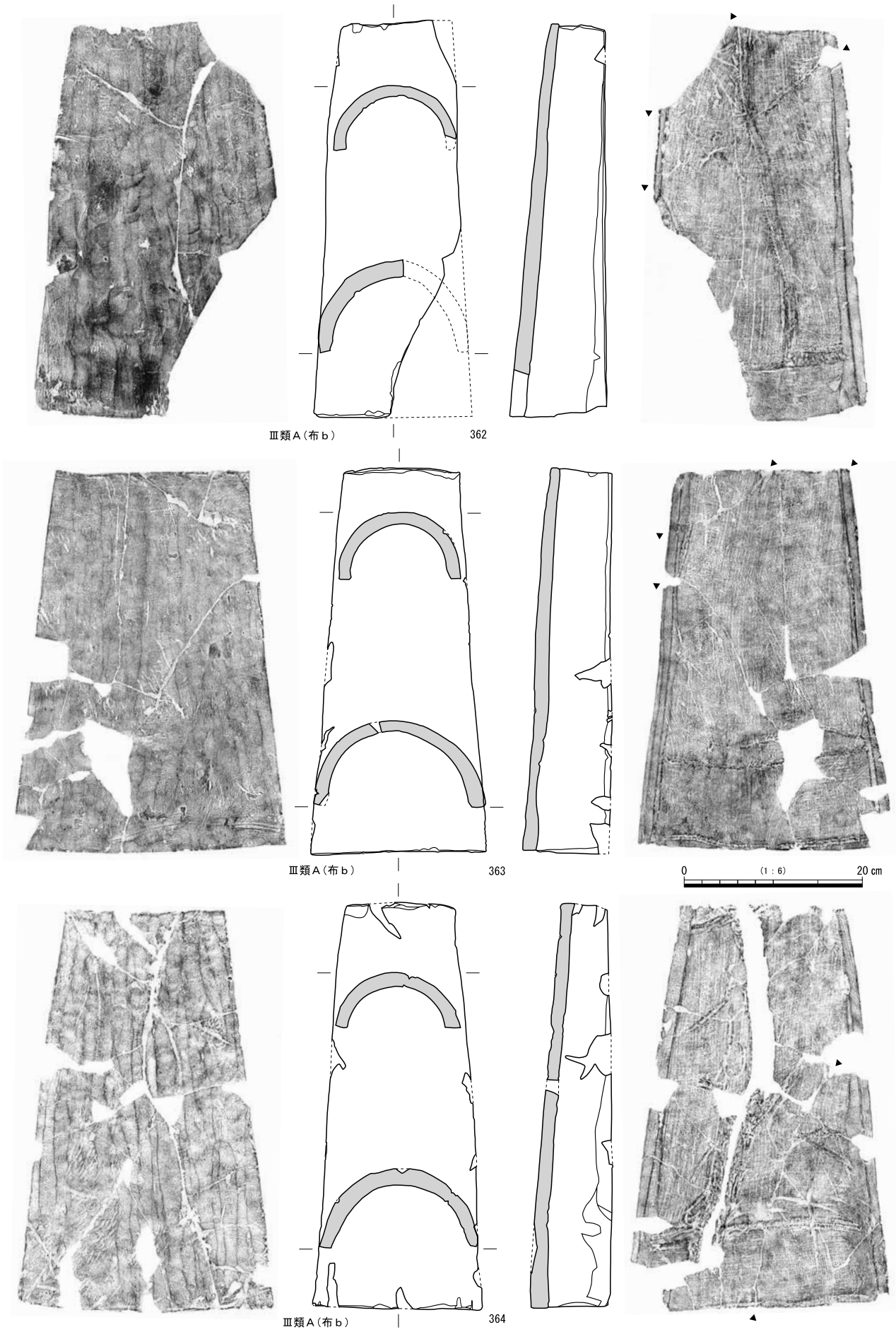


図 105　３号窯窯体内出土丸瓦（18）

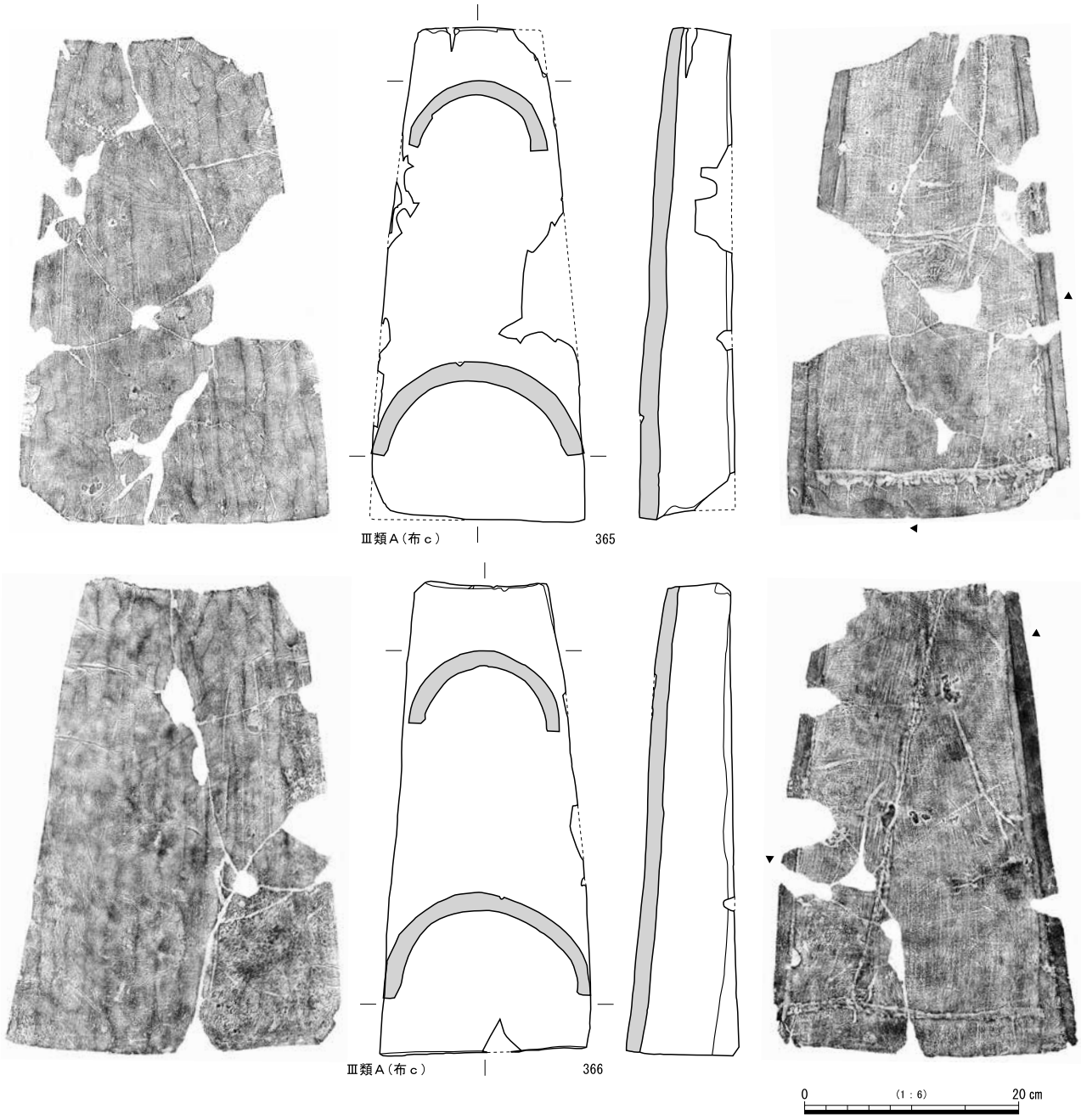


図 106　３号窯窯体内出土丸瓦（19）

347 の広端部側の側面には、一部分割破面が確認できる。破面は凹面側に残っており、凸面側から分割截線を入れていることがわかる。335 ～ 342・344・351 ～ 353・355 ～ 357・363・364 では、凹面の広端側に布端が確認される。広端付近が布足らずの状態になっているが、Ⅱ類とは異なり側板の痕跡は認められない。凹凸がほとんどないことから、杵型の模骨であるとみてよい。

凹面には、布ｂの上下の布の継ぎ目や筒状に綴じた綴じ目が確認できる。いずれも上部の布の綴じ目では、布端の纏りの大部分が外れ布端の解れが目立つ。その他には、布の大きな破損はみられない。341 と 362 では、布ｂを裏返した状態で使用している。

356 と 361 は凸面の削り調整が部分的なものである。356 は右半のみ､361 は狭端側のみ削り調整する。削り調整が施されない部分には横ナデ調整が残っており、全面を横ナデした後に削り調整していることがわかる。削り調整を施すⅢ類Ａと、削り調整を施さないⅢ類Ｂとの中間的なものといえる。

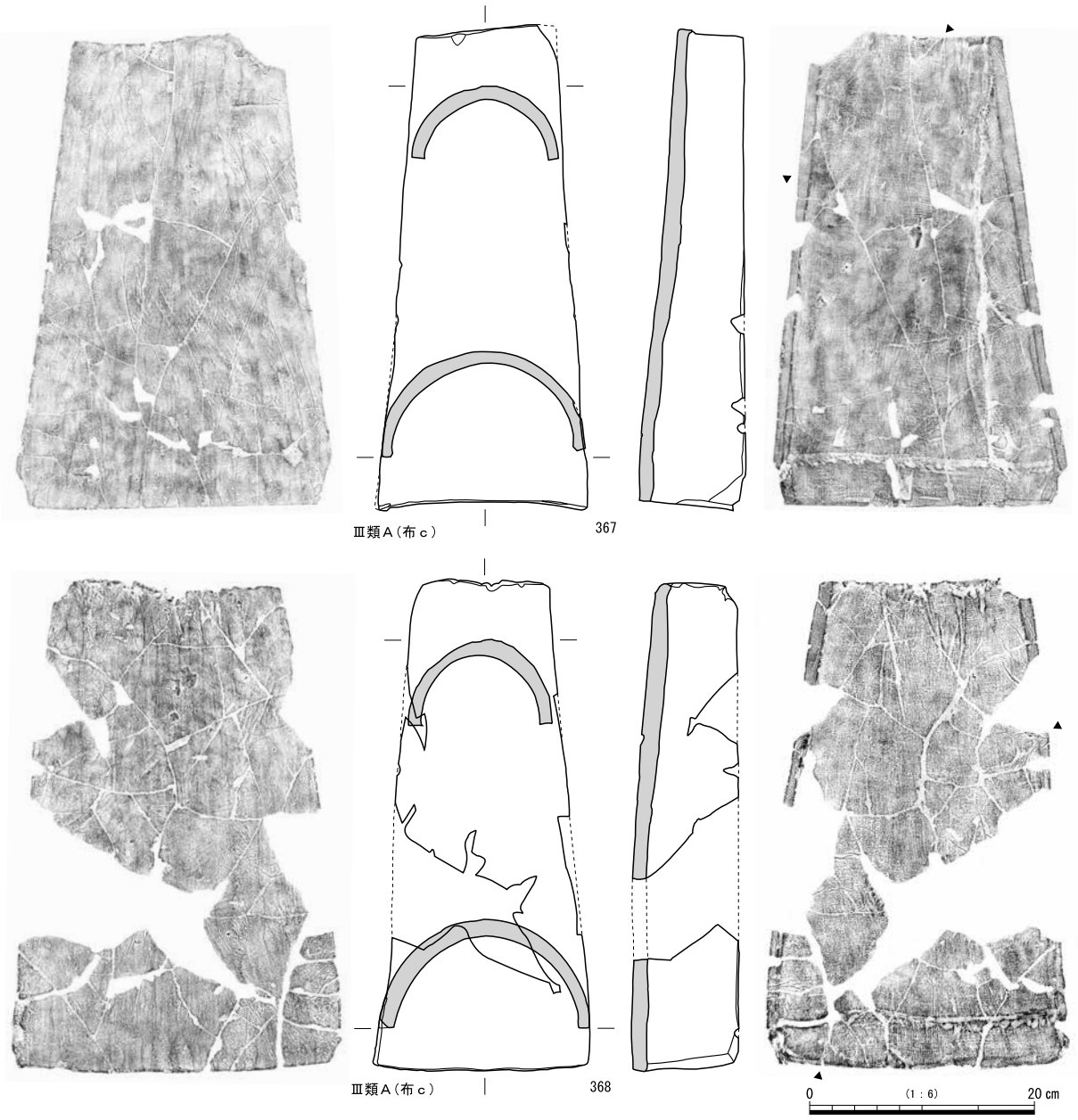


図 107　３号窯窯体内出土丸瓦（20）

365 ～ 388 はⅢ類Ａで、布袋に布ｃを使用するものである。三角形状の粘土板が使用されており、調整技法も布ｂを使用するものと変わらない。長さも同様で、44 ～ 45 ㎝のものが多く、369 や 371 のように 40 ㎝前後の短いものや 387 のように 46 ㎝と長いものも一部存在する。

365 と 366、367 と 368 は、粘土の接合痕や布の綴じ目、布の皺などが一致しており、同一の粘土円筒から分割された個体であることがわかる。いずれも右上がりの方向に粘土接合痕が残る。365 と 366 には糸切り痕が比較的明瞭に残されており、365 と 366 の左上には横方向に、366 の右下には左下から右上に向かって弧を描く。367 と 368 の凹面には、部分的にナデ調整が施されている。

布ｃには綴じ目に破損が認められる。破損箇所は上の布の綴じ目であり、下に布を継ぎ足した接合部に破れが確認される。この部分が残るものは、366・367・370・371・373 ～ 375・380・383・385・387 の 11 点である。このうち、373 には破れは発生しておらず、ほかのものは縫い目が破損して穴が空い

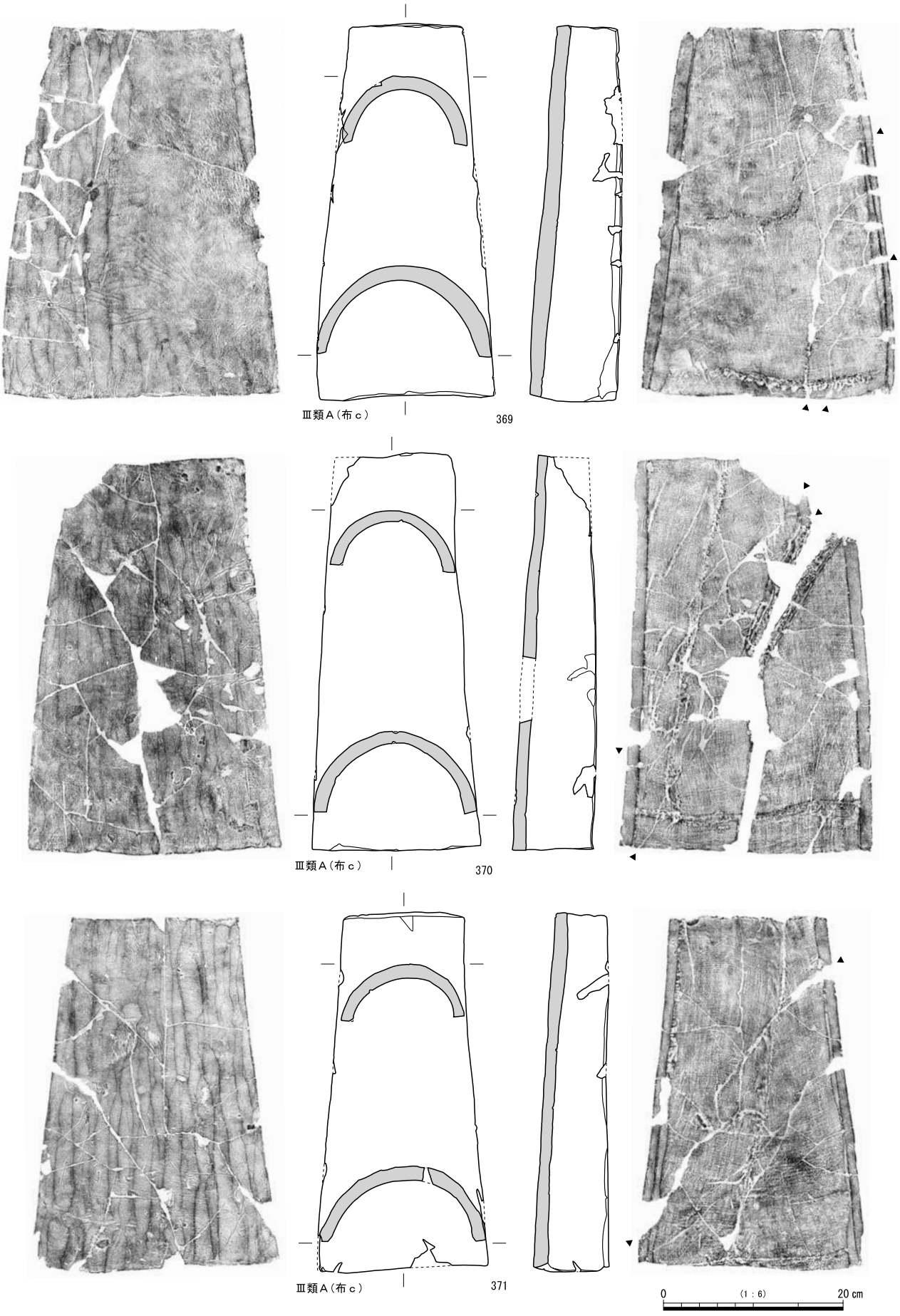


図 108　３号窯窯体内出土丸瓦（21）

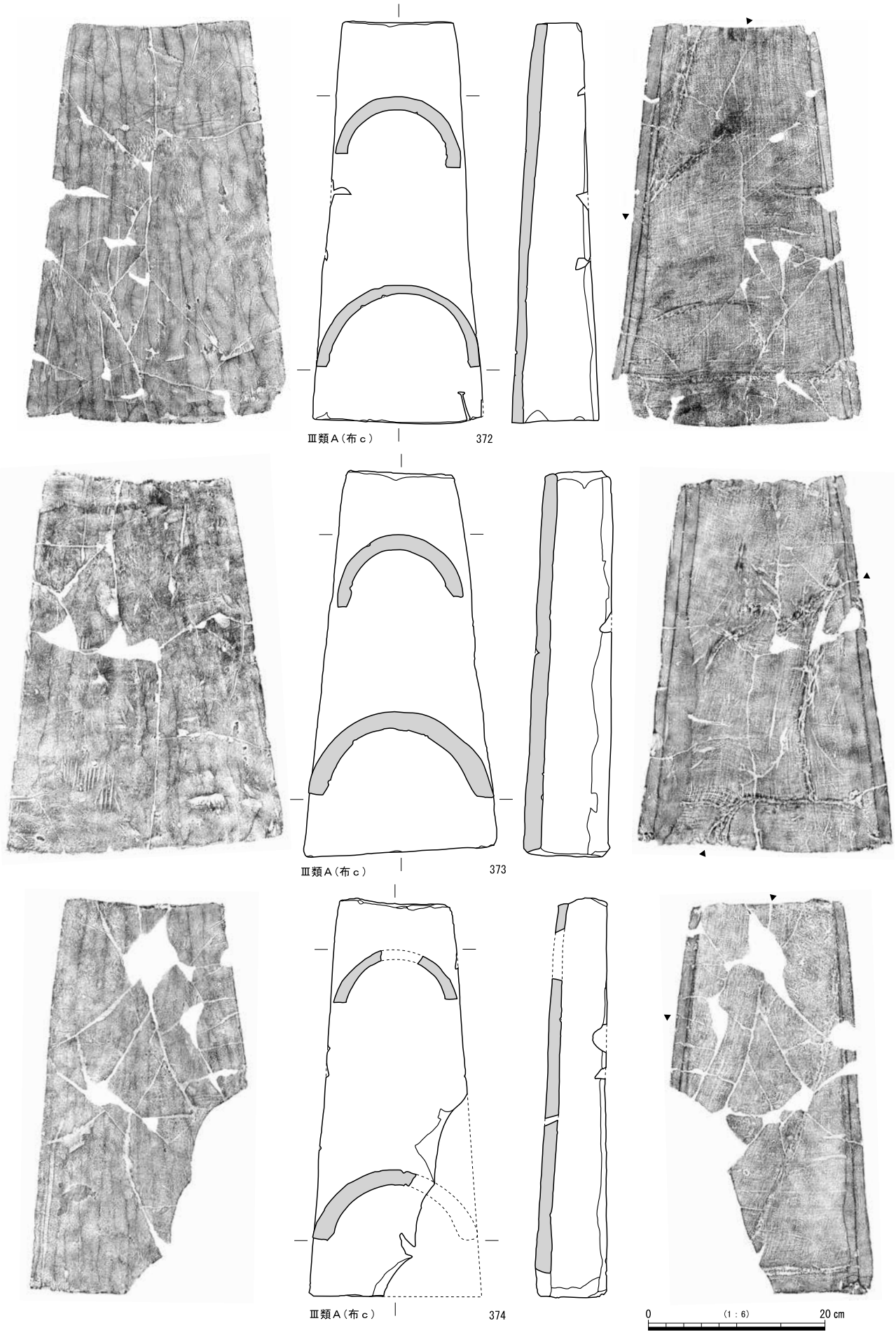


図 109　３号窯窯体内出土丸瓦（22）

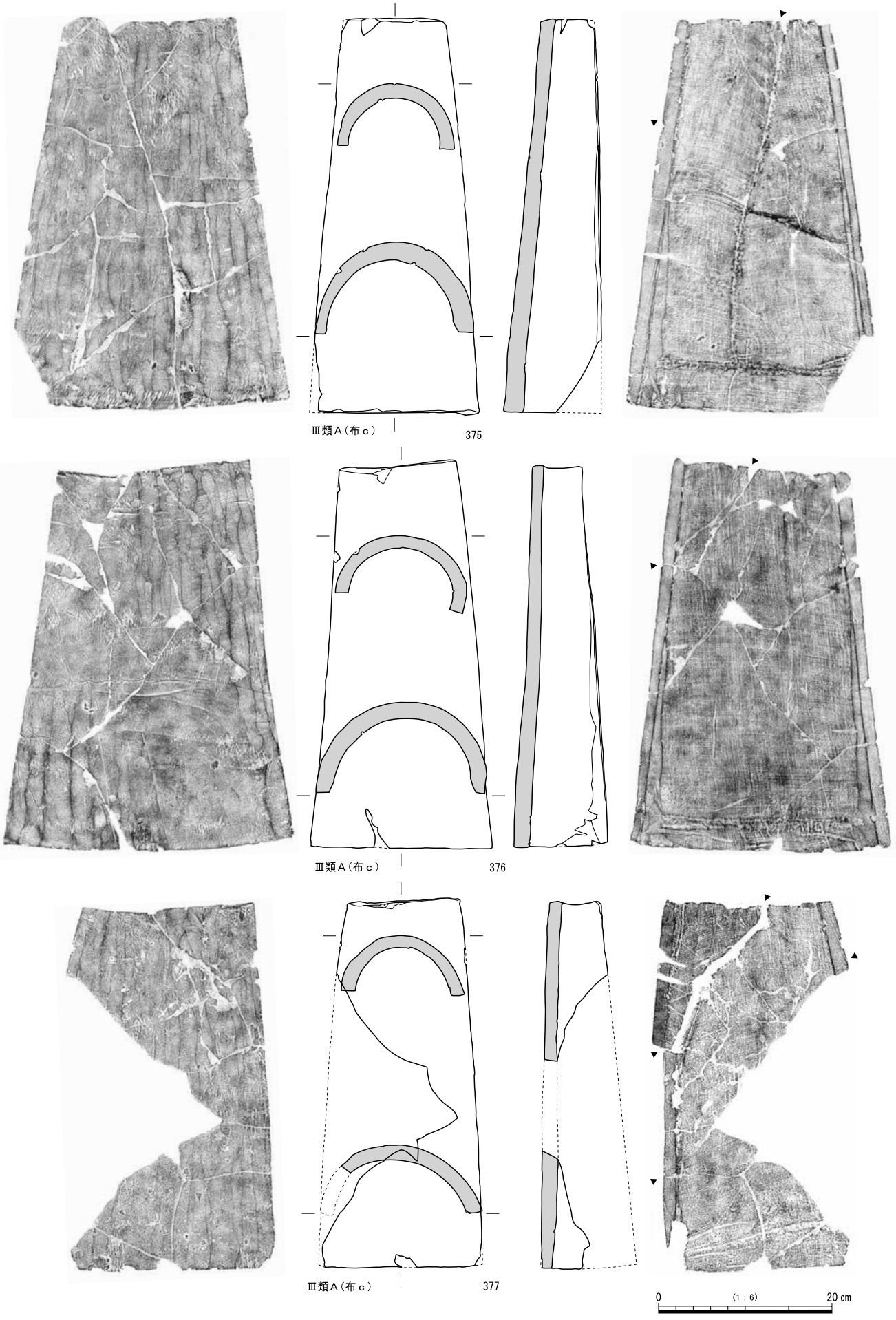


図 110　３号窯窯体内出土丸瓦（23）

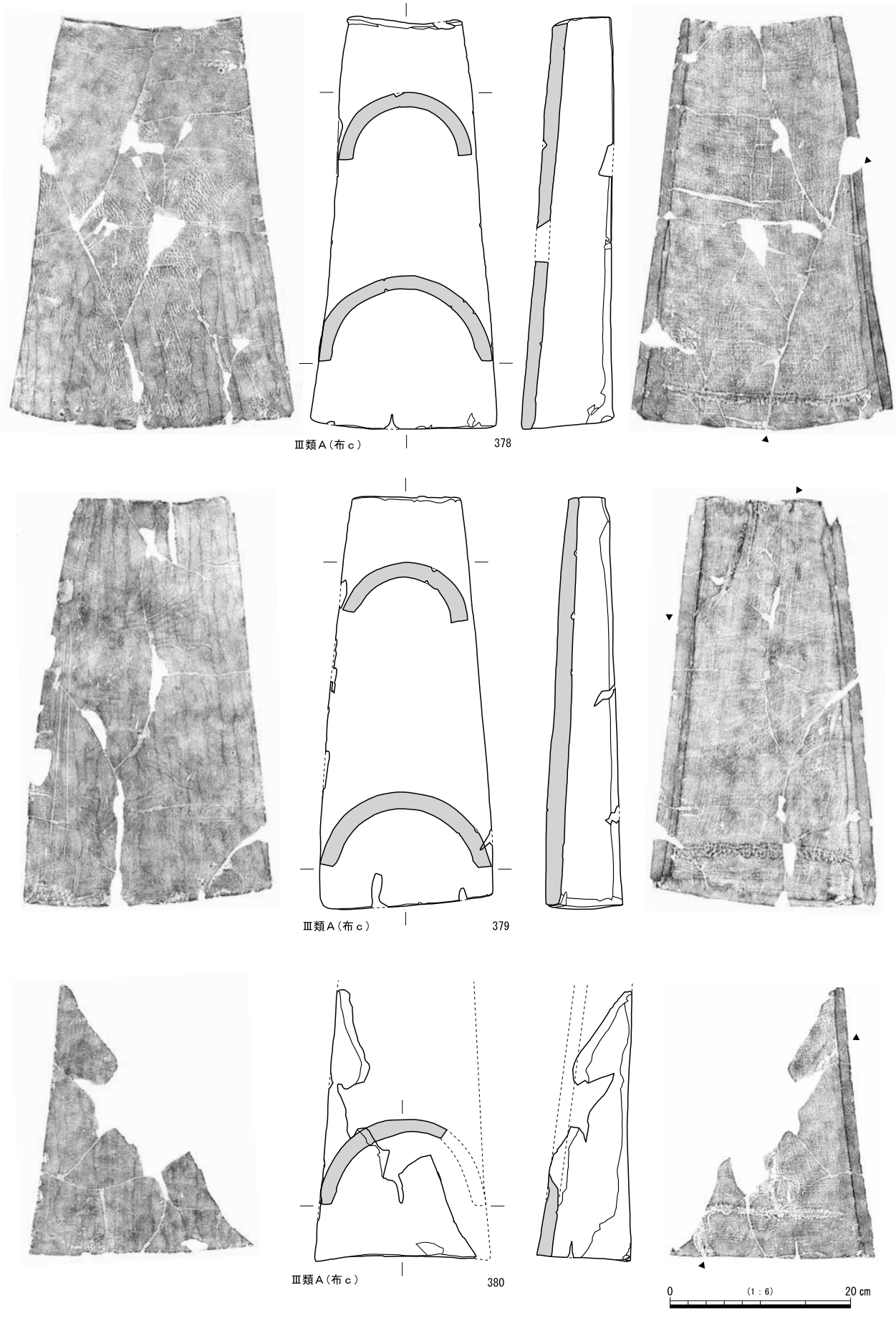


図 111　３号窯窯体内出土丸瓦（24）

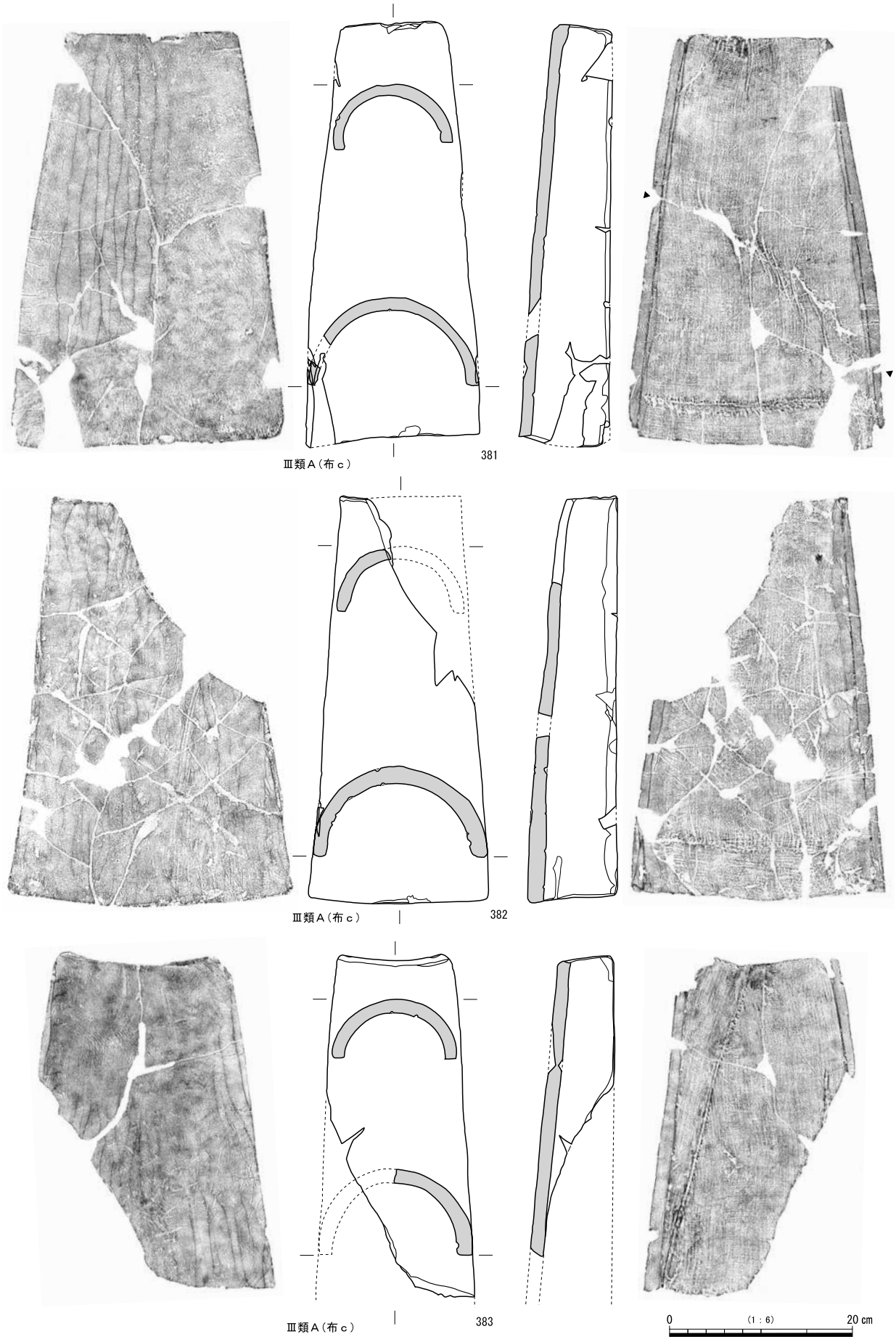


図 112　３号窯窯体内出土丸瓦（25）

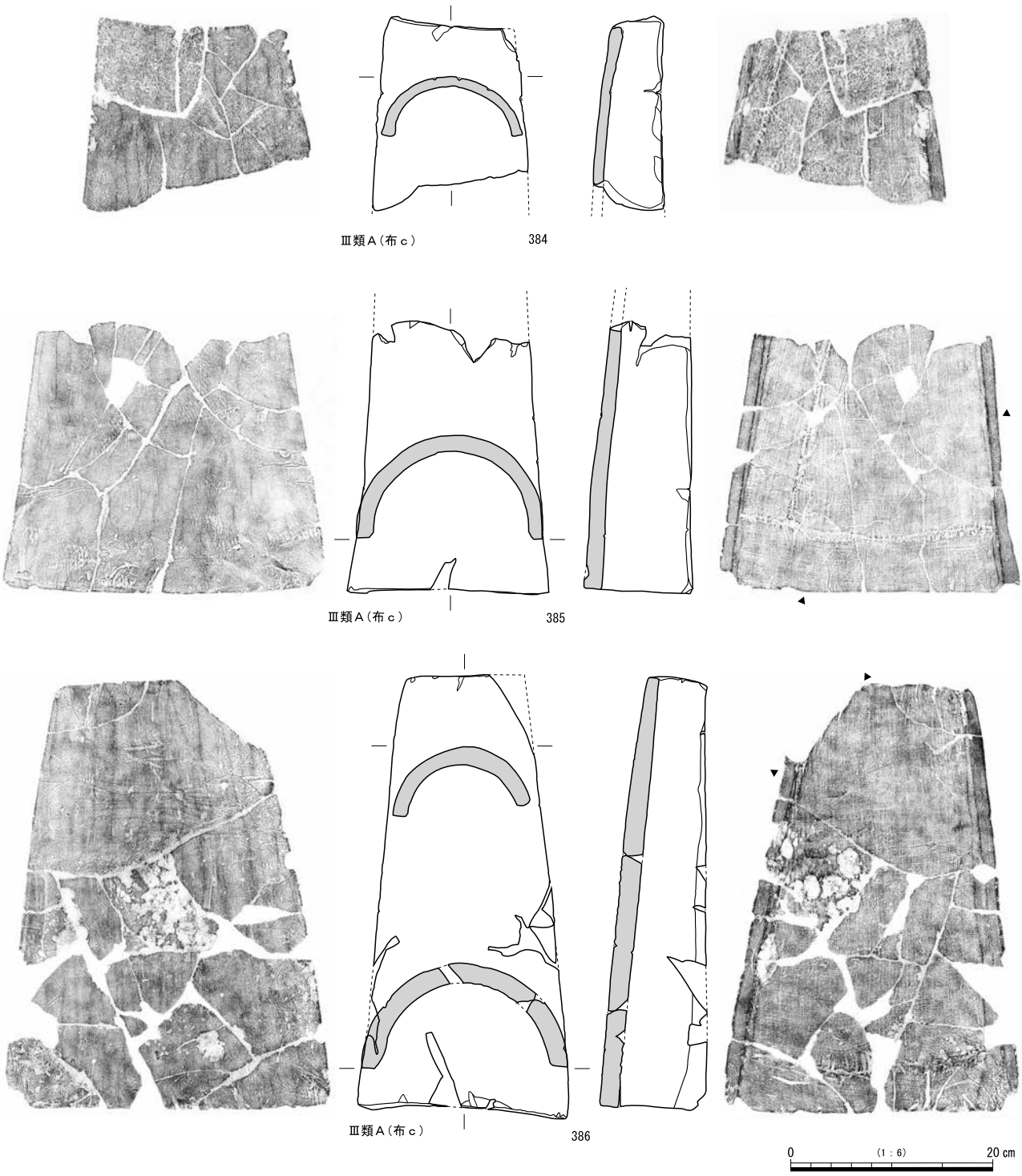


図 113　３号窯窯体内出土丸瓦（26）

たような状態になっている。破損箇所の長さは、370 が 3.8 ㎝、385 が 4.7 ㎝、383 が 5.5 ㎝、375・387 は６㎝となっており、徐々に破損の範囲が広がっている様子が見てとれる。

凹面には、糸切り痕が比較的明瞭に残る。371 と 388 では、接合痕を境に糸切り痕の方向が異なっている。371 では、左上では糸切り痕が右下がりに、右下では右上がりになる。388 では、左上では右上がり、右下では右下がりになっている。また、377・379・381・387 では、粘土接合痕を境に糸切り痕が途切れている状態が確認される。

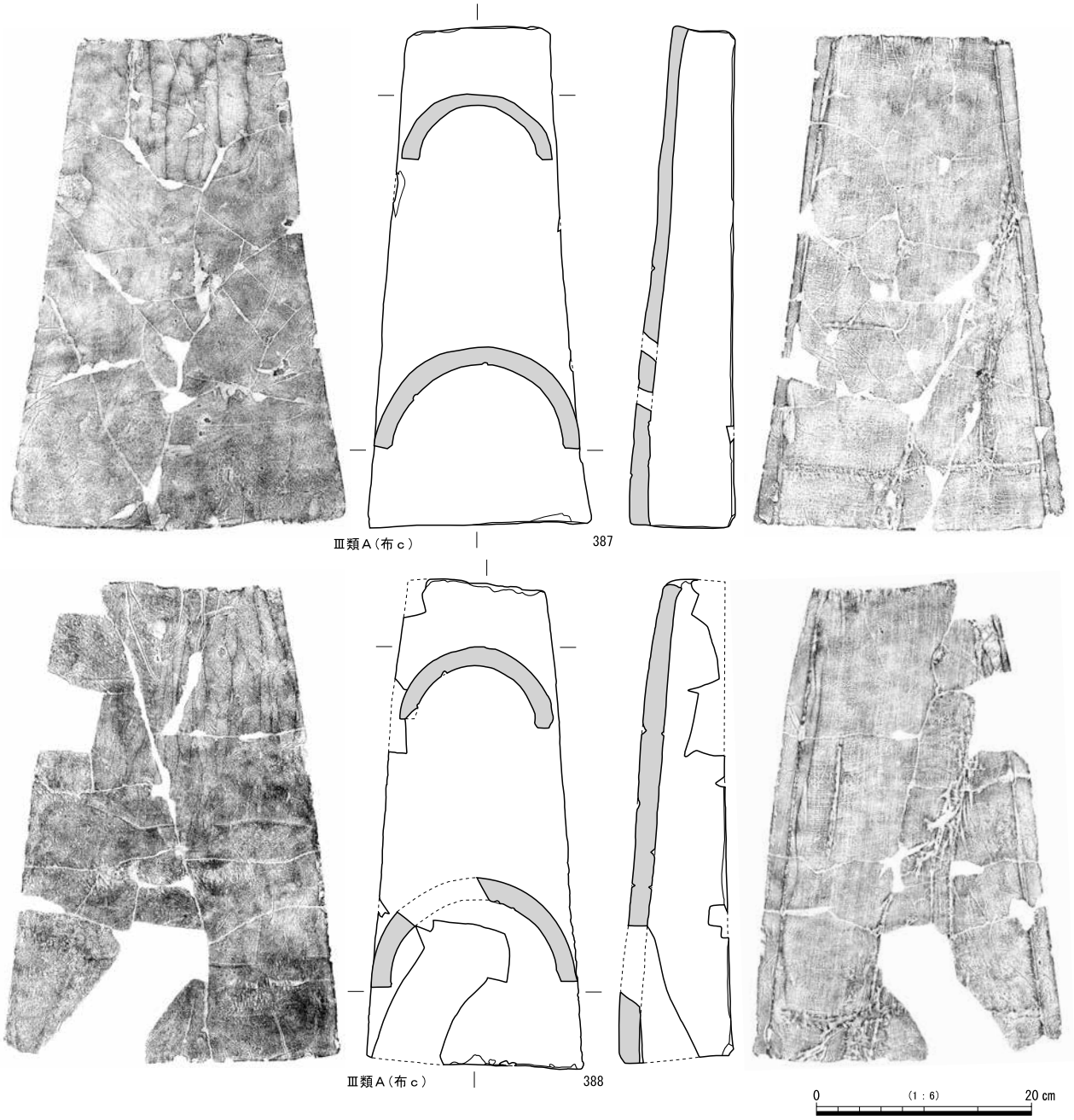


図 114　３号窯窯体内出土丸瓦（27）

破片のもの以外には、いずれも斜め方向に粘土接合痕が認められており、先の糸切り痕の状況と合わせ、三角形状の粘土板が使用されていることがわかる。381 以外は粘土接合痕が右上がりであり、模骨に対して右回りで粘土板を巻き付けていることがわかる。381 は粘土接合痕が左上がりである。左巻きのものはこの１点のみであり、何らかの偶発的な要因による産物とみてよい。

凸面は全面に縦方向の削り調整を施すものが大半であるが、369・376・381・383・387・388 のように、削り調整が部分的にしか施されていないものも確認される。369 と 381 は全体の半分程度、382 は狭端側を削り残している。376 は広・狭端側の半分程度、387 と 388 は狭端側の中央付近のみ削り調整を施している。これらは、Ⅲ類ＡとＢの中間形態とみることができる。前述のように 383 と 387 は、布綴じ痕の破れが大きくなった段階のものであることからすると、Ⅲ類Ａの削り調整が省略され、Ⅲ類Ｂ１が成立した可能性も考えられる。

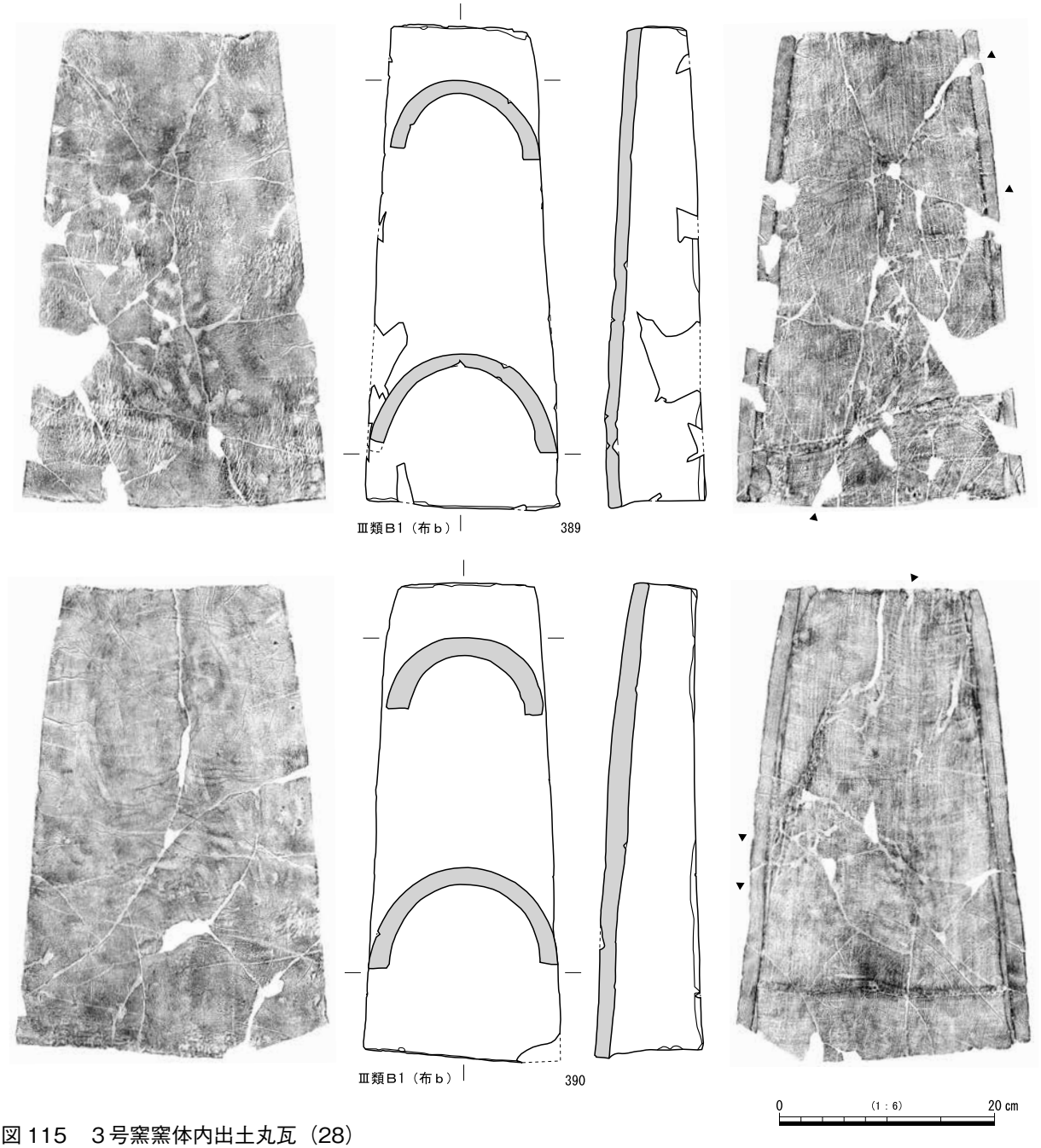


図 115　３号窯窯体内出土丸瓦（28）

Ⅲ類Ｂ１　389 ～ 393 はⅢ類Ｂ１で､布袋に布ｂを使用するものである。凸面は全面横ナデ(回転ナデ)調整を基本とするが、部分的に縦ナデも併用している。一部ナデ残しの部分には、斜め方向の縄叩きの痕跡が残る。その他の技法はⅢ類Ａと同様であり、凹面は両側縁を面取りする。三角形状の粘土板素材を使用しており、斜め方向に粘土接合痕がみられ、粘土板の間の隙間には小型の粘土を充填している。側面は全面削り調整されている。法量についても、全長 44 ～ 45 ㎝・狭端幅 12 ～ 13 ㎝・広端幅 19 ～ 20 ㎝とⅢ類Ａと同様であり、同一の模骨が使用されていた可能性がある。

いずれも右上がりの方向に粘土接合痕が確認される。389 ～ 391 では粘土板の間に隙間があり、その間に小型の粘土が充填されている様子がみてとれる。391 には凸面にまで粘土の接合痕が残されている。いずれも糸切り痕が明瞭に残り、389 では粘土接合痕を境に方向が異なることが確認でき、391 と 393 では接合痕で糸切り痕が途切れている。

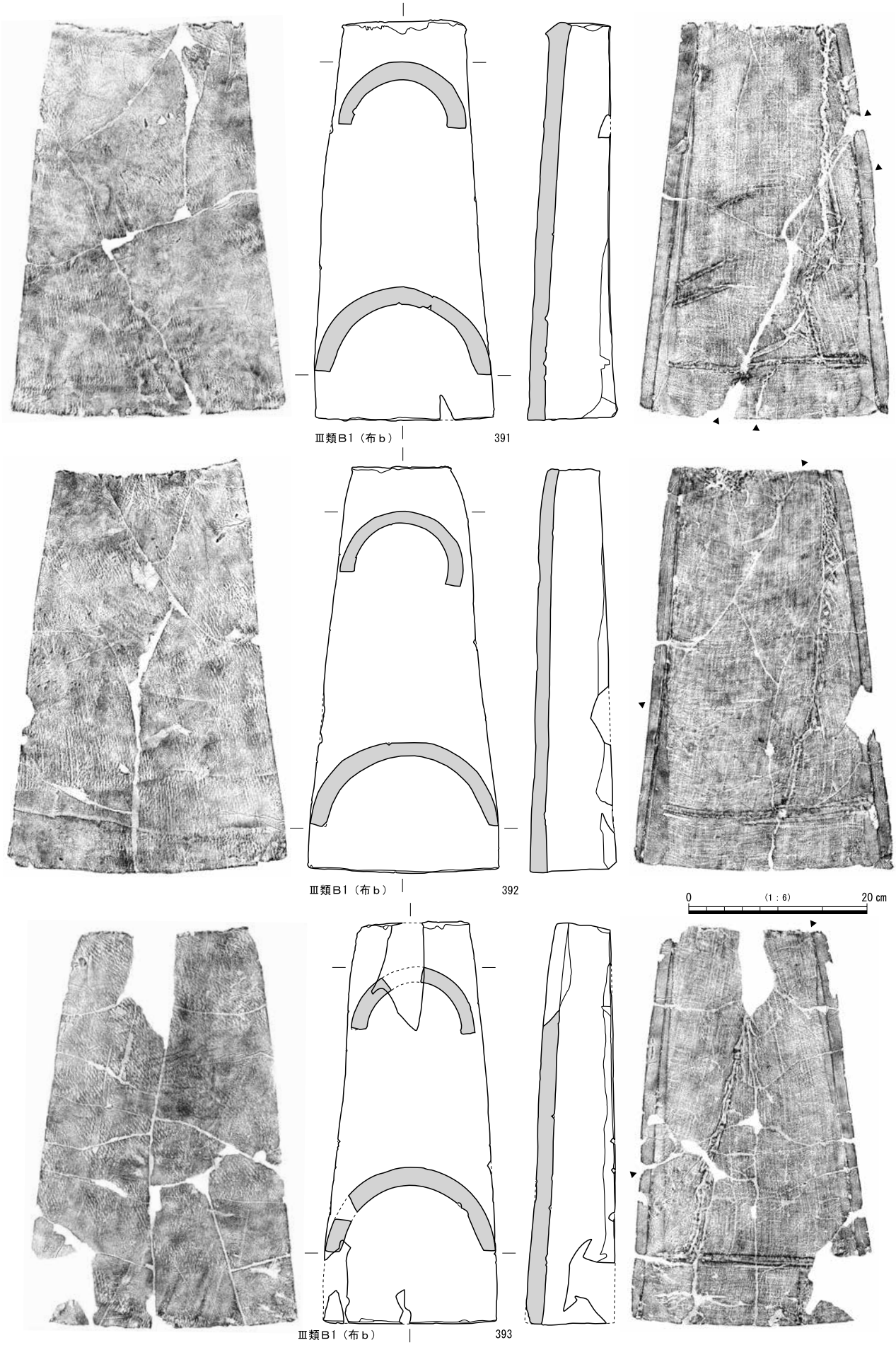


図 116　３号窯窯体内出土丸瓦（29）

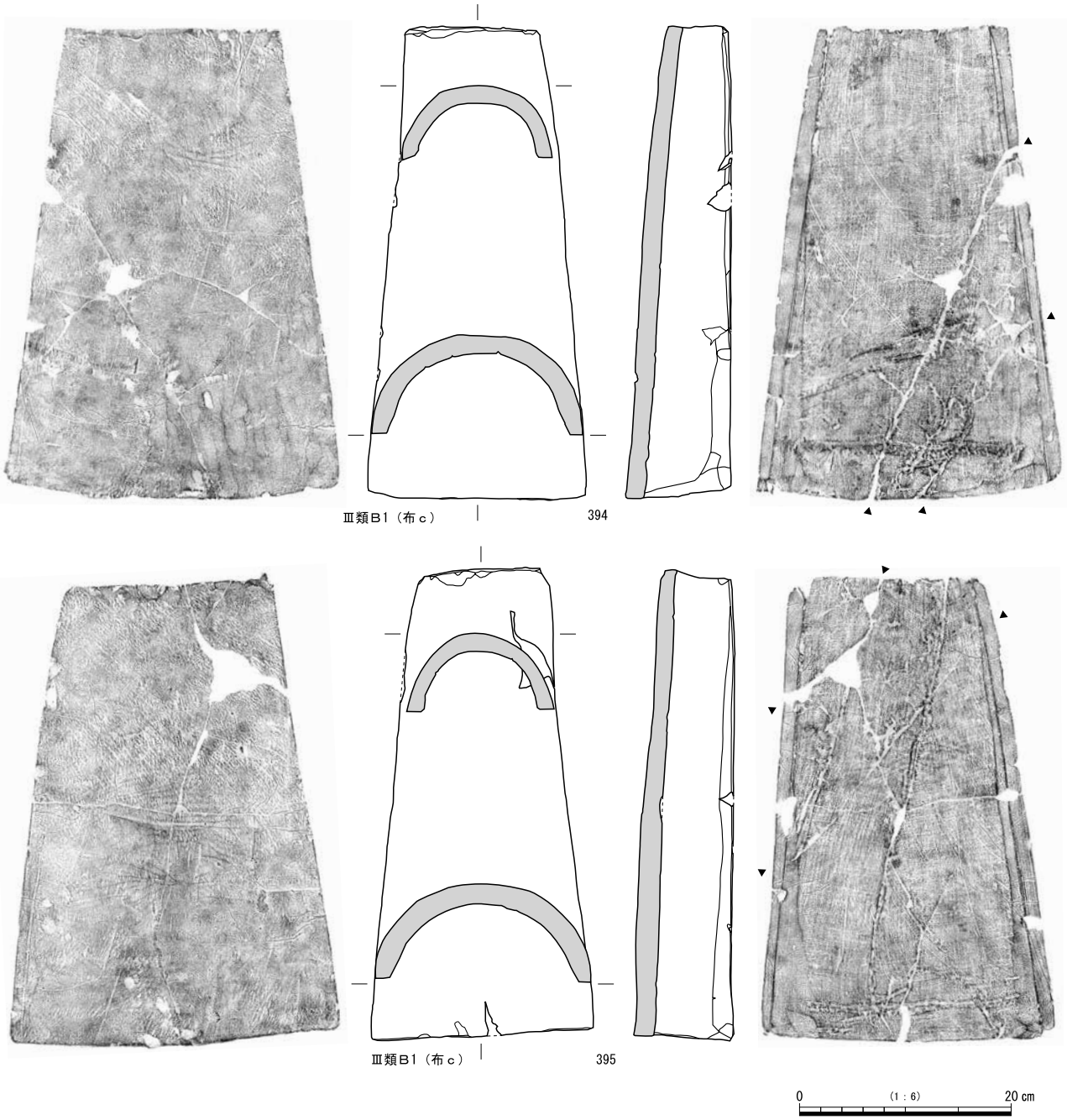


図 117　３号窯窯体内出土丸瓦（30）

凸面は大部分が横ナデ調整であるが、389・390・392 では狭端側の一部分に、393 では狭端側と広端側の一部分に縦ナデ調整が加えられている。389 と 391 には、側面の広端付近にわずかに分割破面が確認できる。破面は凹面側にあり、凸面側からの分割であることを示す。392 では側面の広端側の隅が斜めに切り落されている。

394 ～ 411 はⅢ類Ｂ１で、布袋に布ｃを使用するものである。凸面は全面横ナデ（回転ナデ）調整されており、ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩きの痕跡が残る。その他の技法はⅢ類Ａと同様であり、三角形の粘土板素材が使用されている。法量も全長 44 ～ 45 ㎝・狭端幅 12 ～ 13 ㎝・広端幅 19 ～ 20 ㎝とⅢ類Ａと同規模を基本とする。ただし、全長に関しては、42 ～ 43 ㎝の短いものや、46 ㎝と長いものが比較的多く確認できる。

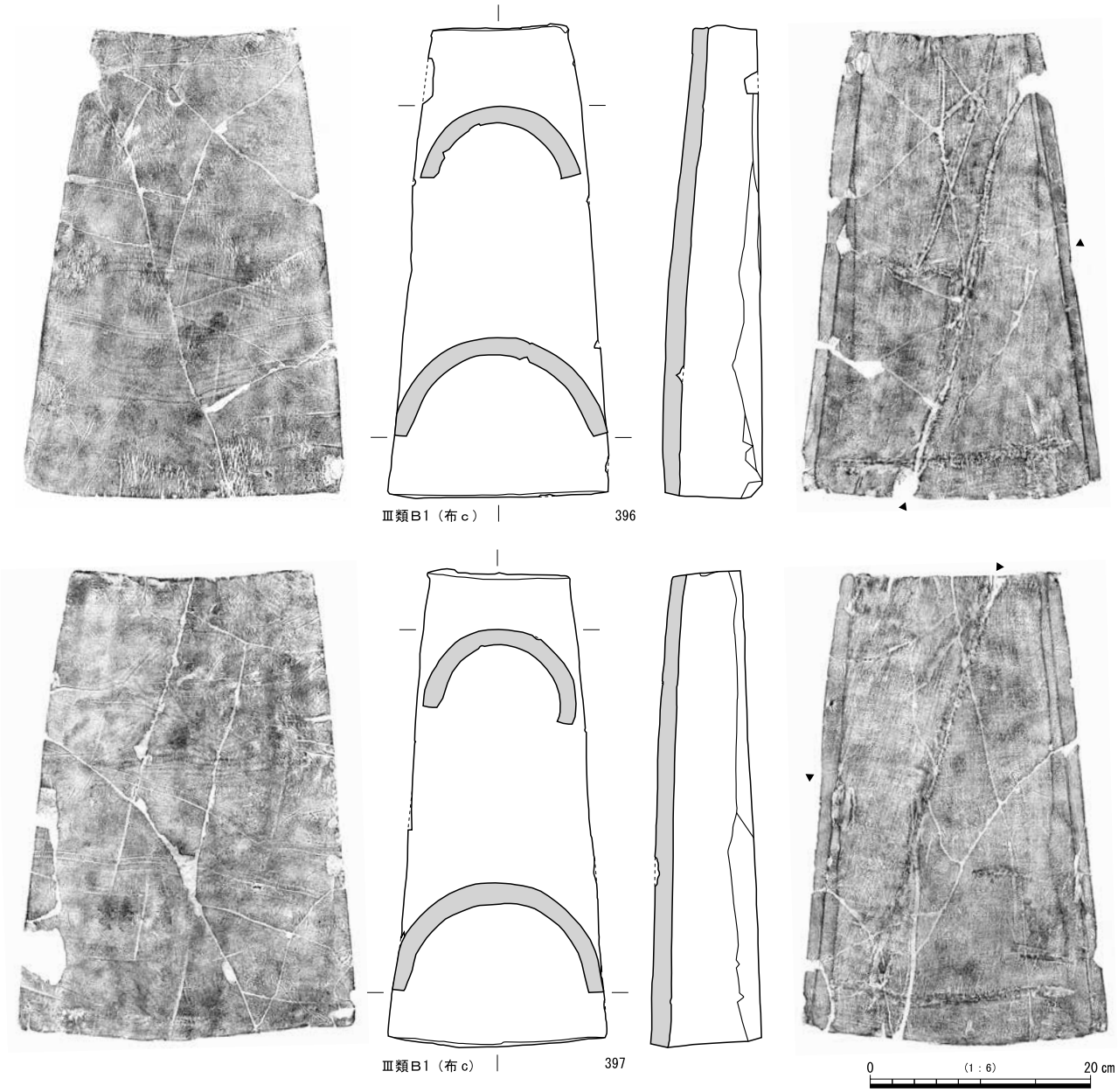


図 118　３号窯窯体内出土丸瓦（31）

394 と 395 は、同一の粘土円筒から分割された個体である。凸面の横ナデによる砂粒の線や、布綴じ痕の場所が一致する。粘土接合痕は、右上がりのものが２本確認でき、隙間には小型の粘土が充填されている。糸切り痕が明瞭に残っており、粘土接合痕を境にして途切れていることが確認できる。

402 と 408 以外のものには、右上がりとなる粘土接合痕が残る。398・399・404・406 では、粘土板の間に隙間が生じており、隙間には小型の粘土が充填されている。402 と 408 は粘土接合痕が左上がりになっており、粘土の巻き付けが逆回転である。糸切り痕が明瞭に残るものも多く、396・397・406・407 では粘土接合痕を境に弧線の向きが異なり、394・395・399・401・403 では粘土接合痕の境で糸切り痕が途切れている。

Ⅲ類Ａと同じ布が使用されているため当然のことではあるが、全体の大きさはⅢ類Ａと大差ない。ただし、長さは 396・397・406・409 のように、40 ～ 42 ㎝と短いものがやや多く確認される。凸面に

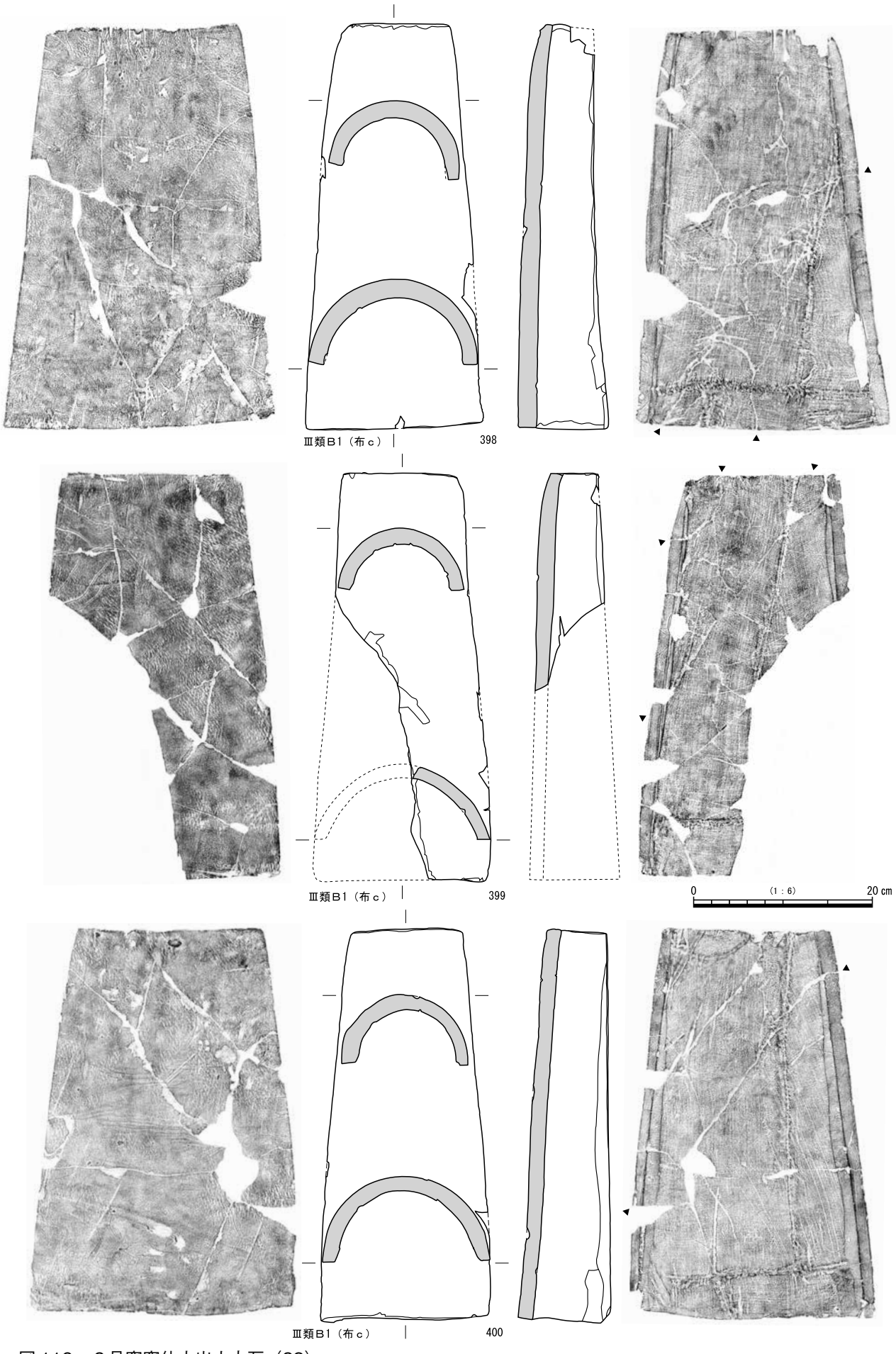


図 119　３号窯窯体内出土丸瓦（32）

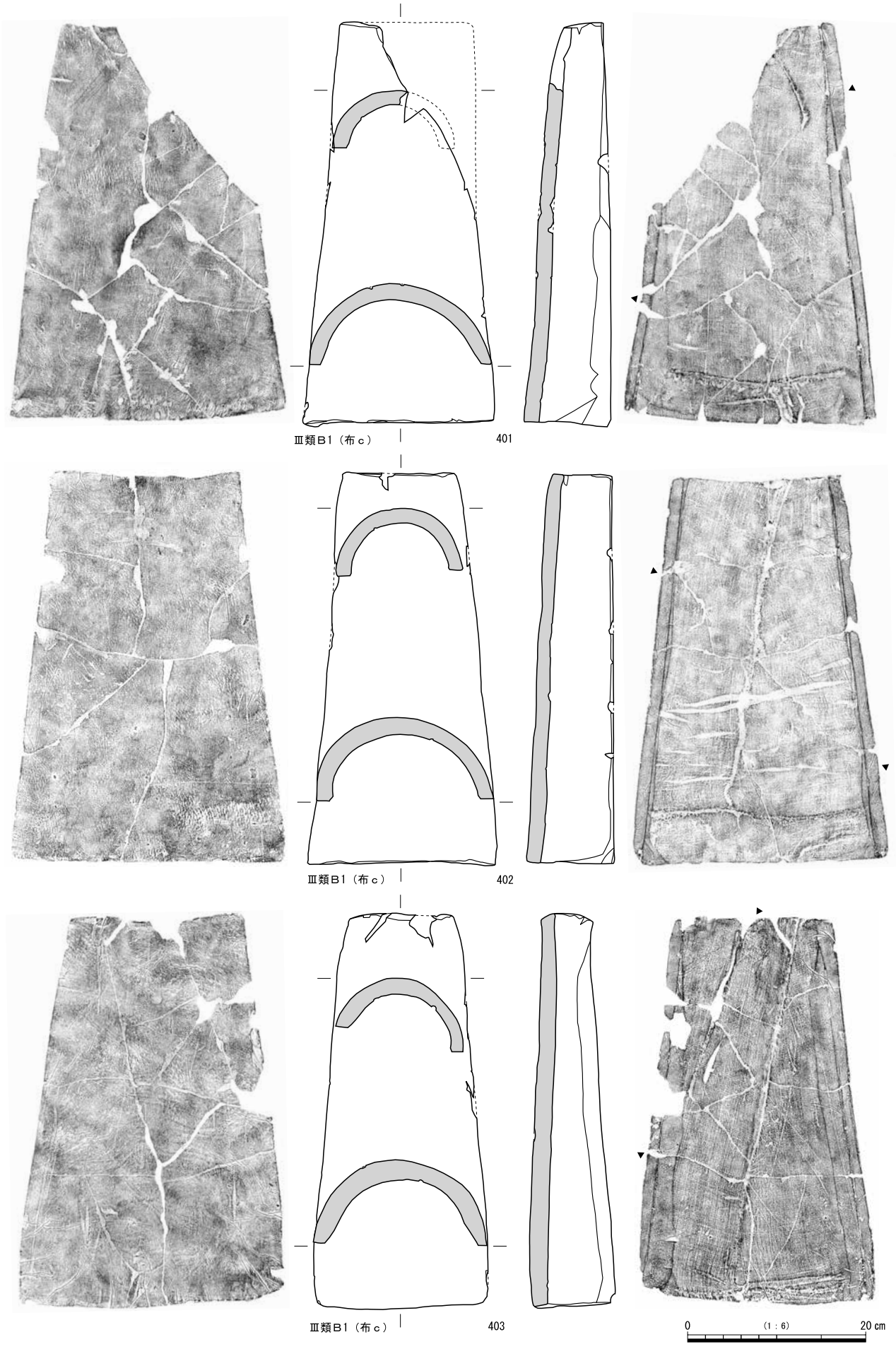


図 120　３号窯窯体内出土丸瓦（33）

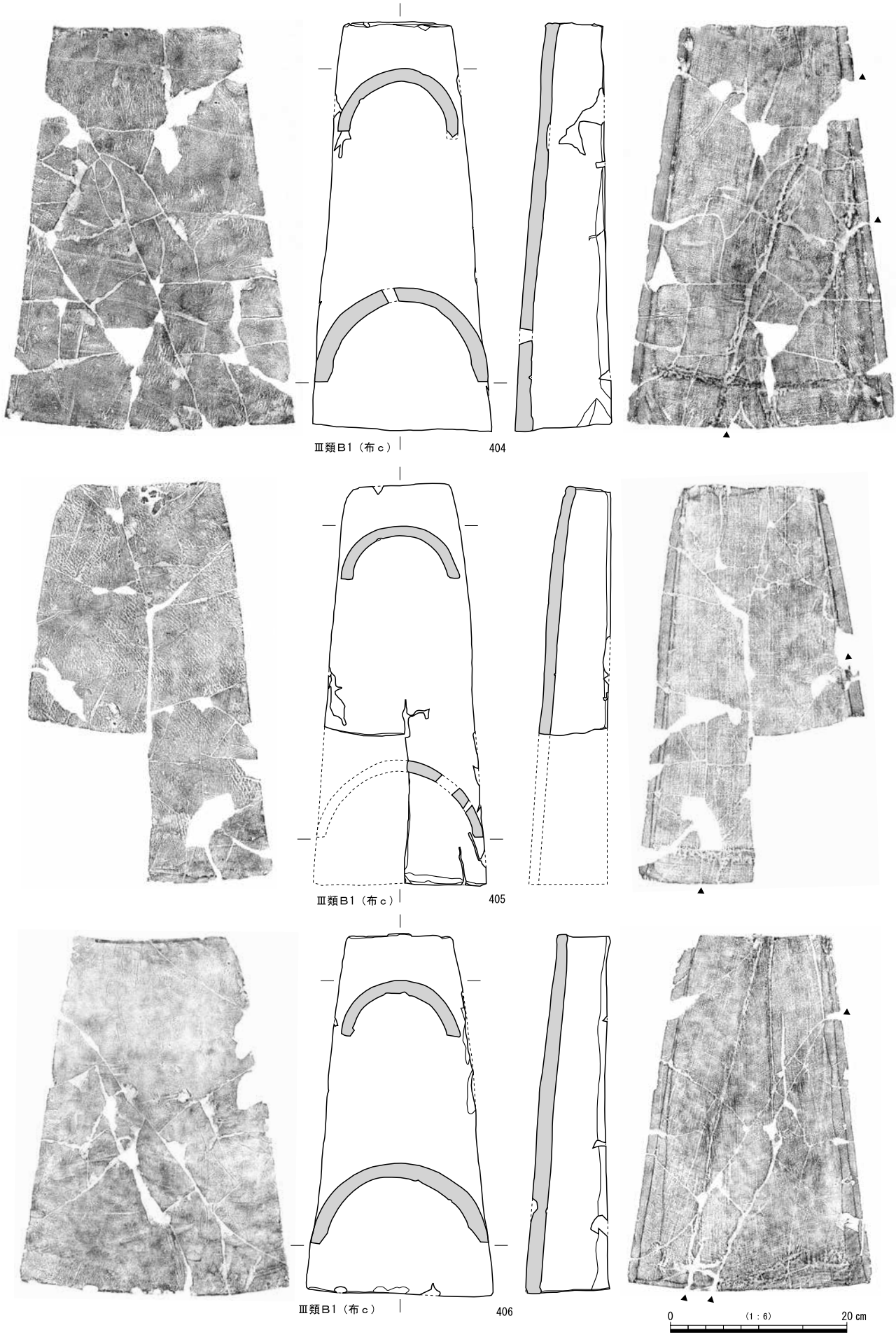


図 121　３号窯窯体内出土丸瓦（34）

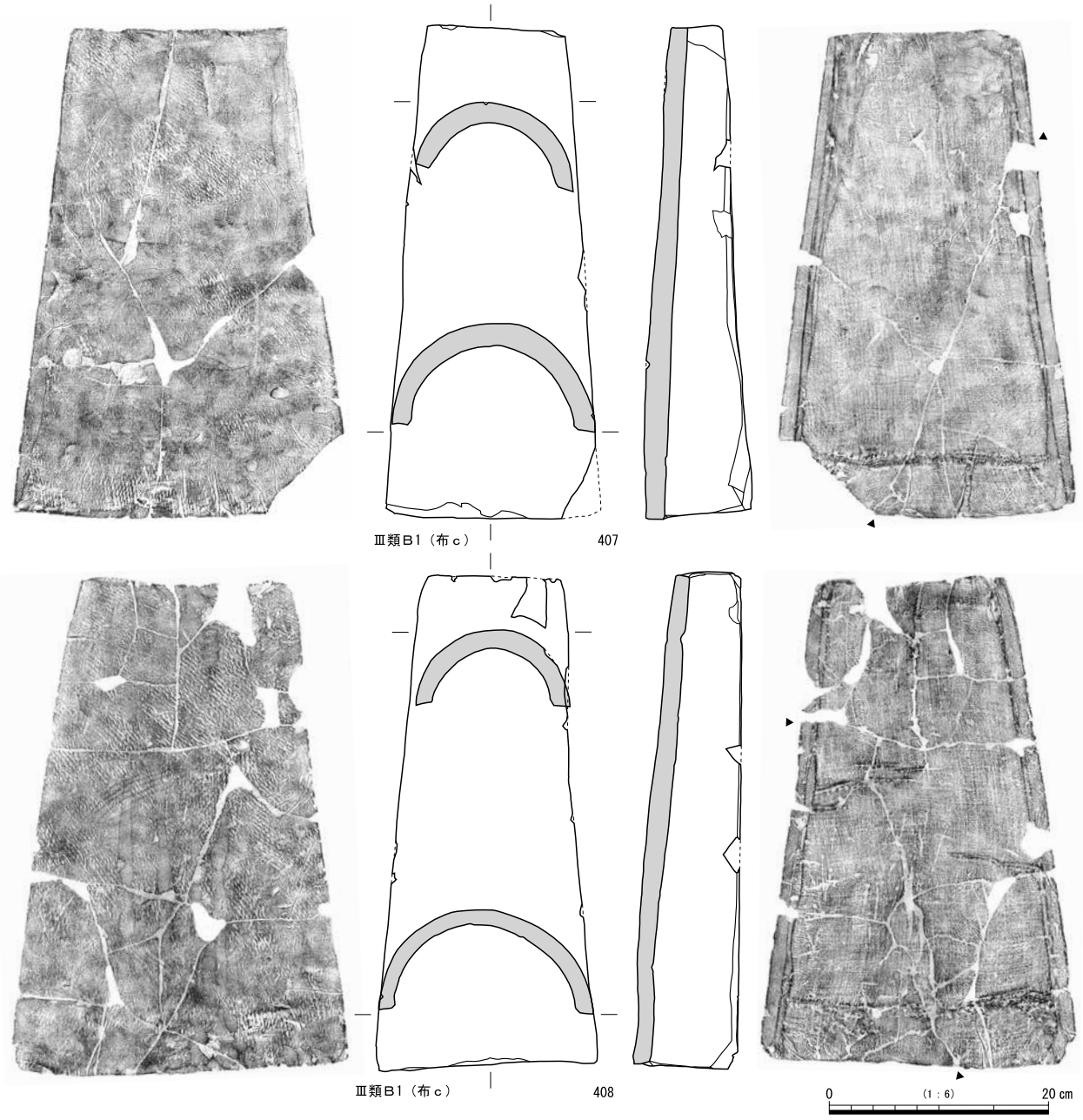


図 122　３号窯窯体内出土丸瓦（35）

は全面横ナデ調整が施されているが、部分的に縦ナデ調整が加えられているものも多い。399・401・405・406・409 では狭端側、404・410 では広端側、398 では狭端側と広端側に、一部縦ナデ調整が施されている。側面は全体に削り調整が施されているが、400 の広端付近には分割破面が確認される。破面は凹面側に残っており、凸面側から分割截線を入れていたことがわかる。

また、Ⅲ類Ｂ１に使用されている布ｃでは、布の破損が確認できる。Ⅲ類Ａで確認された上布の下端の綴じ目の破損は、当該部位の残る 395・397・398・400・402 ～ 404・406 のすべてで確認できる。破損部の大きさは、６㎝前後であり、Ⅲ類Ａで最も破損が大きくなった段階と同規模である。さらに 406 と 409 では、その下側と右側（実際の布では左側）でも、綴じ目が破損して穴になっている様子が確認できる。同じ布ｃを使用するⅢ類Ａと比較すると、明らかにⅢ類Ｂでは布の破損が進行している。

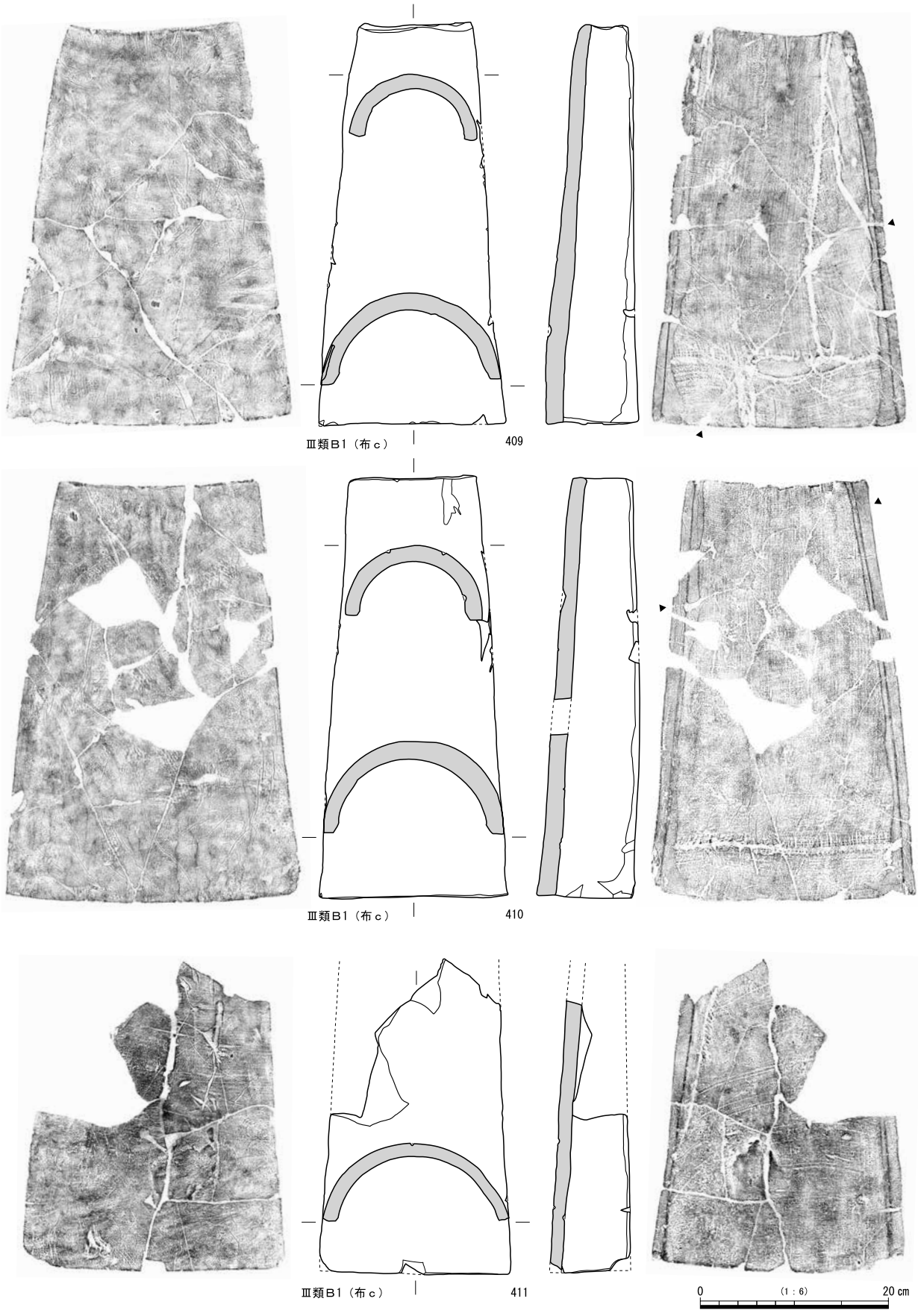


図 123　３号窯窯体内出土丸瓦（36）

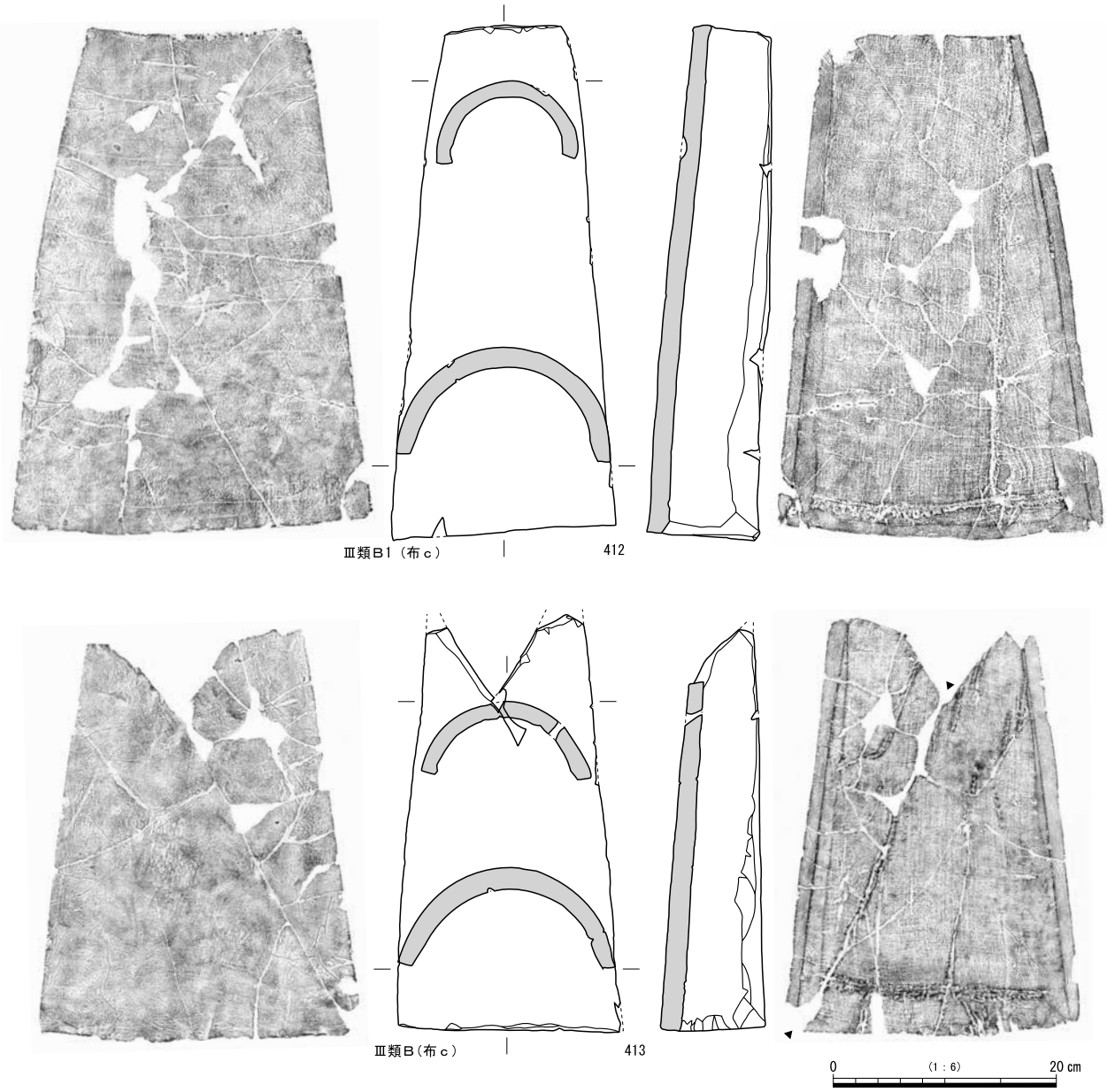


図 124　３号窯窯体内出土丸瓦（37）

412 と 413 は、凸面の調整や法量からⅢ類Ｂ１としたが、やや特殊なものである。412 は布袋に布ｃを使用しており、法量は全長 45 ㎝・狭端幅 12 ㎝・広端幅 20 ㎝である。凸面には全面横ナデ調整が施されており、ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩きの痕跡が残る。法量や使用した布袋、調整技法に関しては、粘土板素材のものと同じである。大きく異なるのは粘土素材である。凹面には３㎝程の間隔で横方向に粘土接合痕が残っており、いわゆる粘土紐巻き付け技法によって成形された丸瓦である。ただし、同様のものは破片でも数点しか確認できず、技法として定着していたとは考えにくい。何らかの偶発的な要因により製作されたものの可能性が高い。

413 は狭端側がＶ字形になるものである。側端部でも長さは 37 ㎝しかなく、狭端側を大きく截断した後に、中央をＶ字形に切り欠いている。広端幅は 20 ㎝で凸面が全面横ナデ調整されており、Ⅲ類Ｂ１を加工したものとみてよい。布袋には布ｃを使用している。右上がりの方向に粘土接合痕が残り、粘土の合わせ目には布が内側に巻き込まれている。特殊な用途に使用したものであろうが、屋瓦としての具体的な用途は思い当たらない。

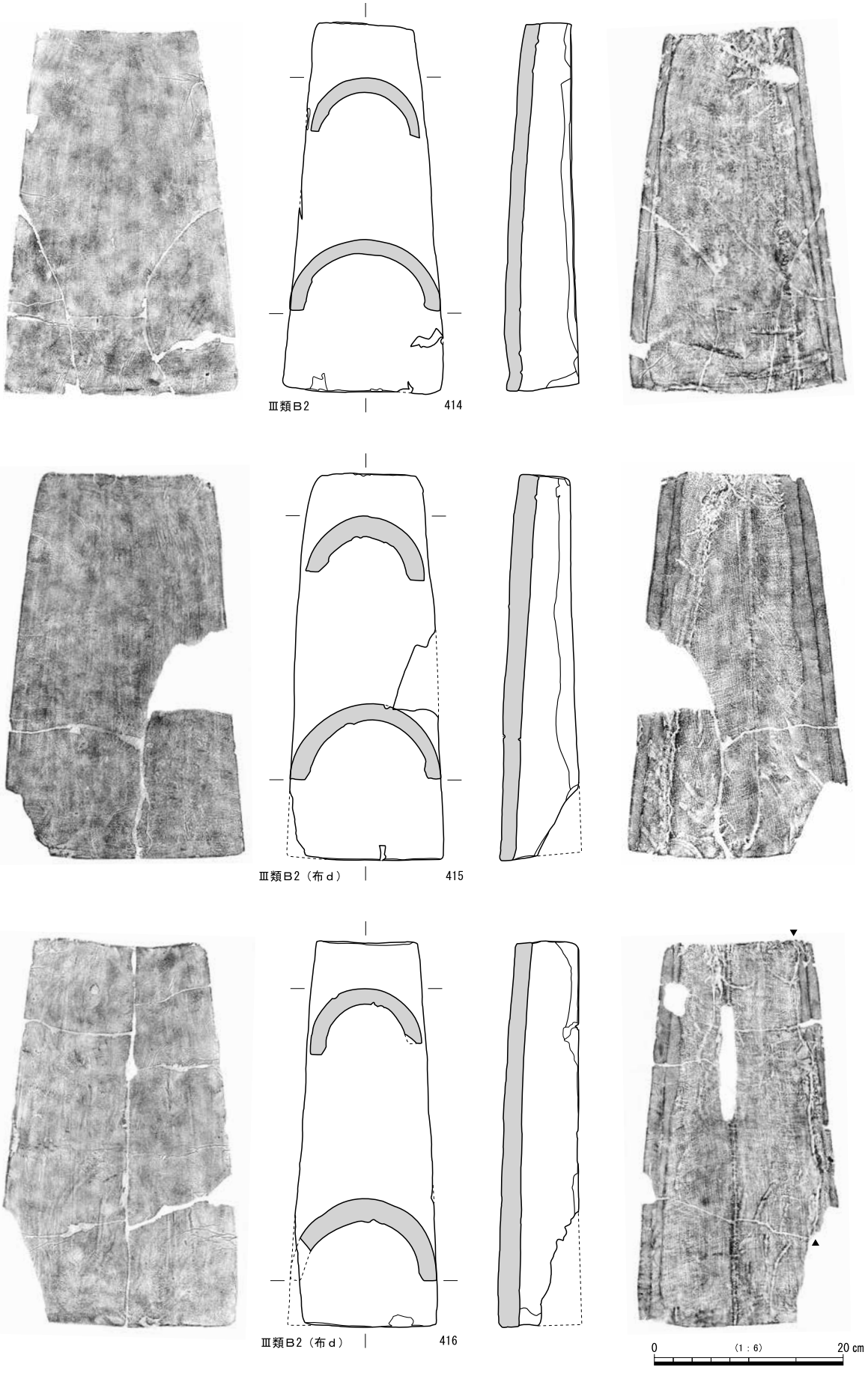


図 125　３号窯窯体内出土丸瓦（38）

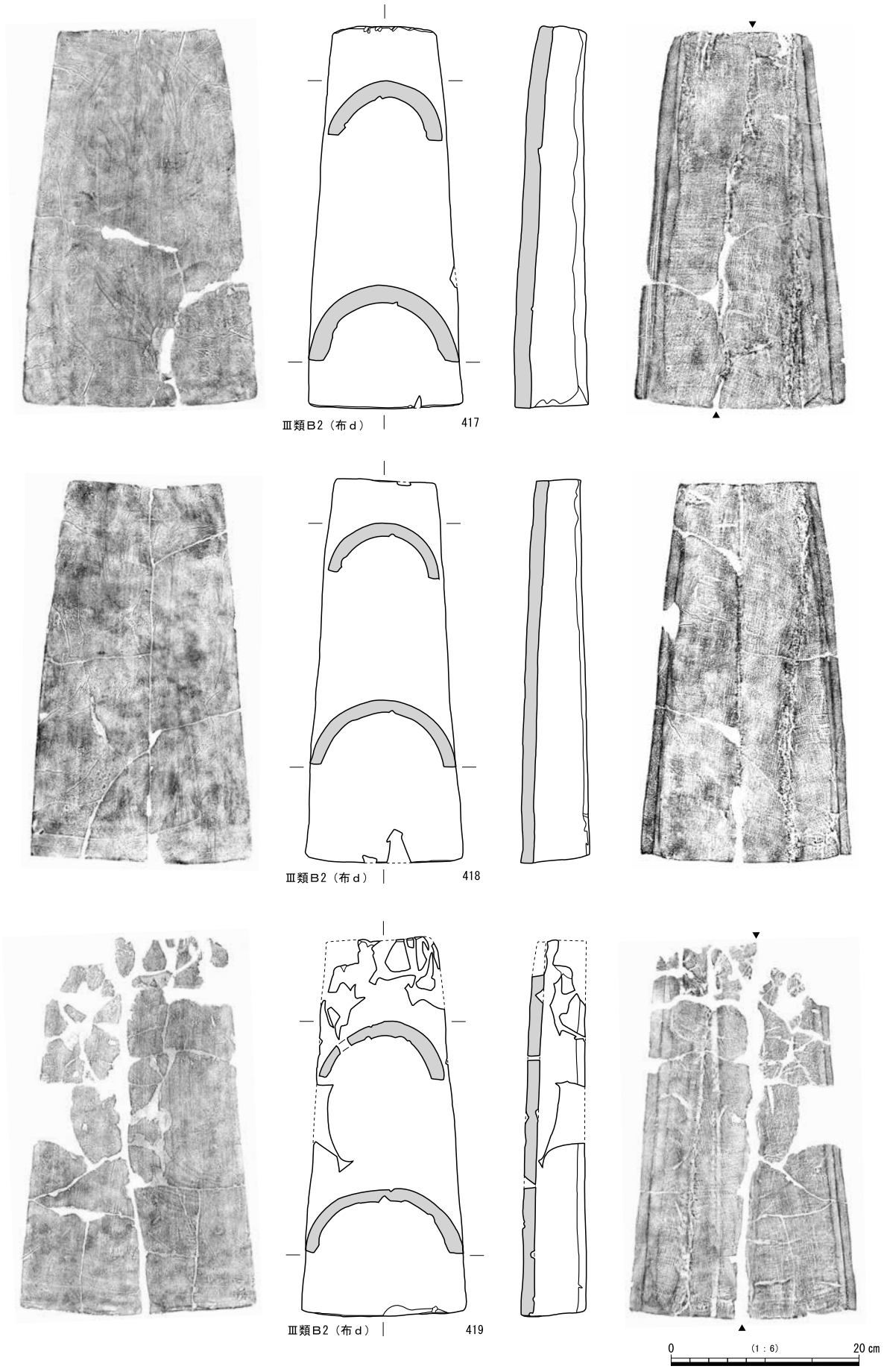


図 126　３号窯窯体内出土丸瓦（39）

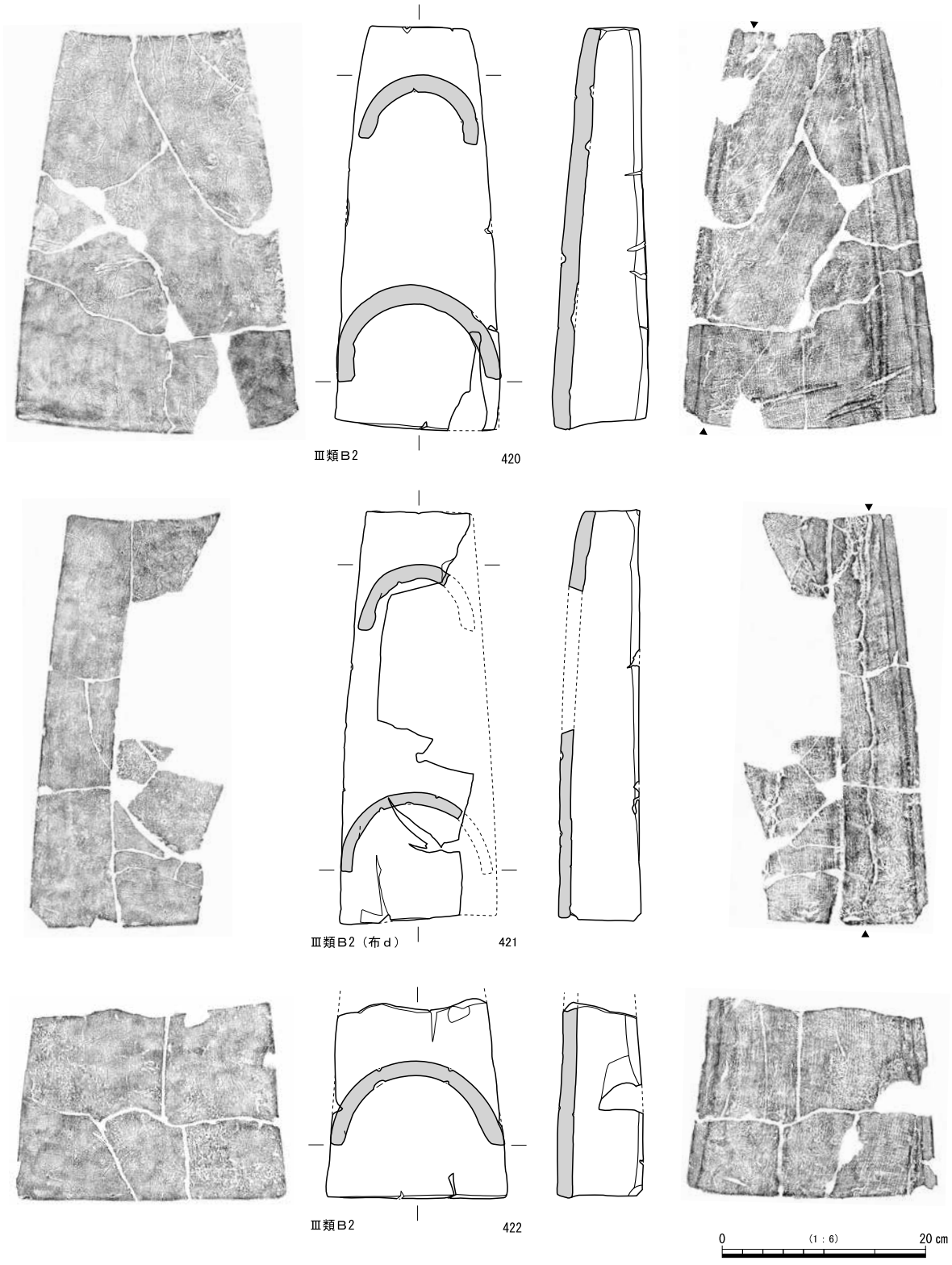


図 127　３号窯窯体内出土丸瓦（40）

Ⅲ類Ｂ２　414 ～ 427 はⅢ類Ｂ２である。凸面には縦ナデ調整が施され、広端側に部分的に横ナデ調整が残る。法量は、全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 10 ～ 11 ㎝・広端幅 16 ～ 17 ㎝である。四角形（または台形）の粘土板を使用しており、粘土接合痕が縦方向に残る。３号窯から出土した軒丸瓦Ⅱ類の丸瓦部には、このⅢ類Ｂ２が使用されており、橙色を呈する色調も共通した特徴である。凹面は両側縁が面取り

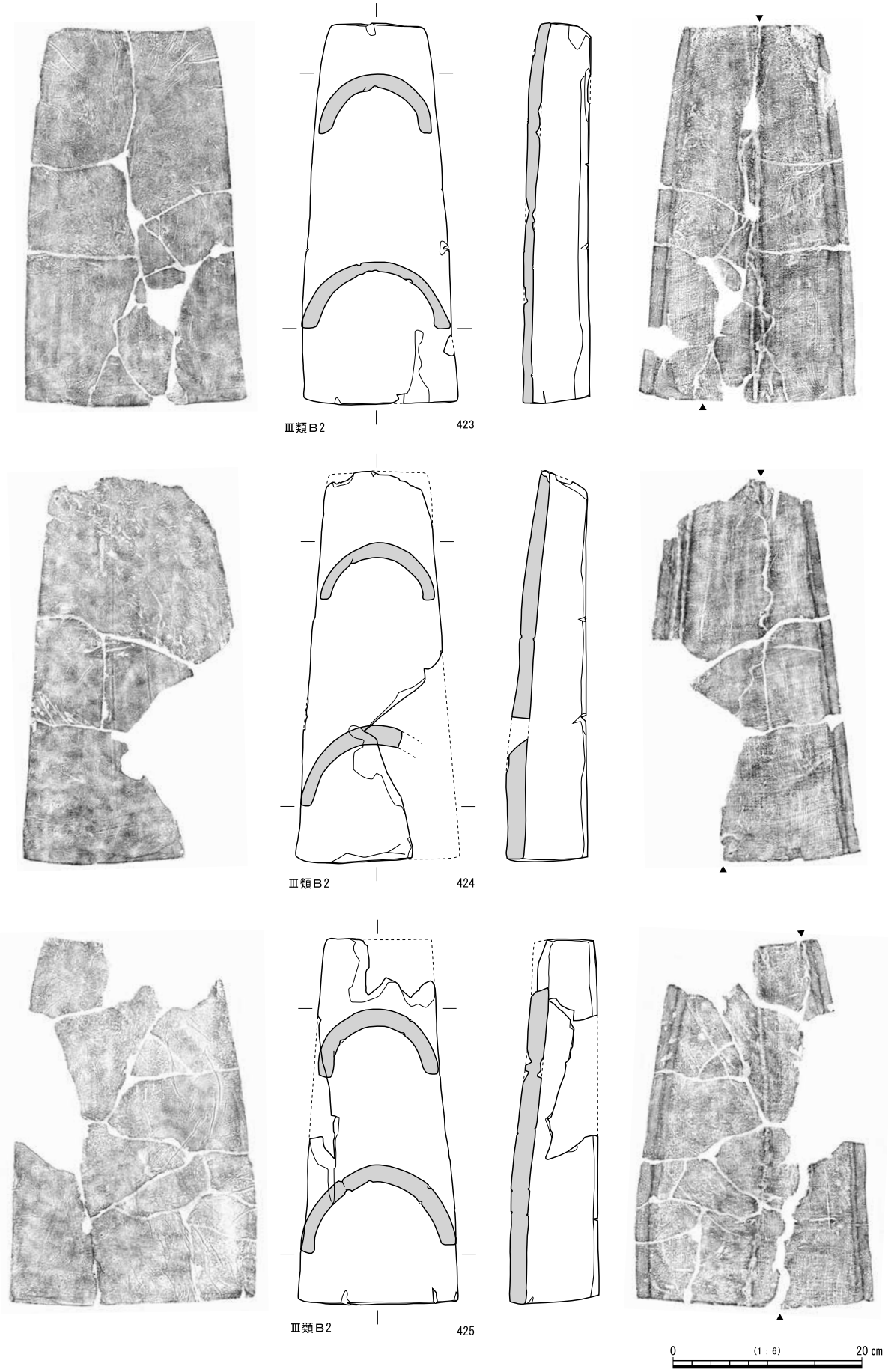


図 128　３号窯窯体内出土丸瓦（41）

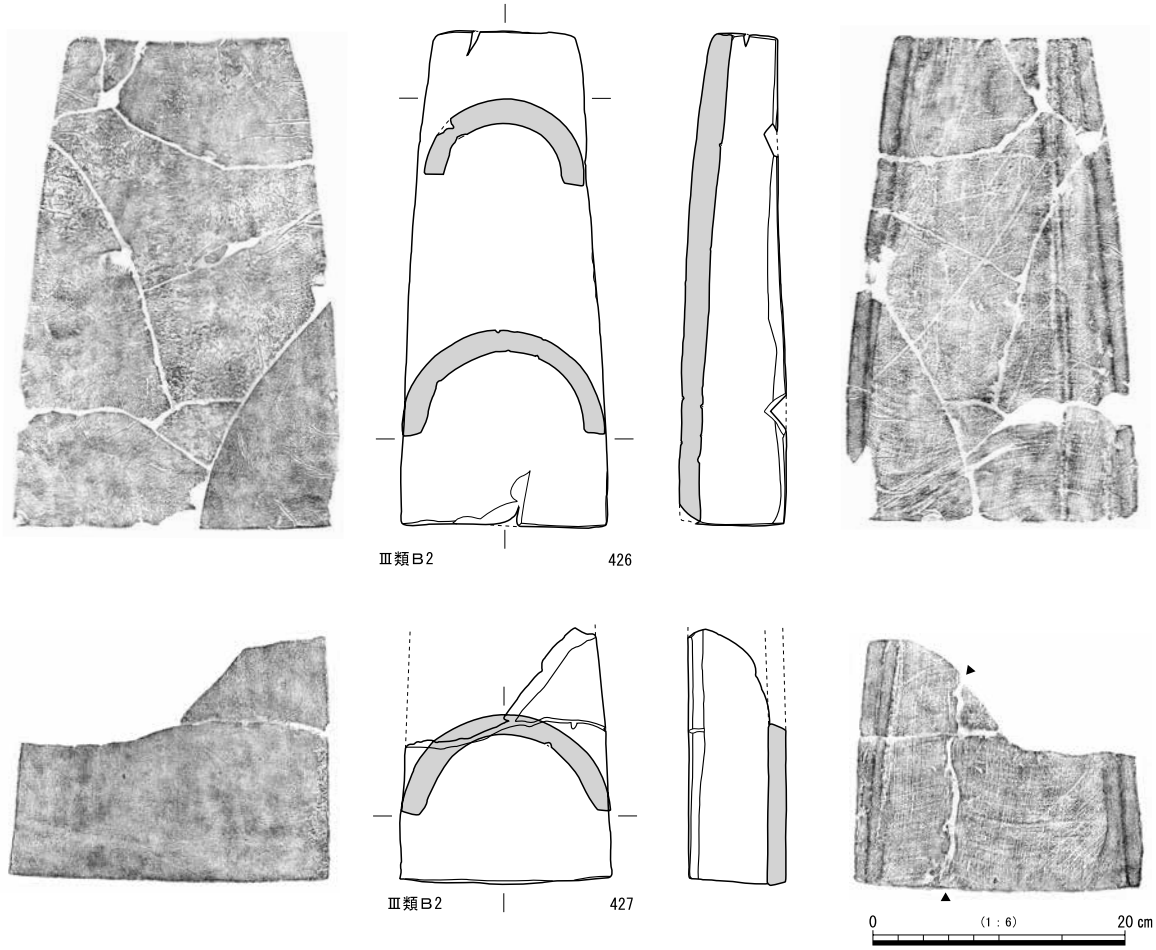


図 129　３号窯窯体内出土丸瓦（42）

されているが、415 や 417 などのように幅広の面取りを施したものが多くみられる。

415 ～ 419・421 には、布ｄの布綴じ痕が残る。明確な布の破損は認められないが、布綴じ痕の上端がやや乱れており、421 では綴じ目が外れている様子が伺える。布ｂ・ｃと異なり、布を継ぎ足さない単純な構造であるため、布綴じ痕が残らないものについて布を特定することは困難であるが、他に同規模の模骨に使用する布袋が確認できないことから、綴じ目の残らないものについても布ｄである可能性が高いと推測される。414 の広端付近に布端が残り、布足らずの部分にも側板痕は確認できない。模骨は杵型模骨であるとみてよい。

416･417･419･420 ～ 425 には、縦方向に通る粘土接合痕が残っており、合わせ目はいずれもＳ型である。419 では粘土の合わせ目に布が巻き込まれている様子が確認できる。414 ～ 417・420・425 ～ 427 には、糸切り痕が明瞭に残っており、417 では粘土接合痕を境に糸切り痕の方向が大きく異なっている。粘土接合痕が認められないものもあることから、Ⅲ類Ｂ２は１枚の四角形の粘土板を模骨に巻き付けて成形したものと推定される。合わせ目がいずれもＳ型であることから、巻き付けの方向は左巻きであろう。

414 ～ 416・420・424 ～ 426 には、縦方向に通る溝状の窪みが残る。分割突帯とも考えられるが、415・416・425 などでは中央付近に残っており、分割のためのものとするにはやや疑問の余地もある。

また、425 の凹面の側縁付近には、十字に刻まれた刻線が確認される。類似する刻線を施したものが認められないため、意図的に入れた記号であるのか、誤ってできたものかは判然としない。

３号窯灰原（図 130 ～ 138、図版 18・59・60）

３号窯灰原からは、総重量 182.3 kgの丸瓦が出土しているが、そのほとんどが破片であり、法量が判明するものは少ない。狭端または広端が残存するものを中心に、34 点を図示する。なお、３号窯窯体内の場合と同様に、出土点数の少ないⅠ類については、破片であっても端部の残存するものについては可能な限り網羅的に図化・掲載した。

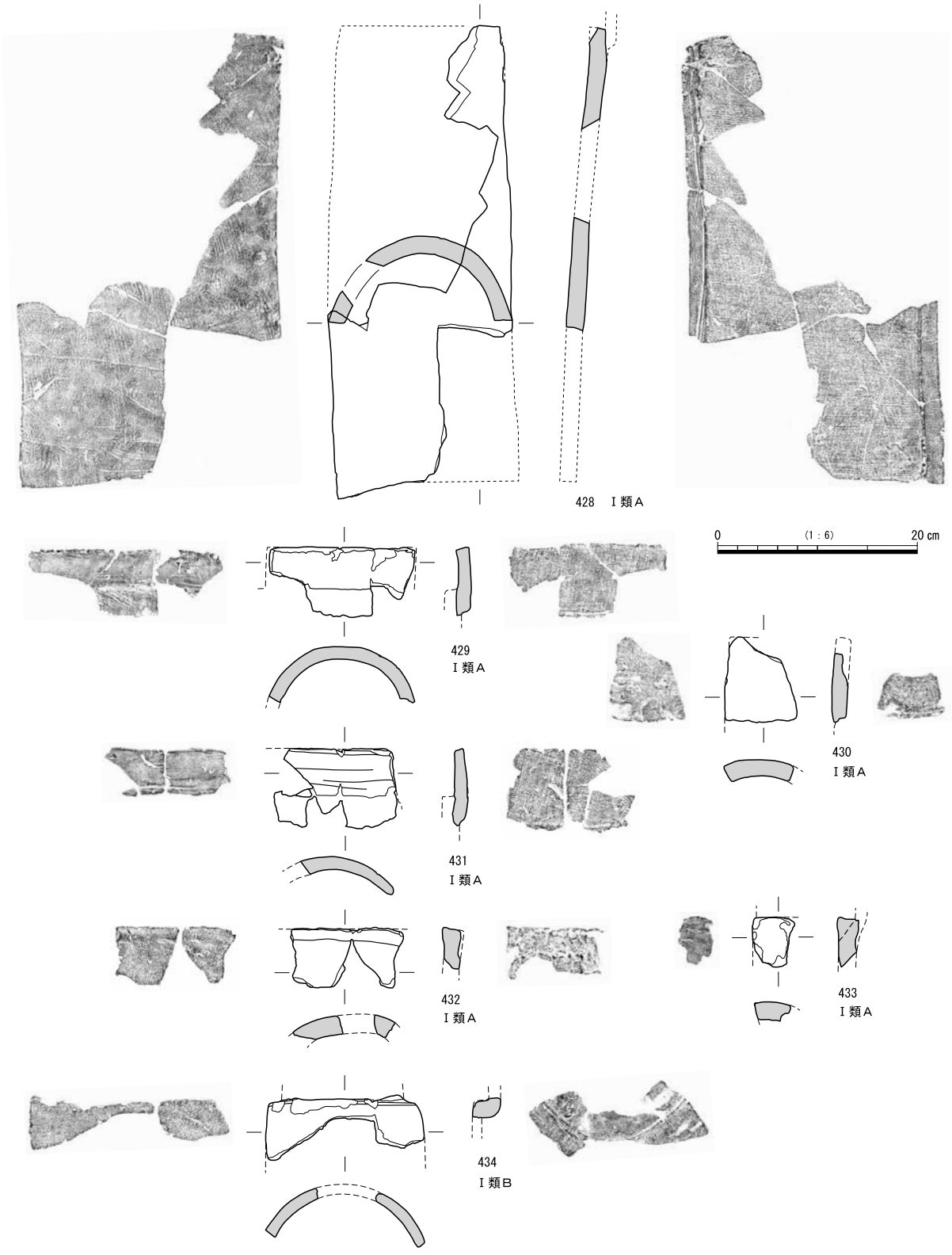


図 130　３号窯灰原出土丸瓦（１）

Ⅰ類　428 ～ 433 はⅠ類Ａ、434 はⅠ類Ｂである。428 は肩部から筒部の破片である。玉縁部は凹面で剥離したような状態で失われている。筒部はやや変形してはいるが､肩部と広端部の幅の差は少ない。玉縁基部に粘土を付加して肩部を形成している。429 ～ 431 は玉縁部から筒部にかけての破片である。段部凹面の屈曲は強いが、段差は５～７㎜程度と小さい。玉縁部の長さは４～５㎝と短く、先端と基部の幅はほぼ同じである。いずれも段部下端では、厚さが数㎜程度と極端に薄くなっている。432 と 433

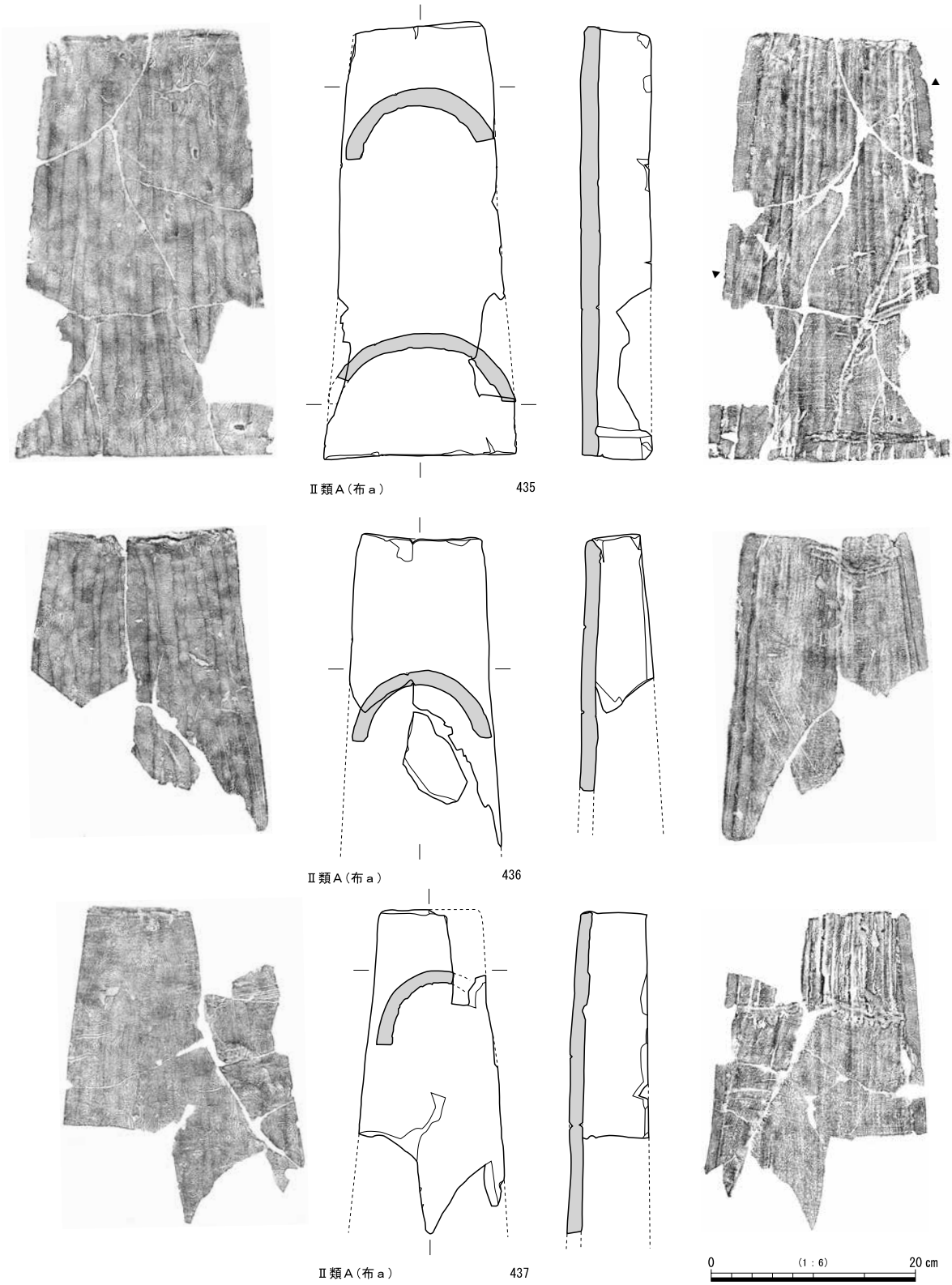


図 131　３号窯灰原出土丸瓦（２）

は肩部の破片であり、玉縁部は段部で剥離したような形で失われている。場所によって多少異なるが、粘土を付加して肩部を形成しているが、その範囲は多いところでは肩部から２㎝程の位置にまで及んでいる。434 はⅠ類Ｂの肩部付近の破片である。玉縁部は基部で折れて欠損している。段部凹面の屈曲は強く、段差も２㎝と大きい。Ⅰ類Ａとは異なり、段部でも十分な厚さを保持しており、少量の粘土を付加して肩部を形成している。

Ⅱ類Ａ　435 ～ 440 はⅡ類Ａである。凸面は全面削り調整が施されており、いずれも狭端側から広端側に向かう方向に削られている。凹面には側縁に面取りが施されている。模骨は側板連結模骨であり、凹面に側板痕が残る。布綴じ痕が確認できるものに関しては、すべて布ａが使用されている。

435 の側面の広端側には、破面が残る。435 ～ 438 には凹面に糸切り痕があり、成形に粘土板を用いていることがわかる。435 には右上がりの方向に粘土接合痕が確認される。糸切り痕は、粘土接合痕を境にして方向が異なっている。435 に関しては、Ⅱ類Ａ・Ｂ１と同様に三角形の粘土板を使用しているものとみてよい。435 と 437 には布ａの布綴じ痕が残る。435 の広端側と 437 の狭端側には布端が確認でき、布足らずの部分には側板痕が認められる。側板の幅は広端側の 434 では１㎝、狭端側の 437 では５㎜程となっており、狭端側の幅を狭くして截頭円錐形の模骨を作っていたことがわかる。また、437 では、１㎝程の間隔で布端に沿って並ぶ小さな窪みが多く確認できる。窪みの部分は布が破れており、布を貫く形で何らかの突起物が存在していたことがわかる。布の一部があらかじめ側板に固定されていた可能性がある。

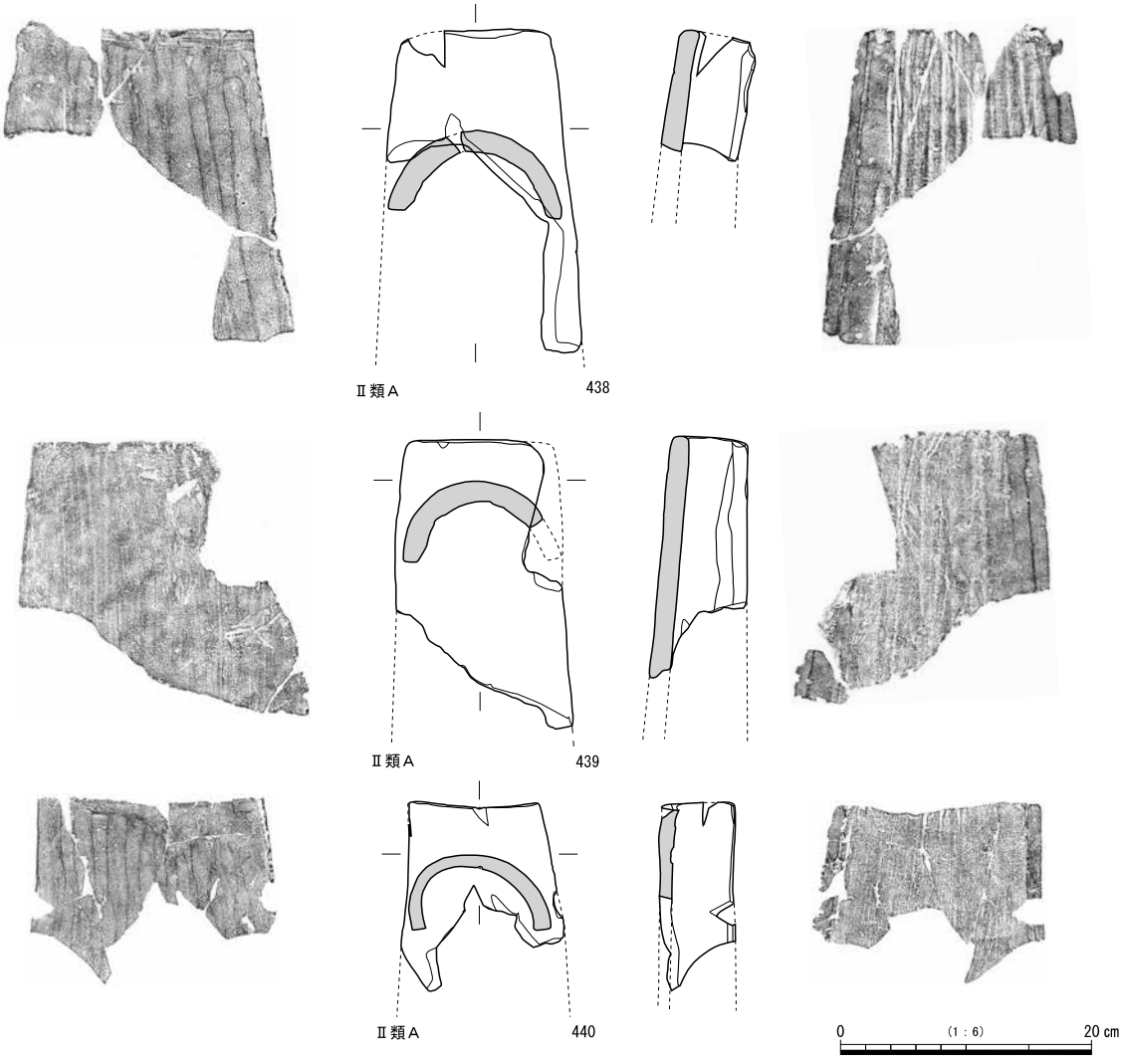


図 132　３号窯灰原出土丸瓦（３）

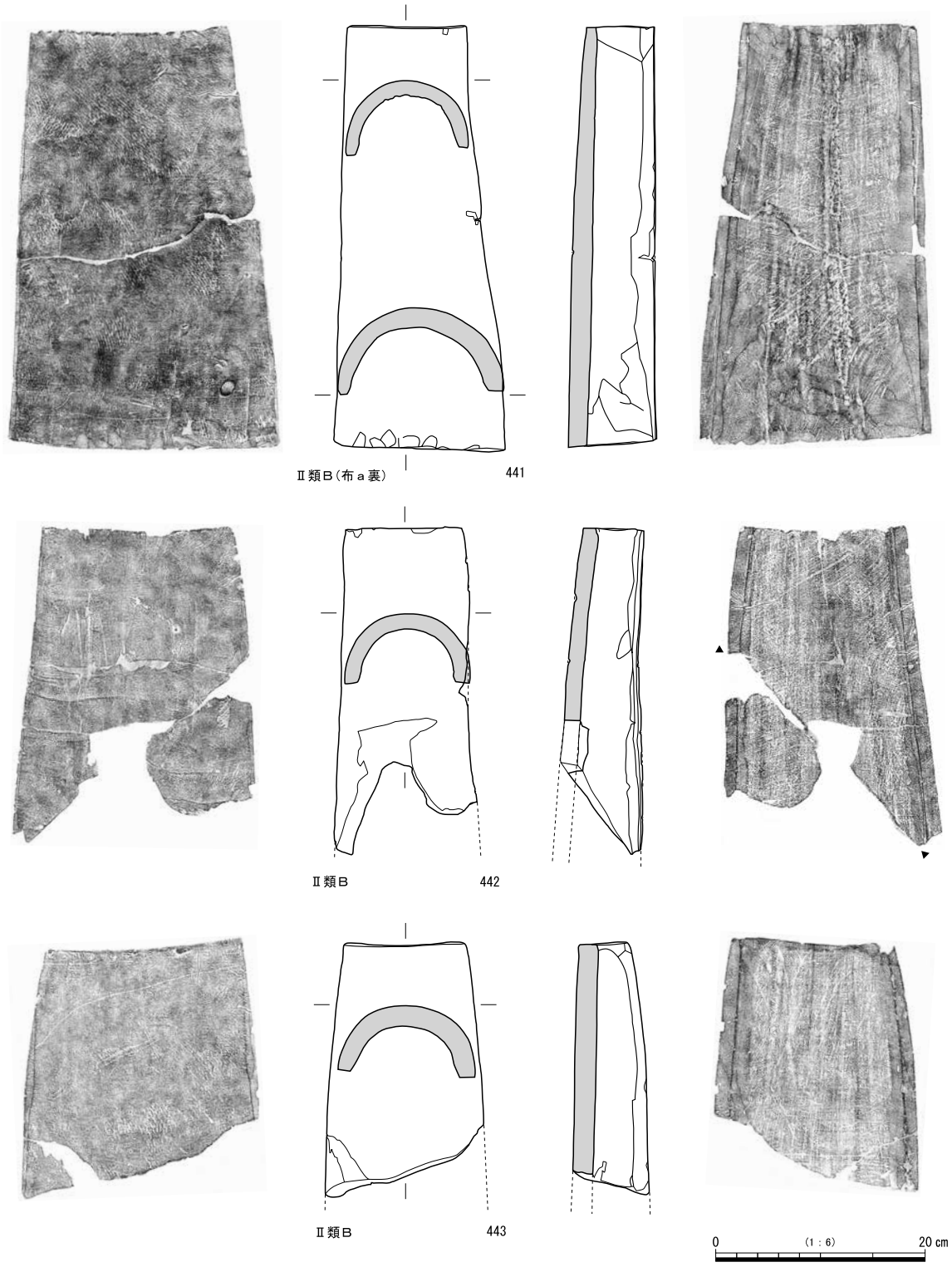


図 133　３号窯灰原出土丸瓦（４）

Ⅱ類Ｂ　441 ～ 443 はⅡ類Ｂである。凸面は全面横ナデ調整である。凹面には側板痕が残り、側縁を面取り調整する。441 と 443 では狭端側にも面取りが施されており、441 は広端側の広い範囲に削り調整を施している。441 は布ａを裏返した状態で使用しており、布綴じ痕が残る。442 には、左上がりの方向に粘土接合痕が確認でき、粘土接合痕を境に糸切り痕が途切れている。三角形の粘土板を反時計回りに巻き付けたものとみてよい。

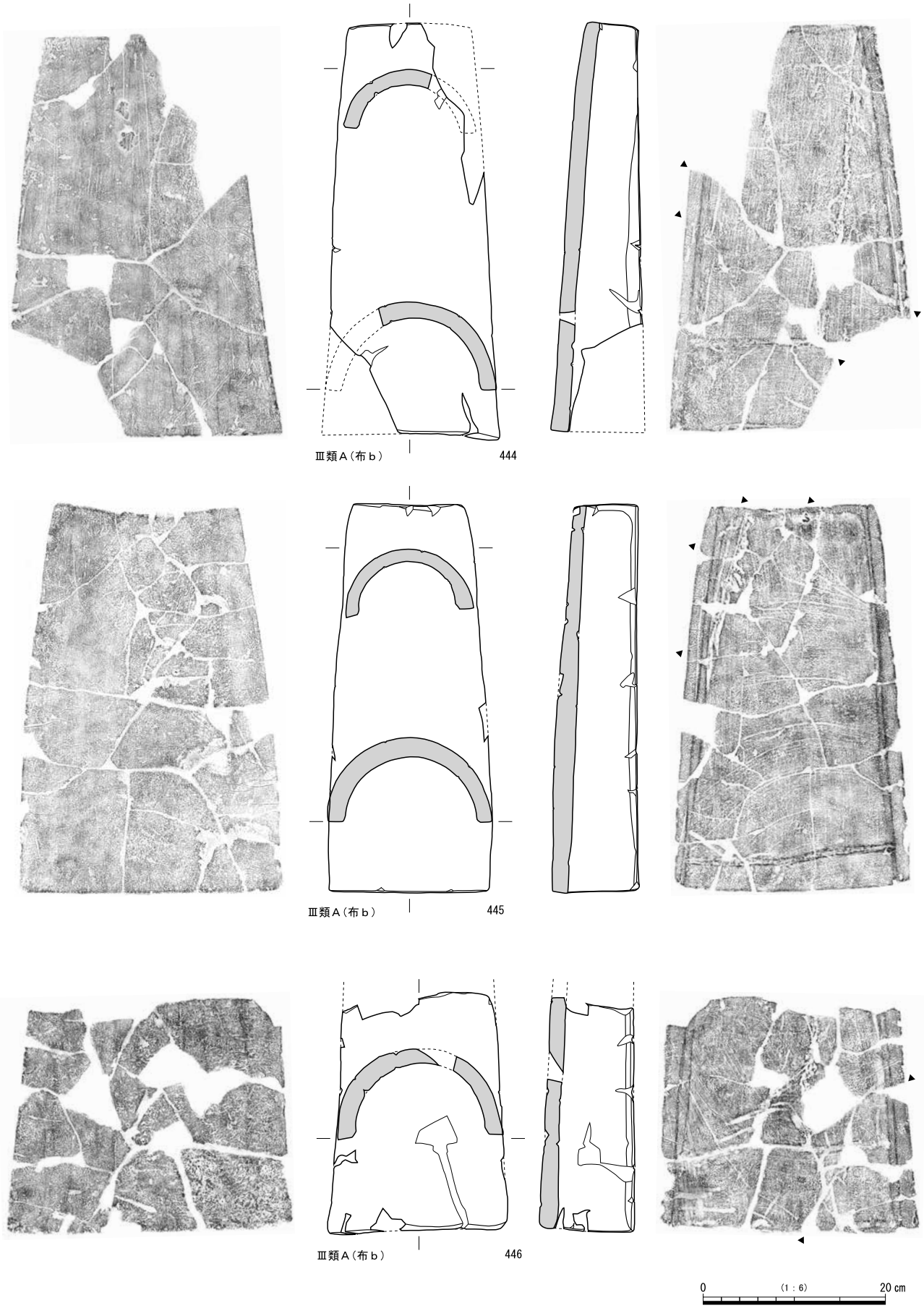


図 134　３号窯灰原出土丸瓦（５）

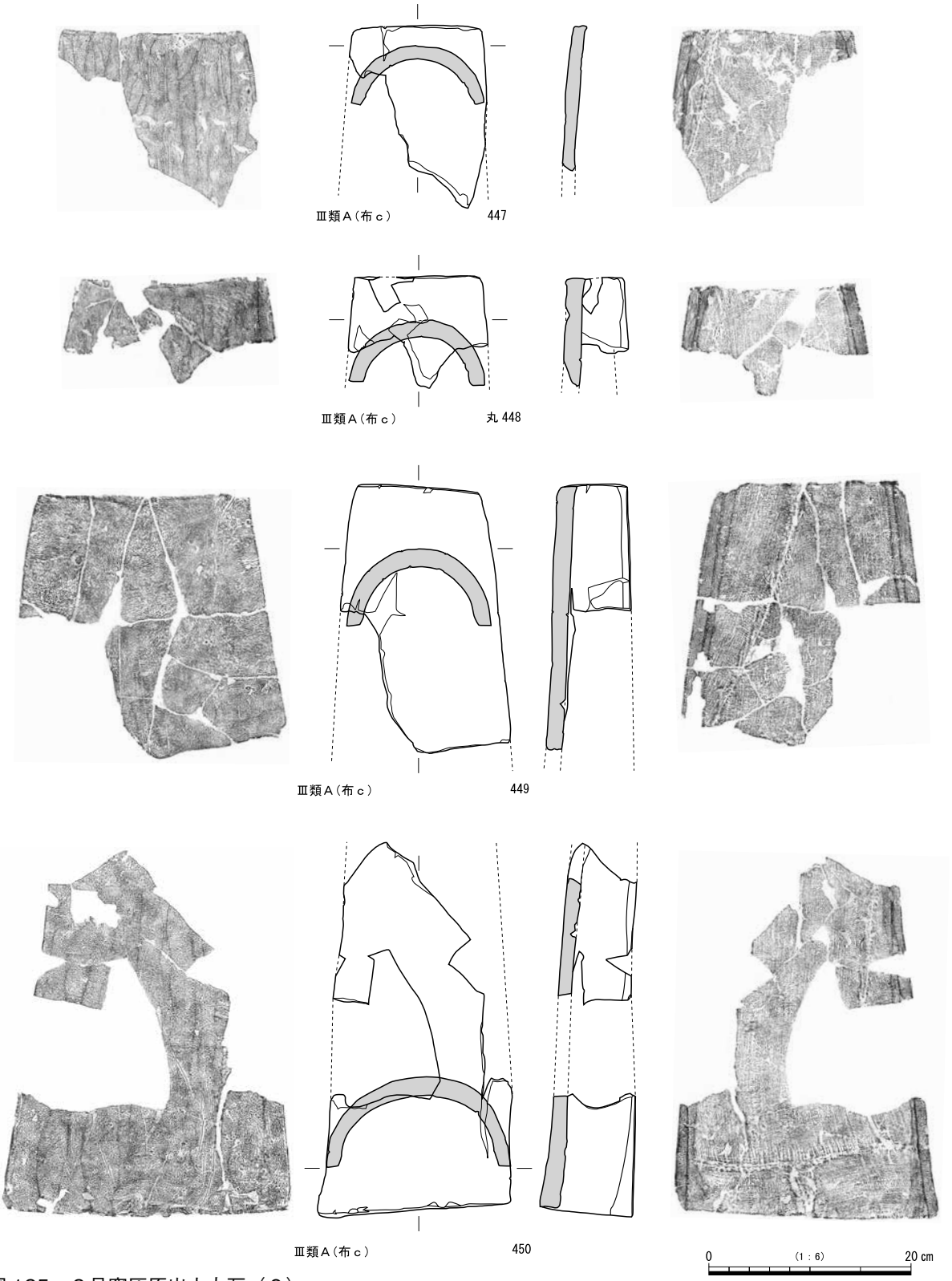


図 135　３号窯灰原出土丸瓦（６）

Ⅲ類Ａ　444 ～ 452 はⅢ類Ａである。凸面は全面に削り調整が施され、凹面は側縁が面取りされる。凸面の削り残しの部分には斜め方向の縄叩き痕が残る。三角形の粘土板が使用されている。

444 ～ 446 は、布袋に布ｂを使用するものである。444 は左巻き、446 は右巻きに三角形の粘土板を巻き付けており、444 では左上がりに、445 と 446 では右上がりに粘土接合痕が確認される。444 と 445

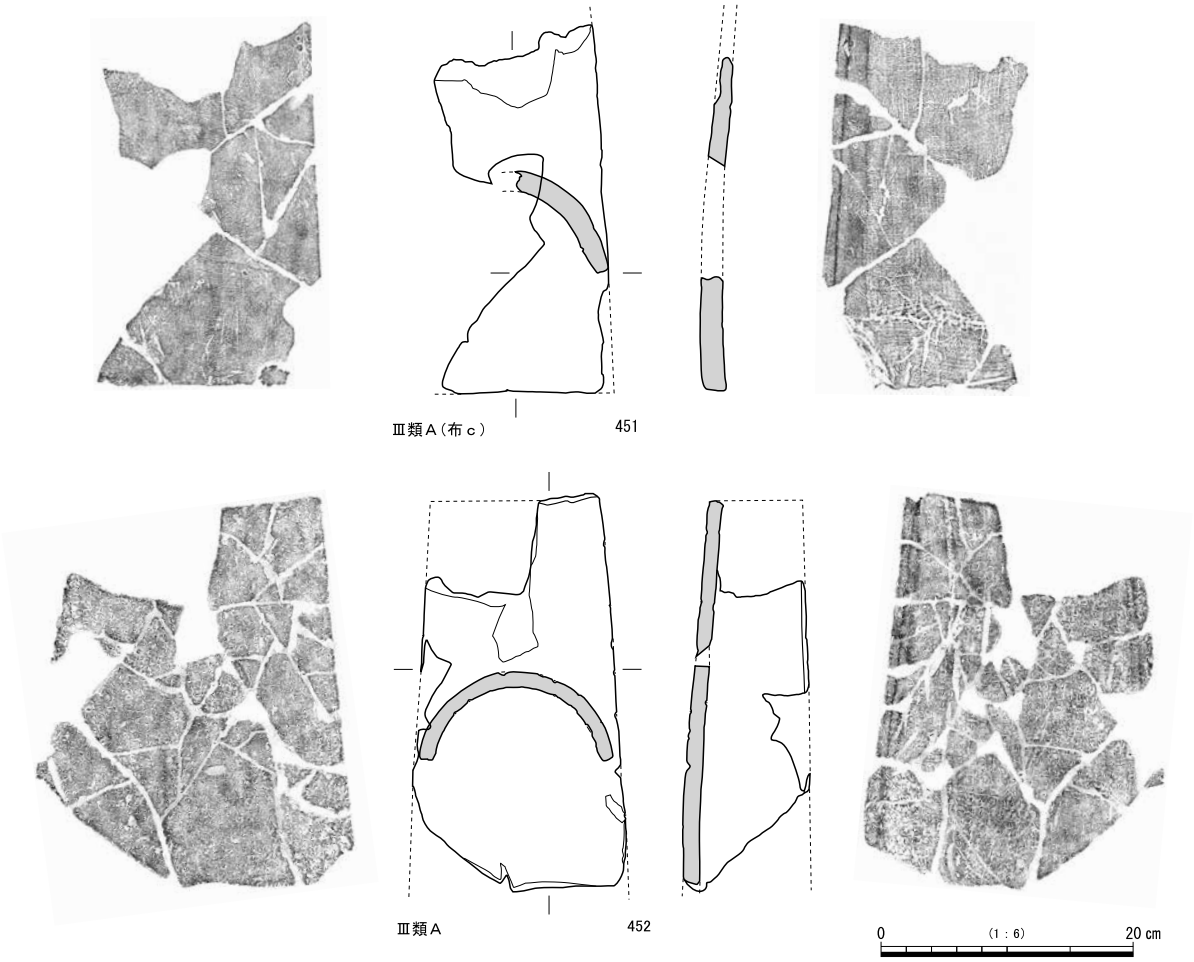


図 136　３号窯灰原出土丸瓦（７）

では２本の粘土接合痕が確認でき、隙間には小型の粘土が充填されている。445 と 446 には糸切り痕が明瞭に残り、粘土接合痕を境に途切れている。

447 ～ 451 は布袋に布ｃを使用するものである。粘土接合痕とみられる部分で欠損しているものが多いが、いずれも破片のため確証がない。布ｃの綴じ目が残っており、450 では上布の綴じ目の下端が破損している様子が確認できる。452 は綴じ目がみられないため、布を特定することができない。

Ⅲ類Ｂ１　453 ～ 458 はⅢ類Ｂ１である。凸面は全面ナデ調整が施され、横ナデ調整を基本とするが、一部縦ナデ調整を加えるものもある。ナデ残しの部分には、斜め方向の縄叩き痕が残る。凹面は両側縁を面取り調整する。粘土素材には三角形の粘土板を使用している。

453 は布袋に布ｂを用いている。凹面には、布ｂの綴じ目と右上がりの方向の粘土接合痕が確認される。454・455 は布ｃを使用したものである。454 には下布を継ぎ足した綴じ目に、455 には上布の綴じ目下端に破損がみられる。布ｃの使用期間の中でも、比較的新しい時期に製作されたものであることがわかる。454 には右上がりの方向に粘土接合痕が確認される。456 ～ 458 は布を特定できない。

Ⅲ類Ｂ２　459 ～ 461 はⅢ類Ｂ２である。やや風化が激しいが、凸面には全面に縦ナデ調整が施されている。凹面は両側縁を面取り調整されている。459 には布ｄの綴じ目が確認できる。460・461 は、破片である上に綴じ目が残らないため、布の特定ができない。

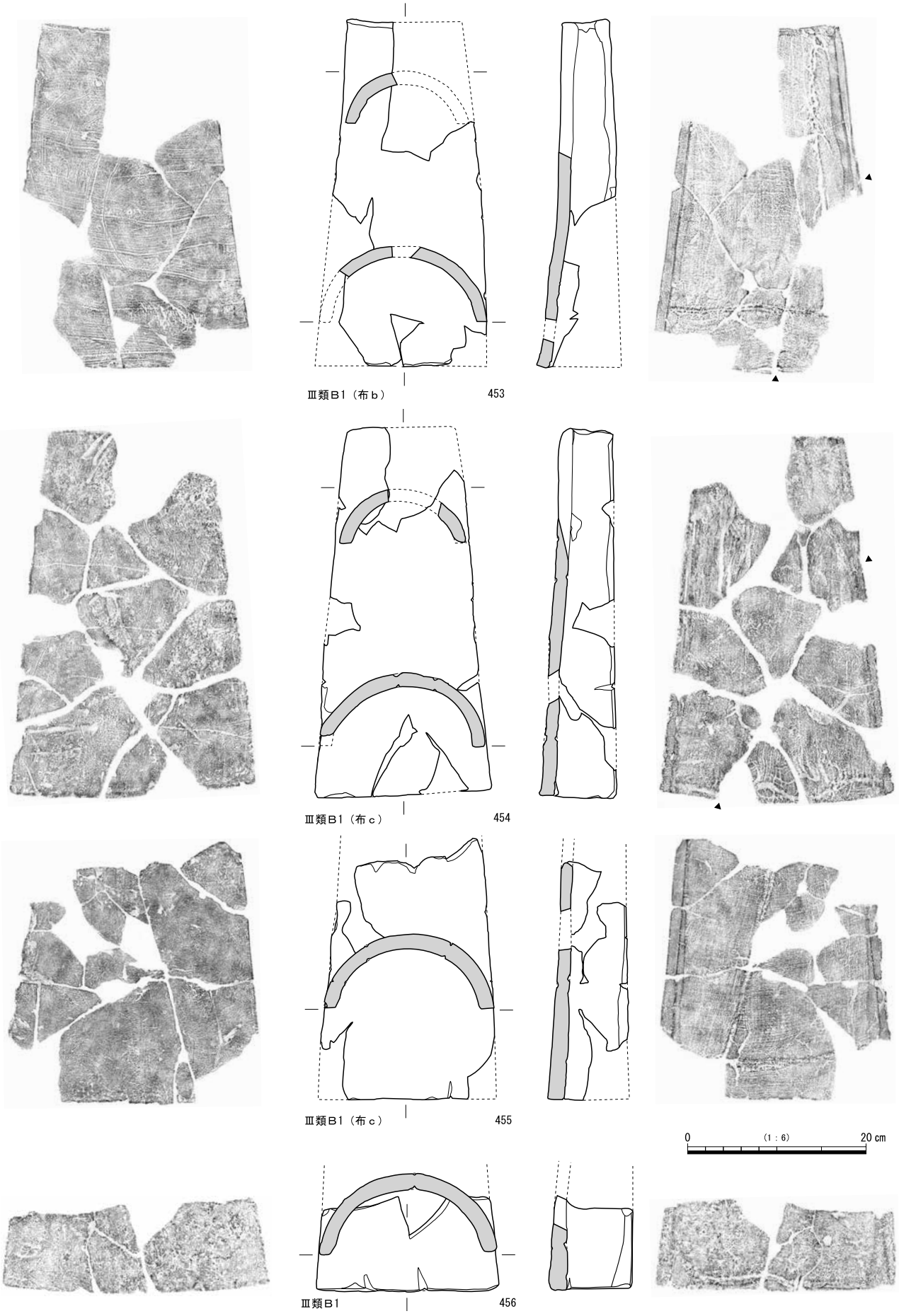


図 137　３号窯灰原出土丸瓦（８）

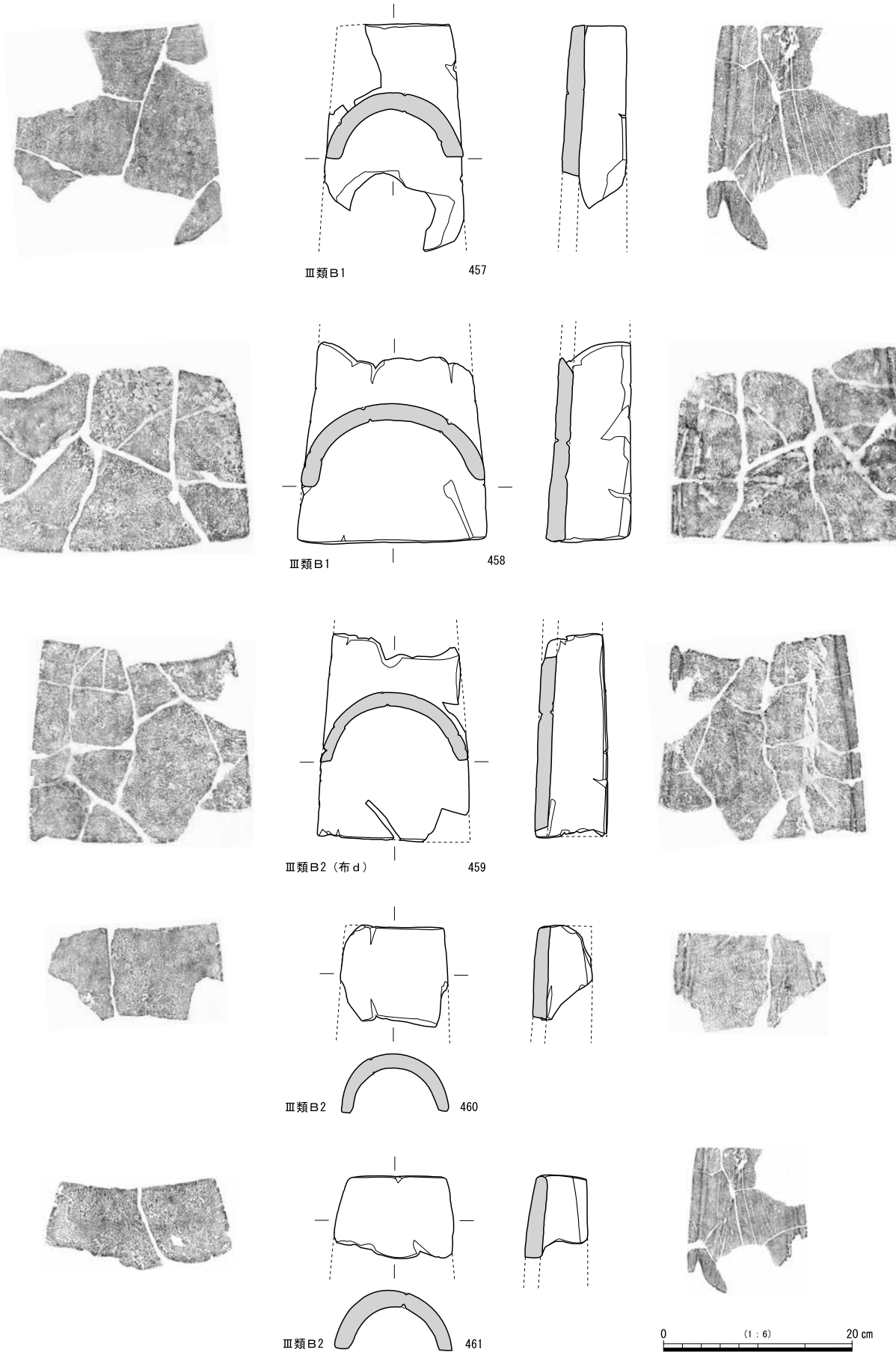


図 138　３号窯灰原出土丸瓦（９）

（3）２号窯出土

２号窯窯体内（図 139 ～ 146、図版 25・59・64・65）

２号窯窯体内からは、他の窯よりは少ないが総重量 49.2 kgの丸瓦が出土している。狭端部または広端部の幅が残るものを中心に 27 点図示する。

Ⅰ類　462 ～ 466 はⅠ類Ｃである。段部凹面の屈曲は強いがやや傾斜しており、段部下端は肩部よりも先端側に位置する。凸面は、玉縁部が横ナデ調整、筒部は縦方向に削り調整される。凹面は、玉縁部

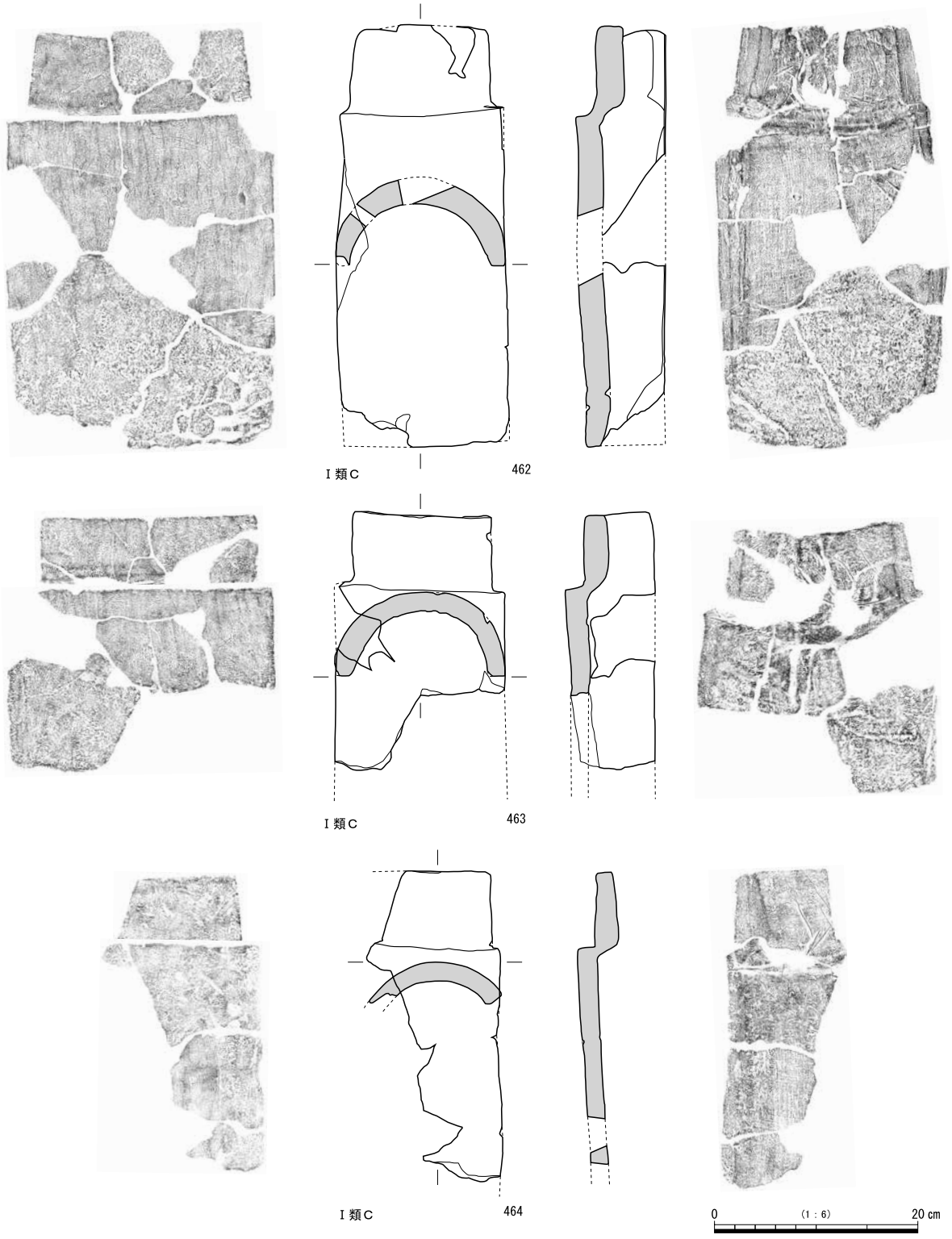


図 139　２号窯窯体内出土丸瓦（１）

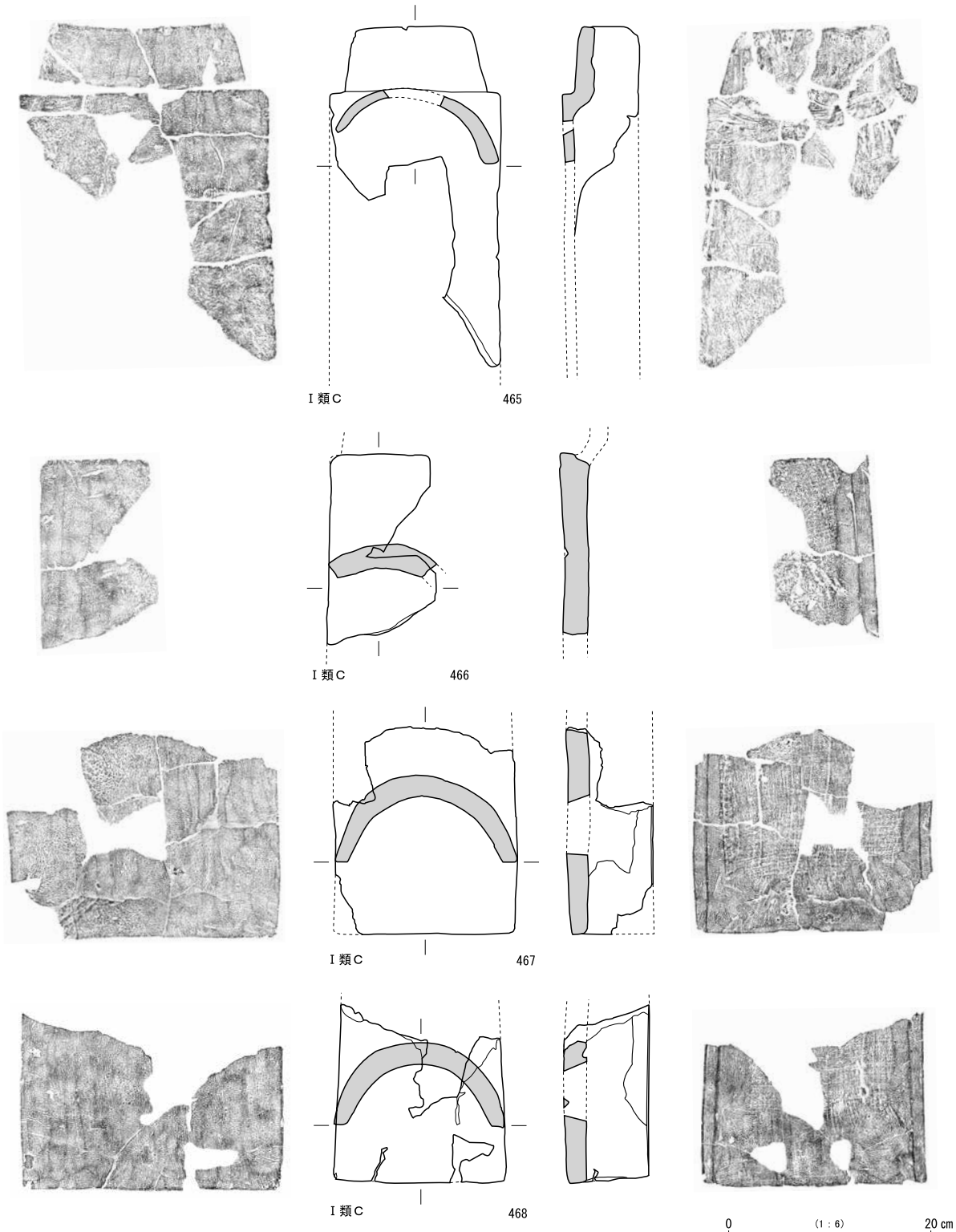


図 140　２号窯窯体内出土丸瓦（２）

と筒部の両側縁をやや幅広に面取り調整する。粘土を補充して肩部を形成している。玉縁部の形状は２種類認められる。462 ～ 464 の玉縁部は、先端と基部の幅にほとんど差がなく、長さは７㎝である。465 の玉縁部は、基部に比べて先端の幅が狭なっており、長さは６㎝である。

466 は肩部付近の破片であり、玉縁部は欠なわれている。肩部は粘土を補充してつくられている。凸面は縦方向に削り調整され、凹面には側縁に幅広に面取りが施されている。467・468 は、広端部の破片である。凸面は縦方向に削り調整が施されている。凹面は両側縁を幅広に面取りし、広端側に削り調

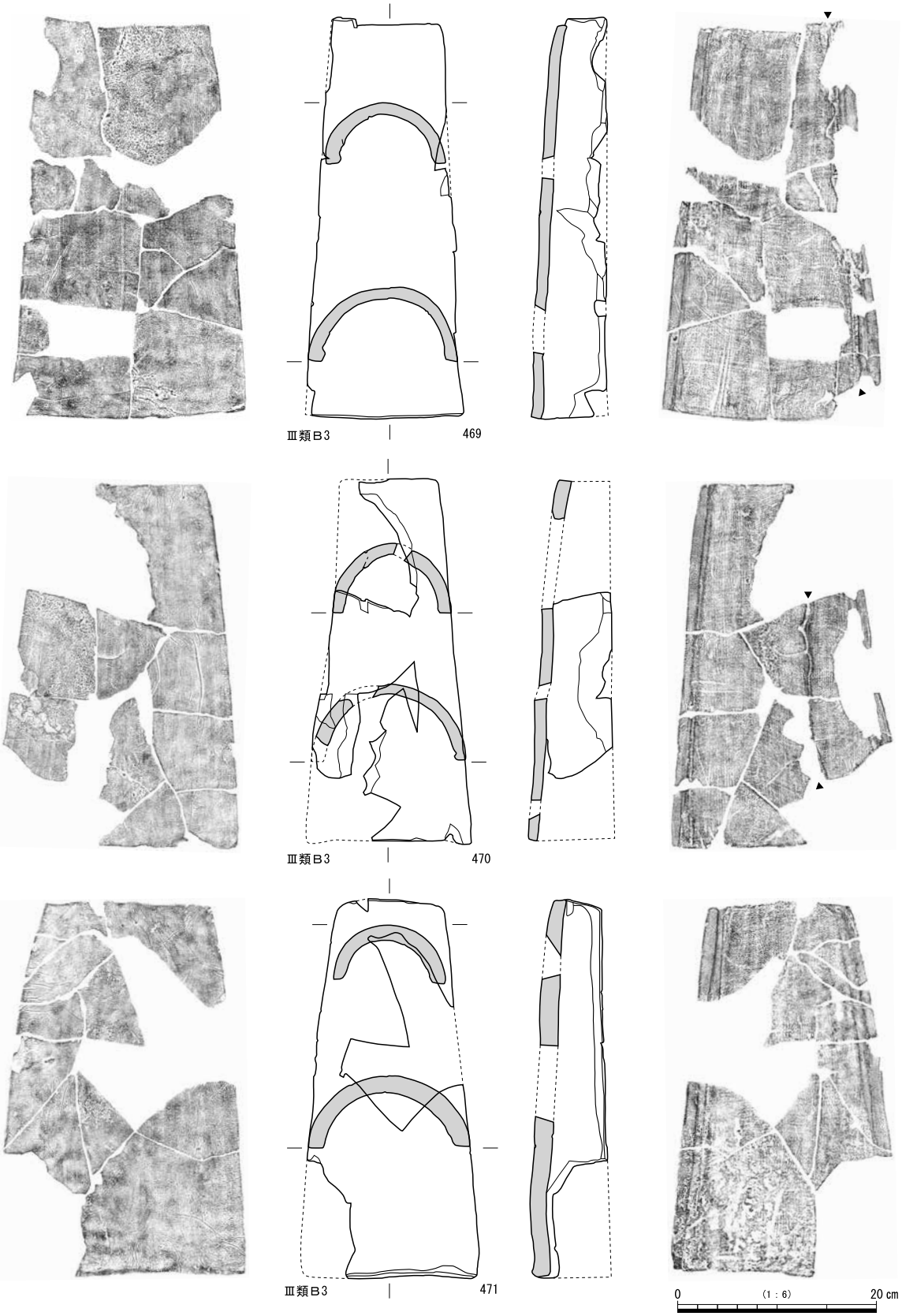


図 141　２号窯窯体内出土丸瓦（３）

整を加えている。466 ～ 468 は玉縁部を欠いてはいるが、凸面に削り調整が施されていることから、Ⅰ類Ｃの破片であると推測される。

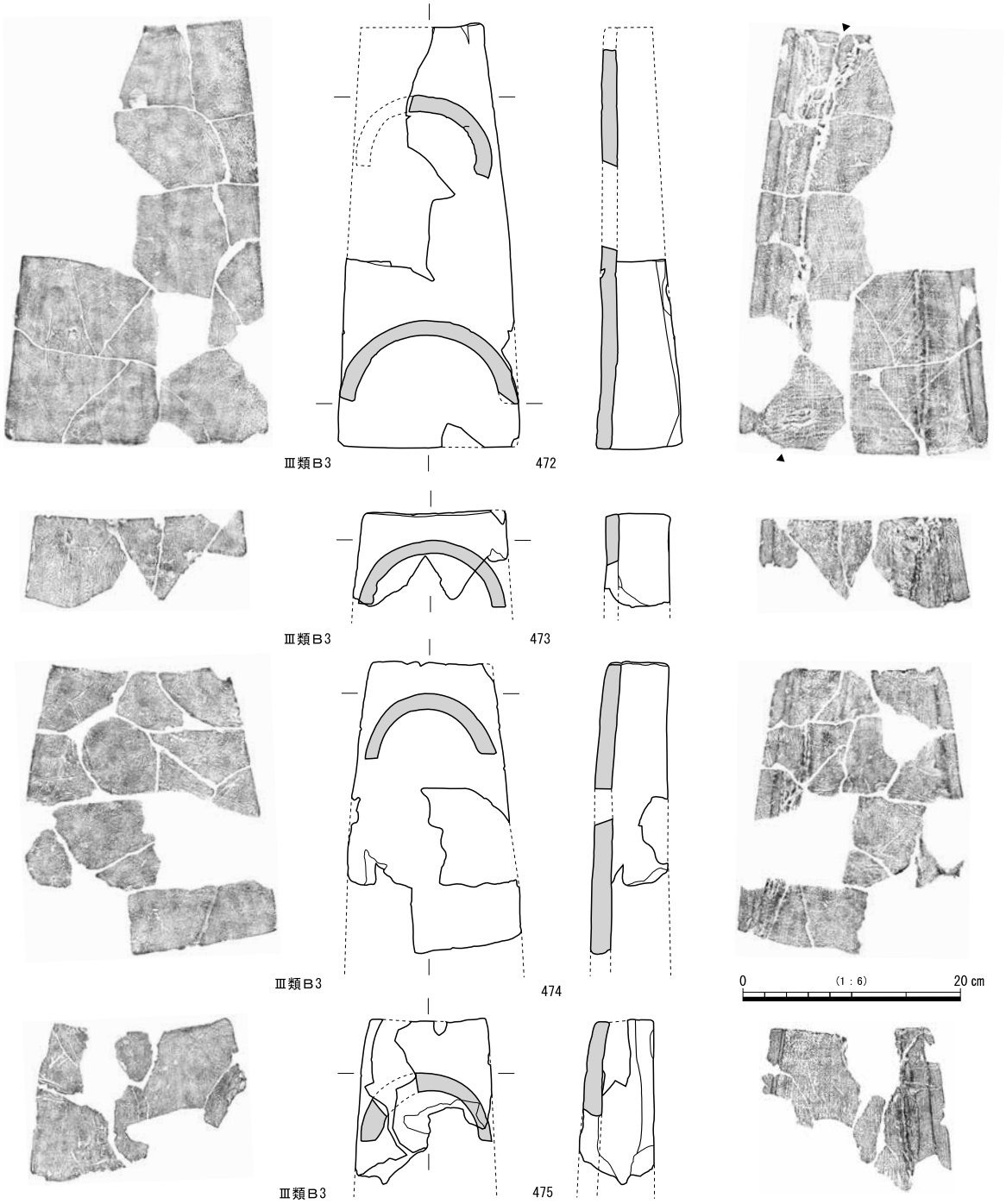


図 142　２号窯窯体内出土丸瓦（４）

Ⅲ類Ｂ３　469 ～ 479 はⅢ類Ｂ３である。法量の上では区別できないが、凸面調整の異なる２種が確認される。469 ～ 475 は、凸面のほぼ全面に縦ナデ調整が施されるものである。横ナデ調整は、広端側にのみわずかに残る。469・470・472 には縦方向に粘土接合痕が残り、合わせ目はいずれもＳ型である。472・473 には布綴じ痕が残る。破片のため同一とは言い切れないが、綴じ目とその上端が開いて居る点が布ｄと近似している。胎土は橙色の強い色調であり、この点でも３号窯のⅢ類Ｂ２と類似する。

476 ～ 479 は凸面を横ナデ調整するものである。469 ～ 475 の縦ナデ調整が省略されたものといえる。いずれも表面の風化が激しく不鮮明ではあるが、476 と 477 には布ｅの布綴じ痕が残る。477・479 には窯壁や焼土が付着しており、構築材などに再利用されていることがわかる。二次的な被熱による変化の可能性もあるが、いずれも軟質で色調は灰白色である

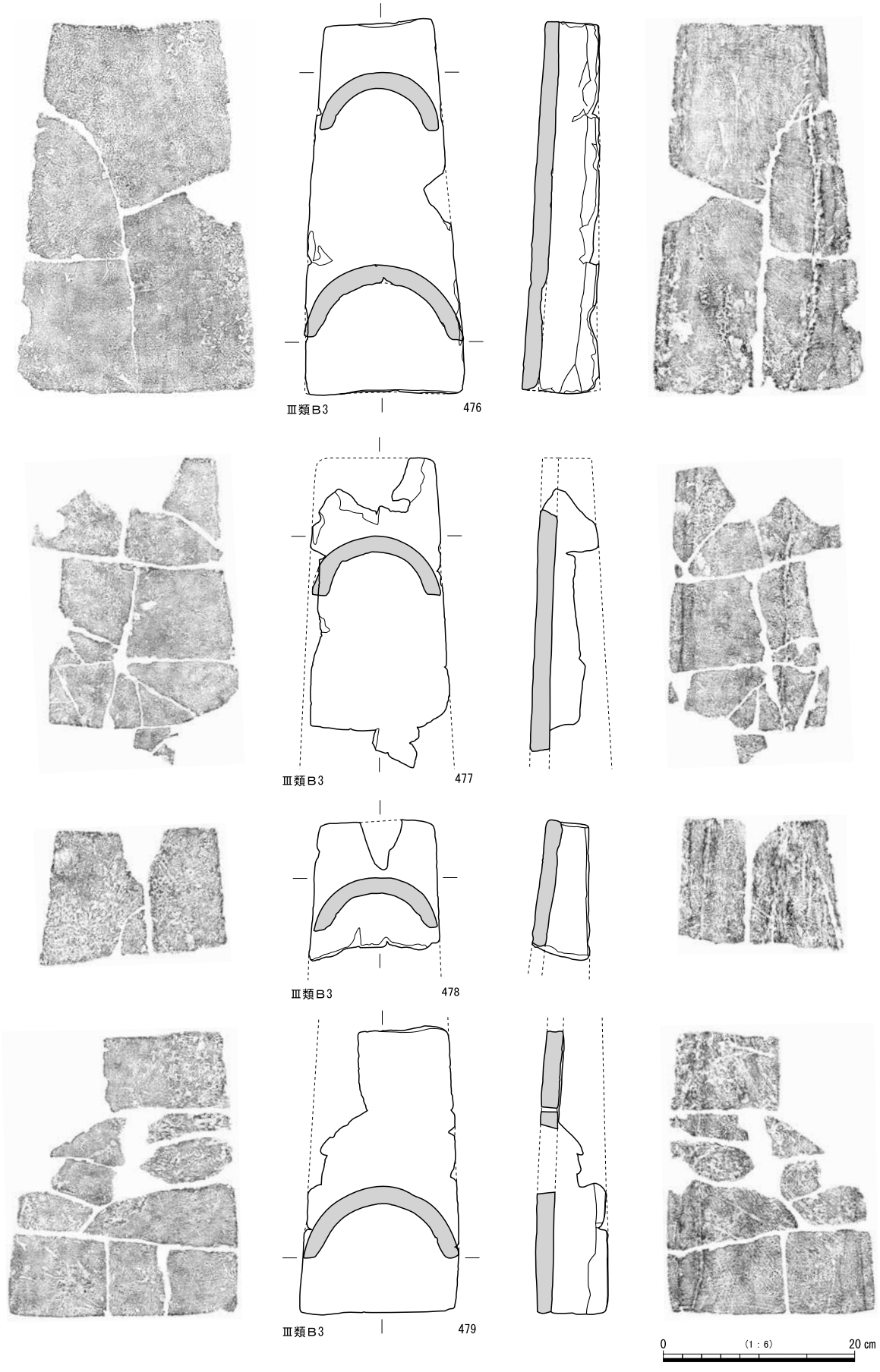


図 143　２号窯窯体内出土丸瓦（５）

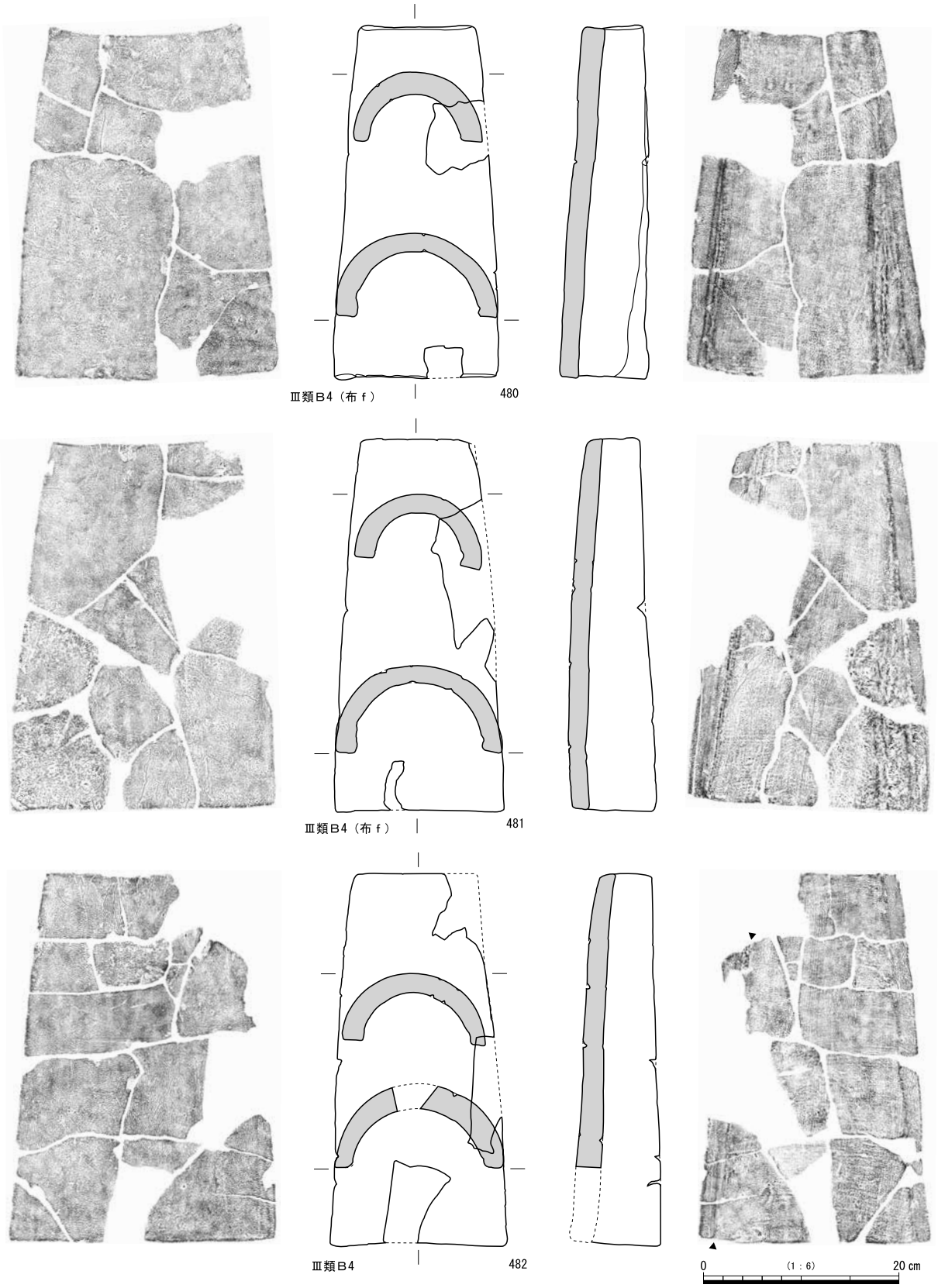


図 144　２号窯窯体内出土丸瓦（６）

Ⅲ類Ｂ４　480 ～ 487 はⅢ類Ｂ４である。凸面は横ナデに加えて、狭端側を中心に縦ナデ調整が施される。凹面は両側縁を面取りするが、面取りの幅は狭いもの（480 ～ 482）と広いもの（483 ～ 485）と

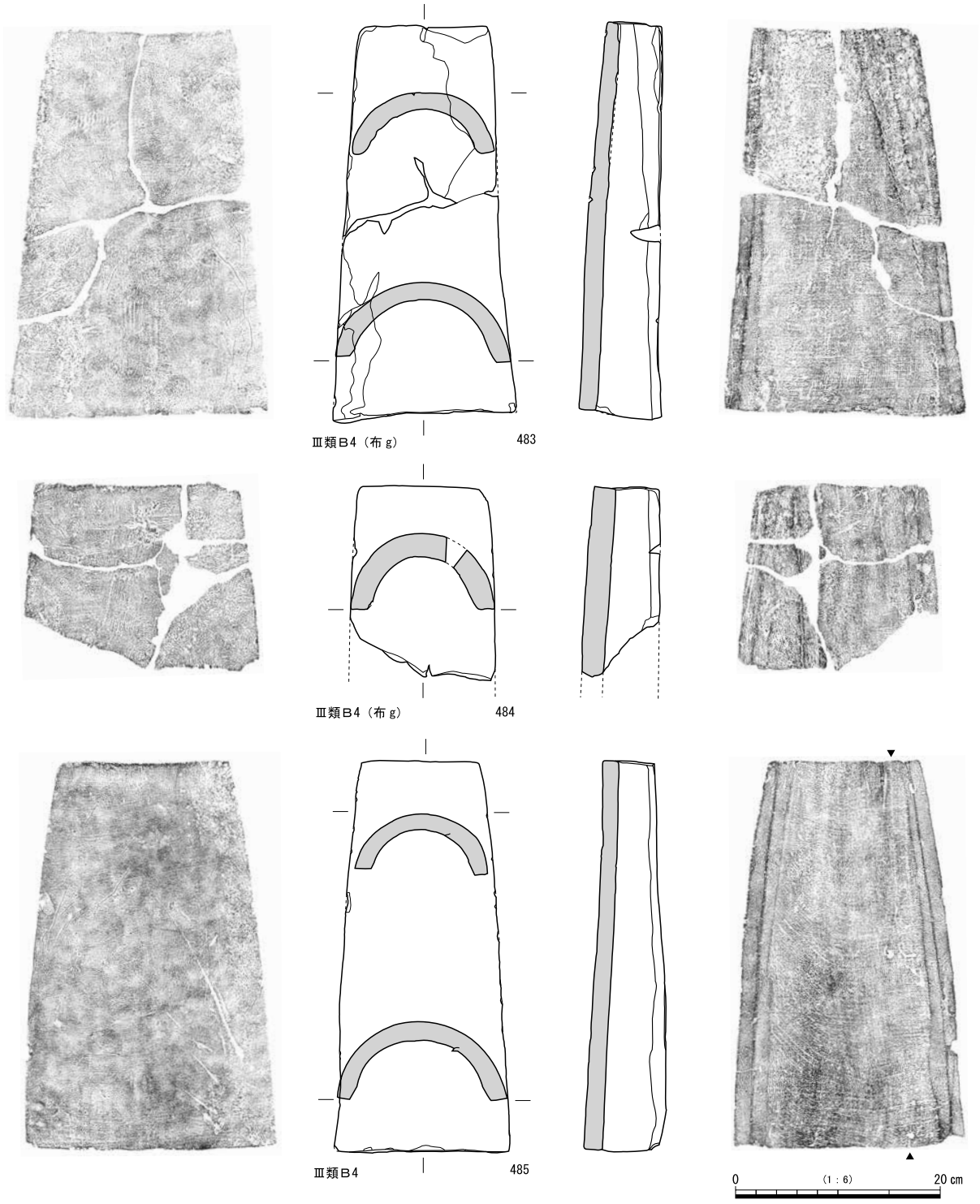


図 145　２号窯窯体内出土丸瓦（８）

がある。480 と 481 は布袋に布 f、483 と 484 は布 g を用いている。480 と 481 には、側縁に分割突帯とみられる溝状の窪みが残る。482・485・486 では、縦方向の粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 482 がＳ型、484 と 485 はＺ型である。479 ～ 481・483・485 は、灰原から出土した破片と接合している。482 と 486 は破片によって色調が異なり、中には灰被りしている破片もある。484 と 487 は軟質で表面が著しく磨滅しており、全体に焼土や窯壁が付着している。これらの瓦に関しては、構築材として再利用されていたものとみてよい。

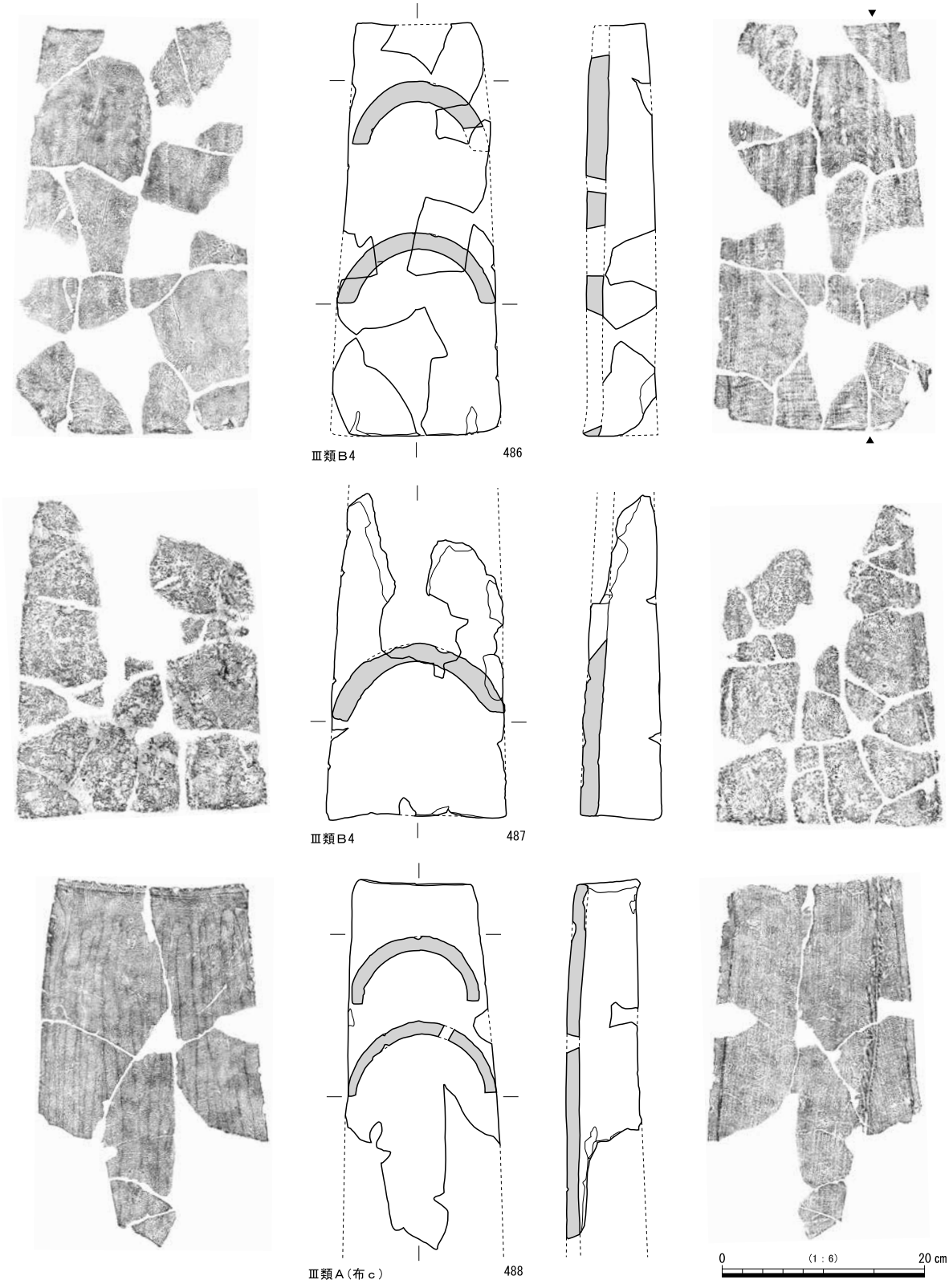


図 146　２号窯窯体内出土丸瓦（７）

Ⅲ類Ａ　488 はⅢ類Ａの破片である。凸面には、縦方向に削り調整が施されている。布袋は布ｃであり、凹面には綴じ目が残る。表面や断面に窯壁が付着していることから、２号窯の構築材として使用されていたものとみてよい。

２号窯灰原（図 147 ～ 151、図版 25・64・65）

２号窯灰原からは、総重量 60.8 kg出土している。ほとんどが破片であり、表面の風化の著しいものが多い。狭端または広端部が残存するものを中心に 20 点図示する。なお、ほかと同様に出土点数の少ないⅠ類については、細片を除き形状がわかるものはすべて図示した。

Ⅰ類Ｃ　489 ～ 491 はⅠ類Ｃである。489 は玉縁部から筒部にかけての破片である。表面の風化が著しく、形状が把握しづらい。凹面段部の段差が深いことからⅠ類Ｃとしたが、屈曲がやや緩やかでⅠ類Ｄに近いようにもみえる。粘土を付加して肩部を形成している。490 は玉縁部の破片であり、肩部は欠損している。玉縁基部に比べて先端の幅が狭い。玉縁部の長さは３㎝で、465 と同様の形態のものと判断される。491 は肩部付近の破片である。玉縁部は欠損しているが、凸面に縦方向の削り調整が施されていることから、Ⅰ類Ｃであると判断できる。

Ⅱ類Ｂ　492 ～ 495 はⅡ類Ｂである。凹面に側板痕の凹凸が残る。凸面の調整は、広端部の破片の 494 は全面横ナデであるが、狭端部の 492 ～ 494 には縦ナデ調整が加えられており、３号窯出土のものと凸面調整がやや異なる。494 と 495 のナデ残しの部分には、斜め方向の縄叩きの痕跡が残る。凹面にはやや幅広の面取り調整が施されている。

Ⅲ類Ａ　496 はⅢ類Ａである。凸面には縦方向の削り調整が施されている。前庭部の構築土内から出土した破片と接合している。破片を含めても、２号窯でⅢ類Ａと明確に認識できるものは、これと前述の 488 の２点のみであり、３号窯の製品が持ち込まれている可能性がある。

Ⅲ類Ｂ３　497 ～ 505 はⅢ類Ｂ３である。凸面には狭端側を中心に、ほぼ全面に縦ナデ調整が加えられている。497・498・501・502 の布袋は布ｄであり、501 と 502 は裏返った状態で使用している。504 は布ｅを用いている。498 ～ 500・505 には、縦方向に粘土接合痕が確認でき、合わせ目はいずれもＳ型である。497 ～ 499 の側縁には、分割突帯とみられる溝状の窪みが残る。504 を除き、布袋や調整は３号窯出土のⅢ類Ｂ２と同じであり、胎土も橙色が強い色調という点で共通する。表面の劣化が著しいものはあるが、焼土や窯壁の付着したものはなく、これらすべてを３号窯から持ち込まれたものは考えにくい。基本的には２号窯で焼成されたものとみてよいであろう。

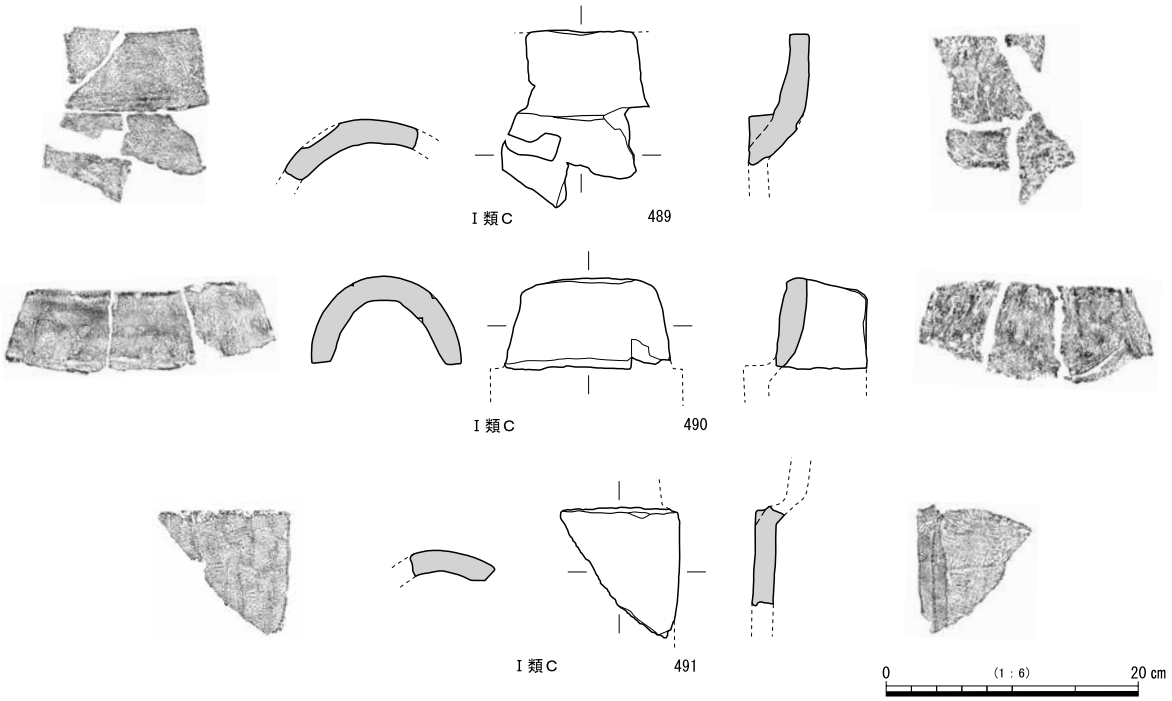


図 147　２号窯灰原出土丸瓦（１）

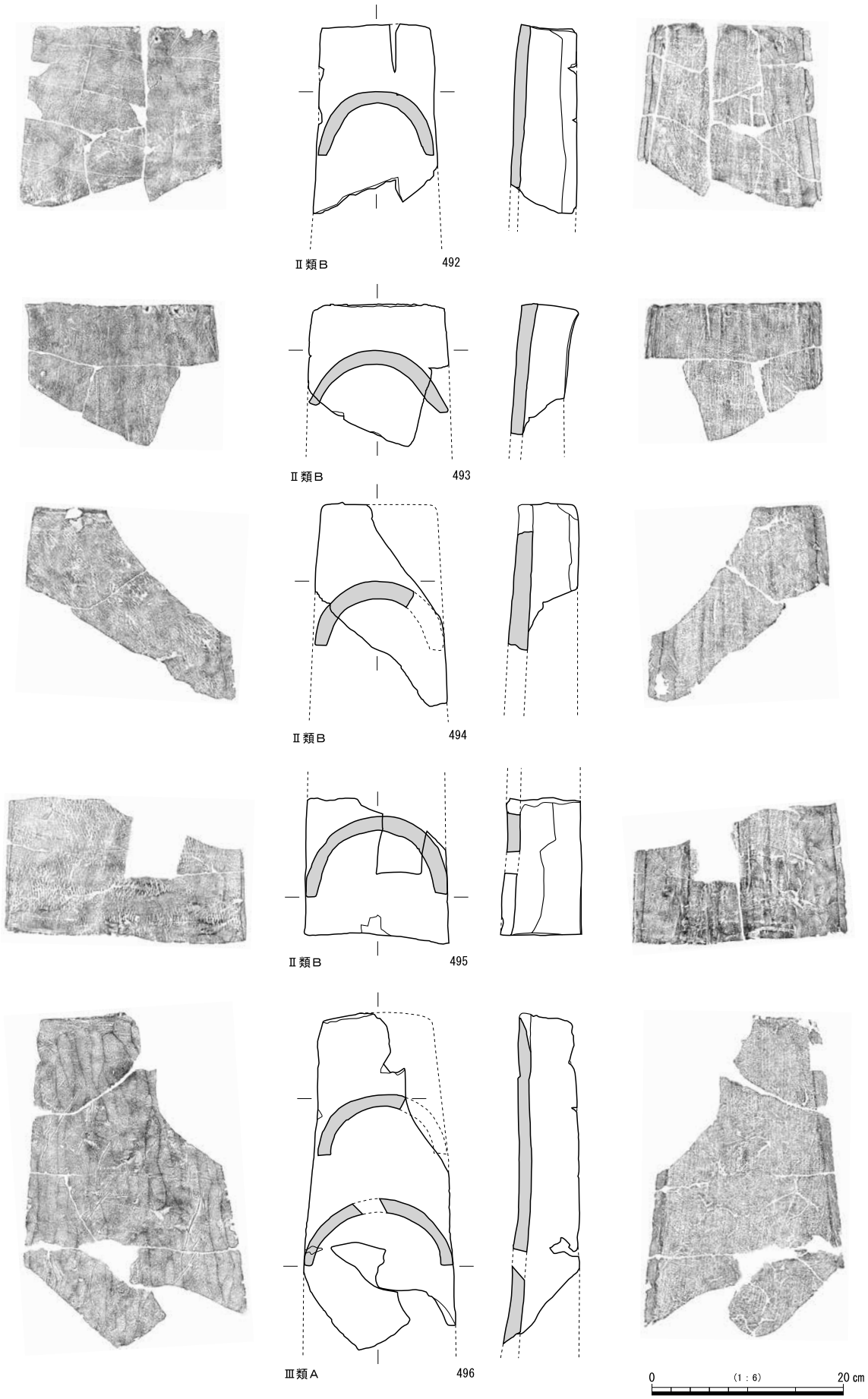


図 148　２号窯灰原出土丸瓦（２）

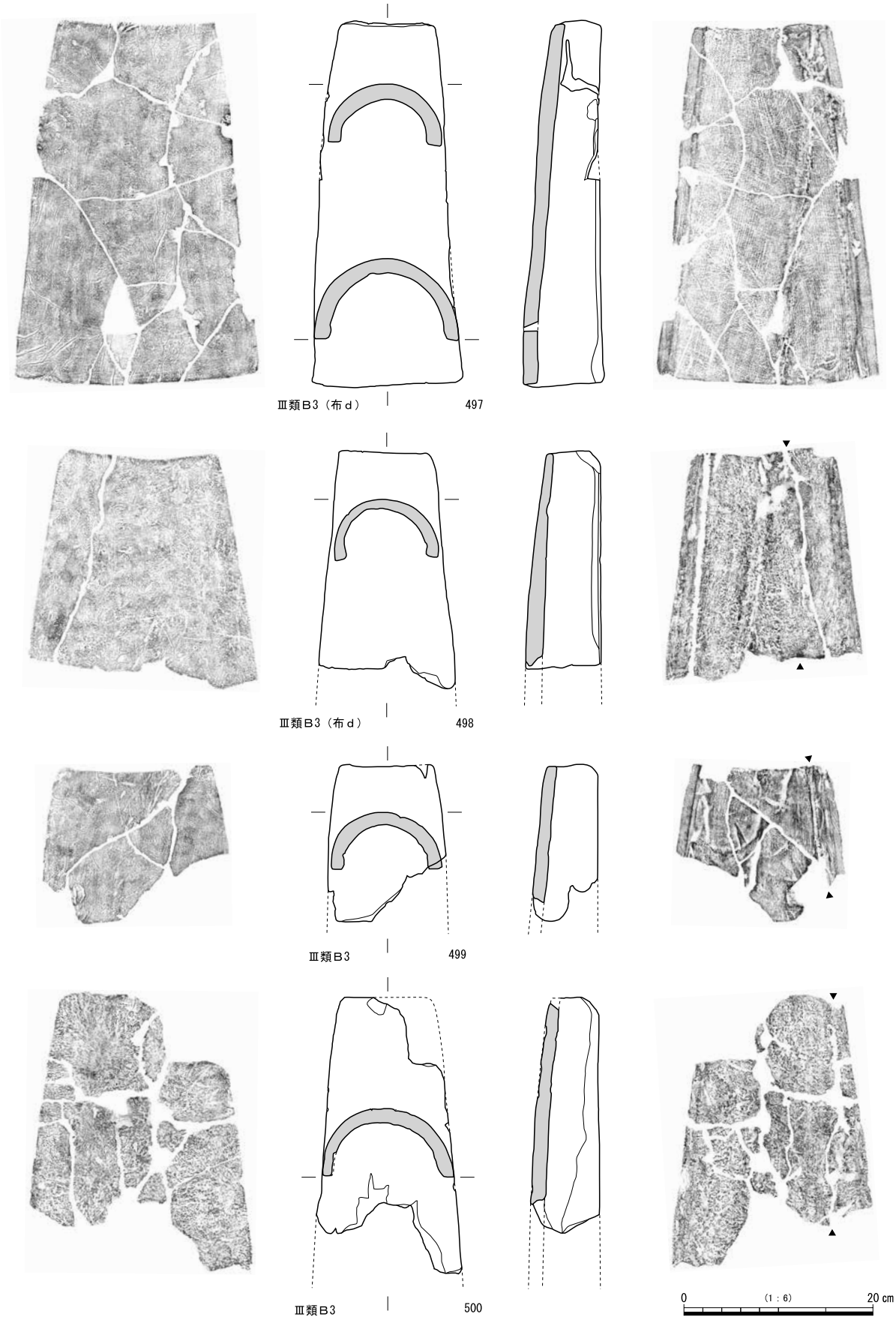


図 149　２号窯灰原出土丸瓦（３）

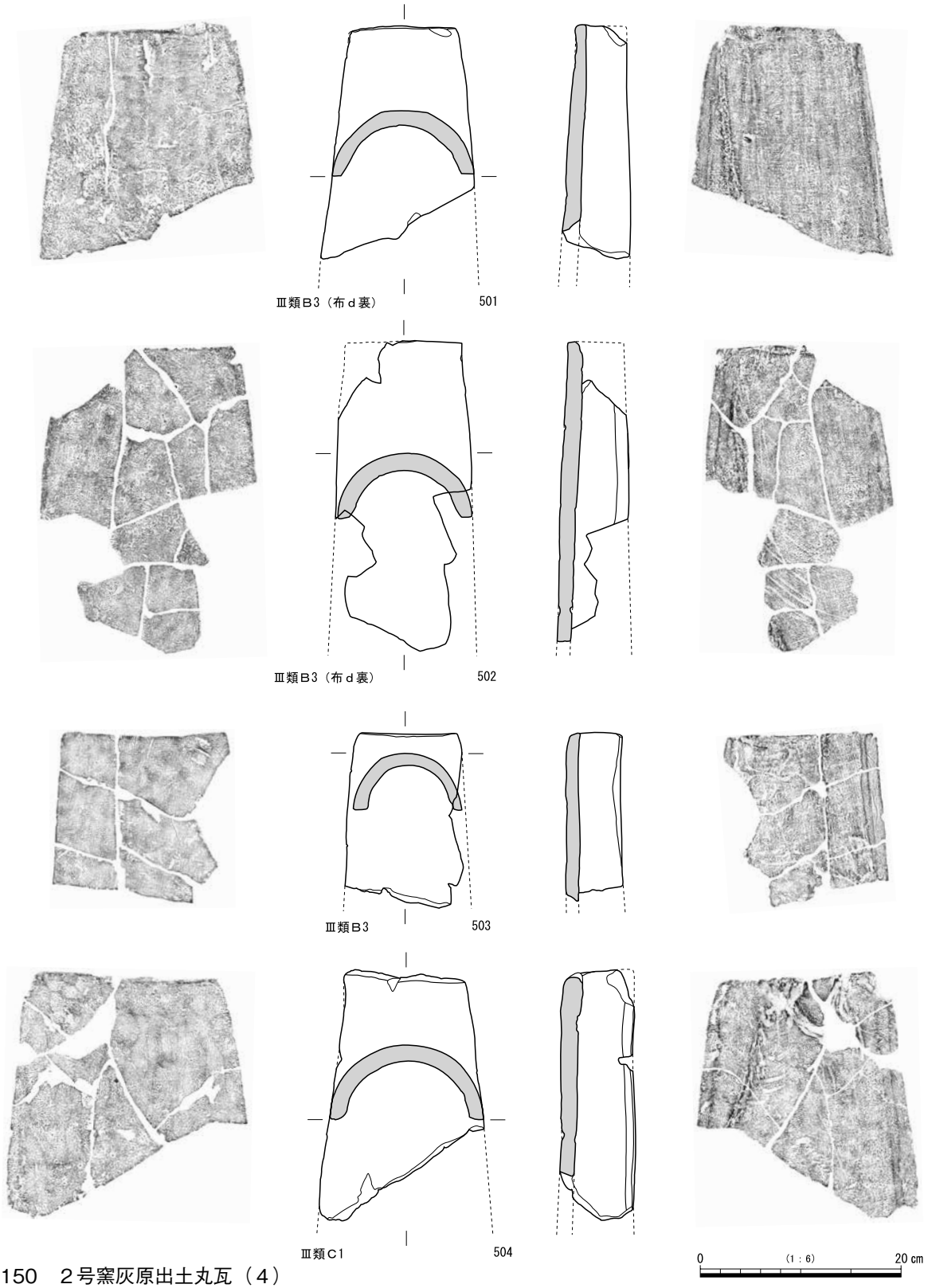


図 150　２号窯灰原出土丸瓦（４）

Ⅲ類Ｂ４　506～508はⅢ類Ｂ４である。凸面は横ナデが主体であるが、部分的に縦ナデが加えられる。凹面は側縁を面取りしているが、面取りの幅に違いがみられる。506は幅の狭い面取りを、507・508は幅広の面取りを施している。506には綴じ目が残っており、使用している布袋は布ｆである。507には、縦方向に粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型である。

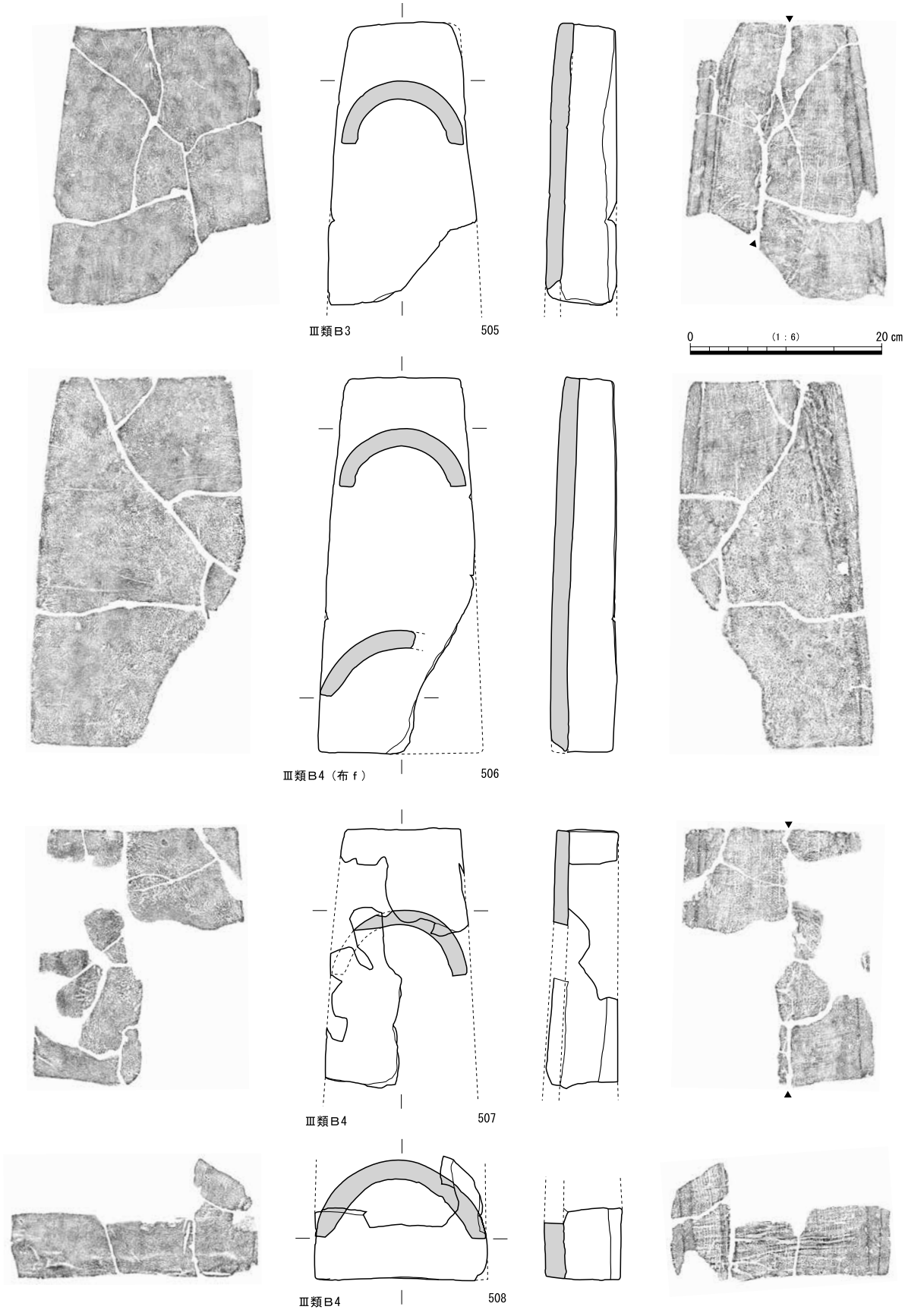


図 151　２号窯灰原出土丸瓦（５）

（４）１号窯出土

１号窯窯体内（図 152 ～ 157、図版 59・65・66）

１号窯窯体内からは、総重量 17.4 kg出土している。Ⅰ類は細片を除き端部の残存する３点を、そのほかは狭端部または広端部の残存するものを 20 点図示する。

Ⅰ類Ｄ　509 ～ 511 はⅠ類Ｄである。段部凹面の屈曲は小さく緩やかに傾斜しており、段差も小さい。凸面は、玉縁部は横ナデ調整、筒部は縦方向の削り調整されている。凸面に粘土を付加して肩部を形成している。509 は筒部の破片であり、玉縁部を欠いている。玉縁部の形状は不明であるが、段差が少ないことからⅠ類Ｄと推定される。凹面の側縁には幅広の面取りが施されている。510・511 は、玉縁部から筒部にかけての破片である。玉縁部の長さは、510 が８㎝、511 は７㎝と多少違いがある。玉縁部の幅は、先端と基部でほぼ同じである。

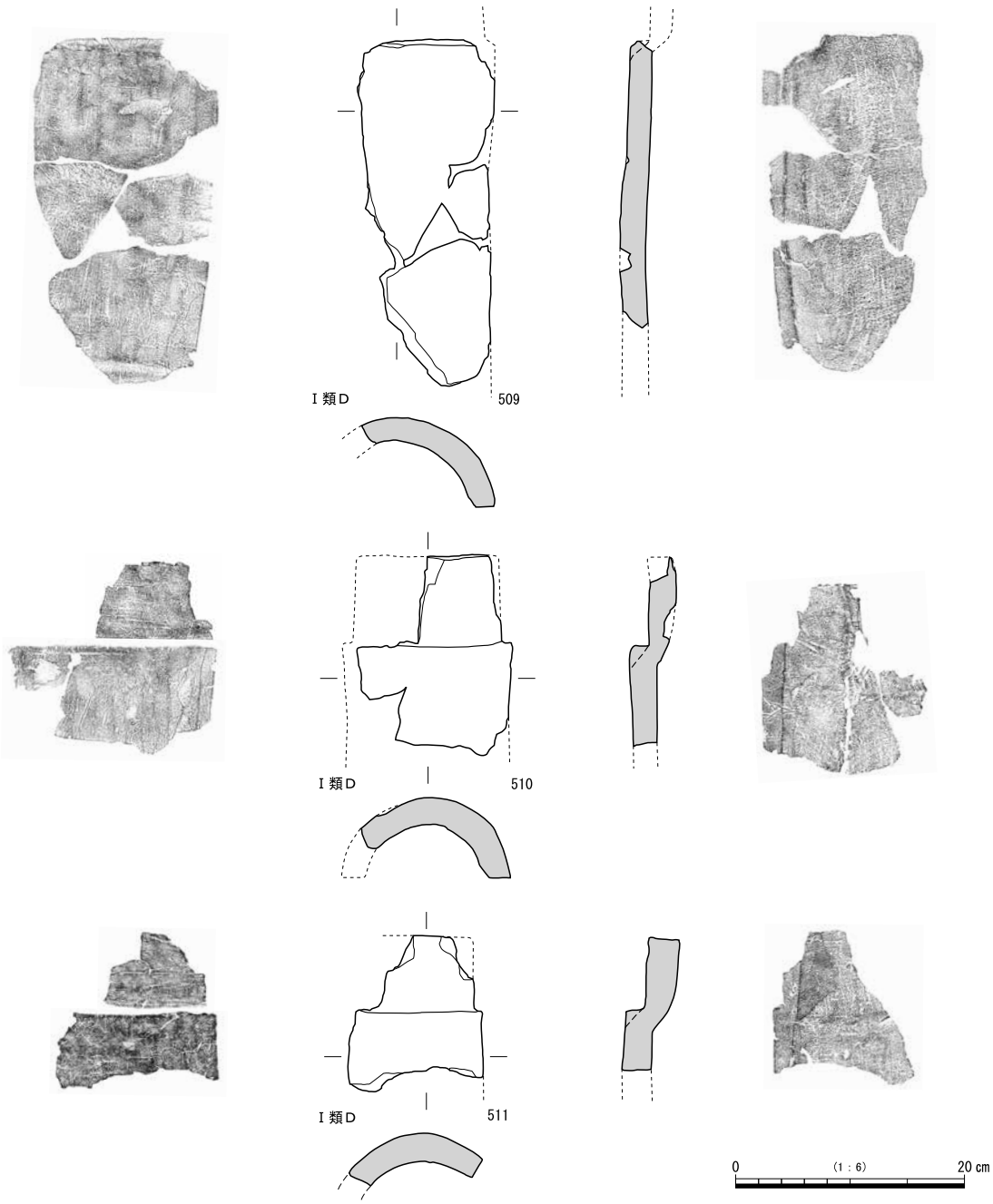


図 152　１号窯窯体内出土丸瓦（１）

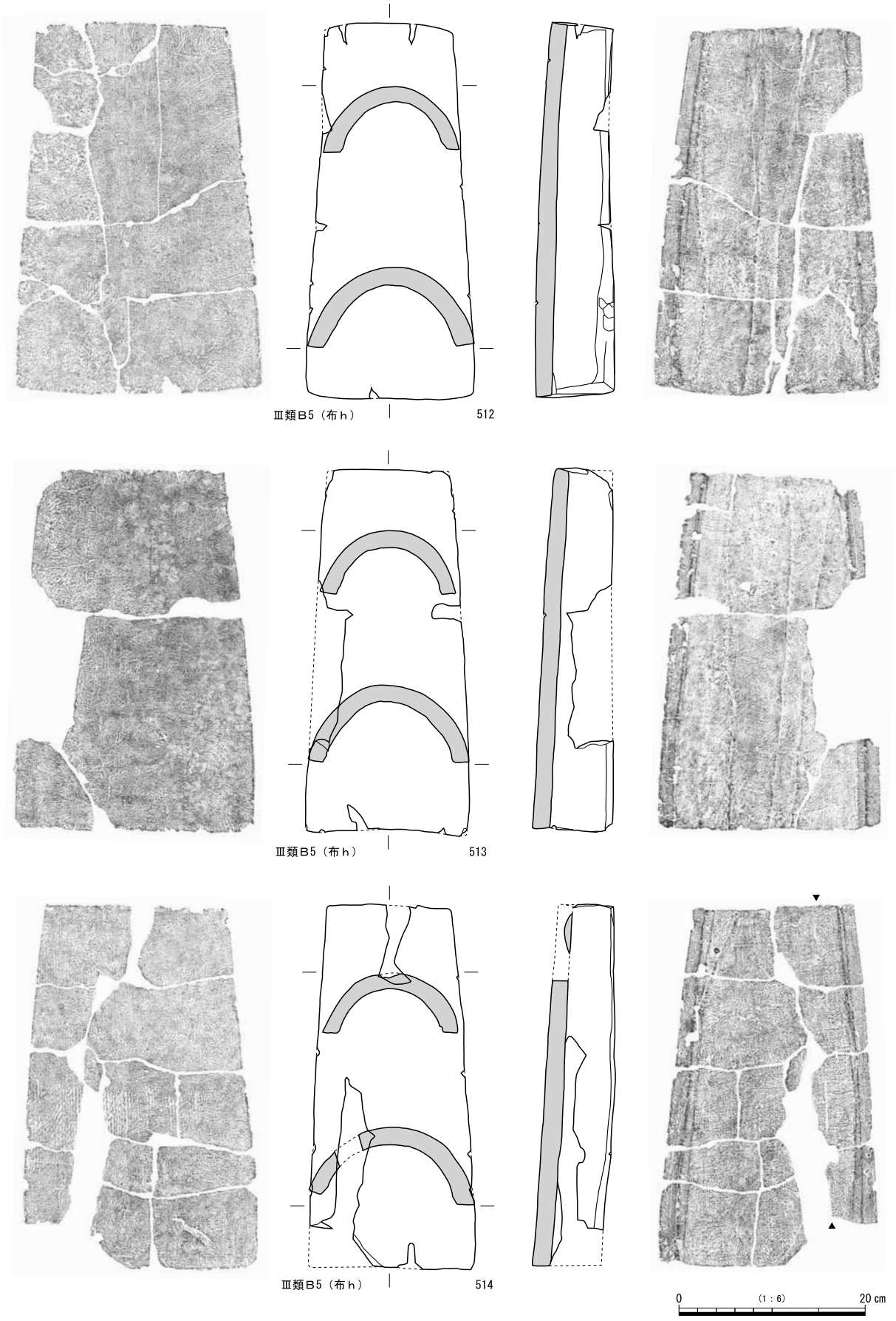


図 153　１号窯窯体内出土丸瓦（２）

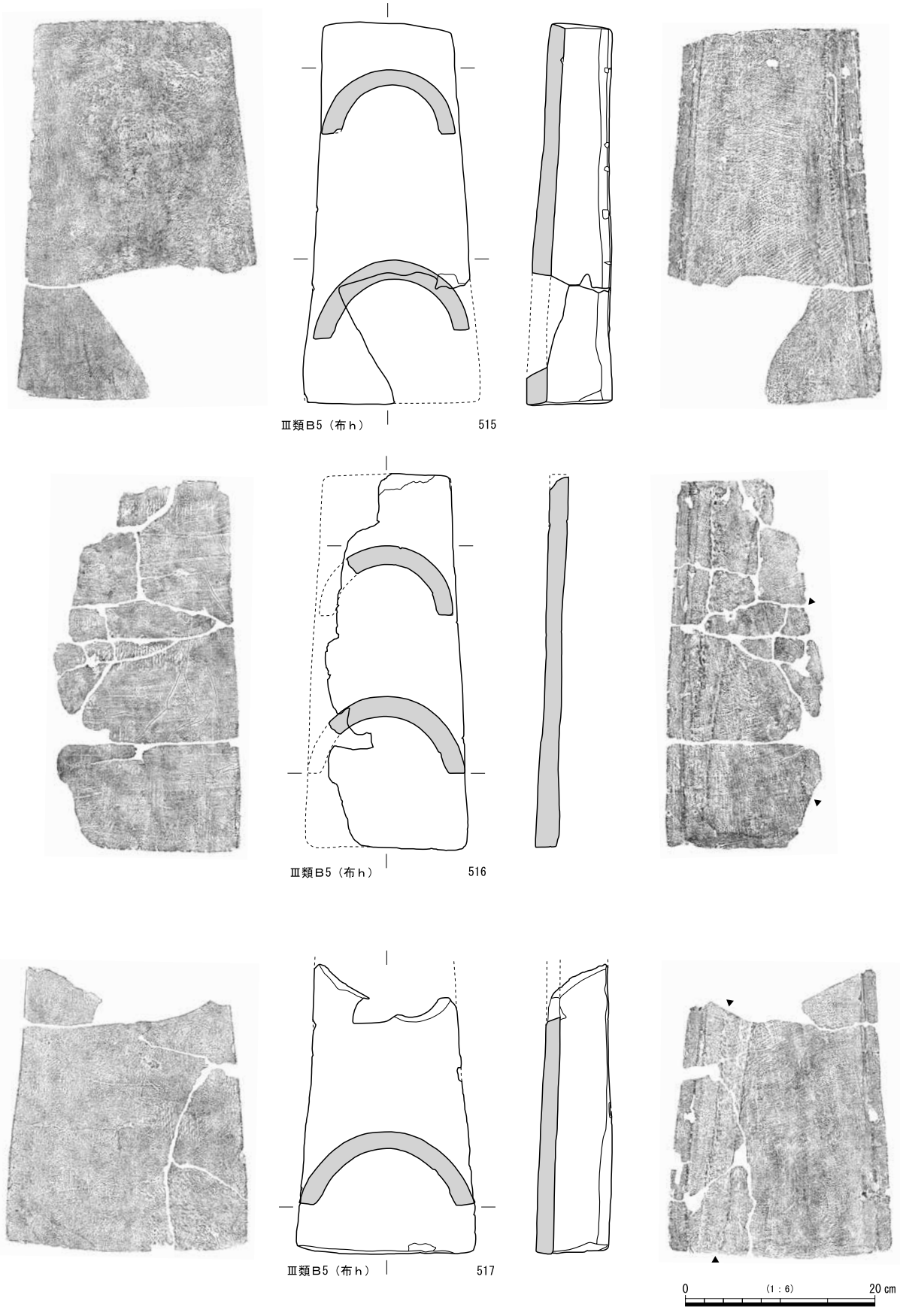


図 154　１号窯窯体内出土丸瓦（３）

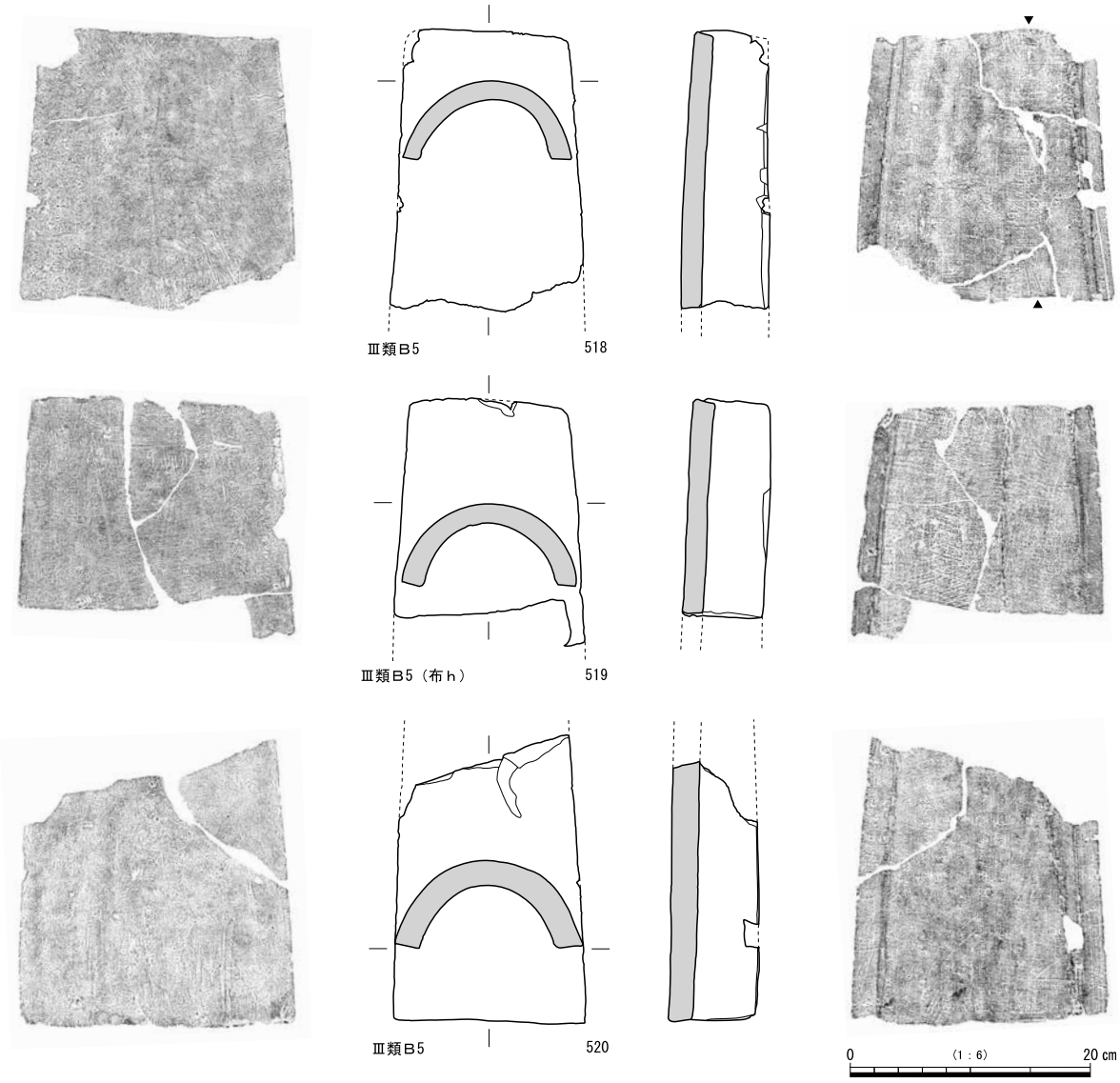


図 155　1 号窯窯体内出土丸瓦（4）

Ⅲ類Ｂ５　512 ～ 520 はⅢ類Ｂ５である。いずれも、砂が多く含む粘土が使用されている。凸面は横ナデ調整が主体であるが、部分的に軽い縦ナデ調整が施されている。縦ナデには工具痕とみられる凹凸が筋状に残る。ナデ残しの部分には、縦方向の縄叩き痕が確認できる。側面は全面削り調整されており、削りの方向に統一性がみられる。右側は狭端から広端へ、左側は逆に広端から狭端へ向かって削っている。消す理調整を行う際に、削る部分が右側に来るように瓦を回転させていたものとみてよい。512 ～ 517・519 には布綴じ痕が残っており、いずれも布袋には布 h が使用されていることがわかる。514 ～ 518 には、縦方向に粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 514・517・518 はＳ型、515・516 はＺ型である。513 と 517 は段構築瓦と接合しており、表面に焼土が付着していることから、元は段構築瓦に使用されていたものとみてよい。518 と 520 にも表面に焼土が付着しており、構築材であった可能性が高い。

Ⅲ類Ｂ６　521 ～ 527 はⅢ類Ｂ６である。凸面は縦方向に削り調整を施した後、部分的に不整方向のナデ調整を施す。凹面は両側縁にやや幅広の面取りを施しており、側面とともにナデ調整を施して丸く仕上げられているものが多い。厚さが一定せず、全体的に粗雑なつくりである。521・524・525 には布綴じ痕が残り、布 i が使用されていることがわかる。525 は布袋が裏返った状態で使用している。522・523・526・527 には、縦方向に粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 522・526・527 がＳ型、523 はＺ型

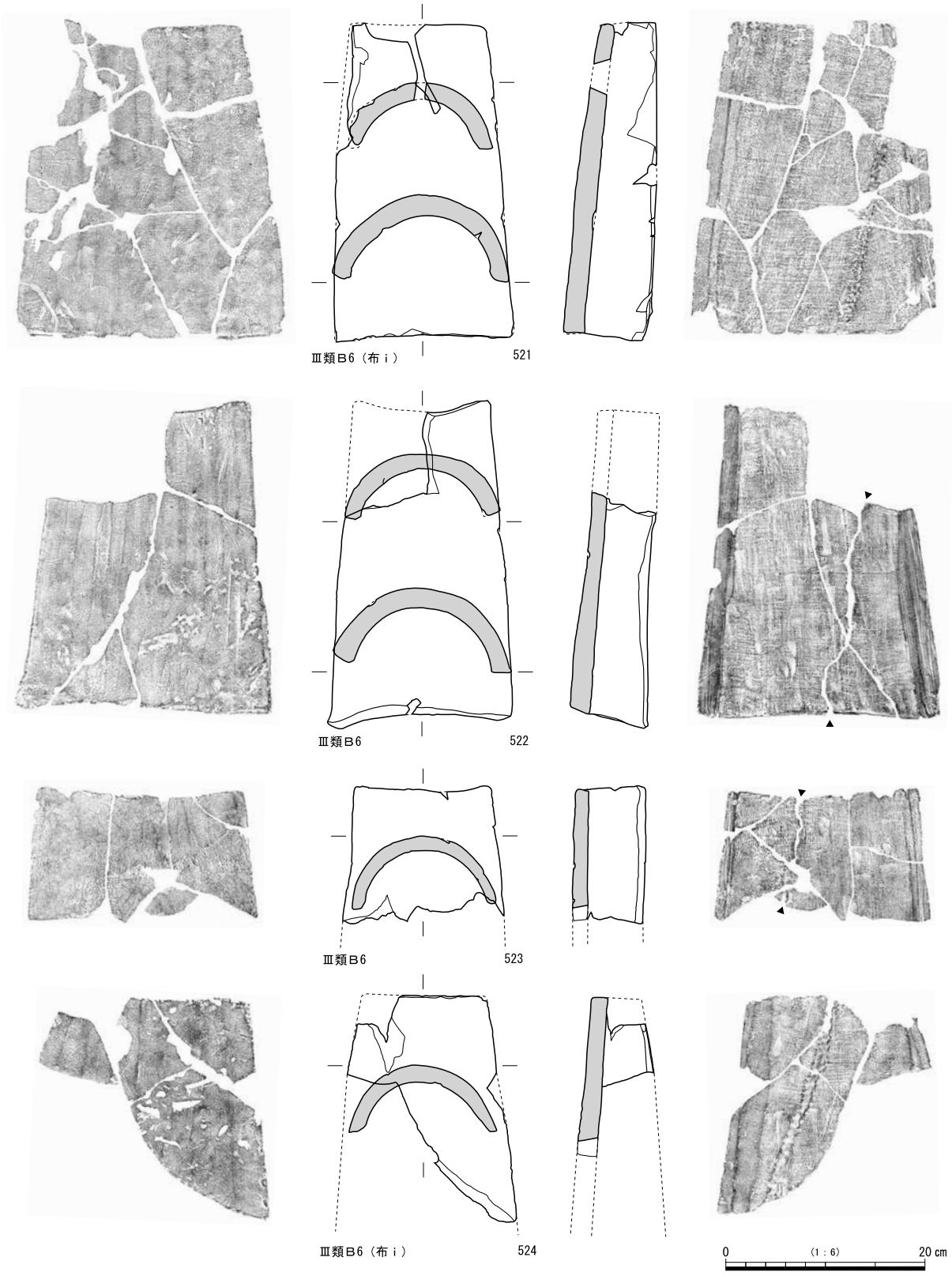


図 156　１号窯窯体内出土丸瓦（５）

である。521 以外はすべて段構築瓦と接合しており、本来は段に使用されていたものとみてよい。

Ⅲ類Ｂ７　528 はⅢ類Ｂ７である。調整はＢ６と同じであるが、全長が 36.5 ㎝とＢ６よりも長い。段構築瓦と接合しており、表面には焼土が付着する。

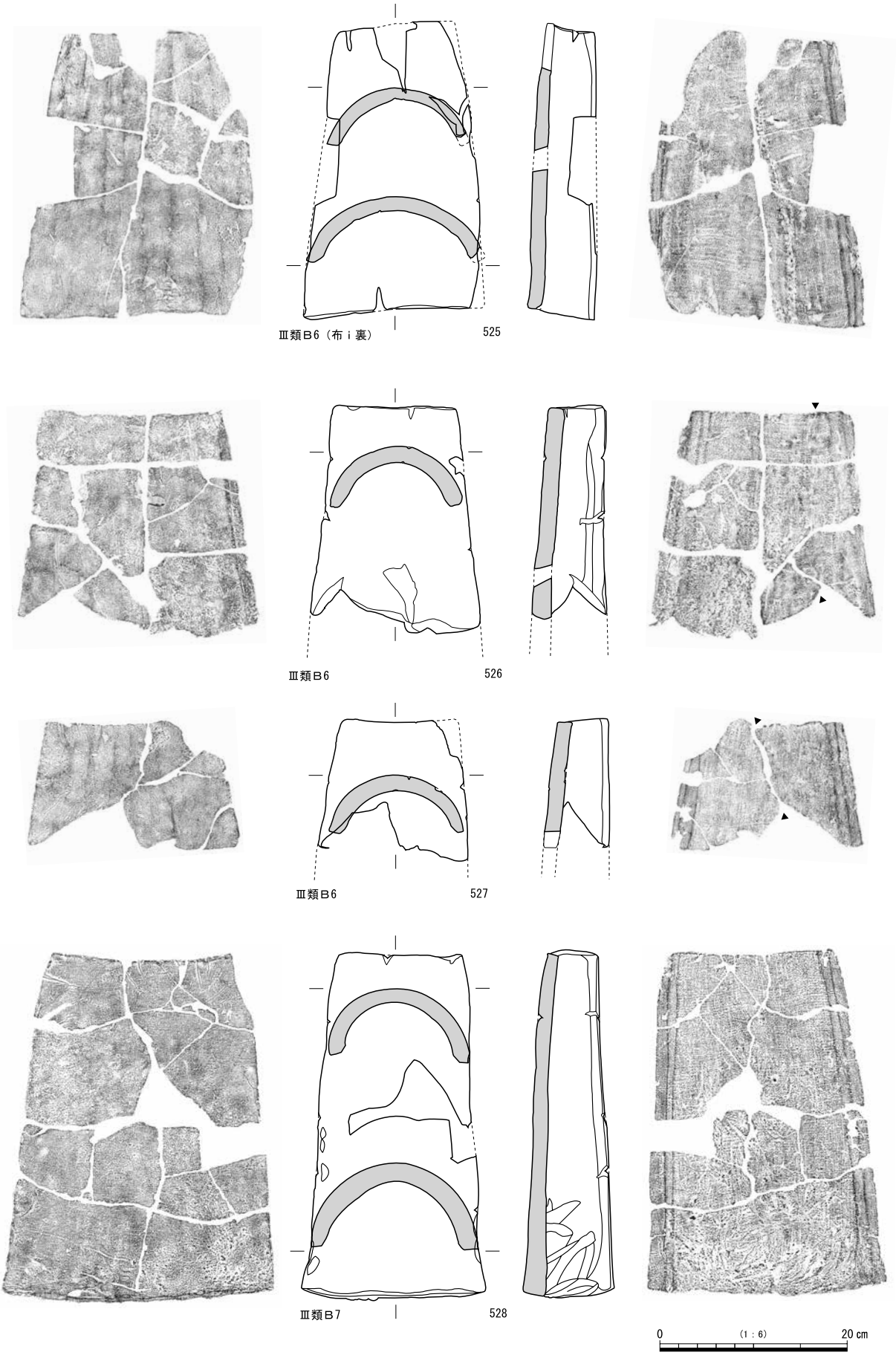


図 157　１号窯窯体内出土丸瓦（６）

１号窯灰原（図 158 ～ 166、図版 30・65）

１号窯灰原からは、総重量 128.5 kg出土している。幅の残るものを中心に 31 点を図示する。

Ⅲ類Ｂ３　529 はⅢ類Ｂ３の狭端部の破片である。凸面は風化が著しいが、おそらくは縦ナデであろう。凹面は両側縁をやや幅広に面取りする。縦方向に粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＺ型である。全面に焼土が付着していることから、構築材として再利用されていた可能性が高い。

Ⅲ類Ｂ４　530・531 はⅢ類Ｂ４である。いずれも風化が著しくほとんど表面が残存しない。530 の凸面は、わずかに縦ナデの痕跡が確認できる。ともに表面や断面に焼土が付着しており、構築材として使用されていたものとみられる。

529 ～ 531 については、出土数が極端に少なく、１号窯で焼成されたものとは考えにくい。構築材として１号窯に持ち込まれた、２号窯の瓦とみるのが妥当であろう。

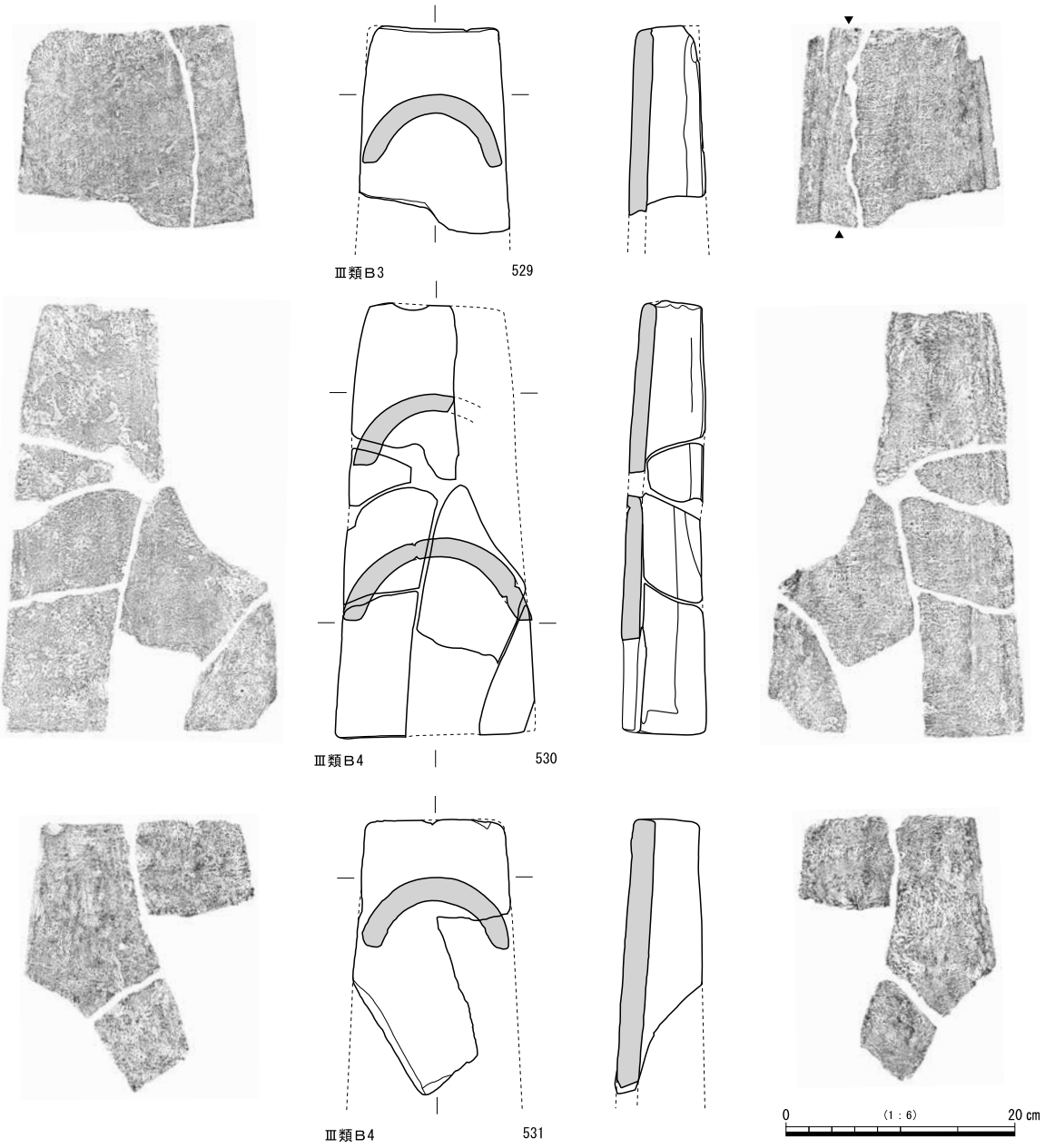


図 158　１号窯灰原出土丸瓦（１）

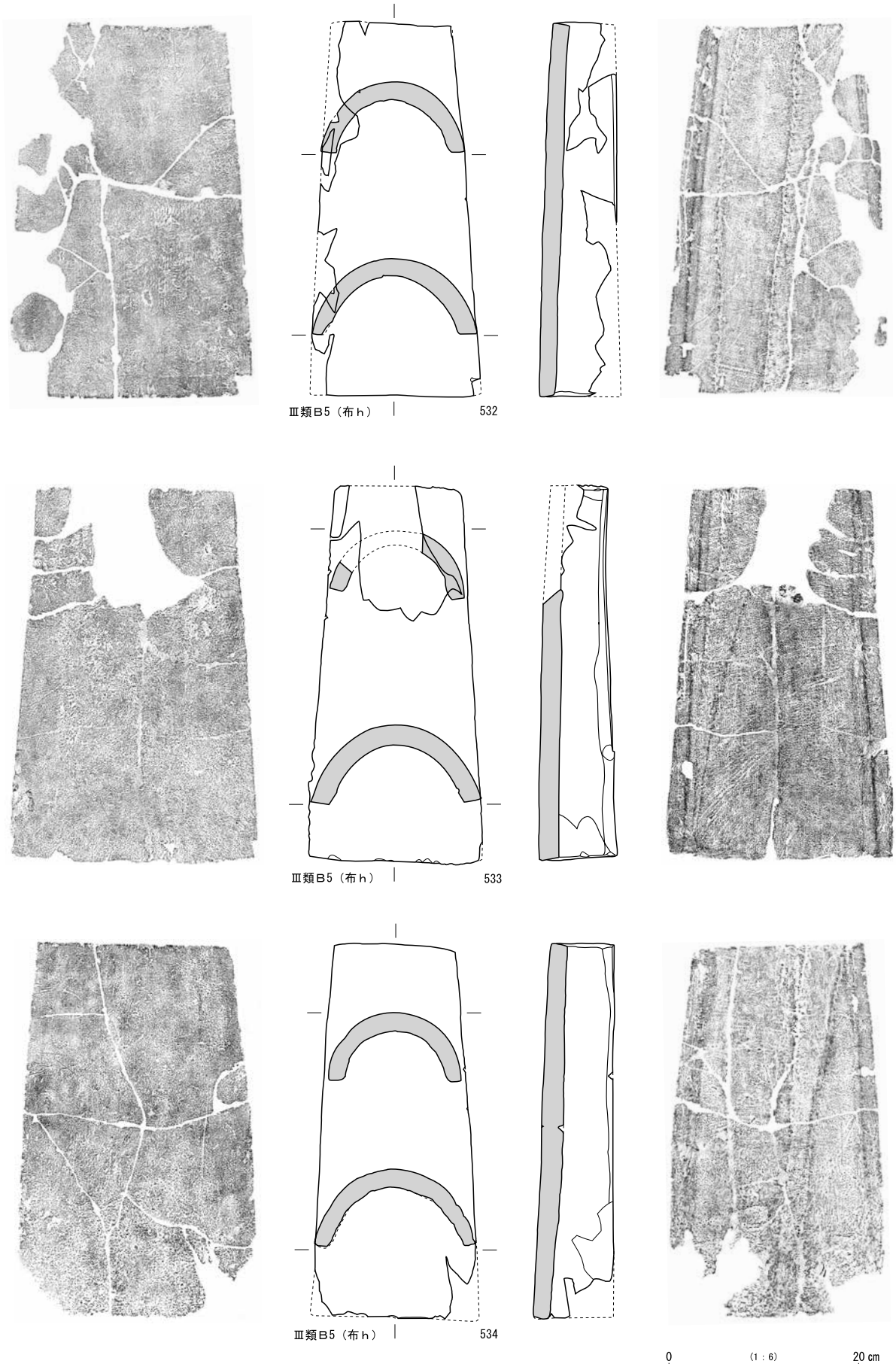
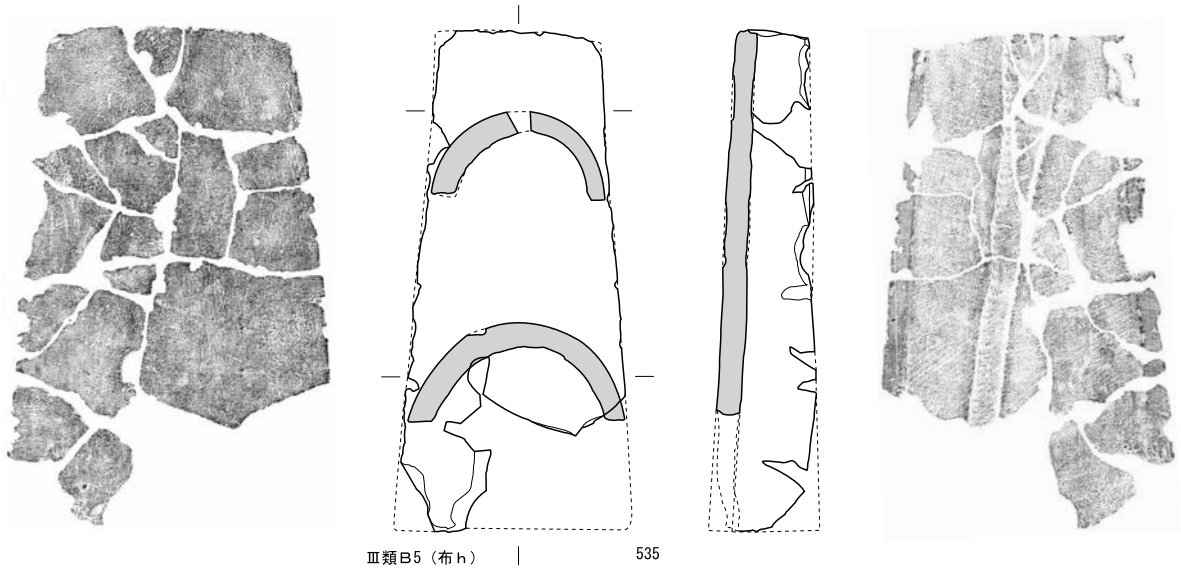
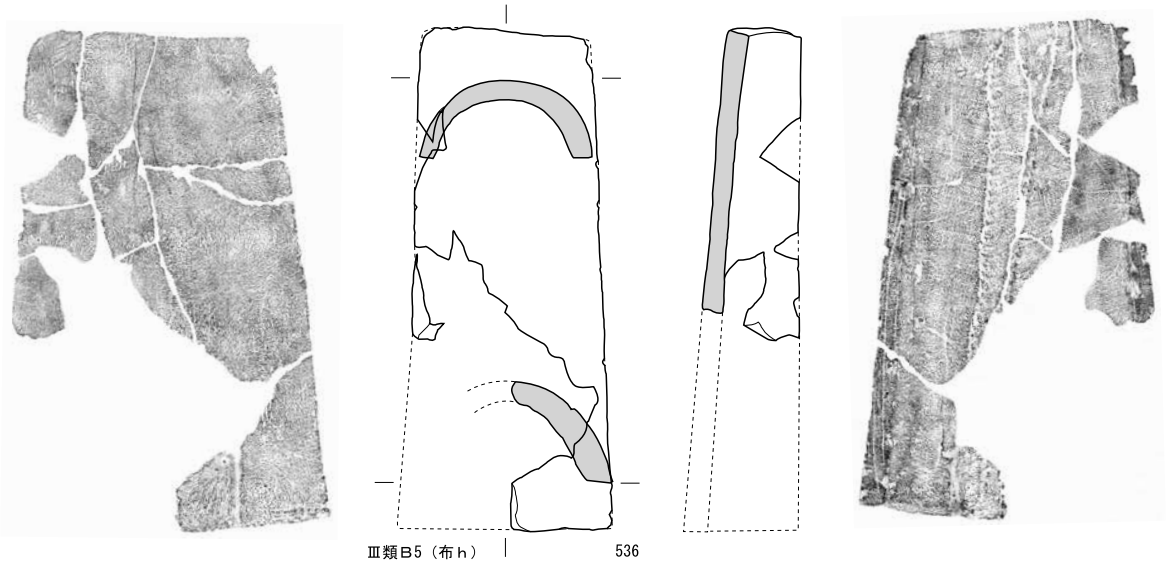


図 159　1 号窯灰原出土丸瓦（2）





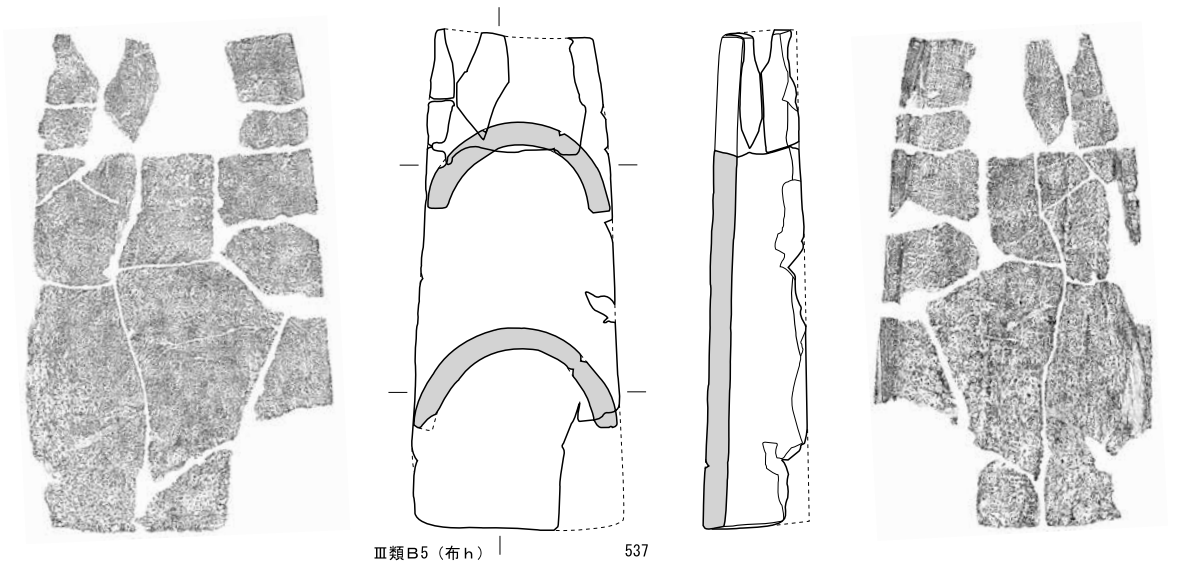
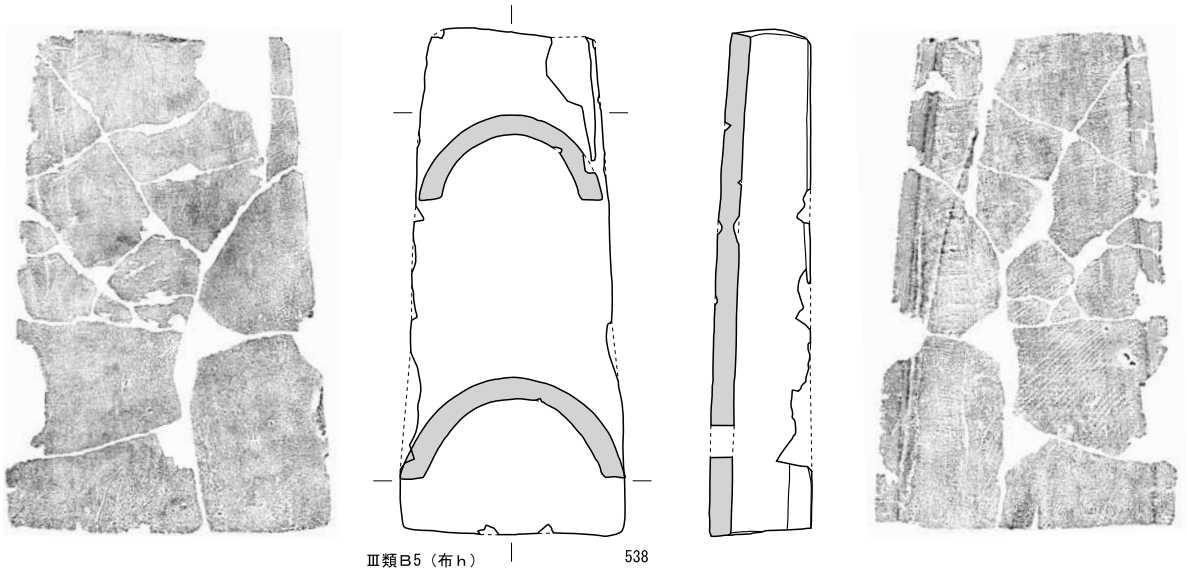
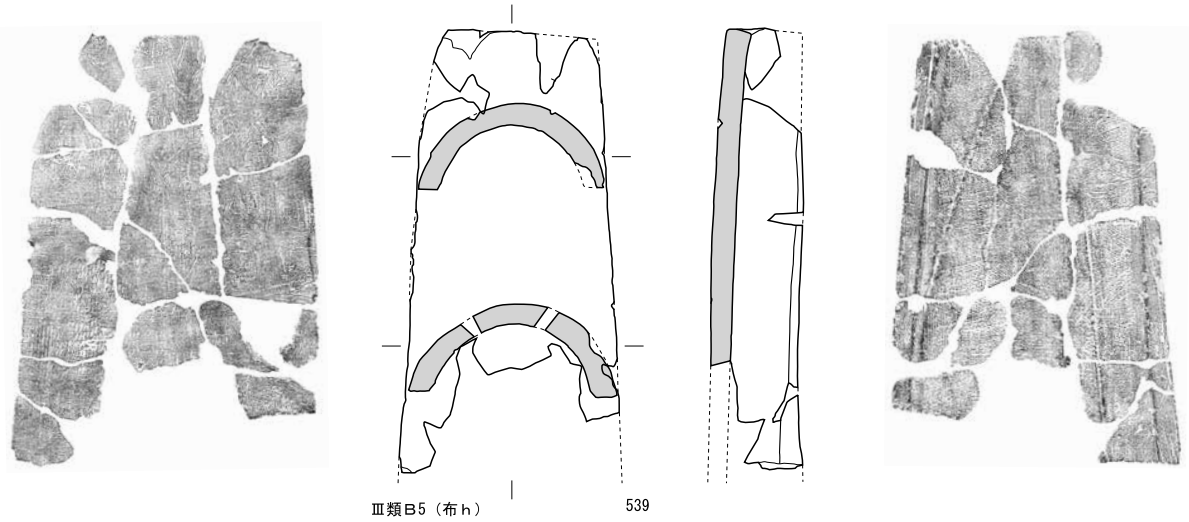


図 160　１号窯灰原出土丸瓦（３）





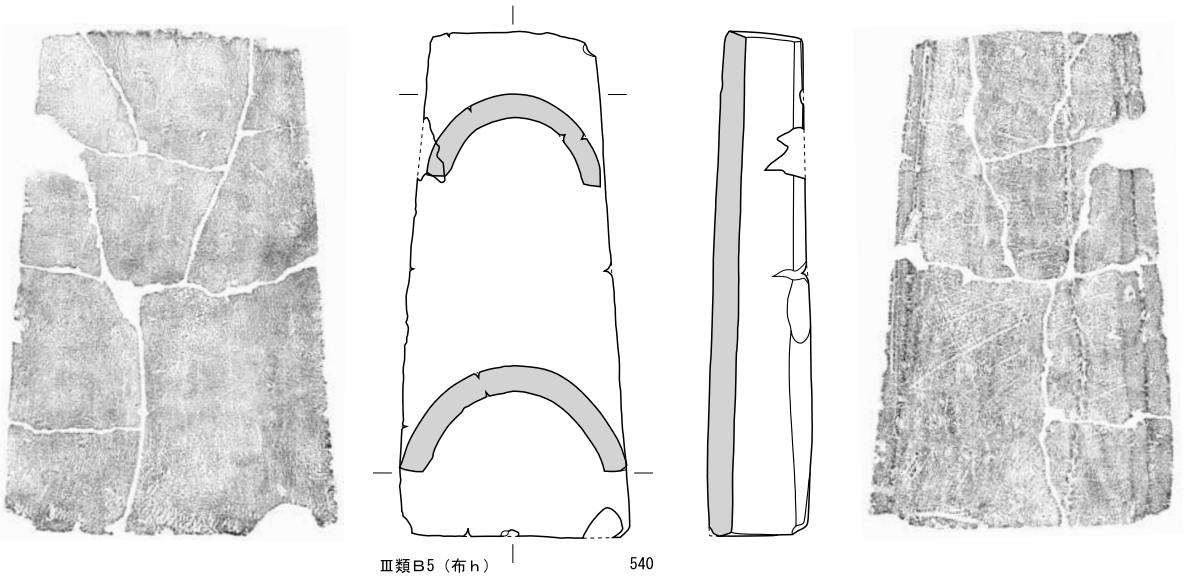
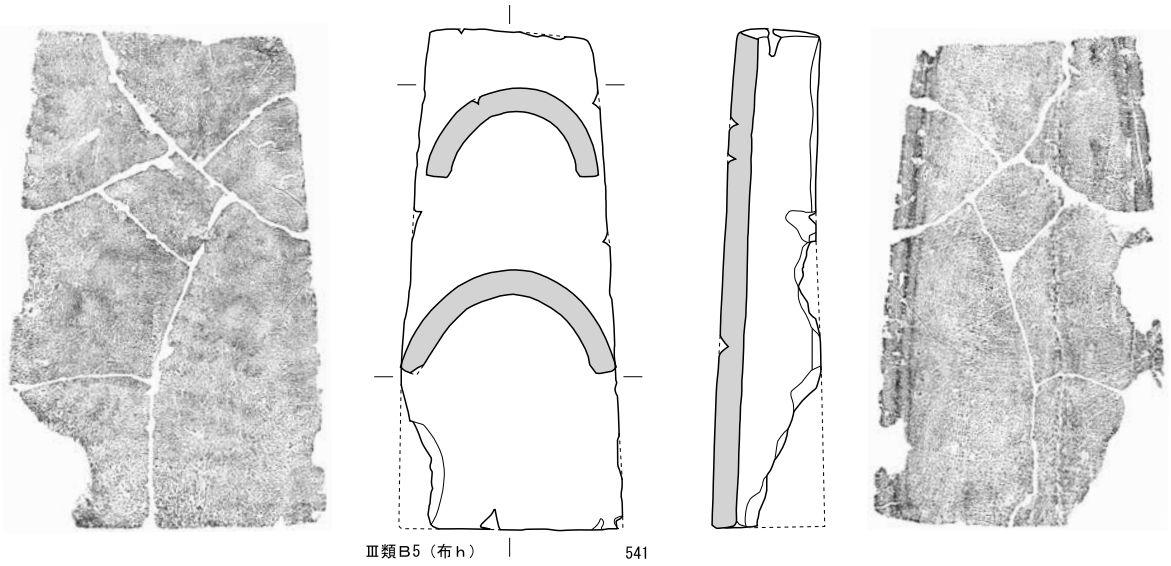
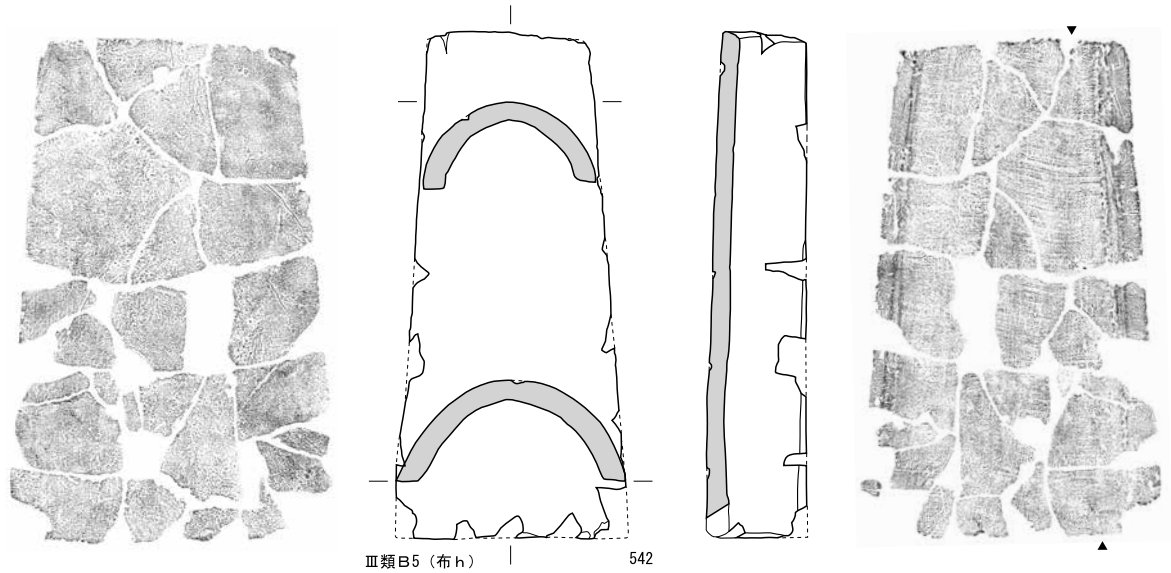


図 161　１号窯灰原出土丸瓦（４）





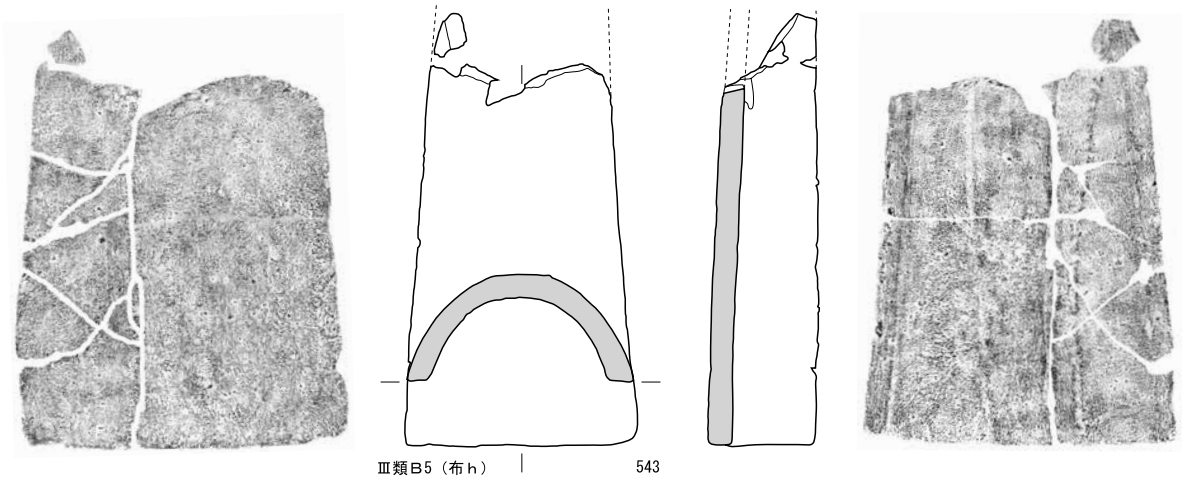


図 162　１号窯灰原出土丸瓦（５）

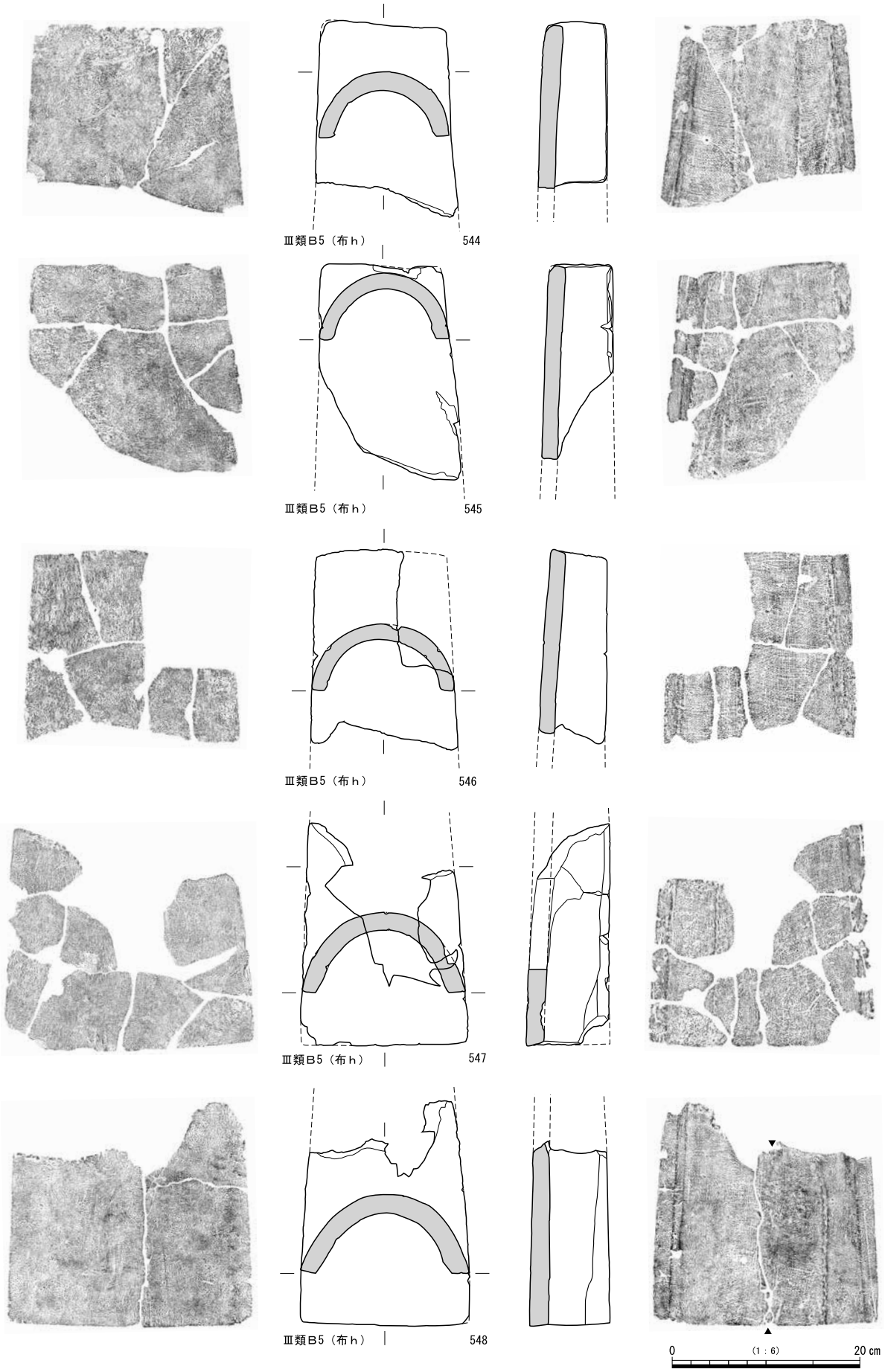


図 163　1 号窯灰原出土丸瓦（6）

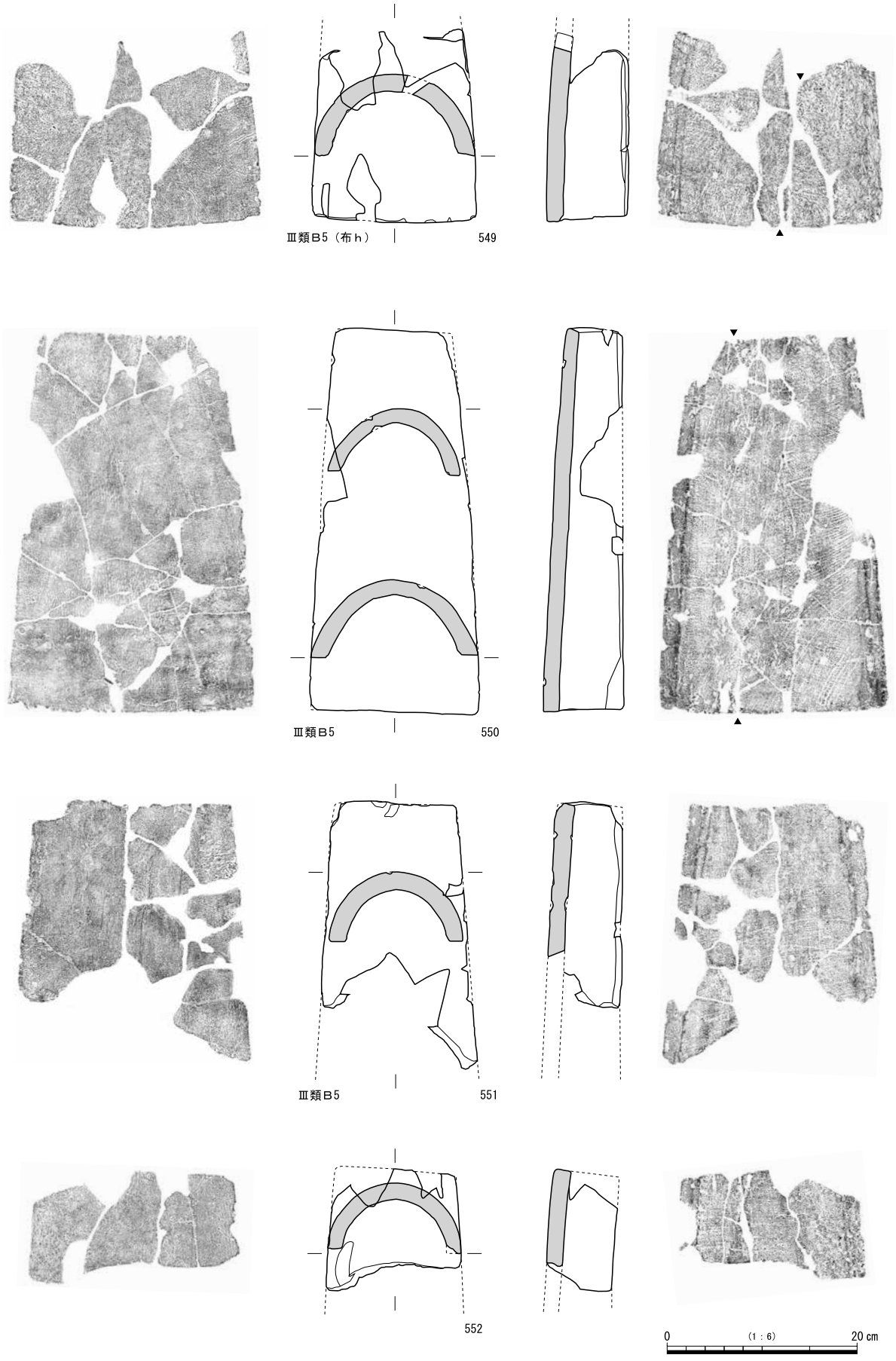


図 164　１号窯灰原出土丸瓦（７）

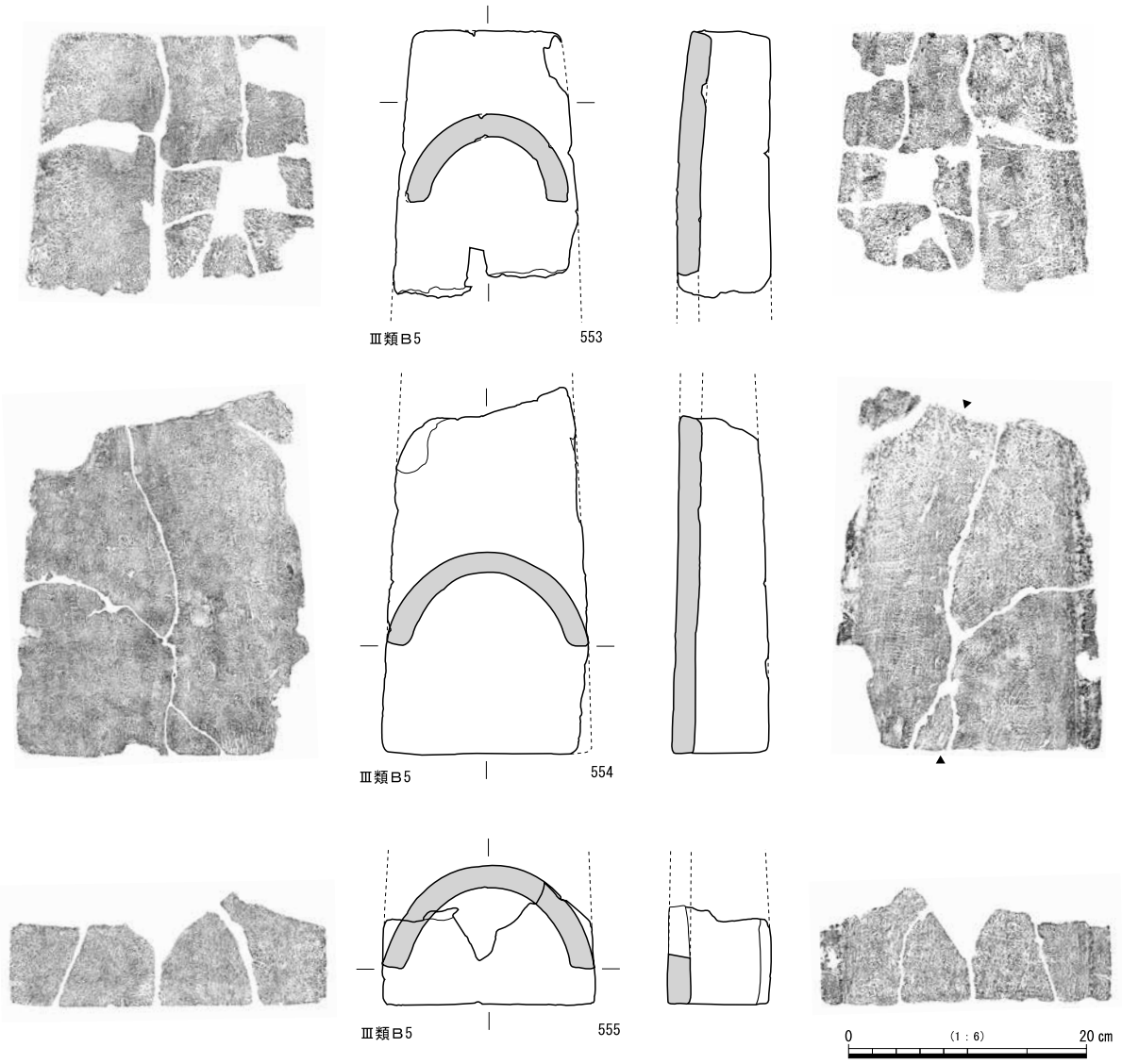


図 165　1 号窯灰原出土丸瓦（8）

Ⅲ類Ｂ５　532 ～ 555 はⅢ類Ｂ５である。胎土には砂を多く含んでおり、風化により表面が剥落して観察できなくなっているものも多い。凸面は横ナデ調整を主体とするが、部分的に軽い縦ナデ調整が施されている。ナデ残しの部分には、縦方向の縄叩き痕が残る。凹面は両側縁を面取りしている。側面には全面削り調整が施されており、窯体内出土のものと同様に、削りの方向は統一されている。確認できるものはすべて右側が狭端から広端に向かって、左側が広端から狭端に向かって削られている。532 ～ 549 には布綴じ痕が残っており、使用されている布袋はすべて布 h である。542・548 ～ 550・554 には、縦方向に粘土接合痕が確認でき、合わせ目はいずれも S 型である。539・543 ～ 545・553・554 は、表面に焼土が付着しており、構築材として使用されていた可能性がある。

Ⅲ類Ｂ６　556 ～ 558 はⅢ類Ｂ６である。凸面は、556 と 558 は表面が風化しているため観察できないが、557 は縦方向に削り調整後、不整方向に軽いナデ調整を施している。凹面は両側縁を面取りする。側面は全体を削った後にナデ調整を施し、隅を丸く仕上げている。厚さが不均一であり、556 や 558 では側面の厚さが 1 ㎝程と薄くなっている。556 には布綴じ痕が残っており、布袋には布 i を裏返した状態で使用していることがわかる。

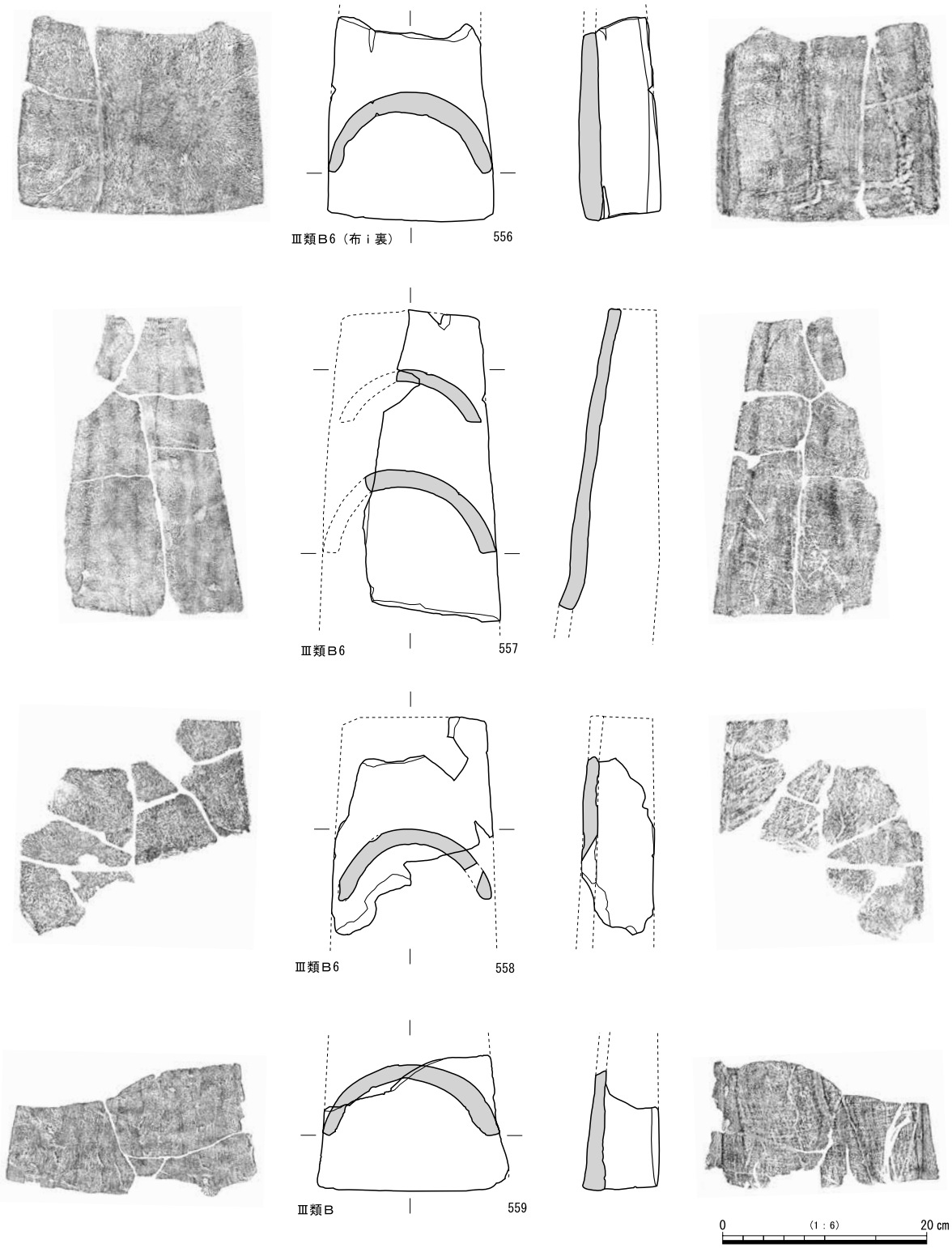


図 166　１号窯灰原出土丸瓦（９）

Ⅲ類Ｂ６・７　559 は広端部のみの破片である。凸面には縦方向に削り調整を施した後、部分的に不整方向にナデ調整されている。厚さは部位によって大きく異なり一定していない。凹面は両側縁を面取り調整する。凹面の広端側に藁状の繊維痕が残っている。側面は全体を削り、軽いナデ調整を施している。これらの特徴から、Ⅲ類Ｂ６またはＢ７であると判断されるが、広端部のみの破片であるため、どちらであるかは識別できない。

（5）その他の遺構出土

SX01（図 167）

SX01 からは、総重量 32.8 kgと一定量の出土が確認されるが、表面の風化が著しく接合できなかった破片が多い。接合されてある程度大きさが判明する 2 点を図示する。

Ⅲ類Ｂ６　560 はⅢ類Ｂ 6 である。部分的に欠損しているが、ほぼ全体の形状が復原できる。凸面は縦方向に削り調整し、広端側を中心に不整方向のナデ調整を施している。凹面は両側縁をやや幅広に面取りする。凹面には布綴じ痕が残っており、布ｉを裏返した状態で使用していることがわかる。側面は、片側は全体を削っているが、もう一方は凹面側が深く削られている。１号窯で出土したものと同じ特徴を有しており、１号窯で焼成されたものとみてよい。

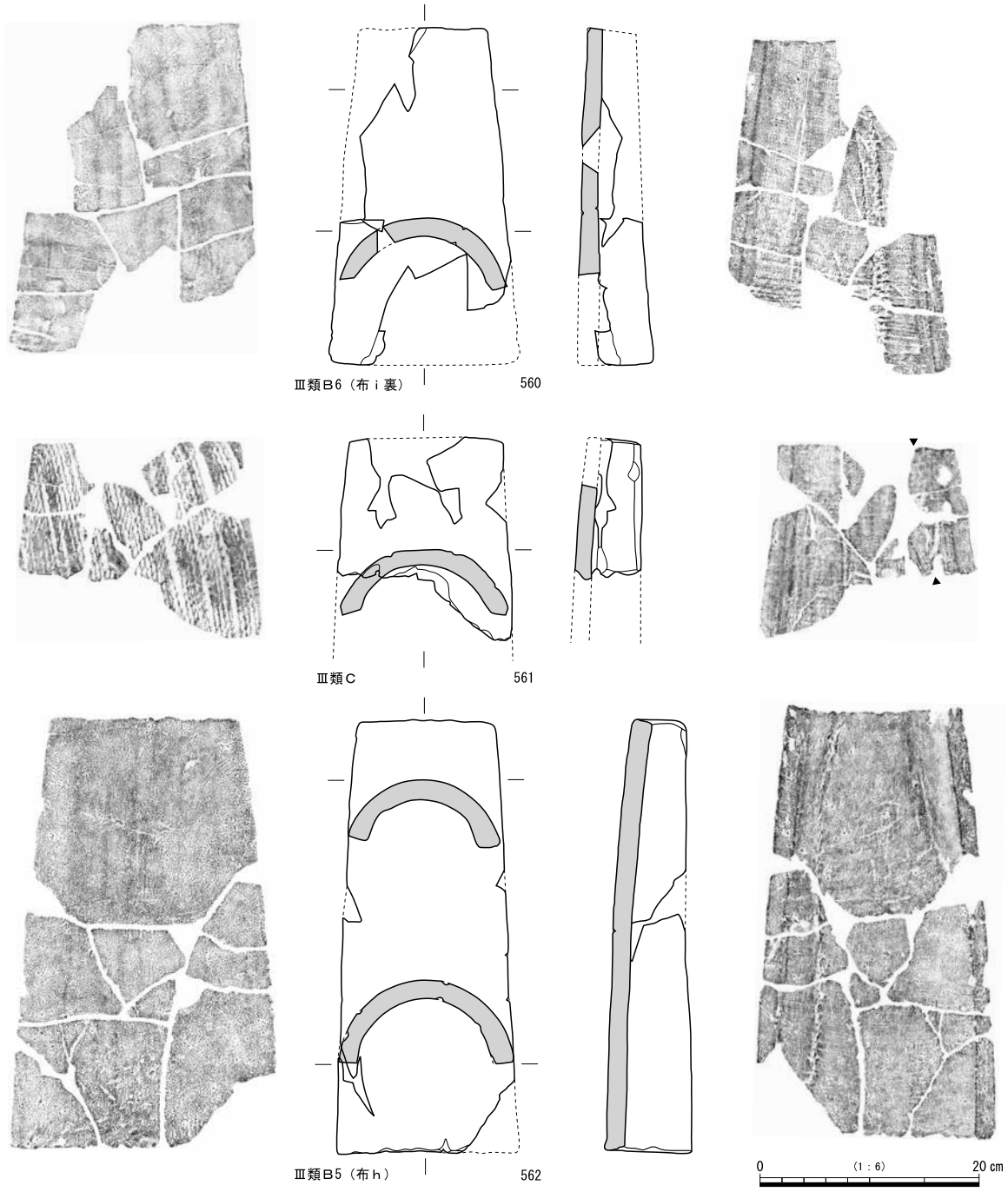


図 167　SX01・SX02 出土丸瓦

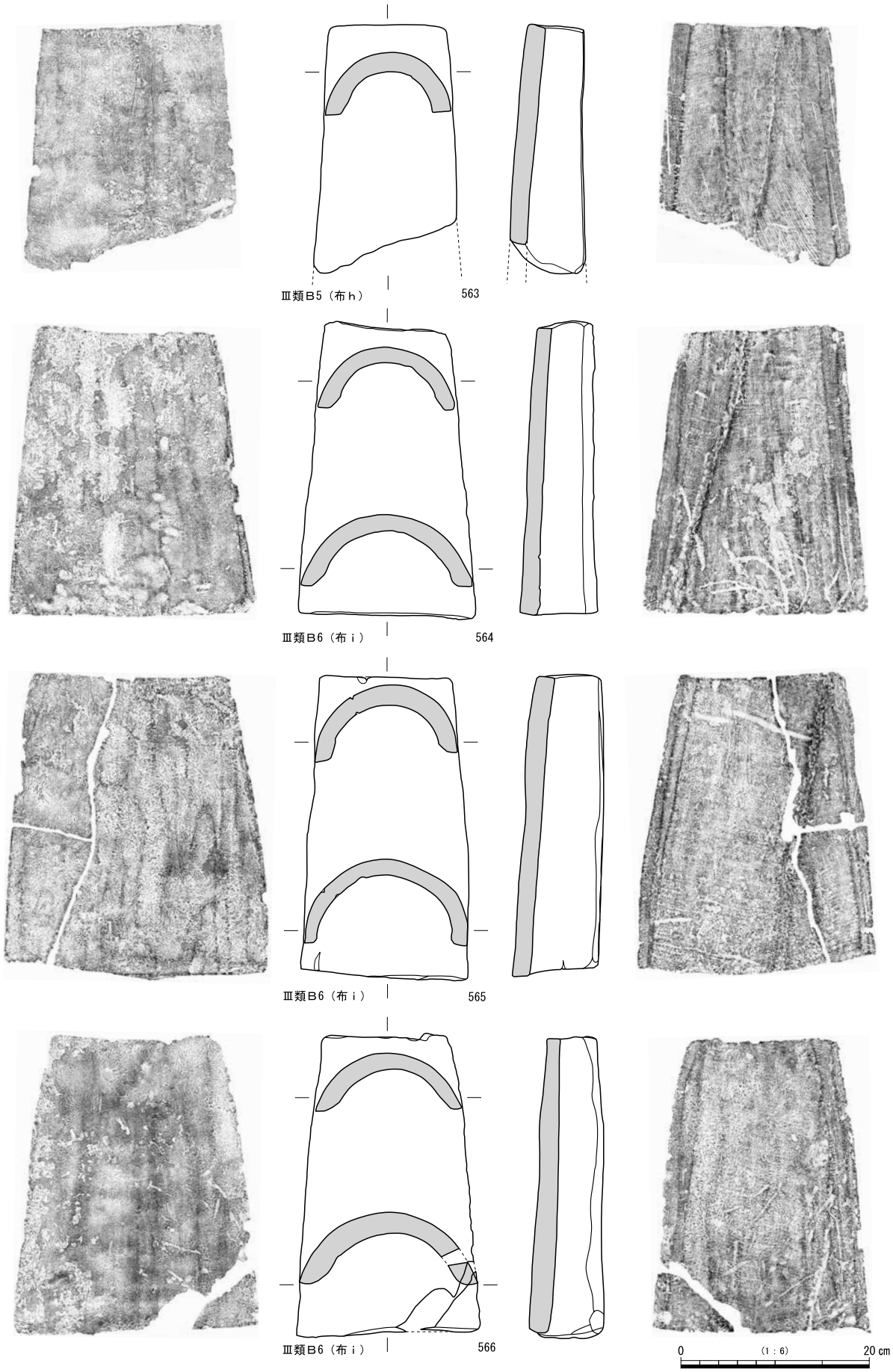


図 168　SD01 出土丸瓦（１）

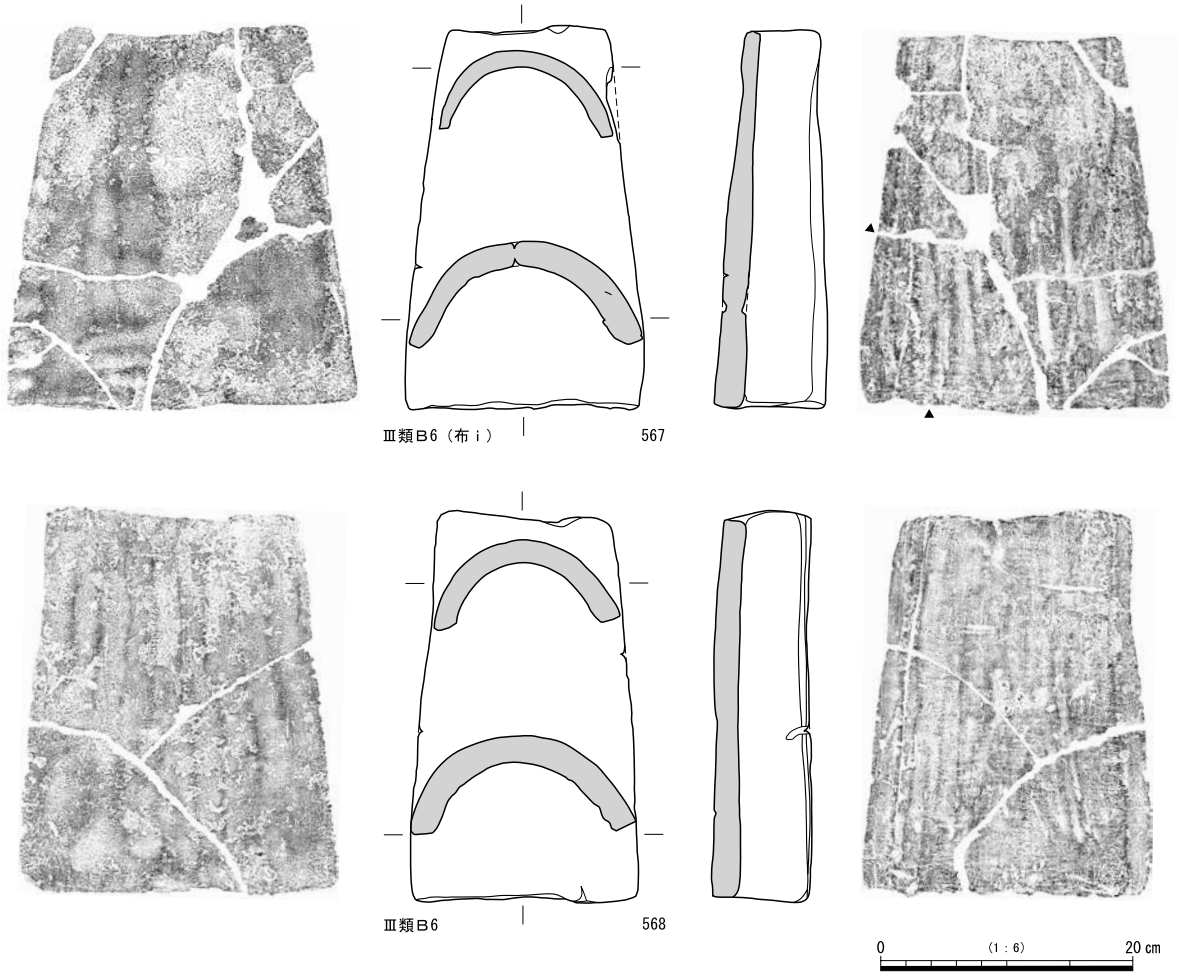


図 169　SD01 出土丸瓦（２）

Ⅲ類Ｃ　561 はⅢ類Ｃである。凸面は無調整で縄叩き痕が明瞭に残る。凹面には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＺ型である。側面は凹面側を深く削っており、部分的にナデ調整を施し側縁を丸く仕上げている。狭端の幅や側面の調整などからみて、Ⅲ類Ｂ６の凸面調整が省略されたものであり、１号窯で生産された丸瓦の可能性が高い。Ⅲ類Ｃは、このほか包含層などでまれに破片が確認できるが、絶対数としては極めて少ない。明確に識別できることから分類してはいるが、確立された技法であったかどうかは疑問である。凸面調整を施さなかった例外的なものとして捉えた方がよいかもしれない。

SX02（図 167）

SX02 では総重量 2.7 kg出土している。ほとんどは風化により表面の観察が困難な小破片であるため、完形に近い状態に接合された１点のみを図示する。

Ⅲ類Ｂ５　562 はⅢ類Ｂ５である。凸面は横ナデ調整が主体であるが、部分的に軽い縦ナデ調整が加えられている。凹面には布綴じ痕が残っており、布袋に布ｈが用いられていることがわかる。胎土には砂が多く含まれている。SX02 に入った経緯はわからないが、１号窯で生産された瓦とみてよい。

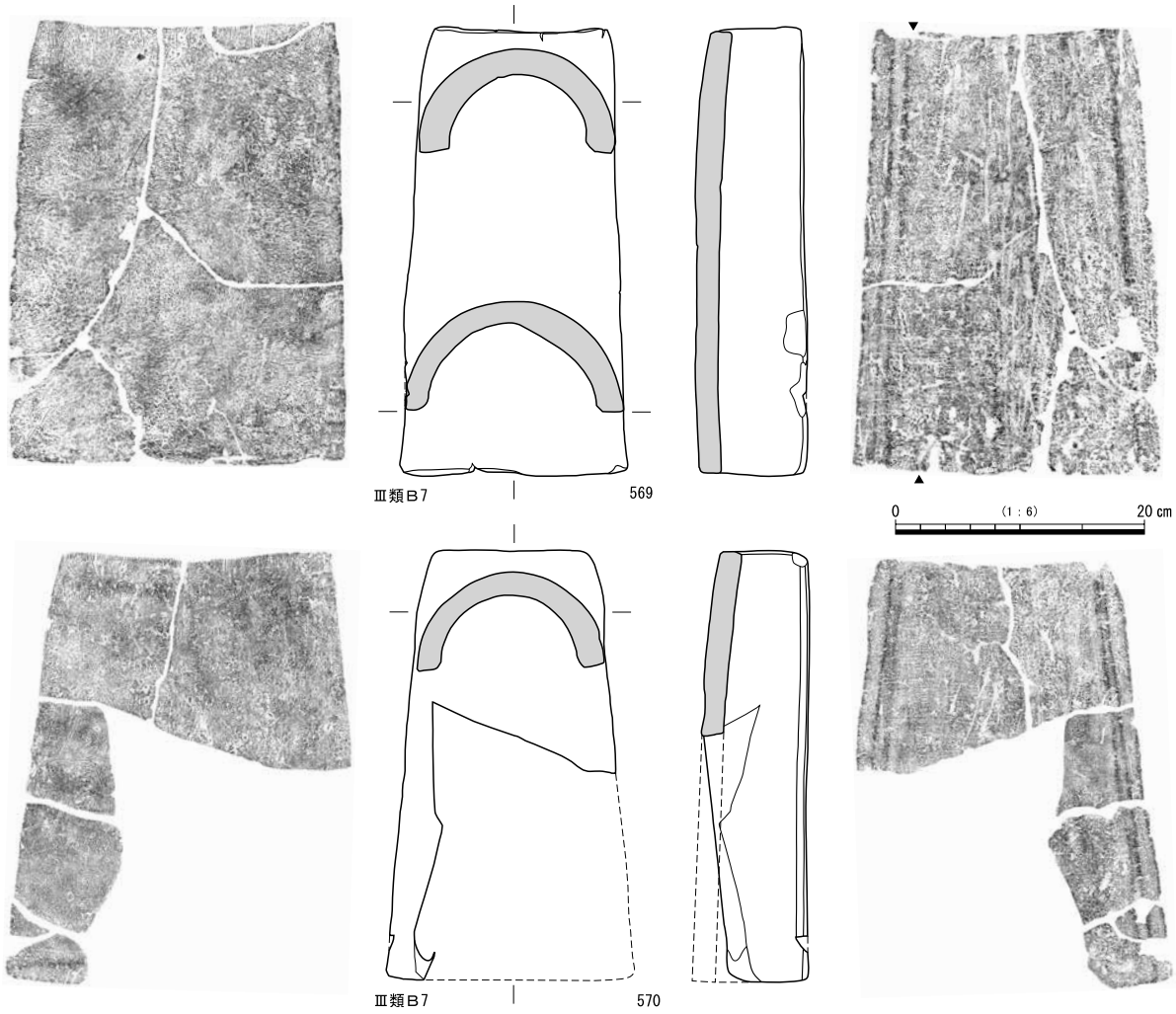


図 170　SD01 出土丸瓦（３）

SD01（図 168 ～ 170）

SD01 からは総重量 21.9 kgと比較的多く出土している。完形に近いものを中心に８点を図示する。

Ⅲ類Ｂ５　563 はⅢ類Ｂ５である。凸面は表面が風化しておりやや不鮮明ではあるが、横ナデが主体で部分的に軽い縦ナデが確認できる。凹面には、片側側縁に幅の広い面取りが施されており、布ｈの布綴じ痕が残る。側面は全面削り調整が施されており、右側面は狭端側から広端側へ、左側面は逆向きに削られている。

Ⅲ類Ｂ６　564 ～ 568 はⅢ類Ｂ６である。SD01 に上方（SX01）から落ち込んだ状態で出土している。いずれもほぼ完形であるが、風化が進み表面が観察できないものも多い。凸面は全面縦方向の削り調整であり、広端側を中心に一部不整方向のナデ調整が施されている。凹面は両側面にやや幅広の面取りを施している。側面は全面削り調整であるが、ナデ調整が加えて隅を丸く仕上げている。凹面の削りは、凹面側を深く削っているものが多い。564 ～ 567 には布ｉの布綴じ痕が残る。565・567 には、縦方向に粘土接合痕が確認でき、合わせ目はともにＳ型である。564 の凹面広端側には、茎の細い植物の痕跡が残っている。567 と 568 の凹面には、一部縦方向のナデ調整が施されている。

Ⅲ類Ｂ７　569・570 はⅢ類Ｂ７である。ともに表面の風化が著しく、表面は部分的にしか観察できない。厚さは一定しておらず、全体的に凹凸が目立つ。569 の凹面には、縦方向の粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型である。

4　平瓦

平瓦は、細片も含めると総重量 4311.5 kgにおよび、瓦の中で最も多く出土している。各窯から出土しており、特に１号窯では焚口の閉塞に用いた瓦が立てられたままの状態で残っていた。窯以外の遺構でも普遍的に出土している。また、ほとんどが破片の状態ではあるが、包含層や攪乱の埋土中、表土や確認調査においても一定量の出土が確認できる。平瓦については、膨大な量が出土しているため、主に両側端の残存するものを図化・掲載した。

（1）分類

平瓦は、いずれも粘土板桶巻作りである。凹凸面の調整や叩き目からⅠ～Ⅴ類に分類し、形状や側面調整の違いによって細分した。法量に違いが認められるものに関しては、さらに細分を行った。

Ⅰ類　　凹凸面の全面にナデ調整を施すもの。法量の違いからＡ・Ｂの２種に細分される。

Ⅰ類Ａ　全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 28 ～ 29 ㎝・広端幅 31 ～ 32 ㎝のもの。

Ⅰ類Ｂ　全長 37 ～ 38 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝のもの。

Ⅱ類　　凸面は全面ナデ調整されるが、凹面はナデ調整しないか部分的なナデ調整にとどまるもの。法量の違いから、Ａ～Ｇの７種に細分される。

Ⅱ類Ａ　全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 24 ～ 25 ㎝・広端幅 25 ～ 26 ㎝のもの。

Ⅱ類Ｂ　全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 27 ～ 28 ㎝のもの。

Ⅱ類Ｃ　全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 30 ㎝のもの。薄手のものが多い。

Ⅱ類Ｄ　全長 36 ～ 37 ㎝・狭端幅 22 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 26 ㎝のもの

Ⅱ類Ｅ　全長 35 ～ 36 ㎝・狭端幅 24 ～ 25 ㎝・広端幅 26 ～ 27 ㎝のもの。非常に厚手のつくり。

Ⅱ類Ｆ　全長 33 ～ 35 ㎝・狭端幅 21 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 25 ㎝のもの。小型で薄手。

Ⅱ類Ｇ　全長 38 ～ 43 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 27 ～ 28 ㎝のもの。

Ⅲ類　　凸面にはナデ調整が施されないか部分的で、叩き締めの円弧を描く縄叩きが残り、凹面にはナデ調整が施されるもの。法量によりＡ・Ｂの２種に細分できる。

Ⅲ類Ａ　全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 23 ～ 24 ㎝・広端幅 25 ～ 26 ㎝のもの。

Ⅲ類Ｂ　全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 27 ～ 28 ㎝のもの。

Ⅳ類　　凸面にはナデ調整が施されず、側縁に平行する縦縄叩きが残り、凹面には全面ナデ調整が施されるもの。凹面を上にした状態で、四側面が右回りの方向に削り調整される。側面調整は分割截面と平行に削る。法量によりＡ・Ｂの２種に細分できる。

Ⅳ類Ａ　全長 37 ～ 39 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 26 ～ 27 ㎝のもの。薄手のものが多い。

Ⅳ類Ｂ　全長 39 ～ 41 ㎝・狭端幅 27 ～ 28 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝のもの。

Ⅴ類　　凹凸面ともにナデ調整が施されず、凸面に側縁に平行する縦縄叩きが残るもの。側面は分割截面と平行に削る。Ⅳ類と同様に、凹面を上にした状態で、四側面が右回りの方向に削り調整される。法量よりＡ～Ｆの６種に細分される。

Ⅴ類Ａ　全長 37 ～ 38 ㎝・狭端幅 23 ～ 24 ㎝・広端幅 25 ～ 26 ㎝のもの。小型で薄手。

Ⅴ類Ｂ　全長 38 ～ 39 ㎝・狭端幅 24 ～ 26 ㎝・広端幅 26 ～ 28 ㎝のもの。

Ⅴ類Ｃ　全長 40 ～ 41 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝のもの。
Ⅴ類Ｄ　全長 36 ～ 37 ㎝・狭端幅 22 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 26 ㎝のもの。叩き目がやや斜めに傾く。
Ⅴ類Ｅ　全長 35 ～ 36 ㎝・狭端幅 23 ～ 24 ㎝・広端幅 24 ～ 25 ㎝のもの。非常に厚手のつくり。
Ⅴ類Ｆ　全長 38 ～ 40 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 28 ～ 30 ㎝のもの

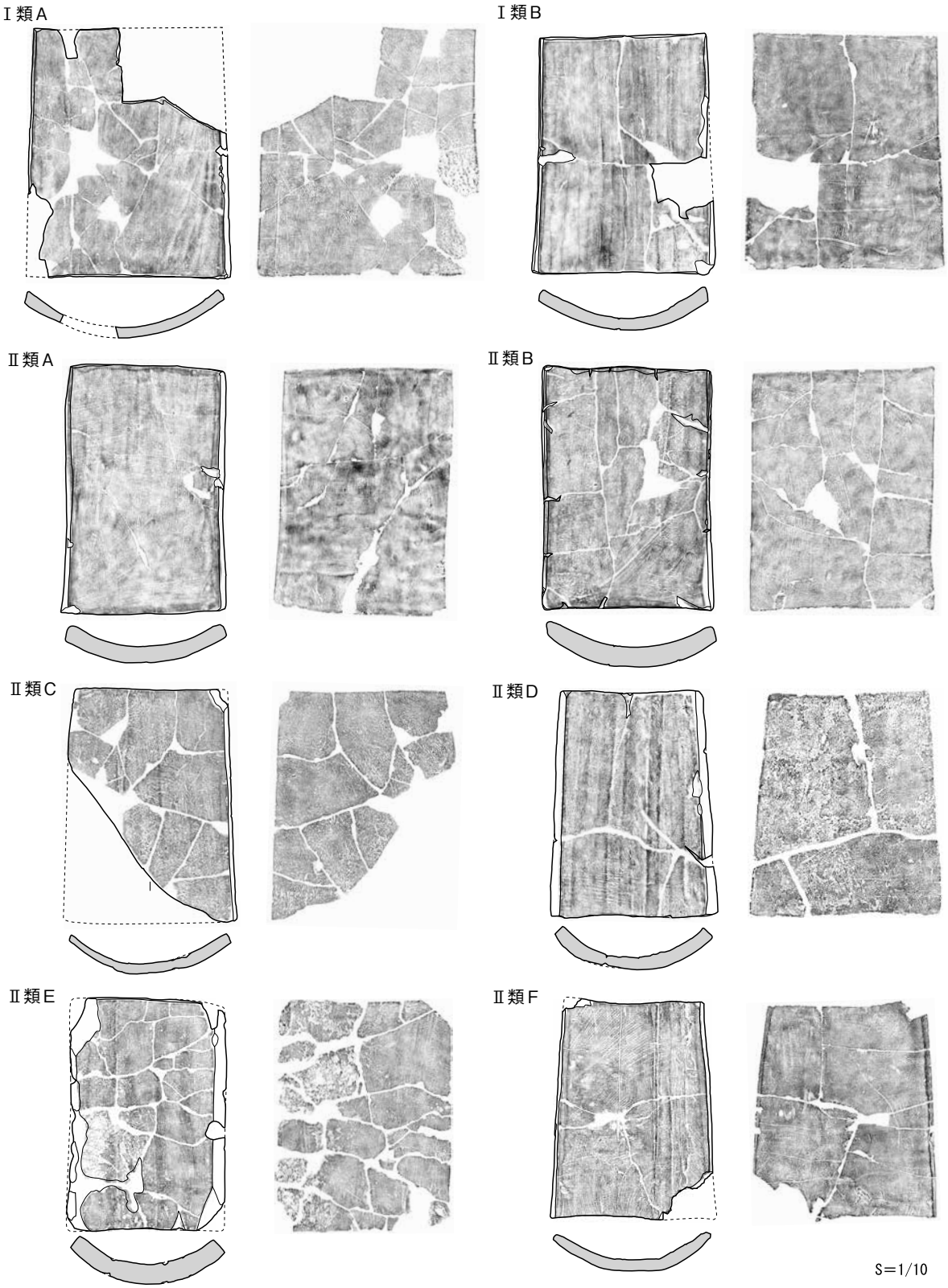


図 171　平瓦の分類（１）

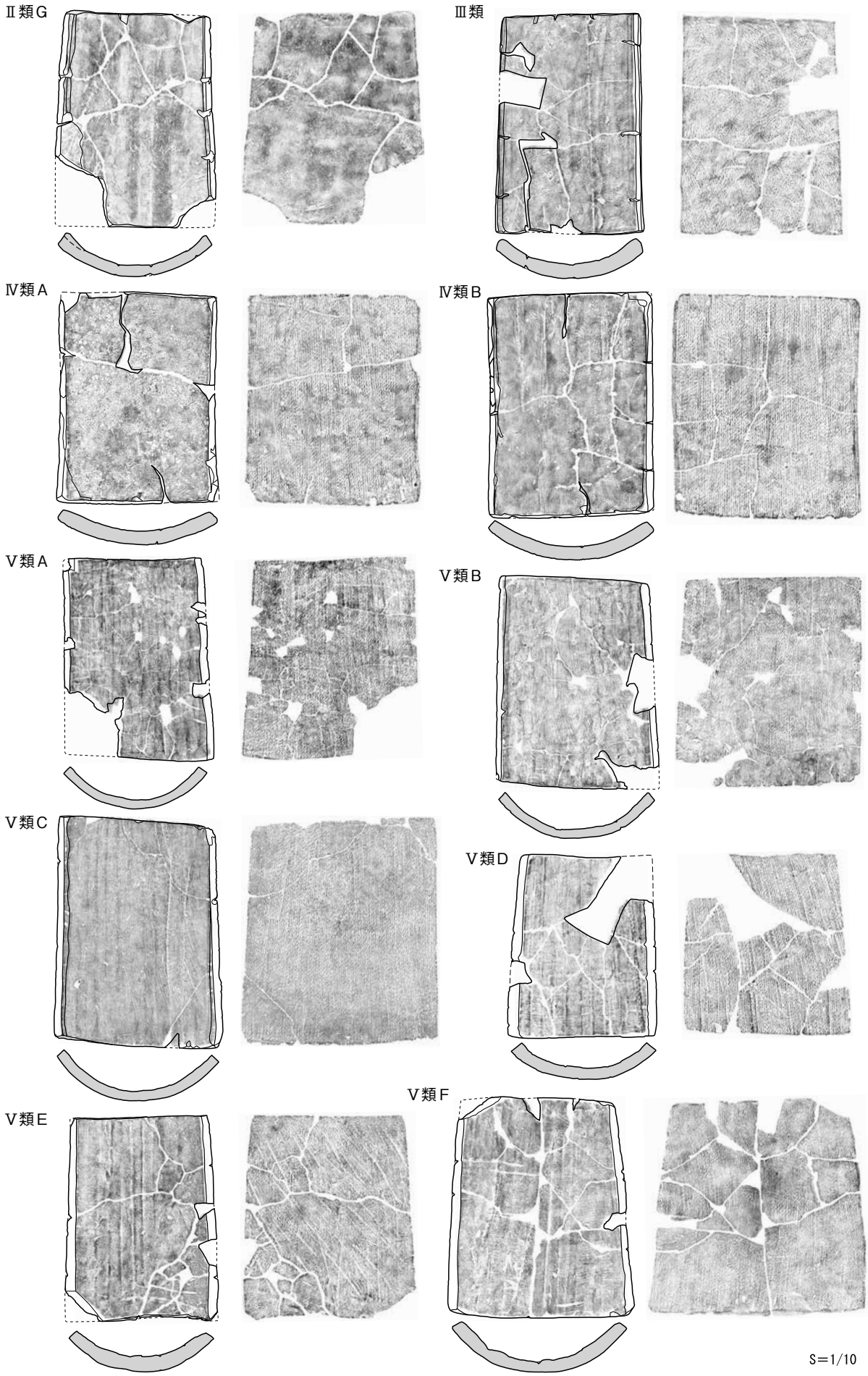


図 172　平瓦の分類（2）

（２）３号窯出土

３号窯窯体内（図 173 ～ 181、図版 19・20・67）

丸瓦に比べると少ないが、３号窯窯体内からは総重量 40.1 kg出土している。特に隅平瓦は完形に復元できるものがまとまって出土している。法量がわかるものを中心に 23 点図示する。

Ⅰ類Ａ　571 ～ 586 はⅠ類Ａである。法量は、全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 28 ～ 29 ㎝・広端幅 31 ～ 32 ㎝と大型で、厚さは 1.5 ～ 2.0 ㎝程と全体的に薄い。凸面は全面に横ナデ調整が施されており、ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩き痕が残る。凹面には全面に縦ナデ調整を施しており、隅平瓦には斜辺に沿って斜め方向のナデ調整を加えている。凹面の両側縁は角を面取りされ、側面は凸面側を深く削る。大型の瓦であるにもかかわらず、薄手のものが多い傾向にある。

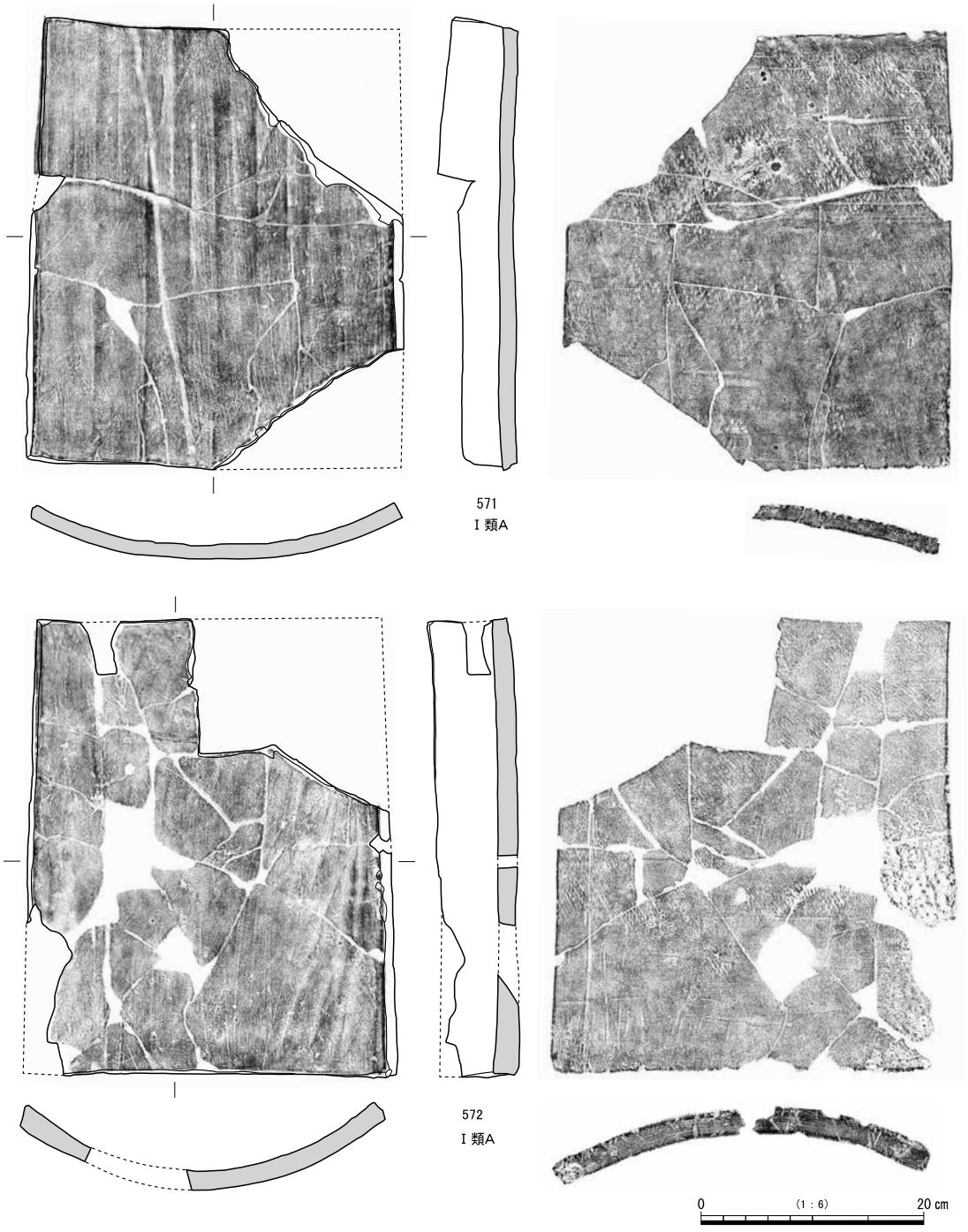


図 173　３号窯窯体内出土平瓦（１）

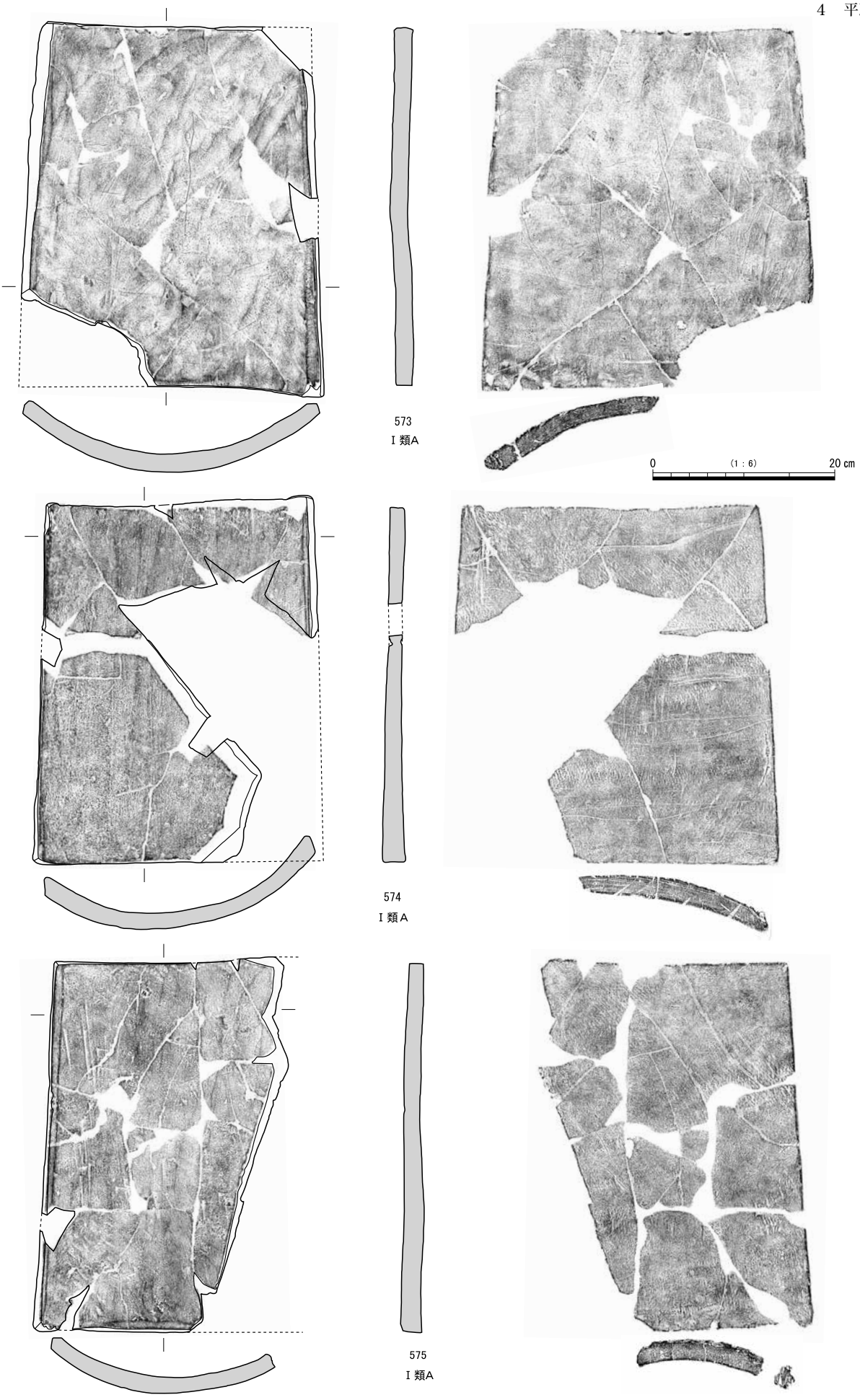


図 174　３号窯窯体内出土平瓦（２）

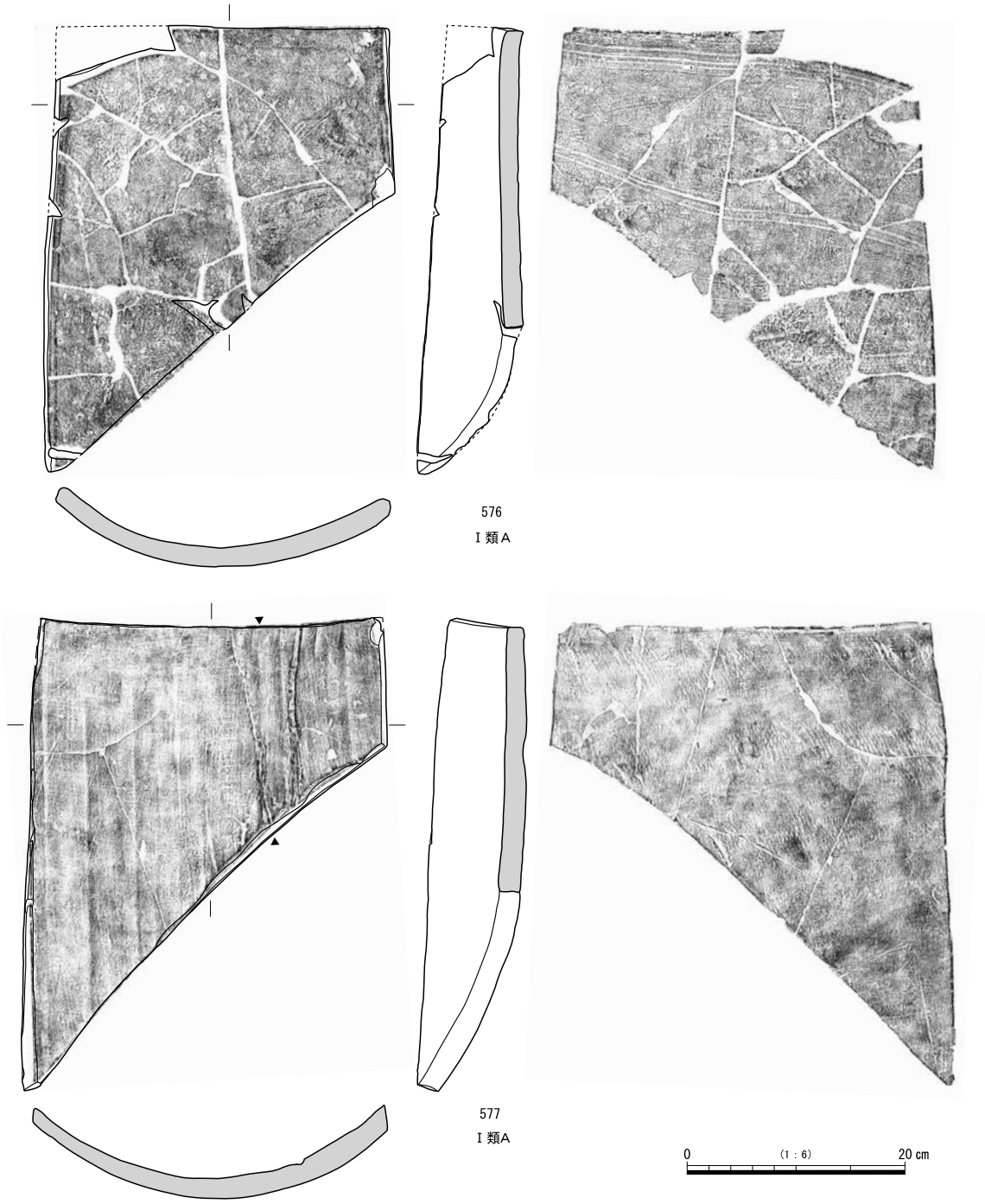


図 175　３号窯窯体内出土平瓦（３）

571 ～ 575 は平瓦である。571・572・574・575 は凸面にナデ残しの部分が多く、斜め方向の縄叩き痕が残る。572 の側縁から３㎝程の所には、凹型台痕とみられる段差が確認できる。571 は凹面のナデ調整が粗く布目が多く残っており、573 の凹面には斜め方向のナデ調整が多用されている。571 の凹面には、側縁に分割突帯とみられる溝状の窪みが残る。572・574 の広端面には、瓦と直交する方向に植物の痕跡が確認できる。痕跡は広端面の調整後に付着している。571 は厚さが 1.5 ㎝程度と非常に薄く、大きく焼き歪んでおり破片が接合しない。

576 ～ 586 は隅平瓦である。576 ～ 580 は広端部の右隅、581 ～ 587 は左隅を切り落としている。基本的な調整は平瓦と同じであるが、凹面には斜辺に沿ったナデ調整が加えられる。577・578・581・582

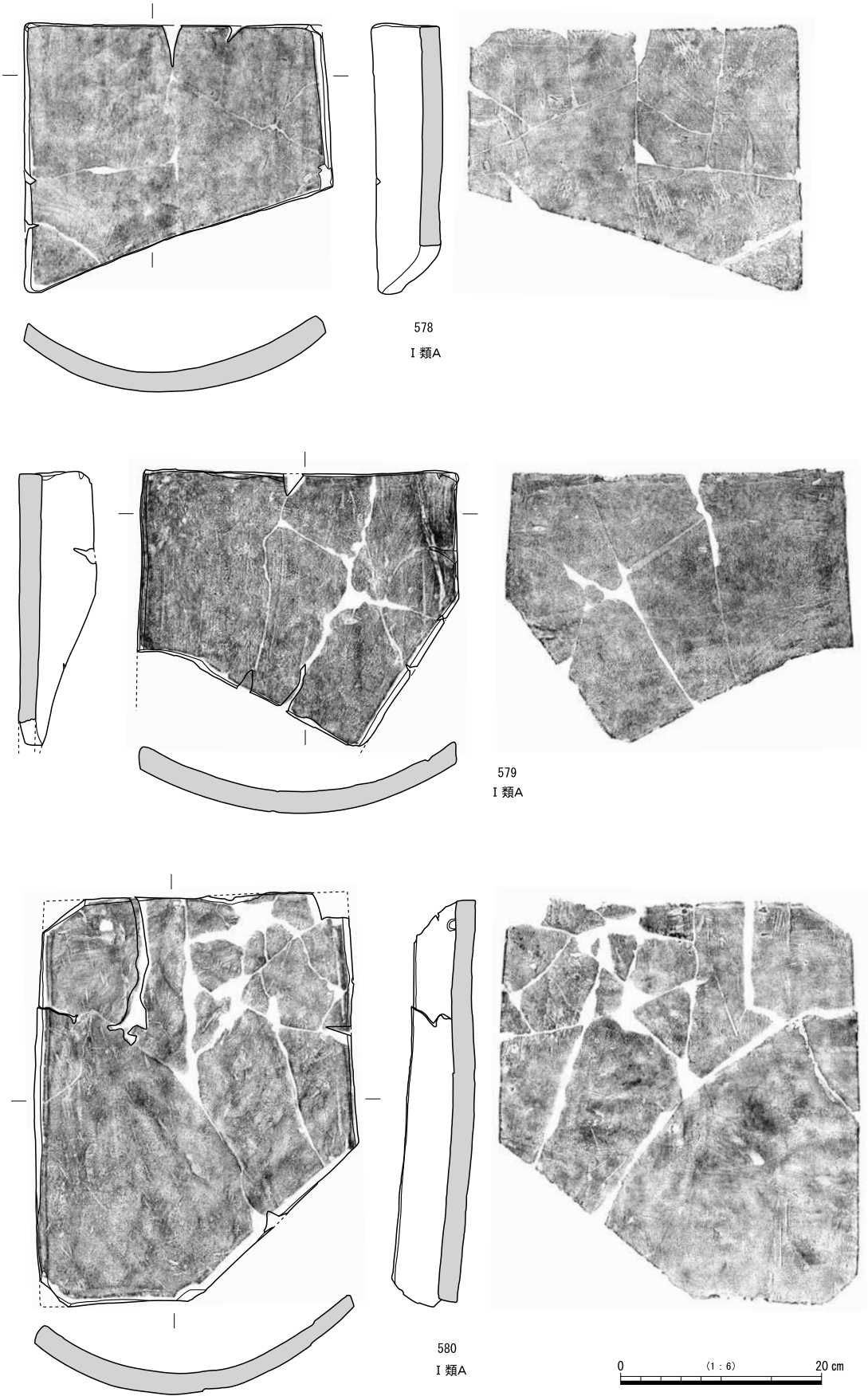


図 176　３号窯窯体内出土平瓦（４）

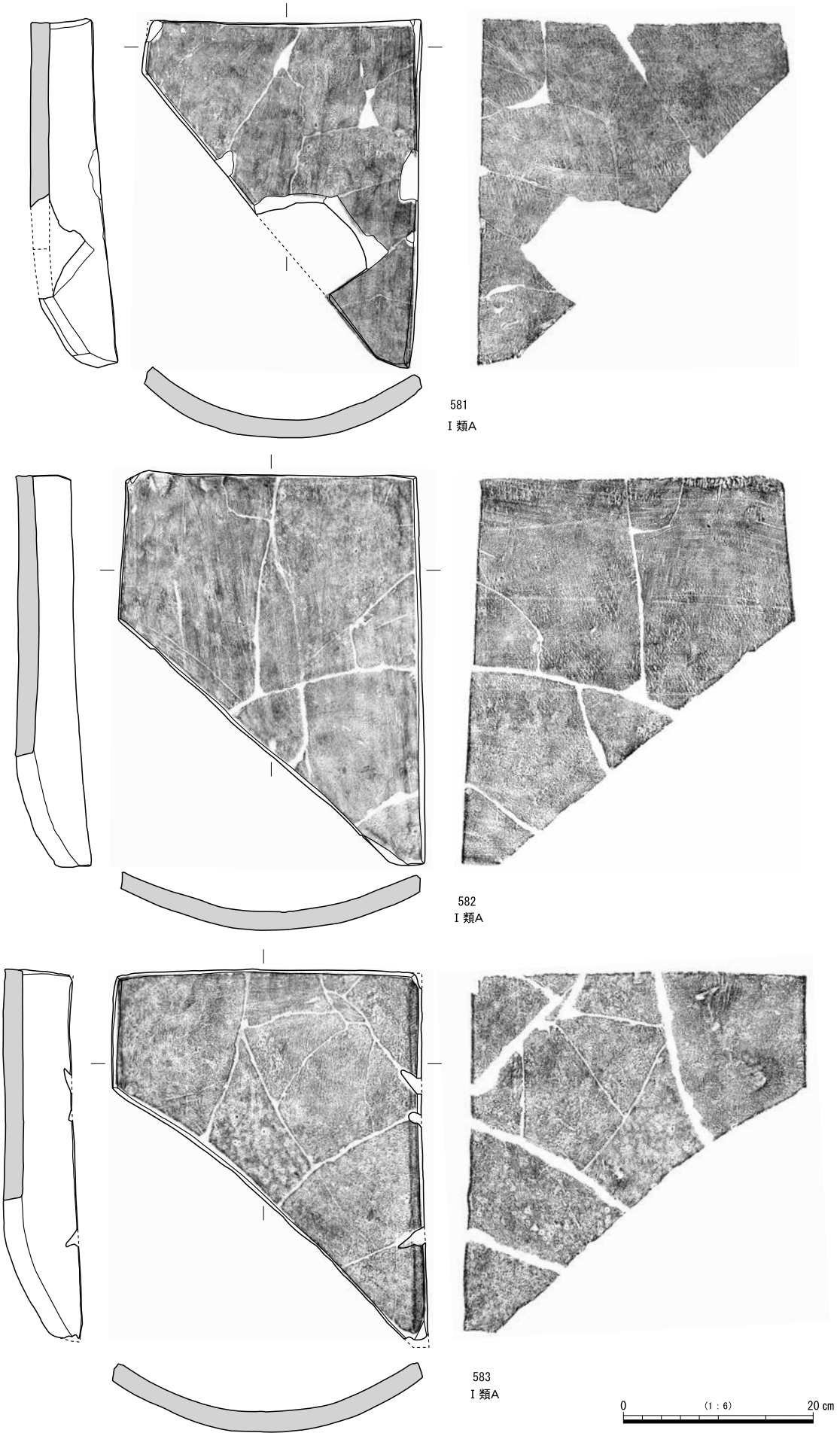


図 177　３号窯窯体内出土平瓦（５）

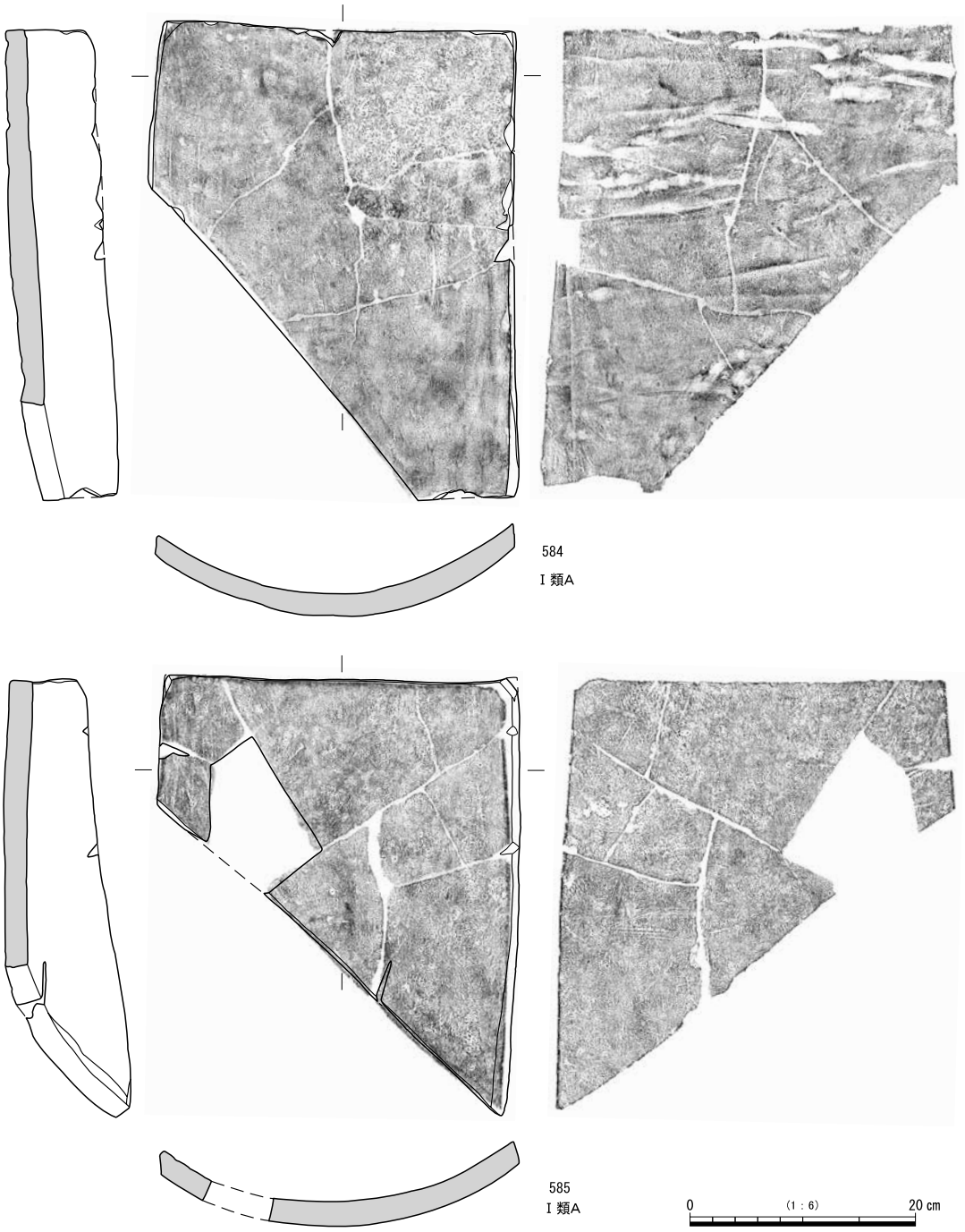


図 178　３号窯窯体内出土平瓦（６）

の凸面にはナデ残し部分が多く、斜め方向の縄叩きが残る。584 には、側縁付近に凹型台痕とみられる段差が確認できる。凹面は縦ナデ調整が主体であるが、580・586 のように斜め方向のナデが多用されるものもある。577 は厚さが 1.5 ㎝程と薄く、凹面のナデ調整が粗い。ナデ残しの部分には布綴じ痕が残り、粘土接合痕も確認できる。粘土の合わせ目はＺ型である。576 の斜辺には凸面側に破面が残る。578 の斜辺には截断面のズレによる段差が確認でき、ともに凹面側から截断されていることがわかる。

Ⅰ類Ｂ　587 はⅠ類Ｂの隅平瓦である。全長 38 ㎝・狭端幅 27 ㎝でⅠ類Ａよりも一回り小さい。凸面には全面横ナデ調整が施されているが､広端側を中心に縦ナデ調整が加えられる。凹面は縦ナデ調整で、狭端付近のみ横ナデ調整が施されている。側縁には、浅い面取り調整が施されている。側面は凸面側に深く削られている。

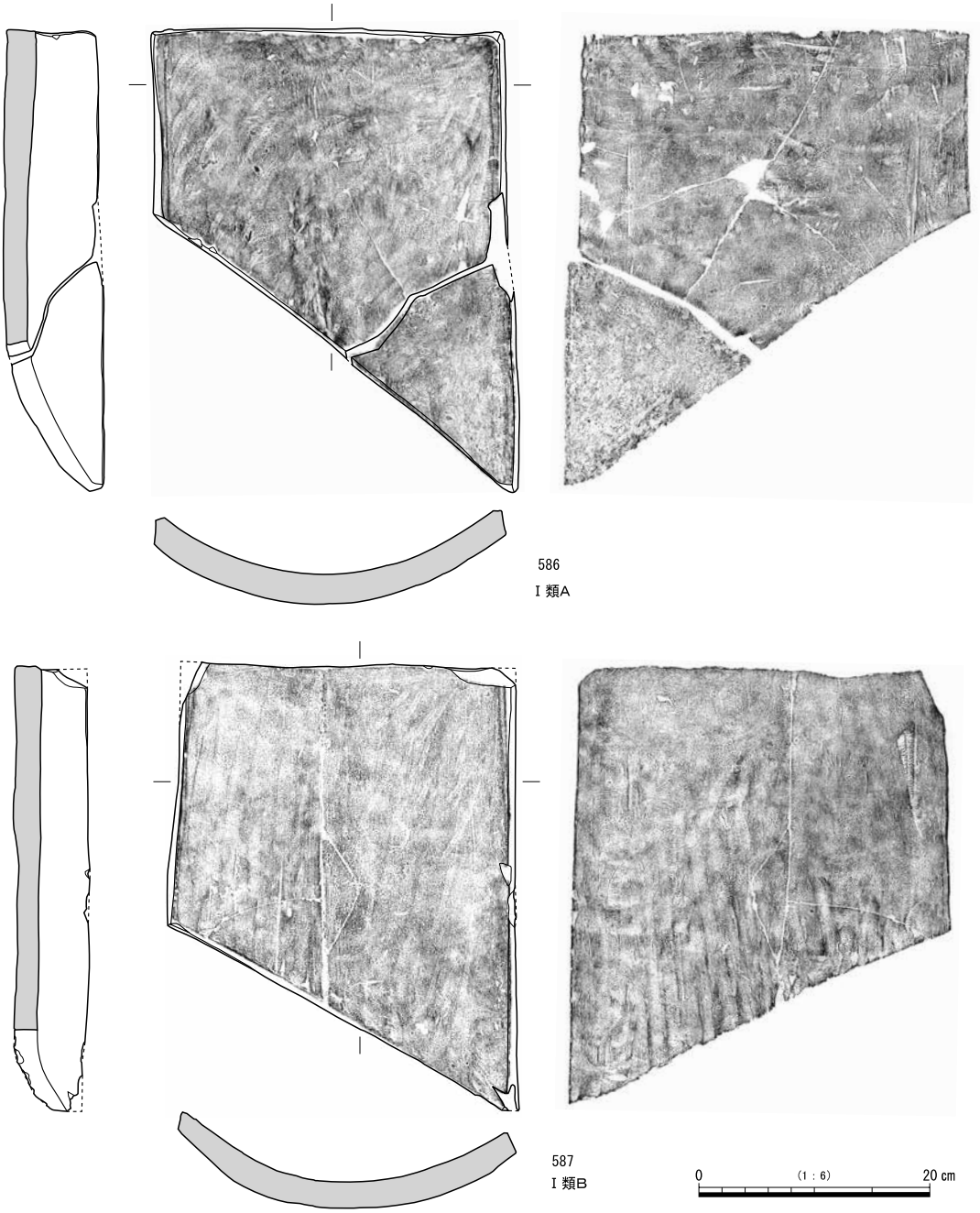


図 179　３号窯窯体内出土平瓦（７）

Ⅱ類Ａ　588～593はⅡ類Ａである。全長39～40㎝・狭端幅24～25㎝・広端幅25～26㎝と小型であり、広・狭端の幅の差が少ない。凸面は横ナデ調整を施した後、縦ナデ調整が加えられる。凸面の狭端側は、狭端縁に沿ってナデが施され丸みを帯びた形状になっている。凹面は、広端側などに部分的なナデ調整は施されているが、大部分が無調整で布目が残る。四側縁にはやや幅広の面取りが施し、側縁に沿ってナデ調整が加えられている。側面は凸面側に深く削られており、ナデ調整を施しているものもある。

588 と 591 は、広端側の比較的広い範囲にナデ調整が施されている。588・591・592 は、凹面の両側縁にナデ調整を施し、丸みを帯びた形状に仕上げている。590 と 592 には、Ｚ型の合わせ目の粘土接合痕が確認できる。

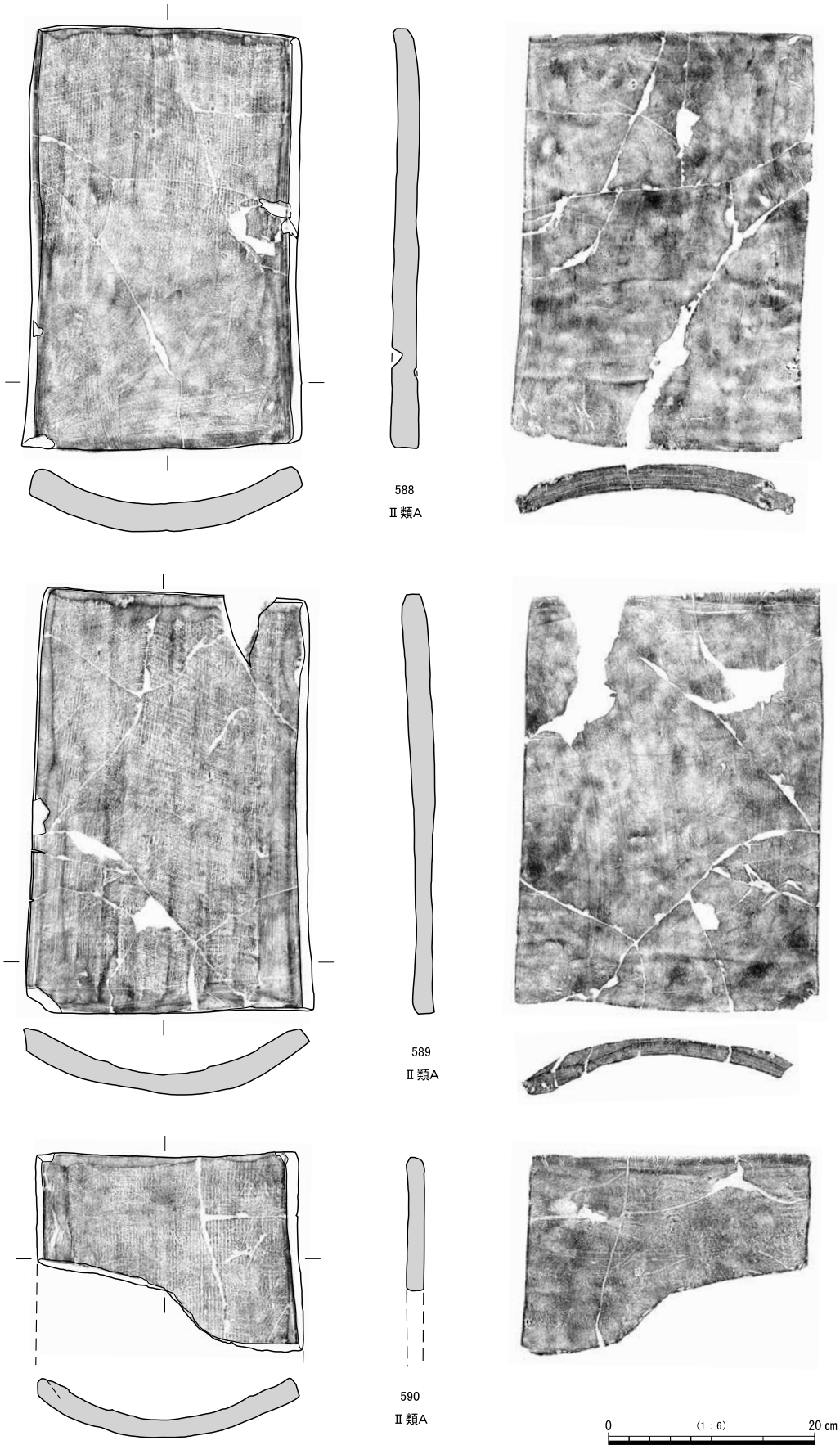


図 180　３号窯窯体内出土平瓦（８）

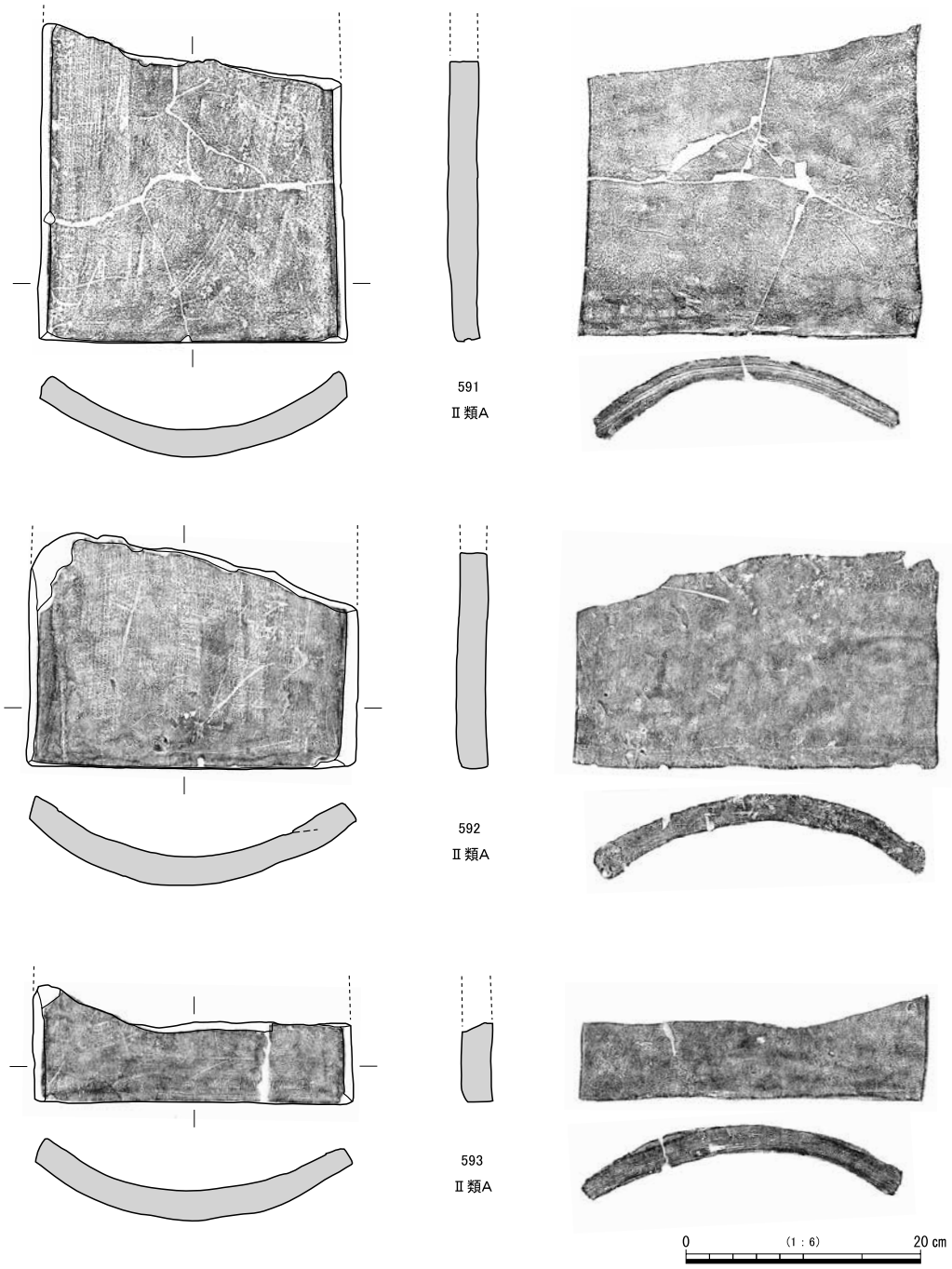


図 181　３号窯窯体内出土平瓦（９）

３号窯灰原（図 182 ～ 192、図版 19・20・67・74）

３号窯の灰原では、総重量 479.5 kgと大量に出土している。大半が破片の状態であり、狭端部または広端部が残存するものを中心に 33 点図示する。なお、破片のため図示しなかったが、凸面に叩き目が残るⅢ～Ⅵ類も少量出土している。

Ⅰ類Ａ　594 ～ 596 はⅠ類Ａである。全体が残るものはないが、広・狭端の幅や全長からⅠ類Ａであることが特定できる。凸面は全面横ナデ調整で、ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩きが残る。凹面は全面縦ナデ調整で、側縁は角を軽く面取りしている。側面は凸面側に深く削る。594 の広端面には、調整後に付着した藁とみられる植物の痕跡が残る。

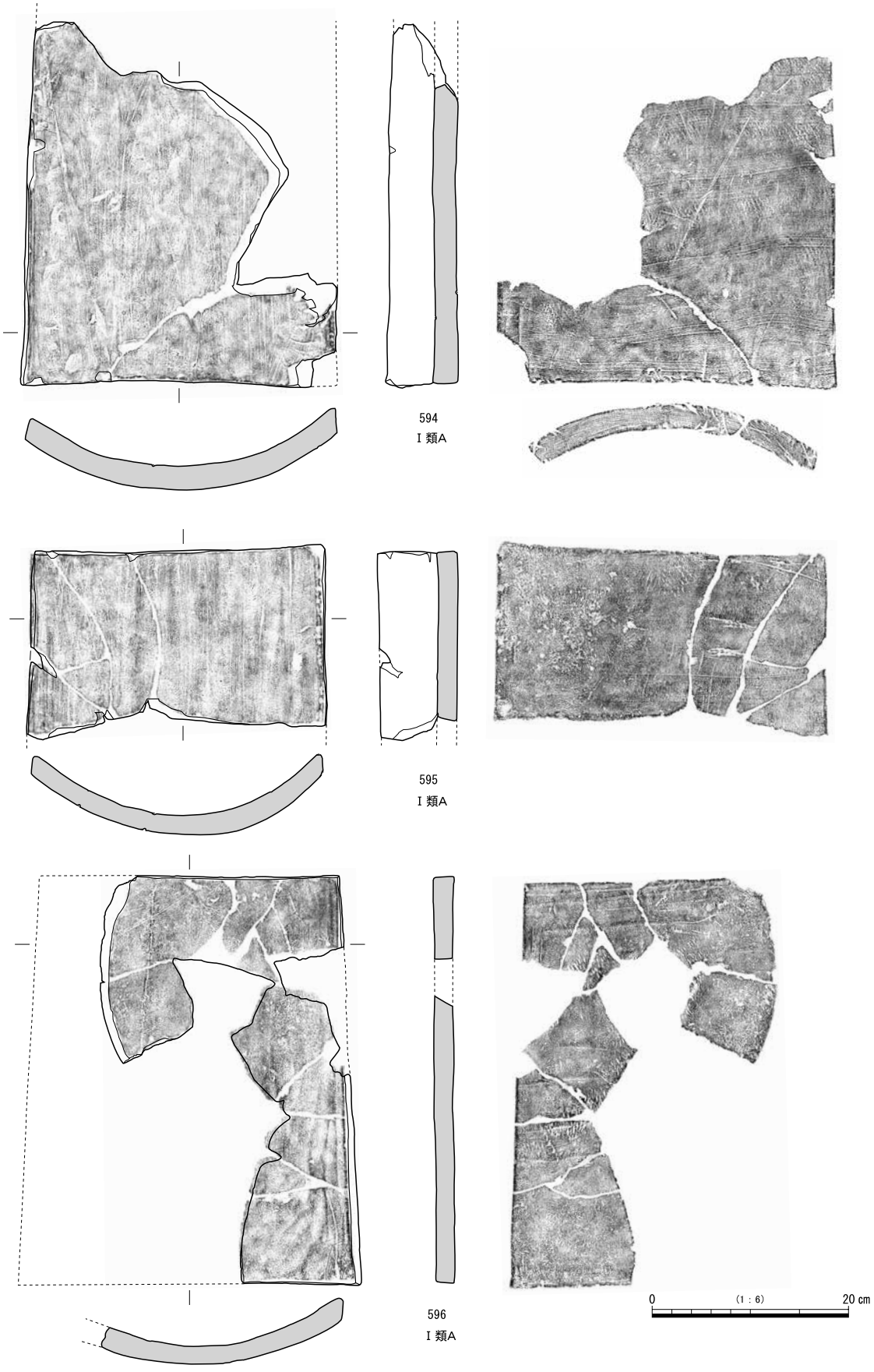


図 182　３号窯灰原出土平瓦（１）

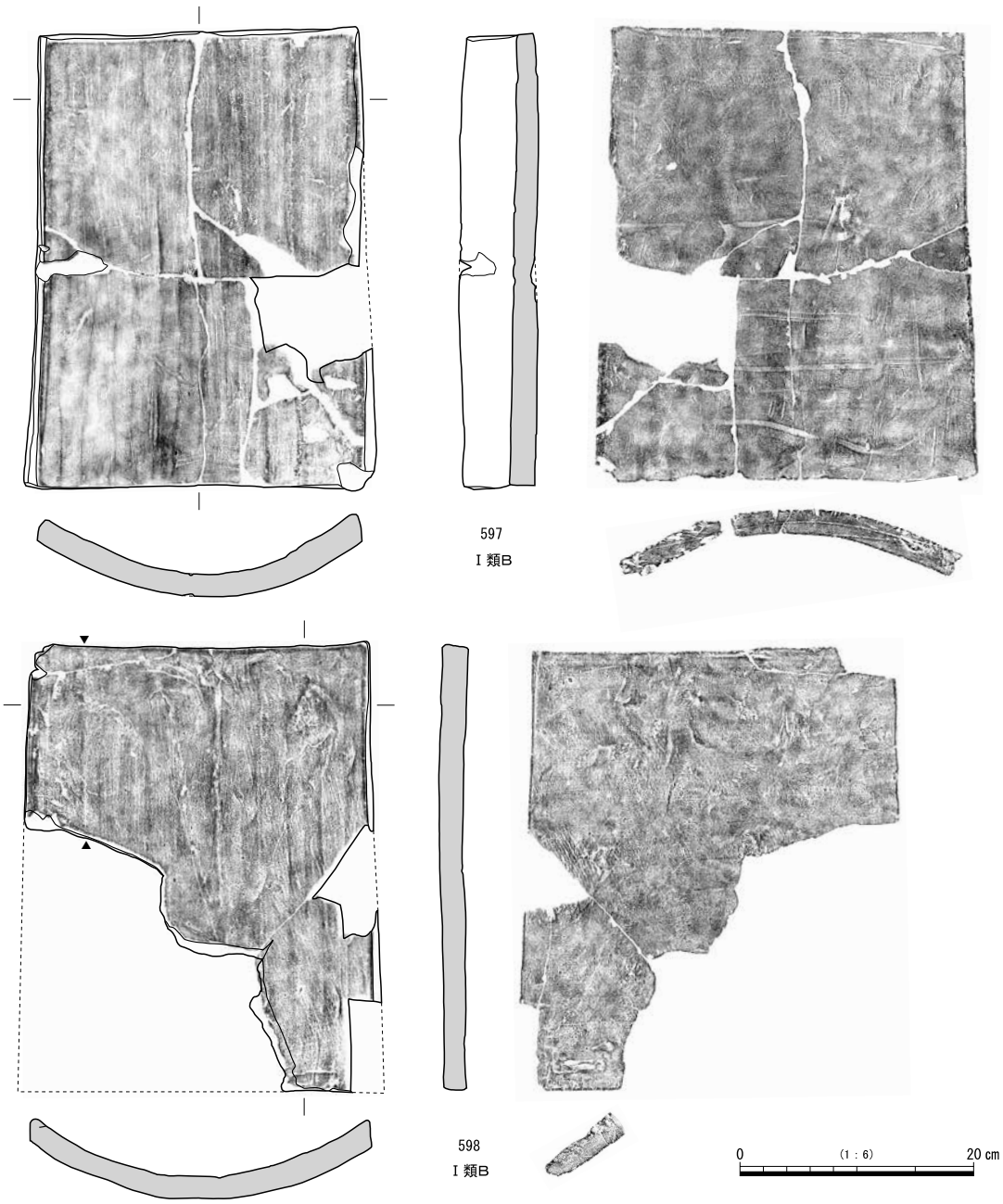


図 183　３号窯灰原出土平瓦（２）

Ⅰ類Ｂ　597 ～ 625 はⅠ類Ｂである。全長の短いものや焼き歪みによって幅が広がっているものもあるが、法量は全長 37 ～ 38 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝を基本とする。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整が主体であるが、広端側を中心に一部縦ナデ調整が施される。ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩きの痕跡が残る。凹面は全面縦ナデ調整し、側縁に沿って四周にナデ調整を施す。両側縁は面取りし、さらにナデ調整を加えている。ナデ調整により側縁が丸く仕上げられているものも多い。側面は凸面側に深く削っている。

599・601・602・604・618 には、凸面の側端付近に凹型台の痕跡とみられる段差が確認される。609 の凸面には、長径１㎝程の大きさの窪みがある。何らかの工具の痕跡とみられるが、特定の配列はなく意図して付けられたものとは考えにくい。619 には、凸面の広端隅に窯壁が付着している。

凹面は四周を側縁に沿ってナデ調整しているものが多いが、597・601・611・616・617 では、狭端側

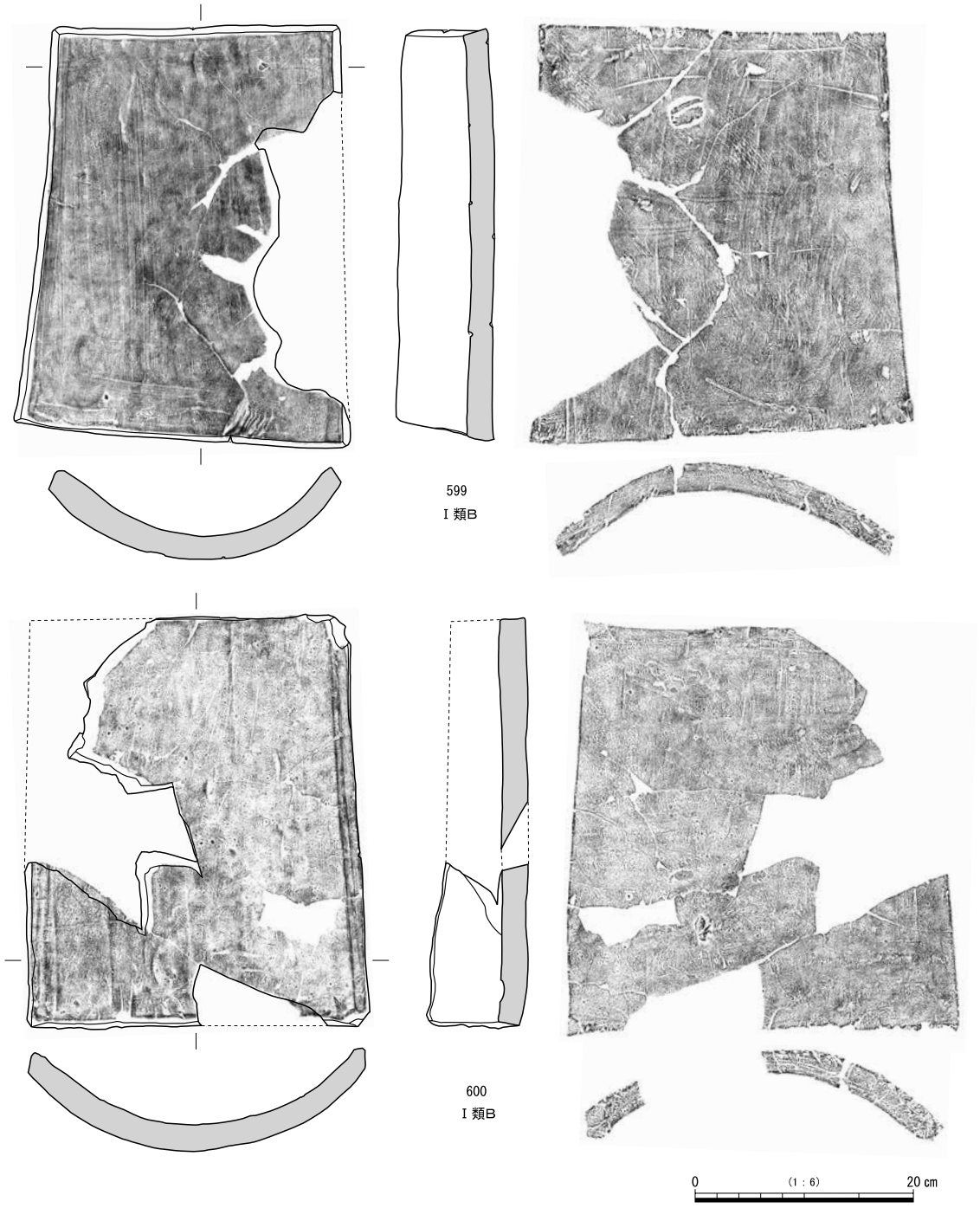


図 184　３号窯灰原出土平瓦（３）

の横ナデ調整が施されていない。凹面が全面ナデ調整されているため布目はほとんど残らないが、598 と 614 の凹面には布綴じ痕とみられる窪みがかすかに残る。598・602・604 では粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 598 がＺ型、602・604 はＳ型である。

広端面の残るほとんどのものに、藁とみられる植物の痕跡が残っている。いわゆる藁座痕とは異なり一枚につき数本確認できる程度であり、間隔や方向も不規則である。また、痕跡は広端面の調整後に押圧されている。窯入れまでの乾燥時に付着したものであろうか。

615 と 616 は小型のものである。615 は全長が 34 ㎝、616 にいたっては全長が 30 ㎝しかない。法量を基準にすると、ともにⅠ類Ｂには当てはまらないが、調整技法がⅠ類Ｂと同一であることから、Ⅰ類

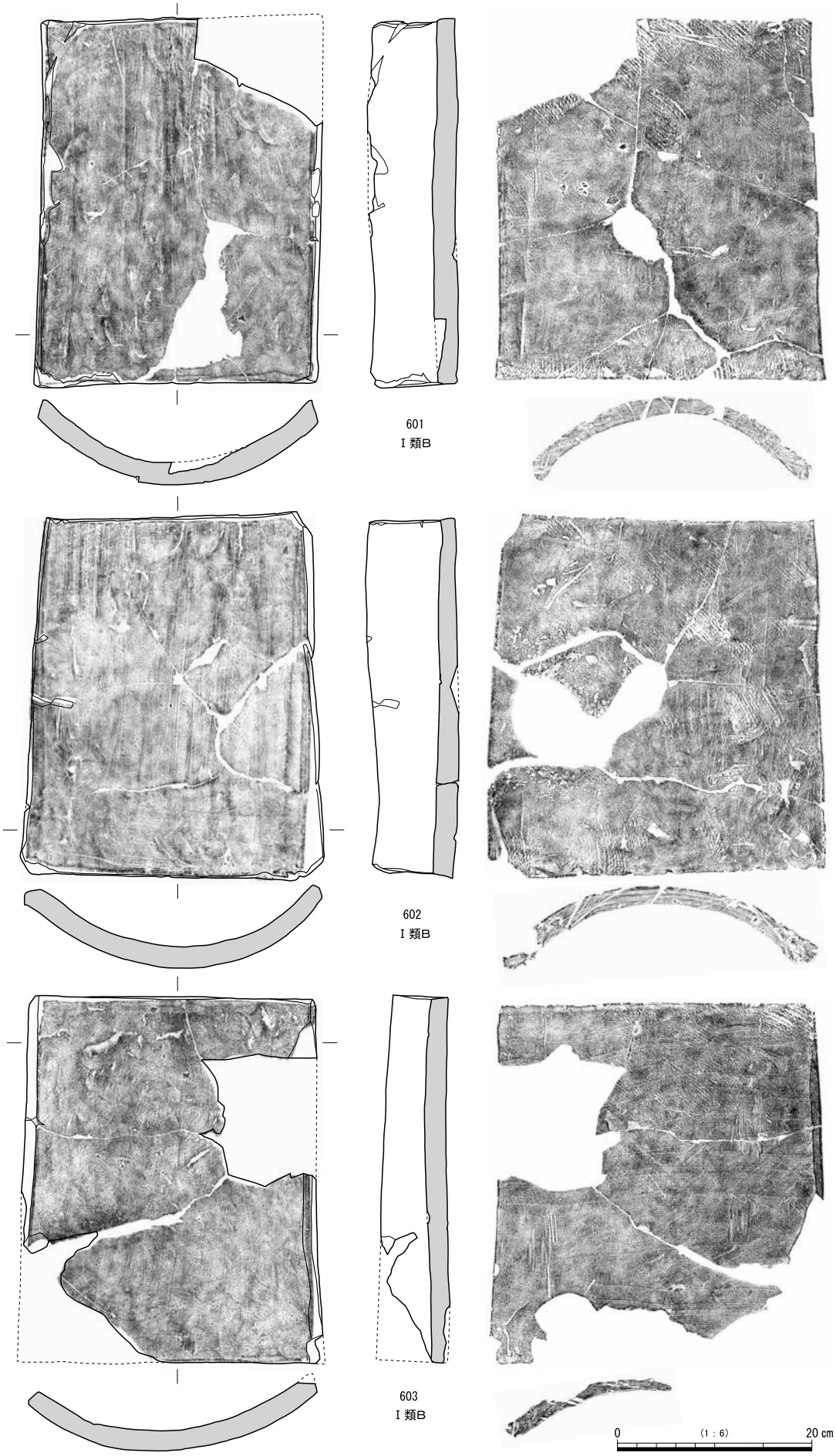


図 185　３号窯灰原出土平瓦（４）

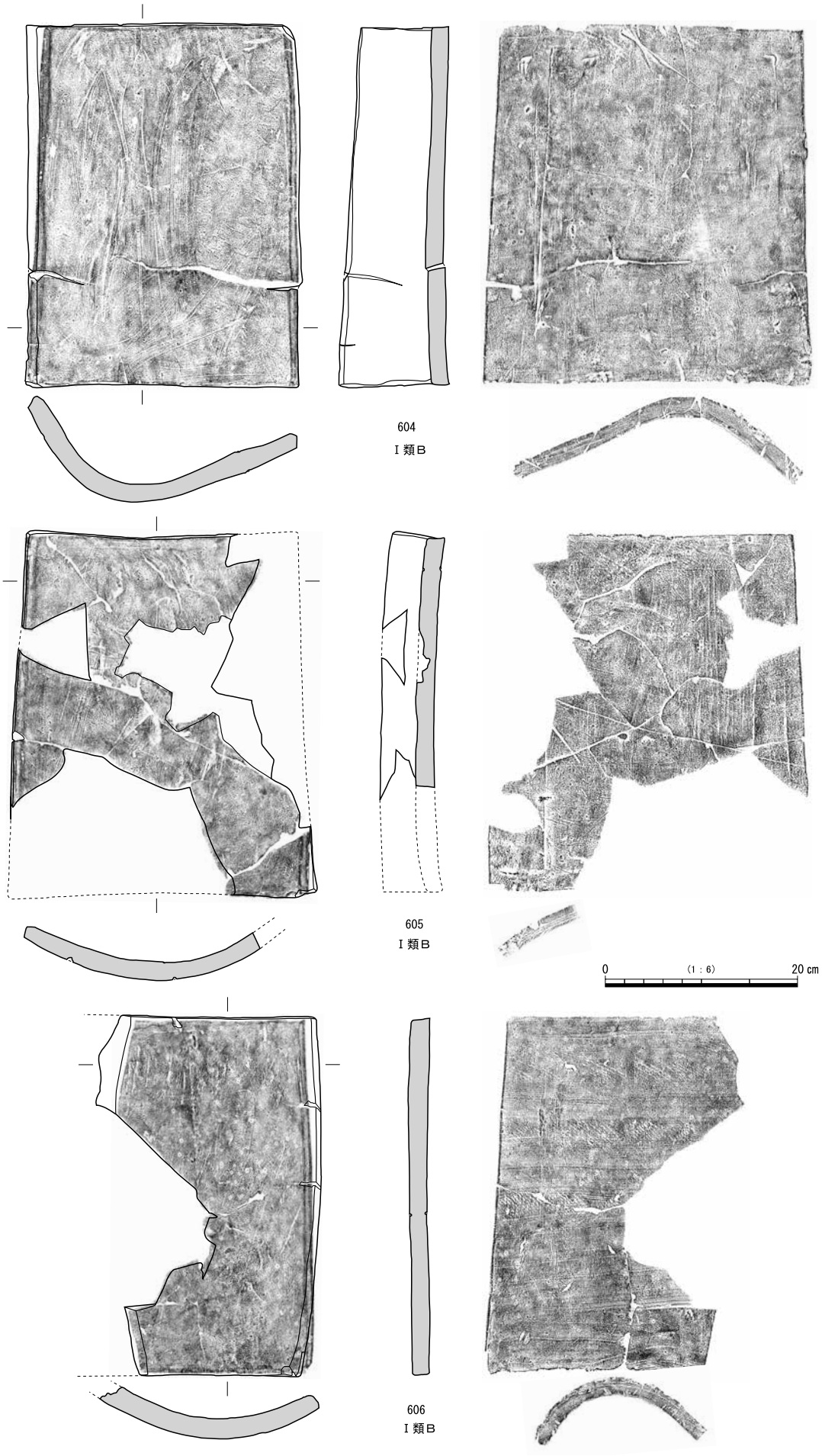


図 186　３号窯灰原出土平瓦（５）

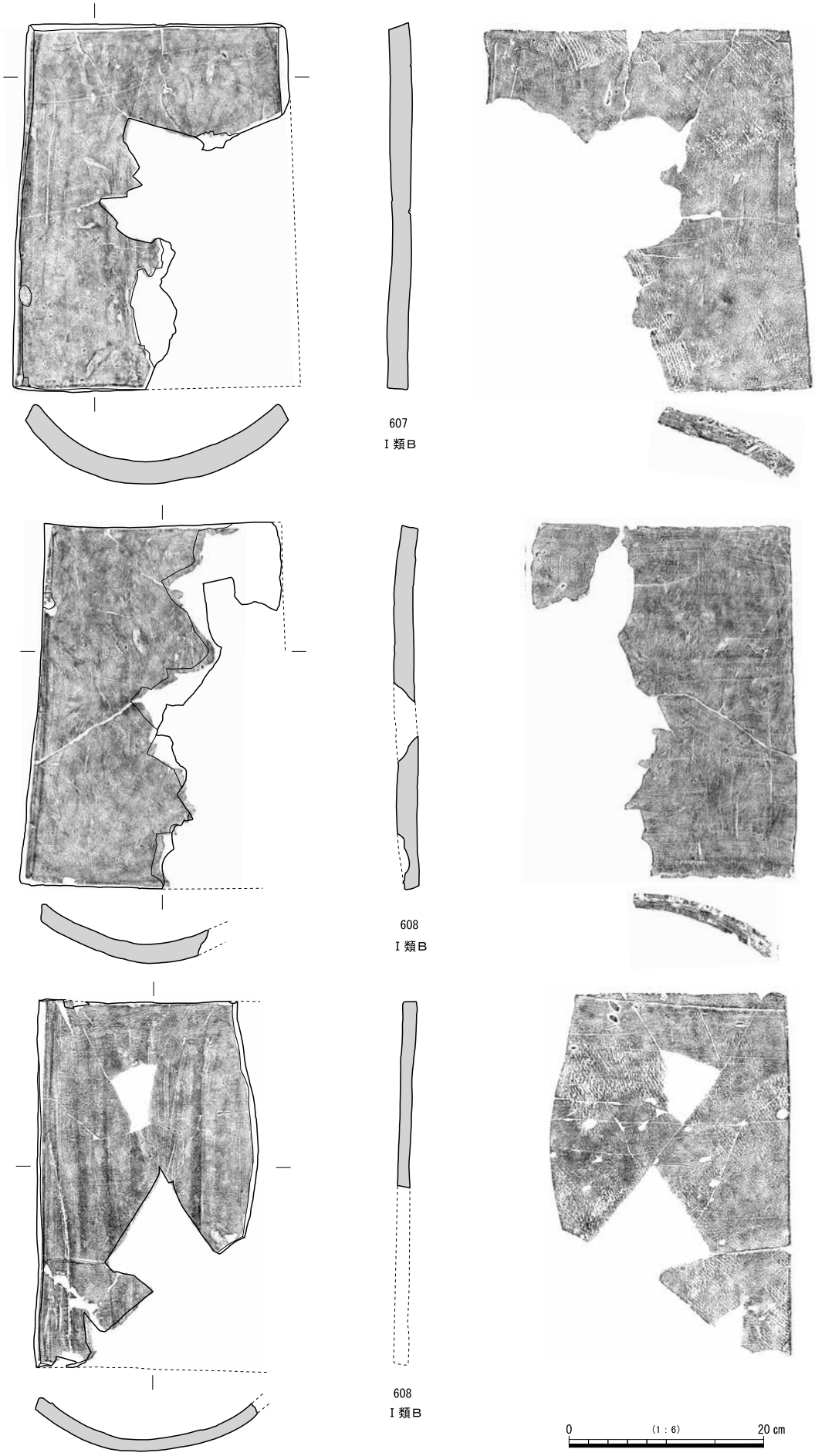


図 187　３号窯灰原出土平瓦（６）

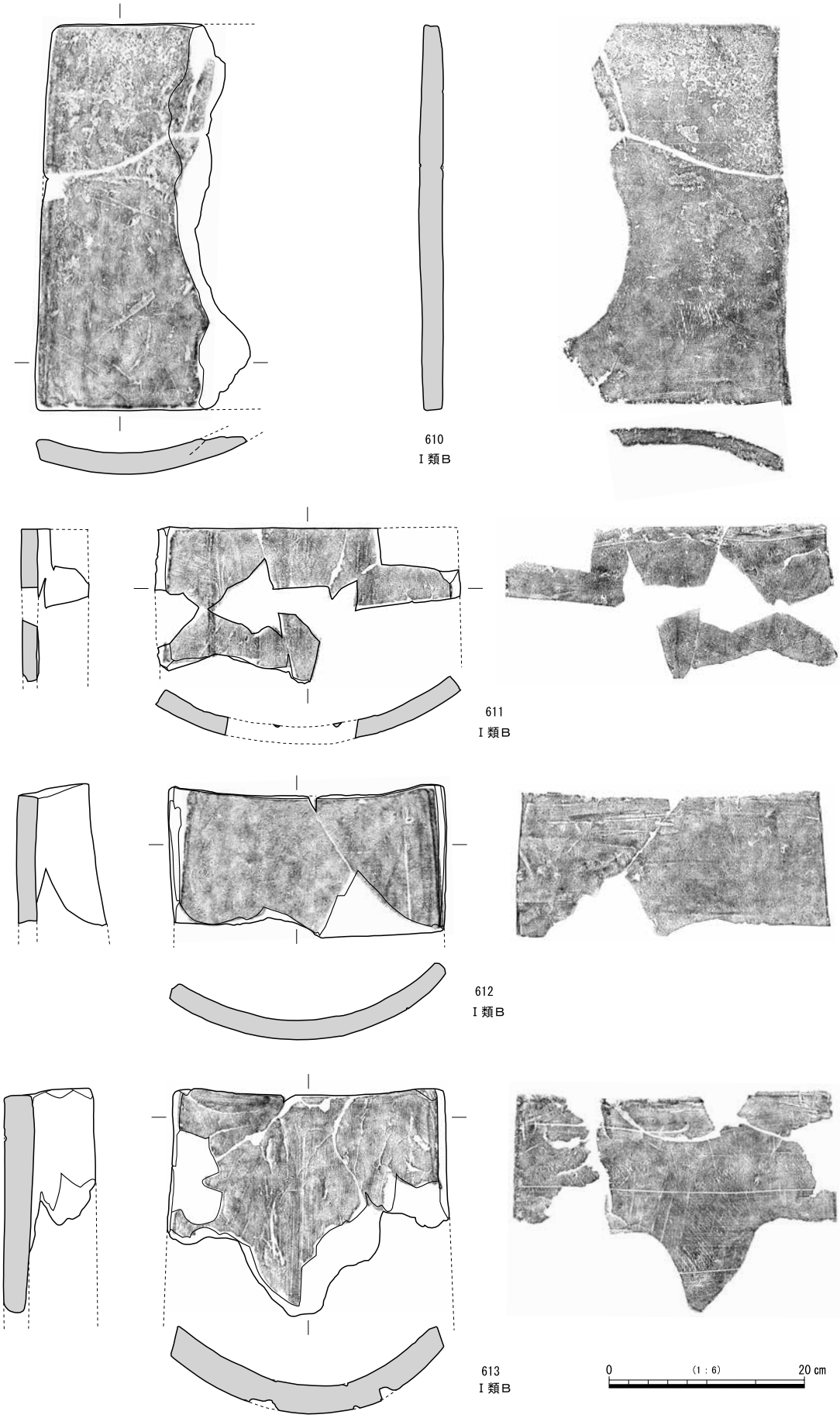


図 188　３号窯灰原出土平瓦（７）

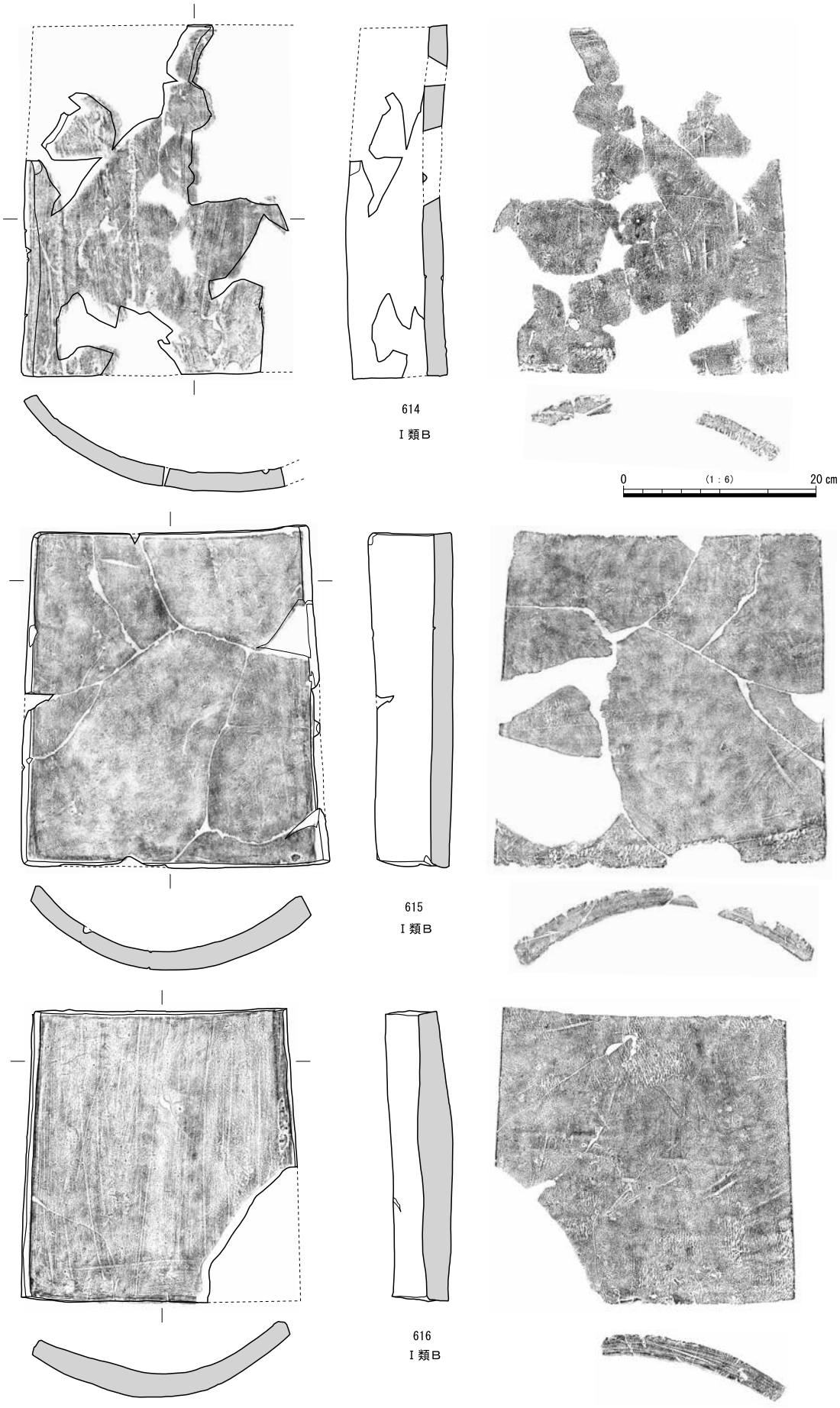


図 189　３号窯灰原出土平瓦（８）

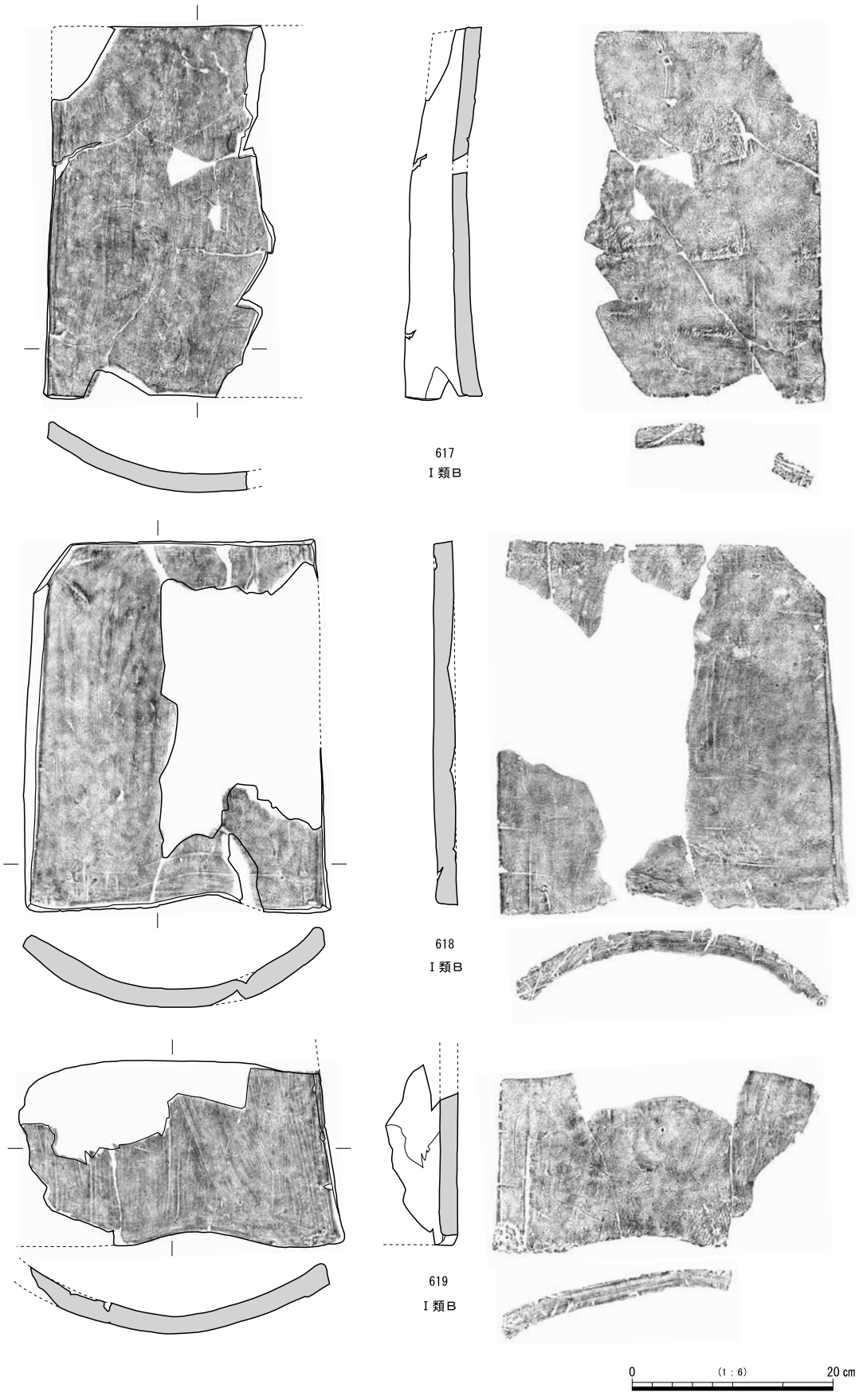


図 190　３号窯灰原出土平瓦（９）

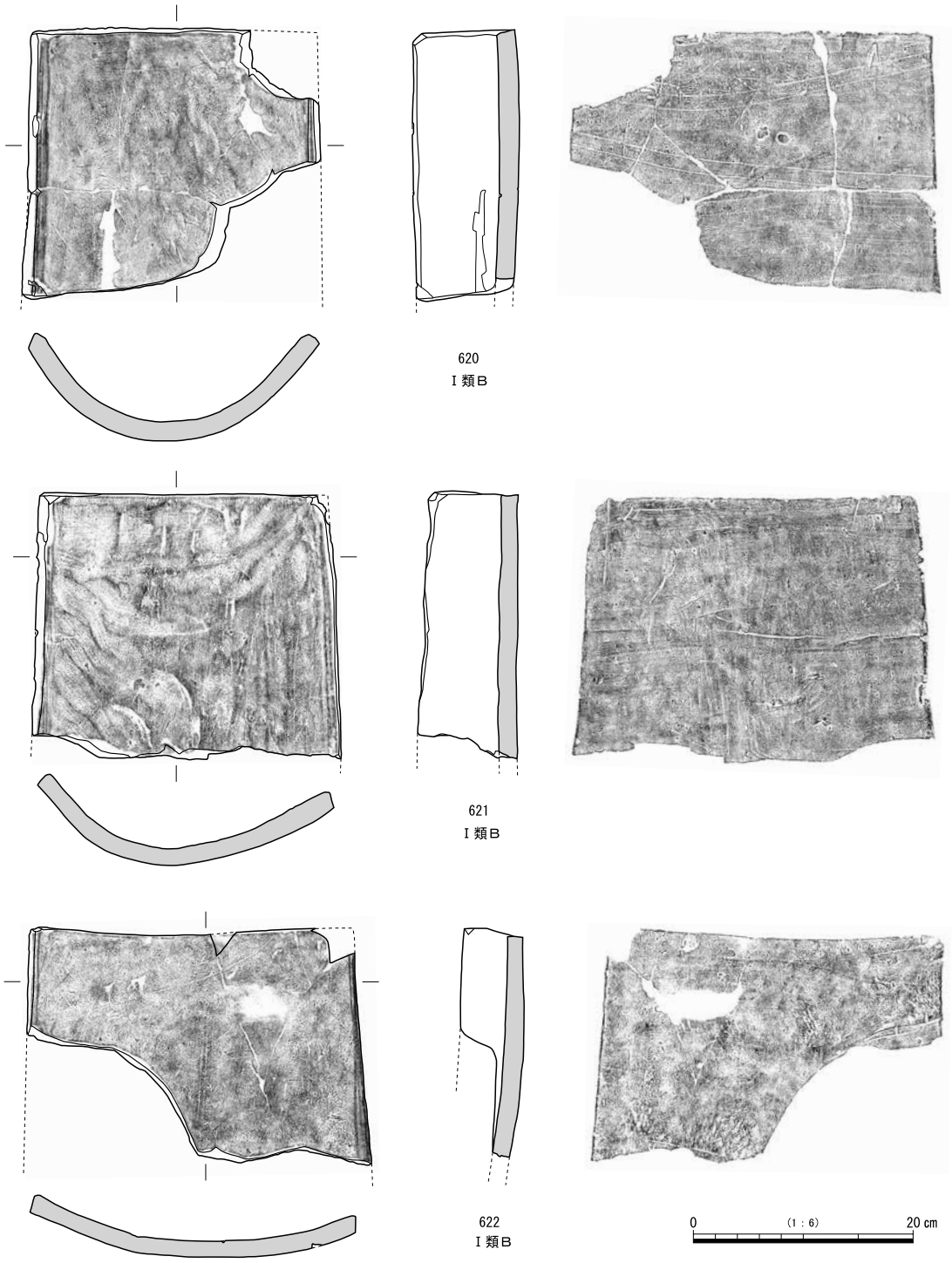


図 191　３号窯灰原出土平瓦（10）

Ｂの特殊例として扱うことにする。617 は広端部が三角形に抉られており、618 と 619 は広端部が湾曲している。特別な用途のために製作された可能性も考えられるが、おそらくは変形や破損から生じた偶発的なものであろう。

Ⅱ類Ａ　626 はⅡ類Ａである。凸面は全面横ナデ調整で、ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩きが残る。凹面は側縁を面取りするほかは無調整で、布目が明瞭に残る。接合した破片が少ないため図化したのはこの１点のみであるが、凹面に布目が残る破片については一定量の出土が確認できる。

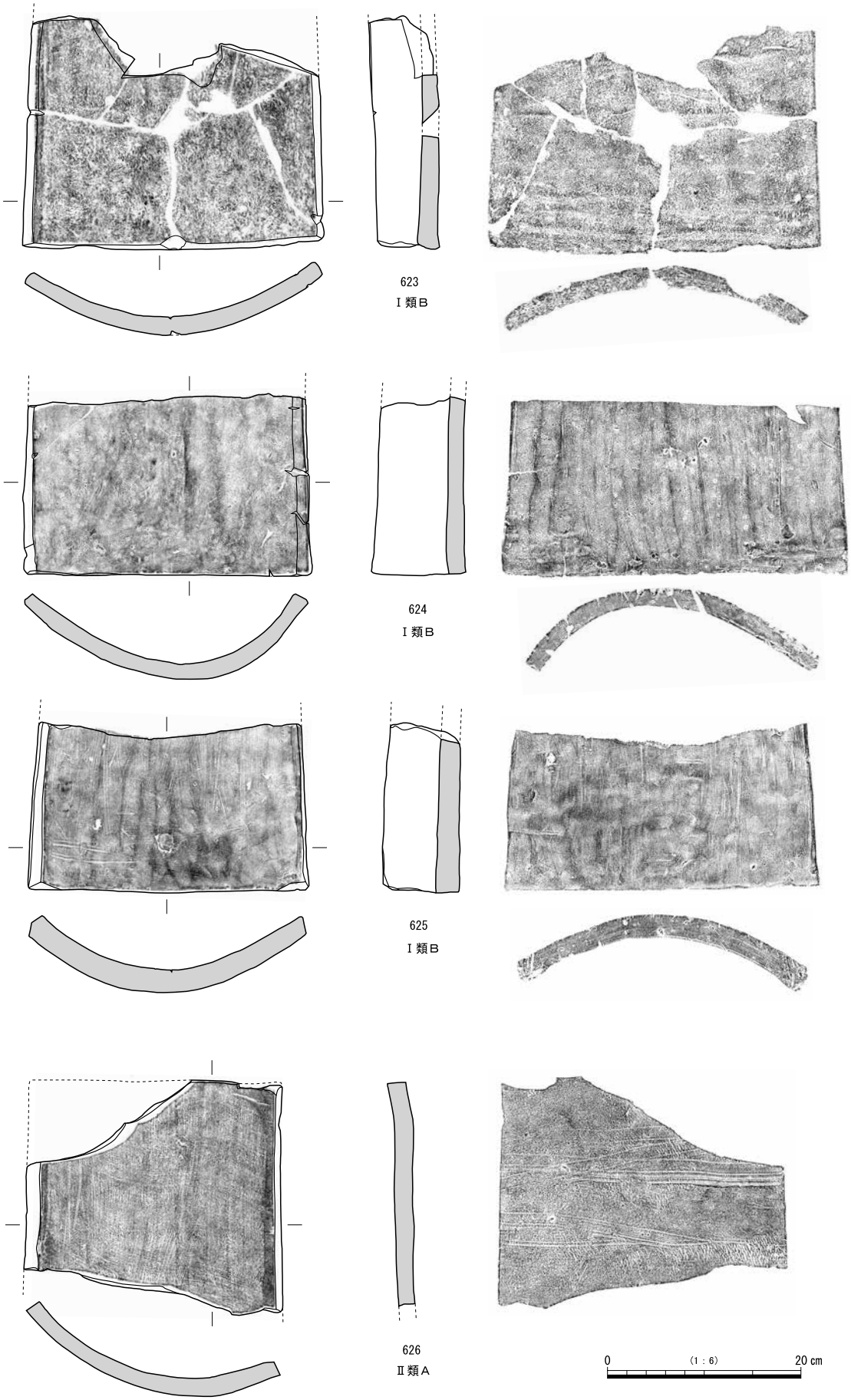


図 192　3号窯灰原出土平瓦（11）

（３）２号窯出土

２号窯窯体内（図 193 ～ 213、図版 26・70・74）

２号窯の窯体内では、総重量 206.1 kg出土している。狭端または広端が残存し、法量が特定できるものを中心に 53 点図示する。

Ⅰ類Ａ　627 はⅠ類Ａである。凸面は全面横ナデ調整で、ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩きが残る。凹面は全面縦ナデ調整で、両側縁をわずかに面取りしている。凹面には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型である。側面は凸面側に深く削っている。破片によって焼成が大きく異なっており、破片の断面に灰被りが確認できるものもある。構築材として利用されていた可能性が高く、２号窯の窯体内から出土してはいるが、おそらくは３号窯の製品であろう。

Ⅰ類Ｂ　628 ～ 630 はⅠ類Ｂである。凸面は全面ナデ調整されており、横ナデ調整が主体であるが、部分的に縦ナデ調整が加えられている。凹面も全面ナデ調整であり、広・狭端側には横ナデ調整、そのほかの部分は縦ナデ調整が施されている。四周には面取りを施し、側縁にはナデ調整を加えて丸みを帯びた形状に仕上げている。側面は凸面側に深く削っている。629 は全長 34 ㎝・広端幅 26 ㎝と小型である。凹面に粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型である。630 も広端幅が 26 ㎝と小型の瓦であり、凹面は削り調整を行った後ナデ調整が施されている。凸面に縦ナデ調整を加える点や、凹面の広・狭端側を横ナデ調整する点において、629 と 630 はⅠ類Ｂと同様の技法が用いられている。法量だけからみると別に分類すべきであろうが、点数も少ないことから、Ⅰ類Ｂの特殊なものとして扱うことにする。628 は破片によって焼成が大きく異なっている。断面が灰被りしている破片があり、凸面には瓦が融着している。628 は構築材として使用されていたものと推測され、３号窯で焼成された瓦の可能性が高い。629 と 630 については、構築材として転用されたことを伺わせる痕跡は残されていないが、２号窯におけるⅠ類Ｂの出土は少量であり、おそらくは同様に３号窯で焼成されたものと推測される。

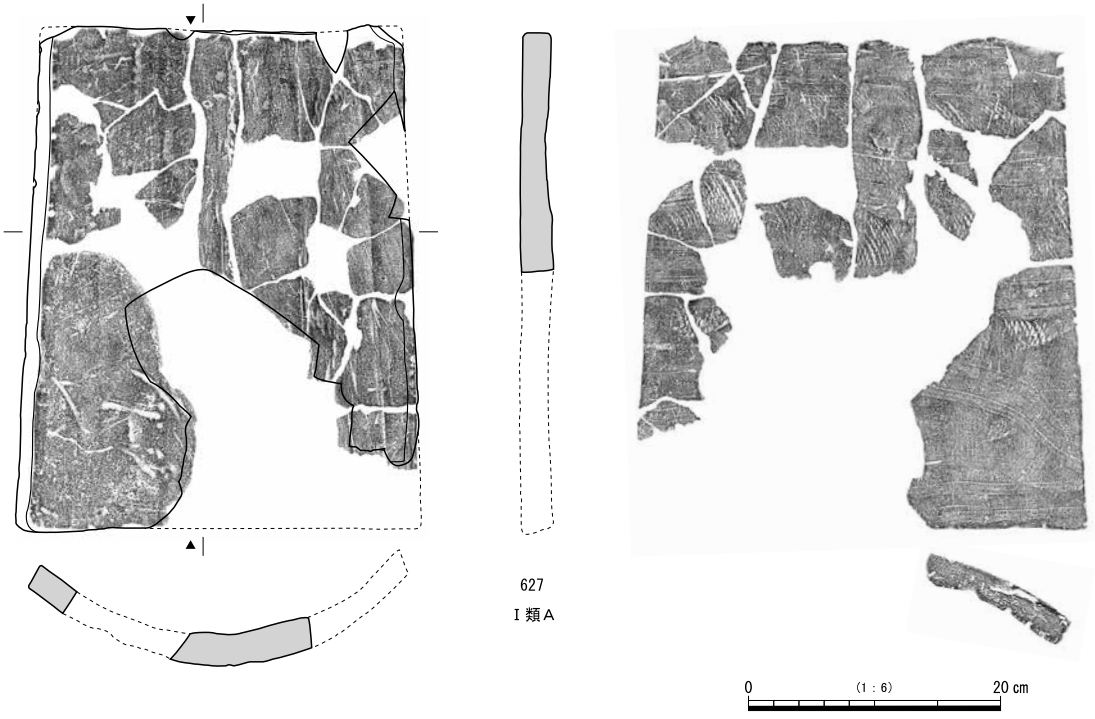


図 193　２号窯窯体内出土平瓦（１）

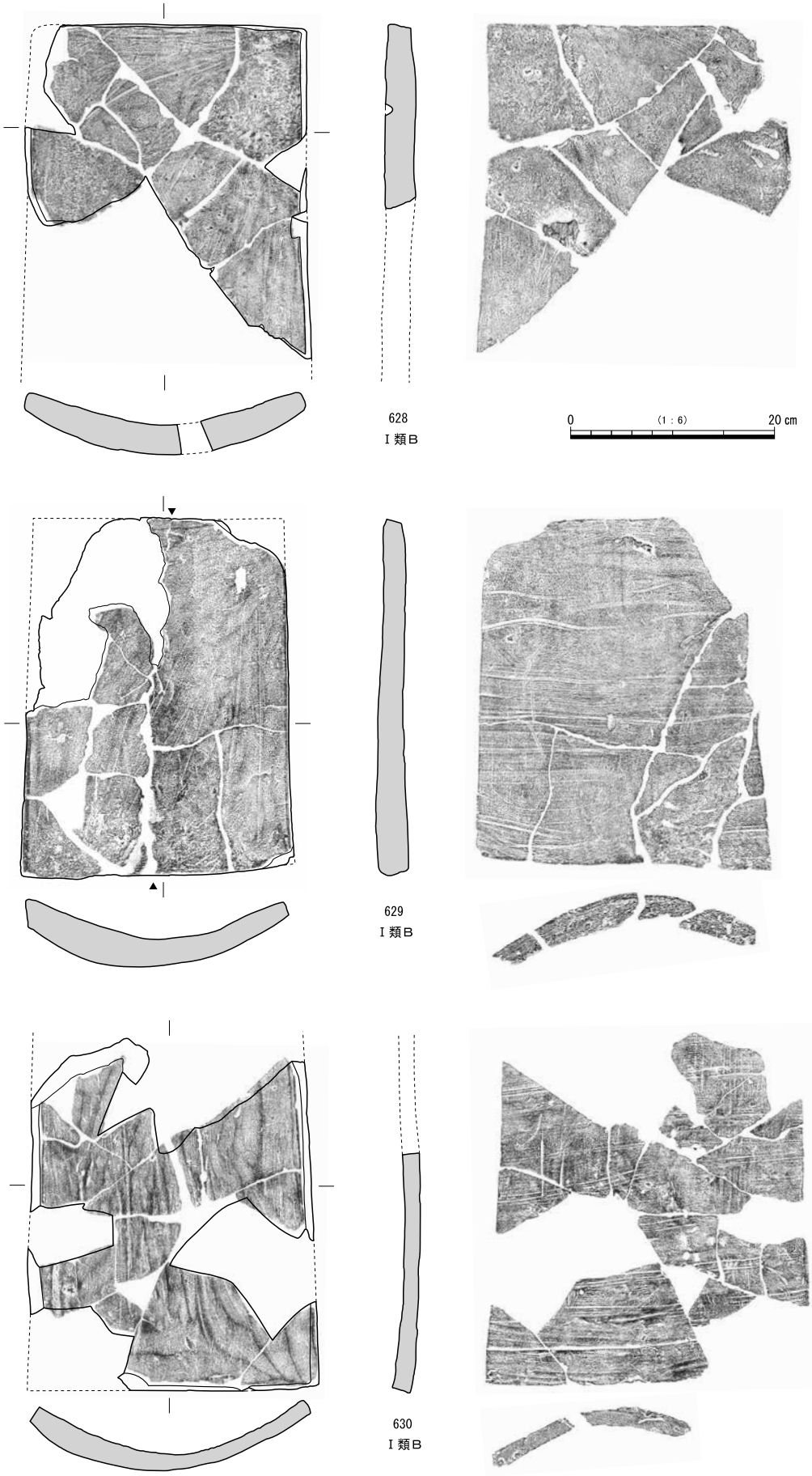


図 194　２号窯窯体内出土平瓦（２）

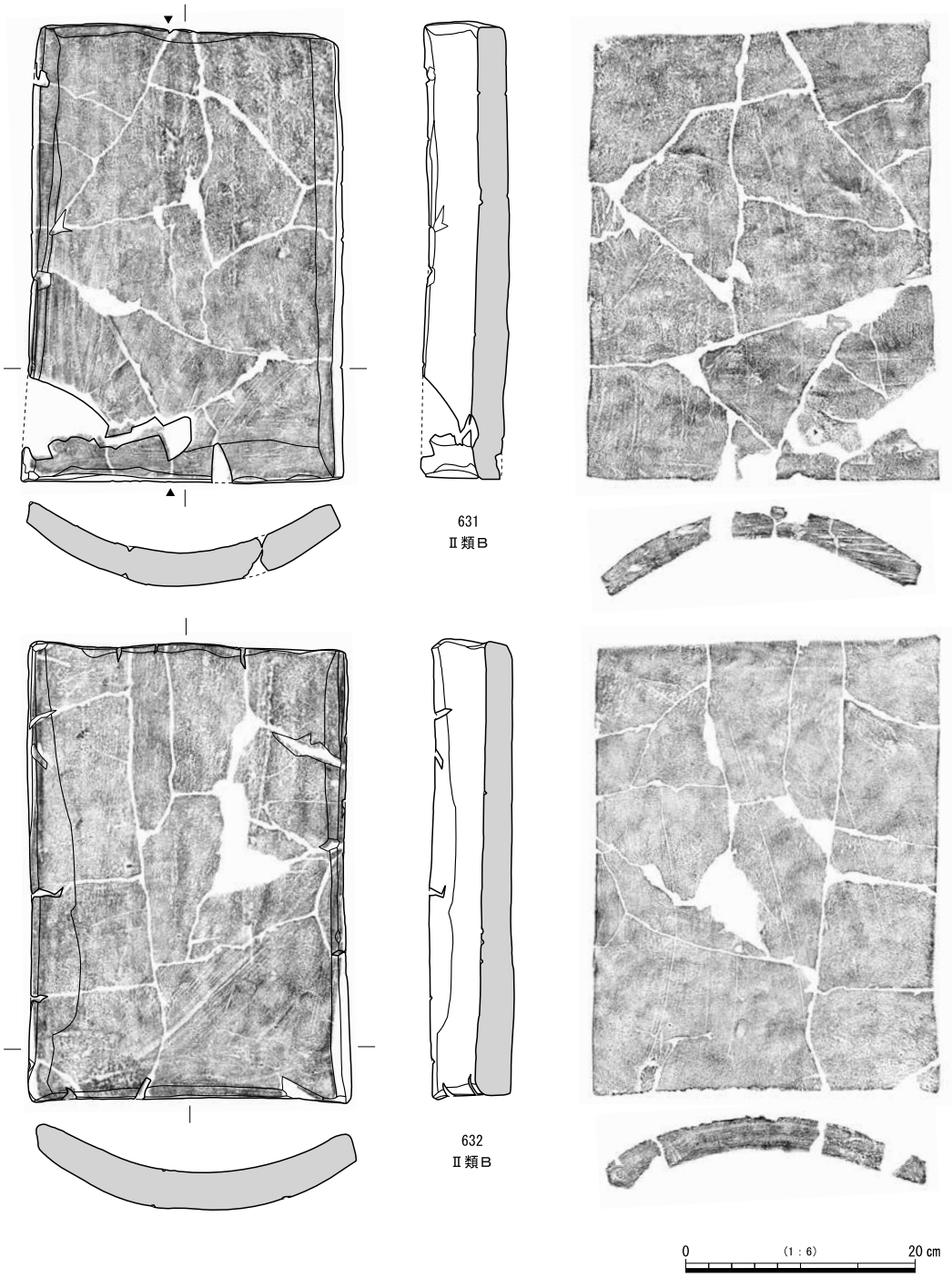


図 195　２号窯窯体内出土平瓦（３）

Ⅱ類Ｂ　631 ～ 646 はⅡ類Ｂである。法量は全長 39 ～ 40 ㎝･狭端幅 25 ～ 26 ㎝･広端幅 27 ～ 28 ㎝と、長さはⅡ類Ａとほとんど違いがないが、幅がやや広い。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整を施した後に、縦ナデ調整が加えられる。特に狭端側の側縁は丁寧に横ナデし、丸みを帯びた形状に仕上げている。凹面は、やや斜め方向にナデ調整を施し、広端側には横ナデ調整が施される。ナデ調整が施されるのは広端側が中心で、狭端側には布目が残る。ナデ調整の範囲は一定しておらず、広端付近だけにナデ調整を施しているものもある。四側縁はやや幅広に面取りされている。左右両側縁には面取り後にナデ調整を施し、角が取れて丸くなっているものが多い。側面は凸面側に深く削る。全体的に比較的厚手のものが多い傾向にある。

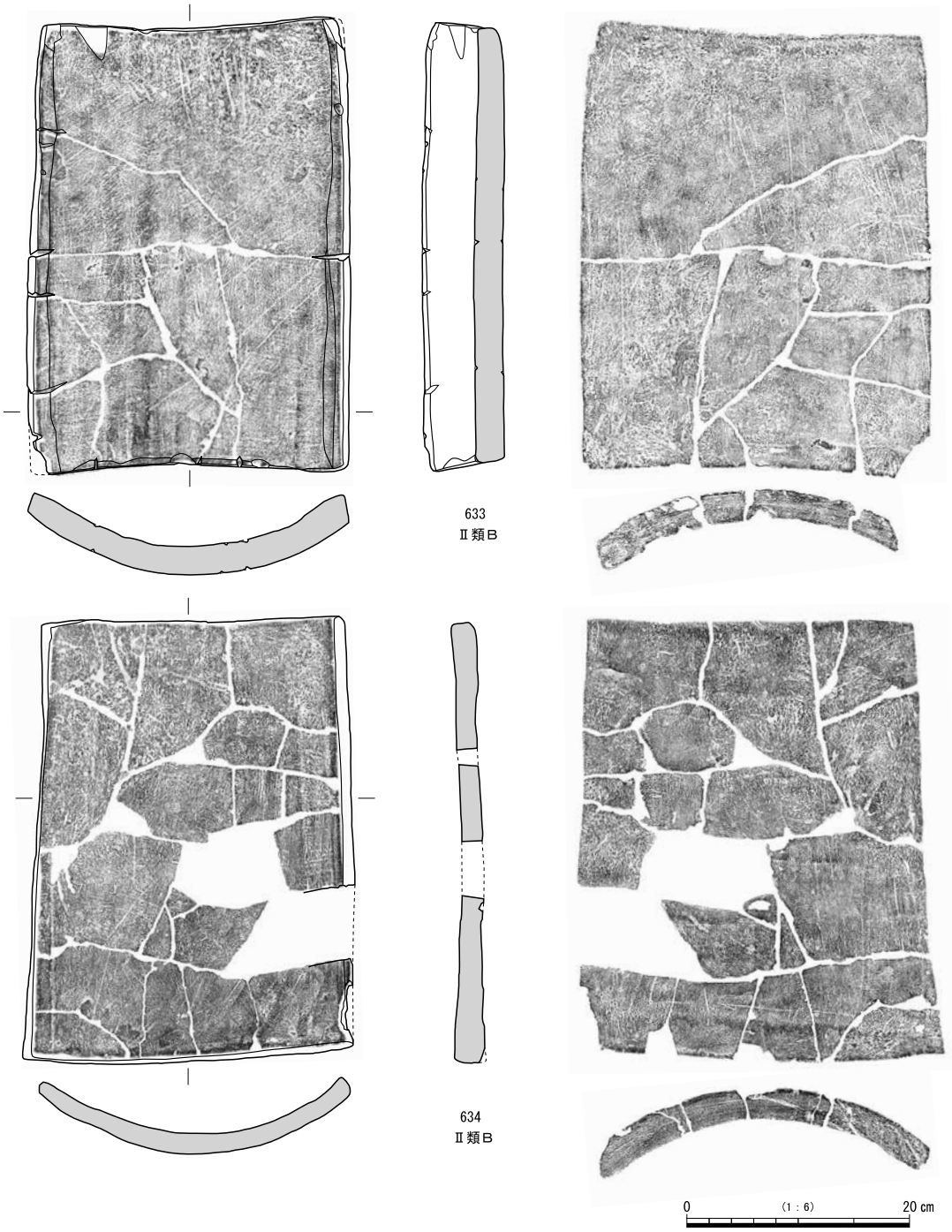


図 196　２号窯窯体内出土平瓦（４）

632・638・644・645 には布綴じ痕が残る。部分的にしか残らないため同一の布袋かどうかは判断できないが、645 は綴じ目の方向がやや異なっており、別の布袋の可能性がある。631 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型である。634 の側端付近には、分割突帯とみられる溝状の窪みが確認される。631・636・641・643・646 には、一部の破片のみ灰被りしており、破片によって焼成が大きく異なる。灰被りはないが、637・642・644 も焼成の異なる破片が接合している。また、645 の凹面には窯壁が付着している。これらのものについては、窯体内に遺棄された瓦ではなく、構築材として使用されていた可能性が高い。641 は焼き歪みにより大きく変形し、扁平に近い形状になっている。646 は広端幅が 24 ㎝しかない小型のものである。粘土の大きさからみると狭端部の破片のようにもみえるが、凹凸面の調

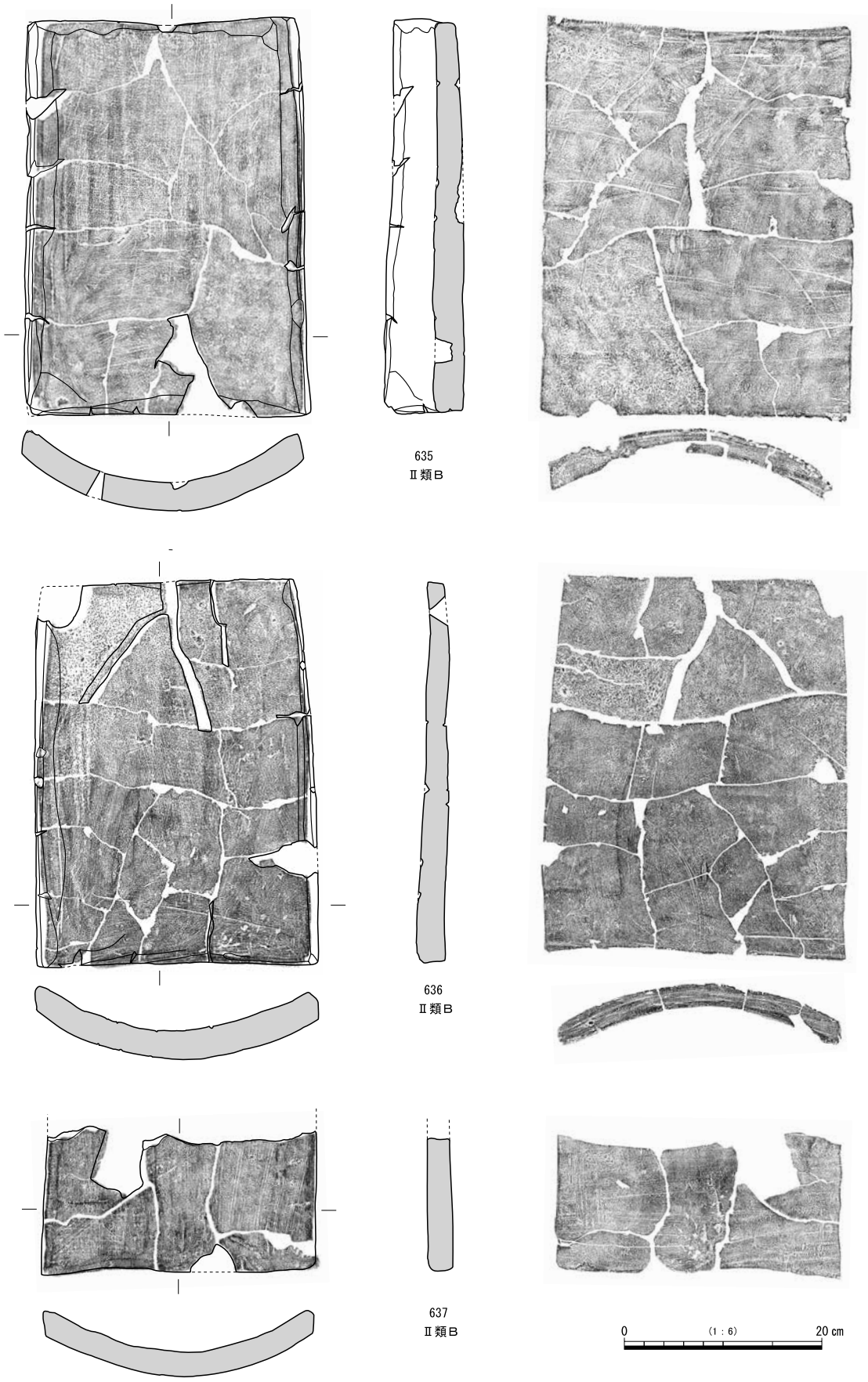


図 197　２号窯窯体内出土平瓦（５）

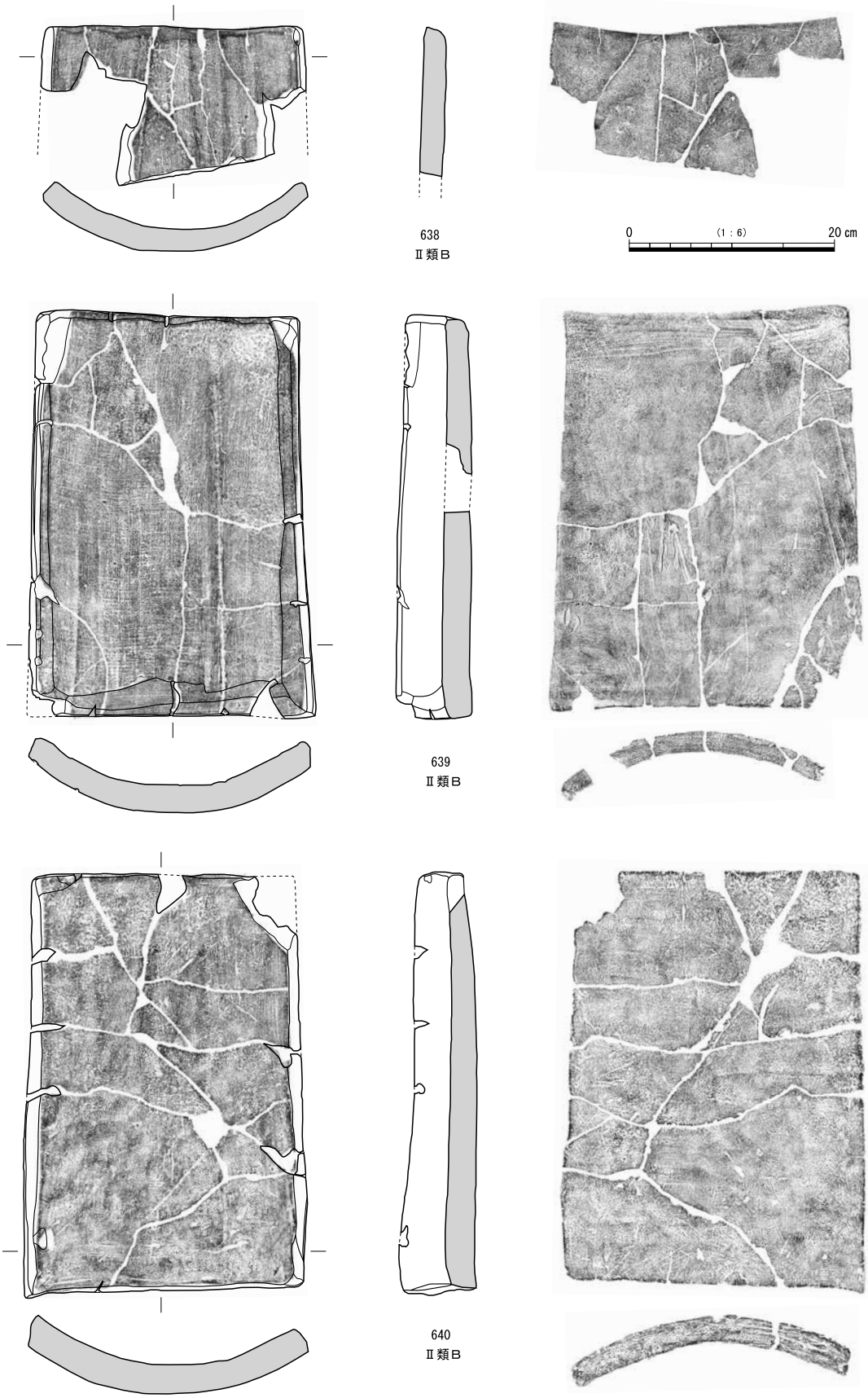


図 198　２号窯窯体内出土平瓦（６）

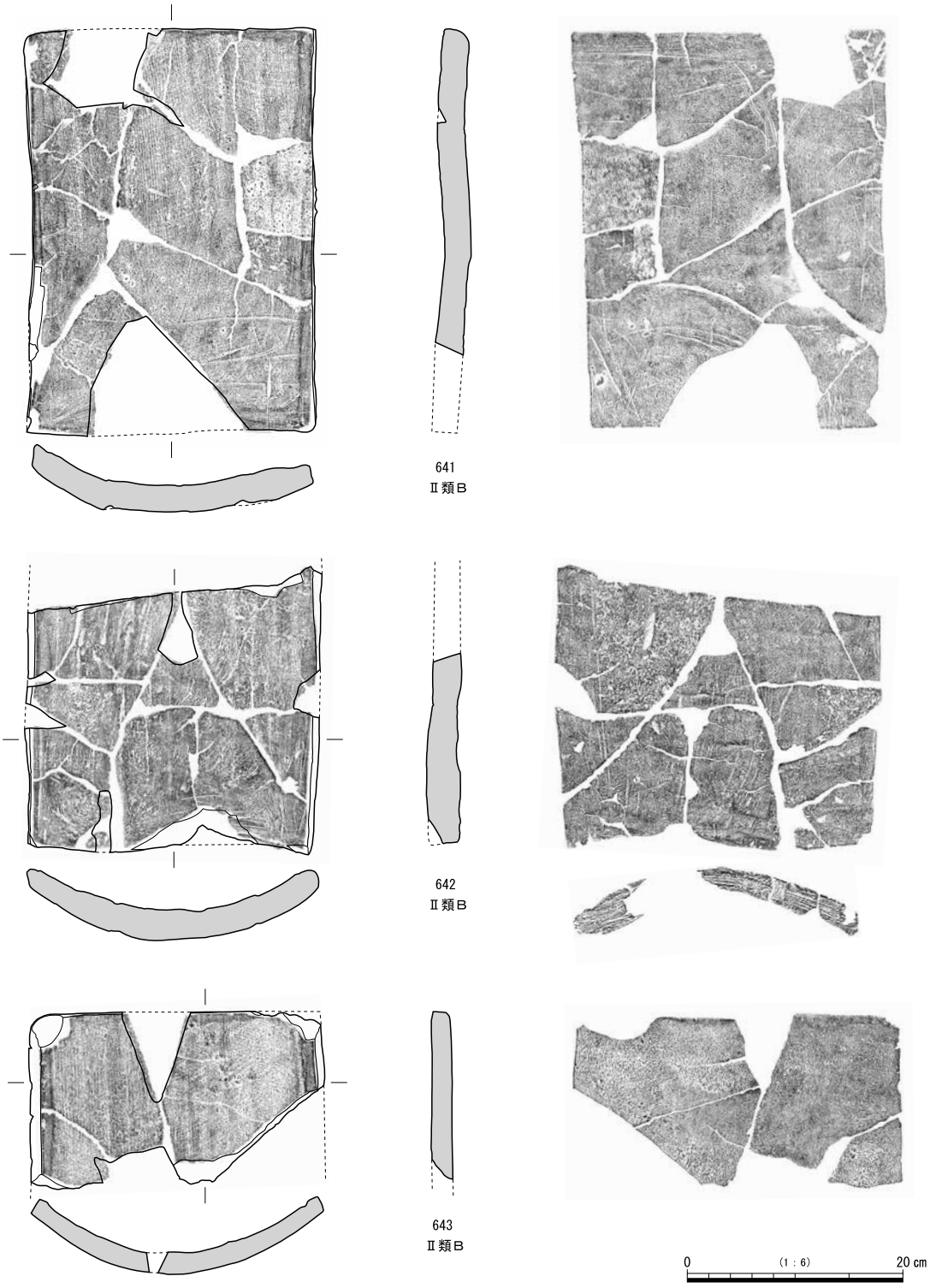


図 199　２号窯窯体内出土平瓦（７）

整は、広端部に共通する調整となっている。広・狭端の幅の差が少ないこともあり、天地を誤って調整されたものかもしれない。645 は全長 43 ㎝と他に比べて大型である。法量のみからいえば別に分類すべきものではあるが、調整がⅡ類Ｂと同一であり、他に確認できないことから、Ⅱ類Ｂの特殊なものとして扱うこととした。

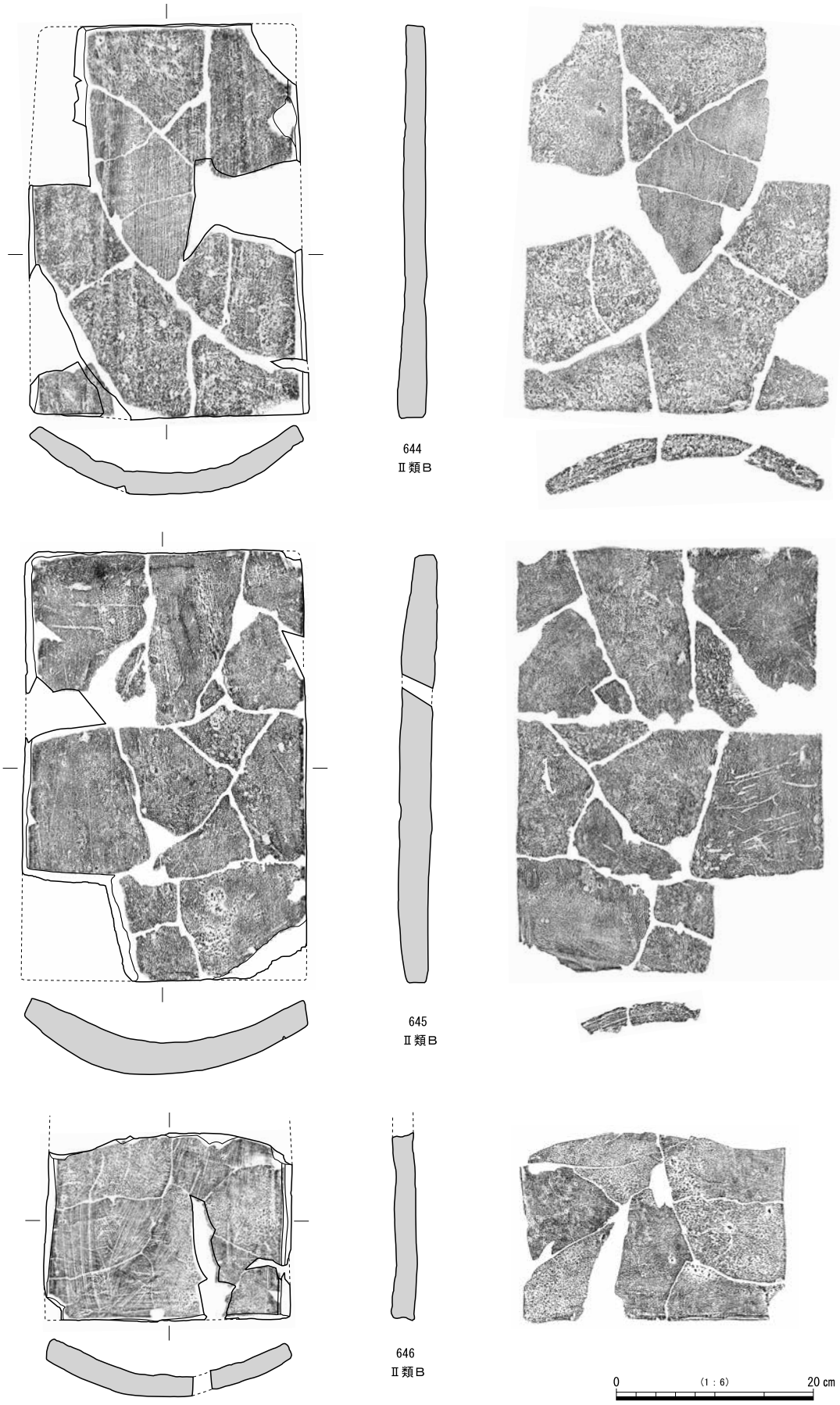


図 200　２号窯窯体内出土平瓦（８）

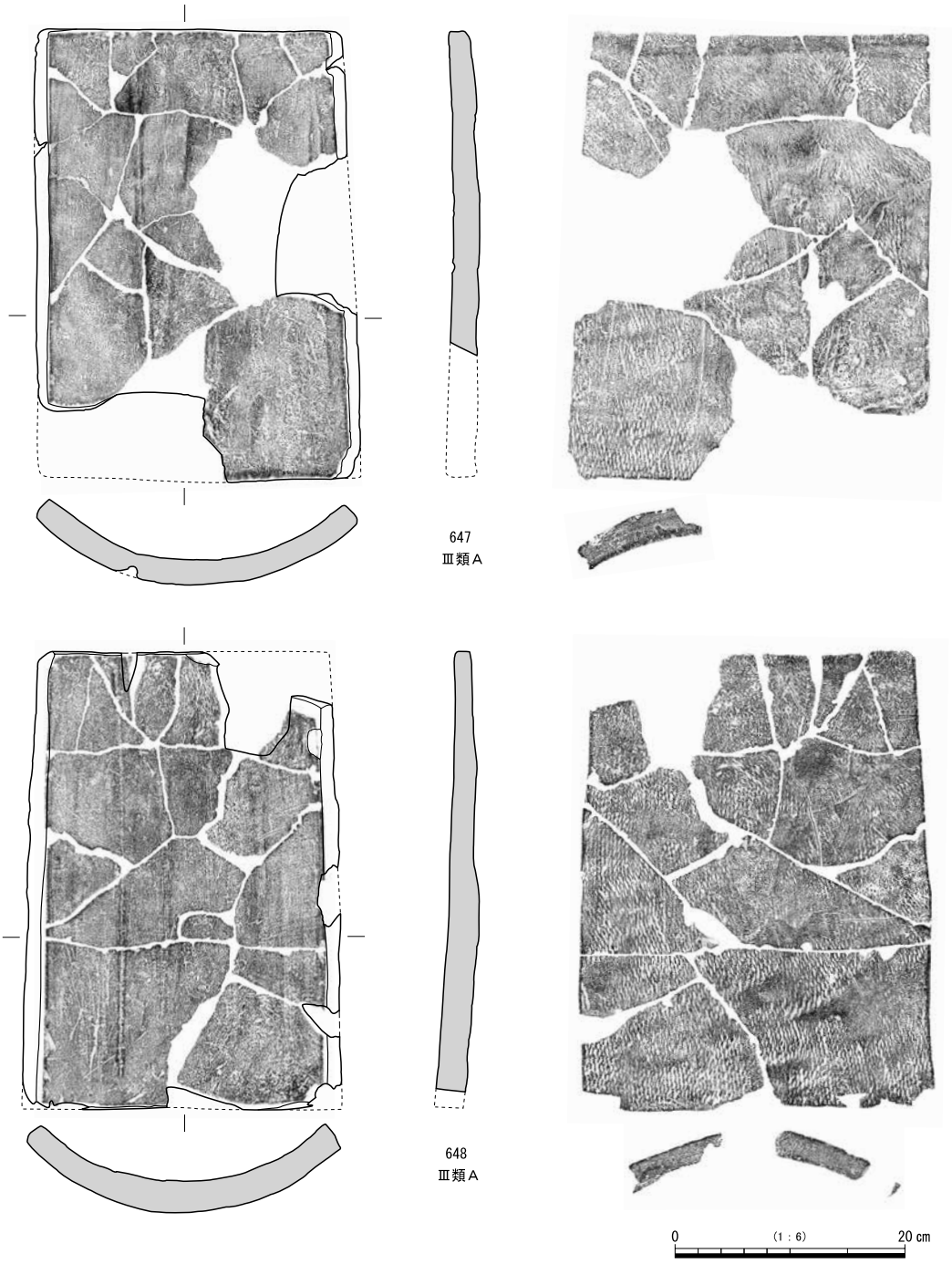


図 201　２号窯窯体内出土平瓦（９）

Ⅲ類Ａ　647 ～ 651 はⅢ類Ａである。法量は、全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 23 ～ 24 ㎝・広端幅 25 ～ 26 ㎝である。凸面は、狭端縁に横ナデ調整を施し丸く仕上げるほかは、部分的に縦ナデ調整が施される程度であり、斜め方向の縄叩き痕が残る。凹面は、狭端付近に部分的に布目が残るものの、ほぼ全面に縦ナデ調整が施されている。両側縁にはやや幅広の面取りが施され、狭端縁に面取りを施すものもある。側面は、凸面側を削っているが、広端側が中心で狭端側まで及んでいないものもある。

647・648・650・651 の凹面には溝状の窪みが確認できる。650 は側端付近にあり、別に布綴じ痕が残ることから、分割突帯の痕跡であると推測される。647・648・651 は、やや中央寄りの位置にあり、ナデ調整により不明瞭になっているが、布綴じ痕の可能性もある。651 には粘土接合痕が確認でき、合わ

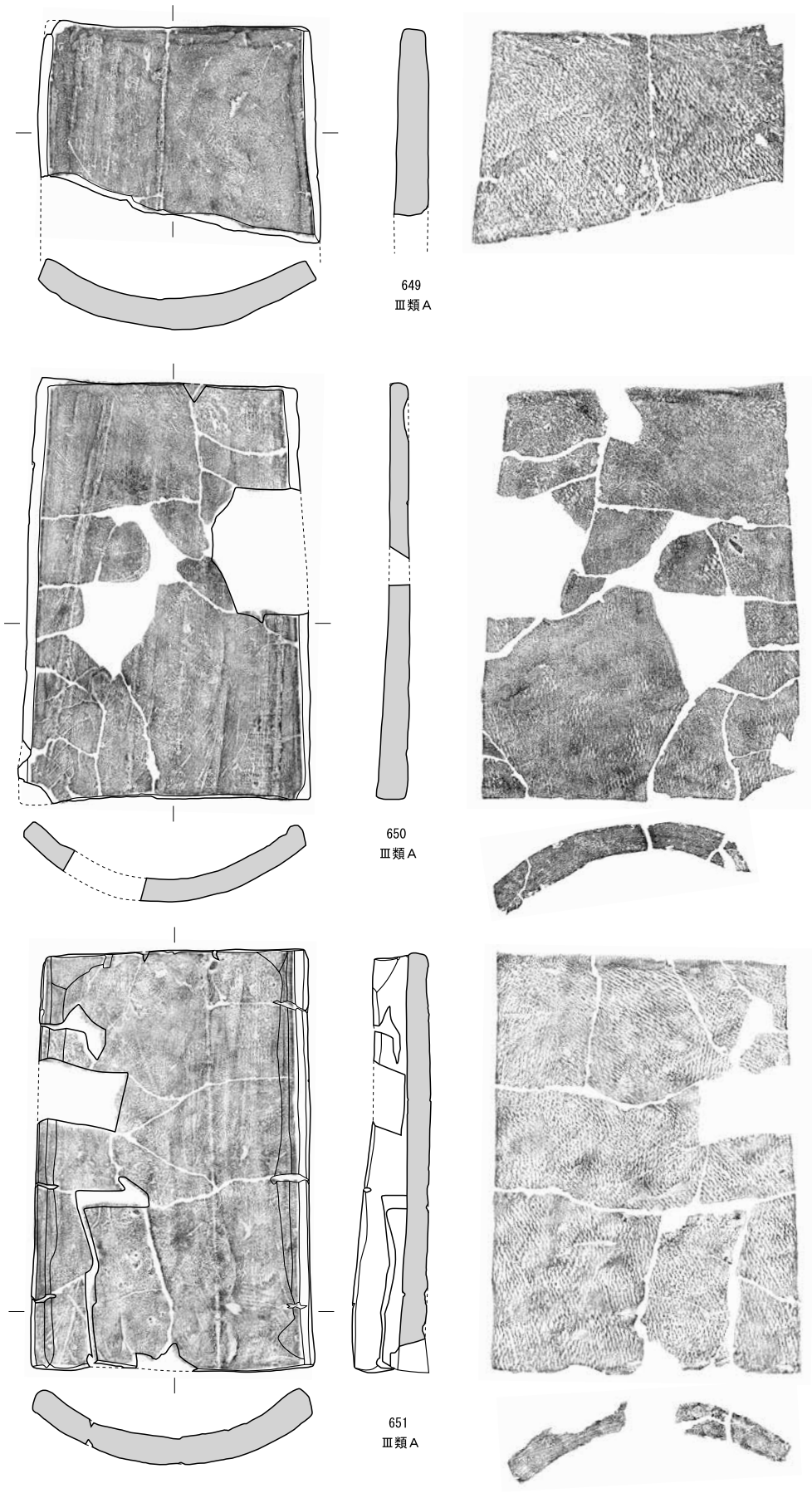


図 202　２号窯窯体内出土平瓦（10）

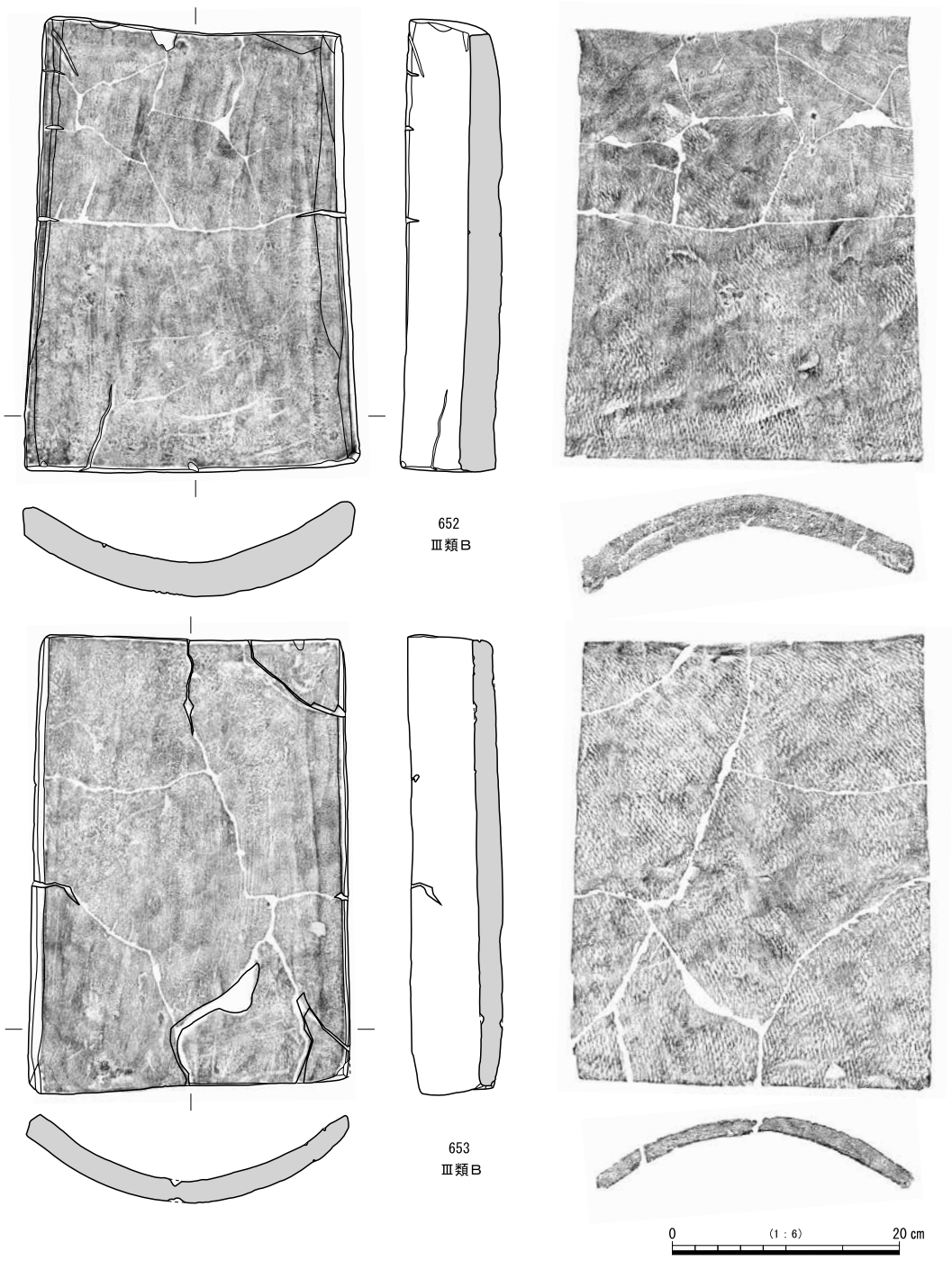


図 203　２号窯窯体内出土平瓦（11）

せ目はＺ型である。648・650・651 は、断面にまで灰被りが及んでいる破片があり、破片によって焼成が大きく異なっている。また 649 には、側面に窯壁が付着している。これらは構築材として使用されていた可能性が高い。

Ⅲ類Ｂ　652 ～ 655 はⅢ類Ｂである。全長は 39 ～ 40 ㎝でⅢ類Ａと同じであるが、狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 27 ～ 28 ㎝と幅が一回り大きい。調整はⅢ類Ａとほぼ同様で、凸面は狭端縁を横ナデ調整して丸く仕上げるほかは部分的に縦ナデ調整が施される程度で、斜め方向の縄叩き痕が多く残る。凹面は全面に縦ナデ調整を施しており、広端側に横ナデ調整を加えるものもある。四側縁には面取りが施されている。両側縁の面取りはやや幅広で、ナデ調整を加えて丸みを帯びた形状に仕上げているものもある。側

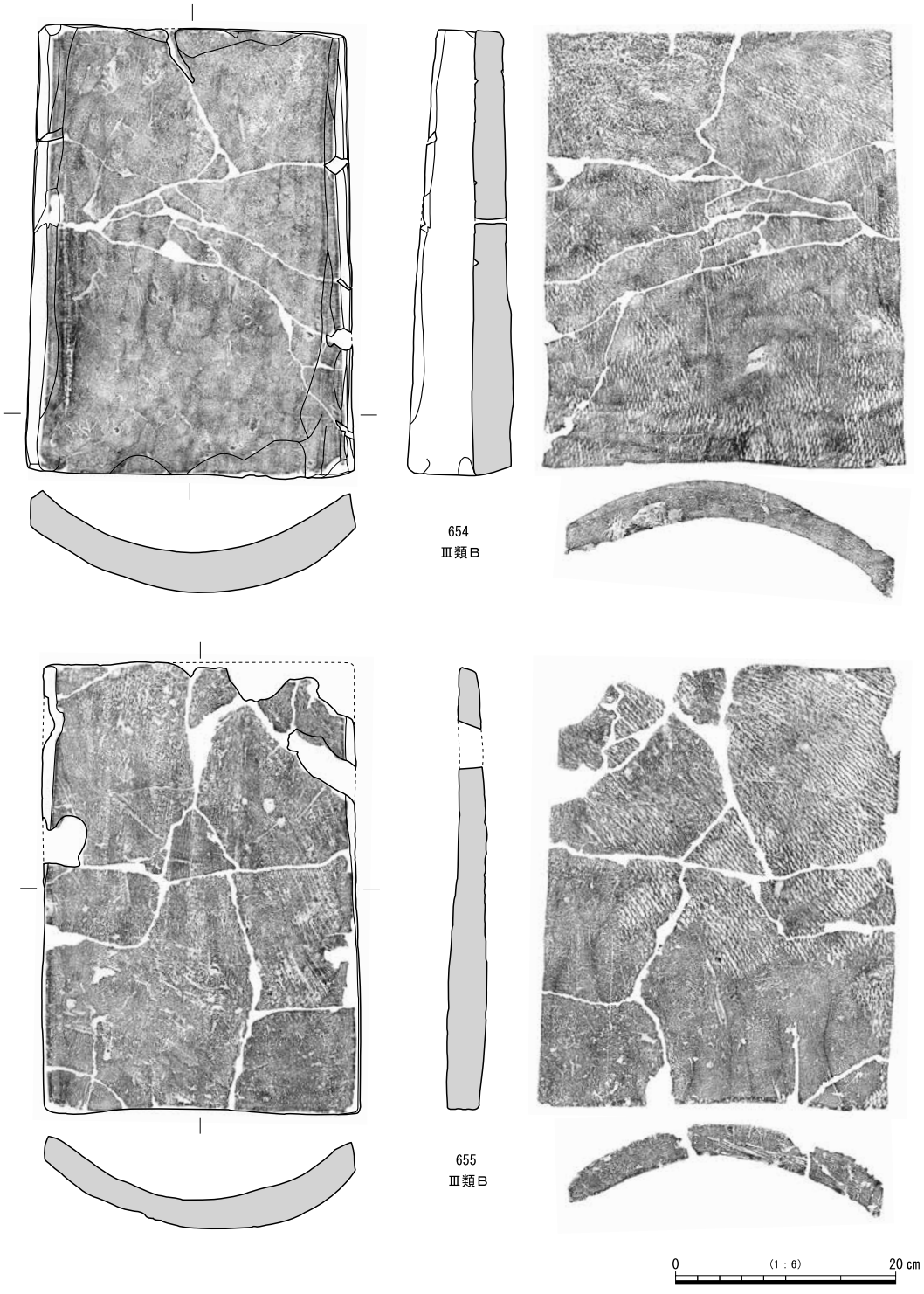


図 204　２号窯窯体内出土平瓦（12）

面は凸面側を深く削っている。Ⅲ類Ａに比べて厚手のものが多い。

654 には、側縁に分割突帯とみられる溝状の窪みが残る。654・655 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 654 がＳ型、655 はＺ型である。652 は表面全体に焼土が付着しており、構築材として使用されていた可能性が高い。655 はやや特殊なものであり、凸面に縦方向の削り調整が施されている。他のものとは異なる調整であるが、それ以外の調整や法量は同じであり、他に同様のものが確認できないため、Ⅲ類Ｂにおける特殊なものとして扱うことにする。

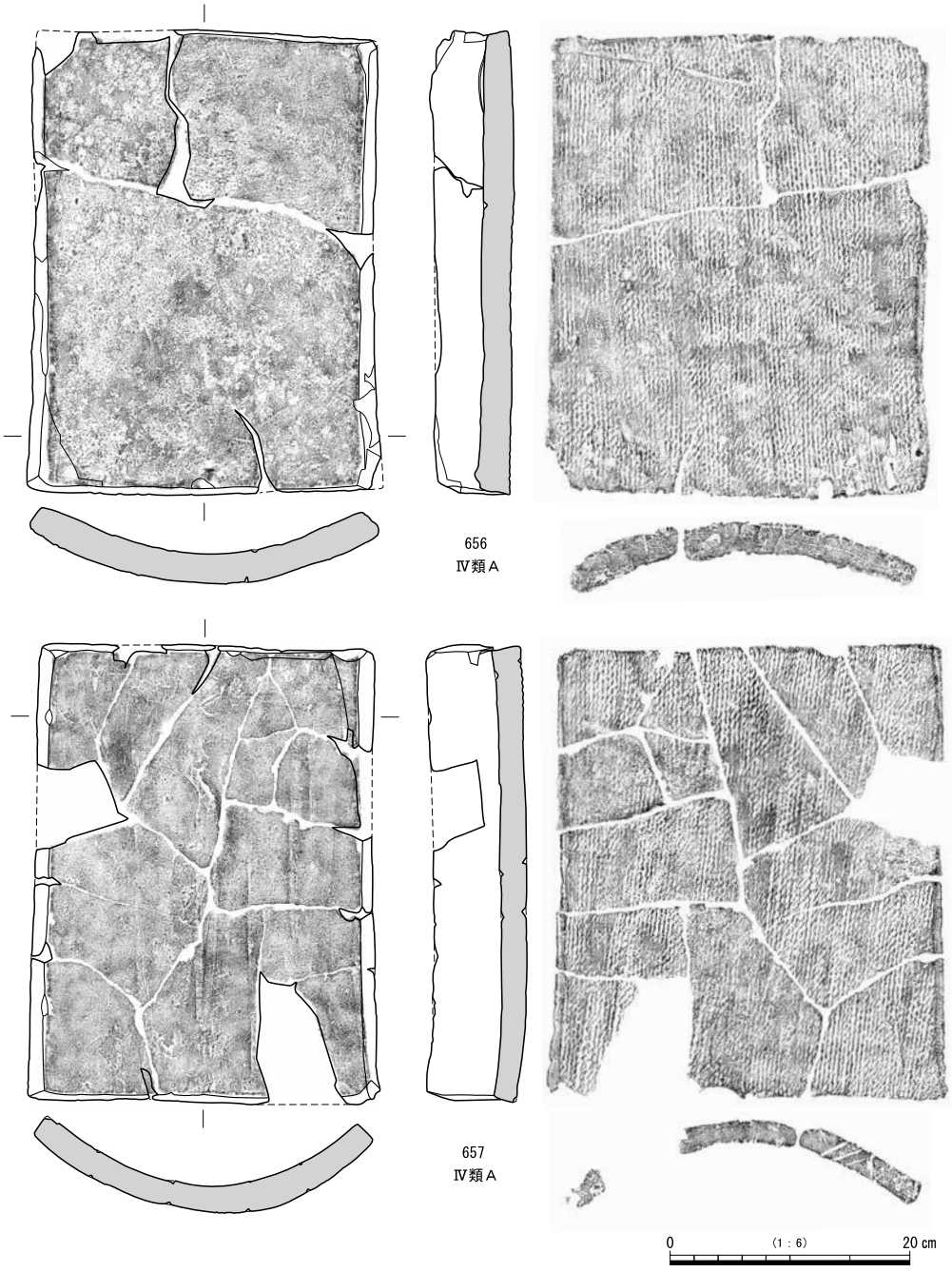


図 205　２号窯窯体内出土平瓦（13）

Ⅳ類Ａ　656 ～ 666 はⅣ類Ａの平瓦である。法量は、全長 37 ～ 39 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 26 ～ 27 ㎝である。凸面は両側縁に面取りを施すほかは無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は、調整が粗くやや広い範囲に布目が残るものもあるが、基本的には全面削り調整されている。左右両側面は、分割截面に沿って全体を削る。側面の調整には回転台が使用されており、凹面を上にした状態で四側面を時計回りの方向に調整している。

659 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型である。656・657 の広端面には、藁とみられる植物の痕跡が残る。痕跡は調整後に付いており、乾燥時に付着したものとみられる。664・665 には表面に焼土が付着している。657・660・662 は、断面まで灰被りしている破片が接合しており、破片によって焼成が大きく異なっている。これらは窯の構築材として使用されていたものと推測される。

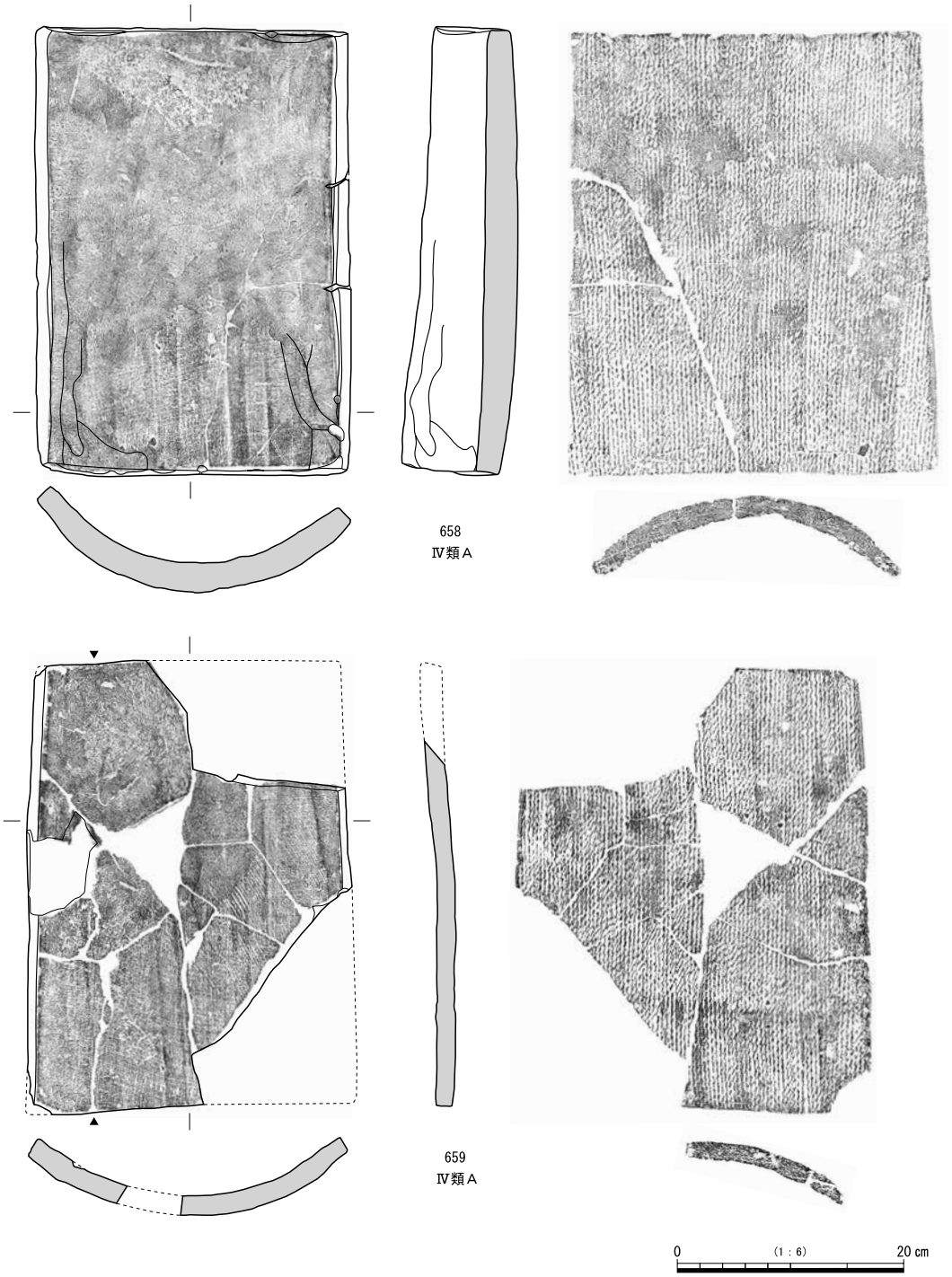


図 206　２号窯窯体内出土平瓦（14）

667 ～ 669 はⅣ類Ａの隅平瓦である。調整は平瓦と同様であるが、669 には斜辺に沿って削り調整が施されている。いずれも広端部の右側が斜めに切り落とされている。截断面は狭端側から広端側に向かって調整されており、斜辺を含めて時計回りに側面を調整していることがわかる。668 の斜辺には、截断面のズレによる段差が確認できる。凸面側が高くなっており、凹面側から截断されていたことがわかる。667 と 669 には全面に焼土が付着しており、667 には窯壁の付着も確認できる。668 は破片によって調整が大きく異なっている。これらは窯体内からの出土ではあるが、最終操業時に焼成されたものではなく、窯の構築材として使用されていたものとみてよい。

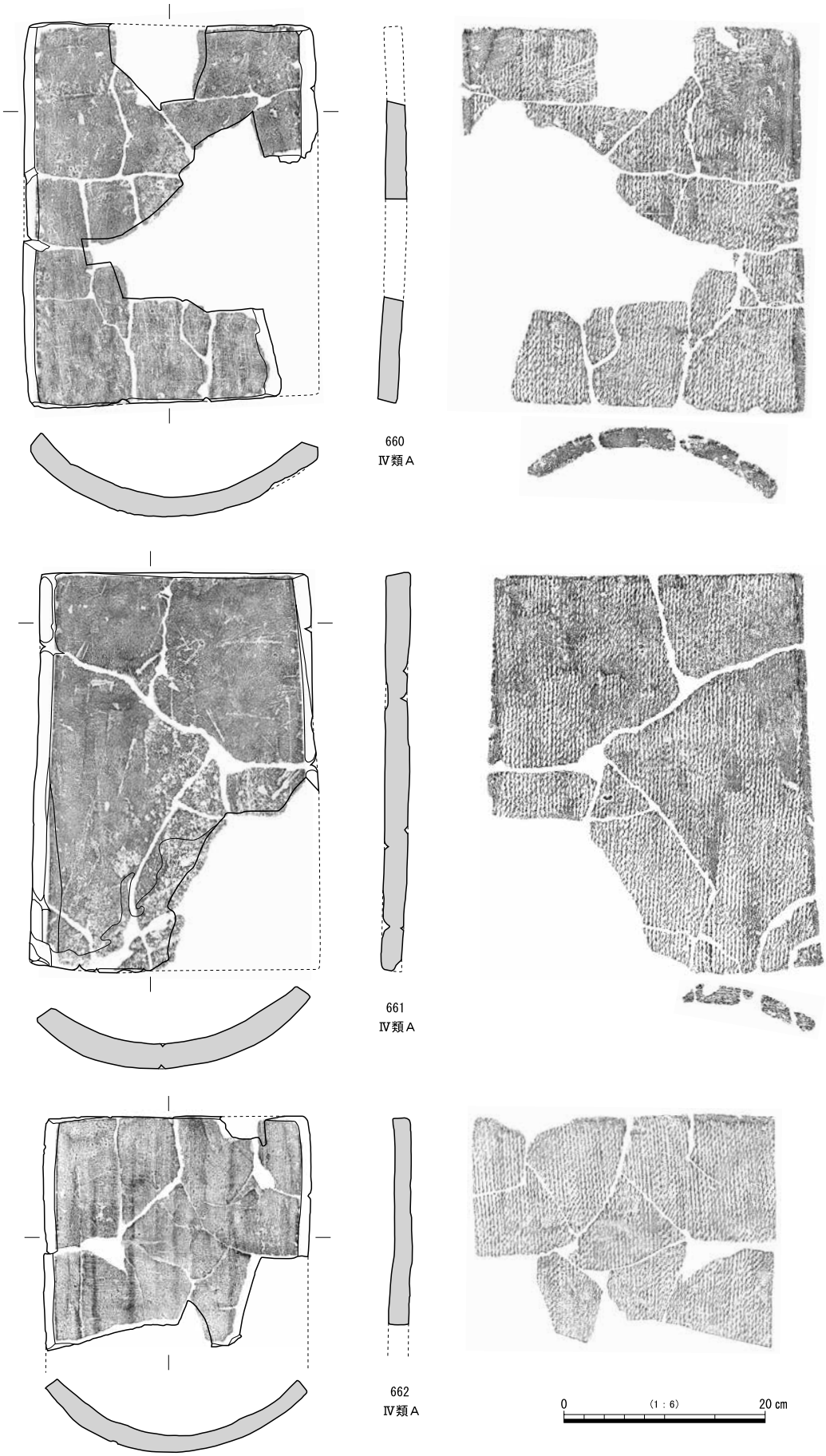


図 207　２号窯窯体内出土平瓦（15）

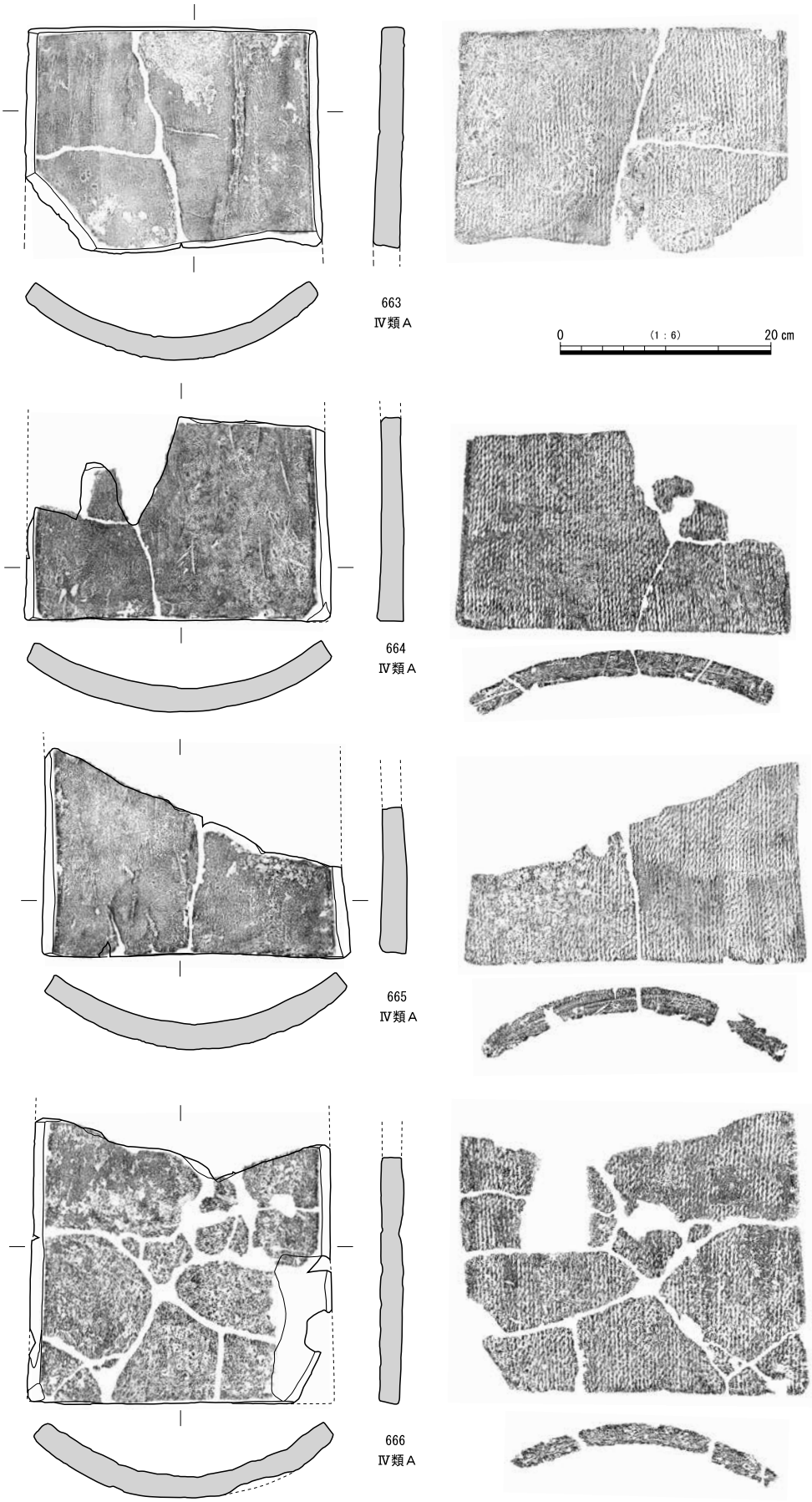


図 208　２号窯窯体内出土平瓦（16）

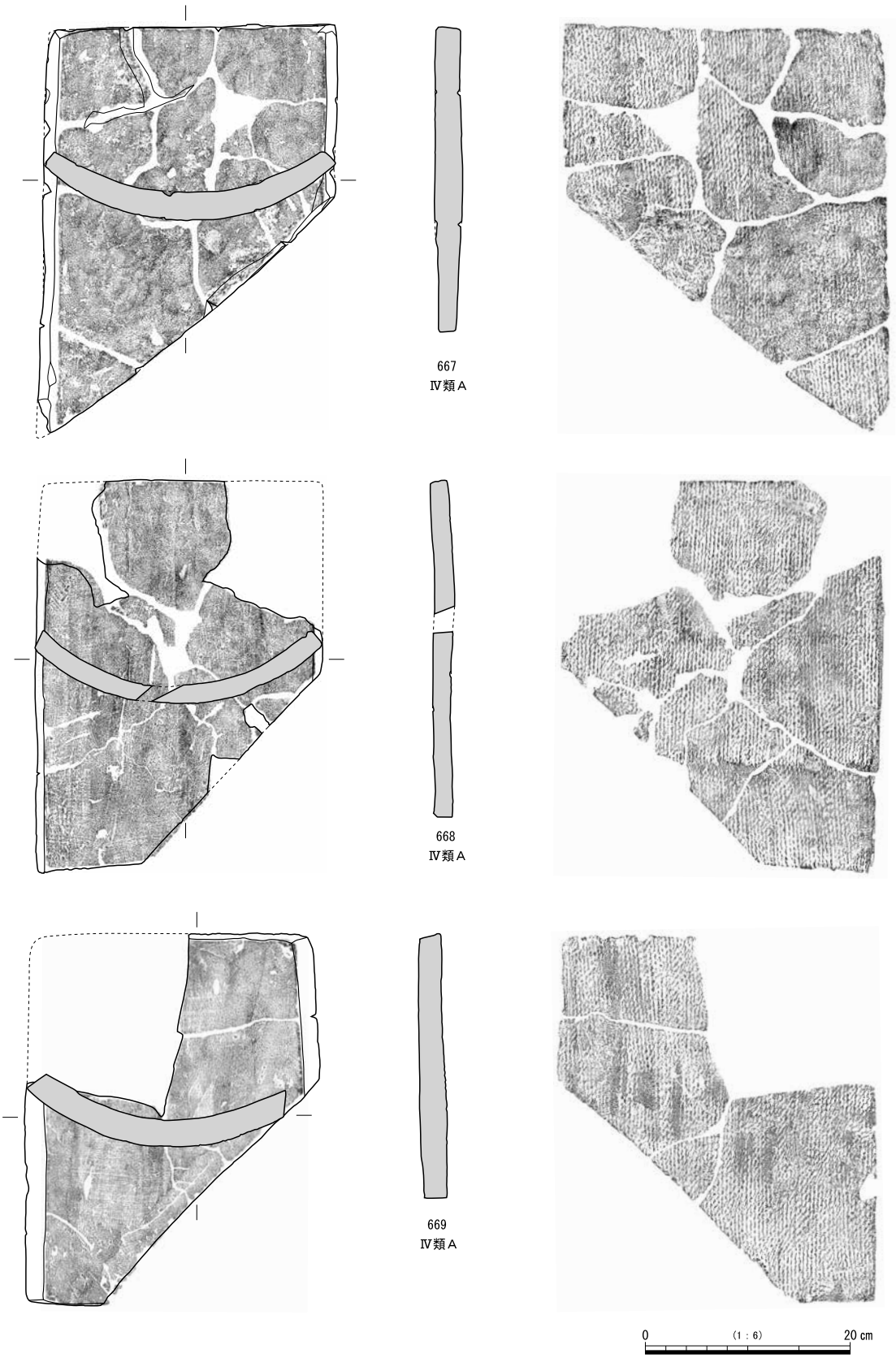


図 209　２号窯窯体内出土平瓦（17）

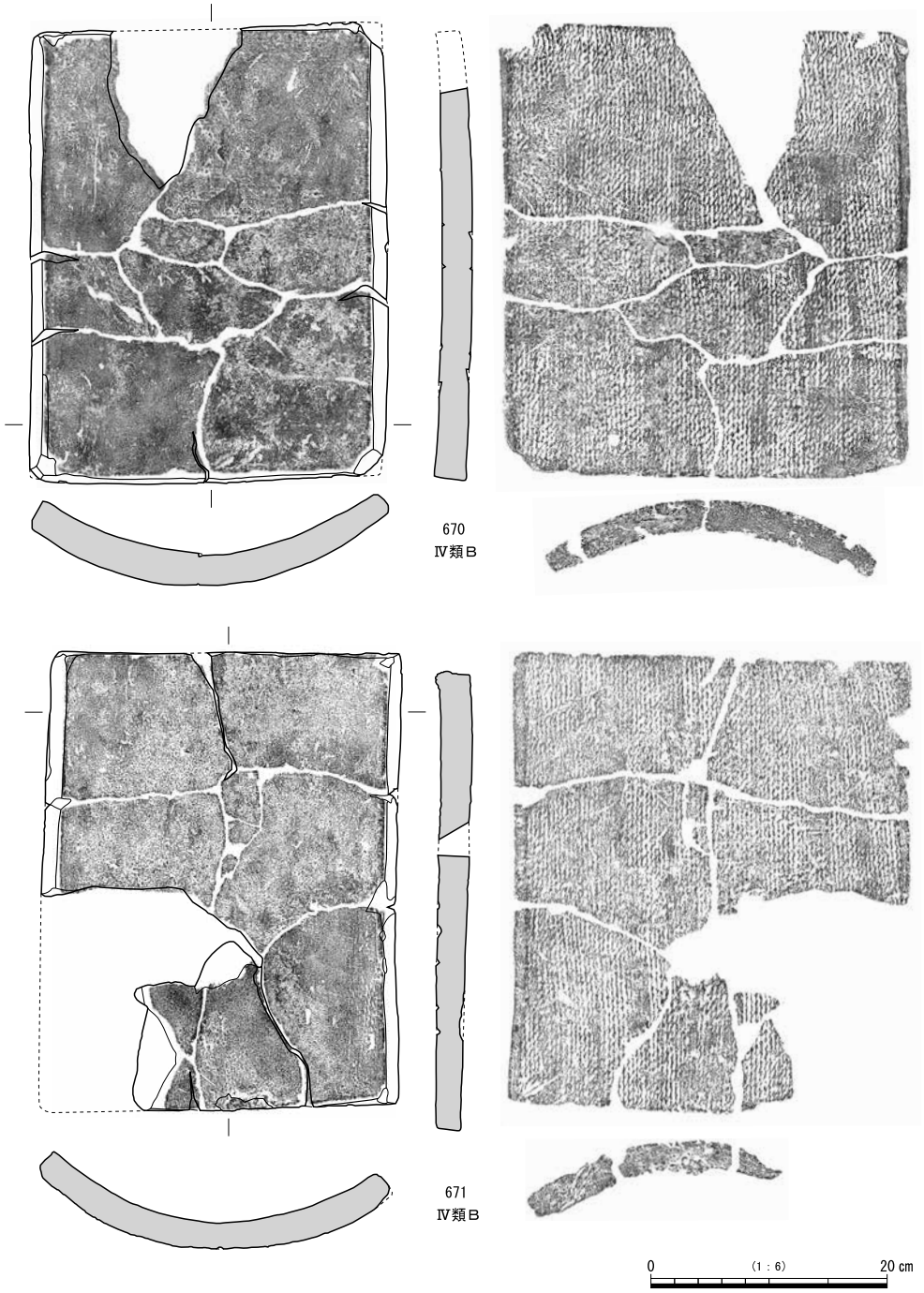


図 210　２号窯窯体内出土平瓦（18）

Ⅳ類Ｂ　670 ～ 678 はⅣ類Ｂの平瓦である。法量は、全長 39 ～ 41 ㎝・狭端幅 27 ～ 28 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝であり、Ⅳ類Ａよりも一回り大きい。調整はⅣ類Ａと同様であり、凸面は側縁が面取りされるほか無調整で縦方向の縄叩き痕が明瞭に残る。凹面には、全面に縦または斜め方向の削り調整が施されている。調整が粗く部分的に布目が残るものや、一部にナデ調整を加えるものもある。側面は分割截面に平行して全面を削る。Ⅳ類Ａと同じく、凹面を上にして四側面を時計回りの方向に調整している。

672 の凹面には、わずかに布綴じ痕とみられる痕跡が残る。677 の側面には、凸面側に分割破面が確認できる。破面が確認できるものは 677 のみであり、677 には凸面の面取りが施されていない。凸面の側縁に施されている面取りは、破面を削り落とす目的も兼ねていたのかもしれない。673 以外のものに

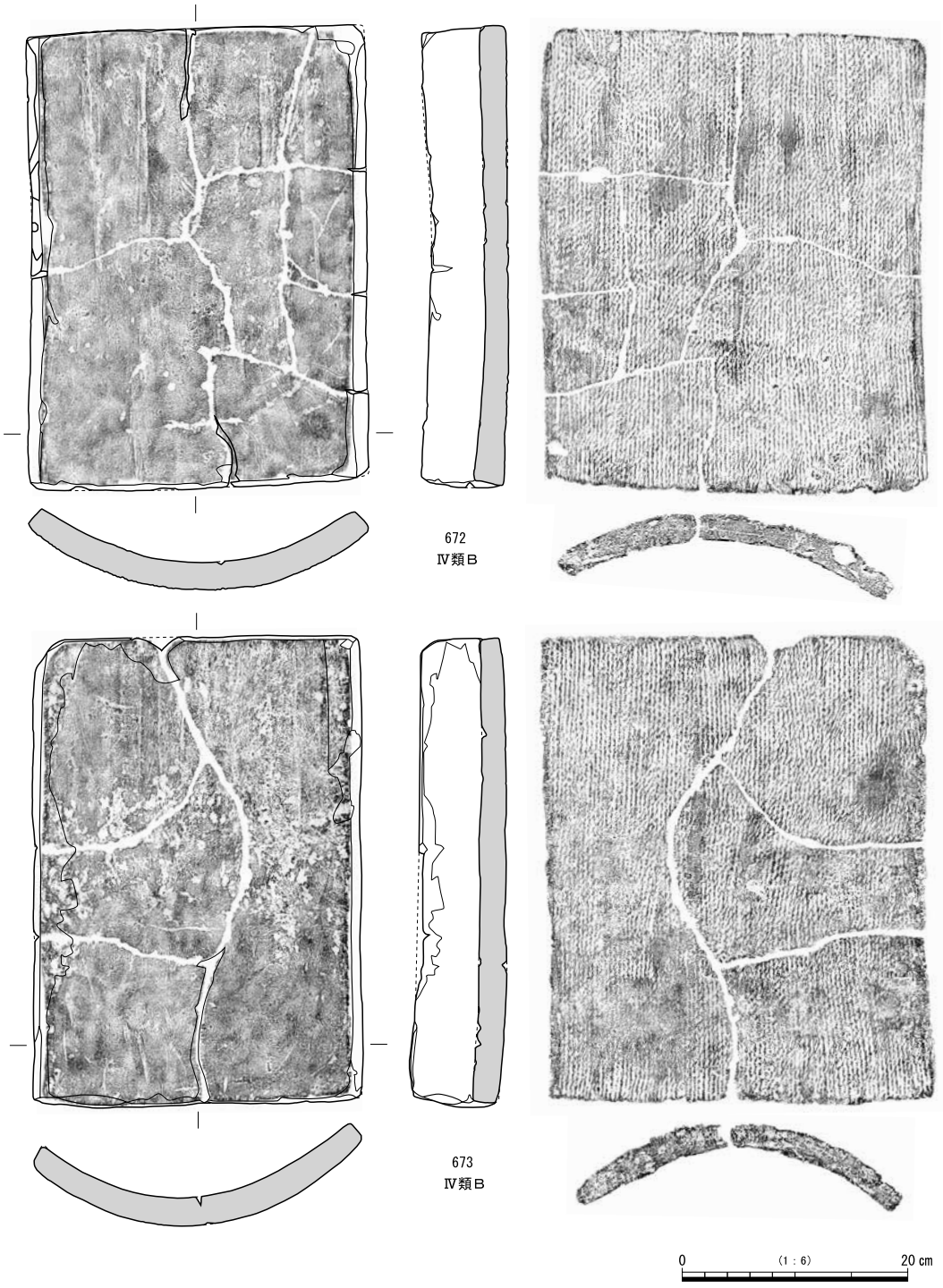


図 211　２号窯窯体内出土平瓦（19）

は表面に焼土や窯壁の付着が確認できる。これらは構築材として再利用されていたものとみてよい。

679 は全長が 31 ㎝と短いやや特殊な隅平瓦である。長さは短いが、幅が 28 ㎝あることから、Ⅳ類Ｂに含めておくことにする。右側の広端部を斜めに切り落としている。断面まで灰被りしている破片が接合しており、破片によって焼成が大きく異なっている。窯の構築材として使用されていたものと推測される。斜辺は狭端側から広端側に向かって調整している。灰被りや表面の風化により調整の方向が確認できない部分も多いが、右側面は広端側に向かって調整されていることから、Ⅳ類Ａの隅平瓦と同様に、凹面を上にして斜辺も含めて時計回りに調整されている可能性が高い。

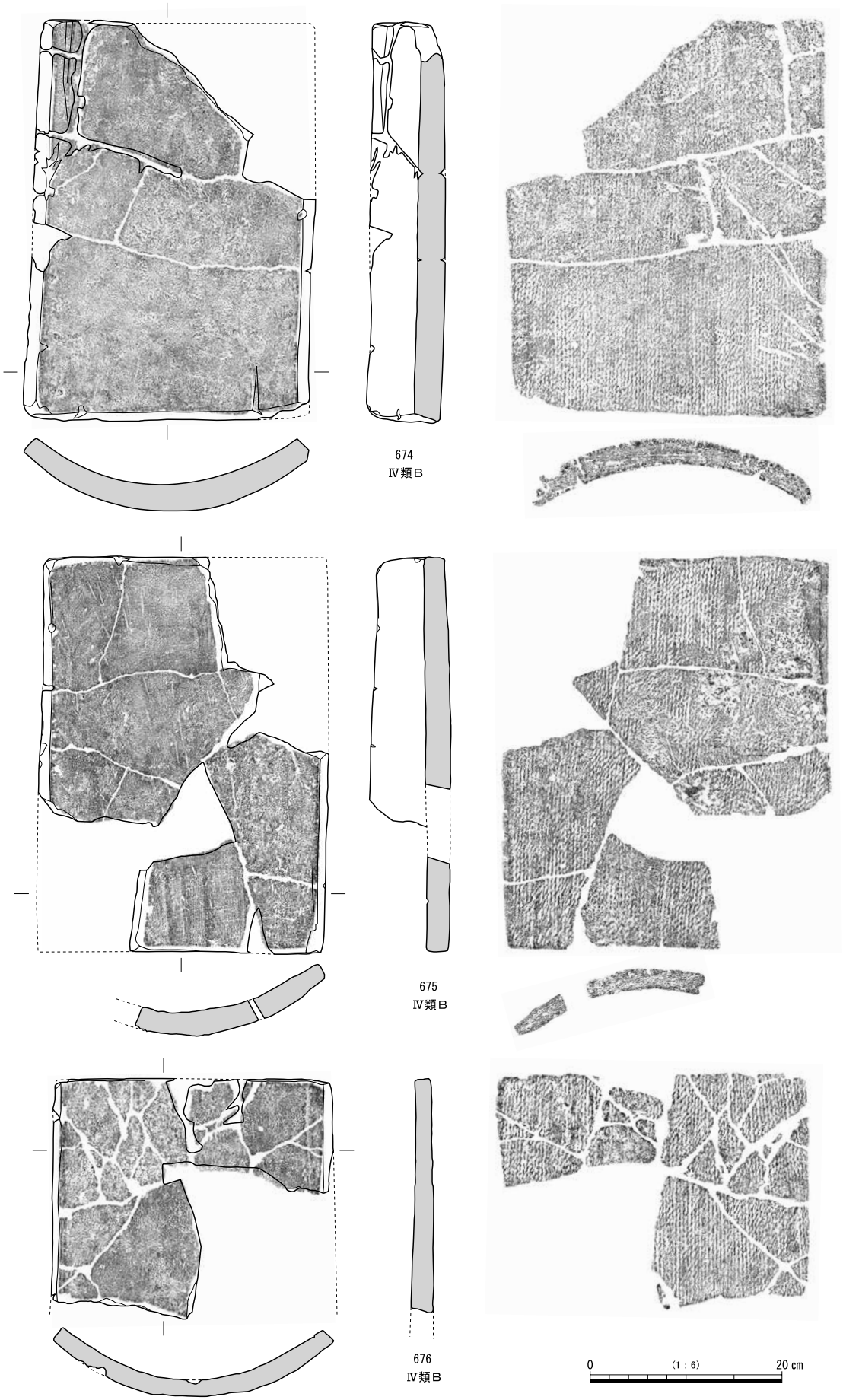


図 212　２号窯窯体内出土平瓦（20）

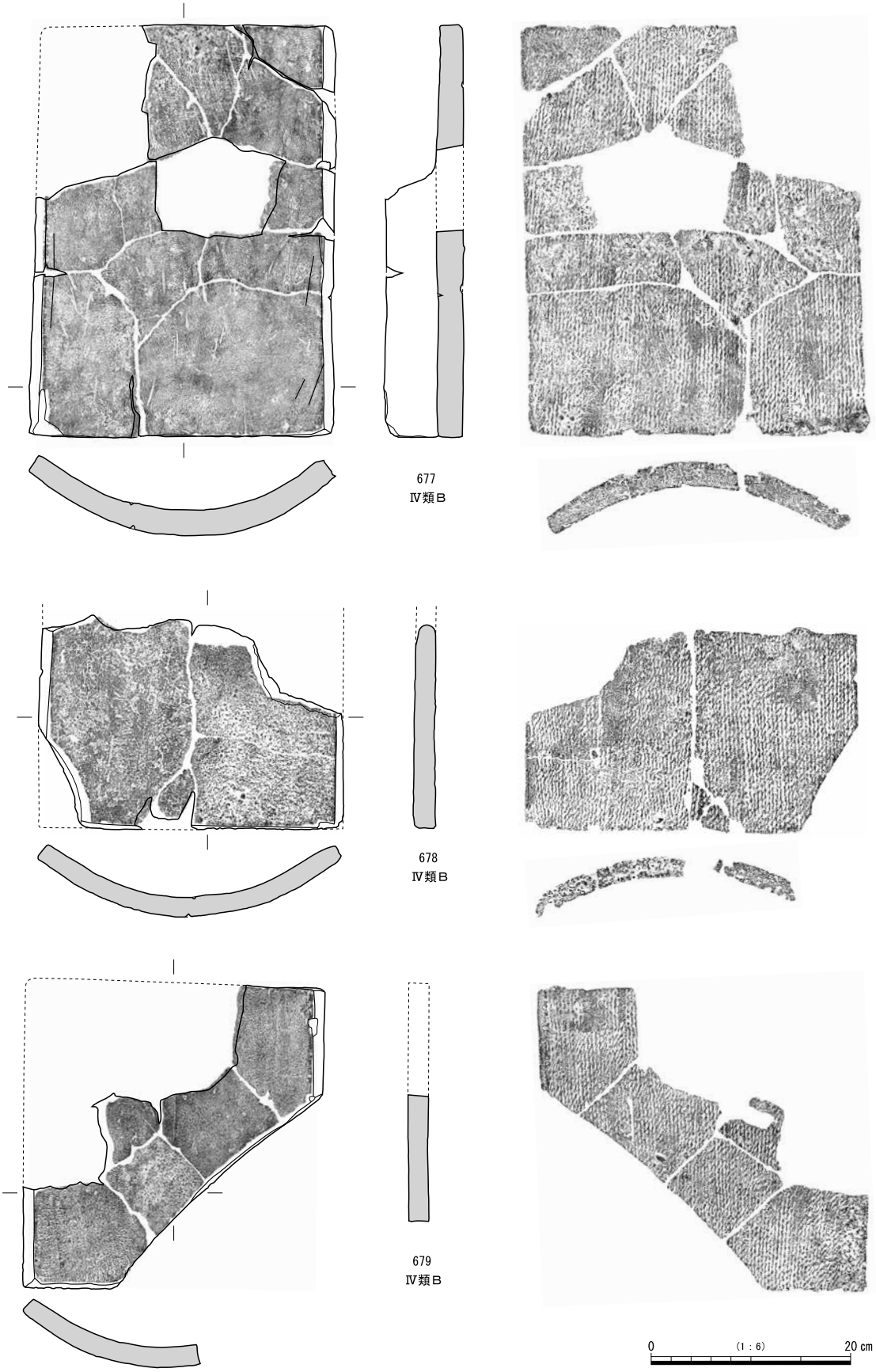


図 213　２号窯窯体内出土平瓦（21）

２号窯灰原（図 214 ～ 228、図版 26・68・71・74）

２号窯の灰原からは、総重量 427.0 kg出土している。風化が著しく接合できない破片も多いが、狭端部または広端部が残存するものを中心に 49 点図示する。

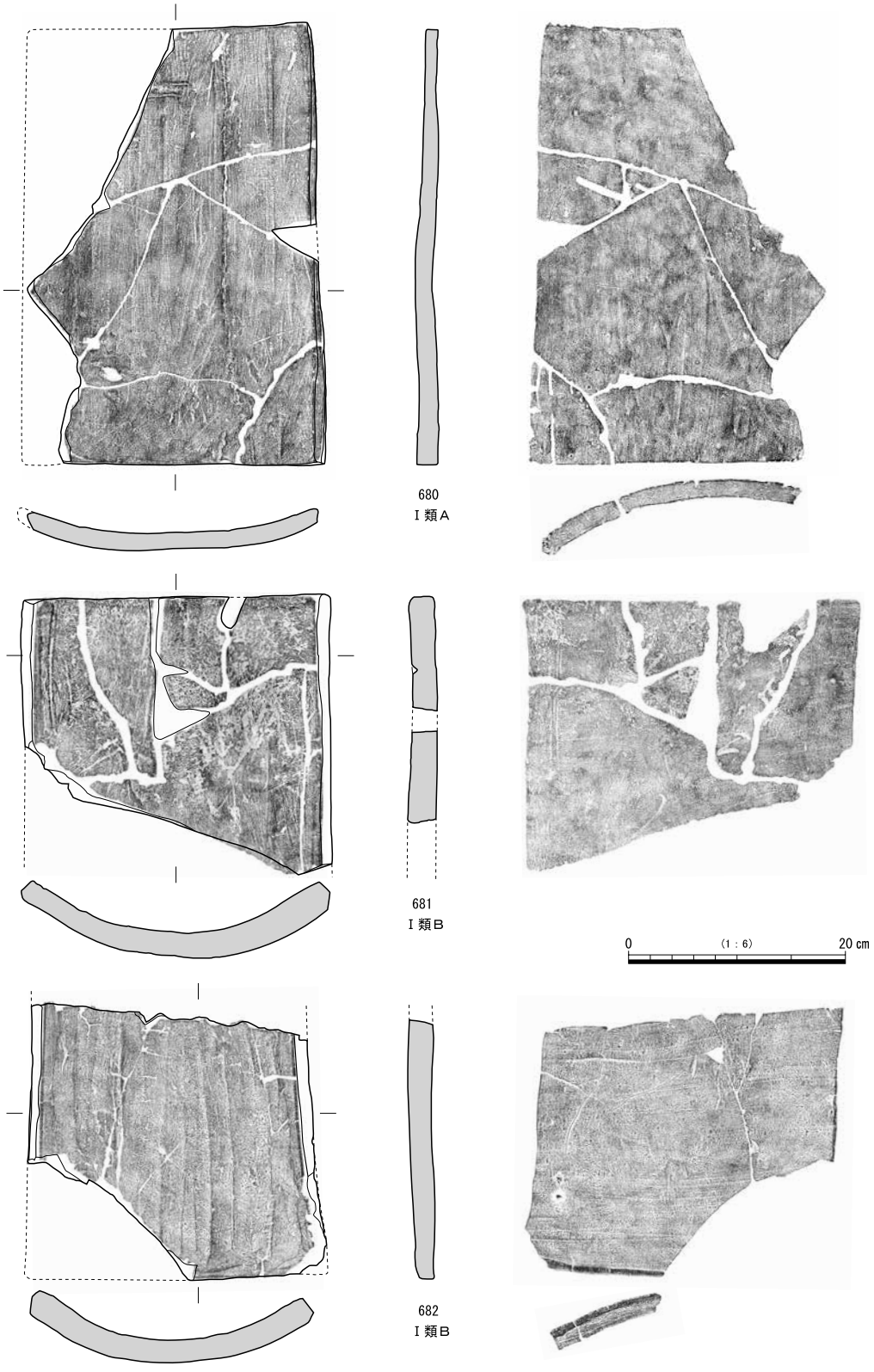


図 214　２号窯灰原出土平瓦（１）

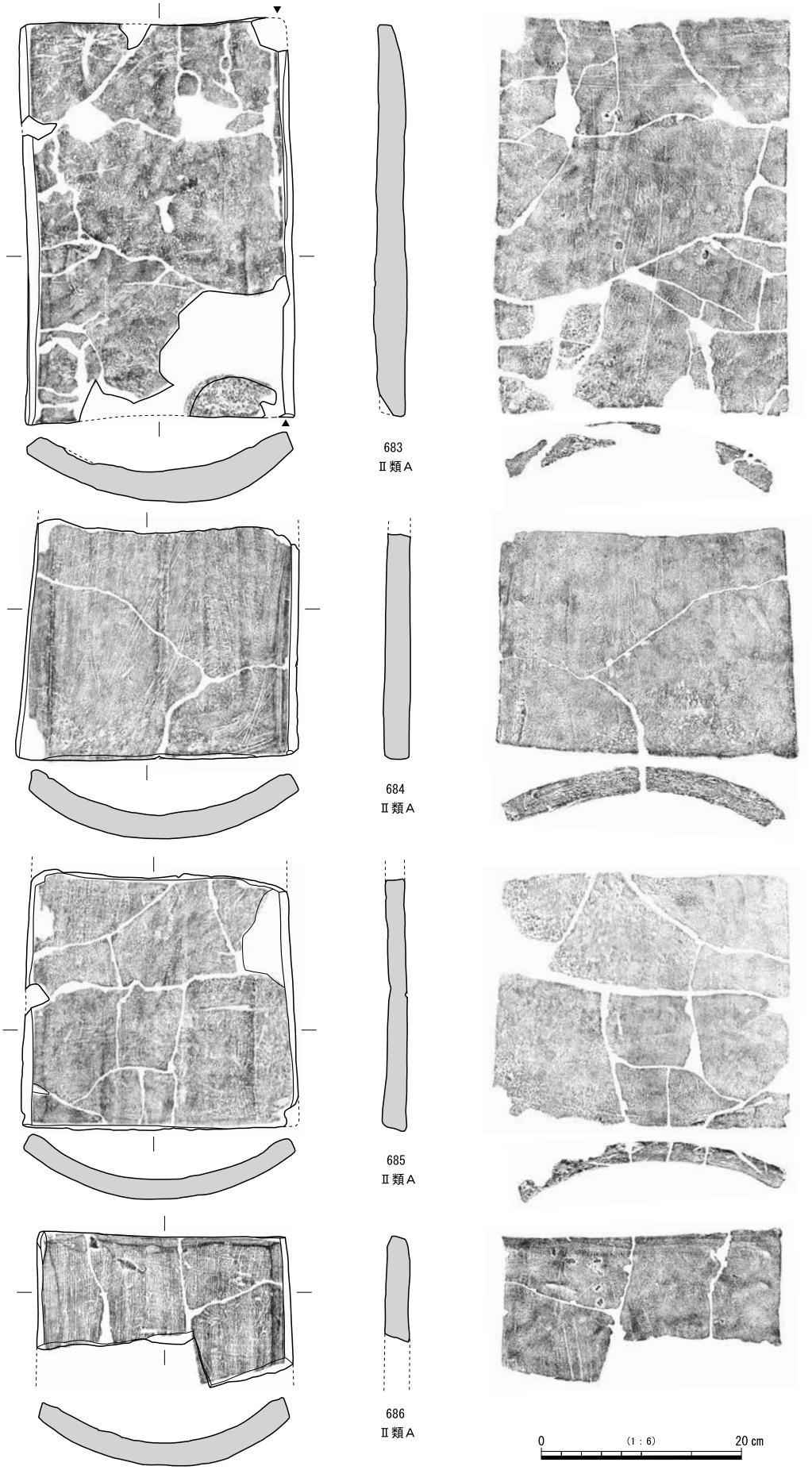


図 215　２号窯灰原出土平瓦（２）

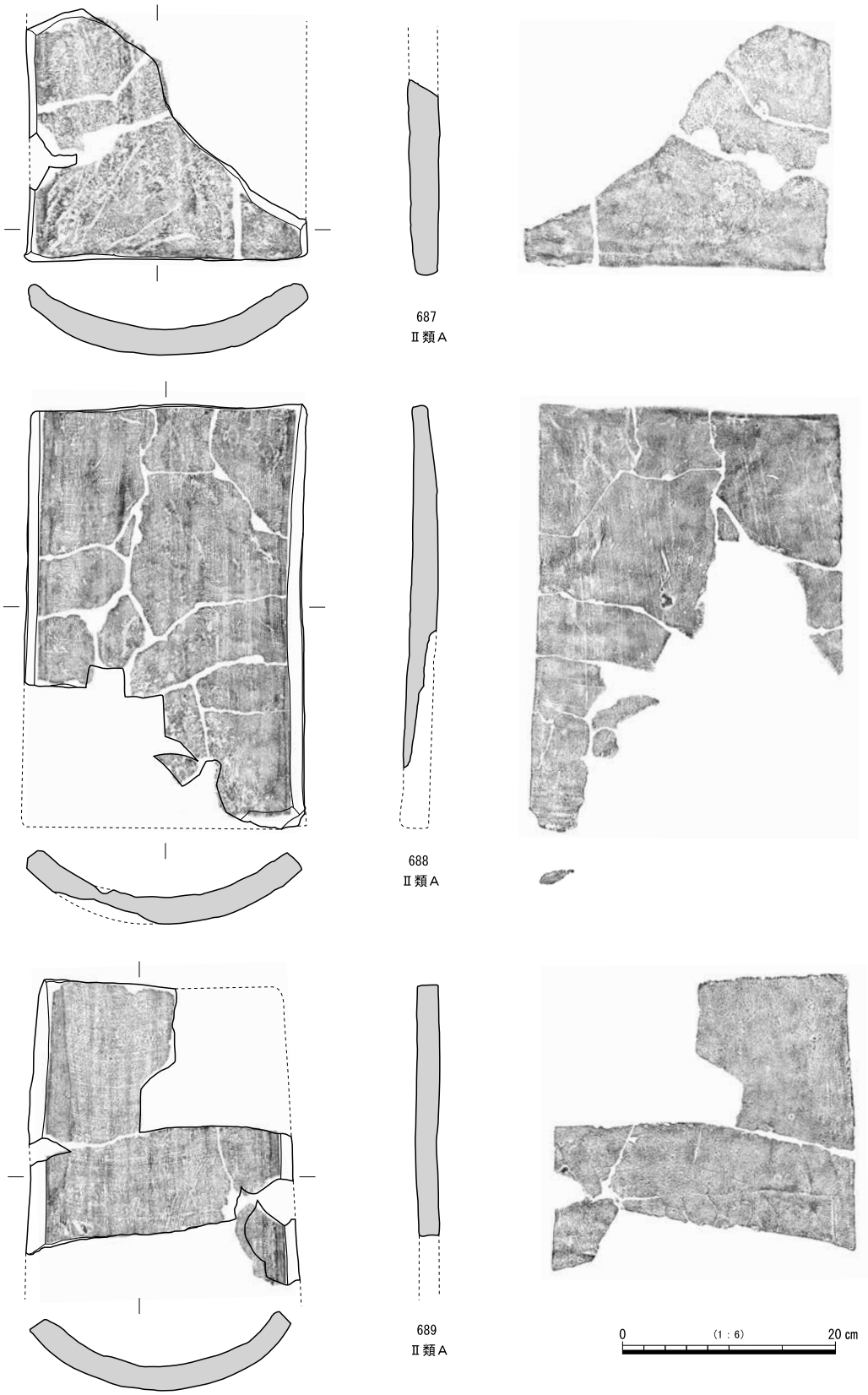


図216　２号窯灰原出土平瓦（３）

Ⅰ類A　680はⅠ類Aである。凸面は全面に横ナデ調整が施されており、広端付近には縦ナデ調整が加えられている。凹面は全面に縦ナデ調整を施している。わずかに布綴じ痕の痕跡が確認できる。両側縁を面取りし、側面は凸面側を深く削る。薄手のもので、扁平に近い形態に焼き歪んでいる。

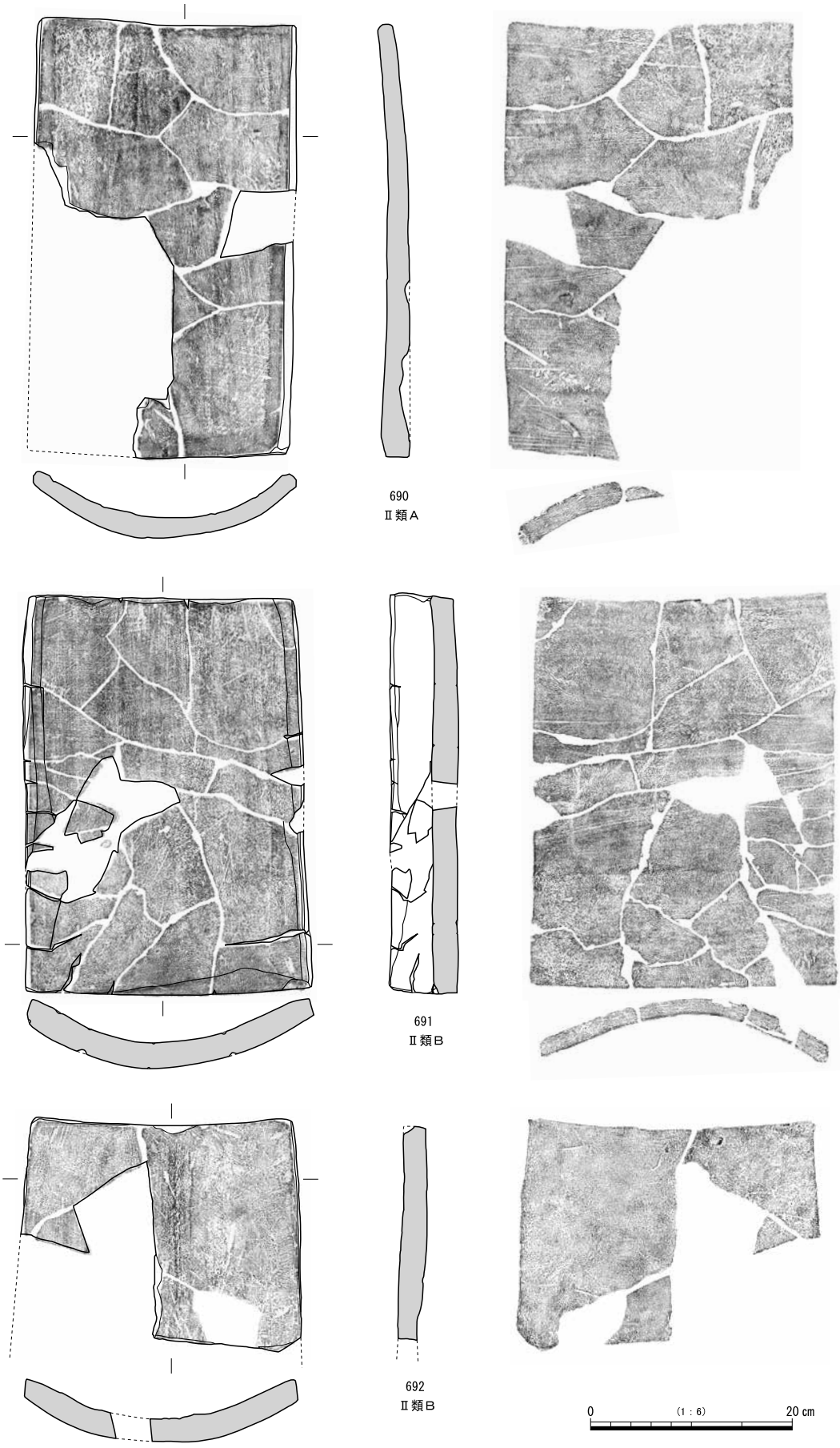


図 217　２号窯灰原出土平瓦（４）

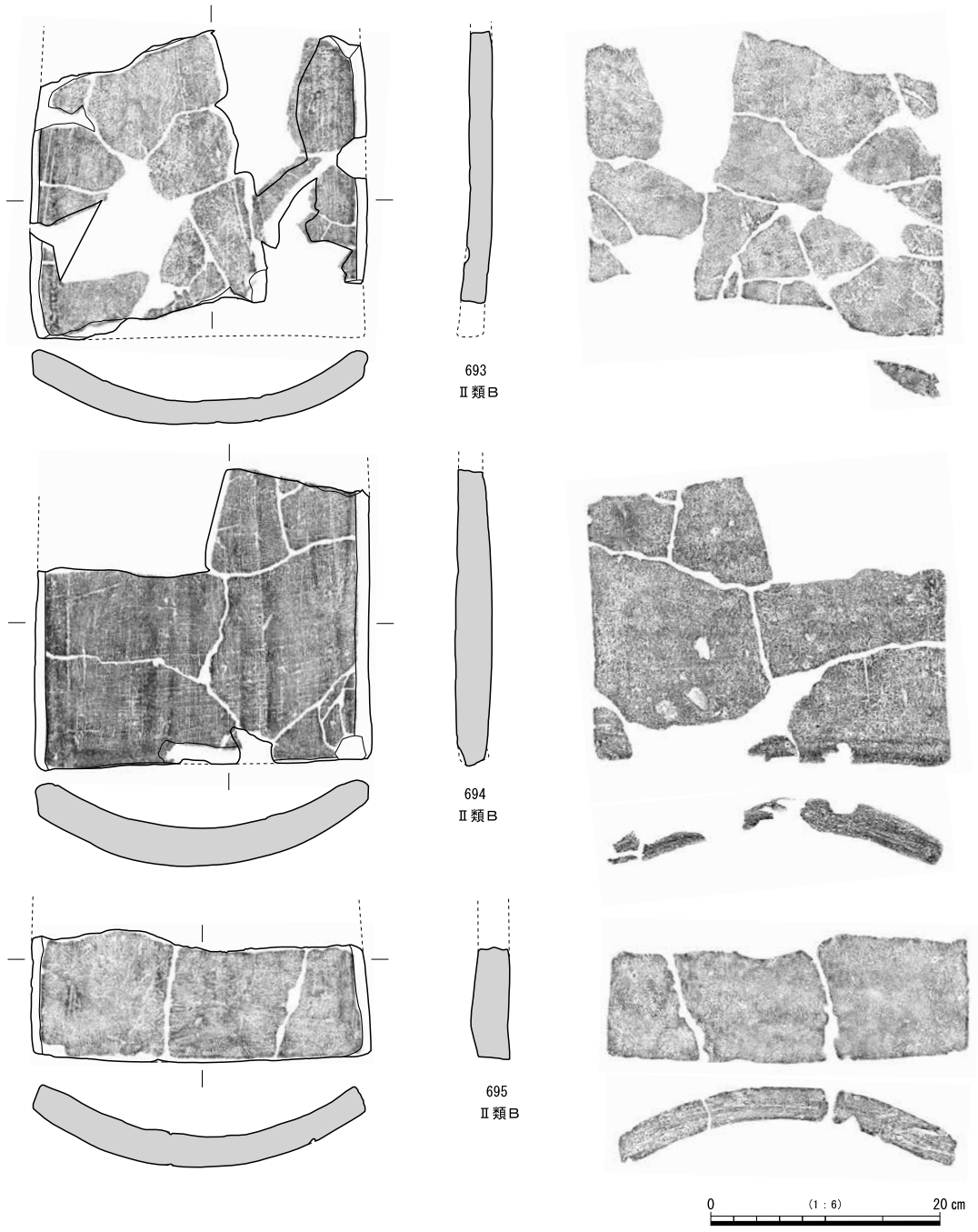


図 218　２号窯灰原出土平瓦（５）

Ⅰ類Ｂ　681・682 はⅠ類Ｂである。凸面は横ナデ調整で、部分的に縦ナデ調整が施されている。凹面は四側縁に面取り調整を施している。681 は全面を縦ナデ調整しているが、682 は縦方向に削り調整してナデ調整を加えている。682 は広端幅が 27 ㎝程しかない小型のもので、凹面に削り調整を施す点など窯体内出土の 630 と近似している。側面はいずれも広端側に深く削っている。

Ⅱ類Ａ　683 ～ 690 はⅡ類Ａである。凸面は全面ナデ調整で、縦ナデ調整が主体であるが、狭端付近には横ナデ調整が施され、側縁を丸く仕上げるものが多い。凹面は、広端側などに部分的なナデ調整を施しているが、無調整で布目が残る部分が多い。四側縁にはやや幅広の面取りが施し、ナデ調整が加えているものもある。側面は凸面側に深く削っている。

683 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型である。684 と 692 には布綴じ痕がわずかに残る。

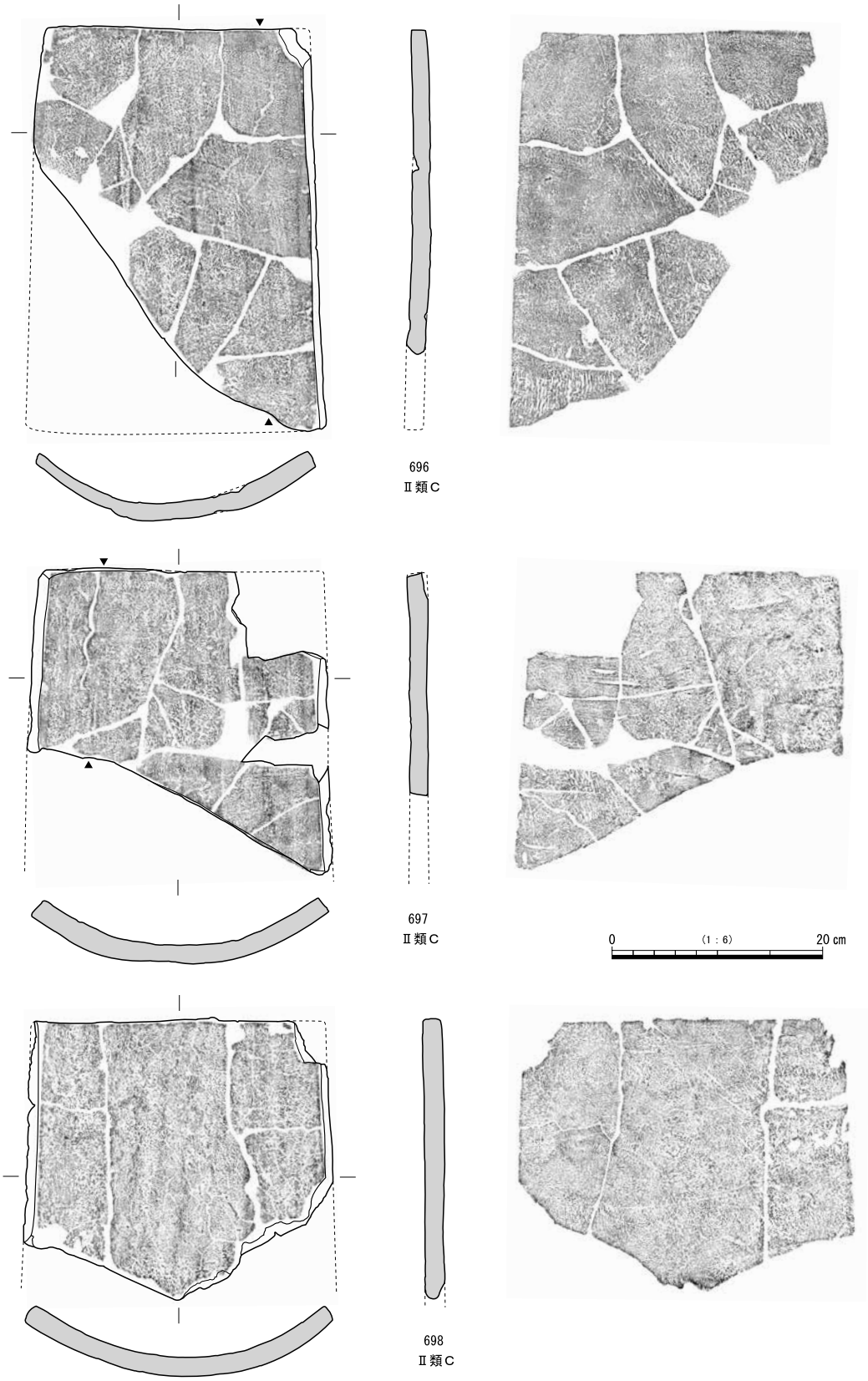


図 219　２号窯灰原出土平瓦（６）

684 と 689 の側縁近くには、分割突帯とみられる溝状の窪みが確認できる。690 は全長が 43 ㎝と長いが、調整が同じであるためⅡ類Ａとして扱うことにする。

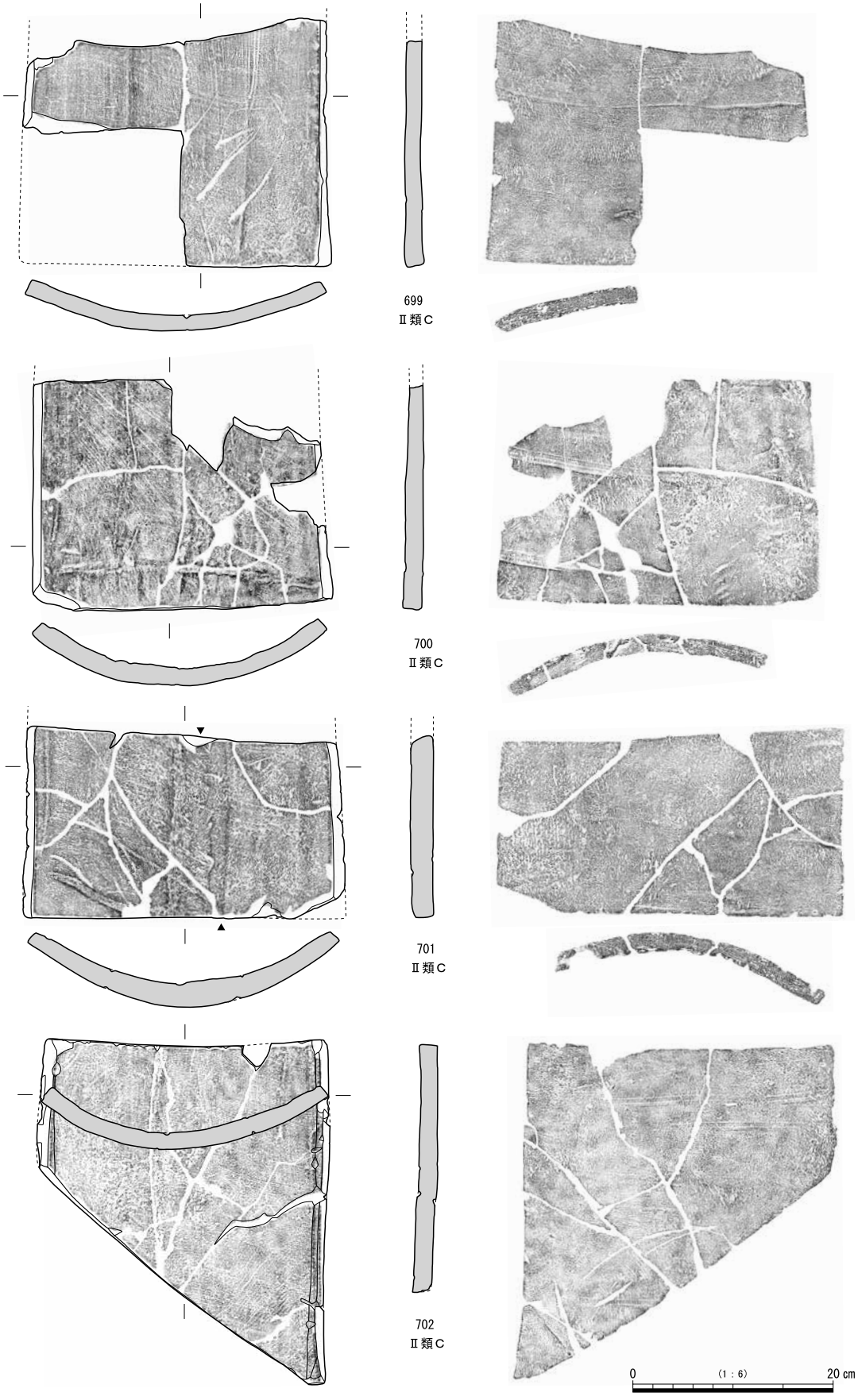


図 220　２号窯灰原出土平瓦（７）

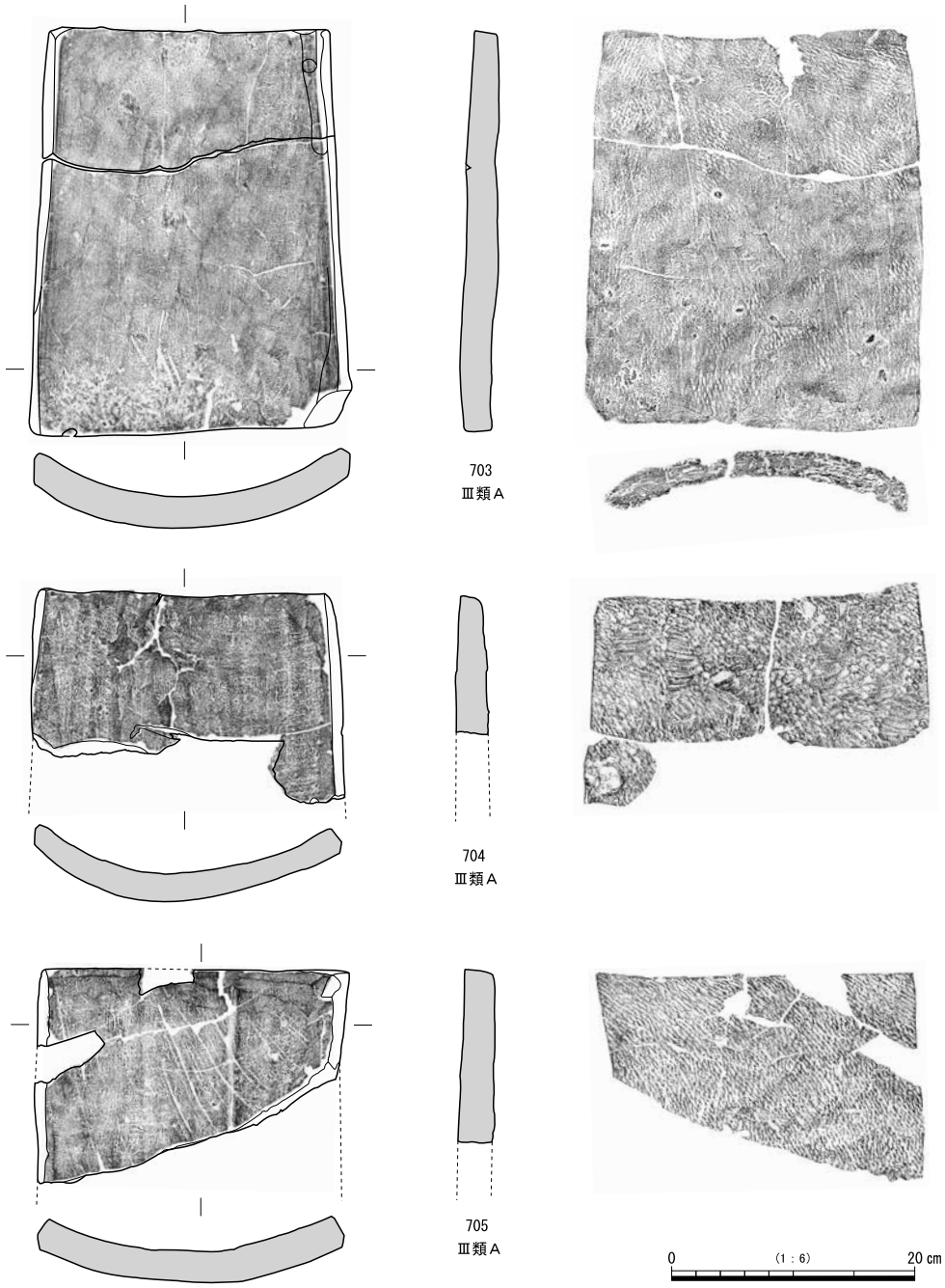


図 221　２号窯灰原出土平瓦（８）

Ⅱ類Ｂ　691 ～ 695 はⅡ類Ｂである。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整を施した後に部分的に縦ナデ調整が加えられる。狭端側の側縁を横ナデし、丸みを帯びた形状に仕上げているものが多い。凹面は広端側にナデ調整を施すものもあるが、大半は無調整で布目が残る。四側縁はやや幅広に面取りし、ナデ調整を加えて丸く仕上げるものが多い。側面は凸面側に深く削る。やや厚手のつくりのものが多い。

692 には布綴じ痕が残る。694 の側縁近くには、分割突帯とみられる溝状の窪みが確認できる。695 の広端面には截断面のズレによる段差が残っており、凹面側から截断されていることがわかる。

Ⅱ類Ｃ　696 ～ 702 はⅡ類Ｃであり、696 ～ 701 は平瓦、702 は隅平瓦である。法量は、全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 30 ㎝と大型である。凸面は全面横ナデ調整で、ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩き痕が残る。凹面は部分的にナデ調整を施しているものもあるが、基本的には無調整

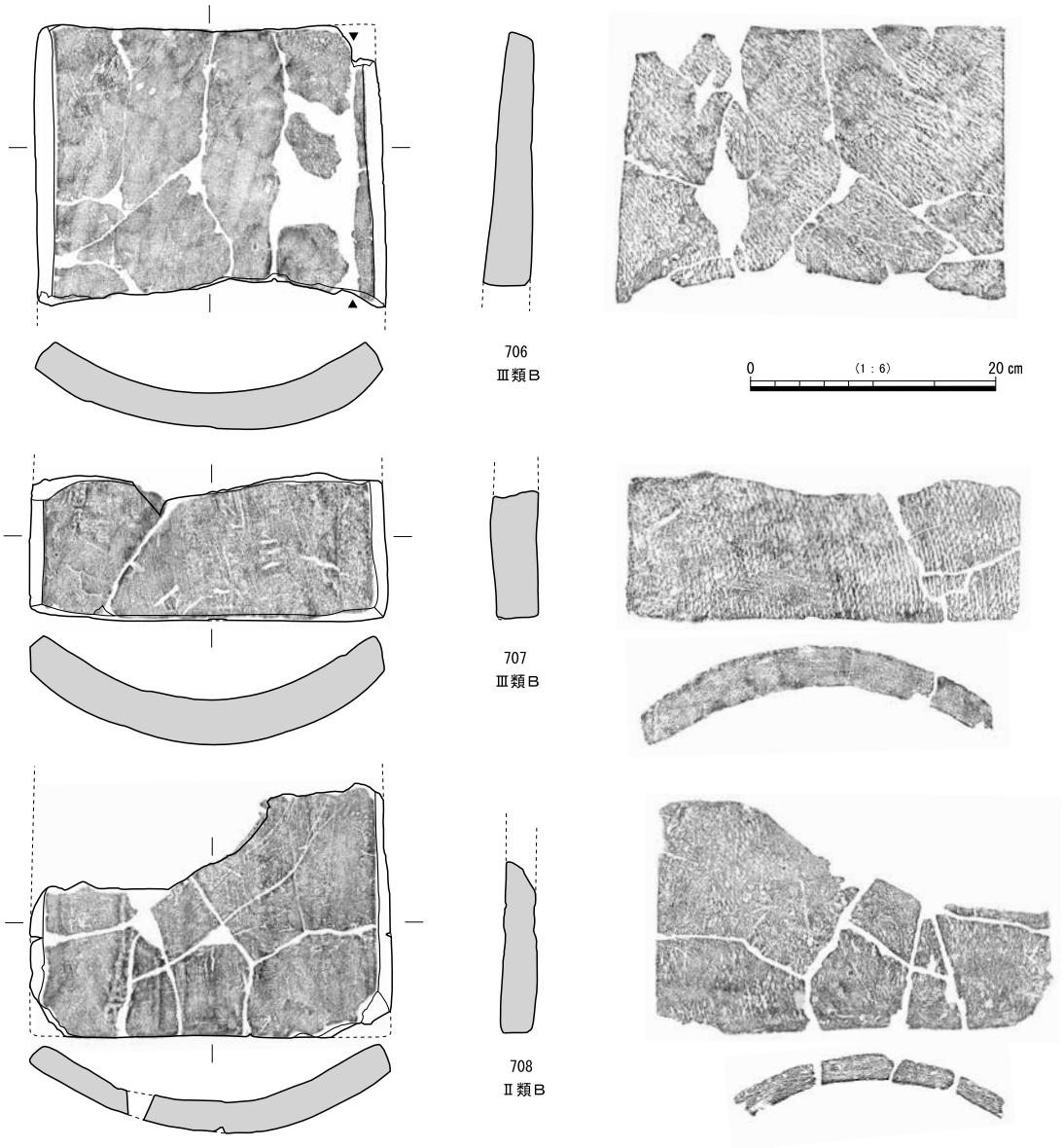


図 222　２号窯灰原出土平瓦（９）

で全体に布目が残る。両側縁にはやや幅広の面取りが施されている。側面は分割截面に沿って全体を削る。いずれも薄手のつくりである。

696・697・701 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 696 と 697 がＳ型、701 がＺ型である。700・701・702 の側縁には、分割突帯とみられる溝状の窪みが残る。701 と 702 には布綴じ痕が確認でき、広端付近は布足らずの状態になっている。

Ⅲ類Ａ　703 ～ 705 はⅢ類Ａである。凸面は一部に軽いナデ調整が施される程度であり、斜め方向の縄叩き痕が明瞭に残る。凹面は全面縦ナデ調整で、側縁にはやや幅広の面取りが施される。側面は凸面側に深く削っている。703 は全長が 32 ㎝しかない小型のものであるが、Ⅲ類Ａと同じ調整であるため、法量は異なるがⅢ類Ａの特殊なものとして扱うことにする。

Ⅲ類Ｂ　706 ～ 712 はⅢ類Ｂであり、706 ～ 710 は平瓦、711･712 は隅平瓦である。狭端幅 25 ～ 26 ㎝･広端幅 27 ～ 28 ㎝とⅢ類Ａよりも幅が一回り大きい。法量は異なるが、調整はⅢ類Ａと同じである。

706 と 709 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はともにＳ型である。708 の凹面には布綴じ痕が残る。707 は破片によって焼成が大きく異なり、断面に灰被りしている破片も接合していることから、構

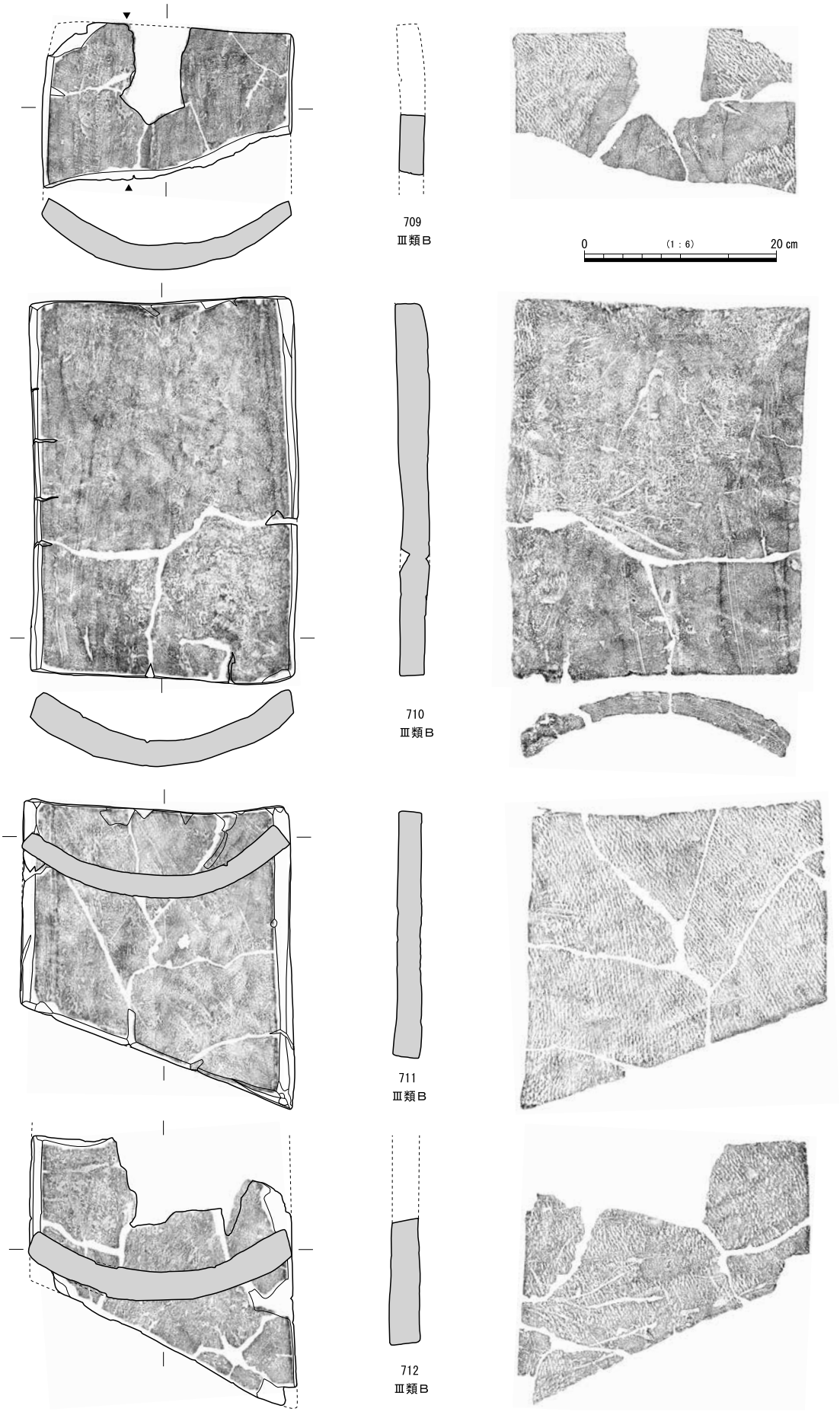


図 223　２号窯灰原出土平瓦（10）

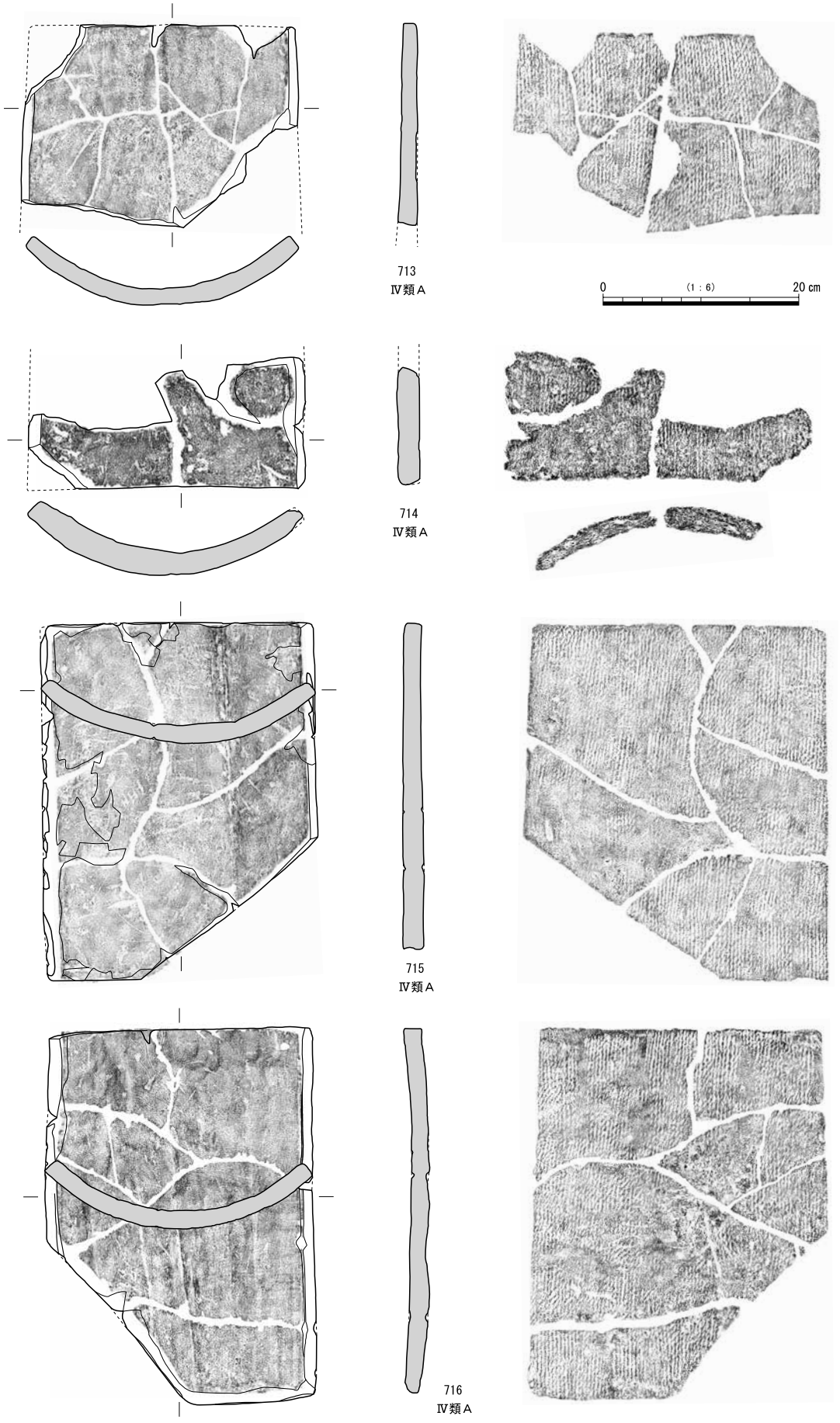


図 224　２号窯灰原出土平瓦（11）

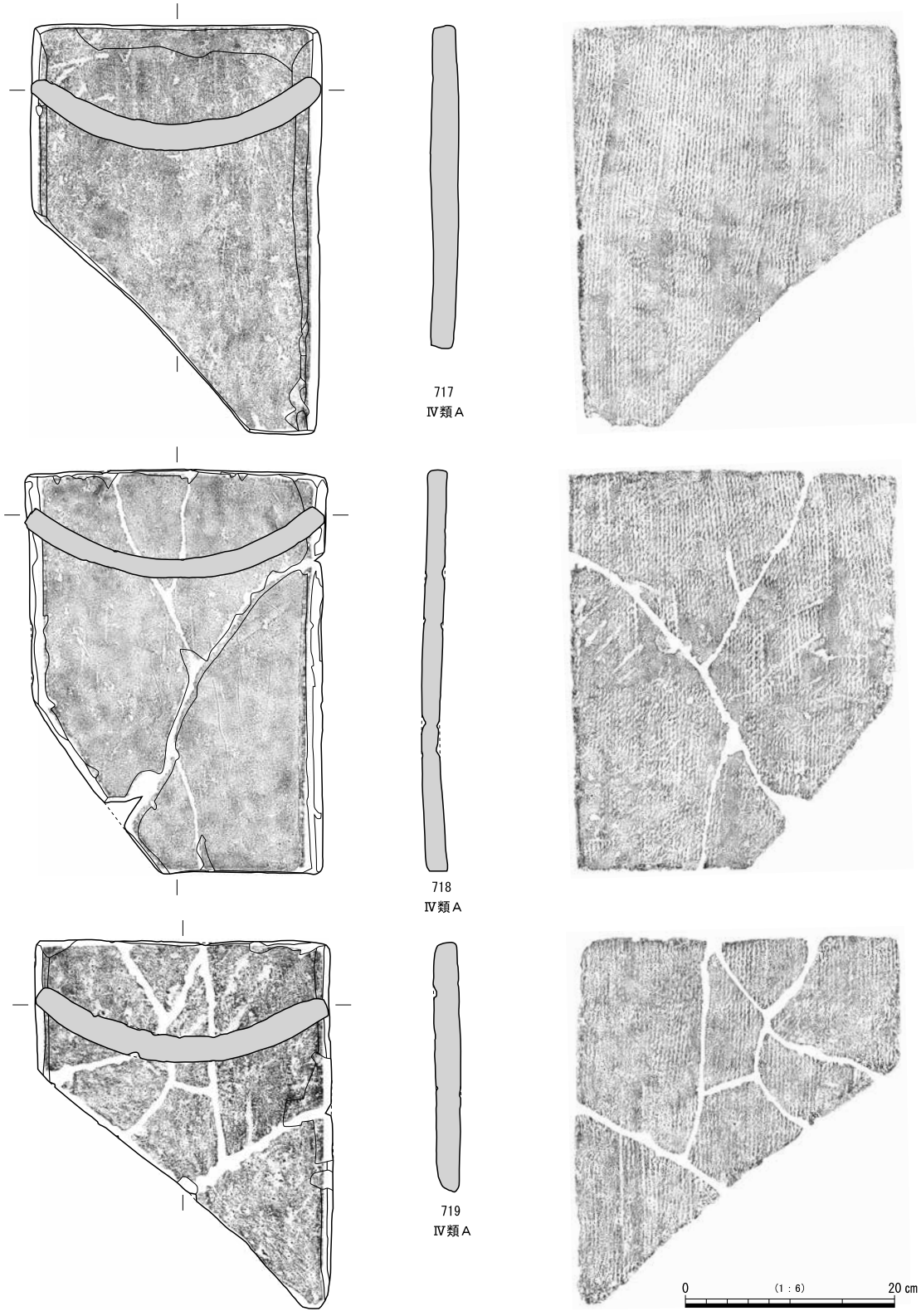


図 225　２号窯灰原出土平瓦（12）

築材として使用されていたものと推測される。710 は凸面の風化が著しく叩き目の痕跡が不明瞭であるが、709 と同様に部分的に削り調整が施されている。窯体内出土の 655 と調整が共通していることから、Ⅲ類Ｂであると推定できる。771 の斜辺には、截断のズレによる段差がみられ、凹面側から截断していることがわかる。

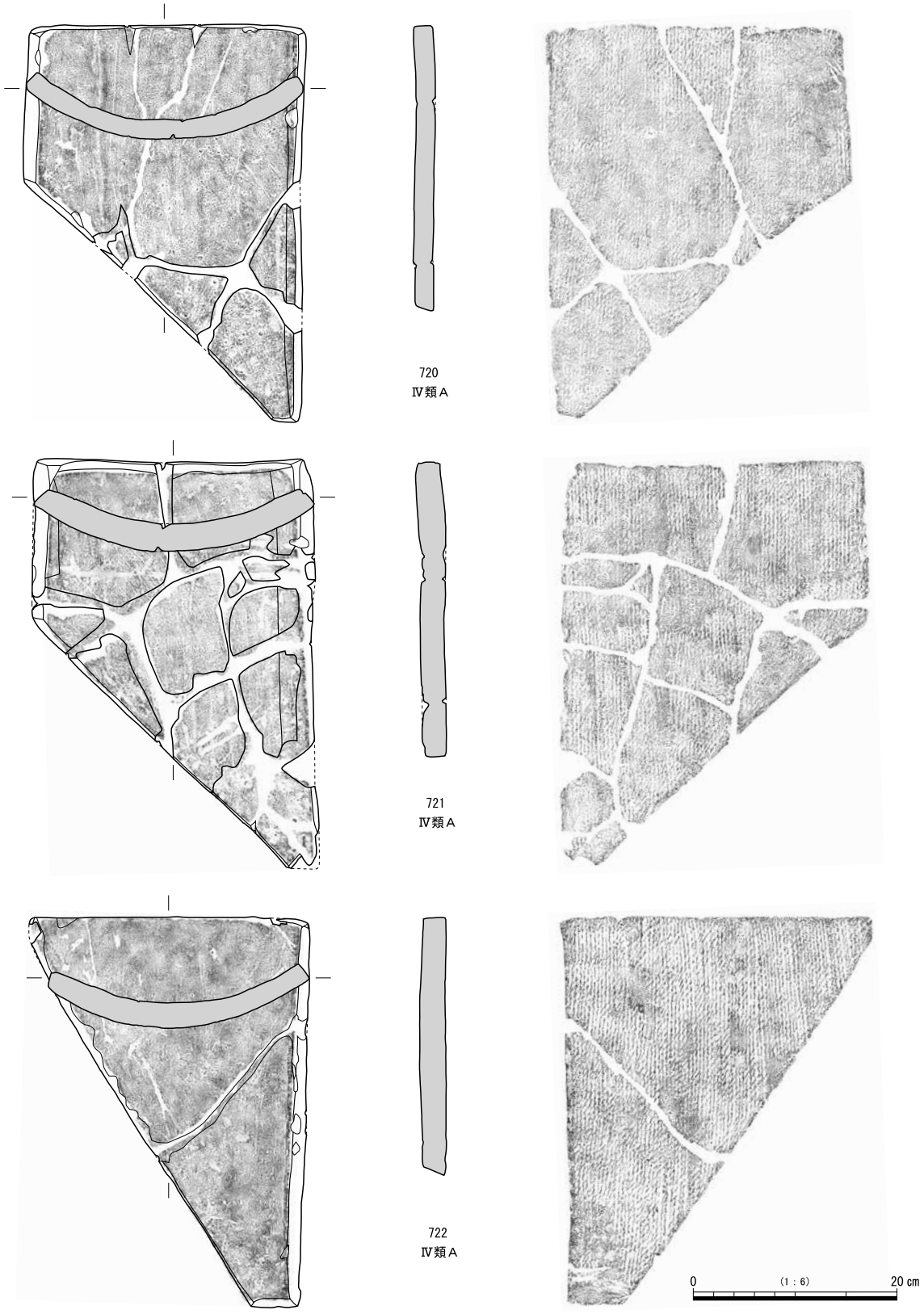


図 226　２号窯灰原出土平瓦（13）

Ⅳ類Ａ　713 ～ 722 はⅣ類Ａであり、713・714 は平瓦、そのほかは隅平瓦である。凸面は側縁を面取りする以外は無調整で、縦方向の縄叩き痕が明瞭に残る。凹面には全面に縦ナデ調整が施されている。側端面は分割截面に沿って全体を削る。側面の風化が著しく調整の方向が観察できないものが多いが、観察できるものをみる限り、凹面を上にして時計回りの方向に調整している可能性が高い。

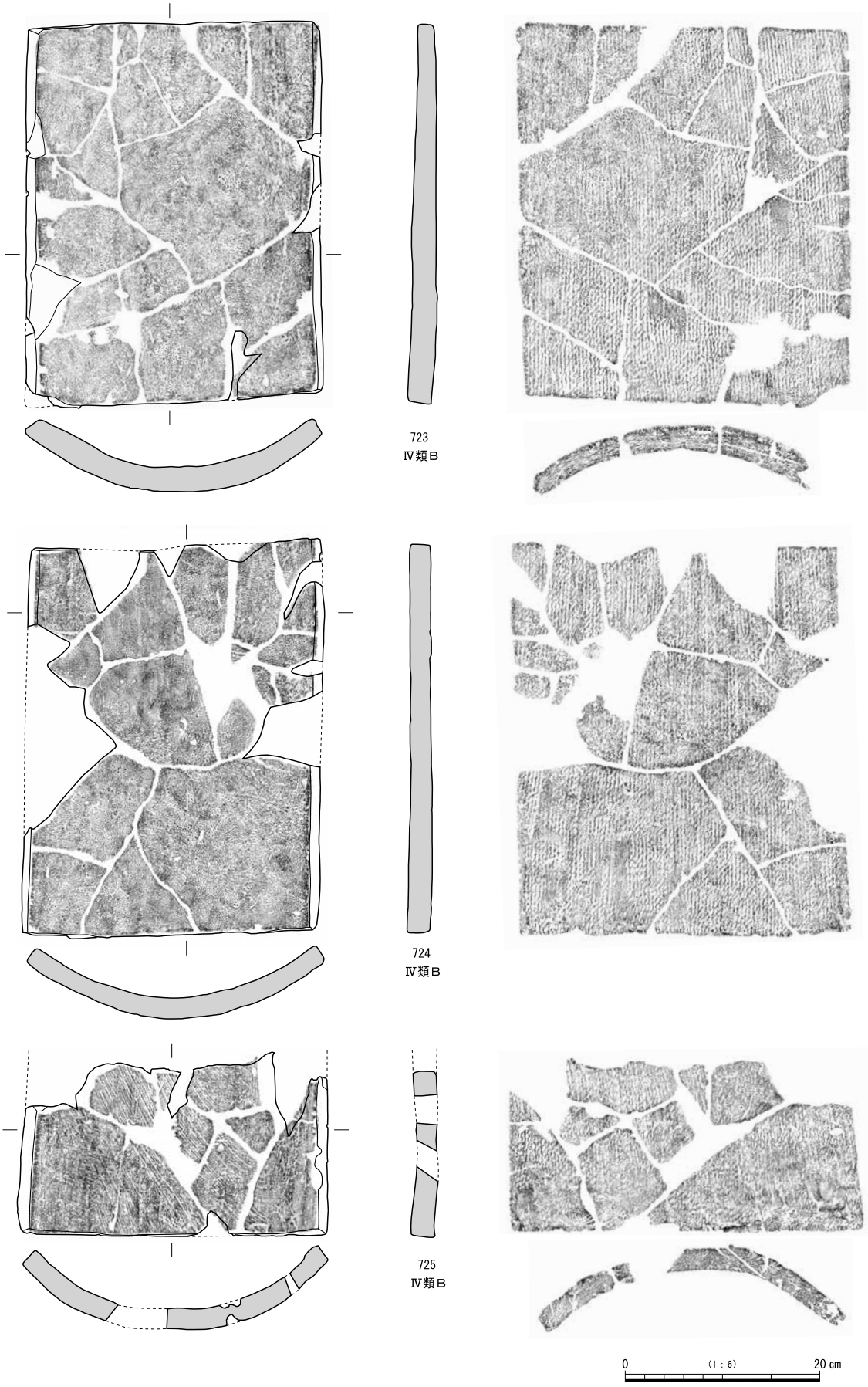


図 227　２号窯灰原出土平瓦（14）

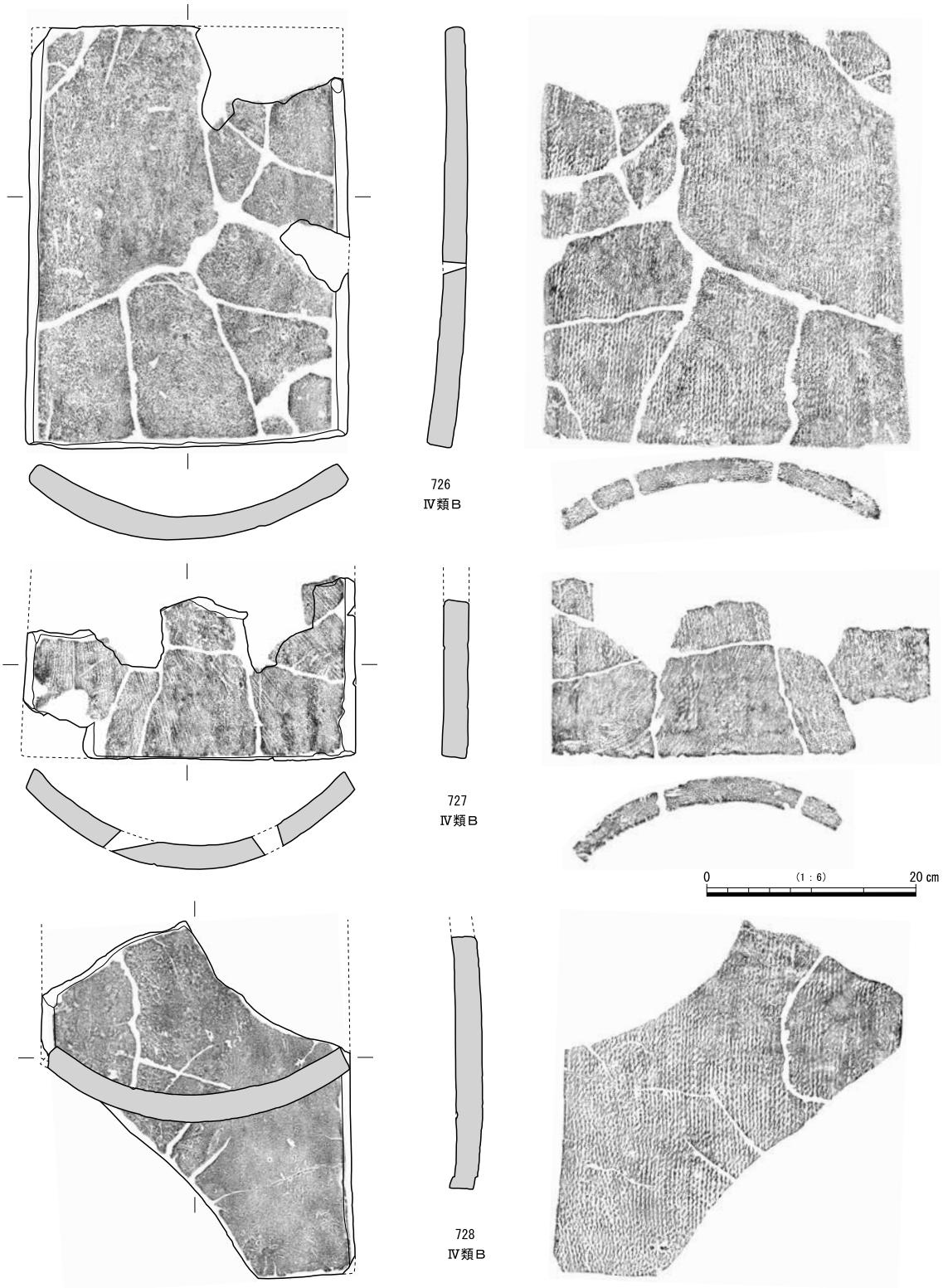


図 228　２号窯灰原出土平瓦（15）

713 の凹面には、わずかではあるが布綴じ痕が確認できる。714･716 には表面に焼土が付着している。全体的に軟質で表面が煤けているものも多いことから、これら以外にも構築材として使用されていたものが多く含まれている可能性が高い。

Ⅳ類Ｂ　723 ～ 728 はⅣ類Ｂであり、723 ～ 727 は平瓦、728 は隅平瓦である。全長 39 ～ 41 ㎝・狭端幅 27 ～ 28 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝とⅣ類Ａよりも一回り大きい。調整はⅣ類Ａと同様で、凸面は両側

縁を面取りするほかは無調整で、縦方向の縄叩き痕が明瞭に残る。凹面は全面縦ナデ調整が施されている。側端面は分割截面に沿って全体を削り、四側面は凹面を上にして時計回りの方向に調整されている。

727 は側端面がやや凸面側に深く削られており、凸面にも一部にナデ調整が施されている。ほかのものとはやや調整が異なってはいるが、縦方向の縄叩き痕が残っており、広端幅が 29 ㎝である点などがⅣ類Ｂと同じ特徴であるため、Ⅳ類Ｂとして扱うことにした。724・728 には焼土が付着しており、738 は瓦自体も一部が赤色に変化している。これらは構築材として使用されていた可能性が高い。

（４）１号窯出土

１号窯窯体内（図 229 ～ 252、図版 31・68 ～ 74）

１号窯の窯体内からは、総重量 498.4 kg多量に出土している。ただし、１号窯は焼成室内に瓦によって段が構築されていることから、出土したものの多くは段構築瓦の可能性が高い。狭端部または広端部が残存し法量が判明するものを中心に 66 点を図示する。

Ⅱ類Ａ　729 はⅡ類Ａの狭端部である。凸面には全面横ナデ調整が施されている。凹面は部分的にナデ調整が施される程度で、大部分に布目が残り、四側縁にはやや幅広の面取りが施されている。側面は

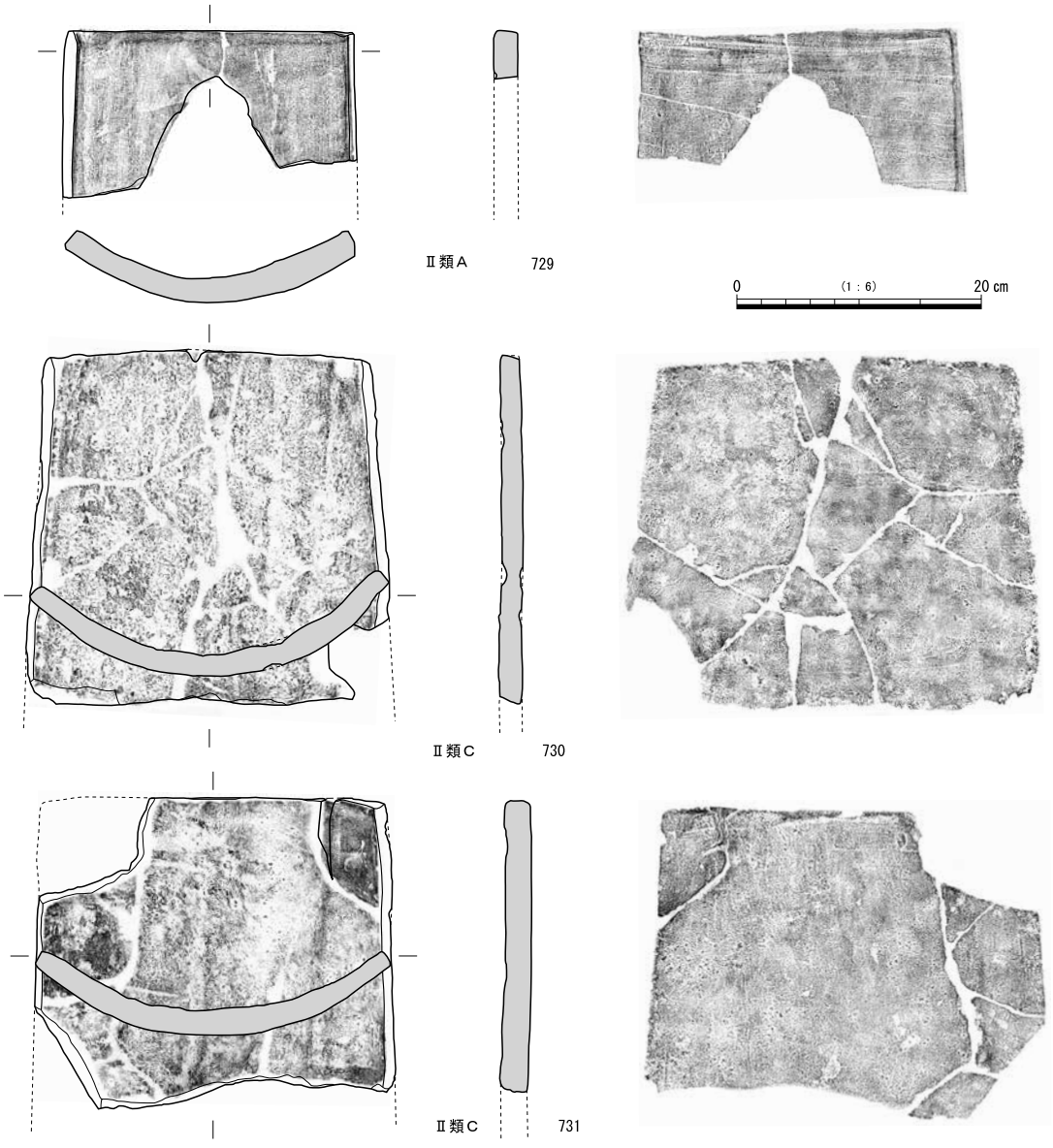


図 229　１号窯窯体内出土平瓦（１）

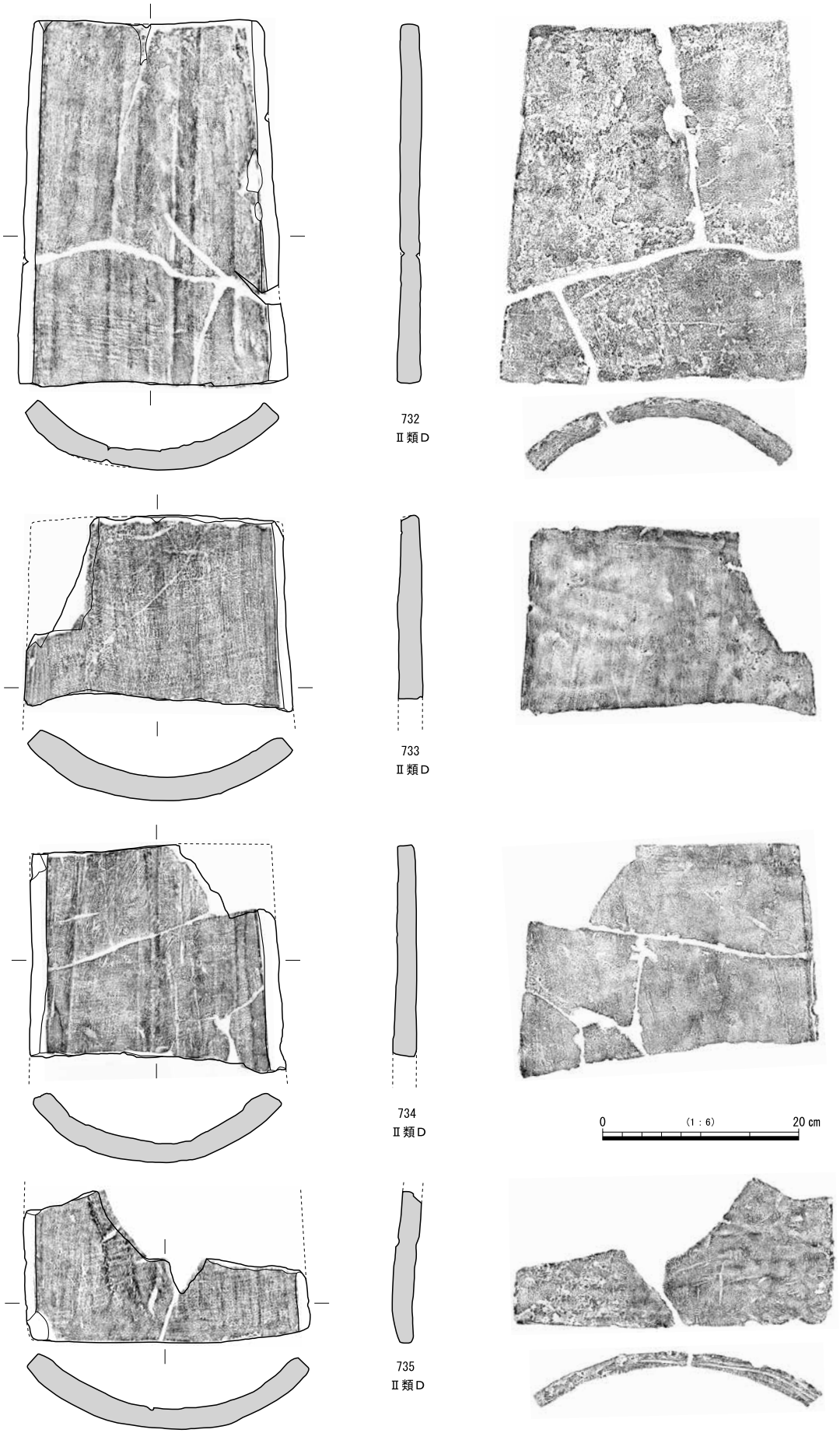


図 230　1 号窯窯体内出土平瓦（2）

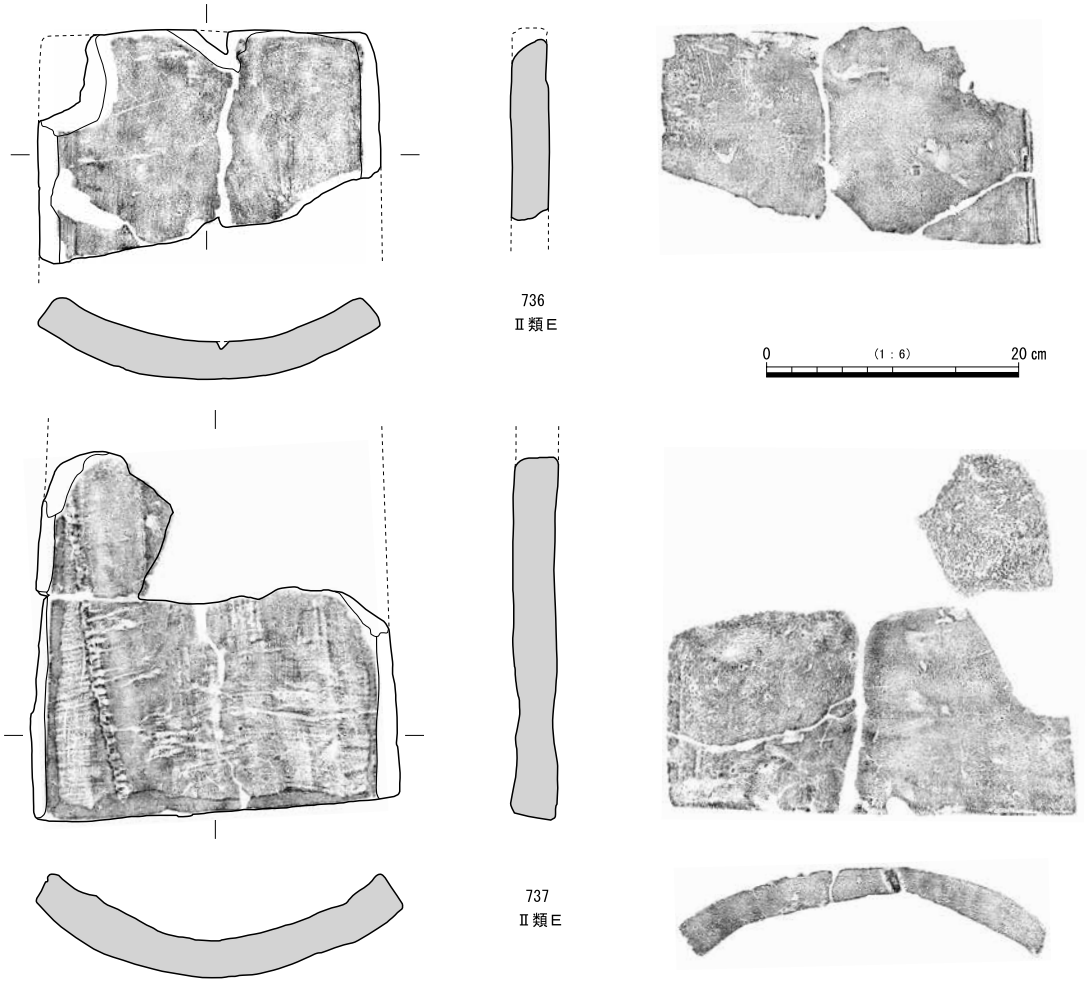


図 231　１号窯窯体内出土平瓦（３）

凸面側に深く削られている。燃焼室第１次床面上層の第Ⅴ層から出土している。１号窯の窯体内出土瓦で明確にⅡ類Ａと認識できるものはこの１点のみであることから、第２次床面を構築する際に混入したものとみてよい。

Ⅱ類Ｃ　730･731 はⅡ類Ｃの狭端部である。ともに風化が著しく部分的にしか表面が観察できないが、凸面は全面ナデ調整で、凹面には布目が残る。側面は分割截面に沿って全体を削っており、全体的に薄手のつくりとなっている。非常に軟質で表面の風化が著しく、二次的に熱を受けているものと推測される。焼土などの付着は確認できないが、出土数も少ないことから、構築材とするために持ち込まれた瓦である可能性が高い。

Ⅱ類Ｄ　732 ～ 735 はⅡ類Ｄである。法量は、全長 36 ～ 37 ㎝・狭端幅 22 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 26 ㎝とやや小型である。凸面は全面ナデ調整が施されており、縦ナデ調整を主体とする。狭端付近は横ナデ調整が施され、丸みを帯びた形状に仕上げられている。凹面は一部に軽いナデ調整を施すものもあるが、大半が無調整で布目が残る。両側縁には面取りが施される。側面は分割截面に沿って全体を削っているが、やや凹面側に深くなるものもある。732･733 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 732 がＺ型、733 はＳ型である。735 には布綴じ痕が残る。732 と 734 は、段構築瓦として遺存していた。

Ⅱ類Ｅ　736・737 はⅡ類Ｅである。法量は、狭端幅 24 ～ 25 ㎝・広端幅 26 ～ 27 ㎝である。完形のものが出土していないため全長は不明であるが、側面の角度と広・狭端幅の差からみて比較的小型のものであると推定される。凸面は全面横ナデ調整で、一部に縦ナデ調整が加えられる。凹面は一部に軽い

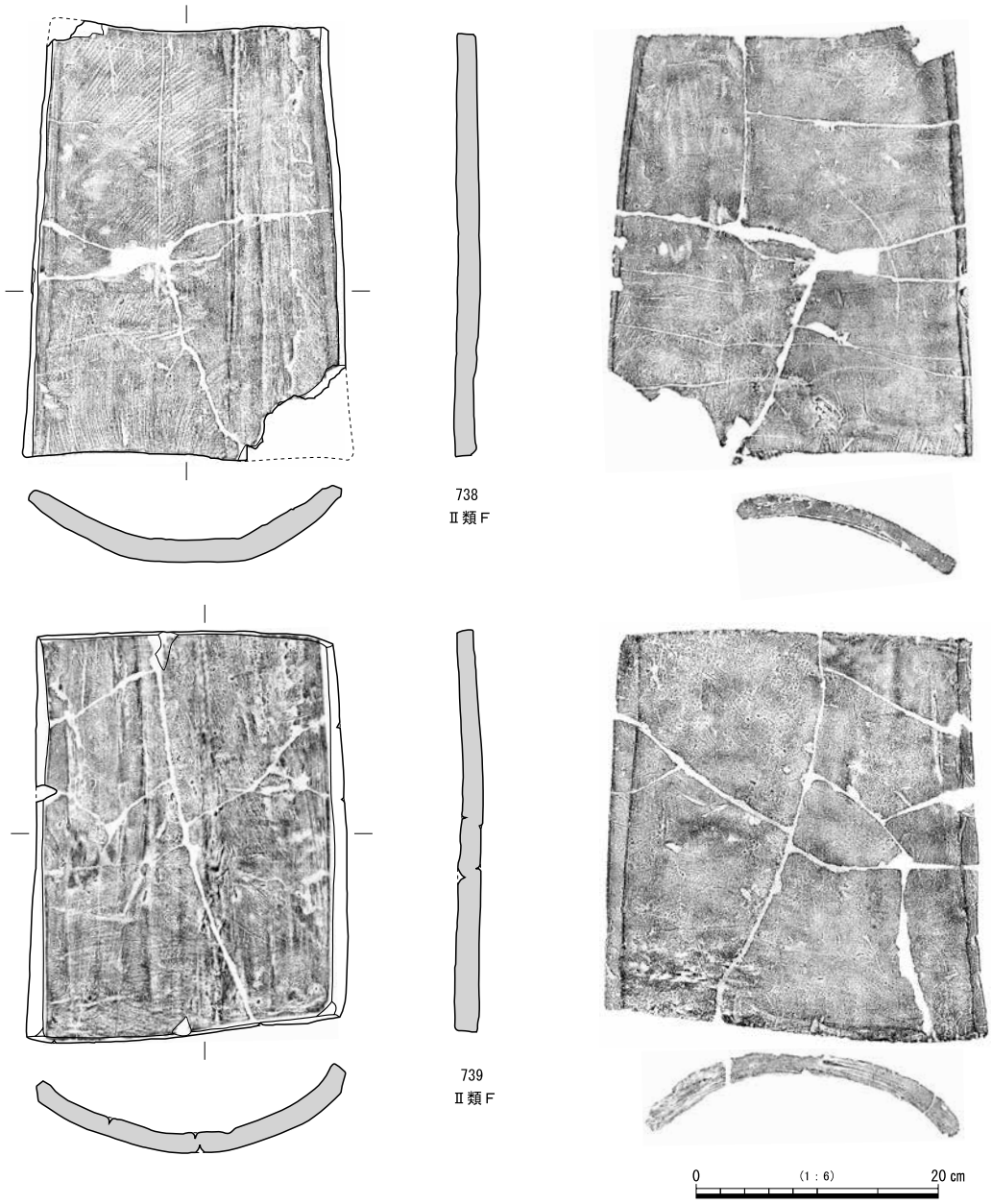


図 232　１号窯窯体内出土平瓦（４）

ナデ調整を施すものもあるが、大半が無調整で布目が残る。四側縁にはやや幅広の面取りが施される。側面を凹面側に深く削り、厚手のつくりである点が特徴である。737 は段構築瓦の破片が接合しており、凹面には布綴じ痕が残っている。

Ⅱ類Ｆ　738 ～ 746 はⅡ類Ｆである。法量は、全長 33 ～ 35 ㎝・狭端幅 21 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 25 ㎝と小型であり、厚さも薄い。凸面は全面ナデ調整である。横ナデ調整を主体とし、部分的に縦ナデ調整を加えているが、凹凸が多く残っておりやや雑な調整となっている。凹面は、部分的に軽い縦ナデ調整を施す程度であり、大部分は無調整である。両側縁には面取りを施している。側面は凸面側を削り、ナデ調整を加えて丸みを帯びた形状に仕上げている。なお 746 に関しては、凹面が全面ナデ調整されている。本来は別の分類を設定すべきであろうが、確認されるのがこの１点のみであり、ほかの調整や法量がⅡ類Ｆと共通するため、Ⅱ類Ｆにおける特殊な個体として扱うことにする。

738・739・740・745 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目は 738・745 はＳ型、739・740 はＺ型であ

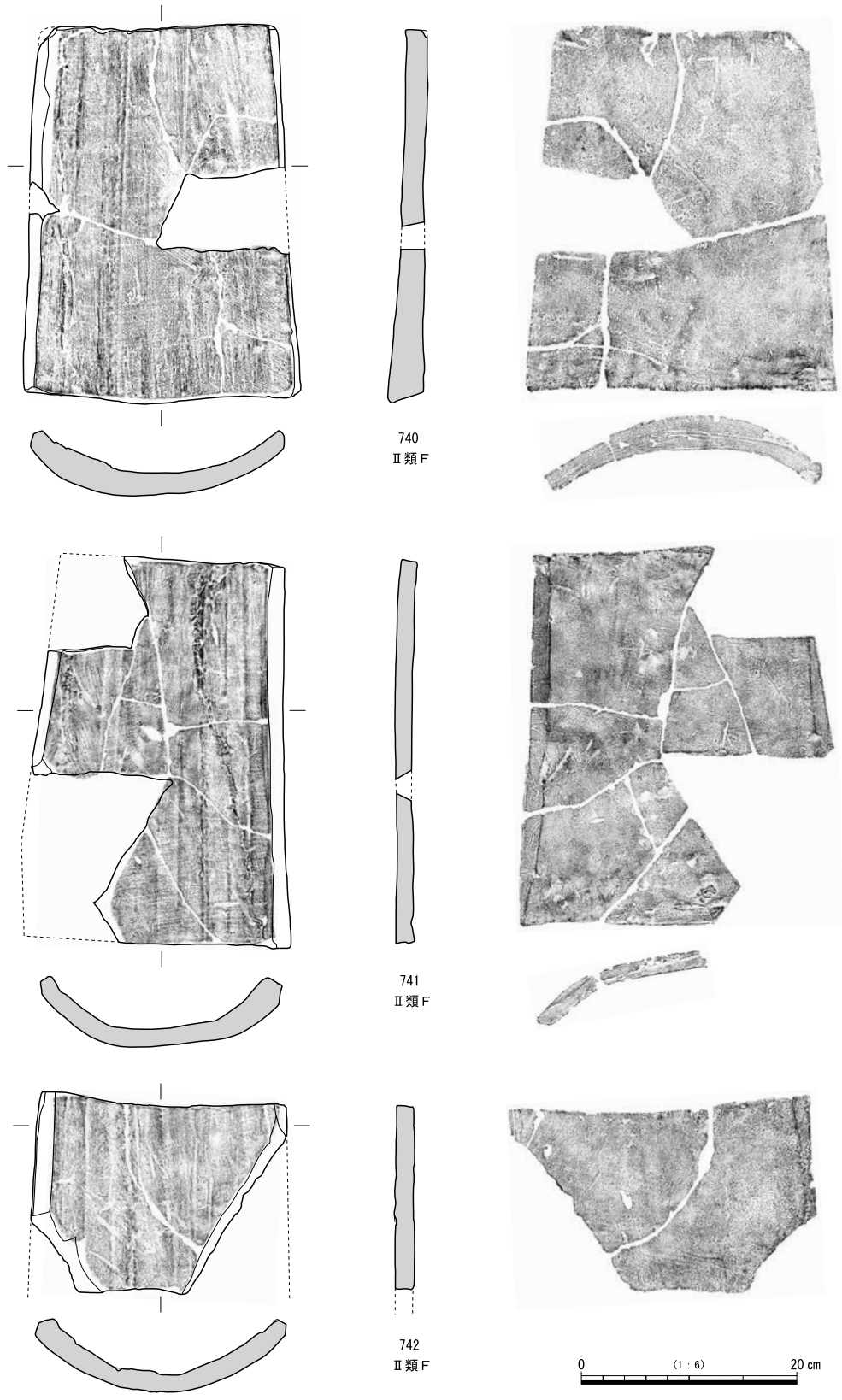


図 233　１号窯窯体内出土平瓦（５）

る。741・743 には布綴じ痕が残っている。740・741 の側端付近には、分割突帯とみられる紐状の痕跡が確認できる。743 と 744 は段構築瓦として残存していた。738 ～ 742・746 は段構築瓦の破片と接合しており、これらについても段構築瓦として使用されていたものとみてよい。

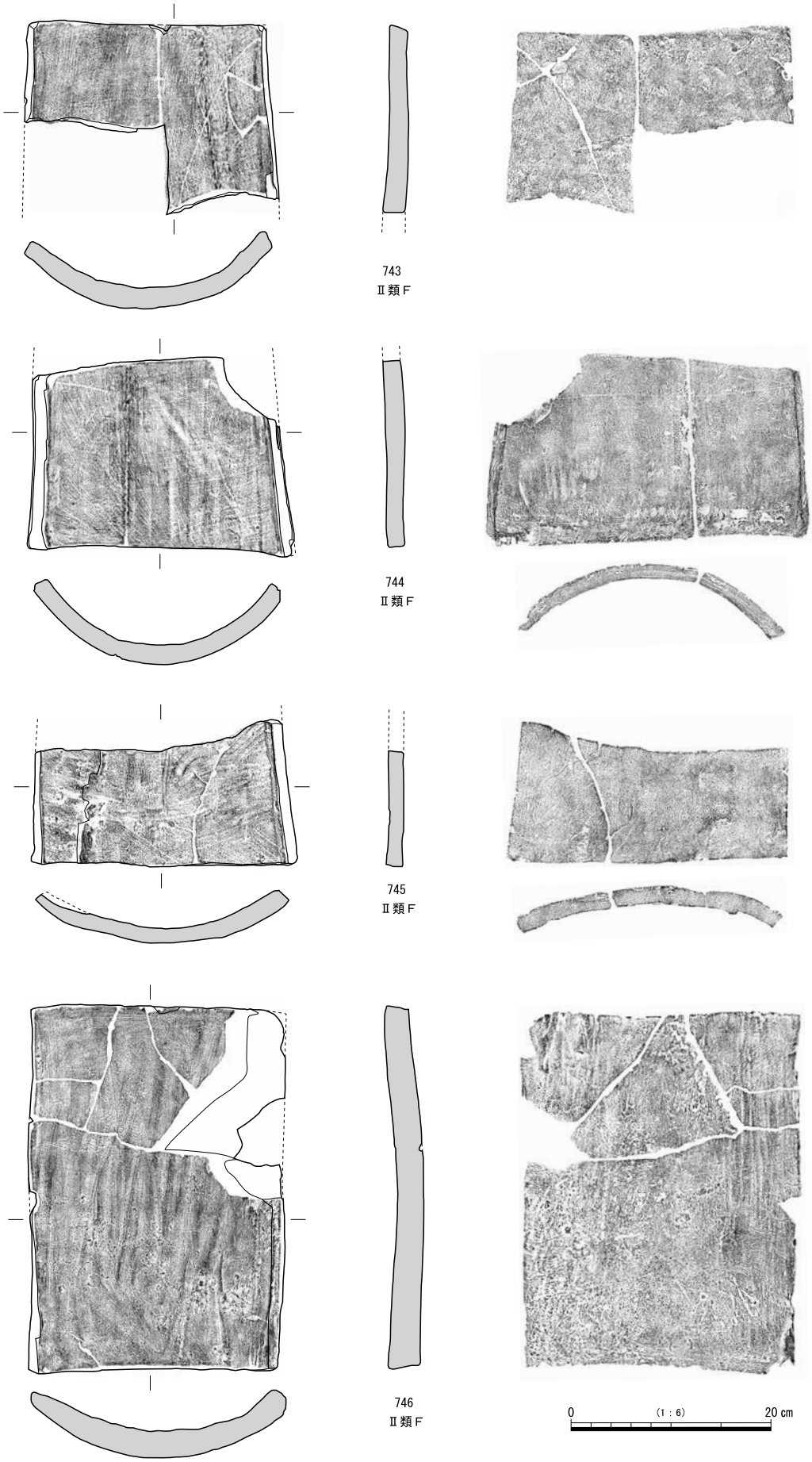


図 234　１号窯窯体内出土平瓦（６）

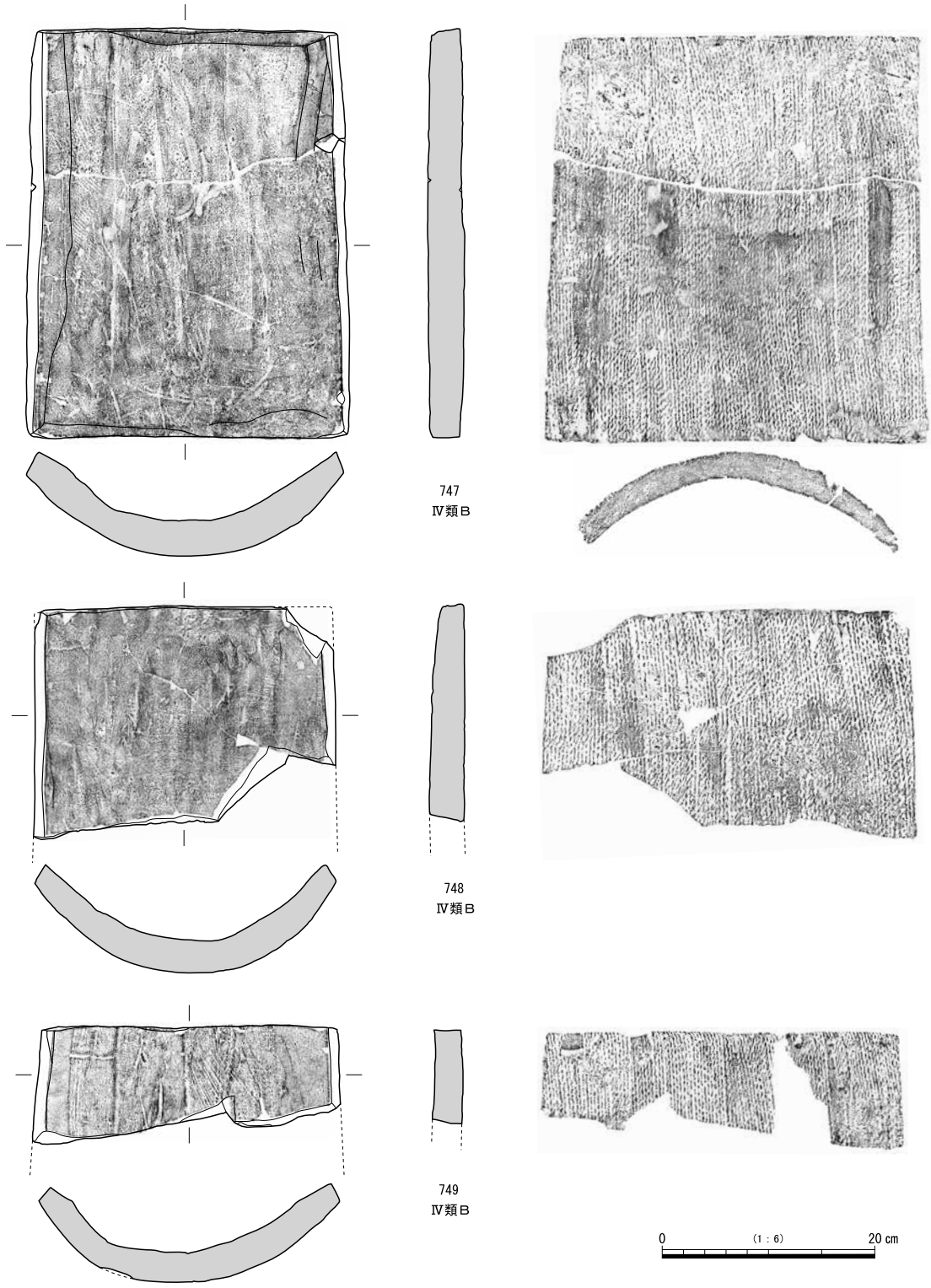


図 235　１号窯窯体内出土平瓦（７）

Ⅳ類Ｂ　747 ～ 749 はⅣ類Ｂである。法量は、全長 39 ～ 41 ㎝・狭端幅 27 ～ 28 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝である。凸面は無調整で縦縄叩きが明瞭に残る。凹面には全面に縦ナデ調整が施されている。側面は分割截面に沿って全体を削っている。法量や基本的な調整は２号窯出土のものと共通しているが、側面の削りがやや凸面側に深く、凹面の側縁に幅広の面取りが施されている点など、調整に多少異なる点が確認できる。749 は段構築瓦であり、747 は段構築瓦として残していた破片と接合している。

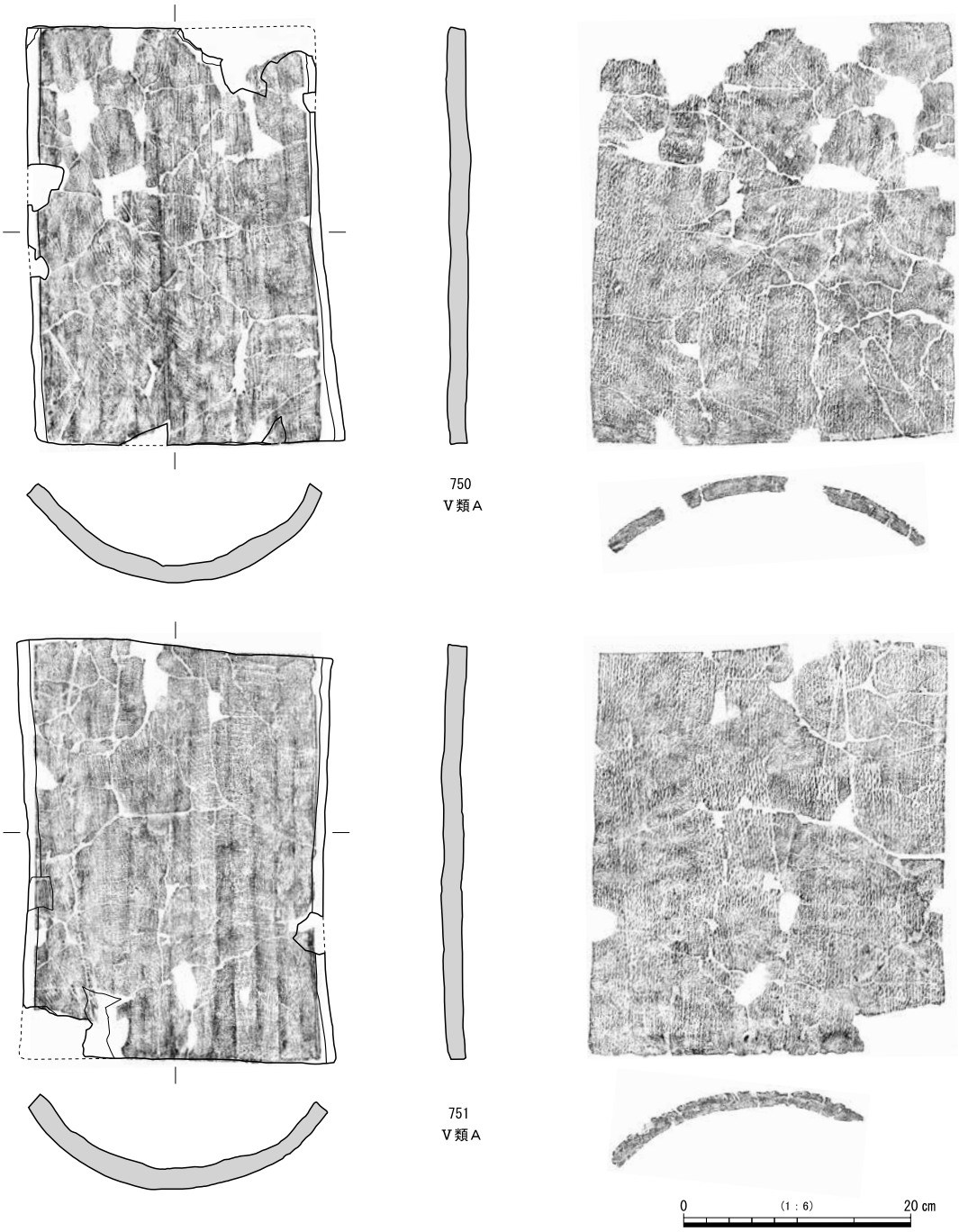


図 236　1 号窯窯体内出土平瓦（8）

Ⅴ類A　750 ～ 760 はⅤ類Aである。法量は、全長 37 ～ 38 ㎝・狭端幅 23 ～ 24 ㎝・広端幅 25 ～ 26 ㎝と小型である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は一部に軽いナデ調整を施すものもみられるが、基本的には無調整で布目が残る。側縁には浅い面取り調整が施されている。側面は分割截面に沿って全体を削る。凹面を上にした状態で、四側面を時計回りの方向に削っている。全体的に薄手のつくりで、広・狭端が凸面側に反っているものが多い。

いずれも凹面には、布目とともに糸切り痕が明瞭に残る。750 の凹面中央付近には、縦方向に溝状の窪みが確認できる。分割突帯とみられるが、位置的には側縁から大きく離れている。751 には布綴じ痕が残る。やや焼きムラもみられるが、いずれも比較的硬質で灰白色の色調を呈している。

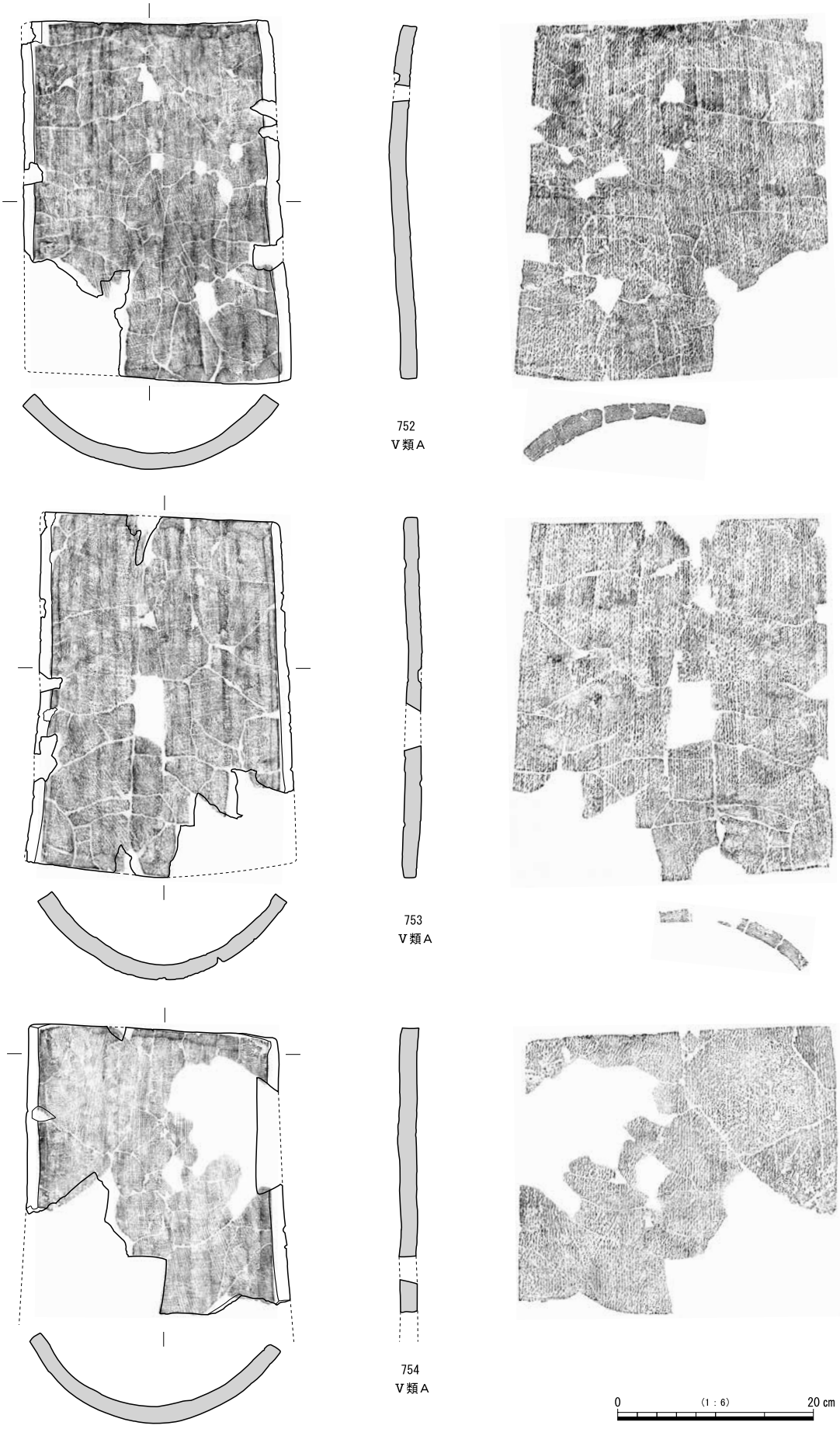


図 237　１号窯窯体内出土平瓦（９）

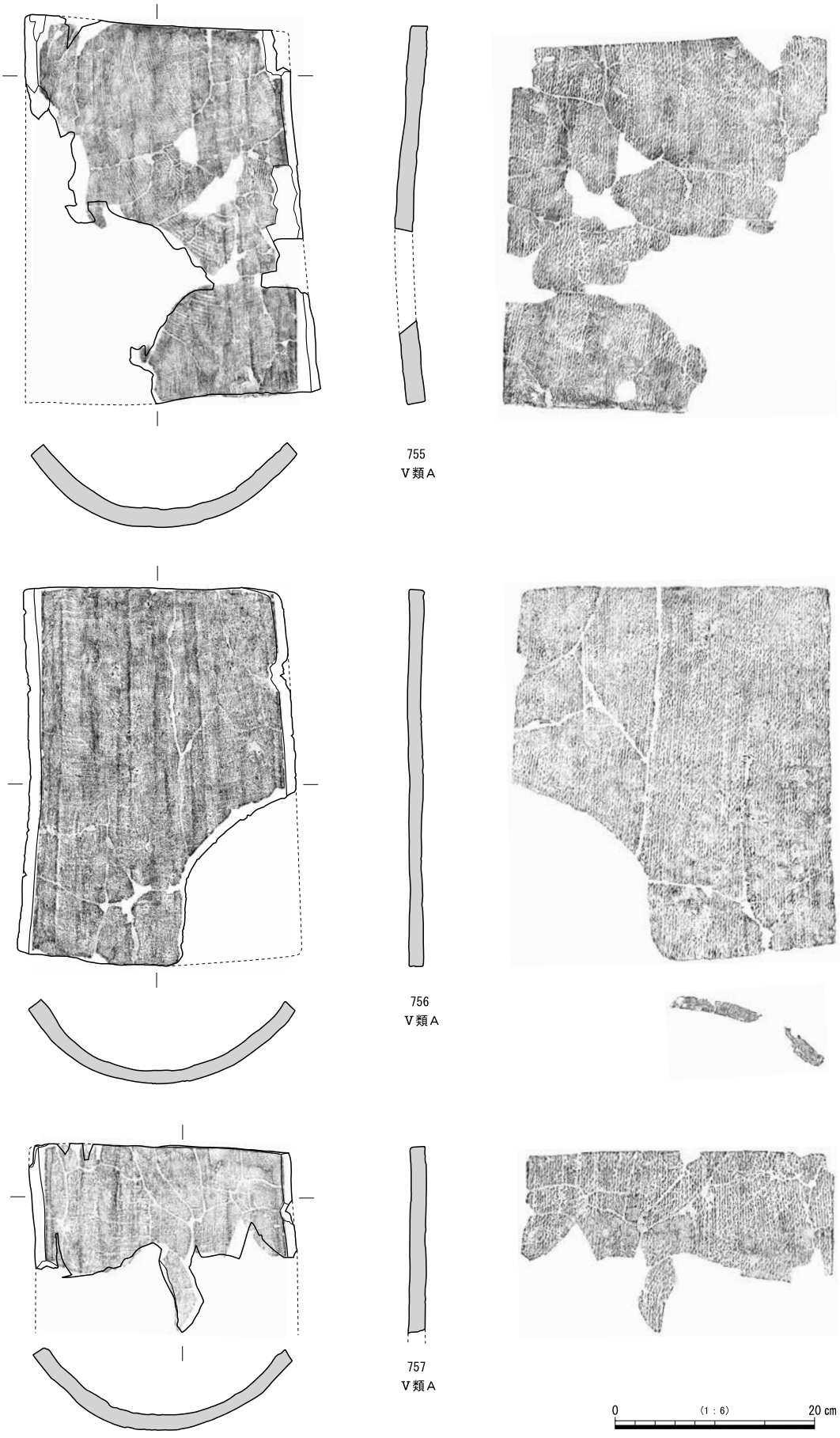


図 238　1 号窯窯体内出土平瓦（10）

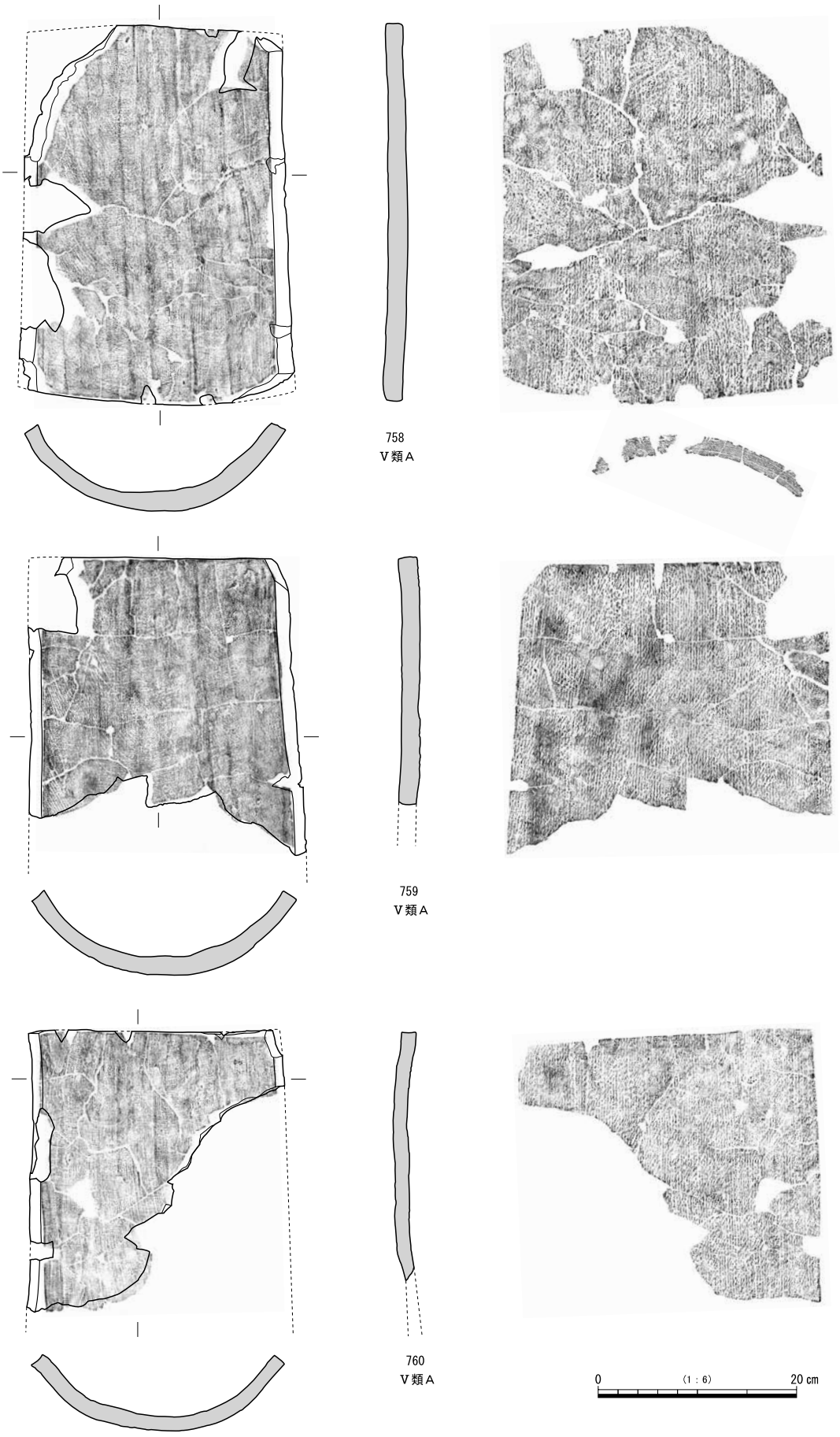


図 239　１号窯窯体内出土平瓦（11）

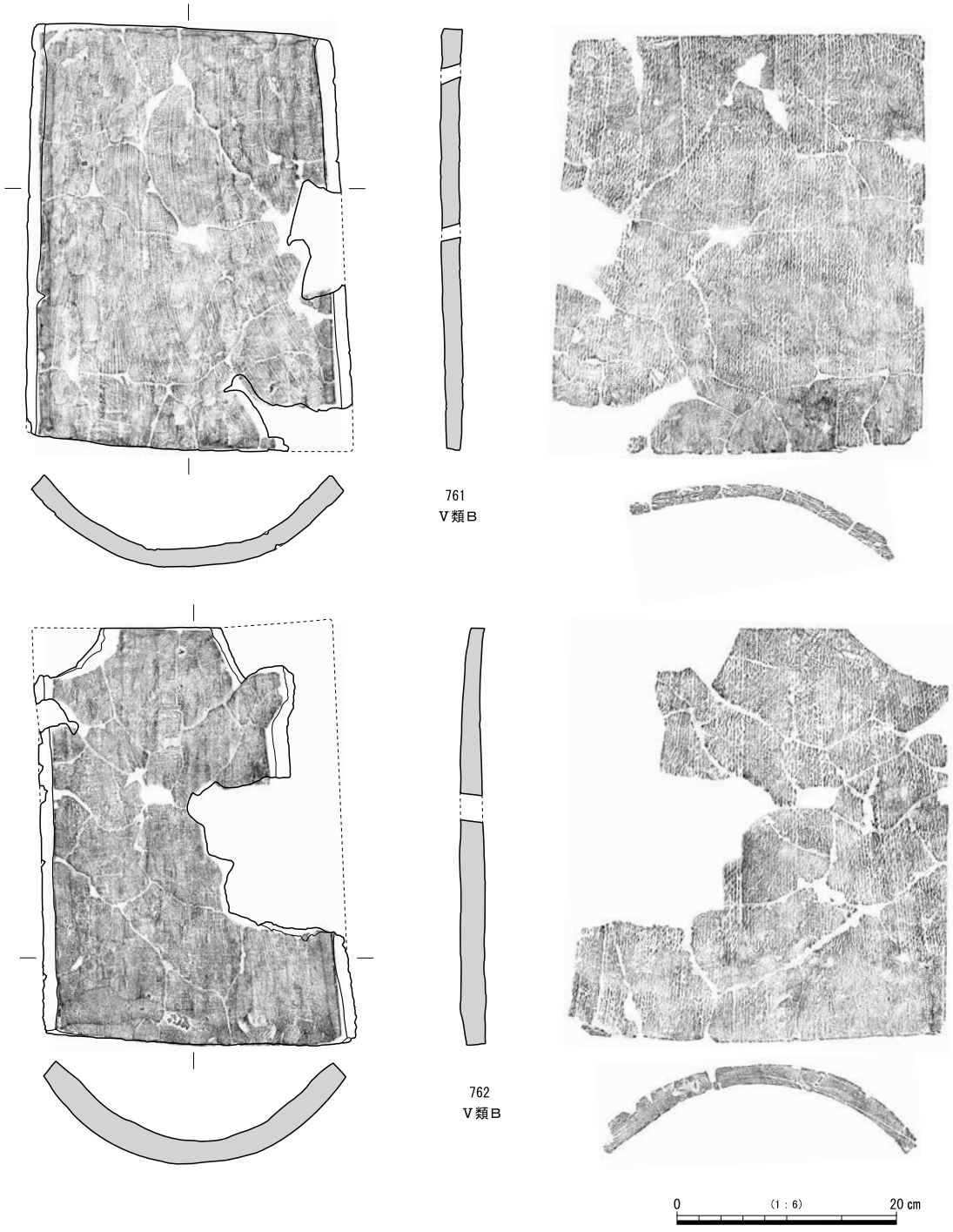


図 240　１号窯窯体内出土平瓦（12）

Ⅴ類Ｂ　761 ～ 773 はⅤ類Ｂである。Ⅴ類ＡとＣの中間的な大きさのもので、法量は全長 38 ～ 40 ㎝・狭端幅 24 ～ 26 ㎝・広端幅 26 ～ 28 ㎝である。調整はⅤ類Ａと同様であり、凸面は無調整で縦方向の縄叩きが残る。凹面は、一部に軽いナデ調整を施すものもあるが、基本的には無調整で広範囲に布目が残る。四側縁はやや幅広に面取りされている。側面は分割截面に沿って全体を削る。凹面を上にした状態で、四側面が時計回りの方向に調整されている。胎土には砂粒が多く含まれており、黒色の色調を呈するものが多い。

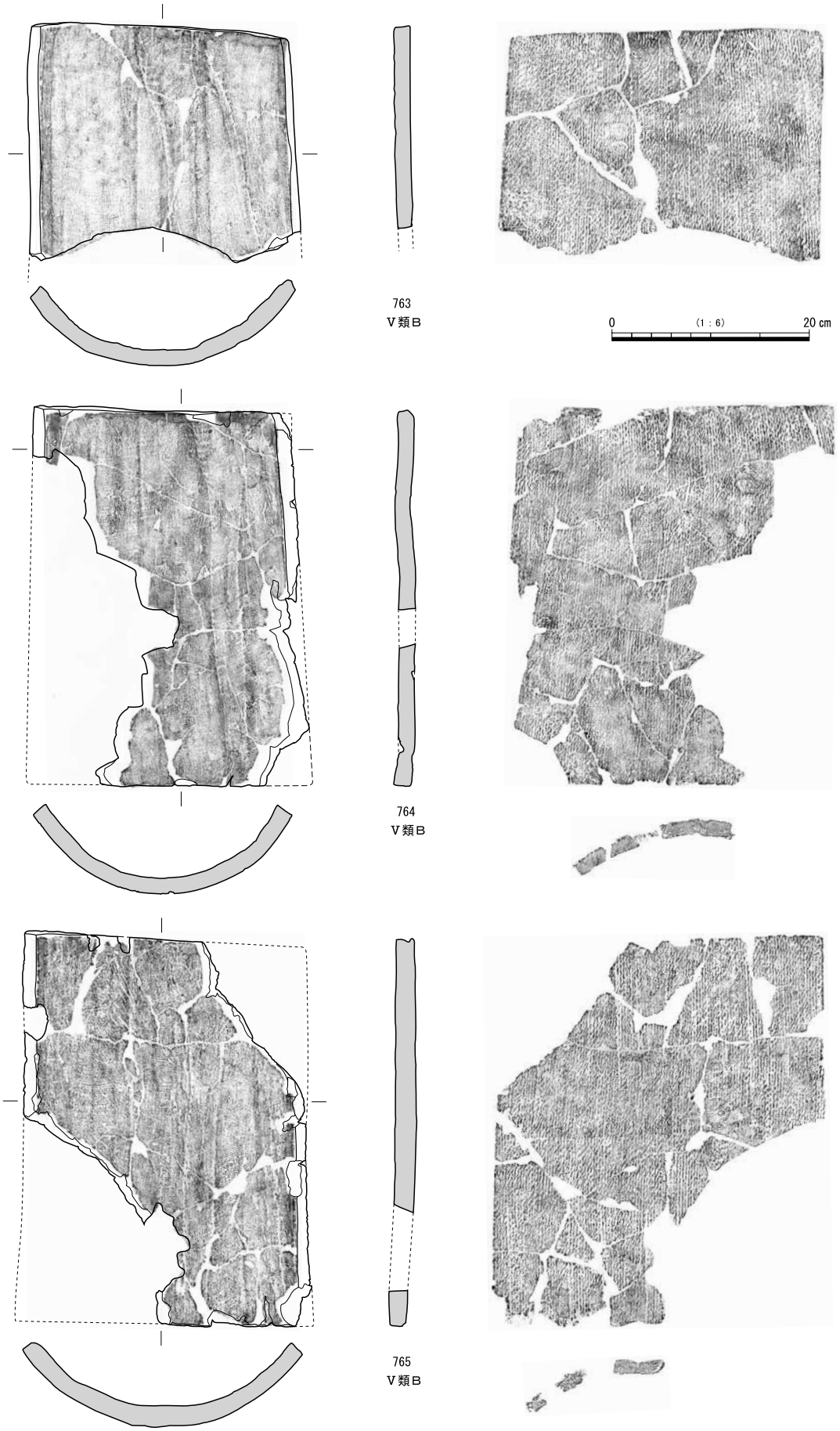


図 241　１号窯窯体内出土平瓦（13）

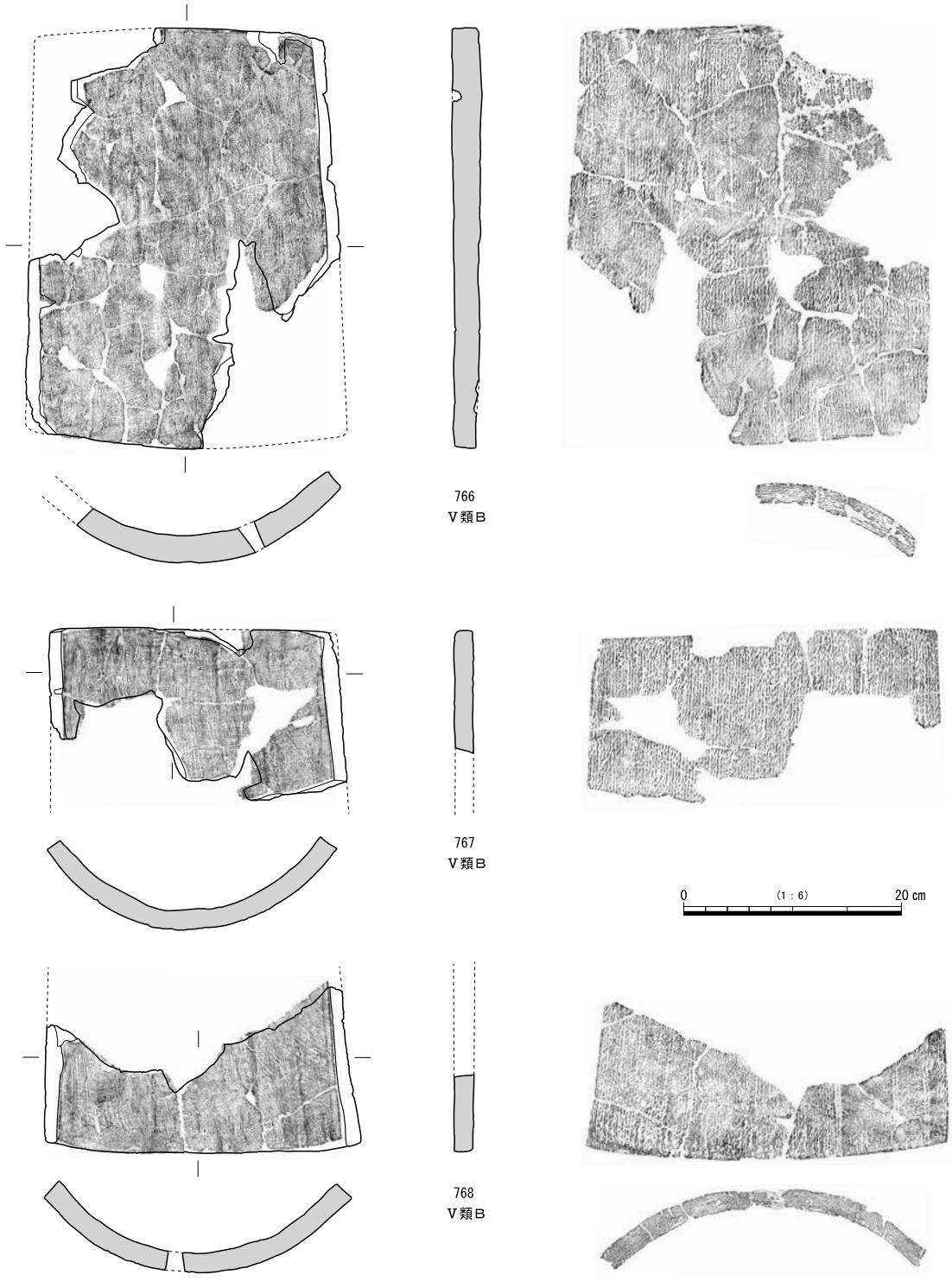


図 242　1 号窯窯体内出土平瓦（14）

763 は段構築瓦であり、761 は段構築瓦として使用されていた破片と接合している。段構築瓦として使用されたことが明確に認識できるものはこの 2 点のみであるが、ほかの瓦も 761 と同様に燃焼室に向かって滑り落ちる形で出土しており、段構築瓦が多く含まれているものと推測される。763 ～ 765・767・772・773 には布綴じ痕が残る。このうち 763 ～ 765・772・773 は綴じ目が一致しており、同一の布袋を使用していたことがわかる。綴じ目が一部しか残存しないため断定はできないが、767 もおそらくは同一のものであろう。

図 243　１号窯窯体内出土平瓦（15）

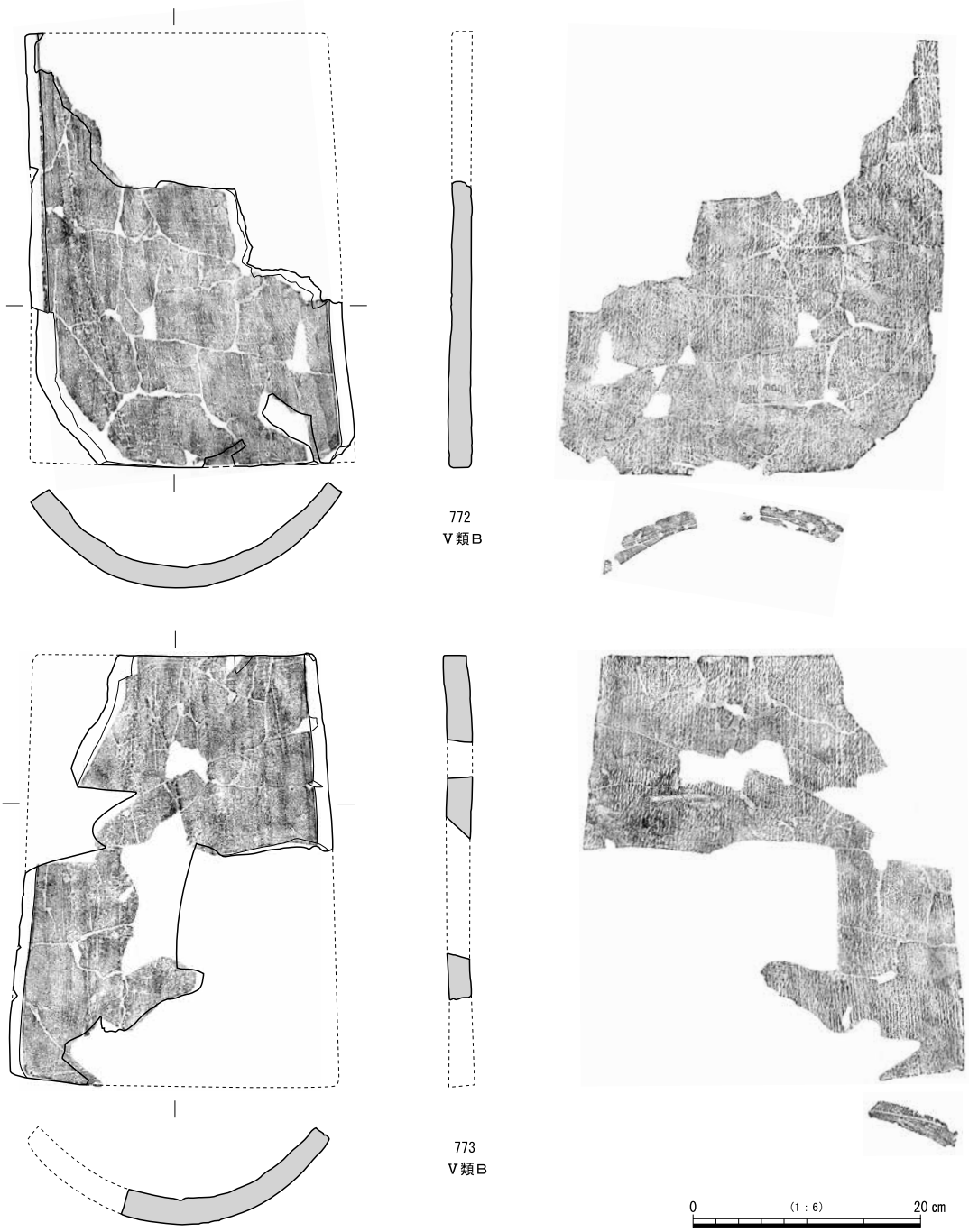


図 244　１号窯窯体内出土平瓦（16）

なお、後述のように、綴じ目が一致するものはⅤ類Ｃでも多く確認されている。同じ布袋を使用している点からみると、桶型の規模には大きな違いがなかったものと推測される。明らかに法量の異なるものが存在するためＢとＣの２種に細分したが、この違いは側面調整の厚さや焼成の具合などに起因するものとみた方がよいかもしれない。

774・775 はⅤ類Ｂの隅平瓦である。切り落とされている範囲は異なるが、ともに広端部左側が斜めに截断されている。調整は平瓦と同様で、凸面には縦方向の縄叩き痕が残り、凹面には布目が残る。775 は焼き歪みにより、湾曲が失われて扁平に近い形状になっている。凹面には布綴じ痕が確認できる。一部しか残存しないが、おそらくは平瓦の綴じ目と同一であろう。

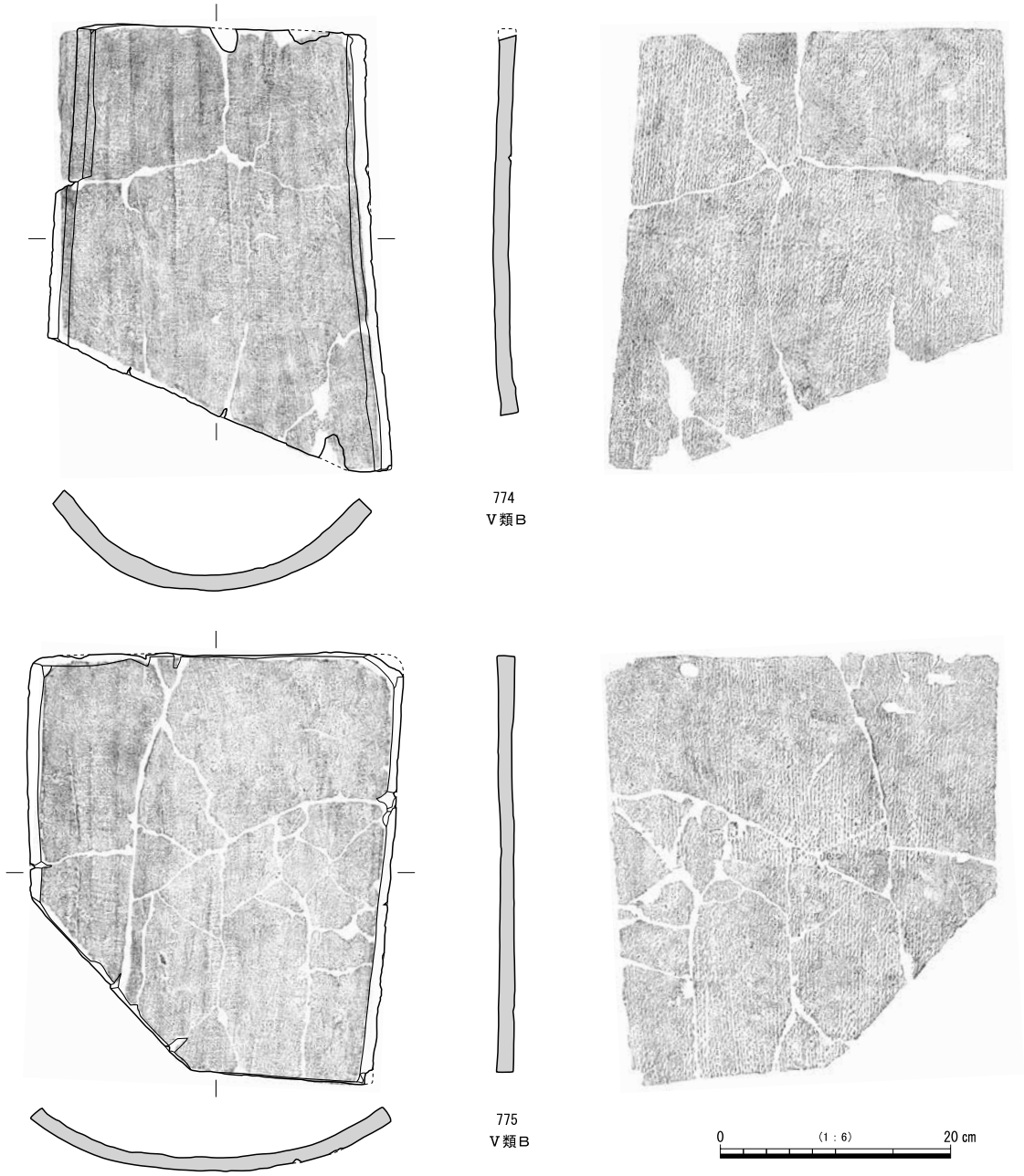


図 245　１号窯窯体内出土平瓦（17）

Ⅴ類Ｃ　776 ～ 791 はⅤ類Ｃである。大型の瓦で、法量は全長 40 ～ 41 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は、一部に軽いナデ調整を施すものもあるが、基本的には無調整で全面に布目が残る。左右の両側縁にやや幅広の浅い面取りを施し、広・狭端側の側縁に面取りを施すものもある。側面は分割截面に沿って全体を削る。側面と広・狭端面は、凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。胎土は砂粒を多く含み、やや焼きムラはあるが、黒色の色調を呈するものが多い。

782 の広端面には、一部に藁座痕が残存する。大半が削り調整によって失われているが、瓦に平行する痕跡とその上に直交する痕跡が残っており、藁束を結束している様子が確認できる。藁座の構造は、後述する藁座の残る截断片と同様である。なお、藁座の残る截断片は、２・３号窯からは多く出土しているが、１号窯からは出土しておらず、平瓦の広端部の調整方法が異なっていた可能性がある。１号窯

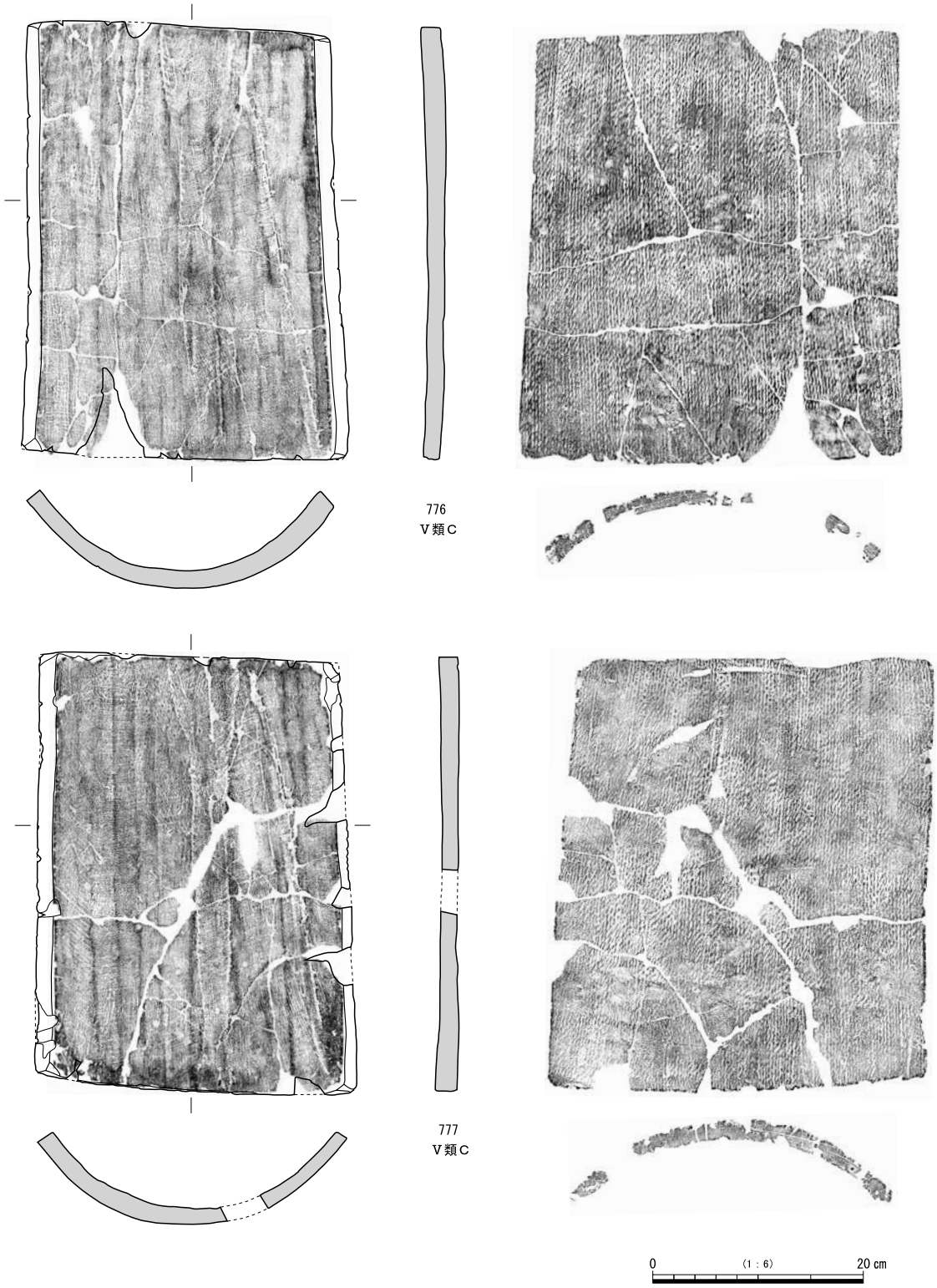


図 246　1 号窯窯体内出土平瓦（18）

においては、Ⅴ類Ｃ以外の平瓦も、２・３号窯のように広端側を大きく切り落とすのではなく、広端面を削って調整する方法が用いられていた可能性が高い。

776 ～ 781 には布綴じ痕が残っており、綴じ目はすべて同一である。783 ～ 785 には粘土接合痕が確認できる。合わせ目は 783 と 784 がＺ型、785 はＳ型である。776・782 ～ 784 は、段構築瓦の破片が接合している。

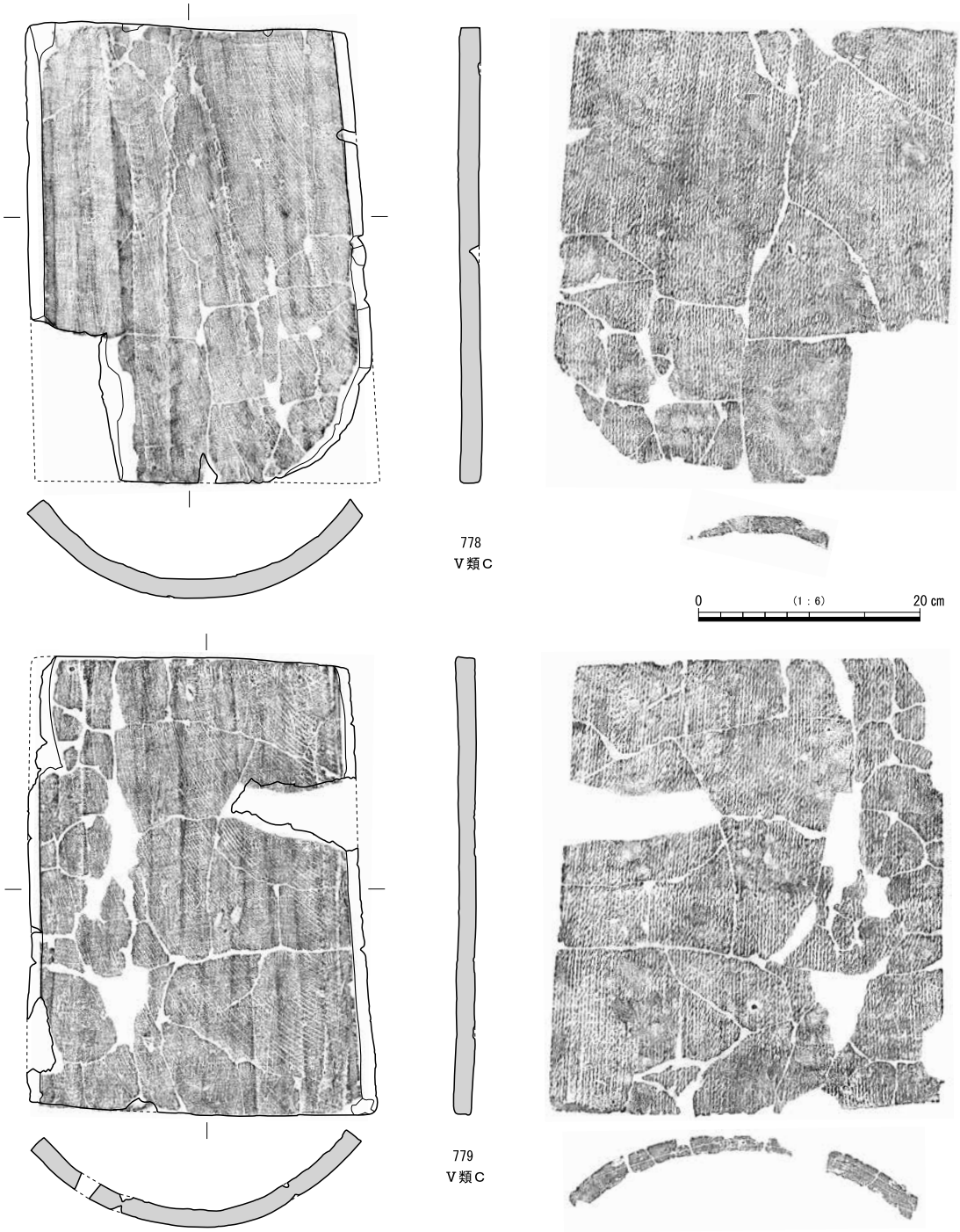


図 247　１号窯窯体内出土平瓦（19）

Ⅴ類Ｄ　792･793 はⅤ類Ｄである。法量は全長 36 ～ 37 ㎝･狭端幅 22 ～ 23 ㎝･広端幅 24 ～ 26 ㎝である。凸面は無調整で縄叩きが残る。叩き目は縦方向ではあるが少し斜めに傾く。凹面は無調整で布目が残り、側縁にはやや幅広の面取りが施されている。側面はやや凹面側に深く削る。法量や、叩き目がやや斜めに傾く点、側面を凹面側に深く削る点などがⅡ類Ｄと共通しており、Ⅱ類Ｄの凹面調整を省略したものとみることができる。792 の凹面中央には、分割突帯とみられる紐の痕跡が残る。湾曲の状態に比べて幅が狭く、粘土円筒を本来想定されていた四分割ではなく、五分割している可能性がある。段構築瓦の破片と前庭部から出土した破片が接合している。

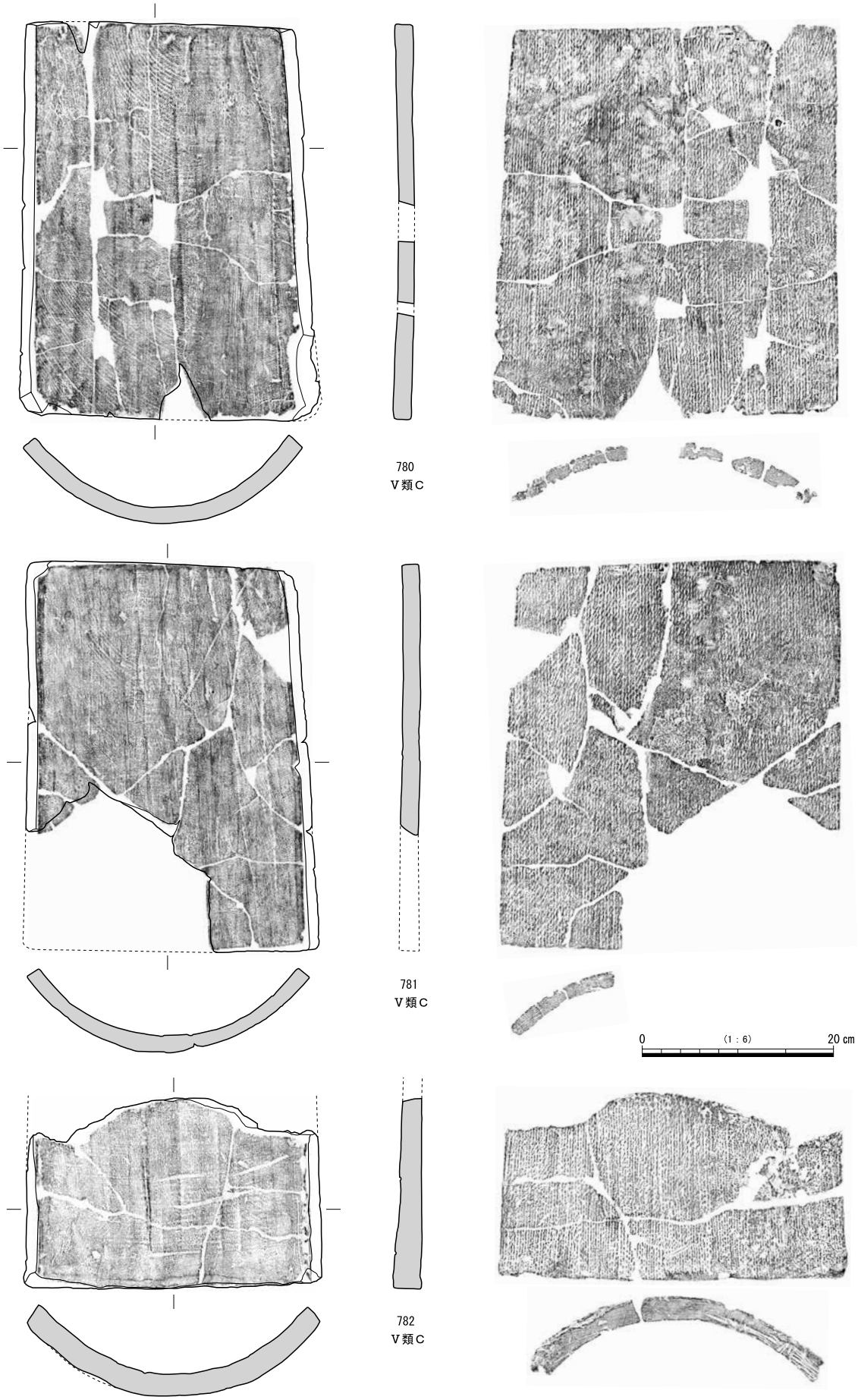


図 248　1 号窯窯体内出土平瓦（20）

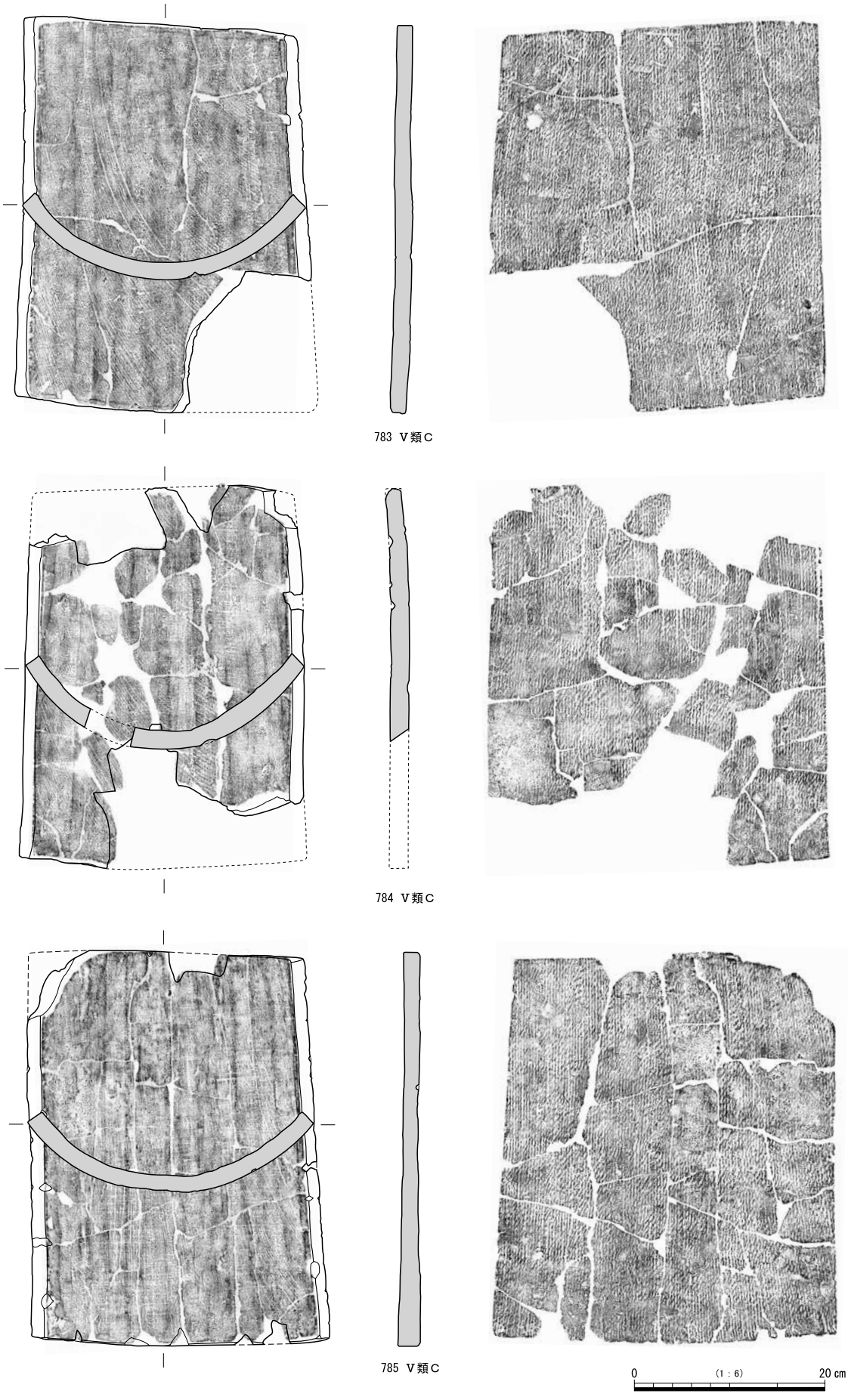


図 249　１号窯窯体内出土平瓦（21）

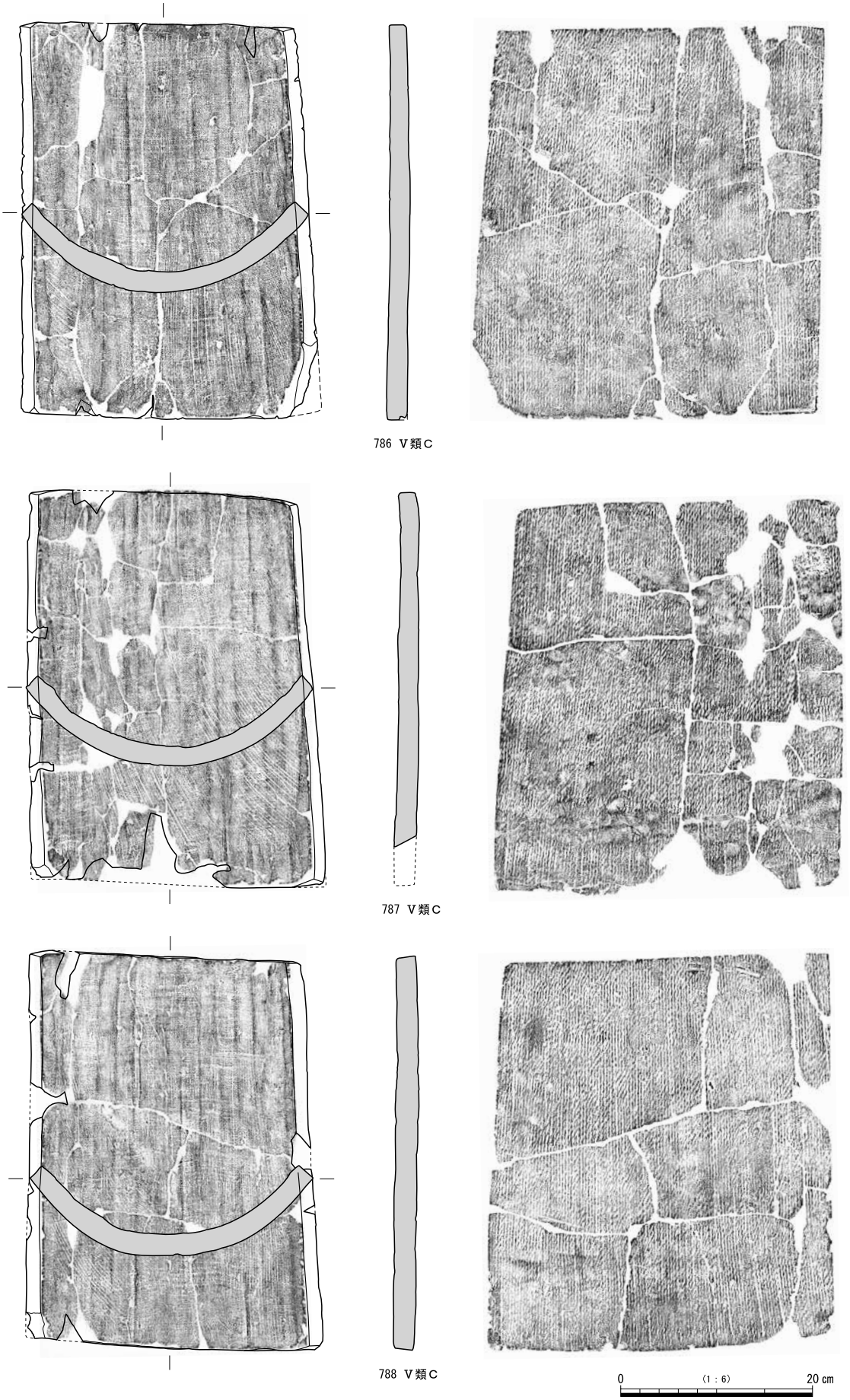


図 250　1 号窯窯体内出土平瓦（22）

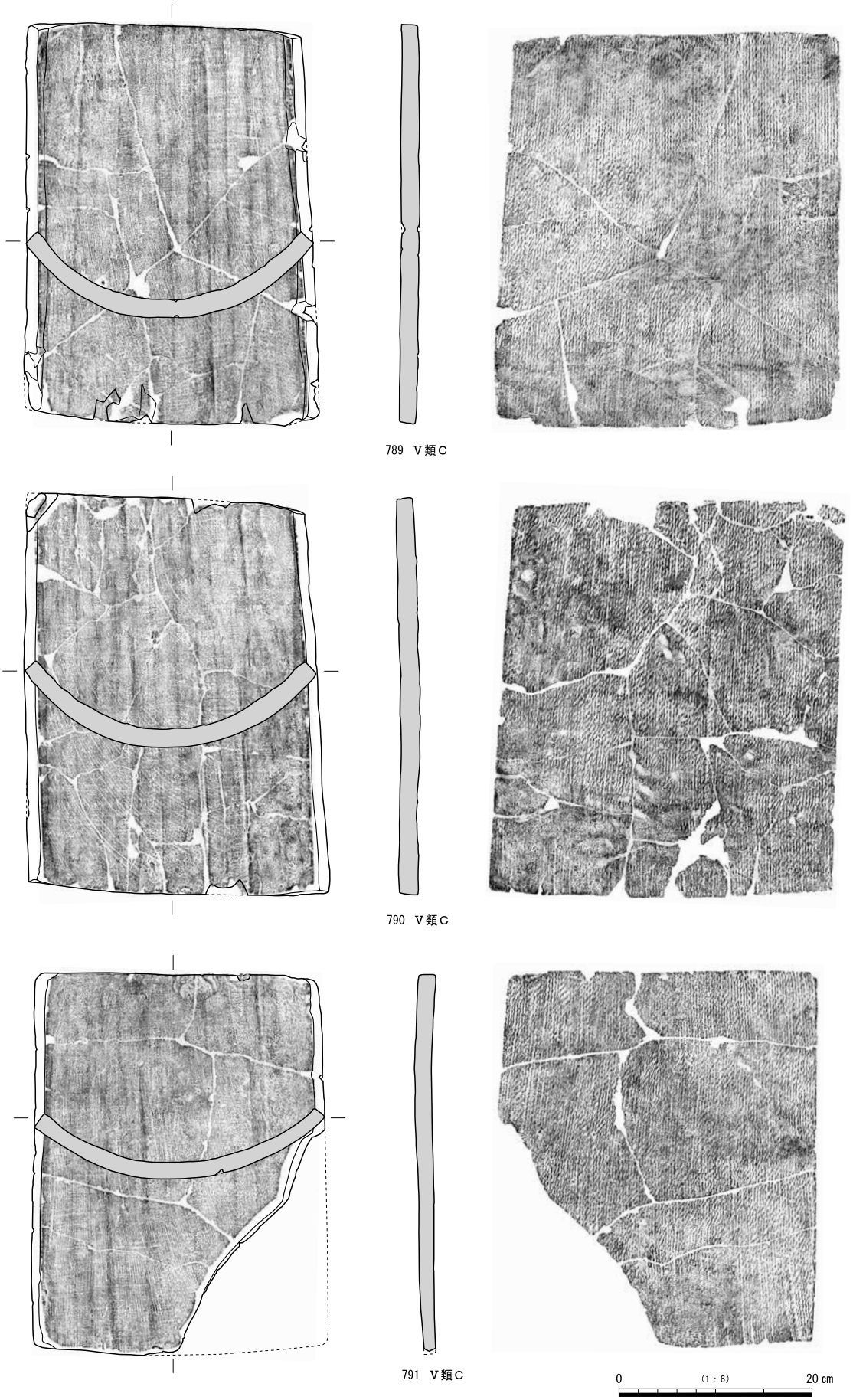


図 251　１号窯窯体内出土平瓦（23）

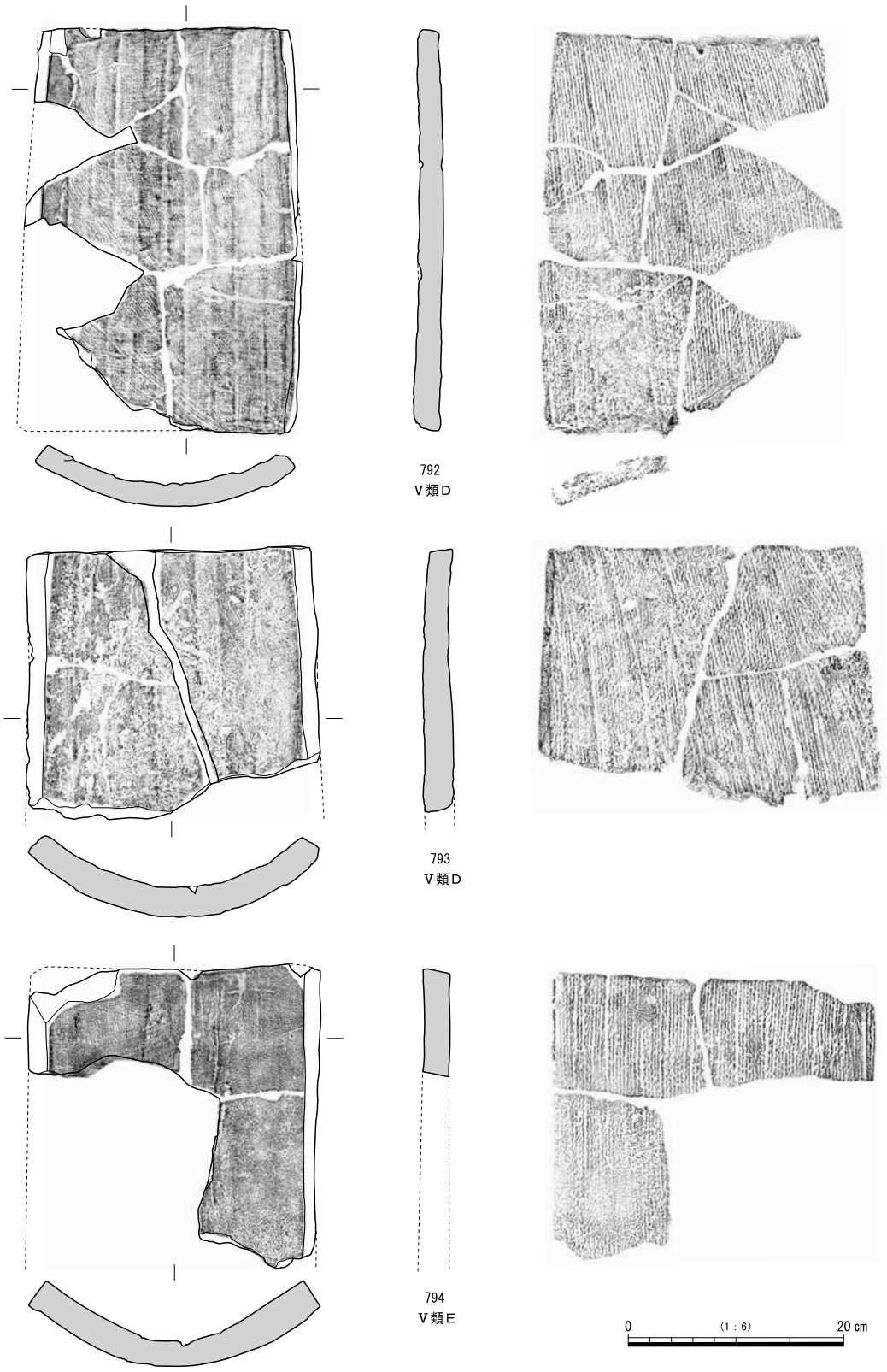


図 252　1 号窯窯体内出土平瓦（24）

Ⅴ類Ｅ　794 はⅤ類Ｅの広端部である。狭端幅は 24 ㎝であり、非常に厚手のつくりである。凹凸面ともに無調整で、凸面には縦方向の縄叩き、凹面には布目が残る。側面は分割截面に沿って全体を削る。法量や非常に厚手のつくりである点がⅡ類Ｅと類似しており、Ⅱ類Ｅの凹面調整を省略したものとみることができる。段構築瓦の破片と灰原から出土した破片が接合している。

焚口閉塞瓦（図 253 ～ 257、図版 32・72）

第３章で記したように、１号窯の焚口では、窯を閉塞するために焚口に立てて並べた状態のままで、平瓦が残存していた。これらの平瓦は、出土した状況から同時期のものであることが確実な資料である。風化が著しいために破片が接合しなかった部分もあるが、いずれもほぼ完形のものであり、出土した 11 点を全て図示する。

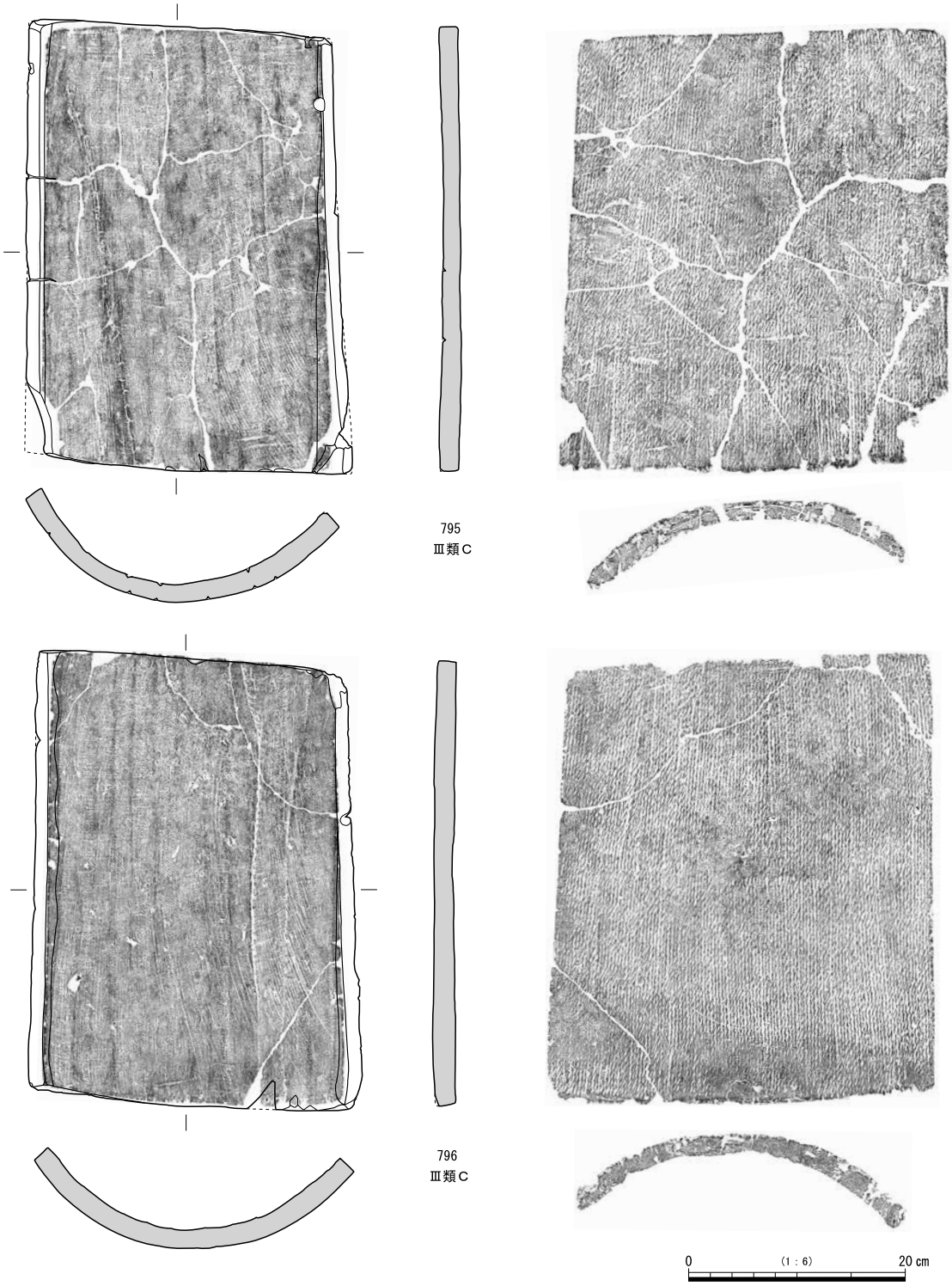


図 253　１号窯焚口閉塞瓦（１）

Ｖ類Ｃ　焚口の閉塞に使用されていた 795 ～ 805 は、すべてＶ類Ｃである。法量は、全長 36 ～ 37 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが残る。凹面は側縁に面取りが施されるほかは無調整で、全面に布目が残る。側面は分割截面に沿って全体を削る。側面と広・狭端面は、凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。いずれも胎土には砂粒が多く含まれている。全体的に黒色の色調を呈しており、窯の内部に位置した側が被熱して炭のようになっているも

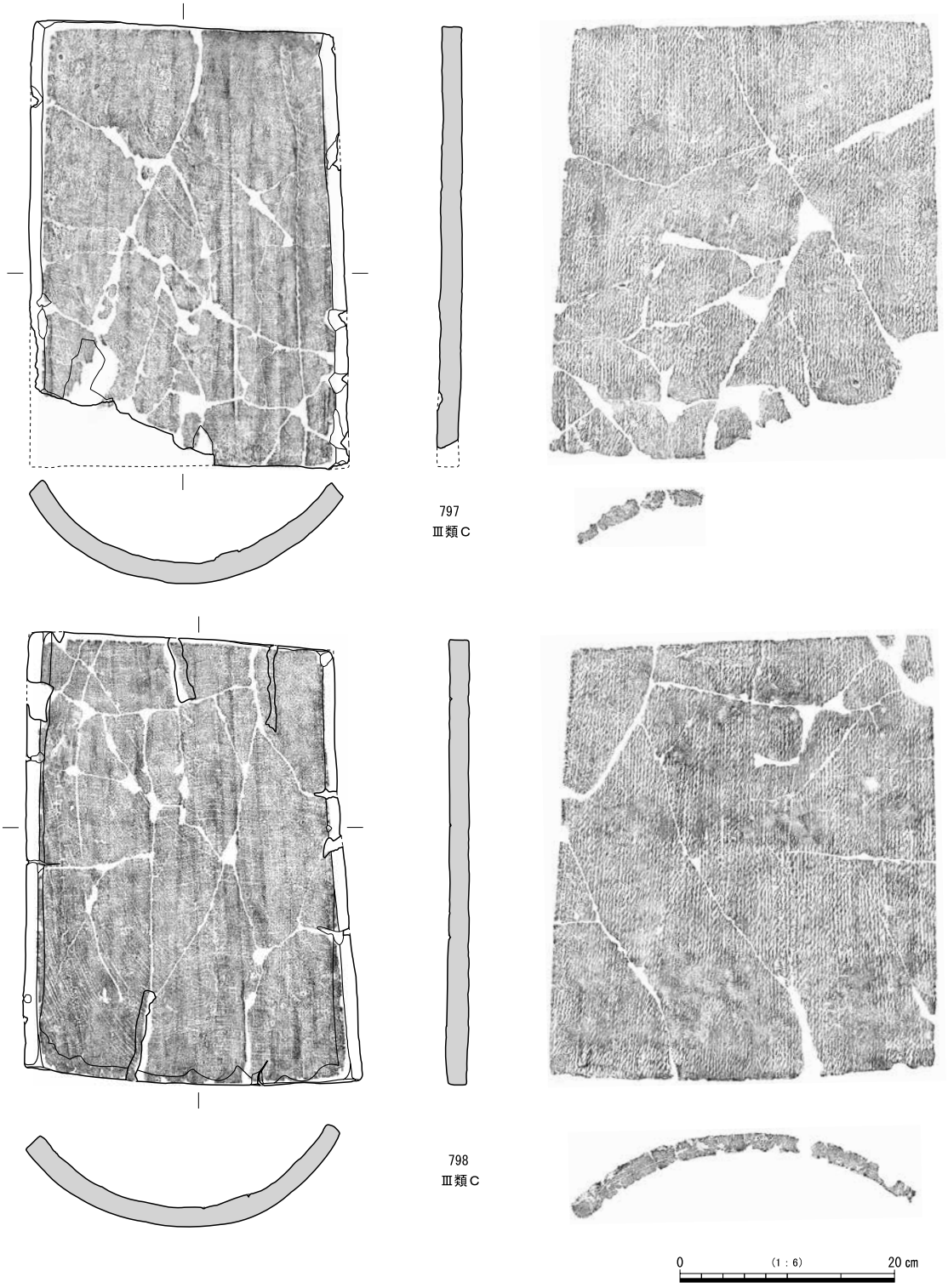


図 254　１号窯焚口閉塞瓦（２）

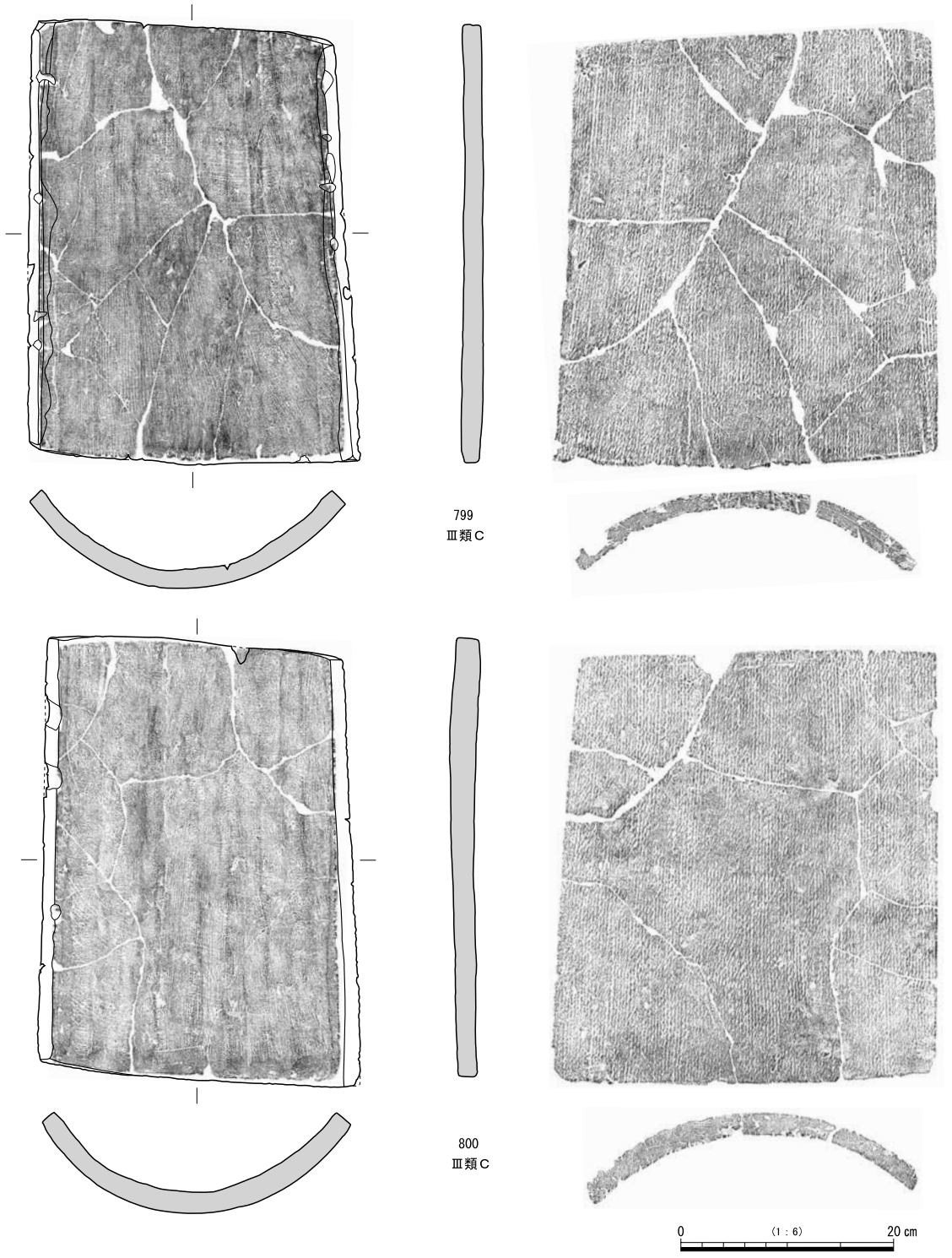


図 255　１号窯焚口閉塞瓦（３）

のもある。

795～798 には布綴じ痕が残る。いずれも綴じ目は、窯体内から出土したＶ類Ｃのものと一致しており、同一の布袋を使用していたことがわかる。799・800 には粘土接合痕が確認できる。合わせ目はともにＳ型である。布綴じ痕と粘土接合痕の残る瓦の割合からみて、２～３の粘土円筒から分割されたものでないことは明らかである。あらかじめ焚口閉塞用の瓦として製作されたものではなく、生産された瓦の

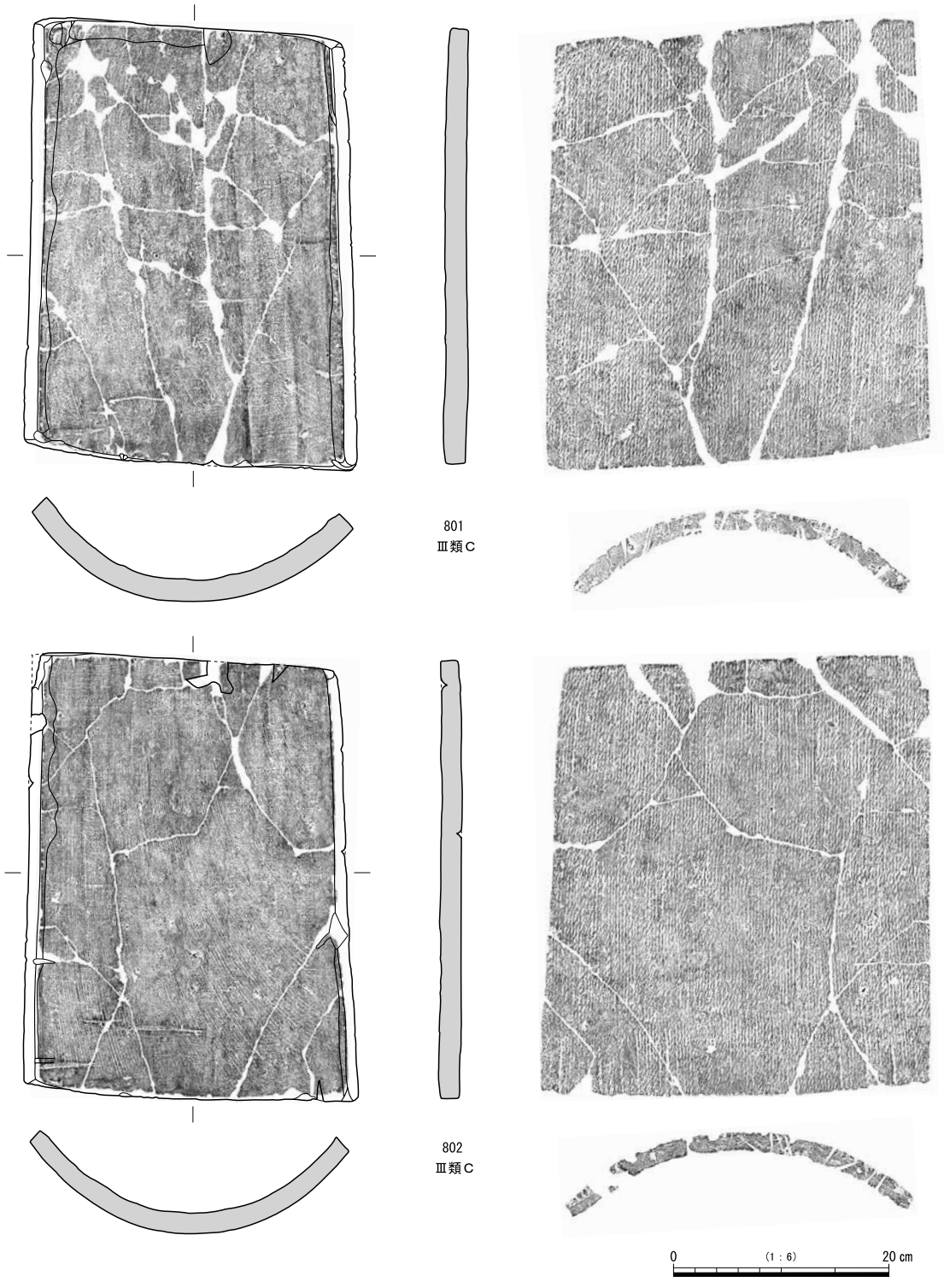


図 256　1 号窯焚口閉塞瓦（4）

中から任意に選択されたものとみてよい。

801・802 の広端面には、藁とみられる植物の痕跡が確認できる。痕跡は広端面の調整後に付着しており、方向も不規則である。同じ藁の痕跡ではあるが、粘土円筒の製作時に付着する藁座の痕跡ではないことは明らかである。調整後の乾燥時に下に敷かれていた藁が付着したものと推測される。

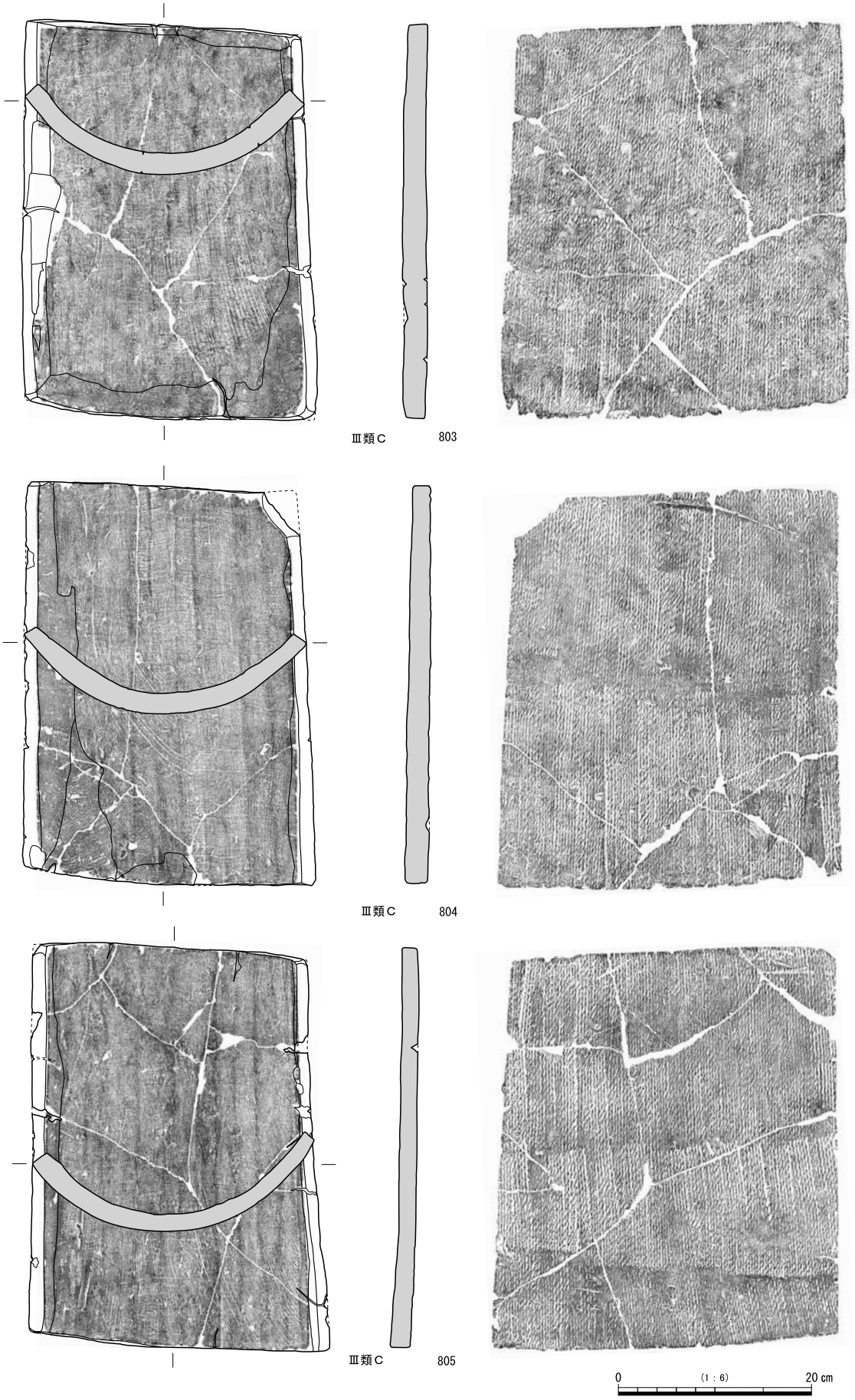


図 257　１号窯焚口閉塞瓦（５）

1 号窯燃焼室奥壁構築瓦（図 258）

第３章で報告したように、１号窯の燃焼室の奥壁には瓦が埋め込まれている。床面としては、第１次床面に伴うものではあるが、奥壁は非常に厚く表面に近い部分にあることから、修築する過程のもので塗り込まれている可能性が高い。いずれも破片のため細分はできないが、使用されている瓦は平瓦のⅡ類とⅤ類である。比較的残存状態の良好な７点を図示する。

806 はⅡ類の狭端部である。凸面はナデ調整で、横ナデ調整に縦ナデ調整が加えられている。凹面には布目が残り、狭端と側端の側縁に面取りが施されている。側面は凸面側に深く削られている。807 ～ 812 はⅤ類である。凸面には縦方向の縄叩きが残る。凹面には布目が残り、側縁に面取りが施されている。Ⅱ類は持ち込まれた瓦の可能性もあるが、Ⅴ類の瓦に関しては１号窯で焼成されたものとみてよい。

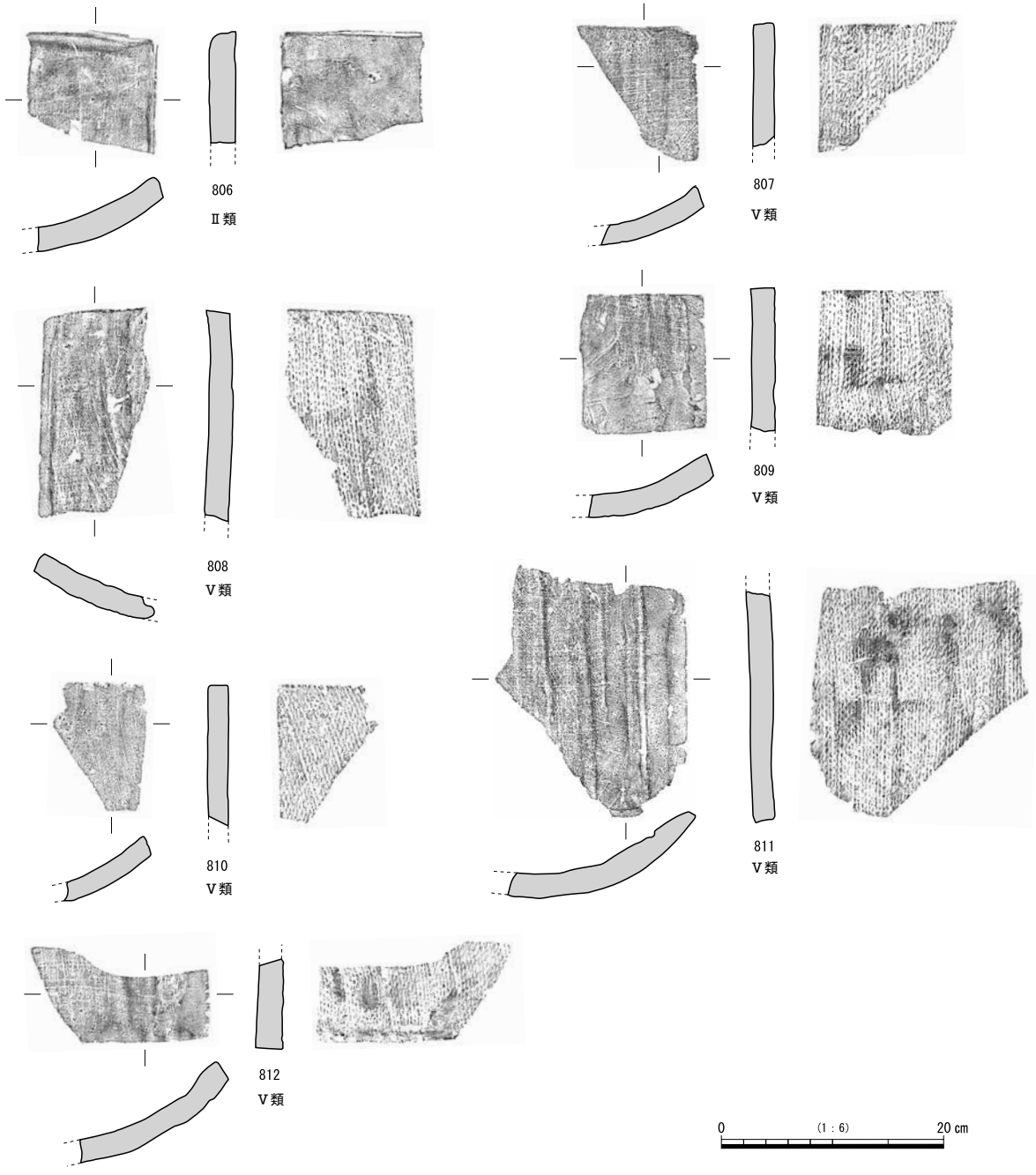


図 258　１号窯燃焼室奥壁構築瓦

１号窯灰原（図 259 ～ 275、図版 32）

１号窯灰原では、総重量 968.8 kg出土している。狭端部または広端部が残存するものを中心に、48 点を図示する。なお、法量が判明しないため図示していないが、Ⅱ類Ｆの破片も一定量の出土が確認できる。

Ⅱ類Ｄ　813 はⅡ類Ｄの狭端部である。凸面には全面にナデ調整が施されており、縦ナデ調整を主体とし、狭端付近は横ナデ調整により丸みを帯びた形状に仕上げられている。凹面は一部に軽いナデ調整を施しているが、大半が無調整で布目が残る。両側縁には面取りが施される。側面は分割截面に沿って全体を削っている。

Ⅱ類Ｅ　814 はⅡ類Ｅの広端部である。凸面には全面に横ナデ調整が施されており、部分的に縦ナデ調整が加えられている。凹面は無調整で布目が残り、やや風化して不鮮明ではあるが布綴じ痕が確認できる。凹面の側縁には浅い面取りが施されており、面取りは凹面側の片側にも加えられている。側面は分割截面に沿って全体を削るが、凹面側にやや深くなっている。全体的に厚手のつくりである。

Ⅳ類Ｂ　815 ～ 818 はⅣ類Ｂである。法量は、全長 39 ～ 41 ㎝・狭端幅 27 ～ 28 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝である。凸面は無調整で縦縄叩きが明瞭に残り、側縁には面取りが施されている。凹面には全面に縦ナデ調整が施されている。側面は分割截面に沿って全体を削る。いずれも法量や基本的な調整方法はⅣ類Ｂであるが、細部には若干の違いがみられる。815 ～ 817 は、凸面側の側縁に面取りが施されるなど、２号窯出土のⅣ類Ｂと同じ調整である。817 は、厚手で湾曲が大きく、側面がやや凸面側に深く削るなど、１号窯の窯体内で出土したⅣ類Ｂと同じ調整方法が用いられている。灰原で双方が出土していることからみて、１号窯でのある段階で細部の調整に変化が生じた可能性が高いと推測される。

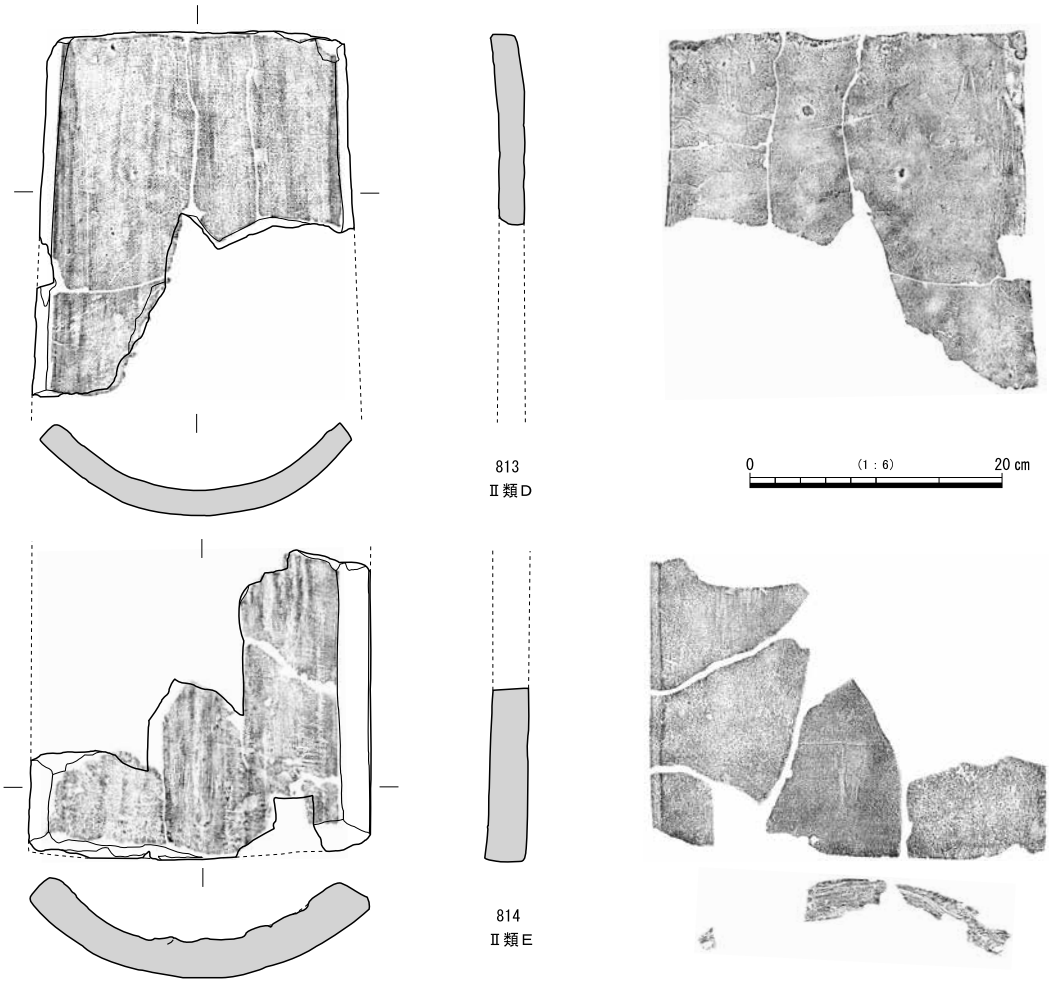


図 259　１号窯灰原出土平瓦（１）

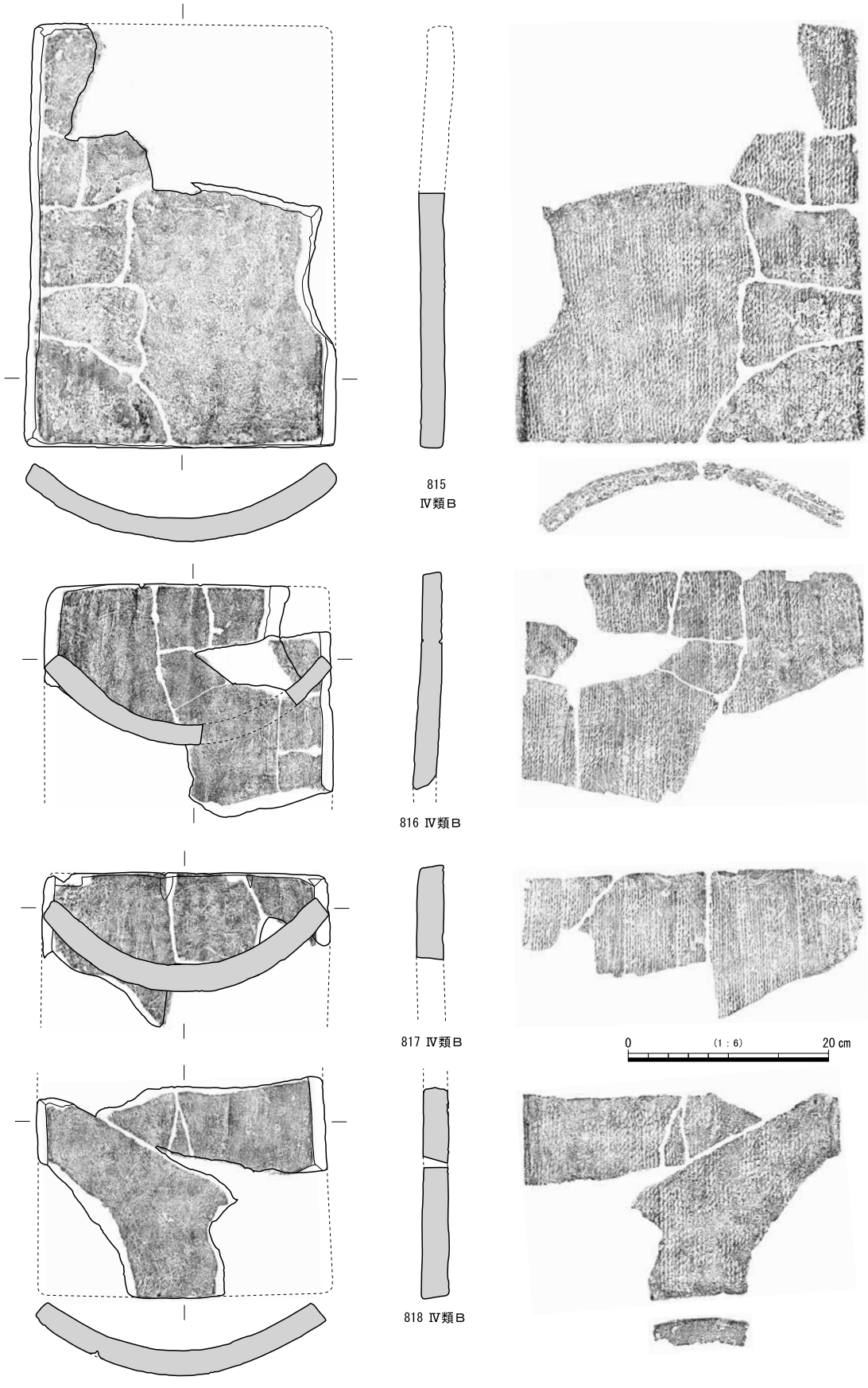


図 260　1 号窯灰原出土平瓦（2）

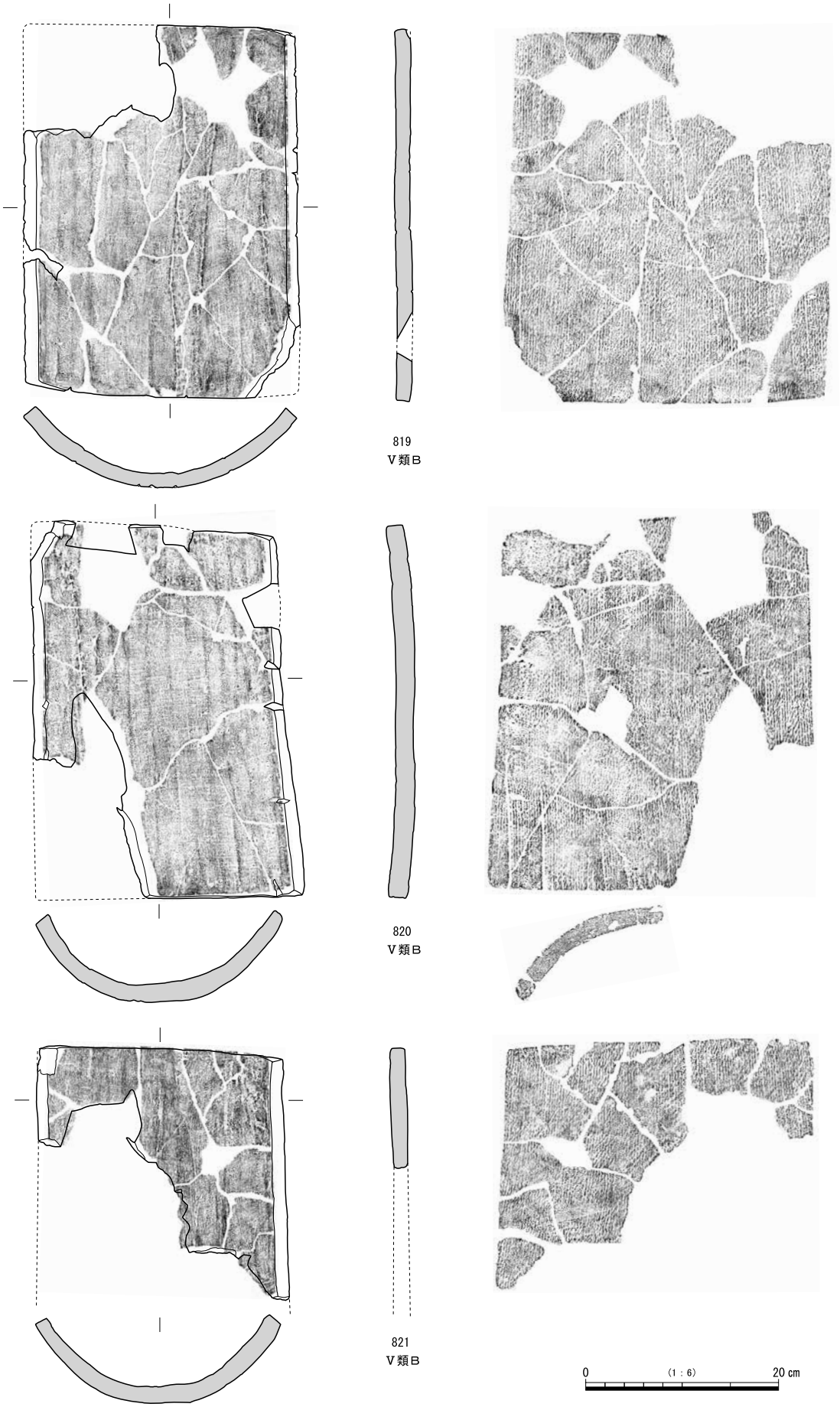


図 261　１号窯灰原出土平瓦（３）

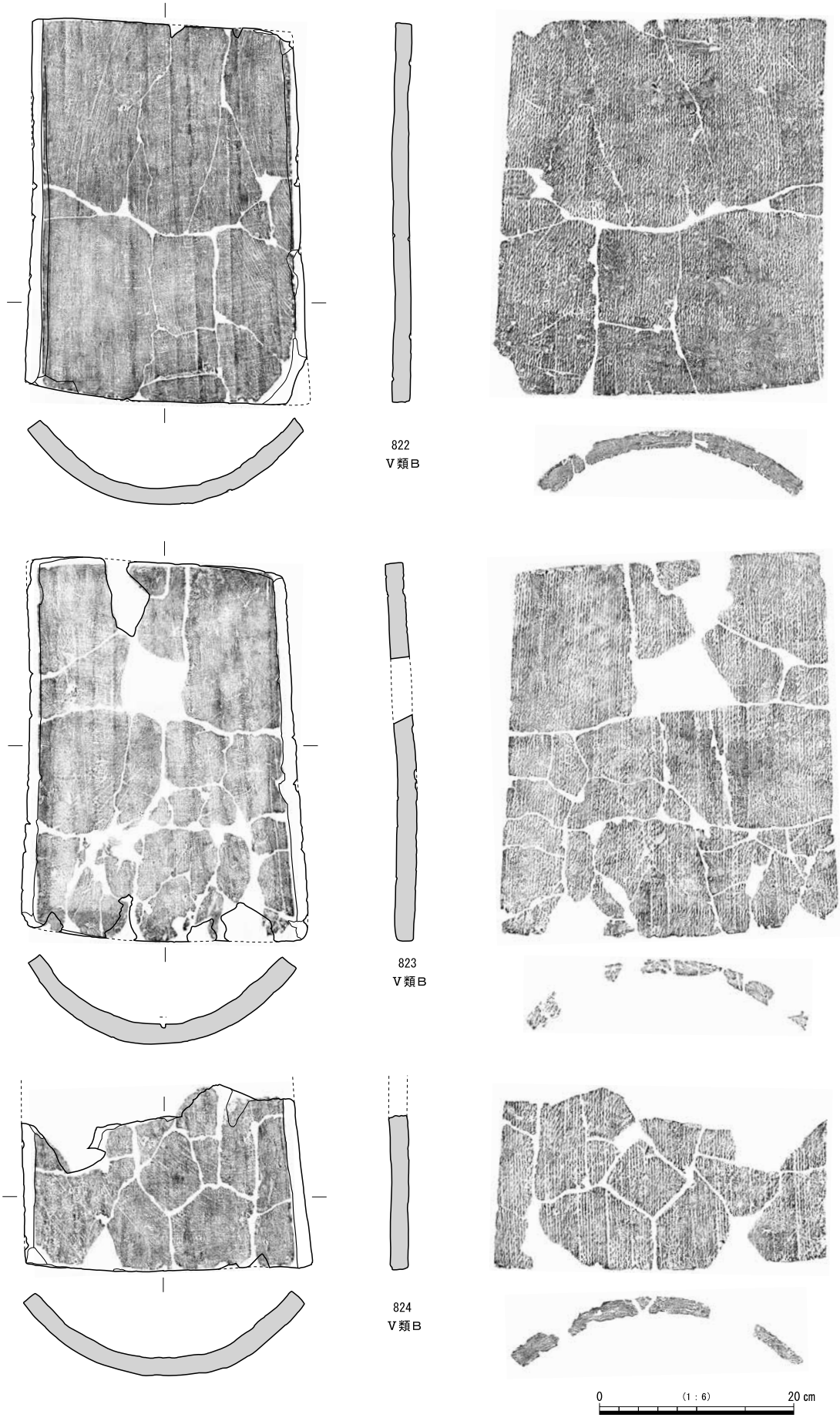


図 262　1 号窯灰原出土平瓦（4）

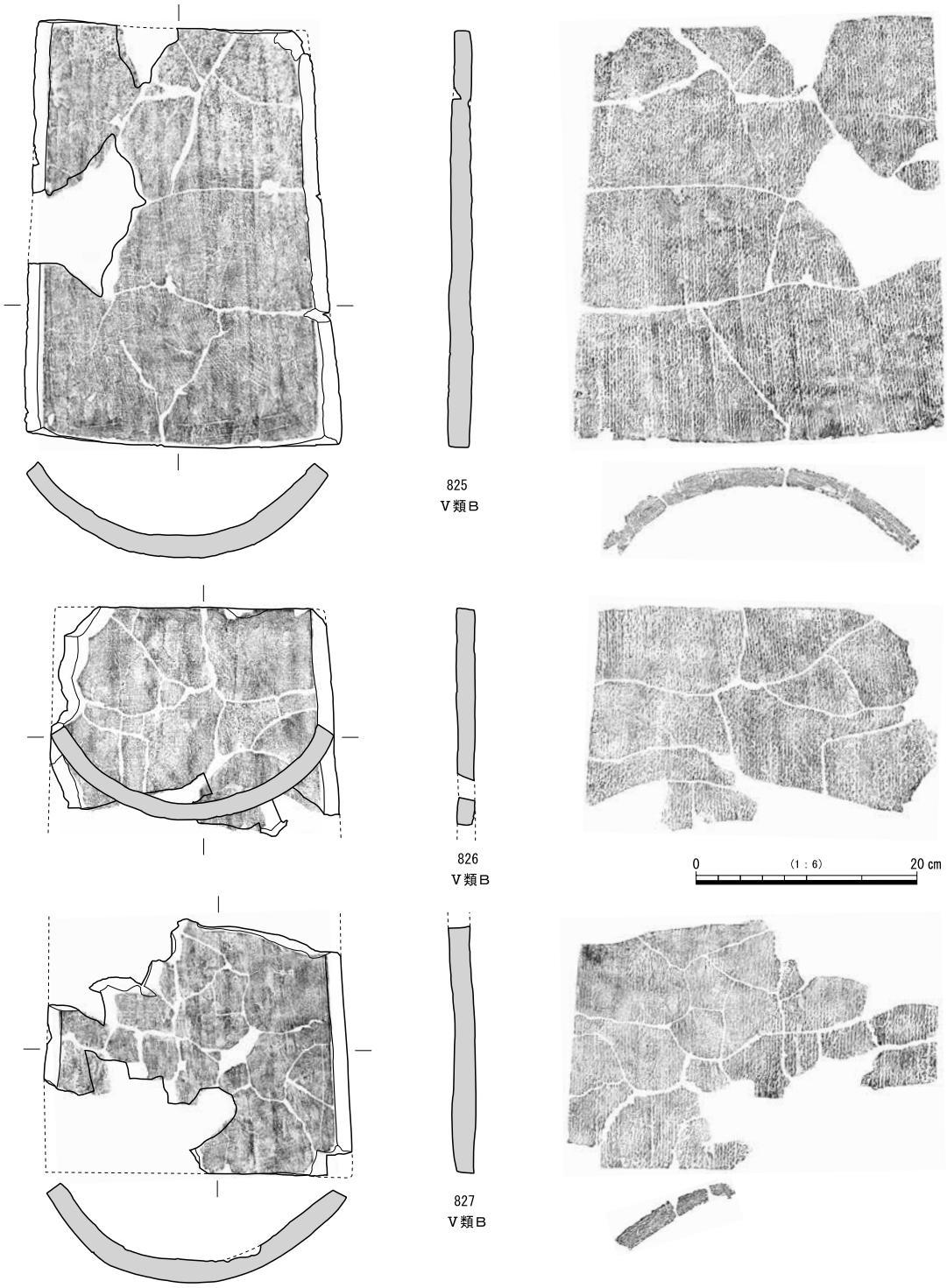


図 263　１号窯灰原出土平瓦（５）

Ⅴ類Ｂ　819 ～ 827 はⅤ類Ｂである。法量は全長 38 ～ 40 ㎝・狭端幅 24 ～ 26 ㎝・広端幅 26 ～ 28 ㎝である。凸面は無調整で縦方向の縄叩きが残る。凹面は、一部に軽いナデ調整を施すものもあるが、基本的には無調整でほぼ全面に布目が残る。四側縁はやや幅広に面取りされているものが多い。側面は分割截面に沿って全体を削る。凹面を上にした状態で、四側面が時計回りの方向に調整されている。胎土には砂粒が多く含まれており、黒色の色調を呈するものが多い。819 ～ 821 の凹面には布綴じ痕が残る。窯体内出土のものと同様に、綴じ目はⅤ類Ｃのものと同一であり、同じ布袋が使用されている。

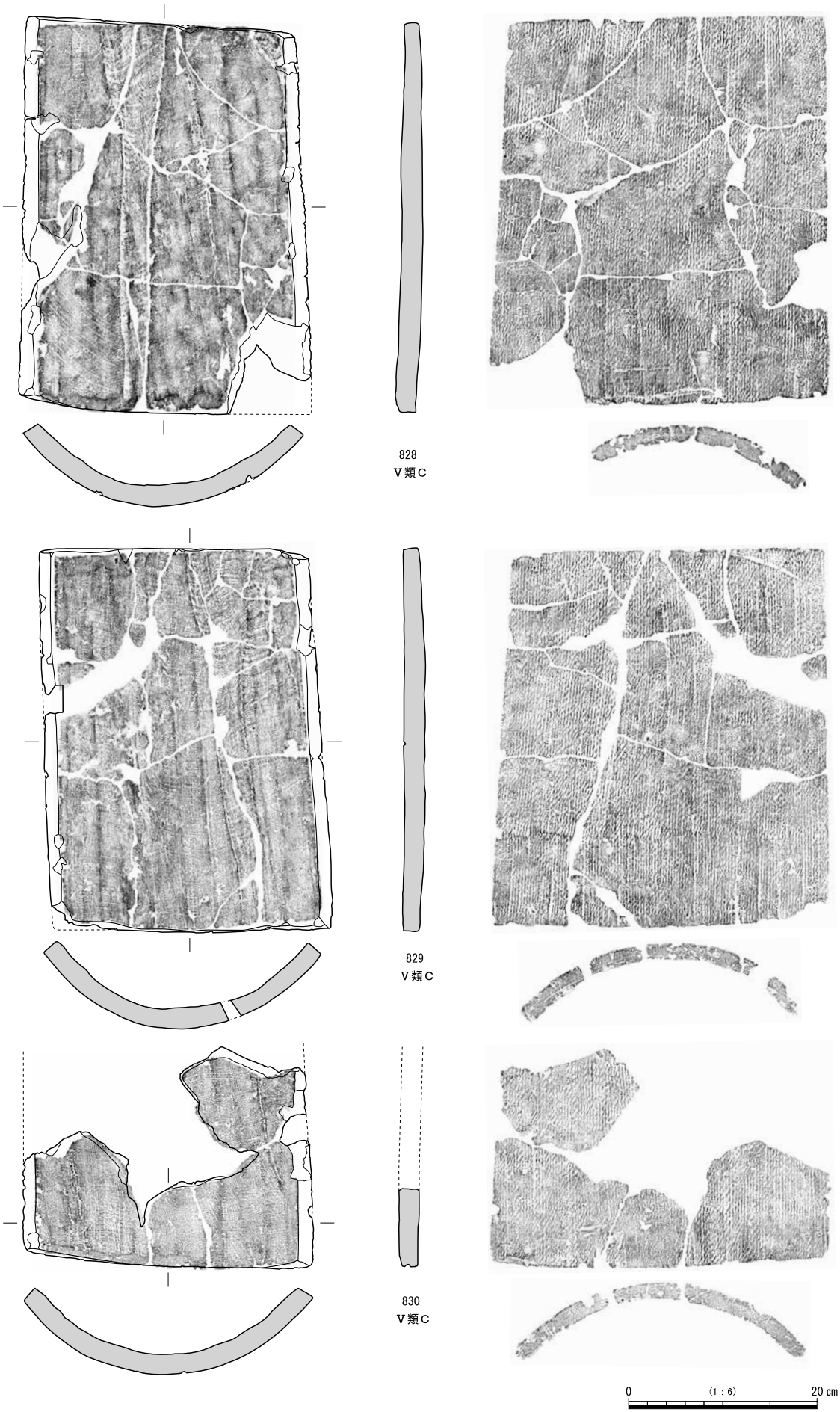


図 264　1 号窯灰原出土平瓦（6）

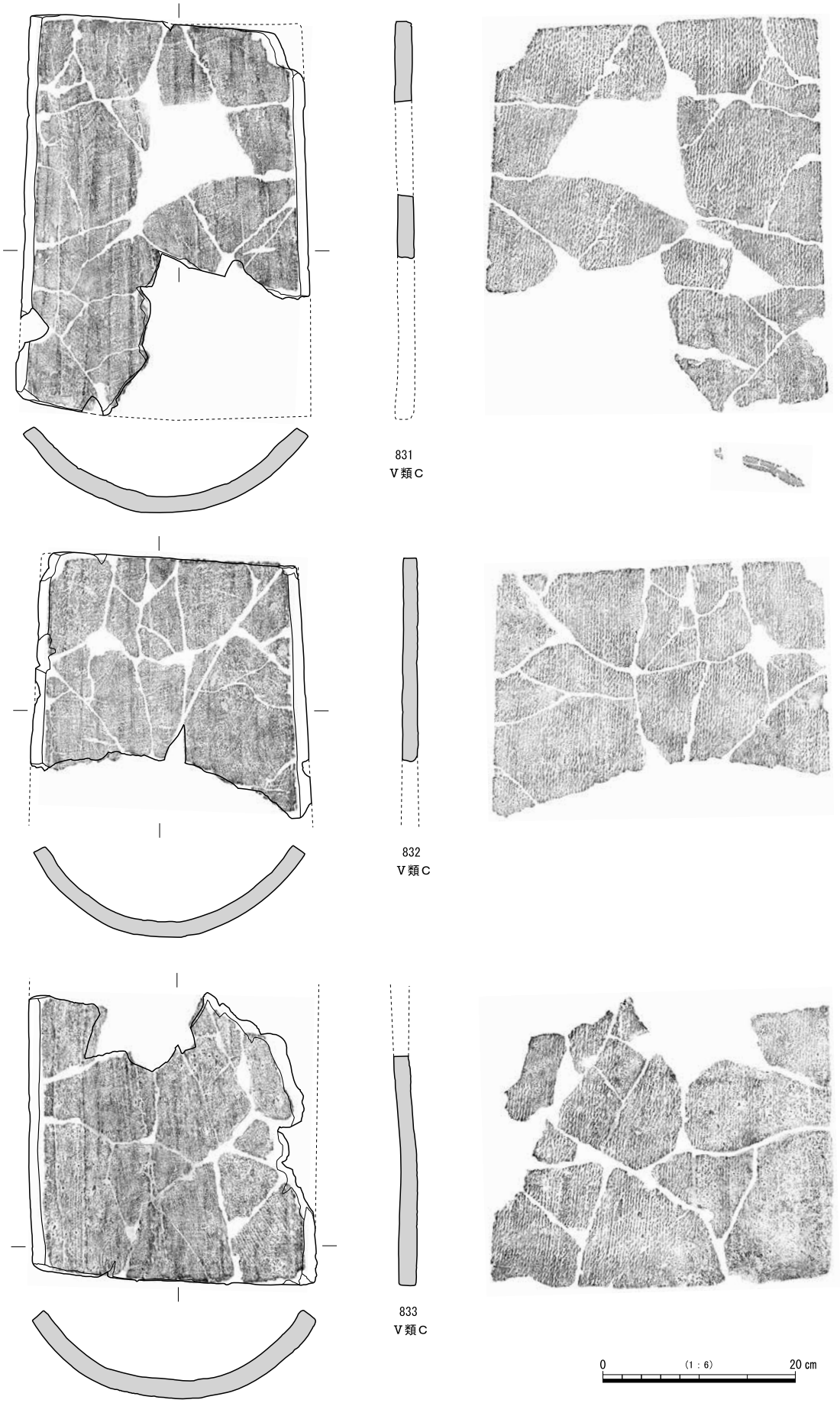


図 265　１号窯灰原出土平瓦（７）

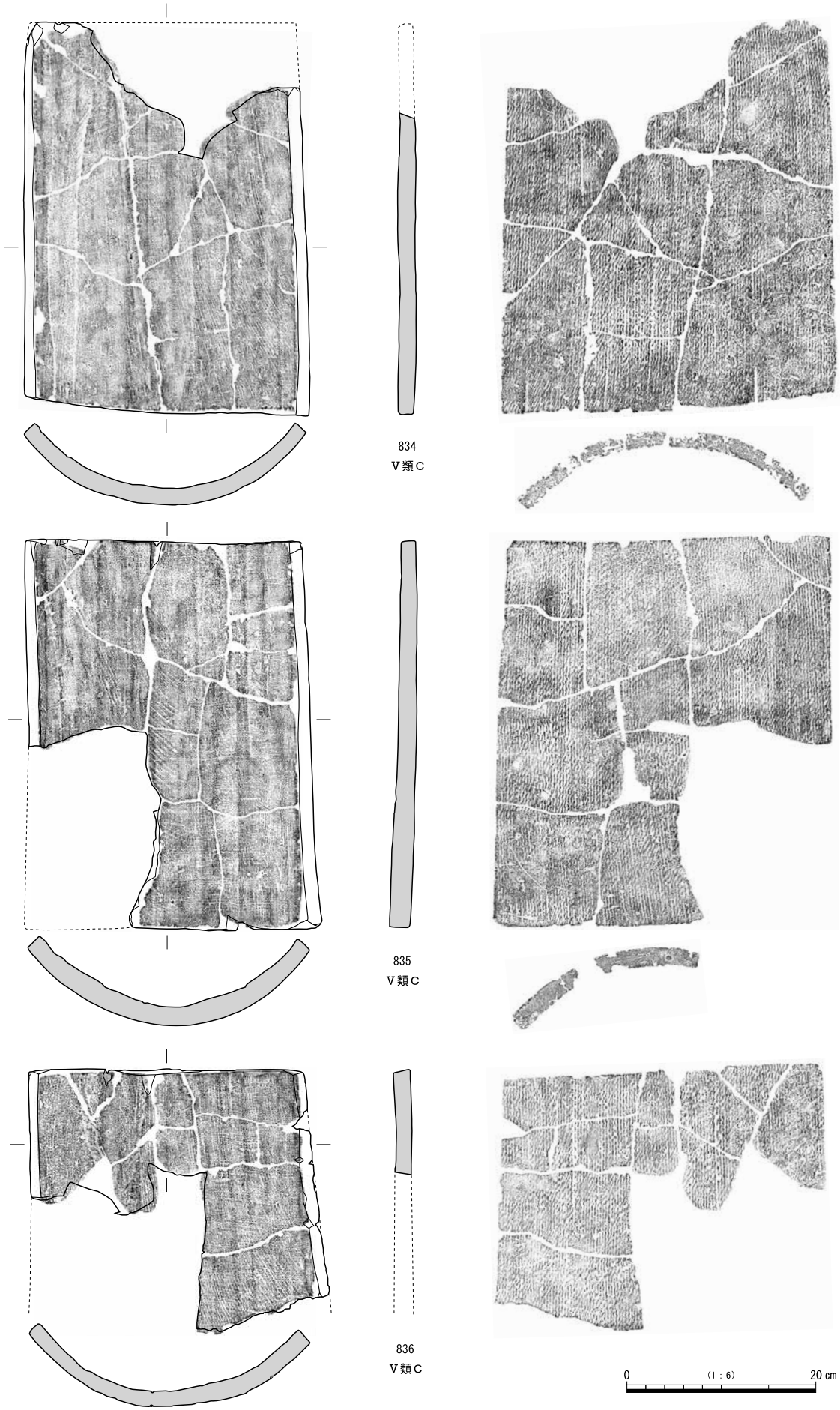


図 266　1 号窯灰原出土平瓦（8）

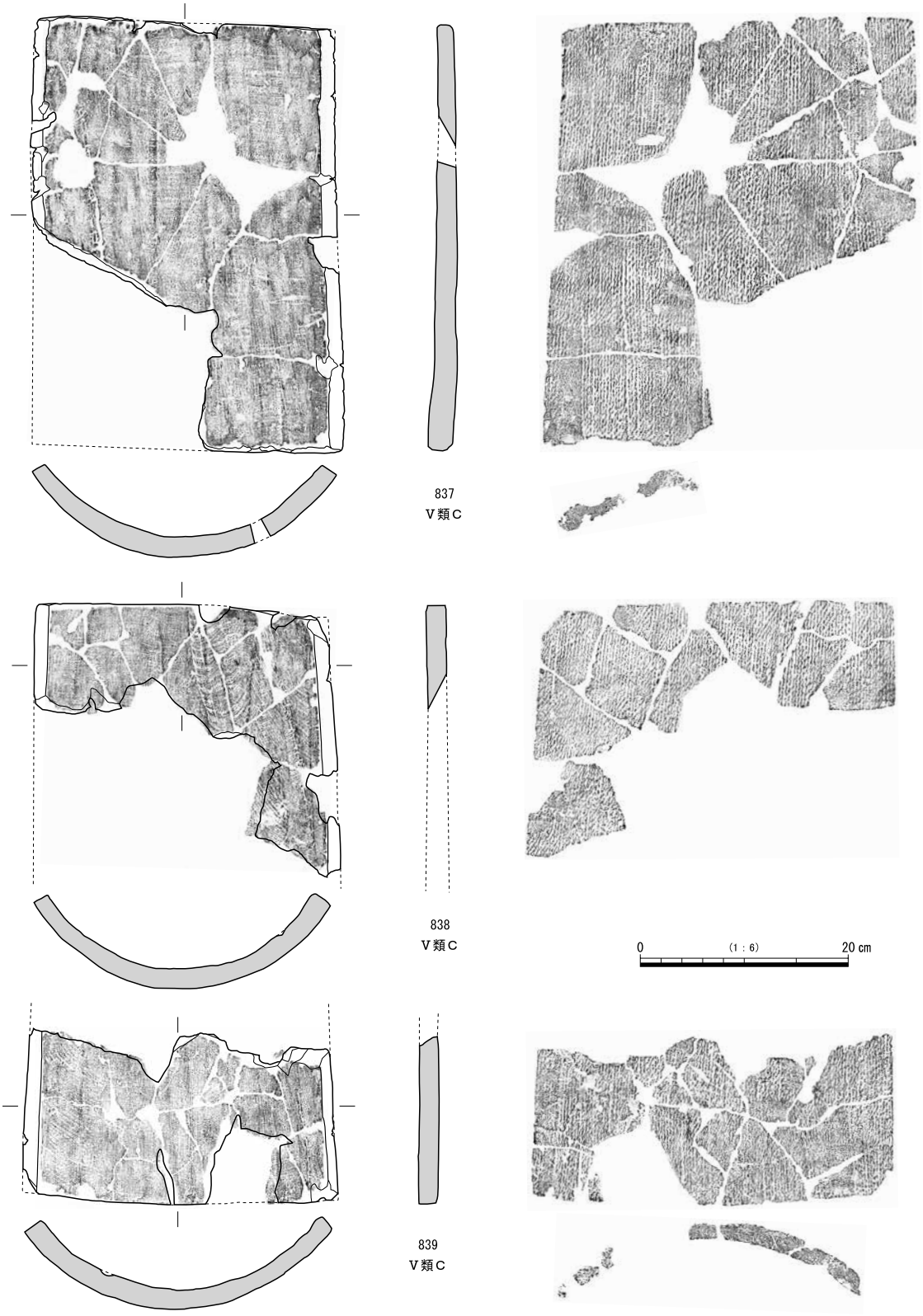


図 267　１号窯灰原出土平瓦（９）

Ⅴ類Ｃ　828 ～ 858 はⅤ類Ｃである。型の瓦で、法量は全長 40 ～ 41 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は、一部に軽いナデ調整を施す程度で、ほぼ全面に布目が残る。左右の両側縁にやや幅広の浅い面取りを施し、広・狭端側の側縁に

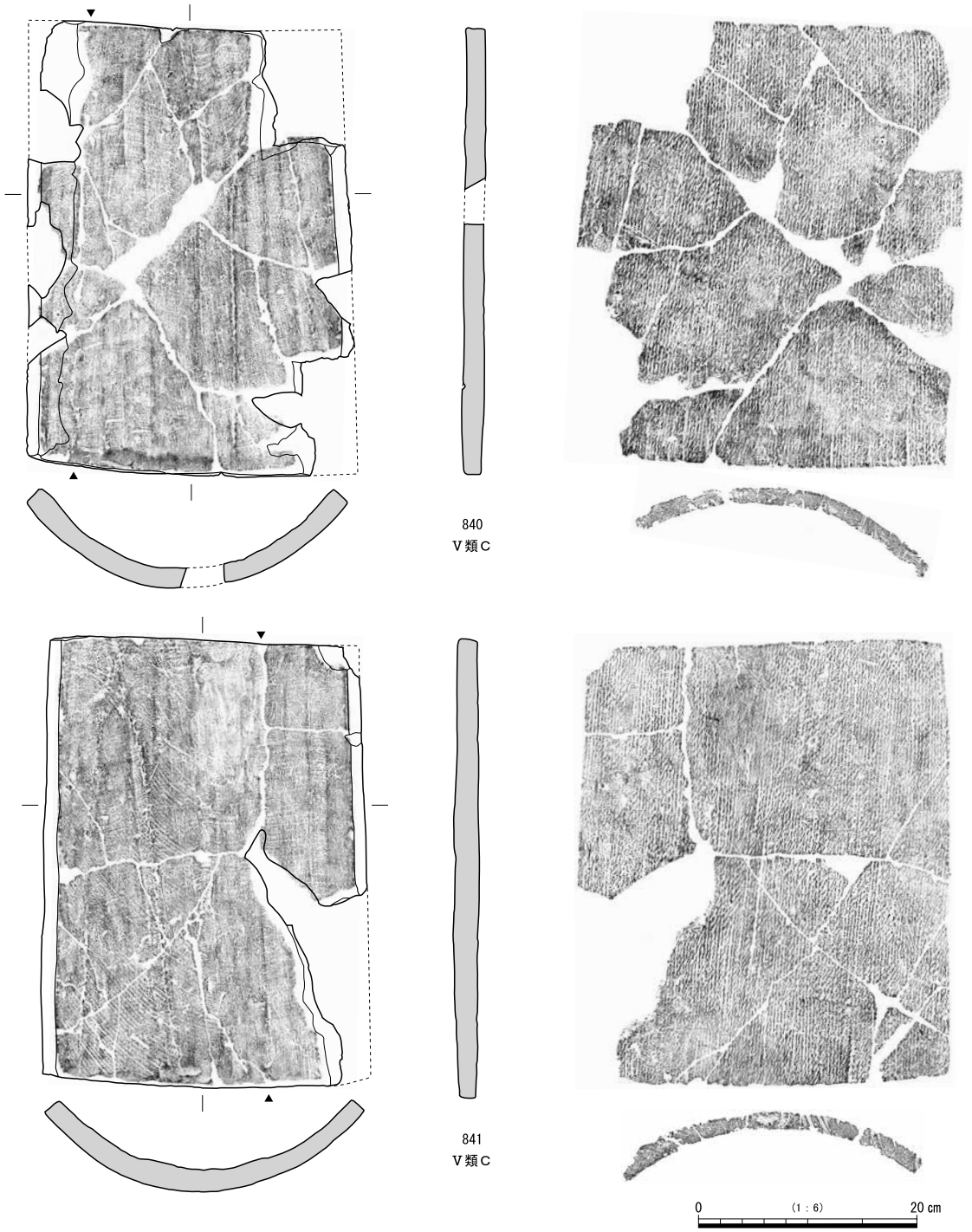


図 268　1 号窯灰原出土平瓦（10）

面取りを施すものもある。側面は分割截面に沿って全体を削る。側面と広・狭端面は、凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。胎土には砂粒を多く含み、ほとんどが黒色の色調を呈している。

828 ～ 841 の凹面には布綴じ痕が残る。いずれも綴じ目は同一であり、同じ布袋を使用して製作されていることがわかる。840 ～ 847 には粘土接合痕が確認できる。合わせ目は 840・844 が S 型、841 ～ 843・845 ～ 847 は Z 型である。841・843・853 の広端面には、藁とみられる植物の痕跡が残る。痕跡は疎らであり、調整後に付着している。分割・調整後の乾燥時に、下に敷かれていた藁が転写されたものと推測される。

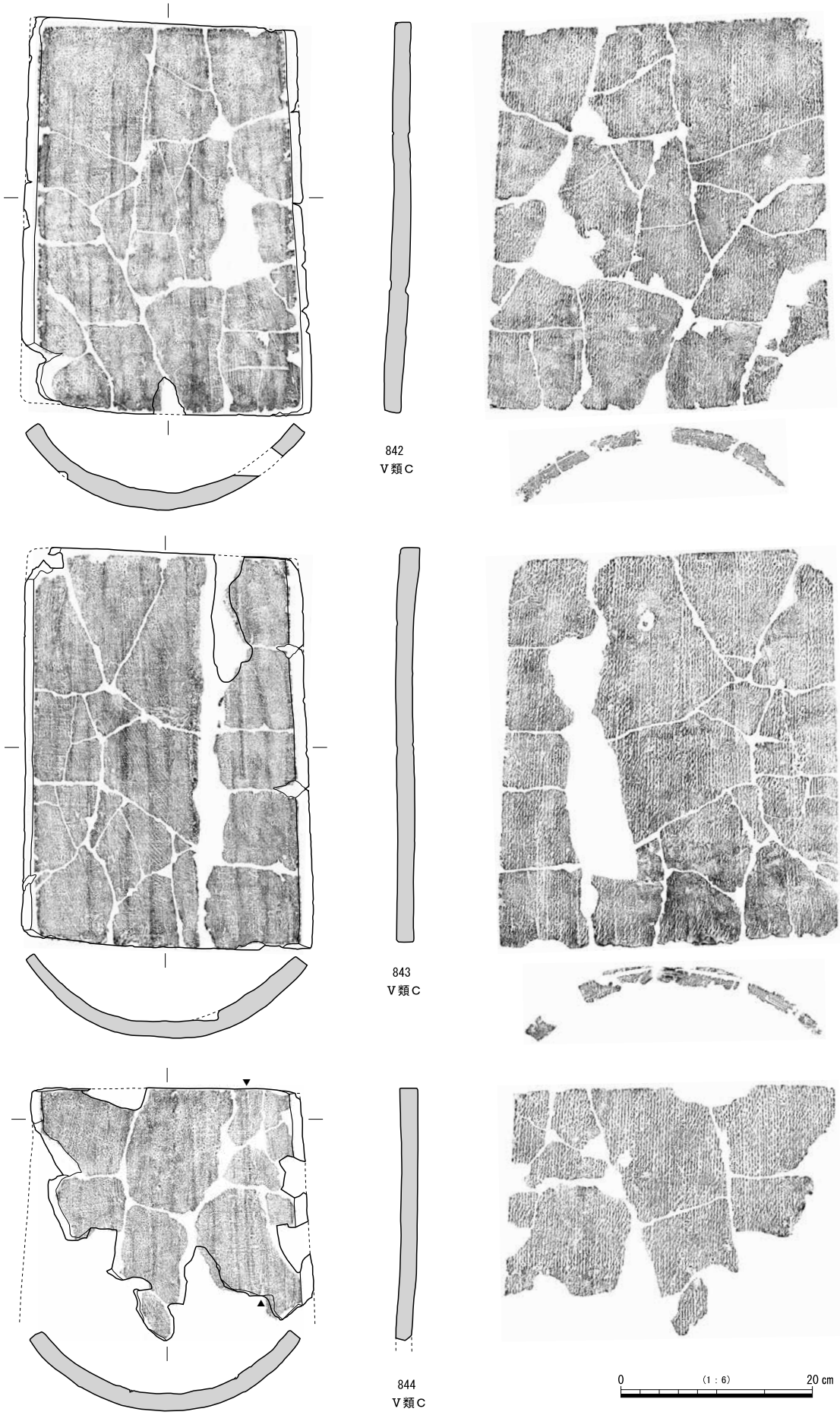


図 269　１号窯灰原出土平瓦（11）

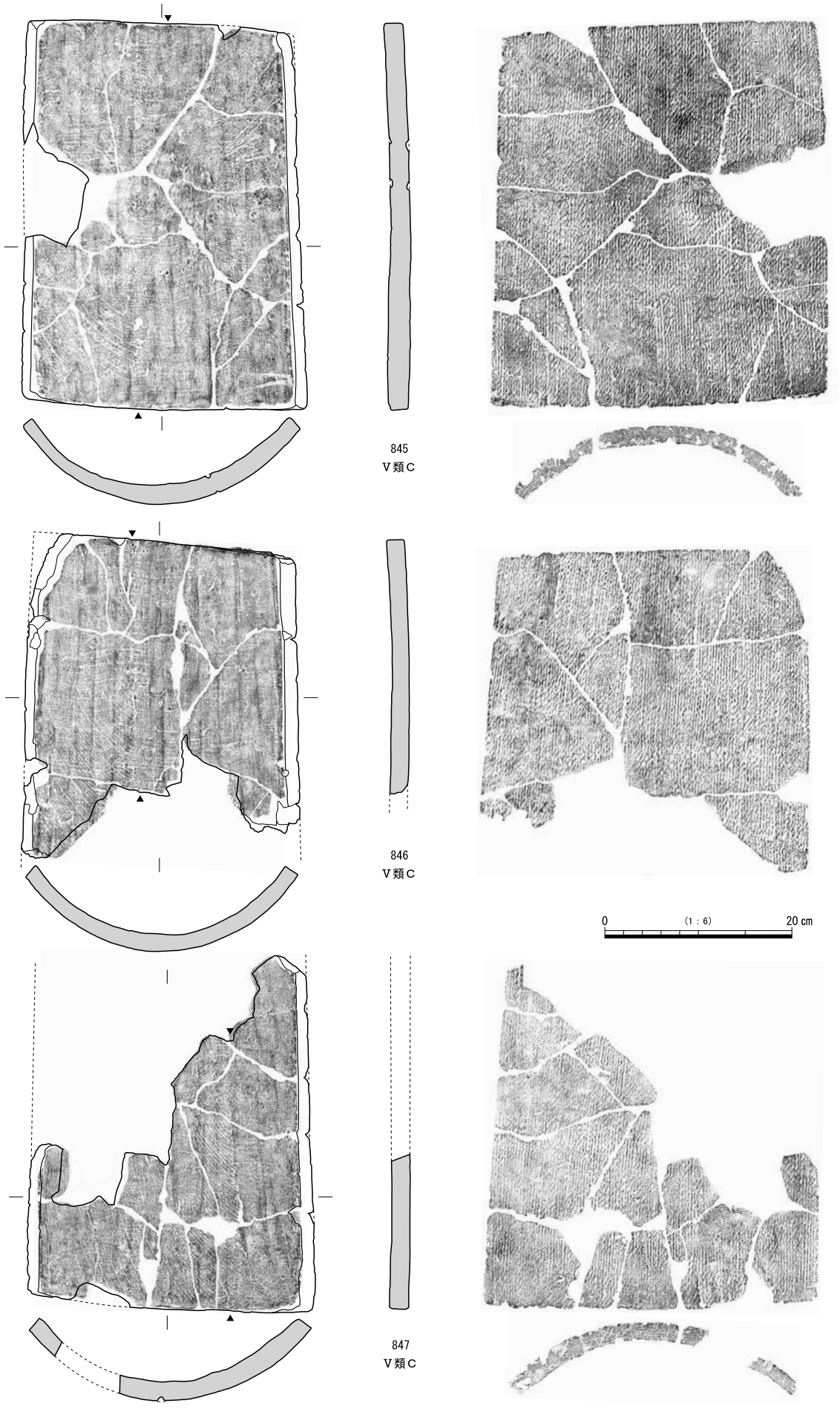


図 270　1 号窯灰原出土平瓦（12）

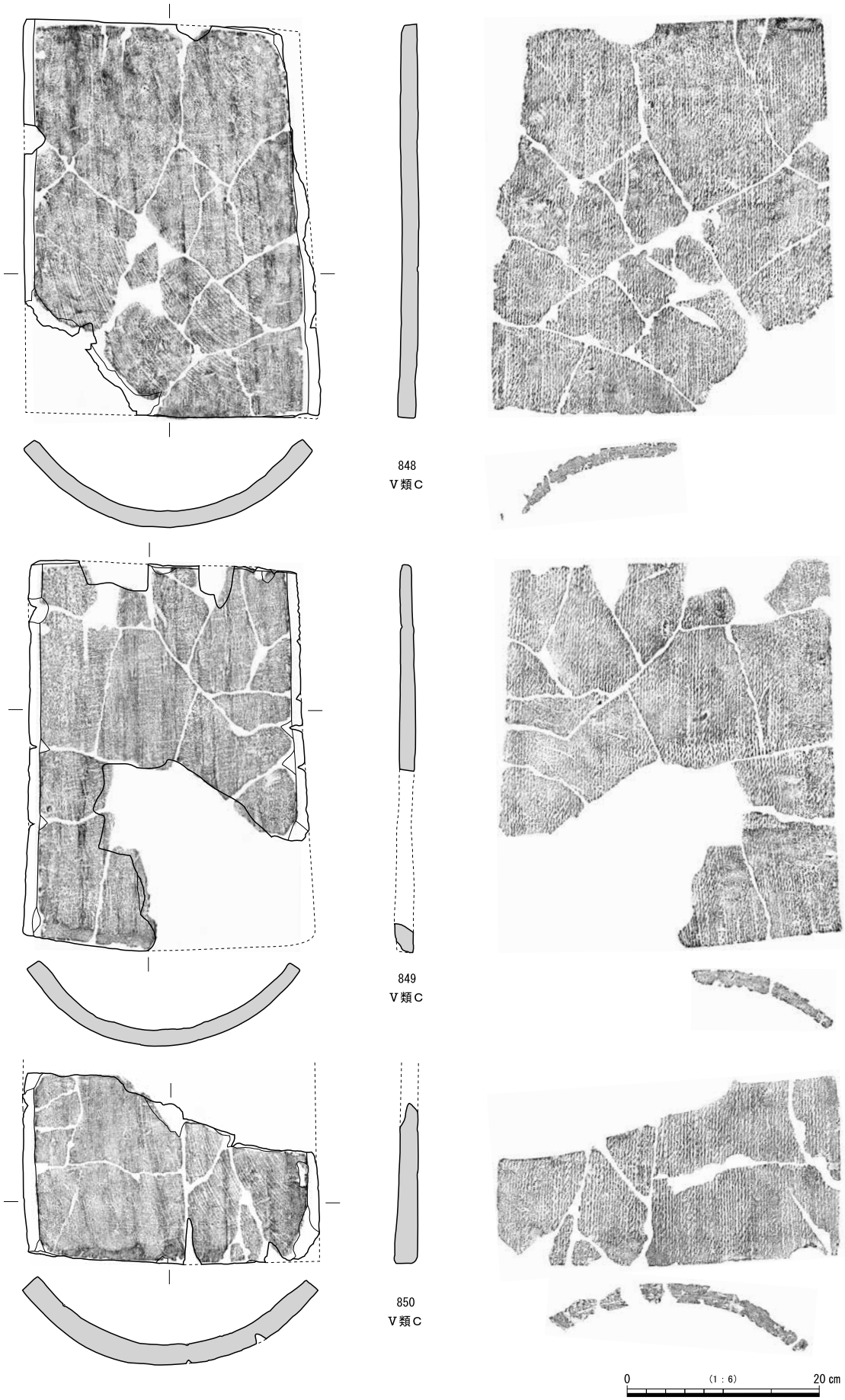


図 271　１号窯灰原出土平瓦（13）

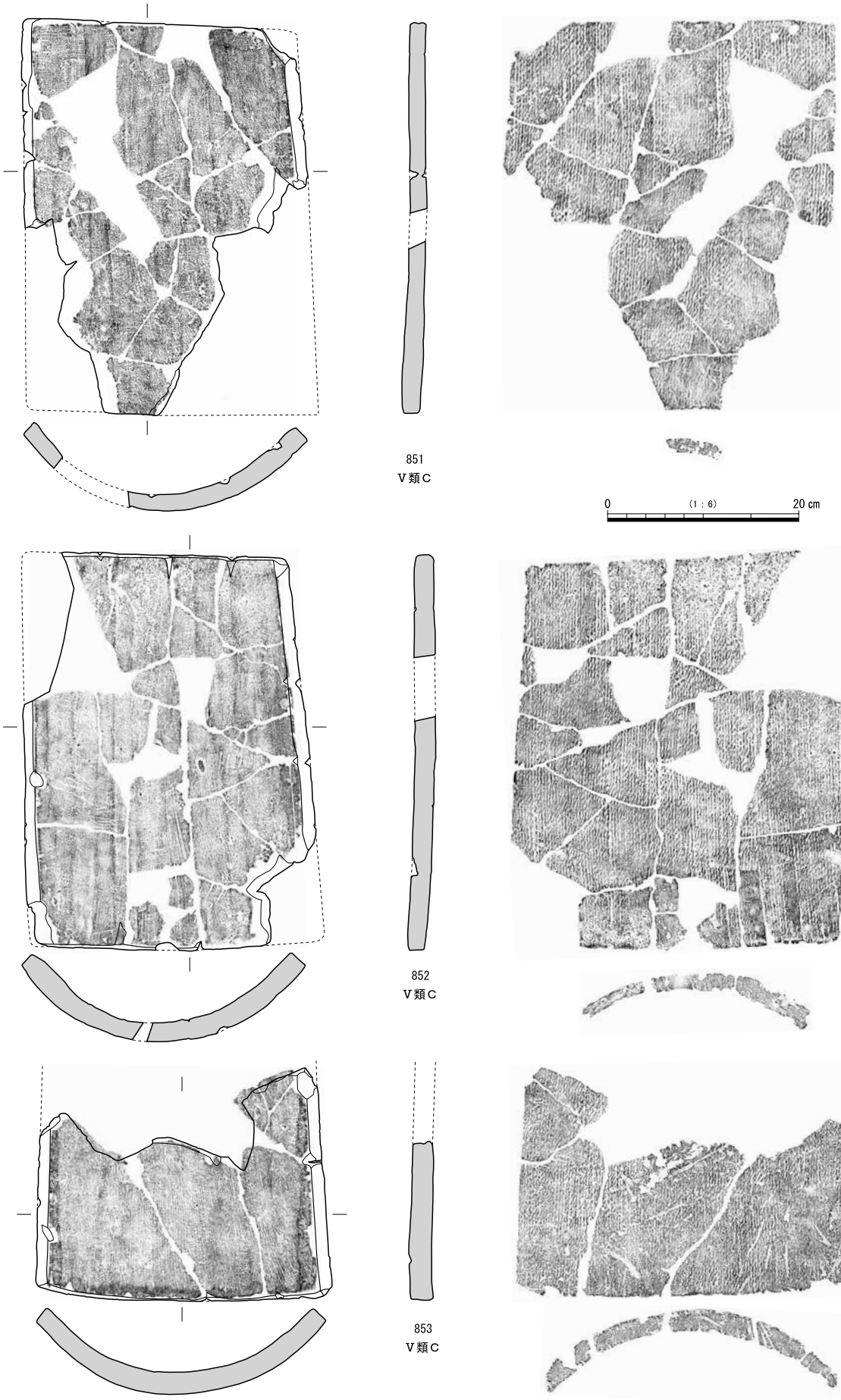


図 272　1 号窯灰原出土平瓦（14）

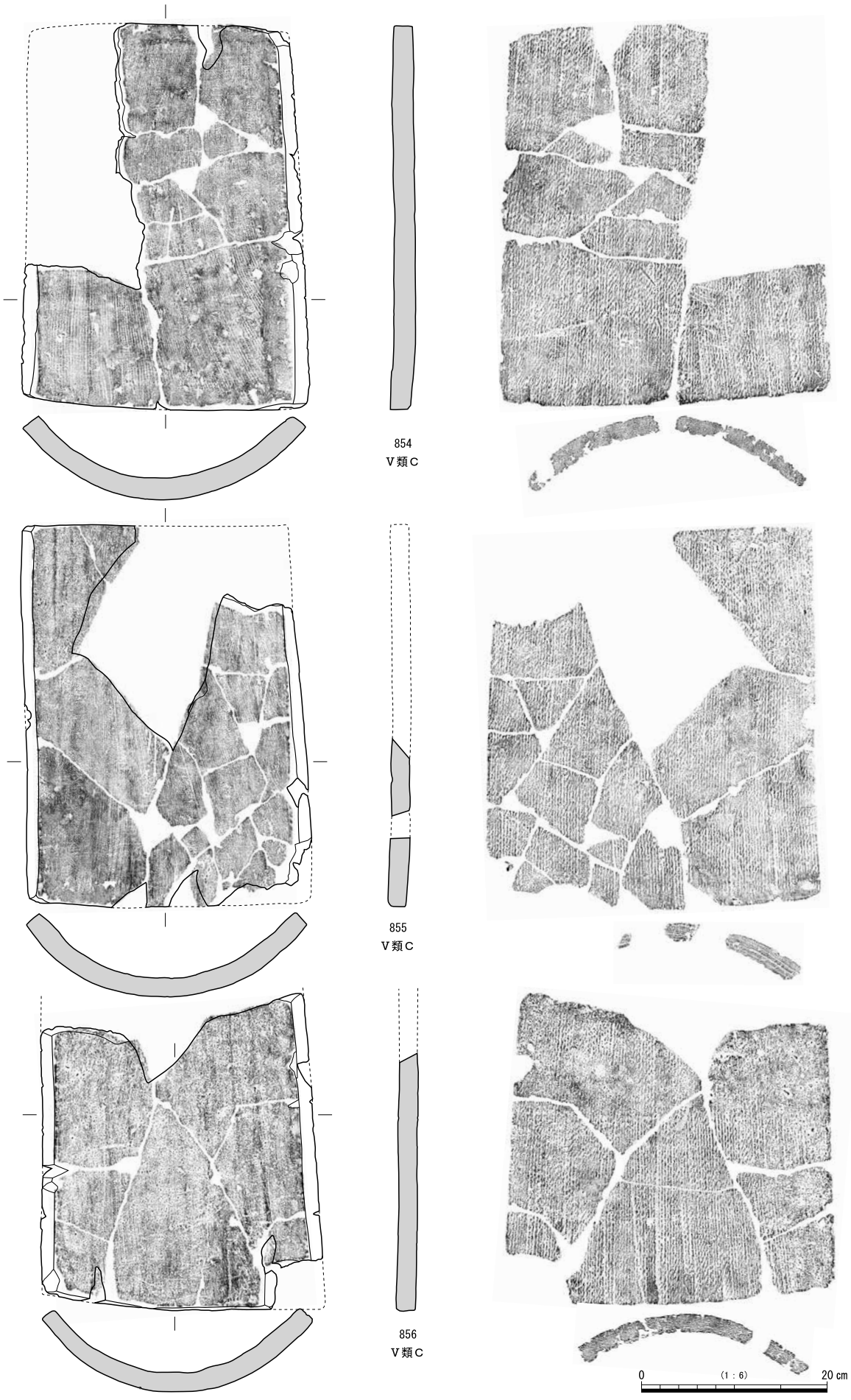


図 273　１号窯灰原出土平瓦（15）

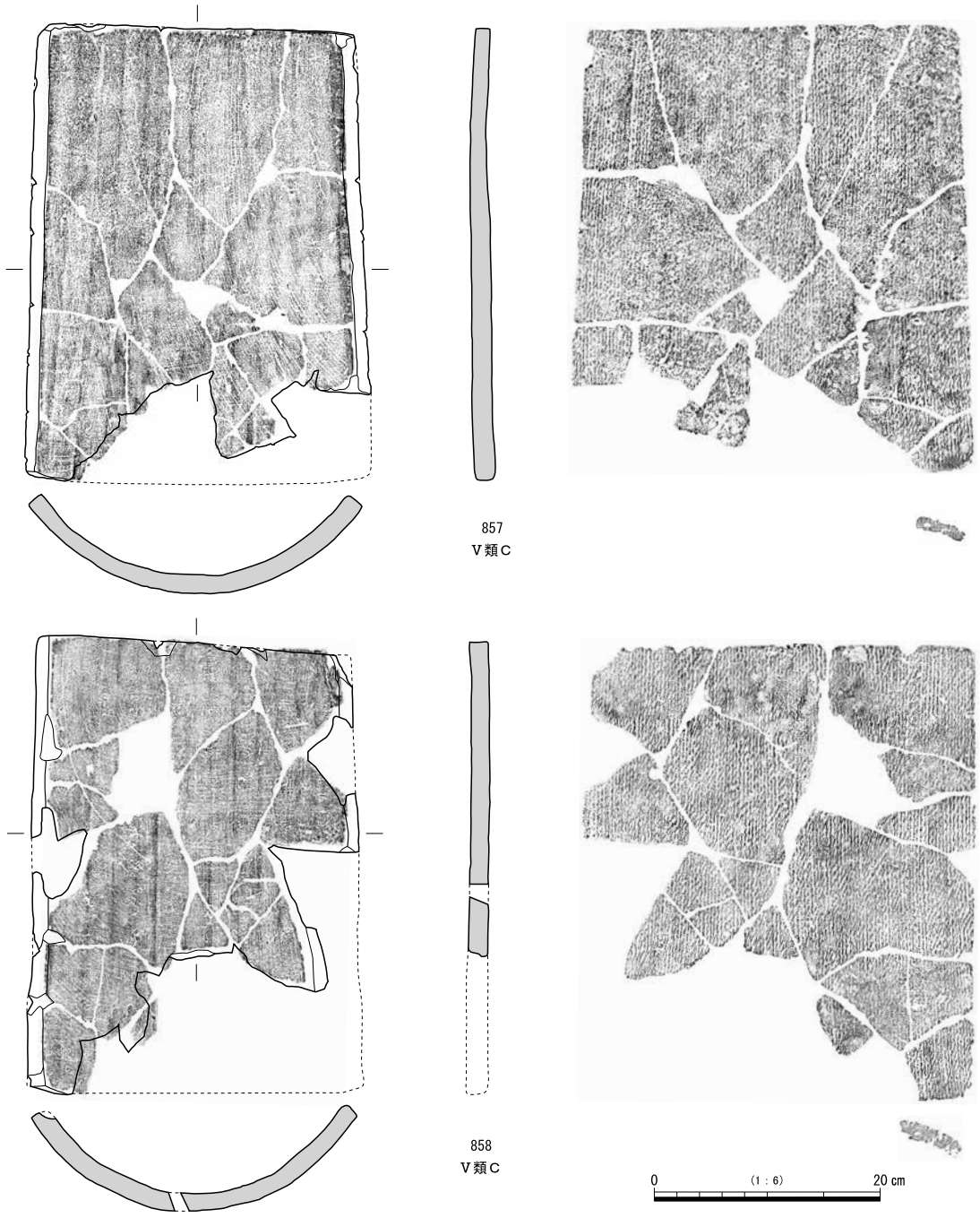


図 274　1 号窯灰原出土平瓦（16）

Ⅴ類D　859 は全長が 33 ㎝と小型のものである。凸面は無調整で、縦縄叩きが施されているが、叩き目が少し斜めに傾いている。凹面は、部分的に軽いナデ調整が施されている程度であり、ほぼ全面に布目が残る。側縁近くに分割突帯とみられる紐状の痕跡が確認される。側面は分割截面に沿って全体を削る。小型のものではあるが、以上の特徴がⅤ類Dと一致することから、Ⅴ類Dの特殊なものとして扱うことにする。

Ⅴ類E　860 はⅤ類Eの狭端部である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は側縁に幅広の面取りを施すほかは無調整で、ほぼ全面に布目が残る。側面は分割截面に沿って全体を削っているが、凹面側にやや深くなっている。全体的に非常に厚手のつくりである。

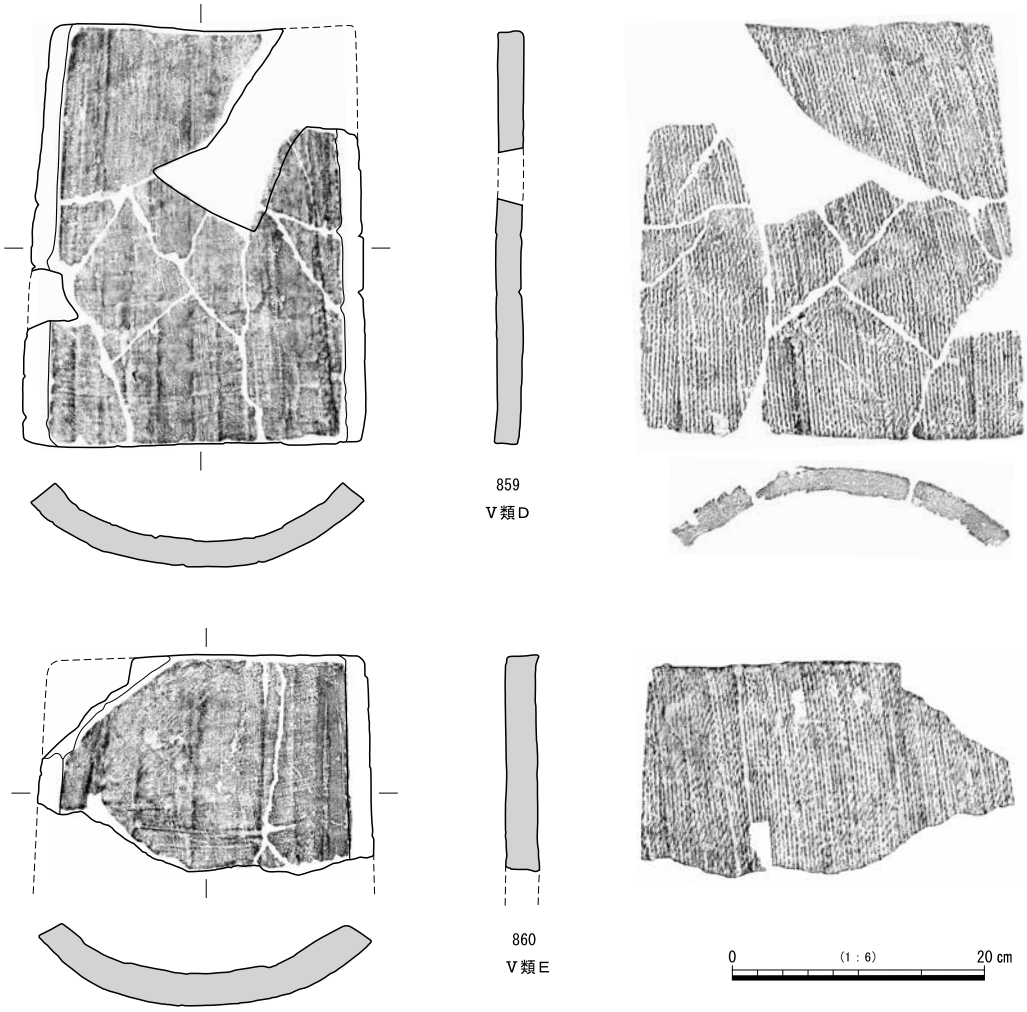


図 275　１号窯灰原出土平瓦（17）

３号窯埋土（図 276 ～ 287、図版 69・72 ～ 74）

第３章で記したように、３号窯埋土の最上層には１号窯の灰原が堆積している。埋土の下層では３号窯に伴う平瓦も出土しているが、ここでは出土層位から１号窯灰原の遺物と判断できる平瓦のうち、広・狭端部が残存するものを中心に 30 点を図示する。なお、大型の破片が出土していないため図示しなかったが、１号窯の窯体内で比較的多く出土しているⅡ類Ｆについても、破片としては一定量の出土が確認できる。

Ⅱ類Ｄ　861 ～ 863 はⅡ類Ｄである。法量は、全長 36 ～ 37 ㎝・狭端幅 22 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 26 ㎝である。凸面は全面ナデ調整で、縦ナデ調整を主体とする。狭端付近は横ナデ調整が施され、丸みを帯びた形状に仕上げられている。凹面は風化が著しくやや不鮮明ではあるが、大半に布目が残る。両側縁には、やや幅広の面取りが施されている。左右の側面は分割截面に沿って全体を削っているが、やや凹面側に深い傾向がある。いずれも表面が風化しており、側面調整の方向は確認できない。861 は表面全体が煤けて窯壁が付着しており、863 には焼土が付着している。ともに構築材として使用されていた可能性が高い。

Ⅱ類Ｅ　864 ～ 870 はⅡ類Ｅである。法量は 869・870 を除き、全長 35 ～ 36 ㎝・狭端幅 24 ～ 25 ㎝・広端幅 26 ～ 27 ㎝である。凸面は全面横ナデ調整で、部分的に縦ナデ調整が加えられる。凹面は一部に

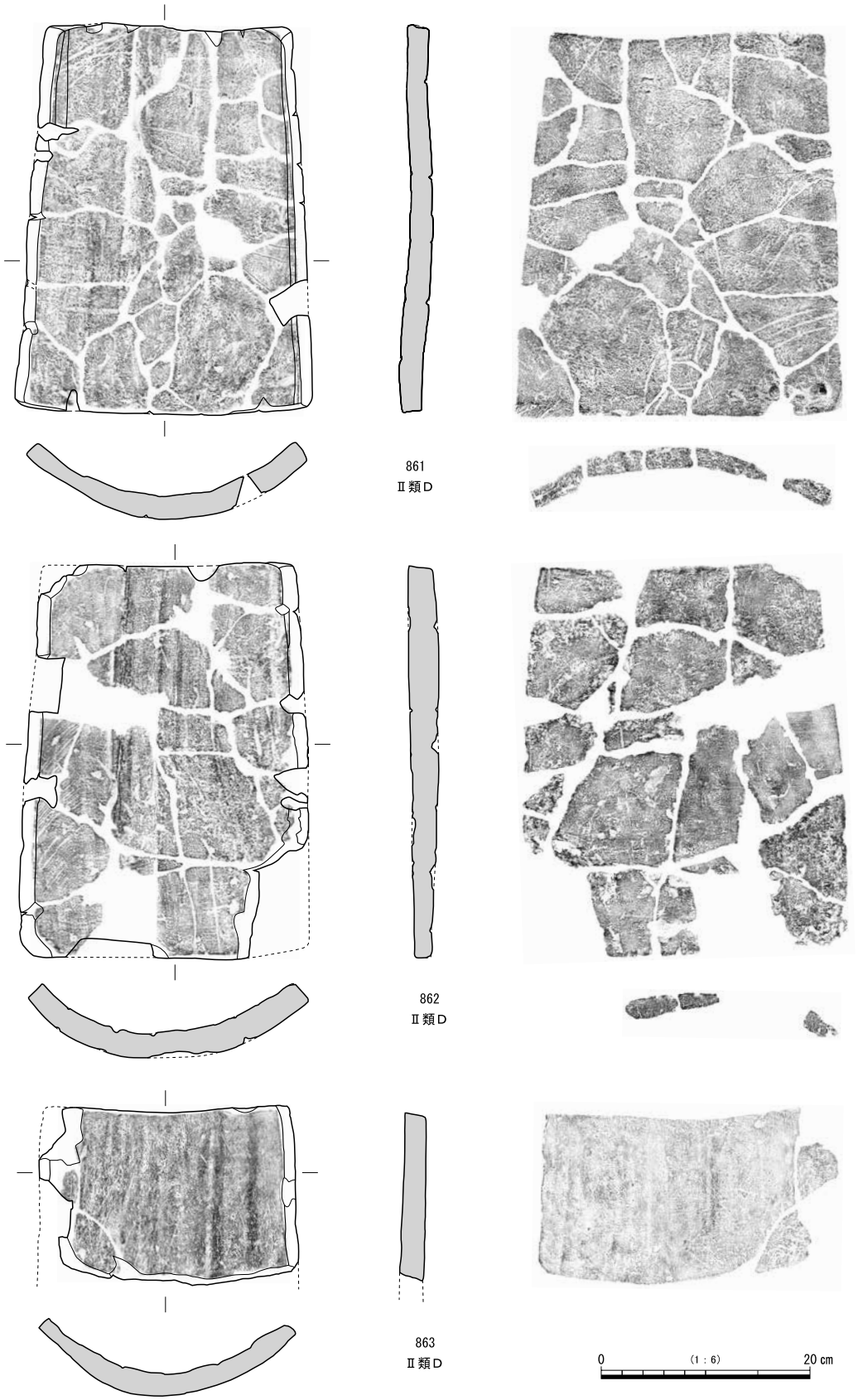


図 276　3号窯埋土出土平瓦（1）

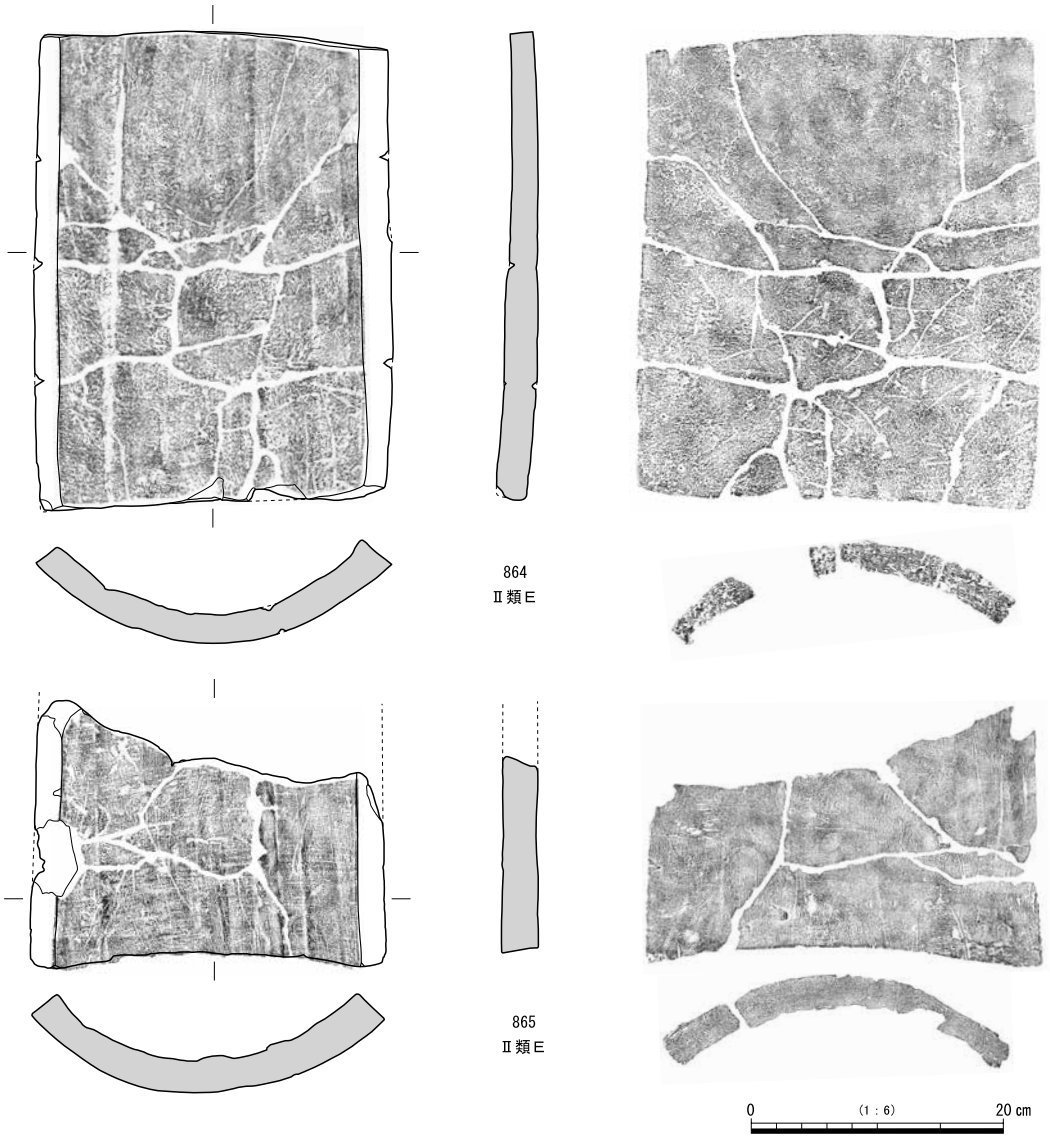


図 277　３号窯埋土出土平瓦（３）

軽いナデ調整を施すものもあるが、大半が無調整で布目が残る。左右の側面は、864 ～ 867 のように分割截面に沿って全体を削るが、やや凹面側に深くなるものと、868 ～ 870 のように凸面側のみを削るものとがあり、２つに細分することも可能である。いずれも側面調整は、凸面を上にして時計回りの方向に調整している。非常に厚手のつくりである点が特徴である。

864・866・867・869 には布綴じ痕が残る。864・867 は全体が煤けており、表面の風化も著しい。焼土や窯壁の付着は確認できないが、ともに軟質であり構築材として使用されていた可能性がある。なお、869・870 は、広端幅が 22 ～ 23 ㎝と幅が狭いものであるが、Ⅱ類Ｅと同じ調整が施されており、厚手のつくりであることから、Ⅱ類Ｅの小型のものとして捉えることができる。

Ⅱ類Ｇ　871 ～ 879 はⅡ類Ｇである。法量は狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 27 ～ 28 ㎝であり、全長は 38 ～ 43 ㎝とやや範囲が広い。凸面は全面ナデ調整で、横ナデが主体であるが、部分的に縦ナデ調整が施されており、全体に指痕が多く残る。凹面は部分的にナデ調整を施すものもあるが、無調整の部分が多く、ほぼ全面に布目が残る。側縁には幅広の浅い面取りが施されている。左右の側面は、分割截面に沿っ

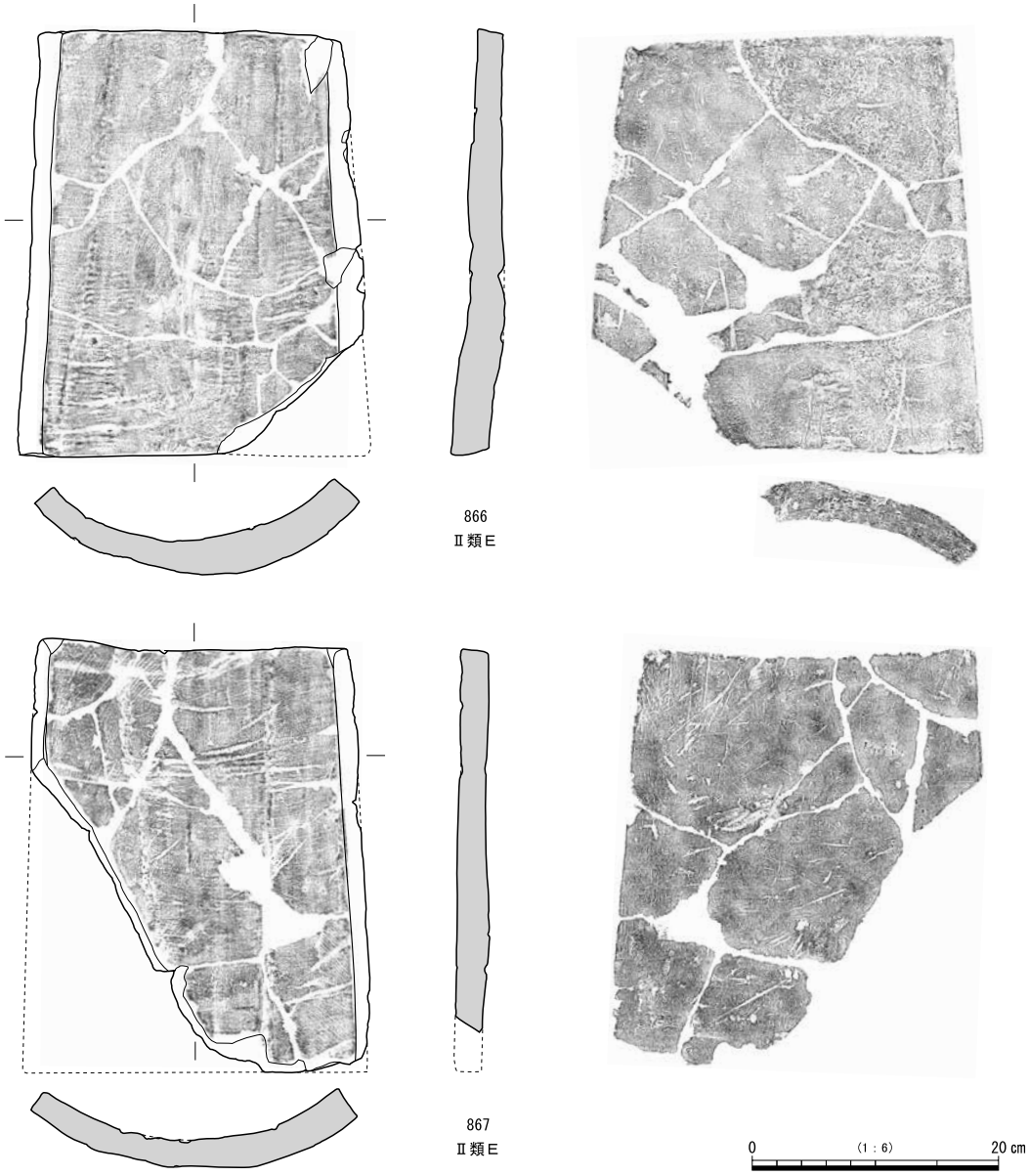


図 278　３号窯埋土出土平瓦（４）

て全体を削っているが、凹面側に深くなるものが多い。四側面は、凹面を上にして時計回りの方向に調整している。

874・877・878 には布綴じ痕が残る。876 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＺ型となっている。872・877・879 の凹面の側縁付近には、分割突帯とみられる紐状の痕跡が残る。Ⅱ類Ｆに近似する茶褐色の色調を呈するものが多い。

877 ～ 879 は非常に歪な形状になっている。側面の調整も、何度かに分けて細かく削っている。いずれも広端面には藁座痕が残る。藁座痕は大半が削られているが、瓦に直交する結束部と瓦に平行する藁束が部分的に残存している。879 は粘土円筒の状態を重視し、藁座痕の残る側を広端部と捉えたが、幅は藁座痕残る側の方が狭くなっている。瓦としてはこちら側を狭端とみた方がよいかもしれない。粘土円筒からの截断に失敗したか、調整時に広・狭端を見誤ったものと推測される。

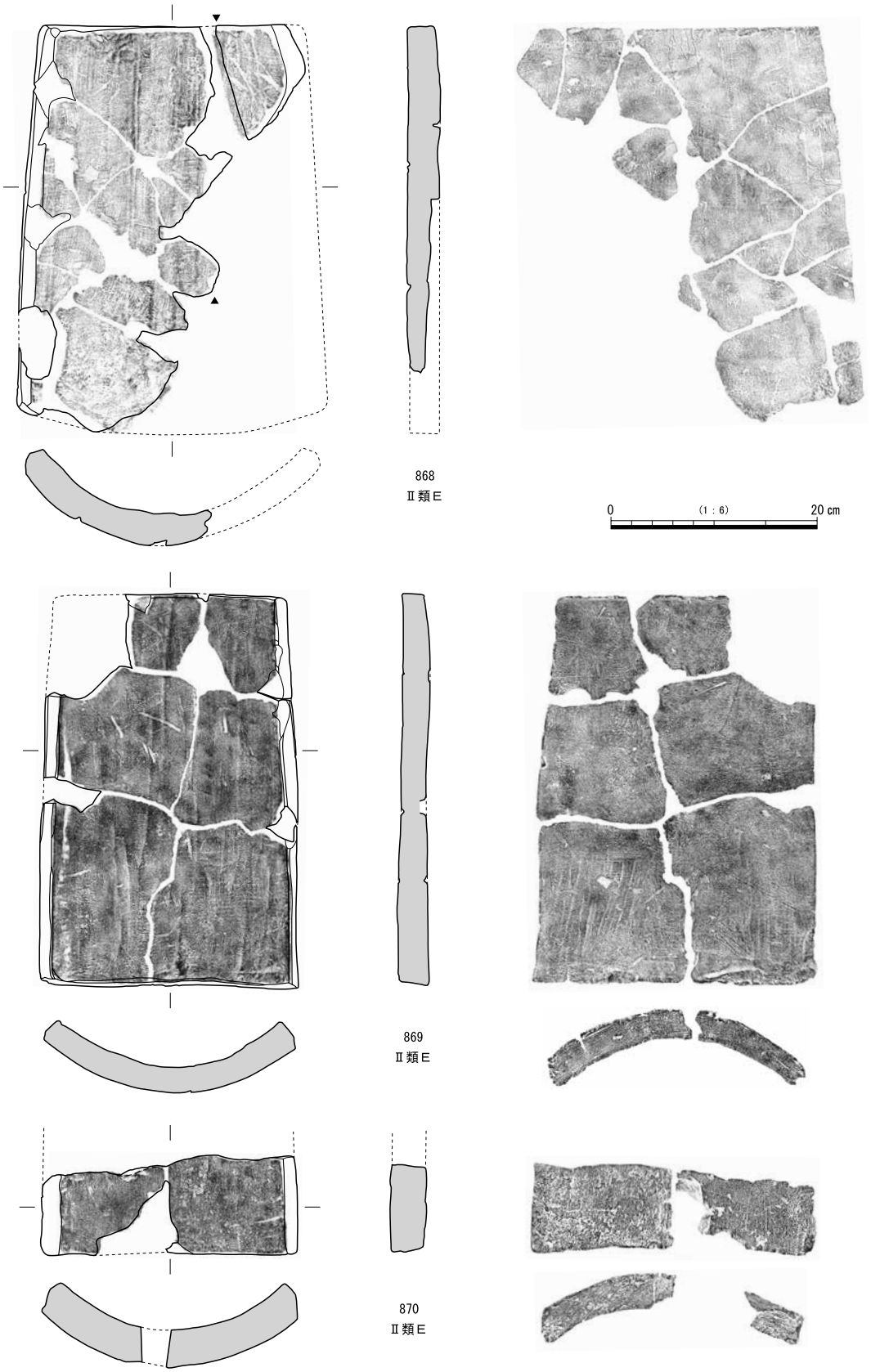


図 279　３号窯埋土出土平瓦（５）

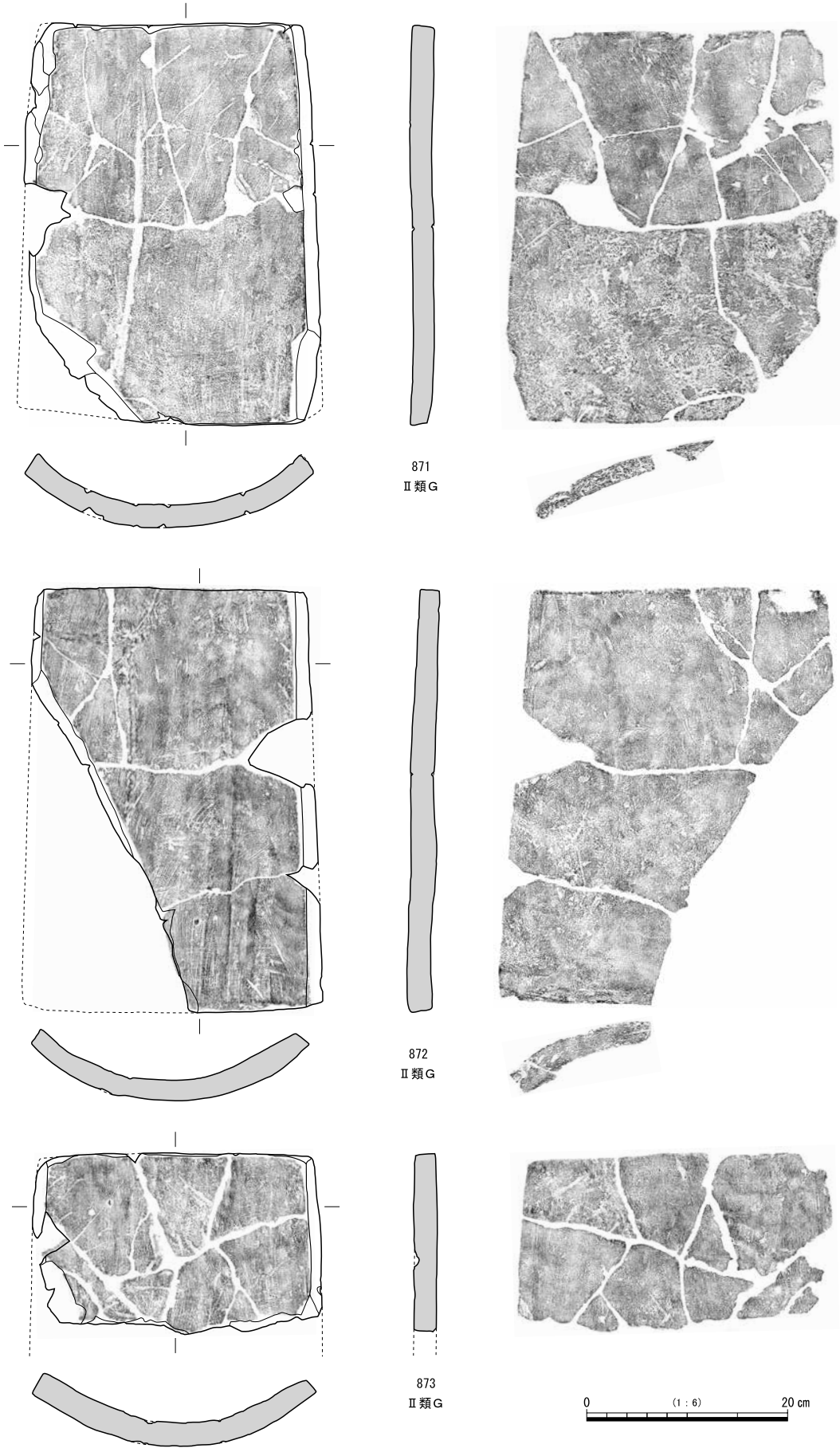


図 280　3号窯埋土出土平瓦（6）

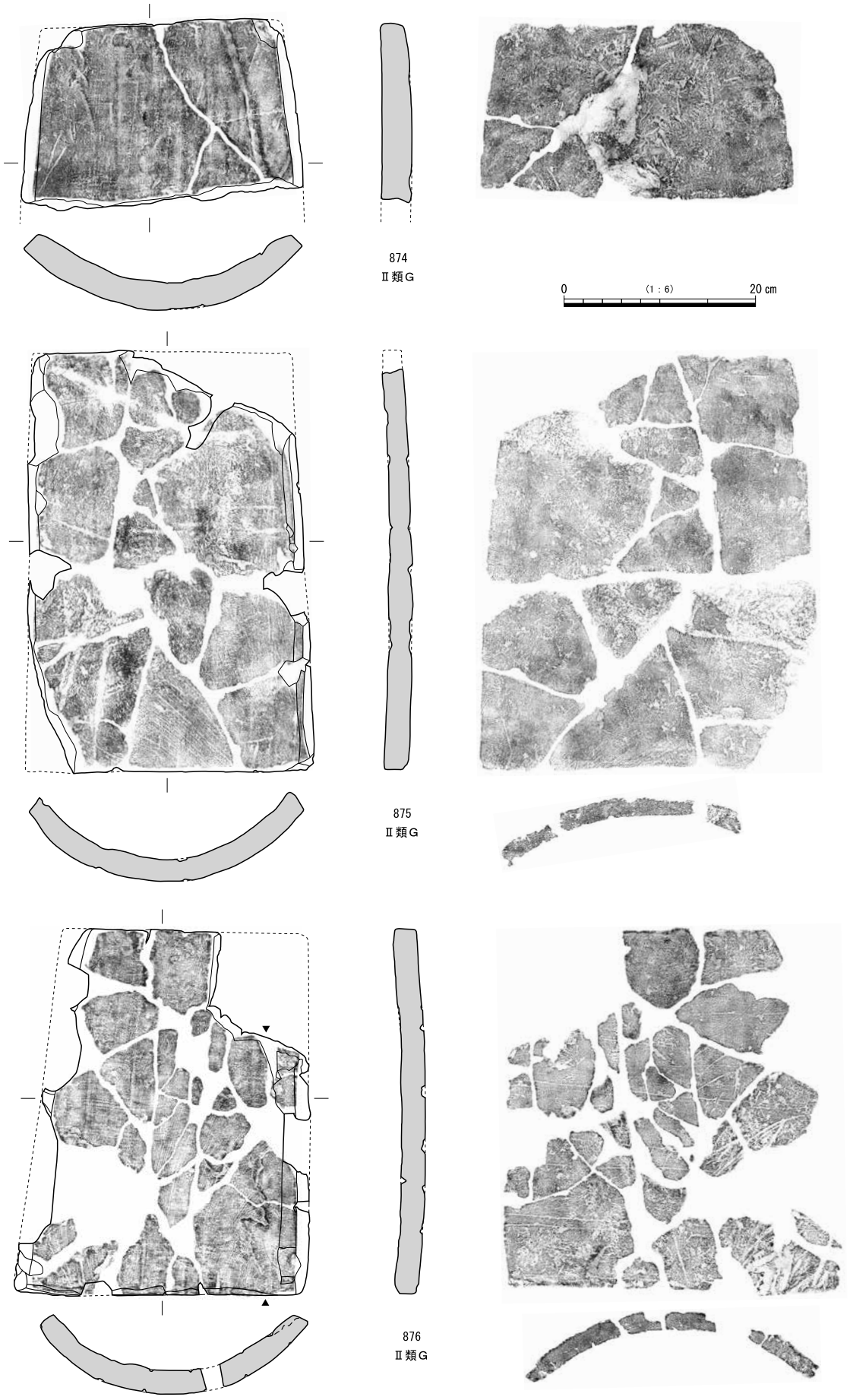


図 281　３号窯埋土出土平瓦（７）

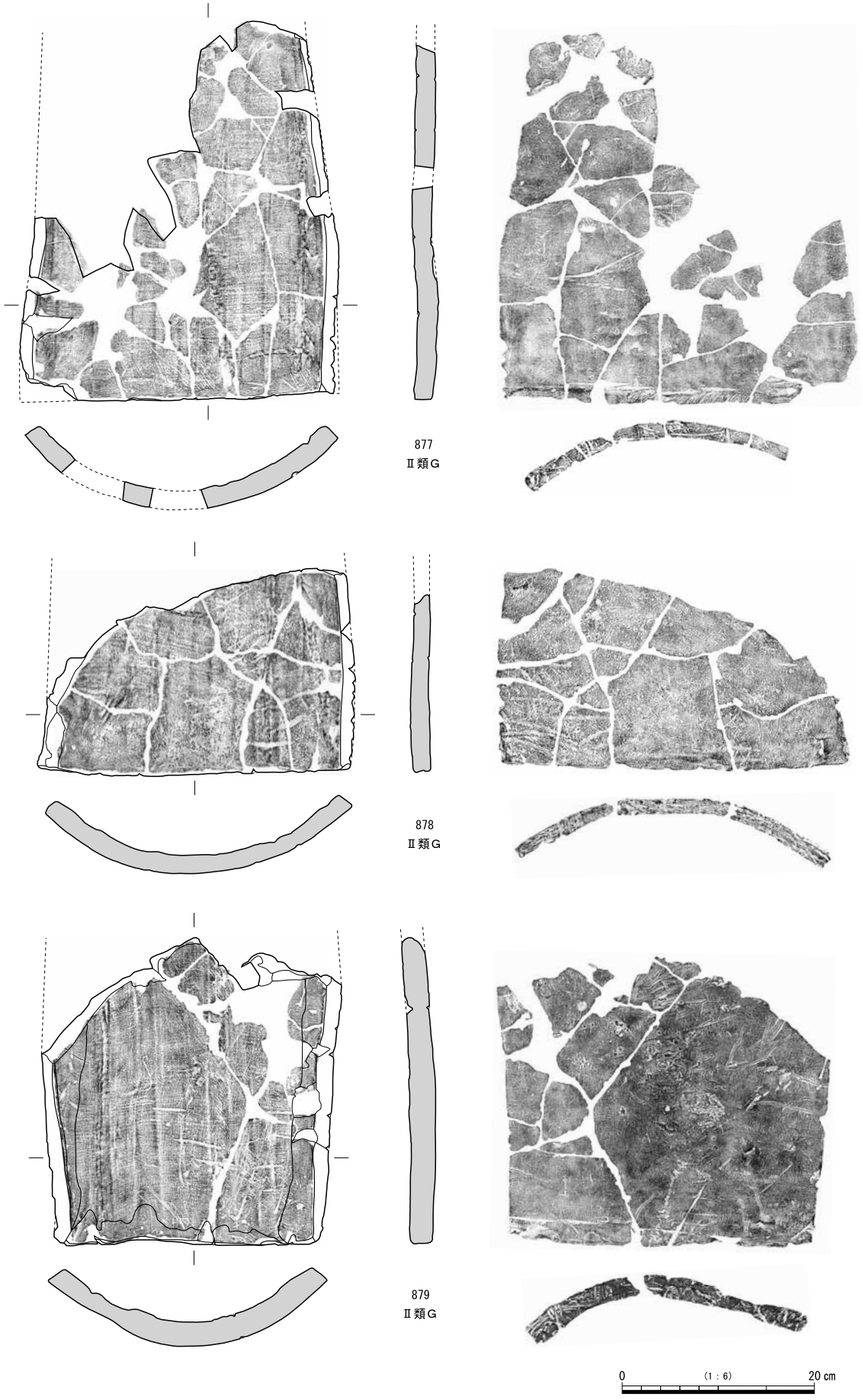


図 282　3号窯埋土出土平瓦（8）

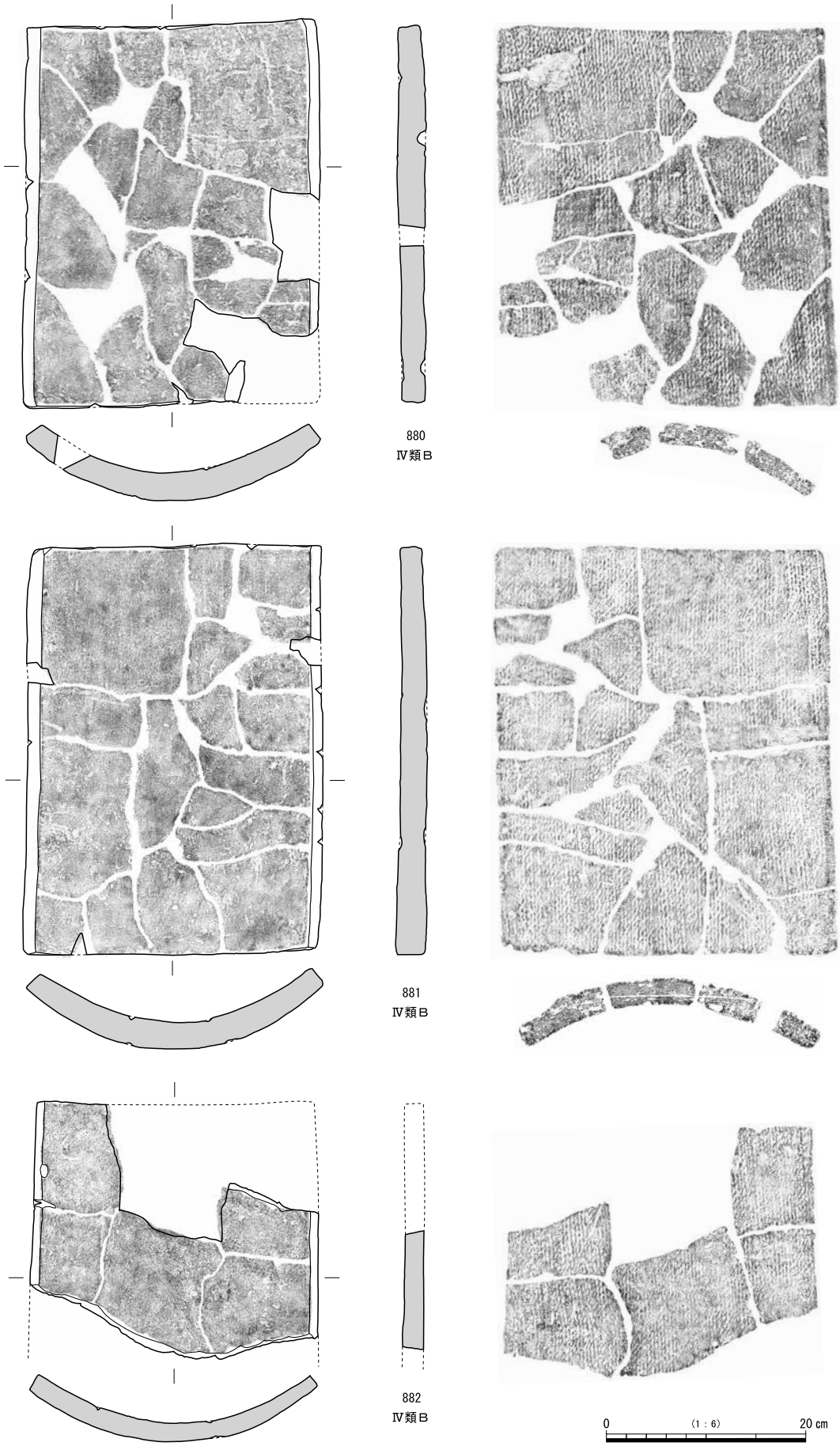


図 283　３号窯埋土出土平瓦（９）

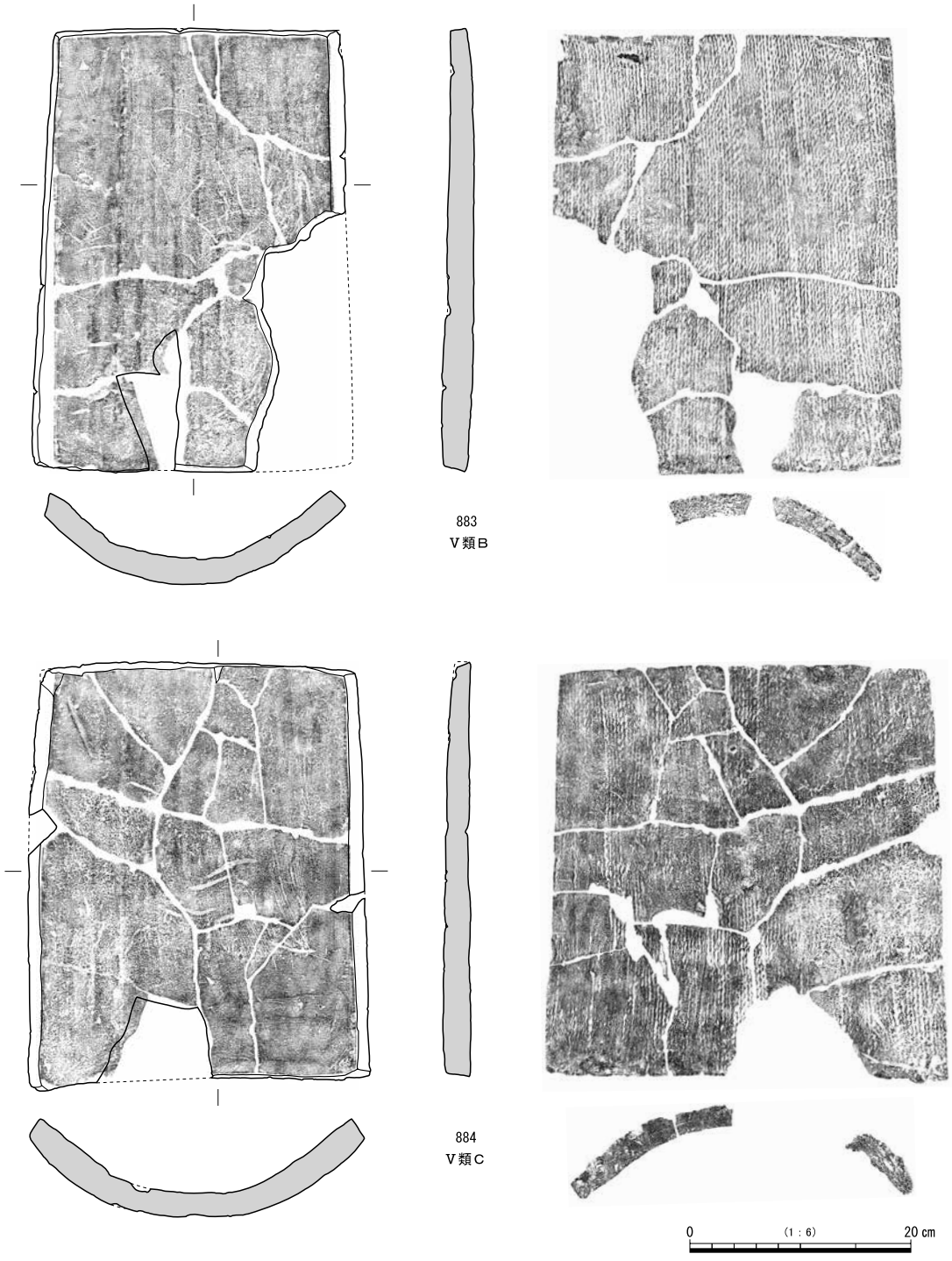


図 284　３号窯埋土出土平瓦（10）

Ⅳ類Ｂ　880 ～ 882 はⅣ類Ｂである。法量は、全長 39 ～ 41 ㎝・狭端幅 27 ～ 28 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝である。凸面は両側端を面取りする以外無調整で、縦方向の縄叩きが残る。凹面は全面に削り調整が施されている。880 と 881 の凹面には、削り残しの部分にわずかに布目が残る。左右の側面は、分割截面に沿って全体を削る。四側面は凹面を上にして時計回りの方向に調整している。胎土や色調は、２号窯で出土しているⅣ類Ｂと近似している。焼土や窯壁の付着が確認できないため断定はできないが、構築材等に利用するために２号窯から持ち込まれたものの可能性もある。

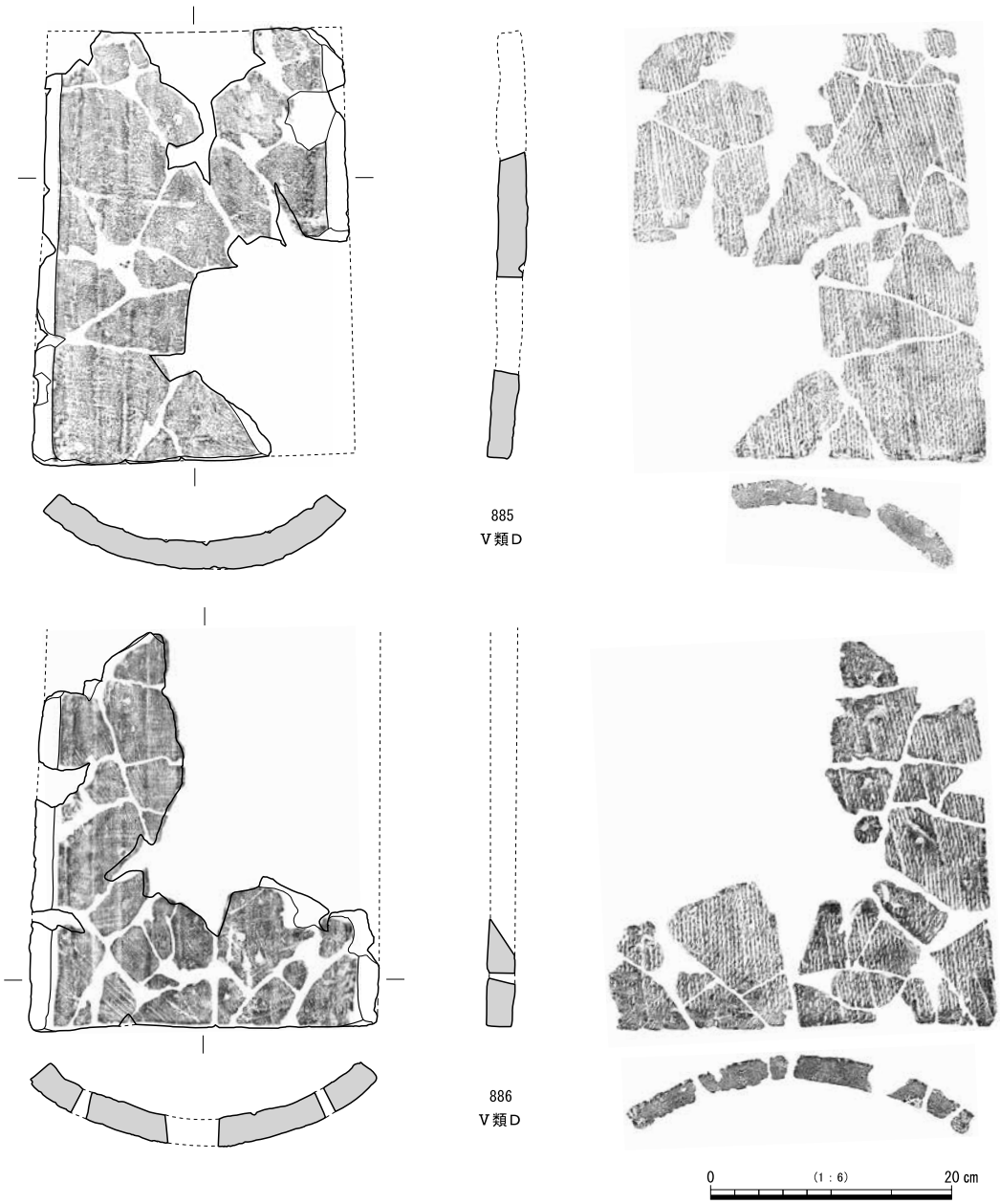


図 285　３号窯埋土出土平瓦（11）

Ⅴ類Ｂ　883 はⅤ類Ｂである。法量は全長 40 ㎝・狭端幅 26 ㎝・広端幅 29 ㎝である。凸面は無調整で縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は風化が著しいためやや不明瞭ではあるが、比較的広い範囲に布目が残っている。側縁にはやや幅広の浅い面取りが施されている。左右の側面は、片側が少し凸面側に深くなってはいるが、基本的には分割截面に沿って全体を削っているとみてよい。四側面は凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。

Ⅴ類Ｃ　884 はⅤ類Ｃである。法量は全長 38 ㎝・狭端幅 28 ㎝・広端幅 31 ㎝である。凸面は指痕で叩き目が消えている部分もあるが、無調整で縦方向の縄叩きが残る。凹面は風化のためやや不明瞭ではあるが、無調整で布目が残る。両側縁を広端側には面取りが施されている。左右の側面は、分割截面に沿って全体を削る。四側面は凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。

Ⅴ類Ｄ　885･886 はⅤ類Ｄである。法量は全長 36 ～ 37 ㎝･狭端幅 22 ～ 23 ㎝･広端幅 24 ～ 26 ㎝である。凸面は無調整で縄叩きが残る。叩き目は縦方向ではあるが少し斜めに傾く。凹面は無調整で布目が残り、

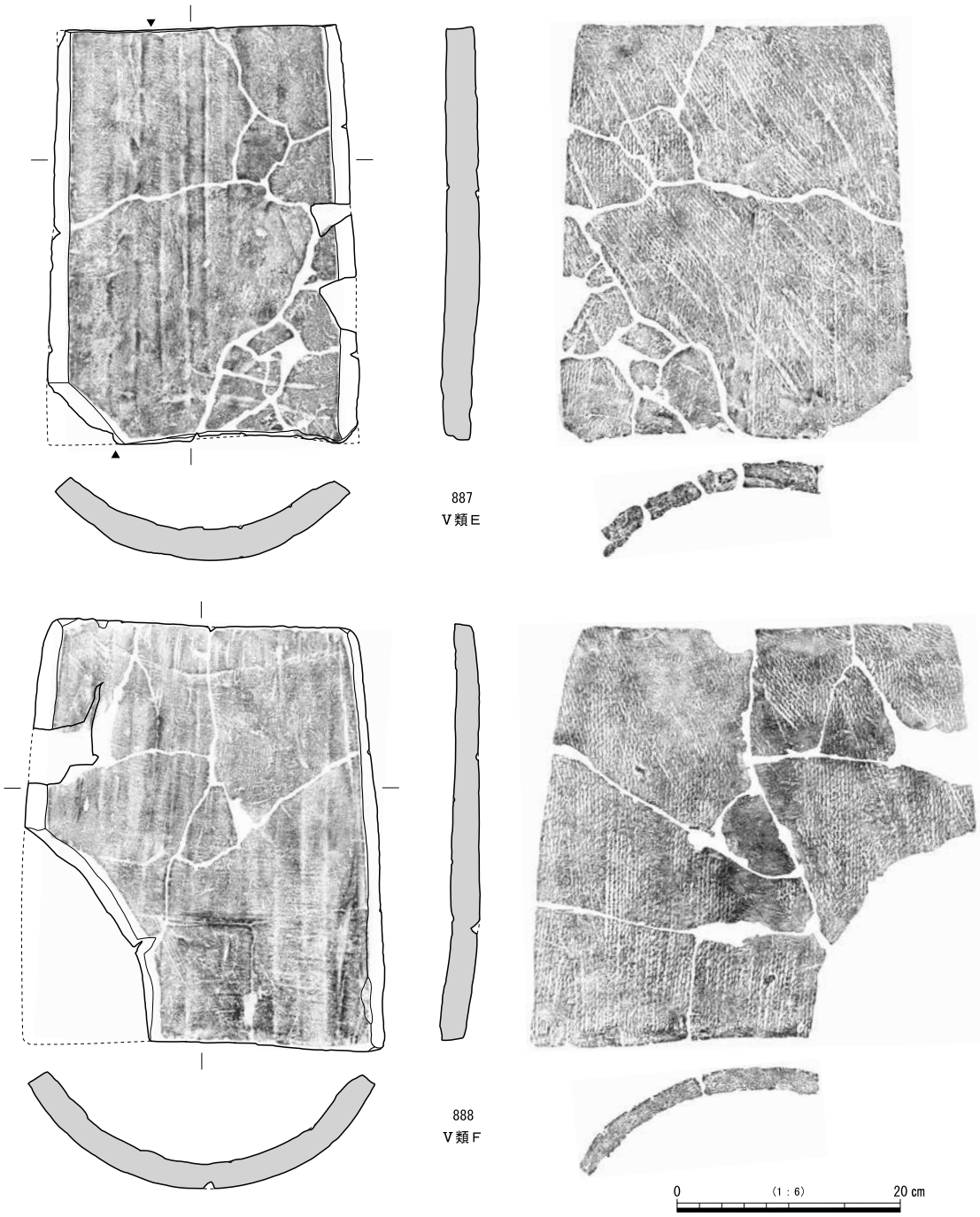


図 286　３号窯埋土出土平瓦（12）

側縁にはやや幅広の面取りが施されている。左右の側面はやや凹面側に深く削る。四側面は凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。ともに凹面の側縁付近には、分割突帯とみられる紐状の痕跡が残る。

Ⅴ類Ｅ　887はⅤ類Ｅである。法量は、全長 36 ㎝・狭端幅 24 ㎝・広端幅 25 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きを施した後、斜め方向に補足の叩きを加えている。凹面は風化が著しく不明瞭であるが、無調整であると推測される。左右の側面は凹面側に深く削る。全体的に厚手のつくりとなっている。法量が近似することや厚手のつくりであることなどから、Ⅱ類Ｅの凸面調整を省略したものとみることができる。粘土接合痕が残り、合わせ目はＺ型である。全体が煤けており、軟質で表面の風化も著しいため、構築材として使用された可能性がある。

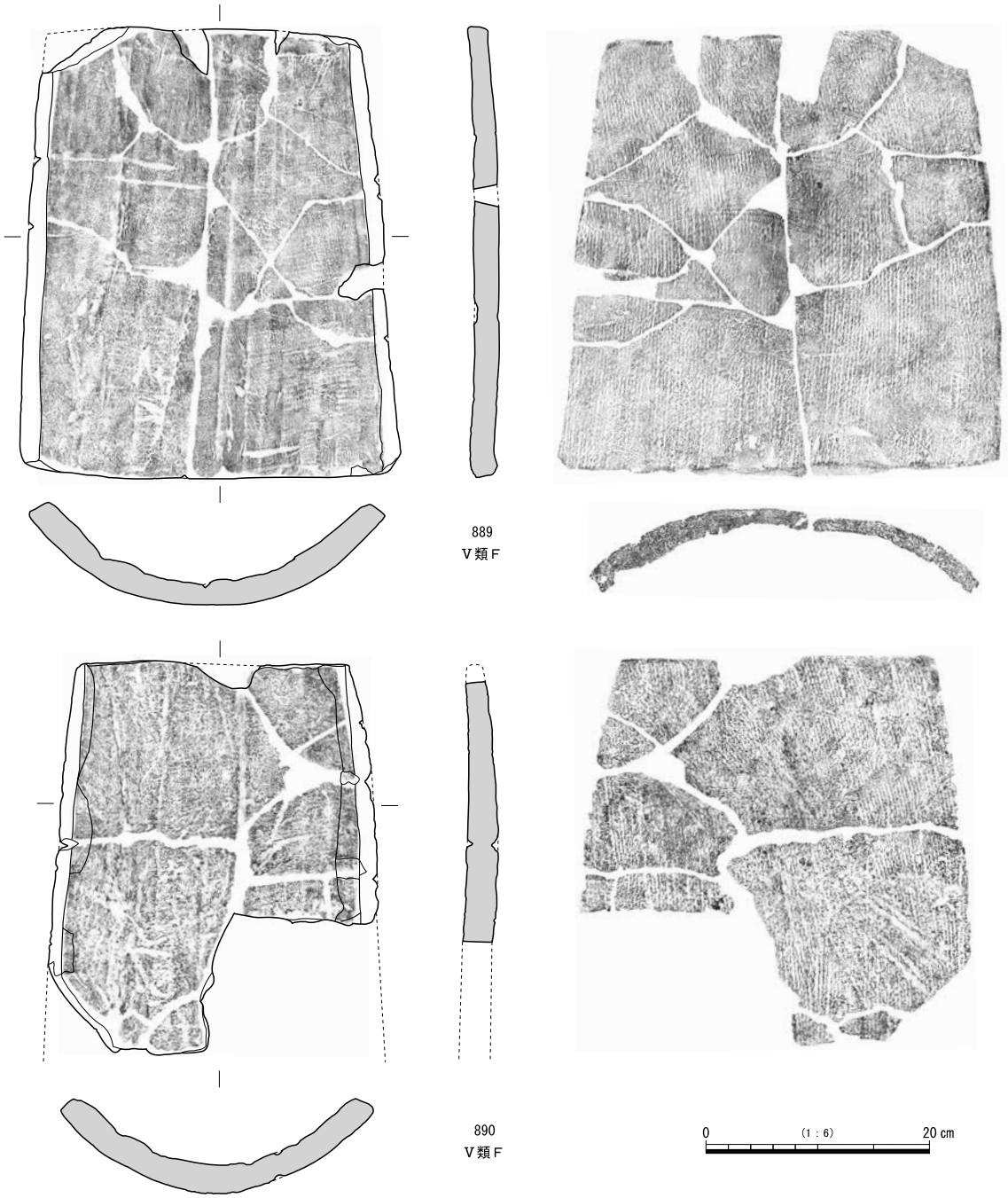


図 287　３号窯埋土出土平瓦（13）

Ⅴ類Ｆ　888 ～ 890 はⅤ類Ｆである。法量は、全長 38 ～ 40 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 28 ～ 30 ㎝である。狭端と広端の幅の差が大きく、台形に近い形状である。凸面は一部にナデ調整を施すほかは無調整で、縦方向に縄叩きを施した後に斜め方向に補足の叩きを加えている。凹面は、側縁に面取りを施す以外は無調整で布目が残る。左右の側面は、分割截面に沿って全体を削っているが、凹面側に深くなるものが多い。四側面は凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整する。890 はやや小型であるが、広・狭端の幅の差が大きく、補足の叩きを加えるなどの特徴がⅤ類Ｆと同様であることから、Ⅴ類Ｆの一種として捉えることができる。

889 と 890 には布綴じ痕が残る。888 と 889 には布端が確認できる。いずれも狭端側が布足らずの状態となっており、888 には布足らずの部分に側板の痕跡が明瞭に残る。

（5）その他の遺構出土

SX01（図 288 ～ 293）

SX01 では、総重量 327.6 kg出土している。細片で風化が著しいものが大半であるが、広・狭端部が残存し分類が可能なものを中心に 15 点を図示する。

Ⅰ類Ｂ　891 はⅠ類Ｂである。法量は、全長 38 ㎝・狭端幅 27 ㎝・広端幅 29 ㎝である。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整が主体であるが、部分的に縦ナデ調整が施されている。ナデ残しの部分には、斜め方向の縄叩きが残る。凹面も全面ナデ調整で、縦ナデ調整を主体とするが、広・狭端は側縁に沿って横ナデ調整されている。四側面はやや幅広に面取りを施している。左右の側面は凸面側を深く削っている。凹面には、わずかではあるが布綴じ痕が確認できる。図示したのは１点のみであるが、調整等からⅠ類と判断できる破片は一定量出土している。３号窯で焼成されたものとみてよい。

Ⅱ類Ａ　892 はⅡ類Ａの狭端部である。狭端幅は 24 ㎝である。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整を施した後に、縦ナデ調整が加えられている。狭端縁に沿ってナデが施されており、狭端側が丸みを帯

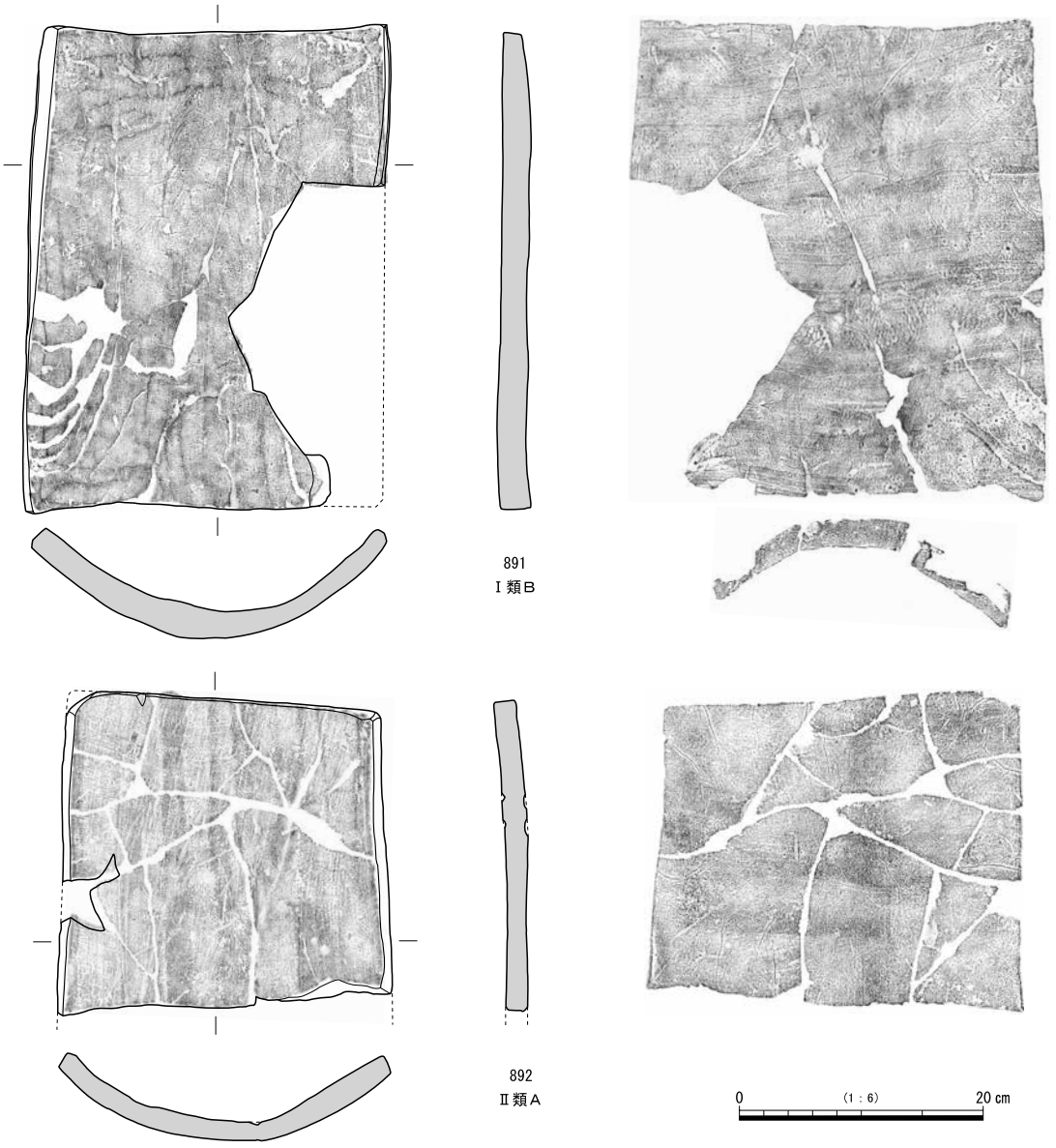


図 288　SX01 出土平瓦（1）

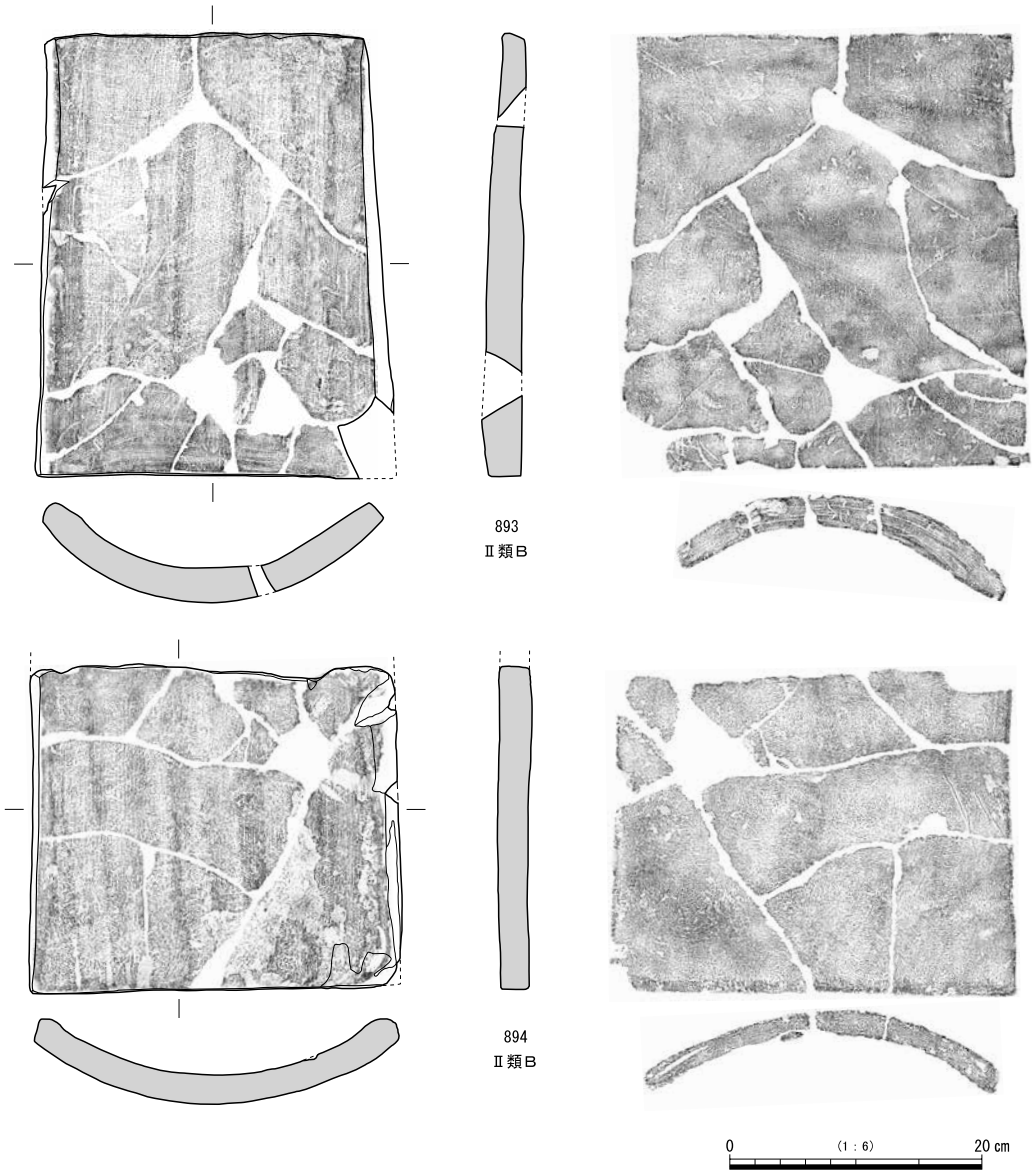


図 289　SX01 出土平瓦（２）

びた形状となっている。凹面は無調整で布目が残る。左右の側縁には面取り調整が施されている。側面は凸面側に深く削られており、ナデ調整を施して丸みを帯びた形状に仕上げている。胎土は、３号窯出土のものと同じく橙色の強い色調である。３号窯で焼成されたものとみてよい。

Ⅱ類Ｂ　893 ～ 896 はⅡ類Ｂである。法量は、全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 27 ～ 28 ㎝である。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整を施した後に部分的に縦ナデ調整が加えられる。狭端側の側縁を横ナデし、丸みを帯びた形状に仕上げている。893 や 895 は広端側に横ナデ調整を施しているが、凹面の大半は無調整で布目が残る。四側縁はやや幅広に面取りし、ナデ調整を加えて丸く仕上げている。左右の側面は凸面側に深く削り、ナデ調整を加えている。896 には布綴じ痕と粘土接合痕が残る。粘土の合わせ目はＺ型である。２号窯で焼成されたものと推測される。

Ⅱ類Ｄ　897 ～ 901 はⅡ類Ｄである。法量は、全長 36 ～ 37 ㎝・狭端幅 22 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 26 ㎝である。凸面は全面ナデ調整であり、縦ナデ調整を主体としている。897 には、凹面の広端側に面取り風の削り調整が施されている。凹面は一部に軽いナデ調整を施すものもあるが、大半が無調整で布目

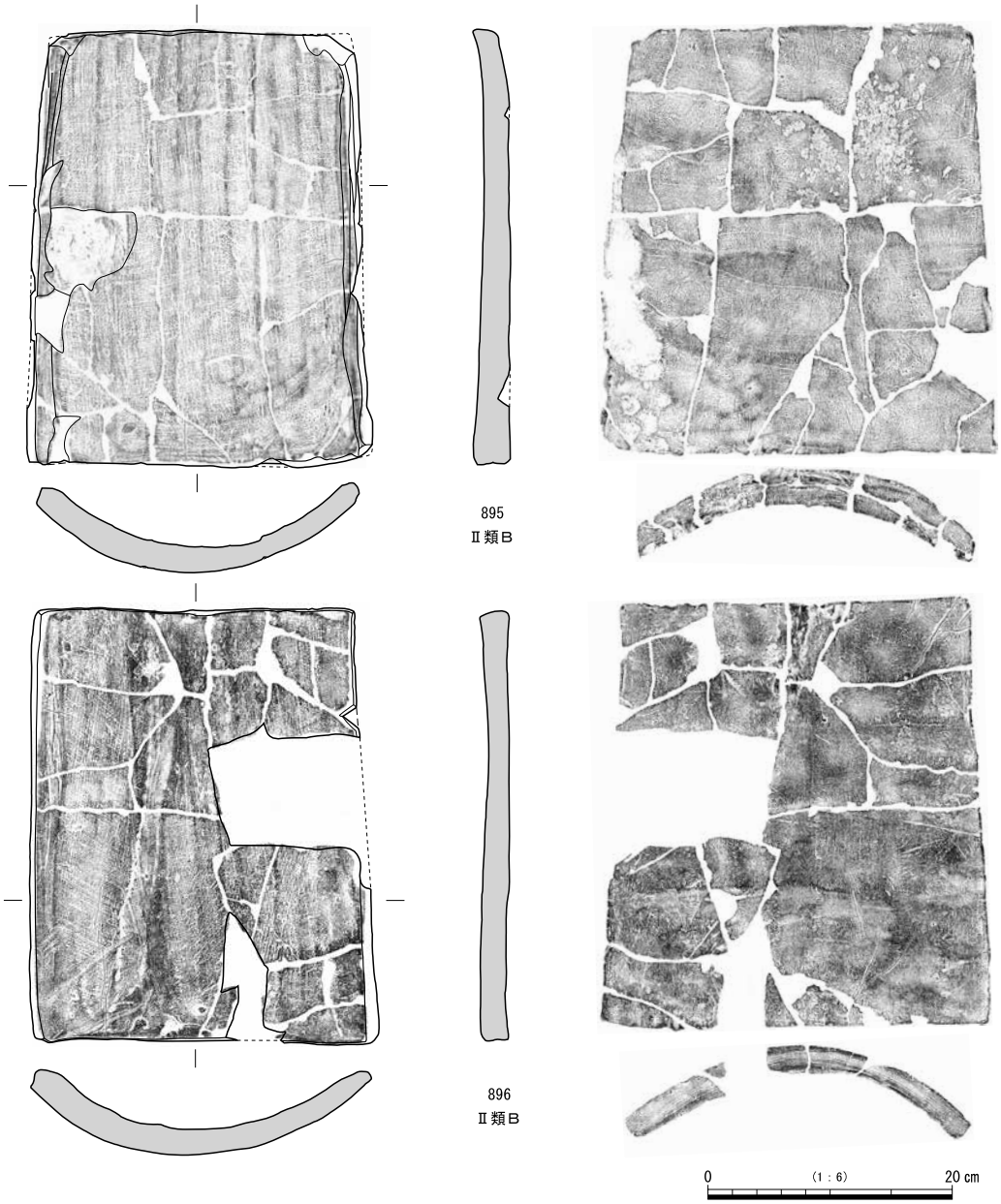


図 290　SX01 出土平瓦（3）

が残る。両側縁には、やや幅広の浅い面取りが施されている。左右の側面は、分割截面に沿って全体を削る。四側面は、凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。

897・899 には布綴じ痕が残っている。901 の広端面には破面が確認できる。破面は凸面側にあり、凹面側からやや厚めに切り落としていることが分かる。これらは、1 号窯で生産されたものとみてよい。

Ⅱ類Ｅ　902 はⅡ類Ｅである。法量は、全長 37 ㎝・狭端幅 22 ㎝・広端幅 23 ㎝である。凸面は全面横ナデ調整で、縦ナデ調整が比較的広い範囲に加えられている。凹面は風化が著しく不明瞭ではあるが、やや広い範囲にナデ調整を施しているようにみえる。側縁にはやや幅広の面取りが確認できる。左右の側面は分割截面に沿って全体を削る。902 は幅が狭いことに加え、凸面に縦ナデ調整を多用し、凹面にナデ調整が施されるなど調整においても、ほかのⅡ類Ｅとはやや異なっている。本来は別の分類を設定すべきかもしれないが、非常に厚手のつくりである点がⅡ類Ｅと共通しており、同様のものがほかに確認できないため、Ⅱ類Ｅの特殊なものとして扱うことにする。1 号窯で生産されたものと推測される。

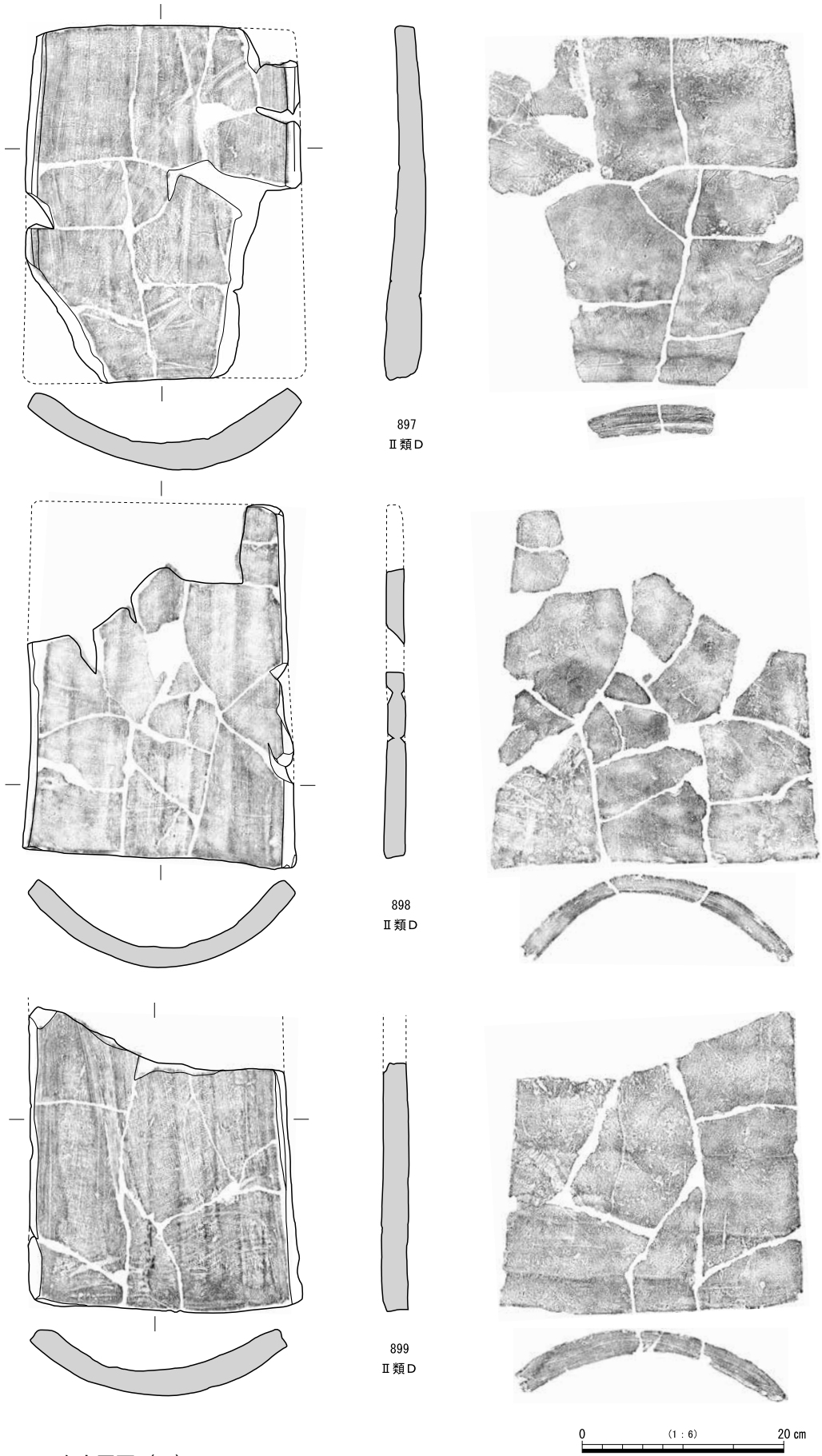


図 291　SX01 出土平瓦（４）

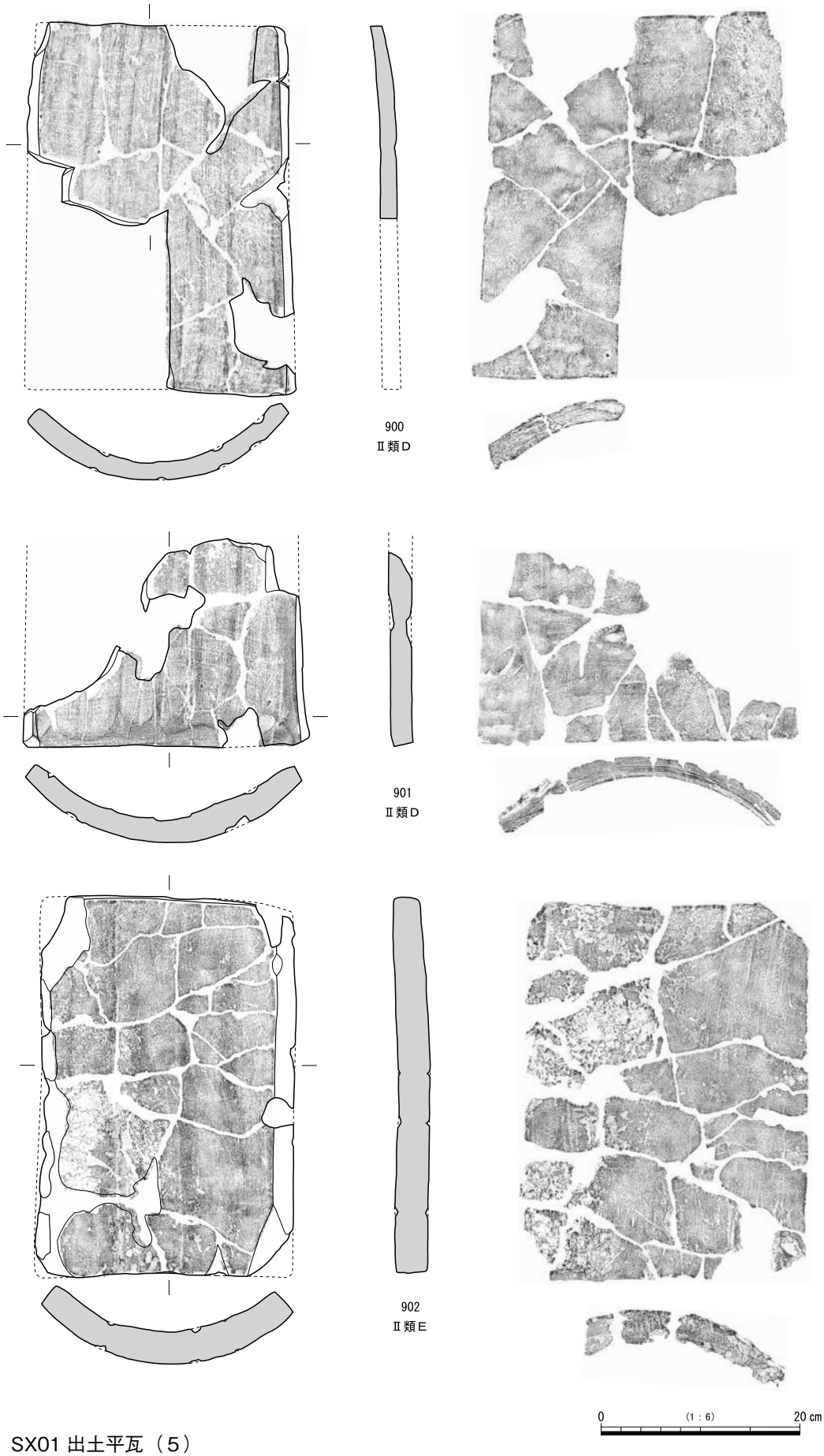


図 292　SX01 出土平瓦（5）

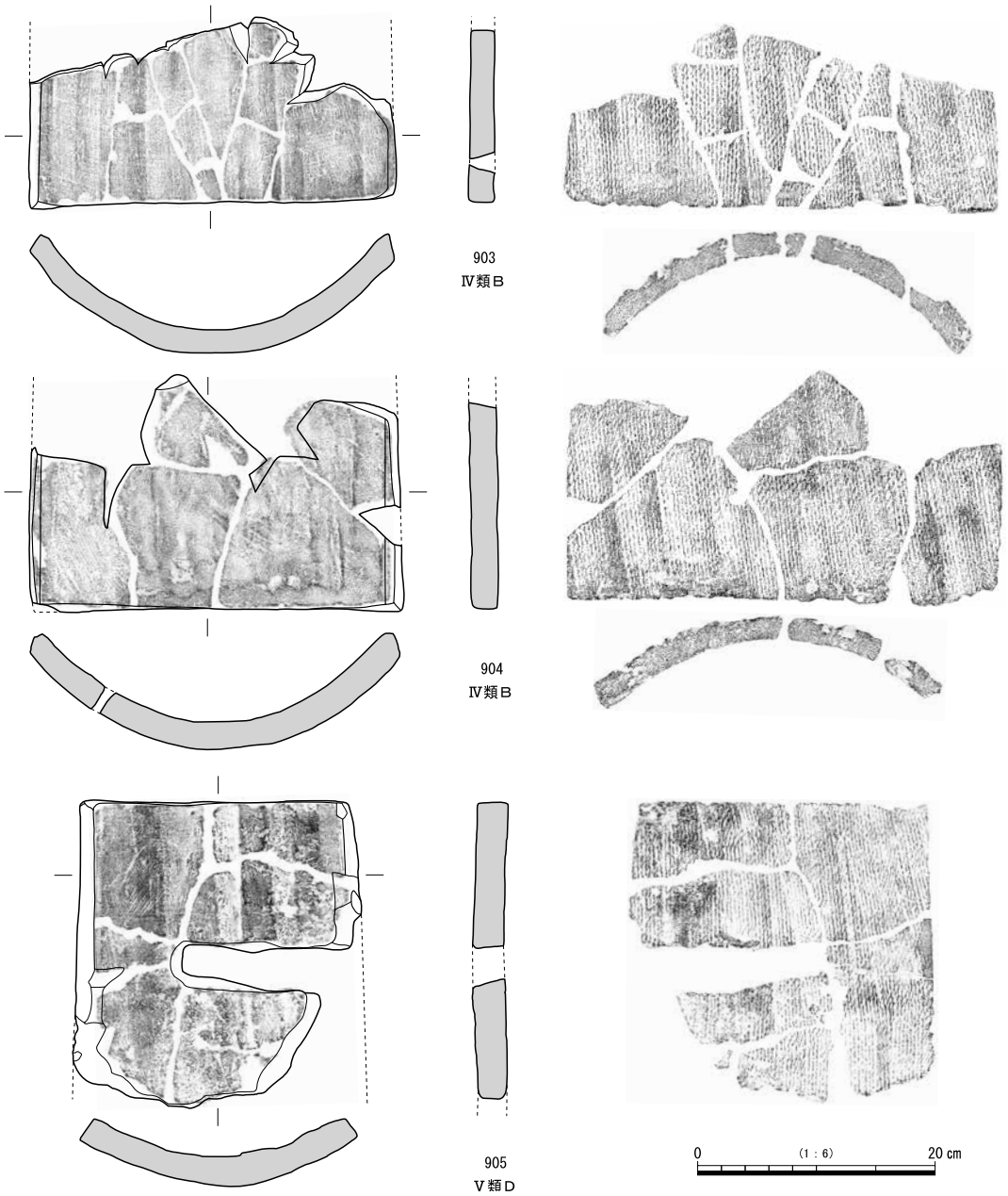


図 293　SX01 出土平瓦（６）

Ⅳ類Ｂ　903・904 はⅣ類Ｂの広端部である。広端幅は 28 ～ 29 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。904 は側縁に面取りを施している。凹面は全面ナデ調整が施されており、ナデ残しの部分には布目が残る。903 はナデが軽く布目が残る部分が多い。側縁には幅広の浅い面取りが施されている。左右の側面は、片側は分割截面に沿って全体を削っているが、もう一方は凸面側に深くなっている。いずれも２号窯で生産されたものとみてよい。

Ⅴ類Ｄ　905 はⅤ類Ｄの狭端部である。狭端幅は 22 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが残っており、狭端側の叩き目はやや斜めになっている。凹面は風化が著しく不鮮明であるが、表面が残存する部分では布目が確認できることから、無調整または部分的なナデであると推測される。左右の側面は凹面側に深く削る。狭端側の叩き目がやや斜めに傾き、側面を凹面側に深く削る点は、Ⅴ類Ｄに共通する特徴である。１号窯で生産されたものとみてよい。なお、Ⅴ類に関しては、図示してはいないがⅤ類Ａ～Ｃとみられる破片も多く出土している。

SX02（図 294 ～ 297）

SX02 では、総重量にして 30.8 kgの平瓦が出土している。このうち、広・狭端部が残存し、分類が可能なものを中心に 12 点を図示する。

Ⅱ類Ａ　906 ～ 909 はⅡ類Ａである。法量は、全長 39 ～ 40 ㎝・狭端幅 24 ～ 25 ㎝・広端幅 25 ～ 26 ㎝である。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整を施した後に縦ナデ調整が加えられている。凸面の狭端側は、狭端縁に沿ってナデが施され丸みを帯びた形状になっている。凹面は、部分的にナデ調整は施されているが、大半が無調整で布目が残る。四側縁にはやや幅広の浅い面取りを施す。側縁に沿ってナデ調整が加えられ、丸みを帯びた形状に仕上げられている。側面は凸面側に深く削られており、ナデ調整を施すものもある。

908 には布綴じ痕が残る。906 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はＳ型となっている。909 は隅

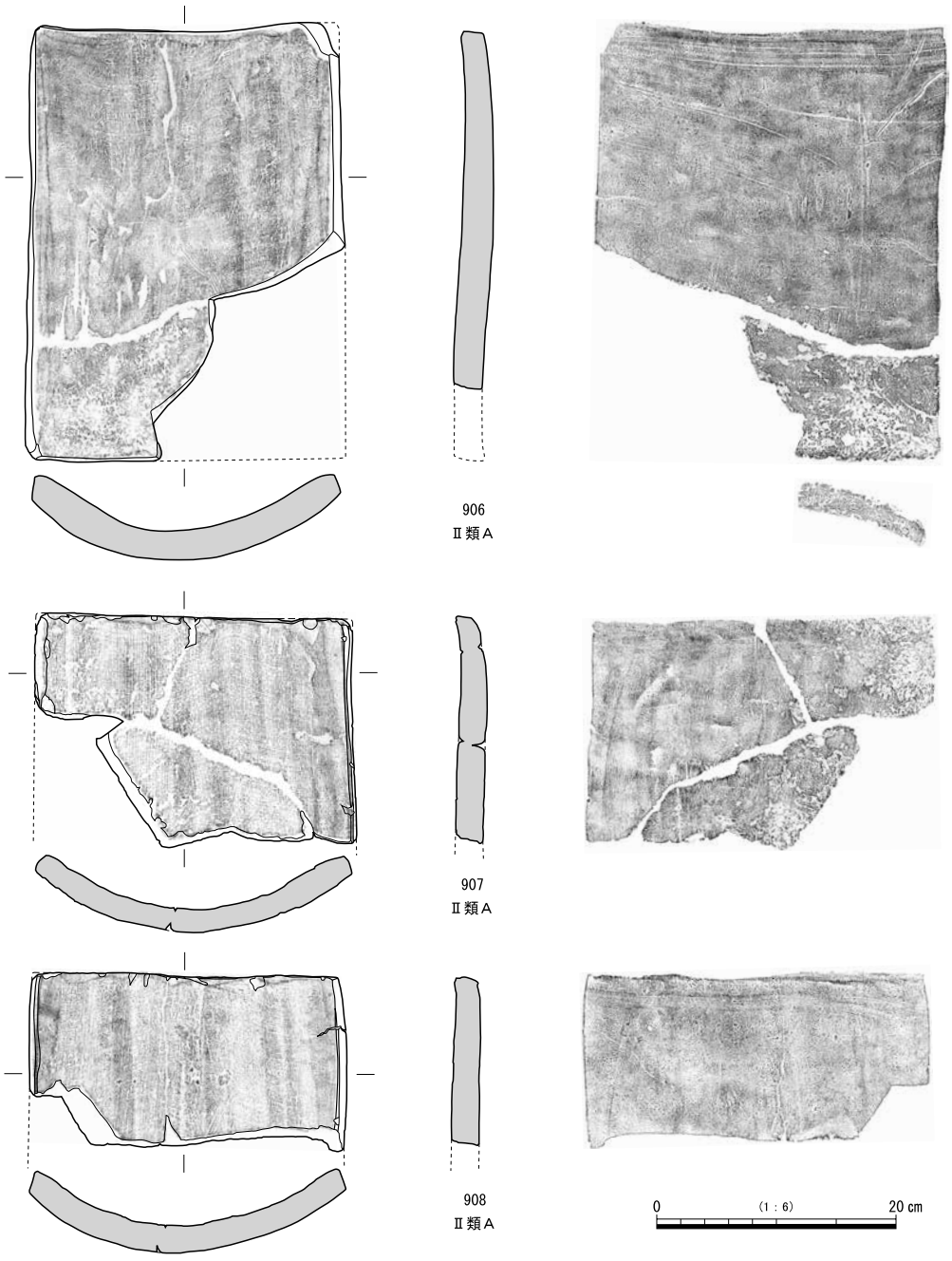


図 294　SX02 出土平瓦（1）

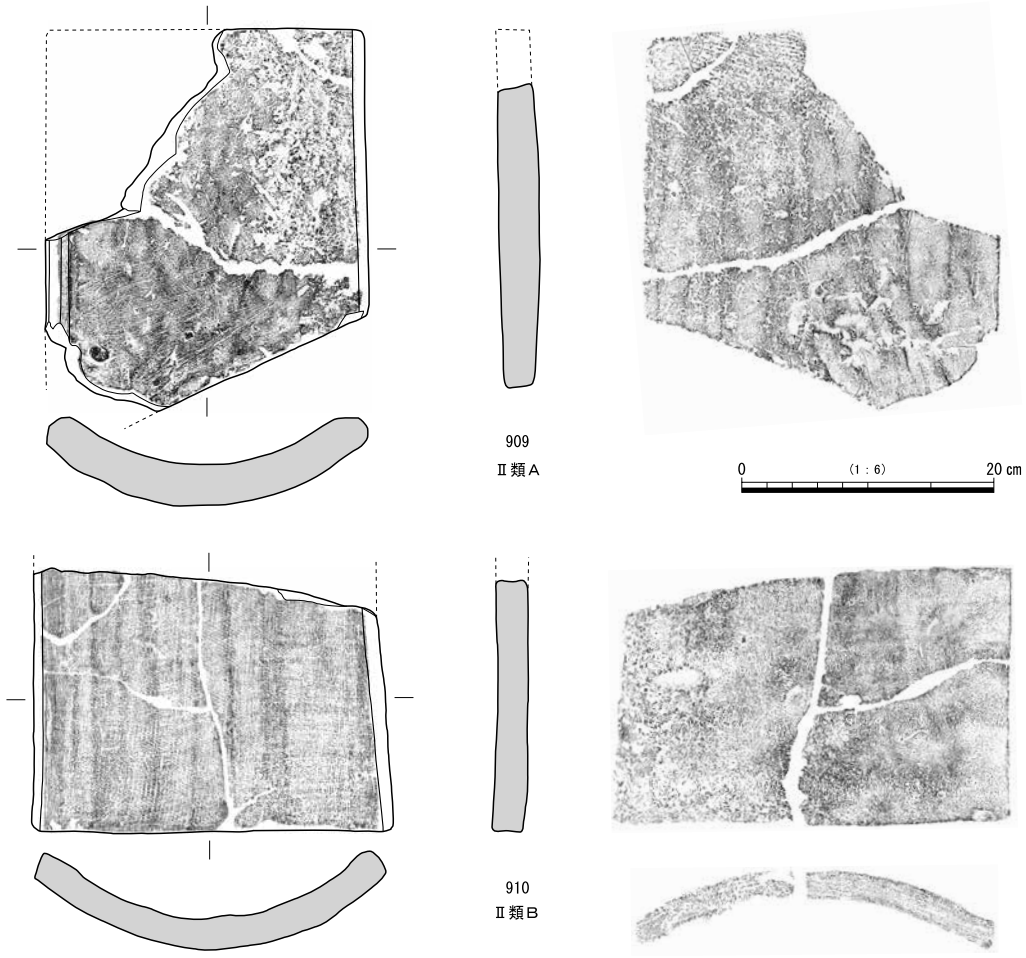


図 295　SX02 出土平瓦（２）

平瓦である。凹面は風化が著しくやや不明瞭であるが、広い範囲にナデ調整が施されている。凹面のナデ調整の範囲は広いものの、その他の調整はⅡ類Ａと共通している。いずれも３号窯または２号窯で生産されたものとみてよい。

Ⅱ類Ｂ　910 はⅡ類Ｂの広端部である。広端幅は 27 ㎝である。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整に縦ナデ調整が加えられている。凹面は、側縁にやや幅広の浅い面取りを施すほかは無調整で、布目が残る。左右の側面は、やや凸面側に深く削り、ナデ調整を施して丸みを帯びた形状に仕上げている。２号窯で生産されたものの可能性が高い。

Ⅲ類Ｂ　911・912 はⅢ類Ｂである。912 は全体がやや歪に変形している。911 は凸面が無調整で、斜め方向の縄叩きが残る。912 の凸面には、側端付近に削り調整が施されており、それ以外には斜め方向の縄叩きが明瞭に残る。いずれも凹面には全面に縦ナデ調整が施されており、ナデ残しの部分には布目が残る。側縁には、やや幅広の浅い面取りが施されている。左右の側面は、911 は凸面側を深く削り、912 は分割截面に沿って全体を削る。911 には布綴じ痕が残る。912 の側縁付近には、分割突帯とみられる溝状の窪みが確認される。912 は、凸面に削り調整を施す点では２号窯出土の 655 と同様であるが、側面の調整が異なっており、Ⅲ類Ｂでもやや特殊なものとみた方がよいかもしれない。いずれも２号窯で焼成されたものの可能性が高い。

Ⅴ類Ｂ　913 はⅤ類Ｂの広端部で、広端幅は 26 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は風化が著しいが、無調整であると推測される。左右の側面は、分割截面に沿って全体を

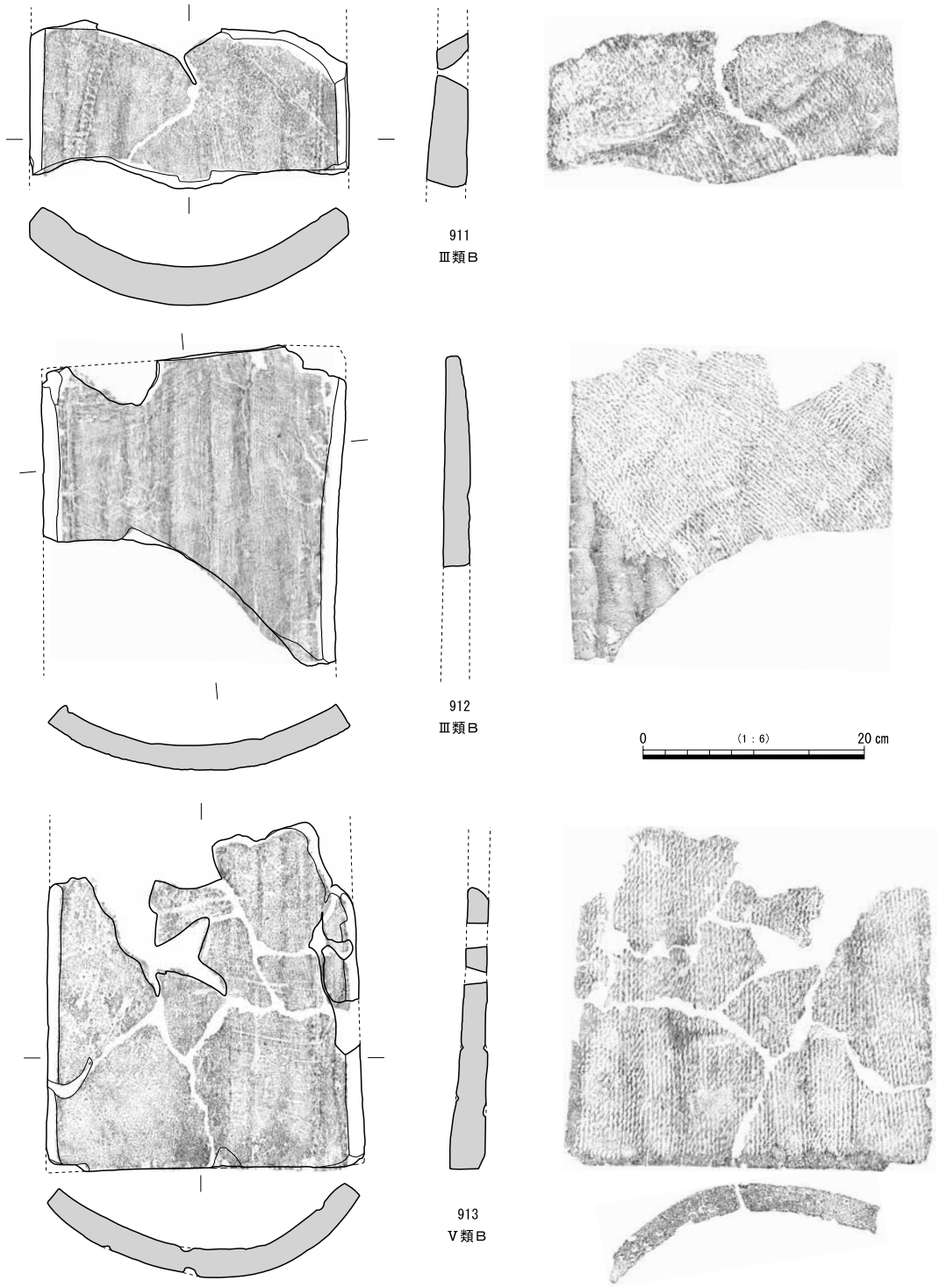


図 296　SX02 出土平瓦（3）

削る。狭端面は不明であるが、三側面は凹面を上にして時計回りの方向に調整している。

Ⅴ類C　914 ～ 916 はⅤ類Cである。狭端幅は 26 ㎝・広端幅は 28 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが残る。凹面は側縁に面取りを施すほかは無調整で、広範囲に布目が残る。左右の側面は、分割截面に沿って全体を削る。いずれも三側面しか残らないが、凹面を上にした状態で時計回りの方向に調整している。915 には粘土接合痕が確認でき、合わせ目はS型となっている。

917 はⅤ類Cの隅平瓦である。法量は全長 41 ㎝・狭端幅 27 ㎝である。調整はⅤ類Cの平瓦とほぼ同

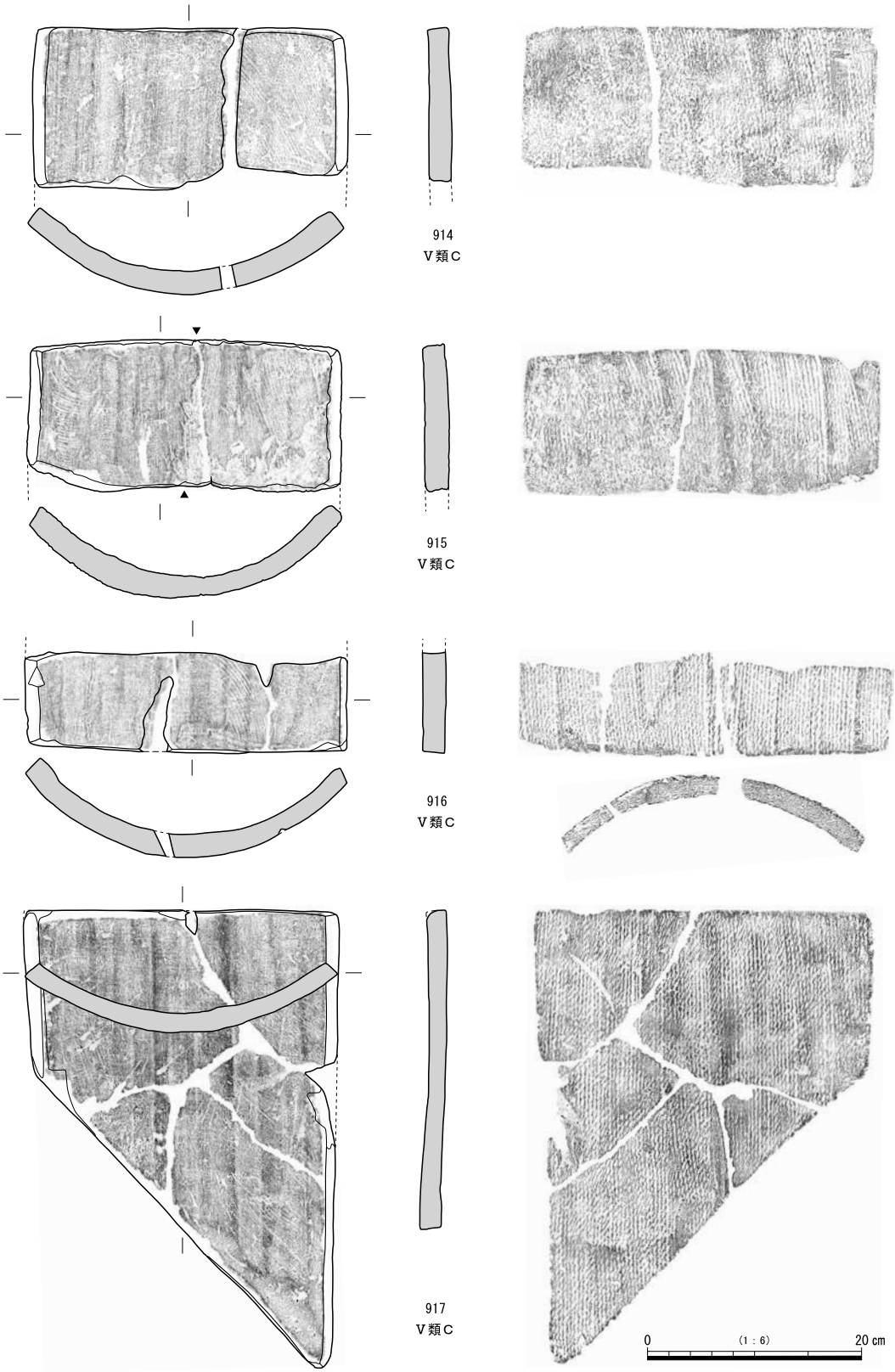


図 297　SX02 出土平瓦（４）

様であるが、斜辺にも一部面取りが施されている。いずれも１号窯で生産されたものとみてよい。

SX02 は２号窯と隣接しているが、出土している瓦は各窯の製品が混在する状況にある。これらの遺物は、上方の SX01 などから流入したものである可能性が高い。

SD01（図 298 ～ 305）

SD01 では、総重量 170.4 kgの平瓦が出土している。丸瓦程ではないが、１号窯の煙道付近から比較的完形に近いものが多く出土している。広・狭端部が残存するものを中心に 21 点図示する。なお、図示していないが、Ⅰ類についても破片は確認される。これらの遺物は丸瓦と同様に、SX01 から流入したものであると推測される。

Ⅱ類Ｂ　918 はⅡ類Ｂの広端部である。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整が主体であるが、部分的に縦ナデ調整も施されている。凹面はやや風化が著しいが、ほとんどが無調整で布目が残る。両側縁には幅広に浅く面取りし、広端側には部分的に横ナデ調整が施されている。左右の側面は、凸面側に深く削っている。２号窯で生産されたものとみてよい。

Ⅱ類Ｄ　919 ～ 921 はⅡ類Ｄである。法量は、全長 36 ～ 37 ㎝・狭端幅 22 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 26 ㎝である。全体的に表面が風化しているものが多いが、凸面は全面ナデ調整であり、縦ナデ調整を主体としている。凹面は部分的に軽いナデ調整を施しているものもあるが、大半が無調整で布目が残る。両側縁には、やや幅広の浅い面取りが施されている。左右の側面は、分割截面に沿って全体を削る。いずれも１号窯で生産されたものの可能性が高い。

Ⅱ類Ｅ　922 ～ 927 はⅡ類Ｅである。法量は、全長 35 ～ 36 ㎝・狭端幅 24 ～ 25 ㎝・広端幅 26 ～ 27 ㎝である。924 ～ 927 は、広狭端の幅の差が少なく四角形に近い形状となっている。凸面には全面に横ナデ調整が施されており、部分的に縦ナデ調整が加えられている。風化によって不鮮明になっているものもあるが、凹面は側縁に浅い面取りが施されるほかは無調整で、ほぼ全面に布目が残る。側面は分割截面に沿って全体を削っているが、凹面側にやや深くなるものが多い。全体的に厚手のつくりとなっている。これらはいずれも１号窯で生産されたものとみてよい。

924・926 には粘土接合痕が確認できる。合わせ目は 924 がＺ型、926 はＳ型である。923 には凹面に布綴じ痕が残り、広端面には藁とみられる植物痕が確認される。植物痕は方向が不規則で、広端面の調整後に付着している。調整後の乾燥時に付着したものと推測される。

Ⅱ類Ｆ　928・929 はⅡ類Ｆである。法量は、全長 33 ～ 35 ㎝・狭端幅 21 ～ 23 ㎝・広端幅 24 ～ 25 ㎝である。凸面は全面ナデ調整で、横ナデ調整を主体とし、部分的に縦ナデ調整を加えている。凹面は、部分的に軽い縦ナデ調整を施す以外は無調整で、ほぼ全面に布目が残る。929 は両側縁に面取りを施している。側面は凸面側を深く削り、ナデ調整を加えて丸みを帯びた形状に仕上げている。928 には粘土接合痕が確認でき、粘土の合わせ目はＺ型である。全体的に薄手のつくりであり、指痕などによる凹凸が多く残るなど、やや雑な仕上がりとなっている。ともに１号窯で生産されたものとみてよい。

Ⅱ類Ｇ　930 ～ 932 はⅡ類Ｇである。法量は、全長 39 ㎝・狭端幅 25 ～ 26 ㎝・広端幅 27 ～ 28 ㎝と大型のものである。凸面は全面ナデ調整で、横ナデが主体であるが、部分的に縦ナデ調整が施されている。凹面は部分的にナデ調整が施されるほかは無調整で、ほぼ全面に布目が残

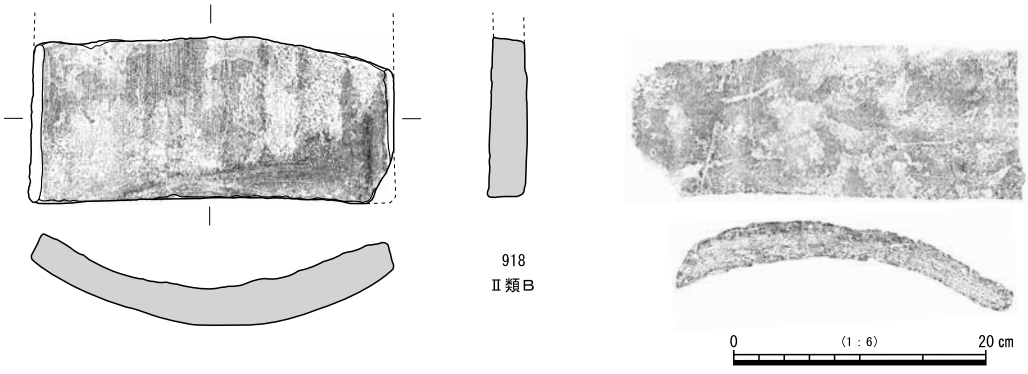


図 298　SD01 出土平瓦（１）

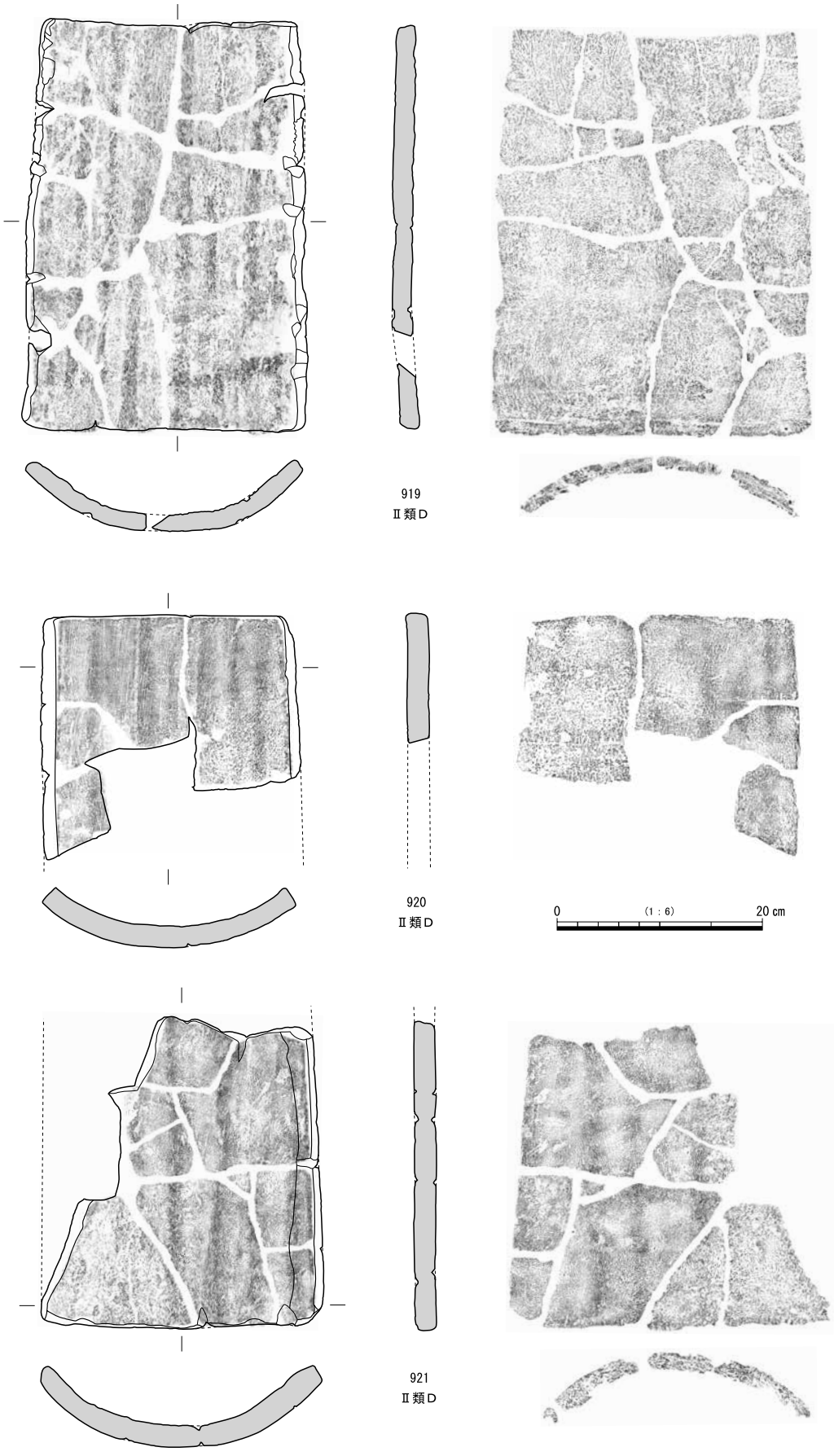


図 299　SD01 出土平瓦（２）

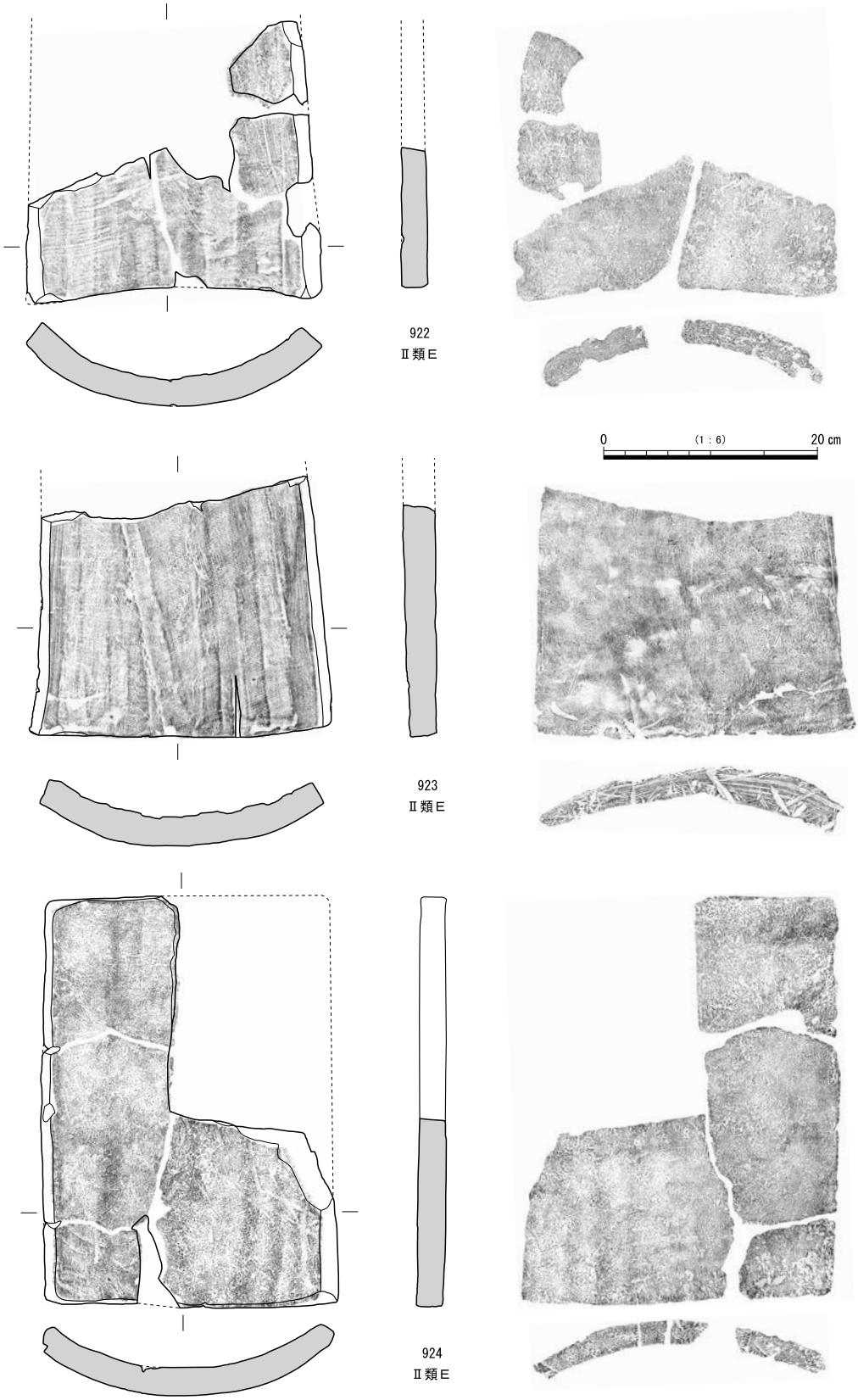


図 300　SD01 出土平瓦（3）

る。側縁には幅広の浅い面取りが施されている。左右の側面は、分割截面に沿って全体を削るが、931 は凹面側にやや深くなっている。930 には粘土接合痕が確認でき、粘土の合わせ目はＳ型となっている。いずれも 1 号窯で生産されたものとみてよい。

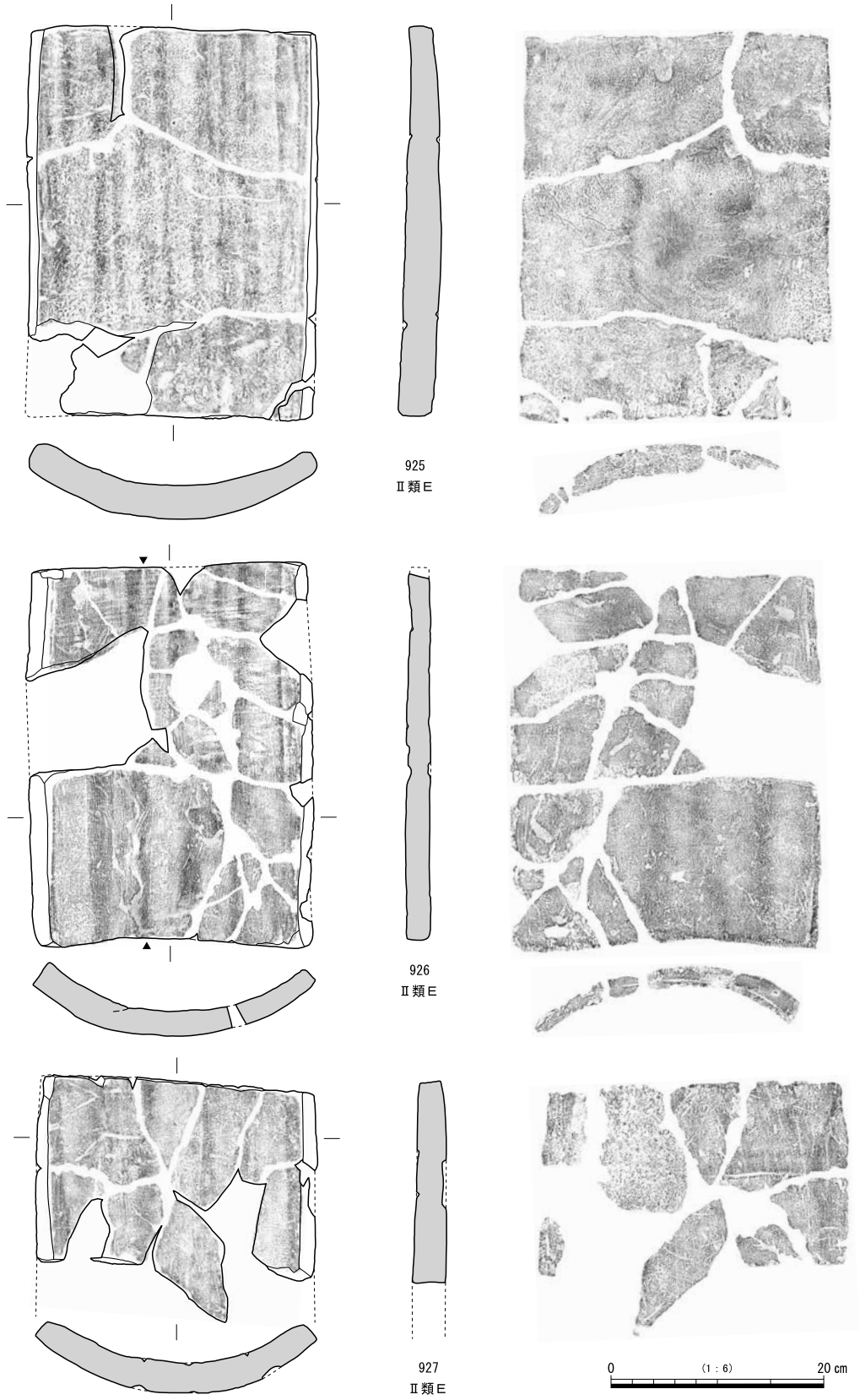


図 301　SD01 出土平瓦（４）

Ｖ類Ｃ　933・934 はＶ類Ｃである。法量は、全長 40 ～ 41 ㎝・狭端幅 26 ～ 27 ㎝・広端幅 28 ～ 29 ㎝である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。凹面は側縁を浅く面取りするほかは無調整

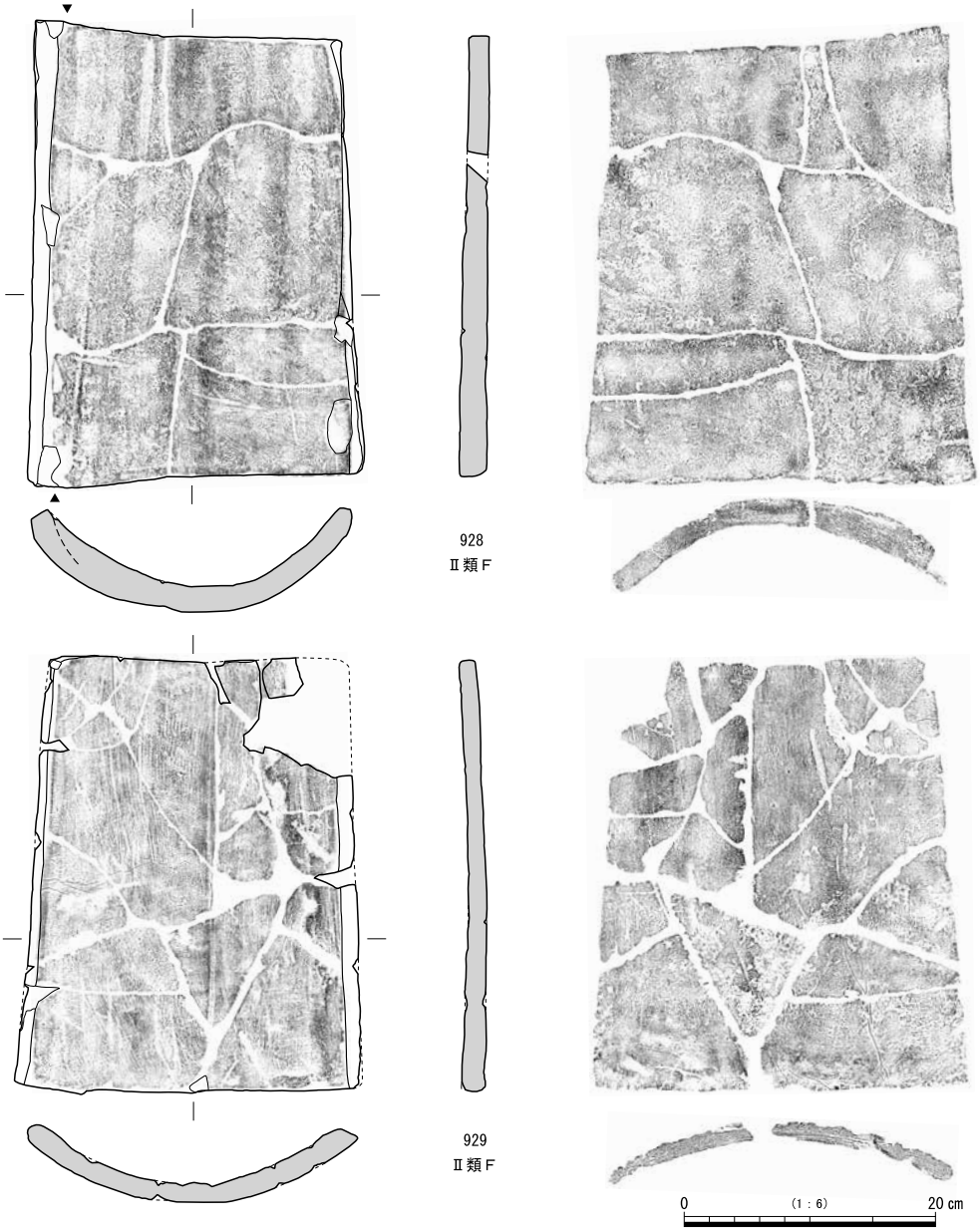


図 302　SD01 出土平瓦（５）

で、ほぼ全面に布目が残る。左右の側面は分割截面に沿って全体を削る。四側面は凹面を上にした状態で時計回りに調整している。933 には布綴じ痕が残っている。ともに１号窯で生産されたものである。

Ｖ類Ｄ　935 はＶ類Ｄの狭端部である。凸面は無調整で、縦方向の縄叩きが明瞭に残る。狭端付近の叩き目はやや斜め方向に傾いている。凹面は側縁を面取りするほかは無調整で、ほぼ全面に布目が残る。側面は凹面側に深く削っている。１号窯の製品であると推測される。

Ｖ類Ｅ　936 ～ 938 はＶ類Ｅである。法量は、全長 35 ～ 36 ㎝・狭端幅 23 ～ 24 ㎝・広端幅 24 ～ 25 ㎝である。凸面は無調整で縦方向の縄叩きが残る。凹面はいずれも風化が著しいが、表面が観察できる部分には布目が残存していることから、無調整であると推測される。側面は、936 と 937 は凸面側を深く削り、938 は分割截面に沿って全体を削っている。いずれも非常に厚手のつくりとなっている。936 と 937 には粘土接合痕が確認でき、粘土の合わせ目は 936 がＺ型、937 はＳ型である。いずれも１号窯で生産されたものとみてよい。

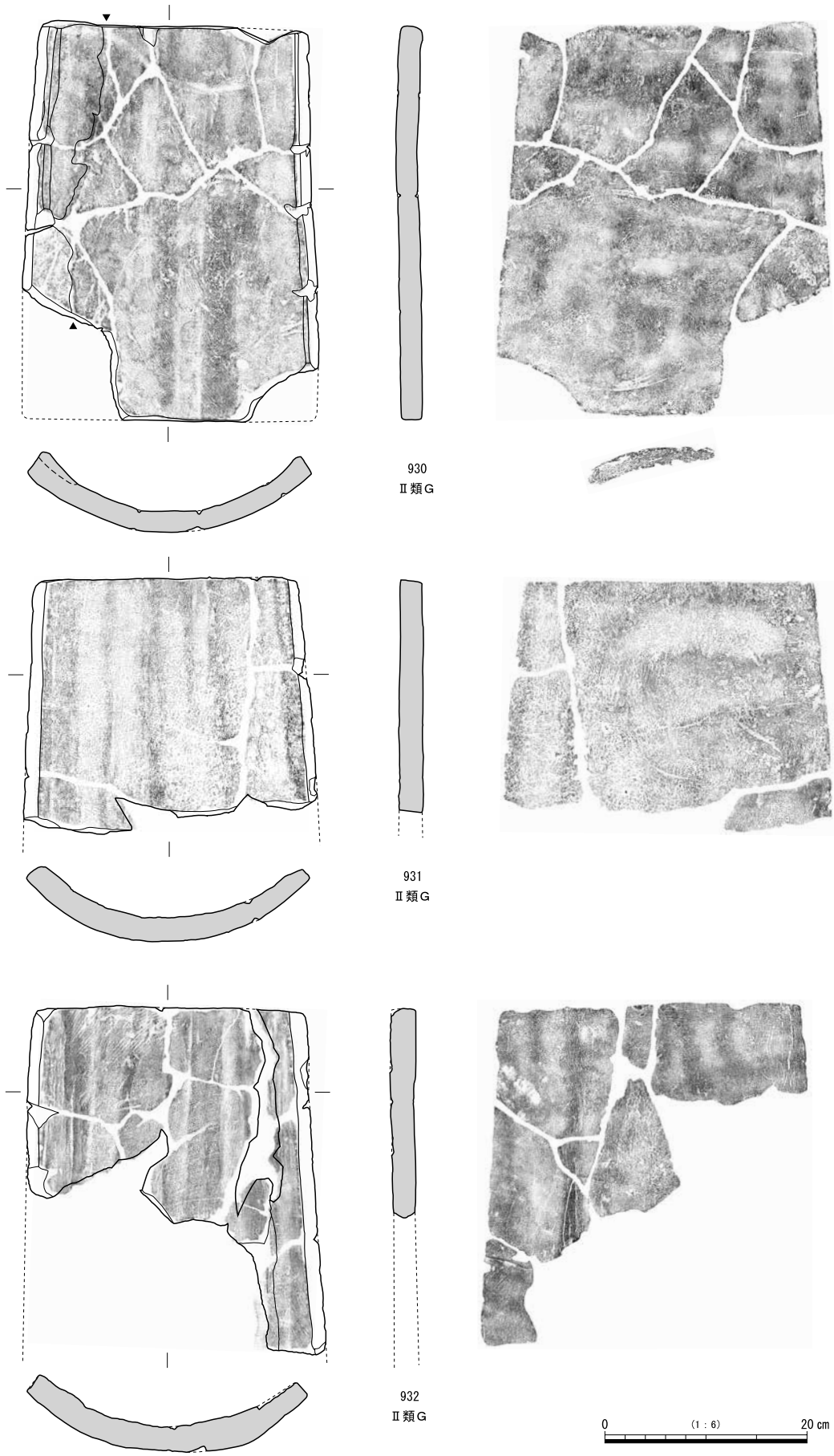


図 303　SD01 出土平瓦（６）

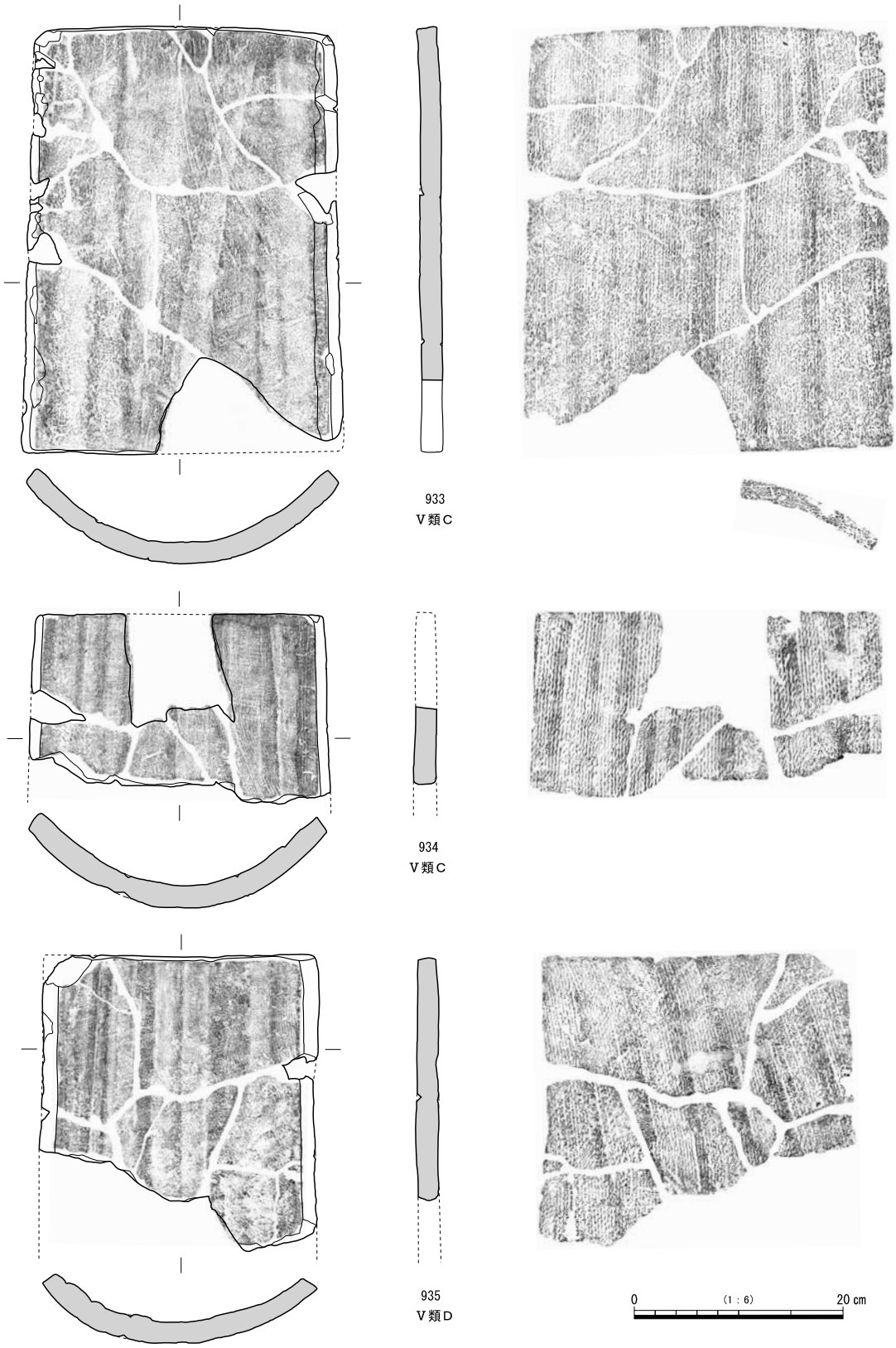


図 304　SD01 出土平瓦（7）

SD02

SD02 から出土した平瓦に関しては、表面の風化が著しいものがほとんどである。また接合する破片も少なく、分類が困難なため図化していない。分類はできないが、平瓦として認識できるものは、総重量にして 64.1 kg出土している。

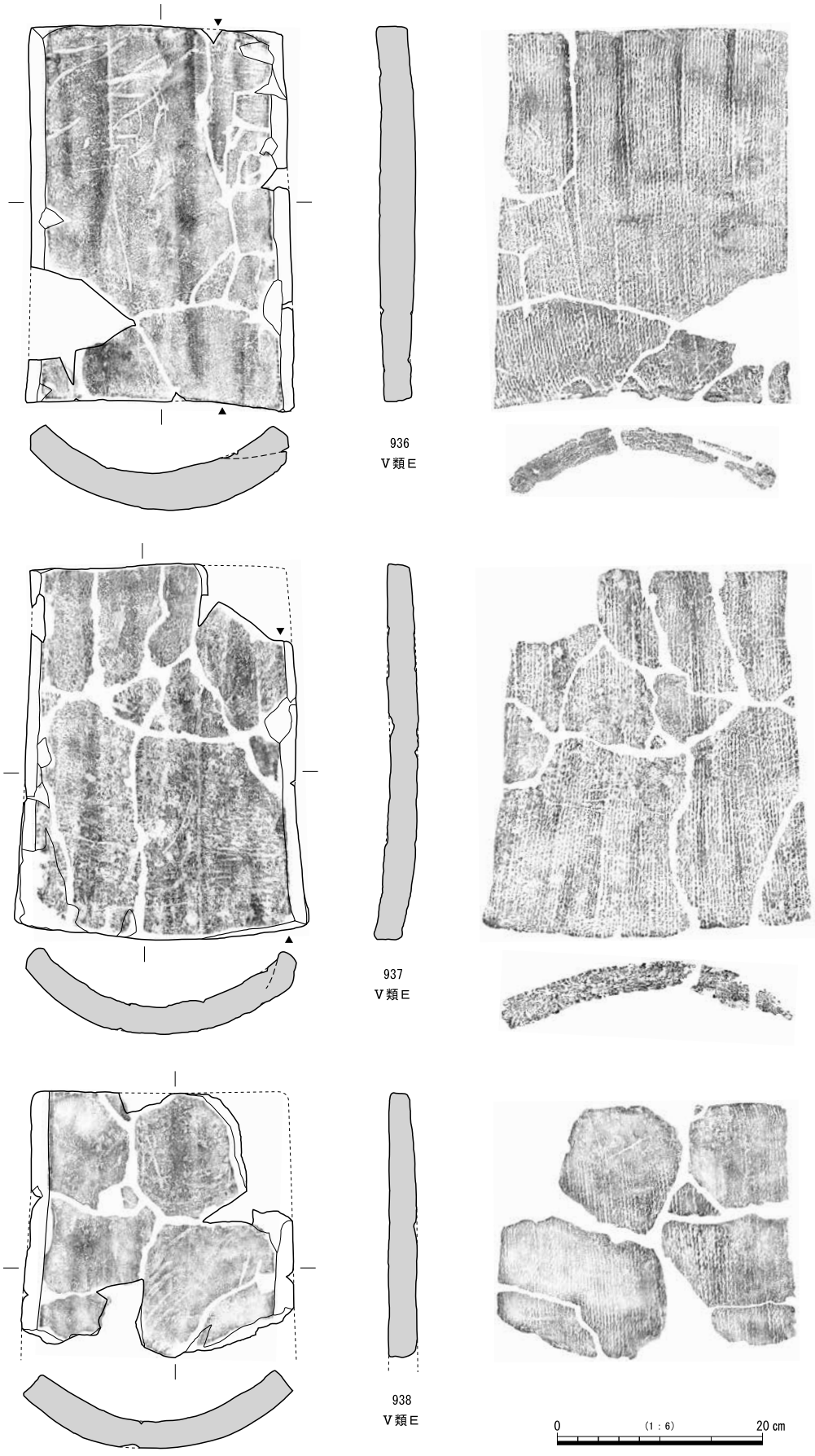


図 305　SD01 出土平瓦（８）

5　熨斗瓦

熨斗瓦は、合計158点・総重量105.7kg出土している。ただし、熨斗瓦に関しては、両側面が残るなど明確に識別できるものに限っており、破片については平瓦と分類されたものにも相当量含まれていることが想定される。各窯から一定量の出土が確認されているが、特に３号窯からは遺存状態のよいものが多く出土している。窯以外の遺構でも出土しており、SD01からは完形に近い状態の隅熨斗瓦がまとまって出土している。比較的多く出土している３号窯については残存部の多いものを中心に、その他の窯・遺構については風化により表面の観察が困難なものを除きほぼ網羅的に図化・掲載した。

（1）分類

熨斗瓦は、いずれも焼成前に平瓦を分割して製作される切熨斗瓦である。凸面は分割する平瓦の調整に拠っているが、凹面は平瓦の調整と異なり、一部を除き基本的にはナデ調整は施されず布目が残る。凸面調整の有無からⅠ～Ⅲ類に分類し、Ⅰ類はナデ調整によりさらに細分した。

Ⅰ類　凸面を全面ナデ調整するもの。凹面はナデ調整しないものが大半であるが、一部全面ナデまたは削り調整を施すものもみられる。ナデ調整の違いによりにＡとＢの２種に細分される。

Ⅰ類Ａ　横ナデ（回転ナデ）を主体とするのもの。法量の違いにより１～６に細分される。

Ａ１　幅が７㎝前後のもの。熨斗瓦Ⅰ類Ａ４を半分に分割。

Ａ２　幅が９㎝前後のもの。熨斗瓦Ⅰ類Ａ５を半分に分割。

Ａ３　幅が12㎝前後のもの。

Ａ４　幅が14㎝前後のもの。

Ａ５　幅が18㎝前後のもの。

Ａ６　幅が25㎝前後のもの。

Ⅰ類Ｂ　縦ナデまたは不整方向のナデを主体とするもの。法量の違いにより１～４に細分される。

Ｂ１　幅が12㎝前後のもの。

Ｂ２　幅が16㎝前後のもの。

Ｂ３　幅が18㎝前後のもの。

Ｂ４　幅が20㎝前後のもの。

Ⅱ類　凸面にナデ調整を施さず、叩き締めの円弧を描く縄叩きが残るもの。出土数が少ないが、法量により１～３に細分される。

１　幅が６㎝前後のもの

２　幅が14～16㎝のもの

Ⅲ類　凸面にナデ調整を施さず、縦縄叩きが残るもの。法量の違いにより１～４に細分される。

１　幅が８㎝前後のもの。熨斗瓦Ⅲ類３を半分に分割。

２　幅が11～12㎝のもの。

３　幅が14～16㎝のもの。

４　幅が18㎝前後のもの。

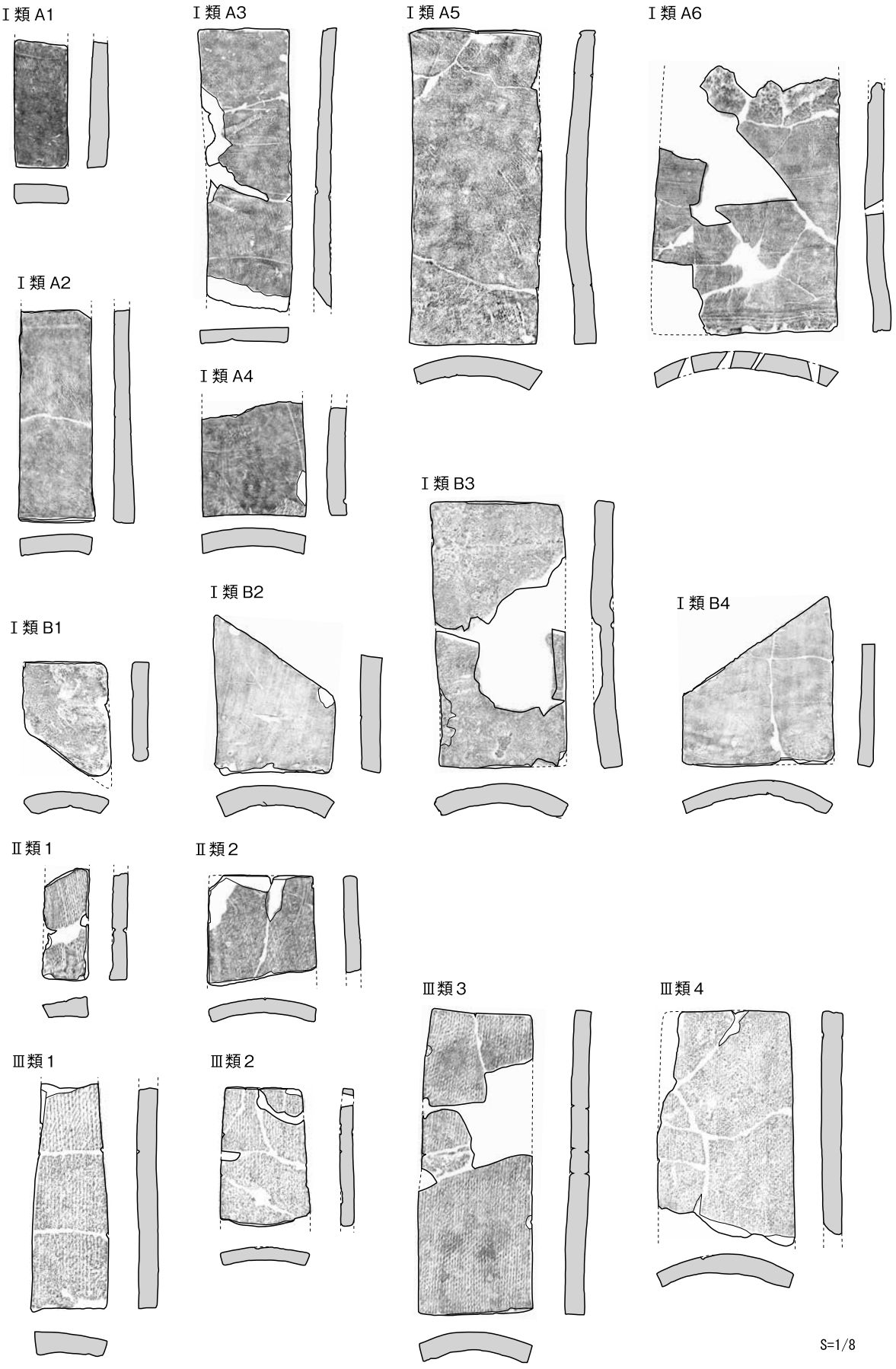

Ⅰ類 A1
Ⅰ類 A3
Ⅰ類 A5
Ⅰ類 A6
Ⅰ類 A2
Ⅰ類 A4
Ⅰ類 B3
Ⅰ類 B2
Ⅰ類 B1
Ⅰ類 B4
Ⅱ類１
Ⅱ類２
Ⅲ類３
Ⅲ類４
Ⅲ類１
Ⅲ類２
S=1/8

図 306　熨斗瓦の分類

（2）３号窯出土

３号窯窯体内（図 307、図版 21・76）

３号窯窯体内から出土しているのは、合計４点・総重量 7.9 kgのみであり、細片１点を除き３点を図示する。939 と 940 はⅠ類Ａ５である。凸面のナデ残しの部分には、斜め方向の縄叩きが残る。393 はほぼ完形で、Ｚ型の粘土板の合わせ目が残る。940 はやや薄手で、凹面の側縁には浅い面取りが施されている。941 はⅠ類Ａ６である。厚さは 2.5 ㎝程で、広端面には藁座痕が残る。

３号窯灰原（図 308 ～ 309、図版 21・75 ～ 78）

３号窯灰原では、合計 52 点・総重量 17.6 kgと比較的多くの数が出土している。両側面が残り幅が把握できるものを中心に 30 点図示する。

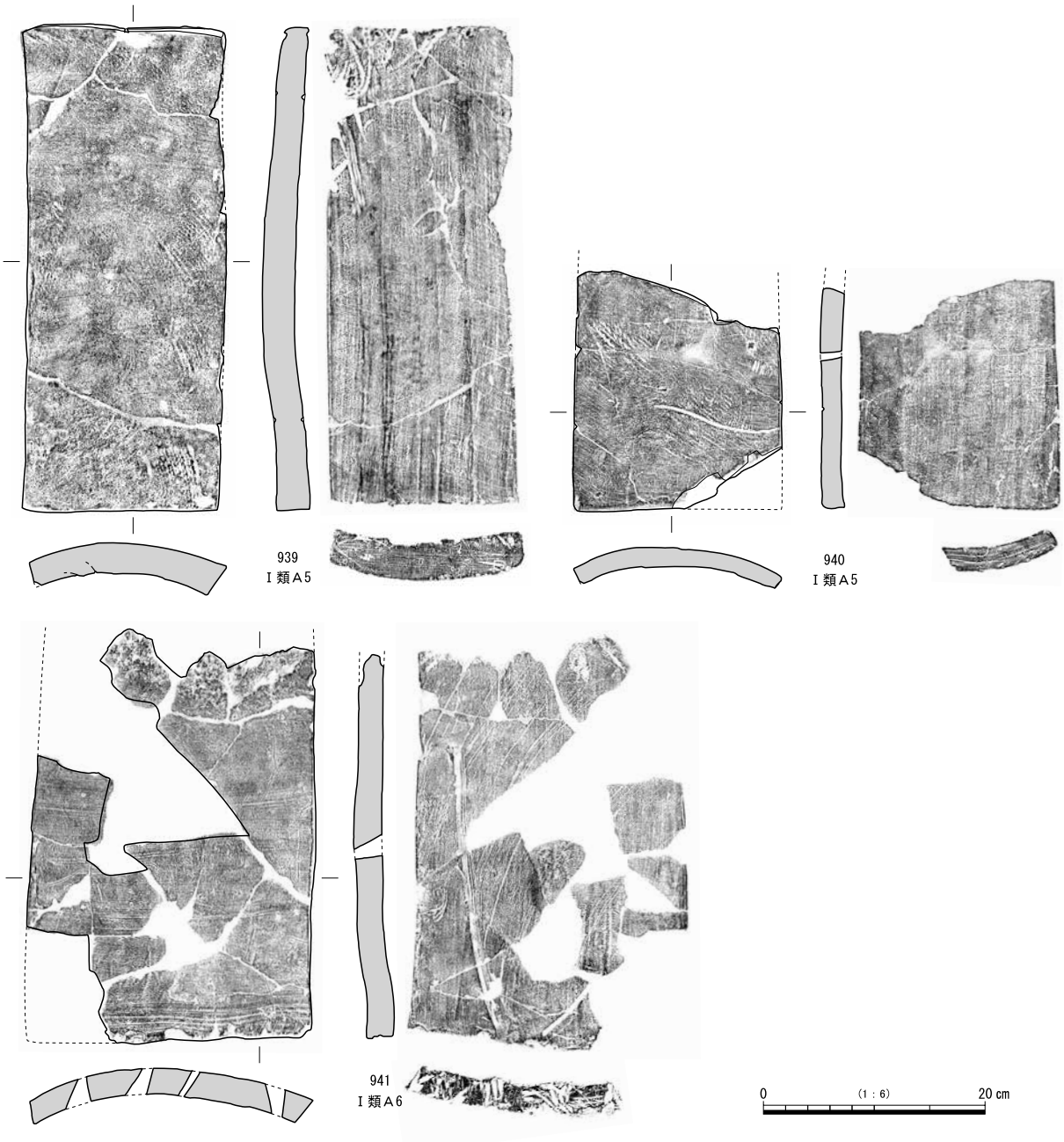


図 307　３号窯窯体内出土熨斗瓦

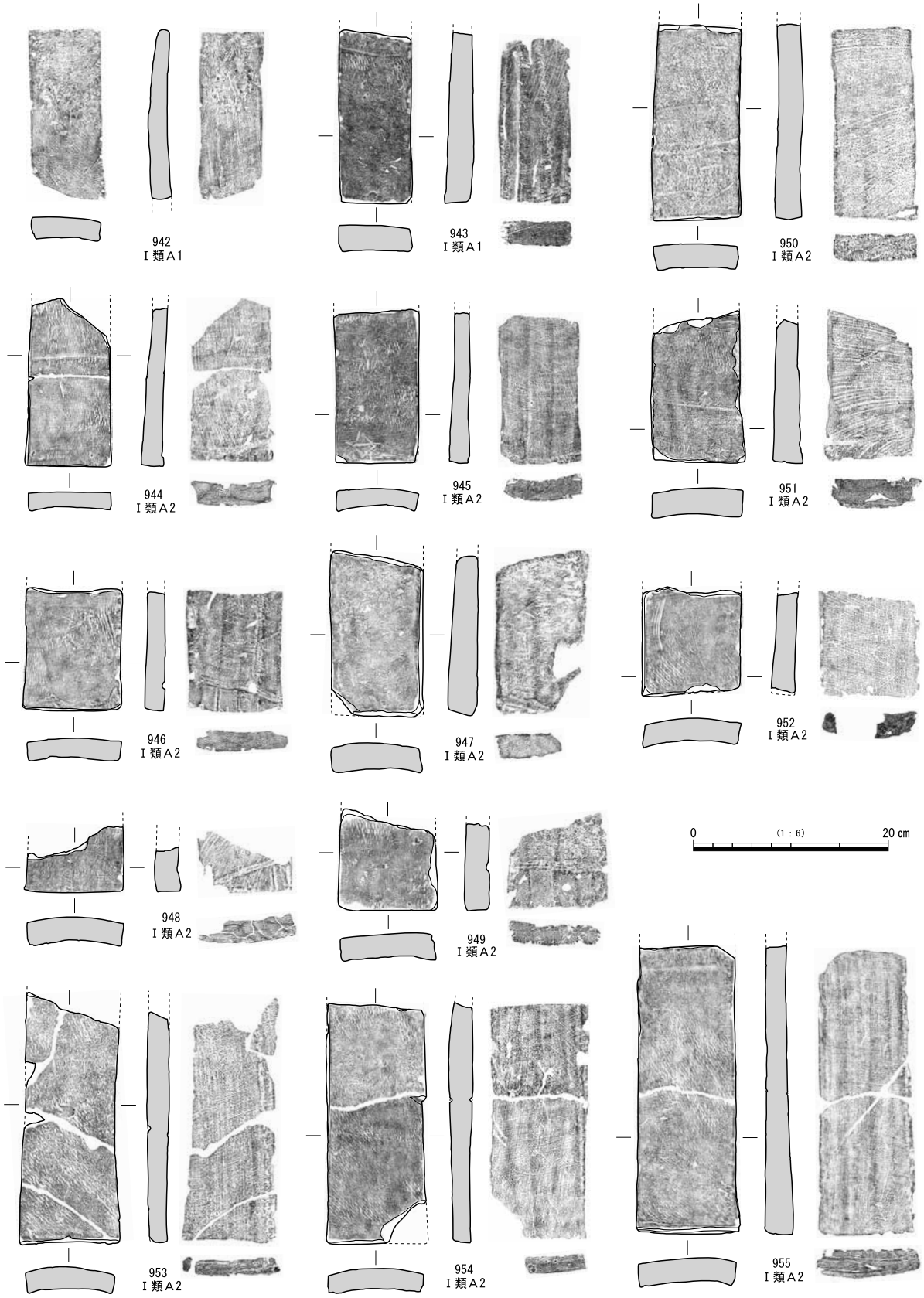


図 308　３号窯灰原出土熨斗瓦（１）

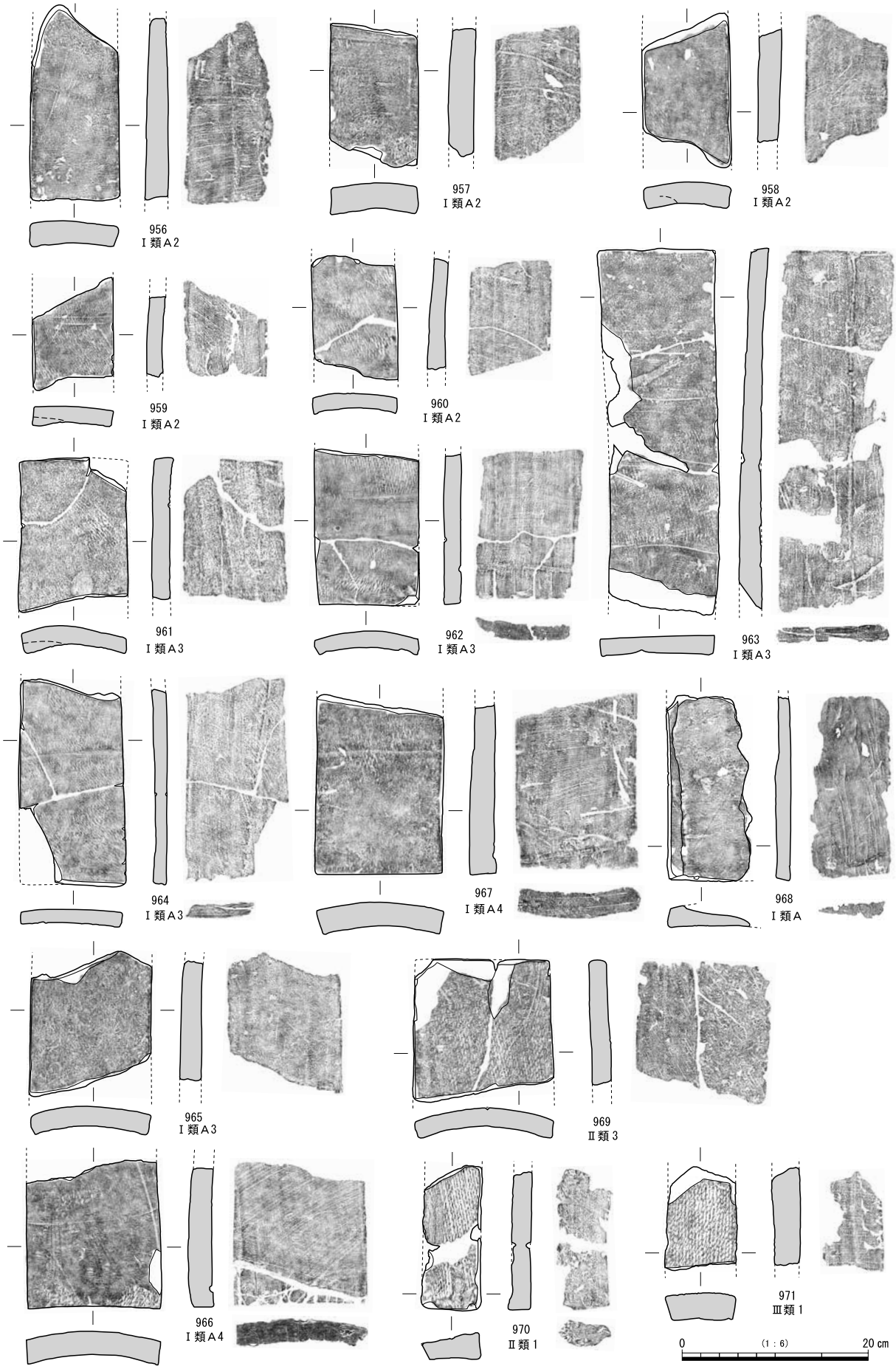


図 309　3号窯灰原出土熨斗瓦（2）

942・943 はⅠ類Ａ１である。凸面は横ナデ調整で、ナデ残しの部分に斜め叩きが残る。いずれも多少平坦になるよう凸面側から押圧されており、凸面には上から押圧した際の指痕が付着している。942 の側面には、凹面側からの切り込みが確認される。

944 ～ 960 はⅠ類Ａ２である。凸面は横ナデ調整で、ナデ残しの部分には斜め叩きが残り、部分的に指痕がみられる。凹面は、側縁を面取りするものもあるが、無調整のものが多い。944 と 945 は半裁されて２枚となった個体である。凸面のナデ調整で砂粒を引きずった痕や、凹面の布目が連続していることから明確に認識できる。分割面には、全体に削り調整が施されている。944 ～ 949 は広端部に布端が認められる破片である。布足らずとなっている部分には、側板痕が明瞭に残る。950 と 951 には、凹面に糸切り痕が明瞭に残る。954・955 には凹面の側縁に分割突帯とみられる窪みが確認できる。956・958 には布綴じ痕が、959 にはＺ型の粘土板合わせ目が残る。

961 ～ 965 はⅠ類Ａ３である。961 にはＺ型の粘土板合わせ目が明瞭に残る。962 は広端部が布足らずの状態となっており、広端付近には側板痕が確認できる。963 は広端部側を欠くが、比較的良好に残る。分割突帯の痕跡とみられる窪みが縦方向に通る。ほぼ扁平に熨されている。964 も扁平に近い形状に熨されており、凹面には布綴じ痕が残る。

966・967 はⅠ類Ａ４である。いずれも厚手のつくりで、広端部側が布端が残る。966 の布足らずの部分には藁状の植物痕が認められる。968 は凸面にナデ調整が施されておりⅠ類に相当するが、凹面にもナデ調整が施される特殊なもの。粘土板の合わせ目で剥離している。扁平な形状であるため熨斗瓦としたが、片方の側面しか残らないため平瓦の可能性もある。

969 はⅡ類３、970 はⅡ類１である。969 については２号窯の前面から出土しており、２号窯のものが転落した可能性がある。

971 はⅢ類１である。窯から 40 ｍ以上離れたＥ区から出土している。縦縄叩きであることから、おそらくは１号窯に伴うものであろう。

３号窯埋土（図 310、図版 77）

１号窯灰原に相当する３号窯の埋土上層から出土した熨斗瓦は、図化した３点のみである。

972 はⅡ類３である。凸面には斜め叩きが残り、叩き目の重複する部分も多い。広端面の凸面側には藁座痕が残る。広端面などに窯壁が付着していることから、構築材に使用されていた可能性が高く、１号窯の製品とは断定できない。

973･974 はⅢ類であり、凸面に縦縄叩きが残る。973 はⅢ類１であり、全面に焼土の付着が確認できる。１と同様に１号窯の構築材として使用されていた可能性が高い。974 は両側端が残存しないため、幅がわからない。隅熨斗瓦であり、狭端側が斜めに截断されている。

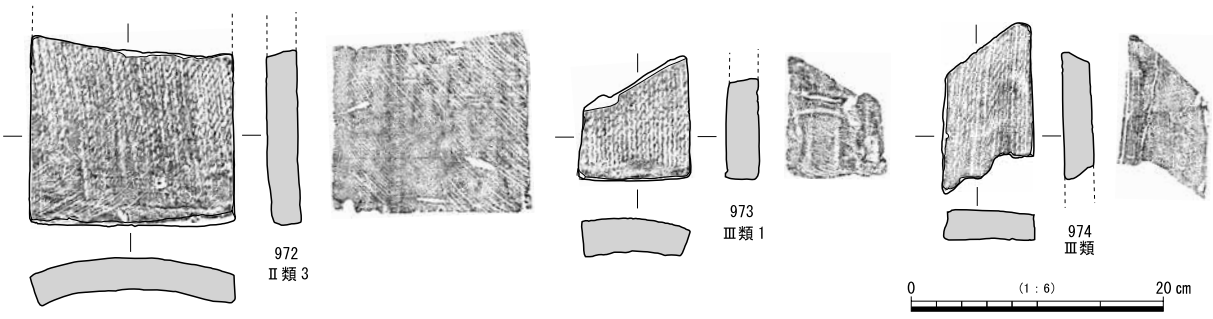


図 310　３号窯埋土出土熨斗瓦

（3）２号窯出土

２号窯窯体内（図 311、図版 78）

２号窯の窯体内から出土した熨斗瓦は、図示した２点のみである。

975・976 はⅢ類３であり、一部を欠くがほぼ全形が把握できる。長さはともに 41 ㎝である。平瓦を半截し、側面を削り調整しているが、平瓦に近い湾曲ままになっており、あまり熨された形跡がない。975 は燃焼部の壁に埋め込まれた状態で出土しており、全面に焼土が付着する。976 は焼成室の床面から出土している。凹面には布綴じ痕が残り、広端面には凹面側からの切り込みが確認できる。

２号窯灰原（図 312、図版 78）

２号窯灰原から出土した熨斗瓦も少なく、確実なものは図示した６点のみであり、ほかに湾曲が緩く熨斗瓦の可能性があるものが１点確認できる程度である。

977 ～ 980 はⅠ類であり、凸面に横ナデ調整が施されている。熨して湾曲を緩くしている。977・978 はⅠ類Ａ２の破片である。977 は広端側が残る破片である。凹面広端付近には布端がみられ、布綴じ痕も確認できる。978 は表面の風化が著しく布目もほとんど観察できない。979・980 はⅠ類Ａ４の破片である。980 は凸面が横ナデ調整されているが、調整が粗くナデ残しの部分が多い。凸面に窯壁が付着しており、構築材として使用されていたものと推測される。

981 はⅡ類３であり、広端部側が半分程度残る。Ⅱ類とⅢ類の中間的な叩き目ではあるが、やや斜め方向で叩き目の重複も多いためⅡ類とした。分割はややいびつで幅が一定していない。凹面の側端付近には、分割突帯とみられる溝状の窪みが確認される。広端側に藁状の植物繊維痕が付着しているが、広端部の削り調整後の付着であり、藁座痕とは異なる。乾燥時に付着したものであろう。

982 はⅢ類２である。表面の風化が著しいが、凸面には縦縄叩きが確認できる。

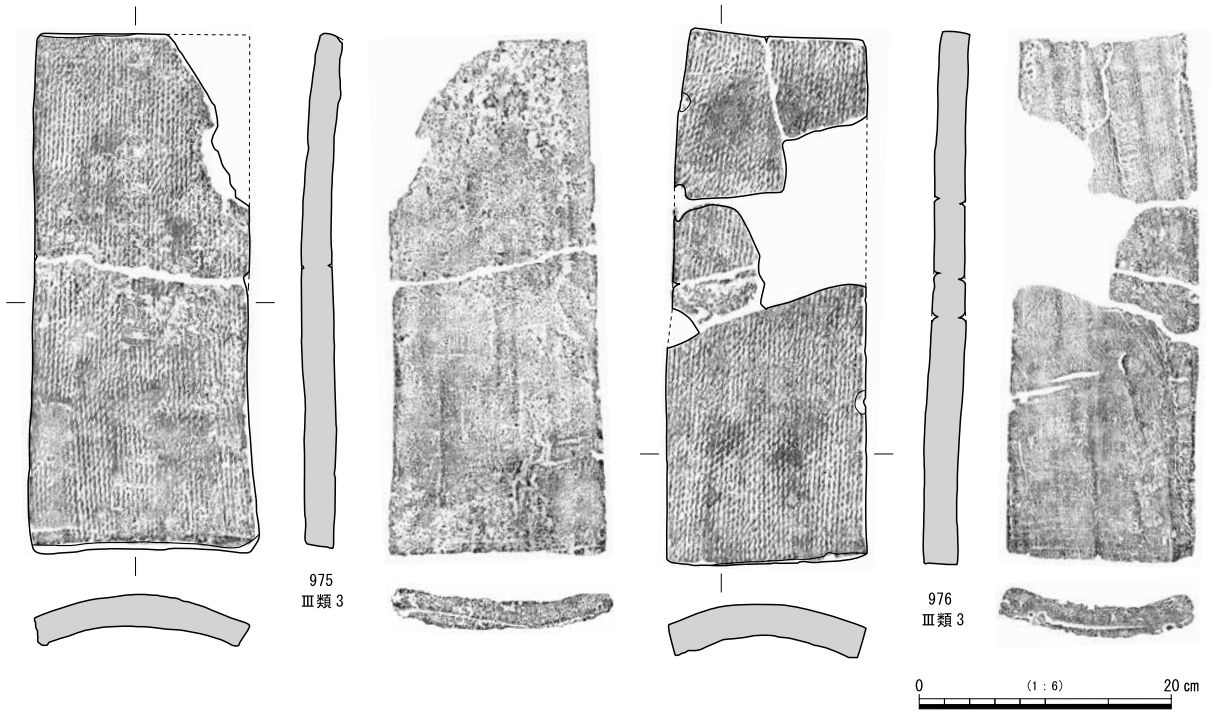


図 311　２号窯窯体内出土熨斗瓦

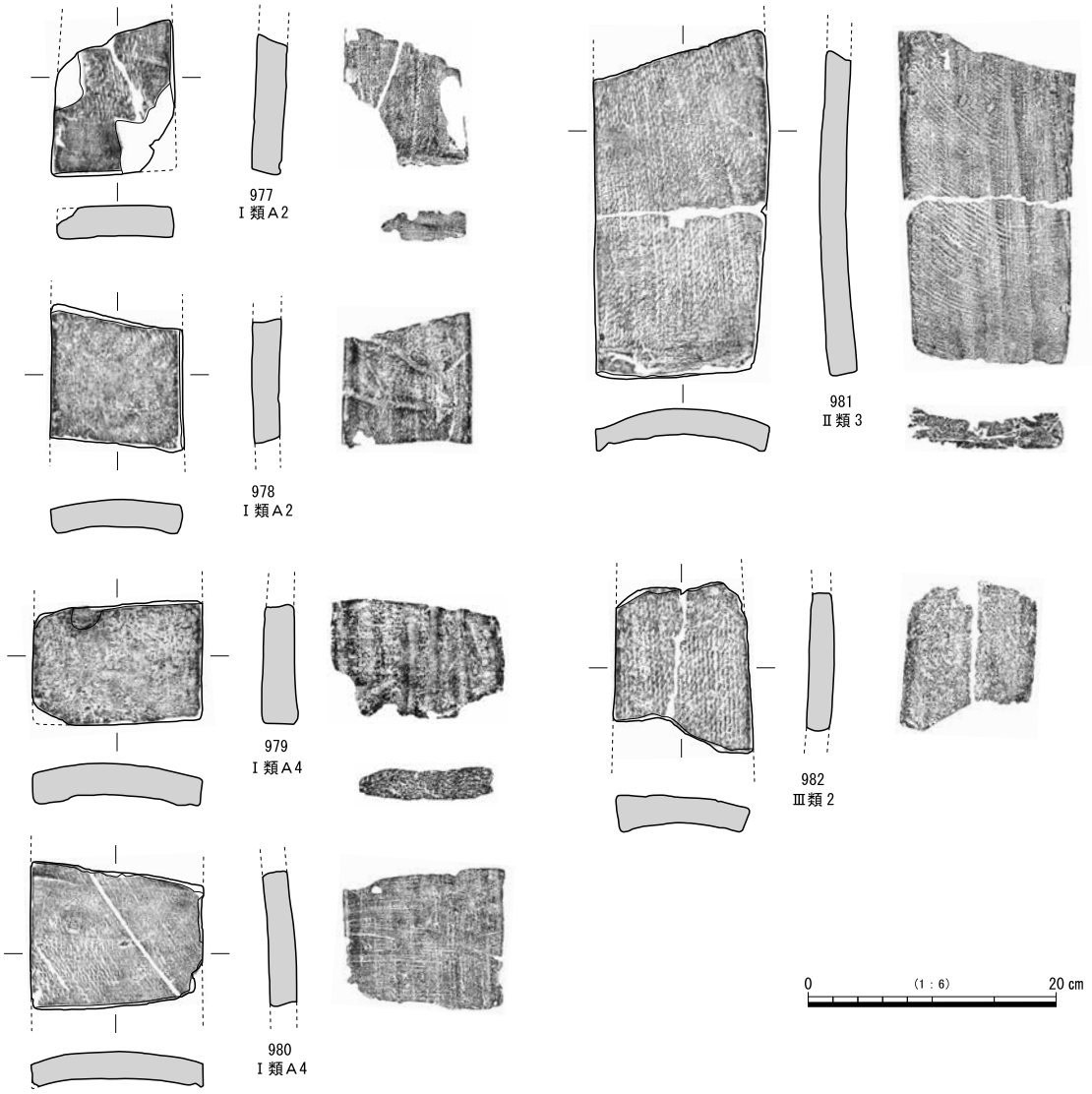


図 312　２号窯灰原出土熨斗瓦

（４）１号窯出土

１号窯窯体内（図 313 ～ 314、図版 33・77・78）

１号窯の窯体内からは、合計 16 点・総重量 15.8 kg出土しており、中には破損していない完形品も確認される。１号窯の焼成室には、瓦を積み上げた段が築かれている。棟と同様に段の構築材には、幅の狭い熨斗瓦が最適である。製品として使用可能な完存する瓦が出土しているのは、このことが関係しているのであろう。段に遺存していたものは 990・991・993・995 のみであるが、他の熨斗瓦も多くは段の構築材として使用されていた可能性が高い。出土した熨斗瓦は 16 点で、そのすべてを図示した。

983 ～ 997 はⅠ類Ｂで、いずれも凸面調整は縦または不整方向のナデ調整を主体とする。983 はⅠ類Ｂ１の隅熨斗瓦である。表面の風化が著しく、全体に焼土が付着する。側面は凹面側に深く削られている。984 ～ 989 はⅠ類Ｂ２である。986 ～ 989 は隅熨斗で、斜辺が広端部側にあるものと狭端部側にあるものとがみられる。984 と 985 は表面の風化が著しく、986 ～ 989 には表面に焼土や窯壁が付着する。988 は凹面調整が特殊で、全体に削り調整が施されている。989 は焚口閉塞瓦の下層（第２層）から出土している。

990 ～ 994 はⅠ類Ｂ３であり、990 以外は隅熨斗瓦である。991 ～ 993 は広端側に、994 は狭端側に斜辺がある。990・994 は表面の風化が著しく、ほかには焼土や煤が付着している。990・991・993 は段構

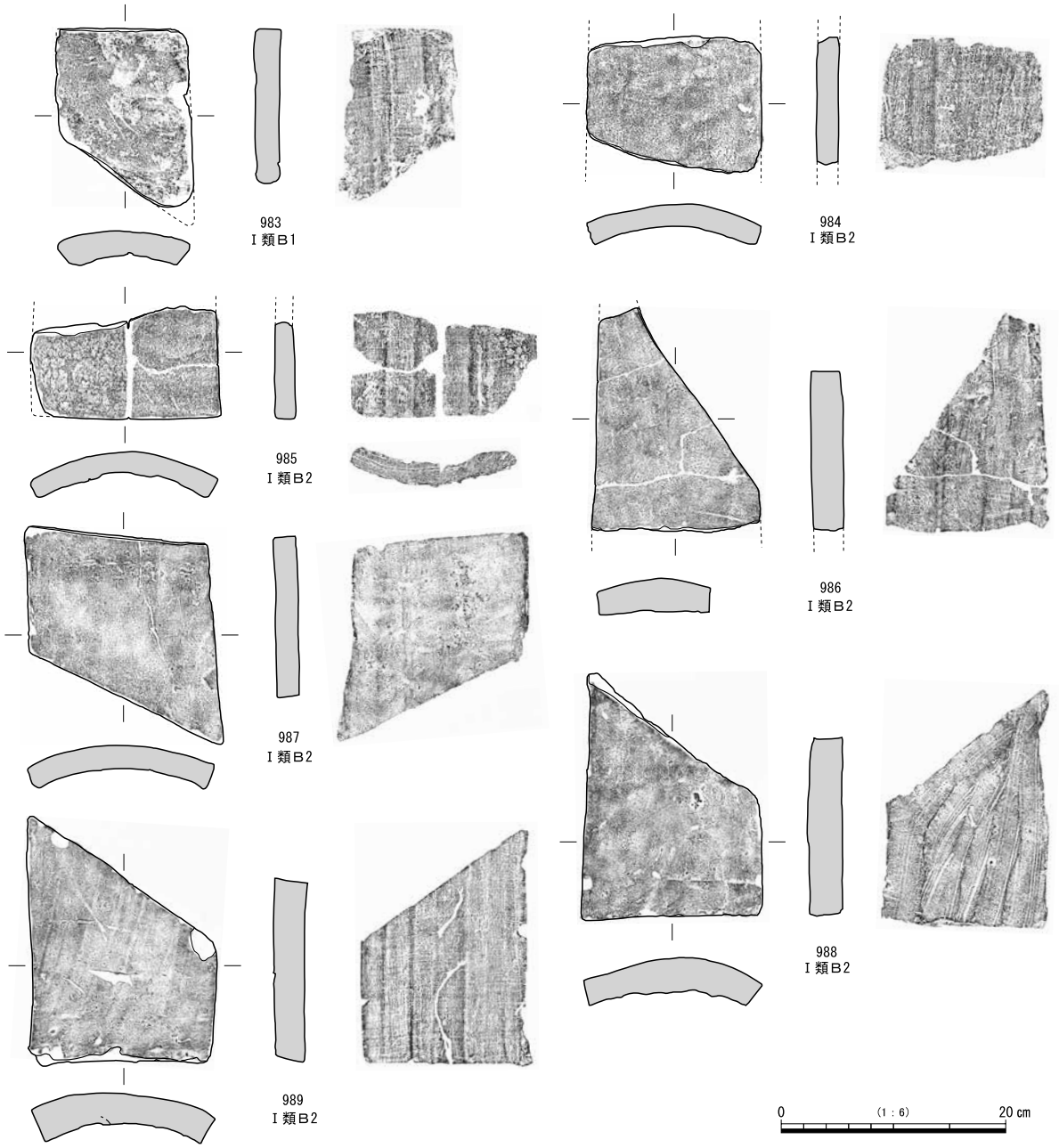


図 313　１号窯窯体内出土熨斗瓦（１）

築瓦であり、990 は 11 段目、991 は２つに割れて２段目と３段目に、993 は３段目に使用されていた。990 は完形品で、長さは 36 ㎝である。991・993 の中央付近の長さが 17 ～ 18 ㎝であることから、これらは１と同規模の熨斗瓦を斜めに截断して製作されたみてよい。991 には紐状の分割突帯とみられる溝状の窪みが確認できる。992 にはＺ型の粘土板合わせ目がみられ、993 の斜辺には凹面側からの切り込みが残る。

995･996 はⅠ類Ｂ４である。いずれも隅熨斗瓦で、表面全体に焼土が付着する。995 は段構築瓦であり、破片が４段目と 11 段目に使用されていた。場所による火熱の違いからか、破片の色調に差異が見られる。996 の斜辺には凹面側からの切り込みの痕跡が残る。

998 はⅢ類１である。燃焼室第二次床面の下層（第３層）から出土している。分割截線が位置をずらして入れ直されており、側面の一部が剥離して内側の分割截面が見えている。切り込みは凸面側から入れられている。凹面には、側端近くに分割突帯とみられる溝状の窪みが確認される。

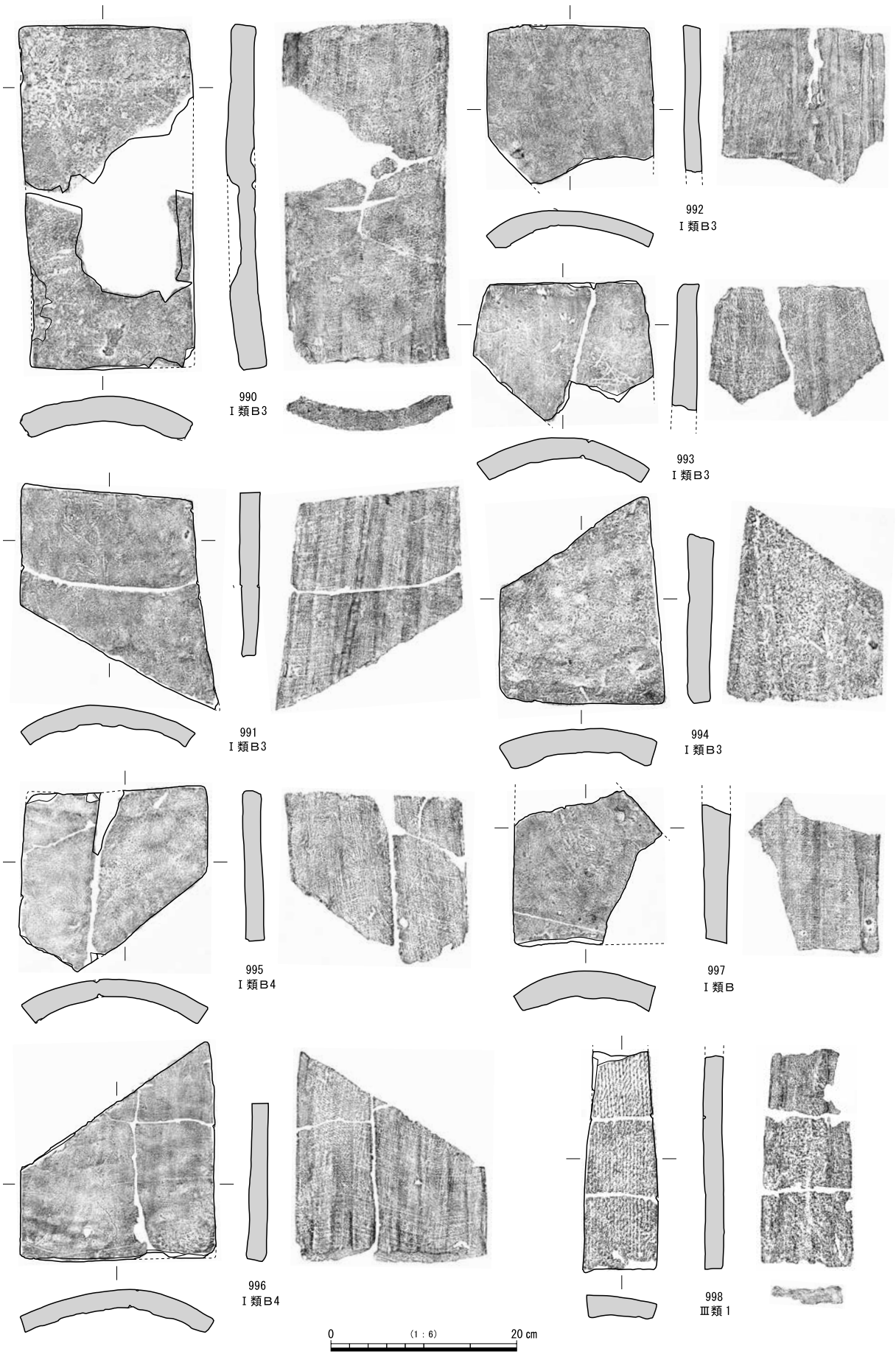


図 314　１号窯窯体内出土熨斗瓦（２）

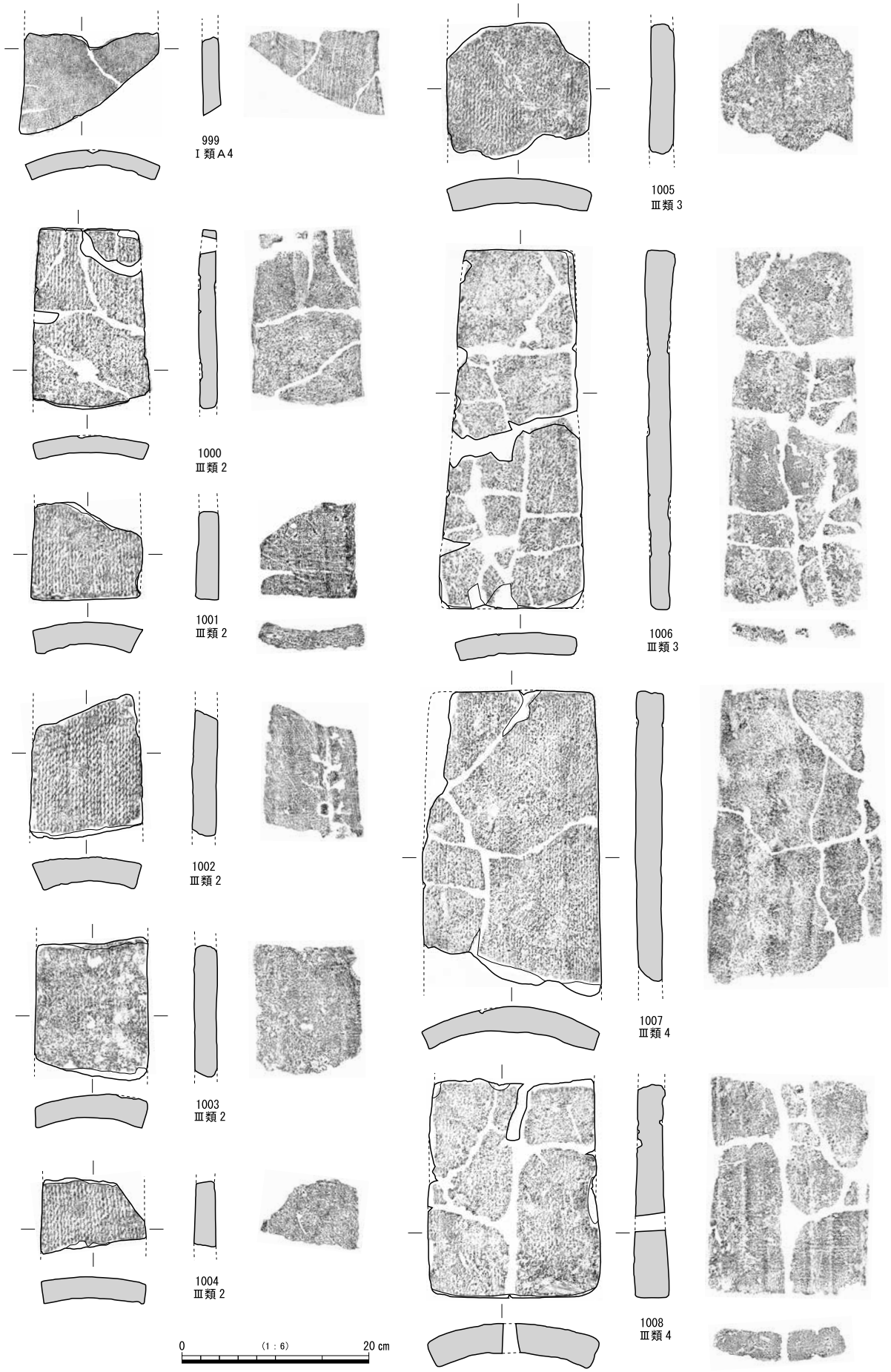


図 315　１号窯灰原出土熨斗瓦

１号窯灰原（図 315）

１号窯灰原からは、合計 12 点・総重量 10.0 kg出土している。表面の風化が著しいものも多いが、両側面の残存する 10 点を図示する。

999 はⅠ類Ａ４の隅熨斗瓦である。１号窯から出土したⅠ類はこの１点のみであり、SX01 などから混入したものの可能性が高い。

1000 ～ 1008 はⅢ類である。いずれも表面に焼土や煤が付着しており、1001 と 1002 以外のものは表面の風化も著しい。灰原からの出土ではあるが、以前に段などの構築材として使用されていた可能性が高い。1000 ～ 1004 はⅢ類２、1005・1006 はⅢ類３、1007・1008 はⅢ類４である。1006 は一部欠損してはいるがほぼ完形で、長さは 38 ㎝である。1007 にはＳ型の粘土板合わせ目がみられる。

（５）その他の遺構出土

SX01（図 316 ～ 318）

SX01 では合計 28 点・総重量 18.3 kg出土している。両側端が残るものを中心に 23 点を図示する。

1009 ～ 1014 はⅠ類Ｂ１で、1009 以外は隅熨斗瓦である。1010 には粘土板の合わせ目があり、合わせ目はＳ型となっている。1014 の凸面には、× 字形に交差する凹線が確認できる。意図的に付けられたものかどうか明確でないが、板状の工具などによるナデの痕跡かもしれない。

1015 ～ 1020 はⅠ類Ｂ２の隅熨斗瓦である。1016 と 1017 は風化が激しく、表面が黒く煤けている。1019 の凹面には布綴じ痕と、紐状の分割突帯とみられる窪みが残る。1020 の斜辺では截断面のズレがあり、凹面側から切り込まれていることがわかる。

1021 ～ 1024 はⅠ類Ｂ３の隅熨斗瓦である。1022 は風化が激しく、表面が黒く煤けている。凹面には布綴じ痕が確認できる。1024 には粘土板の合わせ目が明瞭に残る。合わせ目はＳ型になっている。

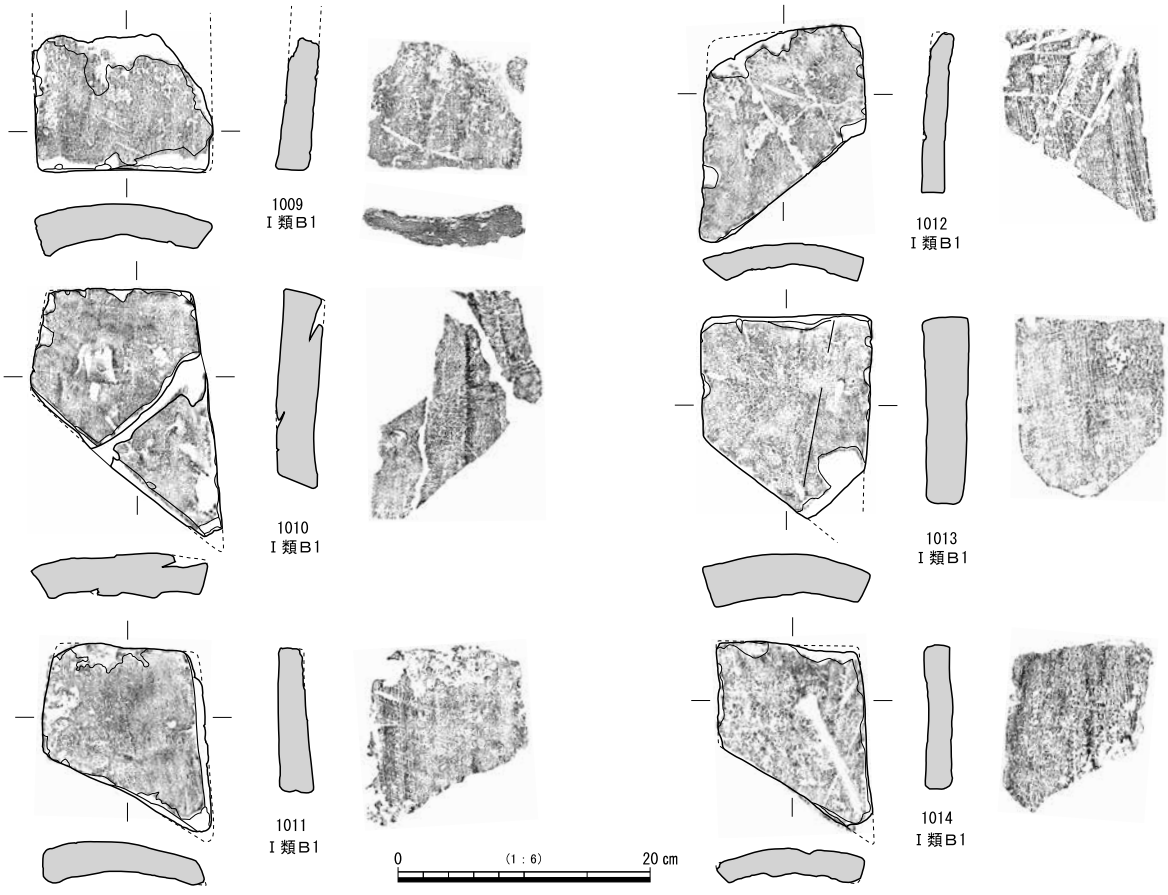


図 316　SX01 出土熨斗瓦（１）

1025 ～ 1031 はⅠ類Ｂ４の隅熨斗瓦である。1029 の狭端面には、凹面側からの切り込みがみられる。１の凹面には、分割突帯とみられる溝状の窪みが残る。1027 は凹面全体が削り調整されており、１号窯窯体内から出土した 988 に類似する。1031 にはＳ型の粘土板の合わせ目が確認できる。

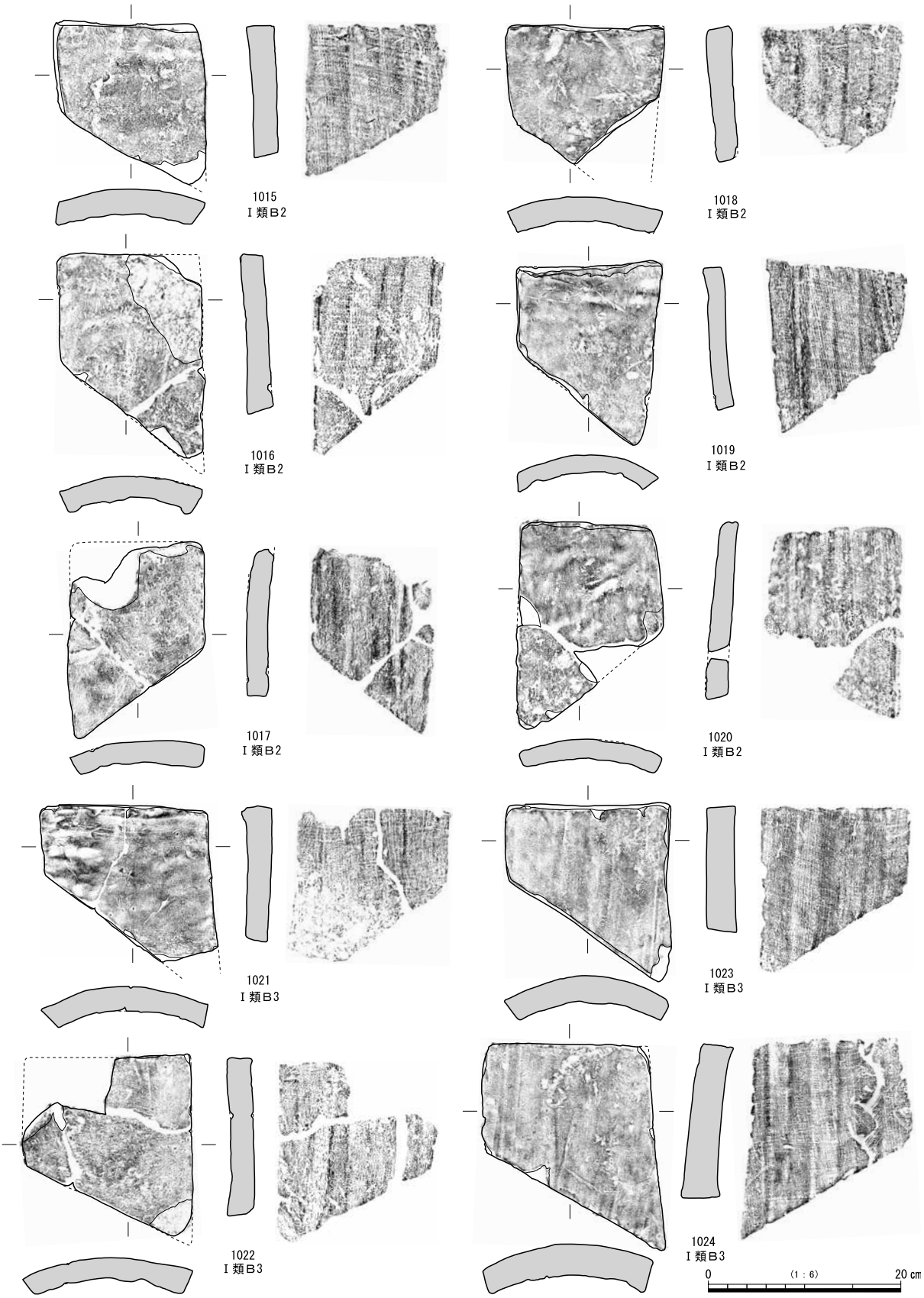


図 317　SX01 出土熨斗瓦（２）

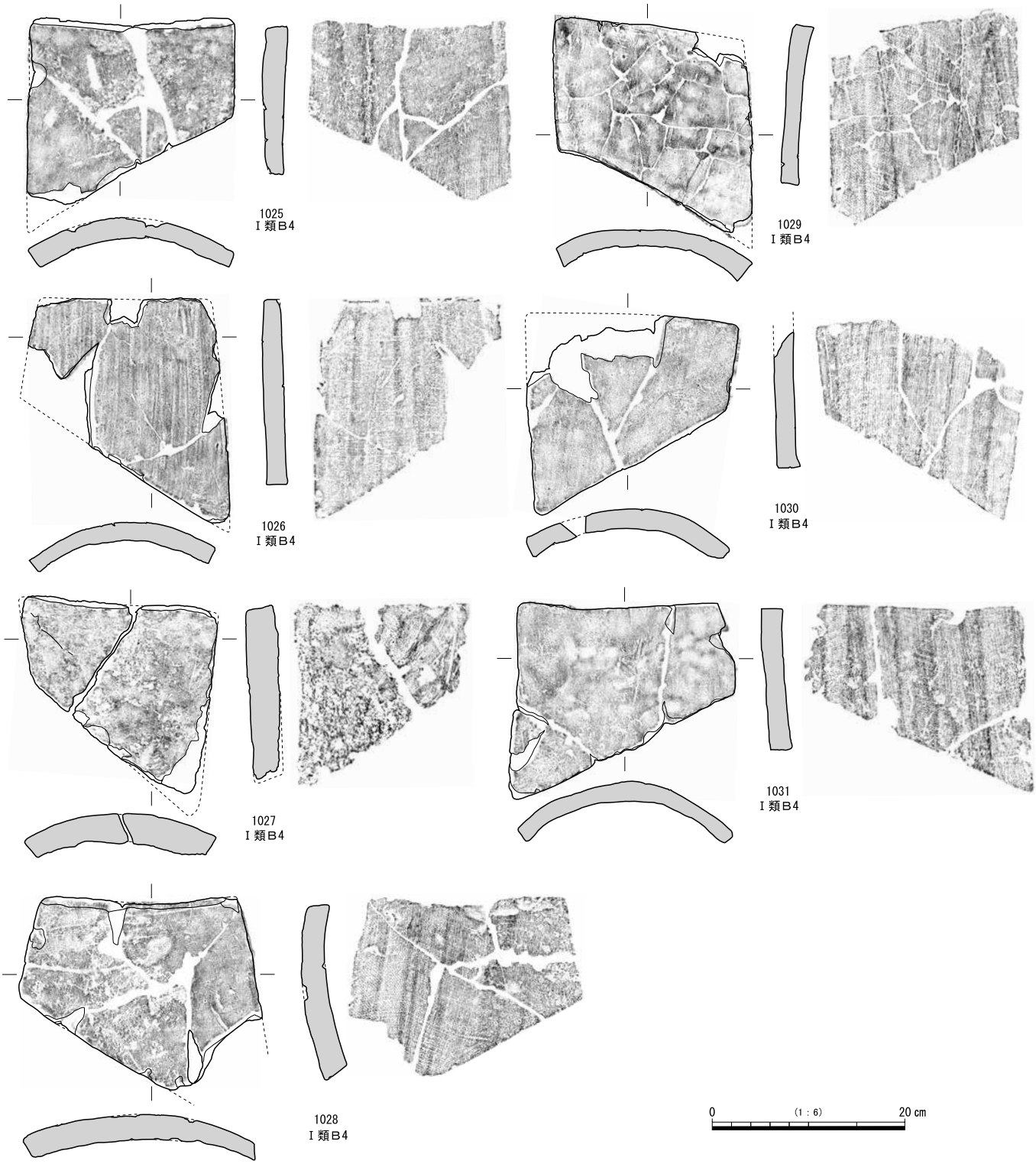


図 318　SX01 出土熨斗瓦（３）

SD01（図 319 ～ 320）

SD01 からは、合計 21 点・総重量 19.5 kg出土している。多くは SX01 から滑り落ちるような状態で出土している。風化が激しく表面全体が剥落しているものが多いことから、表面が残存し分類可能なものを 15 点図示する。

1032 ～ 1045 はⅠ類Ｂで、いずれも隅熨斗瓦である。1032 はⅠ類Ｂ１である。斜辺には截断面のズレ

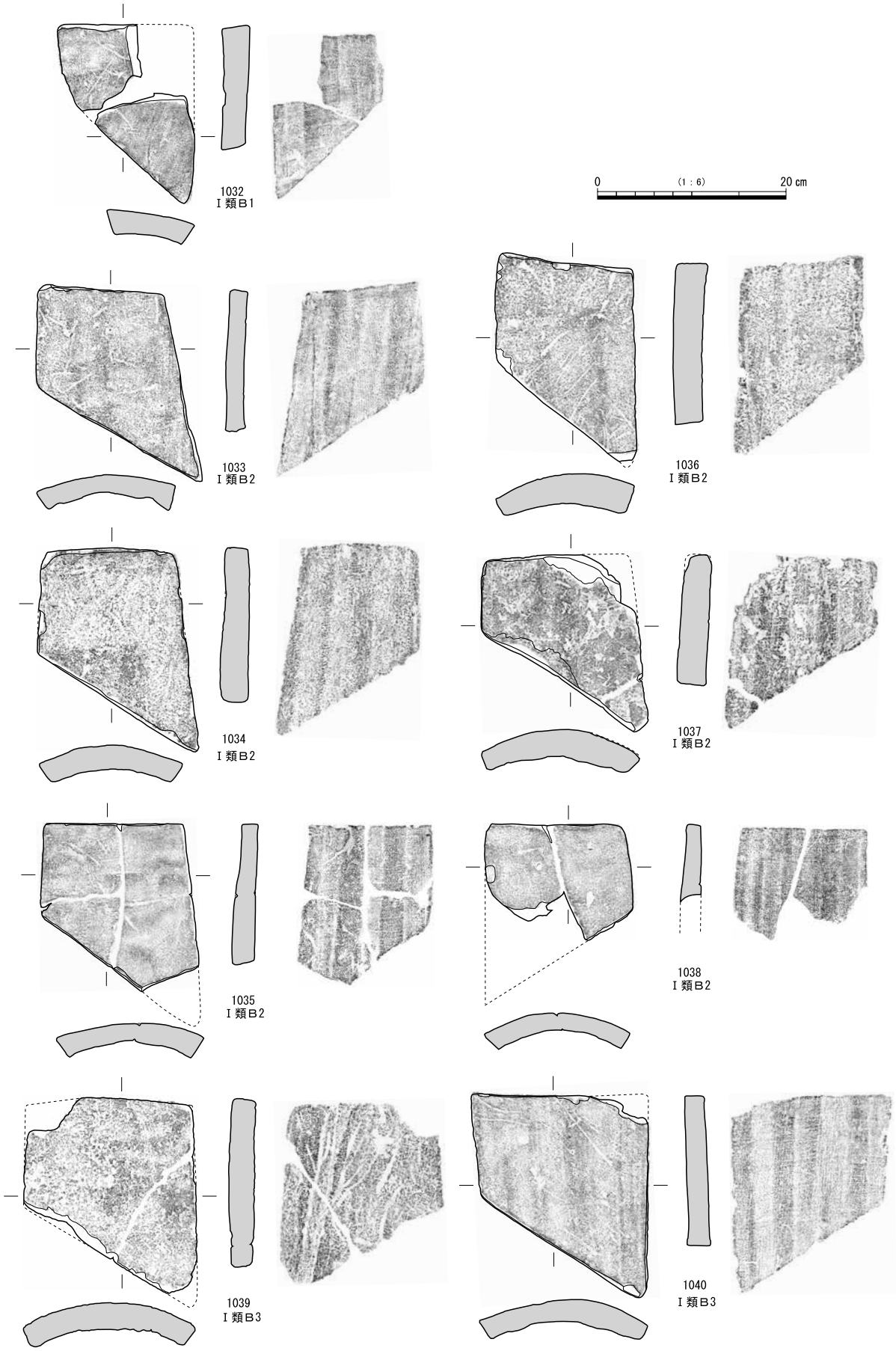


図 319　SD01 出土熨斗瓦

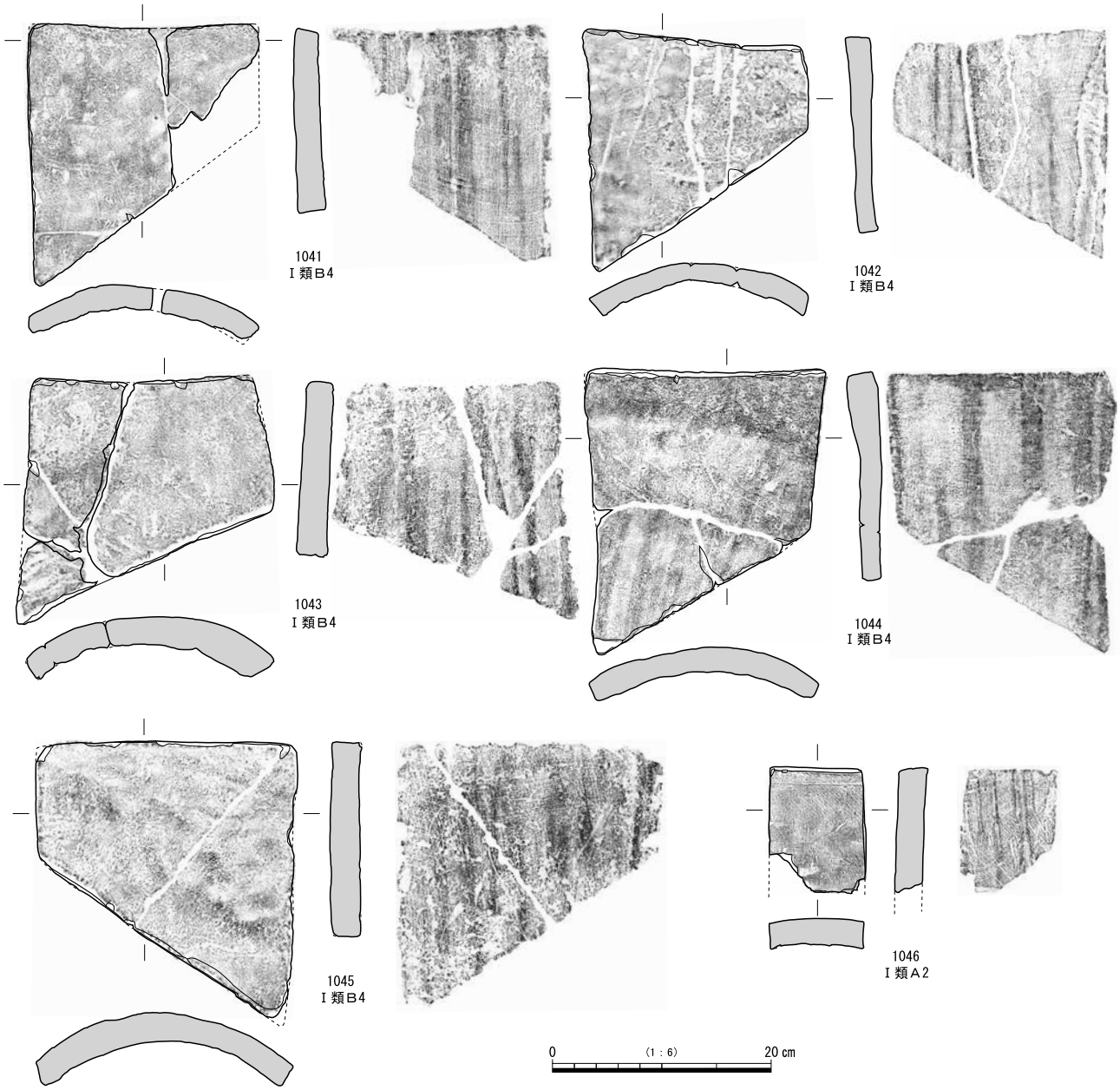


図 320　SD01・SD02 出土熨斗瓦

が確認でき、切り込みは凹面側からである。1033 ～ 1038 はⅠ類Ｂ２である。1034・1036・1037 は表面の風化が激しく、剥落している部分も多い。1035 の斜辺には截断面のズレが確認でき、凹面側からの切り込みであることがわかる。1039・1040 はⅠ類Ｂ３である。1039 の凹面には布綴じ痕が残る。1041 ～ 1045 はⅠ類Ｂ４である。1041 の斜辺の凸面側には、分割時の破面が確認できる。1042 の凹面には、布綴じ痕と紐状の分割突帯とみられる窪みが残る。

SD02（図 320）

SD02 から出土した熨斗瓦は、確実なものでは１点のみである。1046 はⅠ類Ａ２である。凸面には横ナデ調整が明瞭に残り、熨されて平らに近い形状になっている。熨斗瓦として認識できたのはこの１点のみであるが、実際は破片の状態であるため熨斗瓦として認識できなかったものが、相当量存在するものと推測される。

6　塼

塼の出土は少ないが、合計 69 点・総重量 23.8 kg出土している。窯からの出土はわずかであり、数点の破片が出土している程度である。むしろ窯以外の遺構からの出土が大半で、なかでも瓦集中遺構 SX01 で比較的まとまって出土している。また、包含層や確認調査などで採取されたものも多い。塼に関しては、出土数も少ないことから、細片などを除き、できる限り網羅的に図化・掲載した。

（1）分類

出土した塼はいずれも長方塼で、方塼は出土していない。幅は確認できるものの、長辺の残存するものがなく長さについては不明である。なお、使用時の状態が判断できないため、上下（表裏）については、製作時の状態を基準にして上・下面と呼ぶことにする。厚さや調整の特徴からⅠ～Ⅲ類に分類される。

Ⅰ類　厚さ２㎝前後の薄手のもの。木製の板の上で粘土を延ばして成形されており、下面には木目痕の残るものが多い。型枠痕は確認できない。上面には指痕が多く残り、軽いナデ調整が施されている。ナデ調整は一部側面にも及び、側面を丸く仕上げるものが確認される。丸く仕上げられている部分は、延ばした大型の粘土の側縁にあたり、それをいくつかに分割して１枚の塼にしたものと推測される。

Ⅱ類　厚さ３～ 3.5 ㎝の厚手のもので、上面に叩き目がみられないもの。調整技法はⅠ類と同様で、下面には木目痕の残るものがあり、上面はナデ調整で一側縁を丸く仕上げるものも確認できる。粘土素材には板状の粘土が使用されており、下面に糸切り痕の残るものがある。

Ⅲ類　厚さ３～ 3.5 ㎝の厚手のもので、上面に細かな正格子の叩き目が残るもの。格子叩きは、鴟尾Ａの腹部でわずかに確認できる程度であり、ほかの瓦では確認できない。下面には線刻による斜格子が刻まれている。

（2）窯跡出土

３号窯（図 321、図版 35・79）

３号窯から出土した塼は、灰原から出土した３点のみである。３点すべてを図示する。

1047･1048 はⅠ類である。1047 は三側面が残存し、幅は 14 ㎝である。上面には軽いナデ調整が施され、指痕が残る。下面にはわずかではあるが縦方向の木目痕が確認できる。側面は、下面に向かって広がる形状になっている。1048 は三側面が残る破片で、幅は 15 ㎝である。両面に木目とナデ調整が確認され、ほとんど上下面の区別がつかないが、上面には指痕が多く残る。側面に截断時の破面が残るが、切り込みは下面側から入れられている。延ばした粘土素材を一度ひっくり返し、ナデ調整を施した後截断したものと推定される。1049 はⅡ類の破片である。部分的ではあるが三側面が残っており、幅は９㎝である。上面はナデ調整で指痕が残り、片方の側面側は丸く仕上げられている。

１号窯（図 321、図版 35・79）

１号窯から出土した塼は、灰原から出土した３点のみである。３点すべてを図示する。

1050 はⅡ類である。幅９㎝で、部分的に三側面が残っている。上下面ともにナデ調整が施されており、上面には指痕が残る。表面に焼土が付着することから、灰原からの出土ではあるが、投棄される以前には構築材として使用されていた可能性が高い。

1051 と 1052 はⅢ類である。いずれも側面の残らない小破片で、表面の風化も著しい。上面には格子叩きが残り、下面には斜格子が線刻されている。

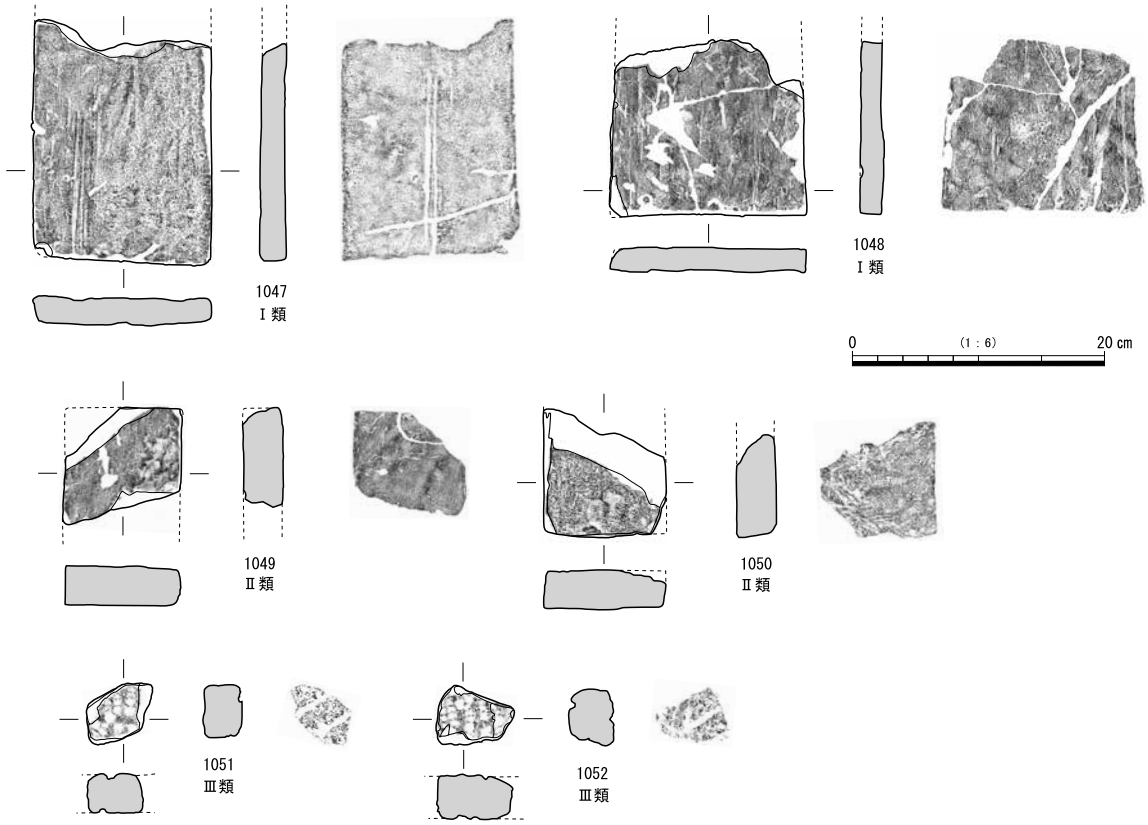


図 321　３号窯・１号窯出土塼

（３）その他の遺構出土

窯以外の遺構では、瓦集中遺構 SX01、溝 SD01・SD02 から出土している。中でも SX01 と SD02 から比較的多くの出土が確認される。

SX01（図 322、図版 79）

SX01 では合計 19 点・総重量 7.4 kg出土している。両側面が残存するものを中心に 15 点図示する。

1053 ～ 1058 はⅠ類である。上面の２側縁にナデ調整を施して丸く仕上げている。下面には縦方向の木目痕が転写されており、粘土の接合痕がみられる。側縁付近には帯状やブロック状の粘土が入れられている。1055 の側面には下面側に分割時の破面が認められる。1056 と 1057 は上下面ともにナデ調整が施されている。1058 の下面には横方向に木目が転写されている。

1059 ～ 1061 はⅡ類の破片である。1059 と 1061 は上面がナデ調整され、下面には縦方向に木目が残る。1060 の上面には指痕と糸切り痕が確認できる。糸切り痕が残るものは､確認調査でもう１点（1081）採取されており、これもⅡ類である。少なくともⅡ類の一部には、粘土板素材が使用されていることがわかる。

1062 ～ 1067 はⅢ類の破片である。いずれも表面が著しく風化している。上面には正格子の叩き目が残り、下面には斜格子が刻まれている。1062・1063・1065・1066 は側面が残る破片である。側面はいずれも削り調整であるが、1062･1065･1066 では下面側が深く削られており、ナデ調整も施されている。1062 の上面には、叩き目とは別に、棒状の工具によって５ヶ所に方形の穴が空けられている。

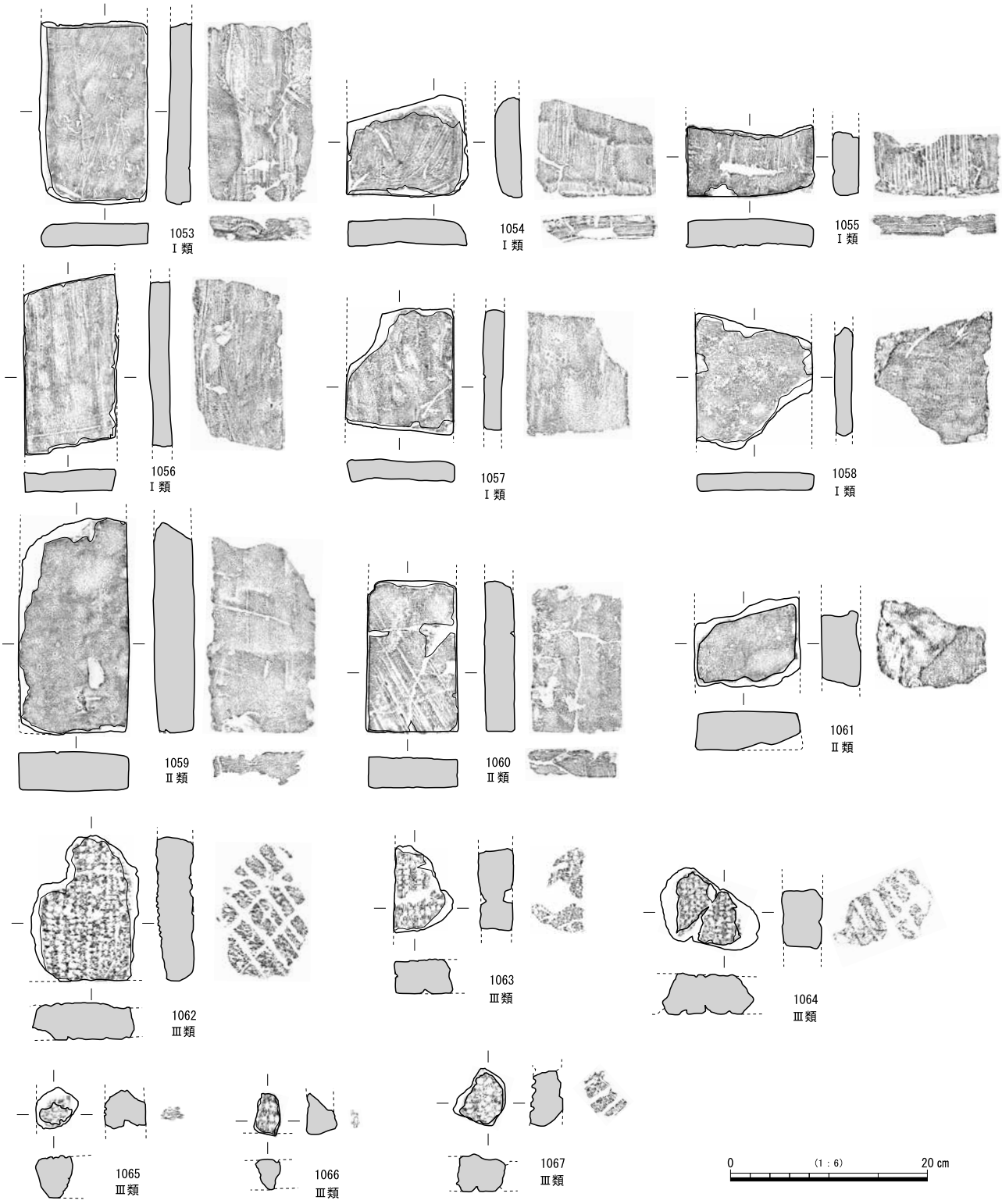


図 322　SX01 出土塼

SD01（図 323、図版 79）

SD01 からは、合計 7 点の破片が出土しているが、大半が表面の大半が欠損する小破片である。出土した塼のうち、比較的残存状態がよく側面が残る 2 点を図示する。

1068・1069 はⅡ類である。ともに表面が風化しているが、1068 は二側面、1069 は一側面が残存する。1068 は上面に指痕、下面には縦方向の木目痕瓦残る。1069 は風化が著しいが、上下面ともに指痕が認められる。

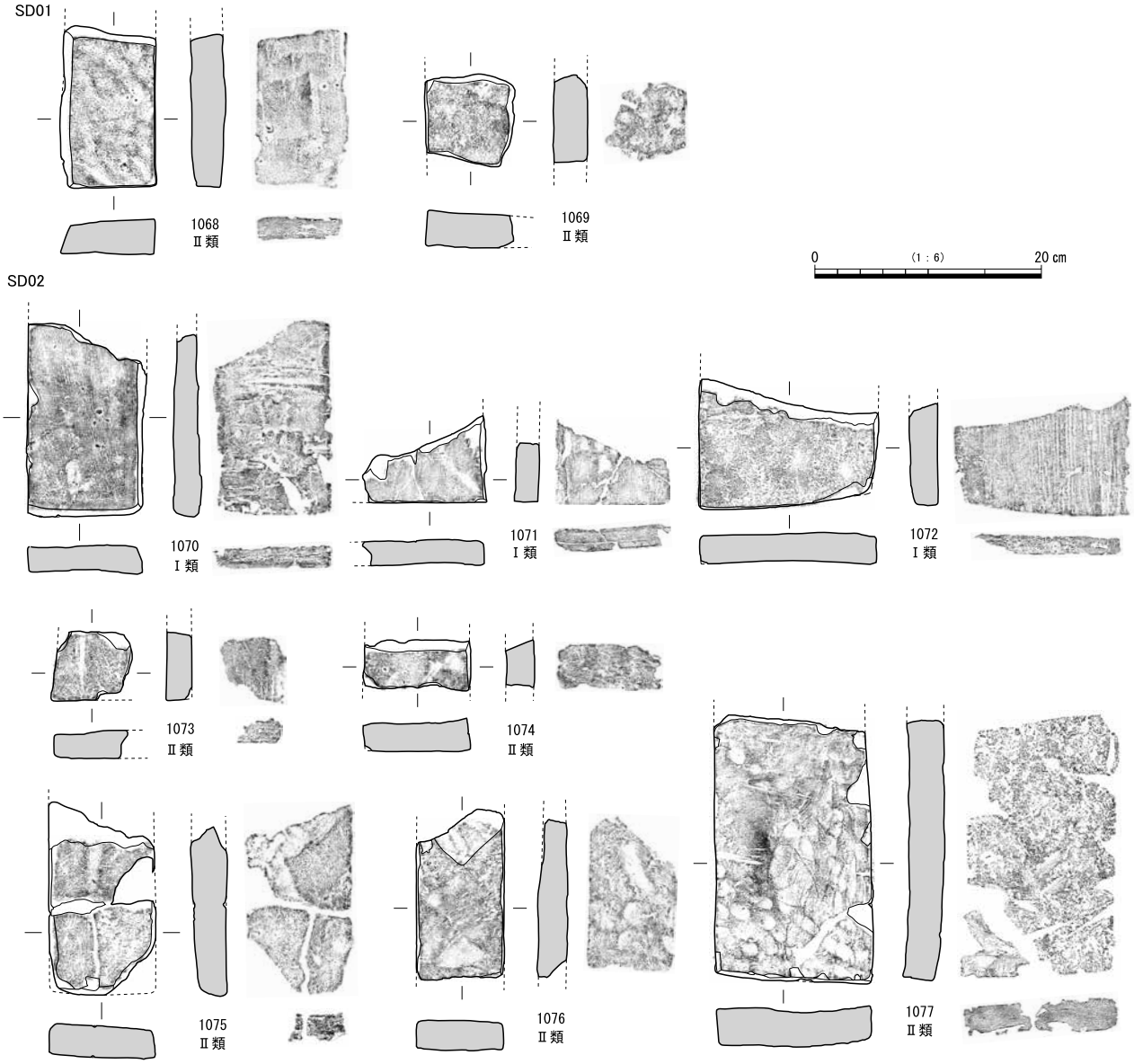


図 323　SD01・SD02 出土塼

SD02（図 323、図版 79）

SD02 では合計 17 点・総重量 5.6 kg出土している。このうち、細片や風化が著しいものを除き、側面が残存しているものを中心に 8 点を図示する。

1070 ～ 1072 はⅠ類である。1070 は二側面が残存している。上面はナデ調整であるが、わずかに縄叩きの痕跡が残っている。篠場瓦窯で出土したⅠ類の塼において、縄叩き痕が残るものはこの 1 例のみである。Ⅰ類は基本的に上面の全面にナデ調整が施されているため、Ⅰ類すべてにこの技法が採用されているかどうかは判断できない。上面の側縁はナデ調整により丸く仕上げられており、下面には横方向に木目が転写されている。1071 は二側面、1072 は三側面が残る破片である。1071 は上面の一側縁は丸く仕上げられている。ともに上面には指痕が残り、下面には縦方向の木目が転写されている。

1073 ～ 1077 はⅡ類である。1073 は一側面、1074 ～ 1076 は二側面、1077 は三側面が残存する。いずれも上面には指痕が残っており、側面は垂直に近い。1073 と 1075 の下面には縦方向の木目痕が転写されている。1076 は下面にもナデ調整と指痕が残る。1074 と 1077 の下面は、風化して表面全体が失われている。

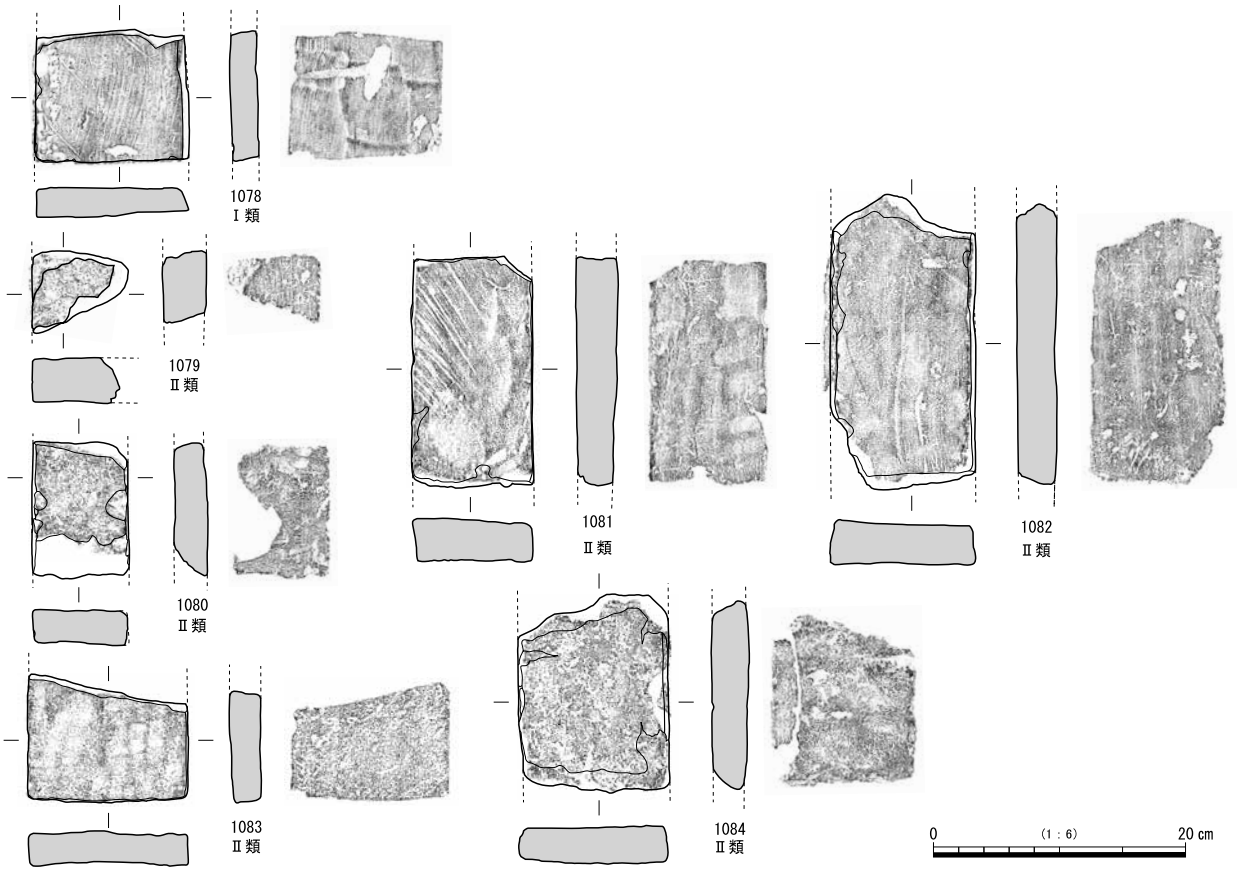


図 324　包含層・表土出土塼

（4）包含層・表土出土

包含層や表土、確認調査などで採取された塼は、合計 20 点・総重量 6.8 kgである。両側面が残存するものを中心に 7 点図示する。

1078 はⅠ類で、二側面が残存する破片である。確認調査の際に採取されている。上面はナデ調整で、片側の側縁が丸く仕上げられる。細かな刻み目が確認でき、叩き具の痕跡の可能性もあるが、Ⅲ類の叩き目とは異なっている。下面には縦方向に木目痕が転写されている。

1079 ～ 1084 はⅡ類である。1079 は一側面が残存する破片で、表土から出土している。上面に指痕が残り、下面には縦方向に木目痕が転写されている。1080 ～ 1084 は二側面が残存する破片であり、確認調査の際に採取されている。1080 は上面は風化により観察できないが、下面にはナデ調整が施されており、一部縦方向の木目痕が認められる。1081 は糸切り痕が残る破片である。下面にはナデ調整が施され、縦方向の木目がわずかに残る。1082 の片方の側面付近には、少し内側に側面と平行する切り込みが確認できる。切り込みは上面側から入れられている。また、もう片方の側面には截断面の段差が残っており、上下面両側から截断されている様子が観察できる。上下面ともにナデ調整が施され、上面には指痕が残り、下面には縦方向の木目痕がわずかに確認できる。1083 と 1084 は、下面については風化が激しく観察できないが、上面はナデ調整で指痕が残る。

Ⅲ類に関しては、掲載しなかったものも含めて出土は確認できない。

７　蠖羽瓦

篠場瓦窯では、特異な形態を有する軒平瓦が出土している。同様の形態的特徴をもつ軒平瓦は、大和・山田寺で出土例があり、これらの瓦については蠖羽瓦と推定されている。本書ではこれに従い、蠖羽瓦としてこの一群の瓦を報告する。

出土した蠖羽瓦は、合計 107 点・総重量 62.0 kgである。３号窯と２号窯では比較的大型の破片が出土しているが、１号窯では灰原から小破片が１点出土しているのみである。窯以外では、大半が小破片ではあるが、窯周辺の遺構や包含層などからも出土が確認される。表面の風化が著しいものや小破片を除き、端部の残るものを中心に図化・掲載した。

（１）分類

篠場瓦窯で出土している蠖羽瓦は、狭端部付近に突帯が設けられ、突帯の広端側に穴が空けられている点を特徴とする。穴の凸面側には筒状にした粘土を貼り付け、管を形成している。穴は側縁付近に空けられており、左側側縁にあるものと右側側縁にあるものの両方が確認できる。瓦当は無文で、貼り付け段顎である。側面と瓦当部分の立ち上がる凸型台で成形されており、側面と瓦当に布目が回る。凹面と突帯の布目が連続することから、凸型台には突帯を形成するための溝が彫られていたことがわかる。

完形に復原できるのものが出土していないため、長さに関しては不明であるが、最も長く残る破片は長さが 49 ㎝あり、少なくともそれ以上の長さの瓦であることは確実である。

鴟尾については、幅と突帯の形状から、Ⅰ・Ⅱ類の２つに分類する。

Ⅰ類　幅が約 30 ㎝のもの。突帯は幅が広く低い。高さは１㎝。幅は左右でやや異なる。左側が上端幅３㎝・下端幅 3.5 ㎝で、右側は上端幅 2.5 ㎝・下端幅３㎝と右側の幅が少し狭い。

Ⅱ類　幅が約 28 ㎝のもの。突帯は幅が狭く高い。高さは 1.5 ㎝。幅はほぼ均等で、上端幅２㎝・下端幅３㎝である。

（２）３号窯出土

３号窯灰原（図 325 ～ 329、図版 34・80 ～ 82）

３号窯灰原からは、合計 19 点・総重量 29.0 kgと大型の破片が多く出土している。側面の残る破片を中心に 12 点を図示する。

1085 はⅠ類である。狭端面と左側面が残る大型の破片である。右側端を欠くが、幅は残存しているだけでも約 29 ㎝ある。長さは 49 ㎝残存しており、広端側に瓦当の痕跡も確認できないことから、平瓦と比べるとはるかに大型のものであることがわかる。突帯は狭端から 7.5 ㎝の位置に、穴は左側面から約６㎝離れた位置にある。穴の凸面側には管が設けられている。管は側面側に向かって斜めに取り付けられており、管の先端は垂直方向に截断されている。凹面中央には比較的広い範囲にナデ調整が施されている。凹面から連続する布目が突帯と側面に認められ、側面には側縁から２㎝程の位置に型端の段差が確認できる。凹面には、側面と突帯に沿った粘土接合痕が確認でき、型の深い部分にあたる側面と突帯に先に粘土を充填して成形している様子がみてとれる。狭端面には削り調整が施されており、布目や型端は認められない。なお、1085 については、破片の大部分が３号窯灰原から出土しているが、２号窯灰原から出土した破片が１点接合している。凹面のナデ調整が２号窯のものと類似するため、実際には２号窯で焼成された製品の可能性がある。

1086 はⅡ類である。幅は 28 ㎝で、両側端が残存する。瓦当側と狭端側を欠いているが、穴の存在から狭端側の破片であることがわかる。突帯は欠損している。穴は左側面から 3.5 ㎝の位置に空けられて

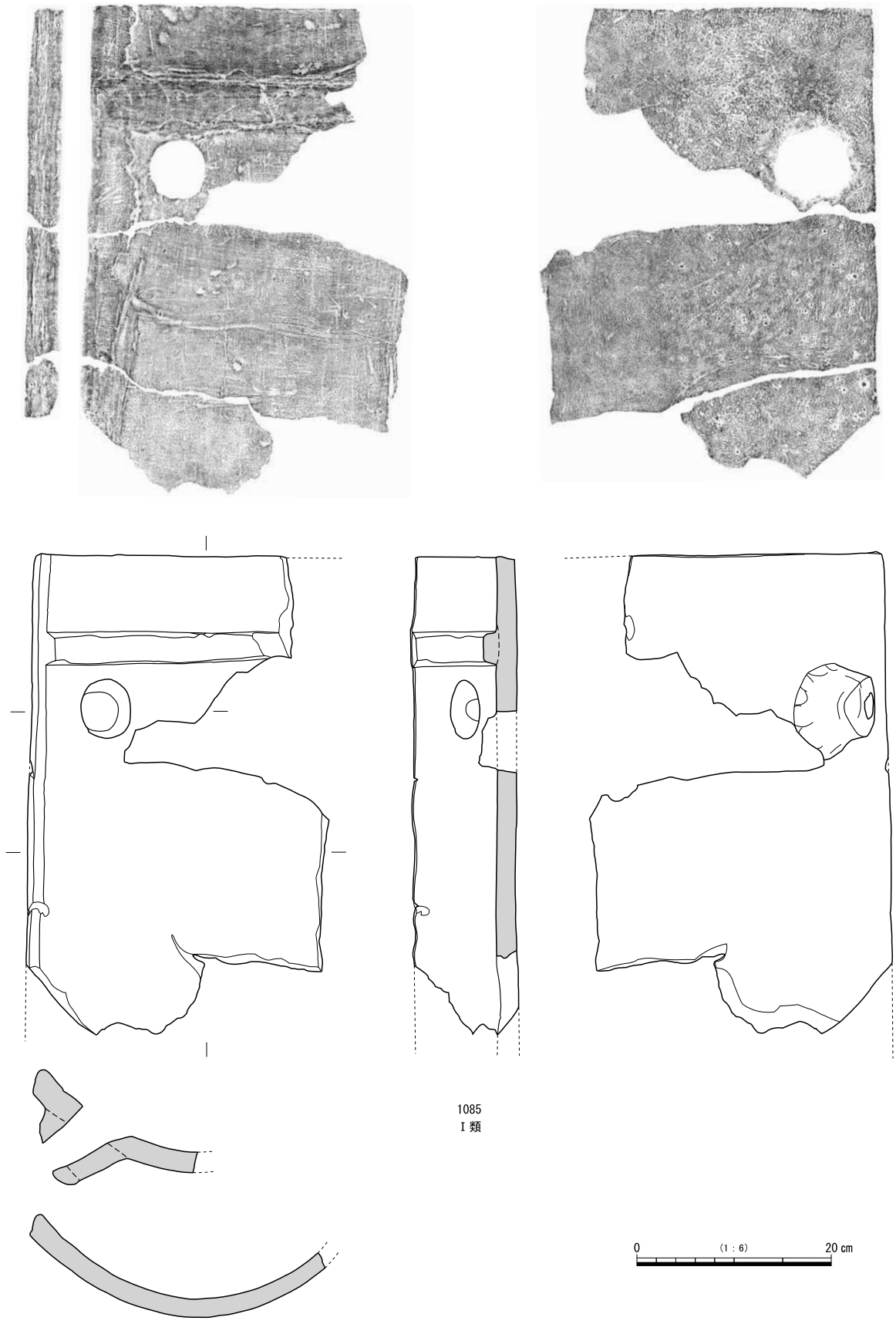


図 325　３号窯灰原出土蟇羽瓦（１）

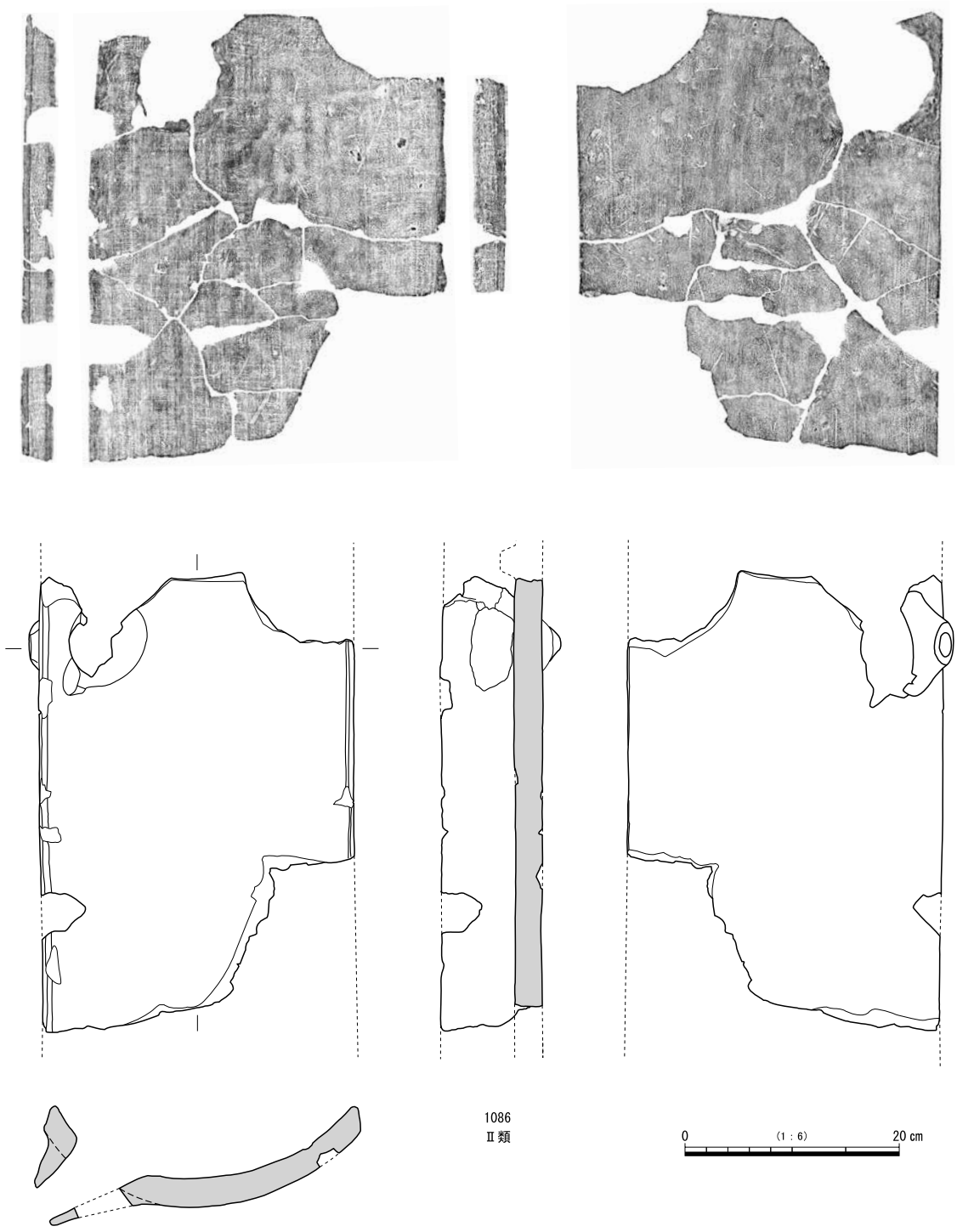


図 326　３号窯灰原出土蠓羽瓦（２）

おり、凹面側の直径は７㎝である。管は外側に向かって斜めに取り付けられており、薄手で表面には削り調整が施されている。管の先端は垂直方向に截断されているが、側面よりも少し外側に出ている。凹面は凹面は部分的に軽いナデ調整が施されている。側面にも布目が回っており、側端から２㎝程の位置に型端の段差が確認できる。凸面には全面に縦ナデ調整が施されている。

1087 はⅡ類の狭端側の破片である。狭端面と両側面が残存しており、幅は 28 ㎝である。狭端から 6.5 ㎝の位置に突帯が設けられている。突帯の幅は上端が２㎝、下端が３㎝である。穴は凹面で直径４㎝であり、左側面から 4.5 ㎝・突帯から 3.5 ㎝離れた位置にある。管は厚手のつくりになっており、先端は

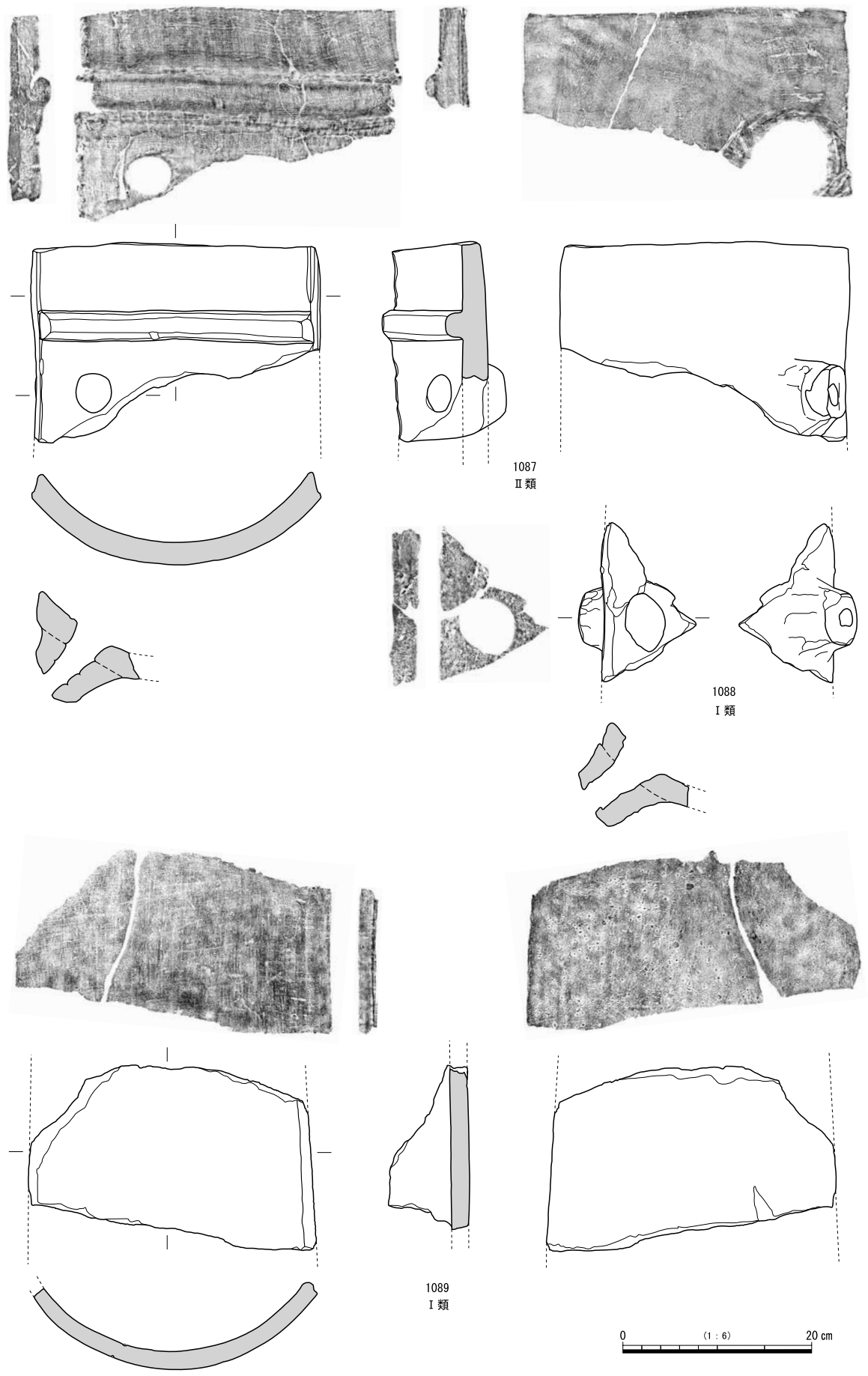


図 327　３号窯灰原出土蠓羽瓦（３）

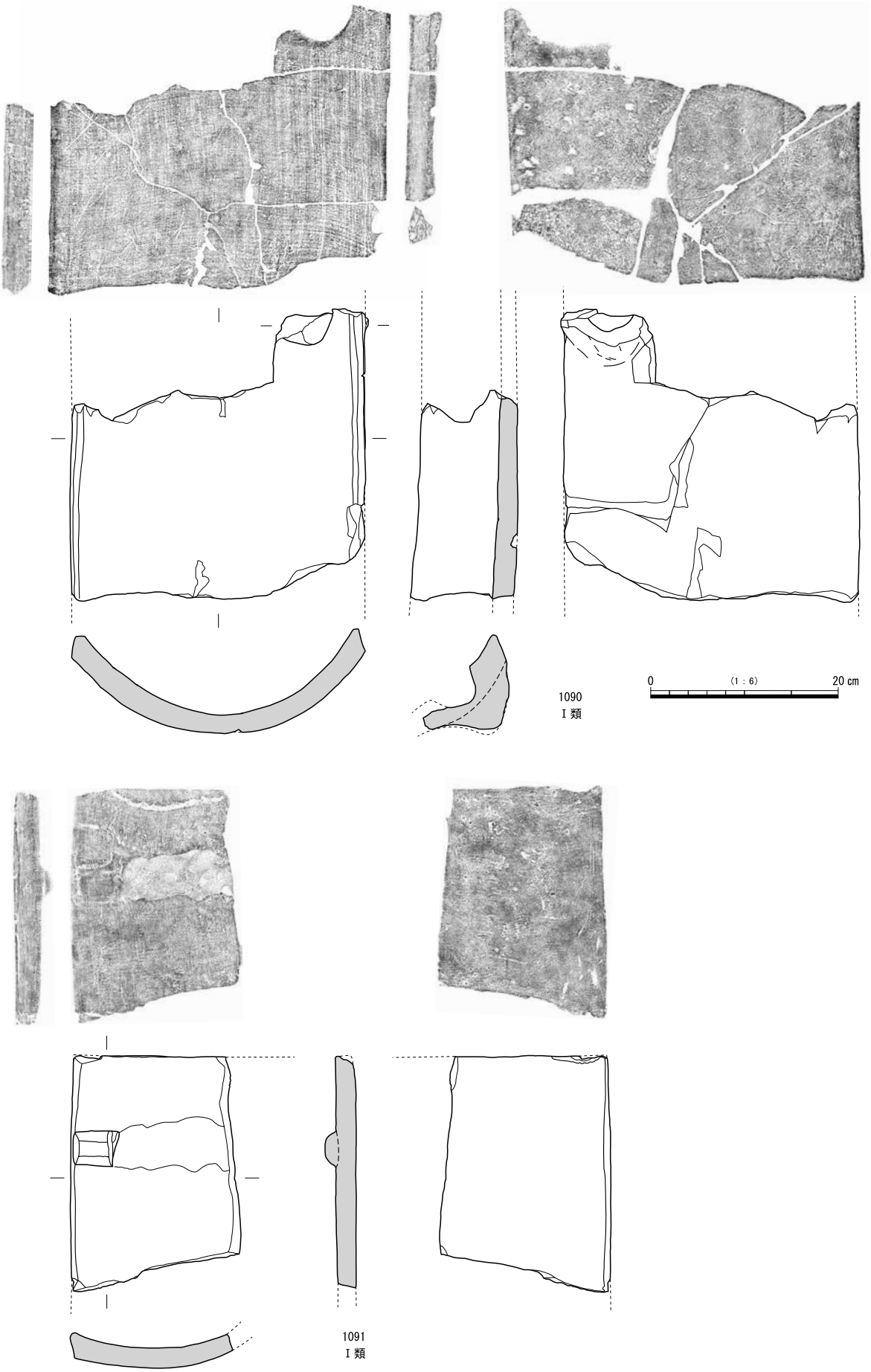


図 328　３号窯灰原出土蟇羽瓦（４）

やや斜めではあるが縦方向に截断されている。凹面の突帯と側縁付近には粘土の接合痕が確認できる。突帯部分を充填した後に側縁に沿って粘土を入れ、最後に全体を粘土で覆っている。凹面は無調整で、布目が明瞭に残る。布目は突帯と側面にも連続しており、側縁から２㎝程の位置には型端の段差が確認できる。凸面は全面ナデ調整であるが、ナデの軽い部分に縄叩きの痕跡がわずかに残る。1088 は片方の側面が残る狭端側の破片である。突帯の剥離痕が確認でき、剥離痕の幅が４㎝程あることから、Ⅰ類であると推測される。穴は左側縁から２㎝と側縁に近い位置にある。そのため管も外側に寄ってしまい、側接合の一部は側面よりも外にはみ出してしまっている。全体的に表面の風化が激しいが、凹面と側面には連続する布目が残る。1089 はⅠ類と推定される破片である。片側の側面が残存しており、幅は残存部で 29 ㎝ある。凹面は部分的にナデ調整されており、側縁に沿って粘土接合痕が確認できる。側面には、凹面側から布目が回り、側縁から 1.5 ㎝の位置には型端の段差が残る。Ⅰ類のほかの破片と比べて型の深さが浅いが、部分的なものなのか型が異なるのかは判断できない。凸面は風化が激しく観察できない部分も多いが、ナデ調整が確認できる。

1090 はⅠ類の狭端側の破片である。両側縁が残存しており、幅は 30 ㎝である。穴は右側縁から 3.5 ㎝の位置に空けられている。管は一部しか残存しないが、外側に向かって斜めに付けられている。凹面はほぼ無調整で、側縁に沿った粘土接合痕が部分的に確認できる。布目は側面にも連続しており、側縁から２㎝の位置に型端の段差が残っている。凸面は風化が著しいが、おそらく全面ナデ調整であろう。1091 はⅠ類であり、狭端面と側面が残存する。狭端から８㎝離れた位置に突帯が設けられている。突帯は上端幅３㎝・下端幅 3.5 ㎝で、高さは１㎝である。凹面は無調整で布目が残り、狭端近くには布綴じ痕が確認できる。布目は側面にも連続しており、側縁から２㎝の位置には型端の段差がある。突帯と側面に沿って粘土接合痕が認められる。この破片には突帯付近に穴がないことから、穴は欠損している右側に存在すると推測される。

1092 ～ 1096 は瓦当の破片である。1092 はⅡ類である。多少風化による磨滅はみられるが、瓦当がほぼ完存する。幅は 28 ㎝で、瓦当の厚さは４㎝である。顎は貼り付け段顎で、長さは８㎝である。接合面に刻み等の加工は行われていない。瓦当面と側面には布目が残り、いずれも凹面の布目と連続している。側面には型端の段差が確認される。型端は平瓦部では側端から約２㎝、顎部では約３㎝の位置にあり、顎の形に沿うように顎段部で高くなっている。瓦当では型端の段差が明瞭には確認できないが、瓦当下端に布目の付着しない部分があり、これが型端に相当する可能性がある。瓦当には、布目の上に植物の繊維とみられる痕跡も確認できる。凸面は全面ナデ調整であるが、ナデの弱い部分にわずかに縄叩きの痕跡が残る。1093 は右側端が残る、瓦当から平瓦部にかけての破片である。顎部は剥落して失われているが、顎部の長さは９㎝程と推定される。瓦当と側面には凹面から連続する布目が確認される。顎の接合面に刻み等の加工は認められない。1094 ～ 1096 は剥離した顎部の破片である。1094 は左側端の残る破片で、長さは 8.5 ㎝である。瓦当には布目が確認できる。1095 はⅠ類である。両側端がほぼ残存しており、幅は現存で約 30 ㎝、長さは 8.5 ㎝である。瓦当下端は布目がなく、わずかに突出しており、側面ほど明瞭ではないが型端の可能性がある。1096 は右側端が残る破片で、長さは場所によって異なるが９㎝前後である。

３号窯埋土（図 330 ～ 331、図版 34・80）

３号窯の埋土を掘り下げる過程で出土した蠓羽瓦は、図示した６点である。

1097 はⅠ類である。両側面が残存する破片である。床面直上に堆積する第９層から出土したものと、３号窯灰原から出土した破片が接合している。埋没過程で床面から巻き上がったものとみられ、３号窯に伴う遺物と判断される。乾燥時または焼成時に多少変形しているようであり、幅は 32 ㎝ある。凹面

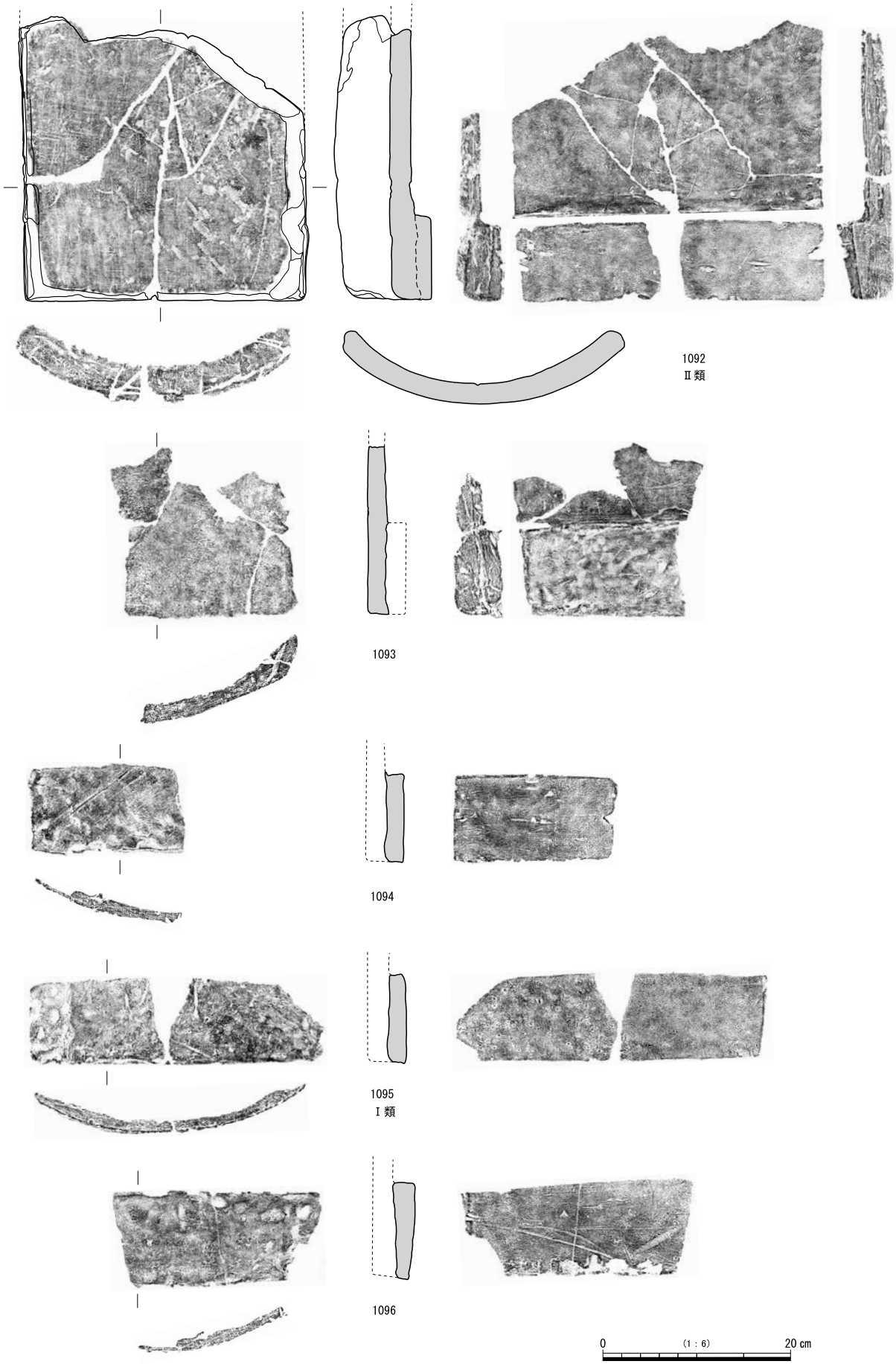


図 329　３号窯灰原出土蠓羽瓦（５）

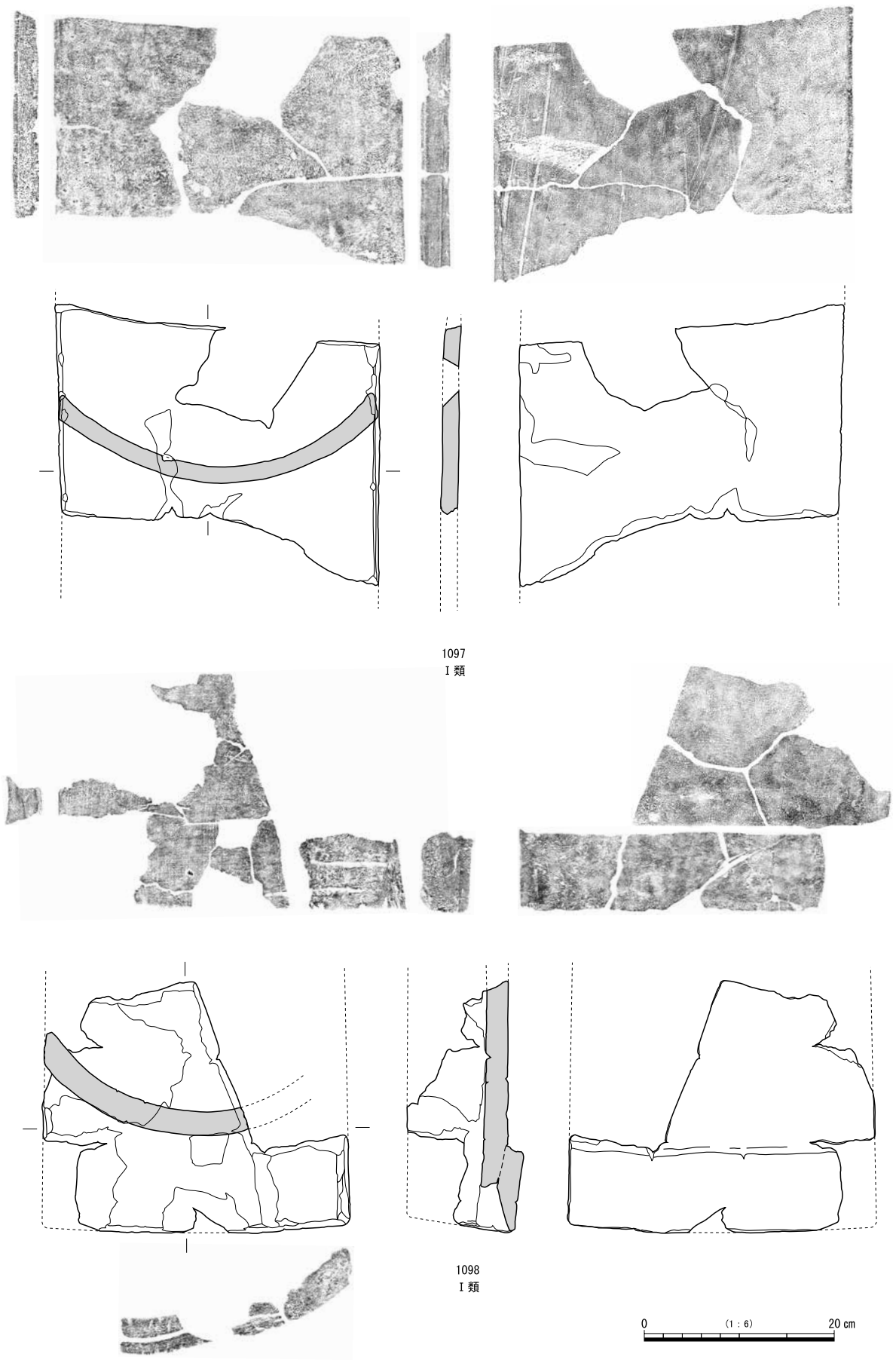


図 330　3号窯埋土出土蠓羽瓦（1）

は風化が著しく布目が観察できないが、側面には明瞭に布目が残る。側縁から２㎝の位置には型端の段差が確認できる。凸面は全面ナデ調整されている。1098 はⅠ類で､瓦当～平瓦部にかけての破片である。すべて床面直上に堆積する第９層から出土しており、３号窯に伴う遺物とみてよい。顎は貼り付け段顎で、瓦当の厚さは 3.5 ㎝、顎の長さは８㎝である。全体的に表面が風化しており、瓦当や凹面にはほとんど布目が確認できない。比較的遺存状態がよいのは顎部側面であり、布目と側縁から４㎝の位置に型端の段差が残っている。

1099 は瓦当から顎段部にかけての破片である。床面直上の第９層と１号窯灰原出土の破片とが接合している。第９層は、上層を天井の崩落土で覆われており、１号窯の瓦が混入することは想定し難い。また､１号窯では他の窯の製品も構築材に使用している。1099 については、３号窯で焼成されたもので、投棄された破片の一部がのちに構築材として１号窯で転用された可能性が高い。瓦当の厚さは 3.5 ㎝で、顎の長さは９㎝である。顎は貼り付け段顎で、顎の剥離面が観察できるが、刻み等の加工は施されていない。全体的に表面が風化が著しいが、凹面や瓦当、側面に布目が確認できる。1100 は右側縁の残る破片である。すべて床面直上の第９層から出土しており、３号窯に伴う遺物とみてよい。凹面は部分的に軽いナデ調整が施される程度で、広い範囲に布目が残る。布目は側面にも連続しており、側縁から２㎝の位置には型端の段差が確認できる。凸面は全面ナデ調整である。

1101 と 1102 は、１号窯灰原に相当する第１層から出土した小破片である。1102 は１号窯灰原から出土した破片とも接合している。1101 は剥離した顎部の破片である。顎の長さは９㎝で、瓦当には布目が残る。1102 は左側面が残る破片である。凹面と側面には連続する布目が残り、側縁から２㎝位置には型端の段差が確認できる。１号窯の灰原から出土した蟇羽瓦は、この２点と 1099 の破片１点の合計３点のみである。１号窯ではほかの窯の製品が構築材として利用されており、灰原には隣接する SX01 から転落した遺物が含まれている可能性もある。1101 と 1102 については、１号窯灰原からの出土ではあるが、いずれも小破片であることからみて、２・３号窯で焼成された製品の可能性が高い。

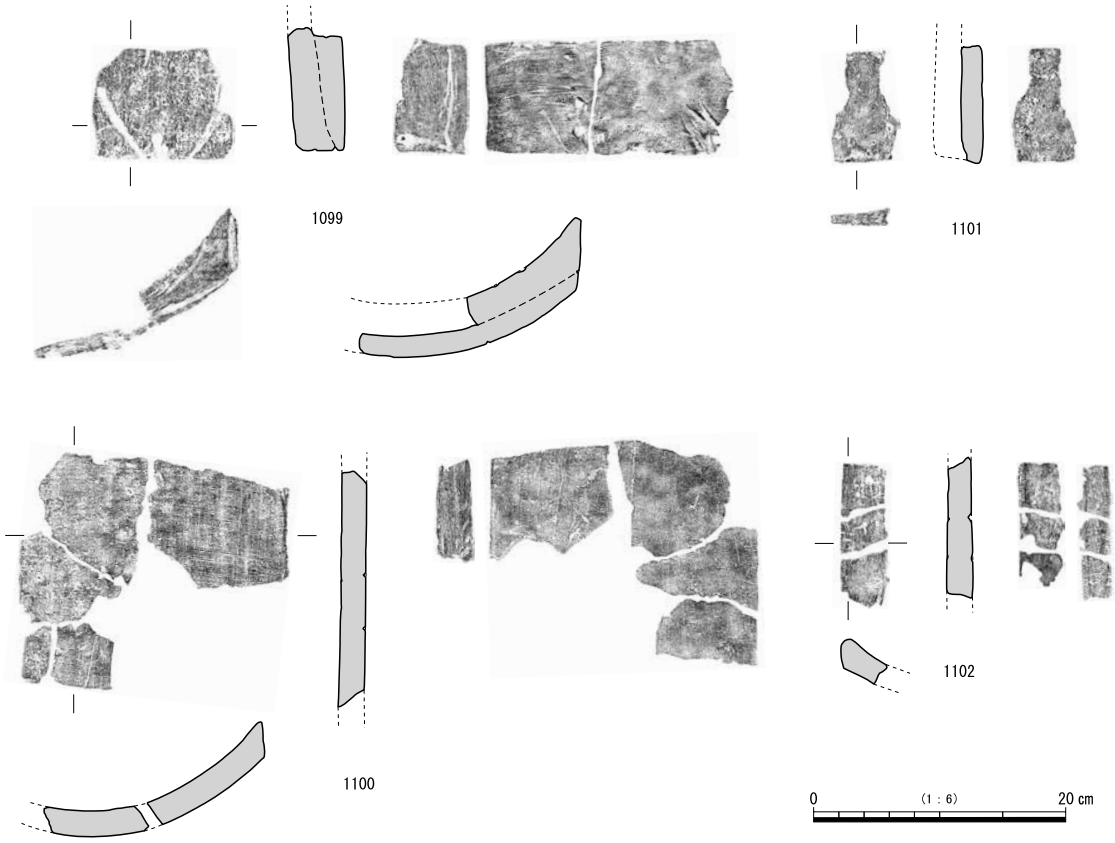


図 331　３号窯埋土出土蟇羽瓦（２）

（3）２号窯出土

２号窯灰原（図 332、図版 34）

２号窯灰原からは、合計７点・総重量 4.6 kg出土している。側面の残存する３点を図示するが、ほかにⅡ類の突帯のみの小破片も１点出土している。

1103・1104 は側面の残る破片である。凹面の比較的広い範囲にナデ調整が施されている。布目は凹面から側面に連続し、側縁から２㎝の位置には型端の段差が残る。1103 はⅠ類の破片で、幅は 30 ㎝である。側端に沿って粘土接合痕が確認でき、一部は合わせ目で剥離している。凸面には全面ナデ調整が施されている。1105 は瓦当から顎段部にかけての破片である。顎部の大半は剥落して失われている。

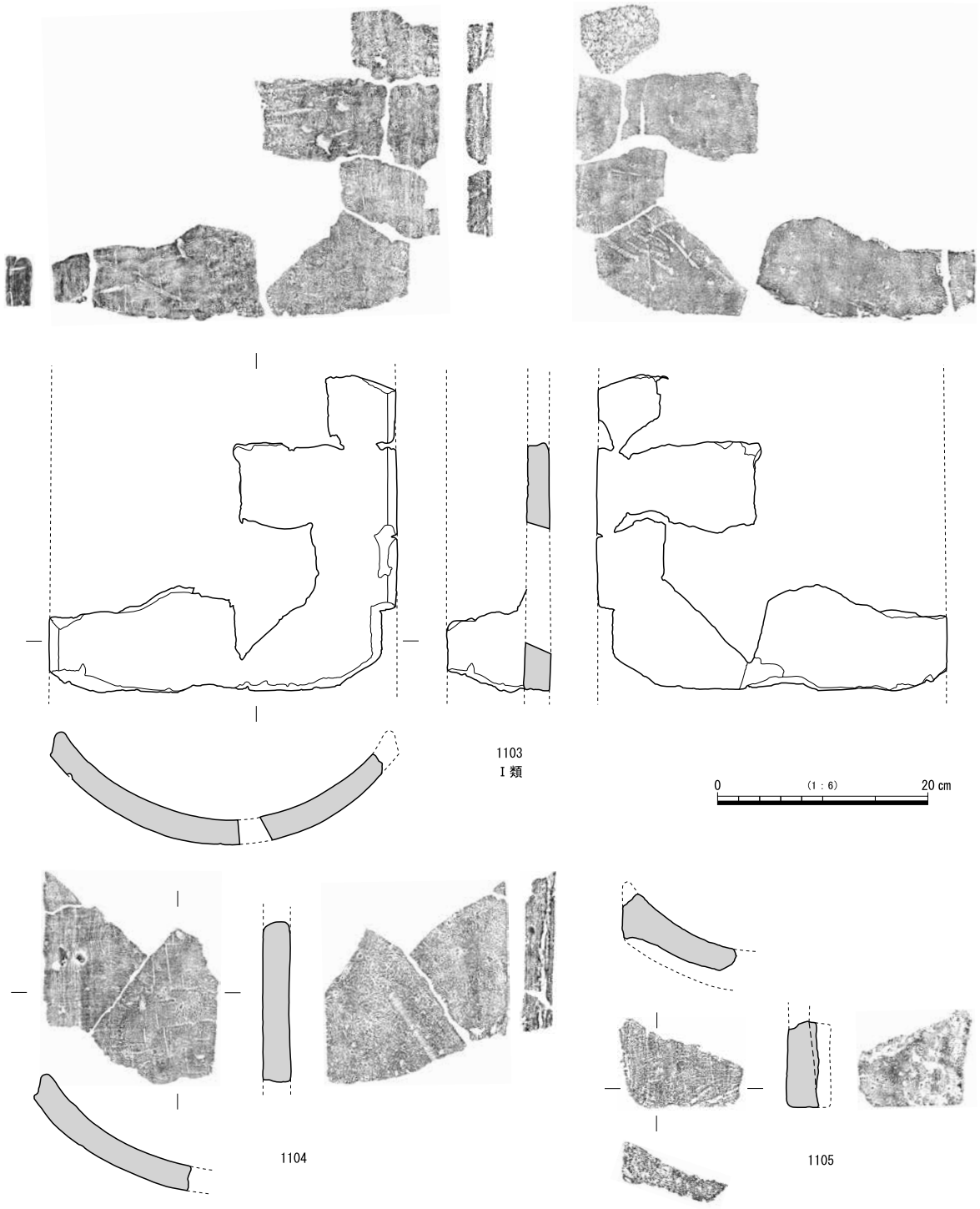


図 332　２号窯灰原出土蠓羽瓦

段部の痕跡が一部残存していることから、顎部は貼り付け段顎であるとみてよい。全体的に表面の風化が激しいが、凹面と瓦当にはわずかに布目が確認される。瓦当の幅は 3.5 ㎝である。

（４）その他の遺構出土

SX01（図 333）

SX01 からは、小破片がほとんどではあるが、合計 19 点・総重量 5.9 kgと比較的多く出土している。端部の残存する破片を 10 点を図示する。

1106 ～ 1108 は瓦当の残る破片である。いずれも顎部は剥離して失われている。瓦当と側面に凹面からの布目が連続する。顎の剥離面には粘土を押し付けた際の指痕は残るが、刻み等の加工は確認できない。1106 の側面には型端痕の段差が明瞭に残り、1108 の凹面瓦当付近には布綴じ痕が確認される。1109 は顎段部付近の破片であり、顎は剥離して失われている。凹面から側面に布目が連続し、側面には型端の段差が残る。顎の剥離面には縦方向に撫でた指痕が確認できる。1110 は剥離した顎部の破片である。剥離面には指痕の凹凸が転写されているが、刻み等の加工は確認できない。1111 ～ 1114 は平瓦部の破片である。凹面から側面に布目が連続し、凸面は全面ナデ調整される。1112 と 1114 には型端の段差が残り、1113 は段差の部分を凸面側に斜めに削っている。1115 は管部の破片である。穴から約 3.5 ㎝離れて突帯の痕跡が残っており、右側の破片であることがわかる。

SD01（図 334）

SD01 では合計６点・総重量 0.5 kg出土している。いずれも小破片であり、部位の特定できない破片が多い。側面が残る２点を図示する。1116 と 1117 は平瓦部の破片である。小破片であり、左右どちらの側面かは判断できない。凹面から側面に布目が回り、側端から約２㎝の位置に型端の段差が残る。1117 には横方向に布綴じ痕が確認される。

SD02（図 334）

SD02 からは、合計 10 点・総重量 2.7 kg出土している。側面の残存する６点を図示するが、このほかにⅠ類とⅡ類の突帯と判断できる小破片が各１点出土している。1118 はⅡ類の突帯付近の破片である。突帯から 3.5 ㎝程離れた位置にわずかに穴が残存しており、左側面の破片であることがわかる。1119 ～ 1121 は瓦当の破片である。瓦当と側面には、凹面から連続する布目が確認できる。顎の剥離面には指痕はみられるが、刻み等の加工の痕跡は確認できない。1122・1123 は顎段部付近の破片であり、瓦当は欠損する。凹面から側面に布目が連続し、型端の段差が確認できる。

（５）包含層・攪乱出土

包含層や攪乱、表土など、遺構以外で採取された蠓羽瓦は、合計 38 点・総重量 11.7 kgである。このうち、突帯の残る破片２点と、瓦当の残る破片３点を図示する。

1124 はⅠ類の狭端側右側面の破片である。布目は凹面から突帯と側面に連続し、側面には型端の段差が確認できる。狭端面は削り調整されており、布目は残らない。狭端面の凹面側には、一部破面のような凹凸が確認でき、凸型台に据えた状態で長さが切り揃えられたものと推測される。1125 はⅡ類である。突帯付近の左側面の破片で、突帯から 3.5 ㎝離れた位置に穴がわずかに残る。側面は風化により不明瞭であるが、突帯には凹面から連続する布目が確認される。1126 ～ 1128 は瓦当の破片である。1126 は瓦当から段部付近まで残る。瓦当幅は４㎝で、凹面から連続する布目が残る。1127 と 1128 は剥離した顎部の破片である。剥離面に刻み等の加工は確認できない。

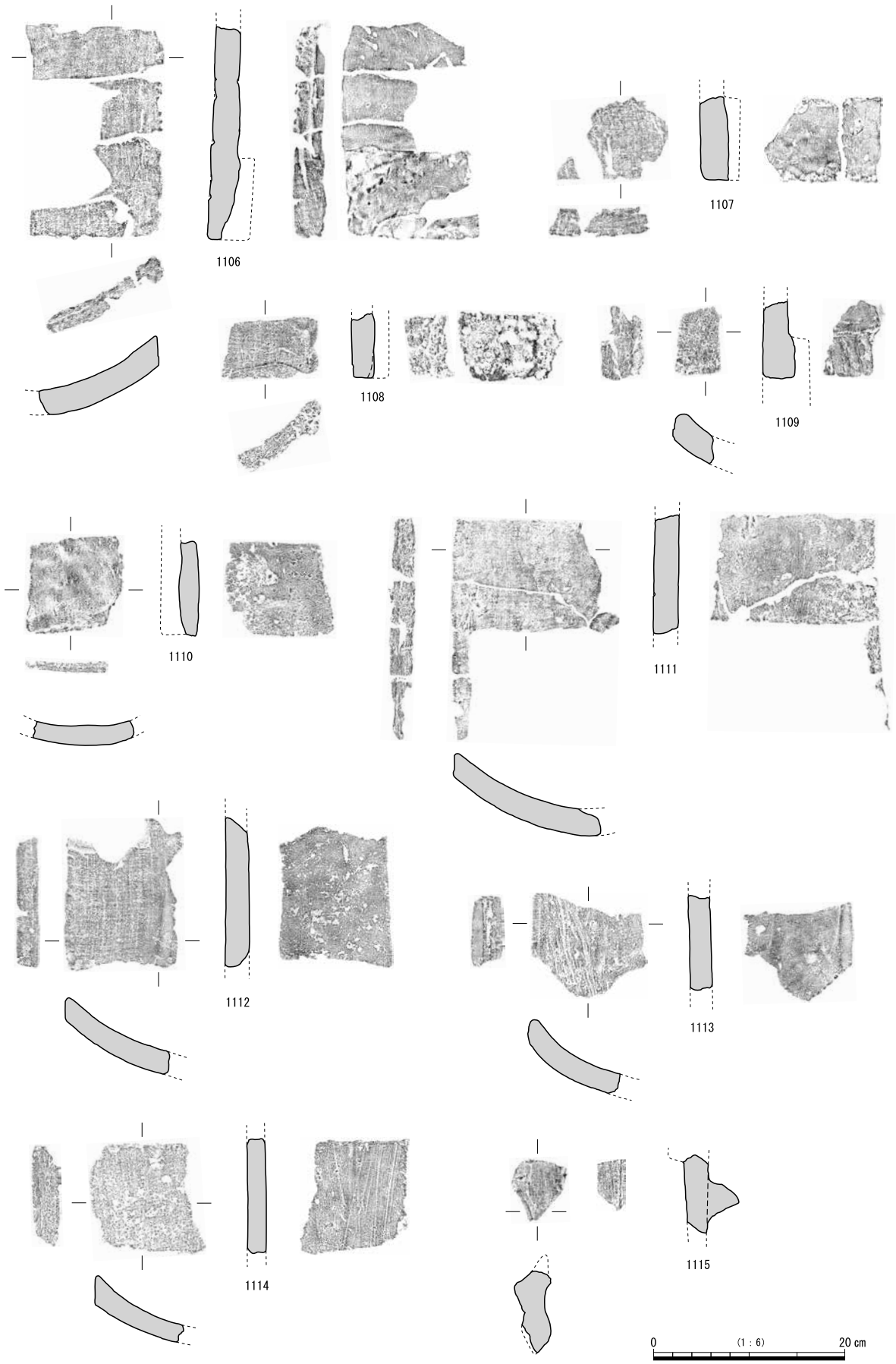


図 333　SX01 出土蠣羽瓦

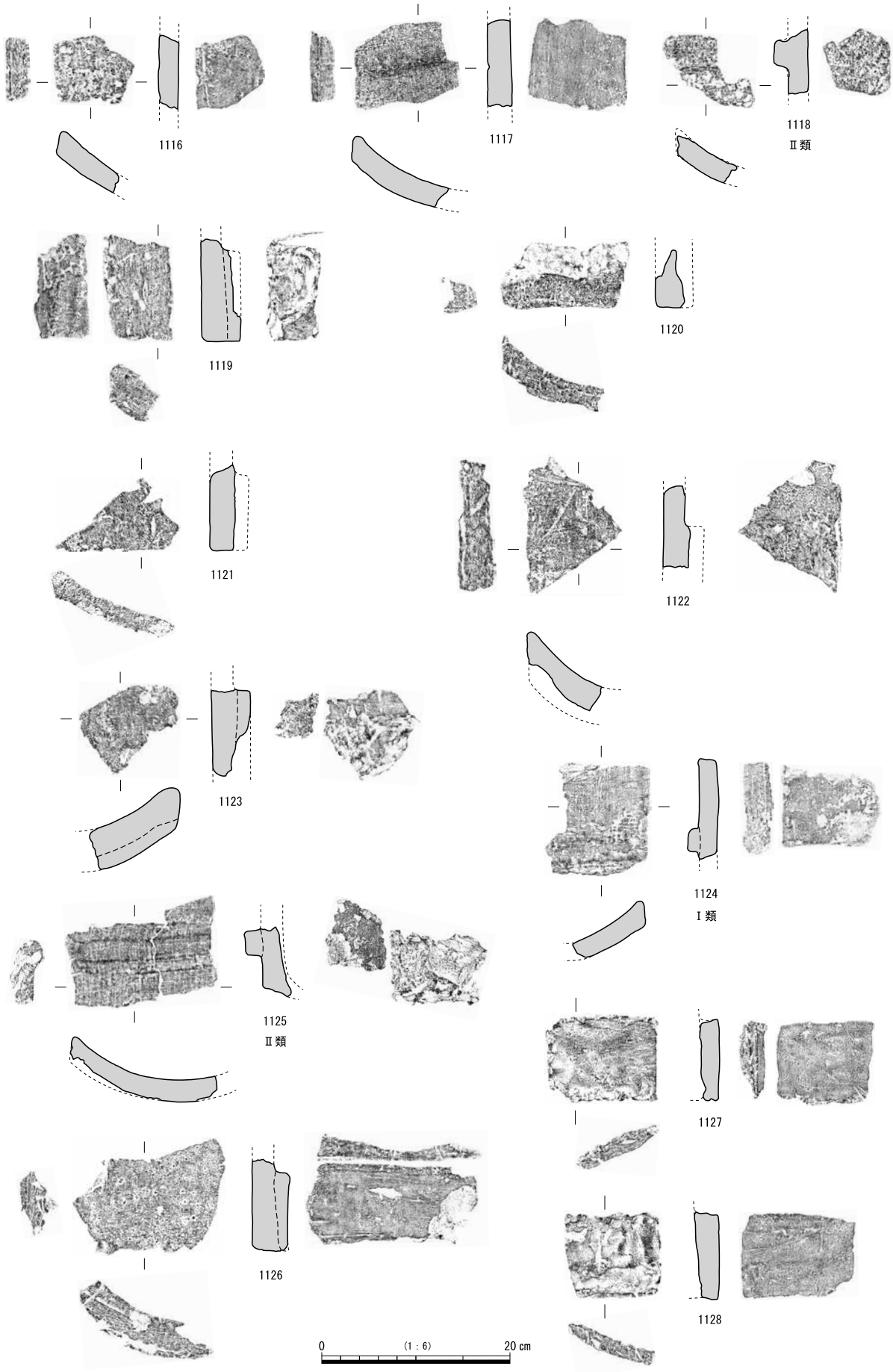


図 334　SD・包含層・攪乱出土蠓羽瓦

8　鬼瓦

出土した鬼瓦は、図示した２点（1129・1130）のみである。無文の鬼瓦で、焼成前の平瓦を整形して製作されている。２点とも３号窯の床面から割れた状態で出土している。

法量は、1129 が高さ 34 ㎝・最大幅 32 ㎝と上部の幅がやや広く、1130 は高さ 34 ㎝・最大幅 32 ㎝と下部の方が幅が広い。表面は全面横ナデ調整されており、無文である。ナデ残しの部分には斜め方向の縄叩き痕が残り、凹型台痕とみられる縦方向に走る段差が側面付近に確認される。裏面も大半がナデ調整されているが、一部ナデ残しがあり、1129 には布目と糸切り痕が、1130 には布目と布綴じ痕がみられる。表・裏面に残る縄叩きと布目の痕跡から、一般的に型作りによるものではなく、焼成前の平瓦を素材としていることがわかる。上部を弓形に截断し、下部中央を半円形に截り抜いて鬼瓦の形態がつくり出されている。湾曲は残されているが、平瓦よりは緩い。裏面に把手やその痕跡は確認できない。

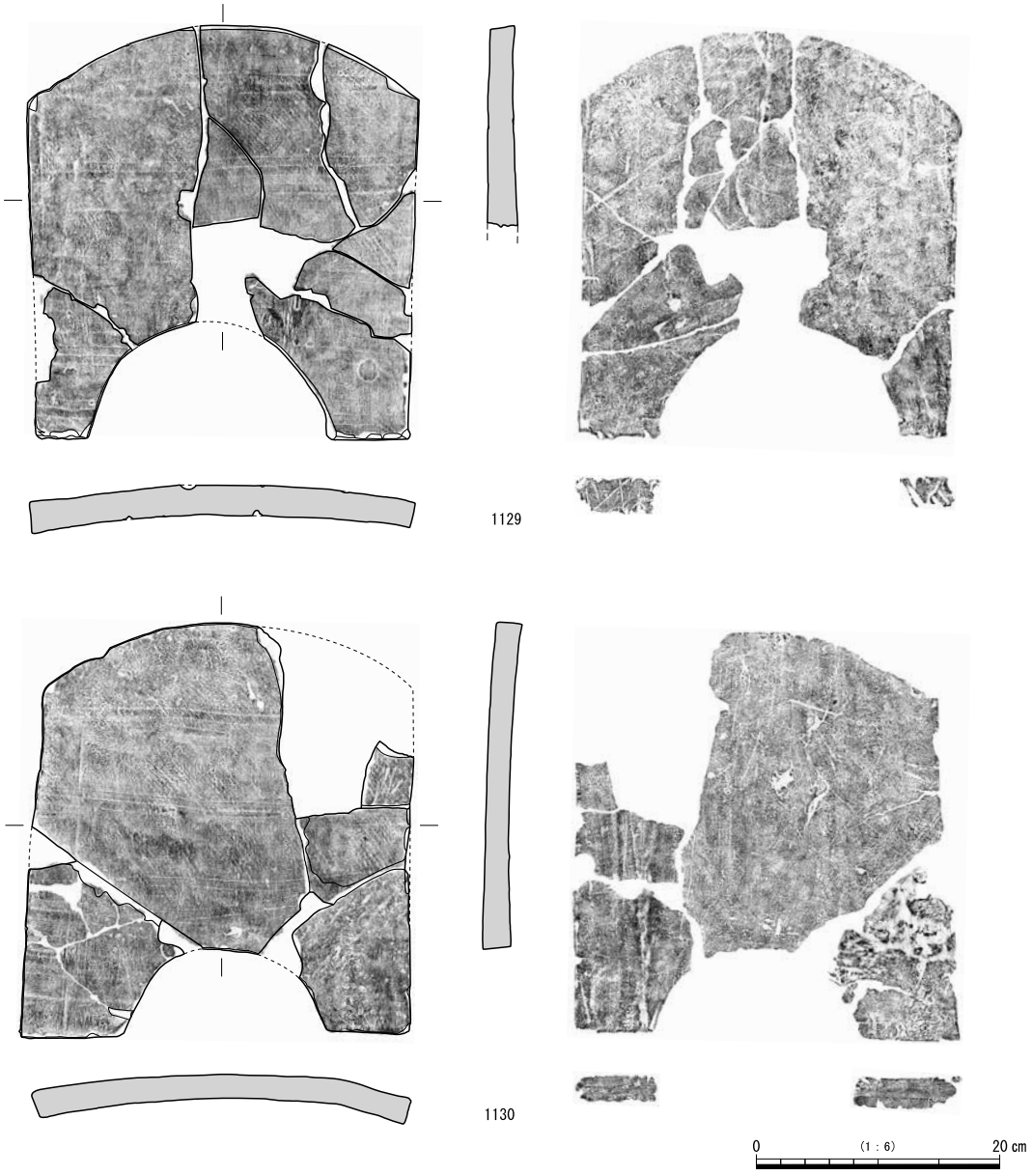


図 335　３号窯窯体内出土鬼瓦

９　鴟尾

鴟尾は、焼成や文様構成などから２個体の存在が確認できる。硬質で珠文帯をもたないものを鴟尾Ａ、軟質で珠文帯をもつものを鴟尾Ｂとする。

（１）鴟尾Ａ（図 336 ～ 344、図版 37・83 ～ 88）

鴟尾Ａの破片は、合計 124 点・総重量 43.7 kg出土している。破片の大半が３号窯灰原から出土していることから、３号窯で焼成されたものとみてよい。接合した破片から、全体像が復原できる。

1131 は右側面の鰭部の破片である。外面には３段の鰭と突帯が一部残存し、内面には腹部が一部残存する。鰭は正段であり、一番上の段付近に鰭を削り出す際の目安線とみられる刻線が残る。腹部は鰭部の中央付近に位置する。外面の破片上部と突帯に沿った部分には黒色の付着物が確認でき、同様のものは内面の腹部と鰭部の境にも残る。突帯側の破片断面は黒色に熱変している。1132 は右側面下端の鰭部から胴部にかけての破片であり、突帯と透かし穴の下部が残存する。透かし穴の下部は三角形で、上方に傾斜する形で空けられている。突帯付近には黒色の付着物が残る。下端は内側に広がる形状になっ

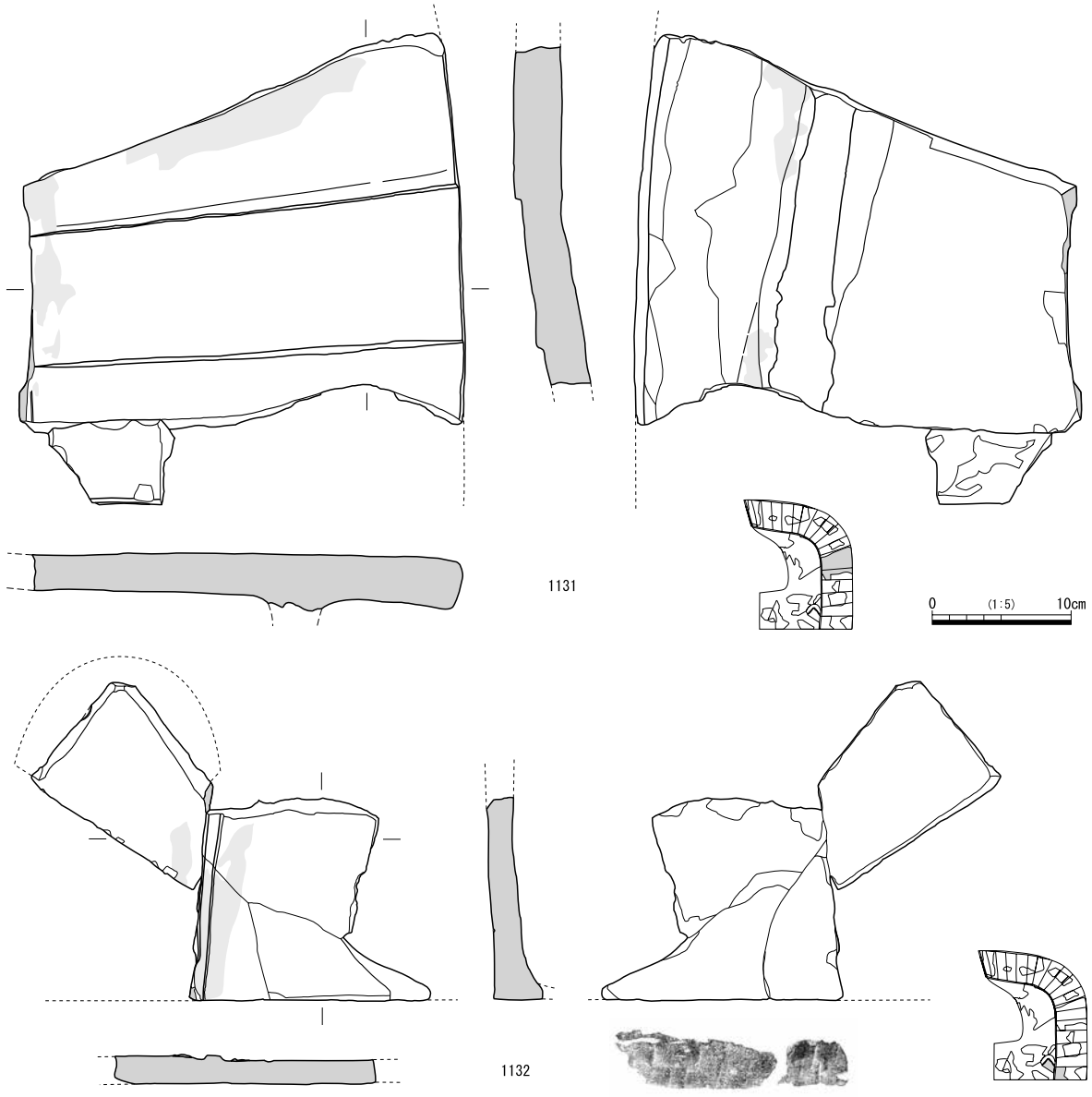


図 336　鴟尾Ａ（１）

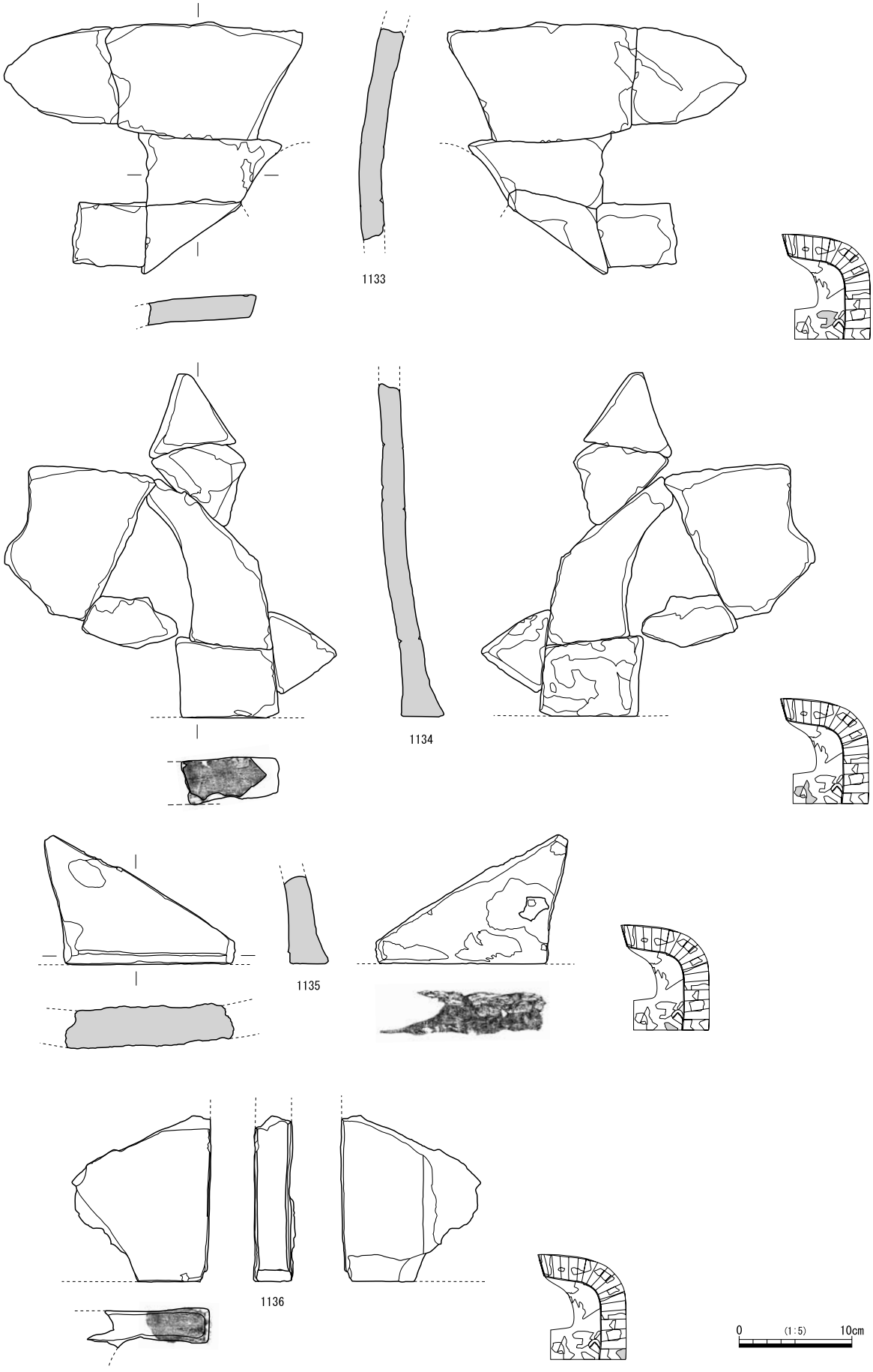


図 337　鴟尾Ａ（２）

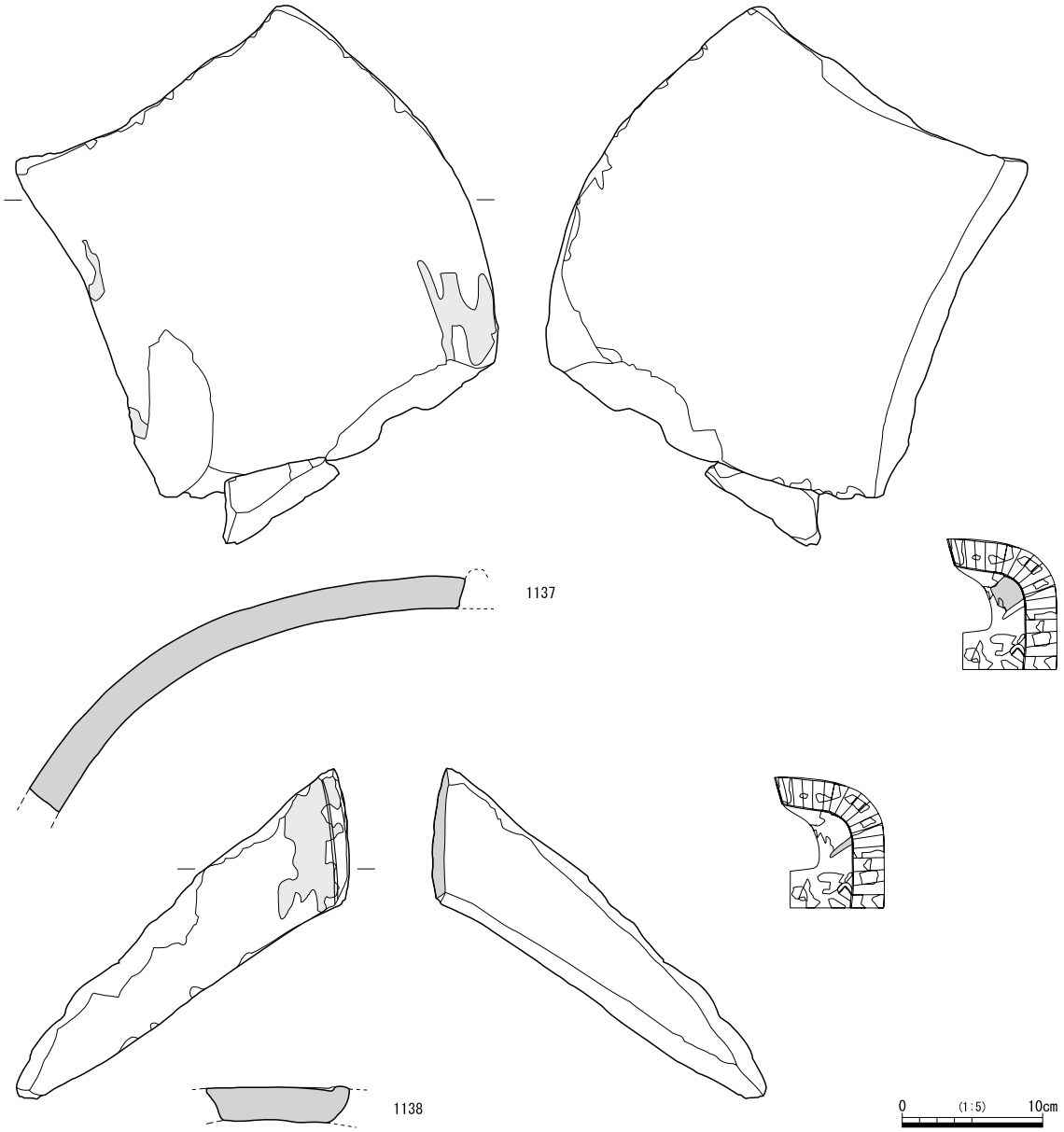


図 338　鴟尾Ａ（３）

ており、下面には木目痕が確認される。

1133 は胴部の破片である。透かし穴の上部が残っており、下部とは異なり湾曲していることから、透かし穴の上部は半円形に近い形状であると推測される。1134 は頭部付近の破片とみられ、下端が残る。下端は内側に広がり、下面には木目痕が確認される。1135 は胴部下端の破片であり、下端は内側に広がる。表面の下端には段差があり、窪んだ部分と下面には木目痕が確認できる。1136 は鰭部端の下端の破片である。表面の下端には 1135 と同様の段差がある。下端の段差は、鰭部端でも確認できる。窪んでいる面と下面には木目が残されている。

1137 は胴部上方の破片で、２号窯の前庭部の構築材として使用されていた。後方は突帯との境で割れており、境の部分と前方の一部には、黒色の付着物が残存している。1138 は 1137 の下に接合する。突帯の後方で割れており、断面は黒色に熱片している。突帯付近には黒色の付着物が確認される。

1139 ～ 1141 は頂部付近の鰭部の破片である。1139 には腹部も残存しており、腹部外面には鰭部との接合部を中心に広い範囲に黒色の付着物が残る。腹部内面には、側面に沿った方向とそれに直交する方

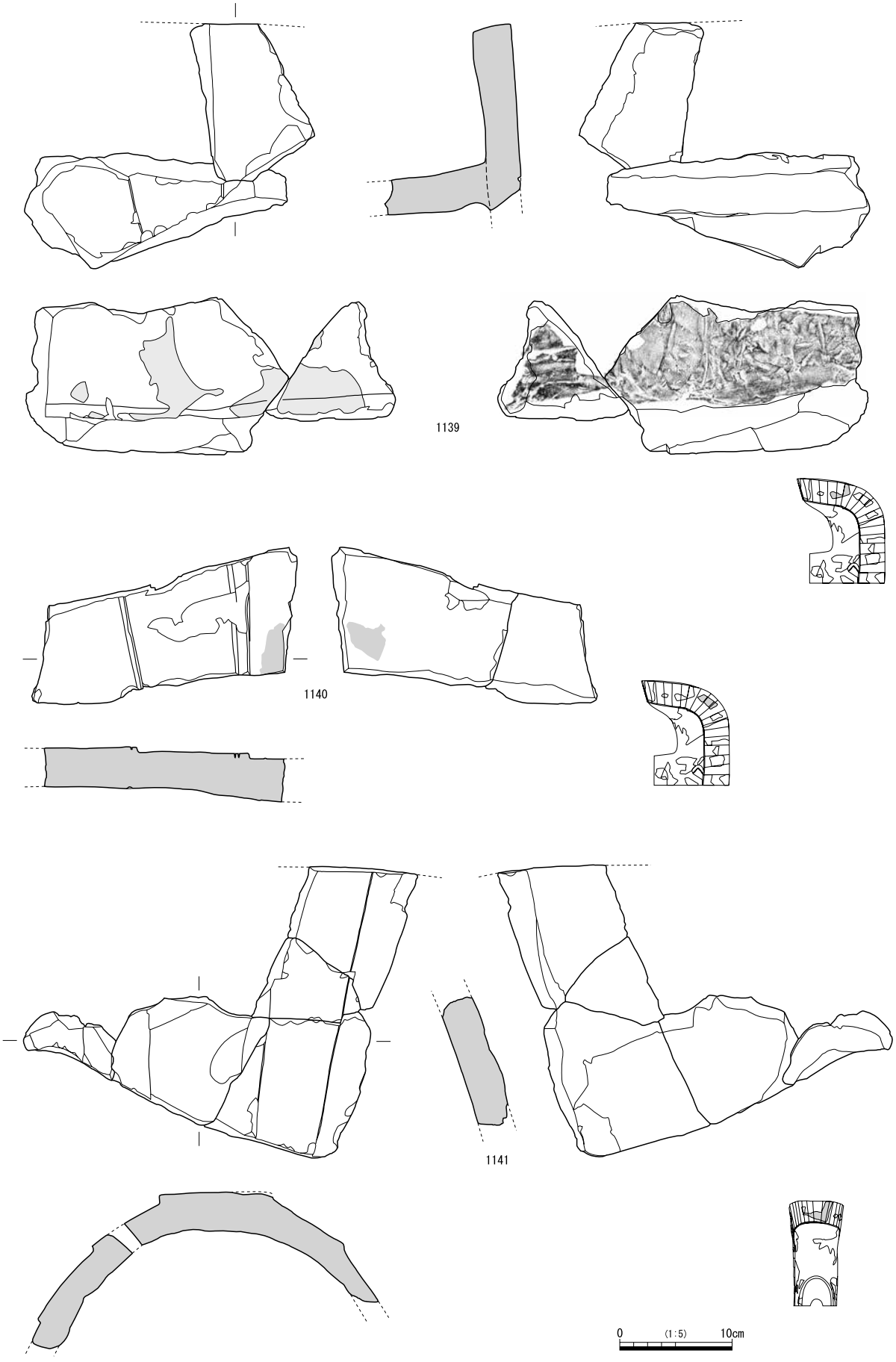


図 339　鴟尾 A （4）

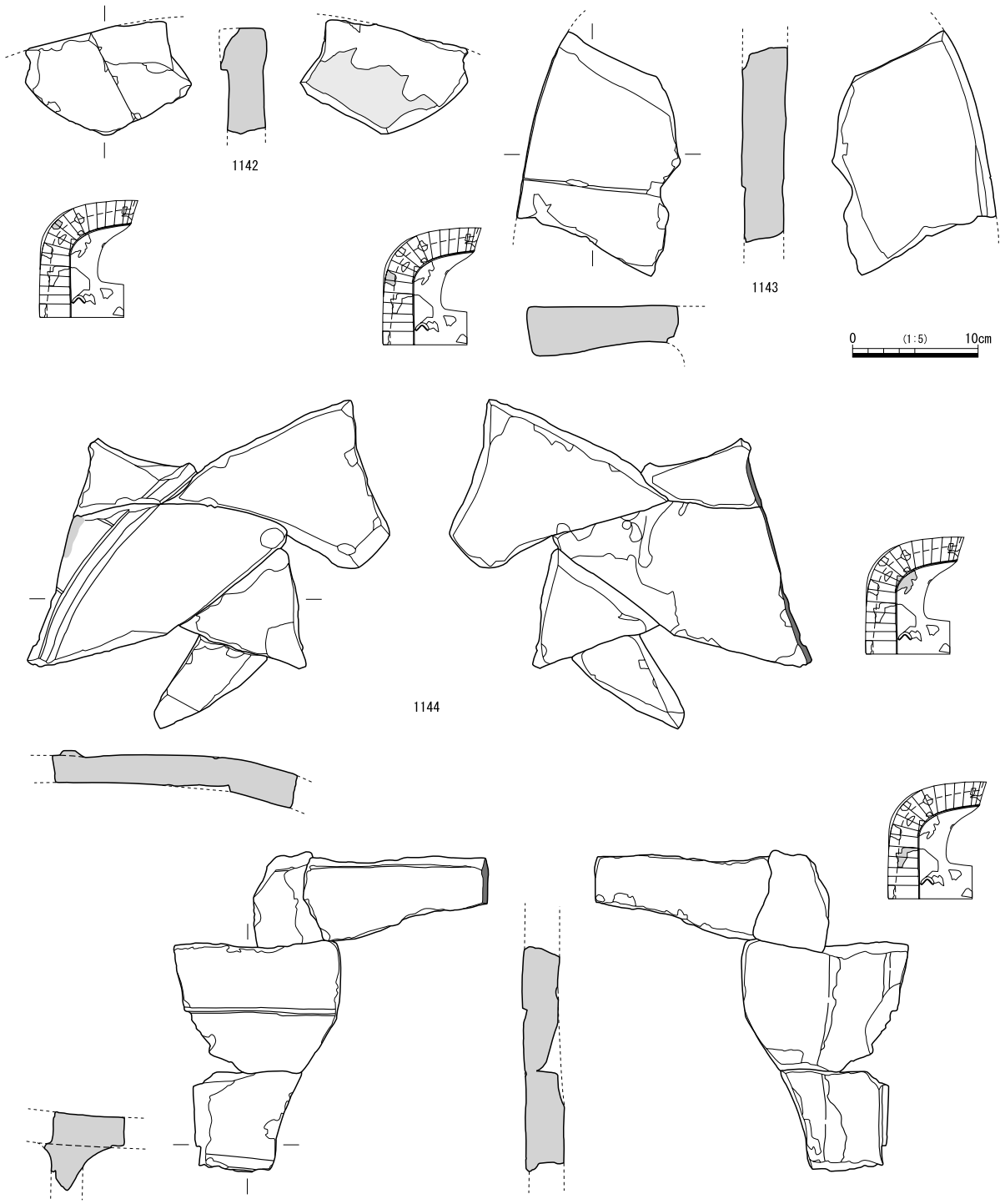


図 340　鴟尾Ａ（５）

向に細い竹のような植物の痕跡が確認できる。1140 には、段付近に目安線とみられる刻線と、内外面に黒色の付着物が確認できる。1141 は鰭部の正面の破片であり、中央の鰭から左右に正段の鰭が彫られている様子がわかる。

1142・1143 は左側面の鰭部の破片である。ともに腹部との接合部で割れている。1142 の内面には腹部との接合部付近に黒色付着物が残る。1144 は上方の鰭部から胴部にかけての破片である。破片の腹部側の断面は黒色に熱変しており、表面には黒色の付着物が確認される。1145 は鰭部から腹部にかけての破片である。前方は突帯との境で割れており、その断面は黒色に熱変している。

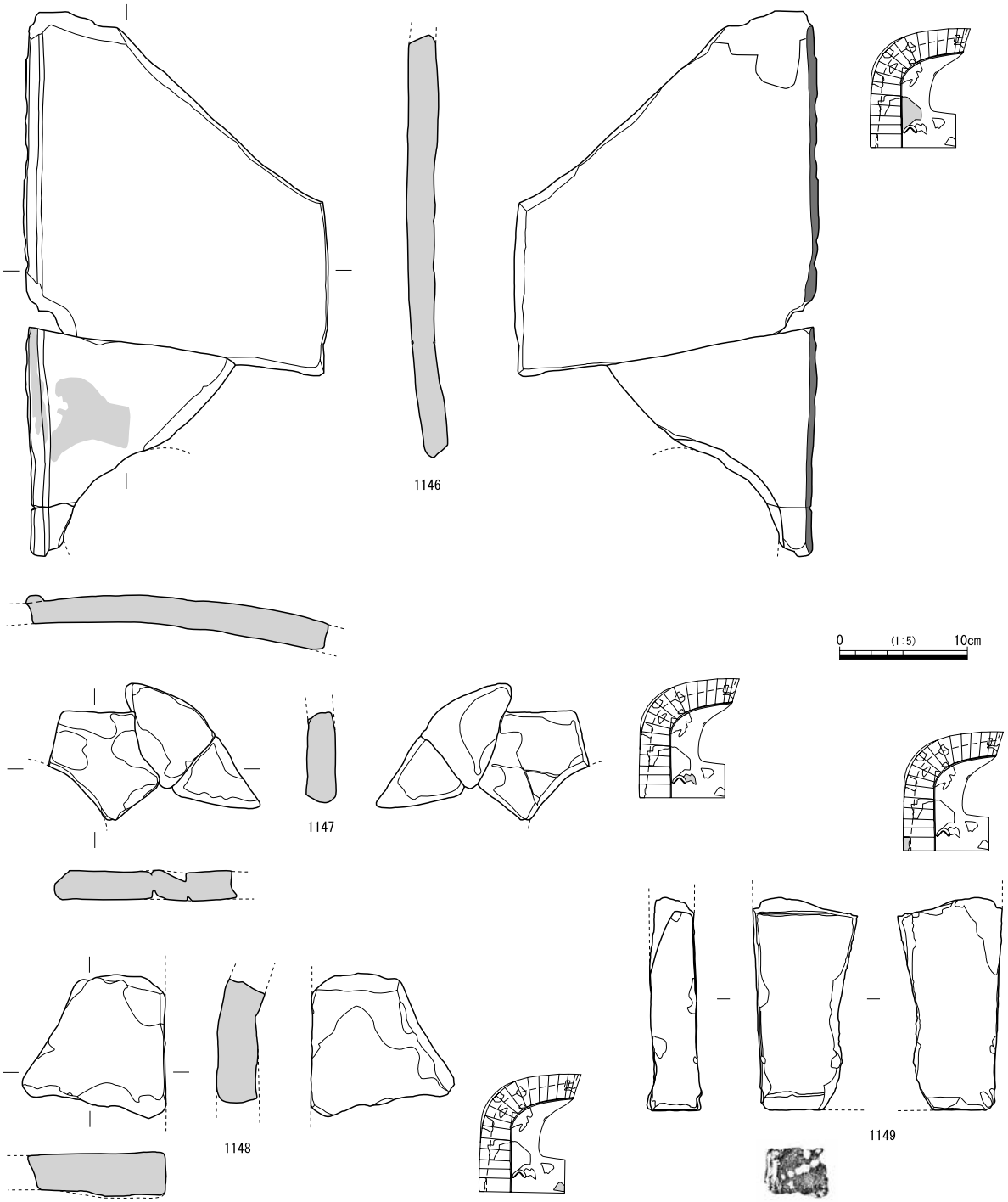


図 341　鴟尾Ａ（６）

1146・1147 は胴部の破片であり、透かし穴の上部が残る。透かし穴の上部は湾曲しており、楕円形に近い形状である。1146 は突帯に沿って割れており、その断面全体が黒色に熱変している。突帯の周辺には黒色の付着物が残る。1148 は頭部の破片である。1149 は鰭部の後・下端の破片で、腹部との境で割れている。1136 と同様に側面と後方の下端に段があり、下面と段の窪む部分には木目が残る。

1150 は腹部の大型破片であり、右側面の鰭部の破片と接合している。鰭部との接合部付近には、部分的に黒色の付着物が残る。腹部には５～10㎝程の間隔で粘土の接合痕が認められる。粘土の接合痕は、一部鰭部の内面にも確認される。

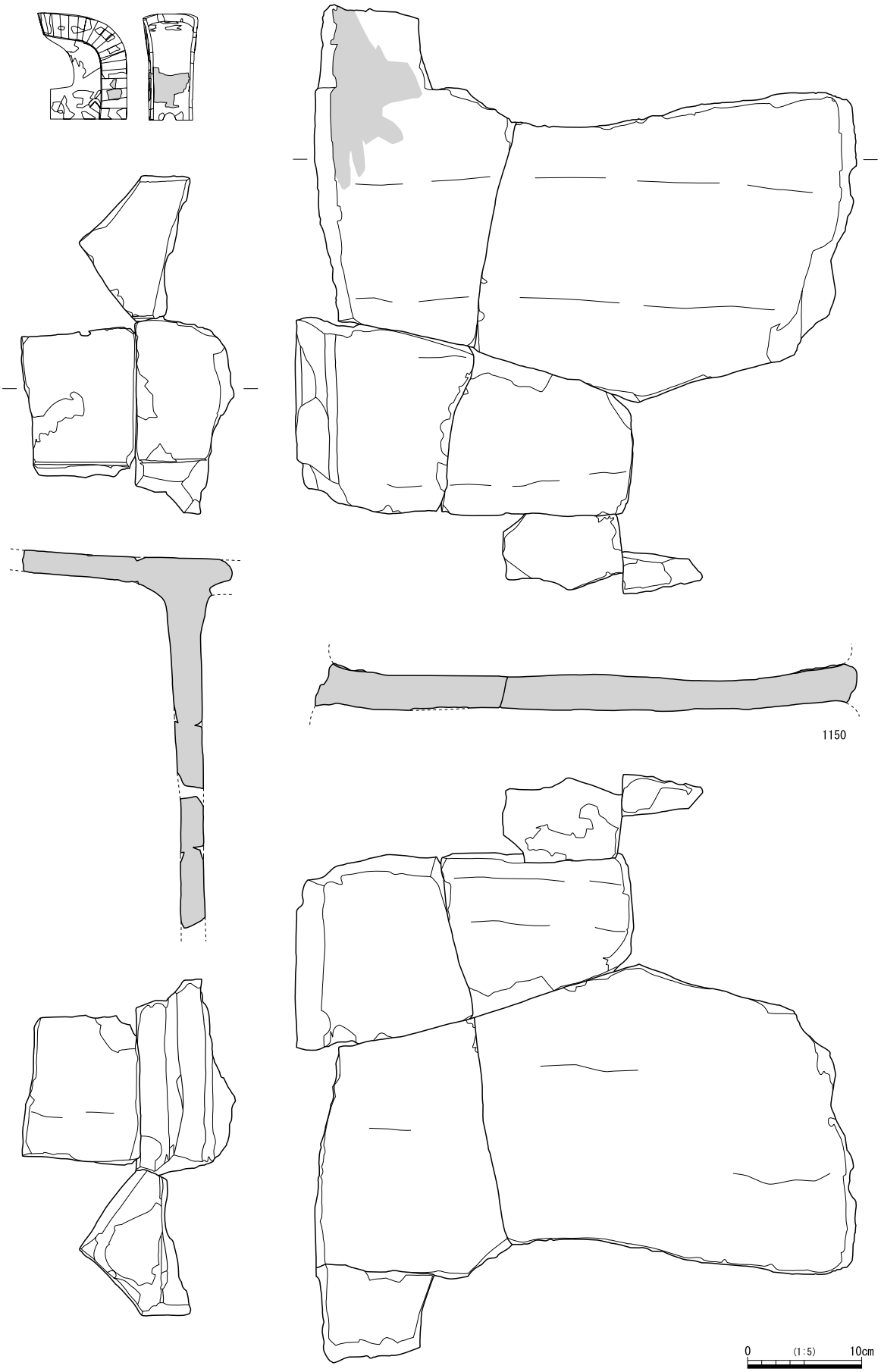


図 342　鴟尾Ａ（７）

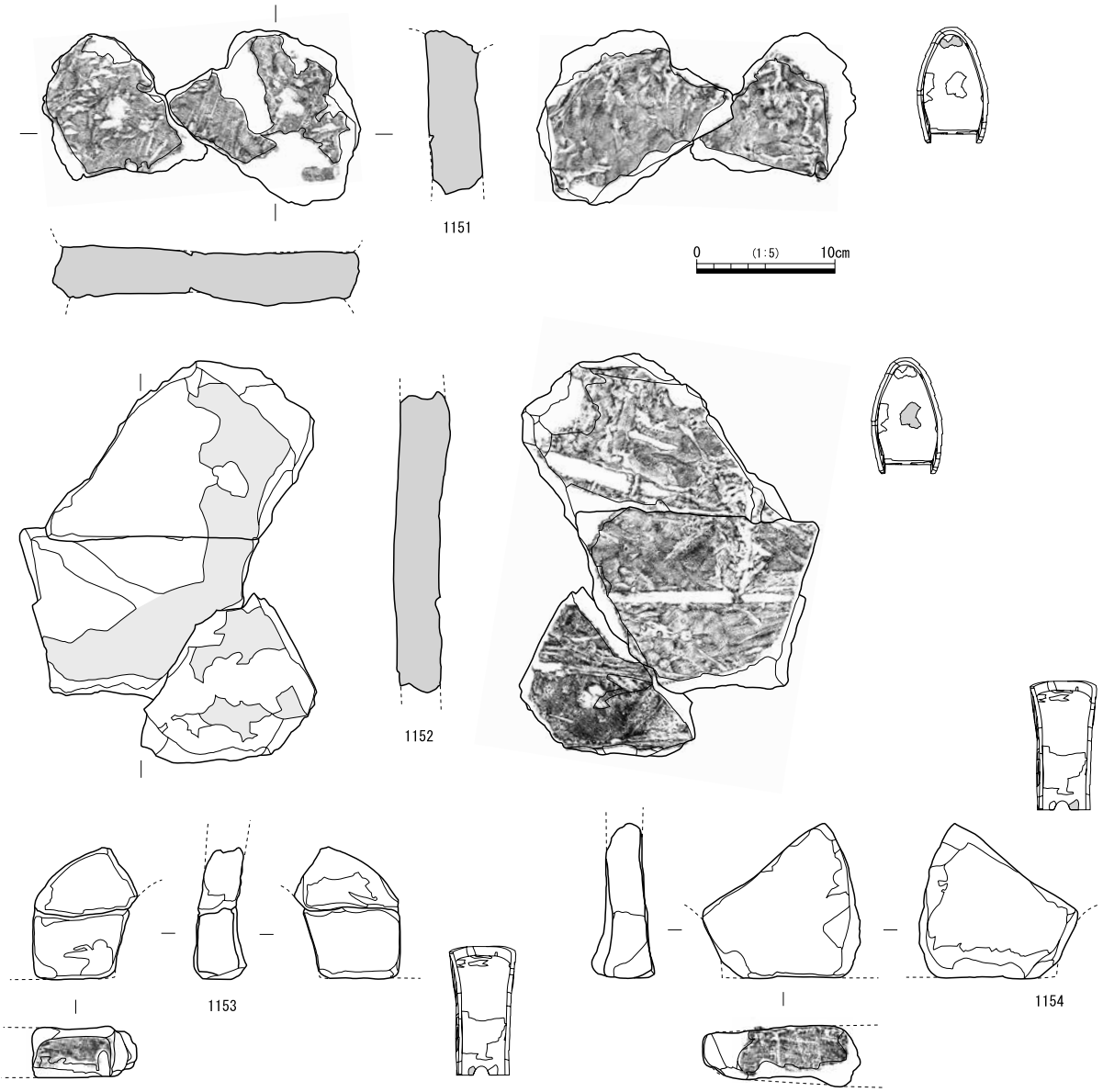


図 343　鴟尾Ａ（８）

1151・1152 は頂部にあたる腹部の破片である。1151 の外面には、細かな刺突の痕跡が残されている。調整で不明瞭になっているが、叩き具の痕跡の可能性もある。1152 の外面には、広範囲に黒色の物質が付着する。裏面には、縦横に配された竹・笹類の痕跡が明瞭に残る。1153・1154 は腹部下端の破片である。いずれも一端が楕円形に刳られ、棟端の軒丸瓦差し込み部が形成されている。下面は表面の風化が著しいが、木目の痕跡が確認できる。

接合された破片から、鴟尾Ａはほぼ全形が復元できている。後方に関しては、下端から頂部付近まで、部分的ではあるが破片が接合している。前方については、破片は連続しないが、まず頂部の湾曲や鰭の間隔、背部の傾斜などから鰭部の頂部前方の位置を推定し、そこから少し後方に下がった位置に頭部先端を復元した。復元された法量は、高さ 132 ㎝・長さ 95 ㎝・後部幅 49 ㎝・頭部幅 44 ㎝である。復元に使用した破片の表面積は全体の 26.6％、破片の総重量は 40.0 ㎏である。表面積から換算すると、完存した場合の推定重量は 150.4 ㎏になる。これら復元に使用した破片のほかには、部位を特定できなかった小破片が 3.7 ㎏出土している。なお 1152 については、復元すると内面の観察が困難となるため、復元個体には使用せず別に保管することとし、復元個体にはレプリカを嵌め込んでいる。

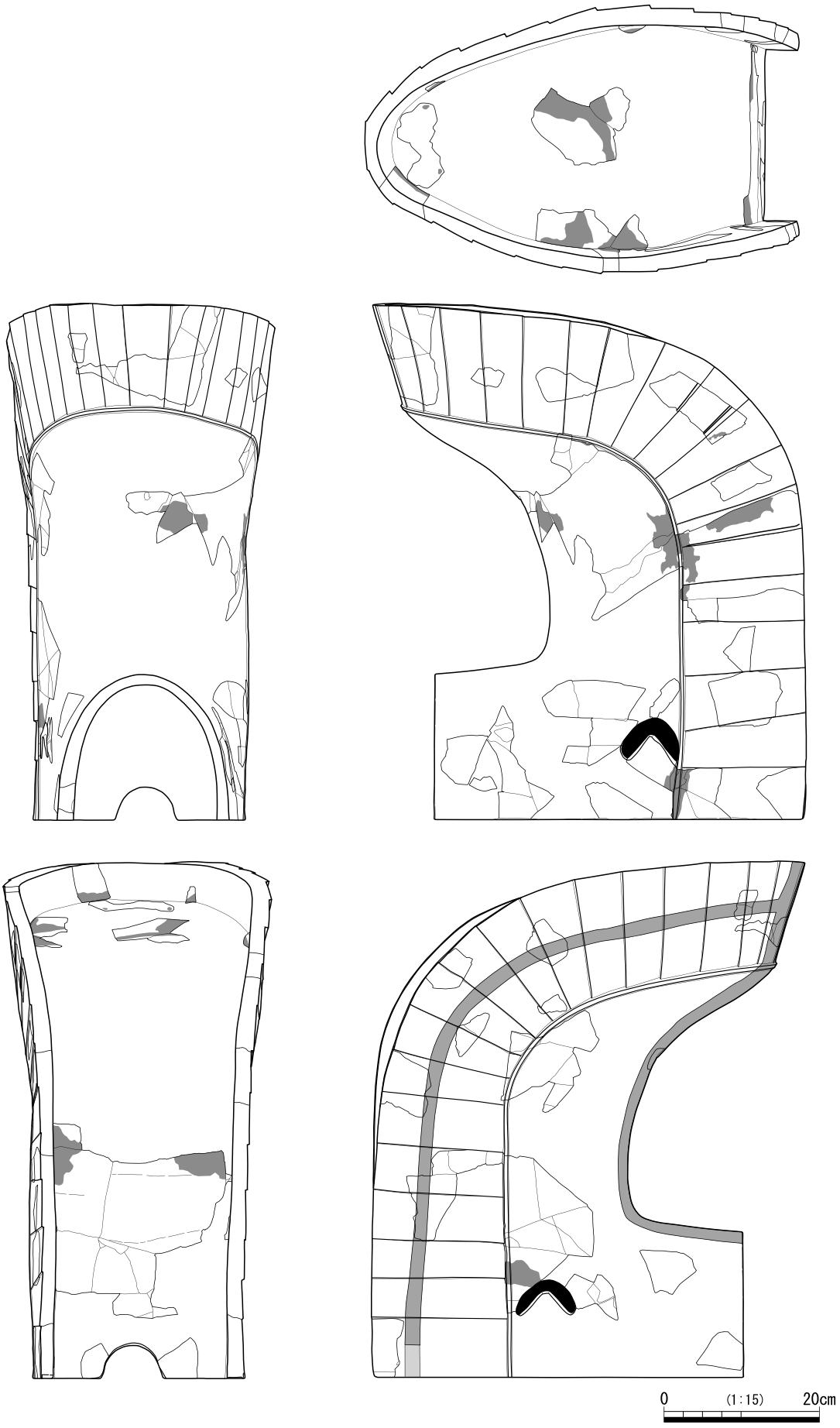


図 344　鴟尾Ａ復元図

（２）鴟尾Ｂ（図 345 ～ 349、図版 38・89 ～ 91）

鴟尾Ｂの破片は、合計 42 点・総重量 39.2 kgである。１号窯窯体内と２号窯灰原から各１点出土しているが、大半は窯上方の瓦集中遺構 SX01 と大溝 SD02 からの出土である。ほかに包含層・攪乱等でも多くの破片が採取されている。破片が限られており全形を復元することはできないが、各部位の大きさからみて、鴟尾Ａと同等の規模のものと推測される。部位が特定できるものを中心に 16 点図示する。

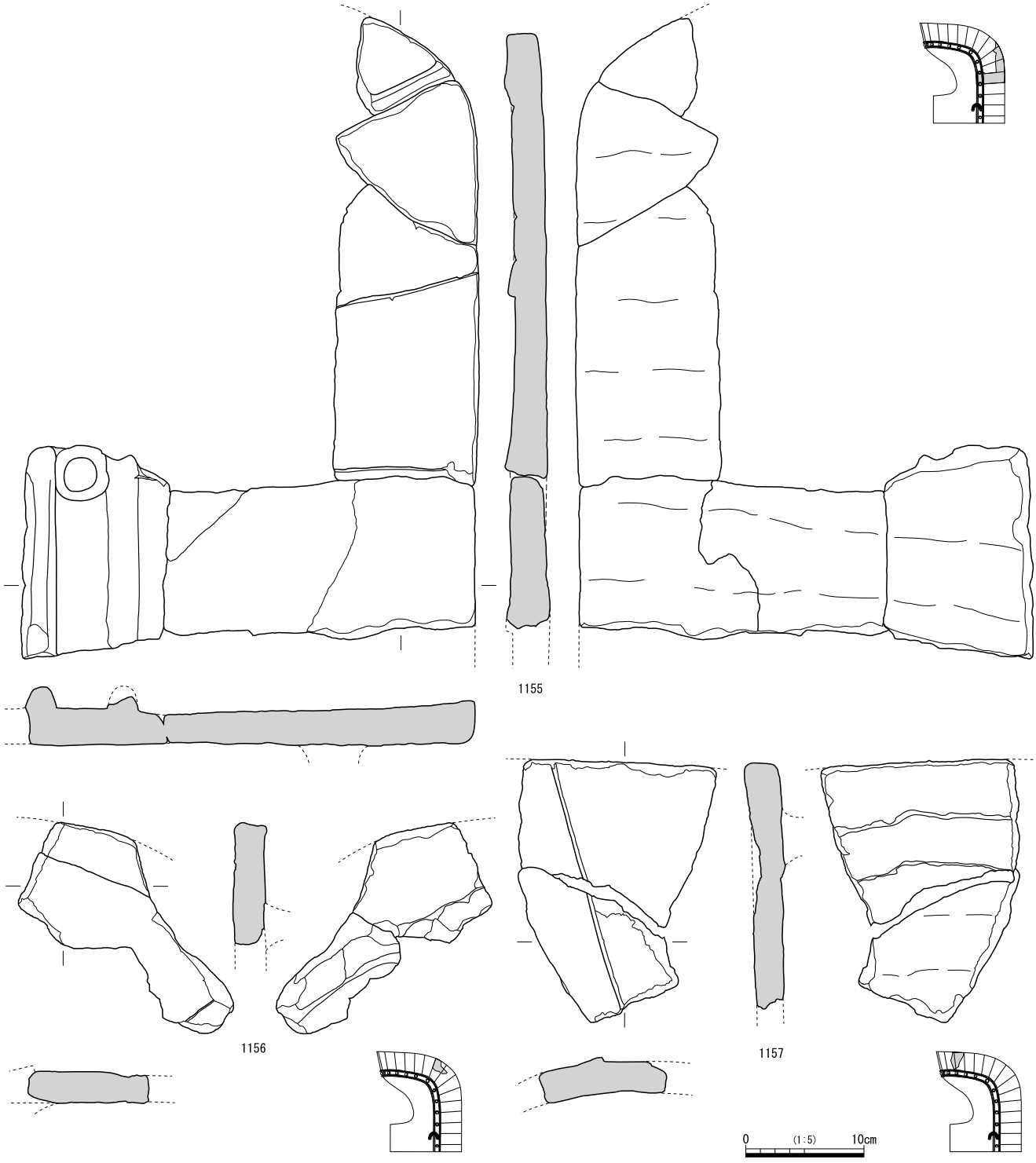


図 345　鴟尾Ｂ（１）

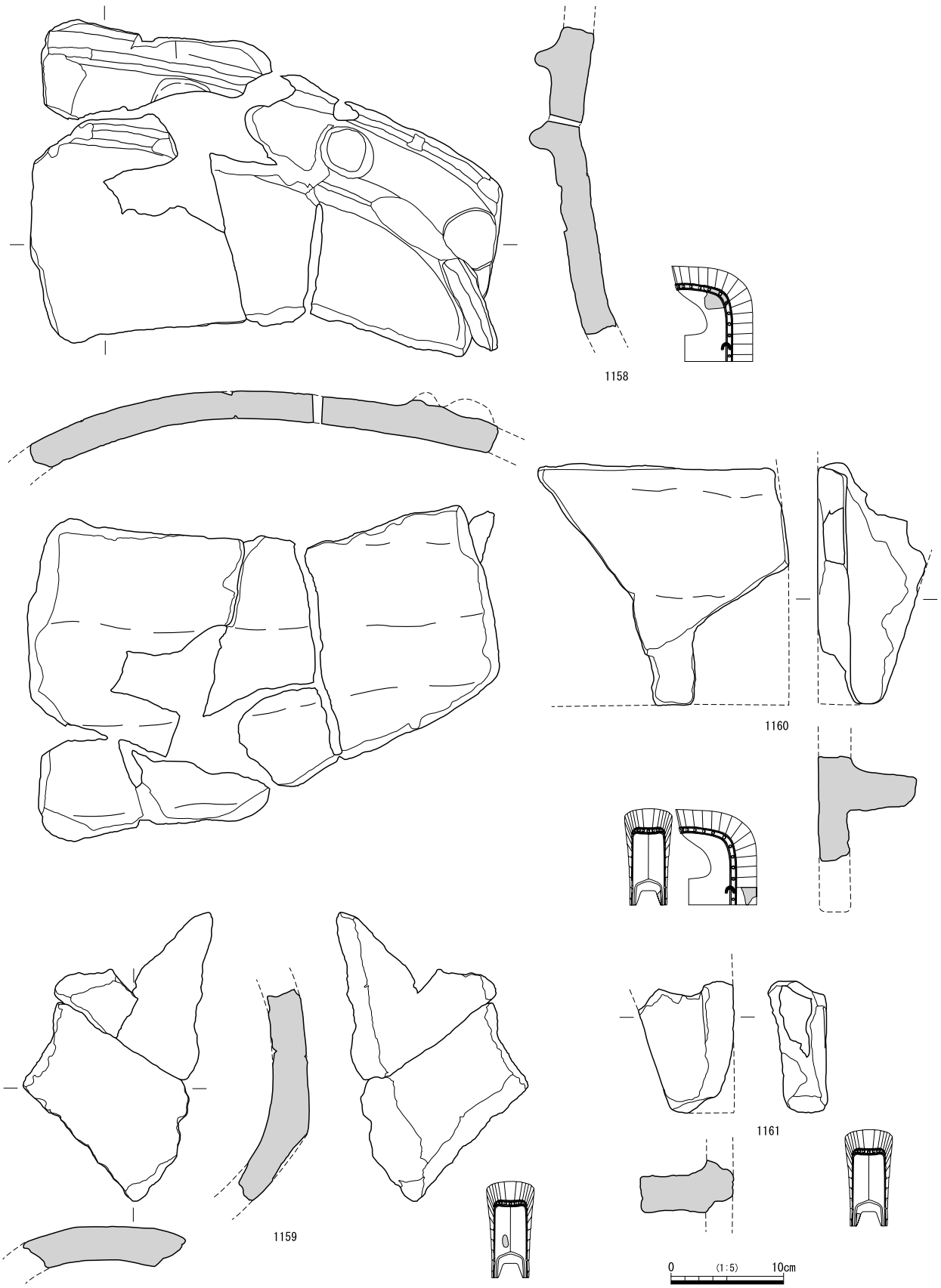


図 346　鴟尾Ｂ（２）

1155 は右側面の縦帯から鰭部にかけての大型破片である。SX01 と SD02 から出土したものが接合している。上方の鰭部端が前方に向かって曲がっていることから、頂部付近の破片であることがわかる。２本の縦帯の間には珠文帯が設けられている。珠文は上面が平坦な截頭円錐形で、大きさは上端の直径３㎝・下端の直径 4.5 ㎝・高さ２㎝である。鴟尾の本体に貼り付けており、12 ㎝下方に剥離痕が確認できる。鰭は正段であり、４段分が残存する。上端付近で厚さを増すことで段が形成されている。破片の下端も厚みが増しており、段の部分で割れているものとみられる。下方の段はほぼ水平であるが、上方になるに従い徐々に斜めになる。腹部は残存しないが、鰭部後方から約９㎝の位置に剥離痕が認められる。裏面には６㎝程の間隔で粘土の接合痕がみられる。粘土紐というよりは、ブロック状の粘土を積み上げて成形しているものと推測される。

1156 は右側面の鰭部の破片である。SX01 から出土している。鰭部端が曲線になっていることから、上方の湾曲部の破片とみられる。段は１ヶ所残存しており、前方の割れ目も段の下端にあたるもの推測される。わずかではあるが腹部が残存しており、腹部は鰭部端に沿って湾曲している。腹部の厚さは 2.5 ㎝程である。1157 は右側面頂部付近の鰭部の破片である。SD02 から出土している。鰭部全体が前方に向かって湾曲している。段はやや前傾気味である。裏面には腹部の剥離痕が残り、粘土接合痕が横方向に確認できる。

1158 は右側面の珠文帯から胴部にかけての大型破片である。SX01 と SD02 から出土したものが接合している。全体が前方に向かって湾曲している。珠文は１ヶ所しか残存しないが、その両側に剥離痕が残っており、珠文の中心間の距離は約 15 ㎝と推定される。縦帯は、外側内側ともに幅 1.5 ～２㎝であり、後方では下に向かって大きく曲がっている。外側の縦帯に沿って割れており、鰭部はほとんど残存しないが、前方の珠文の上に１ヶ所段の痕跡とみられる刻線が認められる。裏面には、６～９㎝程の間隔で横方向に粘土の接合痕が残る。1159 は背部から頭部にかけての破片である。背部は大きく反り上がっている。粘土の接合痕に沿って割れており、図の右上が上方にあたる。横方向にも湾曲していることから、やや左側面寄りの部位であろう。

1160・1161 は腹部下端の破片である。1160 は２号窯灰原から出土しており、1161 は SX01 周辺の地表面で採取されている。1160 は右側面に接合する部分であり、側面には鰭部が残存する。腹部下端は、後方からみて右上に向かって斜めに切り取られている。1161 は反対側にあたる左側面に接合する部分であるが、腹部下端は後方からみて左上に向かって斜めに切り取られている。上方の破片が存在しないため具体的な形状は不明であるが、鴟尾Ｂの腹部下端については、台形またはややいびつな半円形に切り抜かれていたものと推定される。

1162 は正面中央の、背部から鰭部にかけての大型破片である。１号窯窯体内と SX01 から出土した破片が接合している。背部は大きく反り上がり、珠文帯と鰭部ではやや直立気味になる。珠文は３つ残存している。１つはほぼ中央に位置し、約 13 ㎝の間隔で両側に配されている。鰭部はほとんどが欠損しており、段の様子も確認できない。背部は鴟尾Ａとは大きく異なり、中央が尖る形状である。内面は全面ナデ調整で、部分的に粘土の接合痕がみられる。

1163 ～ 1166 は左側面の鰭部の破片である。1163 は全体が大きく湾曲していることから、頂部の前方に近い部分であると推測される。段は正段で、２段残存している。鰭部端から６㎝の位置に腹部が一部残存する。鰭部内面には、横方向に粘土の接合痕が確認される。SX01 から出土している。1164 は小破片であるが、鰭部端が残る。鰭部端の形状がやや曲線になっており、上方の破片であると推測される。段は正段で１段残存する。SD02 から出土している。1165 は頂部後方の破片である。鰭は２段残存しており、やや後方に傾斜する。鰭部端はほぼ平らであり、全体の湾曲もほとんどない。鰭部端から約６㎝離れた位置に鰭部端に平行して腹部が接合されている。SX01 と SD02 の破片が接合している。1166 は

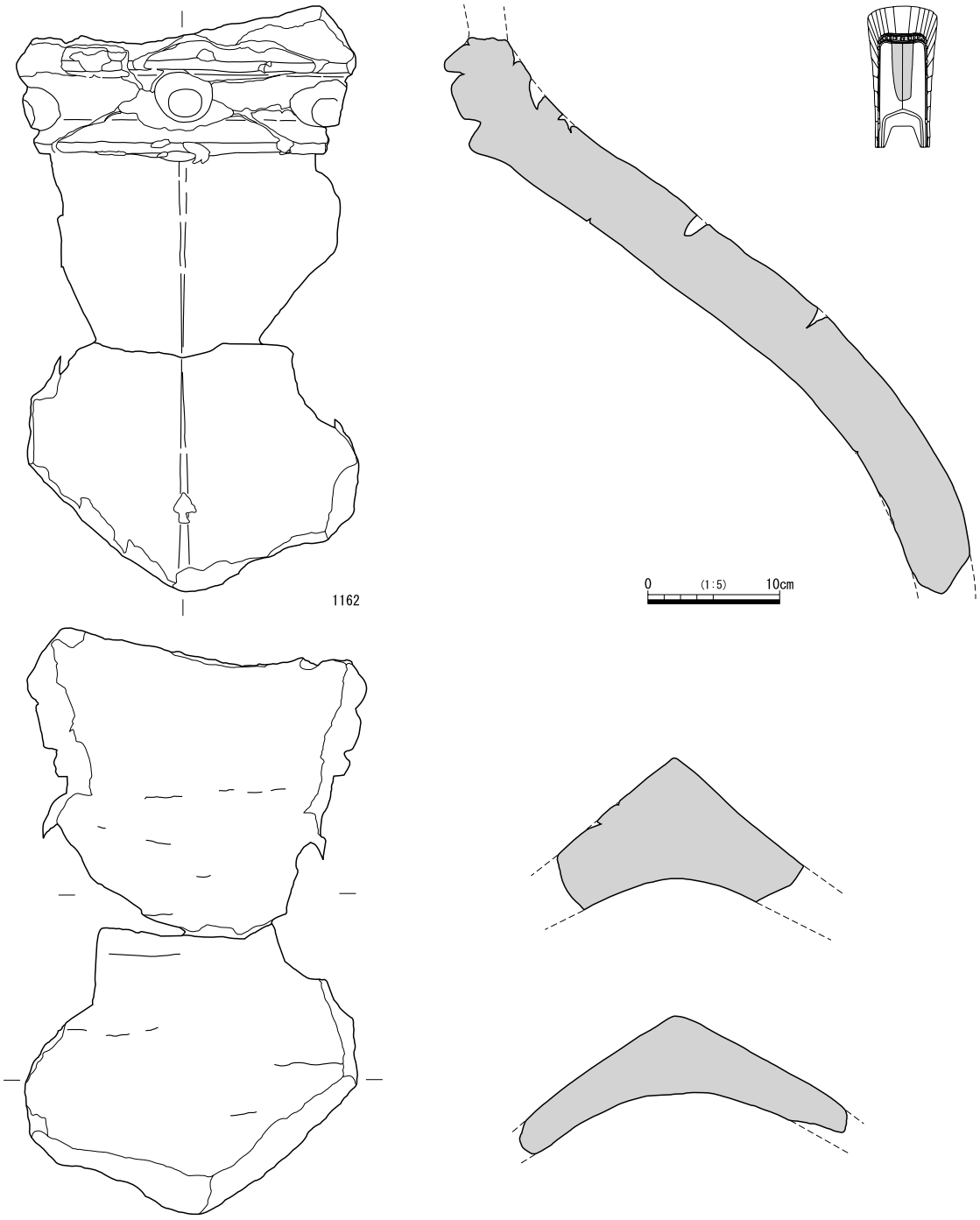


図 347　鴟尾Ｂ（３）

鰭部の小破片である。段が１段残存しており、内面には腹部の剥離痕が確認される。SD02 から出土している。

1167 ～ 1169 は珠文帯付近の破片である。1167 は２本の縦帯の間に珠文が１個残存する。SD01 から出土している。鰭部はほとんど欠損しているが、わずかに段が残っており左側面の破片であることがわかる。胴部は内側へ湾曲し、全体も前方へ向かって湾曲することから、頂部でも前方の破片であると推測される。1168 は縦帯と珠文が剥離しているが、剥離痕から縦帯と珠文の存在が確認できる頂部の破片である。不明瞭ではあるが、縦帯がわずかに曲線を描き、全体の湾曲も少ないことから、頂部後方の破片であると推測される。SX01 付近の地表面で採取されている。1169 は珠文１個と外側の縦帯が一部

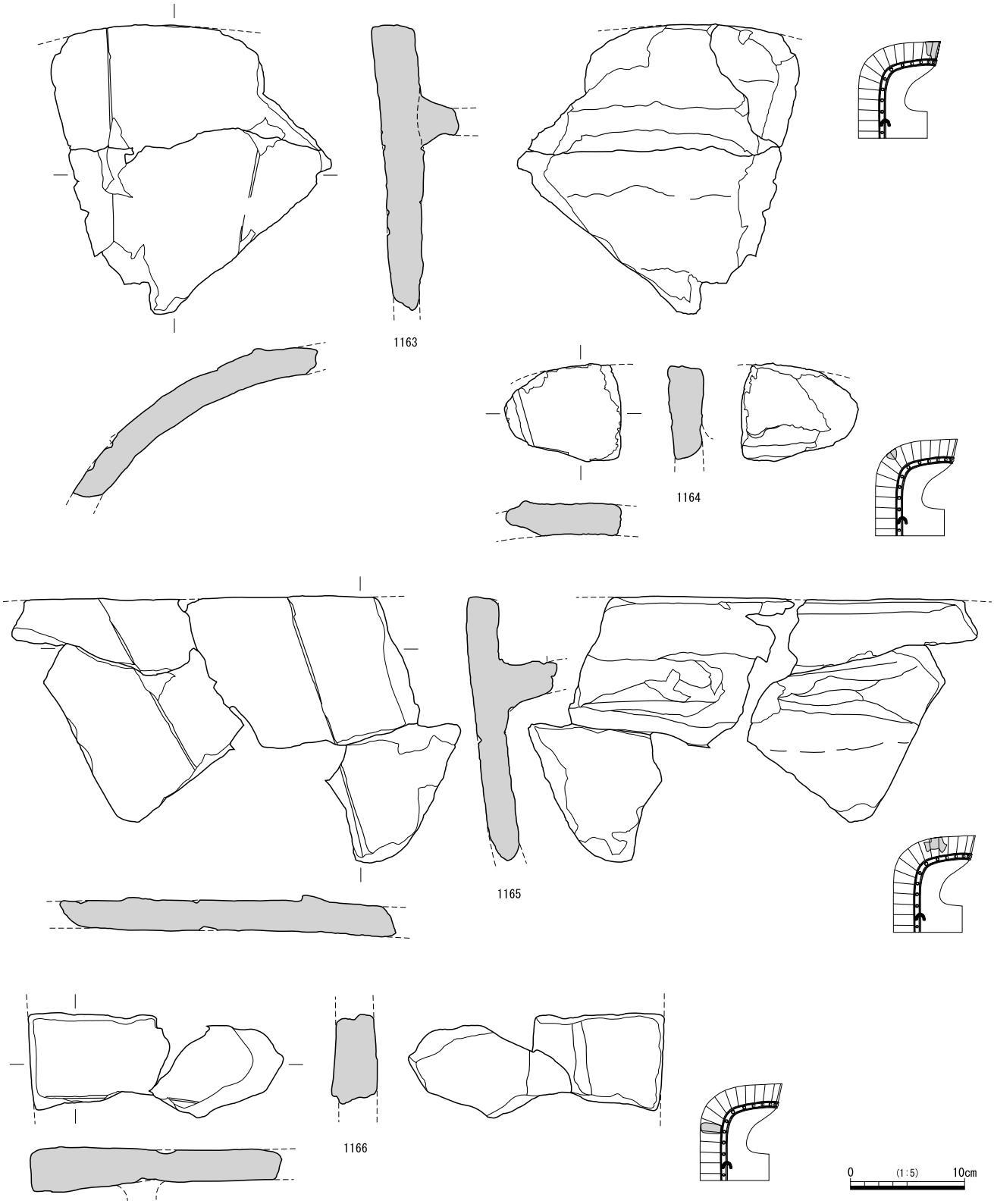


図 348　鴟尾Ｂ（４）

残存する。段がわずかに残存しており、左側面であることがわかる。全体の湾曲がほとんどなく、縦帯が曲線を描いていることから、頂部後方の破片であると推測される。SD02 から出土している。

1170 は左側面の透かし穴下部の破片である。縦帯の左側が少し高くなっていることから、左側が珠

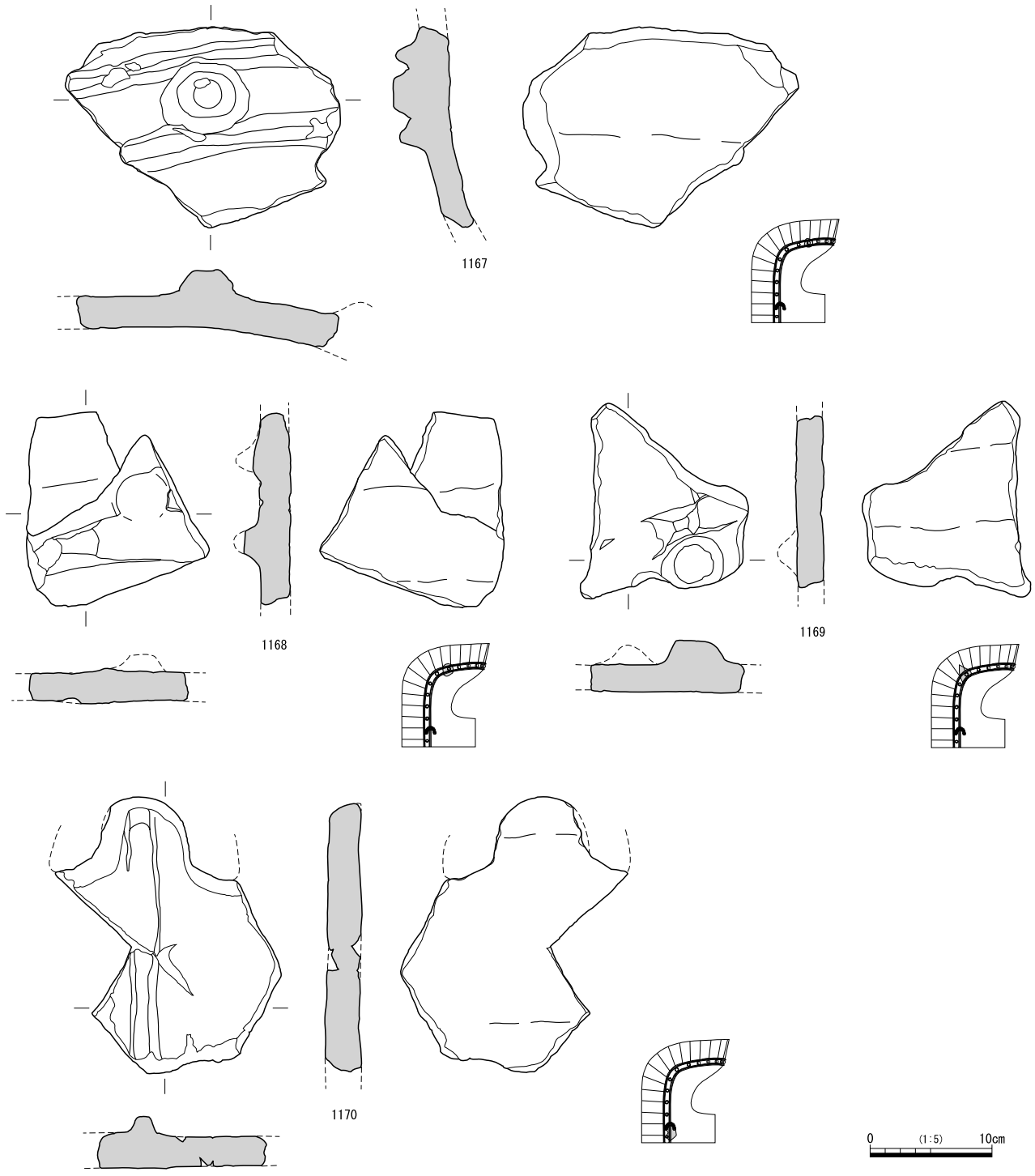


図 349　鴟尾Ｂ（５）

文帯に相当するとみてよい。透かし穴下部は、鴟尾Ａとは異なり半円形に近い形状である。内面側に向かって傾斜する形で刳り抜かれている。縦帯は透かし穴近くで変形し、低くなっている。確認調査の際に SX01 付近で採取されている。

鴟尾Ｂは大半が窯以外の遺構からの出土であり、特定の窯からの集中した出土は確認できない。

10　瓦製作時の截断片

篠場瓦窯では、製品として焼成された瓦塼類のほか、製作時に切り落とされた断片が出土している。本来は焼成されずに失われてしまうものであり、古代瓦窯における類例の出土は管見の限りない。広端部側を切り落とした平瓦の截断片が大半であるが、平瓦または熨斗瓦の側面側の截断片も確認できる。細片３点を除きすべて図化・掲載した。

なお、部位の名称については、基本的に平瓦と同様のものを使用するが、狭・広端面は存在しないため、粘土円筒の状態で上になる方を上面、下になる方を下面と呼ぶことにする。

（１）平瓦広端部の截断片

平瓦製作時にできた広端部の截断片は、合計 51 点・総重量 11.6 kg出土している。３号窯と２号窯の灰原から出土しており、１号窯からの出土は確認できない。

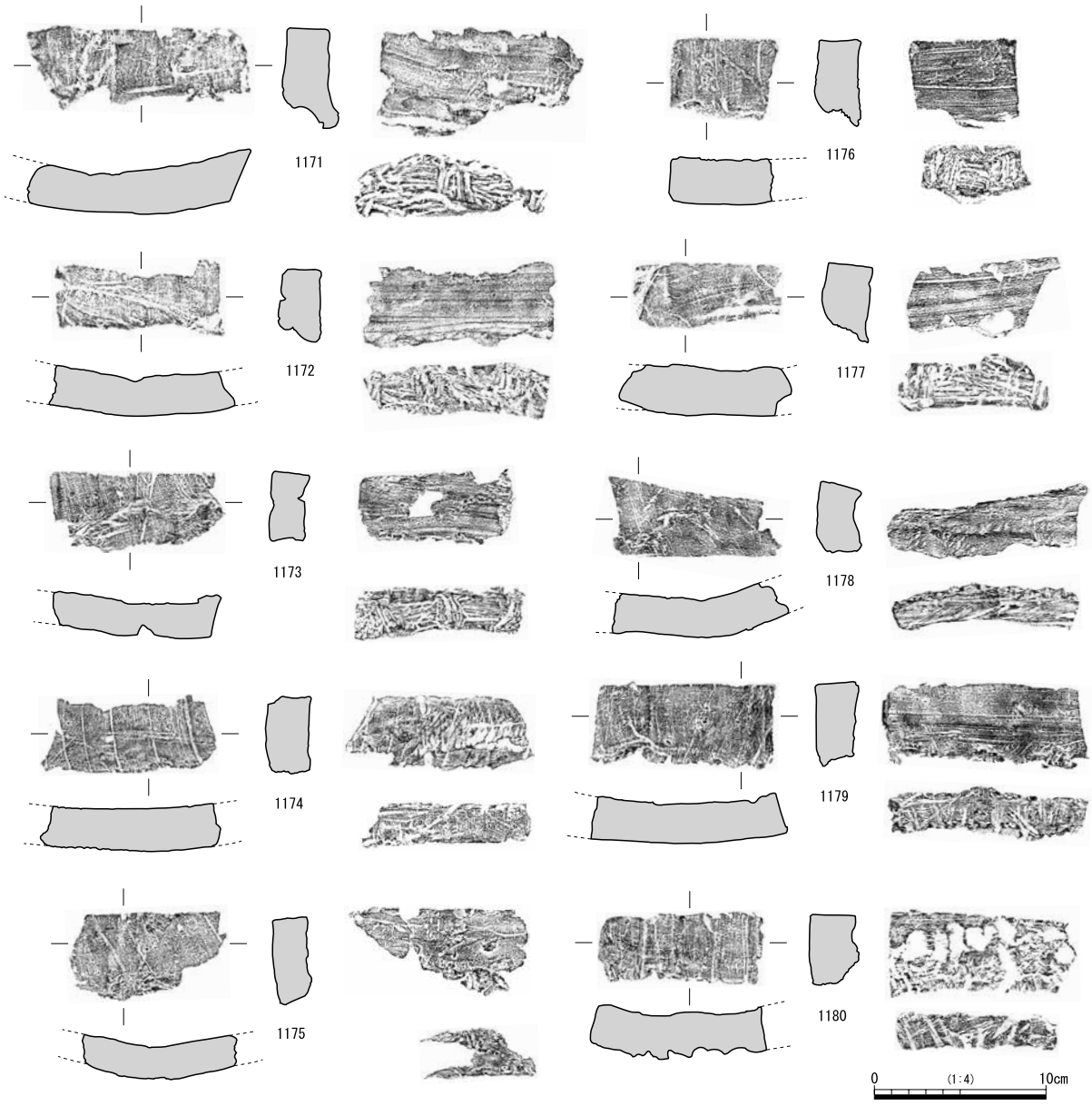


図 350　３号窯灰原出土平瓦截断片（１）

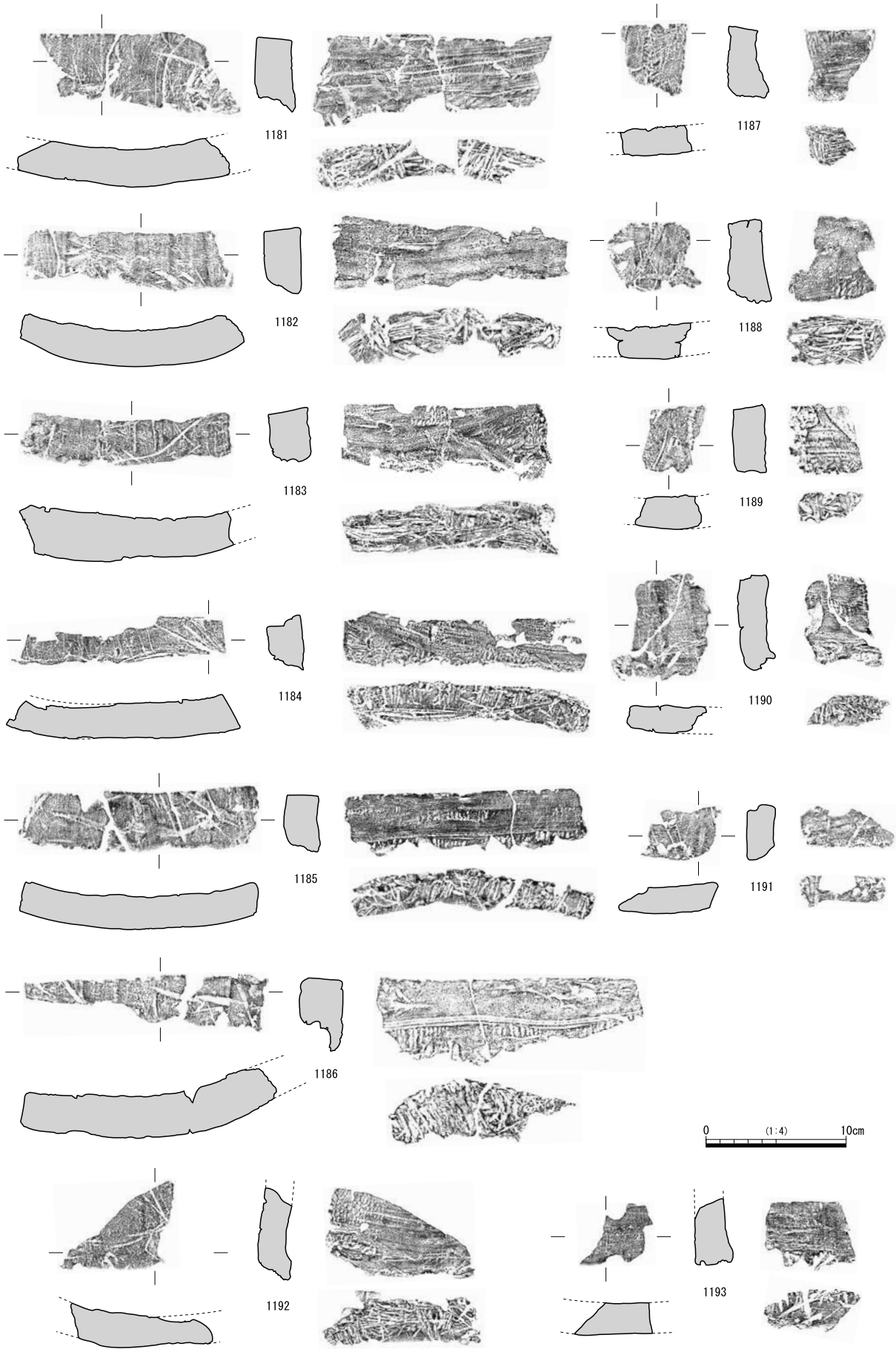


図 351　３号窯灰原出土平瓦截断片（２）

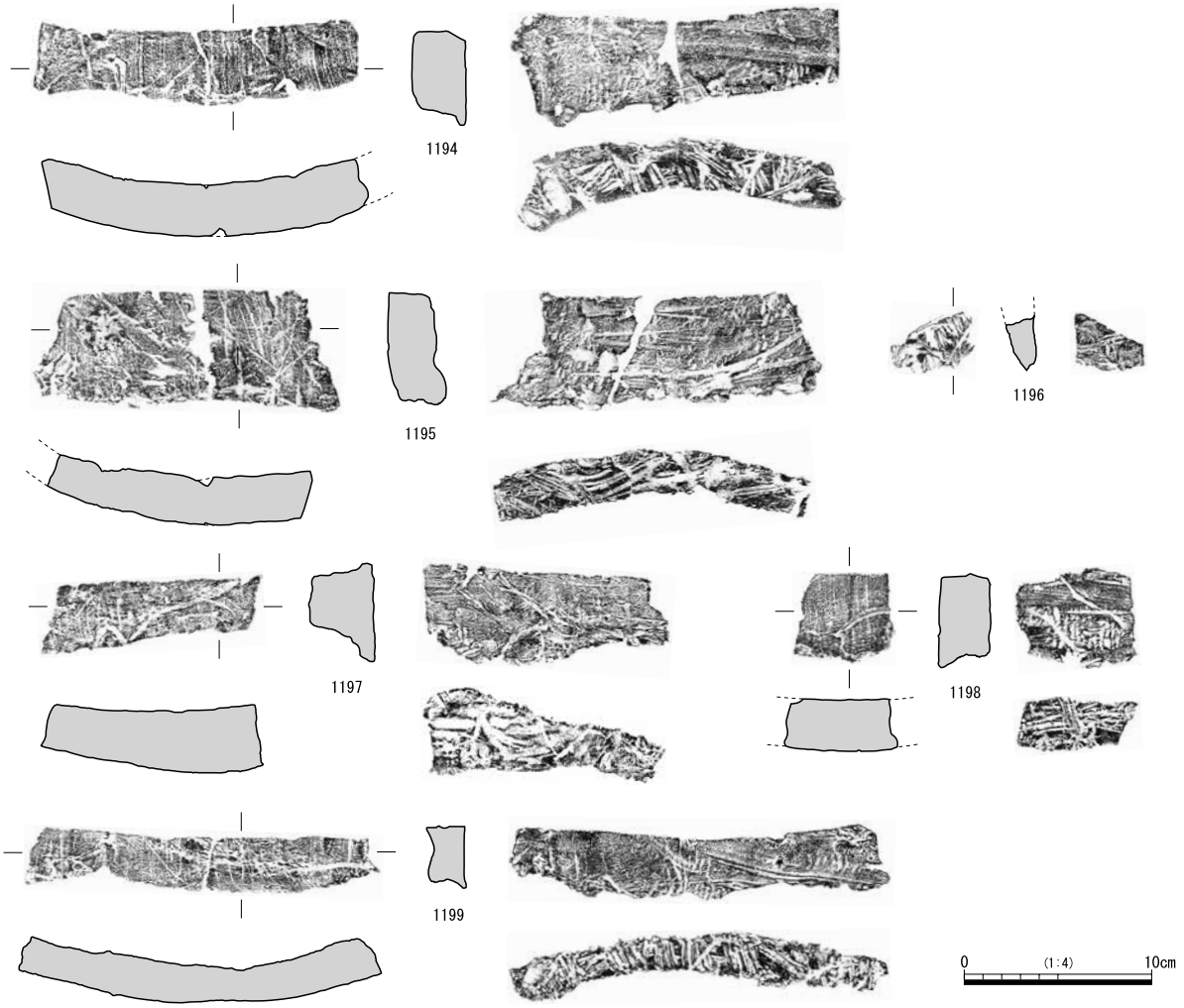


図 352　２号窯窯体内出土平瓦截断片

下面には、いわゆる藁座痕が明瞭に残っている。藁の痕跡は、瓦に沿って横方向に走るものと、直交するものがあり、藁束を数ヶ所で結束していることがわかる。凸面には横ナデ調整が施されており、ナデ残しの部分には縄叩きの痕跡が確認できる。凹面は無調整で布目が残る。側面は全面に削り調整が施されている。上面には凸面側に破面が残るものや、凹面側に切り込みのズレが確認できるものがある。これらの点から、平瓦は凸面と側面の調整後に、凹型台に乗せた状態で截断されていることがわかる。

３号窯灰原（図 350 ～ 351、図版 36・92）

1171 ～ 1193 は、３号窯灰原から出土したものである。1172 の上面には斜めに截断面の食い違いによる段差が残る。砂粒の動きなどからみて、截断する部分を左側にして平瓦を凹型台に置き、刃器を手前に引いて截断していることがわかる。1178 の上面には、截断面に平行して截断面の食い違いによる段差が残る。凹面側の截断面がわずかに下方に入っており、凹面側から刃器を入れて截断している様子がみてとれる。1174・1190 には、上面よりも４㎜ほど下方に、凹面側から切り込みが入っており、截断の目安線か截断面の入れ直しであると推測される。1174・1184 には、上面の截断面が凸面側に至っておらず、凸面側に破面が残る。藁座は４～５㎝間隔で結束しているものが多いが、1179・1184 ～ 1186・1189 は１㎝程の間隔で細かく結束している。1178 は藁束全体が捩れているだけで、結束されていない。完全には藁束全体を結束しておらず、1181 ～ 1186 には結束部の上に藁が乗っており、凹面に至っている痕跡も確認される。1186 は藁束を象った状態で下面が良好に残存している。凹面側と凸面側の

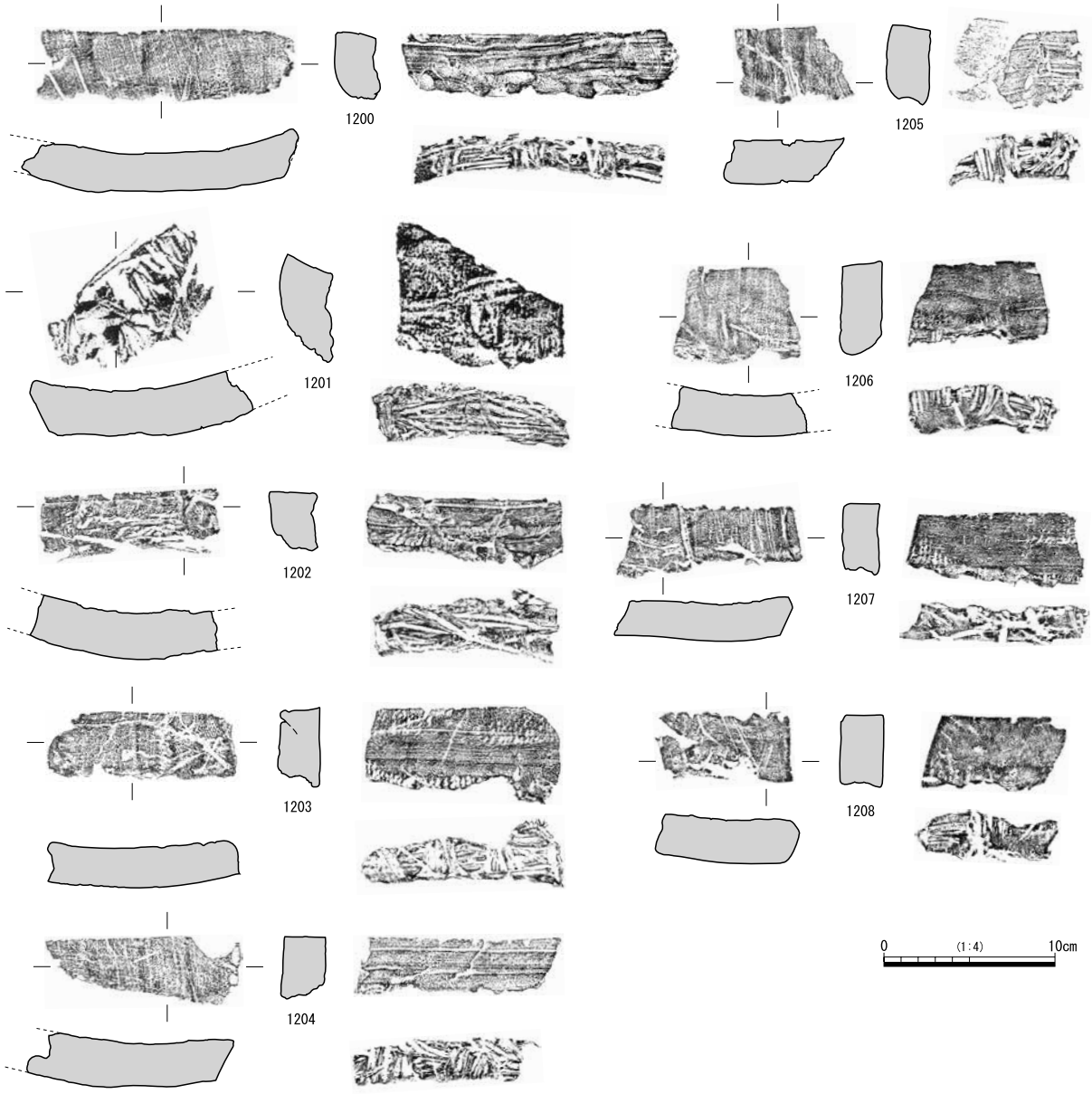


図 353　２号窯灰原出土平瓦截断片

高低差は３㎝程あり、比較的太い藁束が用いられていたことがわかる。藁座の外側に粘土が被るものが多いが、1175・1179・1180・1190・1191 は桶型と藁座の間に隙間があったのか、藁座の内側に粘土が被っている。1180 の凸面には、藁座に粘土を押し付けた際の指痕が残る。1171・1180・1181 には表面に焼土が付着している。1181 は接合する破片の色調が異なっており、1181・1182・1187 には断面が被熱し灰被りも確認できる。1192・1193 は上端が欠損しているが、同様のものと推測される。

２号窯（図 352 ～ 353、図版 36・92）

1194 ～ 1204 は２号窯から出土したものである。1194 ～ 1199 は窯体内、1200 ～ 1208 は灰原から出土している。３号窯出土のものと同様に、上面には截断面、下面には藁座痕が確認できる。凸面は横ナデ調整でナデ残しの部分には叩き目が残り、凹面には布目が残る。大半は藁束が結束されているが、1195・1197・1202 は全体が撚れているだけで結束はされていない。1195 と 1199 は色調の異なる破片が接合している。1194・1200・1201 の上面には凹面に沿って截断面のズレがみられ、1197・1206・1202

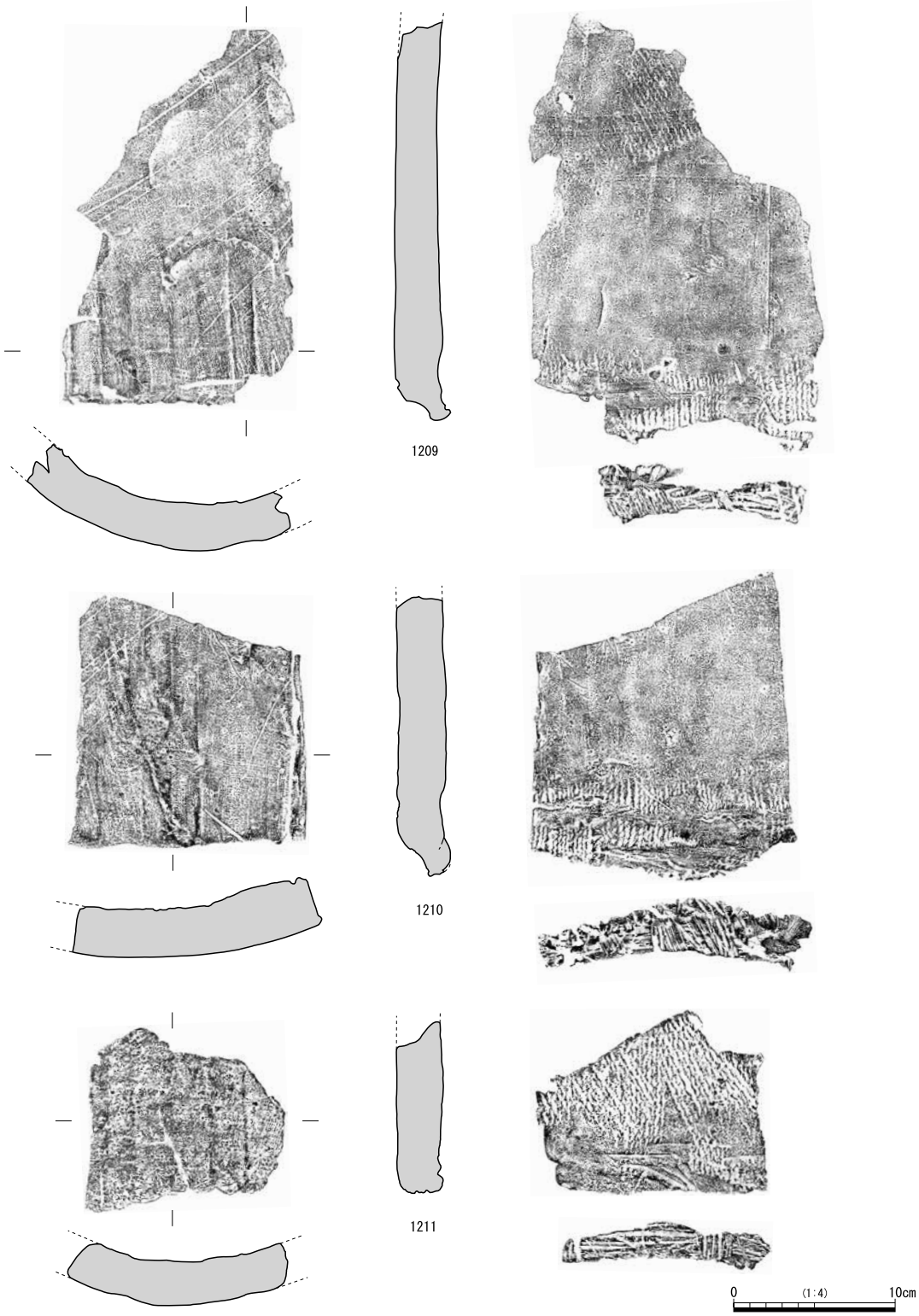


図 354　藁座痕の残る平瓦

の上面には凸面側に破面が残る。３号窯のものと同様に、広端側を左側にして凹型台に置き、刃器を手前に引く形で截断している様子がみてとれる。1195 の側面は上半と下半で位置が大きく異なり、段の斜面は破面となっている。上半は側面が立つように截断されており、平瓦の側面にあたると判断できる。段差は凸面側で３㎝程もあり、分割截面を削るというよりは、側面を大きく切り落として整形されていることがわかる。

（２）藁座痕の残る平瓦・熨斗瓦

点数はわずかであるが、広端面に藁座痕が明瞭に残る平瓦も出土している。截断片ではないが、先に示した断片が平瓦製作に伴うものであることを示す資料として、1209 ～ 1211 の３点を図示する。また、１点のみであるが、熨斗瓦にも広端側に藁座痕が残るものが確認でき、これもあわせて示しておく。

いずれも、広端面（下面）には藁座痕がそのまま残されており、藁束とそれを結束した痕跡が確認できる。1209 は３号窯灰原から出土している。凸面は横ナデ調整が施されているが、切り落とすことが念頭にあったのか広端側は軽いナデに留まっている。凹面は無調整で布目が残る。1210 は表土除去中に採取されたものである。凸面は横ナデが主体であるが、部分的に縦ナデが加えられている。凹凸面の調整は１と同様であり、側面は全体を削っている。凹面・広端面、断面には灰被りが認められる。1211 は１号窯を破壊する攪乱から出土している。凸面は無調整で、斜め方向の縄叩き痕が残されている。凹面は表面の大半が風化して失われているが、部分的に布目が残存している。軟質の焼きであり、表面全体に焼土が付着している。1217 は熨斗瓦であり、広端部が截断されずに残っている。表面の風化が著しいが、藁の一部が凹面側に巻き込まれている様子が確認できる。３号窯灰原から出土している。

（３）側面の截断片

瓦の製作過程で発生した截断片としては、側面側の截断片も出土している。側面の截断片として明確に認識できるものは 1212 ～ 1216 の５点だけであり、そのすべてを図示する。

1212 ～ 1215 は、凸面が全面横ナデ調整されており、凹面は無調整で布目が残る。1214 は風化が著しく表面が観察できない部分が多いが、凸面は無調整で縦縄叩きの痕跡が残る。いずれも截断面は、凸面側が広がる形に斜めに截断されている。平瓦からみると、側面が立つように截断されていることになる。反対側の側面は、凹凸面に対して垂直に近い角度である。側面全体に板ナデ調整が施されており、細かな木目の筋が確認できる。下面が残る 1215 には藁座痕が残っている。1212 は２号窯灰原、1213 は２号窯灰原、1214 は１号窯窯体内、1215 は３号窯灰原、1216 は SD01 から出土しており、1216 の表面には焼土が付着している。

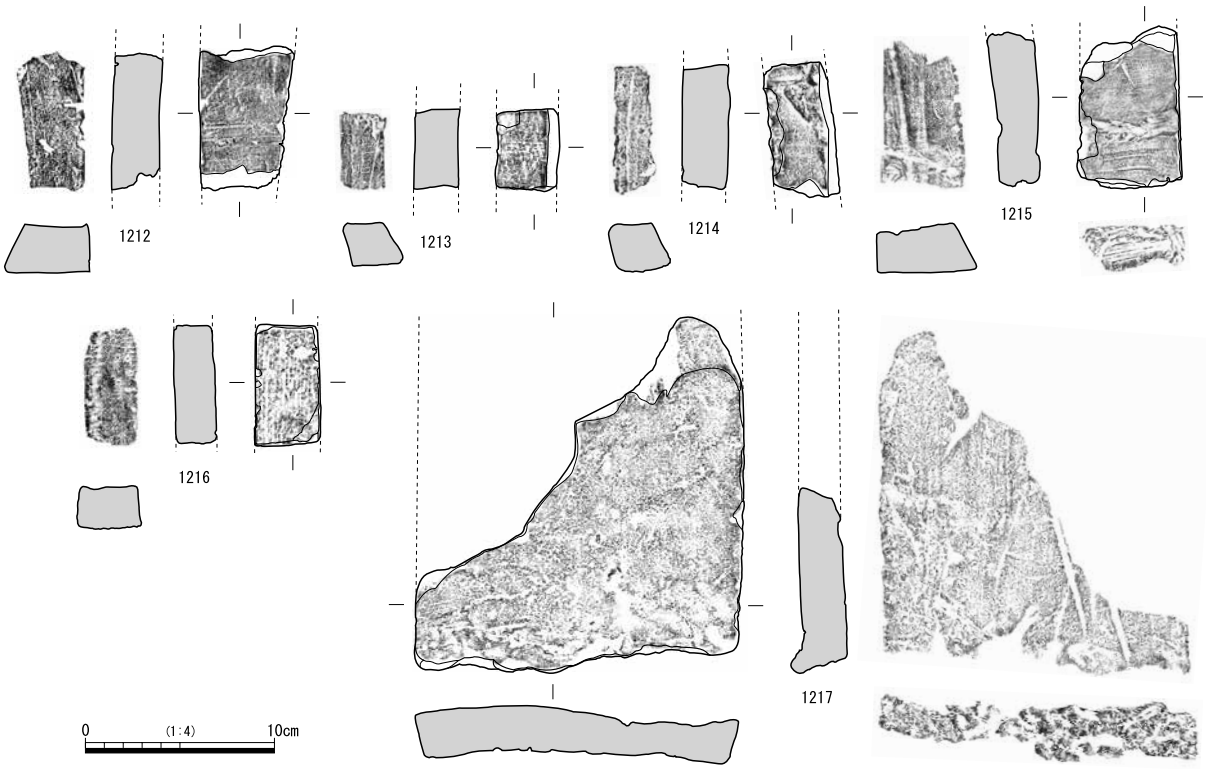


図 355　藁座痕の残る熨斗瓦・側面の截断片

11　文字瓦

1 号窯から出土した瓦の中に、文字が記された平瓦がある。文字はいずれも焼成前に、凸面に指書きされている。1 号窯から出土した平瓦には、凸面に指痕が付着したものが多いため、細片の場合は文字瓦との判別が困難なものもあるが、明らかに文字瓦として認識できるものと、その可能性のあるものを 14 点図示する。

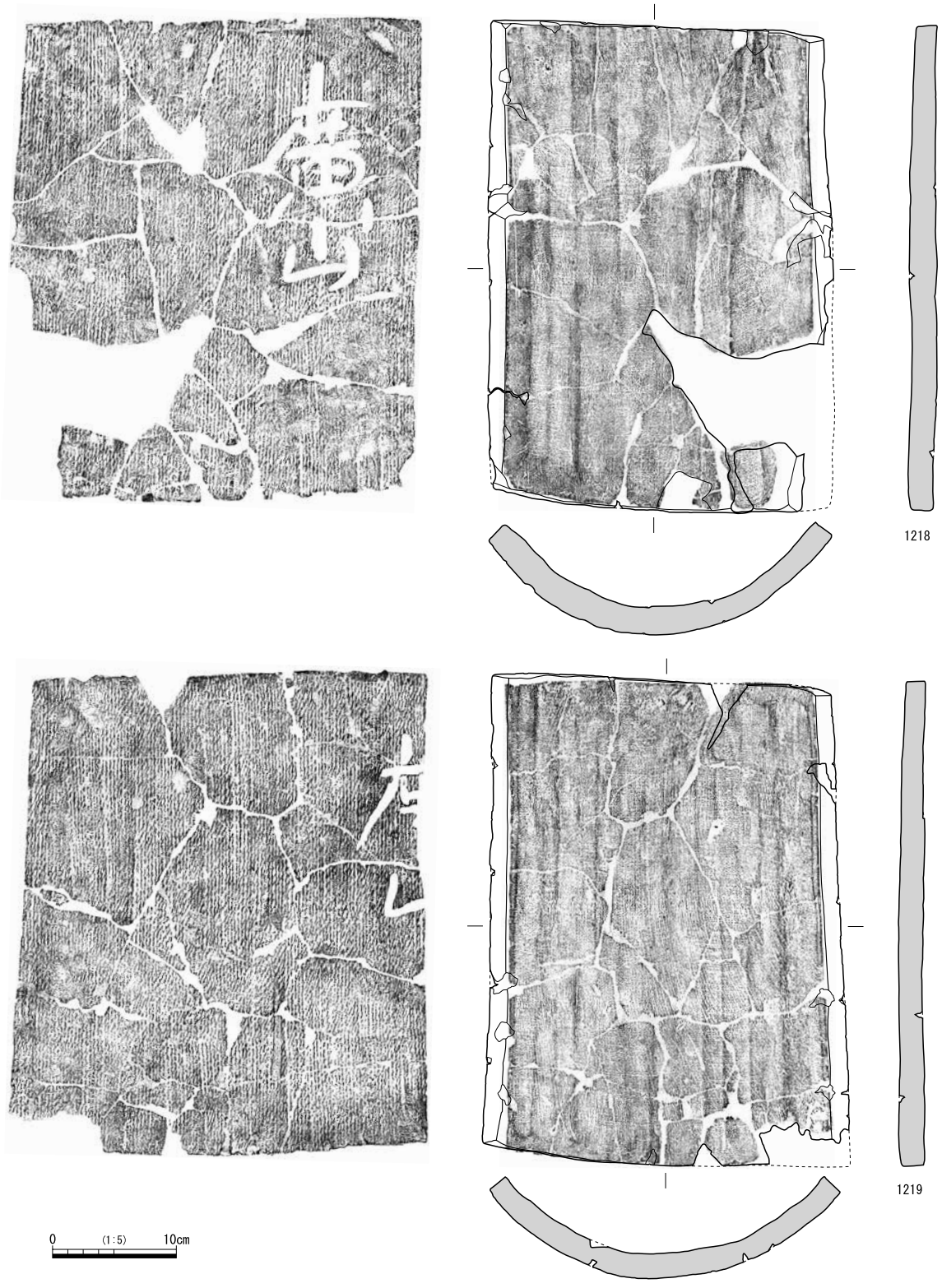


図 356　文字瓦（1）

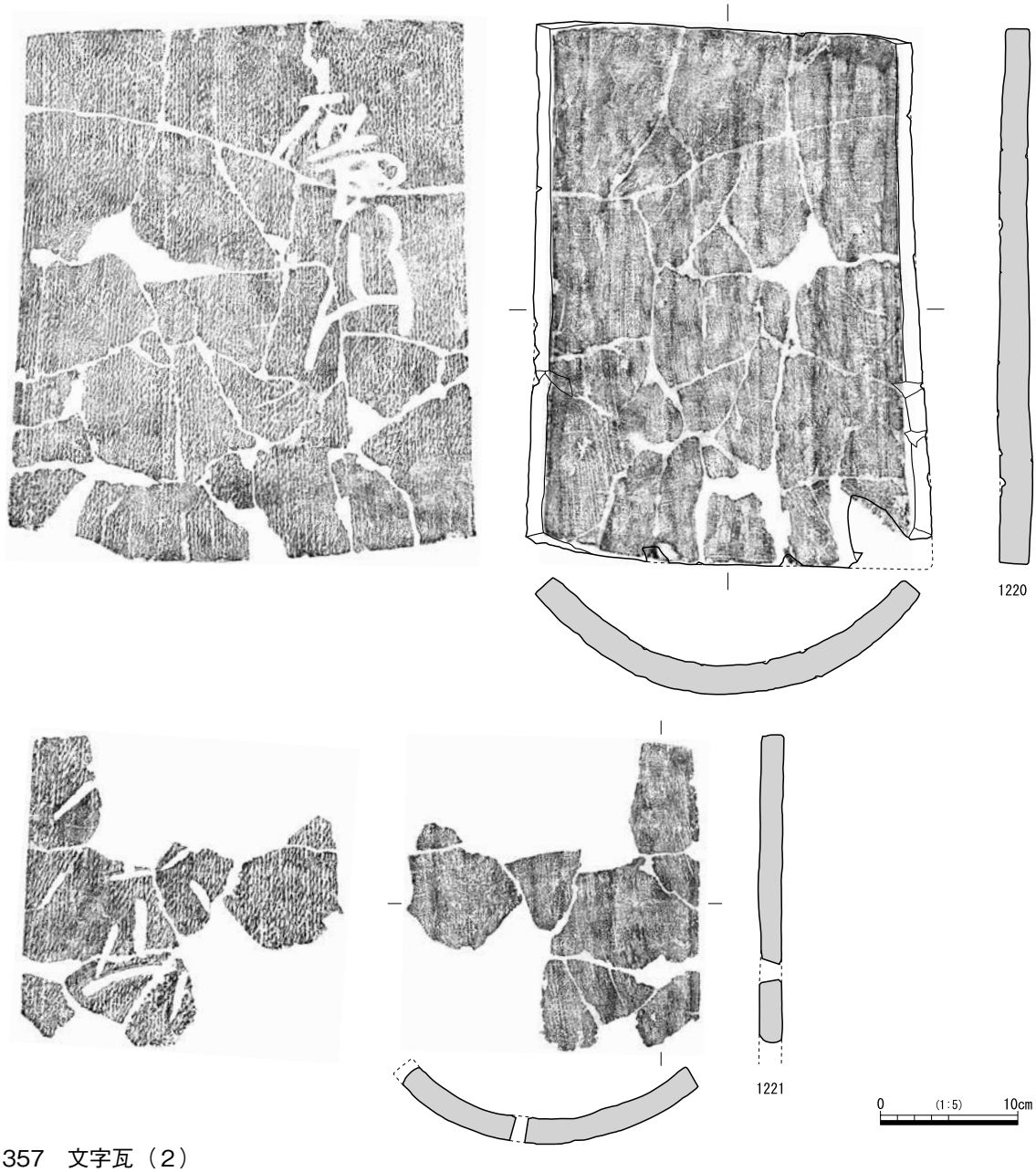


図 357　文字瓦（２）

廣山（図 356 ～ 358、図版 93・94）

1218 ～ 1221 は「廣山」と書かれたものである。いずれも狭端面を上にした状態で、凸面の狭端付近に書かれている。文字の部分は叩き目が消えており、粘土円筒を叩きしめた後に文字を書いていることは明らかである。1219 は側縁で文字が半裁されている。分割する以前の粘土円筒の状態で、文字が書かれていることがわかる。また、このことは、分割時には文字を判読する必要性がなくなっていたことを示している。４点とも瓦は平瓦Ｖ類Ｃである。字体としては、1218 は一画一画を独立させた、楷書体に近い字体である。1220 と 1221 は字画が連続しており行書体に近い。筆跡の特徴としては、いずれも「广」の一画目は、長く縦棒状で左に寄った位置にある。また、「广」は「廣」の文字全体で、やや左上に寄っている。粘土の被りの状況からみると、いずれも「山」については「Ｌ」を書いた後に、右側に縦棒を２本加えるという独特の筆順で書かれている。字体が異なっているため、一見すると 1218 と 1220・1221 とでは筆跡が異なるようにもみえるが、上記のような点で筆跡の特徴が一致していることから、文字を記した人物は同一人物である可能性が高いと推測される。

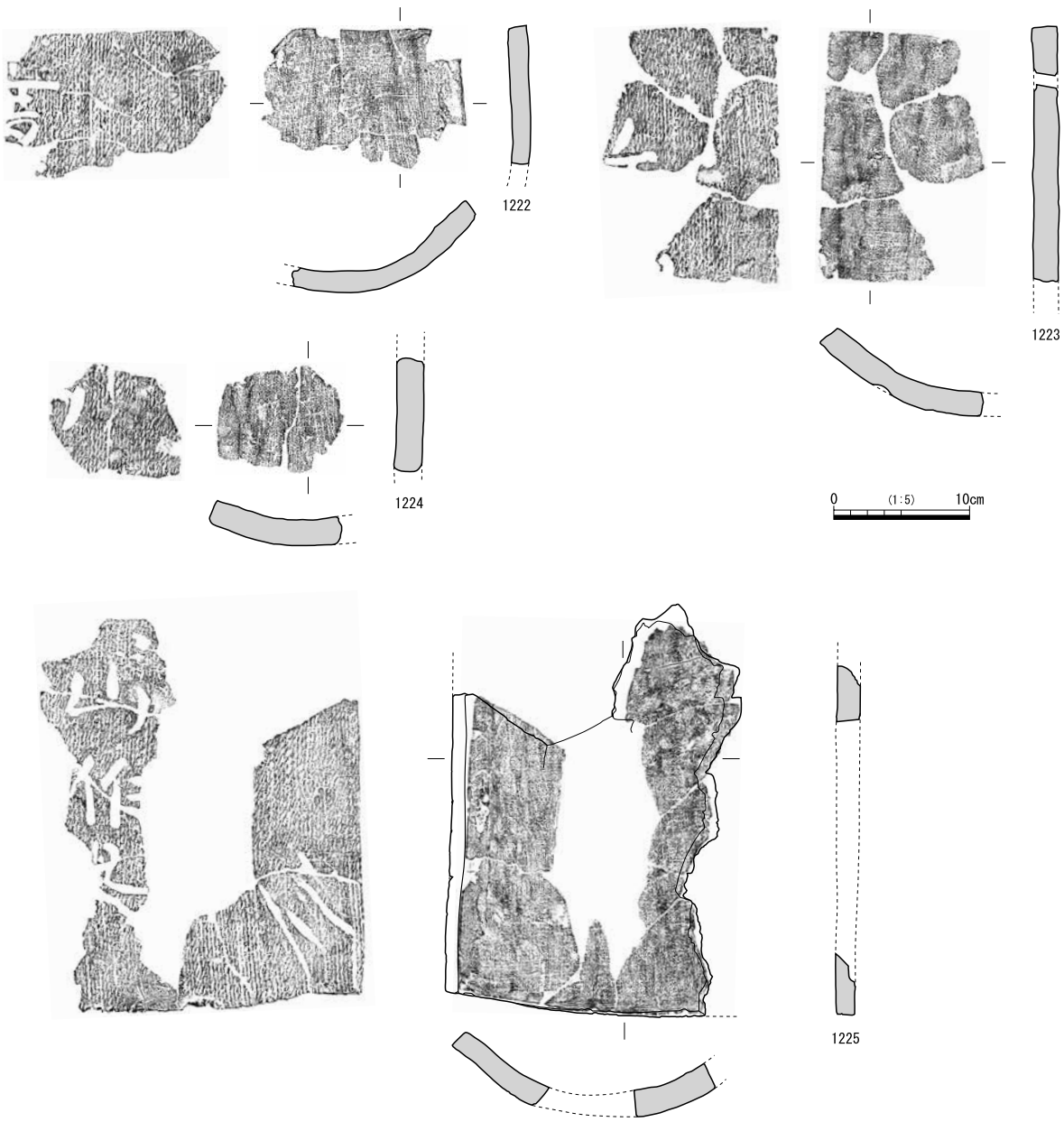


図 358　文字瓦（3）

廣・山（図 358、図版 94）

1222 と 1223 には「廣」の文字が確認でき、狭端付近に書かれていることがわかる。1224 には「山」の文字が確認できる。破片のため 1 文字しか残存しないが、「廣山」の文字の一部分であると可能性が高い。いずれも平瓦Ⅴ類であり、1222 は薄手のつくりであることからⅤ類Ａであると推測される。

山作瓦（図 358、図版 94）

1225 は「山作瓦」と書かれているものである。これらの文字とは別に、側端付近には斜め方向に縦棒が 3 本書かれている。「山」の上は欠損しているが、出土しているほかの文字瓦からみて、上に「廣」の文字が存在する可能性が高い。このことから、「廣山」とだけ書かれているものについても、その本来の意味するところは「廣山作瓦」であったものと推測される。瓦は平瓦Ⅴ類である。

図 359　文字瓦（４）

判読不能（図 359、図版 94）

1226 ～ 1231 は文字として判読できないものである。1226 は一部截断される形で、文字とみられる指書きが確認できる。欠損部が多いため判然としないが、上の文字は「廣」のようにみえる。上の文字が「廣」であるとすれば、下の文字は「山」の文字が大きく崩れたものの可能性が高い。1227 ～ 1230 は断片であるため、文字の特定はできないが、指の動きが明瞭であるため文字の一部であると推測される。1231 には、文字としては判読できないが多くの指書きが残る。側端付近に残存しているため、分割されている可能性がある。四角形に囲んだ線や、波形に折り返した線が確認できる。文字とは考えにくい線が多いことから、文字ではなく戯画のようなものが描かれていた可能性もある。いずれも瓦平瓦Ｖ類の凸面である。

12　土器

篠場瓦窯で出土した土器の大半は須恵器である。須恵器は、大きく焼き歪んだものや融着したものが確認されることから、瓦窯で焼成されたものとみてよい。須恵器は各窯の窯体内や灰原から出土しており、窯上方のSX01・SD01・SD02でも出土している。須恵器以外では、窯の埋土や灰原から土師器が少量出土しているほか、３号窯灰原の下層では弥生土器、大溝SD02や表土などでは中近世の土器も出土している。瓦窯に直接関連する須恵器は、端部の残存するものをできる限り網羅的に、他の土器に関しては残存状態の良好なものを中心に図化･掲載している。なおSX02に関しては、図示していないが、甕の胴部の破片が３点出土している。

（１）３号窯出土

３号窯では、破片も含めて合計53点・総重量2.1㎏出土している。窯体内から出土したのは破片１点のみであり、ほかはすべて灰原からの出土である。年代としては、７世紀末葉の飛鳥Ⅳ期併行期に位置付けられる。

３号窯窯体内・灰原（図360、図版41・95）

1232は窯体内から出土した坏身である。口縁部の小破片で、床面付近から出土している。形態からみて無高台の坏身とみられる。1233～1259は坏身である。いずれも無高台のもので、破片のものを含めても高台坏は確認できない。1233～1239は、平底で口縁が直線的に立ち上がるものである。口径は12.5～13㎝で、深さは3.5～4.0㎝である。1238と1239は底部外面の中央に削り残しがあり、へ

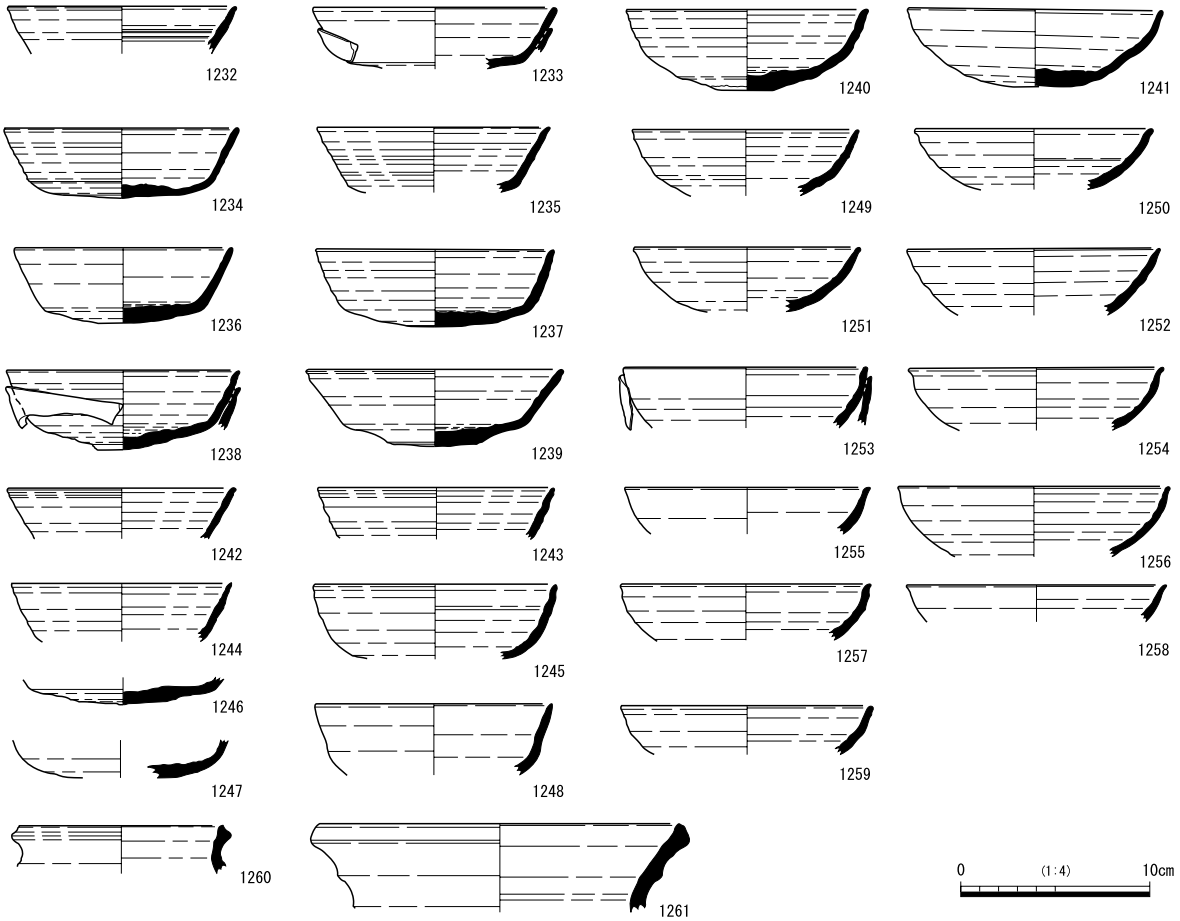


図360　３号窯窯体内・灰原出土須恵器

そ状に飛び出している。1240 と 1241 は丸底で、底部が屈曲せず曲線的に立ち上がるものである。口径は 12.5 ～ 13 ㎝で、深さは４㎝前後とやや深身である。1240 には底部外面の中央に削り残しがあり、1238・1239 と同様にへそ状に飛び出している。1242 ～ 1259 は口縁部付近の破片である。焼き歪んでいる可能性もあり、口径や傾きにはやや厳密性を欠くが、1242 ～ 1248 は平底のもの、1249 ～ 1259 は丸底のものであると推測される。1233・1238・1253 の外面には、坏身の破片が融着しており、重ねた状態で窯詰めされていたことがわかる。1260 は短頸壺の口縁部、1261 は甕の口縁部の破片である。壺・甕類については、これ以外にも胴部の破片が少量出土している。

（２）２号窯出土

２号窯では、窯体内と灰原から出土している。ほとんどが破片ではあるが、合計 70 点・総重量 4.4 kg出土している。２号窯では、３号窯と坏の構成が異なり、摘み蓋と高台坏が確認される。年代としては、７世紀末～８世紀初頭の飛鳥Ⅳ～飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）併行期に位置付けられる。

２号窯窯体内（図 361、図版 42）

1262 ～ 1267 は坏蓋である。1262 は頂部の破片で、摘みは剥落して残存していない。1263 ～ 1267 は口縁部が残存する破片であり、いずれも頂部を欠いているが、摘み蓋であるとみてよい。口縁部は下方に折り返している。口径は、破片からの復元径のためやや厳密性を欠くが、15 ～ 16 ㎝前後であると推定される。1268 ～ 1270 は高台坏である。底部で明瞭に屈曲し、やや外反気味に立ち上がる。法量は、口径が 14 ㎝前後、坏部の深さが３㎝前後と推定される。1271 ～ 1275 は無台坏である。いずれも口縁部の小破片であるが、湾曲して立ち上がる丸底のものであると推測される。口縁の復元径は、12 ～ 13 ㎝前後である。1276 は長頸壺の底部である。高台は外反する形状で、底部の端に貼り付けられている。1277 は口縁部が平らに整形されている。小破片のため、焼け歪みにより本来の径とは異なっている可能性がある。形状からすると碗であろうか。1278 は甕の頸部から口縁部にかけての破片である。図化していないが、甕についてはこのほかにも胴部の破片が出土している。1279･1280 は陶臼の底部である。1280 の底部には、斜め方向に刻み目が転写されている。

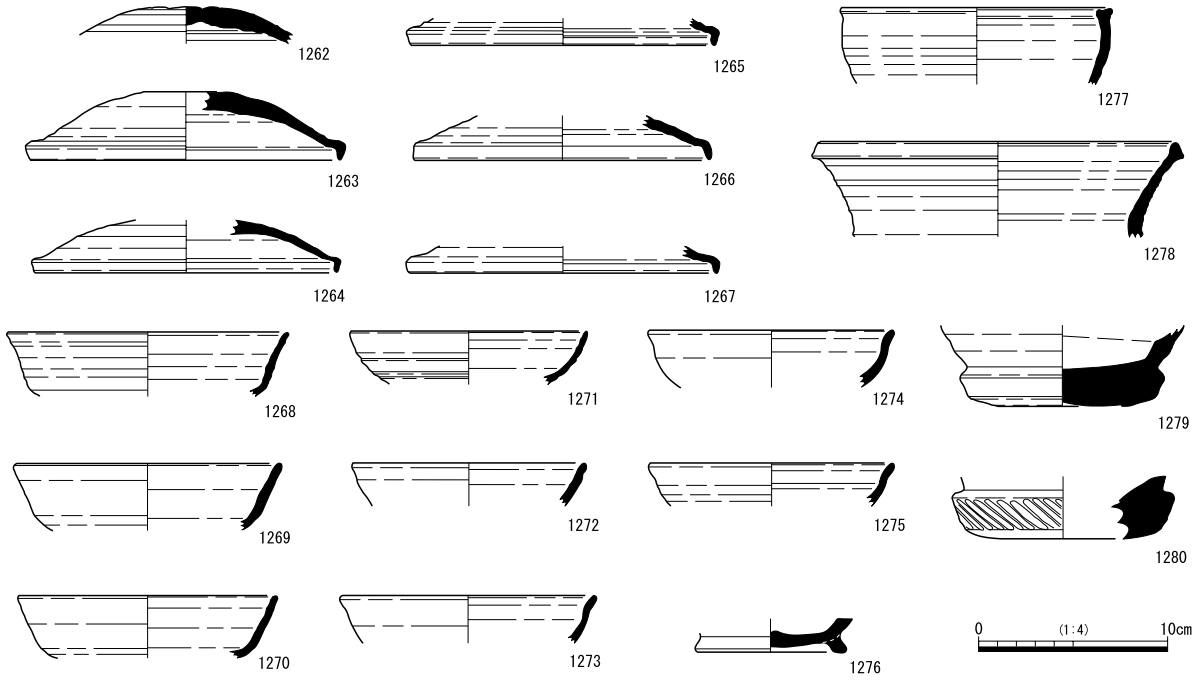


図 361　２号窯窯体内出土須恵器

２号窯灰原（図 362、図版 42・95・96）

1281 ～ 1286 は坏蓋である。1281 は口縁部から頂部まで残存する。法量は口径 16.5 ㎝・高さ 3.5 ㎝で、天井部端から頂部に向かって徐々に高くなる。頂部には回転ヘラ削りが施され、口縁部はやや外反気味に下方へ折り返している。1282 ～ 1284・1286 は口縁部、1285 は天井部の破片である。なお、1286 については、SX02 から出土した破片と接合しているため、上方から流入した遺物の可能性がある。1287 ～ 1290 は高台坏である。1287 は一部破片を欠いているが、ほぼ完形に接合されている。坏部がやや歪んでいるが、口径は平均 14.2 ㎝、坏部の深さは３㎝、器高は４㎝である。高台は、屈曲部から少し内側に入った位置に貼り付けられている。1288 ～ 1290 は口縁部の破片であり、いずれも底部を欠いている。1291 は口縁部の小破片であるが、やや内彎気味に立ち上がっており、おそらくは無高台の坏身であろう。1292 ～ 1294 は瓶類である。いずれも破片のため全形は不明であるが、1292 と 1293 は平瓶の破片であると推測される。1295・1296 は広口壺である。破片が接合しないため別個体であるが、同じ形態のものとみてよい。1297 は高台の破片である。高台が大型で、径も大きいことから壷類の高台であると推測される。1298 は把手の破片である。甑の把手であろうか。1299 は甕である。

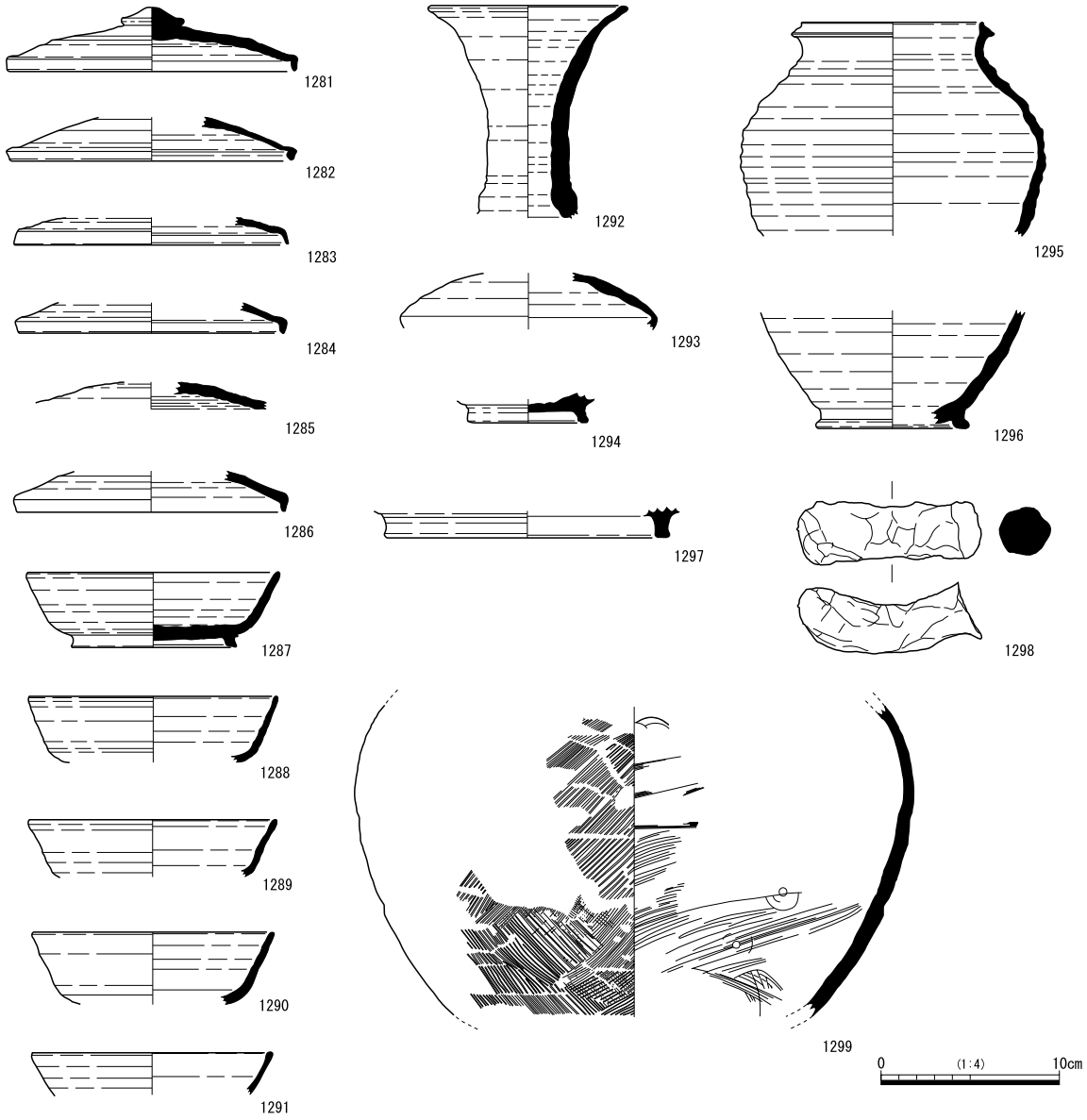


図 362　２号窯灰原出土須恵器

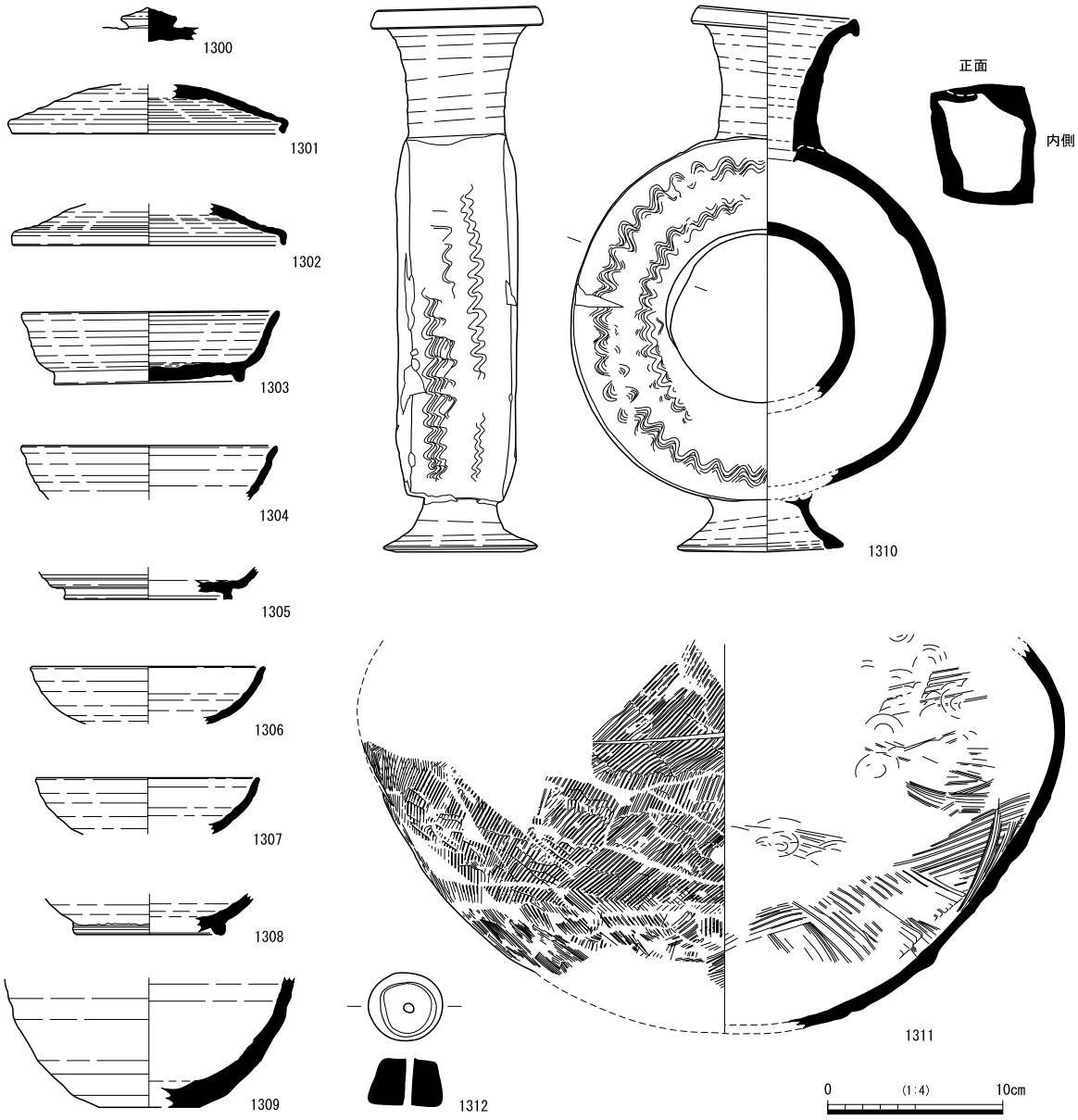


図 363　１号窯灰原出土須恵器

（３）１号窯出土

１号窯では、点数は少ないが灰原から出土している。また、第３章で記した通り、３号窯の埋土の最上層には１号窯の灰原が堆積しており、これを含めると１号窯では須恵器が合計 52 点・総重量 4.8 kg 確認できる。須恵器の形態からは、２号窯出土のものとの間に明確な差異は見出せない。遺構や出土瓦からみて１号窯は２号窯よりも明らかに後出することを考慮すると、年代は８世紀初頭の飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）併行期に位置付けられる。

１号窯灰原（図 363、図版 43・44・96）

1300 ～ 1302 は坏蓋である。1300 は頂部の破片で摘みが残存している。1301 は頂部を欠くが、口縁部から頂部付近まで比較的良好に残る。口径は 15.5 ㎝で、頂部までの高さは４㎝前後である。1303 ～ 1305 は高台坏である。1303 は部分的に口縁部を欠くが、ほぼ完形に復元できている。全体がやや歪んでいるが、口径は平均 14.3 ㎝、坏部の深さは３㎝、器高は４㎝である。屈曲部から少し内側に入った位置に、高台が貼り付けられている。1304 は口縁部、1305 は底部の破片である。1306・1307 は無台坏

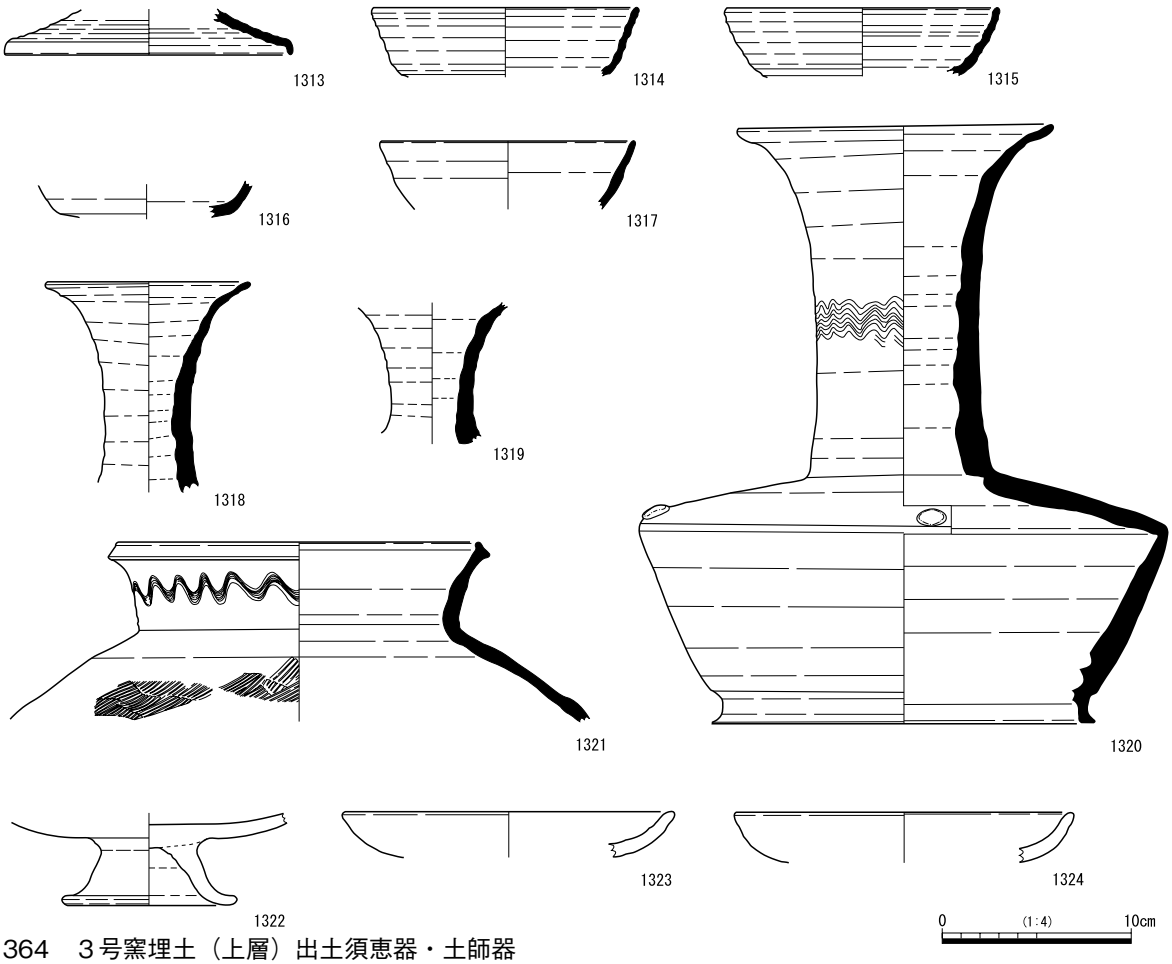


図 364　３号窯埋土（上層）出土須恵器・土師器

である。口縁部しか残存しないが、丸底のものであると推測される。1308・1309 は壺の底部の破片である。1308 は高台が設けられているが、1309 は無高台である。1310 は環状瓶である。部分的に破片を欠くが、ほぼ完形の状態に復元できている。静岡県内における環状瓶の出土の初例である。体部はドーナツ状の形態で、断面は四角形である。環状の体部は、内側と外側から粘土を立ち上げ、内側からの粘土を外側からの粘土の上に乗せて形成している。体部の正面・裏面・側面には、櫛描き波状文を２列施している。底部には、楕円形のやや高い高台が貼り付けられている。1311 は甕の肩部から底部にかけての破片である。外面には叩き目が残り、内面は部分的にあて具痕が残るが、全面をナデ調整している。1312 は陶製の紡錘車である。断面台形で中心が穿孔されている。

３号窯埋土（図 364、図版 43・96）

1313 は坏蓋である。口縁部の破片で頂部を欠いているが、摘み蓋であるとみてよい。1314・1315 は高台坏である。口縁部の破片で、底部は欠損している。1316・1317 は無台坏である。1316 は平底のもので底部で屈曲して立ち上がる。1317 は口縁部の破片であるが、丸底のものと推測される。1318・1319 は壷類の頸部である。口縁はハの字に大きく開いている。1320 は台付きの長頸壺である。器高 31.6 ㎝・口径 16.5 ㎝・肩部径 28 ㎝の大型品である。底部を欠いているが、ほぼ完形に復元できている。頸部には櫛描き歯状文が施され、肩部には対角線上に４個の珠文が貼り付けられている。1321 は甕である。口縁部から肩部にかけての破片であり、頸部の中央付近には櫛描き歯状文が施されている。胴部の外面には叩き目が残り、内面は全面ナデ調整されている。1322 ～ 1324 は土師器の皿である。いずれも全面に赤彩が施されている。窯で生産されたものではなく、おそらくは瓦工が使用したものであろう。

（４）その他の遺構出土

SX01　SX01 からは、合計 33 点・総重量 1.3 kg出土している。点数としては少ないが、端部など比較的形状がわかる破片が多い。1325 ～ 1330 は坏蓋である。1325 は口縁部を部分的に欠くが、頂部から口縁部まで残存する破片である。口径は 15.5 ㎝に復元され、口縁部から摘みの頂部までの高さは 4 ㎝である。1329 と 1330 は口縁部の破片である。1331 ～ 1334 は高台坏である。1331 は全体の 3 分の 1 程度の破片であるが、全体の形状が復元できる。口径は約 14 ㎝で、坏部の深さは 3.4 ㎝、器高は 4.2 ㎝である。1335 ～ 1337 は無台坏である。1335 と 1336 は口縁部から底部まで残存する。いずれも丸底で、口径は 12.5 ㎝程の大きさに復元される。1338 は口縁部付近の破片である。図上ではやや深身のものに復元できるが、大きく焼け歪んでおり、本来は後述する SD01 の 1343 と同様のものであると推測される。1339 は底部の破片である。非常に小型のもので、直径 6 ㎝程で上方へ立ち上がっている。小型の壺の類であろうか。1340 は瓶類の肩部から頸部にかけての破片である。肩部を水平にすると頸が少し傾い

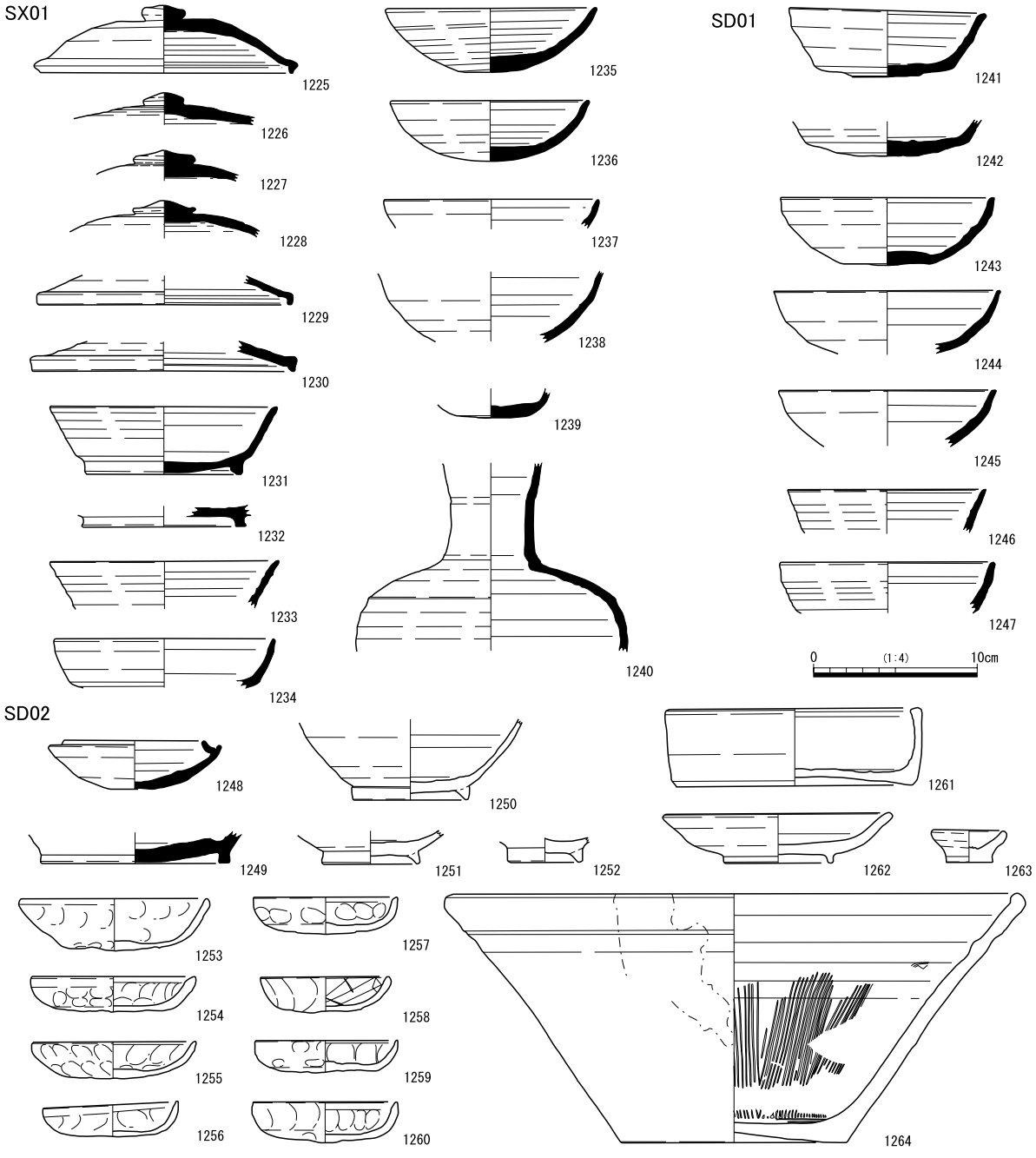


図 365　SX・SD 出土土器

ており平瓶であると推測される。瓦と同様に、１～３号窯で焼成された製品が混在して出土している。

SD01　SD01では、破片も含めて合計14点・総重量0.8kg出土している。ほとんどが図化できない小破片である。1341～1345は無台坏である。1341・1342は平底のもので、1343～1345は丸底のものである。1341は部分的に欠損しているが、ほぼ完形のものである。法量は口径12㎝・深さ３㎝である。底部には削り残しがあり、中央がへそ状に飛び出している。1343もほぼ完形のものであるが、全体が大きく焼け歪んでおり、口縁部はは長径14㎝・短径13㎝の楕円形になっている。1346と1347は口縁部の小破片であるが、高台坏の可能性がある。瓦において明確であったように、基本的にはSX01から流入した遺物であるとみてよい。

SD02　SD02では、須恵器以外の遺物も出土している。1348は須恵器の坏身である。口径が8.5㎝と小型で、口縁の立ち上がりも低い。最上層の第１層から出土しており、窯に伴うものではない。1349は須恵器の壺の底部であり、第４層から出土している。底部に堆積する第４・５層からは、土器では須恵器のみが出土する。1350は灰釉陶器、1351・1352は山茶碗であり、いずれも第４層と３層の境付近から出土している。1353は土師質土器皿である。手づくね成形で、全体的にやや厚手のつくりである。第３層から出土している。1354～1360は、第２層から出土した土師質土器皿である。いずれも比較的硬質で、薄手のものである。1361～1364は最上層の第１層から出土した近世の陶磁器類である。第１層からは、図化したもの以外にも陶磁器の破片が出土しているが、18世紀後半以降のものがほとんどである。

（５）包含層・攪乱出土

土器は、包含層や表土・攪乱の掘削時や、確認調査の際にも採取されている。近世の陶磁器類も少量出土しているが、ここでは古代の土器について報告する。なお、３号窯灰原の下層では弥生土器（1365～1368）も出土している。遺構は確認されていないが、近隣に弥生時代の遺跡が存在した可能性がある。

1369～1408は須恵器である。1369～1374は坏蓋の破片である。いずれも摘み蓋で、口縁部は下方に折り返している。

1375～1389は無台坏である。1375～1384は平底のものである。1375は３号窯で特徴的にみられた、底部に削り残しがあり、中央がへそ状に飛び出る形状をしている。1383は窯跡では確認できない、大型で深身のものである。1385～1389は、底部が丸底になるものである。

1390～1402は高台坏である。1390のように底部で明瞭に屈曲して直線的に立ち上がるものが多いが、1393のように底部で湾曲して、外反気味に立ち上がるものも確認できる。

1403～1406は甕である。口縁部の残るものを図示したが、これ以外にも胴部の破片は多く出土している。1407は壺

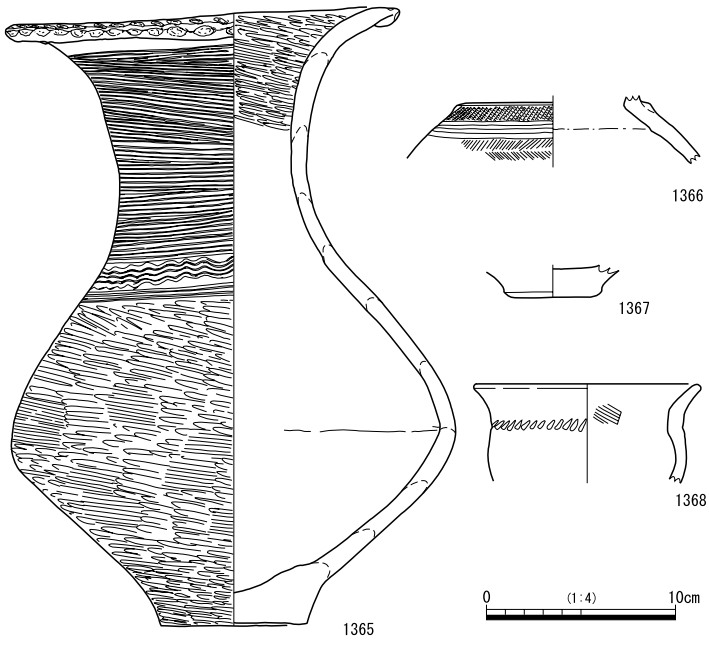


図366　弥生土器

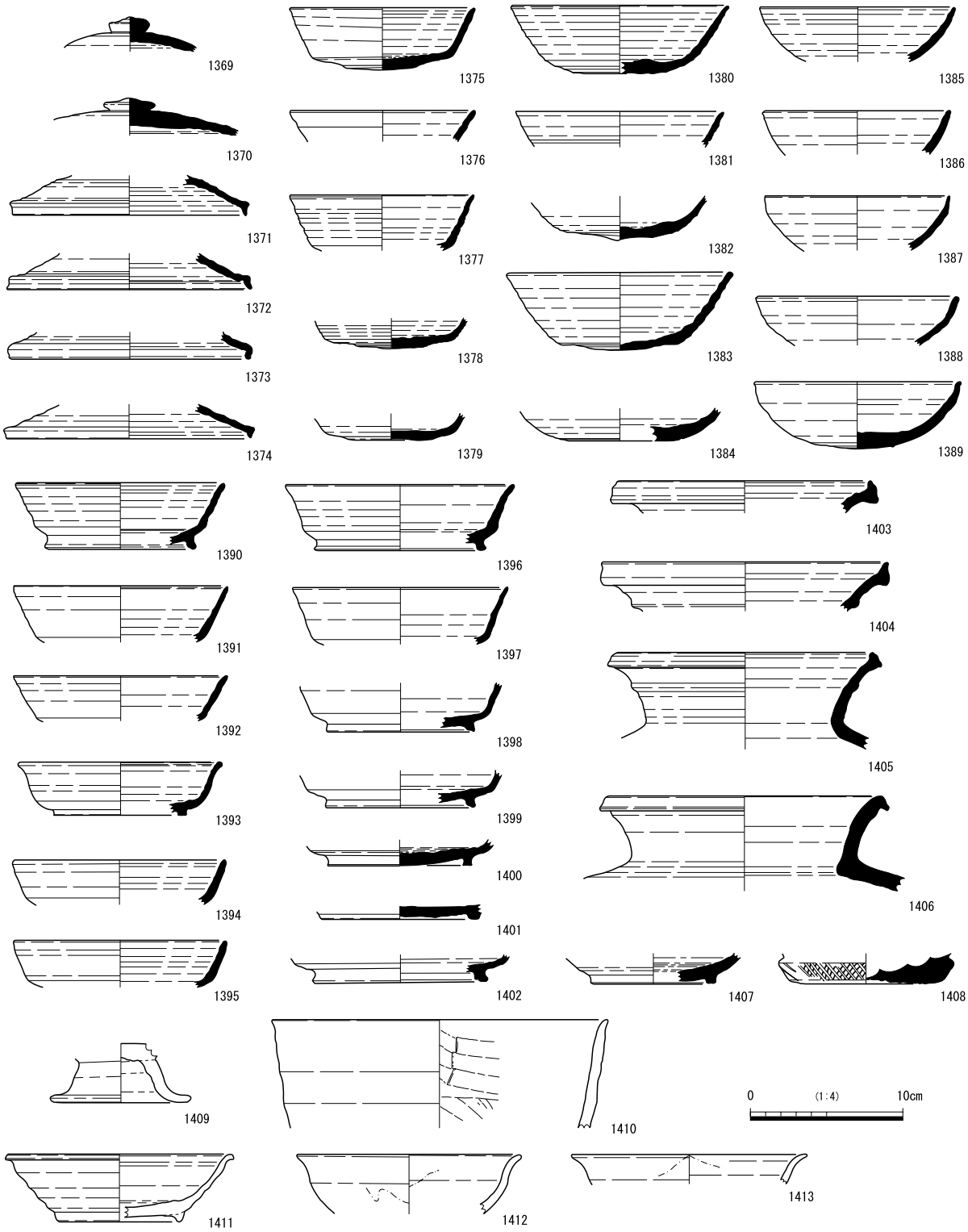


図 367　包含層・攪乱出土土器

の底部、1408 は陶臼の底部である。遺構に伴う遺物ではないため、持ち込まれたものが含まれている可能性はあるが、窯跡から出土したものと大きな差はなく、基本的には瓦窯で生産されたものと考えてよい。1409 と 1410 は土師器である。1409 は脚付きの皿、1410 は甑の破片である。いずれも表面には赤彩が施されている。1411 ～ 1413 は灰釉陶器である。遺跡全体でも灰釉陶器はごくわずかしか出土していない。

13　陶馬

篠場瓦窯では、瓦塼類や須恵器のほかに陶馬も出土している。出土が確認できたのは２号窯のみである。陶馬の可能性が考えられるものも含め、出土した 10 点すべてを図化・掲載する。

1414 は頭部から胴部にかけての破片で、灰原から出土している。左側面には面懸と手綱の表現が残る。胴部前方には背から腹にかけて鞍を固定するための粘土紐が巻かれている。1415 は胴部後方の破片であり、灰原から出土している。胴部とともに後足と尻尾が残る。背から腹にかけては鞍固定用の突帯がある。その後方にも灰被りのない部分が２ヶ所あり、尻懸等が表現されていたものと推測される。

1416・1417 は鞍で、1416 は窯体内、1417 は灰原から出土している。前輪と後輪が表現されているが、前輪と後輪に高さや角の違いはほとんどない。1418 ～ 1420 は足のみの破片であり、1418・1419 は窯体内、1420 は灰原から出土している。足の開きや剥離面の傾斜などから、1418・1419 は右前足または左後足、1420 は左前足または右後足であると推測される。

1421 は窯体内から出土した首から胸部にかけての破片である。首が細く断面円形で、竹管を施文して手綱と胸懸を表現するなど、意匠も 1414・1415 とは大きく異なる。1422 は扁平で表面に凹凸が付けられている。灰原からの出土であり、陶馬の部品と推測されるが、部位については特定できない。

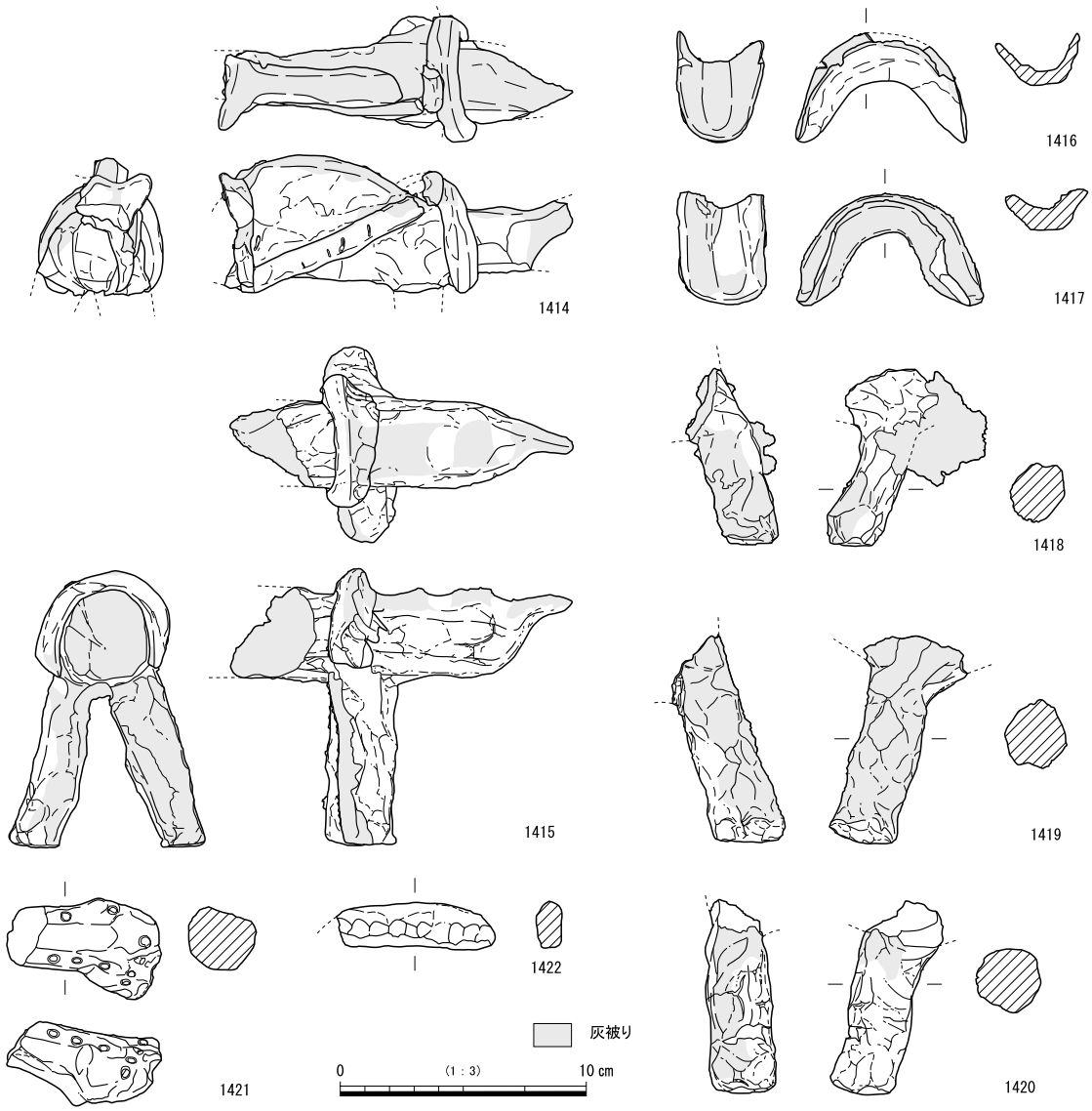


図 368　陶馬

表２　遺物一覧表（軒丸瓦１）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	分類	技法	瓦当中央厚さ（cm）	瓦当下端厚さ（cm）	重量（g）	残存部	色調	瓦笵位置	備考
1	軒丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅰ		-	2.6	125	周縁部	灰白 2.5Y8/2	－	
2	軒丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅰ		-	-	62	瓦当上部	灰白 2.5Y8/2	－	
3	軒丸瓦	3	窯体内	埋土	ⅡA		3.4	2.9	3540	完形	浅黄橙 10YR8/3	基準位置	
4	軒丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅡA		3.5	2.7	3150	ほぼ完形	淡黄 2.5Y8/3	基準位置	赤彩（付着物分析№２）
5	軒丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅡA		3.5	2.9	3460	ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/4	基準位置	赤彩（付着物分析№３）
6	軒丸瓦	3	窯体内	埋土	ⅡA		3.5	2.5	3800	ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/4	約 180° 回転	
7	軒丸瓦	3	窯体内	埋土	ⅡA		3.2	2.9	1380	瓦当ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/4	基準位置	
8	軒丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA		3.4	3.1	1460	瓦当ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/4	やや左にずれる	文様が二重に転写
9	軒丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA		3.2	3.0	1220	瓦当ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/3	基準位置	文様が二重に転写
10	軒丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA		-	3.2	252	周縁部（下半）	浅黄橙 10YR8/3	基準位置	
11	軒丸瓦	3	窯体内	埋土	ⅡA		-	-	54	周縁部	淡黄 2.5Y8/3	－	
12	軒丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA		-	-	60	周縁部（上部）	浅黄橙 10YR8/3	（基準位置か）	
13	軒丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅡB１		3.3	3.2	3080	ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/3	やや左にずれ	赤彩
14	軒丸瓦	3	窯体内	床面＋２号窯灰原	ⅡA		-	-	2300	瓦当～丸瓦部	灰白 10YR8/2	180° 回転	
15	軒丸瓦	3	窯体内	床面＋２号窯灰原			-	-	1820	丸瓦部ほぼ完形	淡黄 2.5Y8/3	－	赤彩か
16	軒丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土			-	-	2200	丸瓦部ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/4	－	
17	軒丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土			-	-	2530	丸瓦部ほぼ完形	淡黄 2.5Y8/3	－	
18	軒丸瓦	3	灰原	N7	Ⅰ		4.1	3.7	1180	瓦当	黄灰 2.5Y5/1	基準位置	瓦当表面に灰被り
19	軒丸瓦	3	灰原	W11	Ⅰ		-	4.6	539	瓦当	灰 N6/	180° 回転	
20	軒丸瓦	3	灰原	K6	Ⅰ		4.4	2.6	691	内区	灰白 2.5Y8/2	基準位置	磨滅著しい
21	軒丸瓦	3	灰原	M5+I3+I6	Ⅰ		3.7	-	353	内区（中房付近）	灰白 5Y8/1	（基準位置か）	蓮子周環
22	軒丸瓦	3	灰原	I7	Ⅰ		-	-	61	周縁（上部）	灰白 5Y8/1	－	
23	軒丸瓦	3	灰原	T8	Ⅰ		-	-	72	周縁（上部）	灰 N6/	－	
24	軒丸瓦	3	灰原	U9+B1	Ⅰ		-	-	173	周縁付近	灰 5Y6/1	基準位置	
25	軒丸瓦	3	灰原	P8	Ⅰ		-	5.0	64	周縁（下部）	灰 N6/	－	
26	軒丸瓦	3	灰原	K3	ⅡA		2.8	1.4	633	内区	浅黄橙 10YR8/3	基準位置	磨滅著しい
27	軒丸瓦	3	灰原	J4+K4	ⅡA		3.2	-	541	内区	灰白 2.5Y8/2	180° 回転	
28	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		1.3	-	17	中房	浅黄橙 10YR8/3	－	
29	軒丸瓦	3	灰原	－	ⅡA		-	-	241	内区（右半）	浅黄橙 10YR8/3	－	
30	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	106	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/4	－	
31	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	54	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	
32	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	59	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/4	－	
33	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	56	内区（右側）	浅黄橙 10YR8/4	－	
34	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	52	内区（左上半）	浅黄橙 10YR8/4	－	
35	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	76	内区（右側）	灰白 10YR8/2	－	
36	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	92	内区（右側）	浅黄橙 10YR8/3	－	
37	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	105	内区（左上半）	浅黄橙 10YR8/4	－	
38	軒丸瓦	3	灰原	S9	ⅡA		-	-	121	内区（左下半）	灰白 5Y8/1	－	
39	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		2.7	-	204	内区（下部）	浅黄橙 10YR8/3	180° 回転か	
40	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	43	内区（下部）	浅黄橙 10YR8/3	－	
41	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	30	内区（下部）	灰白 10YR8/2	－	
42	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	2.0	105	内区（下部）	浅黄橙 10YR8/3	－	
43	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡA		-	-	90	内区（右下半）	浅黄橙 10YR8/4	基準位置	
44	軒丸瓦	3	灰原	M2+W8	ⅡA		-	-	371	周縁～丸瓦部	灰白 5Y7/1	右へ 90° 回転	
45	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡB１		-	-	196	内区（上半）	浅黄橙 10YR8/4	－	
46	軒丸瓦	3	灰原	K9	ⅡB１		-	-	71	内区（上部）	灰白 5Y8/1	－	磨滅著しい
47	軒丸瓦	3	灰原	K5	ⅡB１		-	-	46	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	裏面剥落
48	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡB１		-	-	35	内区（下部か）	浅黄橙 10YR8/3	－	
49	軒丸瓦	3	灰原	J9	ⅡB１		-	-	53	内区（下部）	浅黄橙 10YR8/4	－	
50	軒丸瓦	3	灰原	K5	ⅡB１		-	-	24	内区	灰白 10YR8/2	－	磨滅著しい
51	軒丸瓦	3	灰原	K4	ⅡB１		-	-	36	内区（下部）	浅黄橙 10YR8/3	－	
52	軒丸瓦	3	灰原	L7	Ⅱ		-	-	125	内区（左側）	灰白 10YR8/2	－	磨滅著しい
53	軒丸瓦	3	灰原	L3	Ⅱ		-	-	43	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	磨滅著しい
54	軒丸瓦	3	灰原	K5	Ⅱ		-	-	198	内区（上半）	灰白 10YR8/2	－	磨滅著しい
55	軒丸瓦	3	灰原	J6	Ⅱ		-	-	82	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	磨滅著しい
56	軒丸瓦	3	灰原	L12	Ⅱ		-	-	30	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/4	－	磨滅著しい
57	軒丸瓦	3	灰原	K4	Ⅱ		-	-	79	内区（下部）	浅黄橙 10YR8/4	－	磨滅著しい
58	軒丸瓦	3	灰原	K4	Ⅱ		-	-	67	内区	浅黄橙 10YR8/4	－	磨滅著しい
59	軒丸瓦	3	灰原	K4	Ⅱ		-	-	52	内区	浅黄橙 10YR8/3	－	磨滅著しい
60	軒丸瓦	3	灰原	K4			-	-	212	丸瓦部	浅黄橙 10YR8/3	－	
61	軒丸瓦	3	灰原	J3			-	-	100	丸瓦部	淡黄 2.5Y8/3	－	
62	軒丸瓦	3	灰原	K5	Ⅱ		-	-	37	周縁（上部）	灰白 10YR8/2	－	丸瓦先端の痕跡
63	軒丸瓦	3	灰原	J5	Ⅱ		-	-	18	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/4	－	丸瓦先端の痕跡
64	軒丸瓦	3	灰原	K5	Ⅱ		-	-	17	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	接合溝
65	軒丸瓦	3	灰原	K4	Ⅱ		-	2.7	19	周縁（下部）	浅黄橙 10YR8/4	－	
66	軒丸瓦	3	灰原	L5	Ⅱ		-	1.9	35	周縁	浅黄橙 10YR8/4	－	
67	軒丸瓦	3	灰原	I4	Ⅱ		-	1.6	28	周縁	浅黄橙 10YR8/4	－	粘土充填時の指痕
68	軒丸瓦	3	灰原	L6	Ⅱ		-	1.3	16	周縁	浅黄橙 10YR8/4	－	粘土充填時の指痕
69	軒丸瓦	3	灰原	M6	Ⅱ		-	2.6	63	周縁（左側）	灰白 2.5Y8/2	－	
70	軒丸瓦	3	灰原	I6	Ⅱ		-	2.9	53	周縁（左側）	浅黄橙 10YR8/3	－	
71	軒丸瓦	3	灰原	L6	Ⅱ		-	2.4	44	周縁（右側）	灰白 2.5Y8/2	－	
72	軒丸瓦	3	灰原	E区	Ⅲ		-	-	74	周縁（上部）	灰白 N7/	－	
73	軒丸瓦	3	埋土		ⅡA		3.6	-	833		浅黄橙 7.5YR8/3		
74	軒丸瓦	3	埋土		ⅡA		-	1.3	69		浅黄橙 10YR8/3		
75	軒丸瓦	3	埋土		Ⅱ		-	2.8	103		浅黄橙 7.5YR8/3		
76	軒丸瓦	3	埋土		Ⅱ		-	1.8	20		浅黄橙 10YR8/3		
77	軒丸瓦	3	埋土		Ⅲ		2.8	-	431		暗灰黄 2.5Y5/2		
78	軒丸瓦	3	埋土		Ⅱ		-	-	117		浅黄橙 10YR8/4		
79	軒丸瓦	3	埋土		Ⅱ		-	-	18		浅黄橙 10YR8/3		
80	軒丸瓦	3	埋土		Ⅱ		-	2.1	61		浅黄橙 7.5YR8/3		
81	軒丸瓦	3	埋土		Ⅱ		-	2.2	54		灰白 10YR8/2		
82	軒丸瓦	3	埋土		ⅡA		-	-	36		浅黄橙 10YR8/3		
83	軒丸瓦	2	窯体内	床面	Ⅰ		-	-	370	周縁～丸瓦	灰 N6/1	－	
84	軒丸瓦	2	窯体内	床面	Ⅰ		-	1.7	14	周縁	青灰 10BG6/1	－	粘土充填時の指痕

表３　遺物一覧表（軒丸瓦２）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	分類	技法	瓦当中央厚さ（cm）	瓦当下端厚さ（cm）	重量（g）	残存部	色調	瓦笵位置	備考
85	軒丸瓦	2	窯体内	床面	ⅡA		2.9	-	110	内区（中房）	浅黄 2.5Y7/3	－	
86	軒丸瓦	2	窯体内	床面＋３号窯灰原	ⅡB２		-	2.4	140	周縁（左半）	灰白 10Y7/1	－	
87	軒丸瓦	2	灰原	D2＋E1	Ⅰ		-	4.0	569	瓦当（下半）	灰白 5Y7/1	右へ 90° 回転	接合溝
88	軒丸瓦	2	灰原	焚口付近	Ⅰ		-	-	137	周縁～丸瓦部	灰白 7.5Y7/2	－	
89	軒丸瓦	2	灰原	D1	Ⅰ		-	-	175	瓦当（上部）	灰白 10YR8/1	－	
90	軒丸瓦	2	灰原	D4	Ⅰ		-	-	112	周縁付近	灰白 5Y8/1	－	丸瓦先端の痕跡
91	軒丸瓦	2	灰原	D0＋D1＋D2＋D3	Ⅰ		-	3.2	130	周縁	淡黄 2.5Y8/3	－	粘土充填時の指痕
92	軒丸瓦	2	灰原	F5	ⅡA		2.9	-	353	内区	浅黄橙 10YR8/4	180° 回転か	
93	軒丸瓦	2	灰原	F5	ⅡA		2.9	-	234	内区（左上）	浅黄橙 10YR8/4	左へ 90° 回転	
94	軒丸瓦	2	灰原	F3	ⅡA		-	-	167	内区（右半）	浅黄橙 10YR8/4	－	
95	軒丸瓦	2	灰原	F3	ⅡA		-	-	143	内区（右上）	浅黄橙 10YR8/4	－	
96	軒丸瓦	2	灰原	C2（1 層）	ⅡA		-	-	174	内区（左上）	浅黄橙 10YR8/4	基準位置か？	
97	軒丸瓦	2	灰原	F3（1 層）	ⅡA		-	1.2	88	内区（左下）	浅黄橙 10YR8/3	－	磨滅著しい
98	軒丸瓦	2	灰原	G4（1 層）	ⅡA		-	-	80	内区（下部）	浅黄橙 7.5YR8/4	－	
99	軒丸瓦	2	灰原	F6（1 層）	ⅡA		-	1.5	101	内区（下部）	浅黄橙 10YR8/4	－	
100	軒丸瓦	2	灰原	F3（1 層）	ⅡA		-	-	18	内区	浅黄橙 10YR8/3	－	
101	軒丸瓦	2	灰原	E3（1 層）	ⅡA		-	-	22	内区	浅黄橙 10YR8/4	－	
102	軒丸瓦	2	灰原	B2（1 層）	ⅡA		-	2.6	75	周縁付近	浅黄橙 10YR8/3	－	支持粘土
103	軒丸瓦	2	灰原	D4（1 層）	ⅡA		-	-	29	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	支持粘土の剥離痕
104	軒丸瓦	2	灰原	B3（1 層）	ⅡA		-	-	202	周縁～丸瓦部	灰白 7.5Y7/1	右に 90° 回転	窯壁付着
105	軒丸瓦	2	灰原	E3（1 層）	ⅡA		-	-	46	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	180° 回転か	丸瓦接合痕
106	軒丸瓦	2	灰原	－	ⅡA		-	-	32	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	180° 回転か	接合溝
107	軒丸瓦	2	灰原	E3（1 層）	ⅡA		-	1.8	26	周縁	浅黄橙 10YR8/3	－	粘土充填時の指痕
108	軒丸瓦	2	灰原	D3＋E3＋E4＋F2	ⅡB 1		4.0	1.7	1210	瓦当	青灰 5B6/1	左へ 90° 回転	丸瓦接合痕・支持粘土
109	軒丸瓦	2	灰原	灰原＋３号窯灰原	ⅡB２		3.3	2.1	940	瓦当～丸瓦部	灰白 N7/	右へ 90° 回転	重圏文残る
110	軒丸瓦	2	灰原	C2＋C3＋D2＋D3	ⅡB２		3.2	-	676	瓦当～周縁	灰 5Y5/1	180° 回転か	重圏文残る
111	軒丸瓦	2	灰原	C1＋D1～4＋E2＋F2	ⅡB２		-	-	1585	周縁～丸瓦部	にぶい黄橙 10YR7/4	－	
112	軒丸瓦	2	灰原	－	ⅡB２		-	-	1040	周縁～丸瓦部	灰黄 2.5Y7/2	－	
113	軒丸瓦	2	灰原	D4＋F3	ⅡB２		-	-	675	周縁～丸瓦部	灰黄 2.5Y7/2	－	
114	軒丸瓦	2	灰原	E4	ⅡB２		-	-	45	周縁（上部）	灰 5Y6/1	－	丸瓦接合痕
115	軒丸瓦	2	灰原	－	ⅡB２		-	-	107	周縁（上部）	灰 7.5Y5/1	－	重圏文わずかに残る
116	軒丸瓦	2	灰原	B1＋前庭部	ⅡB２		-	2.8	125	周縁（右下）	灰白 5Y8/2	－	断面に焼土付着
117	軒丸瓦	2	灰原	E0	ⅡB２		-	3.0	39	周縁	灰白 5Y7/1	－	
118	軒丸瓦	2	灰原	C3＋C4	ⅡB２		-	2.4	105	周縁（左下）	灰 5Y5/1	－	焼土付着
119	軒丸瓦	2	灰原	D3	ⅡB２		-	2.7	118	周縁（下部）	灰 5Y6/1	－	
120	軒丸瓦	2	灰原	E0	ⅡB２		-	3.1	32	周縁	灰白 5Y7/1	－	
121	軒丸瓦	2	灰原	F3	ⅡB		-	-	139	内区（右上）	灰白 10YR8/2	－	
122	軒丸瓦	2	灰原	G4	ⅡB		-	-	114	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/4	－	
123	軒丸瓦	2	灰原	C2	ⅡB		-	1.5	62	周縁付近（下部）		－	
124	軒丸瓦	2	灰原	C1	ⅡB		3.7	-	346	内区（左半）	灰白 5Y7/1	180° 回転	磨滅により接合部不明
125	軒丸瓦	2	灰原	E3	Ⅱ		-	-	430	周縁～丸瓦部	浅黄橙 10YR8/3	－	磨滅著しい
126	軒丸瓦	2	灰原	D2	Ⅱ		-	-	59	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/4	－	接合溝
127	軒丸瓦	2	灰原	C3	Ⅱ		-	-	66	周縁（上部）	灰白 5Y7/2	－	
128	軒丸瓦	2	灰原	D2	Ⅱ		-	-	14	周縁（右側）	浅黄橙 10YR8/4	－	支持粘土
129	軒丸瓦	2	灰原	F3	Ⅱ		-	-	23	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	丸瓦接合痕
130	軒丸瓦	2	灰原	F3	Ⅱ		-	-	33	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	
131	軒丸瓦	2	灰原	F3	Ⅱ		-	-	12	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	
132	軒丸瓦	2	灰原	F4	Ⅱ		-	-	47	周縁上部	浅黄橙 10YR8/3	－	丸瓦接合痕
133	軒丸瓦	2	灰原	F4	Ⅱ		-	2.8	63	周縁（下部）	浅黄橙 10YR8/3	－	磨滅著しい
134	軒丸瓦	2	灰原	E3	Ⅱ		-	1.7	37	周縁	浅黄橙 10YR8/3	－	粘土充填時の指痕
135	軒丸瓦	2	灰原	D4	Ⅱ		-	1.7	31	周縁	浅黄橙 10YR8/4	－	
136	軒丸瓦	2	灰原	E4	Ⅱ		-	1.5	18	周縁	浅黄 2.5Y7/3	－	粘土充填時の指痕
137	軒丸瓦	2	灰原	D2＋E2＋E4＋G4			-	-	1790	丸瓦部	浅黄橙 10YR8/4	－	
138	軒丸瓦	2	灰原	D1＋E2			-	-	370	丸瓦部	浅黄橙 10YR8/4	－	磨滅著しい
139	軒丸瓦	2	灰原	－			-	-	131	丸瓦部	灰 5Y4/1	－	全体に灰被り
140	軒丸瓦	2	灰原	E2			-	-	134	丸瓦部	浅黄橙 10YR8/4	－	磨滅著しい
141	軒丸瓦	2	灰原	C2			-	-	303	丸瓦部	浅黄橙 10YR8/4	－	磨滅著しい
142	軒丸瓦	1	灰原	C8	ⅡB		-	-	111	内区（下部）	浅黄 2.5Y7/4	－	磨滅著しい
143	軒丸瓦	1	灰原	A11	ⅡA		-	-	101	内区（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	
144	軒丸瓦	1	灰原	C7	ⅡA		-	-	61	内区（下部）	淡黄 2.5Y8/3	－	
145	軒丸瓦	1	灰原	C7	ⅡA		-	-	107	内区（右下）	灰白 2.5Y8/2	－	支持粘土
146	軒丸瓦	1	灰原	C7	ⅡA		-	-	31	内区（上部）	淡黄 2.5Y8/3	－	支持粘土剥離痕
147	軒丸瓦	1	灰原	C7	ⅡA		-	-	22	内区	灰白 2.5Y8/2		
148	軒丸瓦	1	灰原	C7	ⅡA		1.1	-	16	内区	灰白 2.5Y8/2		
149	軒丸瓦	1	灰原	A11	Ⅱ		-	-	26	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	丸瓦接合痕
150	軒丸瓦	1	灰原	B8	Ⅱ		-	-	17	周縁	灰白 7.5Y8/1	－	磨滅著しい
151	軒丸瓦	1	灰原	C13	Ⅱ		-	-	11	周縁（上部）	浅黄橙 10YR8/3	－	磨滅著しい
152	軒丸瓦	1	灰原	a8	Ⅱ		-	2.3	20	周縁	浅黄橙 10YR8/3	－	粘土充填時の指痕
153	軒丸瓦	1	灰原	a8	Ⅱ		-	2.3	15	周縁	浅黄橙 10YR8/3	－	粘土充填時の指痕
154	軒丸瓦	1	灰原	－	Ⅲ		-	-	100	周縁（下部）	灰白 2.5Y8/1	－	瓦当裏面ケズリ調整
155	軒丸瓦		SX01		Ⅰ		-	3.0	45	周縁	浅黄橙 10YR8/4	－	
156	軒丸瓦		SX01		ⅡA		3.2	-	89	中房	浅黄橙 10YR8/3	－	
157	軒丸瓦		SX01		Ⅱ		-	-	87	内区	灰白 2.5Y8/2	－	
158	軒丸瓦		SX01		ⅡB２		-	-	270	周縁	にぶい黄橙 10YR7/3	－	
159	軒丸瓦		SX01		ⅡB２		-	-	159	周縁	にぶい黄橙 10YR7/4	－	
160	軒丸瓦		SD02		ⅡA		3.0	-	339	内区	明黄褐 10YR8/6	－	
161	軒丸瓦		SD02		ⅡB２		-	-	131	周縁	灰白 5Y8/1	－	
162	軒丸瓦		SD02		ⅡB２		-	-	100	周縁	灰白 2.5Y8/2	－	
163	軒丸瓦		SD02		ⅡB２		-	-	99	周縁	淡黄 2.5Y8/4	－	
164	軒丸瓦		－	包含層	Ⅰ		4.0	4.6	1185	瓦当	灰黄 2.5Y7/3	180° 回転	
165	軒丸瓦		－	排土	ⅡA		-	-	201	内区	にぶい黄橙 10YR7/3	－	
166	軒丸瓦		確認調査		ⅡA		3.7	-	788	内区	灰黄 2.5Y6/2	135° 回転	
167	軒丸瓦		－	表土	Ⅲ		-	-	263	周縁	灰白 N8/	－	
168	軒丸瓦		－	表土	巴文		-	3.3	50	内区	灰白 2.5Y8/2	－	中世瓦

表４　遺物一覧表（軒平瓦１）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	瓦当文様	分類	瓦当厚さ（cm）	顎部長さ（cm）	重量（g）	残存部	色調	備考
169	軒平瓦	3	窯体内	床面	四重孤文	ＩＡ	2.8	7.2	5000	ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/4	
170	軒平瓦	3	窯体内	床面＋埋土＋２号窯灰原	四重孤文	ＩＡ	2.8	7.7	3480	瓦当～平瓦部	灰白 10YR8/2	粘土接合痕（Ｚ型）
171	軒平瓦	3	窯体内	床面＋埋土＋１号窯灰原	四重孤文	ＩＡ	2.1	8.7	1590	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/4	顎面に格子状の施文
172	軒平瓦	3	窯体内	床面	四重孤文	ＩＡ	2.7	6.2	1160	瓦当～平瓦部	灰白 10YR8/2	顎部整形時の切り込み
173	軒平瓦	3	窯体内	床面	四重孤文	ＩＡ	3.0	6.5	1490	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/3	布綴じ痕
174	軒平瓦	3	窯体内	床面	四重孤文	ＩＡ	3.0	6.1	780	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/3	赤色付着物
175	軒平瓦	3	窯体内	床面	四重孤文	ＩＡ	3.1		136		浅黄橙 10YR8/3	
176	隅軒平瓦	3	窯体内	床面	五重孤文	ＩＢ１	2.6	7.6	3700	ほぼ完形	淡黄 2.5Y8/3	
177	軒平瓦	3	窯体内	埋土	五重孤文	ＩＢ１	2.8	7.4	934	瓦当～平瓦部	黄灰 2.5Y6/1	
178	隅軒平瓦	3	窯体内	床面	五重孤文	ＩＢ１	2.6	7.6	3510	瓦当～平瓦部	にぶい橙 7/3	
179	軒平瓦	3	窯体内	床面	五重孤文	ＩＢ１	2.5	8.3	450	瓦当～段部	淡黄 2.5Y8/3	平瓦の段部に截断面
180	隅軒平瓦	3	窯体内	床面	五重孤文	ＩＢ１	2.9	7.2	242	瓦当～段部	にぶい黄橙 10YR7/3	
181	隅軒平瓦	3	窯体内	床面	五重孤文	ＩＢ１	2.6	8.0	1576	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/4	
182	隅軒平瓦	3	窯体内	床面	五重孤文	ＩＢ１	3.0	7.4	860	瓦当～平瓦部	黄 2.5Y8/6	隅截断時の躊躇い傷
183	隅軒平瓦	3	窯体内	床面＋埋土	五重孤文	ＩＢ１	2.3	8.0	1830	瓦当～段部	明黄褐 10YR7/6	凹面にヘラ記号
184	軒平瓦	3	灰原	K4	四重孤文	ＩＡ	2.8	6.5	247	瓦当～顎段部	浅黄橙 10YR8/3	
185	軒平瓦	3	灰原	M3	四重孤文	ＩＡ	2.6	6.1	198	瓦当	淡黄 2.5Y8/4	平瓦部に截断面
186	軒平瓦	3	灰原	K3	四重孤文	ＩＡ	2.9		60	瓦当	淡黄 2.5Y8/3	表面磨滅
187	軒平瓦	3	灰原	J4	四重孤文	ＩＡ	3.1		184	瓦当	浅黄橙 10YR8/4	
188	軒平瓦	3	灰原	I5	四重孤文	ＩＡ	2.6		151	瓦当	浅黄橙 10YR8/4	瓦当やや磨滅
189	軒平瓦	3	灰原	K4	四重孤文	ＩＡ	2.7	6.3	225	瓦当～顎段部	淡黄 2.5Y8/3	表面磨滅
190	軒平瓦	3	灰原	I3	四重孤文	ＩＡ	3.0	5.9	479	瓦当～平瓦部	淡黄 2.5Y8/3	表面磨滅
191	軒平瓦	3	灰原	M4	五重孤文	ＩＢ１	2.4	7.5	1380	瓦当～平瓦部	オリーブ灰 2.5GY5/1	
192	軒平瓦	3	灰原	O4	五重孤文	ＩＢ１	2.7	7.4	567	瓦当～顎段部	灰白 2.5Y7/1	段部付近に切り込み線
193	軒平瓦	3	灰原	N4	五重孤文	ＩＢ１	2.6	6.7	590	瓦当～顎段部	灰 5Y5/1	
194	軒平瓦	3	灰原	Q9	五重孤文	ＩＢ１	2.1	7.2	718	瓦当～顎段部	灰 5Y6/1	平瓦部に截断面
195	軒平瓦	3	灰原	L4	五重孤文	ＩＢ１	2.7	7.6	550	瓦当～顎段部	灰 7.5Y5/1	段部付近に切り込み線
196	軒平瓦	3	灰原	N4+M3	五重孤文	ＩＢ１	2.7	7.0	946	瓦当～平瓦部	灰白 5Y7/2	平瓦凸面に斜め縄叩き
197	軒平瓦	3	灰原	L4	五重孤文	ＩＢ１	2.5	6.3	1344	瓦当～平瓦部	灰 7.5Y5/1	顎貼り付け部叩き目
198	軒平瓦	3	灰原	H9 ＋ G8	五重孤文	ＩＢ１	2.6	7.3	124	瓦当～顎段部	灰 5Y6/1	
199	軒平瓦	3	灰原	L4 ＋２号窯灰原	五重孤文	ＩＢ１	2.3	8.7	313	瓦当～顎段部	灰白 7.5Y7/1	顎段部が２段
200	軒平瓦	3	灰原	P10	五重孤文	ＩＢ１	2.5	7.5	53	瓦当	灰 5Y6/1	
201	軒平瓦	3	灰原	N4	（五重孤文）	ＩＢ１		7.4	332	顎部	灰 7.5Y6/1	
202	軒平瓦	3	灰原	S9	（五重孤文）	ＩＢ１		7.5	271	顎部	灰 7.5Y6/1	剥離面に糸切り痕
203	軒平瓦	3	灰原	N6 ＋ O5	（五重孤文）	ＩＢ１		7.3	205	顎部	灰 5Y6/1	剥離面に糸切り痕
204	軒平瓦	3	灰原	O4	（五重孤文）	ＩＢ１		6.7	325	顎部	灰 5Y7/1	
205	軒平瓦	3	灰原	N5	（五重孤文）	ＩＢ１		7.2	228	顎部	灰 5Y6/1	
206	軒平瓦	3	灰原	L3	（五重孤文）	ＩＢ１		7.7	220	顎部	オリーブ灰 2.5GY6/1	
207	軒平瓦	3	灰原	N4	（五重孤文）	ＩＢ１		7.4	222	顎部	灰オリーブ 5Y6/2	
208	軒平瓦	3	灰原	N5	（五重孤文）	ＩＢ２		-	352	瓦当～顎段部	灰 7.5Y6/1	顎剥離面に斜め縄叩き
209	軒平瓦	3	灰原	Q9	五重孤文	ＩＢ２	3.2	7.3	465	瓦当～顎段部	浅黄橙 10YR8/3	顎面に波状文
210	軒平瓦	3	灰原	P8	（五重孤文）	ＩＢ２		6.9	109	顎部	灰 5Y5/1	顎面に波状文
211	軒平瓦	3	灰原	Ｅ区	無文	Ⅳ		6.6	160	顎部	灰白 7.5Y7/1	
212	軒平瓦	3	灰原	Ｅ区	無文	Ⅳ		6.5	417	顎部	灰白 5Y7/1	
213	軒平瓦	2	窯体内	焚口（下層）＋灰原	四重孤文	ＩＡ	2.7	6.9	1520	瓦当～平瓦部	淡黄 2.5Y8/4	表面磨滅
214	軒平瓦	2	窯体内	焚口（下層）＋灰原	四重孤文	ＩＡ	2.7	7.5	2350	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/3	表面磨滅
215	軒平瓦	2	窯体内	焚口（下層）＋灰原	四重孤文	ＩＡ	2.6	6.8	1380	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/4	
216	軒平瓦	2	窯体内	床面	四重孤文	ＩＡ	2.2	6.1	1100	瓦当～平瓦部	青灰 5B5/1	凸面側に灰被り
217	軒平瓦	2	窯体内	焚口（下層）	四重孤文	ＩＡ	3.0	6.7	540	瓦当～段部	浅黄橙 10YR8/4	表面磨滅
218	軒平瓦	2	窯体内	床面＋灰原＋埋土	連珠文	Ⅱ	5.0	5.7	6500	ほぼ完形	灰 5Y6/1	平瓦部凸面に縦縄叩き
219	軒平瓦	2	窯体内	床面	連珠文	Ⅱ	5.2	7.0	5390	ほぼ完形	オリーブ黄 5Y6/3	平瓦部凸面に縦縄叩き
220	軒平瓦	2	灰原	C2＋焚口付近	四重孤文	ＩＡ	2.9		510	瓦当～段部	浅黄橙 10YR8/4	表面磨滅
221	軒平瓦	2	灰原	E3	四重孤文	ＩＡ	3.0		168	瓦当	灰白 10YR8/2	
222	軒平瓦	2	灰原	D2	四重孤文	ＩＡ	1.9	5.5	151	瓦当～平瓦部	灰 N5/	凸面側と断面に灰被り
223	軒平瓦	2	灰原	D2	四重孤文	ＩＡ	3.4	7.5	550	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/3	表面磨滅
224	軒平瓦	2	灰原	D1	四重孤文	ＩＡ	2.8	7.4	620	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/3	表面磨滅
225	軒平瓦	2	灰原	D2	五重孤文	ＩＢ１	2.4		383	瓦当～段部	灰白 10YR8/2	表面磨滅
226	軒平瓦	2	灰原	D2	五重孤文	ＩＢ１	3.0	7.1	470	瓦当～平瓦部	灰白 10YR8/2	
227	軒平瓦	2	灰原	D2 ＋ D4 ＋ E5 ＋ A1	五重孤文	ＩＢ２	2.8	6.2	1,470	瓦当～平瓦部	黄灰 2.5Y6/1	顎面に波状文
228	軒平瓦	2	灰原	C2 ＋ C3 ＋ D1 ＋ E2	五重孤文	ＩＢ２	2.9	7.9	322	瓦当～段部	灰黄 2.5Y7/2	顎面に波状文
229	軒平瓦	2	灰原	E2	五重孤文	ＩＢ２	2.5	7.1	630	瓦当～段部	灰白 5Y8/2	顎面波状文
230	軒平瓦	2	前庭部	E1	五重孤文	ＩＢ２	3.0		36	瓦当	灰白 5Y8/2	顎面波状文
231	軒平瓦	2	灰原	E3	五重孤文	ＩＢ２	2.6	7.2	259	瓦当～段部	灰白 5Y8/2	顎面波状文
232	軒平瓦	2	灰原	E5	五重孤文	ＩＢ２		7.2	253	顎部	浅黄 5Y7/3	顎面波状文
233	軒平瓦	2	灰原	D2	連珠文	Ⅱ	5.2	5.5	5900	ほぼ完形	褐灰 7.5YR4/1	磨滅著しい
234	軒平瓦	2	灰原	G3	竹管文	Ⅲ	3.0	7.0	450	顎部	灰白 2.5Y8/2	
235	軒平瓦	2	灰原	E3	竹管文	Ⅲ	2.6	6.8	326	顎部	淡黄 2.5Y8/3	
236	軒平瓦	1	窯体内	燃焼部（下面）	四重孤文	ＩＡ	3.0	7.4	787	瓦当～平瓦部	灰白 2.5Y8/2	焼土付着
237	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋灰原	四重孤文	ＩＡ			266	瓦当～段部	灰黄 2.5Y7/2	弧線の重複
238	軒平瓦	1	窯体内	燃焼部	四重孤文	ＩＡ		-	43	瓦当	灰白 2.5Y8/2	弧線の重複
239	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋灰原	五重孤文	ＩＢ１		(7.7)	1387	瓦当～平瓦部	灰黄 2.5Y6/2	凸面に斜め縄叩き
240	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋灰原	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.7	600	顎部	灰白 5Y8/2	
241	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋灰原	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.8	823	顎部	灰白 5Y7/1	
242	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋窯体内	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.3	390	顎部	淡黄 5Y8/3	
243	軒平瓦	1	窯体内	段構築材	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.7	219	顎部	淡黄 5Y8/2	表面と断面に焼土付着
244	軒平瓦	1	窯体内	段構築材	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.1	235	顎部	灰白 2.5Y7/1	表面に焼土付着
245	軒平瓦	1	窯体内	段構築材	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.5	374	顎部	灰白 2.5Y7/1	側端で竹管文半截
246	軒平瓦	1	窯体内	窯体内＋灰原	弧線＋竹管文	ⅢＡ		7.1	690	顎部	にぶい黄橙 10YR7/3	
247	軒平瓦	1	窯体内	窯体内	弧線＋竹管文	ⅢＡ		5.9	525	顎部	にぶい黄橙 10YR6/3	
248	軒平瓦	1	窯体内	窯体内	弧線＋竹管文	ⅢＡ		7.0	318	顎部	灰黄 2.5Y7/2	
249	軒平瓦	1	窯体内	窯体内＋埋土	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.3	282	顎部	灰白 5Y7/1	表面に焼土
250	軒平瓦	1	窯体内	窯体内	弧線＋竹管文	ⅢＡ		6.9	281	顎部	灰黄 2.5Y7/2	側端で竹管文半截
251	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋３号窯埋土	竹管文	ⅢＢ		6.8	472	顎部	灰黄 2.5Y7/2	
252	軒平瓦	1	窯体内	段構築材	竹管文	ⅢＢ		-	119	瓦当	灰白 2.5Y7/1	

表５　遺物一覧表（軒平瓦２）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	瓦当文様	分類	瓦当厚さ（cm）	顎部長さ（cm）	重量（g）	残存部	色調	備考
253	軒平瓦	1	窯体内	窯体内＋灰原	弧線	ⅢC		6.3	615	顎部	灰白 2.5Y7/1	
254	軒平瓦	1	窯体内	埋土＋灰原	弧線	ⅢC		6.3	336	顎部	灰白 10Y7/1	小型
255	軒平瓦	1	窯体内	段構築材	弧線	ⅢC		-	349	瓦当～平瓦部	明褐灰 7.5YR7/2	弧線の重複
256	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋窯体内＋埋土	無文	Ⅳ		6.9	619	顎部	灰白 5Y8/1	瓦当ケズリ
257	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋埋土	無文	Ⅳ		6.9	678	顎部	褐灰 10YR4/1	
258	軒平瓦	1	窯体内	段構築材＋窯体内＋灰原	無文	Ⅳ		6.4	698	顎部	灰黄 2.5Y7/2	
259	軒平瓦	1	窯体内	窯体内＋灰原	無文	Ⅳ		7.0	625	顎部	灰白 5Y7/1	
260	軒平瓦	1	窯体内	窯体内	無文	Ⅳ		(5.7)	2705	瓦当～平瓦部	灰白 2.5Y7/1	瓦当側端にアタリ線
261	軒平瓦	1	灰原	B13	四重孤文	ⅠA		-	86	瓦当	浅黄橙 7.5YR8/3	表面の磨滅
262	軒平瓦	1	灰原	A9	四重孤文	ⅠA		18.0	294	瓦当～平瓦部	浅黄橙 10YR8/4	
263	軒平瓦	1	灰原	B3	四重孤文	ⅠA		3.5	13	瓦当	灰白 2.5Y8/2	表面の磨滅
264	軒平瓦	1	灰原	C12	五重孤文	ⅠB1		9.7	136	顎部	灰 N5/	顎が長い
265	軒平瓦	1	灰原	a3＋B5	弧線＋竹管文	ⅢA		7.0	735	顎部	灰白 2.5Y8/2	
266	軒平瓦	1	灰原	B4＋C3＋a3＋C6	弧線＋竹管文	ⅢA		6.8	767	顎部	灰白 5Y8/2	
267	軒平瓦	1	灰原	A3＋a3	弧線＋竹管文	ⅢA		7.2	637	顎部	浅黄橙 10YR8/3	
268	軒平瓦	1	灰原	B3	弧線＋竹管文	ⅢA		7.6	733	顎部	浅黄橙 10YR8/4	側端で竹管文半裁
269	軒平瓦	1	灰原	B8	弧線＋竹管文	ⅢA		7.0	327	顎部	淡黄 5Y7/3	
270	軒平瓦	1	灰原	B4＋a3	弧線＋竹管文	ⅢA		6.5	616	顎部	にぶい黄橙 10YR7/3	一部磨滅
271	軒平瓦	1	灰原	B2＋B5	弧線＋竹管文	ⅢA		7.0	856	顎部	灰白 10YR8/2	側端で竹管文半裁
272	軒平瓦	1	灰原	C4	弧線＋竹管文	ⅢA		6.9	780	顎部	浅黄橙 7.5YR8/3	
273	軒平瓦	1	灰原	C3	弧線＋竹管文	ⅢA		6.2	536	顎部	にぶい黄橙 10YR7/3	
274	軒平瓦	1	灰原	C3	弧線＋竹管文	ⅢA		6.6	671	顎部	にぶい黄橙 10YR7/3	側端で竹管文半裁
275	軒平瓦	1	灰原	B5＋B9＋C6	弧線＋竹管文	ⅢA		6.9	913	顎部	灰オリーブ 5Y6/2	
276	軒平瓦	1	灰原	C6	弧線＋竹管文	ⅢA		6.1	320	顎部	淡黄 2.5Y8/3	
277	軒平瓦	1	灰原	B7＋C6	弧線＋竹管文	ⅢA		5.1	311	顎部	灰 5Y6/1	
278	軒平瓦	1	灰原	C3	竹管文（2列）	ⅢB	4.0	6.8	155	瓦当～段部	灰白 7.5Y7/1	
279	軒平瓦	1	灰原	A2	竹管文	ⅢB		-	188	瓦当～段部	灰黄 2.5Y7/2	表面やや磨滅
280	軒平瓦	1	灰原	B3＋a3＋A4	竹管文	ⅢB		6.5	885	顎部	灰白 7.5Y7/2	
281	軒平瓦	1	灰原	B4+B7+A3+B6+C6	竹管文	ⅢB		6.7	680	顎部	灰黄 2.5Y7/2	
282	軒平瓦	1	灰原	B5＋B6	竹管文	ⅢB		6.3	325	顎部	灰白 5Y8/2	
283	軒平瓦	1	灰原	A1＋B5	弧線	ⅢC		6.7	448	顎部	灰白 7.5Y7/1	
284	軒平瓦	1	灰原	A1·3+B2·3·5·6·8+C1·6	無文	Ⅳ	5.2	6.2	3790	瓦当～平瓦部	灰白 2.5Y8/2	表面磨滅
285	軒平瓦	1	灰原	A2+A3+B5+B6+C6	無文	Ⅳ	4.8	6.4	1300	瓦当～段部	灰白 5Y7/1	
286	軒平瓦	1	灰原	A2＋B5	無文	Ⅳ		(6.0)	553	瓦当～段部	にぶい黄 2.5Y6/4	段部付近に切り込み線
287	軒平瓦	1	灰原	a3＋B6	無文	Ⅳ		7.5	783	顎部	淡黄 2.5Y8/3	
288	軒平瓦	1	灰原	A3＋a3	無文	Ⅳ		7.5	848	顎部	淡黄 2.5Y8/3	
289	軒平瓦	1	灰原	a3＋C6	無文	Ⅳ		7.3	742	顎部	にぶい橙 7.5YR7/4	
290	軒平瓦	1	灰原	a3＋A4	無文	Ⅳ		6.5	683	顎部	淡黄 2.5Y8/4	
291	軒平瓦	1	灰原	B3＋B5＋B7＋B3	無文	Ⅳ		7.0	587	顎部	暗灰黄 2.5Y5/2	
292	軒平瓦	1	灰原	B5+B7+B8+3 号窯灰原	無文	Ⅳ		6.3	643	顎部	灰黄 2.5Y6/2	
293	軒平瓦	1	灰原	A4＋A5	無文	Ⅳ		5.8	638	顎部	灰黄 2.5Y7/2	
294	軒平瓦	1	灰原	A3＋B3＋B6	無文	Ⅳ		5.9	559	顎部	にぶい黄 2.5Y6/3	
295	軒平瓦	1	灰原	A5＋B7＋B1＋B2	無文	Ⅳ		5.7	620	顎部	灰白 N7/	
296	軒平瓦	1	灰原	A4＋B12	無文	Ⅳ		5.6	564	顎部	灰白 2.5Y8/2	
297	軒平瓦		SX01		五重孤文	ⅠB	2.5	7.7	2381		灰白 7.5Y7/1	
298	軒平瓦		SX01		弧線＋竹管文	ⅢA		8.1	287		灰黄 2.5Y7/2	
299	軒平瓦		SX01		竹管文	ⅢB		6.6	326		灰黄 2.5Y7/2	
300	軒平瓦		SX01		無文	Ⅳ	4.2	6.1	800		灰黄 2.5Y7/2	
301	軒平瓦		SX01		無文	Ⅳ	3.8	6.6	613		灰黄 2.5Y7/2	
302	軒平瓦		－	包含層	四重孤文	ⅠA	2.8	8.6	340	顎部	浅黄橙 10Y R 8/4	
303	軒平瓦		－	包含層	五重孤文	ⅠB1	2.6	7.4	487	顎部	灰白 2.5Y8/2	
304	軒平瓦		－	包含層	五重孤文	ⅠB1	2.6	7.8	294	顎部	灰オリーブ 5Y6/2	
305	軒平瓦		－	表土	五重孤文	ⅠB1	2.2	8.2	150	顎部	灰 5Y5/1	砥石に転用
306	軒平瓦		－		五重孤文	ⅠB2	2.8	7.1	209	顎部	にぶい黄 2.5Y6/3	
307	軒平瓦		－		弧線＋竹管文	ⅢA		7.8	191	平瓦～顎部	明黄褐 2.5Y7/4	
308	軒平瓦		－		弧線＋竹管文	ⅢA		5.8	208	平瓦～顎部	灰白 5Y7/2	
309	軒平瓦		－		弧線＋竹管文	ⅢA		6.4	199	平瓦～顎部	オリーブ黄 5Y6/3	
310	軒平瓦		－		無文	Ⅳ	3.6	6.2	233	顎部	灰黄 2.5Y7/2	
311	軒平瓦		－		無文	Ⅳ	3.3	5.4	181	顎部	灰オリーブ 5Y6/2	
312	軒平瓦		－		無文	Ⅳ		7.2	470	顎部	黄 2.5Y8/6	

表６　遺物一覧表（丸瓦１）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	分類	布	長さ（cm）	狭端幅（cm）	広端幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存部	備考
313	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅰ	－		-	-	1.4	74	淡黄 2.5Y8/3	玉縁部～筒部	
314	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅰ	－		-	-	1.5	47	淡黄 2.5Y8/3	玉縁部～筒部	
315	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	41.4	12.3	18.8	1.7	2860	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
316	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	42.0	11.8	17.8	1.6	2850	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
317	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	42.8	(12.0)	18.7	1.8	3030	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	凹面右側に窪み（２ヶ所）
318	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	41.1	(12.4)	18.1	1.5	2700	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	
319	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	42.0	12.8	(18.7)	1.8	2680	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
320	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	40.8	(12.6)	(18.1)	1.8	2730	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
321	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	43.1	(11.5)	18.1	1.8	2590	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
322	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅡA	a	42.4	(11.7)	(18.0)	1.7	2530	灰白 5Y7/2	広・狭・側	
323	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅡA	a	42.6	12.4	(19.8)	1.7	1770	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	布端
324	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	42.2	12.3	18.1	1.6	2540	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
325	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	39.1	(11.9)	17.6	1.4	2240	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
326	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	40.5	12.4	(17.5)	1.8	1950	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	布端
327	丸瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	a	42.7	11.8	18.3	1.6	2510	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
328	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅱ類B	a	42.5	(12.4)	18.6	1.5	2650	にぶい黄橙 10YR7/2	ほぼ完形	凸面：斜め縄叩き残る

表７　遺物一覧表（丸瓦２）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	分類	布	長さ(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存部	備考
329	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅱ B	a		11.6	-	1.4	745	淡黄 2.5Y8/3	狭・側	
330	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅱ B	a	41.6	12.3	17.8	1.5	2790	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	凸面：斜め縄叩きわずかに残る
331	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅱ B	a	41.1	11.6	(17.7)	10.8	3130	淡黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	
332	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅱ B	a	41.6	11.4	18.8	1.7	2270	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	布端
333	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b		-	(19.5)	1.7	1790	灰黄 2.5Y8/2	広・側	46 と同一の粘土円筒
334	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b		-	18.9	1.7	2560	淡黄 2.5Y8/3	広・側	100 と同一の粘土円筒
335	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	41.8	12.6	(19.5)	1.6	2350	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	152 と同一の粘土円筒
336	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b		-	(19.2)	1.7	514	灰白 2.5Y8/2	広・側	83 と同一の粘土円筒
337	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.2	9.3	(19.0)	1.6	2620	浅黄 2.5Y7/4	広・狭・側	狭端両側を斜めに切り落とし
338	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.9	12.7	(18.7)	1.6	2630	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
339	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	46.8	11.4	19.6	1.5	2960	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	
340	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.0	13.1	(19.1)	1.3	2330	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	布端
341	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	45.6	13.1	19.3	1.4	2600	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	布袋裏返し
342	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ A	b	44..9	(11.5)	19.6	1.9	3250	黄褐 2.5Y5/4	ほぼ完形	布端
343	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	44.0	(11.0)	(20.0)	1.4	2710	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	粘土接合痕明瞭（布の巻き込み）
344	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	45.5	12.3	20.1	1.5	2930	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	布端
345	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	41.7	12.1	18.4	1.2	2330	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
346	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	41.7	13.0	19.7	1.5	2690	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	狭端面：藁痕わずかに残る
347	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	46.0	(12.5)	20.1	1.7	3110	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	側面広端側に破面残る
348	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ A	b	44.6	(11.7)	19.5	1.8	3130	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	広端側片隅：斜めに切り落とす
349	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	41.5	(11.4)	(19.3)	1.5	2360	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	粘土接合痕明瞭
350	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.9	12.8	19.8	1.7	3240	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	狭端面：藁痕残る
351	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	46.6	12.6	(19.4)	1.7	3190	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	布端
352	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ A	b	45.6	11.8	18.5	1.3	2280	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	粘土接合痕明瞭（布の巻き込み）
353	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ A	b	43.3	13.1	19.4	1.6	2840	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	広端側片隅：斜めに切り落とす
354	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.8		18.8	1.6	2280	にぶい黄橙 10YR7/2	広・狭・側	狭端側両隅：斜めに切り落とす
355	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	44.9	(10.0)	20.4	1.4	1760	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	布端
356	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.9	12.8	19.4	1.7	2730	灰白 2.5Y7/1	ほぼ完形	凸面：左側ケズリ省略
357	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	46.4	12.1	18.9	1.4	2770	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
358	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.9	13.0	(19.6)	1.7	2910	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	粘土接合痕明瞭（布の巻き込み）
359	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	45.2	12.6	20.7	1.8	3310	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	狭端面：藁痕残る
360	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	40.5	13.0	19.3	1.7	2790	灰白 2.5Y7/1	ほぼ完形	狭端面：藁痕残る
361	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B2	b	45.0	11.7	(20.8)	1.8	2080	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	側端面狭端側：一部ケズリ残し
362	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	44.2	(11.8)	(17.3)	1.8	2250	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	布裏返し
363	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	43.2	13.0	19.8	1.5	2710	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	布端
364	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	b	45.5	12.1	(18.9)	1.7	2530	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
365	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	46.0	(12.6)	(22.2)	1.8	2770	浅黄橙 10YR8/3	広・狭・側	43 と同一の粘土円筒
366	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	44.2	11.4	19.4	1.5	2630	淡黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	87 と同一の粘土円筒
367	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	42.5	(12.4)	(18.9)	1.3	1960	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	97 と同一の粘土円筒
368	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	43.5	11.3	19.1	1.4	2030	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	69 と同一の粘土円筒
369	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	41.4	12.4	(19.6)	1.7	2790	浅黄 2.5Y7/4	ほぼ完形	
370	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	44.2	(12.5)	18.8	1.3	2330	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	粘土接合痕明瞭（布の巻き込み）
371	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	39.7	13.4	(19.0)	1.4	2000	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	粘土接合痕明瞭（糸切り痕断絶）
372	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	45.5	12.5	(19.2)	1.4	2420	浅黄 2.5Y7/7	ほぼ完形	
373	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	43.6	11.5	21.3	2.0	3200	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
374	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	45.1	12.4	(19.7)	1.6	1780	灰黄 2.5Y8/2	広・狭・側	
375	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	45.4	(11.6)	(19.7)	1.6	3350	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
376	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	44.7	13.5	20.9	1.6	3150	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	凸面：ケズリ一部省略
377	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	42.5	13.0	(18.9)	1.6	2060	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	狭端面：藁痕わずかに残る
378	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	45.6	12.7	20.5	1.5	2850	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	凸面：狭端側ケズリ省略
379	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	45.7	11.9	18.7	1.8	3140	灰 5Y6/1	ほぼ完形	狭端面：藁痕残る
380	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c		-	(19.3)	1.4	840	淡黄 2.5Y8/3	広・側	
381	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ A	c	45.4	10.9	18.9	1.2	2400	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	凸面：右半ケズリ省略
382	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	44.4	(13.2)	19.5	1.6	2060	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	分割破面が一部残る
383	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c		11.1	-	1.5	1600	淡黄 2.5Y8/3	狭・側	凸面：狭端側ケズリ省略
384	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ A	c		(12.8)	-	0.9	536	灰白 2.5Y8/2	狭・側	
385	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c		-	20.0	1.5	1710	淡黄 2.5Y8/3	広・側	
386	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	42..9	(12.0)	20.7	1.9	3220	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	狭端側を斜めに切り落とし
387	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ A	c	46.3	13.2	20.5	1.5	2670	浅黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	凸面調整がⅢ類 A と B の混合
388	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ A	c	45.0	(12.7)	20.0	1.9	3200	浅黄 2.5Y7/4	ほぼ完形	側端面：不十分な截面残る
389	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	b	44.7	12.6	18.0	1.4	2300	浅黄 2.5Y7/3	ほぼ完形	狭端面：藁痕わずかに残る
390	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	b	44.2	12.5	(18.6)	1.8	3170	灰黄 2.5Y6/2	ほぼ完形	狭端面：藁痕わずかに残る
391	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	b	44.8	13.8	19.9	2.0	3490	淡黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	粘土接合痕明瞭
392	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	b	45.4	11.0	20.3	1.6	3110	浅黄 2.5Y7/4	ほぼ完形	
393	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	b	45.0	12.3	19.3	1.8	3300	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
394	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	44.6	12.1	20.5	1.7	3240	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	37 と同一の粘土円筒
395	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	44.1	10.9	21.0	1.9	3210	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	47 と同一の粘土円筒
396	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	42.6	14.5	19.4	1.6	2730	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	
397	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	43.0	13.8	19.3	1.7	3250	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	
398	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	45.4	11.3	19.8	2.0	3520	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
399	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	45.4	12.7	(18.7)	1.7	1980	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
400	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	43.9	12.3	18.8	1.7	3210	浅黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	広端側に分割破面・截面残る
401	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	45.0	(15.0)	21.2	1.7	2780	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
402	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ B1	c	43.6	12.6	21.0	1.7	3000	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	凸面：斜め縄叩き残る
403	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	44.3	11.6	18.8	2.1	3380	灰白 2.5Y7/1	ほぼ完形	狭端面：藁痕残る
404	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	46.2	12.0	20.3	1.7	3000	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
405	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	45.5	10.8	(19.8)	1.2	1800	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
406	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	40.8	11.8	21.1	1.8	2670	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
407	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	44.9	12.6	(19.7)	2.0	3280	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	凸面：斜め叩き残る
408	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	44.9	12.1	19.8	1.6	2890	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	凸面：斜め縄叩き残る
409	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	42.8	11.9	(19.8)	1.8	2580	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	
410	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	44.8	13.5	20.0	1.9	3240	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	凸面：斜め縄叩き残る
411	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c		-	(20.2)	1.4	1420	灰黄 10Y R 8/2	広・側	長さが短い
412	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c	45.5	10.5	20.0	1.6	3300	浅黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	

表８　遺物一覧表（丸瓦３）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	分類	布	長さ(cm)	狭端幅 (cm)	広端幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調	残存部	備考
413	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B1	c		-	(20.2)	1.8	2270	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	特殊例　狭端：Ｖ字形に切り欠き
414	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ B2	d	39.1	10.0	16.6	1.4	1890	浅黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	
415	丸瓦	3	窯体内	埋土	Ⅲ B2	d	41.0	10.2	(16.3)	1.9	2550	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	狭端面：藁痕残る
416	丸瓦	3	窯体内	埋土	Ⅲ B2	d	40.9	10.7	(15.7)	2.0	2580	浅黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	粘土接合痕（Ｓ型）
417	丸瓦	3	窯体内	埋土	Ⅲ B2	d	40.7	10.7	16.3	1.9	2370	浅黄橙 10YR8/4	ほぼ完形	粘土接合痕（Ｓ型）
418	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B2	d	40.9	10.5	16.7	1.4	1840	浅黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	煤付着
419	丸瓦	3	窯体内	床面	Ⅲ B2	d	40.3	(11.0)	17.4	1.4	1610	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
420	丸瓦	3	窯体内	床面＋埋土＋２号窯灰原	Ⅲ B2		39.5	9.5	(16.1)	1.8	2217	浅黄橙 10YR8/4	広・狭・側	
421	丸瓦	3	窯体内	埋土＋２号窯体内＋灰原	Ⅲ B2	d	40.5	(10.0)	(15.0)	1.2	896	浅黄橙 10YR8/3	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
422	丸瓦	3	窯体内	床面＋２号窯灰原	Ⅲ B2			-	17.5	1.6	1112	浅黄橙 10YR8/4	広・側	
423	丸瓦	3	窯体内	埋土＋２号窯灰原	Ⅲ B2		40.4	9.8	16.2	1.5	1833	浅黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	
424	丸瓦	3	窯体内	埋土＋２号窯灰原	Ⅲ B2		41.3	(10.3)	(17.4)	1.7	1436	浅黄橙 10YR8/3	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
425	丸瓦	3	窯体内	埋土＋２号窯焚口＋灰原	Ⅲ B2		38.8	(11.0)	16.8	1.8	2031	にぶい黄橙 10YR7/3	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
426	丸瓦	3	窯体内	埋土＋２号窯灰原	Ⅲ B2		39.2	11.0	16.2	1.8	2380	浅黄橙 10YR8/4	ほぼ完形	
427	丸瓦	3	窯体内	埋土＋埋土	Ⅲ B2			-	16.8	1.6	887	浅黄橙 10YR8/4	広・側	粘土接合痕（Ｓ型）
428	丸瓦	3	灰原	N8・P8	Ⅰ A			-	15.0	1.1	179	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	
429	丸瓦	3	灰原	F4・J4	Ⅰ A			-		1.3	174	暗灰N 3/	狭・側	
430	丸瓦	3	灰原	M5	Ⅰ A			-		1.9	126	灰 N4/	狭	
431	丸瓦	3	灰原	K9・N7+ 表土	Ⅰ A			-		1.3	194	灰 5Y6/1	狭	
432	丸瓦	3	灰原	M3	Ⅰ A			-		1.8	39	暗灰 N3/	狭・側	
433	丸瓦	3	灰原	M3	Ⅰ A			-		1.6	90	灰 N6/	狭・側	
434	丸瓦	3	灰原	K9･M4･M5･W8･ｕ９	Ⅰ B			(18.3)	(16.0)	1.8	1560	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	
435	丸瓦	3	灰原		Ⅱ A	a	42.4	18.8	(12.4)	1.5	1925	灰白 5Y8/1	ほぼ完形	布端（広端側）
436	丸瓦	3	灰原	K5+L4+U9	Ⅱ A	a		-	11.7	1.5	1040	灰 5Y6/1	狭・側	
437	丸瓦	3	灰原		Ⅱ A	a		-	(9.8)	1.3	960	灰白 2.5Y7/1	狭・側	側板痕明瞭
438	丸瓦	3	灰原	K5+L4+K7	Ⅱ A	a		-	11.8	1.7	675	灰黄 2.5Y6/2	狭・側	
439	丸瓦	3	灰原	P8	Ⅱ A	a		-	(11.6)	1.7	790	浅黄 2.5Y7/4	狭・側	
440	丸瓦	3	灰原	J8+M2+J12+K11+S10	Ⅱ A	―		-	(10.4)	1.2	386	灰 5Y5/1	狭・側	焼き歪み大きい
441	丸瓦	3	灰原		Ⅱ B	a	40.4	16.4	11.2	1.8	2380	浅黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	裏返しの布
442	丸瓦	3	灰原	T12+Q10	Ⅱ B	a		-	11.1	1.5	1330	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	粘土巻き上げ逆向き
443	丸瓦	3	灰原	N6	Ⅱ B	a		-	11.5	2.0	1330	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	
444	丸瓦	3	灰原		Ⅲ A	b	44.8	(19.4)	(13.3)	1.8	2930	褐灰 10YR5/1	広・狭・側	
445	丸瓦	3	灰原	O4+N5	Ⅲ A	b	42.6	17.5	11.8	2.1	3085	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
446	丸瓦	3	灰原	M3+N3+O4+U6+N5+N4	Ⅲ A	b		19.2	-	1.8	2035	淡黄 2.5Y8/3	広・側	布端
447	丸瓦	3	灰原	O10+K14	Ⅲ A	c		-	12.5	1.4	509	黄灰 2.5Y5/1	狭・側	
448	丸瓦	3	灰原	M3+J4	Ⅲ A	c		-	12.3	1.6	353	褐灰 10YR4/1	狭・側	狭端面：藁痕残る
449	丸瓦	3	灰原		Ⅲ A	c		-	11.8	1.7	1320	淡黄 2.5Y8/3	狭・側	
450	丸瓦	3	灰原	K2+M7+N6+N10+N7+N8	Ⅲ A	c		19.0	-	1.9	1540	灰 7.5Y6/1	広・側	焼き歪み大きい
451	丸瓦	3	灰原	M3+L3;L4	Ⅲ A	c			-	1.6	918	灰 10Y4/1	広・側	
452	丸瓦	3	灰原	N4+M4	Ⅲ A	-		-	(13.2)	1.2	1100	淡黄 2.5Y8/4	狭・側	表面磨滅著しい
453	丸瓦	3	灰原		Ⅲ B1	b	38.4	(19.3)	(12.8)	1.4	1755	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	裏返しの布
454	丸瓦	3	灰原	L4+L5+W6+N6+M4+O8+P9	Ⅲ B1	c	41.3	19.8	(12.2)	1.5	1825	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	布端（広端側）
455	丸瓦	3	灰原		Ⅲ B1	c		(20.0)	-	1.6	1630	黄灰 2.5Y4/1	広・側	
456	丸瓦	3	灰原	-	Ⅲ B1	―		20.4	-	1.8	692	灰白 2.5Y8/2	広・側	布端（広端側）
457	丸瓦	3	灰原	L4+L5	Ⅲ B1	―		-	(11.9)	1.8	968	淡黄 2.5Y8/4	狭・側	
458	丸瓦	3	灰原	M4+N6	Ⅲ B1	―		20.0	-	1.7	1175	灰白 2.5Y8/2	広・側	表面の磨滅著しい
459	丸瓦	3	灰原		Ⅲ B2	d		(16.0)	-	1.4	885	灰白 2.5Y8/1	広・側	表面磨滅著しい
460	丸瓦	3	灰原	L4	Ⅲ B2	―		-	(10.5)	1.5	322	浅黄 2.5Y7/4	狭・側	
461	丸瓦	3	灰原	K5+L6	Ⅲ B2	―		-	10.4	1.7	354	浅黄 2.5Y7/3	狭・側	
462	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅰ C	―	41.5	12.8	(16.5)	2.4	2898	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	破片によって収縮異なる
463	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅰ C	―		13.5	-	1.8	1271	浅黄 2.5Y7/3	狭・側	表面の磨滅著しい
464	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅰ C	―			-	1.9	810	灰白 2.5Y8/2	狭・側	
465	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅰ C	―		11.5	-	1.5	1036	淡黄 2.5Y7/3	狭・側	表面の磨滅著しい
466	丸瓦	2	窯体内	床面＋焚口付近	Ⅰ C	―			-	2.4	580	灰白 2.5Y8/2	狭・側	
467	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅰ C	―		-	(18.0)	2.1	1400	青灰 5B5/1	広・側	断面に灰被り
468	丸瓦	3	窯体内	床面＋灰原	Ⅰ C			-	16.6	2.1	1180	灰 N6/	広・側	
469	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B3		40.1	(10.9)	(16.2)	1.1	1661	浅黄橙 10YR8/4	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
470	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B3		36.5	(10.0)	(16.5)	1.1	1061	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
471	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B3		38.2	10.5	(17.4)	1.6	1590	浅黄橙 10YR8/3	広・狭・側	分割突帯
472	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B3	d	38.5	(11.4)	(16.6)	1.4	1267	浅黄橙 10YR8/4	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
473	丸瓦	2	窯体内	床面＋前庭部＋灰原	Ⅲ B3	d		12.8	-	1.3	257	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	分割突帯
474	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B3			(11.0)	-	1.6	994	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	凸面磨滅著しい
475	丸瓦	2	窯体内	床面	Ⅲ B3			10.7	-	1.6	461	浅黄橙 10YR8/4	狭・側	分割突帯
476	丸瓦	2	窯体内	埋土	Ⅲ B3		38.9	11.0	(16.4)	1.8	2090	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	
477	丸瓦	2	窯体内	埋土	Ⅲ B3	e		(12.0)	-	1.7	1110	灰白 10YR　8/1	狭・側	窯壁付着
478	丸瓦	2	窯体内	床面	Ⅲ B3	e		11.6	-	1.7	488	灰白 2.5YR8/2	狭・側	表面の磨滅著しい
479	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B3	―		-	15.9	1.8	1340	淡黄 2.5Y8/3	広・側	窯壁付着
480	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B4	f	35.7	11.6	16.7	2.1	2690	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	分割突帯
481	丸瓦	2	窯体内	床面＋焚口付近＋灰原	Ⅲ B4	f	38.2	(11.7)	17.5	2.0	2403	黄橙 10YR8/6	広・狭・側	分割突帯
482	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B4		38.2	(12.7)	18.0	2.1	2584	浅黄橙 10YR8/4	広・側	分割突帯
483	丸瓦	2	窯体内	床面	Ⅲ B4	g	38.2	12.1	(17.9)	1.7	2075	浅黄 2.5Y7/3	ほぼ完形	
484	丸瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B4	g		12.7	-	2.3	1106	淡黄 2.5Y8/4	狭・側	
485	丸瓦	2	窯体内	床面	Ⅲ B4		38.0	11.4	(17.0)	1.7	2160	灰白 5Y7/1	ほぼ完形	
486	丸瓦	2	窯体内	床面＋焚口付近＋灰原	Ⅲ B4		40.5	11.5	(16.5)	1.6	1673	浅黄橙 10YR8/3	広・狭・側	胎土分析（No.18）
487	丸瓦	2	窯体内	床面	Ⅲ B4			-	17.8	1.9	1410	淡黄 2.5YR8/3	広・側	窯壁付着
488	丸瓦	2	窯体内	床面＋前庭部＋灰原	Ⅲ A	c		11.6	-	1.3	1188	灰白 5Y7/1	狭・側	窯壁付着
489	丸瓦	2	灰原	D4	Ⅰ C			-		1.9	394	淡黄 2.5Y8/4	狭	
490	丸瓦	2	灰原	D4	Ⅰ C	―		-		1.9	319	淡黄 2.5Y8/4	狭	
491	丸瓦	2	灰原	D2	Ⅰ C			-		1.7	213	灰白 N7/	狭・側	
492	丸瓦	2	灰原	C1+D2+E3+F2+ 前庭部	Ⅱ B			-	11.5	1.2	640	灰 5Y6/1	狭・側	
493	丸瓦	2	灰原	E3	Ⅱ B	―		-	13.7	1.4	475	灰白 2.5Y7/1	狭・側	やや歪む
494	丸瓦	2	灰原	D3	Ⅱ B			-	(12.1)	1.9	591	灰 10Y6/1	狭・側	
495	丸瓦	2	灰原	D3 ＋ E3 ＋前庭部	Ⅱ B			15.0	-	1.7	742	灰 5Y5/1	広・側	凸面：縄叩き残る
496	丸瓦	2	灰原	a1 ＋ D4	Ⅲ A			-	(11.4)	1.3	687	灰 N6/	狭・側	

表９　遺物一覧表（丸瓦４）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	分類	布	長さ(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存部	備考
497	丸瓦	2	灰原	B2 ＋ D3	Ⅲ B3	d	38.6	15.8	9.7	1.7	1860	浅黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	分割突帯
498	丸瓦	2	灰原	E1	Ⅲ B3	d		-	9.7	1.8	909	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	分割突帯
499	丸瓦	2	灰原	D1	Ⅲ B3			-	10.1	1.4	480	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	
500	丸瓦	2	灰原	焚口付近	Ⅲ B3	－		-	(10.0)	1.6	1075	浅黄橙 10YR8/4	狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
501	丸瓦	2	灰原	E1	Ⅲ B3	d		-	(11.0)	1.6	735	灰白 7.5Y8/2	狭・側	裏返しの布ｄを使用
502	丸瓦	2	灰原	D4 ＋ F4 ＋ G4	Ⅲ B3	d		-	(11.5)	1.7	1008	浅黄橙 10YR8/4	狭・側	裏返しの布ｄを使用
503	丸瓦	2	灰原	D1 ＋ D2 ＋ D4	Ⅲ B3			-	9.7	1.3	469	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	布端（狭端側）
504	丸瓦	2	灰原	A3 ＋ B2 ＋ E1	Ⅲ B3	e		-	11.8	1.7	1000	浅黄橙 7.5YR8/4	狭・側	磨滅
505	丸瓦	2	灰原	D1 ＋ D2	Ⅲ B3			-	(11.3)	1.9	1440	浅黄橙 10YR8/4	狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
506	丸瓦	2	灰原	焚口付近＋ F2 ＋ F3	Ⅲ B4	f	39.2	(17.0)	11.7	1.9	1986	浅黄橙 10YR8/4	広・狭・側	裏返しの布ｆ使用
507	丸瓦	2	灰原	D3 ＋ E2 ＋ E3	Ⅲ B4			-	12.4	1.4	779	にぶい黄橙 10YR7/3	狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
508	丸瓦	2	灰原	D4	Ⅲ B4	－		(18.0)	-	2.0	576	浅黄橙 10YR8/4	広・側	
509	丸瓦	1	窯体内	段＋埋土＋灰原	Ⅰ D	－		-		2.2	1191	灰 7.5Y6/1	狭・側	
510	丸瓦	1	窯体内	燃焼部（下面）＋灰原	Ⅰ D	－		-	(12.4)	2.3	660	灰白 5Y8/2	狭・側	
511	丸瓦	1	窯体内	埋土	Ⅰ D	－		-		2.5	438	灰白 2.5Y8/1	狭・側	
512	丸瓦	1	窯体内	床面＋焚口＋灰原	Ⅲ B5	h	40.2	17.8	(13.7)	1.8	2575		広・狭・側	
513	丸瓦	1	窯体内	床面＋段	Ⅲ B5	h	39.1	(17.4)	(13.0)	1.9	2150	灰白 5Y8/2	広・狭・側	
514	丸瓦	1	窯体内	床面＋焚口	Ⅲ B5	h	39.0	(17.5)	13.3	1.8	2140	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	凸面：縄叩き痕わずかに残る
515	丸瓦	1	窯体内	床面＋埋土	Ⅲ B5	h	40.1	(18.5)	13.4	1.9	2310	淡黄 2.5Y8/6	広・狭・側	凸面の磨滅著しい
516	丸瓦	1	窯体内	床面	Ⅲ B5	h	39.6	(17.0)	(13.5)	2.0	1815	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
517	丸瓦	1	窯体内	段＋焚口	Ⅲ B5	h		18.6	-	1.7	1700	灰白 7.5Y8/1	広・側	
518	丸瓦	1	窯体内	床面	Ⅲ B5	－		-	(13.5)	1.7	1120	灰白 2.5Y8/2	狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
519	丸瓦	1	窯体内	窯体内	Ⅲ B5	h		-	12.9	1.8	1090	橙 5YR6/6	狭・側	
520	丸瓦	1	窯体内	床面	Ⅲ B5	h		16.0	-	2.1	1525	灰白 2.5Y8/2	広・側	
521	丸瓦	1	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ B6	i	31.7	(18.0)	(13.2)	1.8	2190		広・狭・側	
522	丸瓦	1	窯体内	床面＋段	Ⅲ B6	－	31.9	18.5	(13.8)	1.8	1735	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
523	丸瓦	1	窯体内	窯体内＋段	Ⅲ B6	－		-	13.8	1.4	505	浅黄 5Y7/3	狭・側	
524	丸瓦	1	窯体内	段＋埋土	Ⅲ B6	i		-	(12.3)	1.7	790	褐灰 10YR4/1	狭・側	
525	丸瓦	1	窯体内	床面＋段	Ⅲ B6	i	30.7	(19.5)	(12.5)	1.6	1310		広・狭・側	布ｈの裏返し
526	丸瓦	1	窯体内	床面＋段＋焚口	Ⅲ B6	－		-	13.1	1.6	1335	浅黄 2.5Y7/3	狭・側	
527	丸瓦	1	窯体内	窯体内＋段	Ⅲ B6	－		-	(12.5)	1.7	560	灰白 2.5Y8/1	狭・側	
528	丸瓦	1	窯体内	床面＋段	Ⅲ B7	－	36.8	19.7	13.2	2.0	2575		広・狭・側	特殊例
529	丸瓦	1	灰原	a5 ＋ a8	Ⅲ B3	－		-	(11.2)	1.7	740	灰白 2.5Y8/2	狭・側	全体に焼土付着
530	丸瓦	1	灰原	A5 ＋ a5	Ⅲ B4	－	37.7	(17.4)	(11.7)	1.6	1350			凹面の全体に焼土付着
531	丸瓦	1	灰原	a4 ＋ a5 ＋ A5	Ⅲ B4	－		-	(11.6)	2.1	805	灰白 2.5Y8/2	狭・側	
532	丸瓦	1	灰原	B2	Ⅲ B5	h	39.1	(18.0)	(12.6)	1.8	2475			
533	丸瓦	1	灰原	A1+B1+B2+A14+ 焚口	Ⅲ B5	h	39.5	(18.2)	13.0	2.0	2675	にぶい黄橙 10YR7/3	広・狭・側	凸面の磨滅著しい
534	丸瓦	1	灰原	前庭部	Ⅲ B5	h	39.3	(17.7)	12.7	2.0	2625	にぶい黄橙 10YR7/3	広・狭・側	
535	丸瓦	1	灰原	B2	Ⅲ B5	h	39.6	(18.7)	(13.0)	2.1	2200	にぶい黄橙 10YR7/3	広・狭・側	
536	丸瓦	1	灰原	A2 ＋ B2	Ⅲ B5	h	39.4	(17.0)	(13.2)	1.9	1660	にぶい黄橙 10YR7/3	広・狭・側	
537	丸瓦	1	灰原	B3 ＋ C2 ＋ C3 ＋ B2	Ⅲ B5	h	39.0	(16.4)	12.3	1.8	1890	にぶい黄橙 10YR6/3	広・狭・側	
538	丸瓦	1	灰原	B2 ＋ B3	Ⅲ B5	h	39.7	17.3	(12.9)	1.7	2340			粘土接合痕（Ｓ型）
539	丸瓦	1	灰原	A2+A3+A5+B2+B5	Ⅲ B5	h		-	(13.0)	1.7	1685	褐灰 10YR4/1	狭・側	凸面：縄叩き残る
540	丸瓦	1	灰原	B2 ＋ B3	Ⅲ B5	h	40.0	17.0	12.1	2.0	2925	浅黄橙 10YR8/4	広・狭・側	布端（広端側）
541	丸瓦	1	灰原	B2 ＋ B3	Ⅲ B5	h	39.5	(17.7)	12.5	1.9	2610	にぶい橙 7.5YR7/4	広・狭・側	
542	丸瓦	1	灰原	A1 ＋ B1+B2	Ⅲ B5	h	40.0	(18.4)	(12.6)	1.6	2085	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	粘土接合痕（Ｓ型）
543	丸瓦	1	灰原	A1 ＋焚口付近	Ⅲ B5	h		18.1	-	1.9	1975	淡黄 2.5Y8/4	広・側	表面の磨滅著しい
544	丸瓦	1	灰原	C3	Ⅲ B5	h		-	(13.0)	2.0	1085	にぶい黄橙 10YR7/4	狭・側	
545	丸瓦	1	灰原	B2 ＋ C2 ＋ C4	Ⅲ B5	h		-	(12.4)	1.6	1100	にぶい黄橙 10YR7/4	狭・側	
546	丸瓦	1	灰原	B4 ＋ B5	Ⅲ B5	h		-	(14.0)	1.7	770	黄橙 10YR8/6	狭・側	
547	丸瓦	1	灰原	B2 ＋ B3 ＋ B5	Ⅲ B5	h		(17.6)	-	1.9	1260	にぶい黄 10YR6/6	広・側	
548	丸瓦	1	灰原	焚口付近	Ⅲ B5	h		(17.8)	-	2.0	1615	黄 2.5Y8/6	広・側	粘土接合痕（Ｓ型）
549	丸瓦	1	灰原	B2 ＋ B3 ＋ B4	Ⅲ B5	h		17.0	-	1.8	1225	にぶい黄橙 10YR6/4	広・側	
550	丸瓦	1	灰原	前庭部	Ⅲ B5	－	40.0	17.8	(12.5)	1.6	2365	浅黄橙 10YR8/4	ほぼ完形	粘土接合痕（Ｓ型）
551	丸瓦	1	灰原	B3 ＋ B4 ＋ B5 ＋ C3	Ⅲ B5	－		-	(12.7)	1.8	1264	灰黄褐 10YR6/2	狭・側	
552	丸瓦	1	灰原	C8	Ⅲ B5	－		-	(12.6)	1.7	515	にぶい黄橙 10YR6/4	狭・側	
553	丸瓦	1	灰原	B2 ＋ B3 ＋ B4 ＋ B5	Ⅲ B5	－		-	12.4	2.0	1280	明黄褐 10YR6/6	狭・側	
554	丸瓦	1	灰原	B2	Ⅲ B5	－		(17.5)	-	1.8	1800	灰黄 2.5Y7/2	広・側	
555	丸瓦	1	灰原	B5 ＋ C5	Ⅲ B5	－		17.8	-	1.9	585	明黄褐 10YR6/6	広・側	布端（広端側）
556	丸瓦	1	灰原	A7	Ⅲ B6	i		16.2	-	2.0	1000	淡黄 2.5Y8/4	広・側	裏返しの布ｉを使用
557	丸瓦	1	灰原	A2 ＋ B3	Ⅲ B6	－	29.3	-	(13.5)	1.5	980	明黄褐 10YR7/6	広・狭・側	
558	丸瓦	1	灰原	A2	Ⅲ B6	－		-	(15.0)	1.5	510	黄 2.5Y8/6	狭・側	表面の磨滅著しい
559	丸瓦	1	灰原	B13 ＋ a1	Ⅲ B6･7	－		(18.7)	-	1.6	675	オリーブ黄 5Y6/3	広・側	
560	丸瓦		SX01		Ⅲ B6	i	(30.7)	(17.5)	(12.0)	1.6	1001	にぶい黄橙 10YR7/4	広・狭・側	裏返しの布ｉを使用
561	丸瓦		SX01		Ⅲ C			-	(14.0)	1.5	618	にぶい黄橙 10YR7/3	狭・側	
562	丸瓦		SX02		Ⅲ B5	h	39.5	(16.5)	12.5	1.8	2298	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
563	丸瓦		SD01		Ⅲ B5	h		-	11.8	2.0	1451	灰白 2.5Y7/1	狭・側	
564	丸瓦		SD01		Ⅲ B6	i	31.0	18.5	13.0	1.8	2001	橙 7.5YR6/6	広・狭・側	
565	丸瓦		SD01		Ⅲ B6	i	31.9	17.8	14.2	1.9	2358	にぶい黄橙 10YR7/3	広・狭・側	
566	丸瓦		SD01		Ⅲ B6	i	31.5	19.5	13.5	2.0	2290	明黄褐 10YR7/6	広・狭・側	
567	丸瓦		SD01		Ⅲ B6	i	29.9	18.5	12.5	1.7	2042	橙 7.5YR7/6	広・狭・側	
568	丸瓦		SD01		Ⅲ B6		31.0	18.0	14.0	2.0	2206	橙 7.5YR6/6	広・狭・側	
569	丸瓦		SD01		Ⅲ B7		35.7	18.4	14.5	2.3	2862	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
570	丸瓦		SD01		Ⅲ B7		(34.8)	(19.8)	12.2	1.7	1452	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	

表 10　遺物一覧表（平瓦１）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	長さ(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存部	備考
571	平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	39.7	(32.0)	(33.9)	1.3	2500	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	分割突帯
572	平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	41.1	(31.1)	(33.2)	1.8	3620	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
573	平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	39.6	(29.6)	(33.6)	1.9	3960	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	
574	平瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅠA	39.3	29.5	(31.5)	1.7	2950	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
575	平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	40.6			1.9	3210	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	
576	隅平瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅠA	(40.7)	(30.6)	-	1.7	2680	灰白 2.5Y8/2	狭・斜・側	斜端：凹面側から截断
577	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	43.4	(31.6)	-	1.9	3160	灰黄 2.5Y7/2	完形	分割突帯
578	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	27.0	(29.6)	-	1.9	2650	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	凸面に斜め縄叩き残る
579	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA		31.4	-	2.2	2510	淡黄橙 10YR8/3	狭・斜・側	
580	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	40.1	(30.4)	-	2.1	4180	淡黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	焼成・焼き縮みが異なる破片接合
581	隅平瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅠA	36.8	(28.7)	-	1.9	2420	淡黄 2.35Y7/3	狭・斜・側	凸面に斜め縄叩き残る
582	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	41.3	30.7	-	2.0	3520	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	凸面に斜め縄叩き残る
583	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	(39.5)	(32.3)	-	2.2	2940	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	磨滅著しい
584	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	41.8	31.1	-	2.0	3840	淡黄 2.5Y8/4	狭・斜・側	凸面：横方向の窪み
585	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠA	38.8	(31.3)	-	2.2	2920	淡黄橙 10YR8/3	狭・斜・側	
586	隅平瓦	3	窯体内	床面＋埋土（4 層）	ⅠA	39.9	30.3	-	2.6	3840	黄灰 2.5Y6/1	ほぼ完形	
587	隅平瓦	3	窯体内	床面	ⅠB	(38.3)	(29.0)	-	2.2	3860	淡黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	凸面に一部布目
588	平瓦	3	窯体内	床面	ⅡA	40.5	25.5	27.1	2.3	4410	灰白 10YR8/2	広・狭・側	
589	平瓦	3	窯体内	床面＋埋土	ⅡA	40.8	25.0	27.7	2.1	4260	灰白 10YR8/2	広・狭・側	
590	平瓦	3	窯体内	床面	ⅡA		25.4	-	1.7	1300	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	粘土接合痕（Z 型）
591	平瓦	3	窯体内	埋土	ⅡA		-	26.3	2.4	2760	浅黄橙 10YR8/4	広・側	表面磨滅著しい
592	平瓦	3	窯体内	床面	ⅡA		-	28.2	2.4	2020	灰白 10YR8/2	広・側	粘土接合痕（Z 型）
593	平瓦	3	窯体内	床面	ⅡA		-	27.2	2.4	830	浅黄橙 10YR8/4	広・側	
594	平瓦	3	灰原	O5+O7	ⅠA		—	(32.4)	2.3	3500	灰オリーブ 5Y6/2	広・側	
595	平瓦	3	灰原	L3	ⅠA		29.2	—	2.0	1940	灰白 7.5Y7/1	狭・側	
596	平瓦	3	灰原	L3	ⅠA	41.5	(30.5)	(35.0)	2.0	2260	にぶい黄 2.5Y6/4	広・狭・側	
597	平瓦	3	灰原	N4+O6+W7	ⅠB	38.7	27.0	28.8	1.9	4170	にぶい黄橙 10YR7/3	広・狭・側	
598	平瓦	3	灰原	M4+M5+P8+N8	ⅠB	38.1	27.6	(31.5)	2.0	2965	灰白 5Y7/2	広・狭・側	
599	平瓦	3	灰原	N3+Q8	ⅠB	39.0	26.4	31.0	2.2	4675	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
600	平瓦	3	灰原	K12+M5+N3+N4+N5+W7+M7	ⅠB	37.5	(27.6)	30.0	2.4	4035	灰 7.5Y4/1	広・狭・側	側端面狭端付近に分割破面
601	平瓦	3	灰原	L5+L6+M3+M4+M6+M8	ⅠB	37.6	(29.0)	29.8	2.4	4670	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	
602	平瓦	3	灰原	M4+N3+N4	ⅠB	37.2	27.2	31.4	2.0	4210	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	
603	平瓦	3	灰原	M4+O8+R9	ⅠB	37.8	29.4	(31.7)	2.1	4050	灰白 7.5Y7/1	広・狭・側	
604	平瓦	3	灰原	N4+N5+M5	ⅠB	37.8	27.8	28.5	1.8	4500	灰 7.5 Y 5/1	広・狭・側	焼き歪み大きい
605	平瓦	3	灰原	L4+N9+N10+O10+P7+V7+M5+BR38+P12	ⅠB	37.0	(28.2)	(32.1)	1.0	3115	灰黄 2.5 Y 6/2	広・狭・側	
606	平瓦	3	灰原	I6+L3+L7+I11	ⅠB	37.3			1.8	3000	灰 7.5Y5/1	広・狭・側	分割破面が一部残る
607	平瓦	3	灰原	N4+O4+M4	ⅠB	37.7	26.4	(28.9)	2.0	3200	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	
608	平瓦	3	灰原	M5+N4	ⅠB	36.9	(24.4)	(28.0)	2.1	2475	灰 N6/0	広・狭・側	
609	平瓦	3	灰原	K4+L3+O5+O6+O4	ⅠB	37.6	(23.3)	(24.2)	1.5	1950	灰白 5Y7/2	広・狭・側	布綴じ痕
610	平瓦	3	灰原	M4	ⅠB	39.6			2.4	2510	灰白 5Y8/1	広・狭・側	粘土接合痕（S 型）
611	平瓦	3	灰原	H7+H8+I3+I4+I5+J6+J8	ⅠB		(30.6)	—	1.9	1020	灰 7.5Y6/1	狭・側	
612	平瓦	3	灰原	H8+J4	ⅠB		28.2	—	2.0	1650	灰オリーブ 7.5Y5/2	狭・側	側端狭端付近に破面
613	平瓦	3	灰原	M4	ⅠB		27.7	—	2.8	2360	灰 7.5Y6/1	狭・側	
614	平瓦	3	灰原	H9·10·13+I5·9～12+J4·8+K5·6·11·13+L7·12+N10+S9+T7	ⅠB	36.3			2.0	2320	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	布綴じ痕・分割突帯
615	平瓦	3	灰原	L3+L4+M5	ⅠB	34.9	28.8	32.0	4	4050	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	
616	平瓦	3	灰原	F4+M3	ⅠB	30.3	26.5	(28.8)	3.0	3480	灰黄 2.5Y6/2	広・狭・側	側面に他個体の一部が融着
617	平瓦	3	灰原	K4+L3	ⅠB	36.8			1.6	2570	灰オリーブ 7.5Y5/2	広・狭・側	広端：三角形に切り込む
618	平瓦	3	灰原	N4+N5	ⅠB	36.3	24.6	30.5	2.2	4070	灰オリーブ 7.5Y6/2	広・狭・側	広端面中央：内側に湾曲
619	平瓦	3	灰原	L3+L4+L6+N4	ⅠB		—		1.8	1775	灰白 5Y7/2	広・側	凸面に窯壁付着
620	平瓦	3	灰原	L5+M5+N7	ⅠB		(25.8)	—	1.8	1940	灰オリーブ 7.5Y5/2	狭・側	焼け歪みで凹面側に湾曲
621	平瓦	3	灰原	O7	ⅠB		(25.8)	—	1.7	2560	灰 7.5Y6/1	狭・側	側端面狭端付近：分割破面
622	平瓦	3	灰原	J4+J12+K5+M3	ⅠB		(29.5)	—	1.7	1700	灰オリーブ 7.5 Y 6/2	狭・側	
623	平瓦	3	灰原	M5	ⅠB		—	31.2	1.9	2040	浅黄 2.5Y7/3	広・側	全体に磨滅著しい
624	平瓦	3	灰原	M4+M5+N4	ⅠB		—	29.6	1.7	2120	黄灰 2.5Y6/1	広・側	
625	平瓦	3	灰原	O10	ⅠB		—	29.2	2.4	2280	灰黄 2.5Y6/2	広・側	
626	平瓦	3	灰原	O7	ⅡA		(25.7)	—	1.9	1870	灰 N0/5	狭・側	
627	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅠA	39.7	(28.2)	(32.3)	2.3	3156	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	
628	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅠB		(26.4)	—	2.7	2988	灰白 2.5Y7/1	狭・側	破片の一つに自然釉・瓦片融着
629	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅠB	34.7	(24.6)	(26.6)	2.7	3525	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	粘土接合痕（S 型）
630	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅠB		—	(28.5)	1.6	2164	灰白 2.5Y7/1	広・側	
631	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB	39.5	25.9	28.1	2.8	4850	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	
632	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅡB	40.2	27.6	27.9	2.6	5177	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	布綴じ痕
633	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB	40.8	(26.5)	(28.6)	2.6	5110	明黄褐 10YR6/6	ほぼ完形	
634	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅡB	40.2	27.0	(29.7)	2.5	3462	浅黄 2.5Y7/4	広・狭・側	側縁に分割突帯
635	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB	40.3	(27.3)	(28.8)	2.9	5588	にぶい黄橙 10TR7/2	ほぼ完形	
636	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅡB	38.7	(26.0)	28.2	2.6	5164	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	狭端側のみ自然釉
637	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB		—	27.8	2.5	1630	灰白 2.5Y7/1	広・側	
638	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅡB		24.7	—	2.2	1010	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	布綴じ痕
639	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB	39.6	25.5	(27.9)	2.7	4822	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	
640	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB	40.8	(25.5)	27.3	2.5	4830	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
641	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB	37.3	27.0	26.7	2.4	3627	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	破片に自然釉
642	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB		—	26.5	2.4	2684	灰白 2.5Y7/1	広・側	広端が変形して波打つ
643	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅡB		(26.7)	—	1.8	1257	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	窯体内出土部分に自然釉と窯壁
644	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅡB	39.7	(25.8)	28.6	2.2	3480	灰白 2.5Y8/1	広・狭・側	磨滅著しい
645	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB	43.3	(27.7)	(28.8)	2.9	5858	浅黄 2.5Y7/4	広・狭・側	窯体内出土遺物に窯壁付着
646	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅡB		—	(24.4)	2.0	2050	黄灰 2.5Y5/1	広・側	断面被熱
647	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅢA	39.2	26.3	(27.6)	2.4	3155	明黄褐 10YR6/6	広・狭・側	
648	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅢA	39.5	(25.0)	(27.7)	2.3	3910	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	灰原の破片に自然釉
649	平瓦	2	窯体内	床面	ⅢA		(25.5)	—	2.9	2225	明黄褐 10YR6/6	狭・側	
650	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅢA	40.5	24.5	(28.0)	2.5	3775	明黄褐 10YR6/6	広・狭・側	窯体内の破片に自然釉
651	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅢA	40.0	24.9	27.1	2.2	4296	明黄褐 10YR6/6	広・狭・側	
652	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅢB	39.7	26.2	29.5	3.0	5715	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	

表 11　遺物一覧表（平瓦２）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	長さ(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存部	備考
653	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅢB	40.3	26.1	28.0	2.1	4411	明黄褐 10YR6/6	ほぼ完形	斜めの縄目タタキ
654	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅢB	40.5	28.0	29.7	3.1	6664	明黄褐 10YR6/6	広・狭・側	凹面側端に分割突帯
655	平瓦	2	窯体内	床面＋焚口＋灰原	ⅢB	40.0	(27.7)	28.7	3.1	5831	明黄褐 10YR6/6	広・狭・側	
656	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA	37.8	(28.7)	(29.4)	2.6	4715	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	表面磨滅著しい
657	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅣA	37.0	27.5	29.5	2.2	4130	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	藁座痕わずかに残る
658	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA	38.7	27.5	27.0	2.6	4950	黄灰 2.5Y6/1	完形	
659	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA	39.8	(26.5)	(29.0)	1.8	2420	黄灰 2.5Y6/1	広・狭・側	
660	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅣA	37.5	28.4	(28.4)	2.2	2796	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
661	平瓦	2	窯体内	床面＋埋土	ⅣA	39.0	26.6	(28.2)	2.4	3770	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
662	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅣA		26.0	—	1.9	1855	黄灰 2.5Y6/1	狭・側	
663	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA		27.3	—	2.3	2140	灰白 2.5Y8/2	狭・側	凸面全体に窯壁付着
664	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA		—	(29.0)	2.3	1785	灰黄 2.5Y7/2	広・側	凹凸面に窯壁付着
665	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA		—	29.3	2.4	1535	灰白 2.5Y7/1	広・側	断面被熱
666	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA		—	(28.7)	2.3	2535	灰白 2.5Y8/2	広・側	表面磨滅著しい
667	隅平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅣA	(39.2)	(28.0)	-	2.5	3302	灰白 10YR7/1	狭・斜・側	
668	隅平瓦	2	窯体内	床面＋埋土	ⅣA	37.8	(27.4)	-	1.9	2338	にぶい黄橙 10YR6/4	狭・斜・側	焼土付着
669	隅平瓦	2	窯体内	床面	ⅣA	(35.2)	(26.7)	-	2.5	2445	灰オリーブ 5Y6/2	狭・斜・側	
670	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣB	37.8	(29.5)	(29.2)	2.5	5340	にぶい黄 2.5Y6/3	広・狭・側	凹凸面に窯壁付着
671	平瓦	2	窯体内	床面＋埋土＋灰原	ⅣB	38.8	28.8	(30.0)	2.5	4310	にぶい黄 2.5Y6/3	広・狭・側	
672	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣB	40.2	(29.4)	(29.4)	2.5	4820	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	
673	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣB	41.4	25.8	28.8	2.4	4965	灰黄 2.5Y7/2	ほぼ完形	側端面磨滅
674	平瓦	2	窯体内	床面	ⅣB	40.9	(29.1)	29.6	2.9	4760	にぶい黄 2.5Y6/3	広・狭・側	凹面に窯壁付着
675	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅣB	40.7	(29.4)	(29.4)	2.4	3590	にぶい黄 2.5Y6/3	広・狭・側	凸面に窯壁付着
676	平瓦	2	窯体内	埋土	ⅣB		(28.8)	—	2.0	1620	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	表面磨滅著しい
677	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅣB	41.0	(28.8)	30.5	2.6	4,406	にぶい黄 2.5Y6/3	広・狭・側	凸面に窯壁付着
678	平瓦	2	窯体内	床面＋灰原	ⅣB		—	(30.3)	2.0	2030	にぶい黄 2.5Y6/3	広・側	窯壁付着
679	隅平瓦	2	窯体内	床面	ⅣB	(31.1)	(29.7)	-	2.0	1520	浅黄橙 10YR8/4	狭・斜・側	一部の破片に灰被り
680	平瓦	2	灰原	C3+E4+D1	ⅠA	40.7	(25.8)	(27.9)	1.6	2305	灰オリーブ 5Y6/2	広・狭・側	布綴じ痕
681	平瓦	2	灰原	E3	ⅠB		28.7	—	2.5	1515	浅黄 2.5Y7/3	狭・側	
682	平瓦	2	灰原	E3+E4+F2+F3	ⅠB		—	(28.0)	2.3	2400	灰 5Y6/1	広・側	
683	平瓦	2	灰原	D2+D3+D4	ⅡA	40.1	(26.6)	27.2	3.0	4680	にぶい黄橙 10YR7/4	広・狭・側	
684	平瓦	2	灰原	B1+D1	ⅡA		—	28.5	2.4	2915	浅黄 2.5Y7/3	広・側	布綴じ痕
685	平瓦	2	灰原	C2 ＋焚口付近	ⅡA		—	(27.7)	2.1	2240	浅黄橙 10YR8/4	広・側	表面磨滅著しい
686	平瓦	2	灰原	E3 ＋ F4	ⅡA		25.2	—	2.6	1320	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	
687	平瓦	2	灰原	E2+F2	ⅡA		—	26.8	2.6	1600	にぶい黄橙 10YR7/3	広・側	表面磨滅著しい
688	平瓦	2	灰原	D4+E4	ⅡA	39.6	25.6	(26.2)	2.2	2824	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	
689	平瓦	2	灰原	D3	ⅡA		(23.2)	—	2.2	1700	灰黄 2.5Y6/2	狭・側	側単に分割突帯
690	平瓦	2	灰原	B1+C2	ⅡA	42.6	25.8	(25.9)	2.4	2836	にぶい黄橙 10YR7/4	広・狭・側	
691	平瓦	2	灰原	D2+D4+E4 ＋焚口付近	ⅡB	39.5	26.1	28.5	2.4	4520	にぶい黄橙 10YR7/3	ほぼ完形	
692	平瓦	2	灰原	B1+D2+F2	ⅡB		26.1	—	2.4	1720	浅黄 2.5Y7/4	狭・側	
693	平瓦	2	灰原	D4+E3+E4	ⅡB		—	(28.5)	2.0	2000	にぶい黄橙 10YR7/3	広・側	
694	平瓦	2	灰原	E4	ⅡB		—	29.5	3.0	3430	にぶい黄橙 10YR7/4	広・側	
695	平瓦	2	灰原	D2	ⅡB		—	29.5	3.1	1690	にぶい黄橙 10YR7/4	広・側	
696	平瓦	2	灰原	D1+D2+D3+E1	ⅡB	38.0	(25.2)	(28.5)	1.7	2045	浅黄 2.5Y7/4	広・狭・側	表面の磨滅著しい
697	平瓦	2	灰原	D2+E2	ⅡB		(27.1)	—	1.8	1526	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	粘土板合わせ目（S 型）
698	平瓦	2	灰原	C1+D2	ⅡB		(27.9)	—	1.9	1950	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	表面の磨滅著しい
699	平瓦	2	灰原	D4	ⅡB		—	(31.9)	1.7	1265	灰黄 2.5Y7/2	広・側	
700	平瓦	2	灰原	D1+D2+E2	ⅡB		—	30.0	1.8	1515	浅黄 2.5Y7/3	広・側	布袋綴じ目・布端残る
701	平瓦	2	灰原	E3+D3+E4	ⅡB		—	(31.9)	2.2	1160	淡黄 2.5Y8/3	広・側	布端残る
702	隅平瓦	2	灰原	前庭部	ⅡB	34.2	27.7	-	1.8		淡黄 2.5Y8/4	ほぼ完形	布綴じ痕
703	平瓦	2	灰原	D4	ⅢA	33.7	23.2	26.3	2.3	3730	灰黄 2.5Y6/2	完形	
704	平瓦	2	灰原	B2+C3+E1	ⅢA		24.0	—	2.2	1600	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	
705	平瓦	2	灰原	D2+D4+E3	ⅢA		25.3	—	2.5	1828	黄灰 2.5Y6/1	狭・側	
706	平瓦	2	灰原	D4	ⅢB		(27.2)	—	2.9	2790	にぶい黄橙 10YR7/3	狭・側	粘土接合痕（S型）
707	平瓦	2	灰原	D2 ＋焚口付近	ⅢB		—	29.2	3.6	2140	にぶい黄橙 10YR7/4	広・側	
708	平瓦	2	灰原	C2+F3	ⅢB		—	(29.2)	2.6	1960	にぶい黄橙 10YR7/3	広・側	布綴じ痕
709	平瓦	2	灰原	E2+E3+F2+F5	ⅢB		(24.6)	–	2.6	1385	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	
710	平瓦	2	灰原	D2 ＋焚口付近	ⅢB	40	27.3	27.6	3.1	1775	浅黄 2.5Y7/3	完形	
711	隅平瓦	2	灰原	C4 ＋ D2 ＋ E2	ⅢB	31.2	27.0	-	2.4		浅黄橙 10YR8/4	ほぼ完形	
712	隅平瓦	2	灰原	F3	ⅢB		-	-	3.0		灰黄 2.5YR7/2	斜・側	
713	平瓦	2	灰原	E2+E3+E4	ⅣA		(27.3)	—	1.8	1467	にぶい黄橙 10YR7/4	狭・側	
714	平瓦	2	灰原	C2	ⅣA		—	(28.7)	2.2	939	にぶい黄橙 10YR7/2	広・側	磨滅著しい
715	隅平瓦	2	灰原	B1	ⅣA	36.3	(27.7)	-	1.9		灰白 5Y8/2	ほぼ完形	分割突帯
716	隅平瓦	2	灰原	E2 ＋ E4	ⅣA	38.3	26.6	-	1.8		浅黄橙 10YR8/4	ほぼ完形	凸面に焼土付着
717	隅平瓦	2	灰原	C2	ⅣA	39.1	27.1	-	2.6		灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
718	隅平瓦	2	灰原	B2	ⅣA	38.2	28.4	-	1.9		淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完形	
719	隅平瓦	2	灰原	C2	ⅣA	35.0	27.8	-	2.4		灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	表面の磨滅著しい
720	隅平瓦	2	灰原	D3 ＋ E3	ⅣA	38.8	26.9	-	1.9		灰白 5Y8/2	ほぼ完形	布綴じ痕
721	隅平瓦	2	灰原	B1	ⅣA	(40.1)	26.1	-	2.4		灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
722	隅平瓦	2	灰原	C2 ＋ E3	ⅣA	38.1	27.2	-	2.5		灰白 5Y8/2	ほぼ完形	
723	平瓦	2	灰原	D2+D3	ⅣB	39.0	30.3	(30.5)	2.4	4934	にぶい黄橙 10YR6/4	ほぼ完形	布綴じ痕
724	平瓦	2	灰原	B2+C2+D2+D3	ⅣB	40.4	30.2	30.5	2.1	3870	にぶい黄橙 10YR6/3	ほぼ完形	
725	平瓦	2	灰原	B1+B2+C2	ⅣB		—	31.6	2.4	1964	にぶい黄橙 10YR7/3	広・側	布綴じ痕
726	平瓦	2	灰原	D2+D3	ⅣB	40.2	(30.1)	30.8	2.3	4666	にぶい黄橙 10YR7/4	広・狭・側	
727	平瓦	2	灰原	B1+B2+C3+D3	ⅣB		—	(31.6)	2.3	1554	にぶい黄橙 10YR7/3	広・側	
728	隅平瓦	2	灰原	E2 ＋ G3	ⅣB		-	-	2.6	3080	明褐灰 7.5YR7/2	斜・側	側面：ケズリの重複
729	平瓦	1	窯体内	燃焼部下面	ⅡA		23.4	—	2.3	892	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	
730	平瓦	1	窯体内	床面	ⅡC		26.6	—	1.7	2410	灰白 2.5Y8/2	狭・側	
731	平瓦	1	窯体内	床面	ⅡC		(28.5)	—	2.1	2052	灰白 2.5Y8/1	狭・側	磨滅著しい
732	平瓦	1	窯体内	段	ⅡD	37.2	22.7	27.3	2.3	2180	灰白 10YR8/2	ほぼ完形	粘土接合痕（Z型）
733	平瓦	1	窯体内	埋土	ⅡD		(25.6)	—	2.4	1780	淡黄 2.5Y8/3	狭・側	粘土接合痕（S型）
734	平瓦	1	窯体内	段	ⅡD		(25.5)	—	1.9	2039	浅黄 5Y7/3	狭・側	中央に分割突帯
735	平瓦	1	窯体内	床面	ⅡD		—	(28.5)	2.1	1180	灰黄 2.5Y7/2	広・側	布綴じ痕
736	平瓦	1	窯体内	燃焼部＋灰原	ⅡE		(26.0)	—	2.9	2017	淡黄 2.5Y8/3	狭・側	

表 12　遺物一覧表（平瓦３）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	長さ(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存部	備考
737	平瓦	1	窯体内	段＋灰原	ⅡE		—	29.0	3.3	3120	浅黄橙 10YR8/3	広・側	布綴じ痕
738	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅡF	35.3	(23.0)	(27.5)	1.8	2760	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	粘土接合痕（S型）
739	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅡF	33.9	24.5	26.0	1.7	2910	褐灰 10YR5/1	ほぼ完形	粘土接合痕（Z型）
740	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅡF	35.3	(21.6)	25.7	2.5	3320	灰 7.5Y5/1	広・狭・側	粘土接合痕（Z型）
741	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅡF	35.7	(20.8)	(24.6)	1.7	2221	灰褐 7.5YR6/2	広・狭・側	粘土接合痕（Z型）
742	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅡF		23.0	—	1.6	1190	黄灰 2.5Y5/1	狭・側	表面磨滅著しい
743	平瓦	1	窯体内	段	ⅡF		(24.0)	—	2.1	1100	浅黄橙 10YR8/4	狭・側	布綴じ痕
744	平瓦	1	窯体内	段	ⅡF		—	(27.0)	2.0	1660	黒褐 2.5Y3/2	広・側	
745	平瓦	1	窯体内	床面	ⅡF		—	26.8	1.7	882	にぶい黄橙 10YR7/2	広・側	粘土接合痕（S型）
746	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅡF	36.5	(25.5)	24.9	2.6	3491	にぶい黄橙 10YR7/4	広・狭・側	
747	平瓦	1	窯体内	段＋灰原	ⅣB	38.4	28.1	29.9	3.4	6550	灰白 10YR8/1	ほぼ完形	
748	平瓦	1	窯体内	燃焼部下面	ⅣB		(28.0)	—	3.1	2840	灰 5Y6/1	狭・側	
749	平瓦	1	窯体内	段	ⅣB		27.9	—	2.7	1360	灰白 10YR8/2	狭・側	
750	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA	36.8	(25.5)	27.4	1.6	2191	灰白 5Y8/1	広・狭・側	分割突帯か
751	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA	36.5	27.8	(28.0)	1.9	2616	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
752	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA	36.3	(25.4)	(27.3)	1.6	2390	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
753	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA	36.6	(24.5)	(27.9)	1.5	2081	灰白 10YR8/1	広・狭・側	
754	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA		25.7	—	1.8	1578	灰白 10YR8/2	狭・側	
755	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA	38.0	(26.4)	(29.7)	1.8	2080	灰白 2.5Y8/1	広・狭・側	
756	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA	38.1	26.0	(28.6)	1.4	2140	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
757	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA		(26.1)	—	1.5	741	灰白 N7/	狭・側	
758	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA	38.1	(25.7)	(28.0)	1.9	2800	灰白 10YR8/2	広・狭・側	
759	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA		(24.6)	—	1.9	1957	にぶい黄橙 10YR7/3	狭・側	
760	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤA		(25.5)	—	1.5	1070	灰白 2.5Y8/1	狭・側	
761	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅤB	39.0	27.1	(29.7)	1.7	3225	黒褐 2.5Y3/2	広・狭・側	
762	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	38.1	(27.2)	28.2	2.2	2780	にぶい黄橙 10YR7/4	広・狭・側	
763	平瓦	1	窯体内	段	ⅤB		26.2	—	1.6	1750	灰白 5Y7/1	狭・側	布綴じ痕
764	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	38.2	(26.2)	(28.8)	1.6	2072	灰 N4/	広・狭・側	布綴じ痕
765	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	38.9	(28.2)	(30.2)	1.9	2471	黄灰 2.5Y4/1	広・狭・側	布綴じ痕
766	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	38.7	(26.6)	(29.5)	2.3	3220	暗灰 N3/	広・狭・側	
767	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB		(26.6)	—	1.8	858	暗灰 N3/	狭・側	布綴じ痕
768	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB		—	29.1	1.8	888	黒 2.5Y2/1	広・側	
769	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	39.0	(25.5)	(26.5)	1.5	2260	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
770	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB		(26.0)	(29.4)	1.8	1847	灰 N5/	広・狭・側	
771	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB		(27.4)	—	1.7	1543	黄灰 2.5Y5/1	広・側	
772	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	(38.4)	(27.4)	(28.5)	1.8	1902	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	布綴じ痕
773	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB		(25.0)	(29.0)	2.2	1873	暗灰 N3/	広・狭・側	布綴じ痕
774	隅平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	38.1	25.1	-	1.3	2800	灰白 2.5Y7/1	狭・斜・側	焼き歪み大きい
775	隅平瓦	1	窯体内	床面	ⅤB	37.4	(32.3)	-	1.1	2440	灰白 2.5Y8/1	広・狭・側	布綴じ痕
776	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅤC	41.2	29.0	(31.0)	1.6	4880	灰 N5/	広・狭・側	布綴じ痕
777	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.4	(28.6)	30.6	1.5	3970	灰 5Y4/1	ほぼ完形	布綴じ痕
778	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.4	29.0	(31.2)	1.8	3980	灰 5Y4/1	広・狭・側	布綴じ痕
779	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.5	(28.8)	31.5	1.5	3780	灰 7.5Y4/1	広・狭・側	布綴じ痕
780	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.2	27.8	(31.9)	1.8	4310	にぶい黄橙 10YR7/4	ほぼ完形	布綴じ痕
781	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅤC	40.7	28.4	(31.0)	1.8	2760	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	布綴じ痕
782	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅤC		—	31.4	2.3	2289	灰白 10YR7/1	広・側	藁座痕が明瞭に残る
783	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅤC	41.1	28.8	(31.6)	1.8	3690	オリーブ黒 7.5Y3/2	広・狭・側	粘土接合痕（Z型）
784	平瓦	1	窯体内	床面＋段	ⅤC	(40.0)	(27.8)	(30.0)	1.9	3320	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	粘土接合痕（Z型）
785	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.5	(29.0)	31.3	1.8	4370	灰 N4/	広・狭・側	粘土接合痕（S型）
786	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.0	28.6	(31.2)	2.1	4960	灰 N4/	広・狭・側	
787	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.0	28.2	(30.8)	2.0	4530	灰白 10YR8/2	広・狭・側	
788	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.1	28.5	(31.2)	2.2	5290	灰白 10YR8/2	ほぼ完形	
789	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.3	28.4	(30.3)	1.9	4710	浅黄橙 7.5YR8/3	ほぼ完形	
790	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤC	41.2	(28.9)	31.3	1.9	4560	灰白 10YR8/2	ほぼ完形	
791	平瓦	1	窯体内	段	ⅤC	39.5	29.4	(30.7)	1.7	2850	灰白 5Y8/2	広・狭・側	
792	平瓦	1	窯体内	段＋前庭部	ⅤD	37.5	(23.5)	(25.5)	2.2	2785	灰白 10YR8/1	広・狭・側	分割突帯
793	平瓦	1	窯体内	床面	ⅤD		26.4	—	2.8	2620	灰白 10YR8/1	狭・側	磨滅著しい
794	平瓦	1	窯体内	段＋灰原	ⅤE		(27.0)	—	2.7	2060	灰白 5Y8/1	狭・側	
795	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部	ⅤC	40.9	(27.9)	(30.0)	1.8	4140	黄灰 2.5Y4/1	ほぼ完形	布綴じ痕
796	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部	ⅤC	41.4	27.9	29.7	1.9	4770	褐灰 10YR4/1	ほぼ完形	布綴じ痕
797	平瓦	1	焚口	窯体内＋焚口＋前庭部	ⅤC	40.8	28.3	(30.0)	2.0	4230	灰黄褐 10YR4/2	広・狭・側	布綴じ痕
798	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部	ⅤC	41.5	(28.3)	31.3	2.0	4590	褐灰 10YR4/1	ほぼ完形	布綴じ痕
799	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部	ⅤC	41.2	27.9	30.9	1.9	4340	黄灰 2.5Y4/1	ほぼ完形	粘土接合痕（S型）
800	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部＋灰原	ⅤC	41.2	27.7	(30.2)	2.0	4820	黒褐 2.5Y3/1	ほぼ完形	粘土接合痕（S型）
801	平瓦	1	焚口	焚口	ⅤC	40.7	28.7	30.6	2.1	4970	褐灰 10YR4/1	ほぼ完形	
802	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部	ⅤC	40.9	(27.9)	30.8	2.0	4510	黒褐 10YR3/1	ほぼ完形	
803	平瓦	1	焚口	焚口	ⅤC	41.0	(28.4)	(30.1)	2.3	5180	褐灰 7.5YR5/1	ほぼ完形	
804	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部	ⅤC	41.1	(27.6)	30.3	2.3	5250	褐灰 7.5YR4/1	広・狭・側	
805	平瓦	1	焚口	焚口＋前庭部	ⅤC	41.6	(28.4)	31.0	2.0	4570	黒褐 2.5Y3/1	ほぼ完形	
806	平瓦	1	窯体内	燃焼部奥壁構築瓦	Ⅱ			-	2.4	479	灰黄 2.5Y6/2	狭・側	
807	平瓦	1	窯体内	燃焼部奥壁構築瓦	Ⅴ			-	1.9	304	にぶい黄橙 10YR7/3	狭・側	
808	平瓦	1	窯体内	燃焼部奥壁構築瓦	Ⅴ			-	2.0	575	淡黄 2.5Y8/3	狭・側	
809	平瓦	1	窯体内	燃焼部奥壁構築瓦	Ⅴ			-	2.0	528	浅黄 2.5Y7/3	狭・側	
810	平瓦	1	窯体内	燃焼部奥壁構築瓦	Ⅴ			-	1.9	241	浅黄 2.5Y7/3	狭・側	
811	平瓦	1	窯体内	燃焼部奥壁構築瓦	Ⅴ		-		2.0	1012	浅黄 2.5Y7/3	広・側	
812	平瓦	1	窯体内	燃焼部奥壁構築瓦	Ⅴ		-		2.0	404	浅黄 2.5Y7/3	広・側	
813	平瓦	1	灰原	B 3+ a 1+ a 5	ⅡD		23.9	—	2.0	1943	浅黄 5Y8/3	狭・側	
814	平瓦	1	灰原	A 5+ a 5	ⅡE		—	27.2	3.0	2071	浅黄橙 10YR8/3	広・側	布綴じ痕
815	平瓦	1	灰原	B 8+ B 1	ⅣB	42.2	(29.2)	30.6	2.3	3960	にぶい黄橙 10YR6/3	広・狭・側	
816	平瓦	1	灰原	A 4+ A 5	ⅣB		(28.4)	—	2.0	1689	淡黄 2.5Y8/4	狭・側	
817	平瓦	1	灰原	A 5	ⅣB		28.2	—	2.7	1365	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	
818	平瓦	1	灰原	a 5	ⅣB		—	(29.4)	2.4	1600	淡黄 2.5Y7/4	広・側	
819	平瓦	1	灰原	A 2+ B 2	ⅤB	38.7	(27.6)	(27.6)	1.5	2497	オリーブ黒 5Y3/1	広・狭・側	粘土接合痕（S型）
820	平瓦	1	灰原	C 1	ⅤB	37.8	(25.1)	(28.0)	1.9	2520	暗灰 N3/	広・狭・側	布綴じ痕

表 13　遺物一覧表（平瓦４）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	長さ(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存部	備考
821	平瓦	1	灰原	A 1+ B 1+ B 2+ C 1+ C 2	ⅤB		(25.4)	—	1.7	1180	浅黄橙 7.5YR8/3	狭・側	布綴じ痕
822	平瓦	1	灰原	前庭部＋焚口	ⅤB	39.0	(26.5)	(29.3)	1.8	3330	黒褐 2.5Y3/1	広・狭・側	
823	平瓦	1	灰原	焚口＋A 1+ B 1	ⅤB	39.3	(26.6)	29.5	2.0	3620	オリーブ黒 7.5Y3/1	広・狭・側	
824	平瓦	1	灰原	A 2	ⅤB		—	29.7	1.9	1443	灰白 5YR8/2	広・側	
825	平瓦	1	灰原	前庭部	ⅤB	38.0	(24.2)	28.3	2.1	3070	暗灰 N3/	広・狭・側	
826	平瓦	1	灰原	A 1	ⅤB		(24.6)	—	1.6	1300	灰黄 2.5Y7/2	狭・側	
827	平瓦	1	灰原	C 1	ⅤB		—	(27.6)	1.8	1380	黒 N2/	広・側	
828	平瓦	1	灰原	焚口＋前庭部	ⅤC	41.4	28.1	(30.9)	2.3	4850	黄灰 2.5Y4/1	広・狭・側	布綴じ痕
829	平瓦	1	灰原	B 2+ B 1	ⅤC	40.5	28.5	(29.5)	1.9	4470	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	布綴じ痕
830	平瓦	1	灰原	B 3	ⅤC		—	(30.4)	2.1	1740	灰 5Y5/1	広・側	布綴じ痕
831	平瓦	1	灰原	B 3+ B 2+ A 1+ A 2	ⅤC	40.8	(28.0)	(30.5)	1.7	2835	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	布綴じ痕
832	平瓦	1	灰原	前庭部＋C 2+ C 3+ C 4	ⅤC		(26.7)	—	1.5	1920	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	布綴じ痕
833	平瓦	1	灰原	C 9+ C 8+ B 8+ C 11	ⅤC		—	29.2	1.9	2331	にぶい黄橙 10YR7/3	広・側	布綴じ痕
834	平瓦	1	灰原	焚口＋前庭部	ⅤC	40.0	(28.2)	30.4	1.8	3510	浅黄橙 10YR8/4	広・狭・側	布綴じ痕
835	平瓦	1	灰原	A 5+ B 1+ B 5	ⅤC	41.0	29.3	(31.8)	2.2	3910	黄灰 2.5Y4/1	広・狭・側	布綴じ痕
836	平瓦	1	灰原	B 3+ C 2+ C 3+ B 4	ⅤC		29.4	—	1.6	1842	灰白 2.5Y8/2	狭・側	布綴じ痕
837	平瓦	1	灰原	B 1+ B 2+ A 1	ⅤC	41.4	(28.6)	(29.7)	2.0	3295	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	布綴じ痕
838	平瓦	1	灰原	C 3+ B 5+ A 5+ B 2+ B 3	ⅤC		(28.2)	—	1.9	1355	黄灰 2.5Y4/1	狭・側	布綴じ痕
839	平瓦	1	灰原	—	ⅤC		—	(30.5)	1.8	1330	灰黄褐 10YR5/2	広・側	布綴じ痕
840	平瓦	1	灰原	A 1+ A 2+ B 2	ⅤC	41.0	(28.8)	(30.3)	1.8	3658	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	粘土接合痕（S型）
841	平瓦	1	灰原	前庭部＋C 3	ⅤC	41.0	(28.4)	(30.2)	1.9	3940	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	粘土接合痕（Z型）
842	平瓦	1	灰原	B 2+ C 2+ A 5+ B 1+ C 1	ⅤC	41.8	(27.8)	(30.4)	1.8	4118	灰 5Y4/1	広・狭・側	粘土接合痕（Z型）
843	平瓦	1	灰原	B 1+ B 2+ A 1	ⅤC	41.4	(28.1)	30.0	1.8	3840	黄灰 2.5Y4/1	ほぼ完形	粘土接合痕（Z型）
844	平瓦	1	灰原	B 3+ C 3+ B 2	ⅤC		(28.0)	—	1.8	1810	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	粘土接合痕（S型）
845	平瓦	1	灰原	焚口＋前庭部	ⅤC	41.7	(28.7)	30.6	2.1	4410	灰 5Y4/1	広・狭・側	粘土接合痕（Z型）
846	平瓦	1	灰原	焚口＋前庭部	ⅤC		(27.8)	—	1.9	2740	黄灰 2.5Y4/1	狭・側	粘土接合痕（Z型）
847	平瓦	1	灰原	B 2	ⅤC		—	30.6	2.0	2603	オリーブ黒 5Y3/1	広・側	粘土接合痕（Z型）
848	平瓦	1	灰原	B 2+ A 2+ B 3	ⅤC	41.0	(28.2)	(30.0)	1.8	3890	淡黄 5Y8/3	広・狭・側	
849	平瓦	1	灰原	A 2+ A 4+ A 3+ B 3+ 前庭部	ⅤC	40.0	27.8	(30.5)	1.6	2459	灰 7.5Y5/1	広・狭・側	
850	平瓦	1	灰原	B 2+ A 1	ⅤC		—	(30.3)	2.1	1900	褐灰 10YR5/1	広・側	
851	平瓦	1	灰原	B 2	ⅤC	41.6	(28.9)	(30.4)	1.7	2516	灰 5Y4/1	広・狭・側	
852	平瓦	1	灰原	B 9+ C 9+ B 5+ B 8+ C 8	ⅤC	41.4	(27.5)	(31.4)	2.1	4160	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	
853	平瓦	1	灰原	A 1+ A 2	ⅤC		—	31.0	2.3	2206	灰黄 2.5Y7/2	広・側	
854	平瓦	1	灰原	B 2+ C 2	ⅤC	41.5	(27.6)	30.6	2.4	3898	灰 5Y5/1	広・狭・側	
855	平瓦	1	灰原	C 6+ A 6	ⅤC	40.7	(29.0)	(30.7)	2.0	3797	褐灰 5YR6/1	広・狭・側	
856	平瓦	1	灰原	A 6+ A 7	ⅤC		—	(30.5)	2.1	3380	灰 7.5Y5/1	広・側	
857	平瓦	1	灰原	A 5+ a 5	ⅤC	40.5	27.5	(30.4)	1.8	3280	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	
858	平瓦	1	灰原	A 3+ A 2+ A 1+ B 3	ⅤC	40.6	(28.0)	(30.0)	1.6	2665	黄灰 2.5Y4/1	広・狭・側	
859	平瓦	1	灰原	a 4+ A 5	ⅤD	33.3	(24.0)	26.9	2.0	2900	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	分割突帯
860	平瓦	1	灰原	A 2	ⅤE		(25.2)	—	2.4	1692	灰 5Y4/1	狭・側	
861	平瓦	3	埋土	B12	ⅡD	37.3	23.1	28.3	2.2	3050	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完形	
862	平瓦	3	埋土	B13+B12	ⅡD	38.1	(24.0)	(27.4)	2.4	3467	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
863	平瓦	3	埋土	C12	ⅡD		(23.8)	-	2.0	1237	明黄褐 10YR7/6	狭・側	
864	平瓦	3	埋土	B12	ⅡE	37.0	27.5	(27.5)	2.3	4124	灰白 5Y7/2	ほぼ完形	
865	平瓦	3	埋土	B12	ⅡE		-	27.9	2.7	2107	オリーブ黒 5Y3/1	広・側	
866	平瓦	3	埋土	B6+B11+B12+B9	ⅡE	34.8	24.5	(28.0)	2.7	3996	灰白 10YR8/2	広・狭・側	
867	平瓦	3	埋土	B11	ⅡE	34.5	25.5	(28.0)	2.1	2883	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	
868	平瓦	3	埋土	B11+B12	ⅡE		(25.6)	(30.2)	3.0	3484	黄灰 2.5Y5/1	広・狭・側	
869	平瓦	3	埋土	B13+ a 5	ⅡE	37.9	(22.6)	25.0	2.4	4253	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
870	平瓦	3	埋土	B12+B13	ⅡE		-	24.5	3.6	1196	にぶい黄橙 10YR7/3	広・側	
871	平瓦	3	埋土	B12+B13+B11	ⅡG	39.7	(26.5)	(30.4)	2.1	4340	灰白 2.5Y8/2	広・狭・側	
872	平瓦	3	埋土	B11	ⅡG	42.0	26.8	(30.0)	2.2	3713	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
873	平瓦	3	埋土	B13+B12+B11	ⅡG		(28.0)	-	2.4	2031	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	
874	平瓦	3	埋土	B12	ⅡG		(25.3)	-	3.0	2418	浅黄橙 10YR8/3	狭・側	
875	平瓦	3	埋土	B4+B11+C7+B12	ⅡG	43.7	(27.0)	(30.0)	2.3	4869	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
876	平瓦	3	埋土	B12+C14+C13	ⅡG	38.2	(25.3)	30.3	2.5	3168	灰白 2.5Y7/1	広・狭・側	
877	平瓦	3	埋土	B12	ⅡG		-	(33.4)	2.2	2809	褐灰 5YR4/1	広・側	
878	平瓦	3	埋土	A5+A6+B12	ⅡG	21.0	-	32.5	1.9	1794	浅黄 7.5Y7/3	広・側	
879	平瓦	3	埋土	B12	ⅡG		-	27.4	2.5	3554	黄灰 2.5Y5/1	広・側	
880	平瓦	3	埋土	C8+C9+C7+B7+A8	ⅣB	38.0	28.7	(29.4)	2.8	4326	にぶい黄橙 10YR7/4	広・狭・側	
881	平瓦	3	埋土	C7+C8	ⅣB	40.8	29.0	29.5	2.7	5500	明黄褐 10YR7/6	ほぼ完形	
882	平瓦	3	埋土	A5+B4+B5+B9	ⅣB		(28.0)	-	1.9	1487	浅黄橙 10YR8/4	狭・側	
883	平瓦	3	埋土	B12	ⅤB	40.1	(25.8)	(29.0)	2.2	3636	灰白 5Y8/2	広・狭・側	
884	平瓦	3	埋土	B13+C13	ⅤC	37.8	(28.6)	31.0	2.4	5158	浅黄橙 10YR8/4	広・狭・側	
885	平瓦	3	埋土	B12+B13+C12+C13	ⅤD	35.7	(24.3)	(26.8)	2.3	2487	灰白 10YR8/2	広・狭・側	
886	平瓦	3	埋土	B12+B11	ⅤD		-	28.6	2.2	1733	灰白 2.5Y8/2	広・側	
887	平瓦	3	埋土	C12+B11	ⅤE	37.5	(25.4)	(28.0)	2.8	4227	灰白 10YR8/1	広・狭・側	
888	平瓦	3	埋土	B12+B13	ⅤF	37.8	27.5	(32.3)	2.3	4352	浅黄橙 10YR8/3	広・狭・側	
889	平瓦	3	埋土	B12	ⅤF	40.2	(28.0)	34.0	2.3	5062	浅黄橙 10YR8/3	広・狭・側	
890	平瓦	3	埋土	B12	ⅤF		24.0	-	2.5	3152	灰白 2.5Y8/2	狭・側	
891	平瓦	—	SX01		ⅠB	39.1	28.1	(29.4)	2.1	4290	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	
892	平瓦	—	SX01		ⅡA		(25.5)	-	1.7	2250	淡黄 2.5Y8/4	狭・側	
893	平瓦	—	SX01		ⅡB	35.1	25.2	(28.5)	2.4	4230	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	
894	平瓦	—	SX01		ⅡB		-	(29.8)	2.4	3120	淡黄 2.5Y8/4	広・側	
895	平瓦	—	SX01		ⅡB	36.0	(24.4)	(27.6)	2.2	3859	黄灰 2.5Y4/1	広・狭・側	
896	平瓦	—	SX01		ⅡB	35.3	26.2	28.0	2.1	3078	灰黄 2.5Y6/2	広・狭・側	
897	平瓦	—	SX01		ⅡD	35.2	(25.4)	(27.0)	2.5	4320	淡黄 2.5Y8/4	広・狭・側	
898	平瓦	—	SX01		ⅡD	36.1	(25.1)	27.3	2.0	2490	浅黄 2.5Y7/4	広・狭・側	
899	平瓦	—	SX01		ⅡD		-	26.8	2.6	3010	淡黄 2.5Y8/4	広・側	
900	平瓦	—	SX01		ⅡD	36.9	(25.0)	(27.3)	2.0	2260	浅黄 2.5Y7/3	広・狭・側	
901	平瓦	—	SX01		ⅡD		-	29.0	2.3	1450	浅黄 2.5Y7/3	広・側	
902	平瓦	—	SX01		ⅡE	37.9	(25.3)	(25.5)	3.2	5380	淡黄 2.5Y8/3	広・狭・側	
903	平瓦	—	SX01		ⅣB		-	30.3	2.1	1501	浅黄 2.5Y7/3	広・側	
904	平瓦	—	SX01		ⅣB		-	(30.6)	2.3	2280	灰黄 2.5Y7/2	広・側	

表 14　遺物一覧表（平瓦５）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	長さ(cm)	狭端幅 (cm)	広端幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調	残存部	備考
905	平瓦	－	SX01		ⅤD		22.8	-	2.5	1938	淡黄 2.5Y8/3	狭・側	
906	平瓦	－	SX02		ⅡA	36.0	(25.2)	(26.4)	2.5	2699	灰黄 2.5Y7/2	広・狭・側	
907	平瓦	－	SX02		ⅡA		(26.1)	-	2.3	1450	にぶい黄橙 10YR7/3	狭・側	
908	平瓦	－	SX02		ⅡA		(25.5)	-	2.2	1456	淡黄 5Y8/3	狭・側	
909	隅平瓦	－	SX02		ⅡA		(25.6)	-	3.2	2586	浅黄 2.5Y7/3	狭・斜・側	
910	平瓦	－	SX02		ⅡB		-	28.7	2.5	2590	淡黄 2.5Y8/4	広・側	
911	平瓦	－	SX02		ⅢB		-	-	3.3	1871	浅黄 2.5Y7/4	側	
912	平瓦	－	SX02		ⅢB		(27.5)	-	2.3	2154	黄灰 2.5Y5/1	狭・側	
913	平瓦	－	SX02		ⅤB		-	(28.8)	2.6	3065	淡黄 2.5Y8/3	広・側	
914	平瓦	－	SX02		ⅤC		27.6	-	2.3	1467	灰白 2.5Y8/1	狭・側	
915	平瓦	－	SX02		ⅤC		28.7	-	2.2	1389	灰白 2.5Y8/1	狭・側	
916	平瓦	－	SX02		ⅤC		-	(29.7)	2.2	1015	淡黄 2.5Y8/3	広・側	
917	隅平瓦	－	SX02		ⅤC	42.6	(29.6)	-	1.8	2699	灰黄 2.5Y6/2	狭・斜・側	
918	平瓦	－	SD01	-	ⅡB		-	(28.4)	2.9	1866		広・側	
919	平瓦	－	SD01	-	ⅡD	39.9	24.8	27.7	1.6	2972		ほぼ完形	
920	平瓦	－	SD01	-	ⅡD		23.8	-	2.1	1417		狭・側	
921	平瓦	－	SD01	-	ⅡD		-	27.2	2.1	2342		広・側	
922	平瓦	－	SD01	-	ⅡE		-	(27.6)	2.5	1758		広・側	
923	平瓦	－	SD01	-	ⅡE		-	28.2	2.6	2919		広・側	
924	平瓦	－	SD01	-	ⅡE	38.4	(25.8)	27.5	2.6	3103		広・狭・側	
925	平瓦	－	SD01	-	ⅡE	36.5	26.7	(27.0)	3.1	4415		広・狭・側	
926	平瓦	－	SD01	-	ⅡE	36.3	26.0	26.0	2.3	3013		広・狭・側	
927	平瓦	－	SD01	-	ⅡE		(26.0)	-	2.9	1948		狭・側	
928	平瓦	－	SD01	-	ⅡF	37.2	24.5	26.7	2.0	3849		ほぼ完形	
929	平瓦	－	SD01	-	ⅡF	34.4	(23.7)	(27.7)	1.7	2378		広・狭・側	
930	平瓦	－	SD01	-	ⅡG	38.9	26.1	(28.8)	2.1	3968		広・狭・側	
931	平瓦	－	SD01	-	ⅡG		26.2	-	2.3	2592		狭・側	
932	平瓦	－	SD01	-	ⅡG		26.4	-	2.3	2691		狭・側	
933	平瓦	－	SD01	-	ⅤC		28.8	(30.9)	2.1	3923		広・狭・側	
934	平瓦	－	SD01	-	ⅤC		27.7	-	2.0	1376		狭・側	
935	平瓦	－	SD01	-	ⅤD		(26.5)	-	2.0	2072		狭・側	
936	平瓦	－	SD01	-	ⅤE	36.6	24.3	26.2	3.3	5166		広・狭・側	
937	平瓦	－	SD01	-	ⅤE	36.5	(25.0)	28.8	2.7	3983		広・狭・側	
938	平瓦	－	SD01	-	ⅤE		(25.0)	-	2.7	2471		狭・側	

表 15　遺物一覧表（熨斗瓦１）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	長さ(cm)	狭端幅 (cm)	広端幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存部	色調	備考
939	熨斗瓦	3	窯体内	床面	ⅠA5	44.4	18.3	17.7	2.9	3390	ほぼ完形	浅黄橙 8/3	粘土接合痕（Z型）
940	熨斗瓦	3	窯体内	床面	ⅠA5	－	－	(18.6)	1.7	959	広・側	淡黄 8/3	分割破面
941	熨斗瓦	3	窯体内	床面	ⅠA6	－	－	(25.8)	2.5	2820	広・側	灰黄 7/3	藁座痕
942	熨斗瓦	3	灰原	Q10	ⅠA1	－	6.0	－	2.0	328	狭・側	灰白 2.5Y8/5	凹面側から截断
943	熨斗瓦	3	灰原	－	ⅠA1	－	－	7.0	2.6	523	広・側	浅黄 2.5Y8/3	布綴じ痕。布端
944	熨斗瓦	3	灰原	P8+M3	ⅠA2	－	－	8.7	1.9	410	広・側	灰黄 2.5Y7/2	34 と同一円筒粘土。布端
945	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA2	－	－	8.2	1.8	406	広・側	浅黄 2.5Y8/3	12 と同一円筒粘土。布端
946	熨斗瓦	3	灰原	L4	ⅠA2	－	－	10	2.0	385	広・側	灰白 2.5Y8/2	布端。布綴じ痕。
947	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA2	－	－	(9.0)	2.7	617	広・側	灰白 2.5Y8/2	布端。
948	熨斗瓦	3	灰原	M12	ⅠA2	－	－	10.0	2.2	216	広・側	黄灰 2.5Y5/1	布端
949	熨斗瓦	3	灰原	P7	ⅠA2	－	－	10.0	2.4	356	広・側	灰白 2.5Y8/2	布端。やや磨滅。
950	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA2	－	－	8.7	2.4	713	広・側	浅黄橙 2.5Y8/3	布端。表面やや磨滅
951	熨斗瓦	3	灰原	R9	ⅠA2	－	－	9.3	2.6	603	広・側	灰黄 2.5Y7/2	布端。
952	熨斗瓦	3	灰原	Q10	ⅠA2	－	－	9.7	2.4	380	広・側	灰黄 2.5Y7/2	
953	熨斗瓦	3	灰原	P8 + P7	ⅠA2	－	－	10.4	1.9	349	広・側	浅黄橙 10YR8/3	布綴じ痕。
954	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA2	－	－	(10.2)	1.9	805	広・側	灰黄 2.5Y7/2	粘土接合痕（S型）"
955	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA2	－	－	10.6	2.3	1150	広・側	浅黄橙 10YR8/3	分割突帯
956	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA2	－	－	－	2.3	632	側	浅黄 2.5Y8/2	表面やや磨滅
957	熨斗瓦	3	灰原	Q9	ⅠA2	－	－	－	2.6	596	側	淡黄 2.5Y8/3	
958	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA2	－	－	－	2.3	455	側	浅黄 2.5Y8/3	布綴じ痕
959	熨斗瓦	3	灰原	T7	ⅠA2	－	－	－	1.8	242	側	灰 5Y6/1	粘土接合痕（Z型）
960	熨斗瓦	3	灰原	L3	ⅠA2	－	－	－	1.6	305	側	浅黄橙 2.5Y8/3	
961	熨斗瓦	3	灰原	P9	ⅠA3	－	(11.7)	－	2.1	566	狭・側	淡黄 2.5Y8/3	粘土接合痕（Z型）
962	熨斗瓦	3	灰原	P8+W6	ⅠA3	－	－	(10.7)	1.7	521	広・側	灰黄 2.5Y7/2	布端。側板痕。凹面側から截断。
963	熨斗瓦	3	灰原	V7 + L5	ⅠA3	－	12.5	－	1.9	824	狭・側	灰白 2.5Y7/2	中央に分割突帯
964	熨斗瓦	3	灰原	P8+P7	ⅠA3	－	－	(11.3)	1.4	513	広・側	灰黄 2.5Y7/2	布綴じ痕
965	熨斗瓦	3	灰原	L3	ⅠA3	－	－	－	2.2	540	側	灰白 2.5Y8/2	表面の磨滅著しい
966	熨斗瓦	3	灰原	T10	ⅠA4	－	－	14.2	2.3	1050	広・側	灰白 2.5Y7/1	布端。側板痕。凹面広端側に藁痕。
967	熨斗瓦	3	灰原	P8	ⅠA4	－	－	13.7	2.7	977	広・側	灰白 2.5Y8/2	布端。
968	熨斗瓦	3	灰原	M5	ⅠA	－	－	－	2.2	197	広・側	灰白 2.5Y7/1	布端
969	熨斗瓦	3	灰原	O9+L15	Ⅱ3	－	(14.4)	－	1.9	629	狭・側	灰白 2.5Y7/1	側端片側：凹凸激しい
970	熨斗瓦	3	灰原	V8+W7	Ⅱ1	－	－	6.3	2.1	290	広・側	灰白 2.5Y7/1	側端片側：凹凸激しい
971	熨斗瓦	3	灰原	E 区	Ⅲ1	－	－	－	2.6	326	側	灰白 5Y8/	タタラ形成時の粘土痕
972	熨斗瓦	3	窯体内	埋土	Ⅱ3	－	-	16.3	2.4	839	広・側	灰白 5Y7/1	
973	熨斗瓦	3	窯体内	埋土	Ⅲ1	－	-	9.0	2.7	276	広・側	灰 N6/	
974	熨斗瓦	3	窯体内	埋土	Ⅲ	－	7.8	-	2.3	238	狭・側	灰白 2.5Y7/1	
975	熨斗瓦	2	窯体内	床面	Ⅲ3	41.4	(16.8)	17.4	2.5	2360	広・狭・側		凹面の全面と側面に窯壁付着
976	熨斗瓦	2	窯体内	床面＋灰原	Ⅲ3	42.6	13.8	15.9	2.7	2350	広・狭・側		凹面に窯壁付着 "
977	熨斗瓦	2	灰原	D2 + D3	ⅠA2	－	-	(9.9)	2.5	364	広・側	淡黄 2.5Y8/3	布端
978	熨斗瓦	2	灰原	D2	ⅠA2	－	-	-	2.2	349	側	浅黄橙 10YR8/3	表面の磨滅著しい
979	熨斗瓦	2	灰原	C3	ⅠA4	－	-	(13.5)	2.5	479	広・側	灰白 2.5Y8/2	表面の磨滅著しい
980	熨斗瓦	2	灰原	B3	ⅠA4	－	-	-	2.1	527	側	灰黄 2.5Y7/2	分割突帯

表 16　遺物一覧表（熨斗瓦２）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	長さ(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存部	色調	備考
981	熨斗瓦	2	灰原	E2 + E3	Ⅱ３	－	-	12.5	2.1	1220	広・側	灰白 2.5Y8/2	藁座痕
982	熨斗瓦	2	灰原	E3	Ⅲ２	－	-	-	2.0	431	側	にぶい黄橙 10YR7/4	
983	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB1	(17.4)	(11.2)	-	2.1	514	狭・斜・側	にぶい黄橙 10YR7/4	分割突帯
984	熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB2	－	-	-	2.0	519	側	橙 7.5YR6/6	
985	熨斗瓦	1	窯体内	床面＋焚口付近	ＩB2	－	-	(17.2)	2.0	435	広・側	灰黄 2.5Y7/2	表面の磨滅著しい
986	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB2	－	-	-	2.9	782	斜・側	灰白 2.5Y8/2	凹面に焼土付着
987	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB2	17.4	16.2	-	2.1	586	完形	灰白 2.5Y7/1	布綴じ痕
988	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB2	22.0	-	16.0	2.8	1173	完形	灰白 10YR7/1	
989	隅熨斗瓦	1	窯体内	燃焼部下面	ＩB2	22.1	-	16.3	2.8	1376	完形	灰白 10YR8/1	粘土接合痕（Z型）
990	熨斗瓦	1	窯体内	床面＋段	ＩB3	37.1	17.9	(17.6)	2.8	2565	広・狭・側	灰黄 2.5Y7/2	
991	隅熨斗瓦	1	窯体内	段	ＩB3	21.5	18.5	-	2.0	1101	完形	灰 5Y6/1	分割突帯
992	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB3	－	17.4	-	1.6	833	狭・斜・側	灰白 2.5Y8/1	粘土接合痕（S型）
993	隅熨斗瓦	1	窯体内	段＋埋土	ＩB3	－	16.3	-	2.2	756	狭・斜・側	灰白 5Y8/2	全体に焼土付着
994	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB3	22.4	-	17.4	2.6	1870	完形	浅黄橙 10YR8/4	表面に煤付着
995	隅熨斗瓦	1	窯体内	段	ＩB4	－	(19.7)	-	1.9	1040	狭・斜・側	灰白 5Y8/2	
996	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面＋焚口付近	ＩB4	23.3	-	(21.2)	2.0	1214	ほぼ完形	褐灰 10YR6/1	焼土付着
997	隅熨斗瓦	1	窯体内	床面	ＩB	－	-	ー	2.7	885	広・斜・側	灰N 6/	
998	熨斗瓦	1	窯体内	燃焼部下面	Ⅲ１	－	-	8.1	2.1	538	広・側	浅黄橙 10YR8/4	分割截面の重複
999	隅熨斗瓦	1	灰原	前庭部	ＩA4	－	-	-	1.8	319	斜・側	浅黄橙 10YR8/4	分割突帯
1000	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ２	－	10.6	-	1.8	586	狭・側	灰白 2.5Y8/2	焼土付着
1001	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ２	－	-	11.6	2.3	441	広・側	灰白 10YR8/2	窯壁付着
1002	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ２	－	-	-	2.6	693	側	浅黄 2.5Y7/3	粘土接合痕（Z型）
1003	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ２	－	-	-	2.5	643	側	灰白 7.5Y8/1	焼土付着
1004	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ２	－	-	-	2.3	255	側	灰白 10YR8/2	
1005	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ３	－	-	-	2.5	722	側	灰白 10YR8/2	
1006	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ３	38.3	(11.6)	(15.1)	2.5	1850	広・狭・側	淡黄 2.5Y8/3	焼土付着
1007	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ４	－	(17.6)	-	2.6	2035	狭・側	灰白 5Y8/2	粘土接合痕（S型）
1008	熨斗瓦	1	灰原	a5	Ⅲ４	－	-	17.5	3.1	1870	広・側	灰白 2.5Y8/2	窯壁付着
1009	熨斗瓦	－	SX01		ＩB1	－	-	(14.0)	2.5	479	広・側		
1010	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB1	－	(11.7)	-	3.2	918	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/3	
1011	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB1	－	(10.6)	-	2.3	497	狭・斜・側	淡黄 5Y7/4	
1012	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB1	(15.9)	(11.6)	-	1.8	403	狭・斜・側	灰白 2.5Y8/2	
1013	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB1	－	13.1	-	2.9	891	狭・斜・側	黄 2.5Y8/6	
1014	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB1	－	(11.4)	-	2.0	388	狭・斜・側	灰白 7.5Y8/2	
1015	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB2	－	14.9	-	2.6	917	狭・斜・側	浅黄橙 10Y8/4	
1016	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB2	－	(15.0)	-	2.4	836	狭・斜・側	淡黄 5Y8/3	
1017	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB2	－	(13.4)	-	2.3	622	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/3	
1018	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB2	－	(16.5)	-	2.6	690	狭・斜・側	灰白 7.5Y8/2	
1019	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB2	19.2	15.3	-	1.8	613	狭・斜・側	灰白 2.5Y8/1	
1020	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB2	21.7	13.5	-	2.0	752	狭・斜・側	灰白 2.5Y8/2	
1021	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB3	－	17.6	-	2.4	852	狭・斜・側	灰白 5Y7/1	
1022	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB3	－	(17.5)	-	2.3	745	狭・斜・側	灰白 5Y8/2	
1023	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB3	18.7	17.0	-	2.8	1054	狭・斜・側	浅黄橙 10Y8/4	
1024	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB3	21.4	(16.8)	-	3.2	1502	ほぼ完形	浅黄 5Y7/3	
1025	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB4	－	20.1	-	2.2	1004	狭・斜・側	淡黄 5Y8/4	
1026	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB4	－	(18.2)	-	2.0	1033	狭・斜・側	灰 5Y6/2	
1027	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB4	(21.6)	(20.4)	-	3.0	1152	狭・斜・側	灰白 5 Y 8/2	
1028	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB4	－	20.0	-	2.6	1349	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/3	
1029	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB4	(21.6)	(19.8)	-	2.0	1065	狭・斜・側	灰白 7.5Y7/2	
1030	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB4	(21.1)	(22.1)	-	2.0	984	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/3	
1031	隅熨斗瓦	－	SX01		ＩB4	20.5	21.0	-	2.3	975	ほぼ完形	淡黄 2.5Y7/4	
1032	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB1	(19.1)	(14.5)	-	2.5	593	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/4	
1033	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB2	20.8	13.5	-	1.9	883	狭・斜・側	灰白 2.5Y8/2	
1034	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB2	21.7	13.2	-	2.5	962	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/4	
1035	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB2	(21.6)	14.6	-	2.0	913	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/3	
1036	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB2	(21.0)	14.5	-	3.1	1089	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/4	
1037	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB2	(18.8)	(15.0)	-	3.0	843	狭・斜・側	にぶい黄橙 10YR7/4	
1038	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB2	(19.2)	14.8	-	1.8	479	狭・斜・側	褐灰 10YR6/1	
1039	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB3	(21.6)	(17.5)	-	2.7	986	狭・斜・側	浅黄 2.5Y7/4	
1040	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB3	(21.8)	(18.8)	-	2.3	1173	狭・斜・側	にぶい黄橙 10YR7/2	
1041	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB4	24.1	(20.6)	-	2.1	970	狭・斜・側	にぶい黄橙 10YR7/4	
1042	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB4	22.3	19.8	-	1.8	828	狭・斜・側	灰黄 2.5Y7/2	
1043	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB4	22.2	(19.2)	-	2.7	1340	狭・斜・側	浅黄 2.5Y7/4	
1044	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB4	26.2	(21.6)	-	2.3	1585	狭・斜・側	淡黄 2.5Y8/3	
1045	隅熨斗瓦	－	SD01		ＩB4	(25.8)	(23.8)	-	2.8	1706	狭・斜・側	にぶい黄橙 10YR7/3	
1046	熨斗瓦	－	SD02		ＩA2	－	8.3	-	2.4	413	狭・側		

表 17　遺物一覧表（塼１）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	狭端幅（cm）	広端幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存部	色調	備考
1047	塼	3	灰原	T9	Ⅰ	-	(14.1)	2.1	920	広・側	淡黄 2.5Y8/4	
1048	塼	3	灰原	Q3	Ⅰ	-	(15.6)	1.9	623	広・側	灰 5Y4/1	
1049	塼	3	灰原	-	Ⅱ	(9.2)	-	3.1	334	狭・側	褐灰 10YR6/1	
1050	塼	1	灰原		Ⅱ	-	(8.5)	3.0	365	広・側	明黄褐 10YR7/6	
1051	塼	3	灰原	A1	Ⅲ	-	-	3.1	70	-	灰白 5Y8/1	
1052	塼	3	灰原	B2	Ⅲ	-	-	3.5	89	-	灰白 5Y8/2	
1053	塼	－	SX01		Ⅰ	-	10.1	2.2	766	広・側	灰白 5Y7/2	
1054	塼	－	SX01		Ⅰ	-	12.1	2.5	417	広・側	にぶい黄橙 10YR7/3	
1055	塼	－	SX01		Ⅰ	-	12.7	2.6	346	広・側	灰白 2.5Y8/2	
1056	塼	－	SX01		Ⅰ	-	-	2.0	543	側	灰白 2.5Y8/2	
1057	塼	－	SX01		Ⅰ	-	-	1.9	424	側	灰 5Y5/1	
1058	塼	－	SX01		Ⅰ	-	-	1.7	320	側	灰白 2.5Y8/2	

表 18　遺物一覧表（塼２）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	分類	狭端幅（cm）	広端幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存部	色調	備考
1059	塼	－	SX01		Ⅱ	-	(10.8)	4.1	1555	広・側	灰黄 2.5Y7/2	
1060	塼	－	SX01		Ⅱ	-	9.5	3.0	727	広・側	黄灰 2.5Y5/1	
1061	塼	－	SX01		Ⅱ	-	-	4.0	474	側	灰 5Y5/1	
1062	塼	－	SX01		Ⅲ	-	-	3.6	610	広	淡黄 2.5Y8/3	
1063	塼	－	SX01		Ⅲ	-	-	3.4	177	側	淡黄 2.5Y8/3	
1064	塼	－	SX01		Ⅲ	-	-	4.0	276	-	灰白 5Y8/2	
1065	塼	－	SX01		Ⅲ	-	-	4.2	49	側	淡黄 5Y8/3	
1066	塼	－	SX01		Ⅲ	-	-	3.1	25	-	淡黄 2.5Y8/4	
1067	塼	－	SX01		Ⅲ	-	-	3.8	83	-	淡黄 2.5Y8/4	
1068	塼	－	SD01		Ⅱ	-	7.9	3.0	547	広・側	黄灰 2.5Y5/1	
1069	塼	－	SD01		Ⅱ	-	-	3.0	277	側	浅黄橙 7.5YR8/4	
1070	塼	－	SD02		Ⅰ	-	10.2	2.1	580	広・側	灰白 5Y7/1	
1071	塼	－	SD02		Ⅰ	-	-	2.1	190	広・側	灰黄 2.5Y7/2	
1072	塼	－	SD02		Ⅰ	-	(14.9)	2.4	608	広・側	浅黄橙 10Y R 8/4	
1073	塼	－	SD02		Ⅱ	-	-	2.3	139	広・側	浅黄 5Y7/3	
1074	塼	－	SD02		Ⅱ	-	-	2.5	165	側	にぶい黄 2.5Y6/3	
1075	塼	－	SD02		Ⅱ	-	(9.2)	2.8	586	広・側	灰 5Y5/1	
1076	塼	－	SD02		Ⅱ	-	-	2.6	446	側	浅黄 2.5Y7/3	
1077	塼	－	SD02		Ⅱ	-	14.0	3.1	1592	広・側	灰白 7.5Y7/1	
1078	塼	－	表土		Ⅱ	-	-	2.2	423	側	浅黄 2.5Y7/4	
1079	塼				Ⅰ	-	-	3.4	189	側	浅黄 2.5Y7/3	
1080	塼				Ⅱ	-	-	2.5	318	側	灰黄 2.5Y7/2	
1081	塼				Ⅱ	-	-	3.2	918	側	灰オリーブ 5Y6/2	
1082	塼				Ⅱ	-	-	3.2	1338	側	浅黄 2.5Y7/4	
1083	塼				Ⅱ	-	12.7	2.4	480	広・側	浅黄 2.5Y7/3	
1084	塼				Ⅱ	-	-	2.9	790	側	灰白 2.5Y7/1	

表 19　遺物一覧表（蟇羽瓦）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	残存長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存部	備考
1085	蟇羽瓦	3	灰原	N3＋N4＋2 号窯灰原	49.3	－	2.0	5375	浅黄 2.5Y7/4	狭端・左側端	側端付近に粘土接合痕
1086	蟇羽瓦	3	灰原	N3＋M3＋O3	42.0	29.2	2.5	4905	浅黄 2.5Y7/3	左右側端	左側に穴と突起
1087	蟇羽瓦	3	灰原	O5	20.5	30.7	2.4	3140	灰 5Y4/1	狭端・左右側端	両側端付近に粘土接合痕
1088	蟇羽瓦	3	灰原	R8	16.8	－	2.3	743	灰白 2.5Y8/2	左側端	
1089	蟇羽瓦	3	灰原	N3＋N5	17.9	30.1	2.0	1655	淡黄 2.5Y8/4	右側端	
1090	蟇羽瓦	3	灰原	N2＋N3＋N4＋SX01	28.8	31.4	1.9	3425	にぶい黄 2.5Y6/4	左右側端	右側に穴と突帯
1091	蟇羽瓦	3	灰原	N4	25.2	－	2.2	1610	灰 7.5Y4/	狭端・左側端	狭端付近に布端
1092	蟇羽瓦	3	灰原	M4	30.2	31.0	2.0	4420	灰白 2.5Y8/1	瓦当・左右側端	瓦当に布目
1093	蟇羽瓦	3	灰原	N2＋O3	19.3	－	2.3	1110	灰 5Y6/1	瓦当・右側端	瓦当に布目
1094	蟇羽瓦	3	灰原	O6	9.3	－	1.9	467	黄灰 2.5Y4/1	顎部	瓦当に布目
1095	蟇羽瓦	3	灰原	N3＋O4	9.4	－	1.8	794	淡黄 2.5Y8/3	顎部	瓦当に布目
1096	蟇羽瓦	3	灰原	O4	10.2	－	1.9	701	淡黄 2.5Y8/3	顎部	瓦当に布目
1097	蟇羽瓦	3	埋土		25.2	34.2	1.7	2640	浅黄 2.5Y7/4	平瓦部	
1098	蟇羽瓦	3	埋土		26.5	(31.8)	2.5	2450	灰白 2.5Y8/2	瓦当～平瓦部	
1099	蟇羽瓦	3	埋土		9.6	－	4.0	1010	灰黄 2.5Y6/2	瓦当	
1100	蟇羽瓦	3	埋土		18.7	－	2.1	897	オリーブ黒 5Y3/1	側端部	
1101	蟇羽瓦	3	埋土		9.3	－	1.8	110	淡黄 2.5Y8/3	顎部	
1102	蟇羽瓦	3	埋土		11.0	－	1.9	140	浅黄 2.5Y7/3	側端部	
1103	蟇羽瓦	2	灰原	D3＋E3＋F3	31.4	(33.0)	2.4	2320	淡黄 2.5Y8/4	平瓦部	
1104	蟇羽瓦	2	灰原	E3＋E4	15.2	－	2.5	1050	灰白 2.5Y8/2	側端部	
1105	蟇羽瓦	2	灰原	－	8.3	－	2.9	373	浅黄橙 10YR8/3	瓦当	顎剥落
1106	蟇羽瓦	－	SX01		22.1	－	2.6	1290	暗灰黄 2.5Y5/2	瓦当	顎剥落
1107	蟇羽瓦	－	SX01		8.7	－	2.9	458	浅黄 2.5Y7/3	瓦当	顎剥落
1108	蟇羽瓦	－	SX01		6.7	－	2.4	247	にぶい黄橙 10YR7/4	瓦当	顎剥落
1109	蟇羽瓦	－	SX01		8.1	－	3.4	191	にぶい黄橙 10YR7/3	瓦当	顎剥落
1110	蟇羽瓦	－	SX01		9.9	－	2.1	288	淡黄 2.5Y8/4	顎部	
1111	蟇羽瓦	－	SX01		23.0	－	2.5	987	灰黄 2.5Y7/2	側端部	
1112	蟇羽瓦	－	SX01		15.5	－	2.5	645	淡黄 2.5Y8/4	側端部	
1113	蟇羽瓦	－	SX01		9.8	－	2.3	403	淡黄 2.5Y8/4	側端部	
1114	蟇羽瓦	－	SX01		11.9	－	1.9	441	淡黄 2.5Y8/4	側端部	
1115	蟇羽瓦	－	SX01		8.2	－	2.4	211	浅黄 2.5Y7/4	穴付近	
1116	蟇羽瓦	－	SD01		7.8	－	2.2	197	灰白 2.5Y8/2	側端部	
1117	蟇羽瓦	－	SD02		9.2	－	2.5	422	灰 5Y5/1	側端部	
1118	蟇羽瓦	－	SD02		7.9	8.9	1.9	185	黄灰 2.5Y6/1	突帯	
1119	蟇羽瓦	－	SD02		10.8	－	4.2	388	灰白 10YR8/2	瓦当	顎剥落
1120	蟇羽瓦	－	SD02		6.1	12.5	-	299	灰黄 2.5Y7/2	瓦当	顎剥落
1121	蟇羽瓦	－	SD02		9.1	14.9	2.6	361	黄灰 2.5Y6/1	瓦当	顎剥落
1122	蟇羽瓦	－	SD02		8.7	－	2.7	434	黄灰 2.5Y6/1	瓦当	顎剥落
1123	蟇羽瓦	－	SD02		9.2	11.5	4.1	403	淡黄 5Y8/2	瓦当	顎剥落
1124	蟇羽瓦	－	－	表土	10.6	－	2.1	353	にぶい黄橙 10YR7/2	突帯	
1125	蟇羽瓦	－	－	表土	7.6	－	2.2	505	オリーブ黒 7.5Y3/2	突帯	
1126	蟇羽瓦	－	－	表土	9.8	－	3.8	1200	灰 5Y6/1	瓦当	
1127	蟇羽瓦	－	確認調査	表土	9.3	－	2.2	264	にぶい黄橙 10YR7/2	顎部	
1128	蟇羽瓦	－	攪乱	埋土	8.6	－	2.0	365	にぶい黄橙 10YR7/2	顎部	

表 20　遺物一覧表（鬼瓦）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	高さ（cm）	頂部幅（cm）	基部幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
1129	鬼瓦	3	窯体内	床面	34.0	32.1	30.5	2.4	3300	凹面に布目・凸面に縄叩き
1130	鬼瓦	3	窯体内	床面＋焚口	34.1	(30.0)	31.9	2.1	3010	凹面に布目・凸面に縄叩き

表 21　遺物一覧表（鴟尾）

No.	種類	個体	出土位置	層位・グリッド	部位	位置	重量（g）	備考
1131	鴟尾	A	3 号窯灰原	E 区	鰭部	右側面・中位	770	黒色付着物・断面被熱
1132	鴟尾	A	3 号窯灰原	k11+L10+N6	鰭部～胴部	右側面・下端	880	黒色付着物・下面に木目
1133	鴟尾	A	3 号窯灰原	V6+E11+P7+M11	胴部	右側面・下部	1210	
1134	鴟尾	A	3 号窯灰原	J9+L10+K12+N11+M13+E 区	頭部	右側面・下部	1600	下面に木目
1135	鴟尾	A	3 号窯灰原	E 区	胴部	右側面・下部	450	下面に木目
1136	鴟尾	A	3 号窯灰原	N7	鰭部	右側面・下部	580	下面に木目・側面に枠痕
1137	鴟尾	A	3 号窯灰原＋2 号窯前庭部	L12	胴部	右側面・上部	3590	黒色付着物
1138	鴟尾	A	－	－	胴部	右側面・上部	625	黒色付着物・断面被熱
1139	鴟尾	A	3 号窯灰原	K9+N8	鰭部～腹部	右側面・頂部	4400	黒色付着物
1140	鴟尾	A	3 号窯灰原	M10	鰭部	右側面・頂部	1330	黒色付着物
1141	鴟尾	A	3 号窯灰原	N5+N8+P7+	鰭部	前面・頂部	2220	
1142	鴟尾	A	3 号窯灰原	E 区	鰭部	左側面・上部	430	黒色付着物
1143	鴟尾	A	3 号窯灰原		鰭部	左側面・上部	-	
1144	鴟尾	A	3 号窯灰原	L8+L10+L12+H13	鰭部～胴部	左側面・上部	1530	断面被熱
1145	鴟尾	A	3 号窯灰原	K11+N10+E 区	鰭部	左側面・中位	980	断面被熱
1146	鴟尾	A	3 号窯灰原＋ 1 号窯灰原	3 号窯 L6+1 号窯 C14	胴部	左側面・中位	2180	黒色付着物・断面被熱
1147	鴟尾	A	3 号窯灰原	M9+K12+E 区	胴部	左側面・下部	310	
1148	鴟尾	A	3 号窯灰原	R10	頭部	左側面・下部	440	
1149	鴟尾	A	3 号窯灰原	K11	鰭部	左側面・下部	550	下面に木目・側面に枠痕
1150	鴟尾	A	3 号窯灰原	E 区	腹部	下部	1890	黒色付着物
1151	鴟尾	A	－	－	腹部	頂部	-	上面に刺突
1152	鴟尾	A	3 号窯灰原	E 区	腹部	頂部	2070	裏面に竹痕
1153	鴟尾	A	3 号窯灰原	J4+J8	腹部	下部	220	下面に木目
1154	鴟尾	A	3 号窯灰原	E12	腹部	下部	390	下面に木目
1155	鴟尾	B	SX01 ＋ SD02	－	縦帯～鰭部	右側面・上半	4680	
1156	鴟尾	B	SX01	－	鰭部～腹部	右側面・上部	745	
1157	鴟尾	B	SX01 ＋ SD02	－	鰭部	右側面・上部	1106	
1158	鴟尾	B	SX01 ＋ SD02	－	胴部～縦帯	右側面・上部	4220	
1159	鴟尾	B	SX01 ＋ SD01	－	胴部	左側面・中位	1064	
1160	鴟尾	B	2 号窯灰原		鰭部～腹部	右側面・基部	1448	
1161	鴟尾	B	SX01	－	腹部	左側面・基部	362	
1162	鴟尾	B	1 号窯窯体内＋ SX01	－	胴部～縦帯	前方・中央	7900	
1163	鴟尾	B	SX01	－	鰭部	左側面・上部前方	2360	
1164	鴟尾	B	SD02	－	鰭部	左側面・上部	261	
1165	鴟尾	B	SX01 ＋ SD02	－	鰭部	左側面・上部	2670	
1166	鴟尾	B	SX01 ＋ SD02	－	鰭部	左側面・中位	701	
1167	鴟尾	B	SD01	－	縦帯～胴部	左側面・上部	1312	
1168	鴟尾	B	SX01	－	縦帯	左側面・上部	675	
1169	鴟尾	B	SD02	－	縦帯～鰭部	左側面・上部	522	
1170	鴟尾	B	確認調査（SX01･SD01 付近）	－	透かし部	左側面	1093	

表 22　遺物一覧表（瓦製作時の截断片）

No.	種類	窯	出土位置	グリッド・層位	長さ（cm）	残存幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存部	備考
1171	藁座痕の残る截断片	3	灰原	V7	5.9	13.0	3.3	250	灰白 2.5Y8/1	上・下・右側端	布の破れ
1172	藁座痕の残る截断片	3	灰原	L3	4.2	10.8	2.5	170	灰白 N8/	上・下端	截断面に段差
1173	藁座痕の残る截断片	3	灰原	L3	4.1	9.7	2.3	148	青灰 5B6/1	上・下・右側端	
1174	藁座痕の残る截断片	3	灰原	L3	4.4	10.5	2.1	197	灰白 N7/	上・下端	藁座部分を一部ナデ（オサエ）
1175	藁座痕の残る截断片	3	灰原	L3	5.1	9.1	1.9	125	オリーブ灰 2.5GY6/1	上・下端	藁座痕わずかに残るのみ
1176	藁座痕の残る截断片	3	灰原	I6	5.2	6.1	2.7	106	灰黄 2.5Y7/2	上・下・左側端	
1177	藁座痕の残る截断片	3	灰原	H4	4.6	10.0	2.8	145	灰白 2.5Y7/1	上・下端	
1178	藁座痕の残る截断片	3	灰原	H4	4.1	10.2	2.6	127	灰白 2.5Y7/1	上・下端	截断面に段差と破面
1179	藁座痕の残る截断片	3	灰原	O4	4.9	11.4	2.5	235	黄灰 2.5Y6/1	上・下・右側端	截断面の凸面側に破面
1180	藁座痕の残る截断片	3	灰原	L6	4.1	10.2	2.9	164	黄灰 2.5Y6/1	上・下・左側端	凸面の下端に指による強い押し付け
1181	藁座痕の残る截断片	3	灰原	G6 ＋ M12	5.4	15.1	2.9	339	灰 7.5Y6/1	上・下端	断面被熱
1182	藁座痕の残る截断片	3	灰原	H12	4.7	16.0	2.7	309	灰 10Y6/1	上・下端	截断面に段差
1183	藁座痕の残る截断片	3	灰原	K3	3.9	15.4	3.0	251	灰黄 2.5Y7/2	上・下・左側端	側端部の凸面側に破面
1184	藁座痕の残る截断片	3	灰原	O4	3.9	16.7	2.4	232	青灰 5B6/1	上・下・右側端	截断面の凸面側に破面
1185	藁座痕の残る截断片	3	灰原	K3 ＋ K4	4.1	17.2	2.3	240	灰白 2.5Y8/2	上・下端	
1186	藁座痕の残る截断片	3	灰原	K4 ＋ L4	5.2	18.4	3.1	317	灰白 10Y7/1	上・下・左側端	
1187	藁座痕の残る截断片	3	灰原	L5	5.0	5.0	2.9	73	灰 7.5Y6/1	上・下端	截断面の凸面側に段差
1188	藁座痕の残る截断片	3	灰原	S6	6.0	5.9	3.0	124	淡黄 2.5Y8/4	上・下端	凹面側からの複数の切り込み
1189	藁座痕の残る截断片	3	灰原	X6	4.9	4.7	2.3	76	オリーブ灰 5GY6/1	上・下端	断面被熱
1190	藁座痕の残る截断片	3	灰原	M8 ＋ N10	6.8	5.7	2.7	99	灰白 2.5Y8/2	上・下端	截断面の凸面側に段差
1191	藁座痕の残る截断片	3	灰原	T4	3.9	7.1	2.0	57	灰黄 2.5Y7/2	上・下・右側端	
1192	藁座痕の残る截断片	3	灰原	K5	-	-	2.0	156	灰黄 2.5Y7/2	下端	
1193	藁座痕の残る截断片	3	灰原	L5	-	-	2.7	94	灰 N6/	下端	
1194	藁座痕の残る截断片	2	窯体内	床面	5.2	17.7	2.8	317	淡黄 2.5Y8/3	上・下・左側端	上端面の凸面側面取り
1195	藁座痕の残る截断片	2	窯体内	床面＋灰原	6.0	14.0	2.5	364	灰白 10YR8/1	上・下・右側端	側端に大きな段差
1196	藁座痕の残る截断片	2	窯体内	床面	-	3.9	1.4	15	灰白 N7/	下端	凸面の下端に指圧痕
1197	藁座痕の残る截断片	2	窯体内	燃焼部	5.3	12.0	3.0	220	灰白 2.5Y8/1	上・下端	上面に破面
1198	藁座痕の残る截断片	2	窯体内	床面	5.0	6.1	2.7	112	灰白 N8/	上・下端	
1199	藁座痕の残る截断片	2	窯体内	床面	3.3	19.6	1.9	203	灰 N6/	上・下端	上端面に藁状の痕跡
1200	藁座痕の残る截断片	2	灰原	C5	3.9	16.3	2.7	231	浅黄 5Y7/3	上・下・右側端	上面に段差
1201	藁座痕の残る截断片	2	灰原	D8	6.4	13.0	3.1	261	灰 7.5Y6/1	上・下・左側端	上面に段差
1202	藁座痕の残る截断片	2	灰原	E4	3.4	10.9	2.5	156	灰白 N7/	上・下端	上面の凸面側に破面
1203	藁座痕の残る截断片	2	灰原	A3	4.6	11.3	2.3	171	灰白 2.5Y8/1	上・下端	
1204	藁座痕の残る截断片	－	－	表採	3.6	12.2	2.6	166	灰黄 2.5Y6/2	上・下・右側端	
1205	藁座痕の残る截断片	2	灰原	E4	4.6	7.0	2.4	96	灰白 N6/	上・下・左側端	断面被熱
1206	藁座痕の残る截断片	2	灰原	C1	5.4	7.9	2.5	138	灰白 2.5Y8/2	上・下端	上面の凸面側に破面
1207	藁座痕の残る截断片	2	灰原	D3	4.1	10.4	2.1	130	灰白 N7/	上・下・右側端	
1208	藁座痕の残る截断片	2	灰原	E3	4.2	8.4	2.6	113	灰白 2.5Y8/1	上・下・右側端	磨滅著しい
1209	平瓦	3	灰原	L5	-	12.4	2.6	1660	灰黄褐 10YR6/2	下端	
1210	平瓦	－	－	表採	-	15.5	3.3	1266	灰 5Y4/1	下・右側端	分割突帯・布綴じ痕
1211	平瓦	1	攪乱	埋土	-	13.6	2.9	487	灰白 5Y7/1	下端	全面に焼土付着
1212	側面の截断片	2	窯体内	床面	-	-	2.5	114	灰白 7.5Y8/1	左右側端	
1213	側面の截断片	2	灰原	E4(1 層)	-	-	2.2	45	灰 5Y6/1	左右側端	
1214	側面の截断片	1	窯体内	燃焼部 (下面)	-	-	2.5	76	灰白 2.5Y8/1	左右側端	表面全体に焼土付着
1215	側面の截断片	3	灰原	I9(1 層)	-	-	2.6	141	灰黄褐 10YR6/2	下・左右側端	下端側面に截断の目安線
1216	側面の截断片	－	SD01	埋土	-	-	3.2	208	灰白 5Y8/2	側	
1217	熨斗瓦	3	灰原	M4(1 層)	-	-	2.9	575	灰白 2.5Y8/2	下・左右側端	表面の磨滅著しい

表 23　遺物一覧表（文字瓦）

No.	種類	窯	出土位置	層位・グリッド	文字	長さ（cm）	狭端幅（cm）	広端幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	色調	瓦の残存部	備考
1218	文字瓦	1	灰原	C1	「廣山」	38.9	26.8	(27.8)	2.2	3360	灰 N4/	ほぼ完形	
1219	文字瓦	1	灰原	A1 ＋ B1	「廣山」	39.1	27.5	(29.6)	1.9	3570	灰 N4/	ほぼ完形	文字を半裁
1220	文字瓦	1	灰原	C1・＋ C2 ＋ C3	「廣山」	38.7	27.3	(29.5)	2.1	3670	褐灰 7.5YR4/1	ほぼ完形	
1221	文字瓦	1	灰原	B5 ＋ A5	「廣山」	－	－	－	1.8	60	灰 N4/	狭・側	文字の右・下欠損
1222	文字瓦	1	窯体内	－	「廣」	－	－	－	1.4	304	灰白 2.5Y8/2	狭・側	文字の左・下欠損
1223	文字瓦	1	灰原	B5 ＋ B6	「廣」	－	－	－	1.8	120	黄灰 2.5Y5/1	狭・側	文字の左・下欠損
1224	文字瓦	1	灰原	A5	「山」	－	－	－	2.0	80	灰 5Y4/1	側	文字の上下・左欠損
1225	文字瓦	1	窯体内	－	「山作瓦」	－	－	－	1.8	1002	オリーブ黒 5Y1/3	広・側	文字の上部欠損。3本線の指書き
1226	文字瓦	1	窯体内	－	－	－	－	－	1.8	614	黒 N1.5/	広・側	
1227	文字瓦	1	窯体内	－	－	－	－	－	1.8	30	黒 N1.5/	－	
1228	文字瓦	1	窯体内	－	－	－	－	－	1.7	10	黒 N1.5/	－	
1229	文字瓦	1	灰原	焚口付近	－	－	－	－	2.1	15	黒 N1.5/	－	
1230	文字瓦	1	窯体内	－	－	－	－	－	1.7	115	黒 2.5Y2/1	－	文字の上・左右欠損
1231	戯画瓦	1	灰原	A2+B1+B2+A3+C3	－	(39.5)	(26.1)	(29.8)	2.1	3300	灰 N4/	ほぼ完形	瓦分割時に画も分割

表 24　遺物一覧表（土器）

No.	出土位置	グリッド・層位	種類	器種	口径（cm）	器高（cm）	残存状況	色調	焼成	胎土	備考
1232	3 号窯窯体内	床面	須恵器	坏	(12.4)	-	口縁 1/8	灰 N5/	良好	粗	
1233	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(12.8)	-	口縁～底部 1/4	灰黄 2.5Y6/2	良	密	融着
1234	3 号窯灰原	-	須恵器	坏身	(12.35)	3.7	口縁～底部 1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	不良	やや粗	
1235	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(12.3)	-	口縁～胴部 1/5	黒褐 10YR3/2	良	密	
1236	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(11.45)	4.0	口縁～底部 1/3	灰白 2.5Y8/2	良	やや粗	融着
1237	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	12.5	4.1	ほぼ完形	にぶい黄橙 10YR7/2	良	密	融着
1238	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	12.25	4.2	口縁～底部 1/2	灰黄 2.5Y7/2	やや不良	密	
1239	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(13.4)	4.1	口縁～底部 1/2	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1240	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(12.7)	4.3	口縁～底部 3/7	灰黄 2.5Y6/2	良	密	
1241	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	13.4	4.15	口縁～底部 1/2	灰黄 2.5.Y7/2	やや不良	密	
1242	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(12.0)	-	口縁 1/8	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1243	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(12.4)	-	口縁 1/8	灰黄 2.5Y6/2	やや良	密	
1244	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(11.6)	-	口縁～胴部 1/6	黄灰 2.5Y5/1	良	密	自然釉
1245	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(12.75)	-	口縁～胴部 1/10	灰黄 2.5Y6/2	良	やや粗	自然釉
1246	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	-	-	頭頂～胴部 1/3	褐灰 10YR6/1	良	密	自然釉
1247	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	-	-	胴部 1/8	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1248	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(12.5)	-	口縁～胴部 1 /12	にぶい黄 2.5Y6/3	良	密	
1249	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(12.0)	-	口縁～胴部 1/10	灰 5Y5/1	良	やや粗	
1250	3 号窯灰原	-	須恵器	坏身	(12.5)	-	口縁 1/8	暗灰黄 2.5Y5/2	やや不良	密	自然釉
1251	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(11.85)	-	口縁～胴部 1/10	灰黄 2.5Y6/2	良	密	
1252	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(13.3)	-	口縁 1/10	灰黄 2.5Y6/2	良	やや粗	
1253	3 号窯灰原	-	須恵器	坏身	(12.6)	-	口縁～胴部 1/6	灰 5Y5/1	やや不良	密	融着
1254	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(13.4)	-	口縁 1/8	灰黄 2.5Y7/2	良	やや粗	
1255	3 号窯灰原	-	須恵器	坏	(12.9)	-	口縁 1/16	暗灰黄 2.5Y5/2	良	密	
1256	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(14.25)	-	口縁～胴部 1/8	灰黄 2.5Y6/2	やや不良	密	
1257	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(13.05)	-	口縁 1/17	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1258	3 号窯灰原	1	須恵器	坏	(13.7)	-	口縁 1/16	浅黄 2.5Y7/3	良	密	
1259	3 号窯灰原	表採	須恵器	坏	(13.2)	-	口縁部 1/10	灰 N6/	良	密	
1260	3 号窯灰原	1	須恵器	壷	(10.8)	-	口縁 1/11	灰白 2.5Y8/2	良	密	
1261	3 号窯灰原	-	須恵器	甕	(19.0)	-	口縁 1/9	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1262	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏蓋	-	-	頭頂部 1/3	灰白 2.5Y7/1	やや不良	密	
1263	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏蓋	(16.3)	-	口縁～胴部 1/5	灰白 7.5Y7/1	不良	密	
1264	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏蓋	(16.0)	-	口縁～胴部 1/3	褐灰 7.5YR6/1	良好	密	
1265	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏蓋	(16.0)	-	口縁 1/6	灰白 5Y8/2	やや不良	密	
1266	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏蓋	(15.6)	-	口縁 1/7	浅黄橙 7.5YR8/3	やや不良	密	
1267	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏蓋	(16.2)	-	口縁 1/12	灰白 N7/	やや不良	密	
1268	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(14.8)	-	口縁～胴部 1/4	灰白 5Y8/2	やや不良	密	
1269	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(13.9)	-	口縁 1/8	灰白 5Y8/2	良	密	
1270	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(13.6)	-	口縁～胴部 1/6	明青灰 5PB7/1	良好	密	
1271	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(12.45)	-	口縁 1/6	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1272	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(12.3)	-	口縁 1/8	灰 N6/	良好	やや粗	自然釉
1273	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(13.25)	-	口縁 1/8	褐灰 10YR6/1	良好	密	
1274	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(12.8)	-	口縁～胴部 1/8	明オリーブ灰 2.5GY7/1	良好	やや粗	
1275	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	坏	(12.3)	-	口縁 1/10	灰白 2.5Y7/1	不良	密	
1276	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	壺	-	-	底部	浅黄橙 10YR8/3	良	密	
1277	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	碗か	(13.1)	-	口縁 1/10	灰白 5Y8/1	やや不良	密	
1278	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	甕	(18.7)	-	口縁 1/5	灰白 5Y8/1	不良	密	
1279	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	陶臼	-	-	底部 1/2	灰 5Y6/1	やや不良	密	
1280	2 号窯窯体内	埋土	須恵器	陶臼	-	-	底部 1/3	灰白 2.5Y8/2	良	密	
1281	2 号窯灰原	1	須恵器	坏蓋	(16.0)	2.9	つまみ～口縁 1/4	にぶい橙 7.5YR6/4	やや良	密	
1282	2 号窯灰原	-	須恵器	坏蓋	(15.6)	-	口縁～胴部 1/7	灰黄 2.5Y7/2	やや不良	やや粗	
1283	2 号窯灰原	1	須恵器	坏蓋	(15.2)	-	口縁部 1/10	浅黄 2.5Y7/3	良	密	
1284	2 号窯灰原	-	須恵器	坏蓋	(14.8)	-	口縁 1/8	淡黄 2.5Y8/4	やや不良	密	
1285	2 号窯灰原	上	須恵器	蓋	-	-	胴部 1/6	灰白 2.5Y8/2	不良	密	
1286	2 号窯灰原	暗褐色土層・表採		坏蓋	(15.1)	-	口縁部 1/4	灰白 5Y7/2	良	密	
1287	2 号窯灰原	1	須恵器	坏身	14.0	4.2	口縁～胴部 4/5	灰褐 7.5YR5/2	良	密	
1288	2 号窯灰原	1	須恵器	坏身	(13.9)	-	口縁～胴部 1/6	灰黄褐 10YR5/2	良好	密	
1289	2 号窯灰原	上	須恵器	坏蓋	(13.8)	-	口縁～底部 1/8	灰白 2.5Y8/2	不良	密	
1290	2 号窯灰原	1	須恵器	坏身	(13.4)	-	口縁 1/2	灰白 2.5Y8/2	不良	密	
1291	2 号窯灰原	上	須恵器	坏	(13.4)	-	口縁部 1/12	灰白 5Y8/1	良	密	
1292	2 号窯灰原	-	須恵器	平瓶	(10.8)	-	口縁～頸部 1/3	黄褐 2.5Y5/3	不良	密	
1293	2 号窯灰原	1	須恵器	平瓶	-	-	胴部 1/4	灰白 5Y7/1	良	密	自然釉
1294	2 号窯灰原	検出面	須恵器	壺	-	-	底部 4/5	灰白 5Y7/1	良	密	
1295	2 号窯灰原	1・表土	須恵器	短頸壺	(10.1)	-	口縁～胴部 1/2	浅黄 2.5Y7/3	良	密	
1296	2 号窯灰原	1	須恵器	壺	-	-	胴～底部 1/8	灰黄褐 10YR6/2	やや不良	やや粗	
1297	2 号窯灰原	-	須恵器	皿	-	-	高台部 1/4	灰褐 7.5YR6/2	やや不良	密	
1298	2 号窯灰原		須恵器	把手							
1299	2 号窯灰原	1	須恵器	甕	-	-	肩～底部 1/3	灰白 2.5Y7/1	良	密	
1300	1 号窯灰原	1	須恵器	坏蓋		-	頂部	灰黄 2.5Y6/2	良好	やや粗	
1301	1 号窯灰原	1・2・表土	須恵器	蓋	15.4	-	口縁～底部 1/2	浅黄 2.5Y7/3	やや良	密	
1302	1 号窯灰原	2	須恵器	坏蓋	(15.4)	-	口縁部 1/4	灰黄 2.5Y7/2	良好	密	
1303	1 号窯灰原	1・表土	須恵器	坏	(14.55)	4.15	口縁～底部 1/4	灰黄 2.5Y 7/2	良好	密	
1304	1 号窯灰原	1・2	須恵器	坏	(14.45)	-	口縁～胴部 1/6	灰白 2.5Y8/2	良好	密	
1305	1 号窯灰原	1	須恵器	坏身	-	-	胴～底部 1/8	灰白 5Y8/1	やや不良	密	
1306	1 号窯灰原	1	須恵器	坏	(13.2)	-	口縁～胴部 1/5	灰黄 2.5Y6/2	良好	密	
1307	1 号窯灰原	1	須恵器	坏	(12.65)	-	口縁部 1/5	灰黄 2.5Y6/2	良好	密	
1308	1 号窯灰原	2	須恵器	坏身	-	-	底部 1/10	灰黄褐 10YR6/2	良好	密	
1309	1 号窯灰原	表土	須恵器	壺	-	-	胴～底部 1/4	浅黄 2.5Y7/3	良	密	
1310	1 号窯灰原	1	須恵器	環状瓶	9.15	31.4	口縁～底部 7/10	灰黄 2.5Y7/2	良好	密	
1311	1 号窯灰原	1+2 層	須恵器	甕	-	-	肩～底部 1/2	黄灰 2.5Y5/1	良	密	

表 25　遺物一覧表（土器）

№.	出土位置	グリッド・層位	種類	器種	口径（cm）	器高（cm）	残存状況	色調	焼成	胎土	備考
1312	1 号窯灰原	2	－	陶製紡錘車	上面 2.65	穴径 0.5	完形	灰 5Y5/1	良	密	
1313	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	坏蓋	(15.0)	-	口縁 1/8	灰白 2.5Y8/1	やや不良	密	
1314	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	坏	(14.0)	-	口縁～胴部 1/12	灰白 5Y7/1	やや良	密	
1315	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	坏	(14.4)	-	口縁～胴部 1/4	灰白 5Y7/1	やや良	密	
1316	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	坏	-	-	底部 1/8	浅黄 2.5Y7/3	やや不良	密	
1317	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	坏	13.3	-	口縁～胴部 1/20	灰白 2.5Y8/1	不良	密	
1318	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	平瓶	(10.6)	-	口縁～頸部 1/6	灰黄 2.5Y7/2	良好	密	
1319	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	平瓶	-	-	頸部のみ	褐灰 10YR5/1	良好	密	自然釉
1320	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	長頸壺	16.6	31.45	ほぼ完形	灰白 2.5Y7/1	良	密	自然釉
1321	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	須恵器	壺	19.0	-	口縁部 2/3	褐灰 10YR5/1	不良	粗	自然釉
1322	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	土師器	高坏	-	-	坏底～脚部 3/5	明黄褐 10YR7/6	良	粗	赤彩
1323	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	土師器	坏	(17.2)	-	口縁 1/10	明黄褐 10YR7/6	良	粗	赤彩
1324	1 号窯灰原	3 号窯埋土上層	土師器	坏	(17.7)	-	口縁～胴部 1/5	明黄褐 10YR7/6	良	粗	赤彩。
1325	SX01	-	須恵器	坏蓋	(15.4)	4.1	つまみ～口縁 2/3	オリーブ黄 7.5Y3/6	良	密	
1326	SX01	-	須恵器	坏蓋	つまみ径 2.5	-	つまみ～胴部 1/4	緑灰 10GY6/1	良	密	
1327	SX01	-	須恵器	坏蓋	つまみ径 3.8	-	つまみ～胴部 2/3	灰白 7.5Y7/1	良	密	
1328	SX01	-	須恵器	坏蓋	つまみ径 3.8	-	つまみ～胴部 1/4	灰白 5Y7/2	良	密	
1329	SX01	-	須恵器	坏蓋	(15.2)	-	口縁部 1/12	灰白 7.5Y8/1	良	密	
1330	SX01	-	須恵器	坏蓋	(15.9)	-	口縁部 1/7	灰白 7.5Y7/2	良	密	
1331	SX01	-	須恵器	坏身	(13.8)	4.3	口縁～底部 1/3	灰白 5Y7/2	良	密	
1332	SX01	-	須恵器	坏身	-	-	高台部 1/16	灰白 5Y7/2	良	密	
1333	SX01	-	須恵器	坏	(13.8)	-	口縁部 1/20	灰白 7.5Y7/1	良	密	
1334	SX01	-	須恵器	坏身？	(13.4)	-	口縁～胴部 1/10	浅黄 5Y7/3	良	密	
1335	SX01	-	須恵器	坏身	(12.75)	3.9	口縁～底部 1/4	浅黄 5Y7/3	良	密	
1336	SX01	-	須恵器	坏身	(12.0)	3.7	口縁～胴部 1/4	灰白 5Y7/2	良	密	
1337	SX01	-	須恵器	坏身	(13.0)	-	口縁部 1/9	灰白 7.5Y7/1	良	密	
1338	SX01	-	須恵器	坏	-	-	肩～胴部 1/5	灰白 10Y7/2	良	密	
1339	SX01	-	須恵器	坏身			底部のみ	浅黄 7.5Y8/3	良	密	
1340	SX01	-	須恵器	壺	-	-	頸部～肩部 1/3	灰白 7.5Y7/1	良	密	
1341	SD01	埋土	須恵器	坏	11.8	-	口縁部～底部 3/5	灰白 2.5Y7/1	良好	密	
1342	SD01	埋土	須恵器	坏身	-	-	底部～胴部 4/5	淡黄 5Y7/3	やや不良	密	
1343	SD01	埋土	須恵器	坏	(12.9)	-	口縁部～底部 1/7	暗灰黄 2.5Y5/2	良好	密	
1344	SD01	埋土	須恵器	坏身	(13.7)	-	口縁部 1/6	暗灰黄 2.5Y5/2	良好	密	
1345	SD01	埋土	須恵器	坏身	(13.1)	-	口縁～胴部 1/8	褐灰 10YR6/1	良好	密	
1346	SD01	埋土	須恵器	坏	(12.0)	-	口縁部 1/8	灰白 10YR7/1	良好	密	
1347	SD01	埋土	須恵器	坏身	(13.0)	-	口縁部 1/6	灰白 5Y7/1	良好	密	
1348	SD02	埋土	須恵器	坏身	(8.6)	3.0	口縁～底部 3/4	灰 7.5Y6/1	良	やや粗い	
1349	SD02	埋土	須恵器	壺	-	-	底部 1/2	灰白 10YR8/1	良	密	
1350	SD02	埋土	灰釉陶器	碗	-	-	胴～底部 1/4	褐灰 10YR6/1	やや不良	やや粗い	
1351	SD02	埋土	山茶碗	碗	-	-	底部のみ	灰白 2.5Y7/1	良好	やや粗い	
1352	SD02	埋土	山茶碗	碗	-	-	底部のみ	灰白 2.5Y7/1	良好	密	
1353	SD02	埋土	土師質土器	皿	11.45	-	口縁～底部 3/4	灰白 10YR8/2	良	やや粗い	
1354	SD02	埋土	土師質土器	皿	9.95	2.2	口縁部 1/4 欠損	浅黄橙 10YR8/3	良	やや粗い	
1355	SD02	埋土	土師質土器	皿	10.0	2.25	口縁～底部 3/5	灰白 10YR8/2	良	やや粗い	
1356	SD02	埋土	土師質土器	皿	8.2	2.15	口縁～底部 2/3	浅黄橙 10YR8/3	良	密	
1357	SD02	埋土	土師質土器	皿	(8.7)	2.25	口縁～底部 4/5	浅黄橙 10YR8/3	良	やや粗い	
1358	SD02	埋土	土師質土器	皿	7.8	2.2	ほぼ完形	浅黄橙 10YR8/4	良	密	
1359	SD02	埋土	土師質土器	皿	8.65	2.0	完形	浅黄橙 10YR8/3	良	やや粗い	
1360	SD02	埋土	土師質土器	皿	(8.7)	2.5	口縁～底部 3/5	浅黄橙 10YR8/3	良	密	
1361	SD02	埋土	陶器	鉢	15.05	4.7	口縁～底部 2/3	にぶい赤褐 5YR5/4	良	密	
1362	SD02	埋土	陶器	皿	(13.6)	3.05	口縁～底部 4/5	灰黄 2.5Y7/2	良好	密	
1363	SD02	埋土	陶器	秉燭	4.2	2.0	完形	灰黄 2.5Y7/2	良好	密	
1364	SD02	埋土	陶器	擂鉢	(34.4)	15.2	口縁～底部 1/4	にぶい赤褐 5YR6/2	良	密	
1365	－	3 号窯灰原下層	弥生土器	壺	19.8	32.6	口縁～底部 4/5	橙 5YR6/6	良	粗	
1366	－	3 号窯灰原下層	弥生土器	壺	(14.6)	-	肩部 1/5	浅黄橙 10YR8/4	不良	密	
1367	－	3 号窯灰原下層	弥生土器	壺	-	-	底部	にぶい黄橙 10YR7/4	不良	密	
1368	－	3 号窯灰原下層	弥生土器	甕	(11.7)	-	口縁～肩部 1/5	浅黄橙 7.5YR8/4	不良	密	
1369	確認調査	表土	須恵器	坏蓋	つまみ径 2.65	-	頭頂部のみ	にぶい黄 2.5Y6/3	良	密	
1370	確認調査	包含層	須恵器	坏蓋	つまみ径 3.4	-	頭頂～胴部 4/5	明黄褐 2.5Y7/6	良	密	
1371		表土	須恵器	坏蓋	(15.2)	-	口縁 1/20	黄灰 2.5Y6/1	良	密	
1372	確認調査	包含層	須恵器	坏蓋	(16.0)	-	口縁～胴部 1/8	灰白 10YR8/1	良好	密	
1373			須恵器	坏蓋	(15.5)	-	口縁部 1/12	灰白 5Y 7/2	良	密	
1374		表土	須恵器	蓋	(16.0)	-	口縁部 1/8	淡黄 2.5Y8/3	良	密	
1375		表土	須恵器	坏身	11.95	4.05	口縁～底部 2/3	暗オリーブ灰 2.5GY3/1	良	密	外面に煤付着。
1376		表土	須恵器	坏身	(12.0)	-	口縁 1/10	にぶい黄 2.5Y6/3	良	密	
1377		表土	須恵器	坏？	(12.0)	-	口縁～胴部 1/14	黄灰 2.5Y6/2	良好	密	
1378		表土	須恵器	坏身	-	-	底部 2/3	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1379		表土	須恵器	坏	-	-	底部のみ 1/1	灰白 5Y7/1	良	密	
1380	撹乱	埋土	須恵器	坏身	(14.1)	4.5	口縁～底部 1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	やや不良	やや粗	
1381		表土	須恵器	坏	(13.6)	-	口縁部 1/2	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1382		表土	須恵器	坏身	-	-	頭頂～胴部 1/2	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1383		表土	須恵器	坏身	(14.4)	5.1	口縁～底部 1/8	灰白 2.5Y8/2	不良	やや粗	
1384		表土	須恵器	坏身	-	-	底部 1/4	浅黄 2.5Y7/3	良	密	
1385		表土	須恵器	坏身	(12.7)	-	口縁～胴部 1/4	黄灰 2.5Y6/1	良	密	自然釉
1386		表土	須恵器	坏	(12.1)	-	口縁部 1/10	灰 5Y6/1	良	密	
1387		表土	須恵器	坏	(12.0)	-	口縁～胴部 1/8	灰黄 2.5Y7/2	良好	密	
1388	確認調査	表土	須恵器	坏	(13.0)	-	口縁～胴部 1/8	灰黄 2.5Y6/2	良好	密	
1389	1 区	表土	須恵器	坏身	(13.4)	4.35	口縁～頭頂部 1/4	灰黄褐 10YR5/2	良	密	自然釉
1390	撹乱	埋土	須恵器	坏身	(13.5)	4.35	口縁～底部 1/8	灰黄 2.5Y7/2	やや不良	密	
1391		表土	須恵器	坏	(14.0)	-	口縁～胴部 1/8	灰褐 7.5YR6/2	良好	密	
1392		表土	須恵器	坏	(14.0)	-	口縁部 1/12	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1393		表土	須恵器	坏	(12.4)	3.85	口縁～底部 1/5	浅黄 2.5Y7/3	良	密	
1394		表土	須恵器	坏	(13.8)	-	口縁～胴部 1/8	灰白 5Y7/1	良	密	
1395	1 号窯周辺	表土	須恵器	坏身	(13.8)	-	口縁～胴部 1/20	灰黄 2.5Y7/2	良	密	
1396	撹乱	埋土	須恵器	坏	(14.8)	4.3	底部 1/8	灰白 2.5Y8/1	良好	密	
1397		表土	須恵器	坏	(14.0)	-	口縁～胴部 1/16	灰褐 7.5YR5/2	良好	密	
1398		表土	須恵器	坏	-	-	胴～底部 1/8	灰褐 7.5YR5/2	良	密	
1399	確認調査	包含層	須恵器	坏	-	-	胴～底部 1/8	灰白 5Y7/1	良好	密	
1400		表土	須恵器	坏身	-	-	底部 1/2	灰黄 2.5Y6/2	良	密	
1401	撹乱	埋土	須恵器	坏	-	-	底部 1/8	灰白 5Y7/1	良	密	
1402		表土	須恵器	坏身	-	-	底部 1/8	灰オリーブ 5Y6/2	良	密	
1403	確認調査	包含層	須恵器	坏蓋	(16.4)	-	口縁部 1/16	灰黄 2.5Y7/2	良好	密	
1404	撹乱	埋土	須恵器	甕	(18.6)	-	口縁 1/12	灰 N6/	やや不良	密	
1405		表土	須恵器	甕	(16.6)	-	口縁～經部 1/10	灰黄褐 10YR6/2	良好	密	
1406		表土	須恵器	甕	(17.8)	-	口縁～經部 1/11	灰黄褐 10YR6/2	良好	密	
1407		表土	須恵器	壺	-	-	底部 1/4	灰 7.5Y4/1	良	やや粗	自然釉
1408		表土	須恵器	陶臼	-	-	底部 1/4	灰白 2.5Y8/2	良	密	
1409	1 号窯周辺	表土	土師器	皿	-	-	脚部 3/4	明赤褐 2.5YR5/8	良	やや粗	赤彩
1410		表土	土師器	甑	(22.0)	-	口縁～胴部 1/8	明褐 7.5YR5/6	良	密	
1411	1 号窯撹乱	埋土	灰釉陶器	碗	(14.6)	4.45	口縁～底部 1/4	にぶい黄橙 10YR7/3	不良	密	
1412		表土	灰釉陶器	碗	(14.6)	-	口縁～胴部 1/12	灰白 2.5Y7/1	良	やや粗	
1413		表土	灰釉陶器	碗	(15.4)	-	口縁 1/16	灰白 2.5Y7/1	良	密	

第５章　上海土遺跡

１　概要

（１）遺構

調査区の西側で掘立柱建物が３棟検出されている。いずれも建物方位が近似しており、ほぼ同時期に存在した建物とみられる。出土遺物から、中世末から近世にかけての建物であると推定される。

上海土遺跡では、このほかに建物としては認識できないが、柱穴とみられる小穴が多数確認されている。また、調査時に遺構としては認識されていないが、調査区の西側には、北西から南東に向かう方向に、氾濫の痕跡とみられる窪みが確認される。同様の痕跡は、西側に隣接する大門西遺跡の調査でも検出されており、中屋遺跡の東端を南北に流れる大門川の氾濫によるものであると推測される。

（２）遺物

遺物は少なく、包含層や攪乱・確認調査で採取されたのもを含めても、ポリエチレンコンテナ１箱にも満たない程の数量である。

掘立柱建物 SB01・02 では、柱穴から土師質土器皿や内耳鍋が出土している。そのほかには、建物としては認識できないが、柱穴とみられる小穴からも土師質土器皿の破片が出土している。いずれも中世末から近世にかけてのものである。包含層や攪乱・確認調査で採取されたものには、土師質土器皿や陶磁器類がある。いずれも中世末から近世にかけてのものであり、調査区のほぼ全域から出土しているが、東側では近世の遺物が多い傾向が認められる。

２　掘立柱建物

上海土遺跡では柱穴とみられる多数の小穴が検出されているが、柱列から明確に掘立柱建物として認識できるものは、調査区西側で発見された SB01 ～ 03 の３棟である。

SB01（図 369、図版 98）

調査区の西端に位置する東西棟である。梁行１間・桁行４間の側柱建物で、南東の隅柱は攪乱によって失われている。建物規模は 4.1 ｍ× 7.6 ｍである。建物の主軸は、N－19°－ W とやや西に振れる。柱痕跡の有無に関しては記録がないため不明であるが、いくつかの柱穴で重複する穴が検出されており、抜き取られている可能性が高いと推測される。桁行の柱間は 190 ㎝の等間と推定される。柱穴は円形または楕円形で、直径は 30 ～ 40 ㎝前後のものが多い。大型の穴や楕円形の穴は、おそらく抜き取り穴であろう。深さは 15 ～ 52 ㎝で、南東の隅柱がやや浅いがほかの柱穴は高さが比較的揃っている。

柱穴 SP09・10・17 ～ 22 からは遺物が出土している。遺物はいずれも土師質土器であり、SP20 では比較的残存状態のよいもの（1427 ～ 1433）が集中して発見されている。いずれも中世末から近世にかけてのものであり、抜き取り穴であるとすると廃絶時に伴うものの可能性もあるが、SB01 は概ね中世末から近世にかけての建物とみてよい。

SB02（図 370、図版 98）

SB01 から東へ 18 ｍに位置する東西棟である。梁行１間・桁行４間の側柱建物であるが、北側は柱穴が１ヶ所検出されておらず３間となっている。建物規模は 4.6 ｍ ×7.6 ｍであり、SB01 とほぼ同規模である。建物の主軸も SB01 と近似しており、N－16°－ W となっている。いずれも抜き取り穴であり、柱

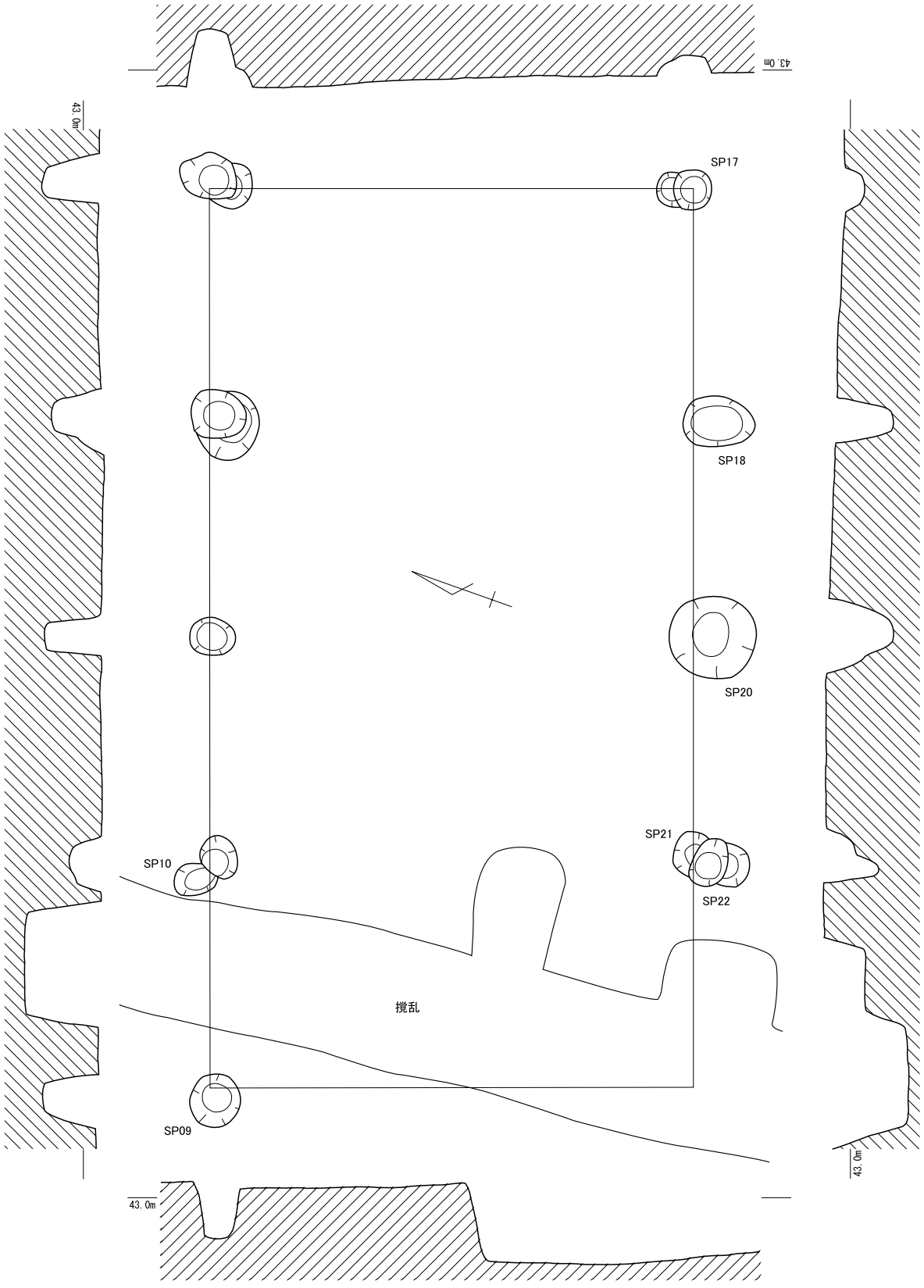


図 369　SB01 実測図

痕跡は検出されていない。桁行の柱間は 190 ㎝の等間と推定される。抜き取り穴は円形または楕円形で、長径 37 ～ 50 ㎝の規模である。深さは 27 ～ 30 ㎝で、隅柱の抜き取り穴がやや深くなっているが、底部の高さはほぼ揃っている。底部は柱の根入れの高さとほぼ一致するものと推測される。

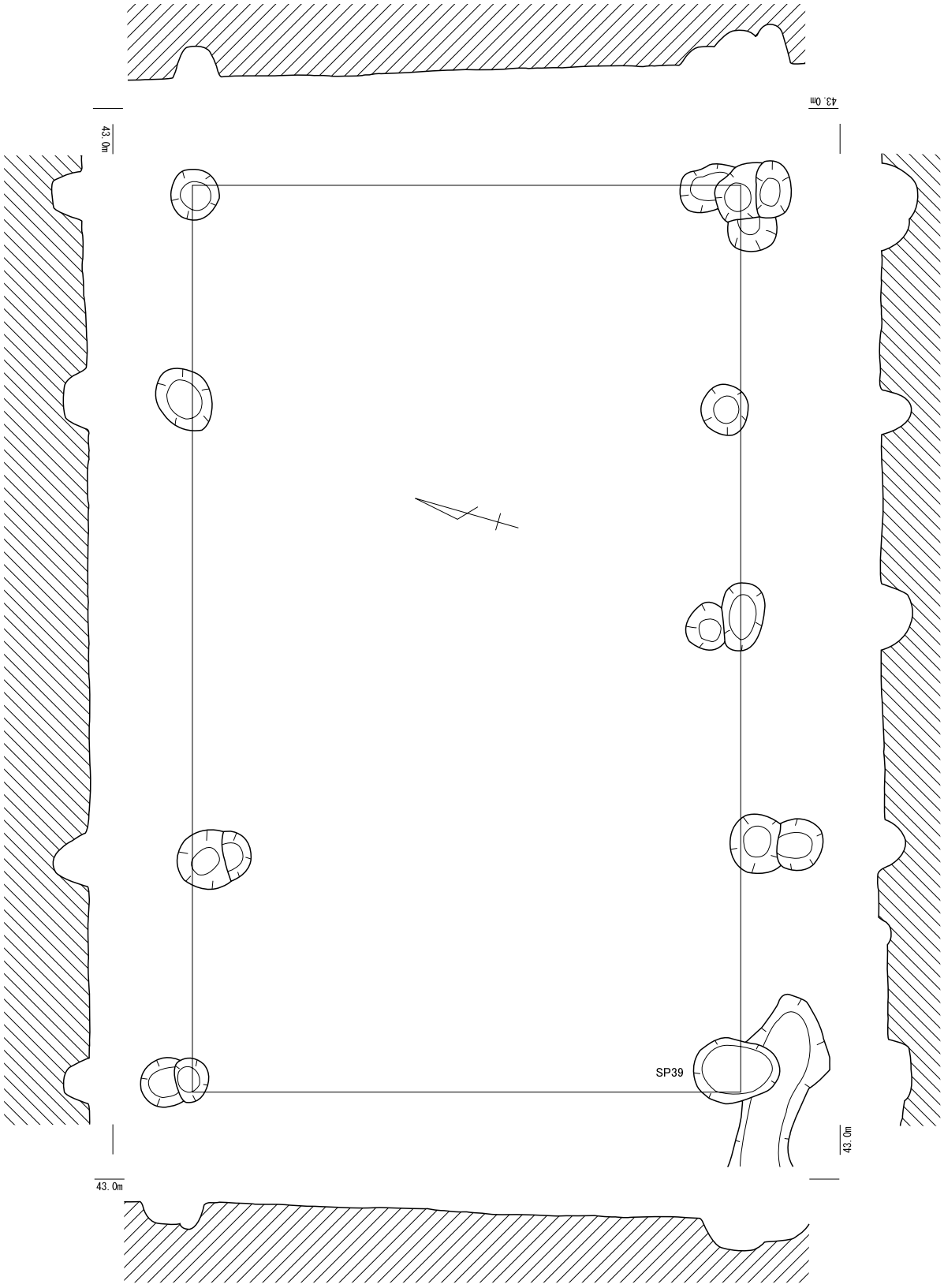


図 370　SB02 実測図

遺物としては、SP39 から土師質土器皿が出土している。いずれも小破片ではあるが、SB01 から出土したものと同様に、中世末から近世にかけてのものと推定される。建物の廃絶年代もこの頃とみてよいであろう。

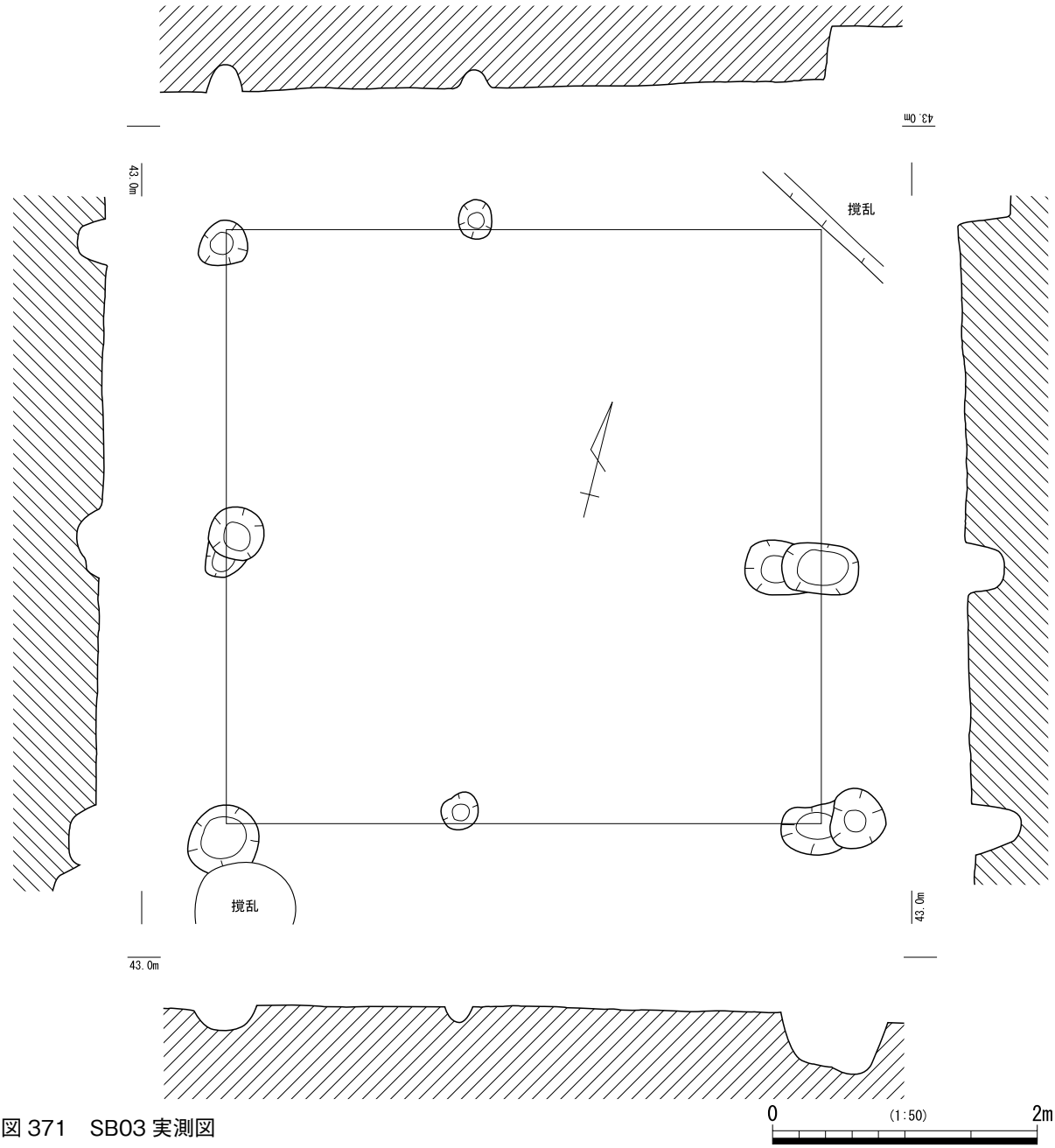


図 371　SB03 実測図

SB03（図 371、図版 98）

SB02 の東側に並ぶ形で建てられている正方形の建物である。主軸はＮ－14°－Ｗであり、梁行の規模は 4.5 ｍと、いずれも SB02 とほぼ同一である。柱穴はいずれも抜き取り穴であり、柱痕跡は検出されていない。柱間はばらつきがあり、北・南・東側が 185 ㎝＋ 265 ㎝、西側は 225 ㎝の等間と推定される。抜き取り穴は円形または楕円形で、長径が 27 ～ 55 ㎝と穴によって規模が大きく異なる。深さは 12 ～ 37 ㎝であり、底部の高さは南東側に向かって低くなっている。北側と南側の中間の柱は、他に比べて浅く極端に小さい。柱そのものが細い材を使用していた可能性が高い。

遺物は出土していないが、SB02 よりも規模が小さく、柱筋の方向を合わせて並列して建てられており、SB02 に付属する建物であると推測される。SB02 と同時期に建てられたものか、後に増築されたものかは不明であるが、概ね中世末から近世にかけての時期の建物とみてよい。

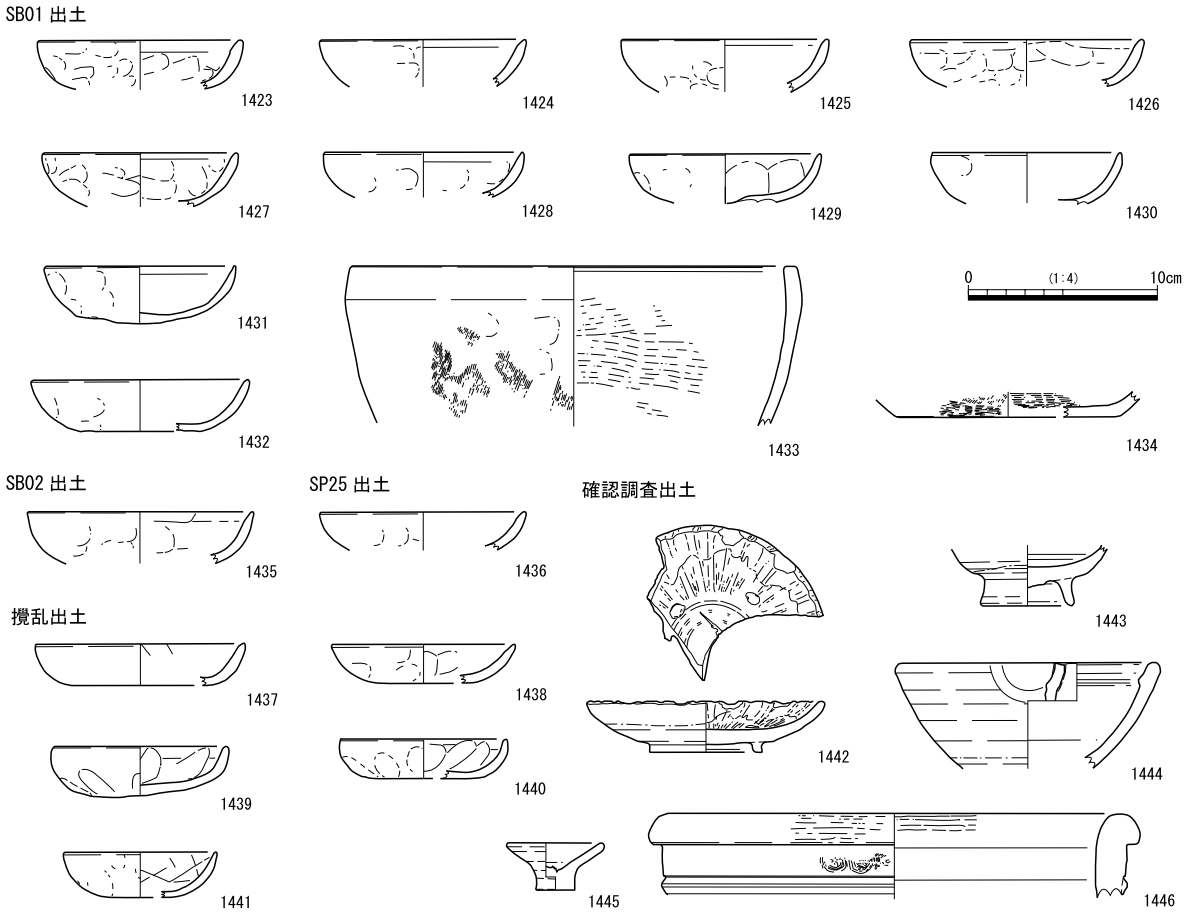


図 372　上海土遺跡出土遺物

3　出土遺物

上海土遺跡では、出土遺物自体が少なく、包含層や攪乱・確認調査で採取されたのもを含めても、ポリエチレンコンテナ 1 箱にも満たない程の数量である。細片がほとんどであるが、口縁部や底部が残存し、形状が判明するものを中心に 24 点図示する。

SB01　1423 ～ 1434 は SB01 の柱穴から出土した遺物である。1423 ～ 1432 は土師質土器皿である。いずれも詳細な年代は不明であるが、中世末から近世にかけてのものである。1423・1424 は SP09、1425 は SP17、1426 は SP22、1427 ～ 1432 は SP20 から出土している。いずれも手づくね成形で、やや軟質のものである。1433 は SP20 から出土した、半球形内耳鍋の口縁部の破片である。16 世紀後半から 17 世紀にかけてのものである。1434 は SP19 から出土した内耳鍋の底部の破片である。

SB02　1435 は SB02 から出土した土師質土器皿である。口縁部の破片であり、SP39 から出土している。SB01 から出土したものと同様に、手づくね成形でやや軟質のものである。中世末から近世にかけてのものとみてよい。

SP25　1436 は建物としては認識できないが、柱穴とみられる SP25 から出土した土師質土器皿である。口縁部の小片であるが、SB01・02 から出土しているものと同様のものである。

その他　1437 ～ 1441 は、攪乱から出土した土師質土器皿である。手づくね成形で、器壁が薄く比較的硬質である。1442 ～ 1446 は確認調査で採取された陶磁器類である。1442 は菊花形皿、1443 は碗、1444 は片口、1445 は秉燭、1446 は瓦質の火鉢である。いずれも近世のものである。

図 373　上海土遺跡全体図

第６章　理化学的分析

１　放射性炭素年代測定

（１）測定対象試料

測定対象の試料は、篠場瓦窯１号窯から出土した炭化物３点（IAAA-61584 ～ 61586）である。

（２）測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}C/^{12}C$ の測定も同時に行う。

（３）算出方法

１）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。

２）BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950 年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

３）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ^2 検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）$\delta\,^{13}C$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta\,^{13}C$ の値を用いることもある。$\delta\,^{13}C$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta\,^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta\,^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の ^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta\,^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}C/^{12}C$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta\,^{13}C$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta\,^{14}C$ は、試料炭素が $\delta\,^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の ^{14}C 濃度を、$\delta\,^{13}C$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta\,^{13}C / 1000))^2$$ （$^{14}A_S$ として $^{14}C/^{12}C$ を使用するとき）

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta\,^{13}C / 1000))$$ （$^{14}A_S$ として $^{14}C/^{13}C$ を使用するとき）

$$\Delta\,^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta\,^{14}C$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

14C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、Δ ^{14}C との関係は次のようになる。

Δ ^{14}C = (pMC ／ 100 − 1) × 1000（‰）

pMC = Δ ^{14}C ／ 10 + 100 (%)

国際的な取り決めにより、このΔ ^{14}C あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age；yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$$

5）^{14}C 年代値と誤差は，1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示する。

6）較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10 較正プログラム（Bronk Ransey1995 Bronk Ramsey2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

（4）測定結果

炭化物 3 点（IAAA-61584 ～ 61586）は、それぞれ 1260±40、1250±30、1260±30yrBP の ^{14}C 年代である（表 26）。

3 点は近似した年代を示し、暦年較正年代（1σ）では、飛鳥時代末から平安時代初頭にかけて、主に奈良時代を中心とする年代である。化学処理、測定値に問題はなく、3 点の ^{14}C 年代もほぼ等しいことから、妥当な年代であると考える。

表 26　放射性炭素年代測定結果

IAA Code No	BP 年代および炭素の同位体比		δ ^{13}C の補正無し	
IAAA-61584	Libby Age（yrBP）	1,260 ± 40	δ ^{14}C（‰）	− 149.8 ± 3.5
	δ ^{13}C（‰）、（加速器）	− 27.59 ± 0.96	pMC（%）	85.02 ± 0.35
	Δ ^{14}C（‰）	− 145.3 ± 3.9	Age（yrBP）	1,300 ± 30
	pMC（%）	85.47 ± 0.39		
IAAA-61585	Libby Age（yrBP）	1,250 ± 30	δ ^{14}C（‰）	− 151.8 ± 3.0
	δ ^{13}C（‰）、（加速器）	− 29.66 ± 0.91	pMC（%）	84.82 ± 0.30
	Δ ^{14}C（‰）	− 143.7 ± 3.5	Age（yrBP）	1,320 ± 30
	pMC（%）	85.63 ± 0.35		
IAAA-61586	Libby Age（yrBP）	1,260 ± 30	δ ^{14}C（‰）	− 147.6 ± 3.0
	δ ^{13}C（‰）、（加速器）	− 26.62 ± 0.82	pMC（%）	85.24 ± 0.30
	Δ ^{14}C（‰）	− 144.7 ± 3.3	Age（yrBP）	1,280 ± 30
	pMC（%）	85.53 ± 0.33		

参考文献

Stuiver,M.and Polash,H.A.(1977)Discussion:Reporting of 14C data.Radiocarbon,19:355-363

Bronk Ramsey C. (1995)　Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A) 355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates , Radiocarbon, 43 (2A) 381-389

Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

2　考古地磁気測定

（1）調査方法

篠場瓦窯では、床面が比較的良好な状態で遺存していたことから、発掘調査された1～3窯の3基について、考古地磁気測定を実施した。分析試料は平成15年8月に各窯の床面から採取し、試料の分析は富山大学にて実施した。試料の採取と分析は、富山大学理学部教授（当時）広岡公夫氏に依頼した。

（2）測定結果

採取した試料から得られたデータを用いて、窯ごとに平均磁化方位を計算した。統計計算にはフィッシャーの統計法（Fisher 1953）を用い、フィッシャーの95%の信頼角（A_{95}）と精度計数（k）を求め、平均値の精度を検討した。

各窯の平均磁化方位を、東海地方の考古地磁気永年変化曲線（広岡2003）とともに表したのが、図374である。黒丸の平均磁化方位を囲む円は、フィッシャーの信頼円（A_{95}）を示している。3号窯は7世紀末（680年頃）、2号窯は7世紀最末期（700年頃）、1号窯はやや時代が降って8世紀中葉（760年頃）であると推定される。

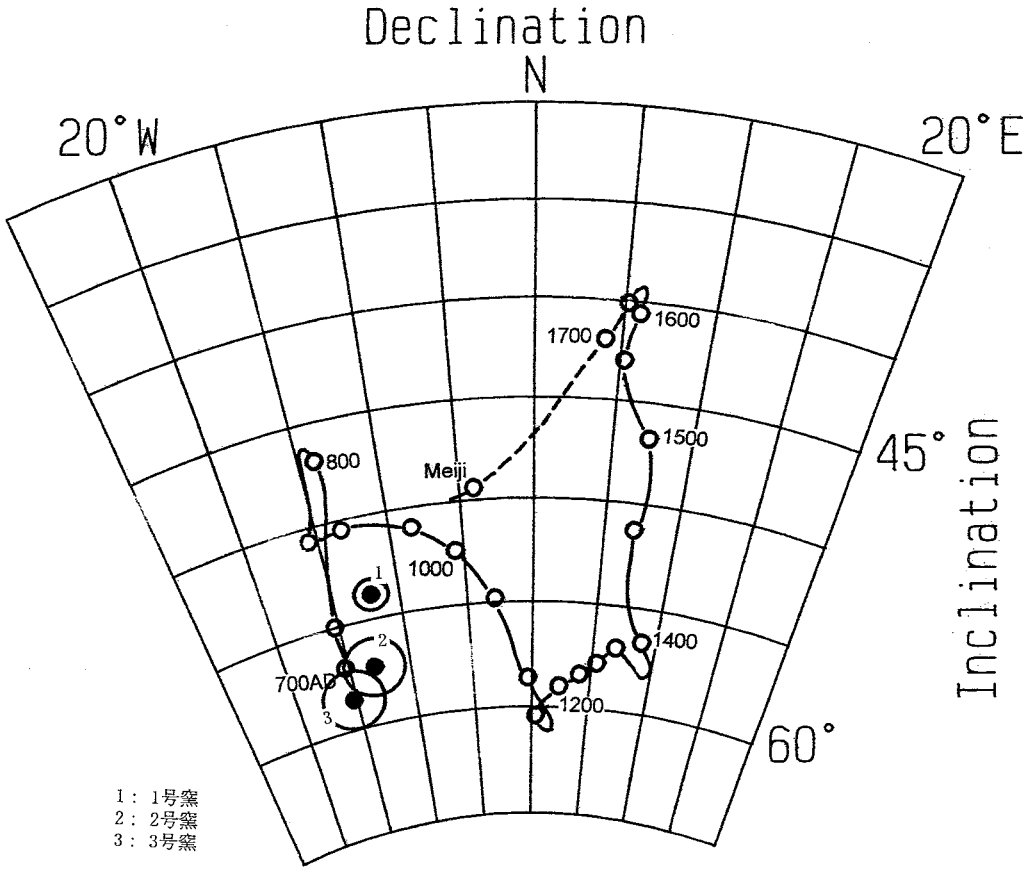


図374　篠場瓦窯の考古地磁気測定結果と東海地方考古地磁気永年変化

参考文献

Fisher,R.A.　(1953)　Dispersion on a sphere,Proceedings of Royal Society of London, Ser.A, vol.217:295-305.

広岡公夫・藤澤良祐（2003）　東海地方の地磁気永年変化曲線，考古学と自然科学，45

3　元素マッピング分析

（1）はじめに

篠場瓦窯では、窯跡が3基検出され、白鳳時代の瓦が多量に出土している。このうち、3号窯では表面が赤色を呈する瓦が出土している。この瓦について元素マッピング分析を行い、その色調の由来について検討した。

（2）試料と方法

分析試料は、3号窯より出土した軒丸瓦3点で、いずれも瓦当の縁部の破片を非破壊で測定した。いずれも表面にごく薄い赤色層が、瓦全体に存在していたとみられる。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type Ⅱを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV･1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。検出可能元素はナトリウム～ウランである。

本分析での測定条件は、30kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間5000sを10～13回走査に設定した。

（3）結果

元素マッピング分析の実施範囲と、分析により得られた鉄(Fe)のマッピング図を図375に示す。

赤色顔料として考えられるものには、朱（水銀朱）、鉛丹、ベンガラがある。なお、ここではベンガラは、広義に鉄による赤い発色をした顔料を指している。今回分析した試料からは、いずれも鉄が検出される一方、水銀や鉛は検出されていない。このことから、水銀朱や鉛丹は使用されておらず、赤い発色は鉄によるものであると推定される。

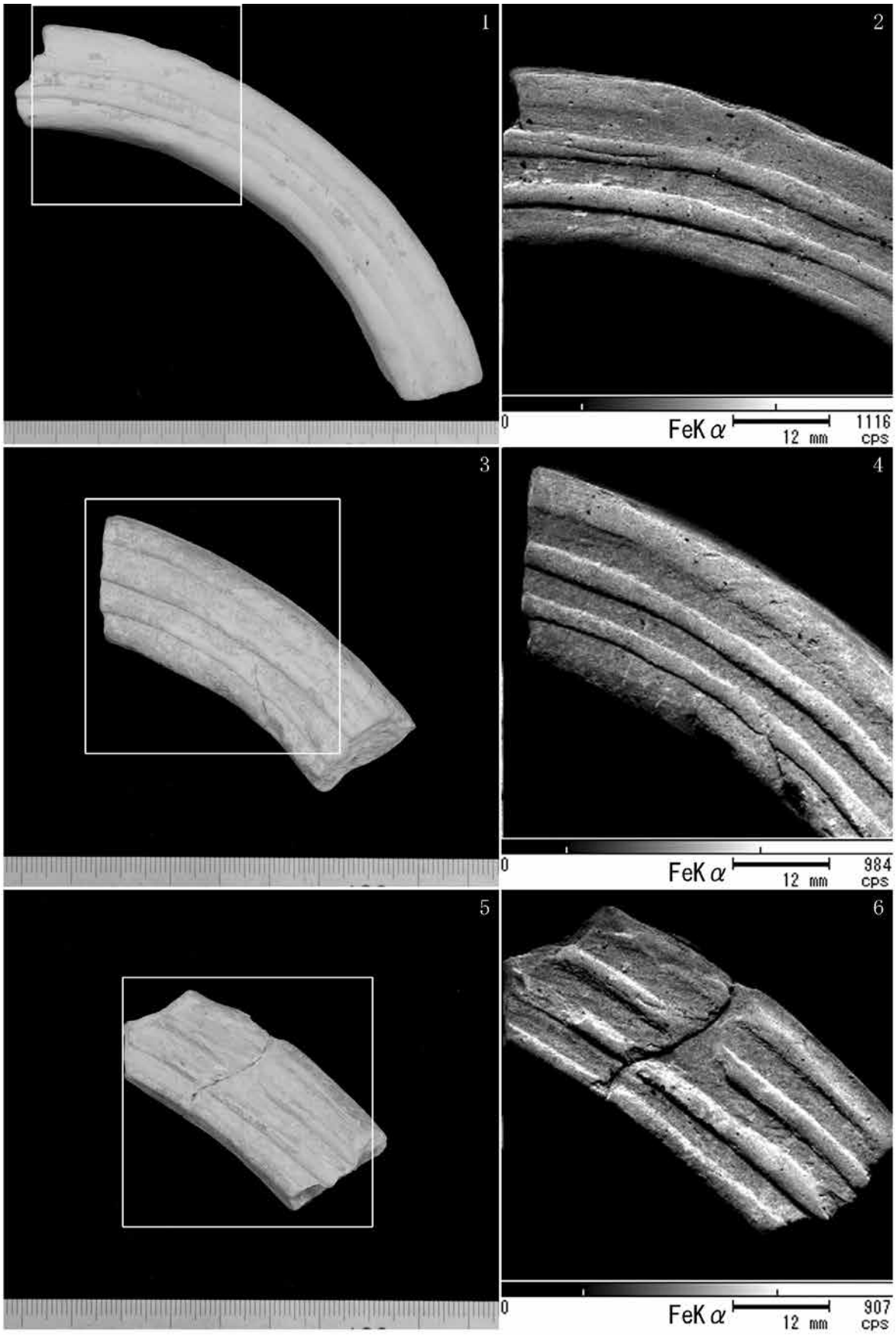
しかし、鉄による赤い発色は、単純に鉄の有無や多寡だけではなく、その酸化状態に大きく影響される。また、鉄は胎土中にも普通に含まれている元素である。これらの理由より、鉄が検出されても、赤色顔料、いわゆるベンガラとして意図的に表面に塗布されたものであるかの判断は非常に難しい。たとえ表面が赤くても、赤色顔料の塗布によるものではなく、焼成の加減によりできたものである可能性もある。

マッピング図をみると、試料の高低差や角度によるコントラストもみられるが、実物とよく比較しながら観察すると、赤色層の残る箇所と残ってない箇所のコントラストも僅かな差ながら確かに認められる。これは、鉄含有量の違いによるものと考えられ、瓦の表面に、胎土素地とは組成の異なる物質の塗布があったといえよう。例えば、胎土素地よりも鉄分のやや多い泥漿を塗って、酸化炎焼成により表面をより赤く発色させるといった手法等が考えられる。

参考文献

成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料Ⅰ－赤彩土器－．考古学ジャーナル，438，10-14，ニューサイエンス社.

成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料．正倉院紀要，26，13-61，宮内庁正倉院事務所.



1. 分析No.1 分析範囲　2. 分析No.1 鉄マッピング図　3. 分析No.2 分析範囲
4. 分析No.2 鉄マッピング図　5. 分析No.3 分析範囲　6. 分析No.3 鉄マッピング図

図 375　元素マッピング分析結果

第７章　総括

１　軒丸瓦

（１）分類と変遷

篠場瓦窯跡では、様式としては大きく３種の軒丸瓦が出土している。Ⅰ類は、いわゆる川原寺式軒丸瓦で、素文傾斜縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。Ⅱ類は、重圏文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦であり、瓦笵は蓮子配置が１＋８となるＡと、１＋６となるＢの２つが確認できる。さらにＢには、通常のＢ１だけでなく、周縁部の重圏文が削られ、見かけ上素文縁となるＢ２が存在する。また、丸瓦接合の技法と裏面調整の技法には、丸瓦の取り付け位置が高く、瓦当裏面を平坦に仕上げる技法ａと、丸瓦の取り付け位置が下がり、瓦当裏面が中央が膨らむ形態となる技法ｂの２種が確認できる。Ⅲ類は、傾斜縁の内区側に二重の圏線が巡るものであり、Ⅱ類Ａを改笵したものと推定される。

第４章で報告したように、各窯から出土したものには混入品とみられる破片も少量含まれるが、それらを除いた上で、各種の軒丸瓦の生産状況を整理したものが図 376 である。

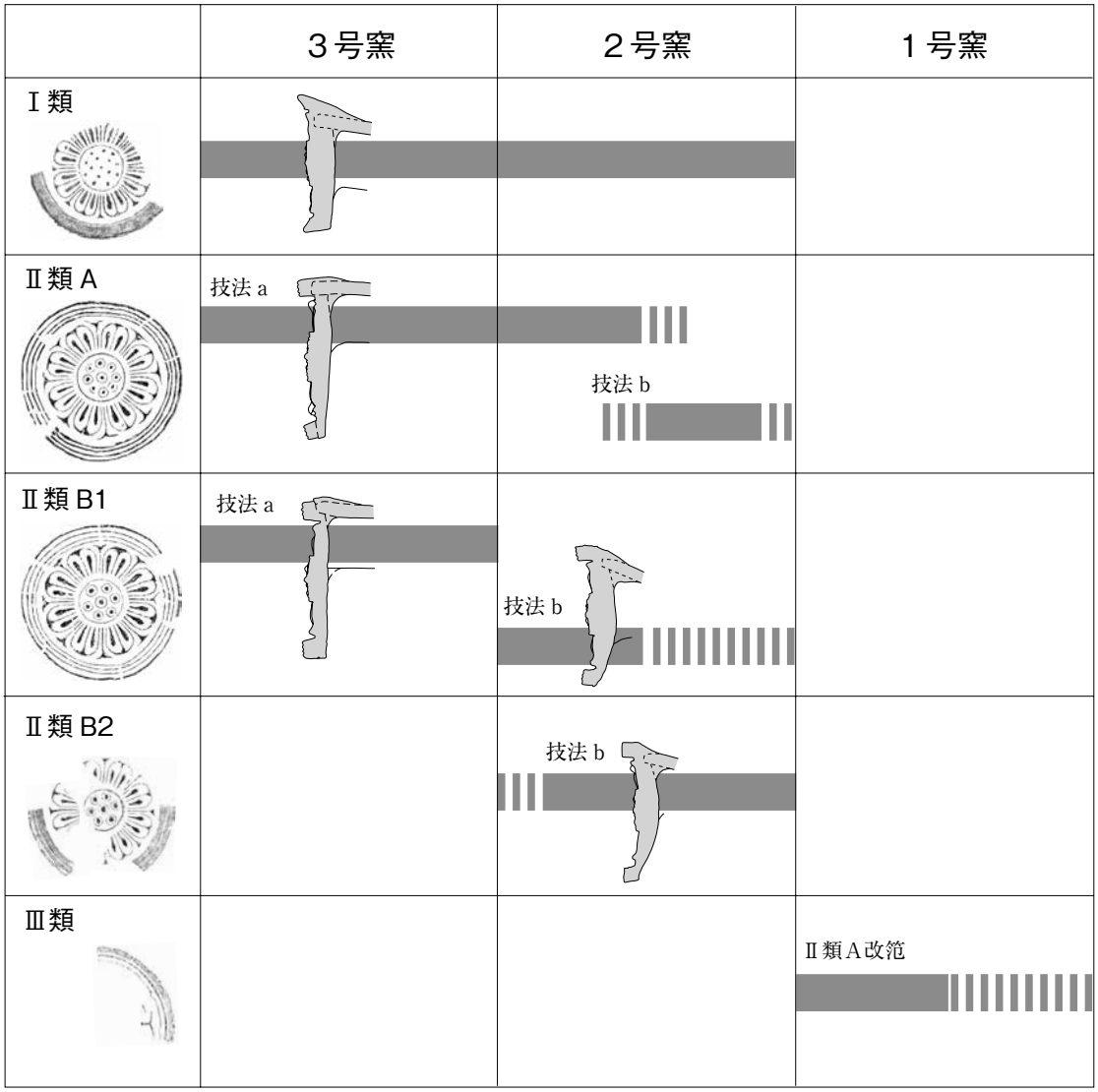


図 376　軒丸瓦変遷図

３号窯　３号窯では、Ⅰ類・Ⅱ類Ａ・Ⅱ類Ｂ１の３種が生産されている。Ⅰ類は、瓦当が厚く、瓦当側面と裏面に削り調整が施されており、裏面側縁のが明瞭に屈曲する。Ⅰ類には内区に笵傷が確認されているが、笵傷は３号窯の段階からすでに存在している。丸瓦と瓦笵の位置関係は、０°と 180°回転したものがある。

Ⅱ類はＡ・Ｂ１にほぼ同じ技法を用いている。丸瓦接合・裏面調整は技法ａである。丸瓦の取り付け位置は高く、一部瓦当側面よりも外に出てしまっているものもあるが、瓦当側面に丸瓦凸面の一部を合わせるような形で嵌め込んでいるものが多い。全体的に薄手のつくりであり、丸瓦凹面側の接合粘土も少ない。瓦当裏面はナデ調整を施して平坦に仕上げている。Ａ・Ｂ１ともに丸瓦には、無段式の丸瓦Ⅲ類Ｂ２が使用されている。丸瓦と瓦笵の位置関係は、Ⅱ類Ｂ１には大型の破片が少ないため０°のもののみであるが、Ⅱ類Ａには０°と 180°回転したものが確認できる。一部に赤彩されたものがある。

Ⅱ類にはＡ・Ｂという２つの瓦笵が存在しているが、同じ製作技法が採用されており、同一系譜の瓦工によって製作されたものとみてよい。一方で、Ⅰ類とⅡ類では、瓦当側面・裏面の調整において大きな違いが認められる。Ⅰ類とⅡ類とでは、文様の様式が異なるだけではなく、製作に関わった瓦工の系譜が異なっていた可能性が高い。

２号窯　２号窯では、３号窯で生産されていたⅠ類・Ⅱ類Ａ・Ⅱ類Ｂ１に、Ⅱ類Ｂ２が加わる。Ⅰ類は、技法に変化はみられず、笵傷の進行なども確認できない。一方でⅡ類においては、技法が大きく変化し、技法ｂが新たに採用されている。Ⅱ類Ａは、３号窯と同じ技法ａのものが一定量生産されているが、技法ｂのものも確認できる。Ⅱ類Ｂでは、Ｂ１は少量確認される程度でありＢ２が主体となる。Ⅱ類Ｂには、すべてに技法ｂが用いられている。丸瓦と瓦笵の位置関係は、２号窯ではⅠ類・Ⅱ類Ａ・Ⅱ類Ｂ１・Ⅱ類Ｂ２のすべてにおいて、90°回転するものが確認できる。３号窯出土のものも含め、瓦笵の回転はいずれも 90°単位となっており、いずれも瓦笵の形状は四角形であった可能性が高い。

技法ｂでは、丸瓦の取り付け位置が下がり、丸瓦先端には刻み加工が施され、瓦当裏面は中央が丸く膨らむ形状になる。技法ａでは、重心の掛かる丸瓦凹面側の接合部分が、瓦当で最も薄い内区の周縁部に位置している。そのため、３号窯では、丸瓦と丸瓦が接合されている付近の周縁部を残して、瓦当が脱落した状態で出土しているものが非常に多い。そのような技法ａにおける強度の問題を改善する方法として、２号窯では技法ｂが採用されたと理解してよいであろう。

Ⅱ類Ｂ２では周縁部の重圏文を削り落とされているが、その理由については、明確な回答を見出せない。瓦笵の損傷が原因であるとも考えられるが、出土したⅡ類Ｂ１の中には大規模な笵の損傷がみられるものは確認できない。１号窯でⅢ類が製作されていることからすると、物理的な理由ではなく、周縁を素文縁にすることを意図したものと推測される。

１号窯　１号窯は軒丸瓦の出土数自体が少なく、不明瞭な部分が多い。１号窯で生産された軒丸瓦として想定できるのは、Ⅲ類のみである。花弁が残存する個体は出土していないが、間弁の大きさと形状はⅡ類Ａと同一である。Ⅰ・Ⅱ類とは異なる花弁が１点も出土していないことや、Ⅱ類ＡとⅢ類の周縁部の内縁の高さや周縁部の内縁と笵端との高さの差がほぼ同じであることなどから、Ⅲ類はⅡ類Ａの周縁部を改笵したものである可能性が高い。周縁部の形状が傾斜縁であり、改笵にはⅠ類が強く意識されている。また、瓦当裏面に削り調整を用いるなど、調整技法においても同様のことがいえる。Ⅰ類については、同笵瓦が磐田市・大宝院廃寺で出土しており、篠場瓦窯のものが先行することが明らかとなっている（武田 2006）。期せずしてⅠ類を生産する必要が生じたが、瓦笵がすでに運び出された後であったために、Ⅱ類Ａを改笵してⅠ類に似せたⅢ類を製作することになったのかもしれない。

（２）周辺地域への展開

篠場瓦窯跡周辺では、古代の寺院跡や瓦窯と推定される遺跡が８ヶ所で確認されている。生産された瓦の供給先となる寺院跡については、現在のところ未発見の状況にあるが、軒丸瓦の文様や技法からこれらの周辺の遺跡との関係をみていくことにする。周辺の古代寺院や瓦窯跡と、出土した軒丸瓦（遠江国分寺所用瓦を除く）を示したのが、図 377 である。

この地域において最も多く出土しているのは、川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦である。川原寺式の軒丸瓦は、大宝院廃寺・寺谷廃寺・木船廃寺・九反田遺跡で出土している。篠場瓦窯跡では軒丸瓦Ⅰ類がこれに相当し、大宝院廃寺出土のものと同笵であることが判明している。周縁部は素文の傾斜縁であり、蓮子配置は１＋５＋９で、蓮子には周環を伴っている。篠場瓦窯跡Ⅰ類には、笵傷が９ヶ所認められる（図 378）。大宝院廃寺例は９ヶ所の笵傷が一致し、さらに２ヶ所笵傷が増加しているものも確認できる。篠場瓦窯跡と大宝院廃寺のものとの間で大きく異なるのは、瓦当裏面の調整である。篠場瓦窯跡例では削り調整して側縁に明瞭な稜を形成するのに対し、大宝院廃寺例ではナデ調整し側縁を丸みを帯びた形状に仕上げている。川原寺創建瓦では瓦当裏面の調整に削り調整が多用されており、調整技法においても、篠場瓦窯跡のものが先行する要素を有しているといえる。これらの点から、篠場瓦窯跡での生産が先行し、大宝院廃寺の瓦窯へは笵型のみが搬入されていることが明らかとなる（武田 2007）。

寺谷廃寺出土例は、瓦当裏面を削り調整する点では篠場瓦窯跡例と同様であるが、蓮子配置は１＋５＋８となっており、篠場瓦窯跡例に比べてやや後出する要素がみられる。木船廃寺例は、瓦当裏面をナデ調整する点で大宝院廃寺例との共通性が認められ、蓮子は１＋５＋ 10 の配置となり、蓮子周環が消失していることから、大宝院廃寺例よりも後出するものと位置付けられる。九反田遺跡のものは、蓮子配置が木船廃寺例と同じ１＋５＋ 10 であるが、花弁は七弁で瓦当の厚さも薄くなっており、木船廃寺例よりもさらに後出するものである。

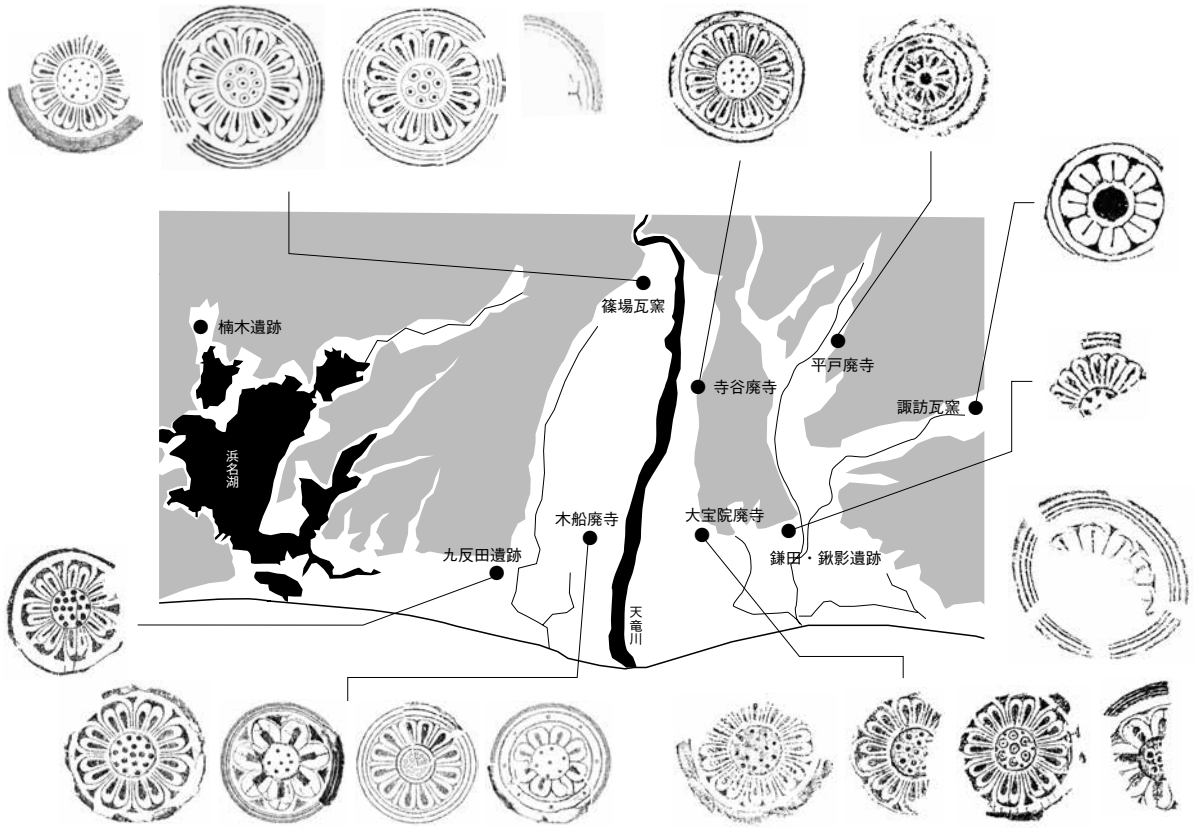


図 377　軒丸瓦の分布

このように、製作年代の違いなどにより、瓦当文様の構成や製作技法の細部においては差異がみられるが、この地域の川原寺式軒丸瓦には共通する要素がある（図 379）。

一つは、周縁部が素文の傾斜縁となる点である。篠場瓦窯跡・大宝院廃寺例と寺谷廃寺例には、内区側の端部に１条の圏線が巡り、木船廃寺例と九反田遺跡例にはみられないといった違いはあるが、川原寺創建瓦（ａ～ｄ類）にみられるような鋸歯文が施されていない点では共通しており、圏線の有無は省略化としてとらえられる。

もう一つは、花弁と間弁の先端の形状である。周知のように、川原寺創建瓦の花弁と間弁の先端は、ハート形のように中心に向かって切り込む形で弁の反転が表現されている。これに対し、遠江の川原寺式軒丸瓦は、花弁と間弁の先端がやや丸みを帯びた平らに近い形状となっており、内側に切り込むものは確認できない。

これらの共通性は篠場瓦窯跡例にみられる要素であり、遠江地域の川原寺式軒丸瓦は、篠場瓦窯跡の軒丸瓦Ⅰ類のデザインを祖型として、基本的な要素を踏襲しながら、省略や変化を生じさせつつ展開していたものとみられる。

篠場瓦窯から瓦笵の提供を受けた大宝院廃寺では、山田寺式系の単弁蓮華文軒丸瓦も出土している。一部には、山田寺式系の軒丸瓦であることから、年代を古くみる向きもあるが、中房が大型化し花弁が短くなるなど、文様としては新しい要素が多くみられる。また、丸瓦の接合技法をみると、丸瓦は低い位置に取り付けられ、先端は無加工である。これに伴い瓦当上部は、瓦当側面の端で屈曲して丸瓦凸面に至る形態となっている。

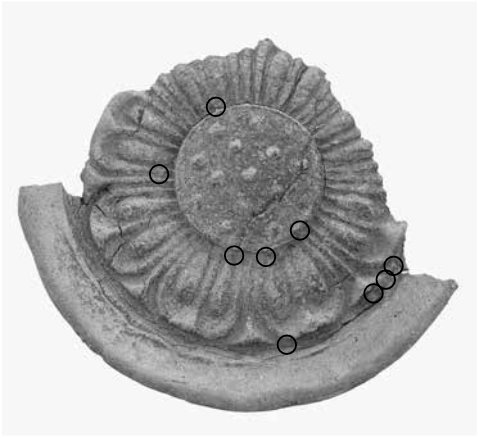


図 378　軒丸瓦Ⅰ類の笵傷

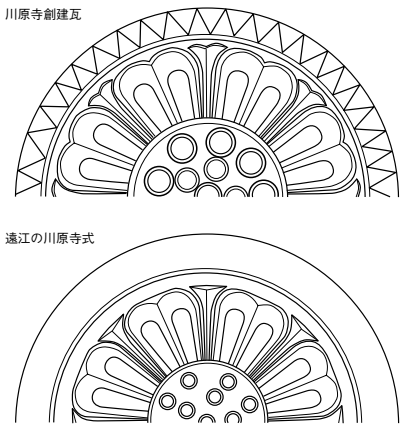


図 379　花弁先端の形態

なお、大和・山田寺跡では、石川麻呂造営期から奈良時代まで同一の瓦笵が使用されているが、丸瓦先端の加工が片枘形から楔形、未加工（凹凸面と端面に刻み）へと変化しており、丸瓦の先端が未加工で取り付け位置が低くなるものは、奈良時代の製品と推定されている（奈文研 2002）。篠場瓦窯では、花弁が複弁蓮華文である点は異なるが、周縁が同じ四重圏文となる軒丸瓦Ⅱ類で同様の傾向が確認できる。軒丸瓦Ⅱ類は、３号窯と２号窯で生産されているが、３号窯では丸瓦先端の凸面側を削り、取り付け位置は高い。そして、２号窯の段階になると丸瓦先端の凹凸面に刻みを施し、取り付け位置は低くなる。瓦当上部は、大宝院廃寺のものと同様に、瓦当側面の端で屈曲する形態となる。

大宝院廃寺の山田寺式系の軒丸瓦については、技術系譜が明確でないため、これらと同時期であるとは断定できないが、少なくとも山田寺式である点のみをもって年代を遡らせるのは問題である。篠場瓦窯跡において、２号窯で生産が終了した後に川原寺式軒丸瓦が提供されていることを勘案すると、山田寺式軒丸瓦についても同様の時期とみた方がよいであろう。

篠場瓦窯跡の重圏文縁複弁蓮華文（軒丸瓦Ⅱ類）については、現段階では木船廃寺や鎌田・鍬影遺跡において、花弁が細弁化したものが確認できる程度である（武田 2006）が、瓦当裏面の調整技法において大宝院廃寺で出土している瓦に注目しておく必要がある（図 380）。大宝院廃寺では、先述した川原寺式のほかに蓮子配置が１＋４＋８となる複弁蓮華文軒丸瓦が出土している。周縁部の残存するもの

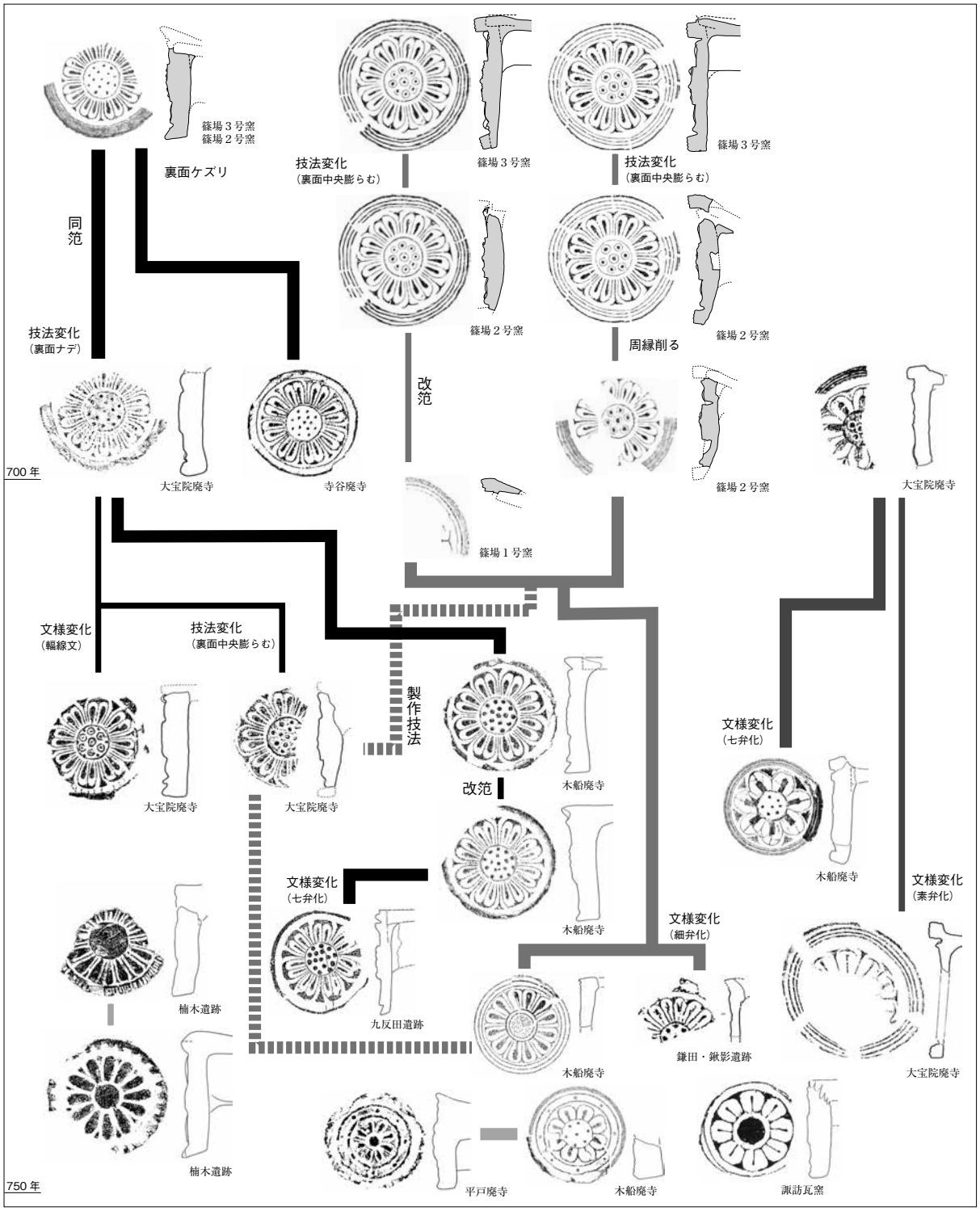


図 380　遠江における軒丸瓦の系譜

は出土していないが、瓦当裏面が丸く中心が膨らむ形態は篠場２号窯の軒丸瓦Ⅱ類と類似しており、重圏文縁であった可能性もある。そうであるとすれば、中心点の周囲に２重（１＋６＋12）に蓮子が巡る木船廃寺例は、密接な関係にある大宝院廃寺から伝わった可能性が高い。

以上のように、軒丸瓦においては、篠場瓦窯跡は瓦笵の提供など大宝院廃寺と密接な関係にある。その後、大宝院廃寺は周辺の多くの軒丸瓦に影響を与えており、篠場瓦窯跡で生産された軒丸瓦は、この地域に展開する多くの軒丸瓦の祖型となる瓦の一つとして評価できる。

2　軒平瓦

（1）分類と変遷

軒平瓦は文様から大きくⅠ～Ⅳ類に分けられる。Ⅰ類は重孤文軒平瓦であり、弧線の数が四重孤となるAと五重孤となるBとに細分できる。さらにⅠ類Bには、顎面が無文のB１と、顎面に波状文が施文されるB２がある。Ⅱ類は連珠文軒平瓦である。三重の廓線の中に10個の連珠が配されており、珠文には周環が巡っている。Ⅲ類は竹管文軒平瓦であり、文様構成によりA～Cの３種に細分される。Ⅲ類Aは上半については不明であるが、半截竹管により施文された瓦当中央の弧線の下に、竹管を押圧した珠文が配される。Ⅲ類Bは上下２段に竹管による珠文が配される。Ⅲ類Cは瓦当中央に弧線のみが施文される。Ⅳ類は無文軒平瓦である。顎部はすべて貼り付け段顎となっている。

各窯から出土した軒平瓦には、転用材としてほかの窯から持ち込まれたものや、混入品とみられるものが含まれているが、それらを除いて整理したものが図381である。以下、窯ごとに軒平瓦の特徴や変化の様子をみていくことにする。

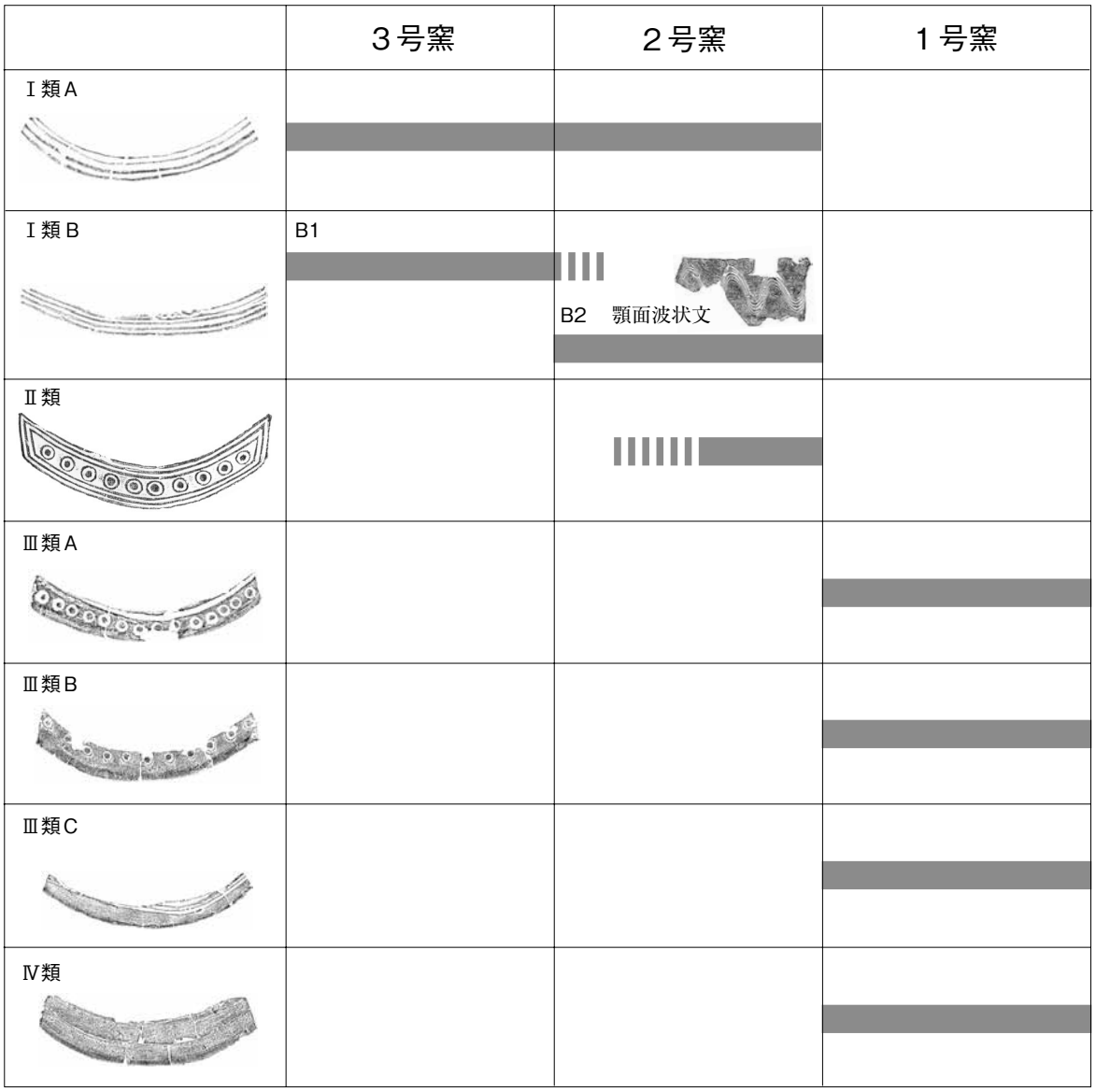


図381　軒平瓦変遷図

３号窯　３号窯での生産が確認できるのは、重孤文軒平瓦のⅠ類ＡとⅠ類Ｂ１である。Ⅰ類Ａの平瓦部は平瓦Ⅱ類Ａであり、凹面には布目が残る。胎土は橙白色のものが多い。Ⅰ類Ｂ１の平瓦部は平瓦Ⅰ類Ａであり、凹面に布目は残らない。胎土は灰白色のものが多い傾向にある。

Ⅰ類ＡとＢ１は同じ重孤文軒平瓦であるが、異なる種類の平瓦が限定的に使用されており、このことは平瓦Ⅱ類Ａを製作していた瓦工は四重孤文、平瓦Ⅰ類Ａを製作していた瓦工は五重孤文と、使用する挽き型が特定されていたことを示している。

なお、篠場瓦窯跡においては、瓦の供給先が未発見の状態であるため、いわゆる軒瓦の組合せについては不明とせざるを得ない。ただし、軒平瓦Ⅰ類Ａと軒丸瓦Ⅱ類は、胎土の色調において橙色が強いという点で共通している。屋根に葺かれたときの組合せと一致するとは限らないが、この点を重視すると少なくとも製作時には、軒丸瓦Ⅱ類と軒平瓦Ⅰ類Ａ、軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅰ類Ｂという組合せが成り立つ可能性がある。

２号窯　２号窯では、Ⅰ類Ａ・Ⅰ類Ｂに加えてⅡ類が生産される。Ⅰ類Ａについては、技法に大きな変化はなく、平瓦にも平瓦Ⅱ類Ａが使用されている。一方で、Ⅰ類Ｂにおいては、３号窯で生産されていたＢ１にかわり、顎面に波状文が施されるＢ２が採用される。Ｂ１とＢ２では、技法も異なっており、顎部の接合面に瓦当と直交する方向のハケ目が施され､棒状の工具を用いて段部を強く撫で付けるなど、顎部脱落防止のための改善が図られている。また、凹面はナデ調整が省略されて、布目が残っている。完形のものなく、使用している平瓦は明確でないが、平瓦Ⅱ類ＡまたはＢであると推測される。

Ⅱ類は連珠文軒平瓦で、瓦笵が用いられる唯一の軒平瓦である。顎部は貼り付け段顎で、凸面に縦方向の縄叩きが残るものが確認される。軒平瓦であるためか、凹凸面の調整は異なるが、縦方向の縄叩きと法量から、平瓦部には平瓦Ⅳ類Ｂが使用されているものと推測される。瓦笵を用いている点だけをみても、明らかにⅠ類とは系譜の異なる瓦である。瓦当を廓線で囲み内区と外区に区分する文様は、いわゆる大官大寺式軒平瓦が初源とされており、平城宮式軒平瓦では広く採用されている。Ⅱ類は唐草文を採用していない点でこれらとは大きく異なってはいるが、少なくとも他地域の瓦の影響を受けて成立したものであることは間違いない。また、平瓦部の凸面に縦方向の縄叩きが用いられていることから、Ⅱ類が生産されたのは、２号窯でも操業当初ではなく、比較的新しい時期である可能性が高い。

１号窯　１号窯になると軒平瓦の構成が一変する。３号窯と２号窯で継続して生産されたⅠ類は姿を消し、２号窯で新たに採用されたⅡ類も確認できなくなる。これらに替わり、１号窯で新しく生産される軒平瓦は、竹管文が施されるⅢ類と無文のⅣ類である。

Ⅲ類ＡとＢには竹管を用いて連珠文が施文されている。竹管による連珠文が施文された軒平瓦は、飛鳥池瓦窯や梶原瓦窯などで確認されるが、竹管文は土器の施文にも古くから使用されており、文様も単純であるために、系譜を見出すことは困難である。篠場瓦窯の場合は、施文の方法は異なるが、先行する２号窯の軒平瓦に同じ連珠文であるⅡ類が存在することから、基本的には連珠文であるⅡ類を模したものと捉えてよいであろう。Ⅲ類ＣはⅢ類Ａの珠文を省略したもの、Ⅳ類は瓦当面の施文そのものをすべて省略したものとみることができる。

また、１号窯で生産されるⅢ類とⅣ類は、いずれも瓦当が狭端部側に設けられている。粘土円筒の天地を返すことなく、そのままの状態で顎部を貼り付けた結果であるとみられるが、ここには軒平瓦の製作技法の伝承が途絶えている様子がみてとれる。１号窯では、軒平瓦の文様に変化が生じただけに留まらず、瓦工組織の構成に変化が生じていた可能性が高い。

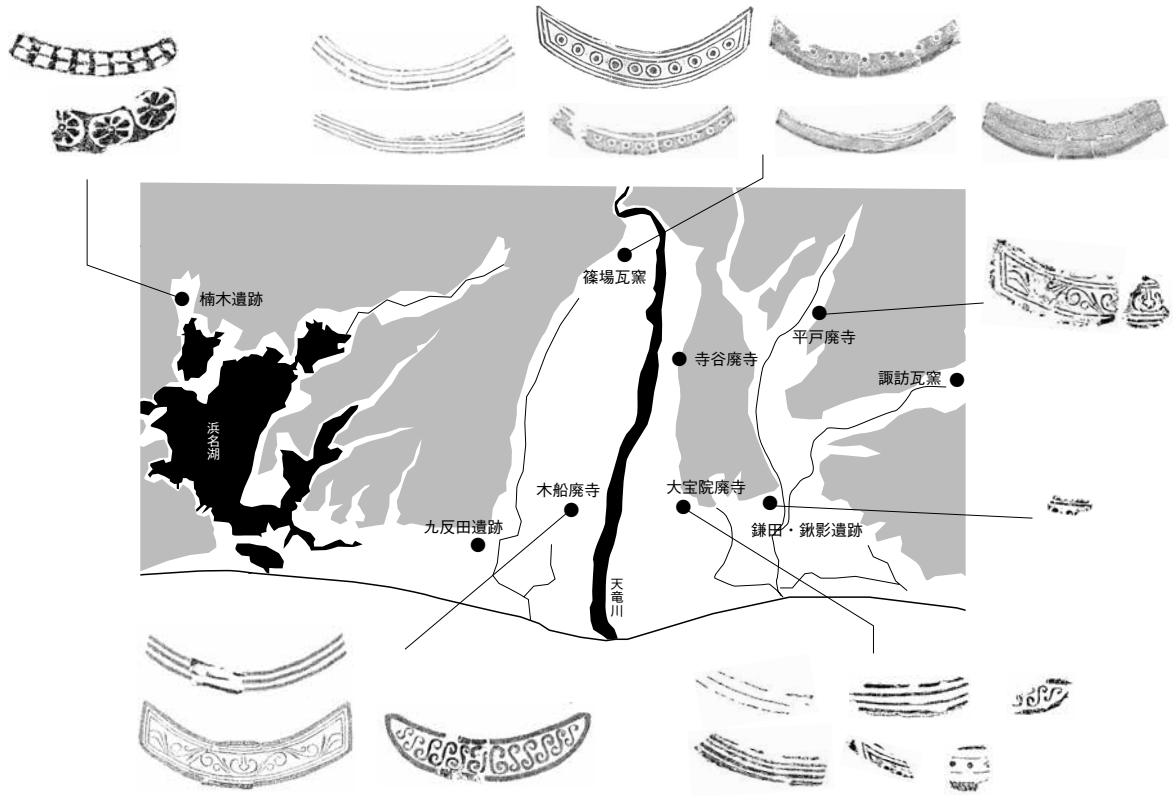


図 382　軒平瓦の分布

（2）周辺地域への展開

篠場瓦窯跡の周辺地域から出土している軒平瓦を示したのが図 382 である。

この地域の軒平瓦において、初期の瓦として位置付けられるのは重孤文軒平瓦であり、篠場瓦窯跡と大宝院廃寺、木船廃寺で確認される。篠場瓦窯跡では、四重孤文（Ⅰ類Ａ）と五重孤文（Ⅰ類Ｂ）があり、３号窯と２号窯で生産されている。大宝院廃寺では三重孤文・四重孤文・五重孤文が、木船廃寺では三重孤文が出土している。重孤文軒平瓦については、文様が単純であるという特質上、前後関係を知ることは困難であるが、篠場瓦窯跡と大宝院廃寺のものが段顎であるのに対し、木船廃寺の三重孤文は無段顎となっておりこれらに比べてやや年代が降るものとみることができる。また系譜を考える上では、顎面に櫛描き波状文が施文されるものに注目する必要がある。篠場瓦窯跡では、２号窯の五重孤文（Ⅰ類 B2）にのみ認められる。大宝院廃寺でも、同じく五重孤文に櫛描き波状文が施され、四重孤文にもヘラ描きによる波状文が刻まれている。ヘラ描きの文様は、櫛描きを簡略化したものであろう。篠場瓦窯跡の２号窯の段階で、大宝院廃寺の瓦窯との関連性が伺える。

同様に、大宝院廃寺と関係する篠場瓦窯跡の軒平瓦に連珠文軒平瓦（Ⅱ類）がある。篠場瓦窯跡では２号窯の段階でのみ生産されているものである。大宝院廃寺では、笵型が異なる２種が出土している。いずれも顎部は段顎であるが、篠場瓦窯跡のものが珠文に周環を伴うのに対し、大宝院廃寺のものには２種とも周環が描かれておらず、文様の上では篠場瓦窯跡のものが古相を呈している。重孤文の顎面施文と同じく２号窯の段階で、篠場瓦窯跡から大宝院廃寺へと文様が伝えられたものと推定できる。連珠文軒平瓦は、大宝院廃寺と同じく珠文に周環を伴わないものが鎌田・鍬影遺跡でも出土している。これについては、大宝院廃寺からもたらされたものとみてよい。

軒平瓦についても、篠場瓦窯跡の瓦は２号窯の操業以降に、大宝院廃寺との関係性が顕著に伺える。そのようにみると、木船廃寺の重孤文や鎌田・鍬影遺跡の連珠文軒平瓦は、大宝院廃寺を経由して展開したものとみてよく、篠場瓦窯の軒平瓦がそれらの祖型にあたるものと位置付けられる。

３　丸瓦

（１）三角形の粘土板を用いた丸瓦

篠場瓦窯跡の丸瓦には、三角形の粘土板を用いて製作されたものが確認されている。ほかに例を見ない極めて特殊の製作方法による丸瓦であるため、まずはこれについて触れておくことにする。

粘土板の特定には、ナデ消し等が施されていない凹面の粘土接合痕を基準とした。ただし、粘土接合痕は粘土板の巻き付け時に形成されたもの以外に、粘土板を切り出す基となるタタラの成形時に生じるものも存在するため、その識別には糸切り痕の連続性を重視した。

篠場瓦窯跡で粘土板の形状が判明したのは、同一の粘土円筒から分割した個体がほぼ完形の状態で出

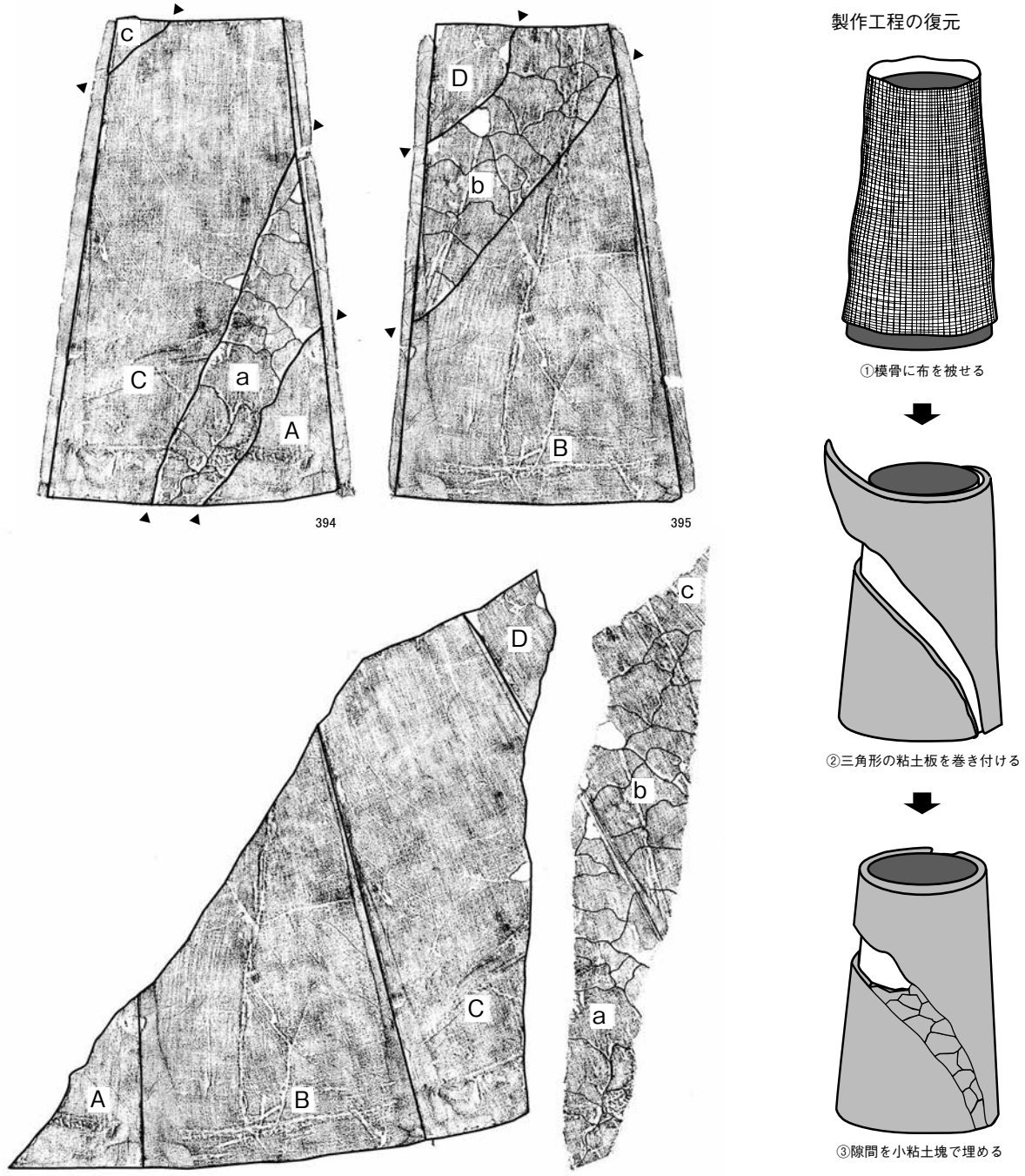


図 383　三角形の粘土板と製作工程

土していることによる。394 と 395 は、凸面のナデ調整における砂礫の移動によって生じた筋や、上下の布の綴じ目の位置が一致することから、同一の粘土円筒から分割された個体と特定できる丸瓦である。粘土接合痕をみると、大きくは右上がりの方向の合わせ目が、394 に３本、395 には２本確認できる。糸切り痕はこれらを境にして断絶しており、交互に糸切り痕の存在が認められない部分が存在する。これらの情報を基に、糸切り痕が残る部分をＡ～Ｄ、残らない部分をａ～ｃとして、分割前の形状に接合すると、Ａ～Ｄは三角形の粘土板であることが判明する（図 383）。当然のことながら、復元した状態では、粘土板の糸切り痕は連続している。また、ａ～ｃを細かくみると、粘土接合痕が多数存在し、小型で不定形の粘土が詰め込まれている状態となっている。このことから、糸切り痕がみられないａ～ｃに関しては、粘土板の隙間に充填された小型の粘土であると推定できる。これらの丸瓦の製作工程は、図 383 のように復元される。

同様に、同一の粘土円筒から分割された個体である 365・366 と 367・368 の場合は、三角形の粘土板に復元できるが、粘土板同士が隙間なく接合されている。強度の面から考えるとこれらのように、粘土板の端を密着させた方がよく、本来的にはこれを志向していたが、やむなく隙間が生じたものについては、394・395 のように小型の粘土で充填することも良しとしていたのであろう。

なお、以上のものは、同一の粘土円筒からの分割が明確な個体についてであるが、三角形の粘土板の場合は、その形状と模骨への巻き付け方法から、合わせ目が斜め方向となる。そのほかの丸瓦についても、粘土板の合わせ目の方向を確認することで、三角形の粘土板か否かを特定することができる。

このような粘土板を使用した丸瓦の報告例は、管見の限りない。静岡県内の丸瓦については、粘土板合わせ目にまで言及された報告自体が限られているため、この製作方法がどの程度の広がりをみせるのか明確にし得ないが、今後注意すべき視点であることを指摘しておきたい。

（２）分類と変遷

丸瓦は、形態や使用する模骨から大きくⅠ～Ⅲ類に分けられる。Ⅰ類は有段式丸瓦であり、段部の形状からＡ～Ｄの４種に細分される（図 384）。Ⅰ類ＡとＢは段部凹面が直角に近い形で屈曲するものであり、Ａは段差が小さく、Ｂは段差が大きい。Ⅰ類Ｃは段部凹面が斜めに屈曲するもので、Ⅰ類Ｄはさらに傾斜が緩くなり撫で肩に近い形状となるものである。Ⅱ類は側板連結模骨を使用する無段式丸瓦であり、凸面調整の方法からＡとＢの２種に細分される。Ⅱ類Ａは凸面を縦方向に削り調整するもので、Ⅱ類Ｂはナデ調整を施すものである。Ⅲ類は杵形模骨を使用する無段式丸瓦であり、Ⅱ類と同様に凸面の調整からＡとＢの２種に細分される。Ⅲ類Ａは凸面を縦方向に削り調整するもので、Ⅲ類Ｂはナデ調整を施すものである。また出土数の多いⅢ類Ｂに関しては、さらに法量により B1 ～ B7 に細分できる。

ほかの瓦と同様に、各窯から出土した丸瓦には、転用材として別の窯から持ち込まれたものや、混入品とみられるものが含まれているが、それらを除いた上で整理したものが図 385 である。以下、窯ごとに丸瓦の構成をみていくことにする。

なお、綴じ目や布の破損状態等から、布袋については図 386 のように９種特定できており、これを布ａ～ｉと呼ぶこととする。

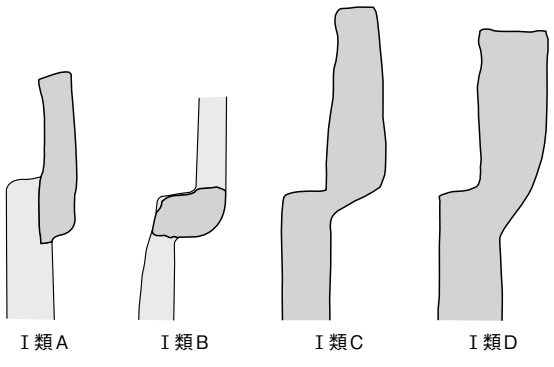


図 384　丸瓦Ⅰ類の形態

３号窯　有段式のⅠ類はＡとＢが生産されている。ただし、出土点数はＡとＢをあわせても 10 点程とごく少量であり、３号窯で主体となるのは

図 385　丸瓦の変遷

無段式のⅡ類とⅢ類である。模骨に側板連結模骨を用いるⅡ類には、凸面に削り調整を施すＡと、施さないＢがともに生産されており、布袋にはともに布ａが用いられている。模骨に杵形模骨を使用するⅢ類は、ＡとＢ１・Ｂ２が生産されている。このうちⅢ類ＡとＢ１には、三角形の粘土板が使用されている。布袋には、ともに布ｂとｃが用いられているが、Ⅲ類ＡとＢ１は出土数が多いことから、布ｂと布ｃのそれぞれに別の模骨が存在した可能性が高い。Ｂ２には四角形の粘土板が使用されており、布袋には布ｄが用いられている。Ｂ２は軒丸瓦Ⅱ類に使用されており、橙色の強い色調のものが多い特徴がある。３号窯では、模骨の種類や粘土板の形状、凸面調整など、様々な技法の丸瓦が製作されている。

２号窯　２号窯では一転して、単純な構成となる。有段式のⅠ類では、段部の屈曲がやや緩やかなⅠ類Ｃが生産される。３号窯と同様に、確認されるのは 10 点程であり、無段式と比べると生産量はごく少量である。無段式は基本的にはⅢ類Ｂに集約されており、Ｂ３とＢ４が生産されている。Ｂ３には、凸面が縦ナデ調整のものと横ナデ調整のものがあり、縦ナデ調整のものには橙色の色調が強く布袋に布ｄが用いられるなど、３号窯のＢ２と共通する要素が確認できる。Ｂ３の横ナデ調整するものには布ｅ、Ｂ４には布ｆと布ｇが使用される。なお、灰原からはⅡ類Ａも少量出土しており、一部２号窯で生産されていた可能性もある。

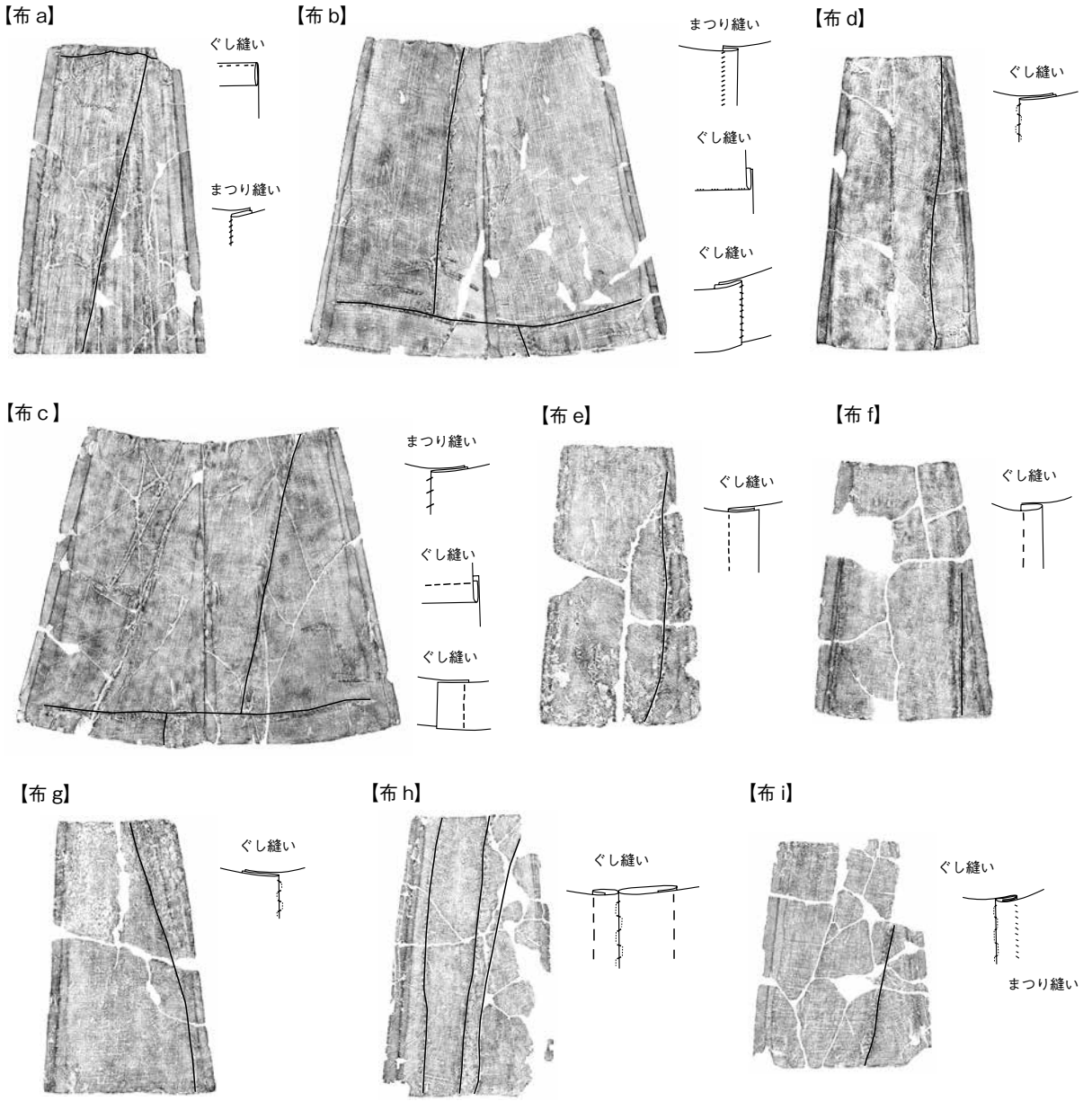


図 386　丸瓦に使用される布袋

１号窯　有段式のⅠ類では、段部の屈曲がさらに緩くなるⅠ類Ｄが生産されている。段部の形状の変化は、屈曲が強いものから弱いものへという、有段式における一般的な形態変化と符合している。ただし、１号窯においても確認されるのはわずか数点であり、生産量はごく少量である。無段式は、Ⅲ類Ｂ５・６・７が生産されている。Ｂ５は凸面の調整が横ナデを主体とし、法量も２号窯で生産されているＢ３・４に近い。ただし、側面調整では削りの方向が左右で逆になっており、回転させての調整という新たな手法の導入が図られている。布袋には布ｈが使用されている。Ｂ６とＢ７は、法量は異なるが、厚さが一定せず凸面に指痕が多く残るなど、一見して粗雑なつくりとなっている点では共通する。布袋には布ｉが使用されている。ほかの丸瓦と比べると明らかに異質な存在であり、同一の技術系譜で捉えることは困難である。１号窯の段階で系譜の異なる瓦工の参画があり、彼らの手によって製作されている可能性が高い。

なお、凸面に縄叩きが残るⅢ類Ｃは、瓦窯からの出土は確認できないが、狭端の幅や凹面側を深く削る側面調整がⅢ類Ｂ６と同様であることから、１号窯で生産されたものとみてよいであろう。

４　平瓦

平瓦は、すべて粘土板桶巻作りである。凹凸面の調整や凸面の叩き目から、大きくⅠ～Ⅴ類に分けられる。Ⅰ類は凹凸面の全面にナデ調整を施すもので、法量からＡ・Ｂの２種に細分される。Ⅱ類は凸面は全面ナデ調整であるが、凹面はナデ調整が施されないか部分的なナデ調整にとどまり、広範囲に布目が残るものである。法量から、Ａ～Ｇの７種に細分される。Ⅲ類は、凸面がナデ調整が施されないか部分的なナデ調整で、叩き締めの円弧を描く斜め方向の縄叩きが残り、凹面にはナデ調整が施されるもの

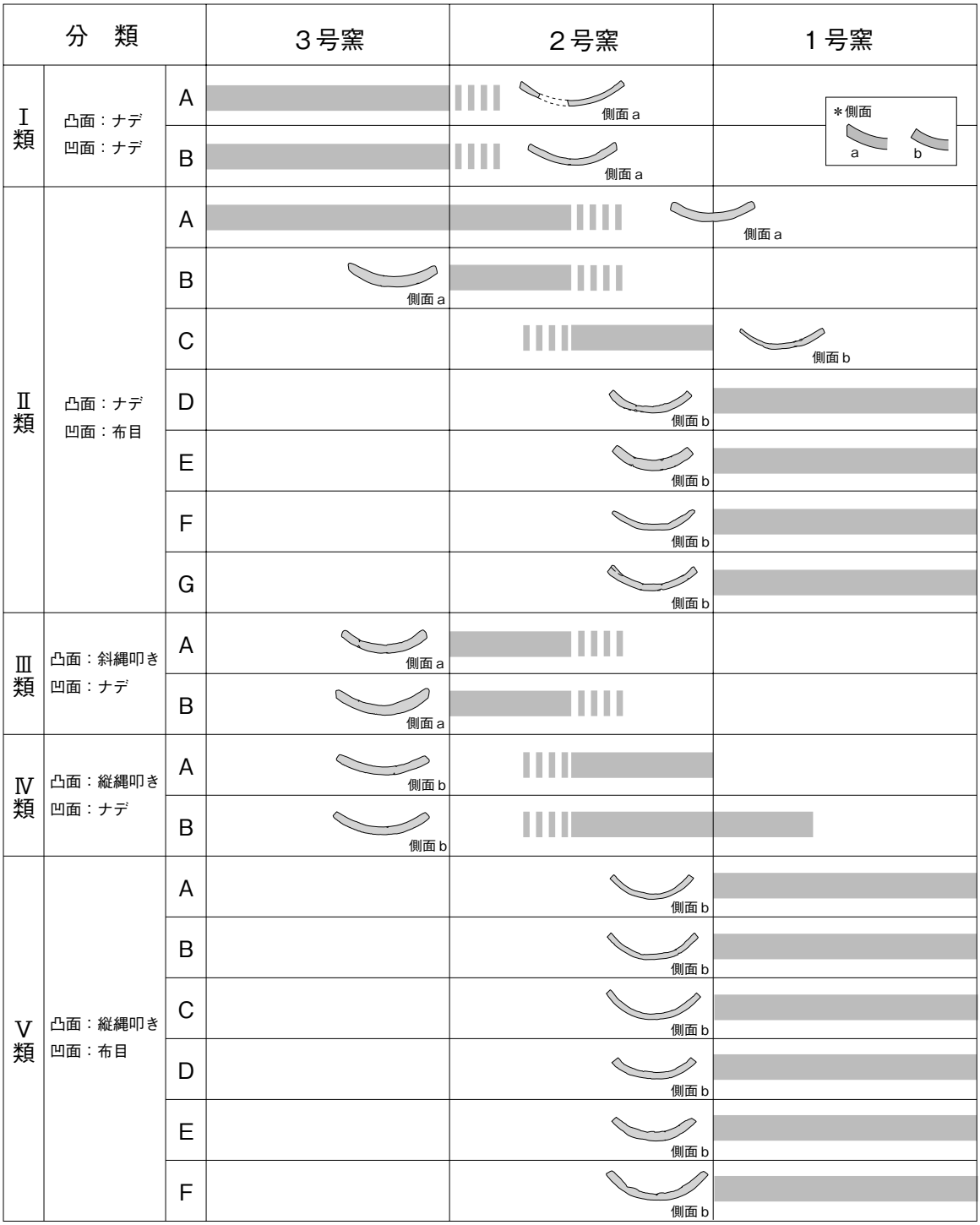


図 387　平瓦の変遷

である。法量から、Ａ・Ｂの２種に細分される。Ⅳ類は、凸面にナデ調整が施されず、側縁に併行する縦方向の縄叩きが残り、凹面には全面にナデ調整が施されるものである。法量からＡ・Ｂの２種に細分される。Ⅴ類は、凹凸面ともにナデ調整が施されず、凸面に縦方向の縄叩きが残るもので、法量からＡ～Ｆの６種に細分される。

ほかの瓦と同様に、各窯から出土した丸瓦には、転用材として別の窯から持ち込まれたものや、混入品とみられるものも一部含まれているが、それらを除いた上で整理したものが図 387 である。以下、窯ごとに平瓦の構成をみていくことにする。なお、側面調整には大きく、凸面側を深く削るものと分割截面と平行に削るものとがみられることから、前者を調整ａ、後者を調整ｂと呼ぶこととする。

３号窯　Ⅰ類Ａ・ＢとⅡ類Ａが生産されている。側面調整は、いずれも側面調整ａとなっている点で共通している。Ⅰ類Ａ・Ｂは、五重孤文の軒平瓦Ⅰ類Ｂ１に、Ⅱ類Ａは四重孤文の軒平瓦Ⅰ類Ａに使用されている。いずれも、凸面のナデ残しの部分には、斜め方向の縄叩きが残されている。

２号窯　２号窯では、３号窯から継続してⅡ類Ａが生産されている。なお、Ⅰ類Ａ・Ｂについては、２号窯でも少量の出土が確認されているが、その多くが焼土や窯壁が付着するなど、構築材として再利用されたものであり、３号窯の製品である可能性が高い。２号窯で生産されていたとしても、ごく少量であったと推測される。またほかに２号窯では、Ⅱ類Ｂ・Ｃ、Ⅲ類Ａ・Ｂ、Ⅳ類Ａ・Ｂが新たに生産されている。Ⅱ類Ｂは法量は異なるが、側面の調整はⅡ類Ａと同じ調整ａである。Ⅱ類Ｃは、側面調整が調整ｂとなっており、全体的に薄手のつくりのものが多い特徴がある。Ⅱ類Ｂ・Ｃともに、凸面のナデ残しの部分には、斜め方向の縄叩きが残されている。Ⅲ類とⅣ類では、凸面の叩き目が異なることに加えて、Ⅲ類が調整ａであるのに対してⅣ類が調整ｂとなっており、側面調整にも違いが認められる。また、Ⅳ類の側面は、凹面を上にした状態で四側面を時計回りの方向に調整している。

１号窯　２号窯から継続してみられるのは、Ⅳ類Ｂである。ただし１号窯では、湾曲がきつく、側面が調整ｂではあるがやや凸面側に深くなるなど、細部において多少の違いが認められる。１号窯では、新たにⅤ類とⅡ類Ｄ～Ｇが生産されている。Ⅴ類は、凹凸面ともにナデ調整が施されず、凸面が縦方向の縄叩きのもので、基本的にはⅣ類の凹面調整が省略されたものとみてよい。Ⅱ類Ｄ～Ｆは、小型で粗雑なつくりのものである。またⅡ類Ｆは、表面に指痕が多く残るなど、丸瓦Ⅲ類Ｂ６と類似した特徴を有している。Ⅱ類Ｇは、大型のものであるが、側面が湾曲しているものが多いなど、やはり全体のつくりとしては粗雑である。ⅤとⅡ類Ｄ～Ｇいずれも、側面調整がすべて調整ｂであり、凹面を上にした状態で四側面を時計回りの方向に調整されている。

平瓦においては、①凹凸面の調整、②叩き締めの方法、③側面の調整方法の３つの要素に変化が認められる。まず、①においては、基本的にナデ調整が省略される方向性にある。３号窯では凹凸面ともにナデ調整されており、２号窯ではいずれかの調整が省略されている。さらに１号窯になると、両面ともに調整しないものが出現している。②については、叩き締めの円弧を描くものから、縦方向の縄叩きに変化している。③は凸面側を深く削るものから、分割截面に沿って全体を削るものへと変化する。また全体を削るものは、四側面を時計回りの方向に削っており、凹型台を回転させて調整している。②と③はともに、２号窯で大きく変化している。出土状況から操業期間のどの段階で変化しているのか特定することはできないが、少なくとも２号窯の段階で、平瓦における製作技法上の大きな画期を見出すことができる。

５　道具瓦・鴟尾

（１）蟇羽瓦

篠場瓦窯出土の蟇羽瓦は、いずれも破片であり、長さの判明するものはないが、幅の違いから大きく２種に分類できる。広端部には瓦当が設けられており､瓦当文様は無文である。山田寺出土のものには、いずれも重孤文が施文されており、この点においては、篠場瓦窯例と異なるが、顎が段顎である点は山田寺のものと共通している。

形態における最大の特徴は、狭端側に帯状の高まりが設けられており、その脇に穴が空けられていることである。穴は突帯近くの広端側にあり、中央よりも側端側に寄った位置にある。この特徴は山田寺のものと共通しており、左側に寄ったものと右側に寄ったものの両者が存在する点も同じである。山田寺のものは、円形の穴が空けられているものと、隅丸方形の穴が空けられているものとがある。篠場瓦窯のものは、円形の穴で凸面側に管状の突起物が設けられており、この点においては異なっている。しかし、山田寺の隅丸方形の穴には、周囲に小穴が空けられており、篠場瓦窯のものからみて管が固定されていた可能性がある。別作りではあっても類似する構造を有しているものとみてよい。

山田寺の報告書では、この高まりと穴の機能について明記されていないが、篠場瓦窯の蟇羽瓦に設けられている突帯と管の機能は、雨水を誘導すること以外には考えにくく、山田寺のものについても同様に捉えてよいであろう。また、穴の位置が左側のものと右側のものの両者が存在することは、瓦を設置した状態が、左側を下にする場合と右側を下にする場合の両方があったことを示している。そのような

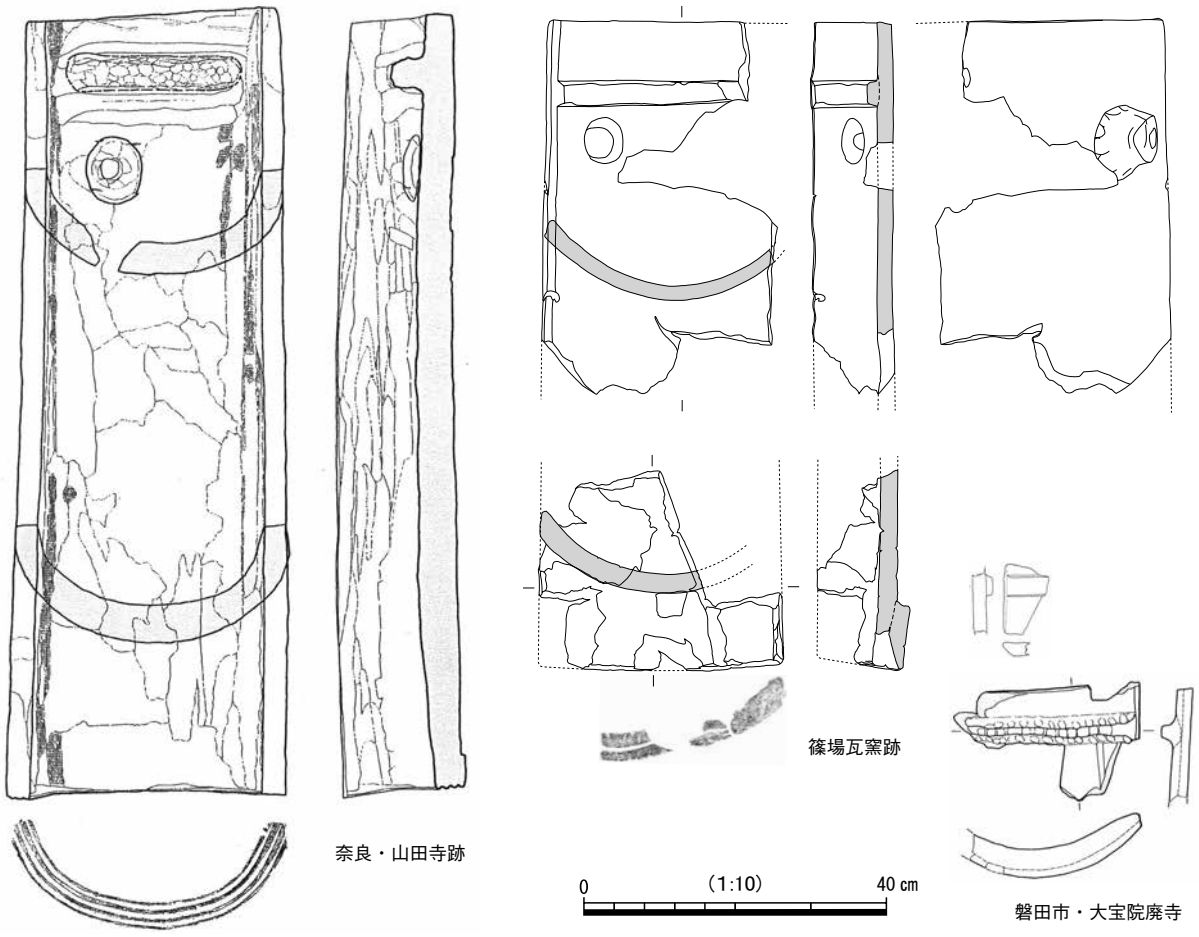


図 388　蟇羽瓦の諸例

瓦の設置方法は、これらの瓦が蟇羽瓦である可能性を補強するものといえる。

篠場瓦窯のものの大きな特徴は、その製作方法である。篠場瓦窯のものは平瓦部が凸型となる型作りである。布目は突帯にも連続しており、突帯となる部分には型に溝が彫られている。また、両側面や瓦当にも布目が連続し、型端の段差もみられることから、周囲を囲む形態の型であったことがわかる。粘土は、まず突帯の部分と側面の端に帯状に入れてから、全体に粘土を充填している。さらに、顎部に粘土を入れているが、型の側面も顎部が高くなっており、顎部まで一体のものとして製作することを意図して型が作成されていたことがわかる。山田寺のものも、凸型台で成形されており、報告書ではその理由として長大な瓦のため桶型では製作できなかったためとみている。篠場瓦窯においても、通常の平瓦はすべて桶巻作りであり、同じ原因を想定してよいであろう。逆に言えば、篠場瓦窯のものは全長の判明するものが出土していないが、同様に長大な瓦であったとみることができる。

また、蟇羽瓦としての報告事例は、山田寺例しか確認できないが、篠場瓦窯の周囲の遺跡に目を向けると、大宝院廃寺で類似する瓦の出土が認められる（図 388）。報告書では、「用途不明瓦」と「瓦塔」とされているものである。破片のため穴の存在は確認できないが、いずれも突帯が設けられており、蟇羽瓦の可能性が高い。篠場瓦窯との関係を考える上で注目される瓦である。

（2）鬼瓦

鬼瓦は３号窯から２点出土しているのみである。最大の特徴は、平瓦を鬼瓦の形に切り抜いて製作されている点である。管見の限りこのような方法で製作された鬼瓦はなく、篠場瓦窯のものが初例である。

ただし、注意すべきは、平瓦を素材としている点である。篠場瓦窯の２例は、接合されてほぼ全形が把握できたため、鬼瓦として認識することができたが、破片の場合それは困難と言わざるを得ず、平瓦の破片とみなされる可能性が高い。また、切り欠いた部分が発見されていたとしても、そのような鬼瓦が存在するとの認識がなければ、用途不明の瓦として報告されることも多いであろう。実際、東海地域の報告書をみると、愛知県・トドメキ遺跡において、用途不明瓦として広端部を半円形に切り抜いた瓦の破片が出土しており、鬼瓦である可能性が高いと推測される。

東海地域では、古代寺院は比較的多く確認されているが、白鳳期の鬼瓦の出土は極端に少ない。ちなみに静岡県では、これまで白鳳期の鬼瓦の出土はなく、篠場瓦窯のものが唯一のものである。寺院に使用されている鬼瓦の数自体が少ないことも一因ではあろうが、国分寺をはじめとする鬼面文の鬼瓦が比較的多く発見されていることと比べるとその差はあまりにも大きい。出土事例が少ない原因としては、発見が困難な平瓦素材の鬼瓦が使用されていた可能性も考慮しておく必要があろう。

（3）鴟尾

鴟尾は、ＡとＢの２個体出土しているが、鴟尾Ａはほぼ全形が復元できている。全形が判明した鴟尾としては、鴟尾Ａが静岡県における初例となる。鰭部は正段で、鰭部の前方に１条の縦帯が巡る。復元された法量は、高さ 132 ㎝・長さ 95 ㎝・腹部下端幅 49 ㎝・頭部幅 44 ㎝である。表面積から換算した完存した場合の推定重量は 150.4 ㎏である。

鴟尾Ａでは、断面が被熱している部分が確認されている（図 389）。断面の被熱範囲は、両側面で縦帯に沿って縦方向と、鰭部の基部から３段目と４段目の境から腹部にかけて横方向に走る。この破損の位置関係から焼成中に、まず縦帯に沿って亀裂が生じ、次いで頂部が形状を維持できなくなり、横方向に亀裂を生じさせる形で前傾してしまった姿が復元できる。また鴟尾Ａの表面には、本体とは異なる黒変した粘土が付着している。鴟尾のような大型品では、粘土が乾燥する際の収縮率の違いから、製作途中で粘土に亀裂が生じることが多い。これらの粘土は、そうした亀裂を埋めるために補充された粘土で

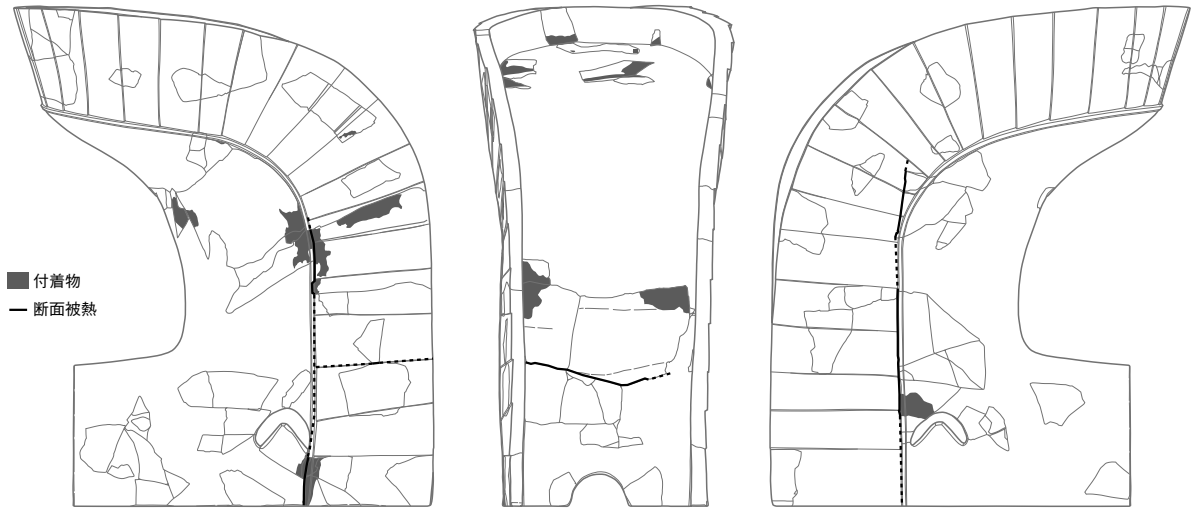


図 389　鴟尾Ａの付着物と断面被熱範囲

あると推定でき、側面の縦帯付近と腹部の側面との接合部付近に集中して認められる。縦帯に沿った部分は、製作過程で一度亀裂が生じ、粘土で埋めて補修を施したものの、焼成時に再び亀裂が発生し、焼成失敗の引き金となってしまったのであろう。

鴟尾に関しては、周辺の遺跡との関係性は判然としない。県内の鴟尾の出土事例は、大宝院廃寺と東ノ谷瓦窯跡で破片が出土しているのみである（武田 2009）。大宝院廃寺のものは、鰭部が表現されないなど、篠場瓦窯との関連性は薄い。東ノ谷瓦窯は、篠場瓦窯跡から 1.5 ㎞西側と極めて近い位置にあり、一定の関係性が想起されるものの、鰭部や胴部の破片しか出土していないため断定するには至らない。

（４）瓦製作時の截断片

製品ではないが、瓦製作時の截断片は、古代における瓦の製作技法を探る上で重要な遺物である。寺院跡からの出土がないのは当然のこととして、瓦窯からの出土も管見の限りない。截断片には、広端部分と側端部分のものとがあるが、特に注目されるのは広端部分の截断片である。広端部分の截断片は、いずれも破片の状態で、幅が完全に残るものはないが、厚さや調整、側面の形態などから、平瓦を製作する際に生じた截断片であることがわかる。截断面の反対側の面には、いわゆる藁座痕が明瞭に残る。

平瓦の広端面に残る藁座痕については、佐原真氏が「平瓦桶巻作り」で紹介しているのをはじめ、比較的古くからその存在が知られており、近年では細部の拓本や写真が報告書に掲載されることも増えている。しかし藁座痕は、調整が不完全な瓦や痕跡が深く入り込んだ瓦などにおいて、断片的に残っているに過ぎず、痕跡が転写される原因については不確実な点が多かった。

今回出土した截断片の藁座痕をみると、束ねた藁に別の藁を５～６本巻き付けて結束している様子が見てとれる。４～５㎝程の間隔で結束されているものが多いが、間隔は一定していない。また、個体によるバラツキも大きく、藁座そのものは非常に簡便なつくりのものといえる。

藁座痕が付着する要因について、佐原氏は粘土円筒の乾燥時に付着したものとみている（佐原 1972）。篠場瓦窯で出土した截断片の場合、藁座は端面に深く入り込み、中には指で粘土を藁座に押し付けているものもみられる。また、藁の一部が凹面側に折れて布目の上に転写されているものも、複数確認されている。これらの点から、截断片に残る藁座痕については、桶型に粘土を巻き付ける段階で付着した痕跡であるとみてよい。篠場瓦窯では、桶型に布を被せ、その下端の周囲に藁座を巡らした上で、粘土板を巻き付けるといった、平瓦の製作工程が復元できる。

6　まとめ

篠場瓦窯跡では３基の瓦窯が発見され、総重量にして5,700 kg以上となる膨大な瓦が出土している。遠江で初めてとなる白鳳期の瓦窯の調査として、想定以上に大きな成果を得ることができた。検出された遺構や出土遺物、各種の瓦の様相については報告したとおりであるが、最後に全体の様相をまとめた上で、古代遠江における篠場瓦窯跡の位置付けを行うことにする。

操業年代　まずは、理化学的な年代測定の結果からみてみることにする。考古地磁気による年代測定では、３号窯は７世紀末（680 年頃）、２号窯は７世紀最終末（700 年頃）、１号窯は８世紀中葉（760 年頃）という分析結果が得られている。放射性炭素年代測定を実施したのは、１号窯のみであるが、３点の炭化物を分析した結果、1260 ± 40、1250 ± 30、1260 ± 30yrBP という年代が得られている。実年代に直すと、それぞれ西暦 690 ± 40 年、700 ± 30 年、690 ± 30 年となる。なお、分析を実施した試料は、燃焼室焚口付近の第二次床面から出土した炭化材である。最終の焚口を構成する第Ⅲ層でパックされていたことから、最終操業時に近い時期の燃料とみてよい。

須恵器に関しては、３号窯が飛鳥Ⅳ期、２号窯が飛鳥Ⅳ～飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）期、１号窯が飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）期に位置付けられる。操業期間内のどの段階で須恵器を焼成したのかという問題はあるが、窯の操業年代としては、３号窯が７世紀末、２号窯が 700 年前後、１号窯が８世紀初頭となり、３号窯と２号窯は考古地磁気測定と、１号窯は放射性炭素年代測定の結果と一致する。

瓦において年代の手がかりとなるものは、軒平瓦Ⅱ類である。軒平瓦Ⅱ類は連珠文軒平瓦であるが、瓦当に笵型を使用し、周囲を三重の廓線で囲む。周囲を廓線で囲むという文様構成は、一般的に大官大寺式軒平瓦以降とされ、平城宮式軒平瓦では広く採用されている。大官大寺式軒平瓦は、文武朝大官大寺所用瓦であり、年代としては 690 年代に位置付けられる。どの程度の時間差を想定するかの問題はあるが、少なくとも軒平瓦Ⅱ類がこの年代を遡ることはない。軒平瓦Ⅱ類は２号窯でのみ焼成されており、平瓦の凸面に縦縄叩きが施されている点から、操業期間の中でも比較的遅い時期のものである。瓦においても２号窯は、考古地磁気と須恵器からみた 700 年前後という年代観が妥当といえる。

問題となるのは、理化学的な結果で１号窯の年代に大きな開きが存在している点である。出土遺物においては、須恵器や瓦の年代において、１号窯と２号窯との間に大きな年代の開きは認められない。遺構の上においても、１号窯の排水溝 SD01 －①を構築する際に、２号窯の排水溝 SD01 －②を埋め立てており、２号窯と１号窯に半世紀近くの時間差があるとは考えられない。

以上まとめると、篠場瓦窯跡における各窯の操業時期は、３号窯が７世紀末、２号窯が 700 年前後、１号窯が８世紀初頭に位置付けることができる。

各窯における様相　篠場瓦窯跡で最初に築かれたのは３号窯である。３号窯で生産された瓦の最大の特徴は、その多様性にある。軒丸瓦には、Ⅰ類とⅡ類が採用されている。同じ複弁蓮華文ではあるが、製作技法が明らかに異なっており、複数の系譜の工人が招聘されているものとみてよい。丸瓦も同様で、同じ無段式の丸瓦にも、側板連結模骨を用いるもの、杵形模骨で三角形の粘土板を用いるもの、杵形模骨で四角形の粘土板を用いるものと、明らかに系譜の異なる３種が採用されている。篠場瓦窯跡は、遠江で最も早くに瓦生産を開始した瓦窯であり、当然のことながら瓦工は他の地域より招聘せねばならない。生産体制を維持するために必要な数の瓦工を確保することは、相当困難であったことは想像に難くない。例え瓦工の系譜が異なっていたとしても、人数を確保を最優先とせねばならないというのが、地域における最初期の瓦窯の実情だったのであろう。

２号窯では、軒瓦における変化が顕著である。軒丸瓦では、Ⅱ類の製作技法に技法ｂが採用され、周縁部の重圏文を削るⅡ類Ｂ２が登場する。軒平瓦では、Ⅰ類Ｂの顎面に波状文の施文が行われるようになり、瓦笵を用いて施文するⅡ類が新たに採用されている。これらはいずれも、後に大宝院廃寺の瓦に大きな影響を与えている。平瓦では、叩き締めの技法において縦方向の縄叩きが、側面調整では凹型台に乗せた状態で回転させて調整する技法が新しく導入される。丸瓦は技術的に大きな変革はみられないが、生産する瓦をⅠ類ＣとⅢ類Ｂとする技法の集約が図られている。

１号窯では、丸瓦や平瓦において、技術的に安定した様子がうかがえる。丸瓦では有段式のⅠ類はＤに変化しているが、無段式はⅢ類Ｂが継続して生産される。平瓦は２号窯で採用された縦縄叩きと、凸型台を回転させて側面を調整する技法が継承されている。しかし、これらとは別に、丸瓦と平瓦ともに粗雑なつくりのものも製作されており、異なる系譜の集団が新たに参画している可能性がある。このことは、軒平瓦に顕著に表れており、１号窯で新たに製作されるⅢ・Ⅳ類はいずれも狭端側に瓦当が設けられている。篠場瓦窯の瓦工と比べて、明らかに技術･知識が劣る集団が製作しているものとみてよい。１号窯からは文字瓦が出土しているが、文字瓦はすべて篠場瓦窯の系譜上にある平瓦Ⅴ類である。人名を付して瓦を識別する必要が生じたのも、この辺りに原因があるのかもしれない。

篠場瓦窯跡の位置付け　　これまでみてきたように、篠場瓦窯跡は、遠江でいち早く瓦生産を開始した瓦窯として位置付けられる。そして篠場瓦窯との関係が最も深いのは、磐田市・大宝院廃寺であり、川原寺式（軒丸瓦Ⅰ類）の瓦笵の提供や、重孤文軒平瓦（軒平瓦Ⅰ類Ｂ）における顎面の波状文、連珠文軒平瓦（軒平瓦Ⅱ類）の文様、蠖羽瓦などの瓦に、大きな影響を与えている。影響が顕在化するのは２号窯の操業以降であり、年代としては 700 年前後の時期である。これらの瓦は、大宝院廃寺の瓦の中でも大きな位置を占めており、その創建に篠場瓦窯が大きな役割を果たしていたことがわかる。のちに大宝院廃寺は、周辺の寺院の瓦に大きな影響を与えている。篠場瓦窯跡は、それらの瓦の祖型となる多くの瓦を導入しており、遠江における古代寺院と瓦生産の起点として、歴史的に重要な役割を果たしている。また、鴟尾や蠖羽瓦などからみて、篠場瓦窯跡の瓦を葺いた寺院は、本格的な堂宇を有していると推定できる。遠江で初めて建立された大規模な寺院建造物が、人々に与えた影響は計り知れない。

では、何故この地において、遠江でいち早く瓦生産を開始し得たのであろうか。篠場瓦窯が所在する地は、遠江国麁玉郡である。和名類従抄によれば、麁玉郡は「赤狭（アカサ）」「碧田（アオタ）」「三宅（ミヤケ）」「覇多（ハタ）」の４郷で構成されている。「赤狭」「碧田」は地理的特徴に由来する郷名であろうが、「三宅」は屯倉、「覇多」は渡来系氏族の存在を想起させる郷名である。技術や人材を導入する人脈と、仏教文化を受容する素地が整っていたことが、背景にあったのではなかろうか。

篠場瓦窯跡で生産された瓦の供給先となる寺院は、現在のところ未発見の状況にある。篠場瓦窯の調査からも大きな成果が得られたが、瓦窯から出土する瓦は廃棄された断片的な資料に過ぎない。将来寺院跡が発見され、より克明な状況が明らかとなることを期待したい。

引用・参考文献

武田寛生　2009「資料調査報告　東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』第 21 号
武田寛生　2007「遠江における川原寺式軒丸瓦」『研究紀要』13 号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
武田寛生　2006「重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦」『設立 20 周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
佐原真　1972「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第 58 巻２号 日本考古学会
奈良文化財研究所　2002『山田寺跡発掘調査報告』
＊出土瓦については、各遺跡の報告書を参照した。

図 版

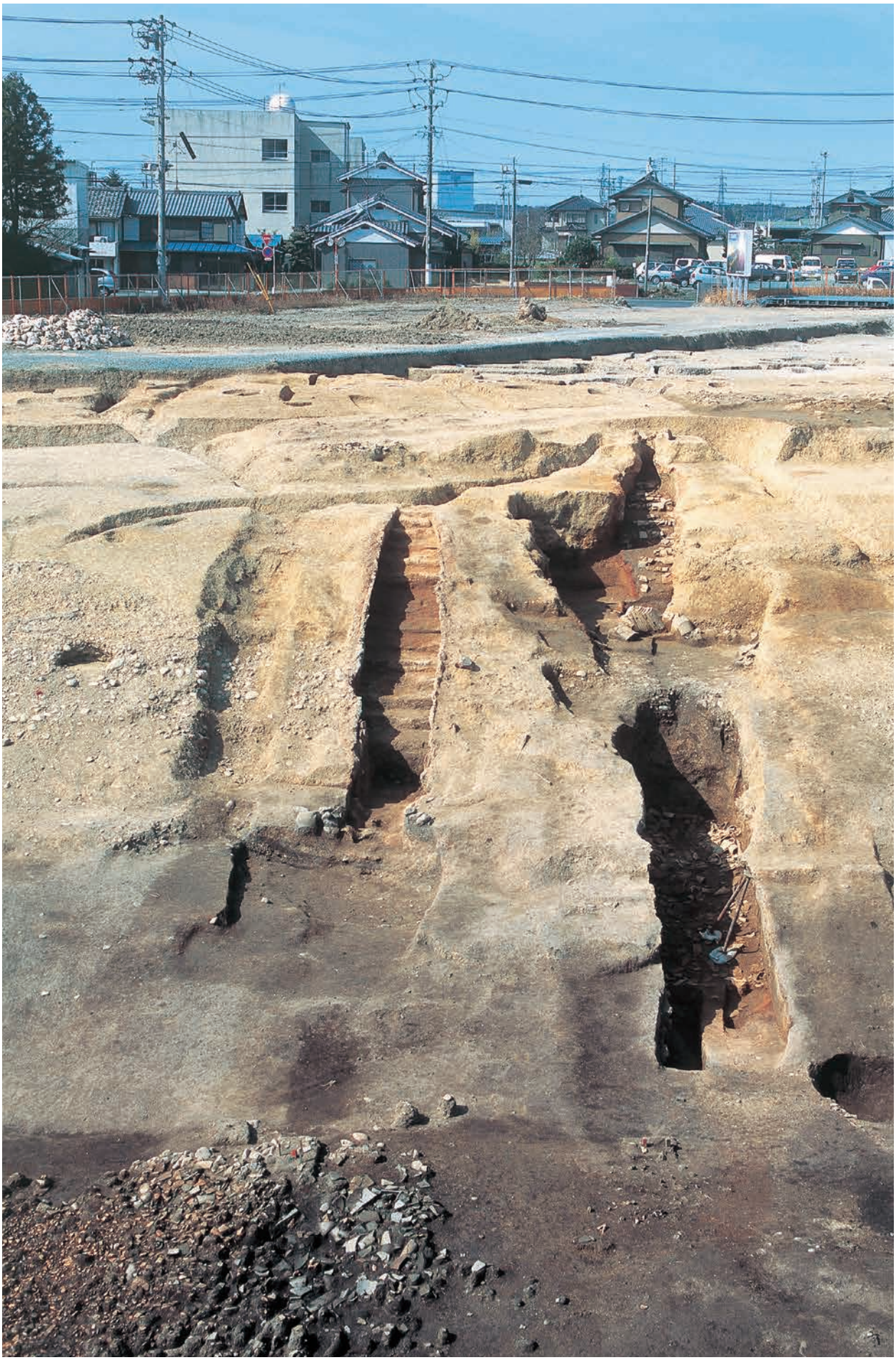
図版 1

1　遺跡遠景（南東から）　　2　遺跡遠景（東から）

１　篠場瓦窯跡（南東から）　　２　篠場瓦窯跡（東から）

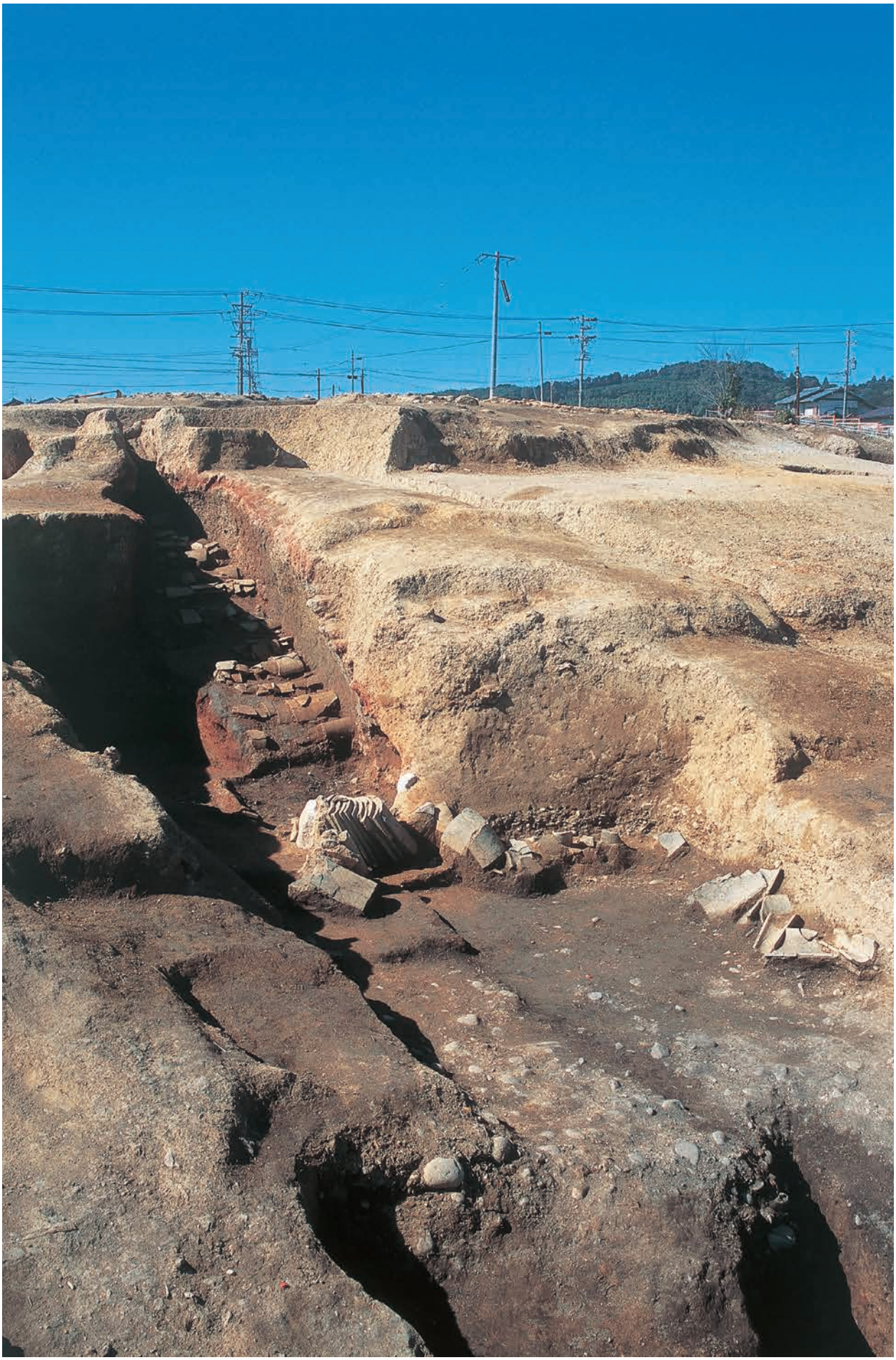
図版３

篠場瓦窯跡調査区　（合成写真）



篠場瓦窯跡遠景（東から）

図版５



１号窯全景（南東から）

１　１号窯と焚口閉塞瓦　　２　１号窯焼成室　　３　段構築瓦　　４　焼成室奥壁構築瓦

図版７

２号窯全景（北東から）

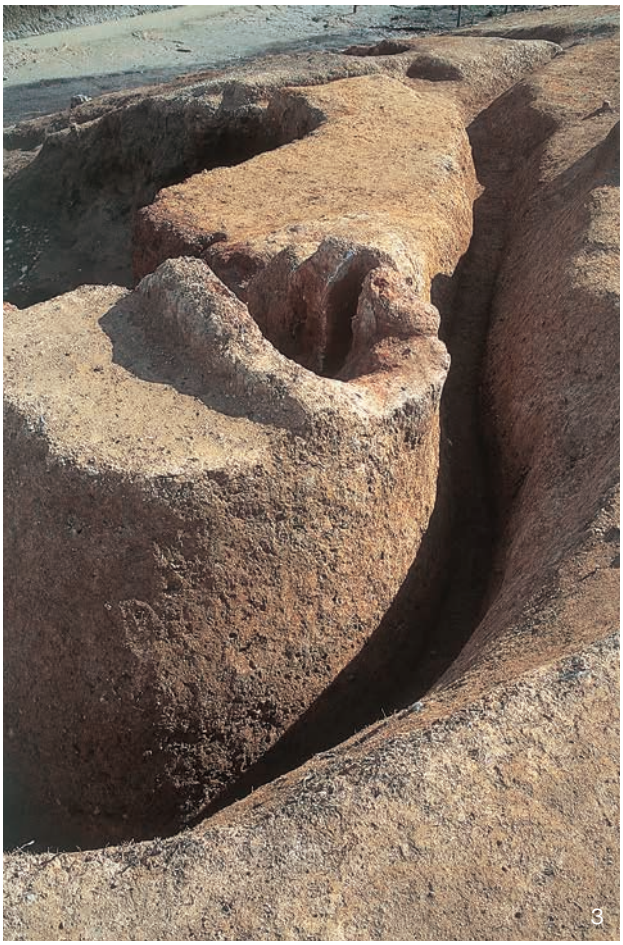
1　１・２号窯検出状況　　2　２号窯壁面の改築　　3　２号窯焚口部の礫　　4　２号窯焼成室瓦出土状況

図版９

３号窯瓦出土状況（焚口から）

1　３号窯焼成室　　2　３号窯焚口　　3　３号窯側壁　　4　３号窯天井残存部　　5　３号窯煙道部

図版 11



1　SD01 南西部（南から）　　2　SD01 北西部（北東から）　　3　SD01 西部（西から）

1　SD02 全景（南から）　　2　SD02 の形状（南から）

図版 13

1　SX01 全景（南から）　　2　SX01 南西部（南東から）

1　SX02 全景（北東から）　　2　掘立柱建物（南から）

図版 15

３号窯出土瓦

3号窯出土軒丸瓦

図版 17

3号窯出土軒平瓦

3号窯出土丸瓦

図版 19

3号窯出土平瓦

3号窯出土隅平瓦

図版 21

3号窯出土熨斗瓦

2号窯出土瓦

図版 23

２号窯出土軒丸瓦

2号窯出土軒平瓦

図版 25

２号窯出土丸瓦

２号窯出土平瓦

図版 27

２号窯出土隅平瓦

1 号窯出土瓦

図版 29

1 号窯出土軒平瓦

1 号窯出土丸瓦

図版 31

1 号窯窯体内出土平瓦

1 号窯焚口閉塞・灰原出土平瓦

図版 33

1 号窯出土熨斗瓦

蝮羽瓦

図版 35

塼

藁座痕の残る平瓦・瓦製作時の切り落とし断片

図版 37

鴟尾 A

鴟尾 B

図版 39

鬼瓦

凸面の叩き目

凹面の布目

陶馬

図版 41

3号窯出土須恵器

2 号窯出土須恵器

図版 43

1 号窯出土須恵器

環状瓶

胴部の粘土接合

胴部下端の穿孔

図版 45

溝 SD02 出土土器

1

2

1　排水溝 SD01・瓦集中遺構 SX01 出土須恵器　　2　包含層・攪乱出土須恵器・土師器

軒丸瓦の分類・赤色付着物

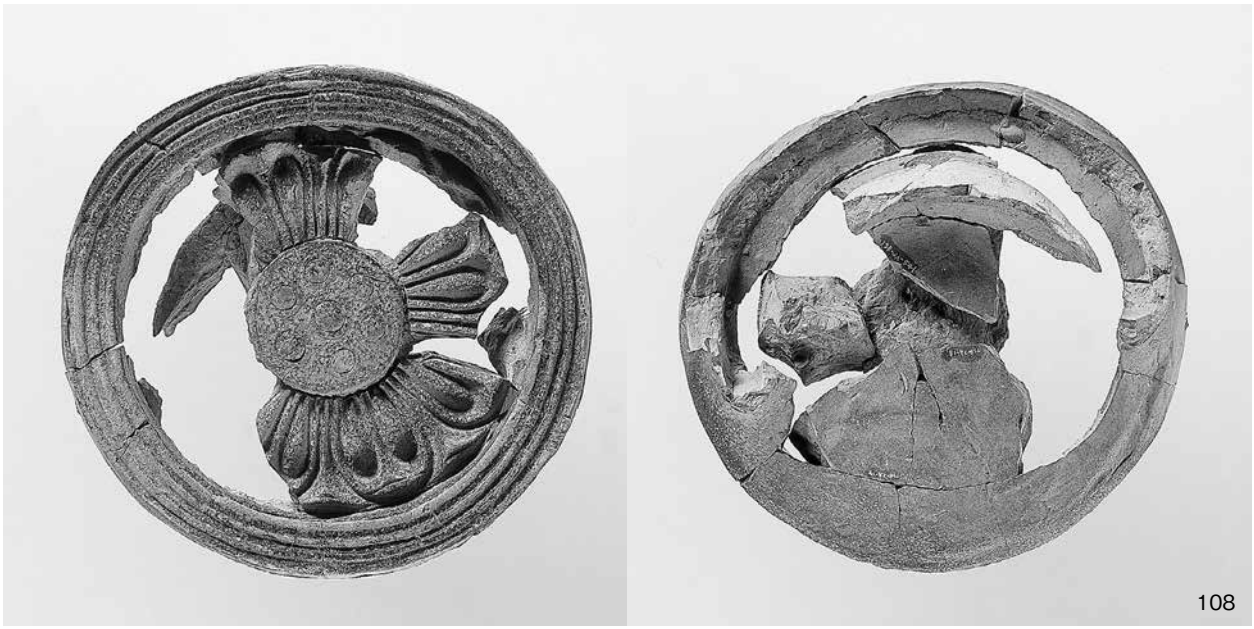
18

3

3

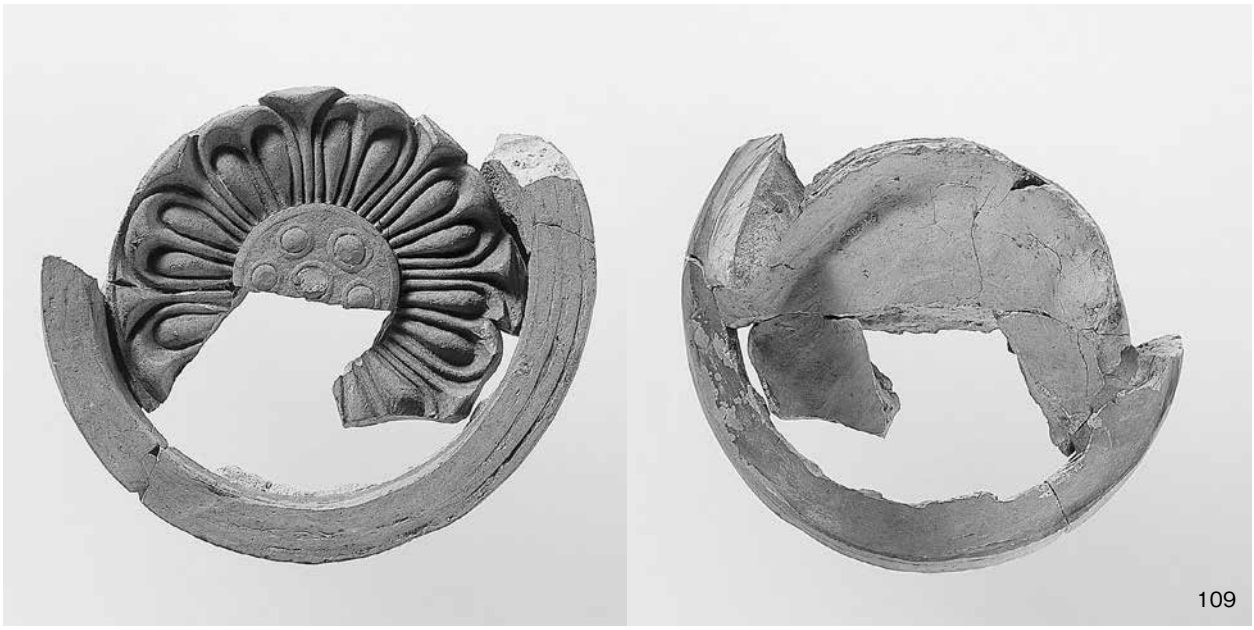
13

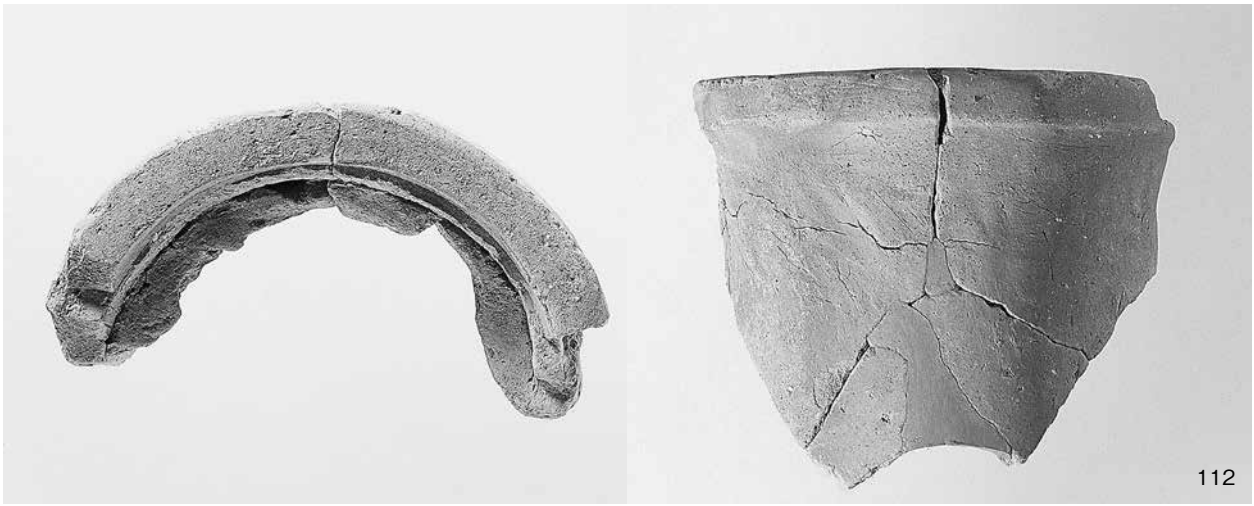
18　Ⅰ類　　3　Ⅱ類Ａ（技法ａ）　　3・4　赤色付着物

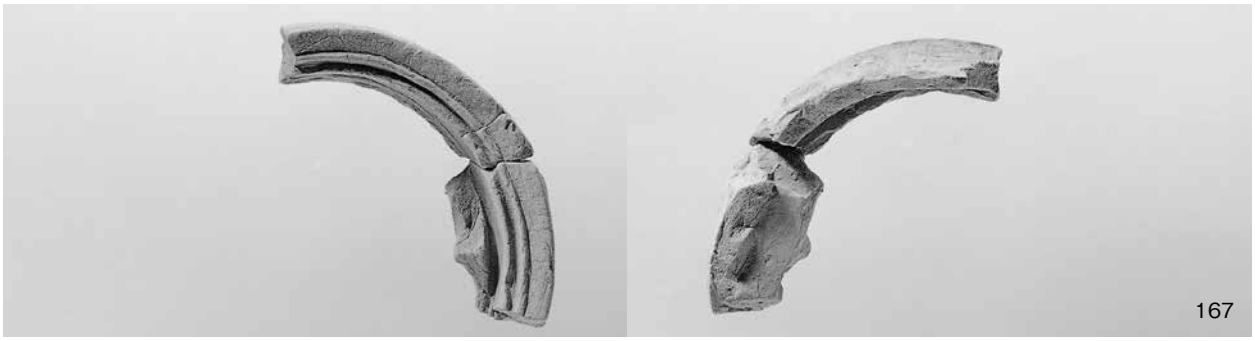


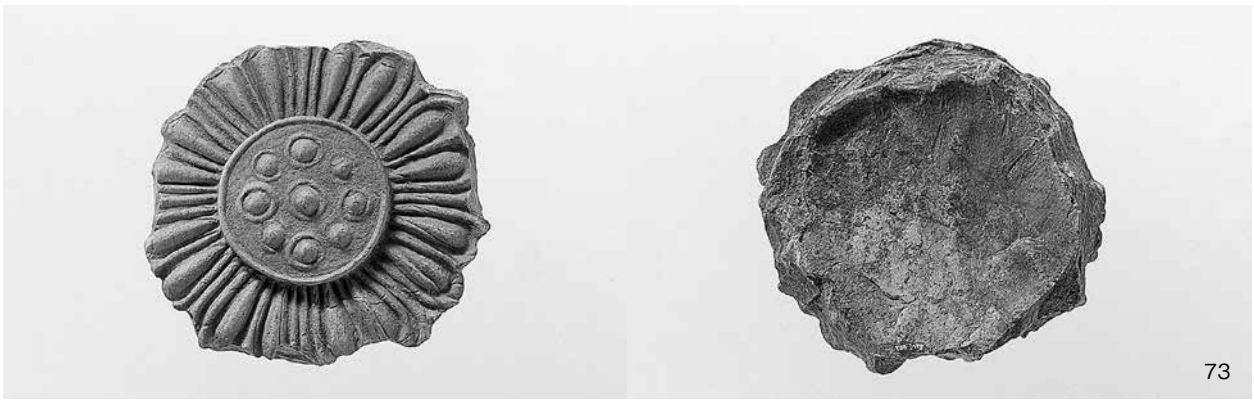
166　Ⅱ類A（技法b）　13　Ⅱ類B1（技法a）　108　Ⅱ類B1（技法b）

軒丸瓦の分類



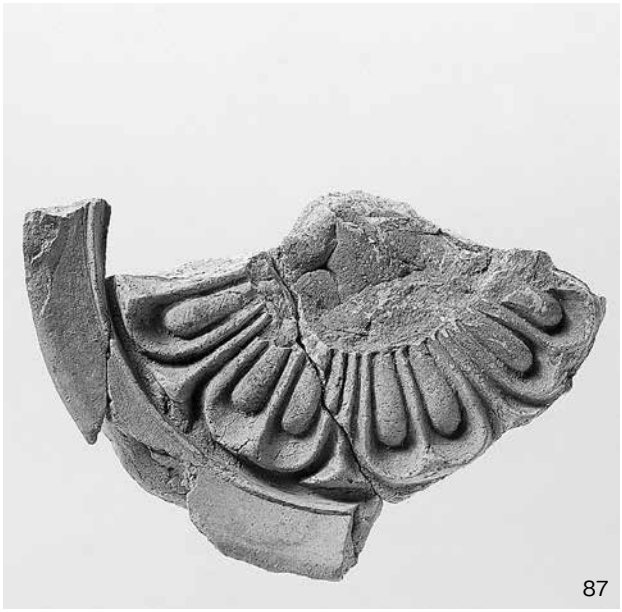






109・112　Ⅱ類 B2 類　　167・73　Ⅲ類

瓦当



瓦当

蓮子周環

笵傷

丸瓦接合部

瓦当側面と裏面の削り調整

4

5

6

8

9

73

4～73　Ⅱ類A（技法a）

Ⅱ類A（技法 a）

Ⅱ類 B2（技法 b）

Ⅱ類A（技法 a）の瓦当裏面

Ⅱ類 B1（技法 a）の瓦当裏面

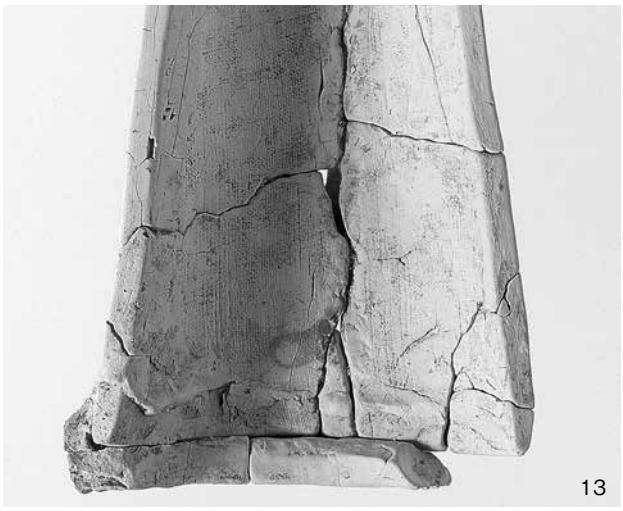
Ⅱ類A（技法 b）の瓦当裏面

Ⅱ類 B2（技法 b）の瓦当裏面

Ⅱ類 B1（技法 b）の瓦当裏面

Ⅱ類 B2（技法 b）の瓦当裏面

Ⅱ類A（技法 a）凸面



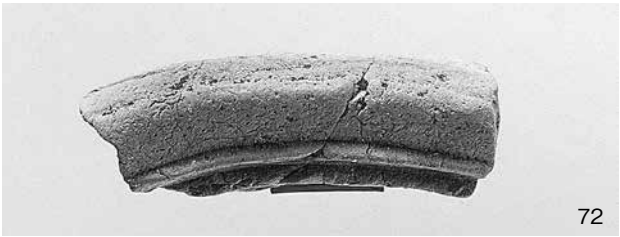
Ⅱ類 B1（技法 a）凹面

Ⅱ類 B2（技法 b）凸面

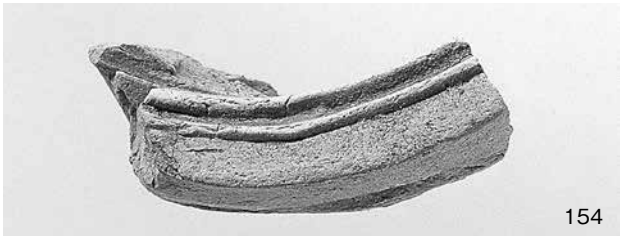
Ⅱ類A（技法 a）丸瓦接合部

Ⅱ類 B1（技法 a）丸瓦接合部

Ⅱ類 B2（技法 b）丸瓦接合部　凹凸面に刻み加工

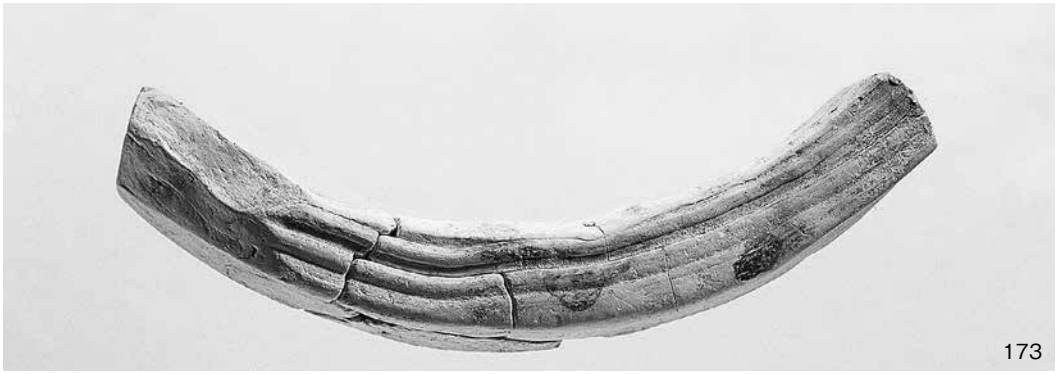


Ⅲ類



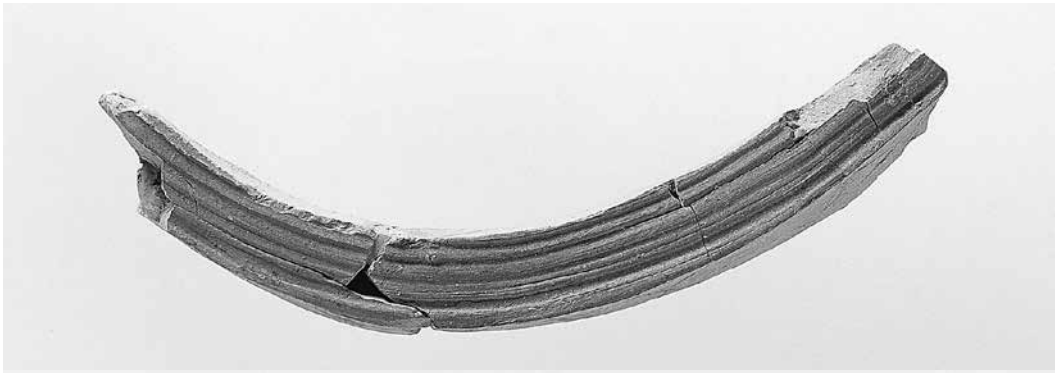
Ⅲ類

軒平瓦の分類



173 Ⅰ類A

183 Ⅰ類B 1

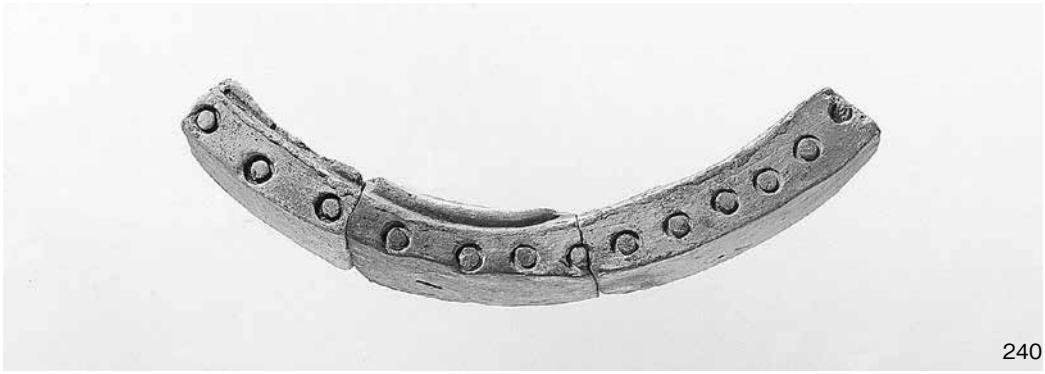


227 Ⅰ類B 2

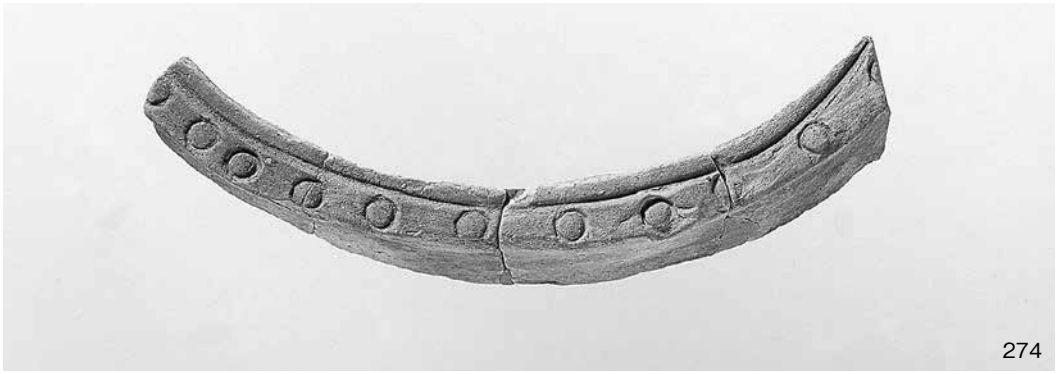
218 Ⅱ類

図版 55

軒平瓦の分類



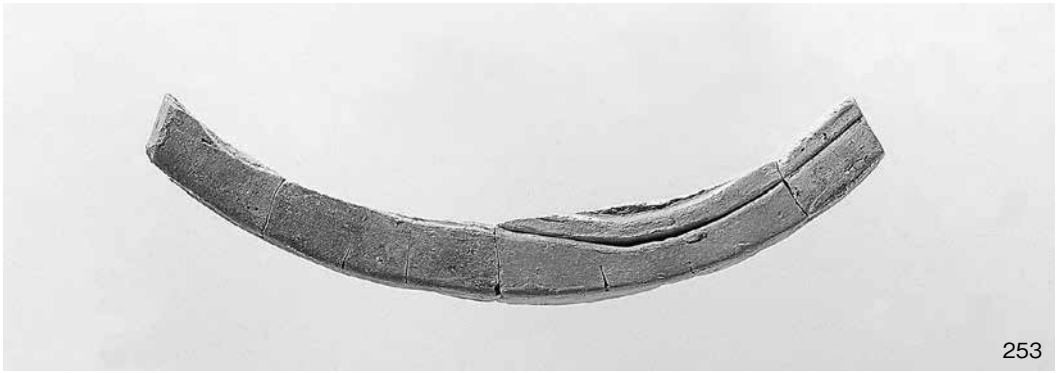
240 Ⅲ類A



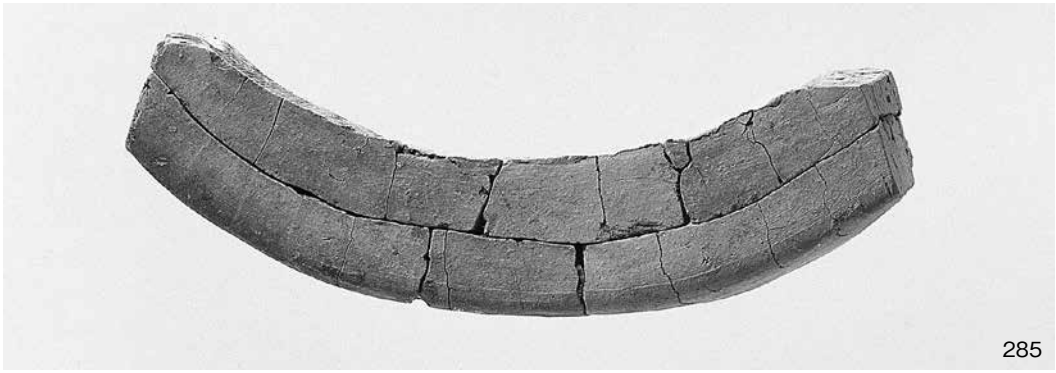
274 Ⅲ類A

278

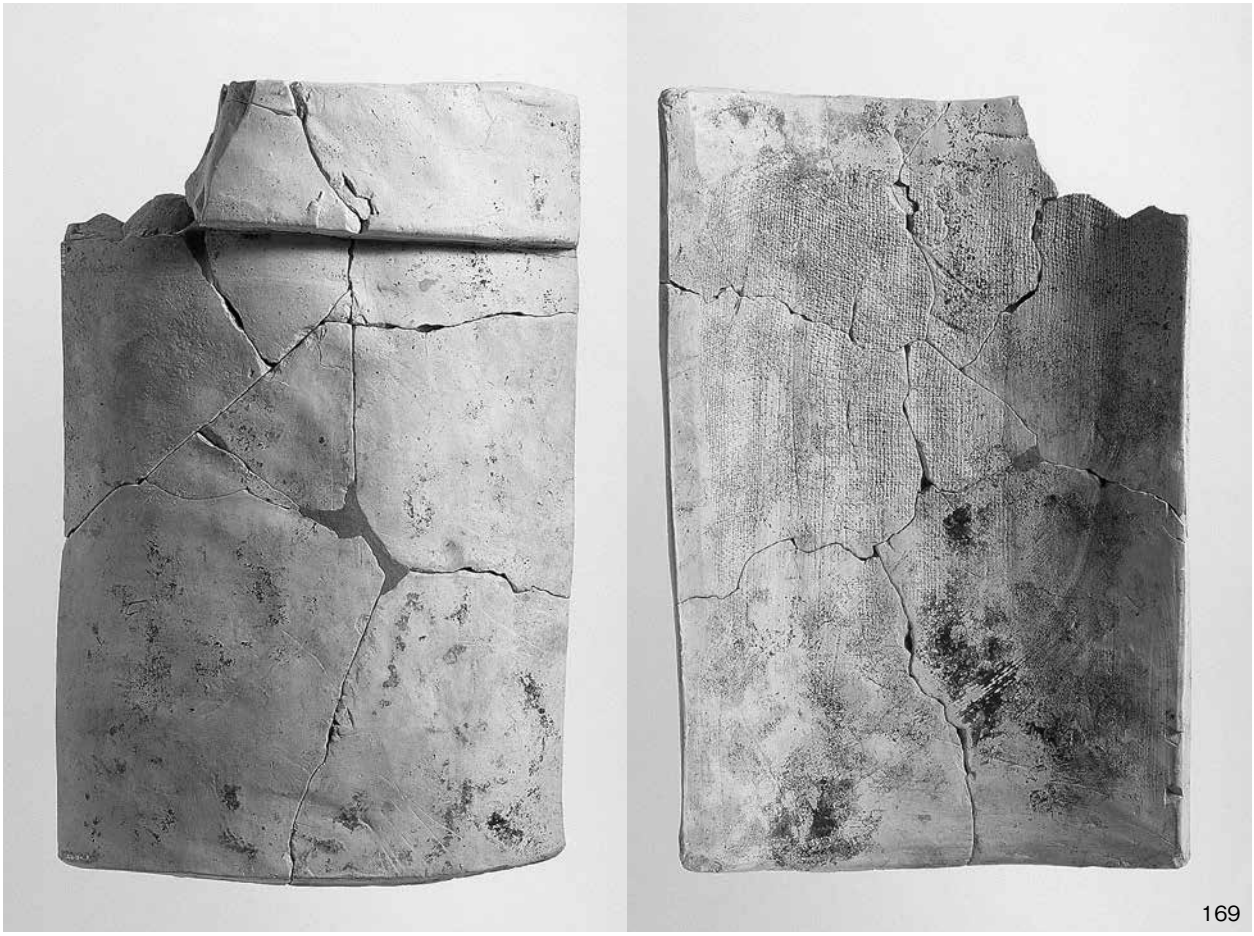
280 Ⅲ類B



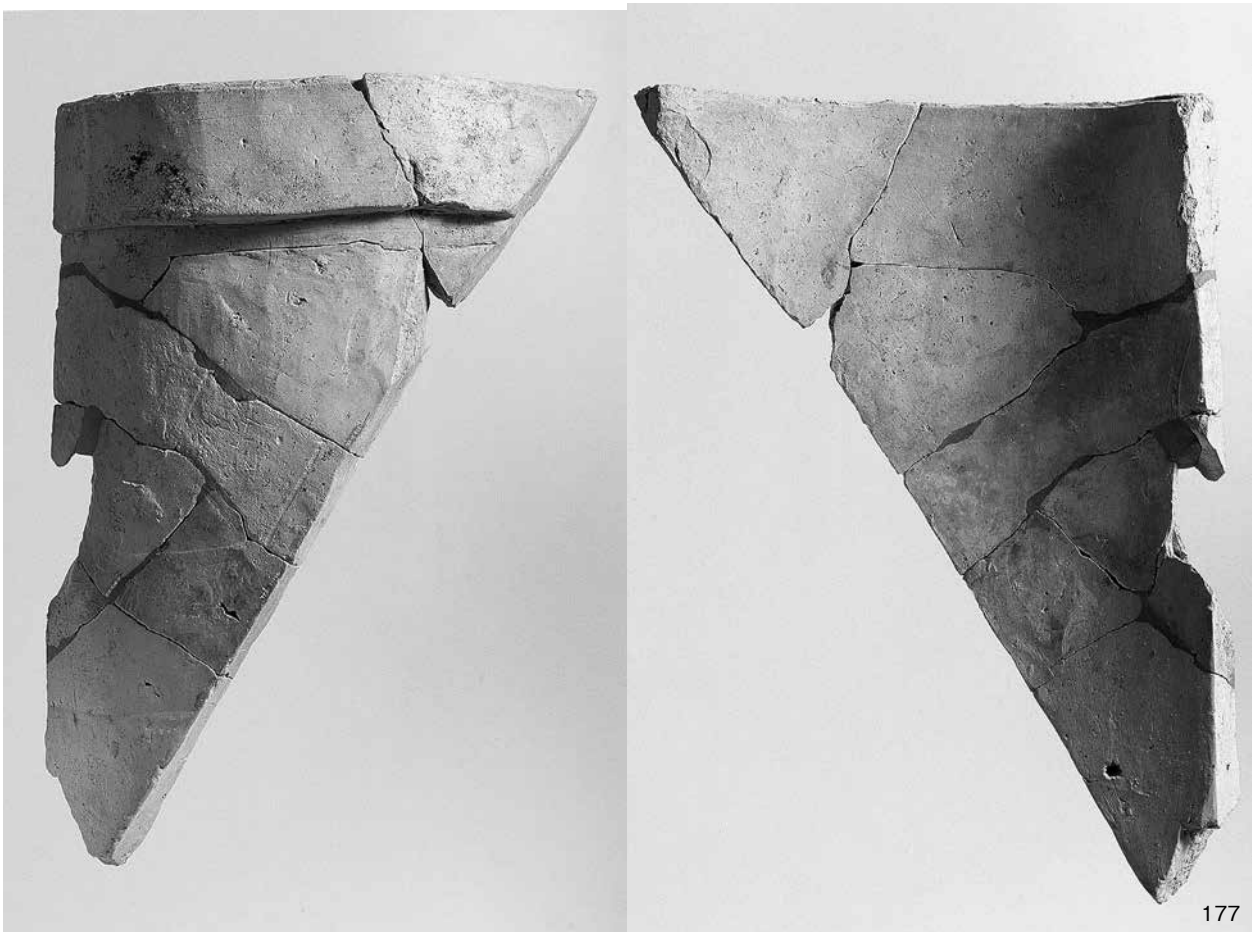
253 Ⅲ類C



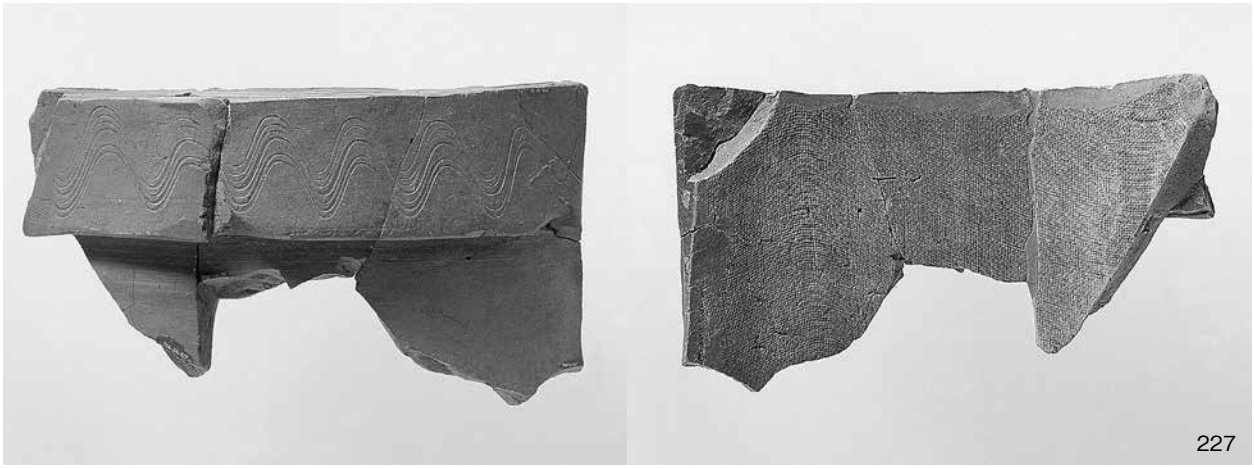
285 Ⅳ類



Ⅰ類 B1　凹・凸面　　凹面には布目が残る



Ⅰ類 A　凹・凸面　　凹凸面ともに全面ナデ調整



Ⅰ類Ｂ２　凹・凸面　　顎面には波状文・凹面には布目が残る

Ⅱ類　凹・凸面　　凸面に縦方向の縄叩き痕が残る

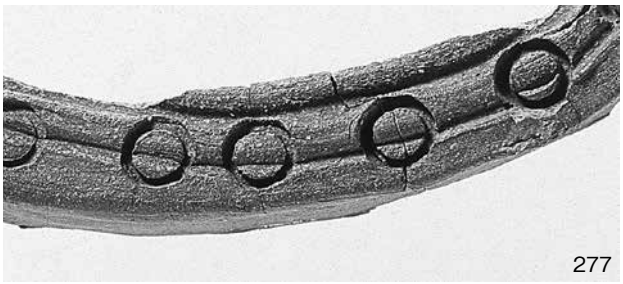
Ⅰ類 B2　顎段部　　段部が溝状に深く窪む

Ⅱ類　凸面に残る縦方向の縄叩き痕

Ⅳ類　凹・凸面　　狭端側に瓦当を設ける

平瓦部の凸面側からの切り込み

Ⅲ類Ａの珠文　　珠文の形状が一致



Ⅲ類Ａの弧線と珠文　　施文は弧線が先

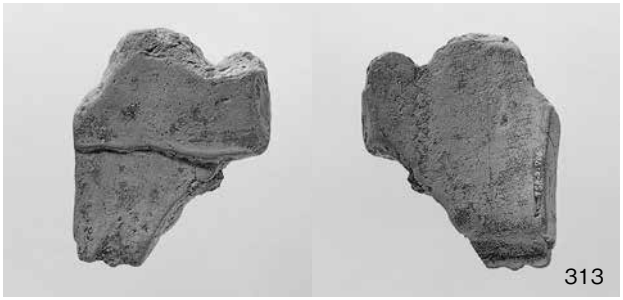
Ⅰ類Ｂ２　顎部接合面のハケ目

Ⅲ類Ａ　顎部接合面のハケ目

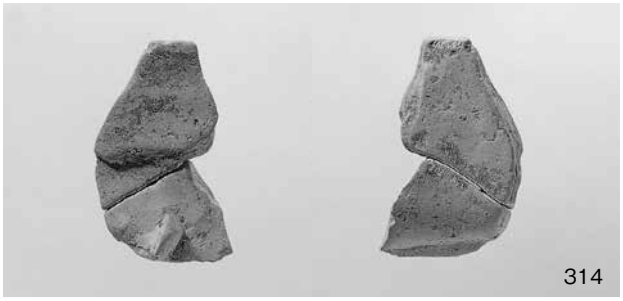
Ⅲ類Ｂ　顎部接合面のハケ目

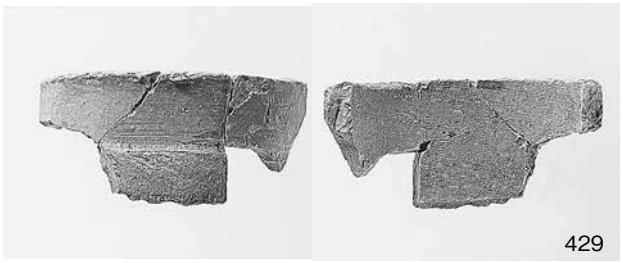
図版 59

丸瓦Ⅰ類

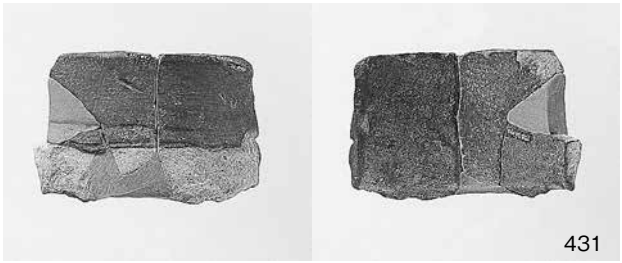


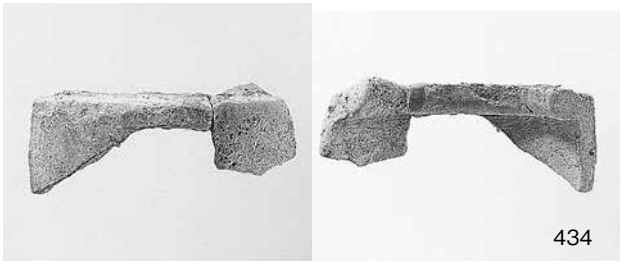
Ⅰ類A



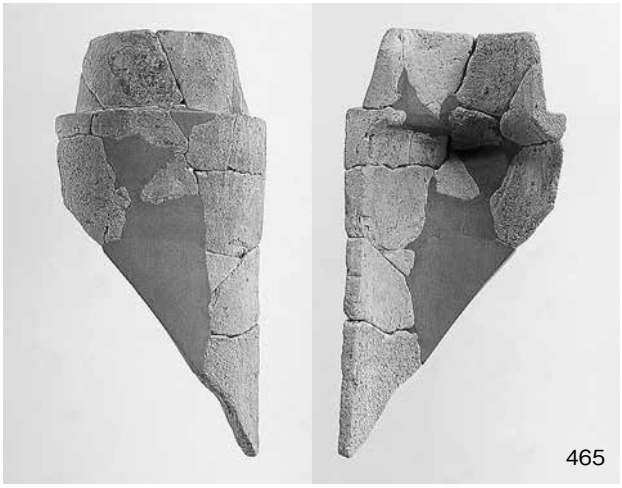


Ⅰ類A

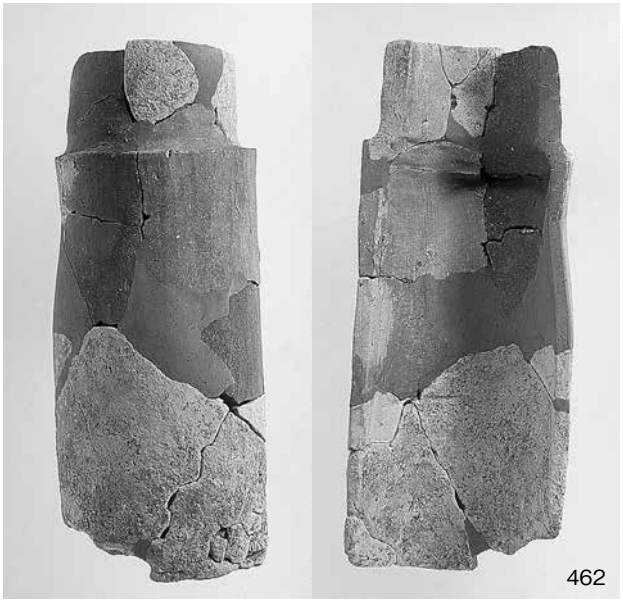




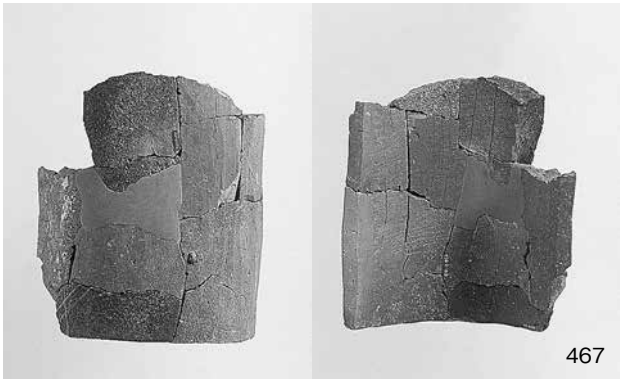
Ⅰ類B



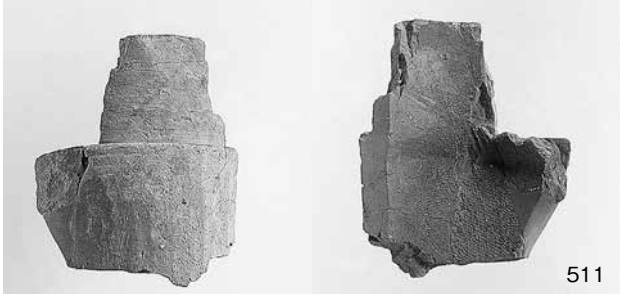
Ⅰ類C



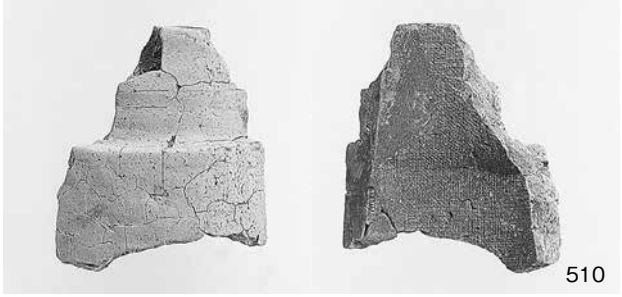
Ⅰ類C



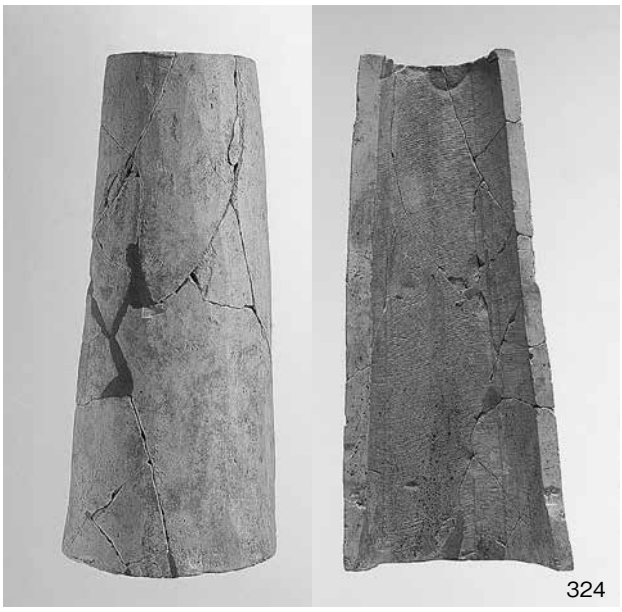
Ⅰ類　広端部



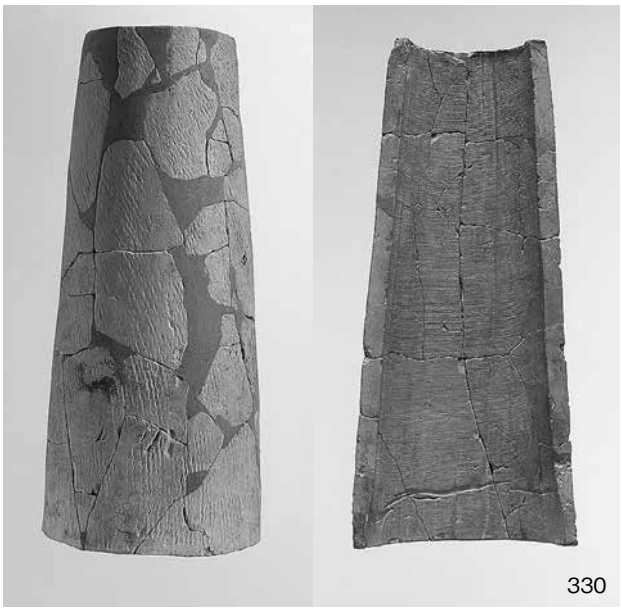
Ⅰ類D

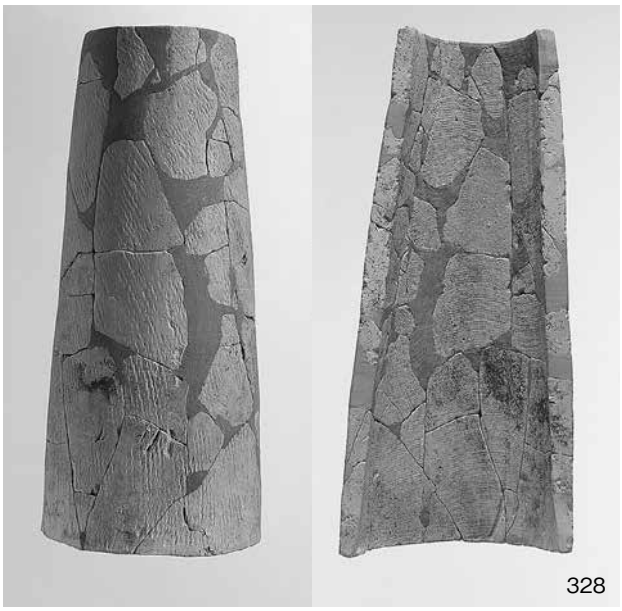


Ⅰ類D

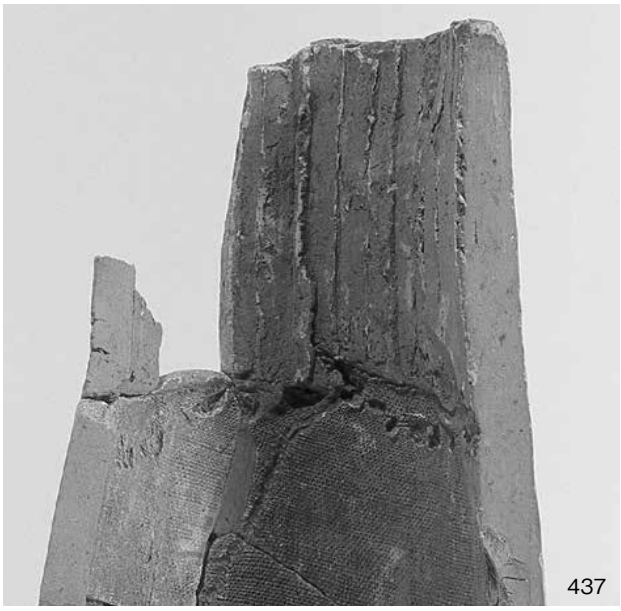


Ⅱ類A



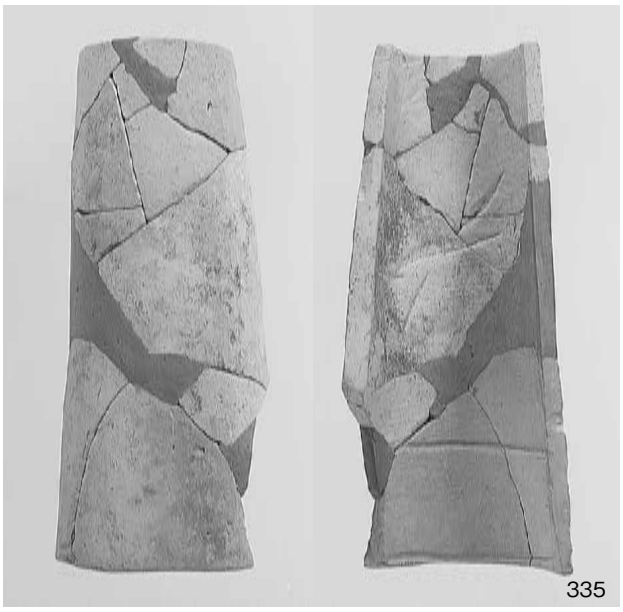


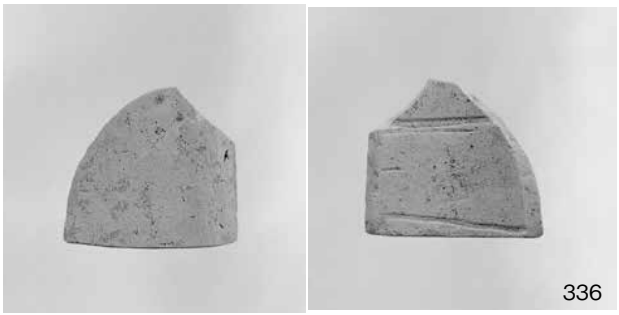
Ⅱ類B



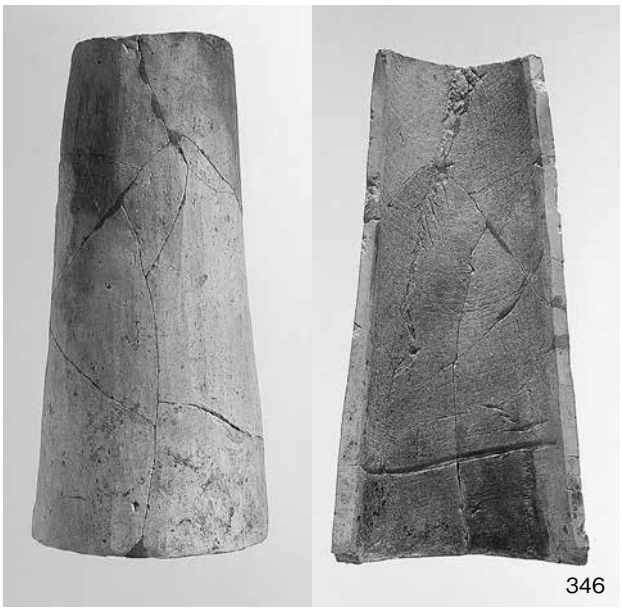
Ⅱ類　狭端部の布足らず

Ⅱ類　広端部の布足らず



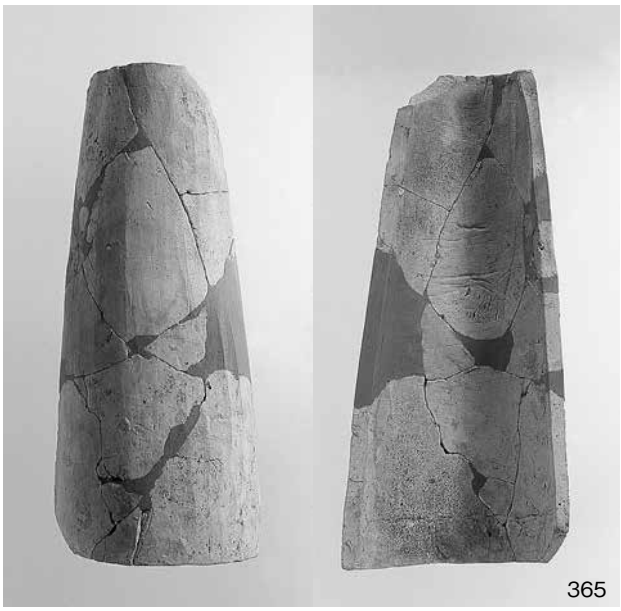


Ⅲ類A（布 b・同一粘土円筒から分割）

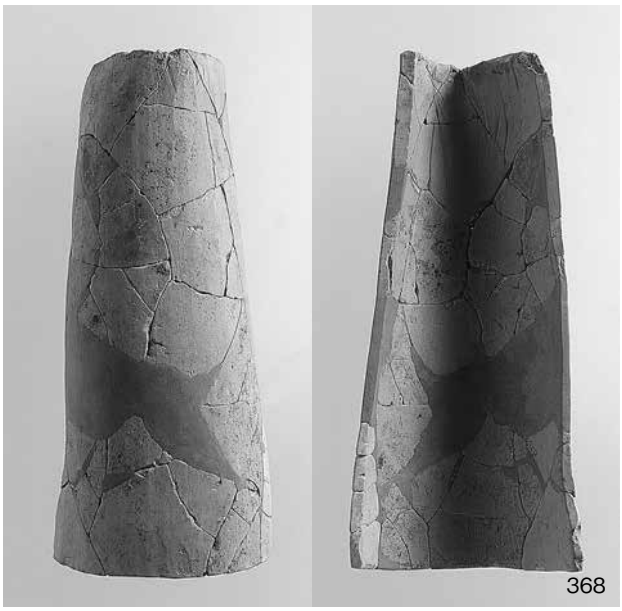


Ⅲ類A（布 b）

Ⅲ類A（布 b）



Ⅲ類A（布c・同一粘土円筒から分割）



Ⅲ類A（布c・同一粘土円筒から分割）

Ⅲ類A（布c）

Ⅲ類 B1（布 b）

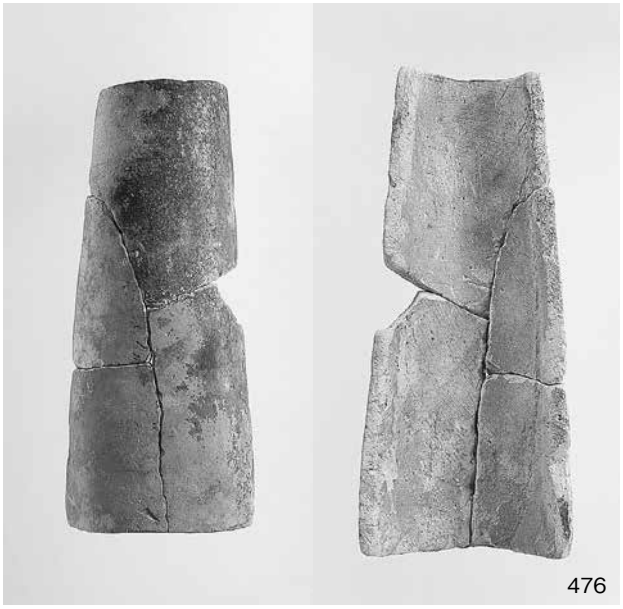
Ⅲ類 B1（布 b）

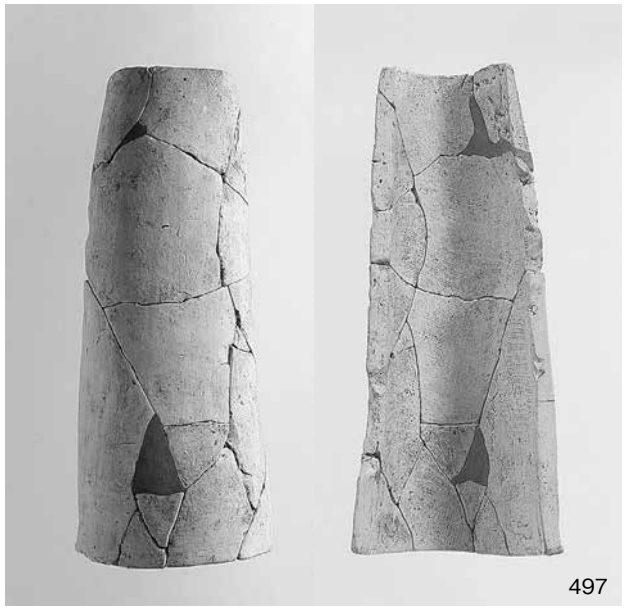
Ⅲ類 B1（布 c・同一の粘土円筒を分割）

Ⅲ類 B1（布 c・凸面を一部削り）

Ⅲ類 B1（布 c）

Ⅲ類 B2（布 d）





Ⅲ類 B3（布 e）

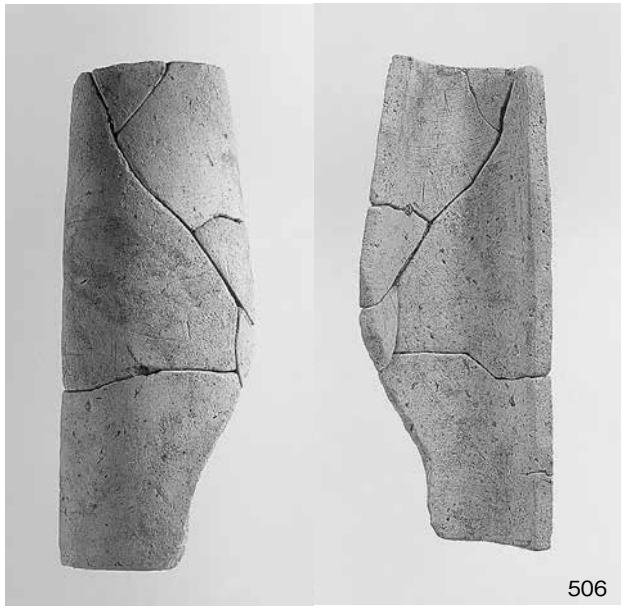
Ⅲ類 B3（布 d）

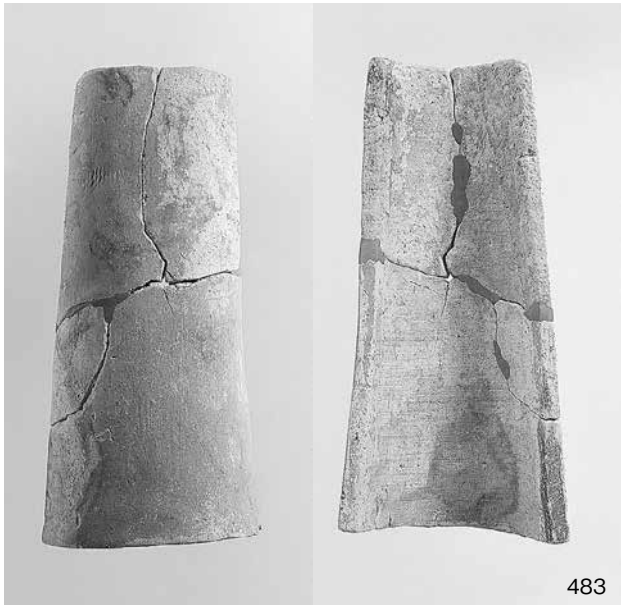
粘土板の布の巻き込み

粘土板の布の巻き込み

480

Ⅲ類 B4（布 f）


506


483

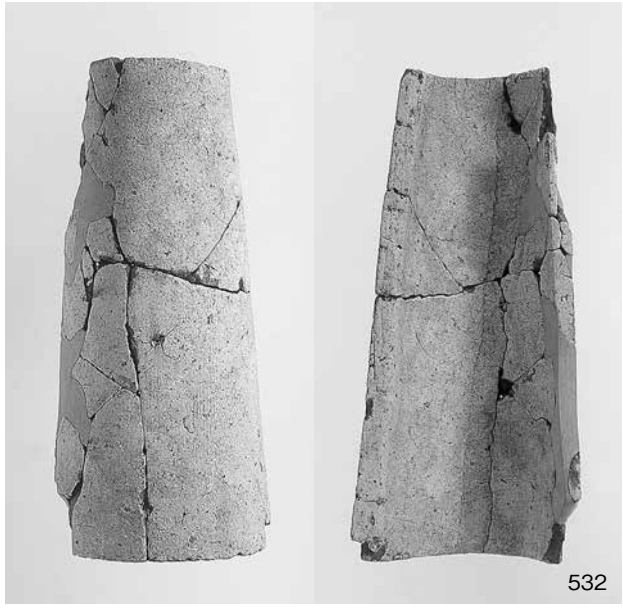
Ⅲ類 B4（布 g）

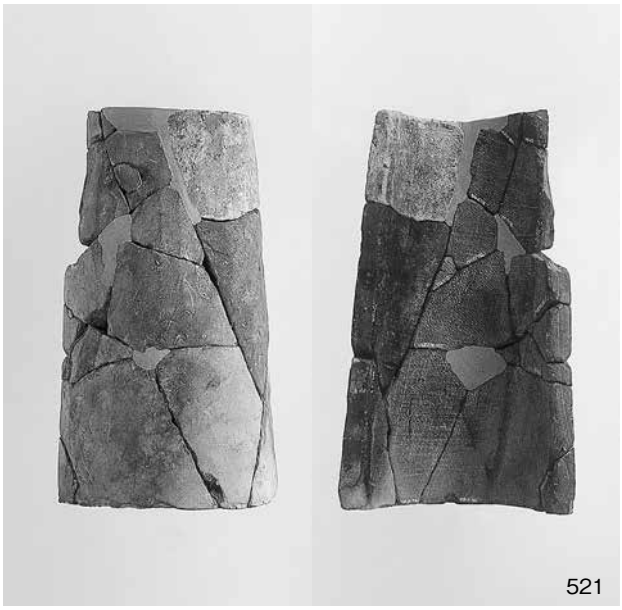
485

Ⅲ類 B4

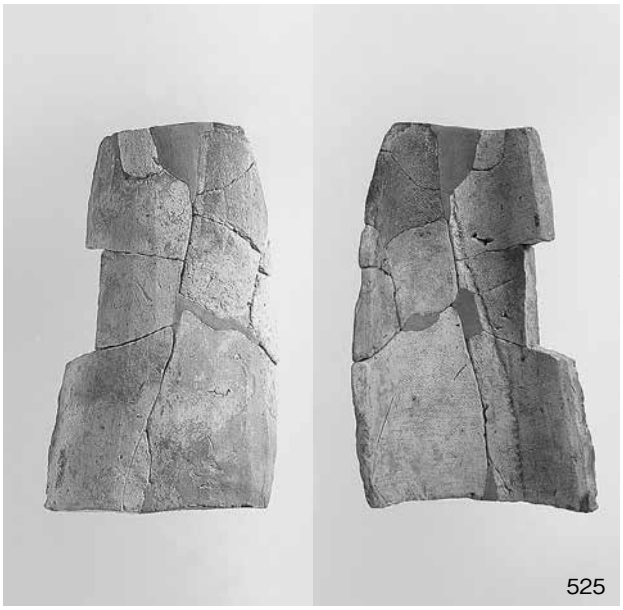
512

Ⅲ類 B5（布 h）

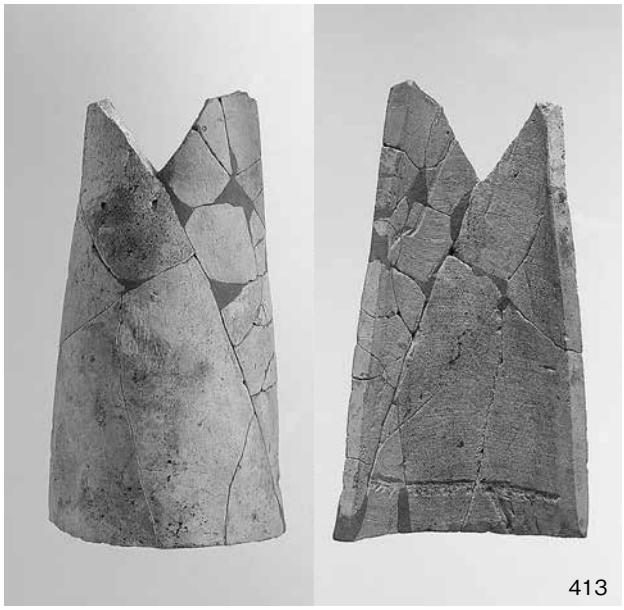

532



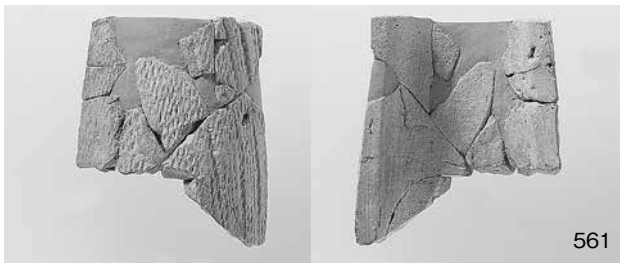
Ⅲ類 B6



Ⅲ類 B7

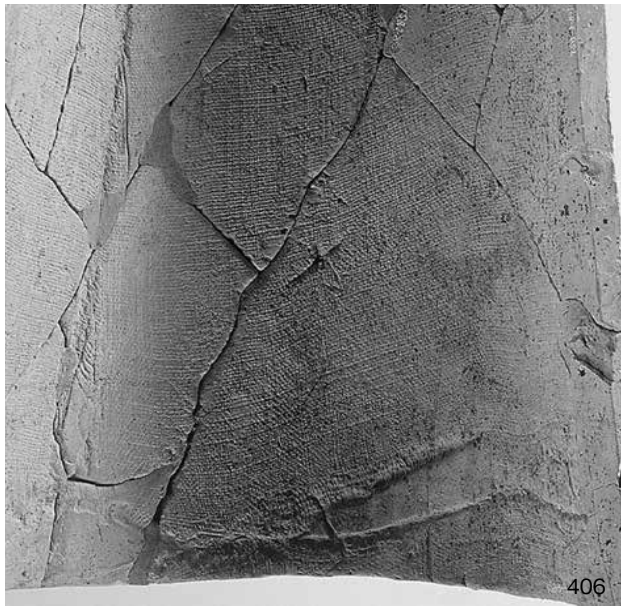


Ⅲ類Ｂ　特殊例

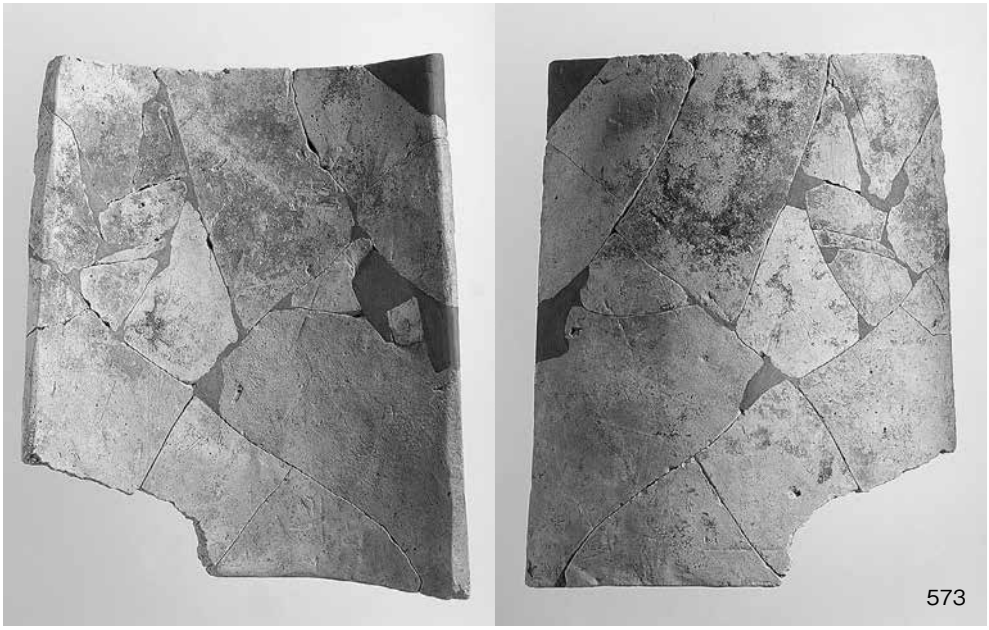


Ⅲ類Ｃ

分割破面

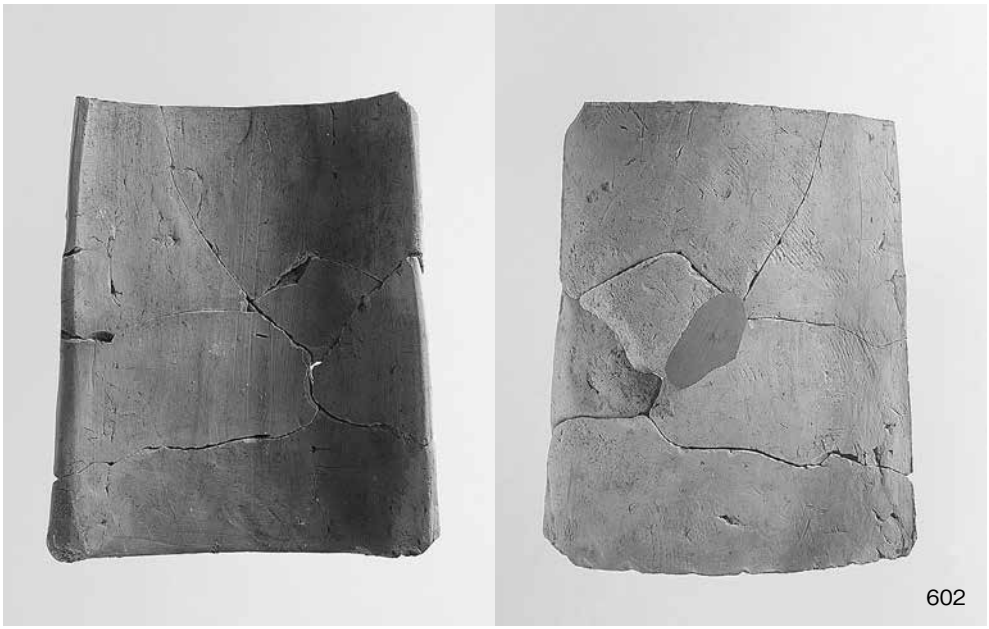


布の破れ（布 c）



573

Ⅰ類A

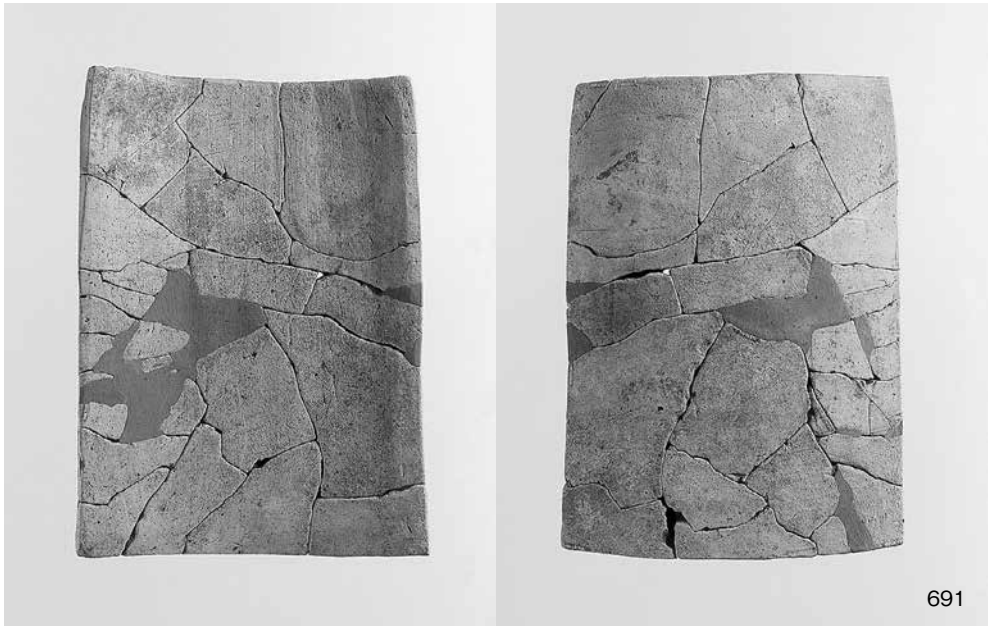


602

Ⅰ類B

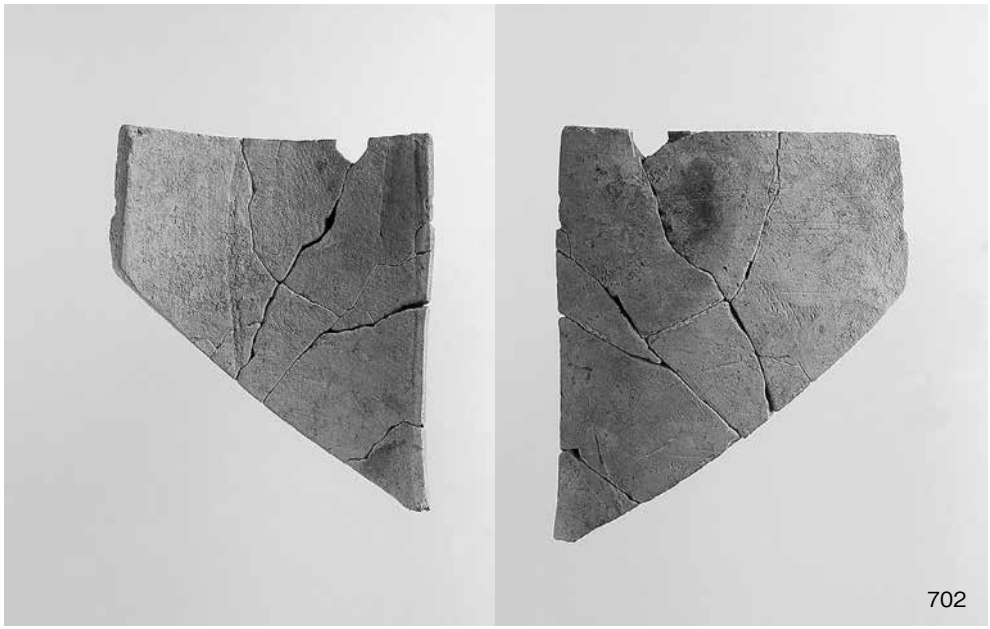
588

Ⅱ類A



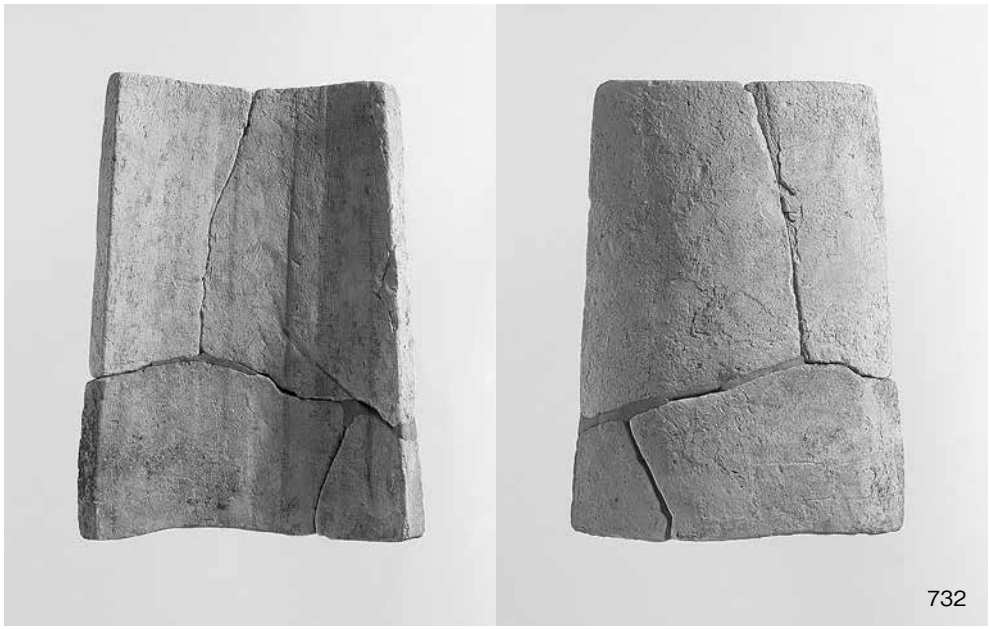
Ⅱ類B

691



Ⅱ類C

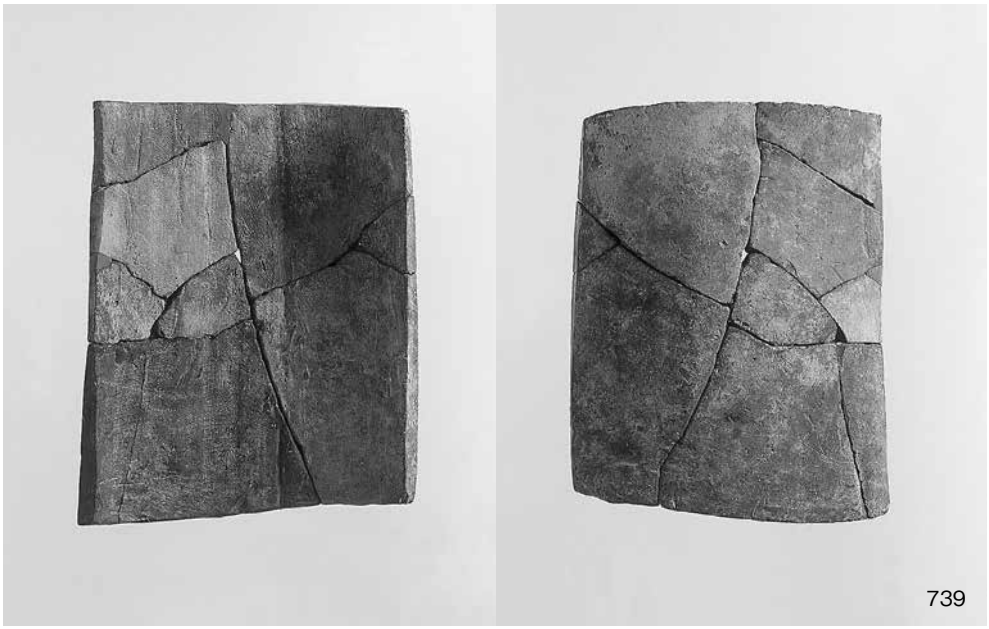
702



Ⅱ類D

732

864 Ⅱ類E



739 Ⅱ類F

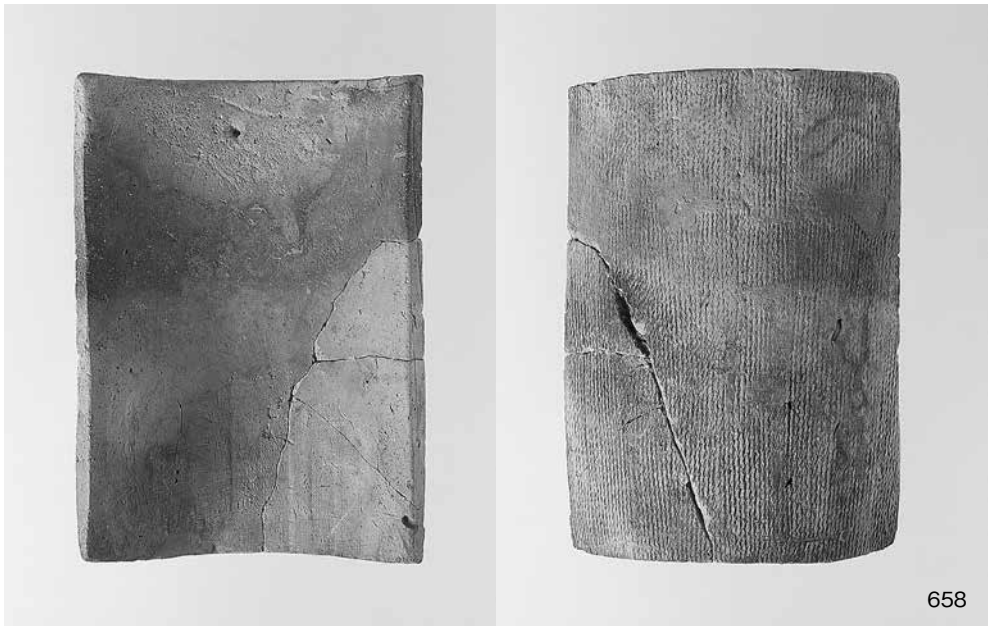
875 Ⅱ類G

Ⅲ類A

651

Ⅲ類B

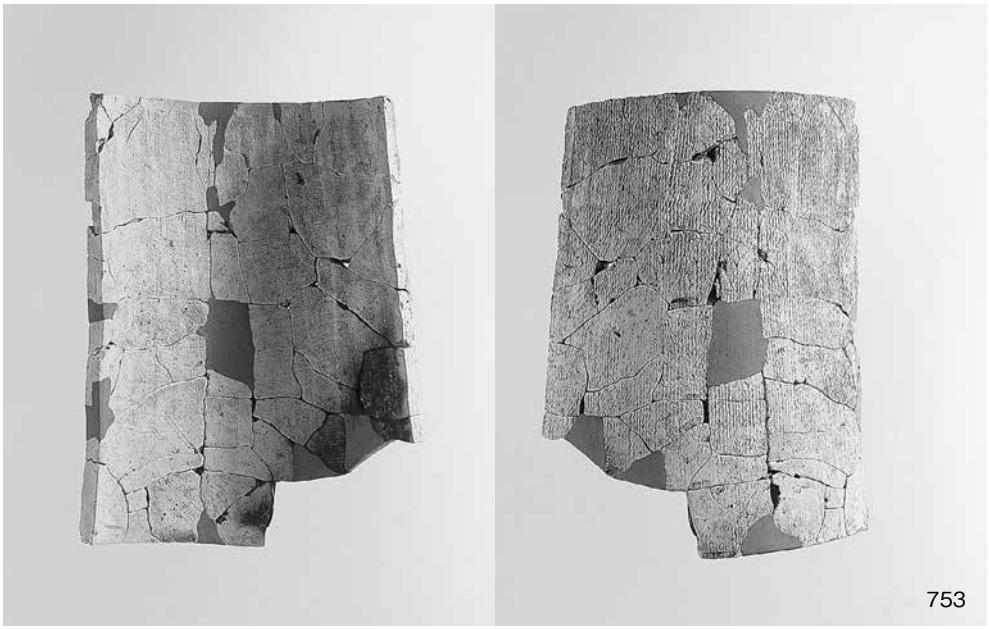
653



Ⅳ類A

658

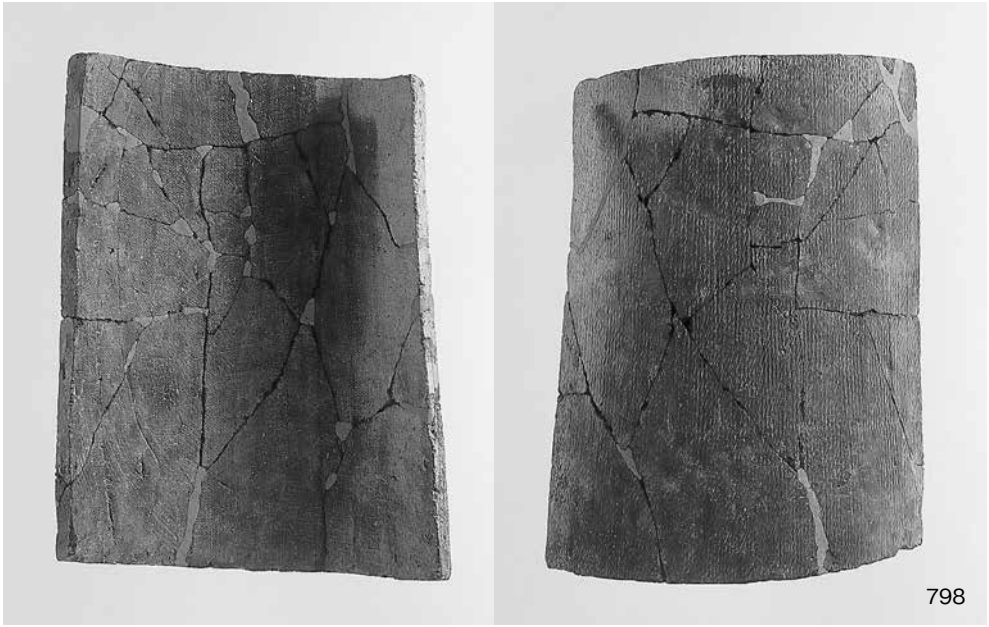
723 Ⅳ類B



753 Ⅴ類A

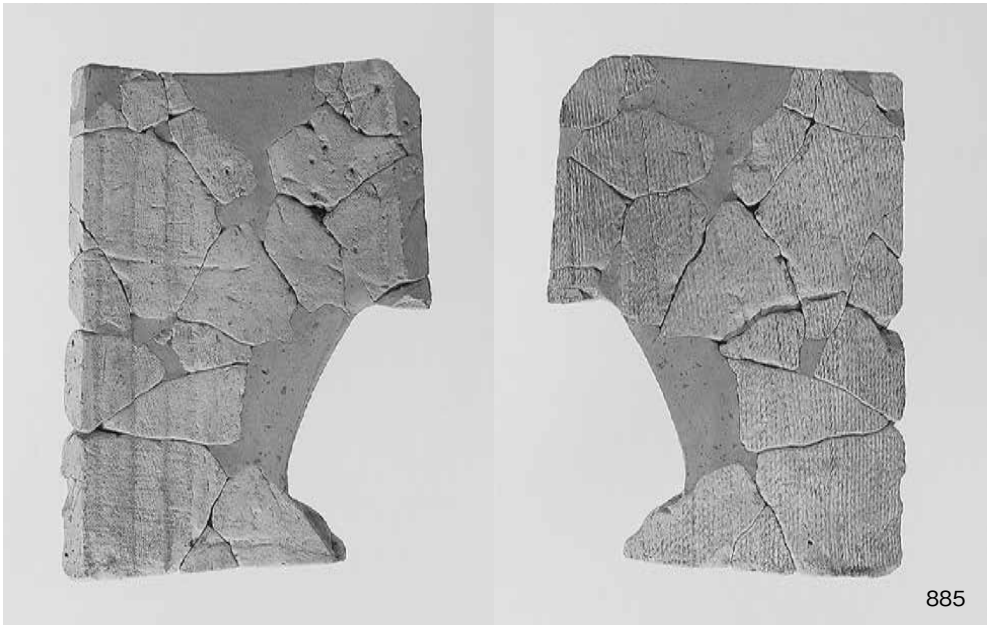
761 Ⅴ類B

Ｖ類Ｃ



798

Ｖ類Ｄ



885

Ｖ類Ｅ

887

889　Ｖ類Ｆ

617　Ⅰ類Ｂ　特殊例

746　Ⅱ類Ｆ　特殊例

広端面の調整後に付着した植物痕

Ⅳ類Ｂ　凸面の面取り

隅平瓦　截断面の段差

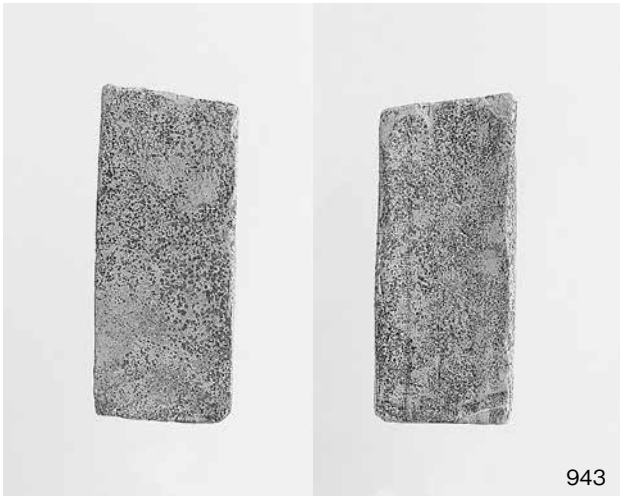
広端面の破面（Ⅱ類Ｄ）

分割破面（Ⅳ類Ｂ）

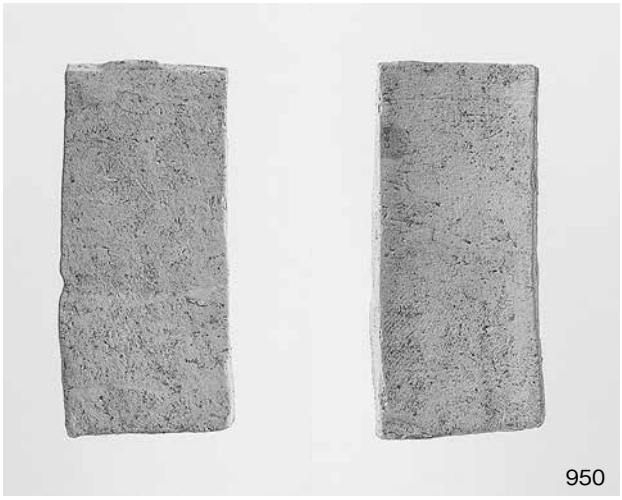
藁座痕（Ｖ類Ｃ）

藁座痕（Ｖ類Ｇ）

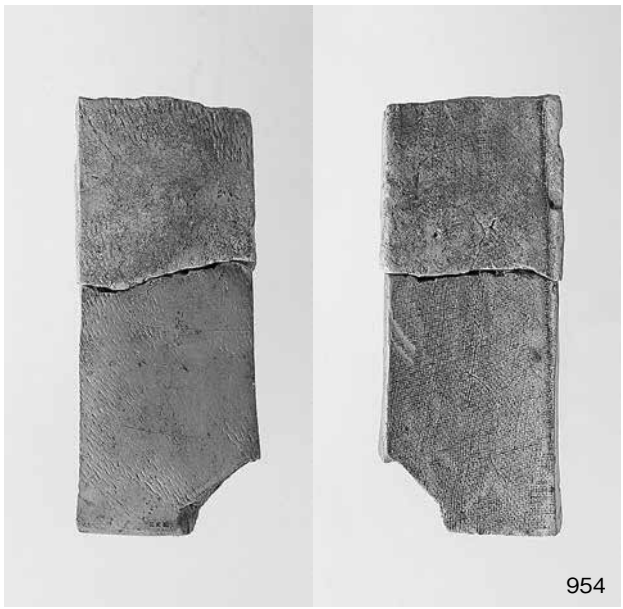
藁座痕（Ｖ類Ｇ）



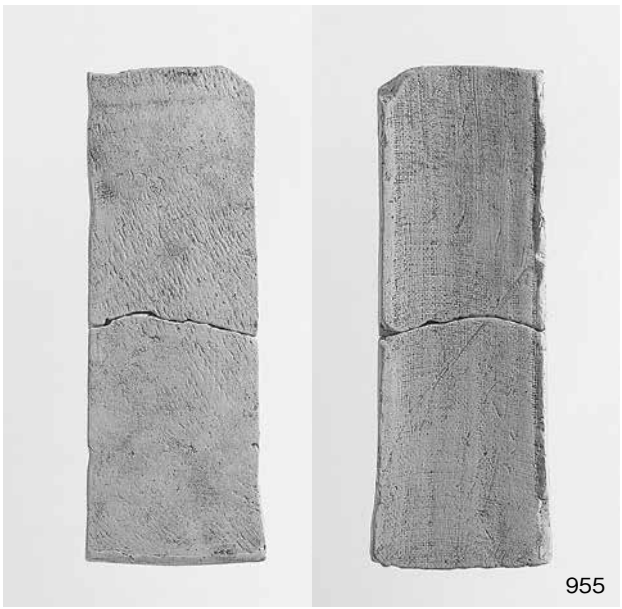
Ⅰ類 A1



Ⅰ類 A2



Ⅰ類 A2



Ⅰ類 A2

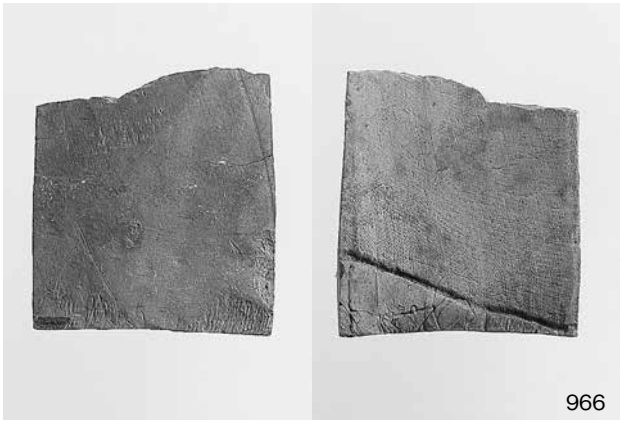
Ⅰ類 A3

Ⅰ類 A3

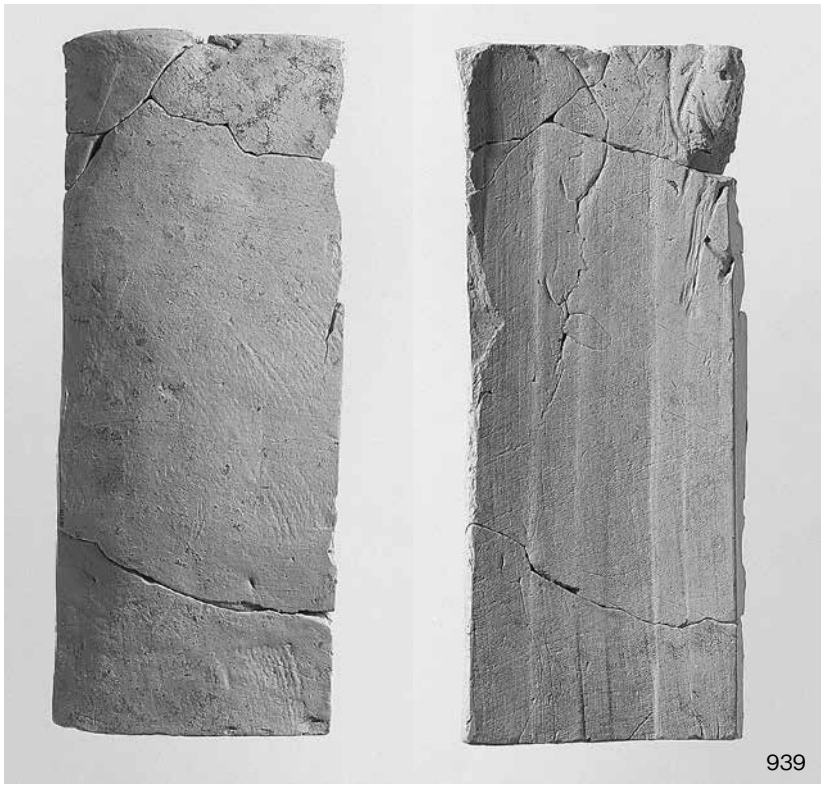
布端と桶形模骨の転写

熨斗瓦Ⅰ類

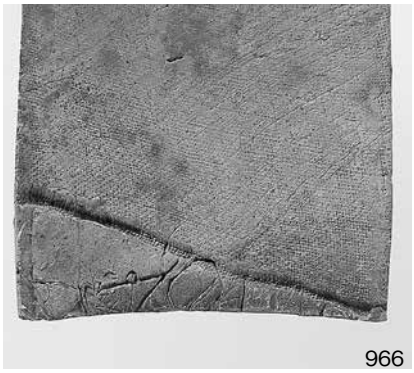
Ⅰ類 A4



Ⅰ類 A4

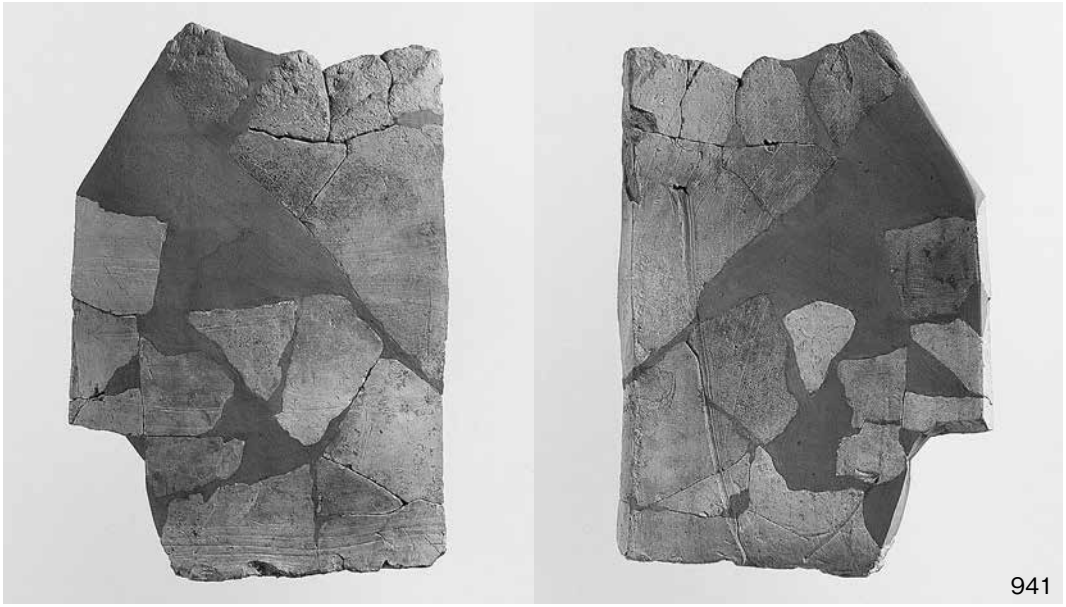


Ⅰ類 A5

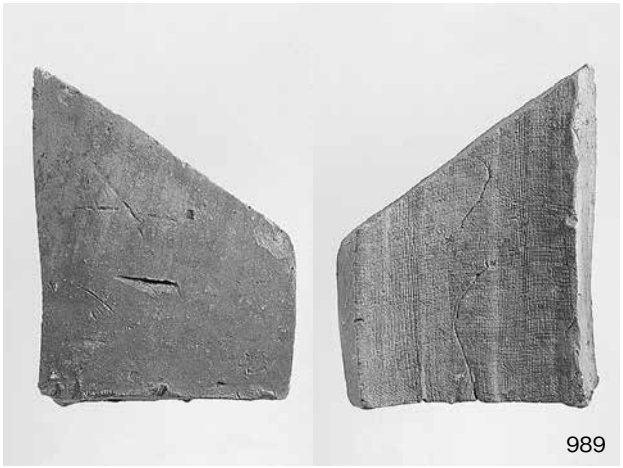


凹面に残る藁状の繊維痕

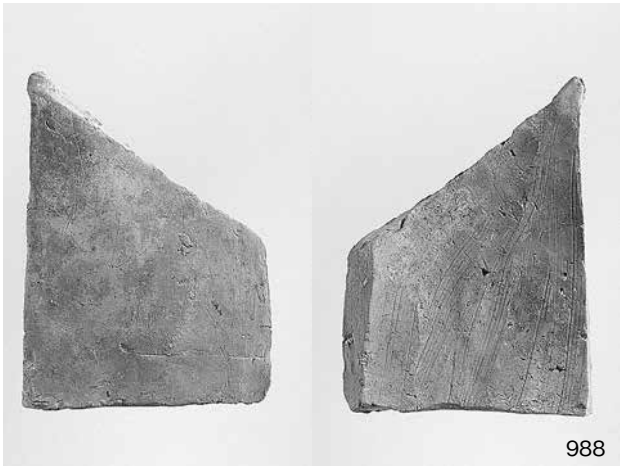
広端面の藁座痕



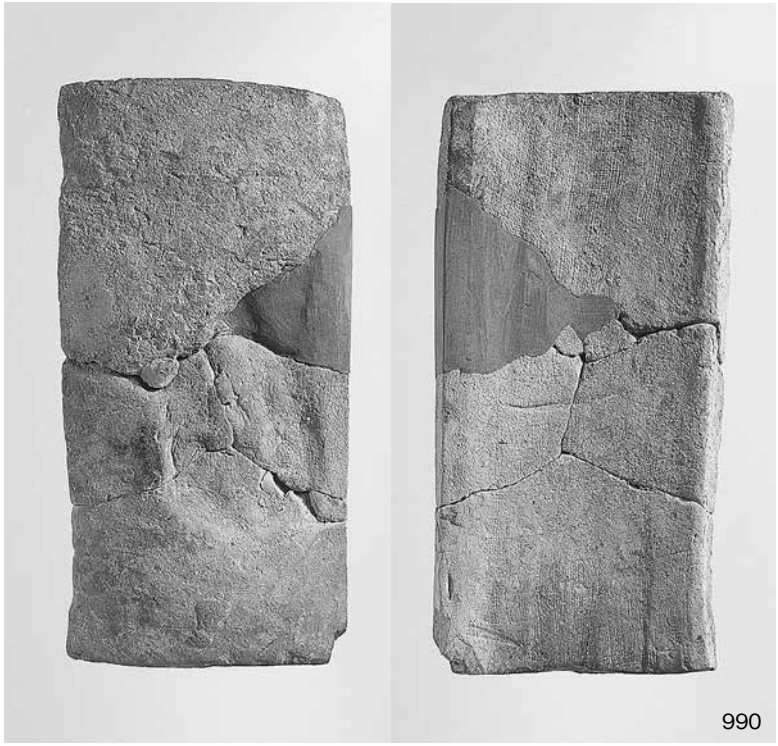
Ⅰ類 A6



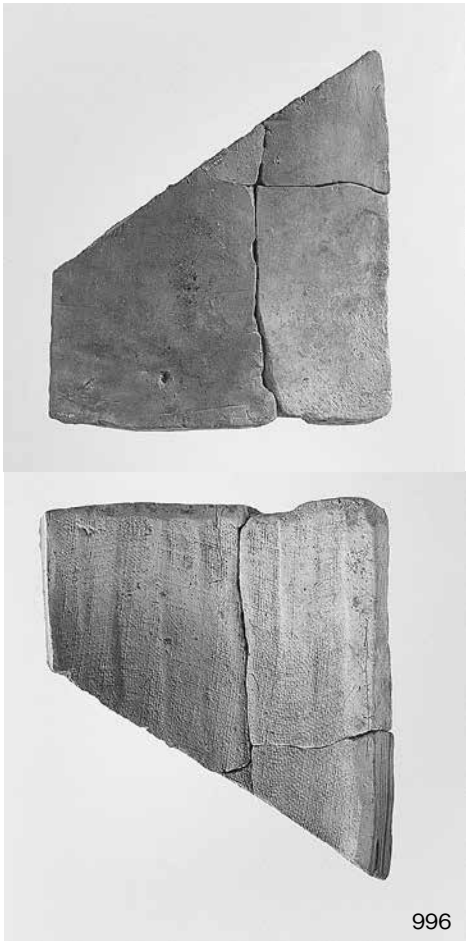
Ⅰ類 B2　隅熨斗瓦



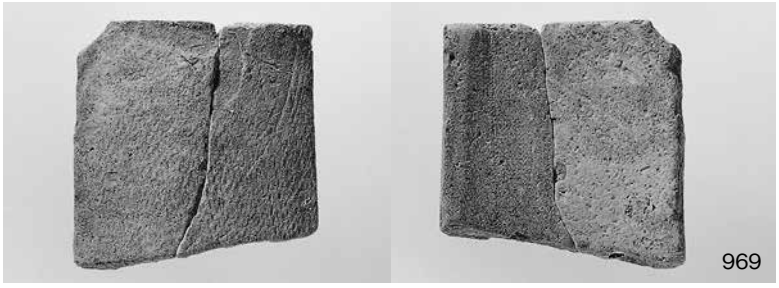
Ⅰ類 B2　隅熨斗瓦　　凹面を削り調整する特殊例



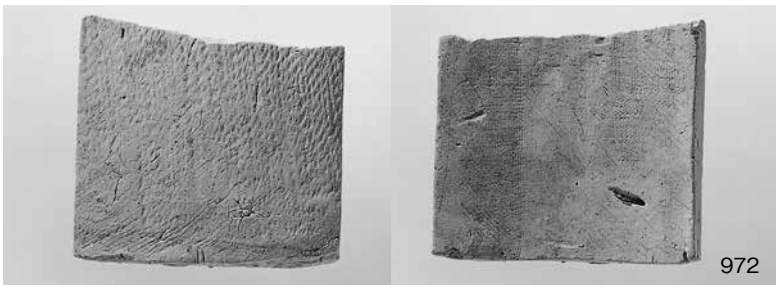
Ⅰ類 B3



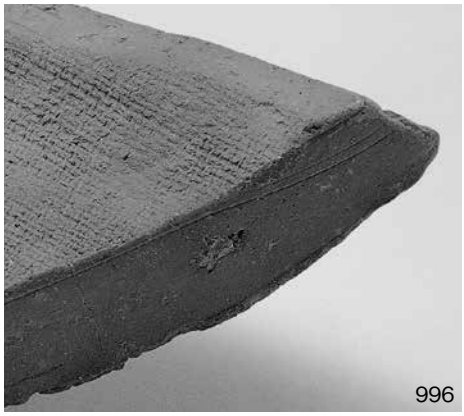
Ⅰ類 B4　隅熨斗瓦



Ⅱ類 3



Ⅱ類 3



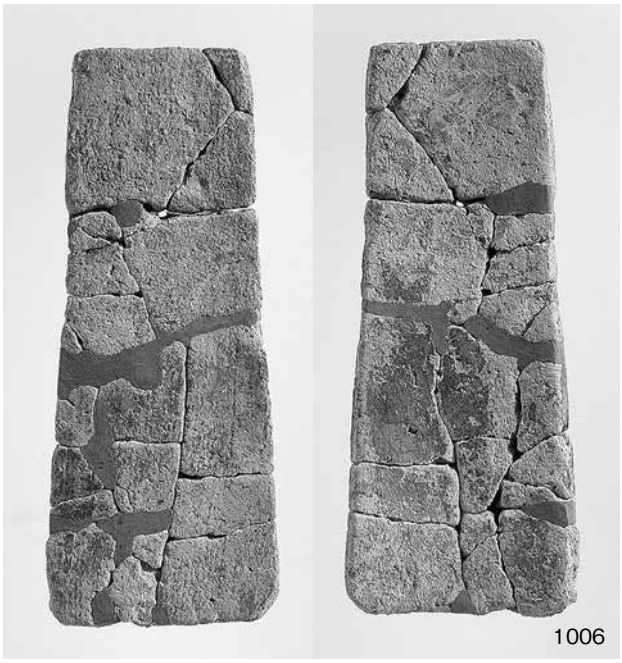
隅熨斗瓦斜辺の凹面側から入る截断面

熨斗瓦Ⅲ類・細部写真

Ⅲ類３

Ⅲ類３

Ⅲ類３



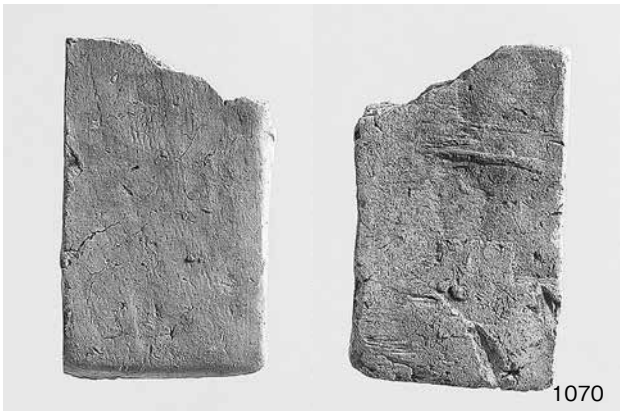
Ⅲ類３

Ⅲ類４

凹面側から入る截断面

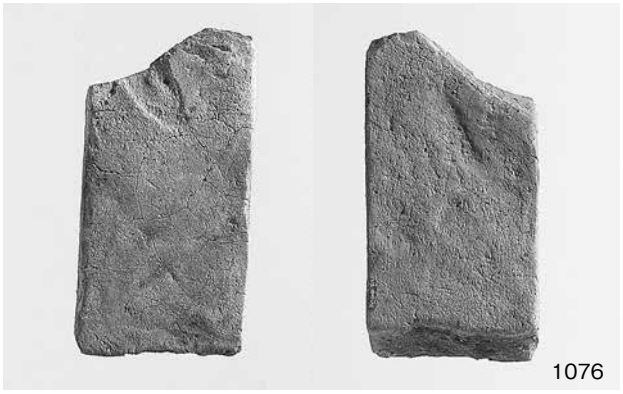
1047

Ⅰ類



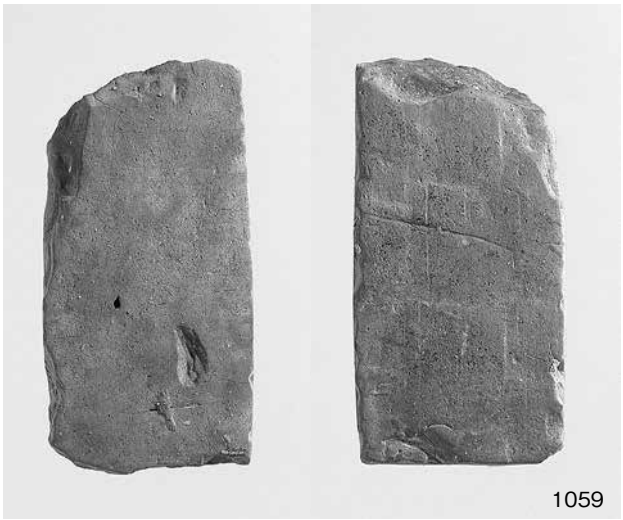
1070

Ⅰ類



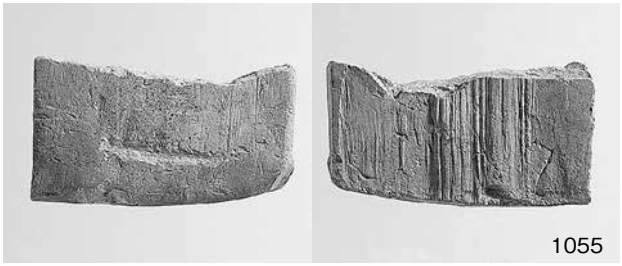
1076

Ⅱ類



1059

Ⅱ類

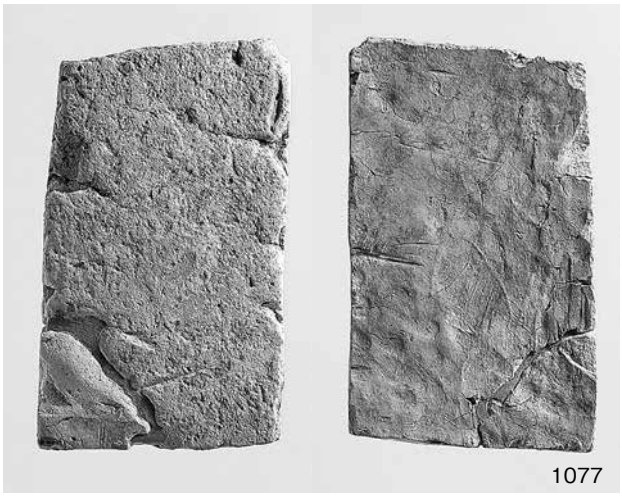


1055

Ⅰ類

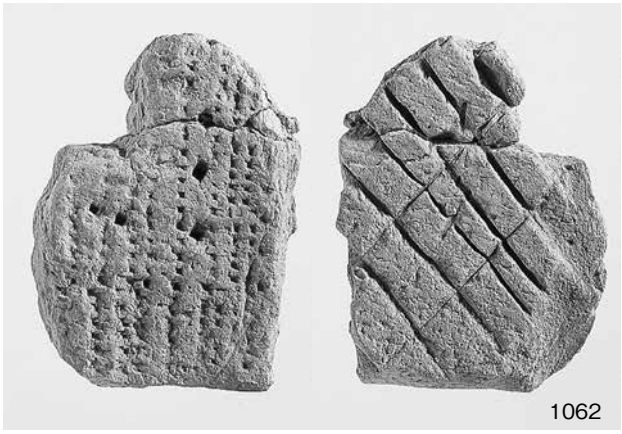
1072

Ⅰ類



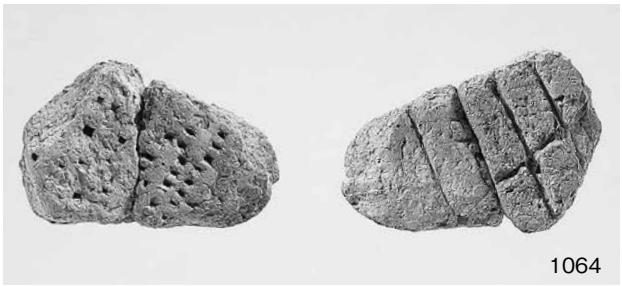
1077

Ⅱ類



1062

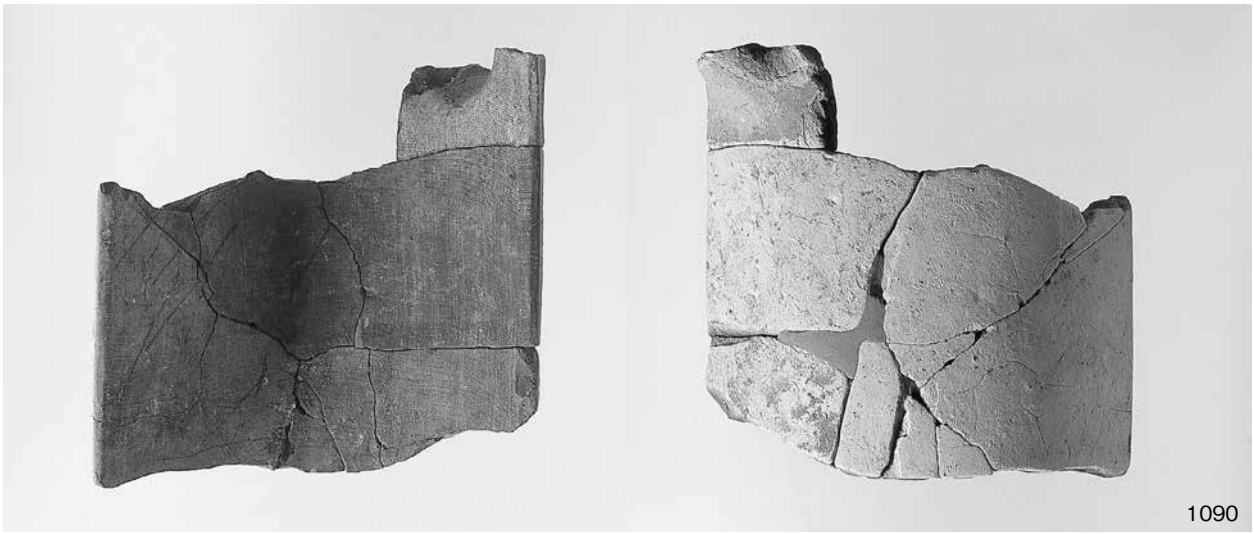
Ⅲ類



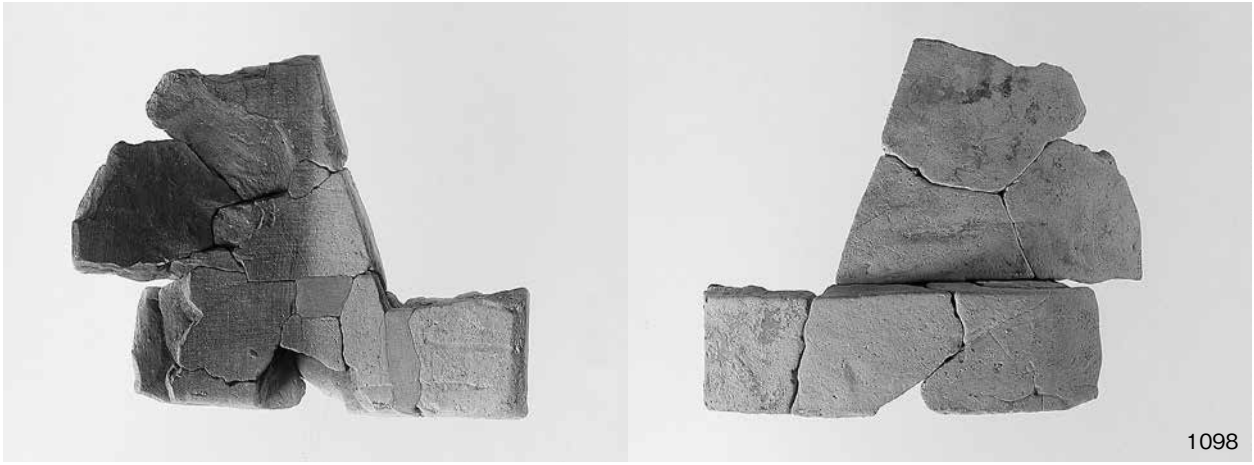
1064

Ⅲ類

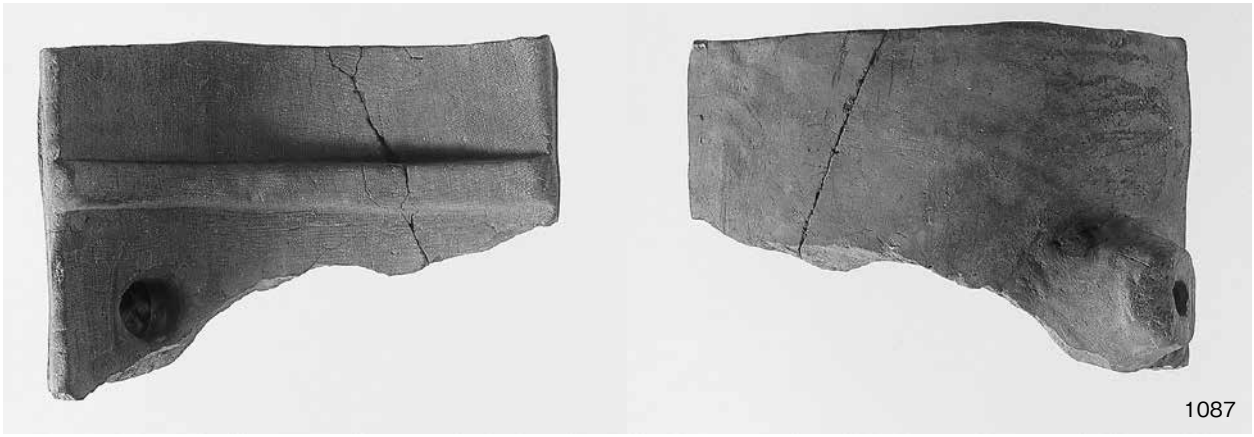
狭端部　　左側に管部



狭端部　　右側に管部

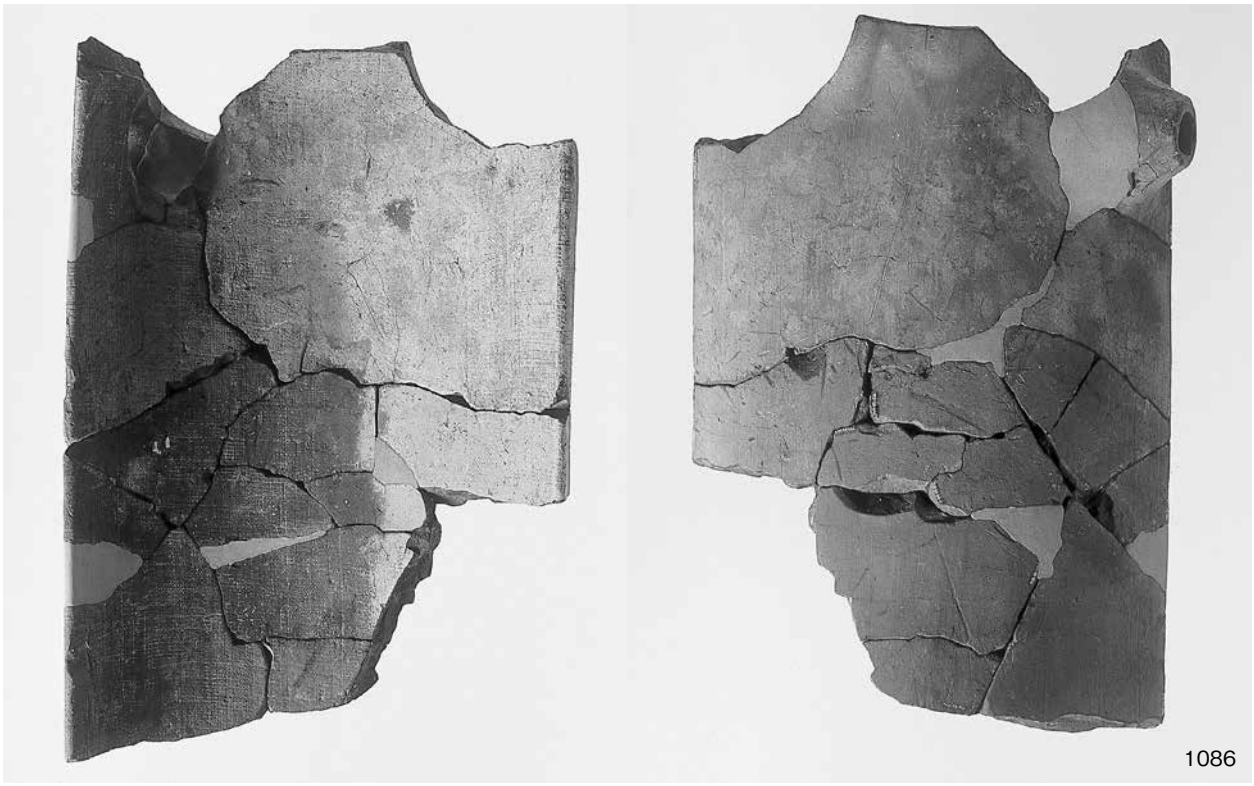


瓦当　　顎部は段顎



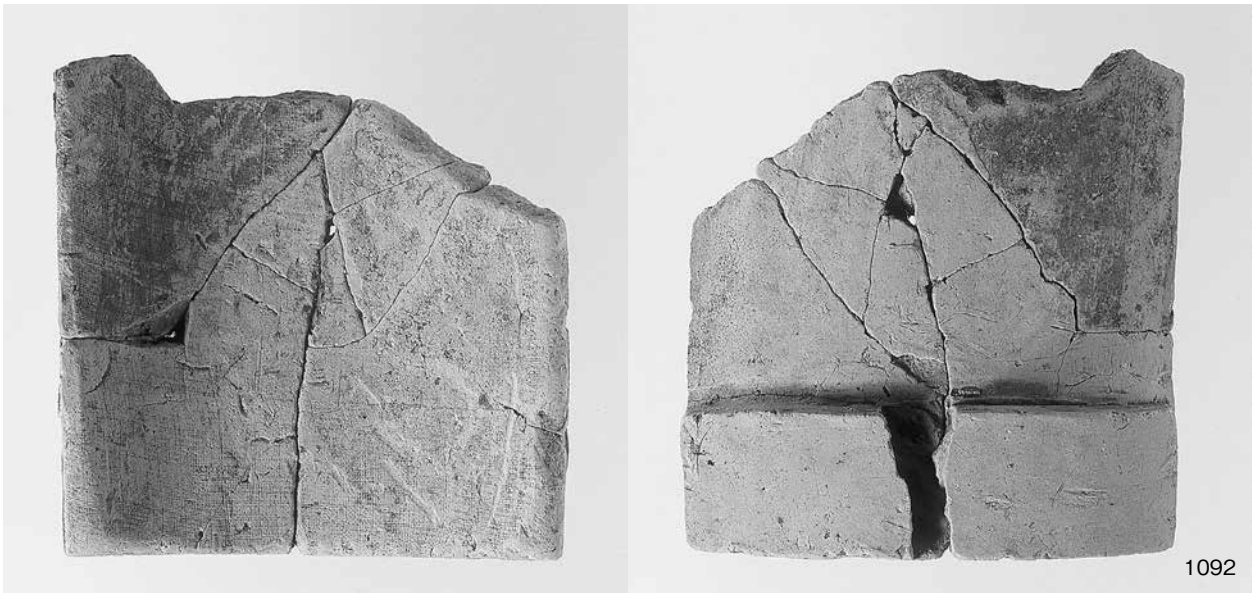
1087

狭端部　　左側に管部



1086

狭端部　　左側に管部



1092

瓦当　　顎部は段顎

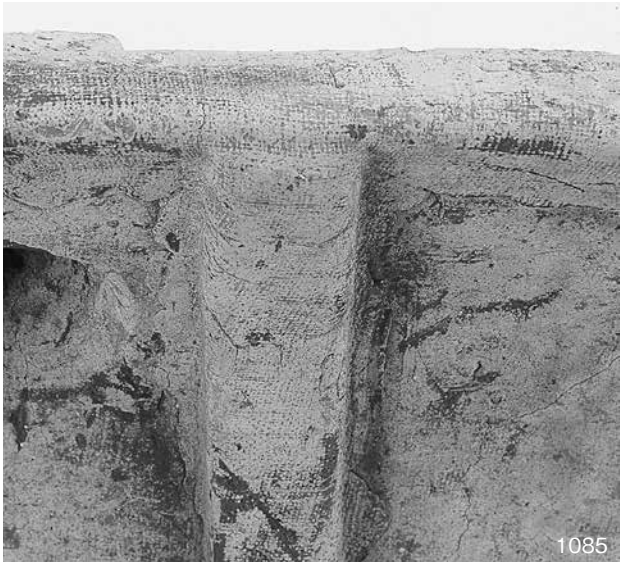
蠖羽瓦の細部

瓦当面と側面の布目

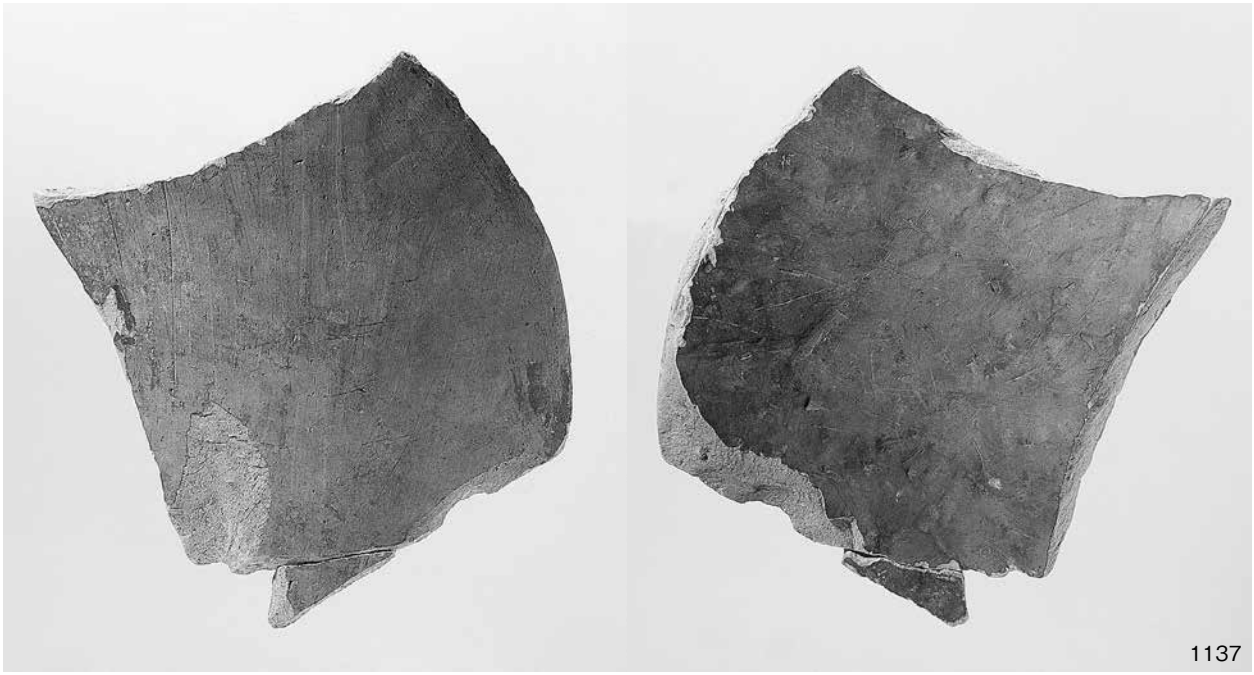
突帯と管部

管部先端の形状

突帯に連続する布目



側面に連続する布目

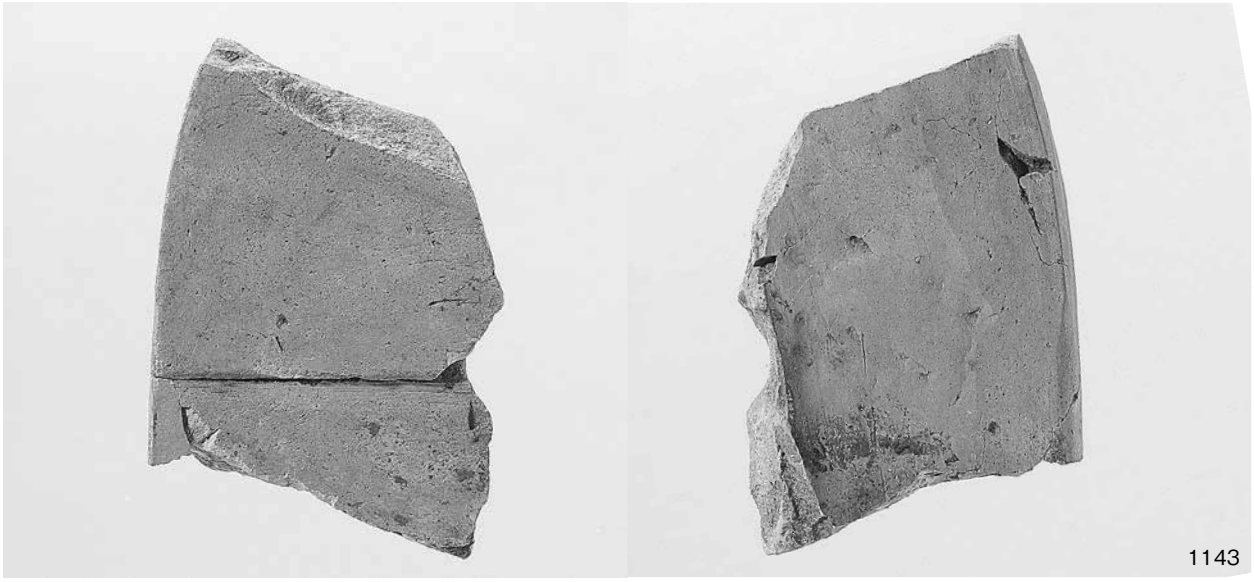


右側面　胴部　　縦帯付近に黒色付着物

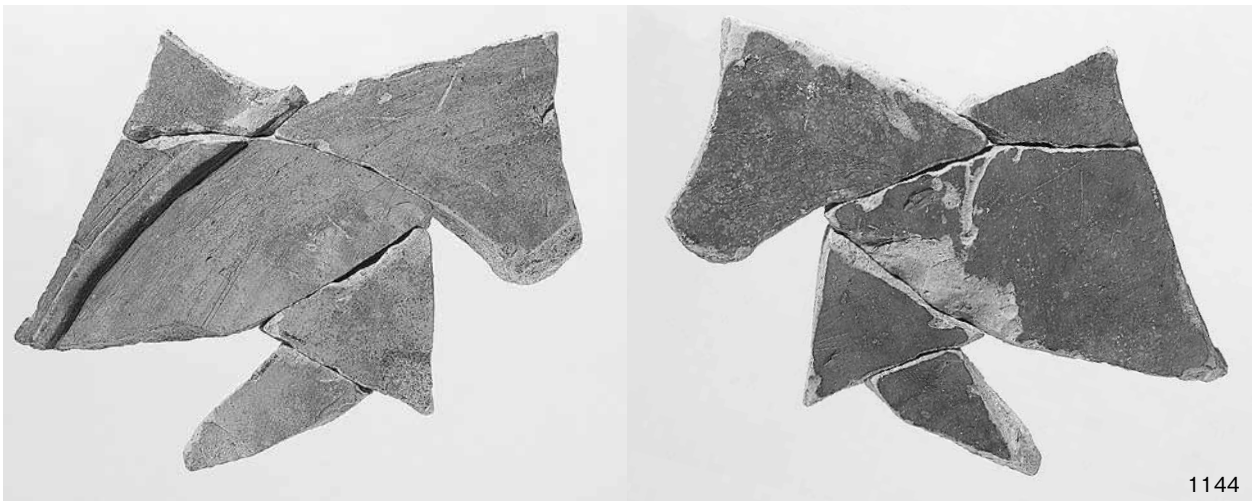
右側面　胴部　　縦帯付近に黒色付着物

右側面　鰭部　　段付近に目安線・縦帯付近に黒色付着物

前面　鰭部

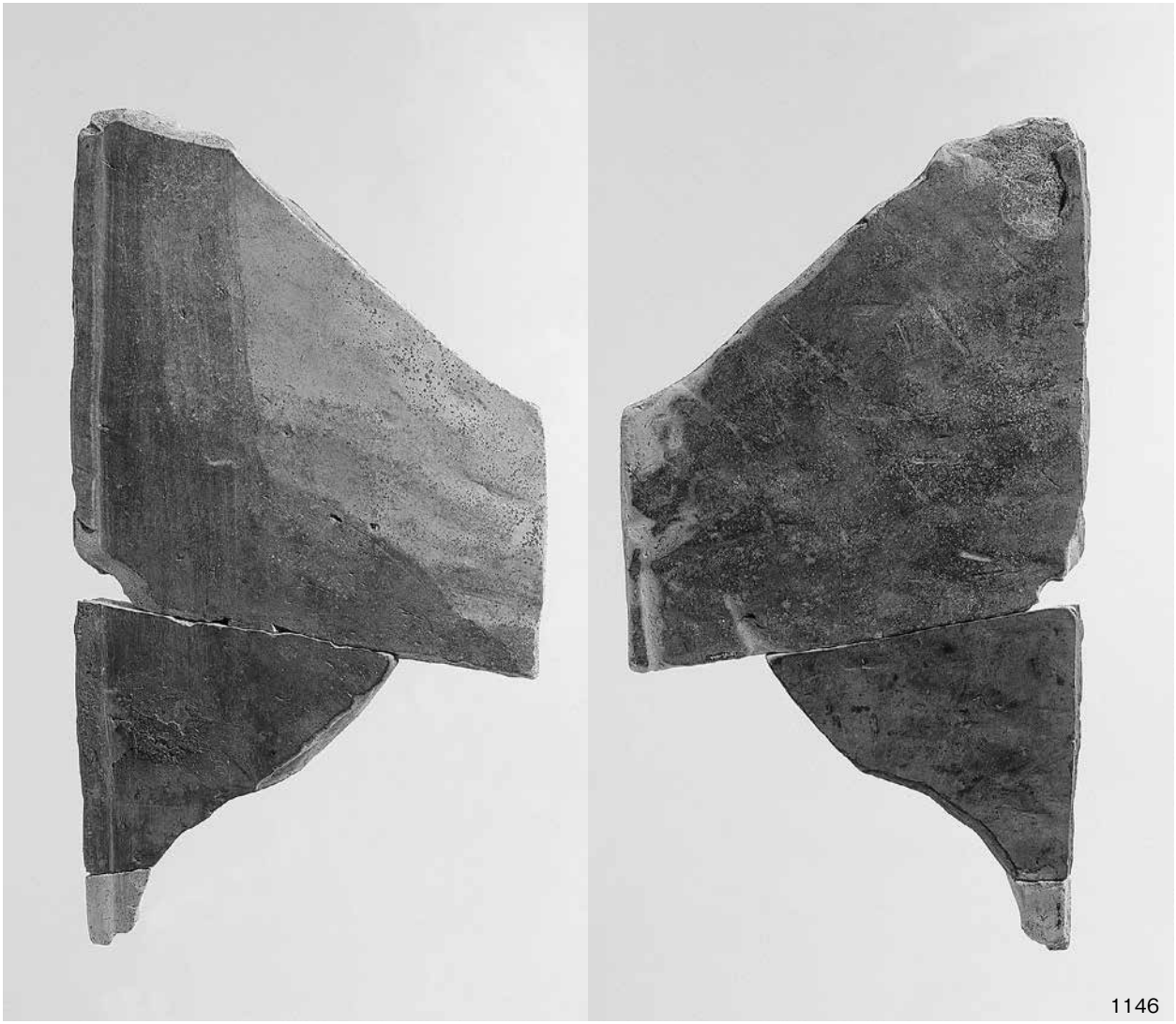


左側面　鰭部



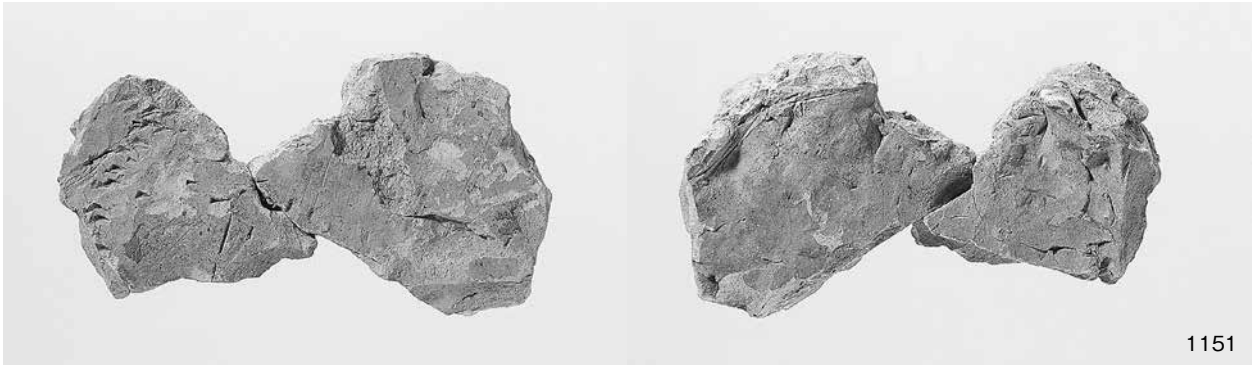
左側面　胴部上方

左側面　鰭部　　段付近に目安線

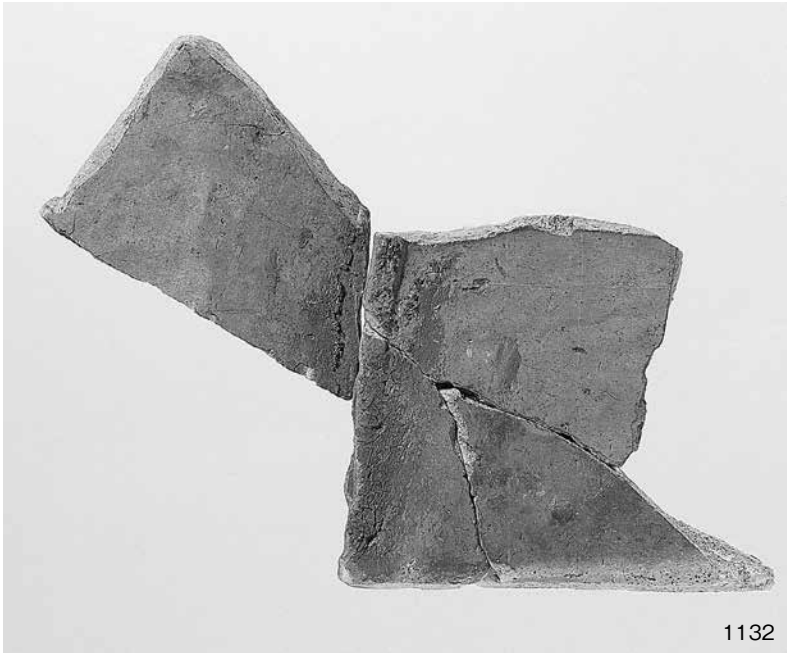


左側面　胴部　　透かしの上半は半円形

腹部　　内面に竹の痕跡・外面に黒色付着物

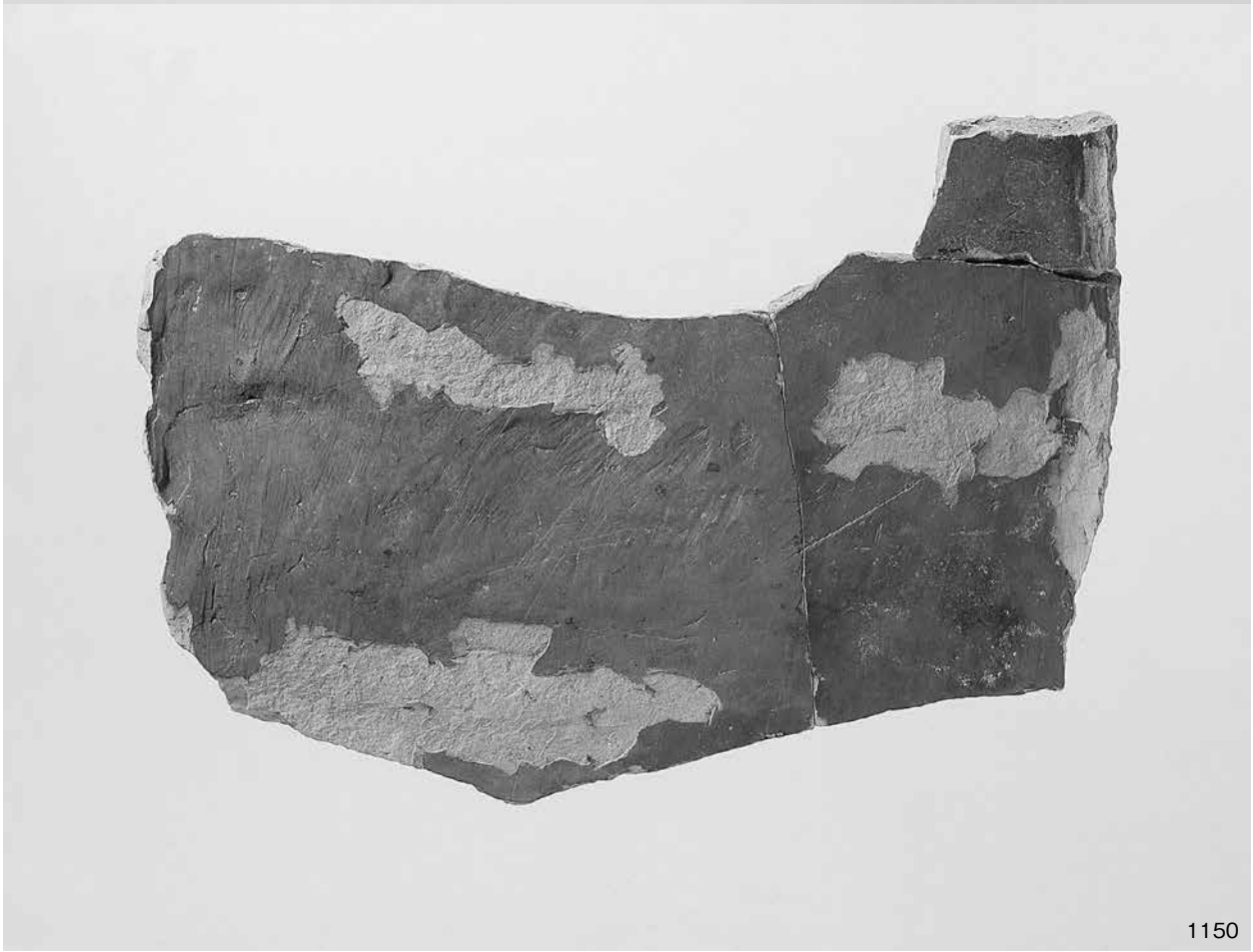


腹部



右側面　腹部　　透かしの下部は三角形・縦帯付近に黒色付着物

断面の被熱



1150

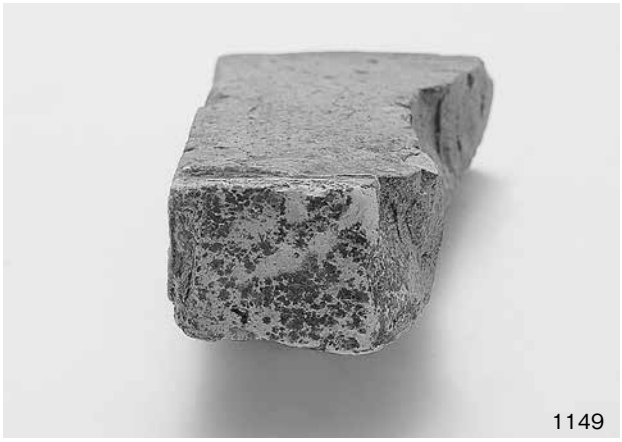
腹部　　横方向に粘土接合痕・外面に黒色付着物

右側面　頭部

下面の木目

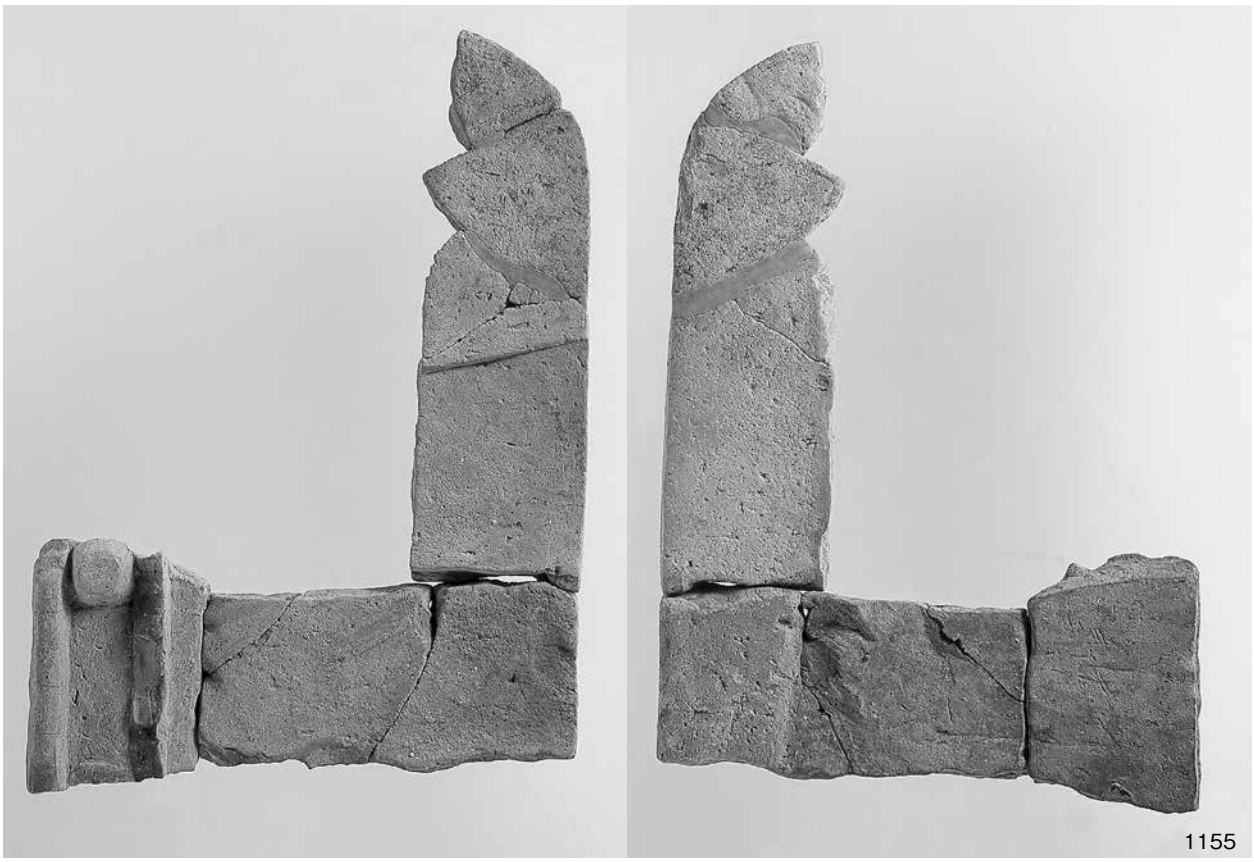
下面の木目と側面の段差

下面の木目

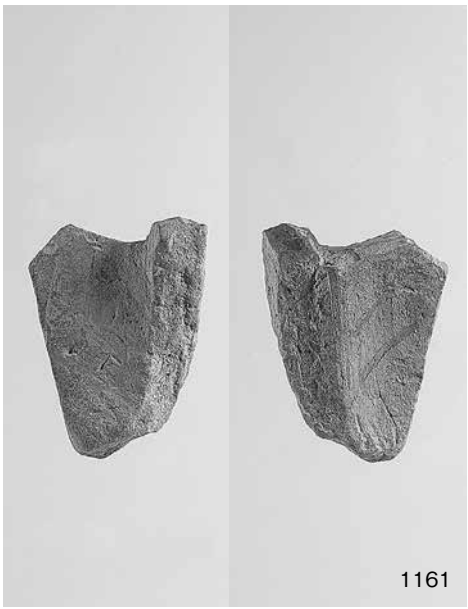


下面の木目と側面の段差

前面　胴部

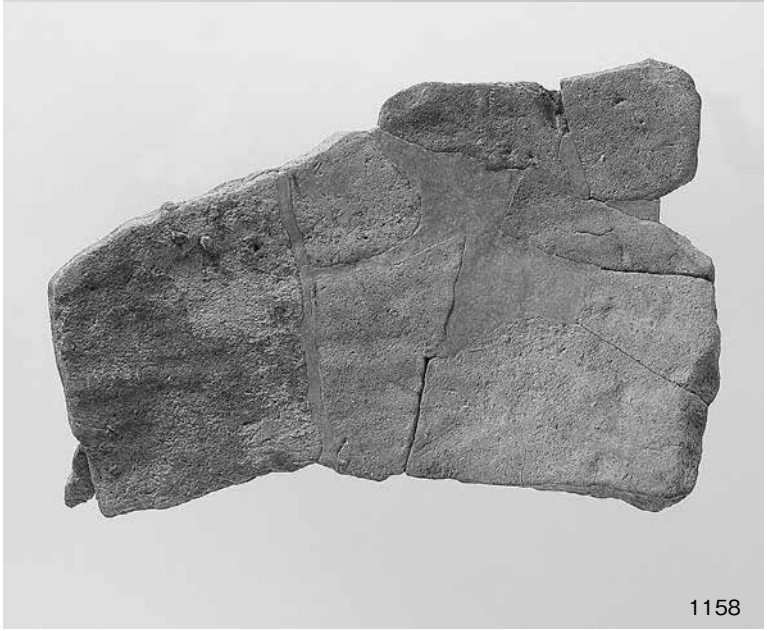


右側面　鰭部～珠文帯



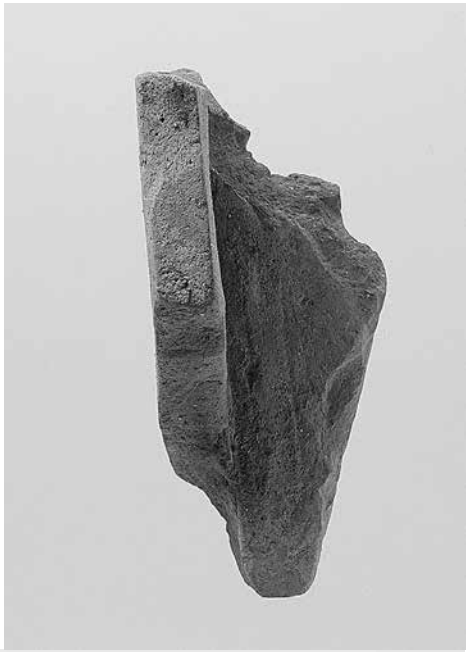
1161

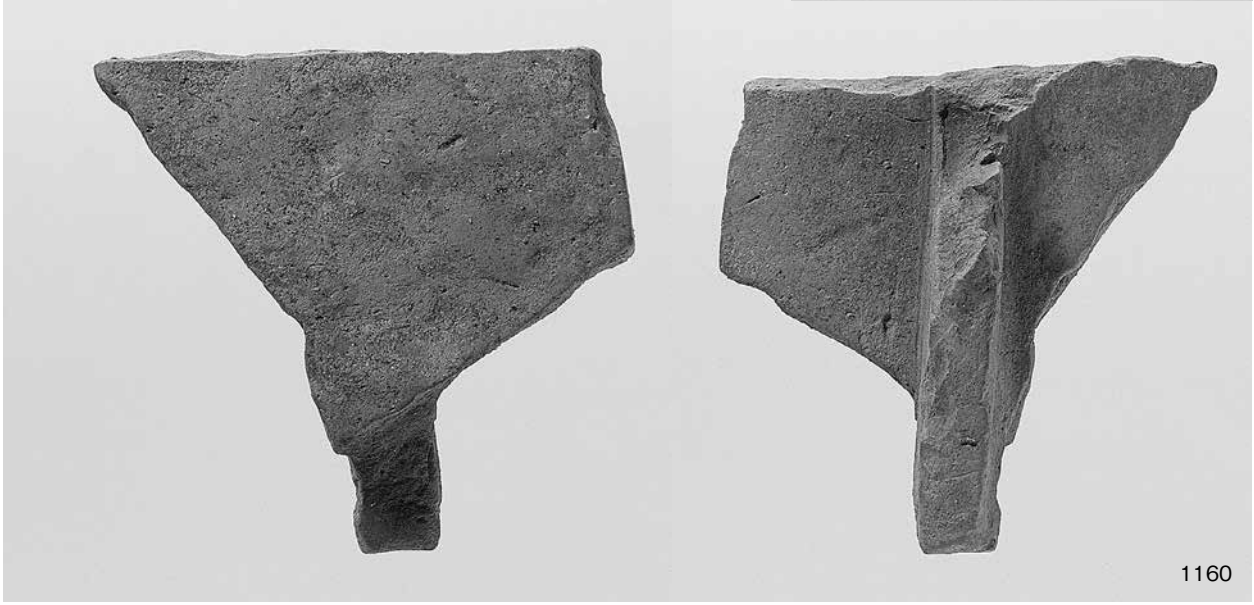
腹部　　下端を斜めに切り抜き



1158

右側面　胴部～珠文帯



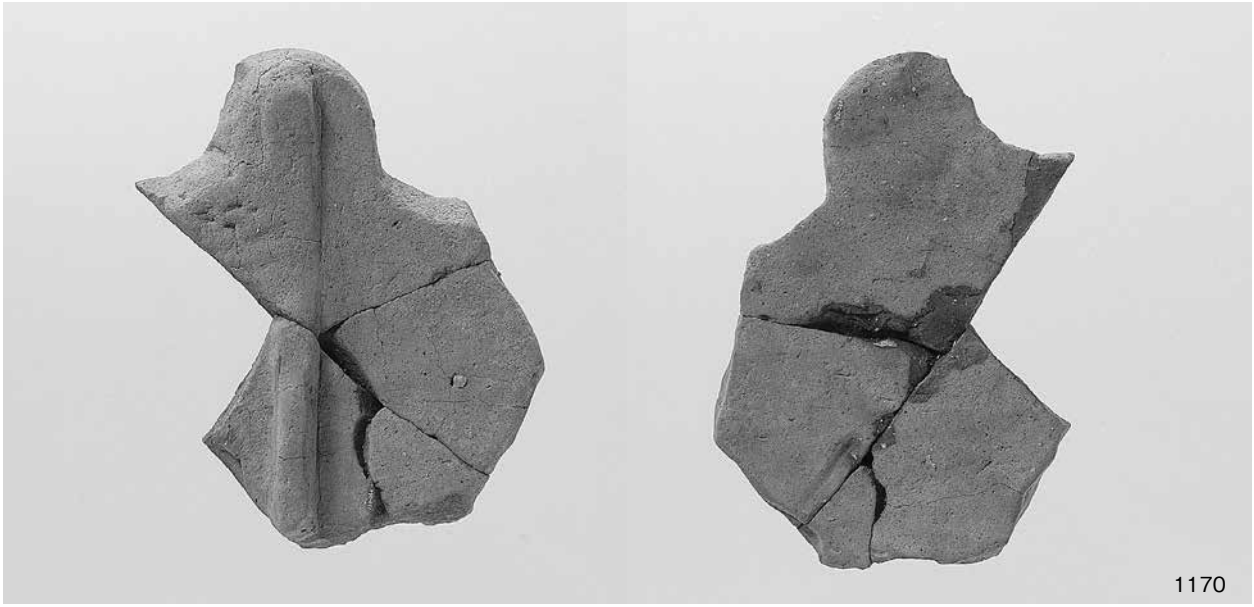


1160

右側面　鰭部～腹部　　腹部下端を斜めに切り抜き

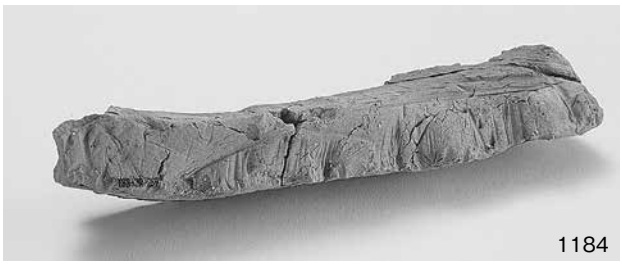
左側面　鰭部

前面　鰭部



左側面　透かし部　　透かしの下面は半円形

広端面の藁座痕



広端面の藁座痕

広端面の藁座痕

広端面の藁座痕

広端面の藁座痕

凸面に連続する藁座痕

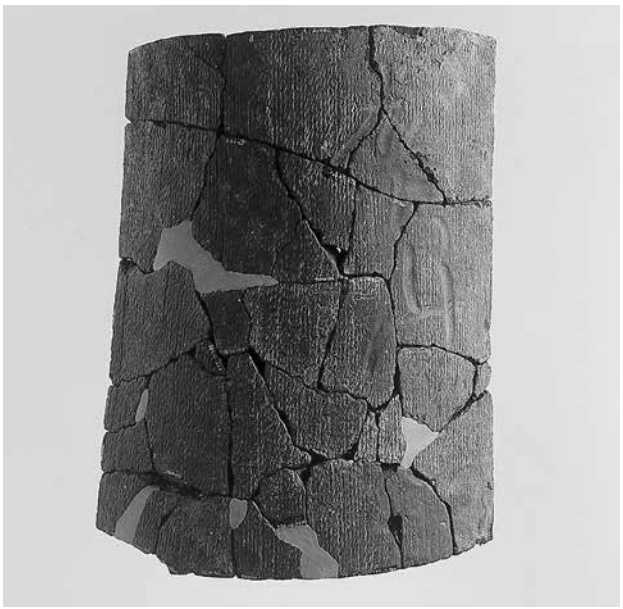
側面に残る截断面の段差

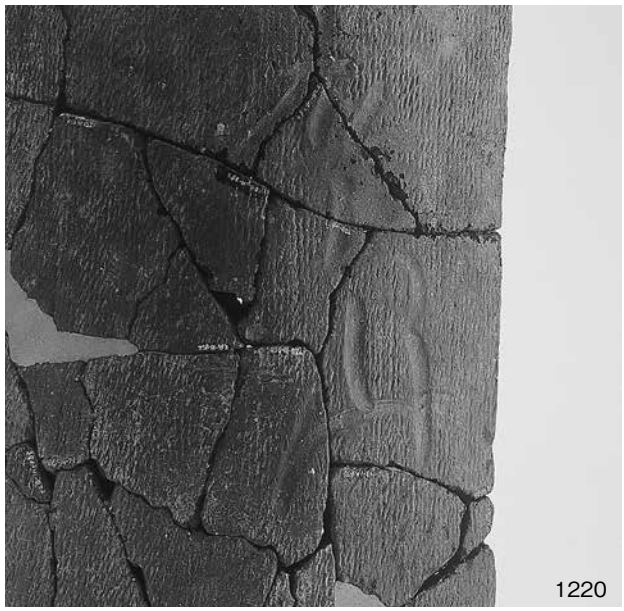
側面に残る破面

平瓦広端面の藁座痕

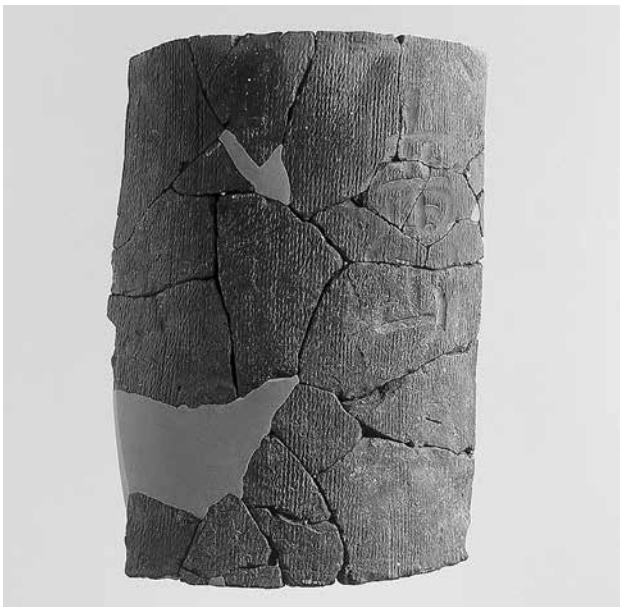
上面に残る截断面の段差

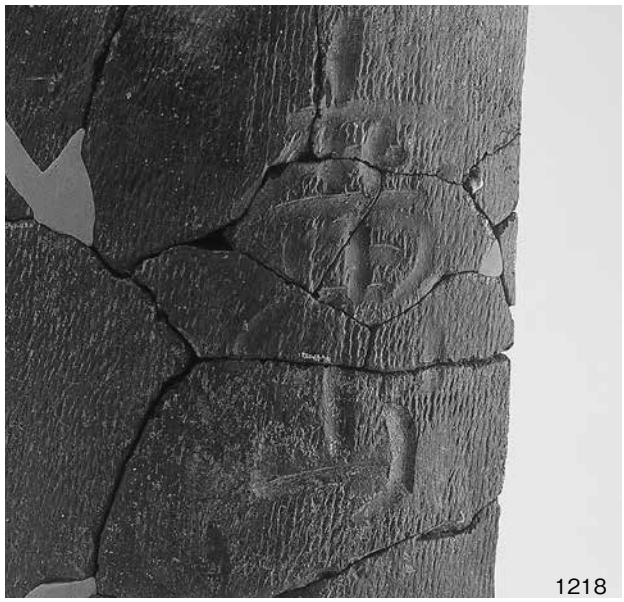
側面の截断面





文字瓦「廣山」

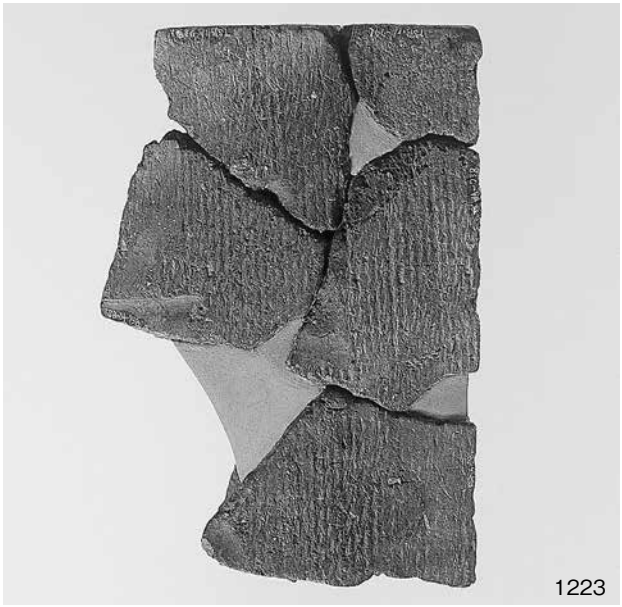




文字瓦「廣山」

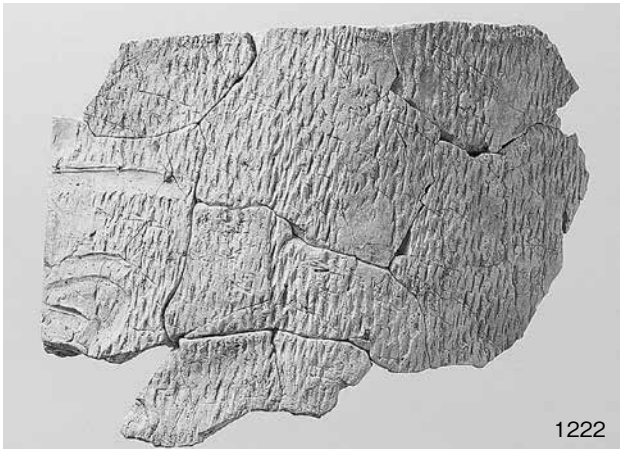
文字瓦「廣山」　文字は側面で半截

文字瓦「廣山」



文字瓦「廣」

文字瓦「山作瓦」



文字瓦「廣」　文字は側面で半截

文字瓦「廣山」か

戯画瓦か

1234

1236

1237

1238

1239

1295

1240

1241

1296

1268

1234 ～ 1241　３号窯灰原出土　　1268　２号窯窯体内出土　　1295・1296　２号窯灰原出土

1281

1287

1290

1322

1301

1320

1303

1321

1281 ～ 1290　２号窯灰原出土　　1301・1302　１号窯灰原出土　　1320 ～ 1322　３号窯埋土出土

1325

1335

1331

1336

1341

1343

1375

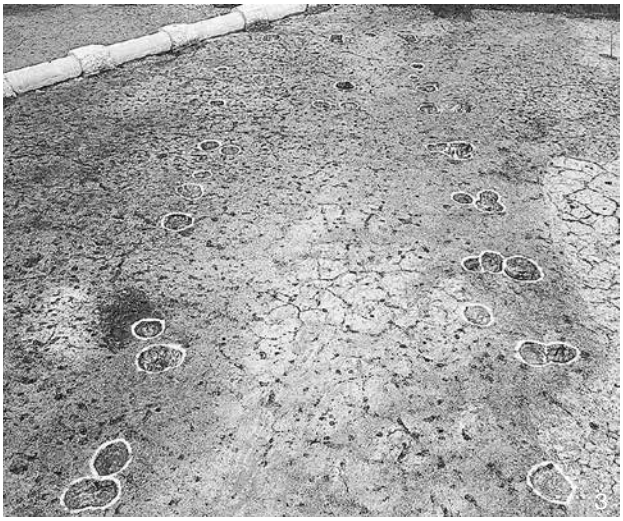
1389

1380

1383

1365

1325 ～ 1336　SX01 出土　　1341・1343　SD01 出土　　1365 ～ 1389　包含層・攪乱出土



1　遺跡遠景　　2　掘立柱建物 SB01（西から）　　3　掘立柱建物 SB02・03（西から）

上海土遺跡出土遺物

1427 ～ 1432　掘立柱建物 SB01 出土

報告書抄録

ふりがな	しのんばがようあと・かみかいといせき
書名	篠場瓦窯跡・上海土遺跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浜松市－4
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第27集
編著者名	武田寛生（編）　広岡公夫 株式会社加速器分析研究所　株式会社パレオ・ラボ
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　　TEL 054－262－4261
発行年月日	2013年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
しのんばがようあと 篠場瓦窯跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 はまきたくねがた 浜北区根堅			世界測地系 34°50′18″ 旧日本測地系 34°50′06″	 137°47′55″ 137°48′06″	20020730 ～ 20041117	12,270	記録保存調査
かみかいといせき 上海土遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 はまきたくねがた 浜北区根堅			世界測地系 34°50′20″ 旧日本測地系 34°50′07″	 137°47′47″ 137°47′58″	20020730 ～ 20031031	9,800	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
篠場瓦窯跡	窯	飛鳥～奈良時代	瓦窯3、溝2、大型土坑1、瓦集中遺構1、掘立柱建物4	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、蟇羽瓦、塼、鬼瓦、鴟尾、須恵器、陶馬	
上海土遺跡	集落	室町～江戸時代	掘立柱建物3	陶磁器、土師質土器	

要　約

篠場瓦窯では、７世紀末から８世紀初頭にかけての瓦窯が３基発見されている。築造順序は、３号窯・２号窯・１号窯の順である。瓦窯は３基とも構造が異なっており、３号窯は直立煙道式緩傾斜窯、２号窯は有階有段式窖窯、１号窯は有階無段式窖窯である。窯跡や灰原からは多量の瓦が出土している。各種の瓦が出土しており、大和・山田寺出土のものと同形態の蟇羽瓦や、平瓦を粘土素材とする無文鬼瓦、藁座痕が残る平瓦製作時の截断片、三角形の粘土板を用いて製作された丸瓦など、全国的にも稀少な資料が出土している。また、「廣山」「山作瓦」の文字が指書きされた文字瓦の存在も確認されている。３基の瓦窯はいずれも瓦陶兼業窯で、数は少ないが須恵器も焼成されており、１号窯では静岡県で初例となる環状瓶が出土している。静岡県内でも初期の瓦窯の一つであり、瓦の技法や文様は遠江地域の古代寺院の瓦に大きな影響を与えている。篠場瓦窯の西側に隣接する上海土遺跡では、中世末から近世にかけての掘立柱建物が３棟検出されており、同時期の土器や陶磁器が出土している。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第27集

篠場瓦窯跡・上海土遺跡

第二東名№130地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市－4

平成25年3月25日

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター

〒422－8002　静岡市駿河区谷田23－20

TEL（054）262－4261

印刷・製本　池田屋印刷株式会社

静岡県静岡市駿河区中原746 － 1

TEL（054）285－8275